

---

# 三好長慶伝 ~ 未完全な天下人 ~

pange

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

三好長慶伝 ～ 不完全な天下人～

### 【コード】

N0310H

### 【作者名】

pange

### 【あらすじ】

織田信長登場以前の戦国は、各地に群雄が割拠する、主人公無き熾烈な乱世だった。だが、都を支配下において各地の群雄よりも一歩も二歩も抜きん出た最強の大名がいた。彼こそ、戦国史上初の天下人と称えられた三好長慶である。父を主君細川晴元に殺され、以来逼塞を余儀なくされていた不幸の御曹司は、ついに主家を圧倒し、幕府をも牛耳る天下人になった。

如何にして三好長慶は天下人になれたのか。そしてなぜ天下人になりきることができなかったのか。下克上によって成り上がりながら、

自らも下克上の餌食となっていく彼と、その理想を受け継ぎながら怒涛の如き時代の流れに抗い続けた三好義継、十河存保ら後継者たちを中心とした三好一族の栄枯盛衰を描く。

【雌伏編】第001章 三好家の若君（前書き）

三好長慶とは戦国時代中期に近畿地方、四国地方で活躍した戦国武将です。メジャーなようで、マイナーな人ですが、配下の松永久秀と並んで下克上の代表格とされる彼の一生を描いていくつもりです。

彼の活躍した時代は、織田信長、武田信玄、毛利元就、上杉謙信、北条氏康、徳川家康らが活躍したような元亀天正の世より、もっと前なので、見知らぬ武将名がよく出てくるかと思いますが、その辺りはご容赦ください。

【雌伏編】第001章 三好家の若君

少年は久しぶりの青空を思う存分に満喫していた。

馬に跨りどこともなく大地の上を疾駆する。肌の上を駆け抜ける気持ちよきそよ風を全身に感じながら、少年は「わああああ」と、日ごろの憂さを晴らすかのごとく大仰に叫ぶのである。その後、近くの村に立ち寄り団子を食らい、休息を取った後、再び走る。とにかく走る。気の赴くまま、心ゆくまま彼は大地の上を駆け抜ける。

比較的小柄で端正な顔立ちを有する少年は、この辺り一帯を治めている領主様の御曹司。お城に生まれ、お城に育ち、お城の中に暮らして数多の如き家臣、近侍、女官たちに守られながら今日まで何不自由なく生き抜いてきた。そんな彼の、密かなる趣味。それがこれ。

城での生活はそれ自体決して悪くないが、そればかりでははつきり言って退屈だった。連日、学業だ武芸だ儀礼だと学ばねばならぬことが山の如くあつたが、遊び盛りの少年にとってそんなものはどれも面倒で厄介なものに過ぎなかった。だからこそ少年は、家臣たちの目を盗み、外に出る。太陽を浴び、風を感じ、大地を味わう感触は、何物にも代えられぬ至高の価値があるように少年には思えたのだった。

「嫌じゃ！」

毎日のように彼はそう言って広き城中を逃げ惑う。この日も例外なくそうだった。

「なりません！」

対する家臣たちもまた必死になって追い回す。

「嫌じゃ嫌じゃ嫌じゃ。もう飽きた。そんなことを学んでも何の意味もあるまい。わしはもつと世界を知りたいのじゃ」

少年の一日は学問に始まり鍛練、儀礼の習得と続き、日没と同時

に終わる。来る日も来る日も似たような行為の繰り返し。変わらぬことのないつまらぬ退屈な日常。それを打破すべく城の外に飛び出そうとしても、彼の脱出を阻止すべく虎視眈々見張っている家来たちを出し抜くのは非常に難しいのである。昨日は上手くいっても今日上手くいく保証などどこにもなく、事実、少年は城からの脱出に失敗して追われる身となっていた。

追捕の任にあたる家臣たちが手にしているのは刀の代わりに山のような書物。今日のうちにこれら全てを読破せよと、彼らはいり得ないほどの無理難題を十歳の少年に突きつけてくるのだった。そんな彼らは口を開けば、どれもこれも若様が立派な世継ぎとなるために必要なものだと言う。

「嫌じゃ！」

少年は心の底から叫んでいる。拳句の果てには、「世継ぎになどなりとうない」などと吐き捨て、驚く家臣たちを尻目に自らの部屋に閉じこもった。

少年は領主の子。生まれたその瞬間より家を継いで民と家来を守り、次代に引き継ぐことを宿命づけられた哀れなる存在。だが、お世辞にも少年は模範的な御曹司であるとは言えなかった。彼は自らの部屋の中で、誰に対するでもなく「嫌じゃ！」と叫ぶと、布団の中に閉じこもって思いきり暴れまわった。

時は戦国。けれど織田信長らが活躍した元龜天正の世とは違う。

天下のあちこちに群雄が割拠し、それぞれが勝手気ままな抗争に明け暮れている。主役のない乱世……、即ち希望なき戦国と言い換えてもいい。

武田信玄も上杉謙信も、北条氏康さえ、まだ歴史の表舞台に現れていない。

そんな世界に思いがけなく生を得た少年は、名を三好千熊丸と言つて、当時の慣習から言えば未だ元服を済ませていない子供に過ぎなかった。

それでも既に十歳である。いろいろ問題とすべき点はあれども基本的には非常に聡明な少年であり、その素質は万人が認めるところである。父たる三好筑前守元長も己が世継ぎとしての彼に大いに期待を寄せていたものだった。

そんな千熊少年は城に戻ると、彼の奔放を今日こそは説教せんと手ぐすね引いて待ち構えていた侍臣を振り切り、男子禁制の奥に閉じこもった。遊び相手の女中たちをいつものようにからかいながら、常の如き満ち足りた日々を謳歌していたのだった。

「なあ、お福」

不意に、千熊は側に控える老女を呼びつけると、

「今日もなんぞ話でも聞かせよ。お主の話は堅苦しい書物を読むより、ずっと面白い」

と言つて、いつものような好奇心に満ちた如何にも少年らしい顔つきをして笑った。

「話ですか？ されば、昨夜もお話しました、私の身の上話の続きでもいたしましょうか」

と、老女お福が言つと、千熊は嬉しそうに微笑んで、

「それでよい」

と、言つた。

「されば失礼して……。私は、それほど格式は高くありませんが、れっきとした公家の姫として生まれました。されど、家は貧しく、朝廷より従三位まで賜っていた父自ら物乞いとして洛中に繰り出しては日々の生計を持たせていた有様です。そんな風なので、厄介者の私は口減らしの如く宮中に女官として出仕することになったのです」

お福にとつては余り思い出さたくない話らしく、時折悲しげな顔をしますが、千熊は構わず続きを聞きたがった。

「とは申せ、時勢が時勢ですので、宮中も決して豊かではなく、一介の女官に過ぎぬ私はここでも厄介払いになりました。……当時、都では公方様の力は無きに等しく、代わって管領の細川政元様が半

將軍と言われるほどの権勢を握って君臨されておられましたが、その管領様が御養子の細川澄之様に殺され、その澄之様も、同じく御養子の澄元様、高国様により滅ぼされ、さらに澄元様と高国様の間で争いが発生するという、果てしなき混乱の最中にありました」

「……」

「私は宮中を厄介払いされた後、少しの間物乞いの如き生活を強いられました。そんな折、何の偶然か、澄之様を滅ぼし、都を支配されるようになった澄元様の重臣であらせられた三好之長様、即ち若様の曾祖父様にあらせられるお方ですが、その之長様の御目に留まって、三好家に入ることになったのです」

「……」

「その後、私は高国様の謀叛により、都を追われた澄元様、之長様に従って阿波に下りました。その折、之長様の嫡子長秀様（千熊丸の祖父）付の女中となり、やがて長秀様の側室に迎えられました。しかし、その長秀様もしばらくして戦死し、以後は之長様の命により老女となり、三好家の奥向きのことを取り仕切らせていただいております」

そんなお福の身の上話に耳を傾けながら、千熊は「ふーん」と頷きながらも、いまいち実感が沸かぬよう時折首を傾げたりしていた。ただ、彼女がどうというより、三好家、即ち彼自身の先祖たちが成してきた業績、事跡には興味もあるようで、曾祖父之長、祖父長秀の話が出るたび、彼はその目を爛々と輝かせていた。

「今ではその之長様もなく、長秀様の嫡子であらせられた筑前守元長様が御当代となられましたが、筑前守様の下、三好家も随分と大きくなりました。私が初めて三好家に入ったところと比べれば雲泥の差であると言つて過言ではありません。その之長様が自害なさい、どうなるものかと思つた時期もありましたが、今では筑前守様も細川家中随一の権勢家。若様はその跡継ぎであらせられるのです。…若様も偉大な先代の方々に後れを取らぬよう、日々精進しなければなりません。そして、之長様、元長様を越える名君となって、三



好の御家に繁栄をもたらすのです。私は、そのためなら何だつてする覚悟です」

などと力強く叫ぶお福であったが、既に、肝心の千熊はすやすやと眠っていた。散々暴れまわった一日の疲れが、どっと押し寄せてきたのだらう。お福は振り上げた拳のやり場に困って、きよるきよると恥ずかしそうに顔を赤らめた。

けれど、こうして千熊を見ていると何とも言えず不思議な気持ちになるものだった。日ごろは聡明で、学業やら武芸その他諸々、全てを無難にこなす俊英児であり、かつ手のかかる腕白ないたずら小僧だが、こうして眠っていると、十歳らしい可愛らしい顔をしている少年に過ぎなかった。

お福はそんな彼の、透き通るように整った髪を撫でた。一見すると女子のような白き柔肌を摩りながら、ふうと小さな溜息を漏らした。自分にも息子がいれば、こんな風に育つたのだらうか。側室となった直後に、子もないまま早世した夫と過ごした僅かな日々などを思い出しながら、女子としての最大の悦びを、ついに感じられなかった自分の生涯に、少しばかりの空しさを感じた。

ここにいるのは、生まれた直後よりお福が育ててきた、半ばわが子も同然の存在だった。そして、行く末三好家を継ぐ世子なのだ。彼女が敬愛してやまぬ之長の嫡流であり、夫長秀の孫である。そう思うと、彼女自身の血を受け継いでいるわけでもないのに、なぜだかわが子の如き愛おしさを感じるのだった。

【雌伏編】第002章 臥薪嘗胆

天文元年（一五三二年）は六月二十一日のこと。

この日、阿波国屈指の大豪族たる三好家は驚天動地と言っても決して言いすぎではないほどの大混乱の只中であつた。

三好家累代の居城たる芝生城には既に主だつた一門、重臣たちが勢揃いしている。しかしそのどれも沈うつな面持ちで絶望に打ちひしがれていた。三好筑前守元長の代となり、以来飛躍的發展を遂げてきた繁盛の武門とは到底思えぬ雰囲気はそれだけ今回の事態の重さを証明しているようであつた。

ざわざわと騒がしい。居並ぶ家臣たちはきよるきよると落ち着きなく周囲を見渡しては、今後、三好家はどうなつていくのか。自分たちはどうなるのか。などと必死な形相で同僚たちと語り合つていた。

人と言う生き物に未来を見通す力などない以上、人々の不安は募る一方だつた。とかく精神面で脆い人間は、悪い方悪い方へと物事を考えすぎるきらいがあるので、それがさらに人々の不安をあおるのだった。そして、それを抑える人間が目下ここには誰もいなかった。ゆえにこそ誰もが日ごろの冷静さを忘れ、ただただ闇の中に置き去りにされた己の立場を嘆くだけだつた。

そこに、

「若君様の御成り！」

と、小姓衆の甲高き大音声が響き渡つた。諸臣は神仏を仰ぎ見るかの如く、てくてくとやってくる小さき御曹司を見つめた。

三好筑前守元長が嫡子三好熊丸は上座にちよこんと腰を下ろすと、下座に平伏す家臣たちをじろりと睨み付けた。思いもよらぬ凶報にすっかり浮き足立っている彼らを見て熊丸はふうと小さな溜息を吐いた。

「皆の者！」

声色こそ未だ声変わりしきっていなかったが、それは堂々たる三好の棟梁に相応しき大音声だった。

諸臣ははつとした様子でしばし硬直した後、慌てて「ははあッ」と恭しく頭を下げた。彼らは皆、そこに若かりし頃の主君元長を見ていた。あの腕白でどうしようもないいたずら小僧からは想像できない姿に感銘を受けた者も少なくなかった。

「既に、皆も此度の一件については聞き知っていることと思う。そしてそれは疑うべくもなき事実である。事實は事実として受け入れ、以後我らが取るべき道を考えねばならぬ」

そう千熊が言うと、すかさず、

「今後我らには様々な難問が降りかかってくるだろうが、真っ先に決めておかねばならぬのは、殿亡き後の御家を担う存在……。即ち、家督承継を済ませ、新体制を整備せねばならぬ」

と、一門の重鎮たる三好康長が阿吽の呼吸で口を挟んだ。

「無論、家督は若君様が受け継がれるべきであり、それについて皆の衆も異存はないだろう。そして、以後のことは新当主たる若君様、いや殿の仰せに従うべきである。これについて、異存ある者あらば、この場にて名乗られよ」

康長に睨み付けられて諸将は黙り込んだ。もとより異論などあるうはずもない。ただ状況が状況だけに若干十歳の少年に全てを託すことが本当に正しいことなのかどうか、そこに一抹の不安を感じずにはいられなかっただけである。けれども先の千熊丸の堂々たる姿を見せられている彼らには、そうした反論もしにくかった。

一通り諸臣が納得したと見ると、康長はすかさず上座の千熊に目配せした。千熊は心得たとばかり、

「今後のことは全て俺が決める。だから皆は安心して欲しい。とにかく今日はこれでお開きとする。以後は俺の沙汰があるまでは何もするな。特に、父上が死なれたからと、殉死したり、あるいは復讐したりしようなどとは思わぬ。全ては俺が決める。俺の命なく勝手に

な行動をしたら、一族縁者悉く同罪として打ち首に処するから、そのつもりでいろ」

と言つて、諸臣に釘を刺すと後は逃げるように大広間から去つていった。

大奥に閉じこもつた千熊はそこでわんわんと泣いた。

お福ら大奥の女性たちは、このいじらしい哀れな御曹司にかける言葉もなくただきよきよと戸惑つていた。

千熊だけでなく、大奥もすっかり騒がしくなつた。三好家の存亡に関わる大事件とあつては彼女たちが慌てるのも無理はなかつた。

「若殿、ご立派にございましたぞ」

そこに一通り家臣たちに事態の説明を終えた三好康長がやってきて、泣き崩れる千熊の眼前に恭しく頭を下げた。

「とにかく家臣たちは宥めました。……後は、若殿がどうすべきか決めるのみです」

康長はひとしきり言い終えると、お福の差し出した茶をぐびぐびと呷つた。

一方、千熊丸は相変わらずひくひくと声にならぬ泣き声を上げた。こみ上げる悲しみは容易く癒されるものではない。何しろ父が死んだ。それも、父が忠誠を尽くし、全身全霊を賭して仕えてきた主君により殺されたのだ。千熊丸の受けた衝撃の大きさが如何ほどのものかあえて記すまでもあるまい。

「若殿、お気持ちは分かりますが今や若殿は三好家の惣領。いつまでもメソメソなされておられる暇はないのですぞ」

かく言う康長も、殺された三好元長の実弟だった。悲しみの度合いは甥の千熊に劣るものではなかつたが、元長の弟として、また新当主千熊丸の叔父だからこそ果たすべき役割があると信じ、そのために私情の一切を捨て去り問題の対処にあたらねばならぬと思つていた。無論、齡十歳に過ぎぬ千熊に自分と同様の冷静を保てとは言わないが、しかし当主たる千熊が自らの口で三好家の全権を掌握す

ると群臣に宣言した以上、彼にはある程度の冷静さは保ってもらわないと困るのだった。

「……叔父上、父上は何ゆえ殺されたのですか？」

と、千熊は心の底から抉り出すような、どす黒き声色で、叔父康長に尋ねた。

「何ゆえ殺されねばならなかったのですか？ 俺は断じて許しませぬ。父を死に追いやった者、それに加担した者、その悉くを必ずや罰して見せまする」

今まで見たこともない千熊丸の姿に康長は思わずぐくりと息を呑んだ。よもや彼は復讐戦争に乗り出す気ではないだろうか。万一、千熊がそのつもりならもはや康長に制御する術はなかった。三好家の世論は既に決起論に凝り固まっている。千熊が号令を下せば、皆は喜んで出陣するだろう。

だが……。戦って勝てる相手ではない。相手は、京を支配し、天下に絶対的勢威を持って君臨している細川晴元なのだ。如何に三好家が有力な大豪族とはいっても、細川家とまともにやりあって勝てる見込みなどあるうはずもなかった。

「叔父上、俺は決意しました」

そんな叔父の懸念など知る由もなく……。いや気づいていたとしても素知らぬ風を装ったまま千熊ははつきりとした口調でそう言った。

「決意？」

康長はまじまじと彼を見る。彼が何と言つのか。一挙手一投足に全神経を配った。彼の言葉次第で自分と三好家の運命も決まるのだ。「かつて越王勾踐こうせんは、呉王闔閭かんとを滅ぼした。闔閭の世子たる夫差は、復讐を誓って勾踐を倒した。そして倒された勾踐は、しばらくの雌伏のときを経て、ついに夫差を滅ぼすことに成功した。この一連の故事が臥薪嘗胆なる言葉の由来だという。…叔父上、俺はこの故事に倣い、臥薪嘗胆を期することにいたしまする」

「臥薪嘗胆……」

「左様にございます」

それは齡十歳の少年千熊丸が示した凄まじき決意の表れだった。康長は呆気にとられたように彼を眺めながら、

「それが若殿の仰せとあらば、我らに否やありませんぬ」  
と言つて、恭しく大仰に平伏した。

【雌伏編】第003章 悲劇の反逆者

時は少し戻って六月二十日。

和泉国にある顕本寺けんほんじは紅蓮の炎に包まれていた。

それはまさに現世に蘇った地獄と違っていい。燃え盛る炎の中に、数十人の男たちが悲壮感漂う壮絶な顔をして腰を下ろしていた。

「わしは、間違っていたのかな」

血塗れの甲冑をがちゃがちゃと揺らしながら、一人の武者は思わず天を仰いだ。

「殿、事ここに至ったからには、もはややむを得ませぬ。ここは三好武士の凄まじさを管領様に見せつけてやるのです」

そんな配下たちの言葉に、三好筑前守元長は思わずにっこりと微笑んだ。

時折吹き抜ける風がなぜだか奇妙に冷たかった。熱いはずなのに、それすら感じなくなっている自分の体を見て元長は苦笑いした。絶対的な死を前にして恐怖しているのだろうか。初陣前夜のようにぶるぶると震えだす体が鬱陶しくて仕方がなかった。

「……祖父上もこんな気持ちだったのだろうか。人の最期とは実に空しきものよ」

既に炎は元長たちのいる本堂まで迫っていた。バチバチと激しい轟音を立てながら、ガラガラと全てが夢の如く崩れ、泡の如く破れていく。その様をまじまじと見つめながら、元長は溜息混じりに昔のことを思い返していた。

それは十二年ほど昔。即ち永正十七年（一五二〇年）の五月末ごろのことだった。

この日、三好家の居城たる芝生城はいつになく騒がしかった。

「爺様が死んだと？」

元長は慌しく駆け込んできた家臣たちの思いもよらぬ報告に、信じられぬといった顔をして呆然と立ち尽くしていた。

「はッ！ 高国勢の反撃は凄まじく、大殿は等持院にて奮戦されましたが、如何せん多勢に無勢にて……。大殿は撤退の途上に捕らえられ、さる五月十一日、知恩院にて高国の命により斬首された由にござりまする。」

弱冠十九歳の青年、三好元長はがっくりと腰を落して、何度も、何度も涙ながらに畳を叩き、

「なぜだッ」

と、誰に対するでもなく声高に怒鳴っていた。

「い、一月までは我らが圧倒的に優勢だったはず。爺様は都を制し、あとわずかで高国を滅亡に追いやることのできたはずだ。なのに、何ゆえ……」

若い元長には、日々刻々激変する都の情勢というものが全く理解できなかった。なぜ祖父が死ぬのだ？ なぜ祖父は負けたのだ？ いくら考えてみても答えは出ない。なぜ、なんで、どうして？ 若き元長の疑問は深まる一方であった。

何しろ半年前まで祖父三好之長は、向かうところ敵なしの勢いでその勢力を拡大していた。一年前の永正十六年（一五一九年）の十月には、大内義興（中国地方の有力守護大名）という強大な後ろ盾を失った細川高国の軍勢を完膚なきまでに打ち破っているし、そして永正十七年の一月には都までも制圧下においてその武威を天下に示していたはずだった。まさに飛ぶ鳥落とす勢いで勢力を広げているはずの之長が、僅か四ヶ月後にかくもあっけなく滅び去ろうとは誰が予想しえたであろうか。元長が困惑するのも無理はなかった。

元長は落ち着きなくあちこちを動き回ると、何を思ったのか、不意に庭に飛び出して、腰に下げた刀を振り払うと、側にあつた大岩に思い切り斬り付けた。

カァァァン。

と、甲高い音を張り上げながら、岩は見事なほど真っ二つに割れ



てしまう。

「なぜだ？」

祖父は死んだ。

「これからどうなるのだ？」

父も既がない。若き元長の双肩には、三好一門の将来がずっしりとのしかかっていた。

「また、辛うじて勝瑞城に御帰還あそばされた澄元様も、今ではお城の中で病に臥せっておいでだそうです」

そんな家臣たちの報告を受けるたび、元長の中に滾る若き闘志は、熱く、熱く燃え上がってきた。死した祖父が粉骨碎身の思いで支え続けた主君澄元も今や病の淵にあるという。ならば、今こそ自分が立ち上がって亡国の危機を救わねばなるまい。自分以外にこの国難に対処できる人間はいない。そう信ずるがゆえに生まれる強い責任感は、彼の心の奥底に眠る祖父の記憶を封印させた。

この日、元長は主だった重臣たちを芝生城の大広間に集結させた。家臣たちは皆、之長の無念を晴らすべく、今こそ澄元を奉戴して上洛すべきと口を揃えて主張していたが、彼はそれほど短絡的ではなかった。怒りに流され、大事を見誤ったりはしない。怒りを堪え、悲しみを乗り越え、その上にこそ最善の道があると信じて、いきり立つ群臣をぎろりと睨み付けた。

「これから後はわしが三好家の当主である。即ち、わが意に叛く事は断じて許さぬ」

そう前置きしてから、

「兵を集めよッ！ これより我らは勝瑞城に赴く！ 高国勢が押し寄せてくるかもしれん。何としても我らの手で防がねばならぬ。我らが未来は我らの力で勝ち取るのだ。天下に三好元長ありということを示すのだッ！」

それは元長が当主として初めて下した決断であり、命令だった。

祖父之長を彷彿とさせる毅然とした態度、堂々たる迫力に群臣は啞然としたように立ち尽くし、ただまじまじと若くも偉大な主君の顔を見つめていた。

いつもの元長とは一味も二味も違った。名将と称えられた之長に勝るとも劣らぬ英雄が目の前にいた。だからこそ家臣たちは「ははあッ！」と恭しく一斉に平伏すと、彼の方針に異議など唱えなかった。

六月十日になって肝心の細川澄元が勝瑞城内にて没した。享年三十二歳という。

三好之長以来近畿地方への勢力拡大を国是としてきた三好家にとつて、細川澄元という男はなくてはならぬ大切貴重な錦の御旗であった。何と言つても、応仁の乱以来近畿地方で延々と繰り返されてきた内戦は、言うなれば管領細川氏内部の権力闘争に過ぎないのであり、要するに戦国時代初期の天下人であった細川政元の跡目を巡る争いの域を出るものではなかった。ゆえに、政元の養子として、彼の有力な後継候補と自他共に認められていた澄元の薨去がもたらす政治的影響は計り知れないほどに大きかったのである。即ち、澄元がいなければ、澄元方は細川高国（政元の養子）と渡り合う上で必須となる大義名分を失うことになりかねなかったのだった。

その細川澄元が死んだ。

即ち澄元派は、細川澄元という看板と三好之長という大黒柱を同時に失つた形となり、その勢力的衰退は誰の目にも明らかとなった。このままではいずれ押し寄せてくるであろう高国軍に太刀打ちできるはずもない。本来であればここは早急に新たな後継者を立てて態勢の立て直しを図り、家中一致団結して迫りくる脅威に備えなければならぬはずなのだが、然るに澄元の被官たちはどれも主君と重臣筆頭の死に右往左往して新たな主君を選び出す努力を怠り、拳句の果てには自らが之長に代わる澄元方筆頭重臣の座を占めてやろう

と、無意味かつ無謀な野心を抱く者やら高国に寝返ったほうがよいのではないかと不届きな算段を胸に抱く者もいて、勝瑞城は混乱と迷走を極めていたのだった。

そうした中、高国勢の進軍に備えて淡路に駐留していた三好元長は、盟友の安宅治興に淡路の守備を任せると、総勢二千に達する手勢を従えて勝瑞城に登城した。その上で浮き足立つ諸将を半ば強引に制圧し、澄元及び之長亡き後の澄元方の実権を完全に掌握してしまったのである。

そのときの元長は、さながら修羅の如きおぞましき形相をしていた。彼はすかすかと評議の席に乗り込むと、下らぬ小田原評定を延々と繰り返すだけの無能な諸将を睨みつけて、

「跡目には六郎様を置いて他にはあるまい」

と、声高に主張し、多少の反発はその武力で押さえ込みつつ、澄元の嫡男である六郎晴元を速やかに家督の座に擁立しよう迫ったのである。

群臣に否とはいえなかった。何しろ勝瑞城は既に元長軍二千により制圧されている。それに澄元には六郎晴元以外の後継者はおらず、異議を唱える要素などどこにもなかったからである。逆にいえば、晴元以外に後継者がいないにもかかわらず、その晴元を後継者に擁立できないほど澄元家臣団は混乱していたというわけだった。

兎にも角にも、こうして澄元家中を實力で纏め上げた元長は、天下に対しても、

「六郎晴元様こそが今は亡き政元公、澄元公が後を継いで、大細川の総帥となるに相応しいお方である」

と、大っぴらに宣言して、澄元及び之長亡き後の晴元方の存在感を示すと共に、高国と対抗する上での正統性、大義名分を保ったのであった。

紅蓮の中に思うのは、思いのほか後悔していないことくらいだった。

確かに、粉骨碎身、ひたすらに仕えてきた晴元に見限られたとき、元長は言いよの無い怒り、悔しさ、空しさを感じた。けれど不思議なことに、晴元を憎んだり、殺したいといった浅ましき感情は余り感じなかった。

今もそうである。悔しさというよりこういう定めだったのだという諦めの気持ちのほうが強かった。晴元を支え、澄元家の天下を取り戻し、なおかつ細川高国を滅ぼすことで祖父之長の無念も晴らした。既に成すべきことは成したのだ。だからかもしれなかったが、不思議と後悔はしなかった。

ただ今更に心残りなのは、国許に残してきた息子たちのことだった。年長の嫡子千熊丸はまだ十歳。三好家棟梁たる自分が叛軍の総帥として処分されれば、当然三好家も叛乱に加担した与党の筆頭として真っ先に処罰されるだろう。十歳の千熊に、この窮地を乗り切れるだろうか。十歳ゆえに命ぐらいは助けられるかもしれないが、そのとき肝心の三好家が存在しているとは思えなかった。

千熊には余計な苦勞をかけることになるかもしれない。そう思うと父親としていてもたってもいらなくなる。申し訳ないと頭を下げて謝りたい気持ちになった。

いよいよ炎は元長の周りを取り巻き、その命が果てるのを今か今かと待ちわびているようだった。既に彼の家臣数十人は揃って腹を切り、その場に転がっていた。もがき苦しみながら死に行くさまを見ると、自然、手に握る短刀がたがたと震えた。

「俺は、三好の大将なのだ」

心の中に強く言い聞かす。震える気持ちを押さえ込み、ぎゅっと刀を握り締める。

既に敵勢は寺の周りを包囲しているだろう。逃げる気などないが、逃げたとしても逃げられはしないだろう。事ここに及んで三好の名を辱めるわけにはいかない。それが、三好家総帥としての自分の最期の使命なのだ。

逃げまい。潔く堂々と立派に死んで見せよう。さすれば三好の名は高まり、結果として息子千熊の利となることがあるかもしれない。これ以上千熊に重荷を背負わせたくはなかった。せめて今できる最善を尽くして、後のことは全て千熊に託そうと思った。

「千熊よ。すまん。俺は実に子不幸な親だ」

そう呟いて苦笑い。くつくく。はっはっは。成長した凜々しき息子の顔を見ることができないのは結構辛い気がした。

元長が腹を切ったのはその直後のことだった。

やがて、息のない骸に猛然と炎が襲い掛かると、それらはやがて全てを飲み込み、そして、彼らの夢ごと全てを焼き尽くしていった。

三好筑前守元長は死んだ。

これにより三好之長、元長の僅か二代で、阿波の土豪から細川氏屈指の重臣へと飛躍を遂げた三好氏は確実に運命の岐路に立たされることになった。そしてそれは、僅か十歳の少年を否応なく天下の表舞台へ引きずり出す、運命的なきっかけとなったのであった。

【雌伏編】第004章 命がけの交渉

六月二十三日。阿波国は勝瑞城<sup>しょうずい</sup>。

この日は生憎の大雨だった。じめじめと纏わりつくような湿気を振り払うように三好千熊丸は自らの体に溢れ出す汗を拭った。

雨音が不思議な音色を醸し出す。薄暗き空はまるで千熊少年の心がそのまま表れているような感じがして余り良い気はしなかった。

正座は辛い。十歳の少年は溜息交じりに心の中にぼやいていた。足はじんじんと痺れ、次第に感覚を失つていく。立ちたい。歩きたい。僅か一刻（約三十分）程度の間少年の我慢は限界を迎えようとしていた。

「若殿！ いけませぬ」

隣に座る三好康長は咎めるように言つて少年を睨み付けた。

「しかし辛いぞ」

千熊が子供らしき文句をつけると、「我慢なされませ」と康長は呆れたような顔つきで言うのであった。

そんな具合にしばらくの間、少年たちは堅苦しい正座を保つたまま無人の上座を漠然と眺めていた。するとどこからともなく、

「守護様の御成り！」

と言う声色が響き渡った。千熊と康長はすかさず深々と頭を下げた。

そこにやってきたのは三十そこそこになるだろう年老いた青年だった。数人の小姓を従え、厳かに入室する彼は、平伏す二人を見下ろすようにゆっくりと上座に腰を下ろした。

「余は阿波国守護細川讚岐守持隆<sup>さぬきのかみもちたか</sup>である。面を上げよ」と、その中年男は言った。

千熊と康長は「ははあーッ」と大仰に答えると、ゆっくりと顔を上げた。千熊は不思議そうに阿波守護として阿波国全土を支配する男の顔をまじまじと見つめた。それが不敬に当たることは重々承知

していながら少年の中に滾る幼き好奇心は彼をしてそうせずにはいられなくさせていたのだった。

細川持隆はその名の如く細川一門に連なる実力者である。細川家の分家に生まれながら、早くより細川澄元に仕え、その死後も跡を継いだ晴元に忠勤を尽くすなど数多くの功績を挙げた重臣中の重臣でもある。事実細川家の本国ともいえる阿波の支配を委任されるなど晴元から絶対の信頼を寄せられていた。

「用件は……、聞くまでもあるまいな。筑前守殿の一件であろう」  
持隆はそう言うと、困ったようにハアと深い溜息を吐いた。

「いかなあ」  
彼は突然すつくと立ち上がると、平伏す千熊丸の下に赴き、少年の柔き頭をぱんと叩いた。

「わしを頼られても此度ばかりはどうにもならん。何しろ筑前殿は管領様に刃を向けた、いうなれば逆賊だ。無論わしとて筑前殿には同情せんでもないが……。だが、わしの口から逆賊を助けよ、などと申せば、わしまでもが同罪となりかねんだろう」

それが持隆という人の偽らざる本音だった。触らぬ神に祟りなし。如何に彼が細川一門屈指の重鎮だといっても、元長の一件はその程度でどうにかなるほどに小さな話ではなかったのである。

雨音が激しくなった。叩きつけるような土砂降りには、障子越しにこの部屋の中まで飛んできそうなほどだった。

「守護様の仰せは尤もなれど、ここは何卒守護様の御厚恩を賜りたく……。もはや守護様のほかに頼るべき人もないのです」

と、三好康長はひときわ目立つ大声で、さながら叫ぶように言い切った。

既に今の彼に恥も外聞もなかった。ただひたすら三好家の存続を勝ち取ることだけが全てだった。だから康長は懇願するように持隆を見上げた。彼以外、頼るべき人もない。ゆえにもし断られたなら、この場にて切腹してみせるぐらいの悲壮な覚悟を漂わせていた。

「頼ってくれるのは有難いが、はつきり言っておりがた迷惑という

ものだ。残念だが、わしがその方らに手を貸すことは出来ぬ。まあ、せいぜいできることといえば、わしの口からそなたらに厳罰を求めることがない、といったことぐらいだ」

持隆は突き放すようにそう言い切ると、これ以上話すことはないと言わんばかりな顔をして、ぷいっとそっぽを向いた。

「しゅ、守護様！ な、何とぞ、何卒お聞き届けくださりませ！」

康長は慌しく持隆の下に駆け寄ると、その裾に縋り付いて、何としてもこの場で彼より明確な言質を引き出そうと必死になっていた。

「ええい、離せ！ 離さぬか、無礼者め」

そんな彼を思い切り蹴り飛ばすと、持隆は腹立たしそうに、微動だにせぬ千熊丸のほうを睨み付けた。

「大体だ、如何なる理由があるにせよ、管領様に背いた時点で一族縁者悉く殺されることは覚悟せねばならぬ。それが戦国の掟というものだ。筑前殿とてそれを承知の上で立ち上がられたのであるう。

ならば、何ゆえわしがそなたらを助けねばならぬ。確かに、阿波守護たるわしにとって三好家は配下の大名の一つ。だが、その程度の縁しかない相手のために、何ゆえ命を張らねばならぬ」

「されど」

「されどではない。筑前殿が事を起こした理由も分からぬわけではない。だが、裏切りは裏切りだ。主君に刃を向けた以上、筑前殿の行為を是とするわけにはいかんだ。それぐらいのことは、そなたらとて分かるう」

そう吐き捨てるように言うと、持隆は憤懣そうな面持ちで土砂降りの縁先のほうへと静かに歩いていった。

持隆とて鬼ではない。助けられるものなら助けてやりたかった。

だが、元長には細川晴元軍とじかに刃を交えたと言う動かし難き罪状がある。しかも今回の一件は、いわば晴元政権内部の主導権争い、即ち政権創設の大功労者として発言力を高める元長と、それを憂慮する晴元側近衆の間で繰り広げられていた対立が発展した結果として生み出された悲劇という一面もあったから、下手に千熊擁護の姿



勢を打ち出すと、権力を握った側近衆、とりわけ三好越前守政長や木沢長政らの反感を買うことにもなりかねなかったからそうそう容易く助けてやるとは言えないのである。

ゆえにこれ以上自分を頼られても困る。そうは思うのだが、相変わらず自分の裾に縋り付く康長の強情さや、黙り込んだまま、ひたすら頭のみ下げている千熊のいじらしさを見ると、どうも容易く見捨てられない気がした。

持隆はどうにもならぬ思いの中で、腹立たしそうにペツと庭先に唾を吐いた。

「ともあれ三好殿、守護様はお忙しい身の上にて、お話はまた後日にしてはいただけませぬか？」

そこに、阿吽の呼吸で口を挟んだのは、持隆の重臣たる久米義広という男だった。彼はじろりと千熊を睨み付けると、汚物でも見るかの如き冷ややかな笑みを見せた。

「守護様、如何です？ 後日、ということでは今日のところは打ち切りといたしましょう」

と、久米に言われると、持隆は小さく頷き、そしてあらゆる後ろめたさを吹き飛ばさんと大仰に笑った。魂のこもらぬ、乾ききった空笑いは、空しく部屋中に響き渡ったが、それでも構わず彼はひたすら「ははは」と笑っていた。

相変わらず空は騒がしかった。

後ろめたい気持ち在必死になって押し隠しながら上座に戻った持隆は、濡れた髪を恥ずかしそうにいじくりつつ相変わらず下座に踏ん張る二人を見下ろした。今更何を言っても無駄だ、そう言おうとした時、

「守護様に申し上げます」

それまでだんまりを決め込んでいた千熊丸が、その華奢な体から生み出されたとは思えぬほどの大音声で、怒鳴るように叫ぶように

言ったのである。

「守護様の御考え、よく分かりました。となると、我らの採るべき道はたった一つしかありません」

「一つ？」

千熊丸の凄まじき迫力に持隆は思わずたじろいだ。何を言い出すのか。何を言わんとしているのか。少年の真意を薄々察したらしい持隆は、呆れたように絶句した。

「京に出向き、むざむざ殺されるぐらいなら、私はこれより居城に戻り、拳兵いたします。例え私をここに殺したとしても、領地には弟もおり、彼らが私や、わが父の無念を晴らすでしょう」

「拳兵か。だが筑前殿ですら管領様には勝てなかつたのだ。そなた如き若造が立つたところで、どうにかなるものでもあるまい」

所詮は餓鬼の浅知恵と、持隆は心の中に嘲笑った。彼が自分をその程度の脅しに屈するような軟弱な男と思っていたなら心外だ。などと思いつつにやりと不敵な笑みを漏らした。

「守護様は、当家の底力をご存じないと見えるゆえ、お教えいたしまししょう」

「……」

「既に芝生城には三千の精銳が揃い、万一のことがあれば即出陣できるよう手筈は整えてあります。されば明日にもこの勝瑞城はわが軍により取り囲まれます。また、阿波にはわが父に従った者も多く、彼らが我らに従えば、その数は五千にも六千にもなります。三好家が滅びれば、次は彼らの番ですから。己の家を守るためとあらば、彼らは容易く我らに与力するでしょう」

「……」

「その上、わが父と私を相次いで殺され、怒りに燃えるわが兵は、それこそ死に物狂いで攻め込んできましょう。となると守護様に勝ち目はございますか？ 管領様から援軍を仰ぐにしても、海を挟む以上、到着までに確実に数日かかります。その間に、この城ぐらゐは容易く攻め落として見せます」

「……」

「例え我らが勝瑞城を攻め落とせなかつたとしてもです。反逆者相手に苦戦している姿を管領殿が御覧になればどう思われるでしょう。管領殿に援軍を仰げば、確かに我らを倒せるかもしれませぬが、そうなれば、守護様の御立場は確実に悪化します。もし私が管領殿の立場なら、自力で国一つ守りきれぬ男に、国、それも大切な本国を預けたりはしないでしよう。それに、わが父を殺し、細川家中に確固たる基盤を築いた三好越前守政長や木沢長政らがこの絶好機を見逃すとも思えませぬ。彼らにとって、細川一門の筆頭、重臣中の重臣たる守護様は目の上のたんこぶ以外の何者でもないのですから」

千熊丸はそこまで言って、ようやく口を止めた。

言い過ぎたのではないか、言ってから少しばかり後悔する。博打も過ぎるとただの無謀。とはいえこれは千熊丸少年の打った一世一代の大博打だった。あたるも八卦、あたらぬも八卦。あたったからと確実に危機から脱出できるわけではなかったが、しかしあたらねば、それは即ち確実な死であり、滅亡を意味した。だから彼は心に願ひ、強く祈った。

気がつくくと土砂降りはずしずつ収まっているようだ。先ほどまで頻繁に轟いていた雷鳴ももうすっかり彼方の先に消えてしまったかのようにであった。

「ま、まあ、しばらく考えてみよう。と、ともかく悪いようにはせぬから、明日まで待て！」

そう持隆が言ったとき、千熊は素直に勝つたと思った。顔をより深く畳に埋めると、溢れ出す笑みを必死になつて押し隠した。

持隆はオドオドと、不安そうに動き回っている。時折悔しそうに千熊のほうを睨んでいた。

この辺りが潮時だろうと、

「されば、明日を楽しみに待ちまする」

と言つて、千熊は康長を伴い、軽やかな足取りで勝ち誇つたような顔をして去つていった。

【雌伏編】第005章 死出の上洛

七月の空を思い切り見上げるとそこには大きな雲がいくつあつて、のつぽのようにとこまでも高く、それこそ天をも貫かんほどの勢いで聳え立っていた。その合間を縫うように広がる青々とした世界は、煌々と輝く橙色と交じり合つて、自然の雄大さを絶妙に演出していた。のどかで広々とした満ち足りた世界を漠然と眺めていると、千熊丸少年は今の自分を取り巻く余りに惨めな環境と比較せずにはいられなかった。

少年は半ば捕虜の如く身動き一つできぬ小さな牢獄に閉じ込められたまま、都までの長き道のりを急いでいた。

都。より正確に言えば平安京と呼ばれる町のことである。延暦十三年（七九四年）に桓武帝により遷都されて以来、都合七百年以上もの長き間ひたすらこの国の中心であり続けた歴史と伝統に満ちた空前の大都市だった。

そこには帝もいれば將軍もいるし管領だっている。公家、寺院など悠久の鎧を纏つた人々がずっしりと根を張つて、今も昔も変わらぬことなき圧倒的な存在感を誇つて君臨していた。

そんな町を千熊丸は目指していた。けれどそれは何も観光といった楽しげなものでは決してなかった。仕事、といえば確かにそうかもしれない。ただそれは齡十歳の少年が背負うにしては、余りに大きくそして辛いものだった。

「三好の若君、確実に殺されるだろうな」

駕籠に揺られながらなんとなく聞き耳を立てていると、少しばかり離れたところにいる足軽たちの噂話が思いもよらず彼の耳に飛び込んできた。暇なので神経の全てを耳に集約していたことが功を奏したのかもしれない。その他いろいろな雑音を吹き飛ばして、彼ら

のひそひそ話だけが妙に彼の耳に入ってきたのだった。

「ま、謀叛人の御子だからな。不憫ではあるが仕方なからう」

足軽たちにとっては、千熊丸や三好家の悲劇などあくまで他人事に過ぎない。不憫だ、可哀そう、などと口にしても表情は案外朗らかであった。要するに、行軍途中の単なる暇つぶしとして彼らはけらけら笑いながら噂話に花を咲かせていただけなのだった。

「なんでも守護様に泣きついたらしいが、守護様にとってもご迷惑な話だったろう。實際上役たちは皆嘆いているよ。万一御家と三好家が密接なつながりを持っている、なんて管領様に勘繰られたりしたら御家もたちまち危うくなるからな」

「はは、確かにな。ま、俺たち雑兵にとっちゃ御家がどうなるうと仕官先ならいくらでもあるから食うには困らんが……。ま、その仕官先を見つけるまでが面倒だからできれば御家はこのまま安泰であつて欲しいがね」

「ま、そうだな。だが、三好の若は哀れな気がするよ。何せまだ十歳だろう。十といえばうちの子供がそんなもんかな」

「確かに……」

足軽たちにとっては所詮ただの暇つぶし程度の雑談に過ぎなかったのだが、千熊にとつては聞き捨てならない、もとい興味を抱かざるを得ぬ話題であった。ゆえに彼は壁に耳を擦りつけ、一言たりとも聞きもらすまいと全力で聞き耳を立てていた。

「俺たちみたいな木っ端には分からん話だけど、ただ……、今回、何で筑前様は謀叛なんて馬鹿なことをしたんだろう？ 筑前様の晴元様に対する忠誠心の厚さは昔から有名だったじゃないか」

と、足軽の一人が言う。

「さあ、詳しいことは分からんがいろいろあつたらしいぞ。俺が聞いた話によると、細川高国が滅びた後、晴元様が一方的にそれまでの基本方針を変更しようとしたのがお二人が対立するそもそのきつかけだったらしい」

「ああ、それなら俺も聞いた。確か晴元様は筑前様らに何の相談も

なく、いきなり公方様と和睦しようとなされたんだろう」

「そうそう。公方様はこれまで高国に擁立されていたんだから。その公方様を廃して、堺におられた……、なんて言ったかな。確か……」

「足利義維様よしつなだろう。確か、公方様の御実弟」

「そう、その義維様を次期將軍にするつてのが晴元様と筑前様の方針だったんだ。それをいきなり公方様と和睦だからな。義維様を一番推していた筑前様の面子は丸潰れ。將軍になれなくなった義維様にしたつて心穏やかじゃないはず。……その上、公方様との和議を推進したのが、晴元様の側近筆頭の三好越前守政長様ときてるんだから、筑前様のお立場なら普通怒るだろう」

「ま、筑前様と越前様は同じ三好一門とはいえ余り仲の良い親類つてわけじゃなかったらしいしな……」

案外、随分と物知りな足軽たちの雑談はその後もしばらく続いた。とはいえ、ああでもないこうでもない、次第にどうでもよいような話題に移っていったようなので、ようやく解放された形となった少年はフウと静かな溜息を吐いて、ゆっくりと目を閉じた。

少年は物思いにふけていた。幸い、狭き駕籠の中なら邪魔立てする者はいない。目的地に到着するまで後数刻ほどだろうが、少なくともそれまでは時間的猶予がある。

だから思う。ゆえに考える。

彼は知らなかった。晴元や父が何を考え、何を目指し、何を求めてきたのか。無論、父たちが足利義維を推し、彼を旗頭に担ぐことで、公方、即ち室町幕府第十二代將軍足利義晴を擁立する細川高国と対峙する上で欠かすことの出来ぬ大義名分を得ていたことは知っている。しかし、それ以後の経緯が彼にはとんとわからないのだった。父も晴元も義維を推していた。ならば当然、高国が滅びた後は義維こそが次期將軍となるべきではないのか。だが、晴元は唐突に

方針を変えた。それがなぜか、千熊には分からない。おそらく父にも分からなかったのだろう。だからこそ父は実力行使に訴え出るより他に仕方がなかったのだ。父は決して無能ではなかったが、ずば抜けて賢いというわけでもなかった。どちらかといえば、猪突猛進、考えるより行動を優先する性質だったから、余り深く考えることなく晴元の裏切り行為のみに囚われ、その背後に渦巻く陰謀を見抜けなかったのかもしれない。

そんな具合に彼の思考回路はぐるぐると勢いよく回りだした。なぜ、なんで、どうして？　これから死に行く者にとつては全く必要がないことではある。けれど、それでももつと知りたい。もつと学びたい。そして考えたい。

要するにまだ死にたくないのだ。少年にはいろいろと未練があった。

無論、晴元がそう命じれば自分は素直にそれに応じ、腹を切るだろう。それが三好家の当主たる自分に定められた宿命……。けれど、そうは言ってもやっぱり死にたくない。

死にたくない。

あらゆることを考えるたび、導かれる答えは全てここに集約されてきた。宿命とは何なのか。なぜ父は殺され自分も死なねばならないのか。

全ては時代が悪い。と決め付けて思考停止に陥ってしまうほど千熊丸は単純な性格をしていなかった。

なぜこんな時代になったのか。どうやったらこの悪夢のような時代から抜け出すことが出来るのか……。今から死にゆく身の上でそんなことを考えている己の滑稽さに苦笑いしながら、千熊は腕組み、そしてゆっくりと瞼を閉じた。

【雌伏編】第006章 前史概略

戦国という時代は何も忽然と唐突に現れ出たものではない。そこには様々な事情、理由があり、また奇妙な偶然が複雑に絡み合った上で出来上がった、いわば一つの芸術だった。

さて戦国時代とは如何にして成立したのか。まずはそこから考えてみよう。しかしそのためにはまず室町幕府の草創期に目を向ける必要がある。なぜかといえば戦国時代とは即ち室町時代の延長線上に位置する時代だからである。だから室町時代後期を局所的に見ているだけではなぜ戦国時代が到来したのかその本当の理由は永遠にわからないのである。

室町幕府とは足利尊氏が設立した史上第三の武家政権である。無論、尊氏は、豊臣秀吉の如く唐突に歴史の表舞台に現れ出た人物ではない。彼の父祖の代から既に足利氏は鎌倉幕府に仕える有力な御家人としてその名を天下に轟かせていた。

尊氏が如何にして覇権を握ったかという具体的な話はこの際割愛するとして、彼が四苦八苦の末に作り上げた政権はとにかく最初から最後までずっと不安定だった。そしてそれは彼自身の性格に起因するところが多かった。

よく鎌倉幕府創業者の源頼朝は冷徹な男といわれる。何しろ幕府の基盤整備のためには創業の功臣でもある弟の源範頼や源義経らを容赦なく切り捨て粛清しているほどだからだ。そして江戸幕府創業者である徳川家康も頼朝に通ずる冷酷さを併せ持っていた。しかし足利尊氏は彼らとは対照的に情の人であった。権力者としては致命的といえるほどの情け深さ、甘さを併せ持っていた。

なぜか？

最大の理由として、家庭環境、あるいは生活環境の違いがあげら



れるだろう。頼朝や家康は幼少期、あるいは中年期に様々な苦勞を強いられていた。一方、尊氏はこれといった苦勞を強いられていない。河内源氏嫡流足利宗家の跡取り息子として生まれた彼は、生まれながらにしてある程度の身分を確約されていた御曹司であった。対する頼朝は名門出身ではあるが、平治の乱に敗北して以後は流人生活を余儀なくされているし、家康に関しては言うまでもないだろう。

とにかく足利尊氏という人は、自らが名門に生まれ何不自由ない幼少期及び青年期を過ごしてきたからか、常に大盤振る舞いで、かつ人を疑うと言うことを知らなかった。無論それが全て悪いとは言わない。実際、そうした人の良さが彼をして天下人に押し上げた面は否定できない。だが彼は氣前が良すぎた……、もといろいろいな点で甘すぎたのである。

例えば弟の直義を副將軍とし、自身とほぼ同格の権限を与えたことなどはそうした尊氏の性格がもろに現れた事件と言えるだろう。もちろん彼としては直義の功勞に報いたつもりだったのだろうが、結果として尊氏と直義という二人の権力者を生むこととなり、幕府はその草創期から尊氏派と直義派が対立する破目に陥ってしまったのである。要するに尊氏、直義兄弟によって引き起こされた内乱である観応の擾乱は、尊氏自らの甘さが招いた自業自得と言ってよかつた。

もちろんそれだけではない。彼は功臣たちに思う存分の恩賞を与えた。無論そのおかげで彼は諸国の武士から絶対的な尊崇を集め、幾たびの失脚を経てもその勢力を保ち続けることに成功したという面はある。負けるたび逆にその力を強めて逆襲に転じた尊氏の底力は、名門足利氏の棟梁というだけでなく、彼自身の氣前のよさによるところが大きかった。だが、ものには常に限度がある。彼はそれを超えたのだ。尊氏の下で膨大な領地を得た者（彼らを守護大名と称している）は、幕府に不満を抱くたび南朝や直義方に寝返ったりして幕府（尊氏陣営）を窮地に陥れただけでなく、戦乱が鎮静化し

た後も、その絶大な権勢を背景に独自路線を突き進むなど、幕府が全国支配を遂行する上での最大の障壁となっていた。

尊氏の残した遺産はその後の將軍たちの課題になった。そしてそれが戦国時代を生み出した遠因の一つにもなっている。

三代義満は強大化した有力守護大名を上手く統制し、強大な権力を誇った。四代義持は父義満の如き専制政治を否定し、諸侯との融和を重視した。そのため將軍が主導的に政治を進めることは難しくなったが、有力諸侯を政権内に取り込むことにより政権自体は安定的に推移した。

問題は六代將軍義教である。彼は兄義持の融和主義的な政策を否定し、父の如き専制君主を目指した。ゆえに彼は次から次へと反抗的な諸侯を討伐し、ついには鎌倉公方府さえも滅ぼした。結果として義教期の幕府は義満時代以上の権勢を誇るに至ったが、物事には常に限度があるのである。將軍権力の確立という大志に燃え上がってひたすらに突き進んだ彼は、その強圧的な政治に恐怖した有力守護大名の一人、赤松満祐によって殺されてしまう（これを嘉吉の変という）。

以後の幕府は、義満・義教時代の如き独裁政治となるわけでも、尊氏・義詮（二代將軍）時代の如き軍事政治や義持時代の如き將軍主導型の有力守護大名の連立政治になるわけでもなかった。というより將軍が殺害されるという前代未聞の事件をきっかけに將軍の権威は著しく低下し、また事件処理を通じて守護大名（特に山名氏）の力が一段と強化したため、もはや將軍が主導して政治を行えるような状況ではなくなっていたのである。

七代義勝が早世した後を受け、將軍となった八代義政は、当初こそ父や祖父の如き専制君主を目指したが、彼らの如き能力もなかったためにすぐ挫折した。その後は政所執事の伊勢貞親ら重臣、正室の日野富子に全てを委ね、風流三昧の日々を過ごすことになるのだ

が、こうした彼の態度も將軍家の權威低下に拍車をかけることになった。

歴代の足利將軍を簡潔に評するなら、尊氏・義詮が軍人君主、義満・義教が絶対君主、義持が立憲君主、義勝・義政が象徴君主といえれば分かりやすいかもしれない。政治に無関心な風流將軍の下では、有力な諸侯たちが合議により、重要政策を決定していくしかなかったのである。

ただ室町幕府の実態が將軍家を盟主とした有力な守護大名の連合体であることを考えれば、義政の下で將軍家が無力化することは幕府そのものの存亡に関わる重大事だった。即ち、調停役である將軍家という重石が外れたことで有力諸侯たちの中に渦巻く対立の火が一挙に表面化することになってしまったのである。

そして、そうした対立が激化し、かつ幕府創設以来の諸矛盾が一挙に表面化した結果として勃発したのが、史上に名高き応仁・文明の乱であった。

応仁の乱の具体的な詳細はこの際省くとしよう。

ただ、この十年間に及ぶ激戦のために室町幕府の權威は大幅に失墜し、その權威を前提として成り立っていたあらゆる常識、秩序もまた無惨に崩れ去る破目となった。

今現在のところ、応仁の乱に戦国時代の起源を求める説が専ら主流であるが、実際は応仁の乱が勃発するずっと以前から既に關東地方などは幕府の統制下を離れ、戦乱状態に陥っていたわけで、応仁の乱こそが戦国を招いた元凶と言いつけるのは少しばかり暴論であるといえる。とはいえ、戦国時代の到来を決定付けたという意味においては、この乱がもたらした歴史的影響は凄まじく大きかった。

ただし……。下克上などの言葉に代表される、いわゆる我々がこうだと信じる本格的な戦国時代は幕府管領細川政元（応仁の乱における東軍盟主細川勝元の嫡子）が引き起こした明応の政変、及び北

条早雲による伊豆侵攻がきっかけとなつて幕開けしたといわれている。

明応の政変とは、端的に言うなら、明応二年（一四九三年）四月、管領の細川政元が畠山氏を征伐すべく河内国に向いていた第十代將軍足利義材を一方的に追放し、足利政知（堀越公方。足利義政の異母兄）の子である足利義澄を十一代將軍に擁立した事件である。要するに將軍家の家臣に過ぎない管領によつて將軍家当主が廃立されたのだから、これほど明確な下剋上もないわけである。

兎にも角にも將軍家が管領によつて廃された！ という衝撃的な大事件は、浪人上がりの北条早雲が伊豆国を地盤とする堀越公方足利茶々丸（政知の子で、十一代將軍義澄の兄）を滅ぼした事件とともに、戦国時代の到来を一般民衆に知らしめるに十分な力を持っていたというわけであつた。

この事件の後、殺伐とした戦国時代は加速度的な勢いでどかな室町時代を飲み込んでいった。

永正四年（一五〇七年）六月には、先の政変で権力を握つた細川政元が暗殺されている。下手人は、養子の細川澄之の郎党といわれているが、その背後に主君澄之の意があつたことは疑いない。だが、その澄之も、同じ養子兄弟である澄元、高国の連合軍により滅ぼされ、その澄元、高国も、やがて細川家の家督の座を巡つて対立するようになつた。

明応の政変に始まり、政元の暗殺により本格化した畿内の戦乱は、要するに細川家内部の主導権争いの域を出るものではなかつた。とはいへ、この主導権争いに將軍家や畠山、六角、大内などの有力諸侯も複雑に関わつたので、戦乱は次第に収拾のつかない大混乱へと発展していったのである。

細川政元の死から細川晴元によって再び細川氏が統一されるまでの約二十四年間の混乱をより簡潔に言い表すところなる。

政元を殺した澄之は、その直後、澄元、高国により滅ぼされてしまう。しかし今度はこの二人が主導権を巡って争い始めたことは先に記した通りである。澄元と高国の実力はどちらかといえば澄元のほうが優位であったが、高国方に中国地方最強と称えられた大大名大内義興が与力したことで形勢は逆転してしまうのだった。かくして澄元は不利を悟って都から撤退し、勢いに乗って都に突入した高国たちは政元が擁立していた將軍義澄を追放した後、政元によって追放されていた前將軍足利義材を復帰させたのである。義材はこの際、自らの名を義植と改めているが、言うまでもなく、管領である細川高国と管領代たる大内義興の傀儡に過ぎなかった。

かくて発足した高国政権であったが、勢力的に磐石であるとはお世辞にも言い難かった。挙句政権の主導性を巡り、大内義興と足利義植の対立が顕在化すると、その隙を突く形で度々細川澄元方が京都を脅かした。澄元は高国らにより追放された前將軍足利義澄を盟主に擁立し、一時は京都奪回を目前に迫るまでに勢力を回復したが、肝心のその義澄が永正八年（一五一一年）八月に没したため、やむなく摂津に逃れていった。

かくして政権基盤を確固たるものとしたはずの高国であったが、永正十五年（一五一八年）八月には、政権の大黒柱であった大内義興が国許の政情不安により帰国するなど早くも衰退の予兆を見せ始めていた。結局大内帰国の隙を見逃さず、すかさず反撃に転じた澄元軍は、高国と対立する將軍義植の支持も得、永正十七年（一五二〇年）一月に上洛したのである。しかし高国はしぶとかった。近江坂本に亡命していた彼は、そこで大軍を編成すると、早くも五月に上洛。澄元方の重臣三好之長を処刑し、澄元までも死に追いやったことで、ここによくやく高国政権は安定することになったといわなければならない。

その後の高国は何かにつけ自身と対立するようになっていた足利義植を追放し、義澄の子である義晴を十二代將軍に擁立する。これにより將軍家を完全に掌握した高国の権勢は絶頂に達した。既に最大の政敵だった細川澄元もなく、その後継者たる晴元も能力的には未知数な少年に過ぎなかったから、勢力的にも彼の右に出る大名はいなくなった。この頃が高国の全盛期といってよく、自らの手で後柏原天皇の即位式を挙行したりと、その権勢ぶりはもはや一介の管領の域を超えていた。

絶頂は退廢の一步。満ちた月は、常に欠ける。

高国とても例外ではなかった。彼の場合、嫡子植国が大永五年（一五二五年）十月に没した辺りから全てがおかしくなった。翌年には、奸臣の讒言に耳を傾け、重臣の香西元盛を肅清し、その結果として彼の兄である波多野植通、柳本賢治らの離反を招いた。彼らは高国の送った討伐軍を悉く撃退した後、阿波に逼塞していた細川晴元と手を結んだのであった。

晴元と彼を支える三好元長にとり、高国政権の内争は臥薪嘗胆を成す上でまさにこれ以上ない絶好機だった。そこで彼らは將軍義晴を擁する高国方に対抗する形で、義晴の実弟であった足利義維を次期將軍候補に押し立て、大永七年（一五二七年）三月には堺に入城したのである。その上で事実上の政権（これを堺公方府、あるいは堺幕府と呼ぶ）を立ち上げた彼らは、享祿四年（一五三一年）六月の大物崩れの合戦にて高国を破り、長年に渡り繰り広げられてきた細川氏内部の抗争に終止符を打ったのだった。

【雌伏編】第007章 奇跡の生還

七月六日。

千熊が見たのは地獄にも似た廃墟だった。

彼を護送する細川持隆の行列は厳かに羅城門を潜り、ゆつくりと朱雀大路を進んだ。あちらこちらに飢えた民の哀れな末路が転がっていたが、助けようとする者もなく、皆、己が命を守るだけで必死といった様子で辛く厳しい日々を生きていた。

晴元政権が発足して以後、それなりに整理も進んでいたらしかったが、それでもなおこれが『花の都』と天下に称えられてきた町とは到底思えぬ有様が延々と広がっていたのである。千熊丸は衝撃の余り、しばらくの間、開いた口が塞がらなかった。

そうこうして千熊はある屋敷にやってきた。持隆配下の侍たちはどれも口をパクパクさせて、驚きを隠せぬ己の感情を分かりやすいほど明確に表現していた。

「これが、晴元様の、御所……」

俗に管領御所などと言われているらしい。盛大にして豪勢を極めた大宮殿は、かつて細川高国がその圧倒的権勢に物を言わせて作り上げたものらしく、都にあつて唯一都らしい代物だった。

今は晴元の京都在留中の居館になっているのだという。更なる普請も始まっているようで、大勢の人夫たちが必死の労働に励んでいた。けれど、都の現状を放り出したまま己がことのみ真つ先に手をかけるあたり、晴元という人間の正体が露骨に現れているようで千熊は思わず苦笑いした。

千熊にとっては見るもの聞くもの、全てが全く新鮮だった。

聞いては驚き、見ては頷き、兎にも角にも彼はこれから自身に待ち受ける宿命などすっかり忘れられた様子で初めて見る世界にすっかり

のめりこんでいた。

やがて管領御所内の狭き一室に閉じ込められた。数人の見張りが常に彼の側に張り付いているほかは、案外居心地の良い書院造のどかな部屋だった。

「これは全て晴元様の御温情。ありがたく思えよ」

と、嘲るような笑い声とともに見張りたちは言うのである。勝ち誇ったような顔をして時折千熊を見下す彼らの冷たき視線を感じるたび、千熊はあえて何も言わなかったが、その内心には腸が煮えくり返るような怒りの焰がめらめらと燃え上がっていた。

御所内での千熊は、罪人であり、捕虜であり、また人質だった。

まず部屋から外へ出ることは許されない。常に数人の見張りが彼の周りを取り巻いている。ゆえに彼の一日というのは、専ら書物を読むか、眠る以外にやるべきこともなく、いつ処刑命令が下るのかという恐怖に苛まれながら過ごす破目となった。

だが、何より辛いのは、迫り来る死の恐怖よりも、見張りたちによる陰湿な苛めだった。

「所詮、後数日もしたら死ぬ奴にこんな大そうな飯など必要あるまい」

などと言って、彼らは千熊に対しまともな食事すら出さなかった。本来、晴元の配慮により一日二食、それ相応のものが出されることになっていたが、彼の下に届く頃には既に鼻の曲がるような腐臭を発する生ごみと化していたりした。抗議しても彼らは鼻で笑い突き放してきた。虜囚の身たる千熊には、彼ら以外の者と話す機会がない。だから、彼は日に日に衰弱し、ついにはたまらず腐ったものを喰らって腹を壊すことも度々だった。

千熊は弱りきった。食わずば死に食べても死ぬとなるとどうしたらよいのか分からなかった。死にたくない。晴元に会い、彼と話すことさえ出来ればまだ希望の光はある。だが、その前に死んでしま



つては何の意味もなかった。

そんなある日のことだった。

貧窮のどん底に喘いでいた彼の下に、三好越前守政長が視察と称してやってきたのだ。どん底の底で苦しみぬいている今の彼にとつて、政長は父の仇ではなく、この地獄のような環境から自分を救い出してくれる光明の如く思えた。彼がやめるよう命じればさすがの見張りたちとて無視はできまい。何しろ、今の彼は細川家中きつての実力者なのだ。

だが……。

「逆賊の倅ならば、その程度の報いは当然といえよう。腐つていようがいまいが、食事を出してもらえただけ有難いと思わねばいかんよ。どうせ明日には御所様（晴元のこと）の御前にて、確実な死を宣告される身の上。そうそう。腹の中に無駄な汚物などたまつていては、死したとき汚くなるかもしれん。ならばいっそ、空っぽにしておけば、美しき死を遂げられるぞ。同じ三好一門として、恥ずかしくない最期を遂げてもらわねば、わしが恥ずかしい思いをすることになる」

と言い放ち、政長はからからと笑った。

千熊が愕然としたのは言うまでもあるまい。三好政長という男の中にある良心とかいう薄甘い期待にすぎた彼が悪いと言えばそれまでだろう。しかし彼は人の心というものを信じてみたかった。こんなどん底で、人の世界とは思ひ難き地獄に放り込まれたからこそ彼は人の心に触れてみたかった。しかしそんな彼の前に突き出されたのは冷たい現実だけだった。

彼はがっくりとうな垂れると、その瞬間、言いよぶのなき怒りが体中に泉の如く湧き上がってくるのを感じた。いつそのまま政長に飛びかかってその首に噛みついてやろうかとも思ったが、そんなことをしたところで何の意味もなくただ無駄に命を散らすだけだと

思い直して諦める。自分は三好家の大将なのだ。痩せても枯れても彼の肩の上には何干という三好の郎党の命がのっかっているのである。自分の短慮で彼らを路頭に迷わせてよいはずがない。国許で自分の帰国と三好家の復興を切に願う忠臣たちの期待を裏切つてよいはずがない。だからこそ千熊は耐えた。こみ上げる怒りを必死に堪えて耐え抜いた。

「明日だ。明日になれば全て終わる」

政長が去った後、千熊は心の中でそう叫んでいた。

明日。明日。明日。

明日になれば細川晴元に会える。確かに政長はそう言った。晴元に会うことさえできれば自身の助命くらいは取り付ける自信があった。無論難しいだろう。だが何としても成し遂げて見せる。さもなければ自分も三好も一巻の終わりだと思いつながら明日に備えとりあえず眠りにつくことにした。

翌日。

三好千熊丸は晴元の命令により彼の下に伺候していた。

千熊の処遇を決める詮議が今日行われると言っているのである。言うまでもなく晴元の御前にて行われることになっている。要するに全ては今日決まるわけだ。三好千熊丸の運命も、三好家の命運も、全てこの一戦にかかっていた。

千熊は自ら望んで白装束を身に纏うと、てくてくといじらしい仕草で晴元の待つ大広間へと歩いていった。

大広間には、細川京兆家当主たる細川晴元が上座の上にでんと構え、堂々と君臨していた。今や誰からも真正銘の天下人と称えられている。実際、都を中心に畿内や四国の大半を支配下におさめているわけで、単純な勢力で見ても天下屈指の最高実力者と言つて過言ではないほどの力をその一手に握っていた。どんな人物なのか、興味津々と言つた様子で千熊丸は彼の御前に深々と頭を下げた。

「その方が、筑前が子、三好千熊丸か？」

晴元は未だ幼さの抜けきらぬ甲高い声色で尋ねつつ、

「白装束とは既に死ぬ気らしい。幼いのに、見上げた度胸だ」

などと、少年の風変わりな出で立ちに高笑いしながら「面を上げよ」と、天下人たる己が威厳をひけらかすかのような敵かな声色で命じた。

千熊はゆっくりと面を上げる。そして、そこにいる天下人の顔をまじまじと眺めた。

案外普通。それが千熊の抱いた率直な第一印象だった。あの細川高国を滅ぼし、父をも殺した男なのだから、もつと大柄な、いようなれば鬼のような風貌をした男だと思っていたのに、そこにいたのは、自分とさして変わらぬ優男だった。

今年で十八歳になるらしい。十歳の千熊とはそれほどの歳の差もない。

「率直に言えば、余は迷っている。家臣の中にはそなたを殺すべしと主張する者も多い。だが、余は、謀叛したからといって、筑前の功績全てを否定するつもりはない。かくのごとく、高国が栄華の象徴に、主として君臨できているのも、全ては筑前をはじめとする三好家のおかげだ」

と言つて、晴元は苦笑いした。

「ゆえに余はその方呼んだ。その方の思いを聴かせよ。それによつては余の考えも変わる。…要するにだ。お主の弁舌次第で、その方の白装束は役にも立つし、無駄にもなるといわけだ」

などと言う晴元を、側に控える三好政長はジトツとした顔をして睨んでいる。彼としては、そんな回りくどいことをせず、一言「死」を命じてくれるだけでよかった。けれど、主君たる晴元がそう言う以上、彼に口を挟む権利はなかった。

「御所様にお尋ね申し上げます」

千熊丸は、ぎろりと晴元を睨み付けると、

「何ゆえ、御所様は義維様を見捨て、公方様と和議を結ばれること

にしたのでしょうか？ わが父はそれゆえに謀叛せざるを得なかったのだと、私は考えております。無論、父が御所様に対し奉り、兵を挙げたは決して許されざる所業。ゆえに、息子たるそれがしが連座して殺されるのも、無理なきこと。ですが、あの純忠無比の父をして謀叛にまで追い詰めた御所様の方針転換の理由をお聞かせ願えねば、それがしは死にきれませぬ」

と、声変わりしきらぬ甲高い声色で、叫ぶように言うのだった。

「無礼者！ この場をどこと心得る。御所様に左様な無礼の言を吐ける立場と思うてか！」

すかさず、政長が激しく罵声を浴びせたが、千熊は全く動じなかった。すると、晴元自ら「構わぬ」と言って、いきりたつ政長を制した。そして、

「余とて、考えなく公方様に鞍替えしたわけではない」と、言った。

「あの折、確かに高国は滅び、余の天下は目前に迫っていた。だが……。高国の残党は依然として強大な勢威を誇っており、もしも余が強引に公方様を廃し、義維様を擁立すれば、残党どもは必ず公方様を擁立して我らに立ち向かってきただろう。これまでわが細川家が繰り返した戦乱を見れば分かる。わが祖父政元は、義植様（當時は義材）を追放し、義澄様を擁立した。その養子たる高国は義澄様を廃して、義植様を復帰させた。わが父澄元は義澄様を擁立し、高国と戦った。…要するに、これまでの戦乱は、將軍家と管領家がそれぞれ真つ二つに割れていたがゆえにおきたといっても過言ではない。そして今、管領家は余が下に統一された。ならば、後は將軍家が統一すれば、戦乱も自然収まるはず」

「……」

「と考えたとき、余が公方様を廃し、義維様を立てればどうなると思う。廃された公方様と義維様の間で、また合戦になる。そんなことなるぐらいならば公方様と和解すればよい。義維様には副將軍あたりの役についてもらい、將軍家統一を図る。それが余の方針だ

った。まあ、義維様も筑前の謀叛に大きく関わったゆえ、やむなく阿波へ追放せざるを得ぬ破目となったがな」

ひとしきり言った後、晴元はふうと大きな溜息を吐いた。

「どうだ？　これが余の真意。理解できたか？」

晴元はそう言って、眼前にきよとんとしている少年の顔を見た。

千熊は正直、驚きを隠せなかった。確かにそうかもいれない。いや、そうだろう。晴元の考えは、恐ろしいほどすんなりと、彼の頭に納まっていった。そして、逆にそうした彼の考えを見抜けず、謀叛などと短絡的な行動に突っ走った父に怒りすら感じた。

「御所様の御考え、十分分かりました。そのような御考えがあることも見抜けず、謀叛などと短慮に走った父の罪の重さも自覚せずにはいられませぬ。御所様、父の罪は子の罪。されば、何なりと処罰をお命じくださりませ」

驚くほど、彼は死に対する恐怖心を失っていた。従容と頭を下げるうち、何も知らず晴元の裏切り行為のみ怒っていた自分が恥ずかしくなった。死ぬと命じられれば素直に死のう。これ以上の抗弁は無用だと、彼は全てを諦め、そして覚悟した。

そして、そのときである。

「御所様に申し上げます」

不意を突くような重い声色が、広間中に響き渡った。

「如何した、木沢殿？」

晴元は広間の脇に控える側近木沢長政に目をやると、木沢はすかさず晴元のほうに膝を向けた。

「千熊殿の御処罰、是非ともご寛大な差配をお願い申し上げます」

「なに？」

晴元は驚き、政長は絶句した。

これまで政長と並び立つ千熊処刑推進派として晴元に運動し続けてきた男の、唐突な豹変がもたらした影響は計り知れぬほどに大きかった。しかし肝心の木沢はケロリとした顔で、相変わらずじっと晴元を見据えていた。

「千熊殿は若干十歳。殺すには忍びなく、また万一殺せば、国許の三好党が黙ってはおりませぬ。御所様の御考え、この木沢長政、痛いほど分かりましたゆえ、ここは千熊殿への寛大なご処分を求めます。三好家と戦になれば、無論負けはしませぬが、万が一、三好方が阿波に謹慎中の義維様を擁立するようなことになっては、厄介なことになります」

昨日までとは言っていることが百八十度違う木沢の態度に、晴元は呆れたように耳を傾けていた。政長などは、百年来の仇の如く木沢を睨んでいたが、言っている事自体は正論なので、容易く口を挟めなかった。

「御所様、それがしも木沢殿に同じく、ご寛大な差配をお願い申し上げます。確かに三好筑前の謀叛は許されがたき暴挙ながら、本人は既になく、その罪を齡十歳の少年に問うのは、いささか厳しすぎるものと心得ます。また筑前の功績も鑑みれば、謹慎などが妥当な処置だと、それがしなどは考えます」

と、細川持隆までもが口を揃えたので、晴元の意も次第に固まってきた。元々、彼に千熊を殺す気などなかった。ただ、元来の優柔不断が祟って、側近の三好政長や木沢長政らの口車に乗って、そうせざるを得ないのだろうと思いついていただけのことだった。だが、その木沢も、今や処刑反対派に回っている。一族の重鎮持隆までもが助けよと言う。ならば、晴元に殺せと命じる理由も動機もなかった。

処分が下った。

上使として、千熊丸の居室にやってきた政長は、憤懣やる方ないといった様子で、彼を睨み付けている。

「三好千熊丸。その方が父、三好筑前守元長の謀叛は許されざる所業ながら、その罪を子に問うは仁君の成すことに非ず。とはいえ、罪は罪であるから、幕府より許可あるまで、都にて無期限の謹慎処

分を命じるものとする」

晴元の花押の押された公式文書を読み終わると、彼はプイツと腹立たしそうに、それを放り投げた。

死なずにすんだ。

けれど、案外実感が沸かないものである。死ぬに違いないと思っ  
ていただけに、謹慎といわれても、その意味がすぐには理解できな  
かったりした。

「ふん。御所様も甘いお方よ。その方のような厄介者を生かしてお  
くとは……。頼朝を助けた平相国の如くならねばよいがな」

そんな捨て台詞のみ残して去っていく彼の後姿を、少年は呆然と  
見送っていた。

助かったのだ。

不思議な気もするが、助かったらしい。齡十歳にして、二度目の  
人生を勝ち得た彼は、そのままごろりと寝転がって、漠然と広がる  
どす黒い天井を、じっと見つめていた。

【雌伏編】第008章 阿波にて

千熊丸が京にあつて、事実上細川政権の人質とされている間、阿波における三好本領を守っていたのは、彼の弟たる三好千満丸（後の三好義賢）であつた。

千熊には、弟が三人いた。一人が千満丸であり、残る二人は、三弟の神太郎（後の安宅冬康）、末弟の又四郎（後の十河一存）である。いずれもまだ幼い子供に過ぎなかつたが、どれもきらりと光るものを持つた、将来有望な逸材ばかりであつた。特に次兄の千満丸などは今年で六歳になることもあり、叔父の三好康長や、一族の三好孫四郎長逸、重臣の岩成友通らに支えられつつ、留守居役として、兄不在の芝生城に君臨していた。

千満は幼いながらに政治というものが好きだつた。

基本的に、元長亡き後の三好家の政治体制は、専ら後見役の康長が仕切り、それを重臣たちが補佐しているという形を取っている。まあ、当主の千熊丸は都にいるし、第一まだ十歳だ。政治を取れるような年齢ではない。同じ理屈で、僅か六歳に過ぎない留守居役の千満丸が政治に参与できるはずもないのだが、彼はそういうことに目のない不思議な少年だつた。

誤解して欲しくないのは、彼の政治好きは、決して薄汚い権力に心を惑わされた結果生まれたものではないということだ。それほどこまでも彼の知的好奇心を満たし、あるいは見知らぬ世界を知りたいという、あくまで純粋な気持ちから生み出された思いに過ぎないのである。

何はともかく、千満丸は政治が、三度の飯より好きな不思議な少年だつた。



あるとき、というより、ほぼ毎日、彼は城下を巡察していた。

供は僅かに数人。他人からすると、それは巡察と称した、ただの遊びであるが、本人は根っから仕事のつもりだった。お忍びであるので、行き交う人々は、誰も彼が三好千満丸であるとは夢にも思わなかったが、当の本人はそういう自分の立場を弁えず、公道の真ん中を堂々と闊歩するので、付き従う供たちは常に冷や冷やしていた。「やはり領主たる者、領民が何を考え、何を思うのか。それを知らずしてよい政治はできまい」

などと嬉しそうに呟いている。活気溢れる町並みを眺めながら、彼は一人悦に浸っていたのだった。

そんな折のことである。

千満丸がふと目をやると、そこには数人の木っ端役人たちが商家に無理難題を押し付けているという、よくありがちな光景が広がっていた。辺りの人々から詳しい状況を尋ねてみると、どうやら町外れなのを良いことに、ここ一ヶ月ほど、横暴な役人たちによる脅迫事件が多発しているのだという。

「一ヶ月ほど前からと申しますと、やはり、御先代様がお亡くなりになられて以後、ということになりますな」

供のそんな言葉に、千満丸も静かに頷いた。

「まずは様子を見よう。もしも奴らが本気で略奪に走るようなら、留守居役として、この千満丸様が断じて許してはおかぬぞ」

そう言つて、千満丸はクスクス笑った。案外楽しんでるようにも見える。実際、千満少年は、不謹慎とはいえ、面白がっていた。捕まった役人たちが自分を見たとき、どんな顔をするのだろう。それは子供の好奇心といたずら心を刺激するに十分すぎるシチュエーションであった。

齡六歳の少年が、全く唐突に、誰もが、触らぬ神に祟りなしと恐

れ敬う役人たちの横暴を止めに入っただから、皆が驚いたのも無理はなかった。

無論、この少年が、三好家当主三好千熊丸が実弟にして、留守居役として、今現在三好領を支配している千満丸であることを誰も知らない。だからこそ、周りを取り巻く群衆は、

「やめとけ。殺されるぞ！」

とか、

「あいつらはただの役人じゃねえんだ。下手すると、お前だけじゃなく、お前の親父さんやお袋さん、一族皆殺されることにもなりかねないんだぞ」

と、少年の無謀な勇気を諫めていたが、千満丸は当然のように全く聞かなかった。

「いい度胸だ、と言いたいところだが、この餓鬼は我らがどういう立場にあるのか、いまいち理解していかないようだ」

役人の一人は、そう言つて下品な笑みをその満面に浮かべた。

「確かに……。我らを怒らせると怖いのだぞ。お前の親父やお袋、兄弟諸共殺す事だつて不可能じゃないんだ。謝るなら今のうちだ。今謝るなら許してやらんこともない。そして、金輪際二度と我らのやりように口出しするな」

他の役人たちも、口を揃えてそう言った。「ははは」と勝ち誇つたように、豪快に高笑いする彼らは、千満丸は自らの身の程知らずを恥じ、必ず謝るに違いないと思つていた。彼がどういう人間なのか、知る由もなく、戦う前から、勝利を信じていたのだ。けれど、その程度の言葉に臆するような千満丸でもない。彼はぎろりと揃いも揃った下種たちを睨み付けると、

「殺せるものなら殺してみろ」

と、あくまで挑発的に、ニタニタ笑いながら言った。

「ふーん。…相変わらずいい度胸だな」

役人たちの顔色が、次第に変わっていく。怒りに満ちた、赤くどす黒い目をした、さながら獰猛な獣の如き表情だった。

「度胸もくそもない。やれるものならやってみろ、と言っているだけだ。それとも、お主らは口ばかり達者で、実際には何も出来ぬ腰抜けばかりか？」

六歳の少年に、そこまで啖呵をきられた以上、野次馬の如く辺りを取り巻く群衆たちの手前、もはや役人たちも後に引くわけにはいなくなっていた。

けれども…。

千満丸の身体から漲る迫力は、彼らを怯えさせるに十分だった。

それでもなお虚勢を張って、

「わ、我らを誰と心得る！ 頭が、頭が高いぞ」

などと役人たちは怒鳴っていたが、その迫力に、知らぬ間に圧倒され、気がつくとも、一步も二歩も後ずさりしていた。

「我らは細川讃岐守様が家来。この地には、讃岐守様が御下知にて参っている身だ。我らが前には、留守居役の千満丸殿でさえ頭が上からぬのだ」

彼らは、まるで悲鳴のように、ただひたすら大音声を張り上げ、千満丸にぶつけた。彼らにとって、それは形勢不利から一発逆転する最後の切り札であったから、ひたすら虎の威を借る狐の如く、怯えたように騒ぎ続けていた。

「阿波国守護、細川家一門衆筆頭。細川讃岐守持隆様の御家来衆ともあらせられる方々が、他家の領内にやってくるなり、薄汚い脅迫行為を行って、いたずらに民衆を苦しめるとは…。呆れてものも言えぬとは、このことだ。…細川の家風も随分と墮ちたものだ」

千満丸は、およそ六歳の少年とは思えぬ気迫を漲らせ、細川家の侍たちを睨み付けていた。役人たちはどれも、怒りを隠せぬような顔をしていたが、周囲に轟く群衆たちの、ふつふつと滾る、憎悪に似た怒りの焰をその肌感じると、苦虫を噛み潰したように、ぐぬぬと唸っていた。

「…貴様は、何者だ！ た、ただの餓鬼じゃねえな。わ、我ら細川家の武士を侮辱するとは、だ、だ、断じて許せぬ！」

そう怒鳴ると、彼らはずいいに刀を抜いた。

殺気立つ彼らの先に、無防備な少年は立っている。けれど、全く動じない辺り、千満丸の度胸もなかなかのものだった。

「斬ってみる。その瞬間、お主たちの命はない」

既にそこには、騒ぎを聞きつけた三好方の精兵が勢揃いしていた。数はおよそ、四十騎程度だが、僅か数人の細川侍を処罰するには十分すぎる数だった。

「き、貴様ら！ わ、我らを誰と心得る。我らは細川讃岐守様が家来なるぞ。我らを傷つければ、それ即ち守護家との敵対を意味するのだぞ」

侍たちは、事ここに至ってなお虚勢を張っていた。けれど、兵士たちは微動だにしない。ひたすら命令を待っている。

兵を率いる隊長は、三好孫四郎長逸と言った。このとき、若干十五歳。その孫四郎長逸は、ニタニタ笑い、そしてちらりと千満丸のほうを見た。彼の合図が下れば、その瞬間にも斬りかかり、先君元長の恨みを晴らすのだと思っている。

「一つ……」

と、千満丸は一步、ゆっくりと細川侍の下に迫った。

「一つだけ、良いことを教えてやるう」

彼は、また一步、彼らの下に迫る。

「俺の名前だが……」

そして、また一步進む。すると、すぐそこに侍たちが轟いていた。だから彼は、低めの声色で、常になく小さく、

「三好千満丸と申す。以後、お見知りおきを」

とだけ言った。

侍たちは、へなへなと腰を落とした。

「千満丸、殿……」

相手が悪すぎる。細川侍たちは、呆然と、そこに立つ少年を見つ

めていた。

千満丸はそんな彼らを見て、すかさず孫四郎に目配せした。彼は嬉しそうな顔をして、すぐさま兵を動かし、侍たちを拘束すると、いちいち喚いては五月蠅い彼らを強引に城のほうへと連行していった。

## 【雌伏編】第009章 一向一揆

浄土真宗、通称一向宗は、ここ最近急激に勢力を広げている、新興の宗教勢力だった。

元は浄土宗の開祖法然上人の弟子であった親鸞聖人の作り上げた鎌倉仏教である。南無阿弥陀仏と唱えるだけで、善人悪人問わず救われるとした彼の教えは、鎌倉、室町と続く時代の中で、急速に浸透していった。

一向宗の勢力が飛躍的に高まったのは、親鸞から数えて八代目にあたる蓮如の時代であった。彼は、近畿地方はもとよりのこと、特に北陸地方での布教活動に力を注いだ。越前吉崎に本拠地を築き、御文と呼ばれる簡易な手紙形式の経典を用いて、弟子たちとともに精力的かつ地道な布教活動を続けていった結果、気がつくくと、一向宗は北陸地方最大規模の宗教勢力となっていたのだ。こうなると、蓮如自身が好むと好まざるに関わらず、膨大な信徒たちを管理する組織が生まれ、それが今現在にいたる本願寺教団の基礎となった。挙句、次第に過激化した彼らは、蓮如の統制下を離れ、事実上の反体制武装組織の様相を呈するようになった。俗に一向一揆と呼ばれる武装蜂起は、彼らの過激思想が具現化したものであった。

北陸地方における一向教団の強勢が満天下に示されたのは、加賀の守護大名富樫氏を滅ぼし、同国を支配下に置いたときのことだった（厳密には富樫氏は滅びておらず、一向宗の傀儡守護家となった）。俗に百姓のもちたる国といわれる加賀は、以後百年に渡り、一向宗、その総本山たる本願寺の支配下に置かれることになったのである。

一向宗及び本願寺の中興の祖と称えられた八世法主蓮如の死後、急速に勢力を広げた本願寺教団は、その子たる九世実如を経て、今

は実如の孫にあたる十世法主証如が支配するところとなっていた。

証如は京都山科に本願寺教団の総本山を築き、そこから各地の一向一揆を指揮していた。政治的には、朝廷、幕府ともに強い繋がりを保っている。特に細川晴元とは密接に関わり、先の三好元長討伐にも証如が深く絡んでいた。

ここで少し元長事件の大きな概要に触れておきたい。

三好元長拳兵事件は、堺公方の扱いを巡る細川晴元と元長の対立や、細川政権の主導権を巡る晴元側近衆と元長の確執、側近衆筆頭の三好政長と元長の三好宗家督の座を巡る争い、有力守護家畠山氏内部の勢力争いなど、様々な要因が複雑に絡み合った上で勃発した悲劇だった。

元長が拳兵した直接的きっかけは、畠山氏内部で繰り広げられていた抗争を鎮定するためだった。

当時畠山氏は、当主である義堯よしたかと、河内守護代を勤めていた重臣の木沢長政の対立が深刻化していた。義堯は晴元政権成立に大きな功績を挙げた男であり、木沢も義堯の下、その代官として晴元軍に参戦し、功を上げた。だが木沢は、次第に晴元の寵遇を得、かつ三好政長と同盟することで、主君義堯をも上回る勢威を手にするようになった。けれど、そんな木沢の台頭を、主君たる義堯が快く思うはずもない。だが、彼が晴元の庇護を受けている以上、如何に義堯といえど、容易く手を出せるものでもなかった。そこで、義堯が目をつけたのは、木沢と手を結ぶ三好政長と対立している三好元長であった。

紆余曲折の末に、ついに耐え切れなくなって拳兵した元長は、義堯とともに、まず木沢長政の居城である飯盛山城を包囲した。当時の元長は、晴元に叛いているという気は更々なかったが、圧倒的な元長軍に包囲され、窮地に追い込まれた木沢は、盟友政長を動かす、ついに晴元の支持を取り付けたのである。だが、如何に晴元の支持

を取り付けてみても、晴元政権内における元長の勢力は想像以上に大きく、その上、足利義維や畠山義堯ら有力者の支持も取り付けている彼の討伐は決して容易い話ではなかった。そこで、晴元は、強大な武力を誇る本願寺証如の力を借りることにしたのであった。

その結果、証如の動員令に応じて集結した一向軍は、怒涛の如き勢いを成して飯盛山城を包囲する三好軍の背後を叩き、ついに三好元長を顕本寺に追いつめると、彼をその夢ごと闇の世界へと葬り去ったというわけである。

### 摂津国は芥川山城。

そこは天下人細川晴元の居城である。京と堺の、ちょうど中間地点に位置しているこの城は、細川高国が築城して以来、難攻不落の堅城として、とかく天下に名高かった。高国政権崩壊後、その地理的な利便性、堅固さに目をつけた晴元は、細川政権の軍事的本拠地として、この城を活用することにしたのであった。

その一室で、晴元は頭を抱えていた。

「…ついに一向軍は興福寺を破った。このままでは、加賀の如く、大和全土が一向門徒どもの支配下に入るのも、時間の問題だぞ」  
そんな風にぼやくと、彼はひととき大きな溜息をついた。

晴元の悩みは深い。しきりに首をひねりながら、「困った」と、誰に言うでもなく、何度も何度も呟いていた。

「如何なされますか。御所様？」

いつもと変わらぬ口調で、緊迫感一つない顔をした政長が尋ねると、彼はムツとしたように睨み付けた。

「どうもこうもない。一向門徒どもの横暴、もはや見過ごすことはできません。だが…。奴らの持つ力は、余を超えている。余はどうすればよいのだ？」

それは自尊心の高い晴元には、断じて許し難い現実だった。一向宗だろうと何だろうと、天下にあまねく存在する全てのものは、悉



く自分に臣従していなければ気がすまないのだ。それが細川京兆家けいちょうけ当主細川六郎晴元という男の偽らざる本心であった。

「されば、まずは堺辺りに兵を進め、いつでも反撃できる体制を整えておくべきでしょうな」

政長は呆れきった顔をして、淡々と言った。

「堺に？ だが、一向軍は二、三万。それに匹敵するだけの数を、一朝一夕に集められるわけもない。数千程度の兵を集めても、奴らには勝てんぞ」

実際、その力を使って元長を肅清したのは、他ならぬ晴元と政長だった。戦上手の元長が一万規模の大軍を率いてなお勝てなかった一向門徒たちに、彼よりは明らかに将器の劣る晴元や政長が勝負を挑んでも勝てるとは到底思えなかった。

「ええい。いったいどうすればいいのだ」

喚きながら、唸る。あたり構わず八つ当たりしなければ、高ぶる気持ちを抑え切れなかった。

「証如め。調子に乗りおつてからに。…余を怒らせたなら、どういうことになるか、思い知らせてやらねばならぬ」

などと呟きながら、晴元は「酒だ！」と、誰彼構わず、大声で怒鳴っていた。

「大和に？」

千熊丸は京の管領御所にあつて、余り嬉しくない報告に苦りきつたような顔をして呟いた。

既に七月も半ばを過ぎ、二十日になっていた。まとわりつくような蒸し暑さは、いよいよ勢いを増し、収まる気配はない。おもむろに空を見上げてみれば、世界は鬱陶しいほど青々と輝いていた。

「御父君を倒した際に動員された一揆勢は、今なお解散されず、半ば本願寺の常備軍として温存されておりました。証如はこの軍を使い、また御先代に勝利した余勢を駆って、一拳に大和を己が掌中に

収めんと画策したようです」

「そうか」

千熊は、思わずふうと小さな溜息を吐いた。

一向一揆は、彼にとり父を死に追いやった憎むべき存在であり、その領袖たる証如は、晴元や政長に勝るとも劣らぬ仇敵の一人だった。とはいえ、彼らの持つ武力は強大である。細川政権に囚われている一介の人質の身で、どうにかできるものでもなかった。

「で、御所様は如何なされておられるのか？」

と、千熊は問う。

「はい。晴元様は既に兵を率いて芥川山を発し、堺に入ったのことにござります」

「…堺に？」

「何しろ、一揆勢は十七日に興福寺を破り、その勢力をほぼ大和全土に広げております。一揆勢と本格的に激突するとなれば、海に開け、いざとなれば四国より援軍を呼び寄せやすい堺は、絶好の最前線基地となりますゆえ」

「…なるほど」

などと、呟きながら、千熊は困ったように苦笑いした。

今回の事態は、いわば父を滅ぼした勢力の仲間割れとっていい。父を殺された子供の立場としては、高笑いして、様子見するのが自然なのだろうが、細川政権と一向門徒が本格的に正面衝突すれば、それは悲劇以外の何者でもない。高国が滅び、ようやく三十年近くに及んだ細川家の内争に終止符が打たれたというに、その舌の根も乾かぬうちに、今度は宗教戦争となれば、人々は泣くに泣けまい。

「俺に出来ることは、何かないのか？」

自分はただの人質に過ぎないのかもしれない。だが、だからといって手を拱いてみていられるほど、千熊は我慢強くはなかった。

「手なら、ありますぞ」

と、眼前の男は言う。にたりと、それまで見せたことのない不気味な笑みを浮かべると、

「三好の若殿は、少しばかり御自分の持つ力をご存知ないようだ」と、言った。

千熊は、じろりと男を見た。年齢は二十幾つからしいが、見た目はもつと大人びている。ここ最近、ずっと千熊丸の側に入入りしているが、その素性を知る者は余りいなかった。ただ、誰もが細川家の家臣なのだろうと、それぐらいにしか思っていなかったが、その証拠はどこにもない。いつの間にかここにいて、いつしかそれが当たり前になっていった。ただ、それだけの男。

千熊はじろりと睨むと、男は「ははは」と高笑いした。

「何ゆえ元長殿は一向宗に滅ぼされたか、若殿はお分かりか？」

「……」

「無論、証如にとつては、晴元殿との関係を高めることで、本願寺の勢力を拡大したいという思惑はあつたろうが、それ以上に、元長殿が懇意にしていた法華宗を打倒したいという野望を抱いていた」

「法華宗？」

「左様。別名、日蓮宗とも言つ」

男の言葉に、千熊は思わずぐくりと息を呑んだ。

父が、というより三好家は代々法華宗を信仰してきた。だから、父が法華宗を庇護するのは当然のように思えたし、それゆえに父が一向宗の目の仇とされた理由も分かる気がした。何しろ、一向宗と法華宗は、これまでずっと対立を続けてきた。同じ鎌倉仏教という共通性をもつ二つの宗派は、特に室町期になって急激に勢力を広げ、今では何かにつけ衝突することが多くなつた。

元長討伐は、法華宗と一向宗の宗教戦争という一面もあつた。即ち、法華宗に支持される元長と、一向宗に支持される晴元の戦い。結果は、法華宗側の準備が整う前に先制攻撃に出た一向軍のために、元長はあつけなく滅ぼされてしまったが、法華側は今も反転攻勢の機会を窺い続けているという。

「要するにです。若殿は、法華宗を動かせばよいのです。御父君と法華門徒は懇意な間柄にあり申した。その上、此度の敵は、彼らが

目の仇にしている一向宗。若殿が仲介すれば、彼らは若殿が御為に一向軍と戦いましょう」

そう言う男に、千熊は「なるほど」と、大きく頷いた。

だが……。安易に法華宗を拳兵させれば、一向軍と全面戦争になりかねない。万一、容易く決着がつかなければ、それこそ泥沼の宗教戦争となつて、畿内全土を混迷のどん底に突き落とすかもしれない。一向宗も法華宗も、貧民に根強い支持を誇る強力な新興教団だから、全面衝突すれば、それは応仁の乱にも勝る最悪の戦乱を招くことにもなりかねなかつた。

「ふふふ、ご心配なされますな。一向宗の専横を快く思わぬのは、何も法華宗ばかりではありません。延暦寺も、興福寺も、あらゆる宗教勢力が一向宗を目の仇としております。その上、晴元殿とそれに従う諸侯が連携すれば、さしもの一向門徒たちとて太刀打ちできませんまい。……早急に此度の戦乱を鎮圧したいなら、あらゆる勢力に立ち上がってもらわねばなりません。その一翼を担う法華宗を、若殿が動かすのです」

と、男は自信満々といった顔をして、そう言った。

千熊は、呆れたように彼を見た。言っていることは、確かに正論ゆえに彼は、それ以上反論する気はなかつた。

だが、彼は思う。この男は、何者なのだろう。考えてみれば、男の素性を一度も聞いたことがない。いつの間にかここにいて、それが当然になつていた。

「君はいつたい何者だ？」

と、千熊が問う。すると、男は不敵な笑みを浮かべた。

「私ですか。ふふふ、名乗るほどの男ではありませんが、若殿がそう仰せなら、お答えせねばなりませんまいな」

などと、勿体付けるように言う。

「松永久秀、と申します。ま、しがなき流浪の身。今は木沢殿の下にて厄介になつておりますがね。あ、そうそう。先ほど申しました法華との交渉ですがね、若殿にその気があるなら、木沢殿は快く協

力することです」

「木沢殿の食客？」

「はは。その前は甲賀衆にも厄介になっておりました。忍法なる変なもの、ほとんど会得できませんでしたが、大勢の中に紛れ込んで、存在感を消すぐらいなことはできるようになりました」

「……」

「ははは。ま、何はともかく、今は木沢殿の食客をやっておりますが、案外木沢殿などより三好の若君のほうが、この一生を賭けるに値するお方かもしれませぬな。…何より目がいい。その肝っ玉の据わった眼光など、特によろしい。若君は、必ずや大成する御方と見ました」

松永久秀と名乗る奇妙な青年は、そう言ってクスクス笑うと、啞然とした様子で、呆然としている少年の肩を馴れ馴れしく、ぼんと叩いた。

【雌伏編】第010章 炎上本願寺

天文元年（一五三二年）八月四日。

堺に布陣中の晴元の下に、一向一揆勢は勢いよく押し寄せてきた。その数は、少なく見積もっても一十万は確実であり、下手をすればそれ以上あるのではないかと思われるほどの圧倒的大軍だった。これに対し、迎撃する側である晴元軍はせいぜい三千程度に過ぎない。

「これはまずい」

晴元は生まれて初めてといっても決して言いすぎではない恐怖を感じた。

死。というものが、これほど明確な形で彼の前に突き出されたことはなかった。しかし、今の彼は、その死を意識しなければならぬほど追いつめられていたのである。

「このままでは、自害せねばなくなる」

晴元は不安だった。無論、細川京兆家当主として恥ずかしくない死にざまを遂げたいとは思っているが、実際に死ぬとなると話は別だ。彼はまだ死にたくなかった。

それでもさすがは天下を支配する細川家といったところか。細川軍の将兵は死に物狂いで防戦し、数にものを言わせた人海戦術を駆使する一揆軍の猛攻を辛うじて食い止めていた。総帥たる晴元も、自ら槍を取り、戦陣に立って戦った。

苦戦、劣勢…。

いくら善戦してみても、数に劣る細川軍の旗色は悪い。さすがに晴元も事ここに至っては死を覚悟し、滅亡を意識せずにはいられなかった。

「もはや、これまで…」

彼は配下に軽く目配せすると、自室に閉じこもって、静かに脇差を引き抜いた。

死ぬのだ。

そう思うと、なんとなく辛い。まだまだやるべきことがたくさんあるような気がする。こんなところで死んでいいのだろうか。などと思いながらも、細川宗家の総大将たる自分が生き恥を晒すわけにもいかないのである。見事に切腹し、さすがは細川家の御大将であったと評価される最期を遂げねばならなかった。

フウ。

漏れるのは、小さな溜息。

晴元はゆっくりと脇差を振り上げる。後は突き刺すだけ。窓から差し込む太陽の日差しを浴びて、きらりと輝く刃先が、何とも言えずおぞましい雰囲気を醸し出していた。

これで最期。

晴元は目を閉じる。

そのときだった。

「申し上げますッ！」

誰かが来た。見れば、側近の三好政長であった。

援軍到着！

これにより細川晴元は九死に一生を得た形となった。

援軍とは、即ち木沢長政率いる軍勢であり、彼はガラ空きになっていた一揆軍の背後を叩くことで、数に勝る一揆軍を蹴散らしたのだった。

かくして晴元は寸でのところで助かったわけだが……。しかし、これで戦が終わったというわけではない。堺の攻防戦には敗れたが、しかし一揆軍は依然として圧倒的な勢威を持って畿内全土に君臨しており、晴元政権全体が窮地に追い込まれていることに変わりはない。かつたのである。

実際、堺から撤退を余儀なくされた一揆勢は、その後も変わることもなく積極的な軍事行動を続けていた。大和はもとより、摂津、山城にも兵を進め、各地で細川方の軍勢と戦った。勝つ戦もあれば、

負ける戦もある。しかし一揆軍の弱点は武器と訓練の不足ぐらいなもので、それ以外、即ち兵力も、士気や統制力も、細川方の将兵を遙かに上回っていたから、一揆軍の優勢が覆ることはなかった。

激化する戦乱に対し、人質に過ぎぬ千熊丸にできることは限られている。

第一、彼は管領御所より外へ勝手に出向くことなど許されぬ身の上だった。また、周りには細川方の目が光り、頼りとなる家臣の数も少ない。晴元はともかく、その側近たる三好政長は、とにかく容赦がなかった。自身の配下を見張りとして配置し、その一挙手一投足を、いちいち監視していた。逃げる気など更々ないが、日々の行動すら縛り付ける厳しさには、千熊もほとほと困り果てていた。

そういう中では、松永久秀と言う男は、実に使えた。目立たず、素早く、何より賢い。

「文を書きなさい。それを私が届けましょう。法華門徒たちは、それで動きます」

と、彼は言った。

「若君の直筆ともなれば、法華門徒たちとて、よもや躊躇はしないでしょう。彼らは亡き筑前殿より、事あるごとに多大なる恩義を受けてきたのですから。それに、この私も幼い頃は法華の寺院に修行していたこともありませう、その折の知己も少々。微力ながらわが人脈と、そして若殿の御文さえあれば、いくら頭の堅い坊主どもとて動かすにはいられますまい」

久秀はいつものように自信満々だった。一方、千熊も「なるほど」といちいち頷いては、すらすらと筆を進めていった。情けない話ではあるが、それぐらいしか今の自分に来ることはないのだった。

捕虜に過ぎない今の自分に、いったい何ができるのか…、なんてことをぐだぐだ考えている暇があるのなら、何でもよいから、実際に行動に移すべきだろう。千熊丸の筆速はいつになく軽快だった。



とにかく戦乱の激化は、彼の望むところではない。だったらどうするか。一通の文を記すだけで、たったそれだけのことで全てを収束に導けるかもしれないなら、書くだけだ。躊躇う理由がどこにある。また、そのついでに父の仇たる一向宗を踏み潰すことが出来れば、これに勝る喜びもなかった。

堺は、辛うじて滅びを免れた細川晴元と木沢長政の軍兵でいっぱいだった。

とりあえず、何とか一向軍を撃退して窮地を脱したものの、根本的な問題解決には程遠かった。一向軍は依然健在で、それどころかさらに勢力を増している。既に大和はとられ、河内や和泉も危うい。摂津もこのままでは一向軍の支配下に収まるのは時間の問題だった。このまま事態が推移すれば、ようやく作り上げた細川晴元政権も、あつという間に崩壊へと追い込まれかねなかった。

「木沢殿、手はないのか？」

晴元は、懇意にしている豪商武野紹鷗の屋敷の一角に座り込むと、側に控える木沢長政に厳しい口調で下問していた。

「手、と申せば、ないわけではありませぬ」

彼はニタニタ笑い、そして軽く頭を下げた。

「あるなら早く申せ。…こうしている間にも、一向軍の勢力は日々増している。このままでは取り返しがつかんことになる」

「…されば申し上げましょう」

と、勿体ぶって言う彼の顔は、おぞましき野心の色に染まりきっていた。

「即ち、法華宗を味方につけるのです」

「法華？　だ、だが、奴らは筑前に与力していた奴ら。筑前を滅ぼした余の命に、容易く従うものかな？」

首を傾げる晴元の顔を、木沢は冷静に見つめていた。

「法華と一向は、いわば累代の仇。その一向宗を滅ぼすための戦と

なれば、御所様との些細な因縁など忘れましょう」

「…だが、う、上手くいくかな？」

晴元は今やすっかり臆病になっていた。ようやく手にした天下。作った政権。細川京兆家という超名門一族に生まれながら、熾烈な闘争を経て家督の座を得た六郎晴元という青年の体には、圧倒的な自尊心と自負心が、溢れんばかりに詰まっていた。要するに、名門出身者としての誇りと、自らの力で全てを掴み取ったという自信だ。逆に言えば、今も昔も、彼にはそれしかなかった。だからこそ、彼は崩壊を恐れた。喪失に恐怖した。何より今に固執していた。

木沢にとつては、そんな晴元の様は滑稽以外の何物でもなかった。けれども口には出さない。顔にも出さない。あくまで表面的には、愚直な忠臣を装っておく。晴元個人はともかく、彼の持つ権力と、晴元政権の強大には平伏さざるを得ない。いずれその全てを自分が奪い取つてみせる。けれど、それまでは、あくまで晴元に忠誠を誓つておく必要性があつた。

「…それに関しては問題ありません。既に法華門徒たちの協力は確約してあります」

と、木沢が言うと、呆気に取られたように、ひたすら驚く晴元であつた。

「無論、これはそれがしの独断専行なれば、罪に問われても文句は言えませぬ。されど、せつかく味方とした法華門徒。利用せぬ手はありません。彼らさえ立ち上がれば、一向宗などは早急に片付くでしょう」

木沢長政は、相も変らぬ自信を全身に漲らせて、睨み付けるように晴元の目を見据えた。

「…ま、まあ、そ、その程度のことです。罪に問うほど、余も狭量ではないつもりだ」

晴元はと言うと、彼の眼光にたじろぎ、時折苦笑いなどこぼしながら、

「よかるう」

と言つて、木沢の示した道、即ち法華門徒との和解を全面的に認めることにしたのだった。

八月の空も、やがて佳境に差し掛かった。

木沢長政が策し、三好千熊丸の助力の下、松永久秀が暗躍する形で動き始めた法華門徒は、それまで圧倒的な勢いで、畿内全土を席卷しつつあった一向宗を瞬く間に蹴散らしていった。

そんな彼らの活躍もあり、やがて、主戦場は洛中へと移った。即ち、各地で一向軍を蹴散らした法華門徒たちは、圧倒的大軍で都に攻めのぼり、その上で洛中に数多の如く存在する一向宗系の各寺院や施設に大挙して押し寄せると、その全てを、悉く壊し、焼き尽くしていったのだった。

無論、一向宗とて一方的にやられていたわけではない。反撃を期して大軍を編成した彼らは、八月十九日に都を目指して進軍を開始し、ついに山崎まで迫った。かくして迎撃に打って出てきた法華軍との間で凄まじき激戦となったわけだが、しかし数に勝り、かつ都を制したことで意気上がる法華軍の厚き壁を突き破るには至らず、撤退を余儀なくされていた。

拳句、こうした細川・法華連合軍の圧倒的優勢の流れを受け、かねて一向宗の隆昌を疎み、妬んでいた比叡山延暦寺や、一向門徒の蠢動に頭を痛めていた六角定頼などが続々と一向討伐の兵を興したので、八月も半ばを迎えた頃には、一向側の敗勢は決定的な流れとなっていたのだった。

そして八月二十三日。

一向宗の総本山たる山科本願寺を、細川晴元、六角定頼、法華門徒、延暦寺衆徒など総勢四万の大軍が取り囲んだ。

このとき既に、洛中及び周辺地域は悉く連合軍の支配下に入って

いたが、難攻不落の要塞と化していた山科本願寺のみは、陸の孤島の如く、ずっと頑強に抵抗を重ねていたのだった。しかし、各地の与党が次々と討伐され、山科御坊が真正正銘、陸の孤島と化した今、如何な難攻不落の堅城に立て籠もっていようとも、本願寺側に勝機などあるうはずがなかった。

八月二十四日。

細川晴元は、山科本願寺に程近い清水寺に陣を敷き、続々と舞い込んでくる報告に耳を傾けていた。敵かな甲冑を身に纏って、如何にも万軍の総帥といった風格を醸し出している彼は、床机の上にとつかりと腰をすえて、時折小さく溜息などを漏らしていた。

「で、山科は落ちそうか？」

晴元が問う。すかさず、

「脱走兵も相次いでいます。総攻撃の御下知あらば、半日もせず落城するでしょう」

と、越前守政長が答えた。

不思議なものである。晴元は、ふと、そんな風に思った。

僅か半月前、自分たちは極端な劣勢に立たされていた。怒涛の如く押し寄せる一向軍のために、堺にまで追い詰められたこともある。だが、今やそれが遠い過去、夢幻だったかのように、今度は自分たちが一向軍の、それも総本山を包囲して、その滅亡を勝者として眺められる立場にいた。

全ては法華門徒のおかげだと思つと、晴元は余り心地よい気はしなかった。けれど、これで当面の危機は去った。元長肅清に始まる一連の騒動も、ようやく収束するのだ。即ち、これで自分の天下はより磐石なものとなる。

「越前、全軍に命じよ」

連合軍盟主として、晴元は言う。政長以下諸将は恭しく平伏し、そしてその命を待った。

「これより直ちに総攻撃を開始する。山科を一挙に攻め落として、必ず将来に禍根を残すな」

千熊丸は晴元の勧めで、山科本願寺を取り囲む木沢長政の軍勢に従軍していた。今風に言うところの観戦武官的な立場であるが、とりあえず軍監の肩書きで、木沢の側に侍っていた。

そして、彼はこのとき初めて戦というものをその目で見たのだ。恐るべき紅蓮の炎が、この世のものとも思われないような大寺院を猛然と飲み込んでいく様は、無垢な少年にとって果てしなく大きな衝撃であった。

盛大な仏教寺院群を構成する御堂や伽藍などが、哀れなほど無惨に、そしてあっけなく崩れ落ちる様を見て、千熊丸の全身は、途端ぶるぶると震えだした。恐怖からなのか、それとも武者震いなのかは、彼にもわからなかった。けれど、自らの目の前にて阿鼻叫喚の地獄絵図にも似た惨劇が繰り広げられていながら、少なくとも、それが酷いことだとは思わなかった。

これが乱世なのだ。

少年は実に素直に、眼前に広がる現実を受け入れていた。

「これが戦だ。分かるかね、千熊丸殿？」

木沢長政は、そう言ってカラカラと笑った。

「坊主だろうと、女子供だろうと、戦に関わったからには容赦なく死んでもらう。それが戦国の倣い。例外はないのだよ」

そんな風に一人吹き、高笑いする木沢を、千熊はジトツと見つめていた。

その間も、連合軍の容赦ない総攻撃を受けて、完全に炎上した山科本願寺は、既にこの世の地獄と化していた。僧侶やら女子供の泣き叫ぶ喚き声が、あちこちにけたたましく轟いている。人が死に、人が殺す修羅の世界では、人はもはや人ではなく、鬼も同然だった。そんな様を、千熊は遠目に、しかし確かにその小さな眼で眺めてい

た。

「それはそうと、千熊殿には感謝せねばならんな」

と、木沢は唐突に言った。

「感謝？」

千熊が首を傾げると、そこで木沢はようやく薄汚い笑いを止めた。

「左様。貴殿が認めてくれた書状のおかげで、法華門徒を動かすことが出来た。此度の戦功は悉くわしのもの。…礼を申すよ。ふふふ。それでこそ、お主の命を助けた甲斐があったというものだよ」

などと呟きながら、彼はにんまりと、不気味なほど不敵な笑みを漏らしていた。

そんな彼に対し、千熊少年は何も言わず、ただずっと、じつと、ぎろりと見つめていた。

だから何だ！

そう言わんばかりの、少年の好戦的な瞳に、木沢長政は面白くなさそうに、フンと鼻で笑うだけだった。

【雌伏編】第011章 砂上の楼閣

凄まじき紅蓮に染まりきった拳句、親鸞以来三百年の歴史と、蓮如以来の栄光を背負ったまま崩れ落ちてみると、そこに残ったのは、ただの焦げた木片だけだった。それでも、証如以下本願寺の御偉方は、どれも無事に脱出し、懲りることなく大坂辺りに新拠点の設営に勤しんでいるらしかった。ただ、今回の戦役で本願寺と一向宗の勢力が大幅に減退したことは否めず、今や洛中は、勝者たる細川政権と法華宗の天下になっていた。

まあ、本願寺総本山たる山科御坊が焼失したからといって、戦乱が全て鎮圧されたわけではないのだった。完全に鎮火したつもりでも、残り火というものは、常に存在する。

その一つが、細川晴国の乱である。

細川晴国という男は、今は亡き管領細川高国の実弟で、即ち細川一門に列する有力者なのだが、高国の弟である以上、兄の滅亡と全く無関係ではいられなかった。かくして彼は兄の滅亡とともに浪人せざるを得なくなったわけだが、だからといっていつまでも浪人身に留まる気もない彼は、虎視眈々と再起の機会を窺っていたのだ。

そんな彼にとって、一向一揆と晴元政権の本格的対決は、自らの復活という夢を実現する上で、まさに絶好の機会であった。何しろ、強大な一向軍の力を利用すれば、仇敵細川晴元を滅ぼすことも決して不可能ではなくなるのだ。そうなれば、自分こそが天下人である。「いよいよ、わしがこの世に打って出る機会が巡ってきたのだ」

一揆軍と晴元軍の対立が激化し始めた頃、晴国はそう言って豪快に高笑いし、その上で、一向軍に使者を出し、共闘を呼び掛けたのだ。

そんな具合に、亡兄の遺志を継ぎ、無念を晴らす最大にして最後の機会を逃すまいと、ひたすら野心の焰を燃やし続けていた彼の下に舞い込んできたのは、あつという間の一向宗の没落と、総本山山科本願寺の陥落という凶報だった。

しかし拳兵準備も整い、後は実行のみの段階となった晴国に、もはや後へ引くことは許されなかった。実際、彼の行動を察知した晴元政権は、彼を討伐すべく、三好政長を総大将とする軍勢を編成し始めたのである。そこで、九月十二日、引っ込みがつかなくなった晴国はやむなく拳兵した。

彼は京都の鞍馬に兵を進め、さらに摂津方面に引っ込んでいた一向一揆の過激派と連携を取り合つて、晴元軍との本格的決戦に備えた。一方、晴国の要請に飛びついた一揆軍過激派は、とりあえず数千規模の大軍を編成すると、同月二十六日には山崎まで進軍したのであつた。

これが晴国の乱の概要であるが、一向一揆の主力が壊滅した今、その残党軍をいくらか加えたぐらいで、法華宗や六角氏を完全な影響下に置いた晴元政権に敵うはずもなく、十月に入った頃には晴国軍は無惨に壊滅し、晴国自身も何処かへ姿を消したのであつた。

晴元は驕っていた。

既に、見渡す限り敵といえる敵もない。一向宗が没落した今、晴元政権の基盤はかつてないほどに磐石となつていた。法華宗の急激な勢力拡大のみが若干不安ではあるが、今のところ彼らは晴元に従順姿勢を貫いている。南近江の有力大名六角定頼も、重臣の進藤貞治を都に派遣し、一向一揆鎮圧の祝辞を述べさせるなど、事実上晴元政権の盟下に入つていた。

怖いものは、何もない。

だから彼は驕った。無理もない。如何に天下最強の権力をその手に握ろうと、彼はまだ弱冠十八歳の青年に過ぎないのである。己が



手の中にある、余りに大きな力に有頂天となり、浮かれ騒ぎ、驕つてしまうのも、ある意味で当然といえば当然だった。

「千熊よ。かつて御堂関白（藤原道長）は、自らの栄華を満月に例えたが、今の余もさしずめそんな気分だ」

と言つて、素直に、純粹に、単純に高笑いする晴元を見ると、千熊は思わず苦笑いせずにはいらなかった。

今の彼は間違いなく頂点を極めている。まだまだ子供に過ぎない千熊丸だが、その程度のことにはわかった。しかし、満ちた月はいずれ必ず欠けるものだ。藤原北家がそうであったように、今や絶頂を極めている細川京兆家も、やがては衰退の道を歩むに違いない。もしそうなたとして、そのとき、自分はどうなっているのだろう。いろいろな考え、思いが、頭に浮かんでは消えていく。

「ま、ともかく今宵は無礼講。正月ゆえな。今日ぐらいは、そなたも身分を忘れ、思い切り酒を飲め」

とにかく細川晴元にとつて、これほど楽しい新年は他になかったろう。これほど心地よい正月は初めてだったろう。何しろ磐石なる天下人として過ごす、初めての一月一日であった。

「後は將軍家と正式に和睦を結んで、都にお戻しすれば、余の地位は磐石のものとなる。くつくく。もはや、何人たりとも余には勝てん。はっはっはっは」

そんな風に豪快に笑いながら、彼は浴びるほど酒を飲み、そして何を思ったか、唐突に立ち上がると、今なお楽しげに騒ぐ家臣たちを横目に、縁先のほうへと歩いていって、そこで、げえげえと、全てを吐いてしまった。

天文二年（一五三三年）に入った頃、晴元政権はいよいよ強大化して、もはや細川晴元の右に出る存在はなくなつた。

だから晴元は、日々自らの力を誇示すべく贅沢な享楽に明け暮れるようになった。連日連夜、重臣、公家たちを集めて酒宴を開いて

みたり、煌びやかな行列を従えて、有名な寺院や史跡を巡ったりした。さらには、管領御所や芥川山城を天下の支配者の居城に相応しき代物にせんと、細川政権配下の諸大名を度々動員しては、増築工事にあたらせていたのだった。

今の晴元は、栄華を極めた英雄、というよりはずっと欲しくてたまらなかつた玩具を手にして、有頂天になって喜んでいるただの子供に過ぎなかつた。

けれど…。

晴元の無邪気さに翻弄される諸侯の不満は、日増しに高まつていた。恩賞一つにしても、彼は公明正大さより己の感情を優先した。要するに余り功績のない者でも、晴元の信任さえ得ていればそれなりの領地を与えられたし、逆に、功績を挙げても彼の信任がなければ、領地を与えられるどころか、逆に没収されたりした。その上、管領御所や芥川山城の増築にかかる費用は、政権傘下諸侯に等しく求めてきたのである。ただでさえ相次ぐ合戦で、どこも軍費が嵩んで、財政的に厳しい状態に立たされているのに、晴元の個人的趣味のために、更なる出費を強いられるとなれば、諸侯の不満が高まるのも、当然といえば当然だった。

晴元政権は強大である。だから諸侯も怒りを胸に堪え、ただ黙々と従っていた。けれど、たまりにたまつた不満と不審は、いつ爆発してもおかしくないほどに膨れ上がっていた。

晴元政権は磐石である。

だが、それは外から見た場合のことで、中から政権の実態を眺めるなら、ぐらぐらと揺れ動く脆き砂上の楼閣の上に、辛うじて存在しているに過ぎなかつた。

白き雪が、ぱらぱらと世界に舞っている。

それはどんどん積もって、世界中を瞬く間に白銀に染めていった。いろいろ複雑に折り重なっていたはずの文明の全てを飲み干して、

全てを真っ白に塗り替えていく。

この日、世界は史上稀に見る大雪に包まれていた。近畿地方にこれほどの雪が降ったのは初めてではないかと思われるほどだったが、芥川山城から見るそれは、なかなか風流だった。

「千熊よ、ここがわが居城だ」

と言つて、晴元は高笑いした。

この日、千熊丸は晴元とともに芥川山城にいた。彼は、初めて見る細川政権の牙城を、ただ呆然と眺めていた。少なくとも、それは三好家の居城芝生城しせいじょうや、勝瑞城かつずいじょうの比ではない。やはり、細川高国が築き、晴元に受け継がれた細川政権累代の覇城ともなれば違つものだと、ひたすら感心するばかりだった。

「今も普請の真っ最中なのだ。後数年もすれば、余の居城として相応しき威容を誇ることになる。そして余はここで政務を執るのだ。余が死んでも、余の子、孫、ひ孫と、代々余の嫡流が天下を治めることになるだろう」

晴元は芥川山の麓に広がる盛大な城下町を眺めながら、そんな風に呟いた。町には無数の人々が犇おそいていて、どれも細川政権の絶対的な権勢を象徴するかのごとく、活き活きと、活気に満ちた一日を過ごしているようだった。

「…御所様は、御自身の幕府を開かれるおつもりですか？」

そんな彼を見ながら、千熊丸は不思議そうな顔をして尋ねた。

「幕府？ …幕府ねえ。それもよいかもしれんが、幕府なら今もある。いちいち潰して、新しいものを作り出す必要性もあるまい」

「…では、御所様は如何にして天下を治められるのですか？」

と、千熊が問うと、晴元はにんまりと微笑み、そして足早に部屋むらのほうへと戻っていった。

「執権北条氏。お主もそれぐらいは知っておるだろう」

「ほ、北条氏？ で、では…」

「想像通りだ。余が目指すのは、第二の北条だ」

晴元は嬉しそうに笑い、千熊は「なるほど」と、納得したように、

何度も何度も頷いていた。

執権北条氏というのは、源頼朝以下源氏將軍家嫡流三代が絶えた後、鎌倉幕府を事実上支配した一族のことであるが、彼らはどれほど強大な権力を握ろうとも、自ら將軍になろうとはせず、あくまで執権として形の上は將軍家を守り立てていた。無論、北条氏の意に背く將軍は次から次へ追放し、さらに政敵となりうる有力御家人も悉く排斥して、都合十六代百年以上に渡り、この国を支配し続けてきたわけだから、形は將軍家の御家人でも、実質は天下人も同然の存在であった。

晴元が執権北条を己が政権の模範にすると明言した以上、彼が目指す政権もおおよそ見当がつくというものだ。即ち、室町幕府及び足利將軍家の存在は認めながら、それはあくまでも形式的な存在に止め、実権は管領家たる細川家が握る。晴元は、執権を管領に、北条氏を細川氏に変えた第二の執権政治を室町幕府に復活させようとしているわけだ。無論、政権の根拠となる管領職は、細川家、それも晴元嫡流が独占世襲するものとすれば、そのとき、名実ともに管領細川氏による天下が完成する。

「北条は桓武平氏の末裔とはいえ、初代執権の時政の代まではただの伊豆の土豪に過ぎなかった。要するに家格は圧倒的に低かったわけだ。それが偶然頼朝公と出会い、娘政子を嫁がせたために飛躍のきっかけを掴んだ。だが、わが細川は、源氏の名門足利家の血脈を受け継ぐ分家の筆頭。…卑賤の北条如きにできたことを、わが細川に出来ぬわけもない。今の世に執権政治を復活させ、天下に君臨するは、わが細川であり、その細川を統べるのは、この晴元が血統でなければならぬ」

そう言って、常になく自信に満ち溢れた表情を浮かべた彼は、二タニタと不敵な笑みを漏らしていた。

けれども、そう上手くいくものかと、千熊は内心首を傾げていた。あの当時と今では、時代がまるで違うのだ。時代が違えば環境も異なり、環境が異なる中で昔と全く同じ体制を構築するというのは、

果てしなく至難の業のように思えてならなかった。何より、他ならぬ足利將軍家が、管領家の傀儡に甘んじるとも思えない。將軍家は將軍家の権威と地盤があり、零落れたりといえど、無視できぬ勢力を保っている。執権北条が將軍を制御して幕政を専断してこれたのは、幕府内に地盤のない摂家や皇族から將軍候補を招聘したためであり、もしも頼朝以来の嫡流が健在であつたなら、彼らもあれほどの権勢を握ることは出来なかつたに違いない。

晴元がどういう天下を考えているのか、その本音など、千熊丸に分かるはずもなかつたが、ただ何となく、彼の天下は余り長続きしないような気がした。なぜか、具体的な説明は出来ない。あくまで直感に過ぎないが、ただ豪快に高笑いするだけの彼を見ていると、確かにそんな気がしたのだった。

二月。

この頃、細川晴元は堺にいた。細川政権の絶対性を堺衆たちに見せ付けんとする、一種のデモンストレーションを兼ねての逗留であつたが、彼自身はそんなことより、堺の豪商たちが常日頃仕入れている南蛮渡来の珍品名物のほうに興味があつたらしく、連日、商家を訪れては、あれも欲しい、これも欲しいと、金に糸目をつけぬ買占めに明け暮れていた。

だが…。

全く無防備な状態で、堺に遊んでいる晴元は、彼を憎む勢力からすれば、攻撃するにこれ以上ない絶好機だった。無論、晴元には常に数千規模の兵が従い、側近の三好政長も警戒を怠つてはいなかつたが、数多い民衆の中より、自然発生的に現れ出る一向一揆の前には、そうした努力は何の意味もなさなかつた。

本願寺証如以下、一向門徒たちの恨みは深い。

彼らにすれば、他ならぬ晴元の要請で元長を討伐してやったという思いがある。それなのに、それから僅か一ヶ月程度で、手のひら

を返したように法華宗と結び、攻撃してきたのだ。彼らが怒るのも無理はないだろう。拳句、総本山であった山科本願寺を焼き討ちされ、無数の信徒たちが虐殺された。これで平静を保てる人間がいたとしたら、それこそまさに仏と言えよう。

兎にも角にも、彼らの中に渦巻く怒りや憎しみは、晴元の油断をきっかけとして、勢いよく燃え上がり、そして爆発した。

「…一揆勢が？」

晴元は、一瞬きよとんとした。購入したばかりの南蛮品を愛でながら、心ここにあらずといった様子で、ぼんやりと「一揆勢ねえ」と呟く彼であった。

「一向軍二万余が、一路堺を目指して進軍しております」

しかし、伝令の告げる詳細なる報告に、彼の顔はどんどん青ざめていった。

「に、二万だと…」

彼とて無能ではない。馬鹿ではないのだ。「二万にございます」と伝令が止めを刺すかのように、言い加えた。

すると、そこに三好政長が慌しく駆け込んできた。晴元の御前に進み出ると、深々と頭を下げ、そして、

「お逃げくださりますよう」

と、言った。

「一揆勢の数はさらに増え、もはや我らの手に負えるものではありません。ここはひとまず逃げ、再起を期すべきでしょう」

「…逃げる？」

晴元はぎろりと、おぞましき視線を政長にぶつけると、

「貴様は、余に、この余に、逃げよと申すのか？」

ひどく冷め切った、鋭い罵声を思い切り浴びせかけた。

「それ以外手がありません。…残念ながら、一揆勢の勢いは凄まじく…。さ、再起さえ期せば、必ずや倒せます。それまでの辛抱で

「ござりますれば、ここはお耐えくださりませ」

政長も必死である。こうしている間も、次第に一揆勢は迫ってきている。まともに戦っても勝ち目がない以上は、逃げるより他に仕方がなかった。

政長の必死な態度に、晴元もやむなく頷いた。彼も馬鹿ではないから、彼の言わんとしていることは、重々承知していた。

会合衆（えいごうしゅう）（堺の有力豪商たちで作る自治組織）の用意した船に乗って、堺を離れた晴元は、陸地から遠ざかるたびに、自分の天下が壊れていくような、不穏な気持ちに苛まされていた。

一日前まで絶頂にいたはずの自分は、僅か一日で敗軍の将にまで転げ落ちてしまった。砂上の楼閣とはよく言ったものだが、このとき初めて、晴元は自分の立場が実に危ういものの上に成り立っていたことを実感したのだった。

けれど、世の中というものは、実に分からぬものである。生き延びただけでも良しとすべきなのだろうが、晴元はすっかり打ちひしがれたように、穏やかな瀬戸内海の潮風をその肌を感じながら、甲板の上に頂垂れていた。

【雌伏編】第012章 逆襲

堺より細川晴元を追放した後、一向軍は先の戦いで失った勢力を取り戻すべく、積極的な軍事作戦に打って出ていた。何よりも、本願寺一門の総帥たる証如自ら、諸国の一向門徒に檄文を飛ばしている時点で、今回の騒動に対する本願寺の本気度も分かるというものである。

既に堺の町は一向軍の支配下にある。そして、次に証如が狙うのは、本願寺の新たな総本山石山御坊のある摂津全土の制圧であった。

「まずは伊丹城の伊丹親興。こいつを滅ぼさねばならぬ」

未完成の石山御坊の一角で、若き法主証如に対し、大叔父の蓮淳れんじゅんはそう言って、眼前の地図を指差した。

「伊丹城を落せば、摂津の半ばは我らの支配下に入る。何よりまずは摂津を固め、その上で上洛する。既に門徒たちは集まっているから、法主たるそなたの号令があれば、数万の大軍で伊丹城を取り囲めるぞ」

蓮淳は、とても気高き高僧とは思えぬ、俗気に満ちたおぞましき笑みを浮かべると、迷う証如の顔を睨むように見つめた。

「事ここに至ったからには、もはや迷っている場合ではない。既に賽は投げられた。法主殿、うかうかとしていると、淡路に逃れた晴元が反撃に転じてくる。都には法華の者どももいる。奴らとの再戦を考えれば、早急に摂津を取り、地盤を固めなおさねばならぬのだ」

「…ですが、大叔父上…。我らは勝てますか？」

証如の脳裏には、今もなお炎上する山科本願寺の、無惨で哀れな様子が焼きついていて。せつかくここまで作り上げた石山御坊が、山科御坊の如く崩れ落ちる様は見たくなかった。

「勝てるとも。何を弱気になっっているのだ。我らには既に数万の兵



がいる。憎たらしい法華どもを叩き潰して、我らが天下をとるには今しかない。その後は、晴元も追い落とし、それなりの人間を細川の跡目に立てておけばいい。実権は我らが握る」

「とにかく迷っている場合ではない。…そなたが動かねば、わが本願寺は滅び去るのだぞ」

そんな風に蓮淳に強く迫られると、証如には反論のしようがなかった。他ならぬ大叔父であり、かつ教団組織の実権を事実上握っている実力者なのだ。如何に法主たる証如といえども、彼の意向を無碍に扱うことはできなかった。

本願寺十世法主証如の号令が下ると、各地の一向門徒たちは、揃いも揃って怒涛の如く、伊丹城に向かって進軍を開始したのであった。

その数は二万とも三万とも言われている。本願寺の坊官しもつま下間兵庫、下間丹後兄弟を事実上の総大将とした大軍は、二月中頃に伊丹城を取り囲むと、城主伊丹大和守親興の手勢と激突した。

「降伏は…、しそうにないか」

下間兵庫は苦りきった顔をして、ハアと溜息を吐いた。

「伊丹勢は二千。兵力差は十倍。これだけの力の差を見せ付けられて、なお抵抗する奴は、ただの阿呆か、それとも何らかの勝算があるのか…」

と、下間丹後も悔しそうに唸っていた。

総攻撃をかけるのは容易い。圧倒的兵力にものを言わせた人海戦術で攻め込めば、数日のうちに落城するだろう。

だが…。その策は、余りに犠牲が大きい。無論、兵たちは誰も死などは恐れないだろうが、大切な門徒たちである以上、出来うる限

り最小限の犠牲で全てを片付けたいというのが、総大将たる下間兄弟の願いなのだった。

「とにかく、今一度使者を送ろう。それで駄目なら、総攻撃を開始する」

総大将下間兵庫がそう言うのと、副将の丹後も大きく頷いた。

木沢長政は、京都にいた。

突如として発生した一向一揆が、たちまち堺の晴元を追い落とし、今では摂津全土の掌握を目指して伊丹城を取り囲んでいるという緊迫した情勢下、彼に出来ることは、洛中の実権を握っている法華宗を動かし、彼らの力をもつて一向軍を撃退することであった。

「木沢様が今よりさらに勢力を広げるには、此度の騒乱は、またとない機会なんでしょうな」

皮肉じみた松永久秀の言葉に、木沢はふんと鼻で笑った。

「君がどう考えようと、わしのすべきことは、淡路に逃れられた御所様に成り代わり、一向一揆を鎮定することだ。その結果、わしはどういう立場になろうと、それは結果論であり、わしの知ったことではない」

「…左様ですか」

基本的に、久秀は全てを見抜いていた。生まれつき勘がいいのである。如何に強大な一向一揆といえども、その裏に暗躍していた木沢の存在なくしては、あれほど鮮やかに堺から晴元を追い落とすことはできなかつただろう。晴元が無防備に近い状態で堺に赴くことを、予め知っていなければ、本願寺側もあの疑り深く、用心深い三好政長を出し抜いて奇襲攻撃に打って出ることなどできなかつた。それを伝えたのは、他ならぬ木沢であり、また晴元に堺へ赴くよう勧めたのも、木沢だった。全てが彼の陰謀。一連の出来事は、悉く彼の手のひらの上起きたことであった。

食えぬ男だと、久秀は思う。人のことを言えた義理ではないと思

うが、自分に輪をかけた陰謀家のひねくれた笑みを見ると、なぜだか無性に腹立ってきた。それだけ自分が若いのか、それだけ自分が冷徹になりきれていないのか。けれど、木沢はそんな彼を見つめながら、全て見抜いているかのように、ニタニタと笑った。

「ところで松永。その方は最近、三好の若によく会うようだな」

ふと、木沢はそんなことを言った。

「別に悪いといっているわけではない。…あの若君殿には随分世話になった。此度も、法華門徒どもを動かすのに、彼の名を騙らせてもらうつもりだしね。…それにしても、法華の門徒どもは、どれも三好と聞けば素直に従う。その三好を背負っている千熊丸殿はまだ十歳で、しかも彼は門徒たちに何の恩も施していないというのに」

「ま、利用できるものは利用する。わしが越前殿（三好政長）の反発を買うのを承知で、わざわざ千熊殿の命乞いに協力したのも、全てはこういうときのためなのだからな」

と言って、彼はその顔を醜く歪めた。

久秀はこういう木沢長政という男が、嫌いではない。けれど、余り好きにはなれなかった。まるで自分を見ているかのような気がするのだ。同属嫌悪というべきなのだろうか。そして彼は自分という存在そのものを、余り好いてはいなかった。野心高く、何より人を信じない。そんな自分が何より嫌いだった。もっと他に生き方があるのではないかと、心の底では思いながら、これまでの一生は、常に人を騙し、欺き、裏切って、自分のためになることだけを求め続ける毎日だった。

三月に入り、ようやく軍備の整った法華一揆は、木沢長政軍とともに京を発すると、一路伊丹を目標して進軍を開始した。

その数、およそ二万。

一方、一向軍に包囲され、苛烈な猛攻を受け続けてきた伊丹城は、

奇跡的に、今もなおその威容を保っていた。一向方が数日中に落ちると見た城は、一ヶ月近くたった今も、昔と変わらぬ堅固を維持していたのだった。

伊丹親興の想定外の奮戦と、伊丹城の堅固さに加え、ここに来て寄せ集めに過ぎない一揆軍の弱点が露呈したことも痛かった。

そして三月二十九日。

伊丹に到着した木沢軍は、早速総攻撃を開始した。伊丹城を取り巻く一向軍も、とりあえず反撃してきたとはいえ、木沢軍と、城方により挟撃される形となった彼らの不利は否めず、同日午後には、もはや軍としての形すら失った。次いで、下間兵庫、下間丹後ら軍首脳が真っ先に逃亡したことにより、敗北は決定的となったわけだが、残された門徒たちは、ただ獰猛な肉食獣に追い立てられる草食獣の如く、無惨に、哀れに逃げ惑うだけで、後は勝勢に乗った木沢勢により一人ずつ確実に狩られていった。

形勢は、逆転した。

淡路島に逃れていた晴元は、伊丹城攻防戦の結果を知ると、そう思わずにはいられなかった。既に伊丹城には木沢長政を筆頭とする法華軍が大結集を始めているという。一向方に靡きつつあった摂津諸豪族も、皆、慌てふためいたように、かつての敗将晴元の下に、次から次へ使者を送り、改めて自らの忠誠を誓っていた。

今や晴元の下には大軍が揃っている。反転攻勢を期すべく、四国より呼び寄せた軍勢であり、淡路衆、阿波衆、讃岐衆、伊予衆など合わせて総勢一万五千となっている。

「一向宗如きに舐められてたまるものか」

すっかり自信を取り戻したらしい晴元は、洲本城の一角で豪快に高笑いしていた。

既に軍備は万端だった。地上戦力は一万五千。それを悉く乗船させて、なお余りあるほどの大船団もある。瀬戸内海を牛耳る海賊衆

の首領たる安宅氏の棟梁安宅治興が率いている水軍衆であるが、眼前一面を埋め尽くす圧倒的な大水軍を見ていると、かつて木曾義仲に追われながら、再び都に攻め上らんと虎視眈々力を蓄えていた平家の気持ちかわかるような気がした。

ただ平家のようににはならぬと、晴元は誓う。必ずや畿内に戻り、都を取り戻し、一向宗を叩き潰す。それだけの力が自分にはあるのだ。しかも、敵方に源義経はいない。

「御所様、全軍乗船完了いたしました」

そこに、安宅治興が報告のためにやってきた。晴元は静かに頷くと、彼に案内されるまま御座船に乗り込んだ。その甲板に吹き抜ける潮風をひしひしと感じながら、ふと思う。堺から抜け出すときに浴びたものとは、全く違う風。これから天下を取り戻しに行くのだと思うと、不思議と心が高鳴った。

淡路を発した晴元軍が目指したのは、堺であった。

海路より晴元が、陸路からは木沢長政が、それぞれ圧倒的な大軍を従えて進軍した。一方、堺に立て籠もっている一向軍は、脱走兵も多く、とてもではないが、勢いに乗る細川軍に太刀打ちできるような状態ではなかった。

だから、彼らは戦わずして逃げ出した。堺を主戦場にしたくない会合衆による説得工作もあったとはいえ、天下に精強を称えられた一向軍の無様な姿に、上陸した晴元たちはただ呆れ、そして嘲笑っていた。

「後は、石山御坊のみ」

と呟きながら、晴元はにやりと不敵な笑みを漏らした。

「総攻撃をかけますか？」

すかさず三好政長が口を挟むと、彼は殊更大きく頷いていた。

「既にここには五万ほどの兵力があります。如何な本願寺とて、今度ばかりは年貢の納め時でしょうな」

そんな木沢長政の言葉に、晴元はただ苦笑する。

後は石山御坊のみ。ここを落し、今度こそ証如以下鬱陶しい一向宗の高僧どもを叩き潰すことが出来れば、目障りな一向一揆も、それなりに息を潜めるに違いない。晴元にとって、自らの政権の基盤を固める上で、一向宗の殲滅は、動かし難き至上命題となっていた。

【雌伏編】第013章 苦渋の決断

天文二年（一五三三年）は五月。

桜は、既に散った。穏やかな日差しに包まれ、ぽかぽかとした雰  
囲気が漂う。時折吹き抜ける風など、思いのほかに気持ちよい。

春は過ぎ、けれど夏ではない。

次第に緑の深まる季節。今年で、ようやく十一歳になった千熊丸  
少年は、眼前に聳える巨城を眺めながら、春だか夏だか分からない  
微妙な大地の上に、ごろりと寝転がった。

「あれが石山御坊でございますか」

側に控える孫四郎長逸は、呆然と立ち尽くしながら、聳え立つ敵  
城を眺めた。

「らしいよ。…かつての山科御坊とは比べ物にならない」

と言いながら、千熊は思わず苦笑いした。

考えてみると、山科攻めは去年の八月末のことだったから、既に  
一年近くが過ぎたことになる。それを長いと見るか、短いと見るか  
は人それぞれだったろうが、千熊にとつては、短いような気がした。  
けれど、少なくとも、本願寺は山科御坊が焼失してから、僅か一年  
足らずの間に、これほどの巨城を築き上げたのだ。石山御坊の壮大  
を見れば見るほど、一年と言う時間は、やはり長いものなのだと感  
じずにはいらなかった。

「石山御坊つてのは、元々は蓮如上人の隠居地だったそうですね」

孫四郎の言葉に、千熊も静かに頷いた。

「…さすがは本願寺隆昌の基盤を作った蓮如上人というべきか。見  
る目は確かだよ。…この城は、堅固すぎる」

そう言つて頭を抱える千熊丸は、改めて、睨み付けるように石山  
御坊なる新興宗門の覇府を見上げた。

包囲する細川軍は、当初総勢五万。今では、法華一揆がさらに加  
勢し、六万近くに達しているが、落ちる気配はない。一方、城内に

は多くて二万、少なく見積もって一万とされる兵力が籠っている。皆、一向宗を崇拜する熱烈な信徒たちであり、死を恐れぬ固い結束を最大の売り物としている。

連日に渡り、細川軍は総攻撃を仕掛けていたが、天然の要害に囲まれた石山御坊は、びくともしなかつた。何しろ、城の北側を淀川西側を海、東側を大和川や深野池に取り囲まれており、攻撃したくとも、この三方から攻撃を仕掛けるのは、不可能とは言わないが、決して簡単なことではなかつた。ならば、残る南側から攻めるより他に手はなかつたが、そんなことは当然承知している城方が兵力を重点配置するなど、防御力を大幅に増強していたので、こちらも容易く攻略できそうになかつた。

これはずつと後の話になるが、桶狭間に勝利した後、一躍天下に覇を唱えた織田信長にとつて、最大の強敵となつたのが、この石山本願寺であつた。十年間に及ぶ彼と本願寺の戦いを、世に石山合戦と称するが、圧倒的な織田軍の猛攻を幾度受けても、石山御坊はびくともしなかつた。これは余談ではあるが、石山攻めの総大将となつていた佐久間信盛（当時の織田家筆頭宿老）は、ちつともはかどらない戦況を信長に咎められて、息子共々追放されているが、佐久間であるうとなかろうと、石山御坊は容易く落ちる代物ではなかつた。結局、二進も三進もいなくなつた信長は武田、上杉、浅井、朝倉、毛利といった本願寺の支援者を悉く倒して、御坊を孤立させると、その上で朝廷を動かして、和議という形で決着をつけざるを得なかつた。

さらに付け加えると、信長死後、天下を継承した豊臣秀吉も、石山御坊跡地を自らの本拠地を選んでいゝ。城攻めの名手と称えられた秀吉の目から見ても、自らの本拠地とするに相応しい堅固さを誇つていゝと思えたのだらう。実際、秀吉死後に起きた二度に渡る大坂の陣では、徳川家康が二十万もの大軍を投入しながら、余りの堅固さを前に、いったんは和議を結び、その上で言いがかりをつけて外堀を埋めるといゝ姑息な手を使わざるを得なかつた。



そんな城である。寄せ集めの細川六万に落せるようなものではなかった。

「このままでは被害が嵩みます」

そんな孫四郎の言葉に、千熊は胸を痛めた。城攻めの先手を仰せ付かっているのは、他ならぬ三好勢なのだ。城攻めが難航すればするほど、犠牲が拡大するのは三好勢だった。

「何とかしなければいかなあ」

十一歳の少年は、そう呟くと、ハアと大きな溜息を吐いた。

細川晴元も、石山御坊の堅固さにはすっかり頭を抱えていた。

攻めても攻めても、全く落ちない。未だ、眼前の城壁一つ抜けないう有様である。一向勢は、石山御坊が誇る天然の要害、堅固な城壁に加えて、宗教的連帯を核にした命知らずな抵抗を加えてくるから、寄せ集めの烏合の衆に過ぎない細川軍の敵う相手ではなかった。

目下、晴元が何より恐れているのは、時間だった。

まあ、よく考えてみればわかることではあるが、各地の諸侯をかき集めた上で編成されているに過ぎない細川軍は、一向軍と比べ、統一性、団結力の面で決定的に劣っている。総大将である細川晴元も、総大将というよりは諸侯連合軍の単なる盟主に過ぎないということもあり、彼には全軍に対する指揮命令権限はあっても、それを徹底させられるほどの絶対的権力はないのだった。

だから、城攻めが長期化し、無意味に時間が経過していくことを、晴元やその側近たちは何より恐れていた。即ち、時間がたてば、それだけ金がかかる。兵糧とて馬鹿にはならないのだ。時間がたてばたつほど金銭的負担が増大する諸侯の不満は、次第に高まっていくだろう。さらに長期化するようなら、戦線を離脱する諸侯も現れるかもしれない。誰か一人、戦線を離脱すれば、それをきっかけとして、細川軍そのものが空中分解する可能性すらある。そんなことになれば、晴元の無力を満天下に晒すこととなり、彼の政権も一挙に

弱体化し、下手をすれば崩壊ということにもなりかねない。

かといって、晴元自身に諸侯の負担を肩代わりしてやれるほどの財政余力などあるはずがなかった。彼の直轄領はそれほど多くはないのだ。彼が全軍の盟主として君臨しえているのは、名門細川の棟梁としての権威であり、また一人一人の諸侯の頭一つ抜き出たぐらゐの国力を保持しているためであつたが、その程度の力で、六万もの全軍を養えるはずもなかった。

となると、早急な解決こそ、晴元の至上命題であつた。しかし力攻めで落とせないとなると、兵糧攻めなどは論外である以上、もはや打てる手立てはなかった。

「和睦、というのも一つの手ではありません」

ぎろりと、怨めしそうに石山御坊を睨み付ける晴元の後ろから、三好政長はそう言つて、恭しく畏まつた。

「…和睦、か。それも、一つの手ではあるな」

晴元は空しげにぼやくと、声にならぬ小さな溜息を一つ吐いて、御坊から目を背けた。

現状、和議以外の手があるとは思えなかった。このまま包囲を続けても、御坊を攻め落とせるとは思えない。長期化して、軍が空中分解するようなことになれば、細川政権そのものの存亡にかかわる危機ともなりかねなかった。

ならば、ここらで和議を結ぶのが、一番の得策であるように思えたのだつた。現時点なら、まだ細川軍優位のままに決着させることもできる。宿願だつた本願寺討滅は不可能になるが、政権そのものが崩壊することに比べれば、幾分マシである。今後、政権をより強化させれば、いつかは滅ぼす機会もやってくるかもしれない。今は、何はともかく、戦を決着させることが急務だつた。

「だが、証如は応じるかな？」

晴元の抱いた不安は、彼だけでなく、細川軍将士の誰もが抱いた共通の不安であつた。和議以外の手はない。そう思う者は、何も三好政長だけではなかった。だが、和議を結べるか否かは別問題だ。

本願寺にとって、細川晴元は僅か一年前に自分たちを利用した拳句、その舌の根も乾かぬうちに裏切った憎むべき仇敵であるし、細川方の主力である法華宗は、ここずっと、実に何百年来に渡って対立を重ねてきた真正正銘の仇だった。だから、和議といっても容易く結べるはずもないのである。それに本願寺側とて、細川方の苦境は知っているだろう。籠城を決め込むだけで、細川政権を崩壊に追いやることのできるかもしれないなら、彼らとて、安易な和議など結ばず、このままずっと絶対的な宗門の覇城に閉じこもり続けるに違いなかった。

「応じるか否かはわかりませぬが、やってみるだけの価値はあると思われませぬ」

と、政長は自信に満ちた目をして、そう言った。

「ならば、誰に任せればよいのだ？ 下手な人間を送り込んで、証如の意を動かせるとは思えんが…」

「左様ですな。今回の一件、任すに値するのは、それがしが見るところ、千熊丸殿などが適役かもしれないませぬ」

「せ、千熊だと？」

驚きを隠しきれぬように、呆れた顔をして、晴元は飄々とそこに立っている側近の顔を見つめた。

「だ、だが…。千熊と一向門徒は、いわば仇敵同士。三好家は法華宗の庇護者だし、一向宗は、筑前に手を下した張本人…」

「だからこそです」

すかさず、政長ははっきりとした口調で言った。

「考えてみてください。この状況では下手な人間を送っても、証如の心は動かせないでしょう。だからこそ、意表を突く形で、千熊丸殿が適役だと思つのです」

「…」

「ま、とりあえず、それがしにお任せあれ。それに、千熊殿が失敗したとて、我らに何の問題がありません。失敗したら失敗したで、次の手を考えればよいだけのこと」

そんな政長の台詞に、晴元は苦りきったような顔をして、プイッとそっぽを向いた。

気に入らぬ。

晴元の顔は、そう言っている。実に正直な人だと、政長は思ったけれど、彼は自分の意見を退けないだろう。それ以外に手がないことを、他ならぬ彼自身が痛いほど承知しているのだ。

和議を結ぶ。

言うは易し、行うは難し。あくまで平凡な人間を使者に立てても、証如の心を動かせるとは思えなかった。逆に、千熊に全てを委ねてしまえば、意表を突く形で、案外良い結果が生まれるかもしれないな。つた。

晴元にしても、ここは考えどころだった。和議を結ぶ以外に手はなく、そのために千熊丸が必要な存在であるということもわかっている。だが、万一失敗すれば、千熊はどうなるだろう。証如により殺されるか、あるいは自分がその失敗をあげつらって殺すことになるのだろうか。彼の父、三好筑前守元長を殺したことも、今となっては後悔しつつある晴元にとって、彼の子である千熊を、そのような窮地に追いやることは、余り気が進まなかった。

けれど、それ以外に手がないなら、仕方あるまい。千熊の身の上方よりは、天下人としての今の自分の立場を守るほうが大切だった。「任せる」

と、散々逡巡した拳句、苦渋に満ちた顔をして、小さく呟く彼の言葉に、政長は殊更大仰に頷き、そして大きく頭を下げた。

にやりと、思わず漏れる不敵な笑みを、必死になって押し隠す。これで千熊を葬り去る絶好の名分が出来たと、一人内心に高笑いする三好越前守政長であった。

【雌伏編】第014章 交渉成立

千熊丸は苦笑いした。

唐突に晴元の本陣に呼び出されたかと思うと、与えられたのは、達成不可能な任務、端的に言うなら、実質的な死を命じられたも同然だった。

「俺は、再び晴元様に殺されたよ」

自嘲気味に、そうぼやく千熊丸に、康長をはじめ、三好軍の諸将は驚きを隠せぬように、彼の顔をまじまじと見た。

「明日にも、俺は石山御坊に乗り込んで、和議の斡旋をせねばならんらしい。…失敗すれば、確実に死ぬだろうな」

一見すると、幼児のようにも見える十一歳の少年は、吹っ切れたような、どこか悟りきったような不思議な顔をして、ハアと大きな溜息を吐いた。死の淵、というものを何度か乗り越えてきた彼にとり、今回の事態も、これまでの一年に繰り返されてきた地獄の再現に過ぎなかった。

「成功させればよいのです」

そんな彼を励ますように、孫四郎長逸は殊更豪快に高笑いして見せた。本願寺との和約を取り付けることが如何に難しいことが、彼とて知らぬはずはない。だが、任された以上はやってのけるしかない。そうするより他に生き残る術がないのなら、こんなところで迷ったり、悲しんだりしていても仕方ないだろう、というのが長逸の基本的な考え方であった。

「そうですね、若殿。…逆に、もしも、此度の一件を見事に解決へ導くことができたなら、若殿が名声は天下に轟き、御家再興の足がかりを掴むきっかけとなるやもしれませぬぞ」

と、康長も口を揃えて言う。

千熊丸は苦りきった顔をしながらも、ともかく家臣たちの励ましに応じるように、何度も大きく頷いていた。

三好千熊丸が、細川晴元の命を帯びて石山御坊内に乗り込んでいったのは、六月も半ばを過ぎた、二十日のことであった。

何の因縁だろう。千熊は、流れゆく歴史というものの不思議さに、思わず苦笑いした。

まさに一年前のこの日。父たる三好越前守元長は、圧倒的な一向一揆軍に追い詰められて和泉国は顕本寺に自害したのだ。即ち、命日。その命日に、父を殺した下手人の下に、交渉のためとはいえ、このこ赴いている己の立場に、彼はただ呆れたように溜息を吐いた。

考えてみると、あの日が、今に至る地獄の始まり。それまで当然と信じてきた常識が脆く儂く崩れ去って、凄まじく厳しい現実なるものが、千熊の肩にずっしりとのしかかるようになったきっかけの日であった。

何はともかく、千熊は因縁の歴史を胸にかみ締めながら、副使の康長とともに、静かに城内を進んだ。殺気立った一向門徒たちが、時折こちらを睨んでくるが、その程度でいちいち動じるほど、千熊丸も柔ではなかった。

果てしない城壁の奥に、本願寺一門の惣領証如の居所たる法主御殿が聳え立っていた。

親鸞より数えて十代目。中興の祖蓮如のひ孫に相当する彼は、当時弱冠十七歳の青年に過ぎない。けれど、全国数十万に及ぶ一向門徒を束ねる勢力拡大著しい新興宗門の総帥として、政治的にも軍事的にも、経済的にも絶大な影響力を誇っていた。

厳かな法衣に身を包み、若くして『証如上人』と称えられている高僧は、下座に平伏す少年を見下ろし、

「面を上げよ」

と、殊更仰々しく言った。

「…その方が、三好筑前守が嫡子千熊丸か？」

証如はじろりと、まるで睨み付けるかのごとく千熊丸を見据えた。弱冠十一歳ながら、その聡明ぶりを天下に轟かせている少年の力量を確かめるかのような眼差しを、千熊丸はにこやかな笑みで返した。

「此度、上人様が御尊顔を拝し奉り、恐悦至極に存じます。…三好筑前守元長が嫡子三好千熊丸にござります。以後、お見知りおきくださりませ」

そう言つて、再び深々と頭を下げる千熊に、証如は思わず苦笑いした。

「左様か。で、堅苦しい挨拶はこの辺りとして、用件は何だ？ ま、あえて聞くまでもあるまいか。…我らとの和睦でも、求めに参つたのである」

証如の鋭い言葉に、千熊丸は人知れず、ごくりと唾を飲んだ。ここが正念場と、彼の中に眠る闘争心は、めらめらと燃え上がってきた。

「如何にも、左様です。晴元公は上人様との和睦を求めておられませ。…これ以上、無益な戦を続け、双方互いに犠牲を出すだけなら、和議を結んで、互いに末永い平和を模索したほうが得策だと、私も思います」

と、千熊は言う。

「なるほど。…だが、残念なことに、我らはこの戦を無益なものとは思つておらぬ。親鸞聖人が目指し、蓮如上人をはじめとする歴代の法主たちが夢に描いた理想の浄土を作り出すための聖戦なれば、和議など結ぶ必要性はない。一挙に細川殿を叩き潰して、我らの手で天下を取るのだ」

証如はそんな風に言いながら、からからと笑った。

「聖戦、でございますか。…ま、あえて否定はしますまい。されど、上人様。ここで晴元公を滅ぼし、細川政権を潰すことで、真の浄土が作れると、本気でお思いですか？」

「無論だ」

「…左様ですか。ならば、あえて申し上げましょう。今、晴元様を倒して、上人様が実力で天下を望まれるなら、天下は麻の如く乱れ、浄土とはかけ離れた地獄が、この世に生み出されるでしょう」

「…」

「その根拠はいくつもあります、一つずつ挙げていきましょう。まず一つ。即ち、もしも一向宗の勢力が急速に広がって、天下に大手をかけるような勢いを得れば、法華宗だけでなく、延暦寺、興福寺、東大寺といった諸寺が黙って、御寺の隆昌を見守るはずがありません。彼らとて膨大な信徒を持つている強大な宗教勢力なれば、泥沼の宗教戦争が勃発することはまず間違いありません」

そんな風に言つてのける千熊丸に、証如は思わずたじろいだ。

これが十一歳の子倅の発言なのだろうか。その一言一句、いちいち理に適っていて、全く反論の余地もなかった。確かに本願寺が勢力を広げれば、他宗派との対立は激化するだろう。

しかし、その程度で言いくるめられるほど、証如も甘くはない。

「例え泥沼の戦になるうとも、我らは必ず勝つ。なぜなら、我らの目指す道こそ正しいからだ。多勢の犠牲を出そうとも、その先に誰も心安んじて暮らせる浄土の国があるのなら、多くの死も、決してただの無駄死にはない」

それはさながら開き直つたかのごとき言であつたが、案外これこそが証如や蓮淳といった本願寺高僧の紛れもない本音であつたりした。

「左様ですか。ならば二つ目の根拠を挙げましょう。…それは、まがりなりにも各地の群雄たちを束ねて、畿内に安定を生み出している細川政権が倒れば、数多の如き群雄たちが、次の覇権を巡って激しい抗争を繰り広げることになります。宗教戦争に、群雄たちの勢力争いも重なるとなれば、畿内は、まさに地獄と化します」

「それがどうした。どれほどの地獄になろうと、その先に天国があるなら、どんな非道も許されよう」



すかさず返す証如は、勝ち誇ったような顔をして、にんまりと不敵な笑みを漏らした。

「なれば、あえて申し上げますが、上人様は、後の世のことばかり仰られますが、今の世に浄土は必要ないと思し召されるのか？」

「……」  
「今生きる人々にも、浄土を生きる権利はあります。今は地獄でも、その先に幸せがあるなら、今の地獄には目を瞑る。そんな考え方では、いつまでたっても地獄しかありません。…上人様にお聞きします。多大な犠牲を強いた上に、どんな天国が出来上がるのでしょうか？ 無数の骸の上に、どんな浄土があるのでしょうか。人が死ねば、そこには悲しみと憎しみがあるだけで、それ以上の、何一つ建設的なものは生み出しませぬ。生まれた悲しみ、怒り、憎しみは、復讐と言う形で、更なる悲劇を産む。結局、その連鎖を繰り返すだけ。そのどこが浄土なのですか？」

「……」  
「親鸞聖人、蓮如上人らが目指し、夢見た国とは、悲しみと憎しみに満ちた、復讐のみが延々と繰り返される地獄ですか？」

之長、長秀、元長と、三代に渡って悲劇的末路を繰り返してきた三好家の棟梁たる千熊丸だからこそ言える鋭き台詞に、証如は返す言葉がなかった。

証如はちらりと、側に控える蓮淳のほうを振り向いた。事実上、本願寺一門を支配しているこの老僧は、腕組み、目を閉じたまま、何も言わなかった。

「和睦案についてですが、細川家は今後一切、御寺のことには口出ししない。この御城についても、もしも資金が入用なら、細川家よりいくらか援助いたしましょう。加賀の支配も公認いたします。その代わり、御寺も我らに対し、攻撃せぬことを確約していただきます。いのです。和睦が締結されれば、その日より、全軍の撤退を始めます」

と、全く絶妙な間合いで具体的な和睦交渉を切り出した康長を、

千熊は頼もしそうに見つめていた。一方の証如も、苦りきったような顔をしながらも、それを無碍に扱うことはできなかった。

「…和睦のこと、決して悪いようにはするまい。だが、千熊殿。一つ聞かせていただきたい」

と、観念したような顔をして言う証如に、千熊は下げた頭をゆっくりと上げた。

「その方の父を殺した我らが言うのもなんだが…、そなたは、何ゆえ晴元殿に従うのだ？ 何ゆえ、筑前殿が殺されたときに、拳兵しなかったのか？ 何ゆえ晴元殿がために、こんな危うい任務を引き受けたのだ？」

一つ、と言いつつ、気がつけば二つも三つも尋ねている自分に苦笑いしながら、彼は不思議そうに首を傾げていた。

「…そうですね。いろいろ理由はありますが、一言で言うなら、それがしも、仮初にも多数の家臣を束ねる主君ですからね。その責任感、でしょうか」

「責任感…」

「はい。私の肩の上に数千の家臣たちの命が乗っかっているのです。些細な恨みなど忘れ、前向きに生きるしかありませんまい。過去ばかり見ていると、仕方がないのです。…確かに父上のは悲しくはありますが、私は父上ではありません。父のことに囚われて、私自身の可能性を潰したくない、というのも晴元様に尽くす理由の一つかもしれないせぬ」

そんな風に飄々と言つてのける千熊の颯爽とした態度に、証如はただ呆然と、啞然としたように、ぽっかりと口を開いたまま、「はは」と苦笑いした。

「ま、よかろう。和議のことは、快く引き受けよう。これでもわたしも仏門に生きる男。御仏にお仕えする我らが、無益な殺生を強いては、門徒どもに示しがつかんよ」

そう勢いで言つてのけた後に、証如は少なからず後悔した。もっと交渉の余地はあったのではないか。和睦案を呑むにしても、この

状況で快諾した自分の判断は正しかったのか…。

けれど、ひとたび口にした以上、前言撤回するような大人気ない真似はできなかつた。証如とて僧侶である前に男なのだ。男に二言はない。

案外あつけなく、しかし見事に和議を纏めた千熊丸は、意気揚々、さながら凱旋將軍の如く、晴れ晴れとした出で立ちで、石山御坊を去っていった。

その果てしなく大きな背中を眺めながら、証如はふうと小さな溜息を吐いた。

「和議など結んで、よかつたのでしょうか」

勢いで言つた手前、証如には余り自信がなかつた。結局千熊丸の弁舌にすっかり乗せられてしまつただけのような気もする。彼は恐る恐る、さながら叱られるのがわかつている子供の如き顔をして、大叔父蓮淳のほうを見つめた。

「悪くない」

蓮淳は、そう言つて、証如の肩をぽんと叩いた。

「ま、千熊とか申す餓鬼が、あれほどの弁舌能力を誇つていゝとは思わなかつたが、ともかく、和議は我らにとつて規定路線だ。…博打は、常に引き時が肝心。これ以上やつて、万一細川政権が潰れれば、あの餓鬼が申したように、法華だけでなく、あらゆる宗門を敵に回す破目となりかねない。…今はとにかく力を蓄えるべきだ。細川に我らが力の程を見せ付けることが出来た今、徹底抗戦は無用」

「…さ、左様ですか」

証如はほつと、安堵の余り大きな溜息を吐いた。蓮淳は、そんな彼を見て、彼とは違う溜息を吐く。

そんな二人の溜息が入り混じる中、激しさを増した石山攻防戦は、千熊丸と三好衆の声にはならぬ歓声のみ残して、ひっそりと幕を下ろした。

【雌伏編】第015章 元服

またそれから幾日が過ぎて世界は全く七月色に染まっていた。

本願寺との間に和議が成立し以来一ヶ月。別段何が変わったというわけでもなく、日々は相変わらず単調に流れていたが、この一ヶ月間、都にあつて天下を極める細川晴元の栄華は確かに素晴らしいものがあつた。

しかしながら……。

本願寺と和議が成立したからといって一向一揆なるものが完全に収束したわけではない。法主証如の意に従おうとはしない過激な門徒たちも大勢いるわけで、彼らは今もなおあちこちに蛮拗して細川政権と対峙する道を目指していた。

けれど、法主証如率いる石山御坊を中心とする本願寺教団が組織立って一揆を行うというとはなくなつたから、一部過激派が主導しているに過ぎないあちこちの一揆勢など強大な細川政権の前にはさしたる脅威でもなかつた。晴元にしても、彼らが蜂起するたびに各個撃破していけばよく、確かに面倒ではあるが一揆の発生を理由に各地の諸大名の内政に介入できるようになるなど、政権の地方支配力は格段に高まることになつたから満更悪い話ばかりでもなかつた。

八月一日。

三好千熊丸は元服した。

烏帽子親は晴元が務め、烏帽子名も晴元がつけた。即ち、千熊丸は元服と同時に、人質としてではなく、正式な細川家の被官として晴元に仕えることを認められたというわけであつた。

無論、元服し、細川家の部将になつたからといって彼が国許に戻れたわけではない。ただ頻発する一向一揆の鎮定を命ぜられたとき

などは、国許より軍を呼び寄せ、畿内の各地を転戦する、というようなことは度々あった。

何はともかく、千熊丸は齡十一歳にして元服を済ませ、その名を『孫次郎利長』とした。利長のうち、長は三好家累代が受け継ぐ伝統ある通字であり、利については、利発な彼を表すに相応しき文字との理由で、晴元がごり押ししたものだっただけだ。

かくて三好孫次郎利長となった彼は、晴元の推挙により従五位下伊賀守に任ぜられることとなった。

「できれば筑前守がよかったよ」

孫次郎利長は度々そんな愚痴をこぼしている。

「筑前守はわが三好家の当主が代々受け継いできた伝統ある官位ですからな」

相も変らぬ主君の様に、呆れたような顔をして岩成主税助友通は言った。

今、三好孫次郎は、摂津下郡で発生した一向一揆を鎮圧すべく手勢二千を従えて出陣していたのだが、これがまた実に弱いのである。欠伸が出るような退屈な戦を終えて帰路につく途上で、そんな愚痴を心の置ける側近たちの前でばやいていたのだった。

「元々は晴元様も筑前守を御認めになつていたようですが、越前殿の猛反対を受け、やむなく伊賀守で収まったそうです」

と、孫四郎長逸が言った。

「また越前殿か……。全く、あの御方ときは、未だ宗家の家督を狙っているのか？ 無駄なことを」

岩成主税助は憤懣やるかたないといった顔をして、溜息混じりにそうばやいた。

三好家中の者たちにとって、三好越前守政長は天敵以外の何者でもない。先君元長を滅ぼし、孫次郎利長を苦しめ、今もなお宗家の家督を狙っている途方もない仇敵だった。当主たる孫次郎が半ば人

質に近い状態で晴元に近侍しているがゆえに、家中の過激派も辛うじて耐えているが、そうでなければ政長を殺し、先君の恨みを晴らしてやると公言している者は一人や二人ではなかった。

だから、家中の者たちは、今回の除目で分家の当主に過ぎない政長が孫次郎と同じ従五位下に任せられたことすら許せないのだった。「ま、いちいち気にしても仕方ない。今のところは伊賀守で満足しておくべきなのだろうな」

などと言って、孫次郎利長は逸り立つ諸将を制して「ははは」と高らかに苦笑いした。

九月六日。

またしても一揆という。芥川山城の晴元の下にも急報が届き、彼は早速、三好孫次郎利長を呼び寄せると、例によって城下に駐屯している彼の手勢に討伐を一任したのだった。

「またも出陣だ」

城下の三好屋敷に戻ると、孫次郎は困ったように溜息を吐いた。

「今回の一揆勢はなかなか強大らしく、既に越水城を奪い、そこを根城に勢力を増大しているという」

そんな孫次郎の言葉に、居並ぶ群臣はどれもいきり立つ戦意をその全身に滾らせてニタニタと笑っていた。

秋風がそよそよと舞う。未だ厳しい残暑を振り払うように孫次郎は外に出た。

彼は、余り戦というものが好きではない。響き渡る喊声。それ自体は決して嫌いではなかったが、その後に必ず付属する悲鳴や絶叫が嫌だった。殺し、殺され、ただそれを繰り返すだけの戦いに何の意味があるのだろうか。戦いのたびに彼はそう思う。

だが、戦国と呼ばれる世界に、大名家の嫡子と生まれた以上、戦いを避けることは許されない。しかも、今の自分は紛れもない当主として数千の家臣を守らねばならぬ立場にある。

孫次郎はぼんやりと空を見上げた。これから自分はどうなるのだろう。どうすべきなのか。とりあえず今のところは晴元の命に従い、兵を率いて過激な一向門徒どもを退治せねばなるまい。

だが……。

いつまでもこんな境遇に甘んじているわけにはいかない。偉大な曾祖父、父の後を引き継ぎ、三好の総帥となった以上、少なくとも昔の如き勢威を取り戻さなければならぬ。亡き父の恨みを晴らし、父が抱いた夢を実現に導かねばならぬ。戦は嫌いだ、などと甘いことを抜かしている暇はないのである。

「何はともかく、敵は倒さねばならぬ」

と、一人小さく呟きながら、彼はまた部屋のほうへと戻っていった。そして、居並ぶ諸将に対し出陣命令を下したのだった。

九月二十三日。

この日、三好軍を主体とする細川軍五千余騎は、越水城を包囲し、立て籠もる一揆勢と対峙した。

孫次郎は聳え立つ越水城を見上げると、

「はあ」

と、いつものような溜息をボソツと吐いた。

「申し上げます。城に立て籠もる一揆勢は、およそ一千から二千の間と思われます。…ただ、内部では主導権を巡って対立も発生しているらしく、案外容易く攻め落とせるものと思われます」

そんな報告に耳を傾けながら、孫次郎はにっこりと微笑み小さく頷いた。

で、早速評定を開くと、案の定、

「総攻撃あるのみ！」

と、声高に主張する主戦派が圧倒的多数を占めていた。一揆勢に細川軍の強さを思い知らせ、今後の見せしめにするのだとする考え方であったが、肝心の総大将格である三好孫次郎にそのつもりはな

かった。

「こちらが優位にあるなら、あえて攻め寄せて犠牲を出す必要性はない。降伏勧告の使者を出し、平和裏に勝利を掴むべきだ」

と言つて、彼はいきり立つ諸将を制した。

それでもなお、主戦派は圧倒的な勢いを保っていて、孫次郎の示した方針を素直に受け入れようとはしなかったが、何はともかく形式的に降伏を勧告するぐらいは良からうと言う岩成主税助の意見もあつて、彼らはようやく納得したのであつた。

結局、一揆勢は形だけの降伏勧告に応じる形であつけなく開城した。やはり一揆方も怖かつたのだらう。絶対的な死を前にして臆したに違いない。それが人間として当たり前の感情なわけで、降伏勧告を強行した孫次郎としてもいくらか気分は良かった。死にたくない、生きたいと思つている人間を殺すことほど後味の悪いものもない。

兎にも角にも一揆軍は降伏した。主戦派諸将にとつては、悔しくはあつても、降伏した相手を滅ぼせ、などとは言えない以上、この結果を素直に受け入れるより他に仕方がなかつた。

ただ、細川軍を構成する豪族の一人たる伊丹親興などは、

「伊賀殿（孫次郎）は甘すぎる。これでは、一揆どもの根絶は不可能だぞ」

と言つて、腹立たしそくに孫次郎の本陣を後にすると、逃げるように自らの陣へと戻つてしまった。そんな彼の後姿を眺めつつ「これでよいのだ」と、孫次郎少年は一人心中の中に力強く何度も何度も頷くのであつた。



【雌伏編】第016章 出会い

九月も過ぎ、十月を越え、気づくと十一月になっていた。

夏が終わり、世界はゆつくりと、しかし確実に、秋から冬へとその姿を変えていった。けれど、そうした季節の移り変わりを味わう余裕一つない少年は、この日も、忙しく敵勢を叩き潰し、疲労困憊といった様子で、芥川山城に帰還していた。

三好千熊丸から、三好孫次郎利長となって以後の彼は、ただの人間質から、堂々たる細川家の部将になった。しかし立場や身分が変わった分だけ、いや、それ以上の仕事で、彼の小さな身体の上にはずしりとのしかかってきた。

倒れないのが不思議なくらいだと、孫次郎は呆れたように、案外頑丈な自分の身体を眺めていた。

十一月も終わりを告げんとしていたある日。

例によって、孫次郎利長は、手勢を従えて一向一揆討伐の戦いに臨み、かついつもの如く、あっさり勝利を掴み取っていた。

手応えがなさ過ぎる。

孫次郎は退屈そうに大きな欠伸を一つつくと、ひっ捕らえられてきた首謀者を本陣に引見した。これもまたいつものことで、殺すか殺さぬかは、全て彼の胸一つだった。

「既に証如殿は一揆すべきではないと、幾たびもお命じになられている。それなのに、何ゆえその方らは、何度も一揆するのだ？」

彼は、常にそう尋ねることになっていた。その返答次第で、処分の程度を決めるのである。即ち、孫次郎の眼鏡に適えば無罪、とは言わぬまでも大幅に減免されるが、適わねば例外なく死罪だった。

彼自身、ここ半年近い連戦で、いつしか死に対する考え方ががらりと変わってきたようで、昔の如く、いちいち生き死にのことで迷

つたり、逡巡したりはしなくなつた。殺すべきは殺し、生かすべきは生かし……といった具合に、無闇な人殺しはしないが、だからといって人殺しそのものを躊躇うことはなくなつた。

「なぜ一揆するか、だと？ ふざけたことを抜かすな。今の世に溢れる害毒を悉く洗い流さねば、我らが夢見る浄土の国など、生まれようはずもない。……見る。そして聞け。我ら農民がどれほど厳しい生活を強いられているか。常に法外に高い年貢を取られ、払えねば殺される。不作だろうと凶作だろうと、年貢の額は変わらんばかりか、逆に戦費がかかるからだの、いろいろ理由をつけては増える一方だ。わが村の者で、何人が餓死したか知っているか？ どれだけの子供を山に置き去りにして、殺してきたか知っているか？ そのたびに、そうせざるを得ぬ親たちが、どれほど悲しい思いを強いられてきたか、お主に分かるか！」

首領格の坊主は、それまで堪えてきたあらゆる怒りや憎しみを、一拳に吐き出すかのごとく孫次郎にぶつけていた。

一向一揆がなぜ起こるのか。その理由を、彼らははっきりとした口調で、こう言った。

「我らとて、できれば一揆など起こしたくない。だが、貧しさの余り、日々生きることすら叶わぬ貧民には、こうするより他に仕方がないのだ！」

孫次郎は首領格の僧侶ともども、ひつ捕らえた全ての者たちを釈放するように命じると、後は誰一人寄せ付けず、一人本陣の奥深くに籠って静かに考え込んでいた。

貧しいから、一揆は起きる。確かに論理である。けれど、孫次郎には、その肝心の貧しさがどれほどのものが分からなかつた。如何に父を殺され、人質として苦難の日々を過ごしてきたとはいえ、大名家の世子に生まれた彼は、本格的な困窮というものを経験したことはない。食べようと思えばいつでも食べられたし、人質時代も

贅沢さえ言わなければ、食事に不自由することはなかった。

「……民が満足に食べていけるようになれば、一揆などという物騒な問題は起きなくなるわけだ」

孫次郎がその答えにたどり着くまでに、それほどの時間はかからなかった。ただ、そのためにどうすればよいのか。それは僅か十一歳の子供に過ぎない彼には、どうにもわからぬ問題だった。

またも一揆が起きたというので、早速孫次郎は兵を率い、急行した。

駆けつけてみると、一揆というよりは、ただ奉行所の周りを数百人の村人が取り巻いて、なにやら騒動が起きているだけのようであった。一向宗ともさして繋がりがあろうには思えず……、という報告を受けた孫次郎は、すっかり拍子抜けといった様子で大きな溜息を吐いた。

「問題の発端は、傲慢な役人たちの横暴な振る舞いにあつたようですよ」

と、斥候に出していた家来は言った。

「よくありがちな話ではありますが、役人たちの一部が商家に押し入って略奪行為に走つたり、あるいは器量のいい町娘などを見つけたらびに強引に拉致したりしていたようです。何かにつけて御所様御直参であることを誇り、威張つて、逆らう者は容赦なく殺していたそうです」

そんな斥候の報告に、孫次郎はその整った顔立ちを醜く歪めた。こみ上げてくるどうしようもない怒りに、身体がぶるぶると震える。自分の力でなく、晴元の威を借りて威張っているという点も、彼の怒りを買つに十分だった。

「……とりあえず村に行こう。とりあえず何かできることがあるやもしれん。揉めているなら、俺が何とかしてやる！」

兎にも角にも、気を取り直し、孫次郎は全軍に対して引き続き進

軍命令を下した。

で、孫次郎率いる五百騎の三好軍が村に到着した頃には、既に空は灼熱にも似た夕焼けに包まれていた。西の彼方に沈みゆく太陽をぼんやりと眺めていると、その瞬間、甲高い、悲鳴の如き絶叫が辺り一帯を切り裂くように響き渡った。

「な、何事だ？」

と、孫次郎が尋ねると、家臣たちもそれぞれきよとんとした様子で、不思議そうに首を傾げていた。

「申し上げます！」

そこに、慌しく駆け込んできた使番は、素早く孫次郎の面前に頭を下げると、

「農民たちの強訴に業を煮やした奉行所の連中が、片っ端から農民たちを拘束し、それに反発した農民たちとの間で小競り合い状態となつているようです」

と、言った。

その後、相次いだ続報は、どれも第一報と同じ事を告げていた。

孫次郎は困ったように頭を掻きながらも、とりあえず何とかせねばなるまいと、とるものもとりあえず馬に跨ると、騒動の中心地へと駆けていった。

騒動は村一帯に広がって、どうしようもない大戦争へと発展していった。

完全たる暴徒と化した村人たちは、鍬だの鋤だの持ち出しては、奉行所の手勢と激突した。数においては圧倒的に勝る村人たちであるから、一人の官兵を数人で袋叩きにしたりした。

そんな具合に、次第に官軍を圧倒して、優勢となつていった村人たちは、やがて奉行所そのものを包囲して、

「代官を出せ！」

とか、

「皆殺しだ！」

といった物騒な大音声を張り上げながら、その燃え上がるような戦意をさらに熱く滾らせていた。

そんなところに、孫次郎利長率いる三好軍が殺到したのである。

総勢五百騎に達し、かつ歴戦を潜り抜けた精鋭揃いの彼らにとつて、村人など大した敵ではなかった。

「敵だ、敵襲だ！」

と、村人たちが騒ぎ始めた頃には、もう遅かった。三好軍は、まさにあつという間に彼らを蹴散らして、陸の孤島と化していた奉行所を救い出してしまったのである。

「他愛無いな」

孫次郎はそんな様を眺めながら、いつもと変わらぬ溜息を吐いた。とりあえず全軍に対して無闇な殺生を禁じつつ、意気揚々、勝ち誇ったような笑みとともに奉行所に乗り込んだのだった。

その翌日。

孫次郎は騒動の責任をとらせる形で、役人と村人双方の代表に謹慎を命じると、騒動の原因となった横暴な役人たちを片っ端からひっ捕らえ、その全てに例外なく死を与えた。こうして兎にも角にも一連の騒動に決着をつけた彼は、巡察と称して家臣たちを伴い、村に出向くと、そこで哀れな孤児と成り果てた少女と出会ったのであった。

「そなたはどうしてそこに蹲っている？」

と、孫次郎は問う。そこには、全身を土色に染めて、見る影もなくやつれ果て、かつ流す涙もなく、ただ声だけで嗚咽している哀れな少女がいた。

少女は声もなく、ただ孫次郎を見上げていた。無理もない。完全武装した数十人の精兵を従え、いくら十一歳の少年といえど、立派な甲冑に身を包んでいる彼を見て、驚かぬはずもない。

「親は？ 家族は？」

そんな彼女の気も知らず、ただ純粹に尋ねる孫次郎に、少女はただ怯え、震えていた。後ずさりして、なにやら本能的に命の危険すら感じていたらしい。そんな怯えきった彼女の顔を見て、孫次郎は心外そうにハアと大きな溜息をついた。

「とにかく、こんなところでは風邪を引くぞ。……とりあえず、陣屋に運べ」

と、彼は側に控える配下に命じた。「ですが……」と、当然のように戸惑い、躊躇う家臣たちは、助けを求めるように、再び幼君の顔を見た。

「ここで出会ったのも、何かの縁だ。とりあえず、運べ。これは命令だぞ。主命だ！」

若き主君は、家臣たちの躊躇などお構いなしといった様子であった。いつになく厳しい口調で命じると、家臣たちも渋々少女を抱き上げ、陣屋のほうへと走っていった。

【雌伏編】第017章 少年と少女

少女はしばらく怯えて、数日は名すら明らかにしなかった。

一方、孫次郎も村に留まって、しばらく占領軍政に力を注いでいたが、十二月に入った頃、晴元の命により芥川山城に伺候すべく、村を去らねばならぬようになった。

とはいえ、その頃になると、既に少女も心を開くようになっていて、孫次郎とだけは気さくに話したりすることも多くなっていた。

連日のように、孫次郎少年は少女の下に足を運んだ。何となく気になる、といった程度之感覚でしかなかったが、今までに感じてきた思いとは何か違うような気もした。

何はともかく、少女は微かに笑うようになった。そして、何より喋るようになった。

「私の父も母も、死にました」

言いづらい記憶。封印したい過去。分かっているが話さずにはいられない少女と、聞かずにはいられない少年。何とも言えず気まぐずい雰囲気が流れ、少年は、ただ小さく「そうか」とだけ言った。

「ま、俺の父ももういない。…案外、似たもの同士かもしれないね」と、孫次郎が言っていると、少女はクスツと微笑み、「そうですね」と言った。

彼女は、自らを静と名乗り、ゆえに孫次郎は勝手に『静御前』の生まれ変わりだなどと騒いでは、「御前」と嬉しそうに呼んでいたのだ。

「で、御前。そなたは父母もなく、家族もなく、となると、これからどうやって生きていくつもりだ？」

孫次郎はじつと、静の顔を見た。そのいつになく真剣な眼差しから、彼女は困ったように目をそむけた。

「頼る身寄りもないというなら、俺の下へ来い。…ま、俺もこれでも一国の主だからな。女子一人どうにかならぬものでもない」

「…よろしいのですか？」

「よい。俺は泣く子も黙る殿様だぞ。これくらいの我侭は許されてもよかるう」

と言つて、ぽんと胸を張る彼に、静はクスクスと笑った。

孫次郎の思いつきは、当然のように群臣の猛反対に遭った。

相手の身分が悪い、というのが家臣たちの反対の大部分を占めていたが、その程度の理屈で言い負かされてしまうほど、この少年は甘くなかった。

「お主たちは、俺にどういふ殿様になつてもらいたいと思つているんだ？ 困つている人を、助けられる立場にありながら、むざむざ見殺しにするような非情な主君になつてもらいたいのか？ もしそう言つたら、なつてやるぞ。だが、そうなつてしまったとき、俺がどういふ人間になるのかは分からんぞ。血も涙もない、史上最悪の暴君となつて、お主たちに仇名すようになるかもしれん。そうなつても、そのときに文句を言つなよ」

と言つて、家臣たちを脅しにかかるのである。

弁舌力では、家中広しといえども、孫次郎に敵う者はいなかった。これまでもこの力で、幾度となく危機を乗り越えてきた彼なのである。

「ま、お主たちが心配するようなことはない。彼女は、いふなれば友達だ。だから案ずるな」

そんな風に言つて高笑いする彼を、家臣たちは困つたように見つめていた。

女子というものに、元来それほど興味があつたわけではない。



十一歳というのは、年頃的にも微妙である。異性というものを全く意識しないわけではないが、しかしまだ幼さを残している。異性を異性と意識しつつ、一方ではまだ互いに等しい存在だと信じていた。

孫次郎は、そういう意味では決して大人びているわけではないから、異性に対する興味関心は、そこそこにしかない。それに、日々戦陣に暮らしているような彼は、女子と出会う機会すらないのだ。そんな彼が、まがりなりにも女子に興味を示したのだから、家臣たちとすれば、ただ温かく見守るより他に仕方がなかった。

それからしばらくの間、戦らしい戦は鳴りを潜め、天文三年（一五三四年）になった。

この短くも確かな平和は、孫次郎にとっては、父が死んでから、初めてと違っていい楽しく、愉快なひと時となった。日に日に明るさを取り戻す静と過ごす時間は、何より面白かった。だから、仕事が終われば、彼は毎日、彼女の下に通った。その日のことを話したり、昔の話をしてみたり、囲碁、将棋……。会えば二人は、いろいろなことをして過ごした。

孫次郎にとって、静はいつしか動かし難い親友になった。無論、彼自身の感覚としては、それ以上でも以下でもないが、二人の親密が深まれば深まるほど、周囲は彼らの関係を当然疑う。中には、実質的な側室と見る者も出るほどで、

「この調子なら、案外早いうちに御世継ぎも生まれるやもしれぬ」などと、随分気の早い話をしている家臣たちもいた。

孫次郎は、今や晴元の信任厚い側近である。

まだ幼いが、しかし様々な経験を積み、一面では大人以上の大人であったりする。智勇に秀で、機転が利く。何より、晴元をずっと支え、今の地位まで押し上げた功臣中の功臣、三好筑前守元長の跡継ぎでもある。元長を殺したことを、未だ気に病んでいる晴元にと

つて、孫次郎を重用することは、せめてもの償いだと思っているら  
しかった。

晴元政権は日増しに強大化して、晴元自身、既に並ぶ者なき圧倒  
的な権力者になっている。朝廷は彼に対して細川宗家当主が代々世  
襲してきた右京大夫の官職を与え、従四位下の位階も授けていた。

「お主、静とか申す娘にすっかり入れ込んでいるようだな」

晴元は、ニタニタと楽しそうに笑って、恥ずかしそうにはにかむ  
孫次郎を見た。

「ま、お主が女子に入れ込む気持ちは分かる。余も女子には目がな  
いほうだからな。…だが、時と場を弁えろよ。今は確かに平和だが、  
いつ何時、一向門徒どもが兵を挙げるとも限らんからな」

などと言いながら、晴元は豪快に高笑いした。

またそれから幾日かの歳月が流れた。

天文三年は八月。

即ち八月十一日、一向門徒たちが再び拳兵し、摂津の棕橋城くらはしきょうじを拠  
点に精力的な活動を開始したとの報告が、芥川山の晴元の下に届い  
たのである。

それまでずっと沈黙していた門徒たちの、性懲りもない暴走に、  
晴元はすっかり頭を抱えてしまった。いつになったら終わるのか。  
どうしたら終わらせられるのか。終わりの見えぬ戦いの繰り返しは、  
強勢を誇る彼にしてもどうにもならぬ難題だった。

「伊賀守。此度の賊徒どもは、余自ら退治することとする。その方  
は余の補佐として従い、余を支えよ」

と、晴元が言えば、家臣としての孫次郎に異を唱えることは許さ  
れなかった。

「御所様が仰せに従います」

だから、彼は恭しく頭を下げ、準備のためとして主君の御前から  
引き下がった。

三好屋敷に入った彼は、そこで、長らく続いた平和が終わったことを、静に伝えた。

「また出陣することになった」

と、彼が言うと、静はすっかり大人びた笑顔で、

「わかりました」

とだけ言った。良人を見送る妻の如き顔をして、深々と頭を下げ、る彼女に、孫次郎は思わず苦笑いした。

「戦ゆえに、死ぬことになるやもしれんが、そのときは、国許にいる弟の千満丸を頼れ。無論、死ぬ気は更々ないが、万一というときもあるからな」

「：全く縁起でもありませんよ。ですが、千満丸様ですね。分かりました。覚えてきましょう」

静はにこりと微笑み、そして大きく頷いた。

「そうだ」

殊更大きく頷き、そして少し悲しげな顔をする彼女の眼前に、ゆつくりと腰を下ろした。

「ま、俺は死なんよ。というより負けない。父の恨みを晴らし、父が夢を果たし、俺の目標を実現するまでは、俺は死ねない」

と言つてにっこり笑う彼に、静は変わることなき笑みを浮かべて、何度も「そうですね」と頷いていた。

八月四日。

従四位下右京大夫細川六郎晴元を総大将とする、総勢二万余騎の大軍は、一路摂津棕橋城を目指して進軍を開始した。

三好伊賀守利長や、三好越前守政長、木沢左京亮長政、細川播磨守元常ら晴元配下の有力な重臣たちが一堂に会した、そうそうたる大軍団は、それだけで今回の出陣に晴元がどれだけ力を注いでいる

か、誰の目にも一目瞭然だった。  
そして…。

八月十一日、細川軍は椋橋城を取り囲み、翌日より総攻撃が始まった。熾烈な攻防戦が延々と繰り広げられた後、九月に入って間もない頃に、ようやく陥落した。

けれど、これで戦いそのものが終わったわけではなかった。椋橋城を脱走した者たちや、さらには別の一向勢力が合流を重ねた挙句、彼らはこちらで蜂起するようになった。

【雌伏編】第018章 孫次郎謀叛

三好孫次郎利長は窮地に追い込まれていた。

椋橋城が陥落するかしらないか、その瀬戸際にあつた八月末頃のことである。

城を包囲する細川軍に、突如として噂が流れ出した。誰がいつ頃流しだしたのかは定かではないが、しかし、それは孫次郎をして窮地に追いやるに十分すぎる威力を誇っていた。

「孫次郎が、謀叛だと？」

晴元は一通の文をぎゅっと握り締めると、わなわなと震えた。

「伊賀殿の陣中より城方へ文などやり取りしている姿を、何人もの兵が目撃しておりますれば、あながち誤報とばかりもいえないと思われませう」

と言うのは三好政長で、彼はここぞとばかり、孫次郎を追い詰めるべく必死の讒言に励んでいた。

「だ、だが、孫次郎が余に楯突くはずがない。余と奴は、今や水魚の如く親密な間柄だ。さながら、劉備玄德と諸葛孔明の如しじゃ」

晴元は必死に反論するが、しかしその口調に力はなかつた。

元来、晴元という人は優柔不断である。その上、猜疑心が強い。

孫次郎を信じる気持ちと、よもやと思う気持ちと、彼の脳裏で激しく対峙している。筑前守元長を滅ぼしたときもこうだった。そしてひとたびこうなってしまうと、必ず膨れ上がる猜疑心に負けてしまう。それも晴元という人の生まれ持った拭いがたい性格であつた。

「されど、先の本願寺との和議締結以来、証如と伊賀殿は親密な関係を維持しております。また、今回の一揆の背後には、これまで矛を収めていた証如が暗躍しているとの噂もありますれば、ゆめゆめ油断なさりませぬように」

と、政長は迷い、悩む主君に、まくし立てるかの如く言い切つた。こういふ男には、強く言つて聞かせるのが一番だということを、政

長は本能的に察しているらしかった。

全ては稀代の陰謀家、三好政長の策略なのだが、晴元にそこまで見抜ける力はない。

早速、政長に言われるがまま、彼は孫次郎を引見し、その弁明に耳を傾けた。けれど、人間というものはひとたび疑ってかかると、どれほどの言い分を聞こうとも、姑息な言い訳の如く聞こえ、ついには真実を見抜く力を殺いでしまう。

晴元の場合、政長に散々、

「孫次郎謀叛」

と、刷り込まれ続けていたし、孫次郎がどれほどまともな弁明をしようとも、

「既にこれだけの証拠がある。それでも白を切るか？」

政長はそう言うって無数の“証拠”なるものを提示し、彼の反論を封じ込めてしまったので、ついに晴元も孫次郎謀叛説を真実と認めてしまったのである。

この辺り、晴元という人の精神的な弱さが明確に現れたといえる。拳句、こうだと決め付けてしまうと、なかなか冷静にはなれない人なので、

「孫次郎め。余がどれほどの恩義をかけてやったかも忘れ、本願寺と結びつき、謀叛するとは、何たる奴だ！」

と、すっかり彼を謀叛人と決め付けた上で、怒り心頭に達しているといった様子だった。

やがて棕橋城は陥落したが、それでも晴元の不審は消えなかった。孫次郎も、晴元周辺がきな臭い雰囲気に含まれていることを知っている。孫次郎自身は、ひたすら恭順の意を示して、どこまでも彼への忠誠を尽くす構えを崩さなかったが、彼の配下たちにしてみれば

ば、そういうわけにもいかなかった。

「御所様が我らを疑われるなら、もはや御所様に忠誠を尽くす必要などあるまい。元々、御所様は、先代元長様を殺した憎むべき仇敵ではないか。いっそ、ここは先制攻撃に打って出て、我らの力の程を見せ付けてやるべきだ」

と、比較的短気な孫四郎長逸などは、そう怒鳴っていた。

「いや、逸るな。もしも御所様に兵を向けるにしても、準備は必要だろう。何しろ、ここには二千の手勢しかない。まともに細川軍と激突しても、勝ち目は万に一つもないぞ」

そう言つて猛る諸将を制するのは、三好康長であつた。後見役として、副将として、とにかく発言力の大きい彼の言葉に、孫四郎は悔しそうにだんまりを決め込んだ。

「まず、とるべき手は本願寺と同盟を結ぶ。これに尽きる。奇しくも妙な噂と同じ展開となるが、今やこれ以外に生き残る術はない」

康長はそう言つて、諸將をじろりと見回した。基本的に反論はない。強大な本願寺の支援が得られれば、孤軍たる三好軍にも十分活路は見出せるのだ。その上で、三好家が橋渡しとなる形で、一向宗と法華宗を和合させることができれば、三好・一向・法華連合は、細川政権をも凌駕する強大な政治勢力として浮上することができる。

「殿、殿は如何思し召しですか？」

おおよその議論も纏まつて、後は主君たる孫次郎利長の裁断一つとなつたとき、康長は群臣を代表して、孫次郎に奏上した。

しかし、もとより孫次郎に細川晴元と敵対する気はない。何の因果か、あつという間に、いつしか晴元と対峙する破目となつているが、できれば平和的な解決を望んでいたのである。

「殿のお気持ちは分かりますが、しかし、今やそのような悠長なことを言っている場合ではありません。：殿が御決意なされぬのなら、いたし方ありません。：後々、お咎めは受けましょう。されば、今は殿の御決断を待たず、それがしの独断専行にて話を進めさせていただきます」

そんな孫次郎の優柔不断を咎めるように、康長はぴしゃりと言いつつ切った。孫次郎がいくら、

「勝手は許さん！」

と怒鳴っても、容易く聞くような叔父ではなかった。

かくて、三好陣営と本願寺が本格的に結びつき始めると、晴元の疑いは、確信に変わった。

皮肉なもので、当初はありうるはずもなかった作り話が、皆が、真実だと騒ぎ続けた結果、本当に真実となってしまうたのである。嘘も百回真といえ、嘘も嘘でなくなるとはよく言ったものだが、陰謀を企んだ張本人たる三好政長などは、内心にこみ上げてくる悦びを押し隠すので必死だった。

「もはや伊賀殿の謀叛は確定的となりましたゆえ、芥川山城下に残してある伊賀殿の御一族は、当然、処分せねばなりません」と、政長は言う。

「…だ、だが、そこまでする必要性はあるのか？ 謀叛したのは、孫次郎一人であつて…」

「違います！ 例え、罪が伊賀殿お一人にあると、古今東西、反逆者に対する罪は、一族縁者諸共に皆殺しと相場は決まっております」

「…一族縁者諸共に皆殺しにせねばならぬなら、余はその方も殺さねばならなくなるが…」

晴元の皮肉に、政長は思わず返す言葉に詰まった。自らも三好一門なわけで、孫次郎の罪が一族に波及するなら、当然政長にも波及の手が及んで当然というべきである。

「た、確かに…、一族縁者諸共に罰するというのは行き過ぎかもしれませんがせぬ。亡き筑前守殿や伊賀守殿が果たしてきた功績を考えれば、それは非道な処置といえるやもしれませぬ。なれば、伊賀守殿及び最も近い血族姻族のみ罰するというので留めることといたしましよ



う

と、兎にも角にもびしゃりと言い切つて、晴元が反論を塞ぎきると、政長は勝ち誇つたように、にんまりと微笑んだ。後は晴元の命を待ち、腹立たしい孫次郎利長の縁者を殺害した後、孫次郎本人をも討伐して、三好家宗家家督の座を手中に入れる。

全てが彼の筋書き通りに進んでいる。だから、彼は許されるなら大きな声で笑いたかった。心の底からあざ笑つてやりたかった。孫次郎如き若造に、負けるような自分ではない。亡き筑前守元長が如く、謀叛人の汚名とともに肅清し、残つた全ては自分が引き継ぐ。

「御所様、ご英断を！ 謀叛人を野放しにしておいては、他に示しがつきませぬ。二度とかようなことが起こらぬよう、情は捨て、徹底的に処分するが肝要かと心得ます」

「…」

「御所様！」

政長に強く迫られ、ついにこの優柔不断な天下人は、その首を小さく、しかし確かに縦に振つた。

政長は素早く頭を下げ、颯爽と去つた。逐一いちいち指図を出し、孫次郎を葬り去らんとしている彼を見て、晴元は、ハアと深く大きな溜息を魂とともに吐き出した。

【雌伏編】第019章 裏切りの代償

九月。

それは未だ残暑厳しき季節である。どんよりとして、纏わりつくような蒸し暑さは、まだまだ収まる気配を見せない。

夏であつて夏でなく、秋であつて秋でない。

そんな季節の変わり目を、その肌に堪能しながら、静の方は縁台の上で一人静かに涼んでいた。

「今日の御部屋様は、変ですよ」

女中たちのそんな言葉に、静はにっこりと微笑んだ。

「何をお考えなのですか？ ……若殿様のことですか？」

ニタニタと、興味津々といった様子で、嬉しそうに笑う彼女たちに、静は「ふふふ」と、軽く笑った。

静の方も、今や十四歳になった。少女といえば少女であるし、その顔立ちや体型など、まだまだ子供の如き可愛さに満ちている。けれど、その一方で、時折見せる妖艶な表情は、大人顔負けの色気に溢れていた。子供の可愛さと、大人の美しさ。その二つを絶妙に併せ持った美少女は、じつと西の空を見上げていた。

「ですが、噂は本当なんでしょうかね？」

ふと、女官の一人が、そう言った。

「誤報よ、誤報。絶対そうに違いありませんよ。若殿様が謀叛なんて、そんなことありえるはずがないじゃありませんか」

すかさず別の女が返し、誰もが大きく頷いた。

けれど、皆不安ではある。日ごろの孫次郎利長を見る限り、彼が細川家に弓を引くとは思えなかったが、何と言つても三好家にとつて、細川家は仇敵以外の何者でもない。重臣の間には、今もなお晴元の打倒を夢見ている者も少なくないらしく、もしも孫次郎がそうした重臣たちの意に流されれば、謀叛ということも十分考えられるのである。

もしも孫次郎謀叛が本当だとすれば、当然、この屋敷に細川方の兵が迫ってくるに違いない。何しろ、ここは他ならぬ細川晴元の本拠地なのである。晴元が殺せと命じれば、その瞬間、屋敷にいる全ての者の命はない。

「気にすることはありません。…御殿様を信じるのです」

と、静の方は、居並ぶ女子たちを落ち着かすように、いつになく強い口調で言った。

けれど、静にしても不安は不安だった。

孫次郎が謀叛するとは思えない。彼が安易に重臣たちの強硬論に流されとも思われない。だが、謀叛の濡れ衣を着せられてしまったということは十分考えられるのである。

静にとって、孫次郎は今や唯一の家族だった。父母も兄弟もなく、縁者といえる縁者もない。その孫次郎の身に万一のことがあれば、もう生きてはいけない。何より、生きていく気もない。ただ、逆に自分の身にもしものことがあったとき、孫次郎はどう感じてくれるのだろうか。

空が赤い。

まるで血塗れの地獄に佇んでいるような気がして、静は不快になった。元々、夕焼けは好きではなかった。父と母が死んだときと同じ色をしている。

「御部屋様、御食事の支度ができましたが、如何なさいますか？」

静の方の身の回りを世話している志津という少女が、恭しく頭を下げる。そんな彼女たちの様を見てみると、時折自分という存在は何者なのだろうと思わずにはいられなかった。

考えてみるまでもなく、静は一年前までは貧民の娘で、日々生きることすら難しい働き日々を送っていたはずだった。さらに年貢が上がれば、遊郭に売られ、遊女として男たちに媚び諂う毎日を送る。それが自らに定められた宿命だと思い、事実、自分と同じ境遇にい

た女たちは、皆その宿命と寸分違わぬ道を歩んでいた。

しかし、今や三好屋敷の女主のような立場にあつて、多くの女性たちに傳かれている。孫次郎の実質的思ひ人という、極めて微妙な立場だが、誰もが彼女を側室と見、側室として遇している。正室のいない孫次郎の下では、側室も正室も、大した差はなかった。

「食べましょう。…ここに持ってきてください」

静はそう言つて、にっこりと微笑んだ。

食事も終わつて、日も暮れた。

静の方は、思い立つたように筆を取ると、蠟燭の明かりのみ頼りに、一通の文を書いた。

何とも言えず、不吉な予感がする。いつもは心を和ませ、暖かくしてくれる月明かりも、今では、ただ青白く、冷たい、悲しみに満ちたものにしか感じられなかった。

文は一通しか書いていない。無学のためか、字も決して上手くはない。ただ、この半年近く、懸命に学んできた成果もあつてか、とりあえず何とか書き終えた。そして、自ら表へ出向き、詰めている家臣の一人を呼び寄せると、

「これを阿波の千満丸様にお届けして欲しいのです」

と、言った。

「大至急ですよ。急いでください」

静の方の厳命に、家臣は一瞬戸惑いながらも、はつきりとした口調で、「はッ!」と、いつになく大仰に平伏し、そして頷いた。

文も書き、飛脚も飛ばし、とりあえずやるべきことを全て終えた彼女は、配下の女子たちを従えて、厳かに己が寢所へ戻つていった。そして、予め敷かれた布団の上に、ゆっくりと寝転がる。

そして、まさにそのときのことだった。

夜は深まり、空には、不気味なほどに大きな満月が、煌々と輝いている。時折ヒュウヒュウと響く風の音のほかは、何の気配すら感じられぬ、無音の世界だった。

そんな世界に、突如、殺気が漲った。

無数の男たちが、山を下り、街を走った。

「我らはこれより謀叛人三好伊賀守が一族郎党を退治すべく出陣する。女子供一人たりとも逃してはならぬ。…基本的には生かして捕らえよとの御命令であるが、反抗する者に関しては、容赦なく斬り捨てよ」

声高に轟く大音声は、無音の世界によく響いた。それはやがて、おぞましい殺気へと変わって、城と町の全てを呑み込んでいった。

彼らが三好屋敷を取り囲んだのは、それからしばらくたった後のことである。細川晴元家臣高畠伊豆守長直（通称甚九郎）を隊長とする総勢二百余の軍勢は、たちまち屋敷全土を覆い尽くすと、

「三好伊賀守謀叛之儀、知らぬとは言わさぬ。我らは御所様の命を受け、詮議のために参った。邪魔立てする者は容赦せぬ。投降する者は、命のみは助けよう」

と、高らかに怒鳴り、そして勢いよく総攻撃を開始したのだった。

勝てるわけがない。もとより、戦う気もない。

屋敷の人々は、次から次へと細川軍に降伏した。静の方自らそうするよう命じて回ったのが、案外功を奏したのかもしれなかった。戦ったところで勝ち目などないし、無闇やたらに犠牲を増やすだけである。

しかし、肝心の静の方だけは、屋敷の奥御殿より出ようとはせず、一人、女の砦に立て籠もっていた。

やがて、屋敷内をあらかた制圧した細川勢が、静の下にも殺到した。彼らはどれも、そこにずっしりと構えて、微動だにせぬ少女の圧倒的な迫力に、ただ驚き、啞然とした。

「あなた方は御所様の御家来衆ですね？」

静の問いに、

「無論だ」

と、大きく頷く高畠伊豆守であった。

「伊賀守殿は本願寺光教（証如）と結び、御所様に反逆した。それゆえ、御所様の命により、その方を逮捕する。悪く思つな」

伊豆守はにたりと笑うと、側にいる兵に向かって、顎で指示した。けれど、

「……一つお聞かせ願いたいのですが」

と言って、静はぎろりと伊豆守以下細川の侍たちを睨み付けた。

「真に、伊賀守様は謀叛したのですか？」

「無論だ！ 実際、孤立した伊賀殿を救うべく、下間兵庫率いる一向門徒の大軍が椋橋城に迫っていると聞く。これ即ち、伊賀殿が本願寺と結び、御所様に弓引いた紛れもない証だ」

「では、伊賀守様の軍勢と、御所様の軍勢が直接槍合わせしたというわけではないのですね」

「……ま、まあ、そうだが」

高畠伊豆守は苦りきったように顔を歪めると、腹立たしそうに静の方を睨み付けた。

「ならば、何ゆえ謀叛と決め付けるのです。……本願寺の策略かもしれません。なぜ謀叛と決め付けるのか。その理由をご説明ください。もし納得できるようでしたら、私は潔く投降します。ですが、もしもそうでないなら、私はここで、喉を掻き切つて死にまする！」

力の限り声高に、大音を張り上げて怒鳴る静の方の凄まじき迫力は、高畠伊豆守らを脅かすに十分な威力があった。

伊豆守は答えに困った。静は既に短刀を自らの喉にあて、いつでも死ねる構えをとっている。「殺さず捕らえよ」というのが、晴元より下された厳命である以上、伊豆守は彼女の決意と覚悟に、ただ戸惑い、そして何より焦った。

「答えられないのですね」

醒め切った瞳をして、ジトツと睨む彼女は、小さく深呼吸すると、少しずつ、しかし確かに、右手に握る短刀に込める力を強くしていった。

ぼたぼたと、真紅色の鮮血が刃先、腕を伝って、やがて地上へと落ちていった。

死とは何か。死んだらどうなるのか。

彼女には分からなかったが、けれど怖くもなかった。あの日、あの時、孫次郎に助けられるまでは、何より死が怖かった。けれど、今は違う。怖くない。目の前にある死と、今ある生が複雑に入り混じって、何が何だか分からなくなってきた。

もつと力を込める。その分だけ、流れる血も多くなった。

高畠伊豆守とその郎党は、焦りに焦って、もう何をしたいのかすら分からなくなっていた。このままでは、彼女は死ぬ。殺すなど命じられている以上、死ねば当然、命令違反として、晴元の怒りを買うことにもなりかねなかった。

「やめろ！」

いてもたってもいられず、伊豆守は飛び出した。

「やめるんだ！」

必死になつて走る。そして、静の下に駆け寄ったとき、既に彼女の短刀は、その柔首を鋭く貫いていた。

「伊賀守様……」

とだけ呟くと、彼女は静かにその息を引き取った。

【雌伏編】第020章 鬼になる

その頃、三好軍は棕橋城を占拠して立て籠もっていた。

細川軍は既がない。晴元以下一万八千の大軍は、迫る一向軍との対戦に備え、本拠芥川山に兵を引いた。

孫次郎は相変わらず棕橋城内の一室に籠って、一人静かに「南無妙法蓮華経」と唱えていた。

なぜこんなことになったのか、他ならぬ彼自身、さっぱり分からなかった。あれよあれよと言う間に反逆者とされ、しかし、気がつくくと細川晴元は大軍を伴って撤退した。

だから今、彼はここにいる。彼の知らぬ間に、三好康長、長逸、岩成友通、篠原自遁ら重臣たちが勝手に一向軍との同盟工作に励んでいるという。兎にも角にも、孫次郎は自室に閉じこもったまま、一歩とて動かなかった。全てを家臣たちに一任して、何もかもなるように任せきってしまったているかのようであった。

芥川山に戻った晴元は、そこで静の方が自決して果てたことを知った。

わなわなと全身が震える。晴元は、眼前に平伏す高畠伊豆守を睨み付けると、

「余は殺せとは言わなかった」

と、凄みの聞いた言葉を、痛烈に浴びせかけた。

「さ、されど、こればかりは致し方なく…。それがしも必死で食い止めようとしたのですが…」

伊豆守は必死になって弁明した。ただでさえ短気な晴元である。

その怒りが高まれば、死罪ということも十分にありうるのである。

「致し方ないだ？ …たわけたことを抜かすな、阿呆が。余は殺すなと命じた。なのに、死んだ。即ち、余の命を蔑ろにしたも同義



伊豆、分かつておろうな」

「……」

「死ぬ。余の命に抗う者は、誰であろうと死ぬ」

晴元は冷酷にそう言い放つと、側に控える屈強な小姓たちに目配せした。彼らは心得たとばかり、高畠伊豆守長直を庭先まで引きずり出すと、おもむろに刀を抜き払い、大仰に構えた。

「お、お待ちください！」

そこに、慌てた様子で駆け込んできたのは、三好越前守政長であった。

「なんだ？ 越前、よもやその方、こやつをかばい立てする気はあるまいな」

ぎろりと睨み付けられて、政長は思わず息を呑んだ。けれど、自らの派閥に属し、かつ細川政権内にそれなりの影響力を誇っている高畠伊豆守の死をむざむざ傍観できるはずもなく、

「左様にございます！」

と、自らの身の危機も省みず、日ごろ沈着冷静かつ冷徹な彼らしくもなく、ただ我武者羅に叫んでいた。

「……その方も、余が命に楯突くのか？」

どこまでも冷え切った晴元が言葉に、政長は絶句した。

「越前、そなたも死ぬか？」

彼は、じつと政長を見つめている。

晴元は苛立っていた。孫次郎が謀叛したと知ってから、ずっとこの調子なのである。

一方、政長にとって、これは決して好ましくない事態だった。孫次郎に謀叛の濡れ衣を着せ、ついに彼を細川家から追い落とす。そこまではまさに最良の出来だったといっている。しかし、肝心の晴元の、やるせない怒りが、自らに向くのでは何の意味もなかった。……余という男は、何と空しき存在なんだろう。信じた男、二人に裏切られる。……筑前、そなたはなぜ死んだ？ 孫次郎、そなたは何ゆえ謀叛した？」

そんな風にぼやきながら、晴元はふうと大きな溜息を吐いて、悲しそうに肩を落としながら、部屋を去った。

その後、高畠伊豆守に対しては謹慎処分を、三好政長に対しては、孫次郎を討伐すべく、軍を率いて出陣するよう命じた。

九月も、ようやく終わりを告げようとしていた。

棕橋城の三好孫次郎は、相変わらず自室内に閉じこもって、出ようともしない。食事のみはきちんと食べるが、身の回りの世話をする数人の小姓衆以外の入室は一切認めず、完全に外界から姿を消していた。

その間にも、三好康長が主導する形で、本願寺との同盟工作は順調に進み、九月二十八日、ついに正式な締結を見ることになった。

「静……。なぜ死んだ……」

外界からは完全に隔離された、狭く暗い室内に、孫次郎は一人嗚咽していた。

「なんで……。なんで、死ぬんだ」

何度考え、どれだけ悩んでも、静が生き返るわけでもない。

孫次郎は己が涙ですっかり跡形もなくなった書状を再び握りつぶすと、思い切り放り投げた。何度も、何度も畳を殴る。声にならぬ涙を流し、涙にならぬ嗚咽を吐く。

静の死を知って、既に一週間近くがたつ。

孫次郎はずっと、この調子だった。

「……許さん」

この日、彼は、それまでの涙とは違う、赤色をした涙を流した。ぎりぎりと、唇をかみ締める。眉はびくびく動き、やがて体全体がぶるぶると震えだした。

静は死んだ。もはや、それは動かし難き事実である。

ならば、誰が殺したのか。誰が殺させたのか。

孫次郎の顔は、たちまち憤怒に燃え上がった。

「晴元殿が、殺させたのか？」  
その瞬間、彼は「ははは」と笑い出した。表情は相変わらず鬼の如き憤怒の形相をしている。声だけで笑う彼は、壊れた人形の如く、しばらく笑い続けた。

孫次郎が表に現れたのは、九月二十九日のことである。

驚きを隠せぬように、重臣たちは久方ぶりに姿を現した主君の顔をまじまじと見上げた。

彼らにとつて、孫次郎が何と言うのか、その一挙手一投足に興味があった。というより、不安だった。もしも彼が、謀叛はならぬと言いつつてしまえば、これまで進めてきた本願寺との同盟も、たちまち何の意味もなさなくなってしまう。

主君の命は絶対である。

だから、康長たちは、孫次郎の顔をじろりと見つめ、そして、ごくりと息を呑んだ。

「我らはこれまで、父を殺された恨みを乗り越え、晴元様に純忠を尽くしてきた。だが、晴元様は我らの忠誠を疑い、あるうことが、俺の家族にも危害を加えた。忠を以って尽くした者に、仇でもつて返すしか出来ぬ無能な主君に、これ以上忠義を貫く必要性などない。俺はこれより兵を挙げる。だが、言っておくが、これはわが父筑前守元長が仇討ちのための戦ではない。この俺が、細川晴元を滅ぼして天下を取るための戦だ」

孫次郎はぎろりと諸将を睨み付けると、有無を言わさぬ迫力で、そう言い切った。

「よいか。これより俺は、鬼になる。そして、我ら三好の力の程を思い知らせてやる。何より、宗家家督を狙い、姑息な陰謀を企み続ける愚かな政長殿に対しては、徹底的に報復する。分家の主風情に、この孫次郎利長を滅ぼすことは、断じて出来ぬ！」

それは、十二歳になった少年の、凄まじき決意だった。家臣たち

はただ啞然と、呆然としていたが、主君の覚悟の程を知るや、どれも「ははーッ！」と、恭しく深々と平伏していた。

十月一日。

三好孫次郎利長率いる三好勢二千余騎は、棕橋城を発した。そして、三日には孫次郎討伐のために芥川山を発した三好越前守政長の軍勢と、潮江庄（現在の尼崎市周辺）で激突したのである。

戦陣に立つ孫次郎は、本陣より、憎むべき仇の軍を見つめていた。もはや、容赦はせぬ。一族だろうと何だろうと、三好政長は仇敵以外の何者でもないのだと、心に誓う。

「見ているよ。必ずや蹴散らしてくれる」

そう呟くと、彼は自らの床机に腰を下ろすと、駆け込んでくる伝令の報告に、逐次耳を傾け、にんまりと微笑んだ。

「手筈通りにやれよ。作戦が上手くいけば、我らに負けはない」

孫次郎は自信ありげに微笑むと、諸将は緊張した面持ちで、「はッ！」とだけ頷き、そして去った。

必ずや、政長を討ち取り、己が天下を掴み取ってやる。

孫次郎はそう思い、そう誓うと、ゆっくりと立ち上がった。右手に握る鉄色の采配が、不気味に鈍く光っていた。

戦いは熾烈を極め、激しさを増した。

政長勢は五千で、孫次郎の二千を若干上回っている。無論、政長勢は先鋒に過ぎず、細川方の主力軍は今もなお芥川山に籠っているが、しかしこれまで晴元に従っていた諸侯が日和見姿勢に転じたこともあり、かつてほどの威容はどこにもなかった。

それでも数に勝る政長軍は、終始孫次郎軍を圧倒した。孫次郎軍の先鋒を率いる孫四郎長逸らの部隊は次々敗走し、見る影もなく後退を重ねている。

「勝った」

政長は、にやりと不敵な笑みを漏らした。この戦に勝ち、孫次郎を討ち取れば、そのときこそ自身が三好家の惣領となれるのだ。細川家における自らの立場も、磐石のものとなるに違いない。

栄光は、もうそこまでやってきていた。絶頂は、すぐそこにある。苦節十数年。一族の元長を滅ぼし、あらゆる権謀術策を弄して掴み取った今の地位。そして、ずっと夢見てきた最高の栄誉が、眼前に横たわっている。

政長は溢れ出す笑みを、もう堪えなかった。嬉しそうに、腹を抱えて高笑いした。

そして、そのときであった。

「も、申し上げます！」

使番が慌しく駆け込んできた。彼は政長の前に平伏すと、

「お、お味方の第一陣、敗れました！」

と、思いもよらぬ凶報を告げた。

信じられぬといった顔をして、小高い丘の上のぼり、戦場を見た。すると、確かに味方が成す術なく敗走している無様な姿が、その目に飛び込んできた。それまで勝利を疑わなかった味方の軍勢が、悉く崩れ去っていく様に、彼は呆然と立ち尽くした。

「だ、第二陣も敗れました。…越前様、も、もはや三好軍の勢いを抑え切れませぬ！」

「…な、なんだと？」

啞然としている彼の下に、更なる続報が飛び込んでくる。

「第三陣も崩れました」

「敵軍、御本陣に迫っております！」

その全てが、政長にとって信じ難い凶報ばかりだった。なぜ、どうして？

いくら考えても、彼にはわからなかった。数に勝り、実際優勢だったではないか。それがなぜ負けるのか。

後に分かったことであるが、三好軍の勝因は、いわゆる釣り野伏

せと呼ばれる戦法を完璧にこなすことができたためであった。

釣り野伏せというのは、一つの戦法で、即ち、**罠**となる部隊を敵軍と交戦させ、負けた振りをしてわざと後退する。これが『釣り』である。後退する罠を追い詰めるべく追撃してきた魚を、後方に隠れていた別働隊（伏兵）が一挙に叩く。これは、追撃に打って出ると、陣形が乱れるという点を突き、かつ奇襲攻撃の強みを上手く取り入れた最強の戦法であったが、指揮官と兵が、まさに一体となって初めてできる、非常に難度の高い技でもあった。即ち、特に罠となる部隊において、指揮系統が乱れていれば、敵を釣る前に、こちらがやられてしまう。やられない程度の強さを保ち、しかし罠だとはばれない程度に力を弱める。この微妙な力加減を間違えると、作戦は全く意味を成さなくなる。

戦国大名でいえば、島津氏が得意とした策であり、実際この戦法の威力は朝鮮の役における泗川の戦いでも存分に発揮されている。この戦いにおいて、島津義弘は僅か七千足らずの兵力で、明・朝鮮連合軍二十万を完膚なきまでに叩き潰したという。

細川晴元、三好政長憎しに凝り固まって、類稀な団結力を誇った三好軍にとっては、この戦法の難易度などさしたるものでもなかった。そして、この作戦が上手く決まったとき、三好政長軍五千などもの数でもなく、圧倒的な完勝をもぎ取ったのである。

政長軍の退却を見守りつつ、孫次郎は全軍に深追いせぬよう命じると、再び自室に閉じこもった。

勝利といっても、政長の首がないのでは、余り嬉しくはなかった。犠牲者が両軍合わせて一千に達しつつあるという報告も、彼の顔を暗くするに十分だった。

「ははは、大勝利だな。後は芥川山に攻め上って、憎き晴元を打ち破るのみ。既に本国からは、千満丸様の援軍が発したって話だ。到着すれば、我らはいよいよ天下をとれるぞ！」

と、孫四郎長逸などは嬉しそうに高笑いしていた。

そんな彼らの無邪気な笑いに、孫次郎利長は一人静かに小さな溜息を吐いた。そして、これからますます熾烈を極めていくであろう、己が戦いの一生に思いを馳せると、ただ苦笑いするより他に仕方がなかった。

## 【雌伏編】第021章 弟の決意

桓武以来七百年。

長岡京より遷都され、以来ずっとこの国の中心であり続けた都は、ここ最近随分と活気に溢れている。

天文三年（一五三四年）も十月に入り、細川晴元の軍勢が三好孫次郎利長に大敗するなど、さして嬉しくない物騒な事件が多発していたが、都はそんな素振りなど一切感じさせぬ繁栄に満ちていた。

全ては、将軍が都に戻ってきたことが生み出した好景気であった。即ち、細川高国が滅びて以来、ずっと都を離れ、近江六角氏の庇護下に存続してきた室町幕府第十二代征夷大将軍足利義晴が、ついに都へ戻ってきたのである。その背後には、政情が不安定化する中で細川政権の基盤を固め直したい晴元の意と、細川政権との繋がりをより高め、かつ晴元により高く將軍を押し付けられる機会を狙っていた定頼の思惑がぴったりと一致したという事情もあった。何はともかく、將軍が戻ってきたのである。將軍といえば、帝と並び立つ都の支配者であるから、市民の誰もが恭しく出迎え、そしてようやく天下の政道が正常化したことを喜んだ。

足利義晴が都に帰還したのは、九月二日のことである。

近江を離れ、二日には建仁寺に入った。しかし、將軍家累代の居所たる室町御所に入ったのは、それから一ヶ月以上もたった十月十日のことであった。

建仁寺から室町御所へ至る將軍の行列は、それこそ盛大を極めた。義晴は、晴元配下の軍勢三千に守られ、暮盤目のように区画整理された京の町並みを練り歩くように回った後、十日も夕刻に入った頃、ようやく御所へ入城したのである。

そして、その日の夜。義晴は改めて、自らが將軍であることを満



天下に示すべく、晴元以下の群臣を前にして、自身の政府における閣僚人事を行うことにした。といっても、実質的には、実権者である晴元の決めたことを承認するだけであり、彼には何の権限もなかった。そんな無力な帝王が、自らの荒んだ宮殿に閉じこもって何よりも真つ先にしたことは、権臣細川晴元をして正式に管領に任じたことであつた。

晴元はこれまでも、自らを管領と称して、実際にそれと変わらぬ権力を握ってきたが、將軍家より正式に任ぜられたわけではなかつた。しかし、これにより彼は、真正銘の細川京兆家当主となつたわけで、その権力基盤は著しく強化されたといつてよかつた。

晴元による一連の細川政権強化策は、ひとえに、潮江庄の戦い以来、急激に勢力を広げる三好伊賀守利長への対抗措置であるといつても決して過言ではなかつた。

実際、棕橋城に拠る三好方の勢力は、日に日に急拡大していた。畿内をはじめとして、各地の有力諸侯は次から次へと、この新興の実力者に対して使者を派した。堺や京の豪商たちの中にも、彼と誼を結ぶべく、群れを成して謁見を求めてきたものだつた。

三好方の戦力強化も進んでいる。

既に阿波の本国からは、城代の三好千満丸率いる二千ほどの援軍も出陣し、数日もすれば到着する見通しとなつていた。淡路を支配し、瀬戸内海の制海権を握る安宅治興も、事実上三好方に加担し、千満丸率いる三好本軍の瀬戸内海通過を援助した。阿波守護細川持隆も、比較的三好兄弟の軍事作戦に協力的で、兵こそ貸さなかつたが、彼らの行動を制することもしなかつた。

「阿波、淡路両国は既に御当家の勢力下にあります。讃岐については、十河城城主十河景滋殿をはじめ、我らに与力する者も多くおりますが、こちらは頑なに晴元殿への忠誠を誓う勝賀城城主の香西元成が強大な力を保っており、こればかりはなんともいえませぬ」

と、三好康長が報告すると、孫次郎利長は「なるほど」と、大きく頷いた。

彼は目を閉じたまま、何やら考え込んでいる風だった。こういうときの彼は、とても若干十二歳の少年とは思えぬものがあつた。あらゆる苦難を乗り越えて、一皮も二皮も向けてしまった彼は、下手な大人よりも、ずっと大人だつたりした。

「千満が到着すれば、俺の下には四千程度の兵がある計算になる。その上、石山の証如殿が援軍を派してくれば、一拳に戦力は数倍に膨れ上がる。…晴元殿がどれほどの兵を集めるかしれんが、法華門徒たちの支援も得られる我らに、敗北はありえぬ」

と言つて、ニタニタと笑う彼は、少しばかりうんざりとした様子で、ハアと溜息混じりに、その場にごろりと寝転がった。

静も死んで、その恨み、怒りのために、勢いよくここまで突つ走つてはきたが、一度主君と誓つた男と、本格的な決戦をしなければならぬと思うと、孫次郎の心境は実に複雑だつた。

その頃。

大和信貴山城を新たな居城としていた木沢長政は、晴元の下知に応じる形で手勢を集めていたが、稀代の野心家たる彼にとつて、晴元と孫次郎の内紛は、自らの更なる出世をもぎ取る上で、またとない機会であつた。

「禿頭、お主はもしも伊賀守と管領殿が決戦すれば、どういうことになると思う？」

木沢に問われ、禿頭と呼ばれた男は、「ははは」と、その薄くなつた頭を摩りながら、

「畿内全土は、未曾有の戦乱に陥るでしょう」と、言った。

「何しろ、伊賀守殿の背後には、一向宗と法華宗があります。この二つが三好家に味方すれば、如何な管領家とて、容易くは倒せま

すまい。というより、勢力的には互角となります。これが総力戦を繰り広げれば、言うまでもなく、未曾有の大戦乱となるは必定」

禿頭は、そう言うてにやりと笑った。

「さすがは禿頭、もとい、わしが見込んだ松永久秀だけはある。くつくく。大戦乱で、細川、三好ともに共倒れとなってくれば、それが一番よい。無論、漁夫の利は、悉くわしが頂くが」

「ですが、木沢様。ここは考えどころですぞ」

禿頭こと松永久秀の言葉に、木沢は「ほお」と呟き、ニタニタと楽しそうに彼の顔を見つめた。

「もしも細川、三好双方が共倒れした場合、確かに木沢様は今よりは高い地位を確実に手に入れられるでしょうが、少なくとも天下は手に入りませんぞ」

「…」

「細川家の後釜を狙っている勢力は、畿内だけでなく、天下あちこちにいるわけです。目下、細川家が強勢を保っているがゆえに、彼らは容易く畿内へ攻め込めないわけですが、もしもその枷が外れば、勢いよく攻め込んでくるでしょう。…例えば、近江の六角、越前の朝倉、西国の大内や尼子…。まあ、九州の大友や、東海の今川、関東の北条などが出張してくるとも思えませぬが、しかし六角、朝倉、大内辺りは細川家衰退を見れば、確実に攻め込んでくるでしょう。となったとき、木沢様は彼らに対抗できますかな？ 結局、今より多少領地は拡大できるかもしれませぬが、結果的には細川家に取って代わるであろうそれら諸侯の臣下に屈するより他にありません。しかも、その場合、木沢様の立場は外様でしかなく、とてもではありませんが、天下人の座など望めませぬぞ」

「…」

「それならば、今ある細川家で力を伸ばすが最良策でしょう。即ち、此度の騒乱を木沢様の手で鎮めて御覧なさい。管領殿は木沢様の功労を認めざるを得ず、三好殿とても同様。いずれが力を握っても、木沢様の政治的地位は一挙に高まります。その上で、着々力を蓄え、

ある程度力を得れば、篡奪してしまえばいいのです」

そんな松永の理路整然とした論理は、木沢長政の心を動かすに十分だった。彼は時折、「ははは」と笑うと、

「俺は外様だろうと、今より領地が広がるなら、それでもよいと思うがな」

などと、心にもないことを、平然と言つてのけたりした。

「はは、それがしが見たところ、木沢様はそれほど容易いお方ではないと思いますが。…ま、いずれの道を選ばれるにしても、木沢様次第。それがしの知ったことではありませんが」

まるで突き放したような久秀の態度に、木沢は苦々しげに顔を歪めると、その瞬間、けらけらと笑った。

十月十七日。

三好千満丸率いる軍勢が椋橋城に入ると、三好方の士気は大いに高まった。

孫次郎にとつては、実に二年半ぶりとなる実弟千満丸との再会だった。久方ぶりに会う弟の大人びた顔に、彼はこみ上げる嬉しさを隠しきれなかった。

「お前も随分甲冑姿が似合うな。…互いにまだ幼いのに、かような宿命を背負わされて、実に難儀なことよの」

と、孫次郎が言えば、千満丸も、

「左様ですね」

と、昔と変わらぬ笑みとともに、小さく頷いた。

お互い、いろいろありすぎて、昔とはすっかり変わってしまった。孫次郎は弱冠十二歳、千満丸は八歳に過ぎないが、子供のままではいられない政治状況が、彼らを大人へと変えてしまった。

「ところで兄上は、真に御所様と決戦なさるおつもりですか？」

こう言ふときの千満丸は、実に子供らしく、可愛げな仕草で首を傾げる。そんないじらしい彼の態度に、孫次郎はにっこりと微笑ん

だ。

「ま、それを御所様が望むのだから仕方あるまい。…何しろ、俺を謀叛人扱いして、しかもあるうことか御前を殺した。これまで俺が御所様にどれだけの忠誠を尽くしてきたか。父上を殺され、家中が怒りに燃え滾っていた頃も、俺は皆を説得し、宥めて、ひたすら御所様が御為に働いてきたのだ。それを仇で報いた以上、俺は御所様を滅ぼす。そのために戦いが必要なら、それもまたやむを得まい」

「…そうですね」

「お主は、御所様と戦うことに反対なのか？」

孫次郎に問われると、千満丸は戸惑った。言うべきなのか否か。兄が決戦を決意した以上、その覚悟に水を差すようなことをして良いものなのだろうか。

「そういえば、先日も木沢殿の特使として、松永久秀が参って、和睦したらどうかとは言ってきたが…」

ふと、そう呟く孫次郎を、千満丸はまじまじと見つめていた。

「兄上は如何お考えですか？ 和議を結ばれるのですか？」

「…お主はどう考える？」

孫次郎は意地悪く、戸惑う弟の顔を見つめながら、おもむろに「ははは」と笑った。

「和睦など断じてありえん。ま、ありうるとしたら、晴元殿が俺に敗北を認め、以後は俺に従うことを誓うならば、和議もやぶさかではないがな。だが、現状のまま和議を結ぶなど、断じてありえぬ。」

…この程度で、俺が受けた屈辱、怒りを晴らすことは到底できぬ」と、燃え上がるような凄まじき怒り、憎しみを全身に滾らせながら、いつになく興奮した様子で怒鳴る兄に、千満丸は思わず息を呑んだ。

「…千満。お主がどう考えているかは知らぬが、俺は管領細川晴元殿に対し、決戦を挑む考えでいる。晴元殿を打ち滅ぼした後は、この俺が天下を取る。曾祖父が目指し、父が夢見た三好家の栄華を、この俺の手で作りに上げるのだ」

それはもはや、千満丸がこうと信じた冷静沈着な兄の姿ではなく、ひたすら怒りに燃え、憎しみにその身体を奪われている、哀れな復讐鬼に過ぎなかった。

けれど、そんな兄の気持ちも、千満丸には痛いほど分かるのだった。父を殺され、愛する人すら殺された。他ならぬ千満丸とて、父を殺した晴元を許したわけではない。これまで三好家が飲まされてきた煮え湯の数々を思えば、晴元を滅ぼし、細川家を倒すことは、彼にとっても積年の夢となっていた。

「なあ、千満丸」

と、孫次郎は穏やかな声色で言った。

「俺たちで、天下を取ろうぞ。俺たち兄弟、力を合わせ、天下を取ろうぞ。…この際、もはや細川など関係あるまい。俺たちの手で天下をとって、こんなくだらぬ殺し合いの世の中に、終止符を打ってやろうぞ」

気がつくくと、孫次郎の眼から、一筋の涙が流れ、やがてそれは水滴となって地に落ちた。その目は、きらきらと悲しげに輝いている。声にならぬ必死の嗚咽も、千満丸にはよく聞こえた。

そんな兄の様子を見て、千満丸は深く、そして力強く誓うのであった。常に、どんなことがあるうとも、自分は必ずや兄を支え、兄の力になるのだと。三好家がため、兄がために、この命を捧げるのだと。何より、兄のためなら、修羅にでも鬼にでもなってもやるのだ、と…。

決戦を覚悟している孫次郎の下には、幾たびも、性懲りもなく松永久秀がやってきた。そのたびに和議をしつこいほどに訴えてくるわけだが、十月も終わりに差し掛かった頃、松永はまたしてもやってきた。これで四度目だったから、さすがの孫次郎もすっかりうんざりとしていた。

「またか」

取り次がれても、そうぼやくしかない。いつそ断つてもよいのだが、松永久秀が木沢長政の特使としてやってきている以上、無碍にも出来ないのである。木沢は彼自身強大な大名であるだけでなく、畠山氏の筆頭家老として、その隷下に連なる諸侯衆に絶大な政治的影響力を誇っている。

「如何いたしますか？」

と、孫四郎長逸は言う。彼は、あの胡散臭い、年齢より幾分老けて見える青年が嫌いだった。

「やはり木沢殿の特使としてきているのだろう。無碍に扱うこともできない。…とりあえず、通せ」

そんな風に孫次郎が命じると、孫四郎は不満そうな顔をしながら、「承知しました」

と、答えた。

松永は、口を開けば和議と言った。それこそ、馬鹿の一つ覚えの如く、和議だ、和議だと言いつけていた。

「和議です、三好の若！ それ以外にとるべき道はない」

そうはつきりとした口調で言い切ってしまう彼は、これでなかなか優れた弁士だった。

「だが、俺は和議などする気はないぞ。…大体、父を殺され、あら

ゆる苦渋を舐めてなお、俺はずつと管領殿の御為に尽くしてきた。なのに、管領殿は我らの忠義に仇で報いた。俺はそれが許せない。管領殿御自ら、俺の下に来て謝罪するならば、まあ、俺もそれほど非情ではないから、今後も昔と変わらぬ忠誠を誓ってもいい。だが、そうでもない限り、わが三好家は、たとえ最期の一兵になるとしても晴元殿に刃を向け続けるだろう」

孫次郎は勝ち誇ったような顔をして、相も変らぬ絶対的な強気を見せびらかすように声高に叫んでいた。

松永はそんな孫次郎少年をぎろりと睨み付けると、「嘘でござろう」と言つて、にたりと不敵な笑みをこぼした。

「ま、ともあれ、和議を結ばぬと仰せなら、それも結構。されど、その折は細川だけでなく、三好家もただではすまぬということ、よく御考えあれ。畿内が覇権を虎視眈々狙っているのは、何も三好の若のみではない」

「……」  
「それがしが話は、ここまででござる。後は、いちいちくどくど説明せずとも、御聡明な三好伊賀守殿であればお分かりでござろう」  
「とだけ言つと、松永久秀はすつくと立ち上がり、居並ぶ諸将がどれも呆氣にとられている隙を突くように、悠々と去つていった。

孫四郎長逸などは、相変わらず腹立たしそくに彼の背を睨んでいる。三好康長や岩成友通、篠原自遁といった重臣たちも、彼ほどではないが、気に入らぬといった様子で、露骨な仏頂面をその表情に表していた。

一方、孫次郎はというと、目を閉じ、腕組みしたまま、何やら一人考え込んでいた。

今更迷いはない。鬼になったのだ。

しかし、根が聡明な彼には、松永久秀の言ったことも痛いほど理解できるのである。細川家の後釜を狙うのは、何も三好のみに非ず。



確かにその通りだと、孫次郎も思っていた。だから出来る限り早急に細川を潰そうと思っていたわけだが、將軍家呼び戻し、管領となつて政権基盤を固める晴元の力は、孫次郎が想定していた以上に強大らしかつた。如何に向宗、法華宗の支援を得たからといって、細川二百年の歴史は、一朝一夕に潰せるほど小さくない。脆くもない。

結局のところ、自分は血気に逸っているだけなのではないだろうか。静御前を殺され、カツとなつて、怒りの余り自分という存在を見失っているだけなのではないか。こうすることが正しいのだと思ひ込むことで、悲しさ、辛さ、空しさ、苛立ちから逃げていただけなのではないか。

孫次郎は静かに考え込んだ。自分の単純な怒りや、衝動で、無数の兵たちを危険に晒してよいものなのか。父祖があればほどに苦心して築き上げてきた三好家を、自分の若い怒りだけで衰亡の危機に追いやつてよいものなのか。

どうしたらよいのか、彼にはわからなくなった。もう後には引けないような気もするし、しかし一方では、自分が諦めれば、まだ引き返せるような気もした。松永久秀の言うように、和議を結べばそれで済む話だつた。

全ては自分次第。だからこそ迷うのである。どのみち、弱冠十二歳の少年が背負うにしては、余りに重すぎる課題ではあつたが、それもこれも、全ては三好孫次郎利長という人に課せられた宿命なのだつた。

孫次郎の執務室に、千満丸はおどおどしたようにやつてきた。

ここ数日、孫次郎はここに閉じこもつたまま、重臣とて容易くは中に入れなかつた。軍議とか、評定などの一切は悉く康長に任せてしまつて、彼自身はただその結果を側近から聞くだけである。あえて口出しはしないし、康長たちも、よほどのことがない限り、孫次

郎不在の評定で重要なことを軽々しく決定したりはしない。

で、孫次郎は一人何をしているのかといえ、ずっと悩んでいたのだ。戦うべきか、戦わざるべきか。二者択一。単純なようで、逆にだからこそ難しい問題。いずれにしても早急に決めなければならぬのだが、なかなか決められない。

悩みに悩んで、悩みぬいた挙句、ついにたまたまなくなって呼び寄せたのが、千満丸だった。他の誰でもなく、彼を呼んだのは、誰より信頼できる弟だったからだ。呼ばれた千満丸はというと、彼もまた何やら悩んでいるようで、ゆえに落ち着かぬ風におどおどしていたのだ。

「おう、千満！ 入れ、入れ」

小さな部屋に、一人仏頂面をしていた孫次郎は、弟の姿を見るなり、嬉しそうな笑みを浮かべた。

「なあ、俺ってどうしたらいいと思う？」

と、開口一番、彼はそう言つて、千満丸の顔を見た。

「戦うべきか、戦わざるべきか。…家臣どもは皆、戦う以外に道はないと騒ぐが、俺は、松永が申したことも理解できるのだ」

「…和議、ですね」

「そうだ」

孫次郎ははつきりと頷くと、改めて千満丸を見据えた。

どうすべきなのか。一人で考えていても、複雑怪奇な、迷宮の如き袋小路からの出口は見つからない。だから千満丸の助言が欲しい。孫次郎は、まるで懇願するかのごとき瞳で、弟の顔をまじまじと見つめていた。

「それは…。それは、私が助言するまでもありません」

と、千満丸が言つと、孫次郎はきよとんと、不思議そうに首を傾げた。

一方、千満丸は何やら意を決したかのように、きつと孫次郎を睨み付けると、おもむろに大きく息を吸い、そして吐いた。そして、彼は自らの懐に暖めていた一通の文を取り出すと、それを兄に手渡

したのだった。

「静殿からの手紙です。…今更にして思えば、遺書のようなものだったかもしれないが」

そんな風に言う千満丸が言葉を証明するかのようには、確かに書状には、静の方と瓜二つの字体で、たどたどしく静と記されていた。

「う、御前の遺書？」

孫次郎はしばらくの間、きよとんとして、微動だにしなかった。何が起きているのか、それが何なのかすら分からぬ様子で、ただ呆けたように、定まらぬ虚空の先をぼんやりと見つめていた。

受け取った文は、余り長くなく、さして綺麗でもないが、見覚えある懐かしき静の文字だった。

『前略、三好伊賀守利長様。…と、堅苦しい挨拶や文が書けるほど、私は決して学はありませんゆえ、失礼とは思いますが、私なりの文で書きたいと思います。』

私は、これから死ぬでしょう。おそらく、孫次郎様がこの文を読まれる頃には、私はもうこの世の人ではないかもしれませんが、ですが、孫次郎様におかれましては、常の如き冷静であらせられますよう、この静、伏してお願い申し上げます。

確かに、私の命を奪うのは、細川家の方々だと思われれます。孫次郎様がどういふ御立場にあられ、またどう御考えになっておられるかは分かりませぬが、しかし、私は孫次郎様を信じています。

孫次郎様。私は戦が嫌いです。私から父母を、家族を、幸せを奪った戦が、大嫌いです。私如き卑賤の者が口を挟むべきことではないかもしれませんが、せめて私の死を理由に、戦を仕掛けるようなことはやめてください。私は確かに細川様に殺されるでしょうが、もしも細川様と戦になれば、凄まじい戦いになるでしょう。私のような境遇に追い込まれる者も、百や二百ではすまないでしょう。私のように

たとえ私が細川様に殺されたとしても、今すぐ細川様と戦うよう

なことはやめてください。もしも私の仇を討ちたいと思し召されるなら、最も犠牲が少ないと思われるときにしてください」

そこには、健気ながらも、ひたすら戦を望まぬ静の方の本音が明確に表現されていた。孫次郎は困ったように苦笑いすると、「それもそうだな」と、静かに頷いた。

「もつと早く、兄上に出すべきでしたが、つい出しそびれてしまい……。まことに、申し訳なく存じます」

と言つて、辛そうに頭を下げる千満丸に、孫次郎はクスクスと苦笑いした。おもむろに上座を立ち上がり、彼の下に歩み寄ると、

「先だろつと後だろつと、出してくれたのだから、俺に文句はない。ま、後過ぎたらさすがに怒つたろつが、今ならまだ許容範囲内だ」  
からからと笑い、そしてまだ幼い弟の頭をぐりぐりと撫でた。

ひとたび決断すると、行動力は圧倒的な孫次郎であった。

まず彼は臨時の評定を催すと、半ば一方的に和睦案受け入れを宣言し、康長に一向宗への対処を一任すると、彼は一人また自室に籠り、そこで城下に待機していた松永久秀を呼び寄せたのだった。

「和睦、俺は受け入れる。だが、あえて聞くが、俺一人が和睦すると言つていても和睦は成立せぬ。晴元様はこのこと承知しておられるのか？」

と、孫次郎が問うと、松永久秀はにやりと笑い、そして大きく頷いた。

「ならばよい。……とにかく、三好家としては和議締結もやぶさかではない。もし必要とあらば、俺自ら晴元様の下に伺候し、直接交渉してもいい」

「……ほお。されど、三好の御大将自ら管領様の下に伺候なされば、御大将を憎む管領御配下の過激な分子が、御大将の御命を狙つやもしれませんぞ」

松永久秀は、まるで孫次郎利長と言う人を品定めするかのよう

じろじろと、その一挙手一投足を見守っていた。

「命、か……。確かに俺だつて、命は惜しい。だが、だからといってびくびくと臆しては、大将は勤まらんよ。日ごろ家臣たちに命を張らせているのだ。こういうときぐらい、大将が命を張る。俺が、この命を賭けるだけで、何万つて人の命が助かるかもしれない。無益な戦もおきずにすむ。なら、俺はこの命、賭けてやる。全ての人のために、俺はこのちっぽけな命を賭けてやるのさ」

そう公然と言い放つ孫次郎は、いつになく晴れ晴れとして、それまでの鬱屈とした表情が嘘のような笑みを浮かべていた。

そんな彼の様に、松永久秀は「なるほど」と、小さく呟き、そして大きな溜息を吐いた。

「それに、その方とても和議のために命を張つたのだらう。実際、俺が何も言わねば、家中の過激な者たちは、その方を殺したらう。だが、民のため、木沢殿のため、そして、その方自身が野心のために、せつかく張つた大博打だ。負けにするのは、実に惜しい」

「……」

「というわけだ。今度は俺の博打が当たるかどうか。こればかりは誰にも分からんが、あたつて欲しいものだな」

などと言いながら、けらけら笑う孫次郎を、松永は呆気にとられたように、しばらくの間、ただ呆然と見つめていた。

そして十一月二日。

木沢長政の居城の一つたる飯盛山城にて、細川六郎晴元と、三好孫次郎利長が久方ぶりに対面し、一連の抗争に終止符を打つべく、和平交渉締結に向けた首脳会談を行った。

晴元の隣には、六角定頼の代理である進藤貞治や、畠山家重臣の遊佐河内守長教が控えている。一方、孫次郎の隣には、本願寺証如の代理としてやってきた蓮淳と、法華宗の高僧がちょこんと腰を下ろしていた。

その結果として、細川晴元、三好利長双方の間に詳細な和解協定が定められ、両者はそれを受け入れ、正式締結した。詳細な協定の内容は省くとして、大まかに上げるなら、以下の五ヶ条からなっていた。

その一、三好伊賀守は引き続き細川右京大夫に臣属すべきこと。

その二、右京大夫は、先の伊賀守謀叛が誤りであったことを認め、謝罪すべきこと。

その三、右京大夫は、三好家の領地を引き続き安堵すべきこと。

その四、右京大夫は、三好宗家の家督が伊賀守であることを認めること。

その五、この後、双方、同事件に関する処罰は一切行わないこと。

無論、これだけではないが、主要なところを挙げると、こうなる。要するに三好家が細川家に臣従する代わり、細川家は領地を安堵し、また三好家の謀叛は誤りであったことを認めるというもので、どちらかといえば三好方優位な和議であった。

また、三好宗家の家督が三好伊賀守であると認められたことで、三好政長が密かに抱いた野望は、ここに形の上は費えたわけで、そういう点においても、孫次郎にとっては好都合な和解案であった。

それから、あつという間に一年以上の歳月が流れ、世の中は今や天文五年（一五三六年）という時間を、至極当たり前の如く受容していた。

その間も、三好孫次郎利長はあちこちを転戦して、一向一揆残党や、細川高国党の生き残りである細川晴国の征伐戦に尽力したりして、片時として心休まる日はなかった。

そんな忙しい日々の間を縫って、孫次郎が久方ぶりに帰郷したのは、天文五年の一月十日のことであった。

京の管領御所に過ごした正月も、雅さと豪華さが上手く重なり合っていて、なかなか楽しいものであったが、それは所詮將軍家や高級公家などを招いて行われた政治的イベントでしかなく、心の底から笑ったりすることは許されなかった。

その点、故郷ならば、そういう気を遣う必要性もなかった。忙しい正月を終え、帰国の途についたのが、三日昼頃のことだった。四日のうちに大坂に辿り着き、五日の朝には、盟友安宅治興の用意した軍船に乗って出航したが、途中、淡路島は洲本城に赴いて、治興の接待を受けたので、阿波に上陸したのは七日も夜のことだった。八日朝に阿波守護細川持隆の居城たる勝瑞城に登城し、九日、勝瑞を発した。その後、ゆるりと物見遊山などを楽しみながら、居城たる芝生城に辿り着いたのは、十日午後のことであった。

本国へ戻るまでの、ぐだぐだとした旅路も、今後の三好家を考えたとき、決して無意味ではなかった。

というのも…。

特に、安宅治興が居城洲本においてのことであったが、宴会もたけなわに達した頃、治興は困ったような顔をして、

「我が家には跡継ぎがおらんのです」

と、言うのであった。

「わしもここ最近はめつきりと年老いて、昔の如く、船を自由に動かすことも難しくなり申した。…かつては倭寇と、幕府からも目をつけられていた海賊の大将が、無様といえは無様ですが、海にいようが陸にいようが、誰しも老いには勝てぬもの」

そんな風にぼやきながら、ぐびぐびと勢いよく酒を呷る彼は、確かにその顔のあちこちに深き皺を作って、如何にも老いた海の男といった感じがした。ただ、見たところまだまだ現役でも十分やっていけそうな感じもするが、こればかりは海に暮らした者でなければ分からぬ引き際というものがあるのかもしれない。

「が、後を継がせたくとも、わしには息子がありません。ま、いたにはいたのですが、皆、どいつもこいつもとつとと死んじまって…で、ものは相談なんですがね」

そう言いながら、治興は酒臭い身体を、ぐいぐいと孫次郎に近づけた。

「伊賀殿には弟君が御三方おられます。そのうちのお一人を、我が家の養子にいただけませんかね」

「…よ、養子？」

「そうです」

「…さ、されど、わが弟と申しても、年長の千満丸はまだ九歳。次の神太郎は七歳、末弟の又四郎に至っては、六歳。どれも、まだまだ幼い子供でござりまする」

「だからよいのです」

などと言う治興は、時節にこにご笑い、さらに孫次郎の下にずいずいと近寄ってきた。

「幼ければ幼いほど、親としての実感も沸きます。育ての親とも申しますし…。とにかく、伊賀殿御自身、未だ十三の若さで、その



聡明は天下に轟いておられる。その弟君であれば、聡明は疑いなし。我が家の更なる発展のためにも、是非、伊賀殿の弟君を養子として迎え入れ、家督を継がせたいのです」

「は、はあ」

戸惑いを隠しきれぬ孫次郎ではあったが、冷静に考えてみるなら、これほどの良縁もないような気がした。

安宅氏は、言うまでもなく瀬戸内海の、特に大坂湾をはじめとする瀬戸内東半分の制海権を握っている海賊たちの総元締めである。配下には天下でも有数の大水軍があり、淡路島を根城に、代々その名を天下に轟かせてきた野蛮な名族であった。

そんな家に養子を出せば、三好家は労せずして淡路島と、安宅氏配下の巨大水軍を手中に収めることが出来る。いずれにしても、三好家がさらに発展するには、本国阿波と畿内を結ぶ瀬戸内海の制海権は必須であったから、安宅氏との同盟強化は何より真つ先に実現しておかねばならぬ最重要課題の一つだった。ゆえに家督継承を前提とした養子縁組を結ぶという、ある意味最強の政略縁談は、孫次郎にとってまさに渡りに船の朗報だった。

堂々と芝生城に入った孫次郎は、そこですっかり成長した弟たちと再会した。

父が死に、人質として都に上った頃、千満丸はともかく、神太郎や又四郎などは、まだまだ小さな赤子に過ぎなかった。それがどうだろう。今や、千満丸もなかなか大人びているが、それに負けず劣らず、神太郎も又四郎も、立派な少年となっていた。本来なら、悪さをしたり、無邪気に遊び呆けていてもよいような年頃であったが、父母はなく、自分たちの力で家と国を守らねばならぬという大きな責任感を背負わされてきた彼らは、そういった遊びもほどほどに押さえ、ひたすら勉強や武術に励んで、いざと言うときに備えているのだという。

「あいつらは、あいつらなりに、いつしか兄上の御為に働くべく、修行に励んでいるんです」

と、千満丸は嬉しそうに言った。孫次郎は「そうか」と軽く頷きつつ、改めて、健気に日々修行に勤しんでいる弟たちの様をまじまじと眺めてみた。彼らは彼らなりに、父死後の日々を必死に生きてきたのだと思うと、自分が味わってきた地獄の如き日々も重なつて、思わず涙が溢れてきた。

久しぶりの大奥も、ただ懐かしいの一言に尽きた。

相変わらず、お福は老女として、城の女子衆の頂点に立っていた。留守居役である千満丸も、孫次郎同様に彼女を母と慕い、懐いていたから、やろうと思えば母代わりとして三好家の表向きの政務に口出しすることも不可能ではなかった。けれど、賢明にして淑やかな彼女は、大奥の総取締役たる任に勤しみ、女子としての分を弁えて、助言するぐらいのことはあっても、自らそういったことに口を挟むことはしなかった。

何はともかく、彼女は孫次郎兄弟の母代わりとして、城内の誰からも深く敬愛されていた。

「福、久しぶりだ」

孫次郎は嬉しそうに微笑みながら、彼女の下に駆け寄った。実に三年半ぶりの再会で、すっかり成長した彼を見た福などは、その場に卒倒し、大仰な仕草で嗚咽していた。

「福よ、大袈裟だぞ。全く、面を上げよ。それでは話も出来んぞ」と、けらけら笑いながら、孫次郎は彼女の側に歩み寄る。

福はすつと立ち上がると、すかさずいつもと変わらぬ笑顔を浮かべて、

「お変わりはありませんか？」  
と、言った。

「はは、変わったといえば、随分変わっただろう。何しろ三年半、

だったか？ それぐらいの間、国許を留守にしたのだからな」

「そうですね。…ですが、御元氣そうで、何よりにごさいます」

そう言つて、再度頭を下げるお福に、孫次郎もにっこりと微笑んだ。

「養子の話がきているのだ」

そんな風に孫次郎が唐突に言つと、福は驚きを隠せぬように、  
「誠ですか？」

と、素つ頓狂な声色で問うのであつた。

「本当だ。淡路の領主で、瀬戸内海を牛耳る安宅水軍の首領」

「…よもや、安宅治興様、でございますか？」

「御明察」

孫次郎はにたりと笑い、福はまたしても大いに驚いている風であつた。

「安宅様であれば、良縁かと思ひますが…。何と言つても、安宅様はかなり大きな水軍を従えておられるとか。海を握れば、殿の更なる飛躍は確約されたも同然でしょう」

「…ま、そうなんだが、果たして誰をやるべきか。…千満丸は、この後も俺の留守を守つてもらわねばならぬから、あいつを養子に出すわけにはいかん。となると、神太郎か、又四郎のどちらかかってことなるが…」

などと呟きながら、孫次郎はふうむと困つたように唸つた。

「…私は、神太郎様などが適任かと思われませう」

「神太郎が？」

「はい。何と言つても、神太郎様は新しいものがお好きで、特に南蛮渡来の物など、よく好まれておられるようです。また船などにも興味がお有りのようですので、又四郎様よりは神太郎様が適任と思われませう」

「…新しいもの好きの、船好きか」

それならば、確かに適任かもしれないと、孫次郎は思った。とはいえ、神太郎は少しばかり体力的にひ弱なところがあつたから、そこだけが少なからず気にはなつたが、それを除けば、彼以上に適している者もいないような気がした。

「ま、とにかく神太郎には俺から伝えるところでしょう。あいつが安宅の頭領となれば、わが三好は一躍四国の大勢力となるわけだな。…まずは徐々に力を蓄え、機を見計らつた後に、俺は兵を挙げる。いつまでも晴元殿に臣従しているほど甘つちよろい男ではないことを、満天下に見せ付けてやるのだ」

などと高らかに叫びながら、孫次郎利長は「ははは」と楽しそうに笑つた。そんな彼の様を眺めつつ、お福もまた嬉しそうにっこりと微笑んだ。

## 【飛翔編】第024章 敗戦

二月も中頃になって、孫次郎利長は三千の軍勢を従えて、再び畿内へと戻っていった。

この当時、細川晴国をはじめとする高国残党勢力や、細川政権との融和的姿勢を推し進める本願寺上層部に反発する過激な一向門徒たちは、摂津は中島に拠って、徹底抗戦の構えを取っていた。

中島は石山御坊の北側近くに位置する中洲で、海上交通の便もよく、立て籠もる上ではこれ以上ない天然の要塞だった。なので、細川政権の弾圧策の前に、敗北を余儀なくされてきた一向軍や晴国軍はこの地に逃れ、再起を期さんとしていたのだった。

けれど…。

中島の地が如何に難攻不落を誇る天然の要害だろうと、そこに集まっている者は、要するに各地の戦に負け続けた敗軍の寄せ集めでしかなく、とりわけ一向門徒たちと高国残党勢力の意思統一はなかなか難しかった。その上、陸上は圧倒的な細川軍により、海上は、安宅水軍により完全封鎖され、中島の地は全く敵中に孤立していた。それでもこれまででは、南方すぐ側に位置する石山御坊の同志たちよりの物資の横流しを受けて、辛うじて余命を保っていたが、それもいつまでも続くはずはない。細川方の抗議を受けた本願寺証如や蓮淳ら一向宗の高僧たちは、中島の反乱軍を密かに支援していた者たちを摘発すると、即座に処罰して門徒の統制を強化した。

かくして中島は完全に孤立したわけである。細川方の完全勝利はもはや時間の問題。誰もがそう信じ、決して疑わなかった。だが…。

窮鼠猫を噛むの例え通り、例えどれほどの優勢に立とうとも、結果というものは、判明するまでは決して分らないものであった。

三月に入つて、中島包围軍に身を投じていた孫次郎利長は、包围軍の総大将である三好政長の命を受け、棕橋城近辺で勃発した一向一揆討伐のために出陣することになった。

「分かつておろうな、伊賀殿。此度の棕橋の一揆勢は、おそらく中島の同志たちを救うべく立ち上がったものに相違ない。奴らがいる限り、中島の阿呆どもは決して降伏せぬ。ゆえにその方は、早急に兵を率いて棕橋へ向かい、奴らを討伐せよ。棕橋近辺の地理は、誰より伊賀殿なればよく御承知のはずゆえ」

それが、総大将としての政長より下された命であつた。ならば、孫次郎としても従わざるを得ない。だから彼は、

「承知！」

とだけ大仰に答えると、まるで逃げるように政長の本陣から去り、そして自らの陣に戻るなり、早速全軍に出陣の命を下したのだつた。

よほど棕橋に縁があるのだらうと、行軍中、孫次郎は思わず苦笑いした。

棕橋城に立て籠もつて細川晴元とやりあつたのは、もう一年半近くも前の話になる。あの戦い以来、孫次郎の名声はうなぎ登りに高まつた。天下最強と称えられて久しい管領晴元とまともに張り合い、拳句比較的有利な条件の下に和睦したのだ。孫次郎を知る者は、それまでの彼に対する評価を変えざるを得なかつたし、初めて知る者は、この凄まじい神童の将来的可能性というものを本気で考えざるを得なくなつた。

安宅治興による養子話も、成長著しい三好家に今のうちから接近しておきたいという思惑のなせる業であつた。実際、養子話は、安宅氏だけでなく、讃岐の土豪十河氏からもそれとなく持ち込まれていた。養子話だけでなく、自らの姫を孫次郎に嫁がせようと企む者も、一人や二人ではなかつた。孫次郎自身が乗り気ではないことと、余りに急激な勢力拡大は、晴元の不審を買う恐れがあることなど、

様々な諸事情により、それらの話は一切進んでいないが、畿内に暮らす人々、上は諸侯から、下は貧民に至るまで、孫次郎利長こそ将来大化けする有望株だと信じていたのだった。

一揆軍は総勢五千という話だった。

孫次郎利長率いる三好勢は、総勢三千。これに伊丹親興、三宅国村ら、細川方の与力を加えると、五千ほどになるから、戦力的には互角であるといえた。

三月六日。

孫次郎の本陣にて、軍評定が催された。孫次郎を筆頭に、三好康長、三好長逸、三好政成ら三好一門、篠原自遁、岩成友通、今村慶満といった三好氏配下の有力部将が軒を連ねている。そんな中に、伊丹親興、三宅国村、塩川政年ら摂津の有力土豪の姿もあった。

「まずは総攻撃あるのみ」

総大将として、孫次郎は勢いよくそう宣言した。

「されど伊賀殿。敵も我らと同数。しかも神出鬼没な一向門徒であれば、眼前の五千が総力とも限りませんぞ。もしも敵が主力を隠していた場合、目の前の敵は完全な囷ということにもなります」

しかし伊丹大和守親興はそう言って、彼の血気を宥めた。

伊丹大和が意見は、正論といえば正論だった。けれど、孫次郎は不満である。このところ、何もかも上手くいって、どこか有頂天になっている彼は、伊丹親興如き土豪に反論されたのが何より悔しかったらしく、

「ならば、伊丹殿はどうすべきとお考えか？ 手を拱いて、敵を見守れとでも申されるのか？」

と、彼らしくもなく好戦的な口調と、ジトツと睨み付けるような視線で、伊丹大和に尋ねるのだった。

「いや、様子を見たほうがいいと申しているまで。一向門徒どもの底力は、伊賀殿とてご存知のはず。無闇やたらな攻撃は、いたずら

に自らの敗北を招いているようなもの」

伊丹は常に沈着冷静である。若くして歴戦を重ねてきた彼は、孫次郎の気持ちなど、手に取るように分かるのだった。

「…それもそうだが、しかし眼前の敵軍にも次々一向門徒たちが合流しているという。このまま捨て置けば、もはや我らには手に負えぬ大軍となりかねない」

孫次郎はいつになく焦っている。いや、逸つていると言っただ方が、この場合よいかもしれなかった。少なくとも、手柄を急いでいる。何と言つても、彼はまだ十四になったばかりの少年に過ぎないのである。如何に神童と言つても、この現実が変わることはない。

政長を出し抜きたい。今の彼は、そればかり考えていた。早急に一向軍を踏み潰し、あの小面憎い三好政長の鼻っ柱をへし折つてやりたい。そのためには、何が何でも総攻撃を仕掛け、鮮やかな勝利をもぎ取る以外に道はない。そう思い込んでいたのである。

「伊丹殿が仰せ、尤もなれど、これより総攻撃を開始する。これは、総大将としての命であるから、異議は許さぬ」

そうはつきりとした口調で言い切ると、孫次郎は清々しき笑顔で諸將を見回した。彼の家臣たちはともかく、伊丹親興、三宅国村ら与力の諸將は困ったように溜息など吐きながら、不満そうな面持ちで本陣より去つていった。

一向軍など、軽く潰せるに違いないと、孫次郎は思い込んでいた。これまで幾たびも戦いを経て、ほとんど連戦連勝だった。負けたことがないわけではないが、致命的な敗北は一度もない。ひたすら勝利を重ね、今の地位を築き上げてきた孫次郎にとって、今回も同様に勝利を掴めるに違いないと、根拠のない自信に満ち溢れていたのだった。

しかし…。

現実には、それほど甘くない。いつも勝っているからと言って、



今日勝てる保証はどこにもない。連戦連勝しながら、最期の一戦に敗れて滅び去った項羽の如き例もあれば、勝利などというものは、常に移ろいやすい幻のようなものだった。

孫次郎は聡明であるし、我慢強く、まさに英雄的気質を備えた天才少年であつたが、しかし、まだまだ現実の何たるかも知らぬ少年に過ぎなかつた。周りが彼を持ち上げ、称えるだけ、彼は浮かれた将来が囑望されればされるほど、彼はその期待に応えるべく必死になつた。そして、周りが見えなくなつた。

よもや敗北するとは、孫次郎は夢にも思わなかつたが、それが現実のものとなつたとき、彼は生まれて初めて、絶望を感じた。放心状態のまま、動くことすらかなわなかつた。側近であり、馬廻衆に属している松永甚介（松永久秀の実弟）が慌しく駆け込んできて、「お逃げくださいませ」

と、必死に進言しても、彼は心ここにあらずといつたように、ただ青々と広がる空をぼんやりと眺めながら、「ははは」と乾ききつた苦笑いを、壊れた人形の如く吐き続けていた。

伊丹親興が指摘したように、三好軍の眼前に布陣し、孫次郎と対峙していた軍勢は、一向軍の一部ではあつても、総力ではなかつた。伏兵を隠し持っていたのである。民衆の中に潜み、機を見計らっていた。そして、三好軍と困たる一向軍が決戦を始めたその瞬間、彼らは猛然と牙を剥き、怒涛の如く三好軍の背後を叩いたのだつた。前方の囿に全力を注いでいた三好方にとって、背後からの思わぬ敵に対処する術などあるはずもなかつた。前方、後方、双方から怒涛の如く押し寄せる敵軍の圧倒的攻勢を前にして、三月七日は午後、ついに孫次郎利長が戦線を離脱し、かくて三好軍は総崩れとなつた。

【飛翔編】第025章 逃避行

孫次郎にとって、これほどの大敗は、まさに生まれて初めての経験だった。哀れな敗軍の將と成り果てた彼の周りには、松永甚介をはじめ数人の側近や僅かな足輕が従うのみで、とても、今をときめく三好伊賀守の一行とは思えぬものがあつた。

「…甚介、水はないか？ 喉が乾いた」

と、孫次郎は実に辛そうにぼやいていた。

町を避け、人里を離れ、何はともかく敵の目から逃れ続けてきた孫次郎一行は、今日も薄暗い雑木林に野宿する破目となつた。

「ここにございます。ささ、どうぞ！」

甚介はすかさず水の詰まつた瓢箪を差し出すと、孫次郎はそれを勢いよく、ごくごくと呼ぶように飲み干した。

「すまん。…それにしても疲れた。とにかく、一度でいいから柔らかな布団の上にぐっすりと眠りたいものだ」

などとぼやきながら、彼は落ち葉で作つた布団にごろりと寝転がつた。気持ちよいとお世辞にも言えなかつたが、しかし無いよりはマシである。見張りのために眠ることすら許されぬ家臣たちの身の上を思えば、贅沢を言っている余裕などないことも分かつていた。「とにかく、雨さえ降らねば、こういう生活も快適なものですよ。

それがしは貧しい家に生まれましたので、幼い頃など、兄とよくこんな夜を過ごしたこともありました」

そんな風に呟きながら、松永甚介長頼はふと昔の自分たちのことなどを思い出したようで、「ははは」と楽しそうに苦笑いした。

幼くして父母を失い、ひたすら貧しく、日々生きることすらままならなかつたあの頃、兄とともに盗みを働いたり、野宿したりすることなど日常茶飯事だった。やがて兄が京の商家に丁稚奉公し、彼

自身も寺の小坊主になったりして、次第に頭角を現すと、そうした苦難は全て過去の話となつていったが、こうして見事出世を遂げた今も、あの頃のことを時折思い出しては、日々の戒めとしていたのだった。

「そんなものか。…そう言えば、一度聞こうと思つていたのだが、そなたは何ゆえ俺に仕官したのだ？ そなたの兄、松永久秀が推薦もあつたゆえ、とにかく登用してみたが、肝心の久秀は木沢殿の客将に納まつている。…無論、お主の実力は、俺とて高く評価している。ゆえに馬廻を任じているわけだが、お主の本心というものを、これまで一度も聞いたことがなかつたな」

ふと、孫次郎はそんな風に言つて、まじまじと甚介長頼のほうを振り向いた。甚介はというと、困つたように後頭部を摩りながら、恥ずかしそうに俯くと、

「当初は…、兄の命により、三好の若大将がどれほどの器量を持つているのか、調べるために参つたのです」

と、包み隠さず、あえて正直に全てを白状した。

「されど、不思議なものでございますが、いつしかそれがしは殿を心底好きになりました」

「…好き？」

「はい。と申しますのは、殿はそれがしの卑しき素性を知りながらも、馬廻に取り立ててくださりました。…はつきり申し上げて、左様なお方はこれまで一人もおりませんでした。それがしも昔は貧しく、日々生きることかなわぬ有様でしたので、それこそ恥も外聞もなく、いくつかの御家を回つて仕官してきましたのですが、どこも私の力量や実績を評価してはくれませんでした」

甚介は悔しそうに、腹立たしそうに、吐き捨てるように言うのである。そんな彼の様を見て、孫次郎は「ははは」と楽しそうに高笑いした。

「お前の目から見て、俺は力量を正当に評価してくれる主君ということか？」

「はッ！ ……それがしは兄上とは違い、自分の手柄や能力を説明したりするのが苦手ですので…」

「ははは。左様か。…俺も自身を表現したりするのは苦手だが…。なるほど、松永久秀はそういう力に長けているのか。…だからこそ、木沢殿にあれほど重用されておられるのかな？」

「…おそらく。ただ、木沢殿が兄上の弁舌力と、兄上が習得している甲賀の術を利用しただけと考えるように、兄上もまた木沢殿の力を利用して…。要するに、お互い、厳密な主従とは言い難い不思議な関係ですが」

「…互いが互いを利用しあう関係、か」

「はい。兄上は、それがしなどより圧倒的な才覚を持っていますが、何分、それがしの想像を遥かに超えた野心家でもありますので」

甚介にしる、孫次郎にしる、お互い、あの、年齢よりはいくらか老けた青年の顔を思い出すたび、笑いが絶えなくなつた。

「よし！ その圧倒的な野心家とやら、いずれこの俺の家来にしてやる。甚介、できると思うか？」

夜は深まり、時折ヒュウと肌寒き夜風が、竹やぶの笹を鳴らす。

空には月がいつぱいに広がって、風流な夜を演出していた。

孫次郎が叫ぶように言うと、甚介ははつきりとした口調で、

「殿ならば、できるでしょう！」

と、言った。

椋橋城の戦いに三好軍を蹴散らした過激な一向門徒たちは、あちこちで拳兵し、やがて燎原の火の如く摂津全土を呑み込んでいった。既に彼らは、石山御坊の統制下から完全に独立していた。本願寺証如が幾たび止めるように促しても、彼らは全く聞く耳を持たなかつた。そして彼らは、重税と戦乱に苦しんでいる貧民たちを糾合し、その勢力を急速に広げていった。

一向軍の急激な勢力拡大は、やがて中島を包囲する細川軍にも影

響を及ぼすようになった。椋橋に集結した一揆軍が中島を救うべく進撃を開始すると、細川軍を率いる三好政長は、迎撃すべく高畠伊豆守を大将とする三千の軍を派し、高畠伊豆守は椋橋と中島の、ちよとど間に位置する神崎川に布陣したのであった。

けれど圧倒的な一揆軍の大海戦術の前には、高畠勢の奮戦も大した意味はなかった。たちまちのうちに蹴散らされ、彼らは怒涛の如く中島を目指したのである。

「退く以外に手はありませんまい」

摂津大塚城主の山中又三郎が恐る恐る進言すると、政長は実に悔しそくに、思い切り床机を蹴り飛ばして、

「孫次郎の阿呆が！」

と、激しく怒鳴っていた。

何はともかく、政長は観念して全軍に撤退を下令した。かくて細川方による中島攻囲は失敗に終わったわけだが、政長自身は手勢を従え、中島に程近い自らの居城江口城に入ると、以後も中島の一揆軍を牽制する役目を担ったのだった。

孫次郎の逃避行も、決して楽なものではなかった。

各地に大小の一揆軍が跳梁跋扈し始めた今、彼にとり、民は皆、敵であった。だから民家を避け、町を離れ、兎にも角にも厳しい逃亡生活を、実に半月以上に渡り続けていたわけだが、三月も二十日になった頃、彼はようやく松永甚介の案内の下、大和は信貴山城まで辿り着いたのであった。

### 信貴山城。

ここは畠山氏筆頭家老、細川晴元の信任厚い近臣たる木沢長政の居城として、その城下町は近年急速に整備の進んでいる新興の有力都市の一つであった。

元來、木沢は河内飯盛山を居城としていたが、あえて信貴山に移したのは、大和に勢力を広げんとする彼の野望の表れでもあった。彼が目指しているのは、ひたすらに天下であったが、そのためにも地盤となりうる領地は少しでも広げておきたかったのである。そこで彼が目をつけたのが大和であり、名族畠山氏の筆頭家老たる立場も相まって、今では大和でも有数の大勢力となっていた。

何はともかく、信貴山に入った孫次郎一行は、そこで木沢長政の手厚いもてなしを受けつつ、先の戦いで散り散りになった家臣たちを呼び集めることにしたのだった。

信貴山城の西の丸に居所を宛がわれた孫次郎は、そこでひたすら反省の日々を過ごしていた。

結局、自らの血気が招いた敗戦であることを、彼も認めないわけにはいかなかった。もう少ししつかりと一向軍の動向を調べていれば、勝てないまでも、ここまで無惨な敗北は喫しなかったろう。自分の血気盛んが、ついに無数の兵を死に追いやったのだと思うと、やるせない気がした。

一方、孫次郎が信貴山にいると知った家臣たちは、続々とここに集まってきた。日に日に増えていく家臣たちの数は、いつしか二千を越え、三千に迫った。

「迷惑をかけたな」

孫次郎は、居並ぶ群臣の前に、溢れ出す涙をぐつと堪えながら、そう言った。

「殿もご無事で何よりにございます。殿と我らが健在ならば、先の戦の雪辱も、必ずや果たせましょう」

と、康長が家臣団を代表して言えば、

「左様。次こそは一向門徒どもを叩き潰してやろう」

孫四郎長逸も楽しげに騒いでいた。

家臣たちに絶望の色はない。不満も感じられなかった。負けたな

ら、次は勝てばいい。そんな具合、どこまでも前向きな考えに固執している彼らに、先の敗戦における孫次郎の責任を問う気など毛頭なかった。

「次、か…」

彼らの豪快な笑みを見てみると、ずっと悩み、苦しんで、ひたすら後悔の殻の中に閉じこもっていた自分が、なんとも情けなく思われてならなかった。負けたなら、勝てばいい。一度の敗北も、そこからより多くを学んで、次の勝利に活かすことが出来れば、必ずしも悪いことではない。歴史上、屈辱的な大敗を喫しながら、その後逆襲に転じて勝利をもぎ取った事例も多い。要するに、諦めるか否か。そこが大切なのだと、孫次郎は思った。

「そうだな。次こそは、必ず勝とう。そしてこの無念を何としても晴らしてやるのだ！」

孫次郎はそう力強く宣言すると、群臣たちはどれもおおおっ！と、殊更嬉しそうに拳を振り上げると、大地を揺るがすような凄まじき大音声で応えた。

四月六日。

信貴山を発した細川軍は、木沢長政の手勢五千、三好利長の三千を中核とし、総勢一万に達していた。

彼らは大和、河内、摂津方面の一揆軍を一掃しつつ進軍を重ね、四月二十日には、一揆軍の根城たる中島を攻囲した。その後、江口城に立て籠もって、今に至るまで一揆軍を牽制していた三好政長の軍勢一万五千と合流したので、第二次中島包囲軍は総勢二万五千に達したのだった。

三好勢敗北を契機に、各地で頻発した一揆も、各地を統治する諸侯の努力も相まって、一ヶ月足らずの間に沈静化し、今や中島の一揆軍主力を残すのみとなった。

度重なる細川方の抗議を受けた本願寺側が、暴徒化しつつある過激な門徒たちの鎮静化に力を入れるようになったことも、このところ一向一揆勢力が弱体化している一つの大きな理由であった。即ち破門の可能性すらちらつかせつつ、半ば強引に説得した結果、一向宗を基盤とした、組織立った一揆は比較的発生しにくくなったわけである。それでも、一部の門徒たちは、重税に苦しむ民衆たちを扇動したりして、依然として拳兵したりしていたが、規模にすれば実に小さく、強大な細川政権の敵ではなかった。

というわけで、中島包囲軍は後顧に憂いなく、じっくりと眼前の敵のみに専念できるようになったのだが、この眼前の敵が実にしぶとく、強いのだった。

「兵糧攻めとする以外に手はないか」

総大将たる政長の言葉に、

「そうですね」

と、副将格の木沢長政はすかさず頷いた。

既に中島は蟻一匹這い出る隙間のないほど、完全包囲されている。陸からは、三好政長以下細川軍二万五千が、海からは安宅水軍が布陣し、中島に対する物資供給を完全に遮断している。また中島南部にある石山御坊も、彼らに対する支援を完全に打ち切ったほか、彼らが証如の降伏命令にも叛いたことで、本願寺としても彼らを捨て置くわけにはいけなくなり、結果として悉く破門に処し、討伐する側に回るようになった。

孤立無援とは、まさにこのことであつたが、しかし彼らのしぶとさはなかなか異常なものがあつた。



「ですが、兵糧攻めなどして、逆にこちら側の物資が不足するよう  
なことになっては、木乃伊とりが木乃伊になるようなものですぞ」

と、高畠伊豆守が言つと、政長はにやりと不敵な笑みを漏らした。  
「兵糧ならば気にするな。堺衆が用立ててくれた軍資金もあるし、  
石山本願寺も詫びと称して、五千石の兵糧を提供すると約束してい  
る。これがあれば、ある程度の期間は長期布陣することも可能」  
「な、なるほど」

勝ち誇つたような笑みを見せる政長に、高畠は安堵したように、  
ほつと溜息をついた。

「敵の兵糧で、敵を倒す…、とはまた皮肉な話でござるなあ」

木沢はそう呟き、からからと笑つた。

「ま、石山の法主殿も我らとの本格的対立は避けたいに違いあるま  
い。五千石で、我が怒りを買わずに済むなら、五千石など彼らに  
とつては安いのだろうさ」

「ま、なんにしても坊主というのは、案外金持ちなのでござるな。  
それほどに金と兵糧があるなら、五月蠅い信徒どもに分け与えてや  
ればよいものを」

そんな風に呟く木沢に、誰もがクスクスと笑つた。

五千石、と一言で言つても、容易く出せる代物ではない。ただで  
さえ昨今はいくら兵糧があつても足りぬ戦乱の世である。本願寺が  
如何に隆昌を誇る宗門の総本山だからといって、それだけの額を容  
易く提供できる彼らの財力には、はっきり言つて誰もが啞然とした  
ものだった。

細川軍による中島総攻撃は、それからしばらく続き、立て籠もる  
門徒たちの必死の抗戦も空しく、七月に入ると、彼らの劣勢は誰の  
目にも明らかとなつてきた。

細川方による兵糧攻めがようやく功を奏してきた形となり、門徒  
たちの抵抗力も著しく弱体化した。その上、戦いを主導する細川晴

国ら高国残党勢力と、籠城軍の中核を占める一向門徒たちの、戦いに対する温度差が表面化するに及んで、中島籠城軍は内も外もがたがたとなった。

「もはや降伏する以外に道はない」

と、主張する坊官たちに対し、

「馬鹿なことを言うな。今降伏すれば、皆殺しになるぞ」

と言つて、徹底抗戦を主張する晴国である。

しかし形勢は明らか不利にある。門徒たちしてみると、こうして徹底抗戦していれば、いずれ総本山が助けてくれるに違いないと、僅かな望みに縋り付いて、今に至るまで抗戦していた。けれど、救いの手を差し伸べてくれるはずの本山は、逆に彼らを破門に処し、敵対姿勢を明確に打ち出してきた。こうなつては、本山から援軍など見込めるはずもなく、一揆勢の士気は戦線不利も相まって、急激に低下していたのである。

一人意軒昂な晴国にしてみると、これほど腹立たしき話はない。彼の夢は、高国政権の復活であり、自身が細川家の棟梁となって天下を支配することなのである。これは、そのための第一歩であり、晴国は弱腰の坊官たちをぎろりと睨み付けると、

「わしは戦うぞ。たとえ最期の一兵になつたとしても」と、叫んでいた。

七月二十五日、夜。

細川晴国は自らに従う主要な与党を集めると、今後の方針について密議していた。

「坊官どもは、既に降伏論で一致しているらしいですぞ」

と言つのは、細川氏綱と言つ青年武将で、今は亡き高国の養子だった男である。

「…あの弱腰坊主どもは、ことここに至つて、降伏すれば自分たちだけは助かるとでも思っているのか？」

晴国は腹立たしそうに、ぐぬぬと唸った。

情勢の不利は、晴国とて承知している。既に海も陸も細川軍により封鎖され、こちらは深刻な物資不足に悩まされていた。兵の戦意も低下し、とてもではないが、これ以上の抗戦は不可能だった。

「されど、坊主たちが降伏で一致したとなると、主戦論を唱えている我らを滅ぼさんとしてくるやもしれませぬ」

と、氏綱の実弟である細川藤賢は不安げな面持ちをして呟いた。

「…そうかもしれぬ。いや、もしわしが奴らの立場なら、そうするだろう。…となれば、座してやられるのを待っているわけにもいまいな」

晴国は、兄譲りの陰気な笑みを浮かべると、側に控える氏綱、藤賢兄弟をはじめとする重臣たちに、静かに目配せした。

重臣たちも、事ここに至っては、そうするより他に仕方がないと思った。坊主たちが行動に移す前に、こちらが動く。さもなくばやられる以上、もはや迷っている暇はなかった。

そして、細川晴国は動いた。

天満神社。

ここに、一向門徒を指揮する本願寺坊官たちの本陣がある。晴国自ら率いる軍勢一千は、闇夜を進み、そして神社一帯を静かに取り囲んだ。

「よいな。坊主と見れば皆殺しにしる。やられる前にやるのだ」

晴国の下知を受け、一千の軍はゆっくりと動き始めた。

氏綱を大将とする第一陣二百が、まず神社内に突入する。坊主たちのいる部屋は遠い。とにかく、彼の役目は逃げ道を封鎖することにあるから、あえて攻撃を仕掛けたりはしなかった。

氏綱勢の布陣が終わると、続いて藤賢率いる二百が怒涛の勢いで突入する。彼らは襲撃部隊であるから、殺気を隠したり、気配を殺したり…、といった面倒なことはしなかった。怒涛の如く社に侵入

すると、手当たり次第、片っ端から殺して回った。

総大将である晴国は、藤賢勢による肅清が始まったと見るや否や、重臣たちに包囲軍五百の指揮を委ね、自ら百の手勢を従えて神社内へと入った。氏綱勢の包囲を潜り抜け、辛うじて逃げ延びてきた坊主を見つけると、

「軟弱者に用はない。死ね！」

とだけ言つて、無情にも、一刀の下に斬り殺した。

その後も、残虐な地獄は延々と続いて、夜も明けかけた頃には、坊官たちは皆死んでしまった。晴国は神聖な神社にあるまじき血塗れの惨状を眺めながら、

「臆病者の末路よ！ ははは」

と、楽しそうに大声で笑っていた。

二十六日、晴国は、天満神社が晴元方により襲撃され、坊官たちは悉く皆殺しにされてしまったのだと、門徒たちに発表した。その上で、以後は自らが総大将になって戦いを指揮していくと主張したのだが、無論のことではあるが、そんな子供じみた説明を信じる者など一人もいなかった。

当然、門徒たちの怒り、憎しみは、明らかな下手人たる晴国と、その郎党に向けられた。それでも、指揮官たる坊主たちを失ったことで、纏まりを欠いた門徒たちは、晴国配下の手勢二千の暴力的な支配に抵抗する術を持たなかった。だから渋々晴国に従っていたのだが、そんなものが長続きするはずもなく、二十七日の正午頃、暴徒化した門徒たちの一部が、晴国配下の足軽数十人を袋叩きにして殺害する事件が起きるや否や、両者の対立は一挙に表面化した。

そして二十八日夜。

もはや細川晴国に、この事態を收拾させられるだけの力はなかった。

「逃げるしか、ありませぬな」

氏綱の言葉に、晴国は無念そうに頷いた。

細川晴国は、門徒たちだけでなく、大勢の配下すら見捨てて、氏綱・藤賢兄弟以下僅かな重臣のみ従えて、中島を脱出した。

無論、完全包囲下にある中島からの脱出は、決して容易ではない。だが、警備の甘い石山御坊側からなら、さして難しい話ではなかった。坊主の如き格好をしてさえいれば、本願寺の派した兵士はどれも見逃してくれたのである。

しかし、総大将細川晴国を欠いた中島は、もはや最悪の地獄と化した。裏切られた家臣たちは、怒り狂う門徒たちの攻撃をまともに受けて全滅し、さらに門徒たちにしても、怒涛の如く押し寄せてくる細川軍の猛攻に耐え切る力は残されていなかった。

七月二十九日。

中島攻めの先鋒を受け持った三好勢が、中島に一番乗りしたとき、既に門徒たちは戦闘意欲一つなく、武器と食糧、僅かな金を捧げて降伏した。当初、自棄になった門徒たちとの激戦も覚悟していた孫次郎は、まさに拍子抜けといったように、安堵の溜息を漏らした。

二十九日、午後。

三好政長も中島に入城した。本来であれば、籠城軍を指揮した有力な坊主たちを、戦後処理の名の下に斬り捨ててやるべきであったが、生憎、彼らは晴国により肅清されていたので、とにかく残された中堅幹部に対して、謹慎処分を命じると、後の処置は石山本願寺に委ねて撤退することにした。

中島が陥落したことで、細川政権が抱える問題の一つは、何とか解決を見たことになった。中島より脱出し、以後も晴元政権打倒を目指して戦い続けていた細川晴国も、中島陥落から一ヶ月が過ぎた八月二十九日、三好孫次郎や摂津の土豪三宅国村の手勢に追い詰められ、ついに天王寺にて自害した。生憎と、氏綱・藤賢兄弟をはじめ、主要な重臣たちは既に晴国とは行動を別にしていたので、これを捕縛することはできなかったが、高国残党勢力の首魁たる細川晴国が死んだのは、晴元にとってこれ以上ない朗報だった。

しかし…。

中島が陥落し、晴国が滅びたからと、晴元政権の抱える問題が全て解決したというわけではなかった。

問題というものはいくらでもあるのだ。そして、そのうちの一つが、ここ最近急激に深刻化して晴元政権を苦しめつつあった。

というのは、天文五年（一五三六年）は三月まで遯ることになるが、京都の一条烏丸において、比叡山延暦寺の僧侶と法華宗信徒が法論を行い、叡山の僧侶が敗れたのである。……なんて言ってしまうと、実に他愛無い問題に思えるが、この実に些細な問題をきっかけとして、叡山と法華の対立が深刻化するようになったのであった。平安期に最澄が創建して以来、長らく天下にその名を轟かせてきた叡山にとって、天文元年（一五三二年）の法乱の後、洛中の実権を握るようになった法華宗は邪魔者以外の何者でもなかった。それでも、細川政権との親密な関係を背景に強勢を誇る法華の勢いを前にしては、ひたすら耐え忍んで今までの日々を過ごさざるを得なかったわけだが、度重なる法華宗の横暴な振る舞いを目の当たりにするにつれ、彼らの我慢も限界を超えていったのである。

だから三月二十三日。

法論敗北を契機とし、耐え難きを耐え、忍び難きを忍んで、兎にも角にも今まで堪えてきた怒りを一挙に爆発させた比叡山延暦寺の僧侶たちは、まず法華宗の急激な勢力拡大を不安視するようになった細川晴元を強引に説得し、さらに六角定頼、木沢長政までも巻き込んで、総勢六万とも言われる大軍で都に突入した。そして二十七日には、法華二十一ヶ寺と呼ばれる法華宗系寺院を次々焼き討ちすると、これまで洛中に絶大な権勢を誇ってきた法華の信徒を、悉く都から追い払ったのである。

かくて法華宗は衰え、叡山が都の支配権を得た。

といつても、それは形ばかりで、追い落とされた法華宗門徒たちの怒り、恨みは凄まじく、彼らは隙あらば都に攻め上らんと、虎視眈々準備を進めていたのである。

既に天文五年も八月になり、長年晴元政権に抗い続けた細川晴国も滅びた。一向宗騒動にもけりをつけ、いよいよ政権基盤の強化に尽力できると思った矢先の事態に、晴元は芥川山城内で、すっかり頭を悩ませていた。

「いつそ、この際ですから、法華宗と叡山を争わせ、御所様が漁夫の利を占めるといふのも一興ですぞ」

と、木沢長政は言った。

「漁夫の利、のう」

それも手の一つではあると思う。だが、四年前や半年前の二度に及ぶ法乱のときの如く、三度、洛中を火の海とすれば、都を守る細川政権の威信は失墜しかねない。せつかく將軍家を迎え、正式に管領となり、彼の夢見る管領政治が具現化しつつある今、無用な騒乱は彼の好むところではなかった。

だが、今更叡山と法華の対立を、言葉で収拾に導くのは不可能に近い。互いに、その面子と意地がかかっているから、武力以外の解

決方法はないのかもしれない。

漁夫の利を狙う、というのも、事ここに至った以上、細川政権が取りうる唯一無二の現実的路線であるような気もした。だが、それは法華、叡山両雄の激突を前提とした策であり、調停役としての細川家がよほど上手く立ち回らぬ限り、畿内全土を巻き込む恐るべき宗教戦争の引き金を引くことにもなりかねないのである。無論、そんなことになれば、細川政権の威信など、かつての足利將軍の如く、木っ端微塵に吹っ飛ばであろう。

晴元は悩み、迷った。

如何にすべきなのか。分かっているような、分からぬような、複雑な気持ちだった。

「とりあえず考えさせる」

と、彼が言うと、

「御意のままに」

木沢長政は恭しく平伏し、そして足早に去っていった。

芥川山城は、言うまでもなく芥川山に聳え立つ典型的な山城である。その山麓部分には、城郭の主要部分が軒を連ね、麓を取り囲むように、重臣たちの屋敷が立ち並んでいた。

その一つ、三好政長の屋敷は壮大壮麗を極め、堂々と聳え立っている。その威容は、細川政権の大番頭と称えられる彼の権勢を、これ以上なく明快に象徴していた。

そんな政長の屋敷に、城を離れたばかりの木沢長政の姿があった。今をときめく実力者二人が、小さな茶室に膝を交えている姿は、なかなか不思議なものであったが、二人はさして気にせず、政長が作法通りの堅苦しい仕草で点てた茶を、木沢は無作法に飲み干した。「ところで、法華の門徒どもは、各地で同志を糾合し、都の奪回を狙っているという。都には山門の僧兵たちがいるだろう。越前殿は法華と叡山。いずれが勝つと思われるか？」



ゆつくりと茶碗を足元に置くと、木沢は唐突にそう切り出した。

「どちらが勝つか、など、それがしには到底分かりかねますな」

政長はニヤニヤと笑って、なかなか本音を吐かなかった。

「なるほど。…確かに、わしもどちらが勝つかははっきり言って分からぬ。だが、双方勢力的には互角。お互いが勝手に争い、どちらも衰えれば、漁夫の利は自ずと我らが下に転がり込む」

「でしような」

「だが、そう考えていくとき、邪魔となるのは三好伊賀守」

そんな木沢の言葉に、政長の眉がぴくりと動いた。

「三好宗家は法華宗の大檀那。先の法華肅清の折は、伊賀殿は掠橋で一揆勢に敗れ、三好家などとるにたらぬ存在だったゆえ、さして問題はなかったが、今は違う。伊賀殿の勢威は日に日に高まっている。もしも再び法華が窮地に追い込まれば、伊賀殿は必ずや支援の手を差し伸べるだろう。そんなことになっては、せっかく実力伯仲している両宗門の力関係が崩れてしまう」

「…」

「伊賀殿の支援下に、法華が勝利したとなると、法華と伊賀殿の勢威はますます強くなりましょうな。…それこそ、故筑前守殿の如く、御所様の筆頭重臣の座を占めるのも、時間の問題」

木沢は、時折政長のほうを見、彼の平静が見る見る乱れていく様を思う存分に堪能していた。いくら冷静を装うとも、政長にとって、孫次郎利長は最大の天敵、仇敵なのである。孫次郎の勢威が今以上に強まり、それが筑前守元長の如きものとなるなどと言われて、いつまでも冷静でいられるはずがなかった。

「ま、これは私の考えだが、いつそ伊賀殿には国許へお帰り願おう。筑前守殿が横死して以来、都合四年間に渡り、伊賀殿は国を空けている。帰国したいという思いは殊の外強いはず。ならば、伊賀殿の思い、我らの手で叶えてやるう。と、私は思うが、越前殿は如何思し召される？」

「…国に戻す、ねえ」

「左様。さすれば、伊賀殿は直接法華宗に手は出せませうまい」

木沢長政の示した策に、政長もすっかり乗り気になった。

無論、孫次郎を国に戻すことにより、彼の潜在的な力がさらに強大化する恐れはあるが、しかし法華宗と結びついて、叡山を撃破するようになるになれば、彼の声望は一挙に高まり、それはかつての元長をも凌駕するかもしれない。そんなことに比べれば、少々の勢力拡大は許容範囲内だった。

「とりあえず、それでいこう」

と、政長が言うと、

「さすがは越前殿。物分りがいい」

木沢は相も変らぬ不敵な笑みを浮かべつつ、ニタニタと笑った。

孫次郎は細川晴国討伐を終え、その論功の形で芥川山城に伺候すると、そこで晴元より直々に、本領への帰国を赦されたのだった。

ただ、彼もそれを素直に喜ぶほど、単純ではなかった。その裏にある企みに気づかぬほど、鈍感でもなかった。

「俺を遠ざけ、法華を潰す気だな」

と、その瞬間に気づいたものの、だからといって何ができるといっうわけでもない。他ならぬ晴元の命であれば、受け入れるより他に仕方がないのである。それに、国に戻りたいという感情は、ここずっと高まる一方であったから、個人的には小躍りして喜びたいところでもあった。

「ならば、文など書いて、法華の僧侶たちに軽拳妄動は慎むよう諭されては如何です？」

「文？」

三好康長の言葉に、孫次郎は「ふうむ」と唸った。そして、それも一つの手だろうと思ひ直し、早速自身直筆の書状を馴染みの僧侶たちに送ることにしたのだった。

九月に入り、法華と叡山の都を巡る対立はいよいよ激しさを増したが、予想された法華宗の拳兵そのものは、なかなか起きなかった。その間、三好孫次郎利長は手勢三千を従え、安宅水軍とともに畿内を去ると、密やかに国許へと戻っていった。

その後、法華と叡山はひたすら激しき睨み合いを続けた後、孫次郎の手紙外交の効果や、都での戦乱を望まぬ將軍家の説得工作もあって、兎にも角にも、法華宗は振り上げた拳を下ろすことを認めただった。

即ち。

十一月十四日。

細川政権、叡山、法華の三者代表による首脳会談が洛中にて催され、そこで法華宗は、半年前の法乱により焼失した寺院の再建を認めてもらい、また、その再建費の一部は細川政権や叡山が肩代わりすることを主な条件として和解案を受け入れたのである。

この和解交渉の結果、洛中は平穏を取り戻し、その仲介役を担った將軍家や幕府の威信も、わずかとは言え、確実に回復することになった。無論、細川政権にとっても、最大にして最悪の難問を克服したことで、その政権基盤は大幅に増強され、ようやく政権としては安定期を迎えることになったのだった。

そして……。

法華宗を和解へと導くにあたり、三好孫次郎の果たした功績が知れ渡るにつれ、彼の声望は飛躍的に高まるようになった。即ち、彼を国許へ追いやることで、騒乱の蚊帳の外に置き、その勢力拡大を防ごうとした三好政長や木沢長政の企みは、完全に失敗に終わったのだった。

【飛翔編】第028章 ひと時の平和

天文六年（一五三七年）四月。

阿波の国は、桜色一色に染まりきっていた。

三好孫次郎利長は、生まれてはじめて領主として国許に過ごしながら、一見退屈ですらある平和を、思う存分に堪能していた。

既に孫次郎は十五歳。もう立派な青年である。

弟の千満丸は、既に十歳となり、先日、孫次郎が烏帽子親を勤める形で元服し、名を豊前守之康と称した。この場合の豊前守は自称であり、正式に認められた官位ではなかったが、この当時はまああることであった（例として織田上総介信長）。

また三弟の神太郎は、二ヶ月ほど前に安宅氏へ養子に出し、末弟の又四郎も、来月には、讃岐の有力豪族十河氏の当主十河景滋の養子に入る予定となっていた。

本国に戻って以後の孫次郎は、こうした具合に、三好家の勢力拡大に明け暮れていた。時には勝瑞城に赴き、守護細川持隆を補佐して阿波の国政に参与することもあったし、あるいは有力な国人衆たちとの友好関係を強化するなどして、阿波における三好家の存在感を高めることも怠らなかった。とはいえ、元々三好氏は阿波最大の大豪族であるし、孫次郎利長自身の名声も加わって、国人たちは、あえて彼が求めずとも、挙って彼の下にやってくる。

そうした外交面だけでなく、内政面にしても四年に及ぶ近畿での生活を経て学んだ知識を活用し、富国強兵を目指して次から次へ、目覚しい改革政治を断行していった。時には領内へ自ら足を運び、民衆の声にも耳を傾けるようにしていた。増税に苦しむ民の怒りが、あの根強い一向一揆を生み出したのだということを、彼は嫌というほどに知っている。国の源は民であり、民の気持ちこそ国の強さなのだ。常に自戒し、また家臣たちに対しても、口をすっぱくして言い聞かせていた。横暴な振る舞いをする役人は、悉く罰し、それが

例え細川持隆の家臣であろうと、容赦はしなかった。

しかし、一方では遊びたい年頃でもある。だから、彼はこうして暇さえあれば、思う存分に楽しむことにしていた。

春は桜、夏は海、秋は紅葉で、冬は雪。

せつかく春なのだから、そこら中を桜色に飾っている風物詩を見逃す手はない。思い立ったが吉日とばかり、ひとしきりの仕事を片付けると、孫次郎は全く唐突に、

「今日花見をするぞ！」

と、家臣たちに命じたのだった。

で、彼は二百の兵を従えて城を発すると、桜並木の広がる町外れの小高い丘までやってきた。

急遽花見に駆り出された家臣たちにしてみれば、これほどに迷惑な話もない。また花見の場を孫次郎一行に占拠され、見るべき場を失った民衆にしても、実に腹の立つ話だった。けれど、相手が三好孫次郎利長とあっては、文句など言えるはずもないし、日ごろ彼の厳しき仕事をつぶさに見ている家来たちは、こんな些細な我俣に対してまで、

「なりませぬ！」

とは言えなかった。

そんなこんなで、孫次郎は最も良い特等席を占拠し、ふんぞり返るように、我が物顔で座った。今日ぐらいは贅沢を言っても、我俣を言ってもよかろうと、彼は思い切り横暴な殿様になりきるつもりでいた。

「兄上、兄上！」

そこに、慌しく駆け込んできたのは、七歳になったばかりの少年又四郎だった。父元長晩年の子で、彼には言うまでもなく父の記憶など全くないが、父がこの幼き末子を誰より愛していたことを、孫次郎はよく覚えていた。

「おう、又四郎！ 何事だ？」

桜の木の下に、楽しそうにふんぞり返っている孫次郎は、いそいそとやってきた末弟の無邪気な顔を見て、「ははは」とにこやかに笑った。

「兄上、遊んできてもよろしゅうございますか？」

「遊ぶ？ …花見は、遊びとは違うのか？」

孫次郎がじろりと睨むと、又四郎はムツとしたように、「違います！」と、言った。

「こんな腹の足しにもならぬ花などにそれがし興味などありません。遊びというのは、鷹狩りのことです」

「鷹狩り？」

「左様です。大体、最近は養子に行くのだからと、修行ばかりで、身体が鈍っていけませぬ。少し、大いに身体を動かしたいのです」

「…なるほど」

孫次郎は腕組みながら、何やら一人考え込むと、途端、すつくと立ち上がって、

「者ども。これより鷹狩りを行う。…ただ、この辺りは少し狭い。

ゆえに、これより白地城に赴き、そこで盛大に鷹狩りを行う！」

と、凄まじき大音声を張り上げて、居並ぶ家臣たちに命じるのだった。

「は、白地ですか？ さ、されど、そこまで赴けば、今日中に帰城することは叶いませぬぞ」

松永甚介が慌しく諫言すると、

「戻る気はない。今宵は白地城に過ぐす！」

孫次郎はけらけらと笑って、問答無用といわんばかりの顔をして、家臣たちを睨み付けた。

白地城は、四国のご真ん中に位置する典型的な山城だった。より具体的に言えば、阿波国三好郡内にあり、代々、小笠原氏に端を發

する大西氏が本拠地としてきた城であった。この大西氏も、小大名ゆえの宿命というべきか、独立した大名としての地位を確立することとは出来ず、形の上は守護である細川家に、実質的には近隣の大名である三好氏に臣従していたのだった。

その大西氏の当主は大西出雲守元武と言い、今では三好家配下の有力な宿将の一人となっていた。本来、彼の立場は阿波守護家から、三好家に配された寄騎大名でしかなかったのだが、三好家が元長の代で飛躍的成長を遂げた後は、寄親、寄騎の関係を超越した主従関係を結ぶに至っていたのだった。

それはともかく、孫次郎利長が二百の家臣を従えて、堂々と白地にやってきたのである。大西出雲守は、突然のことに驚きながらも、何はともかく主君の御越しである以上は、慌しく出迎えの準備を整え、自ら数騎を率い、孫次郎一行がやってくるであろう街道まで出向いたのだった。

「出雲殿、出迎え御苦労にござる！」

そんな孫次郎の言葉に、出雲守は「はッ！」と仰々しく頭を下げた。

三好孫次郎はというと、畿内で赫々たる武勲を挙げた若き俊英と評価の高い青年像とはかけ離れた、異様な出で立ちをして、「ははは」と笑っていた。

煌びやかな朱色の南蛮鎧を身につけ、乱れた髪にもさして気を遣う風もなく、悠々とやってくる。呆然としている出雲守を尻目に、「これよりこの辺りで鷹狩りを行うつもりだが、出雲殿もどうかかな？」

などと言って、にこりと微笑んでいた。

後に鬼十河と称えられる圧倒的武勇は、未だ三好又四郎といった幼年期より、片鱗を見せていた。

馬に跨れば、まさに人馬一体。弓を扱えば、百発百中だった。空

高く舞い上がって、縦横無尽に飛び回る鳥を、流鏑馬で射落としたときなど、見物していた孫次郎は驚きを隠せなかった。

「全く、あいつには驚かされる」

と、呆気にとられたようにぼやく孫次郎に、

「あれは、まあ、学問が嫌いな分、いつも鍛錬にのめり込んでいましたから」

豊前守之康はそう言って、嬉しそうに笑った。

「にしても豊前。俺は実によい兄弟をもったようだ。…父を失ったときなど、もはや俺一人で三好家を守っていかねばならぬのだと、深刻に思い悩んだものだが、考えてみれば、お主もいるし、神太郎も、又四郎もいる。この四人が力を合わせれば、我が家は父祖時代など目でもないほど飛躍できるに違いない」

「…そう、ですね。されど、やはり当主である兄上の御力あってこそ三好家でござりますれば、兄上が優秀ゆえに、父上死後、ここまで持ち直すことができたのです」

そんな風に言う之康に、孫次郎は恥ずかしそうにはにかみながら、にっこりと苦笑した。

「ま、何はともかく、わが兄弟は互いにどういう立場になるうと、常に仲良く、皆が死ぬまで鉄の如き結束を守り抜いていきたいものだ」

「はい。出来れば、劉備、関羽、張飛が如く…」

「ははは。そうだな。だが、俺たちは劉玄德たちよりずっと深く結ばれている。何しろ、彼らは義兄弟だが、俺たちは真正正銘の兄弟だ。そして、彼らは三人だが、俺たちは四人だ。この四人、力を合わせて三好家がため、天下がために働き、死ぬるときは、できれば全員同年同月同日といきたいものだ」

そんな孫次郎の言葉に、豊前守之康は嬉しそうに高らかに笑った。

やがて、日は落ち、西の空は血のように真っ赤に染まっていた。

思う存分遊び終えた又四郎少年は、満足気な笑みを浮かべて、二人の兄の下に駆け込んできた。



「お主は凄いや」

と、長兄たる孫次郎が言えば、

「どうです？ 俺はこれから養子に行くけど、この力で長兄を助けるんだ」

などと、殊勝な言を吐く又四郎であった。

天文七年（一五三八年）九月。

従五位下越前守三好政長は、従五位上越後守に叙任し、かつ同月中に仁和寺が所有している荘園の代官職を幕府から与えられるなど、権勢を極めていた。

世人は、既に彼を天下の宰相と見、目聡い者たちは、早速、ありとあらゆる手を使って、彼の歡心を得るべく努力するようになった。細川政権が強大化するにつれ、それに比例するように政長の地位も高まった。何と言っても、彼には細川晴元の絶対的信用があるわけ、最近では芥川山城内で酒池肉林に耽るようになった晴元に代わって、政治の全てを取り仕切るようになっていたほどだった。

例えば…。

細川政権執政の立場から、政権財政の確保を目指して、山城北部に段銭を課したり、その他様々な法令を定めたりした。そのたびに発した管領奉書には自らの名も署名するなど、その権勢ぶりは主君たる晴元に勝るとも劣らぬものであった。

けれど、こうした彼の専横を、細川政権傘下の諸大名が快く認めていたわけではない。実際、政権の強大化、即ち中央集権化を目指す政長が、反抗的な諸大名に対する締め付けを著しく強化していたことに対し、反発や不満も高まっていたのだった。

しかしこうした反発を見逃すほど、政長も甘くない。そもそも細川政権というのは、名門細川氏の権威と、將軍家をその庇護下に置いていること、幕府管領としての権限を拠り所として成立しているに過ぎない。細川家自体は、他の諸侯よりは少しばかり大きな勢力を持った大名家に過ぎず、極論すれば、將軍家を盟主とする大名連合の筆頭格に過ぎないのである。

これは余談であるが、細川晴元政権は、現代において五十五年体制を崩壊させた細川護熙連立内閣にも似ている。細川連立政権は、

非自民非共産を旗印に日本新党、新生党、日本社会党、新党さきがけなど八党派が連携して成立したものだ、この際、日本新党の党首だった細川が政権首班とされたのは、肥後熊本藩主家の末裔で、近衛文麿元首相の孫でもある血筋が盟主と仰ぐに相応しいものだったからと言われている。

それはともかく…。

細川護熙政権と、それを継いだ羽田孜政権がそうだったように、絶対的な中核となりうる存在を欠いた連立政権というものは、些細なきっかけで、いとも容易く崩壊してしまうものだった（非自民連立政権の場合は日本社会党、新党さきがけの離反）。だから、三好政長にとって、ほんの小さな不満の芽も、見過ごすわけにはいかなかったのだ。盟主たる細川家の実力を、諸侯に思い知らせて始めて政権基盤は確固たるものとなりうるのである。

「内藤国貞。まずは、これを滅ぼす」

政長は、京の管領御所で、側近たちを前にそう宣言していた。

「丹波守護代の内藤殿ですか？ まあ、確かに内藤殿は越後殿がやりようをいちいち否定し、文句ばかり言っておられましたからな」

と、側近たちも一様に口を揃え、政長の判断を快く認めていた。

だから、政長も気分良く、早速芥川山に使いを送ると、内藤討伐の許可を晴元に求めたのである。内藤を滅ぼせば、彼の領地を細川の直轄領に組み入れることも出来るし、何より、彼と同調して自分の政治方針に楯突いている身の程知らずの連中を黙らせることも出来るだろう。

政長の使者は芥川山城に登城し、晴元に謁見した。日々女子に明け暮れ、酒浸りの日々を過ごしていた彼は、とろんとした瞳のまま、使者の顔をまじまじと見つめていた。

「ふーん。内藤攻め、ね」

晴元は、そういう政治絡みの話を聞くのも面倒臭いと言わんばかりの顔をして、

「越後の意に任す」

とだけ突き放すように言った。

何はともかく、これで政長は誰に気兼ねすることなく、丹波出兵に臨むことができるわけである。

だから、早速彼は内藤と敵対している丹波八上城主の波多野秀忠と連携すると、彼とともに、総勢一万六千に及ぶ大軍を従え、丹波に進軍したのであった。

内藤国貞は、八木城を本拠地として、丹波一国に大きな勢力を誇る有力国人であった。丹波守護代の地位にあり、事実上同国を支配している。

彼は元々、細川高国の家臣であった。国貞の『国』の字も、高国から与えられたものである。しかし、高国が重臣香西元盛を肅清した事件をきっかけに勃発した波多野植通、柳本賢治（いずれも香西元盛の兄弟）らの叛乱を受け、彼は高国から波多野方、さらには晴元方に寝返った。以来晴元政権の重鎮として、事実上丹波を預かっているわけだが、自らの実力を過信して、政長批判を公然と繰り返したことが、命取りとなった。

政長率いる討伐軍は怒涛の勢いで進軍し、やがて八木城を取り囲んだ。内藤勢も必死の奮戦を示して抵抗したものの、所詮、多勢に無勢である。このままの状況が続くようであれば、陥落は時間の問題だった。

「何とかせねば…」

国貞の焦りは深まった。

「何とか…」

彼は、いてもたってもいられぬといった様子で、焦燥感に満ち溢れている城内を歩き回った。家臣たちは、彼を前にして、平伏す力もないといった風に、疲れきった様子でへばっていた。

「ここは、伊賀殿におすがりするより他に仕方がありませんぞ」

と、側近たちは、口を揃えてそう言った。

「伊賀殿は、三好家の宗家ゆえ、分家に過ぎぬ政長より格上にございますし、御所様も伊賀殿の進言なれば、お聞き入れ下さりましよう。我らの本意が御所様に伝われば、御所様とて我らを滅ぼそうとはなされないでしょう」

「なるほど」

国貞も、それ以外の良策はないように思えた。三好伊賀守利長は、まだまだ若い、しかし今や細川政権に確固たる地位を築き、絶大な影響力を誇っている。安宅氏や十河氏に養子を送り込み、両家を取り込むなど、三好家自体の国力も急激に強まっていた。

三好家が仲介すれば、あるいは晴元を動かすことも可能かもしれない。晴元が動けば、政長とて兵を引くだろう。

天文七年十一月五日。

内藤家から差し向けられた急使は、ちょうど堺に逗留中だった孫次郎利長の下に到着し、慌しい仕草で、国貞からの親書を手渡した。それを読みながら、孫次郎は困ったように小さな溜息を吐いた。

「俺に御所様を説得してくれと書いてある」

と言つて、彼は側近の松永甚介にそれを下げ渡した。

「聞くところによれば、八木城は越後殿の軍勢に包囲され、陥落寸前だそうですね」

「まあな。だから俺に助けを求めにきたのだろうが、…さてさて、俺にそんな力があるのかな？」

そんな風に、ニタニタと自信に満ちた不敵な笑みを漏らすと、孫次郎は溜息混じりに、ごろりとその場に寝転がった。

「実際にあるかないかはともかく、内藤殿は、あると思ったから、殿に助けを求めにきたのでしょ」

「ふーん。だが、助けを求められた以上、断るのは男ではないな」

孫次郎は弱冠十六歳である。若者特有の血気、情熱、そして正義感を全身に漲らせながら、楽しそうに体中で笑った。

「それにしても、俺の名も随分と知れ渡ってきたのだな。たかが十六歳の餓鬼を、最期の頼みとするのだからな。…ま、いずれにしても、此度の騒動、俺の手で收拾することができれば、また一人、俺の味方が増えるというわけだ」

などと呟きながらも、すっかり乗り気になった孫次郎は、早速甚介に諸事取り計らうよう指示を出すと、自らも堺を離れ、芥川山へ急ぐことにしたのだった。

十一月六日午後。

駆けに駆け、ようやく辿り着いた芥川山城は、かつて見た、堂々と天下に君臨してきた細川政権の覇府ではなく、墮落しきつた魔府といったほうが良いような、何ともいえず不気味で、空しい雰囲気漂っていた。

華美な音曲が、無性に寂しさを掻き立てる。どこともなく響き渡る妖艶な声色に、諦めにも似た侘しさを感じずにはいられなかった。三好孫次郎利長は変わり果てた主君の有様に、ただハアと溜息を吐いた。昼間から酒を飲み続けていたらしい彼は、すっかり酩酊して、孫次郎を見る目も、とろんとして焦点の定まらぬだらしなきものであった。

「御所様におかれましては、少々御酒が過ぎますようです。いまや天下に御所様に並び立つ者はおりませぬが、さりとて天下安泰とは程遠い現状。まだまだ御所様には頑張ってもらわねばなりません」しばらく見ぬ間に、すっかり腑抜けと化した主君の哀れな様に、孫次郎は心の中に大きな溜息を吐いた。これが、あの細川晴元なのだろうか。確かに父の仇であるし、その優柔不断には散々悩まされてきたが、基本的に、孫次郎は晴元が嫌いではなかった。

「五月蠅いぞ、孫次郎！ 余は天下人なのだ。天下を治める余が、何をしようが勝手であろう」

と、凄まじき剣幕で怒る晴元は、その勢いのまま立ち上がった。

けれど、たちまち崩れ、転げ落ちた。側近たちが「殿！」と、慌しく駆け寄るが、ふらふらとして、それでも必死に平静を装うとする彼の様に、孫次郎は困ったように苦笑いした。

「されば、その天下人に申し上げます」

孫次郎とても、弁士として、これまで幾たびも修羅場を潜ってきた。晴元がどれほどに怒鳴ろうが、彼はさして気にする風もなく、

「丹波出征の儀についてでござりますが」と、言った。

「丹波？ …… ああ、内藤が謀叛したゆえ、越後が征伐に向かっているが…。それがどうかしたのか？」

「内藤殿謀叛と御所様は先ほど仰せられましたが、果たして、内藤殿はまことに謀叛など起こしたのですか？」

「…」  
「それがしが聞き及ぶところ、内藤殿が謀叛をしたなどというのは、全くの誤報にござる」

「…なに？」

晴元は、すっかり酔いから醒めきったような、常の如き顔をして孫次郎を睨み付けた。

「かつてのそれがしもそうでしたが…。此度の一件、全て越後守殿が企んだ陰謀でござりまする。即ち、越後殿の施政方針に多少反発していた内藤殿を血祭りに上げることで、越後殿は他の諸侯に対する見せしめとしたのです」

「…見せしめ？」

「左様。…無論、見せしめとするも、決して悪い話ではござりませぬ。越後殿の政治は、全て御家のため、御所様が御為です。されど、やり方が厳しかったため、諸侯の反発を買ったのです。その反発を押しつぶすため、手っ取り早く内藤殿討伐の兵を興したというわけです」

「…」

「そして、既に内藤殿は徹底的に追い詰められています。見せしめ

とはいえ、これ以上やる必要性がどこにあります？ 現時点であれば、諸侯も御所様の力の強さを知り、無意味な反発はやめましょう。されど、これ以上やれば、次は自分の番であると思いい、その恐怖はやがて御所様に対する不満、不審、怒りへと変わります。…かつて六代將軍足利義教公が何ゆえ殺されたのか。そのこと、よくよく御考え下さりませ」

孫次郎はきつぱりと言い切って、晴元に二の句も告げさせなかった。晴元はといえば、まだ酔いの残る頭で、しばらくぼんやりと考え込んでいたが、「それもそうだ」と呟くや、彼の意を受け入れる覚悟を決めたようで、

「よかるう」  
と、言った。

そして、十一月十日。

この日、晴元の派した急使が、八木城の内藤国貞と、八木城を囲む三好政長本陣に到着した。

越後守政長は、晴元の上使を前にしても、あからさまな不審と不満を隠そうともしなかったが、しかし晴元の上意である以上は、抗うわけにもいかなかった。無論、城に立て籠もって、陥落寸前の危機に追いやられていた内藤国貞に、拒む理由などどこにもなかった。かくて、和議は成立したのである。

内藤国貞は、政長軍に城を明け渡した後、釈明のために十一月十五日、芥川山城は晴元の下に伺候した。その上で、改めて晴元より八木城を与えられ、さらに引き続き丹波守護代として同国を支配することが認められたのである。とはいえ、領地の一部は没収され、それは三好政長と、波多野秀忠の両名に与えられた。

十二月二日。



無事、八木城に戻った内藤国貞は、そこで孫次郎利長の使者としてやってきた松永甚介と面会していた。孫次郎の意を受け、密かに八木に入った甚介は、

「今後とも三好・内藤両家、親しく付き合つて参りたいものです」と、分かりきつた社交辞令を述べ、恭しく頭を下げた。

甚介がわざわざ出向いてきた狙いが分からぬほど、内藤国貞も鈍感ではない。彼の不敵な顔の中に、凄まじき覚悟を感じ取ると、内藤は仰々しく何度も大きく頷いた。

「左様ですな。それにしても、此度のことは、伊賀殿には何とお礼申し上げてよいやら分からぬというものでござる。この次、伊賀殿に万一のことあらば、この内藤国貞、家を挙げて、伊賀殿の御為に尽力する覚悟です」

そんな風に言う内藤国貞の殊勝な姿に、松永甚介長頼はにやりと不敵な笑みを漏らした。

「いずれ、内藤様にお会いしたいと、わが殿も申しております。その折は、是非よろしくお願い申し上げます」

「いや、こちらこそ。…本来、わしのほうから出向かねばならぬ身を、わざわざ松永殿が御越しくださり、恐悦至極に存ずる」

と、内藤は恥ずかしそうに頭を掻きながら言った。甚介もまた愛想笑いを浮かべつつ、内心は大袈裟に高笑いしたい気分だった。

内藤もおちた。

勞せずして…、と言う言葉は決して適當ではないが、しかし戦という常套手段を用いずして、着々その勢力を飛躍的に広げていく主君孫次郎利長の政治的力量の凄まじさに、甚介は心の底で舌を巻いた。これならば、彼が天下を取る日も近いのではないか。そう思うと、途端、彼の心は、体は、なぜだか熱く燃え滾ってきた。自分のことのように、興奮が泉の如く湧き上がってきた。

天下を取る人。

そう思つて、孫次郎利長という人を思い浮かべると、確かにそうなるべくして生まれた、選ばれし者であるような気もした。とにかく

く、陪臣に過ぎない自分に対してまで、恭しく頭を下げている丹波  
守護代の男を見ていて、彼はそう思わずにはいられなかった。

三好家の勢力は、確かに飛躍的に高まった。

三好利長の尽力により、内藤氏が危機を脱したことで、細川氏傘下の諸侯たちも、さらに彼を高く評価するようになった。また、三好政長に対抗しうる唯一の人間だとして、彼に接近を図ろうとする者も少なくなかった。

けれど、そうした状況を、当の三好政長が快く思うはずもない。彼は何とか孫次郎の勢力拡大を防ぐべく、木沢長政と連携するなどしたが、日に日にその力を強める孫次郎の前には、大した意味もなかった。

三好越後守政長と三好伊賀守利長の対立が日に日に深刻化する中で、天文七年は、比較的静かに幕を閉じ、世の中は、新たに天文八年（一五三九年）を迎えた。

しかし…。

天文八年は、その初っ端から不穏な兆しに満ちていた。即ち、細川晴元が都において開いた新年の祝賀に、三好伊賀守が参席しなかったのである。彼はずつと国許に留まり、晴元の再三の上洛命令を受けても、微動だにしなかった。

当然、世論は俄かに騒がしくなった。何と云っても、伊賀、越後の両三好家が、先の丹波騒動以来激しく対立していることを知らぬ者はない。細川政権執政たる越後守政長と、政権傘下屈指の雄藩たる伊賀守利長の激突は、時間の問題であると、かねてから囁かれていたほどなのである。

だから、誰もが、伊賀守は拳兵すると考えた。阿波に留まっていたのも、そのための準備だと、誰もが信じて疑わなかった。

「誠に伊賀殿は拳兵なざる気なのかのう？」

新年祝賀に三好伊賀守の姿がないと分かるだけで、既に諸侯はこんな調子で、完全に浮き足立っていた。もしも孫次郎が挙兵するつもりだとすれば、どちらに味方すべきなのか。諸侯たちが悩み、迷うのも無理はない。

三好孫次郎の勢力は、既に細川家中最強である。単独の大名家としてみるなら、無論、三好家に匹敵する領地を持つ者は数多い。だが、淡路最大の土豪にして、瀬戸内海を支配している安宅氏や、讃岐の有力豪族十河氏を事実上掌中に収め、その上、丹波守護代の内藤氏とも友好な同盟関係を築いている彼の力は、圧倒的に強大だった。もしも孫次郎が挙兵すれば、少なくともこの三家は伊賀守方に与力するだろう。これに阿波国最大の土豪たる三好家の力を加えると、その勢力は細川政権の半分近くに達するといつて過言ではなかった。

逆に越後守政長はというと、確かに彼は摂津江口城を中心に、摂津、山城、丹波などに根強い勢力を持つてはいる。だが、孫次郎と比べれば幾分劣る上に、彼に与力するであろう大家家といつても、せいぜい木沢長政ぐらいであつた。細川晴元が明確に政長を支持すれば、また話も違つたろうが、孫次郎優位と見れば、晴元とて安易に政長を支持しないだろう。また、有力な同志といえる木沢長政にしても、ここ最近はその出身母体である畠山氏内部で急激に台頭している遊佐河内守長教に実権を奪われ、かつてほどの影響力を失つているというのが、専らの噂だつた。

その木沢長政は苦境に立たされていた。

木沢と言う人は、今でこそ河内守護代、信貴山城主として畿内に絶大な影響力を誇っているが、元来は、畠山氏に仕える数ある中堅家臣の一人に過ぎなかつた。

そこから持ち前の知恵と胆力で、次第に頭角を現した。彼がその存在を天下に轟かせたのは、主君畠山義堯とともに細川晴元方に与

力して以後のことだった。

政治的才略に長け、戦国と言う荒波を生き抜くに足る鋭い嗅覚を持っていた木沢長政は、この当時既に畠山義堯の重臣にのし上がっていたが、義堯より晴元の方により大きな将来性があると見た彼は、自ら晴元支援軍の総大将の役目を買って出て、畠山軍を率いて戦列に加わった。そして高国の重臣だった細川尹賢（氏綱・藤賢兄弟の実父）を摂津富田に滅ぼすなど、大いに活躍したのである。その過程で、晴元の信頼を勝ち取ることに成功した彼は、単なる畠山家の有力被官から、晴元政権の実力者へと飛躍するきっかけを得ることになったのだった。

その後、三好政長と結び、三好元長・肅清に貢献したことは先に記した。この際、彼は元長と結んだ主君義堯をも葬り去ることに成功し、その上で、かつて義堯と畠山家督の座を巡り、激しく争ってきた畠山積長を跡目にするという荒業で、畠山家の実権を掌握したのだった。

けれど、そこで終わらないのが、稀代の陰謀家と評される所以である。即ち、彼は天文三年（一五三四年）、遊佐河内守長教と共同で、主君としていた積長を廃し、守護の座から追放してしまうのである。その動機は、木沢や遊佐の傀儡に甘んぜず、意欲的に政治に取り組もうとする積長と彼らの間に、深刻な対立が生じたからといわれているが、実際のこととは分からない。ただ、その結果、彼らは積長の実弟長経を新たな守護に擁立することで、その地位を確固たるものとしたのであった。

とまあ、一見すると至極順風満帆に見える木沢長政であるが……。しかし木沢の権力掌握には、後援者としての細川晴元や、外部の同盟者としての三好政長、内部の同盟者としての遊佐長教の存在が欠かせなかった。そして今、その遊佐長教が急速に畠山家中の信望を集め、勢力を拡大していた。その背景には、晴元の信任を背景に勢力を広げた木沢に対する嫉妬や、彼の横暴な振る舞いに対する反感があったというが、ともかく遊佐はこれら反木沢の雰囲気を手く

掴み取ることで、事実上畠山家の最高権力者の座を我が物にしていたのである。聡明で、知識に長けながら、権力欲旺盛ゆえに人と馴れ合うことが苦手な木沢長政にとって、遊佐長教という男はこれ以上なく厄介な政敵であった。

一月二日。

京は、木沢屋敷。

「このままではいかん」

そこで、木沢長政は苦りきった顔をしてぼやいている。

「如何なさるのですか？ おそらく、伊賀殿は拳兵する腹でしょう。さすれば、越後殿は苦境に立たされますが」

と言うのは、彼の弟たる木沢左馬允であった。

「越後殿だと？ …今はそれどころではないわい。お主も見たらう。河内の奴め。新年祝賀をよいことに、御所様に阿諛追従並べ立てて、信任を得んとしおった。このわしの株を奪うつもりだ。許せぬ」

木沢長政の怒りも、彼の立場を思えば尤もなことだった。なんといつても、今の彼は、畠山家中における信望を失っている。家中の派閥勢力図で言えば、遊佐が六、木沢が三といったぐらいで、無派閥の一割を加えても、到底遊佐には勝てない。

そんな彼が、唯一遊佐に勝っているのが、天下人細川晴元からの信頼度であった。そして、これがあるからこそ、木沢長政は遊佐に対し、絶対的な政治的優勢を確保できているのである。しかし、これすらも遊佐に奪われると、木沢長政と言う存在は、畠山氏配下の有力大名の一つに成り下がってしまうのだ。それは即ち、天下の政権（細川家）に関わることはおろか、畠山氏の政務にすら口出しできない田舎大名に零落れることを意味しているわけで、ひたすら天下を目指して歩み続けてきた木沢に許容できる話ではなかった。

「されど、よろしいのですか。越後殿は、木沢様の唯一無二ともいえる確実な同盟者でござりますぞ」

と、松永久秀も言ったが、既に木沢長政に聞く耳はなかった。

「焦って、耄碌したな」

そんな彼の様を見つめながら、松永久秀は心の中にそう呟いていた。

「三好越後がどうなろうと、俺の知ったことではない。だが、越後を助け、伊賀殿の行動を押さえ込まねば、木沢長政の運命などそこで終わりだ。越後がこの危機を乗り越え、強大な勢威を手に入れば、遊佐長教など大した敵ではないというのに……。だが、もしも伊賀殿が越後を倒し、その勢力を飛躍的に伸ばせば、そのとき奴が如何に畠山家の実権を握っていても、何の意味もなさぬ。畠山家の力など、たかがしれている。そんな力を如何に結集したとて、伊賀殿には勝てまい。…もし、伊賀殿とも越後と同様に同盟を結べると思っているなら、それは大間違いだ。伊賀殿にとつて、木沢長政も三好政長も、基本的には同じ父の仇に過ぎないのだ。…だが、あれは既に目先のことに囚われすぎて、大局を見失っている」

さてさてどうすべきなのか、松永久秀は一人じつと考え込んでいた。このままいけば、もはや木沢に命運はない。いや、自ら絶とうとしているように見えた。木沢長政が政治的に生き残るには、もはや三好政長を全面的に支持し、彼を助けて三好利長を葬り去るより他に手はないのである。だが、それが分からず、遊佐長教という小さな敵に拘り続けているなら、どのみち木沢長政も長くはない。

「潮時、かな」

もとより、久秀には、木沢と心中する気などない。彼の下なら出世できる。そう思ったからこそ、これまで彼のために力を尽くしてきたに過ぎないのである。

「ま、ひとまず木沢のやりようを眺めておくのも一興。これで奴が翻意するなら、まだ芽はあるが…」

などと呟きながら、改めて久秀は木沢長政という一代の梟雄の顔

を見つめた。けれど、そこにあるのは、その鬼謀を天下に恐れられた男とは到底思えぬ、ただ焦り、悩み、迷い、苦しんでいる、ありふれた平凡な男の顔に過ぎなかった。

### 阿波芝生城。

その動向を天下に注目されている、弱冠十七歳の青年君主三好伊賀守利長は、晴元からの上洛命令書を眺めながら、ニタニタと不敵な笑みを漏らしていた。

「我らが先日御所様に送った書状に対する返事は、一切ない」

孫次郎の殺気立った言葉に、居並ぶ宿将はどれもごくりと息を呑んだ。既に、彼らは孫次郎利長の本意を知っている。だからこそ、彼の一拳手一投足、その言動一言一句に至るまで、家臣たちは全神経を注ぎ、注目していた。

「御所様に、亡き父元長の旧領を返還する気はないらしい。…まあ、既に三好越後守や木沢左京亮らが勝手に横領した後ゆえ、今更返せるはずもないのだろうが…。だが、いずれにしても、これまで三好家が御所様に尽くしてきた功績を思えば、恩賞の形として返還に応じてもよいであろうに。だが、御所様にその気はない。即ち、御所様は我らを愚弄している。我らの忠誠を認めてはおられぬのだ」

普段の彼らしくない、異様に挑発的で、高圧的な、怒りに満ちた物言いに、重臣たちは驚きを隠せぬような顔をして、彼をじっと見つめていた。

「それに、御所様本人もすっかり酒と女子に夢中で、天下人として果たさねばならぬ職務を忘れている。…我らは、今一度立ち上がり、御所様に目を覚ましてもらわねばならん。領地も返してもらい、御所様には正気に戻っていただく。そのためには、多少の荒療治も必要であろう」

「…」

誰もが、ごくりと息を呑む。いよいよ本題だ。ついに肝心の、核



たる部分に、孫次郎自ら手を伸ばしたのだ。皆が待ち望んだ瞬間。ずっと待ちわびてきた決断を、孫次郎が下そうとしている。

「我らはこれより挙兵し、上洛するッ！」

それは大地を揺るがし、空気を引き裂く、けたたましい大音声であった。従五位下伊賀守三好孫次郎利長の示した、絶対的な決意であり、覚悟であった。

そして、それは、彼の目指す夢への記念すべき第一歩でもあった。

【飛翔編】第031章 無血上洛

天文八年一月五日。

阿波を発した三好利長の軍勢は、総勢二千五百に達していた。

既に阿波守護の細川持隆の了解は取ってあった。彼としても、三好政長の専制政治には大いに反発していたところだったから、孫次郎利長の決起を英断と称えた上で、兵員こそ貸さなかったが、兵糧や矢玉などの軍需物資の一部を与えて、事実上彼の味方についたのだった。

孫次郎動く。

この報に、天下はたちどころに騒がしくなった。

まず、三好家と縁深い安宅氏、十河氏が与力した。続いて丹波守護代八木城主内藤国貞も、伊賀守支持の姿勢を鮮明に打ち出すと、早速自身兵を率いて都に迫り、三好政長を牽制した。

一方、安宅水軍に乗り込み、阿波を出港した三好軍は、一月八日には堺に上陸した。世直しを大義名分に掲げ、士気高く進軍する彼らを、居並ぶ諸侯はただ傍観するしかできなかった。

無論、三好政長などは、

「これは伊賀守の明確な謀叛である。討伐せよ」

と、近隣諸侯に指令は飛ばしていたのだが、世人に人気が高く、かつ圧倒的な潜在力を誇る三好利長と決戦する勇氣のある大名などどこにもなく、結局、三好軍はほとんど無抵抗のまま、悠々と進軍を重ね、一月十三日に山崎に入ると、翌十四日には、ついに入洛を果たしたのである。

「…案外、楽でしたな」

三好康長のそんな軽口に、孫次郎利長も、思わず苦笑いした。実際のところ、孫次郎も三好家の面々も、これほど楽に上洛できるとは夢にも思っていなかったのであった。必ず細川方の抵抗があるに違いないと、最新の武器を備え、兵糧を蓄え、準備万端整えた上で挙兵したというのに、これでは全く拍子抜けというものである。また兵の中には、郷里の家族に己が死後のことまで指図して、後顧に憂いなく従軍している者もいたぐらいだったから、彼らにしてもよい意味で意表を突かれた展開に、ただ呆然と溜息など吐いていたものだった。

「楽といえば楽。だが、これからが厄介な政治の世界と言う奴だ」

と、孫次郎が気を引き締めるように言うと、

「左様ですな」

と、康長も大きく頷いた。

翌十五日。

三好利長は管領御所に鎮座する管領細川晴元の下に赴くと、そこで年賀の挨拶をした。基本的に、孫次郎の挙兵上洛というのは、実際のところはともかくとして、細川晴元の上洛命令に応じたもの、という形をとっているから、彼が晴元の下に挨拶に行くのは、至極当然のことであった。

だが…。

管領御所の周りを、三好方の精鋭で囲み、その上で先の年賀に出席しなかった三好利長以下、内藤国貞、安宅治興、十河景滋ら三好方諸侯が群れを成してやってくる様は、なかなか壮観であり、何より圧迫感に満ちていた。

「此度、管領様の御召しに応じ、上洛仕りました次第にござります。新年、おめでとうござりまする」

四諸侯を代表する形で、孫次郎利長が言うと、上座にある晴元はただ「うむ」とだけ言って、軽く頷いた。

やがて、鬱陶しいほど面倒臭い儀式に満ちた謁見式が終わると、内藤、安宅、十河ら各将は自陣へと戻っていった。利長はというと、相変わらず晴元の側にあつて、彼の冷たく厳しい視線を一身に浴びていた。

「孫次郎、何ゆえ此度、大軍を率いて上洛するなどと物騒な真似をした？」

日ごろの酒色のせいか、体のあちこちに贅肉がつき、かつての凛々しさを失ってしまった貴公子の言葉に、利長は思わず小さな溜息を吐いた。

「御所様に現実を知ってもらおうと思つたまでのこと」

「現実、だと？」

「左様です。御所様は、確かに天下人なれど、その基盤は如何に脆く、弱い砂上の楼閣に過ぎないのだということを、知ってもらいたかつたのです」

「……」

「ここ最近の御所様は何ですか？ 全てを越後殿に委任しきつて、日々芥川山城にて酒と女の日々だというではありませんか。未だ天下定まらぬとき。天下人たる御所様がそんな有様では、御所様の天下もそう長くはありませぬ」

齒に衣着せぬ孫次郎の鋭き言葉に、晴元は思わず言葉を失った。

孫次郎の言い分は、至極尤もで、晴元に反論できるはずもなかった。彼自身、酒と女子に明け暮れている自分に、時折嫌気が差すこともあつた。けれど、面倒臭い政治に比べれば幾分マシであると、現実から逃げたい一心で、ひたすら酒と女にのめりこんで来たのである。だが、天下人として良いことかと問われれば、悪いことだとはつきりと断言できる。

「…それと、亡き父筑前守が旧領、そろそろ御返還いただきたい。かつて、御所様は全て返すと仰せでした。あれから七年。されど、未だ父の旧領は、越後守殿や左京亮殿の手にあります」

「あ、ああ…。あれか」

晴元は苦りきったように顔を歪めながら、しかし実に正当な孫次郎の要求に、やはり返す言葉もなかった。

「そ、そうだ」

ふと、彼は何やら思いついたように、パンと手を叩くと、側に控える小姓に目をやった。小姓はすかさず立ち上がり、去ったかと思うと、しばらくして戻り、そして一羽の鷹を晴元に差し出したのだった。

「これはの、去年辺りだったか、尾張の織田備後守（信秀）より送られし鷹じゃ。確か、美濃で捕えたとか申しておったが、なかなか見事なものじゃ。…とりあえず、これをその方にやろう。約束が遅れに遅れた詫びと思え」

と言つて、彼はその鷹を孫次郎利長に与えると、驚く彼の様を見ているはからからと楽しそうに笑っていた。

鷹など貰ったところで、それだけで孫次郎の気持ちはどうにかなるものでもない。彼と言う人は、余り鷹に興味はなかった。

だから彼は、三好屋敷に戻るなり、鷹の処置は配下に委ね、とりあえず日も暮れたので、とにかく休むことにした。拳兵から上洛に至るまで、やたら神経を使い続けてきただけに、彼の精神的疲労は限界に達しつつあった。

「だが、織田備後守か…。織田と申せば、尾張の守護代。そんな田舎の小大名ですら、都に食指を伸ばしてくるとは…。天下にはなかなかいりいな人がいるものだな」

などと思いつつ、ゆっくりと目を閉じる。けれど、天下に数多轟く英雄たちのことを思うと、なかなか容易くは眠れなかった。

孫次郎も、とりあえず戦国を生きる大名の一人であるから、天下の情勢くらいは把握しているつもりである。当然、織田備後守信秀のこともある程度は知っていた。

織田信秀という人は、尾張守護代を代々世襲する織田氏の一門で

あるが、その家格と身分は決して高くなかった。当時織田氏は清洲織田氏と岩倉織田氏の二つに分かれて対立していたが、信秀は清洲織田氏に仕える三奉行家の一つ弾正忠家の当主に過ぎなかったのである。しかし、彼は自らの力と才略、胆力でもって次第に頭角を現し、守護の斯波家はもとより、岩倉織田家、清洲織田家といった主筋にあたる織田諸家を遙かに凌駕する實力を手に入れ、事実上尾張国主と呼んで差し支えない地位を手に入れたのだった。

人呼んで『尾張の虎』。

後世においては、織田信長の父親として著名になる彼だが、美濃の土岐氏（実質的には土岐氏を傀儡化し、その後乗っ取ることになる斎藤道三）や、三河の松平氏、さらにはその松平氏を傘下に加えた駿河・遠江の今川氏と激しく争いながら勢力を広げていく姿は、決して偉大なる息子に劣るものではなかった。

「俺も急がねばいかなあ。こういう英雄たちが、どんどん力を強めていったら、俺の出番もなくなるぞ」

そんな風に思いながら、孫次郎はいつしか眠りについた。遠のく意識の中で、彼は何を夢見ているのだろう。負けたくない。自分が天下を取ってやるのだ。そんなことを思っているのかもしれない。ニタニタとしまらない笑みを浮かべ、唾をたらす様は、お世辞にも、天下にその名を轟かした三好孫次郎利長とは思えなかった。

一月も過ぎ、二月も半ばに達した頃、三好利長は焦れていた。

細川晴元に散々要求しても、旧領返還について全く音沙汰がなかった。晴元はまるで逃げるように芥川山へ引っ込んでしまっし、管領御所を守っている三好政長に言っても意味がない以上、孫次郎は苦りきったような顔をして、毎日屋敷内で怒鳴っていた。

「御所様は、相変わらず我らの力がわかっておられぬようだ」

孫次郎は晴元が嫌いではないが、しかし彼の余りの優柔不断には、業を煮やさずにはいられなかった。

「されば、幕府に訴え出るのは如何でしょう？」

と、そこに聞こえてきたのは、どこか聞きなれた、年寄りじみた青年の、特徴ある声色であった。

「お久しぶりです。伊賀守様」

そう言つて、静かに孫次郎の下にやつてきたのは、松永久秀であった。弟の松永甚介長頼に伴われてきた彼は、時折ニタニタと笑いながら、

「幕府の力を借りればよいのです」

と、言つた。

「幕府だと？　だが、幕府即ち管領。御所様が幕府を支配しているのに、その御所様が首を縦に振らぬ以上、幕府とて頼りにはなるまい」

そんな風に孫次郎が言つと、松永久秀は「ははは」と豪快に高笑いした。

「確かに幕府に対する管領殿の支配力は絶対的。されど、本来幕府とは何でしょう。幕府とは、即ち將軍。管領というのは、將軍の補佐役に過ぎませぬ」

「……」

「公方様を動かすのです。將軍家の命とあらば、管領殿とて無碍に扱つわけには参りますまい。何と言つても、將軍家の権威あつてこそその管領でございますからな」

「…なるほど」

「また將軍家にしても、管領殿に全権を握られている現状を快くは思つておられませんまい。もしそれがしが公方様の立場なれば、ここは三好家に味方し、細川、三好の対立を上手く利用しながら、將軍家の勢力回復に繋げようと思つてしような」

久秀の言葉に、孫次郎は何度も頷き、やがて、「それしかあるまい」と呟いた。

【飛翔編】第032章 対峙

三好伊賀守利長は、早速室町御所に伺候すると、室町幕府第十二代將軍足利義晴に謁見した。

孫次郎も、これまで、何度か晴元とともに謁見したことはある。だが、単独で義晴の御前に出向いたことはなく、故にか、なんともいえぬ緊張感の余り、いたたまれない気分になった。

「伊賀守か…。面を上げよ」

義晴は、およそ高貴な天下人とは思えぬ粗野な顔を笑みで歪めると、じろりと睨み付けるように孫次郎を直視した。生まれてこの方、何かと苦勞の耐えない將軍は、案外孫次郎と変わらない顔つきをしていた。

「おそれながら公方様、此度は単刀直入に申し上げます」

と、孫次郎が言えば、

「申せ！」

義晴は甲高い高貴な声で、そう答えた。

「此度公方様が御許に伺候いたしましたのは、管領様に諭していただきたいが故にございます」

「…余に管領を諭せと？」

「はッ！」

「何をじゃ？」

「しからは申し上げます。我ら三好家は、先の筑前守の乱の折に、その領地を管領様の配下により横領されました。されど、その後、管領様は返還すると約束なされたのです。されど、管領様は今もつてなお返そうとはなさらない。…我らとて、これまで粉骨碎身の思いで、管領様並びに幕府が御為に働き、それなりの手柄功績を挙げてきたつもりであります。さりとて、これまで恩賞と呼べる恩賞一つ賜ったことはなく、その上、横領された旧領すら返してもらえぬとなると、我らは何のために忠義を尽くしてきたのか分からぬと



いつものでございます」

「…なるほど」

義晴は溜息混じりにそう呟くと、改めて、まじまじと孫次郎を見つめた。要するに、晴元に対する旧領返還要求の大義名分として、將軍家を味方に取り込まんとする孫次郎利長の政治的戦略なのだということは義晴にもすぐ分かった。如何に管領の力が強大とはいえ、管領の傀儡に甘んじたくない將軍の本音と、形の上では、れっきとした主君である將軍家の命令を無碍にはできない管領政治の矛盾すら計算に入れた上で、こんな頼みごとをしに、わざわざ鄙びた御所まで足を運んだのだらう。そう思うと、眼前に平伏しているまだ若き青年の政治力に、義晴は啞然としつつ苦笑いせずにはいられなかった。

「ま、余とて家臣どもの揉め事を仲裁するにやぶさかではない。それが將軍たる余が勤めゆえな」

と、義晴が言うと、

「ありがたき幸せにござりまする」

孫次郎利長は深々と頭を下げた。

足利義晴直筆の御内書（將軍の命令を記した公文書）が、芥川山の細川晴元の下に届けられたのは、三月に入ってしばらくたった十二日のことであった。

なんといつても將軍家の命である。如何に天下を牛耳る管領の細川晴元とはいえ、無碍に扱うことはできなかった。將軍家を軽視し、その権威を否定することは、將軍家の権威を代行するという形で天下に君臨している自身の存在理由すらも否定することになりかねないからである。

しかし、だからといって容易く受け入れるわけにもいかないのが晴元の実情だった。実際、三好政長や木沢長政らに、横領した領地を返せと命じて、彼らが簡単に応じるとも思えなかった。無論、強

制すれば従うだろうが、そこまでしてわざわざ家中に波風を立たせたくないというのが、晴元の偽らざる本音であった。

ゆえに彼は早速上洛し、室町御所に伺候すると、

「その儀はご猶予くださりますよう」

と、必死の諫言に走った。

けれど、義晴も伊達に苦勞を重ねてきたわけではない。これまでは管領家の絶大な権勢を前に、ただだんまりを決め込み、傀儡に甘んじていなければならなかったが、今や三好利長という、晴元にも匹敵しうる実力者が背後にいる。ならば、いちいち晴元の意に従順と従う必要性もないのである。

「ならぬ。それに、ひとたび將軍として発した命令が、容易く撤回されては、將軍家の權威に関わる。朝令暮改は、何より権力者がやってはならぬことである」

と言つて、全く聞く耳を持たない將軍に対しては、如何な晴元とてそれ以上何か言えるわけでもなく、すぐごと退出せざるを得なかった。

しかし、その後も晴元は將軍直々の幕命を、のらりくらりと言い交わして、なかなか従おうとはしなかった。

開き直ったのだ。

確かに、將軍家の權威を否定すれば、補佐役に過ぎない管領の權威そのものも否定することになる。だが、だからといって將軍家の命令に服してしまうと、管領の上位権力としての將軍家の存在感が高まり、結局その下にいる管領の存在が霞んでしまうことになりかねないのである。

だから無視することにしたのだ。將軍家の權威が下がること、細川晴元が天下最大の武力を保持してさえいれば、それを補うことは可能である。少なくとも、形は將軍に服しながら、實質は將軍を超越する存在としての管領の政治的立場は維持できる。

こうした複雑な政治的意図の下、晴元は逃げるように都を去り、芥川山城に立て籠もった。だが、そこで軍を集めるなどの積極的行動に出るならまだしも、相変わらず女子と酒に明け暮れている彼の様が天下に知れ渡ると、諸侯の不安は高まり、それはやがて三好利長への待望論、期待論へと変化していった。

「もはや、晴元殿に対しては我らが実力、思い知らせてやらねば、動かぬようだ」

孫次郎利長は、悲壮感に満ちた顔をして、溜息混じりに呟いていた。

「決戦なさるおつもりか？」

今や側近中の側近として孫次郎の側に侍っている松永久秀、甚介兄弟は驚きを隠せぬように、彼の顔をまじまじと見つめていた。

「それも一つだと、俺は思う。…何といっても、晴元殿は將軍家の命を無視している。これだけでも、十分晴元殿討伐の大義名分はある」

と、三好孫次郎利長ははっきりとした口調で言い切った。

しかし、よもや孫次郎の口から、『晴元討伐』という言葉が出ようとは、さしもの松永兄弟も夢にも思っていなかったらしい。困惑を隠しきれぬように、ただ呆然と若き主君を見つめている彼らに、孫次郎は苦笑いした。だが、既に彼は本気である。第一、これほどの大事を軽々しく言うほど、この青年も甘くない。

ただ、事はそれほど容易な話ではない。何しろ、細川晴元を敵に回すのである。三好政長や木沢長政を相手とするのとはわけが違う。全細川と対峙するとなれば、勝算は五分と五分。敗北すれば滅亡必至である以上、重臣たちの賛否も分かれた。

けれど、

「これは三好家当主としての俺の決定である。異議は許さぬ！」

という孫次郎の強い決意の下、反対派の声は急激に萎んでいった。

孫次郎が兵を挙げたのは、四月三日のことである。

三好軍二千五百を基盤とし、内藤国貞の丹波勢二千や、晴元に愛想をつかした三好伊賀守派諸侯の軍を加え、総勢は一万近くに達していた。

既に將軍家からの正式な許可もある。これにより、三好軍は正式な幕府軍となり、細川晴元軍こそが討伐されるべき賊軍と化したのである。三好方の政治的優位は誰の目にも明らかとなった。

一方、細川方とて手を拱こまねいて三好方の行動を眺めていたわけではない。晴元に代わり、京を守る三好政長は、突如の孫次郎利長の拳兵に驚き、慌てて都を離れたものの、彼が三好利長軍の決起を容易く認めるはずもなかった。そこで高槻城に入って兵を集めることにしたのであるが、その強権的政治で反発を買っていた彼の下にはせ参じる諸侯は少なく、集まったのは自らの手勢を中核に、僅か三千余騎であった。

そして四月九日。

高槻を発した三好政長軍と三好利長軍は、山崎辺りで激突した。当初激戦が予想されたものの、数に勝る利長軍は終始政長軍を圧倒した。結局、寄せ集めの政長軍は劣勢と分かるや否や、たちまち崩れ、その日の正午頃には総崩れとなった。

四月十一日。

勝勢に乗る三好利長軍は、たちまちのうちに高槻城を奪取し、その目と鼻の先にある芥川山城攻略の拠点とした。その上で細川晴元に使者を送り、將軍家の命に服するよう求めたのだった。

三好利長を主将とする芥川山包圍軍の数は、日に日に増大した。

四月十五日の段階で、総勢一万六千に達し、二十日には二万を越えた。その後も続々集まって、三好伊賀守利長は彼自身の想像を遥

かに超える力を持つに至った。

「孫次郎の下に二万だと？」

晴元は、予想外の展開に、呆然と立ち尽くしていた。

「さらに増える勢いです」

そんな側近の言葉に、晴元はもはや絶句するしかなかった。

芥川山城には、とりあえず三千の兵が常駐しているが、二万の前にはたつた三千である。さらに増えるとなると、当然細川方に勝ち目はなくなる。

「かくなる上は、一つ考えねばなりません」

と、三好政長は言った。

「今のところ、我らが取りうる手は二つあります。一つは、このまま伊賀守と戦い、万に一つの勝機に賭けるか。…あるいは、伊賀守の要求を受け入れ、機を待つのです」

「…要求受け入れ？ だがな、それは即ち、お主に与えた領地を、孫次郎に返すということだぞ。それでよいのか？」

そう言つて、不思議そうに首を傾げる晴元に、越後守政長はにやりと、常と変わらぬ不敵な笑みを見せた。

「もとよりそれがしは先の戦に敗れ、御所様をかくの如き窮地に追い込んだ戦犯なれば、領地没収ぐらいは覚悟しておりました。…ただし、お分かりいただきたいのは、これは策であり、何もまともに伊賀守の要求に応えるというわけではありません」

「…なに？」

「要するにです。ひとまず伊賀守の要求を受け入れたように見せかけ、奴の軍を撤退させます。要求を受け入れた証として、それがしは領地を差し出し、また蟄居と称して丹波辺りに引つ込みましょう」

「丹波は内藤国貞の支配下にあるとはいえ、奴に反発する勢力は少なくありません。例えば、八上城主の波多野秀忠。それがしは丹波に引つ込んだ後、味方を集め、隙を見計らい拳兵します」

「…だが、それで勝てるのか？」

晴元はすっかり弱気になっている。実際、眼前には三好利長が二万もの大軍を率いて芥川山城を包囲しているのだ。孫次郎利長が持つ圧倒的な底力を見せ付けられた今、彼が及び腰となるのも、無理はなかった。

「勝てないでしょう」

と、政長は、あっけらかんと言つてのけた。その余りに開き直つたかのような態度に、晴元はばかんと、呆けたように口を開けたまま、ただ呆れていた。

「それがしのみ力では、残念ながら伊賀守には勝てませぬ。されど、御所様が助力してくだされば、話は別」

「…余が？」

「左様。即ち、まず御所様が最初に兵を挙げます。されど、これは伊賀守の主力を誘き寄せる為の陽動。奴の軍が芥川山へ進発した後、それがしは丹波にて兵を挙げ、もぬけの殻となった京の都を占領するという策です。その後は御所様の軍とそれがしの軍で、伊賀守軍を挟撃するのです」

「な、なるほど」

晴元は、腕組みながら、じっくりと考え込んでいた。これ以外の、これ以上の策は、残念ながら彼には思い浮かばなかった。ここで徹底抗戦してみたところで、圧倒的な三好軍に勝てるとは思えなかった。権力欲、名誉欲が人一倍強い晴元ではあるが、死してまでそれに拘る気など更々ない。生き延びた後に復権の道があるのなら、彼はどんな苦渋でも舐める気でした。

「よかるう。それでいく」

と、常の彼らしくもなく即断即決すると、政長もまた嬉しそうにニヤニヤと、食えない笑みをその満面に表していた。

【飛翔編】第033章 晴元の逆襲

四月二十九日。

桜は、既にその役目を終えたかのごとく、その美しくも儂き命を盛大に散らしていた。ぱらぱらと舞い落ちる桜色の世界は、どこか幻想的で、見る者全てを魅了していた。

晴元と利長は、そんな世界で、さながら子供の如く睨み合っていた。互いにじつと、ぎろりと、そしてむっとした様子で、何も言わず、ただ互いの眼を睨んでいる。晴元には自尊心、利長には優越感。互いが妙に意固地になった拳句、和議を結ぶべく行われたはずの会談は、いつしかただの空しき静止画となっていた。

ヒュウと、春風は悲しげな音色を奏でている。

城方と三好方の睨み合いは、二人の無言が続く限り、いつまでも続かざるを得なかった。互いに殺気だった様子で、一昔前まで味方だった者たちを睨んでいる。それもまた一つの悲劇であったが、しかし、皆、そんなことに思いを馳せていられるだけの精神的余裕はなかった。

「…よかるう」

先に折れたのは、晴元だった。観念したような顔をして苦笑いする彼に、孫次郎も静かに笑った。

「公方様が御命令。この晴元、全面的に従おう。…伊賀守、それでよいのか？」

と、晴元は言う。

「よろしゅうござります」

孫次郎利長は嬉しそうな笑顔で大きく頷くと、すかさず、すつと立ち上がる。彼はおもむろに晴元の面前に赴くと、

「公方様よりの御命令を伝える！」

と、殊更声高に、叫ぶように言った。

晴元は慌てたように平伏し、利長は朗々と幕命を伝えた。既に有

名無実のものとは化して久しい『幕命』なるものが、かくも絶大な効力を発揮しようとは、当の孫次郎ですら驚きを隠せなかったが、自分の眼前に、天下人と称えられている男が平伏している光景というのは、案外悪い気はしなかった。

かくして細川晴元は將軍家の命を受け入れ、三好利長も兵を引いた。三好政長は利長との間に結ばれた取り決めに応じる形で、速やかに横領していた旧元長領を返還すると、あらゆる公職を投げ捨て、丹波に隠棲したのだった。

突如勃発した戦乱は、あっけなく終息した。深刻化すると思われた細川政権内部の権力闘争は、静かに幕を閉じたのである。……と、誰もが思っていた。肝心の孫次郎利長にしても、政長が思いのほか容易く旧領返還に応じたことを良しとして、彼らが密かに抱いていた企みに気づくことはなかったのである。彼がそんな具合であるから、世人が久方ぶりの平和の到来を予想したのも無理なきことであった。けれど、晴元も政長も、それほど甘い男たちではなかった。やられたらやり返す。彼らはその胸に、臥薪嘗胆を誓いつつ、形だけの講和で、天下全てを誤魔化していたのだった。

孫次郎利長は、齡十七にして、既に栄華を極めていた。

京の三好屋敷には、連日の如く様々な客が群れを成してやってきた。彼らは皆、新興の権力者たる三好孫次郎利長と少しでも近づき、そのお零れに預かるべく必死になっていたのだった。

將軍足利義晴にしても、自ら主導的に幕政を支配しようと思ったとき、強大な軍事力を握っている孫次郎の存在は欠かすことができなかった。それゆえに事あるごとに彼を頼ったから、幕政すら彼の影響下にあるようなものであった。無論、晴元の影響力も、衰えたとはいえ、依然として強大な地位と権力を保って芥川山に君臨していたから、完全に孫次郎が晴元に取って代わったというわけではない。要するに、これまでの晴元単独政権に代わって、晴元・利長の



連立政権になつたといえ、分かりやすいかもしれない。

夜眠り、朝起きる。一日中書類に目を通し、判を押す。

大きな力を握るようになったとはいえ、孫次郎のやっていることは、実に単調で空しき作業ばかりだった。

せつかく桓武以来の千年王城せんねんおうきにいるというのに、その伝統も歴史も堪能する余裕はなかった。春は終わり、次第に夏へ変わろうとする季節の移り変わりを味わうことすら許されない。第一、屋敷内から外に出る暇すらないのである。余りの忙しさに、孫次郎青年の不満は日に日に高まっていった。

「なあ、叔父上。たまには遊びに行きたいものだ。せつかく都にいるのに、屋敷で仕事だけの日々なんて……」

こういうときの孫次郎は、今をときめく新興の実力者ではなく、十七歳の青年に相應しい無邪気で、好奇心に満ちた顔をする。隣で彼の補佐の任に徹している康長は、ただ苦笑いしつつ、

「仕方ありません。とりあえず、今日はこれだけを済ませれば終わりといたしましょう」

と言つて、山の如く積まれた書類の束を指し示すのだった。

「あ、あんなにあるのか？」

そんな風に、呆然と溜息を吐く孫次郎に、「ははは」と康長は笑った。

「されど、本来は、この山を終えた後には、幕府の重臣の方々や公家衆の方々と面談する予定も入っていたのですぞ」

「……」

「それは全て、明日以降に回します。されば、頑張つてこれだけすませるのです。三好の御大将ともあらせられるお方が、この程度で弱音を吐くとは何事です！ かつて、兄上……、御先代様もこれぐらいの仕事は、戦の片手間に終わらせていたほどなのですぞ」

と、康長はぴしゃりと言い切った。

「父上も、これぐらいの仕事をこなしていたのか…」

そう言われると、もう何も言えない孫次郎だった。ひたすら父の背中を追い続け、ようやく今の地位を得た彼にとり、父に出来て自分にできないなどということは、断じてあつてはならぬことだった。

「左様ですぞ。されば、殿も頑張らねばなりません」

ニタニタと嬉しそうに笑う康長に、孫次郎は苦々しげに微笑むと、眼前に聳え立つ紙の山を恨めしげに睨みつつ、ハアと大きな溜息を吐いた。

### 芥川山城。

城主たる管領細川晴元は、生まれ変わったかのように、女も酒もきっぱりと捨て去り、黙々と政務に励んでいた。

まずは自身の直轄戦力の増強が最優先だからと、時折傘下の諸豪族を呼び寄せては、彼らに対する自身の影響力を拡大しようと必死になった。これまでの彼は、豪族諸侯が伺候してきても、事務的な話以外、いわゆる雑談のようなことは一切したことがなかった。というよりは、特段の用でもない限り、滅多に会ってやりもしなかったほどである。それが天下人としての権威上昇に繋がるのだと言う政長らの助言を受けてのことだったが、今となっては、そんなことも言つてはいられなかった。

「御所様は変わられた」

と、彼に謁見した豪族たちが思うのも無理はなかった。

この辺りは、さすがに細川高国を滅ぼし、まがりなりにも自らの実力で天下を奪い取った男だけのことはあった。如何に名族細川に生まれたからとて、彼はただの苦労知らずの御曹司ではなかった。

「まずはこの城の常駐兵力を増やさねばなりません」

と、重臣の細川尹隆ただたかの言葉に、晴元も大きく頷いた。

「せめて一万ぐらいはないとなあ」

そう晴元は呟きながら、南蛮渡来の甘菓子的美味しそうに頬張っ

た。

だが、こういう彼の積極的な軍事増強策が、都の三好方の目に留まらぬはずもない。無論、建前の上では、諸国の脅威に対抗し、あるいはいざという危機に備えるためと称してはいたが、誰の目にも都を牛耳る三好対策であることは明らかだった。

そして…。

五月十八日。この日を境として、都において根も葉もない流言飛語が飛び交うようになった。しかし、次から次、民から民を経るたびに尾ひれのついた噂は、次第に信憑性を帯び、やがて誰もが真実であると思うようになった。

そして二十二日。

「ご、御所様が挙兵したと？」

孫次郎は驚きを隠せぬといったように、報告に来た甚介を睨み付けていた。

「はッ！ 既に將軍家のほうに、檄文が届いたそうにございます」

「檄文？」

「はい。細川家被官の分際で、將軍家を誑かし、姦策を持って幕政を壟断する奸臣…、と、殿を名指しで批判した上で、奸賊討滅を大義名分とし、拳兵に及んだそうにございます」

「…俺が、奸臣？」

ただきよんととして、絶句する孫次郎に、甚介も腹立たしそうな顔をした。

「兵力は？ …御所様、いや、晴元殿の下にある兵力はどれほどだ？」

と、孫次郎はぎろりと、おぞましき視線を甚介に浴びせかけた。怒っている。無理もない、とは思いながら、普段は見せぬ彼の鬼のような形相に、松永甚介は思わず苦笑いした。

「一万とのことですか」

「…一万か」

それぐらいならば、何とかなる。孫次郎の中に滾る絶対的な自信

と闘志は、凄まじき怒りによって煽られ、やがてそれは彼の断固たる決意へと昇華していった。

「誰が奸臣なのか、一度晴元殿に思い知らせてやる。甚介、兵を用意しろ。整いつ次第出陣し、今度こそ芥川山を攻め落とす！」

「は、ははッ！」

三好伊賀守利長として下した敵命に、松永甚介長頼は恭しく平伏し、そして大きく頷いた。

畏である。

と言う意見も、決してないわけではなかったが、最終的には孫次郎が当主としての権限で押し切った。

五月二十五日。

孫次郎利長率いる三好軍一万は都を発し、一路芥川山を目指した。途中、三好方に連なる諸将も合流したので、最終的には二万近い兵力となった。

「俺を怒らせるとどうなるか、一度思い知らせてやるのだ」

と、行軍中も、ずっと孫次郎はそう思っていた。

やがて、三好軍は高槻城に入り、晴元の立て籠もる芥川山城を十重二十重に包囲した。兵力も二万五千ほどに拡大し、三好孫次郎の持つ勢威の凄まじさを満天下に見せ付けるには、十分すぎる数になった。

「されど、あの山城を攻め落とすのは、なかなか骨の折れそうな話ですな」

と、孫四郎長逸は、溜息混じりにぼやきながら、恨めしげに眼前に聳え立つ芥川山城を睨んでいた。

「だが、必ずや攻め落とす。そして、晴元殿にわが三好家の力の程を思い知らせる。さもなくば、未来永劫、我らは晴元殿の奴隷に甘んじねばならなくなる」

「…確かに。されど、殿も昔と比べれば、随分とお変わりになられ

たものですね」

ふと、そんな風に呟く孫四郎は、まじまじと孫次郎利長の顔を見、そしてクスクスと笑った。

「何と言つても、一昔前であれば、殿御自ら晴元殿と決戦するなどとは口が裂けても仰らなかつたでしょう。御先代が殺された恨みなど忘れてしまったのではないか、と思うことも度々あつたぐらいです」

「…ふん。無論、昔と今では俺も変わるさ。だが、俺が晴元殿に恭順の意を貫いていたのは、まあ、確かに晴元殿ならば忠誠を尽くすに値する御方かもしれぬと思つたことはある。だが、それ以上に、三好家を守るためだつた。もしも俺が晴元殿に少しでも疑われるような行動をとれば、曾祖父之長以来の三好家は跡形もなく滅び去つていたに違いない」

「…」

「昔の俺には力がなかつた。だが、今の俺にはある。それだけのことだ。今も昔も俺が目指しているのは、父祖が目指した夢を受け継ぎ、俺の手で実現させることだ。夢というのは即ち、天下だ。俺は、天下人になる。そのために戦っている」

「天下人…」

孫四郎は、戦国の世に男と生まれた者なら誰もが夢見、目指す言葉の持つ甘美な響きに、思わずうっとりとした。そして、眼前にいるこの若き主君ならば本当になれるかもしれないと、一人思つたりした。

その頃。

丹波国は八上城。

城主波多野秀忠は、総勢三千の手勢を従えて出陣した。長年の宿敵たる八木城主内藤国貞を出し抜けるとあつて、波多野勢の戦意はいつになく高かつた。

五月二十八日。

波多野勢は、城主不在により手薄となっていた八木城を取り囲むと、加勢に來た三好政長勢と共同で、半日もせぬうちにこれを攻め落とした。さらに早くも二十九日には政長勢四千とともに八木を發し、丹波を越えると、三十日には京に程近い嵯峨の地に進出したのだった。

彼らの目的が、手薄となった都の奪取にあることは言うまでもなく、實際、孫次郎が留守居として配置しておいた岩成友通らの三好勢五百余騎では、とてもではないが、三好政長、波多野秀忠率いる上洛軍には勝てなかった。

「岩成殿、如何します？」

慌しく駆け寄ってくる与力部將たちを前にして、主將の岩成友通は苦々しげな顔をして、悔しそうに唸っていた。

「決戦に及んでも、勝ち目はあるまい。…既に芥川山の殿の下にはこのこと知らせておろうな？」

「は、はい」

「ならば、我らもここは潔く兵を引こう。無謀な戦で、洛中を火の海としては、殿の御名に傷をつけることにもなりかねない」

三好家にこの人ありと、その名を天下に轟かせている岩成主税助友通ほどの男としては、まさに苦渋の決断であった。いつそ、都に立て籠もり決戦に及んでもよいのだが、たかが五百で、総勢一万に迫らんとしている上洛軍に勝てる見込みなどないし、その結果、都が火の海にでもなるうものなら、主君利長と三好家の今後を考えた上で、後々大いなる汚点となりかねなかった。

だから引くのである。一時の敗北も、最終的な勝利の一步となるのなら、今は涙を呑んで我慢するより他に仕方がなかった。

岩成勢が引いた後、三好政長を総大將とする上洛軍は、大挙して市内に突入した。

彼らはまず、これまで三好方の勢力下にあつた室町御所を武力制圧して、將軍義晴を抑えると、六月二日には芥川山の晴元を救うべく都を発したのである。

「既に大多数の諸侯が、兵を引き始めております。おそらく、我らの敗北を察したのでしよう。…全く、鼠の如き奴らでござる」

そんな気に食わぬ凶報に耳を傾けながら、孫次郎利長はその眉をぴくぴくと震わしていた。

「主税助殿を追い、都を制した越後の軍がこちらにやってくるのも、もはや時間の問題でしょう。されば、我らもここは兵を引き、再起を期さねばなりませんまい」

と、内藤国貞は無念そうな顔をして、そう言った。彼もまた居城たる八木城を落とされており、既に帰るべき場所を失っていた。ゆえに今更、他の諸侯の如く三好方から離反するわけにもいかず、ならばと、開き直ったかのごとく、孫次郎利長に自らの運の全てを託すことにしたのだった。

「…やむを、得ないか」

事態は一刻を争う。一瞬の判断の遅れが命取りとなる今、迷っている暇はなかった。

「内藤殿。それがしの油断により、かくの如き事態となつて、誠に申し訳ござらぬ。…我らはこれより兵を引き、再起を期します。内藤殿は如何なされる？」

と、孫次郎が言つと、

「もはや、事ここに至つては、我らが運命も伊賀殿と一蓮托生にござる。我が家が滅びるも栄えるも、全て伊賀殿に一任することにしたしますわい」

そんな風に豪快に高笑いして、大きく頷く内藤国貞であった。

六月五日午後。

三好利長率いる三好軍は、芥川山城の包囲を解くと、引き潮の如

く、あつという間に撤退していった。細川軍による追撃もないわけではなかったが、三好方の懸命な殿軍の抵抗の前には、さしたる意味もなかった。

六月六日。

三好政長が芥川山城に入り、同日中に晴元は論功行賞を挙行した。細川政権の復活と、晴元独裁の再確認を兼ねたそれは、三好方に連なった諸侯はもとより、三好方を裏切つて晴元方についた者に対してすら厳しいものだった。



【飛翔編】第034章 利長反撃

朝日がきらきらと水面を照らす。それは、さながら宝石の如く、煌びやかに輝いていた。

孫次郎利長は不満だった。

安宅治興の用意した軍船の甲板から、延々と広がる水平線の彼方をぼんやりと眺めている。

こんなはずではなかったのだと、若き闘志は、己が浅慮を詰っていた。なぜ晴元や政長の策を見抜けなかったのだと、しきりに自身を責めていた。

芥川山から撤退を余儀なくされた孫次郎は、急勾配な坂から転げ落ちるが如く、一挙に奈落の底へと突き落とされたのだ。圧倒的な勢いを成して迫る晴元軍の攻勢を受け、畿内における唯一の拠点となった堺からも脱出せざるを得なかった。

「全ては、俺の油断が招いたことか…」

そう思うと、家臣たちに対し、あるいは内藤国貞や安宅治興ら、自分に従ってくれる諸侯たちに申し訳がないような気がして、いてもたってもいらなくなるのだった。

三好軍は淡路に入り、安宅氏の本城洲本に入城した。

阿波よりは淡路のほうが畿内に近い。それが本拠地たる阿波国まで戻らず、洲本城に留まった最大の理由であったが、実際、雪辱に燃える孫次郎は、虎視眈々復権を目指して力を蓄えつつ、畿内情勢の変化を待つことにしたのだった。

で、その畿内はというと…。

案外早く、機は巡ってきた。

即ち、晴元・政長の強烈な独裁政治が、諸侯の反発を招いたためであったが、この反発を武力で抑えようとしたことで、晴元政権に

対する不信感は一拳に燃え上がったのである。

利長の芥川山撤退から、晴元政権に対する不信感が爆発するまでにかかった時間は、僅かに一週間足らずだった。

晴元政権は依然として強大だが、晴元に不満を抱く諸侯たちにしてみると、まだ三好孫次郎利長が淡路、阿波、讃岐の三国に対する支配力を維持したまま、淡路に踏ん張っていることが大きな心の支えとなっていた。いざとなれば彼らに援軍を求めればいい。そう思えば、どれだけ強き態度に出たとしても、さして不安ではない。彼らの深層心理は、いつしか三好利長という一青年を上置いて、彼を晴元に対抗しうる、唯一無二の対抗馬であると認識するようになっていたのだった。

その頃、都では…。

蒸し暑き京の梅雨は、いつそう厳しさを増している。この日も、ざあざあと叩きつけるが如き土砂降りであったが、そんなことをいちいち気にしてられないほど、室町御所は緊迫感に満ちていた。

御所には、近江守護にして従四位下弾正忠の地位にある六角定頼が伺候していた。細川晴元の岳父（妻の父）に当たる彼は、当代随一の名君として天下に名高く、実際、混乱極まる天下政局にも絶大な影響力と発言力を持っている実力者だった。

「弾正、管領の岳父たるそなたに頼みがあつて、今日は呼んだ」

將軍義晴は、苦りきった顔をして、溜息混じりにそう言った。

「…管領殿と伊賀殿のことにござりますな」

定頼も、殊の外両者の対立については頭を痛めていたようで、そう答えながら、彼は困ったように頭を搔いていた。

「そうだ。このまま両者が激突すれば、天下の混乱は歯止めが利かなくなる。そうなる前に何とかしたい。…弾正ならば、余が気持ち、理解してくれよう」

義晴にとって、定頼は心許せる数少ない大名の一人だった。高国

政權滅亡後、都を離れ、近江に入った彼をずっと庇護してくれたのが定頼だったこともあるが、何より性格的にも、二人の相性は実によかった。

「上様がお気持ち、痛いほど承知しております。それがしも同じ気持ちでござりまするゆえ。：管領殿はわが娘の良人おとこなれば、それがしも粉骨碎身の覚悟を持って、此度の乱の調停に勤めたいと思っております」

と、定頼が胸を張って言うと、義晴は頼もしそうに、「任せる」

とだけ言つて、ほっとしたようににっこりと微笑んだ。

ただ、事態は義晴や定頼の想定を上回る勢いで、深刻と激しさの度を強めていた。

淡路洲本に待機していた孫次郎利長は、畿内情勢が混乱し始めるや否や、その機を見逃すまいと、早速本国阿波より増援部隊を呼び寄せたり、あるいは洲本沖に停留中の安宅水軍の軍船に兵員を乗船させるなど、着々と出陣準備を整えていった。

六月十日には、定頼の使者が洲本を訪れ、利長を説得していたが、「我らは將軍家より命ぜられた細川様討伐の任を肅々と実行するのみにござります」

と言つて、全く聞く耳を持たなかった。

「もしも拳兵なさるつもりなら、わが六角家は管領殿に与力いたしますぞ」

そう脅しても見たのだが、

「ご勝手に！」

孫次郎は淡々と頷き、そしてにやりと不敵に笑った。

使者はすくすく退散し、急ぎ都に戻ると、十二日、事の次第を主君定頼に報じた。定頼も困ったような顔をして室町御所に伺候すると、義晴に全てをつまびらかに伝えた。

「左様か。…伊賀は徹底抗戦の構えか？」

定頼の言葉に、落胆気味の義晴は、苦りきったような顔をして肩を落とした。

「事ここに至っては、上様御自ら伊賀殿に御内書を発給なさるより他に手はありません」

「余の書状？」

「はッ！ 將軍たる上様が伊賀殿に御命令するのです。…少なくとも先の上様が出された管領殿討伐の命令を、今もなお有効のものと主張することで、伊賀殿は自らの行動の大義名分としています。上様が矛を収めるよう命じれば、伊賀殿とて無碍にはできませんまい」

そんな定頼の言葉に、義晴は「ふうむ」と唸りながらも、書状一枚で混乱が収束に導けるのなら、いくらでも書いてやると、早速小姓に命じて紙と筆を持たせると、すらすらと流れるように御内書を記していった。

將軍家の使者となった芥川豊後守は、十四日朝に洲本へ辿り着き、それを孫次郎利長に示した。

「これが正式な幕命である。公方様の上意であるぞ！」

と、芥川豊後守は声高に宣言してみたが、それを受け入れるか否かは孫次郎次第であり、その彼はというと、時折ニタニタと笑いながら、

「左様か」

とだけ淡々と呟いていた。

御内書を受け取ると、孫次郎はそれを改めてまじまじと見た。將軍家の意思が記されたそれには、要するに戦だけは止めるようにと、必死の言葉が連ねられていたが、孫次郎はそこから読み取れる將軍家の焦りを感じて、思わず苦笑いした。

「伊賀殿、上様が命に応じ、兵を納められよ」

と、芥川豊後は言ったが、

「ははは。それが誠の將軍家が御意思であるなら、兵を納めねばならませぬがな……」

孫次郎は、開き直ったかのように、どこまでもあっけらかんと笑っていた。

「何を申される。これは正真正銘、將軍家の御意思でござる」

芥川豊後がぎろりと睨み付けると、孫次郎はようやく笑いを止めた。

「奸臣どもが上様を誑かした上で出させたものかもしれませぬ。こればかりは、誰にも分かりませぬな」

「…か、奸臣とは、誰のことを指される？」

「さあ？　ただ、上様を武力で押し、その意をずっと阻んで幕政を壟断してきたお方なら、お一人おられよう」

それは、露骨なまでの皮肉であり、芥川に返す言葉はなかった。

孫次郎は、かつて自分を『奸臣』と名指した男に対し、その男もまた『奸臣』であると主張することにより、將軍家の命令の正統性を否定したのである。

六月十四日午後。

三好孫次郎利長は、総勢五千の兵を率いて淡路を発すると、同日深夜頃に堺に上陸した。

そして十六日には、摂津島上（今の高槻市近辺）まで進軍すると、まず芥川山城を包囲し、間髪入れず、総攻撃を加えた。

「既に晴元殿は都にあつて、城内にいる兵力は僅か一千足らず。攻め落とすなら、今を置いて他に機はありませぬ」

と、三好康長が言つと、  
「分かつている」

と、利長も大きく頷いた。

既に手筈は整っている。晴元が手当たり次第、直轄軍となりうる足輕を雇っては城に入れていたので、三好方としても間者を忍ばせ

るのに、それほど苦勞はしなかった。

「間者たちが火をつけ、城門を空ければ、後は突入するのみです」  
晴元軍に潜入中の間者衆を束ねている松永久秀は、時折二タ二タと楽しそうに微笑みながら、眼前に聳え立つ芥川山城をじっと見つめていた。彼の目から見れば、芥川山に聳え立つ細川政権の覇府も、陥落寸前の斜陽の砦にしか見えなかったのだらう。そんな彼の様を眺めながら、孫次郎もまたにやりと不敵な笑みを漏らした。

やがて手筈通り、どこからともなく城内より火の手が上がると、かつ同時に城門も人知れずゆっくりと、静かに開いた。

十六日午後。

三好軍は大挙して芥川山城に突入し、同日中に城の全土が陥落した。城兵は怒涛の如く押し寄せてくる三好勢の猛攻に耐え切れず、泡を食って逃げ出したが、逃げ切れず殺された者、負傷した拳句動けなくなった者、降伏した者、上手く逃げ出せたものなど、いろいろいたが、最期まで徹底抗戦し、武士の本懐を果たした者は極々僅かに過ぎなかった。

やがて、孫次郎利長が悠々と入城し、その日の夜ごろには、疎開していた城下の民も、次第に町へと戻ってきた。十七日の朝には、それまでの騒がしき戦乱が嘘のように、いつもと変わらぬ日常が始まった。

「久秀、お主の策が見事図に当たった。礼を申すぞ！」

二人きりになったとき、利長は誰に気兼ねする風でもなく、率直に、この新参側近の功績を称えた。その松永久秀はというと、にこりと笑って、さも当然のことのように頷くだけである。

「ところで、ここ忙しくて余り詳しく聞く暇がなかったが、一度聞こう。そなたは、本気で木沢殿の下から離れることにしたのか？」

と、利長が不思議そうな顔をして尋ねると、久秀はにやりと笑い、そして大きく頷いた。

「木沢殿は、既に焦りの余り、泉の如しと称えられた智謀にも曇りが生じてきたようです。…少なくとも、このそれがしが力を貸すに値せぬ存在と成り果てましたゆえ、見限ってまいりました」

「…見限ったと？」

「はい」

「…では、何ゆえどういふ点で、木沢殿の智謀に曇りが生じたと、そなたは思っただのだ？」

利長はどこまでも興味本位である。ニタニタと笑い、まるで松永久秀と言つ人を試しているかのように、その全身をまじまじと見つめていた。

「此度の騒動に対する木沢殿の行動、その全てを見ていれば、殿とお分かりかと存じます」

そんな久秀の言葉に、

「…さて、俺にはトンと分からぬ。何しろ、俺は阿呆な田舎者ゆえなあ」

と、利長は幼さの残る整った顔立ちに、小悪魔の如き無邪気な笑みを浮かべた。

「では申し上げましょう。木沢殿は、既に畠山家での実権掌握にのみ目と心を奪われております。即ち、彼の目には遊佐河内守を如何に葬るか、それしかないのです。されど、今の情勢を思えば、木沢殿は畠山家のことは捨て置いても、三好越後守と連携し、晴元殿のために全力を尽くすべきだったのです。されど、木沢殿はそうしなかつた。実際、越後が上洛した折も、木沢殿は信貴山城に立て籠もつたまま、微動だにしなかつた」

「…ま、あの折は木沢が動けば、その隙に遊佐河内が信貴山を奪うという流言の効果も大きかつたのだろうが」

と、利長はクスクスと笑う。何を隠そう。そんな流言を流して、木沢長政の動きを制したのは、他ならぬ利長本人だったのである。

「その程度の流言に心惑わし、殿を葬り去る絶好機を見失つた木沢

殿など、所詮その程度の器だったということ。その上、木沢殿は越後の要請を断ったことで、彼との良好な関係すら失いました。もはや、木沢殿に芽はありませぬ」

「ゆえに、離反したと申すのだな」

その瞬間、利長の顔色が大きく変わった。それまでの笑みは欠片もなく、ただぎろりと、睨み付けるような厳しい眼光があるのみだった。

「無論です。わが力を託すに値するのは、将来性ある主君のみ。沈み行く船の巻き添えとなるなど、正直御免でござる」

「ならば、俺が沈み行く舟となったとき、そなたは俺をも見限るのか？」

と、利長が言えば、

「ふふふ。殿が常に強くあれば、それがしは命を賭けてお仕えしましょう。そして、常に強くあり続けられるお方と見込んだればこそ、それがしはあなた様にお仕えすることにしたのです」

久秀は、開き直ったかのごとき言を、堂々と吐いた。

その瞬間、利長は「ははは」と高笑いした。怒るのかと思えば、そうではない。この程度のことと怒るなら、こちらから身を引いてやると、心密かに決意していた久秀にしてみると、利長の態度は、まさに拍子抜けだった。

「よかるう。そういう奴が俺の側にいてくれたほうが、俺自身刺激になる。常に強くあらねばならぬという向上心にも繋がる。…お主さえよければ、俺に仕えてみないか。差しあたつては、祐筆（今風に言えば書記官）など勤めてくれるとありがたいものだ」

三好孫次郎利長は、ゆつくりと立ち上がると、下座に平伏す松永久秀の眼前まで歩み寄った。

「祐筆ですか。それはまた面白そうな役回りですな」

松永久秀は、にこやかに微笑み、そして主君たる孫次郎利長の純真無垢な瞳を見つめた。

「ならば以後は三好のために働いてくれよ。少なくとも、今の我が家



は強いと思う。命がけの忠誠を誓ってくれるな？」

そんな利長の言葉に、

「無論！」

と、久秀は大きく頷いた。

六月十七日。

芥川山陥落の凶報に動揺した晴元は、京を離れ、高雄（現在の京都市右京区）に引き上げていった。

すると、当然のように洛中は騒然となった。再び、性懲りもなく三好利長が大軍を率いて舞い戻ってくる可能性が高まったのであるから、無理もなかった。

細川政元が暗殺されて以来、この町では、頻繁に政権交代が繰り返されてきたが、政元が死去して既に三十二年も過ぎたというに、今もなおいっこうに収まる気配もなく、ひたすら延々と繰り返されるめまぐるしい政争に、市民の誰もが頭を抱えていた。

とはいえ、迫る脅威に対し、晴元方が無策だったわけではない。既に三好軍はその勢力を大幅に増して、晴元方を圧倒していた。ならばと、晴元は越前の朝倉孝景や若狭の武田元光、さらには能登の畠山義総ら諸国の大名に援軍を要請し、彼らの武力を以って三好軍に対抗しようとしたのである。

「なに？ 晴元殿が？」

利長は驚きを隠せぬといった様子で、ぎろりと松永甚介を睨み付けていた。

「はい。調べましたところ、どうも真実のようです」

と、甚介が神妙な顔をして言うと、利長は苦々しげに顔を歪めた。確かに既にそんな噂は流れていた。しかし、噂は噂に過ぎぬと、利長は大して重くは取り上げてはこなかったのであるが……。しかしながら限りなく信憑性の高い噂となると、話は別だった。

ミイイン、ミイインと、最近は五月蠅いほどけたたましく蝉の鳴き声が響いていた。梅雨時の纏わりつくような蒸し暑さも相俟って、

利長はうんざりとしたような顔をした。

そんなところへ、この凶報である。利長は許されるなら、この場で、体中に湧き上がるやるせない不満を吐き捨て、あたり構わずぶつけてやりたかった。

「晴元殿は、血迷われたか？」

利長がそう思ったのも、無理なきことであつた。

「左様ですな。今のところ、晴元殿が使者を送つたのは、朝倉、武田、能登畠山の三家だそうですが、さらに増える可能性も否定できません。それに、この三家のみに留まつたとしても、援軍を率いて駆けつけてきた彼らが、いつまでも援軍のままにいるはずがないでしょう…。我らを倒したら、その後は、援軍に來た大名が、第二の我らとなつて晴元殿に仇名すだけ。その辺りのことが分からぬようでは、どの道、晴元殿に天下人の資格はありません。」

と言う久秀の言葉に、利長もまた大きく頷いた。

「特に朝倉家などは厄介ですぞ。応仁の乱の折に、朝倉孝景（同名の現朝倉家当主孝景の曾祖父。敏景とも言う）が越前守護職の斯波氏から篡奪し、以来今の孝景に至るまで四代六十年もの間、越前に君臨してきた大国でござる。抱える兵力は数万騎。特に、初代孝景の子である朝倉宗滴は稀代の名将と名高く、これが軍を率いて乗り込んで来た場合、我らの勝ち目は限りなく低くなるかと…」

と、久秀が言えば、利長も否定せず、じつと黙つたまま小さく頷いた。

「ここは速攻で片をつけねばなりません。泥沼の戦となれば、晴元殿だけでなく、我らも朝倉や武田のために滅ぼされてしまいかねませぬ。…みすみす、奴らに漁夫の利を捧げるわけには参りませぬ」  
そう言うのは甚介で、彼は彼なりに必死に三好家の取るべき道を考えていた。

芥川山の夏は暑い。湿り気の強い空気を拭いつつ、利長はふうと小さく溜息を吐いた。

「出陣するより他に仕方はあるまい。甚介が申すように、速攻で兵

を動かし、都を取って晴元殿を抑える。朝倉や武田などに漁夫の利はやらん！」

そうはつきりとした口調で言い切ると、久秀や甚介長頼は、ただ恭しく頭を下げるだけであった。

芥川山城を攻略し、勢いを得た三好軍は、既にその数は二万に迫ろうとしていた。

六月二十一日。

芥川山を発した三好軍は、怒涛の勢いで都に迫った。これに対し、細川方の兵士は既に晴元とともに高雄へ退去しており、都は全くもぬけの殻となっていた。

しかし、高雄と京は近い。三好軍と細川軍の間で決戦になる可能性が高いと見た町人たちは、泡を食って四方八方、あちこちに逃げ散った。またも都が戦火に吞まれるのだと思うと、誰もがいたたまれない気持ちになったが、これが戦国なのだと、皆、覚悟するしかなかった。

一方、事の急変に慌てていたのは、何も市民だけではない。室町御所に鎮座する足利義晴もまた、当惑の色を隠せなかった。

「ついに、伊賀守は和議を呑みませんでした」

残念そうな顔をして復命する芥川豊後守に、義晴は苦りきった。

「管領と伊賀の間で決戦となるやもしれぬ。こうなった以上、余には止められぬ。応仁の乱の如き大戦が、この都に再現されるのだ」

半ば諦めきったような口調で、そう呟く義晴は、もうどこか自暴自棄になっていた。將軍たる自分には、既にこの程度の戦いを食い止める力もないのだと思うと、従三位権大納言征夷大將軍という、やたら重く、空しいだけの地位が、ひたすらに鬱陶しくなった。

「上様、ひとまず、洛中は危険でございます。戦となれば、応仁の乱の折の如く、この御所の争奪戦となるは必定。上様におかれましては、速やかに坂本まで御動座願いたく」

と、六角定頼の重臣たる蒲生定秀は言った。

「坂本に……。またも、都落ちか？」

力なく呟く義晴に、蒲生定秀は静かに頷いた。

既に御所の周りには、蒲生の手勢三百騎が犇んでいる。彼は主君定頼の命により、將軍一門を救うべくやってきたのであり、將軍が何と言おうとも、有無を言わず連行するつもりであった。

が、肝心の義晴は、蒲生定秀が何と言おうとも、微動だにしない。室町幕府征夷大將軍の意地にかけても、義晴は更なる都落ちを快しとはしなかった。

「されど上様！ 万一のことあらば、お命すら危ういこと、お分かりか？」

蒲生は激しい剣幕で迫ったが、義晴を翻意させるまでには至らなかった。で、蒲生は諦めた。別段、強引に連行するという手もないわけではなかったが、伝統的な権威というものを何より重んじる名族の重臣としては、將軍の断固たる意思というものを無碍に扱うわけにはいかなかった。

「とりあえず、わが妻と子の菊童丸（後の足利義輝）を連れて、その方は都を離れよ。……余には、天下を統べる征夷大將軍として、此度の騒乱を鎮める責任がある」

と言う義晴に、蒲生定秀は困ったような顔をしつつも、静かに頷き、そしてすくすく立ち去った。

二十二日午後。

三好軍が入京すると、彼らは大内裏、室町御所、管領御所などの要所を次々と掌握し、同日夜までに都全土を制圧した。

翌二十三日午前。

孫次郎利長は、有力諸侯の一人柳本元俊を伴い、室町御所に伺候すると、そこで足利義晴より正式に京都警備の大任を与えられたのだった。これにより、三好方は正式に都を支配することが認められ

たわけであり、警備役拝領が持つ政治的意義は大きかった。

だから三好勢は大つぴらに市内を闊歩した。といっても、略奪暴行の類は、利長の出した軍令により厳しく禁じられていたから、木曾義仲入洛の折のようなことにはならなかった。

懸念された戦も、なかなか起きず、やがて市民も日に日に疎開先から戻ってきた。それに伴い、市内の活気は回復基調に入ったが、しかし京に程近い高雄の地に晴元が大軍を擁して健在である以上、人々は、いつ戦いが始まるかという潜在的不安を拭い去ることができなかった。

とはいえ、少なくとも以来一ヶ月に渡って平和が保たれたことは特筆に価するといえよう。高雄の細川、都の三好。双方は、しばらく睨み合いながらも、決して直接対決することはなかった。戦力的には三好方が圧倒的優位に立っていたが、下手に攻め込み、泥沼の戦となれば、朝倉や武田らに漁夫の利を占められるかもしれない。そんな恐怖感が三好方の足を縛っていた。無論、戦力に劣る細川方から攻撃を仕掛けられるはずもない。

かくて奇妙な均衡状態の中、お互い容易く手が出せずにいた。いわゆる冷戦だが、人々にしてみると、こういう一触即発の危機的状況の中で保たれている平和など、決してありがたいものではなかった。中には、いつそ早く戦となつて、全てが終わつた、真正正銘の平和の中に暮らして見たいものだと言う者もいた。兎にも角にも、こうした緊迫した状況だと、上は將軍家から、下は乞食に至るまで、洛中に暮らす誰もが、息をつく余裕すらなかった。

六月はあつという間に過ぎ去つて、激動の天文八年は七月となった。

七月十四日。

高雄の細川晴元は、腹心の三好政長や波多野秀忠らに全軍を預けると、三好利長を征伐すべく出陣させた。機は今と見たのか、依然

として三好軍の精銳が洛中に展開している状態では、余りに危険な賭けであったが、晴元は気にしなかった。

三好政長と波多野秀忠は都の西側郊外にある妙心寺に入り、そこを本陣とした。総勢八千。

対する三好方は、三好利長自ら率いる一万三千で、金乗寺に本陣を置いて、細川軍と対峙した。

「さてさて、どうすべきかな」

孫次郎利長は、困ったように溜息を吐くと、目の前に広がる敵軍を眺めた。

「総攻撃をかけるべきでしょう」

とは、三好軍に加盟している諸侯の一人、柳本元俊の言葉であった。柳本賢治が細川高国との戦いの最中に暗殺されて以後、すっかり落ち目となった柳本氏の復権の機会をこの戦いに求めている彼は、三好軍内にあつて、一番の強硬な主戦派であつた。

「だが、泥沼の戦となれば、細川方の要請に応じた朝倉辺りが出張ってくるぞ。そうなれば、何の苦勞もしていない朝倉に勝利の味を奪われることにもなりかねぬ」

と、内藤国貞が反論すると、柳本元俊はぎろりと睨むように彼を見つめた。

「だからとて、ここで睨み合いを続けていても結果は同じだろう。どうせ決着をつけねばならぬ相手。ならば兵力的優位が確保されている今、一気呵成に攻め潰すが得策というものだ」

「いや、数的優位が確保されている今だからこそ、いつそ和議などに持ち込むべきだろう。無論、我らが有利な和議でござるが」

「わ、和議だと！」

柳本は素つ頓狂な声を張り上げて、あり得ないと怒鳴った。

「ここで細川晴元を叩き潰さずして、いつ潰すのだ。どうせ晴元殿は再び伊賀殿に背くぞ。少なくとも、晴元殿に取り付いている三好越後は、必ずや伊賀殿の脅威となる。…かつて、平相国は頼朝を見逃し、結局平家は頼朝に滅ぼされた。そして頼朝は倒した平家の公

達に対し、決して容赦はしなかった。故にこそ、鎌倉百四十年の礎を築けたのだ。まあ、やりすぎて一門までも殺したために、源家の天下は三代に終わったが……。何はともかく、言ってみれば、晴元殿が平相国であり、伊賀殿が頼朝公だ。ここで情け容赦して、細川家を存続させたりしたら、平相国の二の舞だ。ここは涙を呑んで、頼朝公の鬘に倣わねばならぬ」

「……だが、長期戦になって朝倉などが出張ってくれば、天下どころの騒ぎではない。平相国にしろ、頼朝にしろ、当時はそれこそ正真正銘、敵などいない完璧な天下人だった。だから徹底的に潰せたのだ。だが、今は違う。細川家も三好家も、天下有数の大大名ではあるが、全国には数多の如き諸侯が犇いているのだ」

そんな具合、柳本元俊と内藤国貞の口論の如き討論は続いたが、肝心の総大将たる三好利長は、一人だんまりを決め込み、床机の上でじつと目を瞑っていた。

「伊賀殿はどうなさるおつもりですか？」

二人の討論に割って入るように、高畠与十郎という男が口を開いた。利長は、相変わらず沈黙を守っているが、時折にやりと笑う姿を見ていると、既に彼には何がしかの策があるようだった。

「……講和以外に、手はなかるうな」

と言つて、利長は苦笑いした。

「伊賀殿！」

柳本元俊は利長をじろりと睨み付ける。しかし、彼は気にする風でもなく、

「これ以外に手はないのだ。反論は許すが、反対は認めぬ。これが三好伊賀守利長が下した決定なのだ！」

そう高らかに、ぴしゃりと言いつけると、まがりなりにも彼を総大将と崇めている柳本元俊には反論のしようがなく、ただ苦々しげな表情を浮かべつつも、

「分かりました」

と、不承不承頷いたのだった。



実際のところは三好、細川両陣営ともに、和議以外の選択肢など最初からなかったのである。

七月二十六日には、激化するばかりの内乱に業を煮やした六角定頼が、ついに八千の大軍を率いて上洛した。將軍義晴の命により、長らく両雄の和睦斡旋に尽力してきたこの人にしてみると、対立の度を深めるばかりの状態は、決して許せるものではなかった。彼自身の面子と、名門六角氏の誇りをかけて、自らの圧倒的な武力を背景とし、強引にでも和睦を結ばせようとしたのである。

それだけではない。

越前国主朝倉孝景は、領内全土に動員令を発し、本拠一乗谷を中心にその兵力を糾合し始めたのである。数にして二万は堅いと見られているが、それ以上になると見る者もいた。既に一部の軍は、越前、近江国境に近い金ヶ崎城に集められ、孝景の号令が下れば、すぐにも近江へ出陣できる態勢を整えていた。また若狭の武田氏や北近江の浅井亮政なども、朝倉氏が立てば、それに応じて拳兵するつもりらしく、独自に軍を集めていた。

こういう状況下では、和議以外の道などあるはずもなかった。もしも強情に決戦の道を選べば、何より都に入った六角定頼が黙ってはいないだろうし、また結局は朝倉孝景に、むざむざ漁夫の利を捧げることになる。

というので、七月二十八日。

両陣営の間で具体的な和睦に向けた協議が始まり、同日夜のうちにそれはおおよそ固まった。

「ふーん。摂津守護代、越水城に加え、河内十七箇所（現在の守口市）の所領。この全てを俺に呉れるかわり、幕府と晴元殿に常と変わらぬ忠誠を誓い、また芥川山城は引き渡せと申すのだな」

交渉を行って帰ってきたばかりの三好康長より、詳細な報告を受けた利長は、そう言うてにやりと笑った。

「左様です。後、筑前守の官職も下さるそうです」

「筑前守？」

「はい」

康長は嬉しそうな顔をして、はっきりと頷く。利長はといえば、相も変らぬ笑みを浮かべたまま、「ふーん」と、案外素っ気無く頷いていた。

【飛翔編】第036章 三好筑前守範長

天文八年（一五三九年）八月二十日。

従五位下伊賀守三好孫次郎利長から、従五位上筑前守三好孫次郎利長となった彼は、厳かな行列を組んで、三好家の新たな居城と定めた摂津越水城に入城した。

そして九月一日。

この日、一門重臣を集めた席で、筑前守利長は、自らの名を、範長と改めている。晴元より与えられた『利』の字を捨てることにより、形はともかく、心は既に晴元から独立していることを世間に見せ付けてやりたい。そんな思いが、筑前守範長になかったとは言わないが、まあ、要するに新たに摂津越水城に入り、心機一転、新たな生活が始まるのだという思いを、自身と、そして家臣たちに知らしめるという思いのほうが強かった。

かくて、三好筑前守範長となった彼は、早速居城越水の大改築を執り行うことにした。細川家筆頭重臣の座を占めるに至った三好家の本拠地が、みすばらしき田舎城では他に示しがつかない。特に、三好政長の居城たる江口城より見劣りすることだけは、断じてあつてはならぬことだった。というわけで、この普請には、三好家のもちうる総力が注がれた。その盛大極まる普請を見る限りにおいても、隆昌著しい三好の国力の凄まじさは、誰の目にも明らかであった。

細川家被官に復帰した後の範長は、あくまでも忠実な晴元の家臣を装っていた。

越水と京を行ったり来たりしながら、相も変らぬ忙しなき日々を過ごしていたが、その立場は、既に晴元の単なる側近から、細川政権を背負って立つ筆頭重臣となっていた。少なくとも、誰もがそう認め、彼自身そう任じている。側近筆頭で、自分こそ筆頭重臣だと思

っている三好政長とは、当然のように対立しているが、それは水面下のことで、表面的には同じ主君に仕える同僚としてガラス張りの友好関係を維持していた。

一方、三好筑前守範長には、細川被官としての顔以外に、新興の実力者としての顔もあつた。何と言つても、彼は細川晴元と互角以上に争い、その結果として、摂津守護代職を勝ち取つたわけである。古来より大国として名高き摂津の支配権を得た範長の勢威声望はますます高まつて、その力は、既に主君晴元すらも凌駕していた。

そんな範長も、いまや十七歳。今のところ、彼に妻といえる存在はないが、それゆえに、三好家と少しでも近づいておきたいと考える有力大家の中には、自らの娘を彼の正室にと、熱烈に薦めてくる者もいるのだった。

「妻など要らぬ」

と、範長は突っぱねた。

「されど、御屋形様は既に十七になられました。御家の世継ぎのこともありますれば、そろそろ御正室を迎えられてもよろしゅうござりまする」

三好康長などは、半ば必死になつて範長に勧めるのだが、彼は頑として受け入れる風もない。どれだけの言葉を弄し、説得に励んでも、「嫌だ」の一点張りでは、如何な康長といえど、取り付く島もなかった。

ただ、年頃の男子が、女子を要らぬというのは不思議といえば不思議だった。男色の気があるのかと思えば、決してそういうわけでもないようで、実際見る目麗しい少年を彼の下に差し向けても、彼は別段周囲が期待したような態度はとらず、

「生まれはどこだ？」

とか、

「親はいるのか？」

といった、とりとめもない、普通の会話に終始していた。

ならば、本当に女子に興味がないのかと、康長たちは頭を抱えた。だが、それもまた違うようである。実際、越水城に入ると、芝生城の大奥にいた女性たちをほとんど移し、気に入った女性とは時折酒など一緒に飲んで、楽しげに和氣藹々と語り合ったりしているという。

けれど、そういう女性たちとも、未だ関係はないという。

「御屋形様は、おそらく静とか申す女子のことが忘れられないのでしょう」

と、大奥総取締の任を担う老女筆頭のお福が言えば、康長は納得したように、大きく頷いた。

「されど、御屋形様は紛れもなき三好の御大将でござる。妻なくして御世継ぎは生まれず、お世継ぎなくば、将来に無意味な禍根を残すことにもなりかねない。細川家が分裂したのも、元をただせば、修験道などに凝って妻帯しなかつた政元公の責任といえる」

そんな風に康長はぼやきながら、困った困ったと、誰に対するでもなく溜息を吐いていた。

「されば、一つ御屋形様に罨をかけてみては如何ですか？」

「罨？」

「そうです」

お福は、いたずら好きな子供のよ様な笑みを浮かべた。康長も、藁にも縋るような気持ちで、長年三好家の奥向き一切を取り仕切ってきた老女を見つめていた。

「御屋形様とて、男でございます。決して女子嫌いではないはず。

となれば、色香で攻めれば、間違いなく落ちます」

「…い、色香で？」

「はい。大奥には、御屋形様と似合いの年頃で、見る目麗しい女子は幾人もおります。そのうち、一番御屋形様に相応しい女子を選び、今宵にも御屋形様の寢所に差し向けましょう」

お福は、幼少時の範長に仕え、養育係として、半ば母と同様の信

頼を寄せられている。そんな彼女ならばこそ、という思いが康長にはあった。だから、全てをお福に委ねると、彼はほっとした様子で奥から去っていった。

その夜。

筑前守範長は疲労困憊といった様子で、寢所に入った。朝起きてから、ずっと政務、軍務に追われ、休む間一つない彼にとって、この寢所だけが、唯一の休息の場であつたりした。

ふうと、大きな溜息を吐くと、彼はゆっくりと畳の上に敷かれた二つの布団の下に向かった…。

「二つ？」

その違和感を、範長は決して見逃さなかつた。そして、そこには恭しく、仰々しく頭を下げている女子が一人いて、純白の寝間着に身を包んだ、その愛くるしい姿に、範長は思わず息を呑んだ。

「お、お、御屋形様。ご、御苦労様にごさいます」

と、たどたどしい言葉遣いで、彼女は上目遣いに範長を見上げた。その妙に色っぽい姿は、健全な十七歳の少年に対しては、ひたすら目の毒であつた。

「そ、その方。な、な、何ゆえ余の寢所におる？ 誰の許しあつて、かようなところに入ったのだ？」

越水城城主にして、摂津守護代。従五位上筑前守の官位を帯び、その勢力の強大さは天下でも屈指りのものとさえ称えられている実力者三好範長の厳しき言葉に、女子は恐縮そうに畏まった。

「お、お、お福様の御命令にごさいます」

「福の？」

その瞬間、範長は困つたような顔をして、苦笑いした。そして、福がかような女子を差し向けてきた真意を察し、「ははは」と高笑いした。

「百万の大軍ですら俺には勝てぬと申すに、かような女子の色香一

つで落とそうとは、笑止千万。ははは」

笑うだけ笑って、範長はゆっくりと腰を落とし、女子の前に座った。女子は緊張の余り、何をして良いのか全く分からぬといった様子で、小刻みに震えていた。

お福の眼鏡に適っただけあって、確かに美しい容姿をしていた。大人の妖艶さの中に、どこか子供のような可憐さも残している。この妖艶と可憐の絶妙なバランスが大切なのだと、範長は密かに思った。

「ま、俺もさほどに薄情ではない。お主は、これからどうしたいのだ？」

そんな風に尋ねる彼に、やましい気持ちなど一切なかった。けれど、尋ねられた女子にしてみると、これほど答えにくい問いもなかった。女子がもしもじと、恥ずかしそうに顔を赤らめていると、範長もようやく己の発言に対する彼女の反応の意味に気づいたらしく、「さあ、答えてみよ。主命だぞ！」

と、今度はいたずら好きな少年そのものの顔をして、ニコニコ笑いながら、厳しい口調で尋ねていた。

「さあ、どうした？ …よかろう。お主が望むこと、この場にて申すことが出来れば、俺はその全てを叶えてつかわそう。さ、申せ。遠慮は要らぬ。これは三好家当主、筑前守範長が言葉なのだ。武士に二言はない」

などと言いながら、基本的に、範長も年頃の健全な青年である。平伏したり、震えたりしている間にずれ動いた寝間着の隙間からのぞく白き柔肌をまじまじと眺めつつ、思わず下品な想像をその頭に浮かべた。

体は、まだまだ小柄だが、胸のほうは比較的ある。顔は、おそらく城内屈指と聞いていいだろう。などと比較採点しながら、範長の気持ちは、次第に彼女でいっぱいになってきた。あの柔らかそうな瑞々しき肌は、触ればどういふ感触がするのだろう。艶かしい彼女の、純真無垢な姿を見ていると、男として、いてもたってもいられ

なくなってきた。

小鳥が囀る泣き声とともに、範長ははっとして飛び起きた。

慌てて周りを見回すと、隣で女子がすやすやと眠っている。互いの乱れた寝間着を省みると、自分が何をしたのか、一目瞭然だった。男になったのだという感覚は、余りない。ただ、ついに一線を越えてしまったのだと思うと、冥土にいるであろう静に申し訳ない気がして、ただ範長は小さく溜息を吐いた。

女子も、やがて目を覚ました。彼女もまた、自分たちのあられもない姿を見て、恥ずかしそうに顔を背けた。互いに、たった一夜で、正真正銘の男と女になったのだと思うと、ただ妙な気分だった。

「す、すまなかつたな」

範長は振り向きざまにそう言うと、女子は「い、いえ」と、恐縮そうに畏まるしかなかった。

十一月の空は、青々と澄んでいて、冷たくも爽やかな朝風に、範長は大きく深呼吸した。

「お主は、何ゆえ我が家の大奥に入った？」

と、唐突に範長が尋ねると、

「家の事情にございます」

彼女も、昨夜よりは幾分堂々と、はっきりとした口調で答えた。

「そなたの家は、余の家臣か？」

「はい。足軽組頭を務めている立花又右衛門と申します」

「…足軽組頭か」

さして高い身分ではない。そう思いながら、範長は改めて彼女を見つめた。

「そういえば、まだ聞いていなかったが、お主は今年でいくつになるのだ？」

「十六にございます」

「十六？ ならば、俺とは一つ違いか」



範長は「ふうん」と頷くと、彼女は慌しく畏まった。

「そう畏まるなよ。少なくとも、俺と二人きりのときは、そんな余所余所しい態度をとるな。誰も彼も、皆そんな態度をとるから、俺も次第に心を閉じざるを得なくなるではないか」

「は、はいッ！」

と、またも条件反射の如く、恭しく頭を下げる彼女に、範長は思わず苦笑いした。

「ま、徐々に慣れよ。さすれば、俺としてはこれほど有り難いことはない。お主とは、真の友として今後とも付き合っていきたいものだ。俺は、お主が気に入った」

「…」

「あ、そうだ。肝心なことを聞きそびれていた。…お主、名は何と申すのだ？」

と、範長が問うと、

「雅と、申します」

そう彼女は恥ずかしそうに答えた。

【飛翔編】第037章 二つの縁組

お雅との生活も、案外楽しく、範長はほぼ毎日のように彼女を自らの寢所に呼び寄せては、日々の愚痴やら、雑談、あるいは囲碁をはじめとする遊びなどして過ごした。

けれど、いわゆる男女関係というものは、あの夜以外一度もなかった。範長が自重しているのと、雅自身が余り強くそういうことを求められない性格なのが災いして、互いに後一步が踏み出せないのである。それが、福にはもどかしい。

「よいですね。子を産むのです。あなたは、三好家の国母となりうる資格を得たのですよ」

と、散々雅には言い聞かせているのだが、こればかりは本人たち次第であるし、また例えそういう関係になったとしても、調子よく男子が授かるかどうかは分からない。全ては神のみぞ知るところであるが、しかしまずはそのような関係にならぬ限り、子など生まれるはずもないのである。

範長はまだ十七だが、今の三好家は、専ら世継ぎの話でもちきりになった。そして、世継ぎ誕生の期待が実態以上に膨れ上がる中、雅の方は『御部屋様』、あるいは西の丸に住居を与えられたので、『西の丸様』と敬称される、実質的側室扱いとなり、彼の父たる立花又右衛門も、ただの足輕組頭から、一躍孫次郎範長の御伽衆へと昇進した。

雅が事実上範長の側室になったからといって、子供、特に男子が生まれないのでは、何の意味もなかった。

二人の仲は基本的に睦まじいので、お福や、康長といった取り巻き連中に口を挟む余地はなかったが、天文九年（一五四〇年）に入つて間もないある日、丹波の有力国人波多野秀忠より縁組話が持ち

込まれてくると、そういうわけにもいかなかった。

波多野秀忠は丹波八上城主で、かねて三好家とは対立を重ねてきた因縁の敵であった。その波多野家はその姫を範長に嫁がせようと画策した背景には、範長の飛躍的勢力拡大に対する恐怖感があった。既に範長は、丹波の背後に位置する摂津の国主となっており、もしも三好家と敵対し続けた場合、波多野家は八木城主内藤国貞と、摂津越水城主三好範長により挟撃されかねず、領地を維持するには、三好家との完全な和解が急務となっていたのだ。

「波多野家と縁戚関係となれば、我らにとっても後顧に憂いなく、摂津の統治に専念できるといふものでございます」

と、重臣岩成主税助友通は言った。

「だが、波多野家と我らが結んだとなると、長く我らと行動をともにしてきた内藤殿の不興を買う恐れがあるぞ」

孫四郎長逸が懸念を示すと、

「左様。未だ内藤殿と波多野秀忠の間では、延々と内戦が繰り返されているらしい。我らが波多野と結べば、内藤殿からすれば許しがたき背信行為と映ろう」

すかさず康長も同調した。

「いや、この際、この縁談をきっかけに内藤家と波多野家を和解させ、丹波の安定を図るのが得策かと。いずれ我らが覇道を目指すとき、丹波は確保しておかねばならぬ要地となります。その丹波が波多野、内藤の両党に分かれて内戦しているのは、面白くありません」

岩成主税助は自信満々の様子で、そう言うのである。

だが、事がそう単純であるとは思えなかった。内藤、波多野は累代に渡り、丹波の覇権を巡って争ってきた。共に、幼い頃より憎むべき敵、滅ぼすべき仇と教えられ、育ってきた両家の指導者たちが、そう容易く和睦を受け入れるとは思えなかった。

「それを成してこそその天下人ではござりませぬか！」

主税助はびしゃりと言い切って、反論に励む諸将を制すると、改

めて主座にある孫次郎範長のほうを見つめた。

「…主税助。やれるか？」

彼は、まじまじと主税助を見つめた。

「お任せくださりませ！」

岩成主税助友通は、胸を張って、殊更大きく頷いた。

「俺は正室を迎えることになるらしい」

と、範長は溜息混じりに、雅の方にぼやいていた。

「御正室にございますか？ …波多野家の姫君様だと、小耳に挟みましたが…」

「ああ。岩成辺りが五月蠅くてな。ま、いざというとき、撰津の真北にある丹波が味方であることに越したことはないが…。ま、骨の折れることよ。波多野と我らが結べば、内藤殿は表面的にはどうあれ、内心は歡ばれんであろう」

「…左様にございますね」

雅の方とて、三好家を取り巻く政治情勢ぐらひは承知している。

撰津を得、いまや名だたる雄藩と成おさせた三好家だが、更なる飛躍を目指すなら、後顧の憂いは完全に除いておかねばならない。そのため波多野家と結ぶのも、確かに面白い策であるように思えた。ただ、そうした事情、範長の立場も全て分かつてはいるが、しかし一人の女子としては、やはり彼が正室を迎えるという事実に対し、寂しさ、悲しさ、嫉妬など、ごく当たり前の平凡な感情を抱かずにはいられなかった。所詮、自分は側室扱いなのだと思つと、少し悲しくなつたが、自身の出自を思えば、仕方ないのかもしれない。ただ、殿様つて奴は、実に面倒な仕事だよ。…毎日休む間もなく仕事だし、今度は家の事情で結婚だからなあ。辞められるものなら辞めてみたいものだが、そももいくまいて」

などとぼやきながら、「ははは」と苦笑いする彼を、雅の方はまじまじと見つめている。不思議な人だと、よく思う。仕事をしてい

るとき、あるいは仕事の話をしているときは、まさに物語に出てくるような英雄の如き顔をする。真面目で、凜とした気配を漂わせ、どちらかというところ寄り難い圧倒的な存在感があった。けれど、こういうとりとめのない雑談などしているときは、十七歳の少年らしい無邪気な顔をするのだった。

「それは贅沢と言うものですよ。御殿様のような立場になりたくても、なれない人が、天下には数多といるわけですから」

と、雅が言えば、

「左様か！」

範長は大きく頷き、「それもそうだ」と、嬉しそうに豪快に高笑いしていた。

三好家と波多野家の縁組を巡っては、波多野家というより、実質内藤家との交渉が専ら主になっていた。

なので、三好方の交渉担当になった岩成友通は、範長より補佐役として付けられた松永甚介を伴い、何度となく内藤家の八木城に足を運んだ。当初、内藤国貞は、三好と波多野の縁組話に対し、当然の如くよい顔をしなかった。

「無論、筑前守様が波多野と結びたいなら、我らに否やはない。どうぞ、御自由になされよ」

と、言葉こそ認めているようであったが、その殺気だった、棘のある口調は、明らかに不承知と言っているようなものであった。

ただ、その程度で岩成主税助としても引くわけにはいかなかった。彼にしても、今回の縁談は、彼の今後の出世にも大きく関わる大事だった。失敗するわけにはいかないのである。

「此度の縁組を持って、我が殿としましては、内藤殿と波多野家の和睦のきっかけにしたいと考えております」

そう主税助が言うと、内藤国貞はムツとしたように、

「筑前殿とて我が家と波多野が長年に渡り対立を重ねてきた因縁の

間柄であることは御承知のはず。…無論、三好政長により追い詰められた折に助けていただいたこと、さらには先の戦いにより波多野秀忠にこの城を攻め落とされた際も、筑前殿のおかげで取り戻すことが出来申した。その恩義、この国貞、一日たりとて忘れてはおりませぬが、だからと言って波多野との和議などもつてのほか」と言つて、もう聞く耳すら持たなかった。

なので、岩成友通はやむなく退出したが、決して諦めたわけではなかった。

だから、翌日もまた現れ、国貞の説得に全精力を注いだ。三好範長と波多野家の姫の縁組は、内藤国貞と波多野秀忠の和議成立を象徴するものでなければならぬのだ。もしも三好の力で、内藤、波多野が長年の争いを忘れ、親密な関係を築くことが出来れば、諸国に三好の調停能力の高さを見せ付ける格好の機会となる。

「全く、その方もしつきき男よのう。和議はならんと、何度も申しとおろうが。…筑前殿が波多野家と結ぼうが、御勝手になされよ。我らが文句を申すことはない。それでよからう」

相変わらず、国貞は素っ気無い態度に終始していた。そこには、波多野と同盟を結ぼうとする三好家に対する、露骨な不信感がありありと表れていた。

岩成主税助は、内心焦っていた。波多野と同盟し、その結果内藤が離反するのでは、何の意味もなかった。今回の縁組は、丹波を一つにまとめた上で、同国を三好家の影響下に置くことが最大の目的なのである。

だからといって、主税助には打つ手がなかった。内藤国貞はどこまでも波多野との因縁の対立関係を楯に、冷たい態度を崩そうとはしなかった。もはややむを得ないのかと、主税助自身、諦めようとしたその時のことであつた。

「内藤殿は、実に無責任なお方でござりますな」

と、それまでだんまりを決め込んでいた副使の松永甚介長頼が言つた。

「無責任だと？ 松永殿、それはいったい如何なる意味かな？」

国貞がムツとしたのは、無理もなきことであつた。余りに傍若無人な物言いに、岩成主税助も慌てて彼を見た。

「内藤殿は丹波守護代でござろう。即ち、丹波を治める堂々たる国主。そして、守護代としてみれば、波多野家も配下の大名家の一つに過ぎませぬ。その配下に対し、昔からの因縁を持ち出して、いつまでもぐだぐだと対立続けているなど、度量が狭いといわざるを得ませぬ。また、丹波の安定を図り、民草の幸せを第一に考えねばならぬ守護代様が、自ら内乱の種を撒いておられるとは…、これを無責任と言わずして、何と言いましよう」

甚介の物言いに、容赦はなかつた。そして、余りの正論に国貞は言葉を失い、主税助も呆然と彼の顔を見つめていた。

「それがしが内藤殿の御立場なれば、せつかくの和解の好機が目の前に転がっているのです。喜んで飛びつき、己の度量の高さ、深さを天下に示しますな。長年の対立も、民草がためには涙を吞んで我慢し、克服する。その素晴らしき姿を満天下に見せ付けてやります。そして、その上で三好家に対し、高い恩を売りつけてやります」

「…」

「内藤殿に御伺いたしますが、いったい内藤殿は、いつまでこの無用な争いを繰り返すおつもりか？ 波多野家が滅びるまででござりますか？ だが、三好家を敵に回して、それができるとお思いでござるか？ 越後に鞍替えするつもりだとしても、今のところ、当家と越後は晴元殿の下で手を結んでおりますれば、越後が内藤殿をお助けすることなどありません。例えあつたとしても、まともに御考えにならればお分かりでござろうが、越後如き、我らにかかれば大した敵ではありません」

まるで齒に衣着せぬ甚介の物言いに、誰もが圧倒されていた。その余りに喧嘩腰な口調に、岩成主税助などは、はらはらと上座の国貞を見つめていたが、国貞自身、苦々しげに顔を歪めながらも、返す言葉もないといった風に絶句していた。

「…よ、よかろう。松永殿が仰せの如く、確かにわしは丹波守護代。守護代としては、長年の対立を乗り越えても、民草のために働かねばならぬ。そのために波多野との和解が必要なら、受け入れよう。た、ただしだ。そのためには、二つの条件がある」

「条件？」

岩成主税助が、不思議そうに首を傾げると、国貞は大きく頷いた。「一つは、波多野秀忠殿が守護代たるわしの指揮下に入ることを正式に誓うこと。その証として、この八木城に伺候すること。そして、もう一つは、三好、波多野両家が縁組するのだから、我らとも縁組してもらおう」

「な、内藤殿と縁組？」

仰天する主税助を尻目に、国貞はじろりと松永甚介を睨んでいた。「縁組と言っても、何もわしの娘をやるとか、筑前殿から貰うとかいう話ではない。実際、筑前殿には姫君はおられぬし、その筑前殿も波多野の姫君を貰うのだ。そこにこり押しするほど、わしも我俣ではない」

「…と、申されますと、縁組とはいっただい…」

主税助は、ただただ呆然と、わけが分からぬといった風に国貞を見つめていた。その国貞はというと、しきりにニタニタ笑うと、

「そこにおける松永甚介長頼殿を、わが嗣子に貰う」

と、言った。

「は…？ ま、松永殿を嗣子に？」

「左様。…残念ながら、わしには跡継ぎがおらぬゆえなあ。ただ、姫はおるから、松永殿には姫の婿となってもらい、いずれはこの内藤家を継いでもらいたいのだ」

「は、はあ」

岩成主税助友通とすれば、どう答えてよいのか分からなかった。だからしきりに、話題の主役たる松永甚介を見るが、彼もまた当惑しきった様子で、困惑気味に呆然としていた。

「ま、そのこと筑前殿にお伝えください。この二つの条件が認めら



れば、それがしは快く筑前殿と波多野家の姫君がご結婚を認め、今後とも変わらぬ忠誠を筑前殿に捧げましょう」

言うべきことだけきっぱりと言いつつ、後は清々しげな笑みと共に、颯爽と国貞はその場から去っていった。戸惑い、困惑している二人は、ただ呆れたように苦笑いするしかなかった。

「甚介と内藤殿の姫が？」

岩成主税助の復命を受けた孫次郎範長は、驚きを隠しきれぬといった顔をしつつも、冷静を取り戻すなり嬉しそうに高笑いしていた。「よ、よろしいのでございますか？」

主税助は、まじまじと主君の顔を見た。

「良いも悪いもなかるう。先方がそうしたいと思っておられるなら、後は甚介の気持ち次第。甚介が良しと言うなら、余に何の異存があるうや」

と言って、からからと笑う三好筑前守範長であった。

肝心の松永甚介長頼は、ひたすら困惑しきっていたが、最終的には受け入れることにした。兄の久秀が、

「国持大名となる最初で最後の機会になるやもしれぬ。断るとは許さんぞ！」

という、半ば冗談、半ば本気の脅しをかけてきたことも、彼の重い背中を押したことは否めなかった。

かくて松永甚介長頼は、内藤家に婿入りすることとなった。

天文九年（一五四〇年）一月二十二日。

波多野家の姫は、厳かな行列を作って、越水城にやってきた。三好筑前守範長の正式な妻として、以後は三好と波多野を結ぶ大切な政治的架け橋、そして何より正室として、夫たる範長と三好家を支える役目を担うことになった。

そして一月二十五日。

三好、波多野両家の縁組ほどに立派ではなかったが、それなりの

格式を以つて、松永甚介長頼は内藤国貞の姫を娶り、その婿嗣子となつた。それに伴い、内藤備前守長頼と名乗ることにした。

結婚から、またさらに日々が流れた。

その間に、冬が過ぎ、春を迎え、夏を越し、そしていつしか、季節はすっかり秋になっていた。

越水城の政治的立場は、この約一年の間にも、日に日に高まり、既に京の都、芥川山城に並ぶ、畿内の政治的拠点の一つに数えられるまでになっていた。

また、外観も大きく変わった。三好家がその総力を注いで行っている普請により、その城規模は芥川山城のそれと比べても遜色ないやそれ以上のものと言っても、決して言い過ぎではないほどになった。天下にその名を轟かす三好家の居城としては、まさしく申し分なかった。

けれど、そこに暮らす三好筑前守範長の生活態度は、今も昔も余り大差はなかった。せっかく正室を迎え入れても、夫婦生活は未だないようであった。相変わらず雅の方の下に出向いては、共に夜を過ごしているという。

「殿、雅の方もようございますが、御台所様の御許にも赴かれませぬと、何のためにお迎えした御台様か分かりませぬぞ」

と、福などは口を酸っぱくして咎めるのだが、範長に聞く耳はなかった。

実際のところ…、範長は波多野の姫が余り好きではなかった。無論、容姿は美しく、礼儀作法もみっちり仕込まれていると見えて、完璧だった。決まりきった台詞で、型の通りの動作をする。けれど、それだけだった。静の方や雅の方のような、接していて楽しさを感じるようなことは、一切なかった。

そうした平穏な城内生活の外側では、当然のように、その政治状

況はめまぐるしいほどの変化を繰り返していた。

ここ最近の畿内情勢を動かす主要人物といえば、まず自他共に天下人と認められている細川晴元があつて、彼の下で力を握る三好越後守政長と三好筑前守範長の二人がいた。目下、この二人の権力闘争を中心にして畿内の政局は推移していたが、それに対し、自らこそ第三の主役だと声高に主張している男がいた。

それが木沢長政である。

畠山家筆頭家老にして河内守護代、信貴山城主。

少し前までは、三好政長と与党を組み、政治的に絶大な影響力を誇っていた実力者だった。

しかし、ここ彼の零落振りは哀れなほど顕著だった。実際、彼の出身母体であり、かつ彼が畿内の政治を動かす上での大義名分的役割を果たしていた畠山氏では、遊佐河内守長教の地位が急速に高まり、今では彼こそが実質的な筆頭家老の座を占めていた。家中の木沢一派は、ほとんど非主流派の野党的立場に追い落とされてしまっている。遊佐一派が専権を振るう中、木沢長政の政治力は日に日に落ちていった。

さらに、畠山家と並び、木沢の政治的基盤の重要な核となっていた細川政権内での立場も、今では大きく揺れ動いている。それと言うのも全て、先の戦いで三好政長の援軍要請を蹴り、眼前の畠山家での政争に明け暮れたつけが巡ってきただけのことであつたが、その畠山家での政争にも敗れた今、まさに踏んだり蹴つたりの状況であつた。

無論、彼とて依然として大きな力を持っており、完全に零落したわけではない。大和への勢力拡大という従来の目標はほぼ完遂されつつあり、大和国人衆は木沢への臣従を誓っている。ただ、晴元の信任を失い、政長とも対立し、拳句畠山家では冷飯食い状態が続いていることに対する彼自身の不満は、日に日に高まっていた。彼の夢は天下であり、そのために、これまで突っ走ってきたのだ。大和に勢力を広げたからと、一地方大名に終わる気のない彼にとっては、

その程度は些細なことではなかった。

三好家の摂津支配は、案外はかどらなかつた。

一年以上の歳月をかけ、有力な国人衆を次々と被官化していったが、中には、三好家の支配を快しとせず、相変わらず抵抗を続けている者もいた。

その筆頭が、伊丹城城主伊丹親興であり、また一庫城城主の塩川政年、三宅城主の三宅国村らであった。

彼らは、範長の守護代就任から一年たつてもなお、越水城に伺候することはなかつた。彼らにしてみれば、僅か十八歳の若造に頭を下げることに不満もあつたし、何よりこれまで三好政長や木沢長政らと親しくしていた手前、範長体制下で冷飯を食わされる可能性もあり、それに対する警戒感もあつて、彼らはひたすら抵抗を貫いていたのだつた。

ただ、彼らも独力で乗りに乗っている新興の実力者たる三好範長に刃向かうほど愚かではない。その背後に範長の政敵たる三好政長がいることは明らかであるし、また、彼らは反三好範長の急先鋒となつている木沢長政とも親しかつた。

「相変わらず、伊丹らに参府しようとする兆しはありません」

と、常と変わらぬ苦りきつた顔をして、康長はぼやいていた。

世界はすっかり秋である。庭には、赤色、橙色、黄色など、実に様々な自然に満ちていた。いっそ、紅葉狩りなどしつつ、思う存分秋を堪能したかつたが、そうもいかないのが、忙しなき三好筑前守範長の宿命であつたりした。

「どうあつても、余に臣従するのは嫌と申すのだな」

その彼は、淡々と、冷め切つたような口調で、ボソツと呟いた。

「叔父上。従わぬなら、滅ぼそう。兵を出して我らの強さ、奴らに

思い知らせてやるのだ」

と言つて、彼はからからと笑つた。

「…それも一つではございますが、ただ気になることもあります」  
「気になること？」

「はい。伊丹大和守らがここまで強気に出てくるのは、おそらく背後に強力な後援者がいるからだと推測できます」

「…後援者？ 越後か？」

と、範長が言えば、康長は「はい」と大きく頷いた。

「ただ、間者からの報告によると、どうも越後守政長だけでなく、木沢長政も奴らに食指を伸ばしているようです」

「木沢？」

「はい。特に木沢は露骨に伊丹大和守らに接触し、関係を強化しているようです。いざというとき、奴らを手懐けておくことで、我らへの楔にしようというのが、木沢の考えでしょう」

時折、庭先から吹き抜ける冷たい秋風が、範長と康長の肌を舐めるように通り過ぎていく。その冷たさにおいてもたつてもいられず、範長はスクツと立ち上がり、おもむろに障子を閉じた。

「伊丹らも、随分木沢に靡いているようです。実際、越後は、実際はともあれ表面的には、今のところ我らと友好関係を保っていますから、少なくとも、越後は露骨に摂津に手を突っ込むことはできません。されど、木沢は我らの完全な敵でございますから、容赦がありません」

「…」

「ただ、木沢のこの露骨な動きを、越後は実質的に黙認しているようです。ゆえに、木沢の動きを幕府に訴え出たとしても、管領殿はお聞き入れくださらないでしょう」

「…そうか。というより、木沢は、そういう政長の行動を完全に読んだ上で、伊丹らに手を伸ばしてきたのだろうな。全く、煮ても焼いても食えぬ狸爺だ」

などとぼやきながら、範長は腹立たしそくに、障子に遮られた東

の空を睨みつけた。

「ゆえに、制裁出兵も一つの手ではありますが、左様なことをいせば、三好越後守政長はいいとしても、木沢左京亮長政との本格的な戦に発展しかねませぬ」

と、康長は言うのであるが、肝心の範長などは、

「ふーん。だが、いつそ手っ取り早くてよいのではないか。木沢も、余が父元長を殺した宿敵の一人に違いない。父の死に関わった者は、いずれ皆死んでもらうが、まず木沢長政を血祭りに上げる。それも良いような気がするがね」

そう言って、豪快に高笑いしていた。

「悪くない策ですが、いけませんね」

そこに、祐筆として控えていた松永久秀が、楽しそうに口を挟んできた。

「まず、木沢長政を侮ってはなりませんぞ。あれも、その智謀で、この激しき動乱を生き抜いてきた傑物でございますからな。落ち目とはいえ、あの鬼謀を侮れば、故筑前守元長様と同じ末路を歩まれることになりますぞ」

久秀は、長らく木沢の配下にいたわけで、その経験に裏打ちされる意見は、千金の重みがあった。

「木沢の如き策略家に対し、先手を打つのは愚策です。ああいう男を相手とするに、上策なるものはありませんが、先手を打つのは、明らかに下策です。機を待ち、今はひたすら耐え忍ぶのが良いと思われます。それが、中策です」

「耐え忍ぶ？」

「はい。その間にこちらも力を強め、また奴が何を考えているのか突き止めるのです。わけもわからぬうちに動けば、それこそ奴の思慮にござります」

そんな久秀の言葉に、範長も大きく頷いた。

これまで、どれだけ多くの英雄たちが、木沢長政の謀牙にかかって殺されてきたか……。そのことを考えれば、確かに軽挙妄動は厳に慎むべきだった。亡父元長も、彼の鬼謀を侮り、先制攻撃を仕掛けたものだから、ついに滅亡にまで追い込まれてしまった。

父に学び、父を目指し、父を越えることを、自身の生き方に定めてここまで歩んできた範長であつたが、父と同じ轍を踏むことだけは御免だった。自分は父とは違う。ならば、父の失敗に踏まえ、そこから学び、それを克服してさらに前へ進まなければならない。

「ならば、待とう。とりあえず、その『機』とやらが、余の下にやってくるまで、余はひたすら眠るとしよう」

と、範長は言う。

「左様。果報は寝て待て、にございます」

久秀はニタニタと笑っていた。

「ならば、伊丹大和らのこと、如何いたします？ 果報は寝て待てと申しても、何もせぬわけにはいかんでしょう」

三好康長はそんな二人の会話に割って入るように尋ねると、

「それなら、いつもの如く、伺候しろと言いつけるだけでよいかと思われませぬ。ただ、それだけでは舐められますので、今のところは越水に軍を集め、伊丹殿らに現実的な圧力をかけるのが上策かと思われませぬ」

と、久秀は淡々と答えた。



【飛翔編】第039章 決戦前夜

天文十年（一五四一年）になった。

三好筑前守範長も、晴れて十九歳である。まだまだ若い、この九年間の凄絶な経験を経て、その身体から滲み出る風格は、下手な大人以上に大人びていた。

ただ、年が明け、しばらくたつても、木沢長政による陰湿な陰謀に歯止めがかかることはなかった。そればかりか、ここ最近木沢の庇護を良いことに、三好家に楯突く豪族が俄かに増えてきて、それが範長ら三好家中枢の最大の悩みとなっていたのだ。

その一人が、上田某という小豪族で、豪族というよりは大地主の主といったほうが良いような些細な勢力を持っているに過ぎなかったが、その程度の男ですら、調子に乗って離反したことに、三好家は激怒し、範長も、その堪忍袋の尾を自ら切った。

だから、わざわざ三好政長より援軍まで頼んで、総勢一万の大軍を従えて出兵した。上田某は慌てふためき、老若男女を問わぬ百人ばかりの兵を強引に掻き集めたが、無論、勝てるわけがなかった。そこで伊丹親興や三宅国村ら、近隣の大豪族に支援を求めたが、彼らとて一万を超える三好の大軍に勝負を挑めるはずもなく、七月十九日、三好軍は孤立無援と化した上田某の居館を十重二十重に取り囲んだ。

「御屋形様、上田方より使者が参り、降伏したいとのことにございます」

御伽衆であり、かつ近習役として、日ごろ範長の下に侍っている側近立花又右衛門は、猛る籠の如き主君の御前に参上し、そう報告した。

「降伏？ 木沢方の甘言に乗って、余に楯突いた分際で、今更泡を食って降伏とはふざけるな。城に立て籠もった者は、皆同罪である。これより総攻撃を開始し、全員を皆殺しにするのだ」

範長はいつになく激怒していた。その目は、凄まじく燃え盛っていて、立花又右衛門は思わず後ずさらずにはいられなかった。

「み、皆殺しにございますか？」

又右衛門が困惑気味に尋ねると、範長は二度は言わず、ただ静かに頷いた。

「で、ですが、城には年寄りも、女子もいるとか。彼らも皆、殺すのですか？」

「無論だ」

すかさず頷く範長に、又右衛門は絶句した。

如何に戦国の世だからと、老若男女を問わず皆殺しというのは、余り例がない。無論、全くないわけではないが、珍しいことであった。

又右衛門は余り合点がいかぬようであったが、兎にも角にも範長の決定は絶対である。早速、範長は諸将に対し、撫で斬りにするよう厳命した。

「見つけ次第、殺せ！ 容赦はするな。一人も逃がすな」

それは、温厚と見られていた範長の発した命とは思えぬほどに厳しく、凄まじいものであった。が、それだけ彼の怒りが凄まじいのだと思うと、命を受けた諸将に、否やは言えなかった。

城は同日中に陥落し、立て籠もった百人余のうち、ほんの僅かに脱出した数名を除いて、全員が無惨に殺された。

当然、城主の上田某も、文字通り八つ裂きにされた。その無惨な髑髏は、彼の妻子ともども、彼の領内に数日曝され、その後は、それを酒盃に作り変えて、戦勝記念の名目で、伊丹親興の下に送りつけたのである。

三好範長は、既に木沢方との決戦を覚悟していた。伊丹に対するこの嫌がらせは、言うなれば彼なりの宣戦布告であった。

だから彼は、上田某の一件が片付くと、芥川山城に伺候して、晴

元の御前にて政長らと今後のことを協議した。伊丹ら、摂津国内の反三好党の支援に、木沢長政が本格的に動くとなると、もはやこれは、三好家のみの問題ではなくなっていた。細川政権を挙げて対処すべき、天下を揺るがす大事であった。

「木沢長政は既に自棄になつてゐる。彼には既に後がない。といつて、悔るわけにもいかん。窮鼠猫を噛むの例え通り、あれが何を企んでくるのか、我らには皆目検討もつかんだ。あの鬼謀の恐ろしさは、余が一番知つてゐる」

と、晴元が言えば、政長も範長も、殊更大きく頷いた。

「これ以上、奴に時間を与えるわけにはいきませんな。これまでは彼の狙いがいまいち分からなかつたので、あえて攻撃は控えて参りましたが……。あれは、既に天下をその実力でもぎ取るつもりです。そのために仲間を集め、その上で一挙に拳兵するつもりでしょう。となると、奴に時間を与えれば、その分、奴の同志はどんどん増えていく」

と、範長は腹立たしそうに言った。

「ならばこちらより先制攻撃を仕掛けるしかない、というわけですね」

そんな政長の言葉に、範長も大きく頷く。

「ゆえにそれがしは上田を惨たらしく攻め潰したのです。これで、我らの覚悟も満天下に知れ渡つたでしょう。恐れをなして我らに従うなら、快く受け入れ、さもなければ滅ぼす。こちらが本格的に動けば、木沢も動くでしょう。その上で、奴を叩く！」

無論、それで勝てるかどうかは分からないが、これが今のところとりうる最善策であると、範長は信じていた。はじめ、彼の参謀役となつてゐる松永久秀より、そう献言されたときは、

「成功するのか？」

と、半信半疑だったが、今ではこれしかないと思つていた。晴元方以上に、木沢のほう時間が欲していると分かつた瞬間、これまでの中策は下策に、下策は中策に変わった。先制攻撃を仕掛け、木

沢に時間を与えない。失敗するかもしれないが、時間を置けばさらに不利となる以上、仕方なかった。

「ならば、まず攻めるべき相手を定めねばなりません」

政長はそう言つて、摂津の詳細が記された地図をまじまじと見つめていた。

「攻めるとなれば、こちらにも攻めるだけの大義がある。何の理由もなく攻め込めば、それこそ木沢の思う壺ゆえなあ」

などと呟きながら、木沢に劣らぬ陰謀家は、腕組みながらじつと考え込んでいた。

「塩川政年など、良いのではないか」

そこに、ふと晴元が口を挟んだ。

「塩川？ ああ、一庫城（一くぐら）（現在の兵庫県川西市）の城主……。されど、何ゆえに？」

と、政長が尋ねると、

「分からぬか。奴の妻は、高国が妹ぞ」

ニタニタと不敵な笑みを漏らしつつ、晴元は簡潔明朗に答えた。

「な、なるほど。高国の義弟たる塩川政年なれば、討伐する大義は十分。晴国が滅びたことで、勢いを失ったとはいえ、高国の残党どもは、今では氏綱（高国の養子）を盟主に奉じて、相変わらず復権を目指しているという……。その残党の一味という濡れ衣を着せてしまえば、奴を退治する大義は成立する」

ほんと手を叩いて歓ぶ政長に、範長もニタニタと不敵な笑みを漏らした。

「それに、伊丹大和守も、三宅出羽守（国村）も、塩川の縁戚に繋がっているはず。となれば、塩川が攻められて、彼らが黙っているはずもない」

「左様。塩川征伐をきつかけに、一挙に木沢党が拳兵せざるを得ぬことになる。無論、木沢本人もな」

そんな風に言いながら、細川晴元は思わず小さな溜息を漏らした。元々、自分が目をかけてやったからこそ、木沢長政は今ほどの力を

手に入れられたのだ。それなのに、その恩を仇で返すかの如く、自分に対し兵を挙げようとしている彼の行動に、晴元は腸が煮えくり返るような怒りを感じた。

一方、三好範長は、淡々として、いつもと変わらぬ平静を保っていた。父の仇を討てるという喜びよりは、木沢の鬼謀に対する恐怖、即ち父と同じ道を歩みたくないという気持ちの方が勝っていたのだった。

八月になった。

三好範長は、総勢八千の兵を率い、越水城を発した。途中、三好政長の軍三千と、波多野秀忠率いる丹波勢二千、摂津における三好方、即ち池田城主の池田信正を筆頭とする豪族たちが合流したので、総勢一万八千の大軍となった。

三好軍は摂津多田にある一庫城を包囲すると、一庫城主塩川政年は手勢二千とともに立て籠もり、徹底抗戦の構えを取った。

「やはり、降伏はせんな」

と、範長は恨めしげに城を見上げながら、ぼやいていた。

「全く…。これではいったい何のために上田の者どもを撫で斬りにしたのか分らないか。…余の怖さを知らしめて、敵の戦意をそぎ落とすのが狙いだっただのになあ」

そんな風に呟きつつ、彼は静かに床机に腰を下ろした。

夏である。

そう感じさせてくれるような青々とした空が、頭上いっぱい広がっていた。身に染みる蒸し暑さから逃れるように、側近たちに団扇を扇がせているが、夏というのは、その程度の小細工でどうにかなるほど、甘いものではなかった。

「とりあえず、包囲を続けるのだ。攻撃はならんと、各陣に改めて徹底させておけ」

そう側に控える松永久秀、立花又右衛門の両名に命じると、二人は恭しく頷き、大仰に平伏した。

大和は信貴山城。

木沢長政は、不満そうに、貝の如く口を閉ざしていた。

摂津諸豪族を調略し、着々その野望実現に向けた布石を打ち続けていた彼であったが、こと、畠山家の話になると、その類稀なる謀才は余り通じなかった。

彼が畠山家内部で事実上失脚しつつあることは、何度も述べた通りであるが、実態はともかく、形としては、足利將軍家に連なり、かつ三管領家の一つとして、古く細川家と同格に扱われてきた名族畠山家は、木沢の野望を実現するにあたってなくてはならぬ存在だった。

だから、彼は一発逆転を期し、賭けに出た。失脚状態を乗り越え、かつての如く、自らが畠山家の実権者に返り咲くには、生半可な策では通じない。そう思ったからこそ、彼は一生一度の大博打に打って出ることにしたのであった。

天文十年（一五四一年）八月十五日。

畠山家当主畠山長経が、本城たる河内高屋城を離れ、物見遊山も兼ねつつ大和国内に入ると、木沢長政は自らの居城信貴山で、これを出迎えた。如何に非主流とはいえ、長経にとり、木沢は自分を擁立してくれた恩人であるし、多分に名目的とはいえ、依然として筆頭重臣の座を占めている男だった。疑う余地などなく、堂々と、平然と彼は信貴山に入ったのである。

だが…。

「よいな。手筈どおりにやれよ」

木沢は、実弟の左馬允に命じると、彼は深刻そうな顔をして、大きく頷いた。

左馬允率いる木沢勢三十騎は、木沢家中より選び抜かれた精鋭揃いだった。そして、彼らは無用心にも、無防備のまま入浴中の長経の下に押し寄せると、猛然と襲い掛かったのである。

結局、長経は必死の抵抗空しく、木沢の配下により暗殺されてしまった。その上で、木沢長政はすかさず兵を動かし、高屋を目指した。彼としては、長経を暗殺し、自らの意のままになる新当主を擁立することにより、畠山家を一拳に己が支配下に置こうとしたのである。

だが…。

「守護様、至急のお戻りである。門を開けい！」

と、左馬允が怒鳴っても、城門は堅く閉ざされたまま、微動だにしなかった。

「何ゆえ開かんのだ？」

と、木沢長政は不思議がついていたが、しばらくすると、開くことなき城門の上より、無数の矢が猛然と放たれ、そして、それは容赦なく木沢勢の兵士十数人を貫いた。

「愚か者め！ そなたが守護様を暗殺したこと、我ら先刻承知しておるッ！ この悪逆非道な主殺しを討ち滅ぼせ！」

そこに高らかに響き渡ったのは、憎むべき遊佐河内守長教の発した大音声であった。

すると、遊佐が予め配していたであろう伏兵たちが、どこからともなく現れ、木沢勢に猛攻を加えた。こうなると、木沢長政に勝ち目はなく、彼は慌てふためいて信貴山城まで逃げ戻ったのである。

してやられたと、木沢は今も思っていた。

実際、長経死後、遊佐河内守は、かつて遊佐と木沢が共同して追放した畠山植長を、再び守護職に擁立して、完全に畠山家の実権を掌握してしまった。それに対して木沢はというと、主殺しの汚名のみ背負って、名目のみ保っていた畠山家筆頭重臣の身分まで失ってしまった。まさに踏んだり蹴ったりである。

稀代の陰謀家たる木沢も、遊佐河内守には敵わなかった。また、今にして思い返せば、なぜ遊佐が、長経暗殺のことを、あれほど速

く知り、準備万端整えていたのかということも腑に落ちなかった。

「…全ては、奴の手のひらの上か。俺が長経殿を殺すことを、奴は予想していたのだろうな」

そんな風にぼやきながら、彼は手にしていた酒盃を、どこともなく投げ飛ばした。

「長経殿を信貴山に送ったのも、奴の策だろう。…くそッ！ 完全に嵌められたな」

悔しいといえば、これほど悔しいこともなかった。いってみれば、木沢長政は、遊佐長教に体よく利用されたのだ。自ら稀代の陰謀家と任じている彼にしてみれば、屈辱以外の何者でもなかった。

だから彼は、仕方なく畠山植長の弟にあたる畠山政国を半ば強引に擁立して、勝手に畠山家の家督であると宣言してしまったのである。その上で、自ら政国政権の筆頭家老に納まり、政国には木沢のかつての本拠であつた飯盛山城を与えて、とりあえず新体制としての体裁を急速に整えていったのだつた。

破れかぶれともいえる政国擁立ではあるが、これにより形としては遊佐長教に支持される畠山植長と、木沢長政に支持される畠山政国によって畠山家は真つ二つに割れることとなった。かくてしばらくの間、両陣営共に、自分たちのほうが正統な畠山家当主であると主張し、激しき睨み合いを続けることになるのであつた。



一庫城いくらぐらを攻囲して、既に一ヶ月になる。

三好方は長期戦を覚悟していた。無論、総攻撃を加えれば、この程度の城は、一両日中に攻め落とすこともできただろう。あえてそれをしないのは、この城を攻め落とすことが今回の作戦の目的ではなかったからである。けれど、その作戦の要諦を占める木沢方の一斉蜂起は、案外なかなか起きなかった。

「先の畠山家の内紛で、木沢長政の謀才にも疑問符が付きまじったからな。諸侯たちも、木沢について戦うことが本当によいのか、いろいろ考えあぐねている様子です」

そんな松永久秀の言葉に、範長は「ふーむ」と、腹立たしそうに唸った。

「ま、拳兵せぬならせぬで構わぬが…。一庫城を攻め潰し、塩川を成敗するのみ。もしも伊丹大和守らが余の下に伺候せぬなら、この大軍で奴らを一人一人確実に狩っていくだけのことだ」

「ですが、木沢長政が事ここに至り、矛を収めるとも思えませぬ。自棄になって実行使に打って出てくる可能性も十分考えられまする」

「…自棄になって、か。だが、あれの鬼謀を侮るわけにはいかんな。如何に畠山家の政争に敗れた、とは言ってもな…」

と言いながら、範長は自らに言い聞かせるように、何度も「侮つてはならぬのだ」と、小さく呟いていた。

九月二十九日。

この日、ついに、木沢方が本格的に動いた。

將軍御所に届いた一通の書状が、何よりの証拠であった。それは管領細川右京大夫晴元の不当不正を詰り、その虐政を非難した上で、

自分たちの正当性を一方的に主張するという、よくありがちな自己中心的な檄文であった。

「管領。これが木沢左京、伊丹大和、三宅出羽の連署で送られてきた訴状だ。その方も読むか？」

義晴は、眼前に平伏す細川晴元に、その書状を下げ渡すと、彼はまじまじと、ゆっくりとそれを拝読した。

「いろいろ中身のない愚痴が書き記されているようですが、一庫城攻撃は不当、でございますか。これは捨て置けませんな」

と言って、晴元は嘲るように鼻で笑った。

「…不当と申すからには、奴らにも言い分があるのだろう」

義晴はニタニタと、楽しそうに笑っていた。

「言い分ですか？ 確かにいろいろ書いてあるようですが、何を寝惚けたことを申している輩でございます。全く話にならぬとはこのことでございます。何より塩川政年は謀叛人高国の妹を妻としているだけでなく、高国滅後も離縁することなく、ぬけぬけと妻としております。即ち、いざというとき高国の残党どもと誼を結べるように、という布石に間違いありません。実際、奴が密かに氏綱と連絡を取り合っていることぐらい、我らはとうの昔に存じておりました」

そんな風に言いながら、晴元は次第に腹が立ってきた。元々は計略であり、塩川が本当に高国の残党と結びついていたかどうかなど、彼には全く分からないのだが、こうやって朗々と喋っていると、本来は嘘だったことが、次第に真実であるように思えてきたのである。即ち、塩川政年が自分を裏切り、ずっと高国残党に与力していたかのような錯覚が、彼の全身を包み込んでいった。そうになると、この短気な天下人は、わなわなと震え、いつの間にか手に握っていた木沢方の檄文を握りつぶしていた。

「ならば、その訴状は受け入れるべきではないと、そなたは申すのだな？」

と、義晴が言えば、

「上様におかれましては、何卒賢明なる御判断をお願い申し上げます」

晴元も恭しく頭を下げた。

かくして訴状は却下された。

そして三十日には、將軍足利義晴自らが直々に一庫城攻撃を命じた。即ち、これは正式な、動かし難い『幕命』であり、かくて塩川政年は幕敵、即ち逆賊となり、包圍軍は幕府軍、即ち官軍となった。こうなると、木沢長政としてもうかうかとはしていられなくなつた。『幕命』という大義を得た三好方が、一気呵成に総攻撃に打つて出ると、せつかく苦心して作り上げてきた撰津における対範長包圍網が完全に崩れ去ることになる。畠山家での立場を完全になくした木沢にとつて、撰津をはじめとする各地の味方だけが、最期の頼みの綱なのである。失うわけにはいかなかった。

だから、彼は動いた。

九月三十日。

將軍が訴状を却下したことが分かるや否や、彼は実弟の木沢左馬允に四千の精銳を預けて先鋒とし、一庫城救援に向かわせた。また彼自身も軍が整い次第、出陣する予定であり、木沢長政としては、これまでに築き上げてきた己の全勢力を、この戦いに傾注する構えでいた。

木沢立つ！

その急報は、瞬く間に畿内中を駆け巡つた。

当然、一庫城を囲む三好方にも伝わつた。総大将である筑前守範長の本陣に、副将の三好越後守政長が駆け込んでくると、

「いよいよだな」

と、言つた。

「左様でございますな。…ただ、木沢方には例によって伊丹、三宅らが連動しているようで…。油断はできませんな」

「無論のことだ」

政長はそう言って笑う。範長は、内心、少しばかり不安であった。いよいよ、木沢長政と戦うのだ。父を殺した一味の片割れ…、というよりは、父を殺した首謀者の一人。父が拳兵するに至ったきっかけを作った男。それを、この手で滅ぼす機会が、ようやく巡ってきたのだ。父が殺され、既に九年という歳月が過ぎたが、あのときの悔しさ、怒りを忘れたことは、一日たりとてない。

しかし、踊りたくなくなるような興奮した気持ちの片隅で、木沢長政という一人の男に対する、拭い難き恐れは、勢いよく確実に広がっていった。あの父すらも滅ぼした男なのだ。怖くないはずがなかった。

「如何した、筑前殿？」

と、政長が不思議そうに首を傾げると、

「なんでもござらぬ」

と、慌てて答える範長であった。

十月二日。

木沢左馬允の軍四千を中核とし、伊丹親興、三宅国村ら摂津諸豪族を加えた総勢一万が一庫城に迫ると、三好軍は潮が引くかのようになり、颯爽と包囲を解き、それぞれの本拠地へと帰っていった。

範長は、政長勢とともに越水城に入ると、まず何よりも防備の増強に力を注いだ。一庫城救出に成功し、勢いづいた木沢方が大挙して攻め寄せてくる可能性がある以上、警戒するに越したことはなかった。

そして…。

十月四日。

案の定、木沢方は怒涛の勢いで越水城に押し寄せてきた。伊丹親

興を先鋒とする、総勢八千である。

「八千如きで、この城を攻め落とせると思っているとは、まさに片腹痛いわ」

と、範長は豪快に高笑いしていた。

物見櫓の上からは、包囲軍の現状が手に取るように分かった。形の上は伊丹大和守を総大将と仰いでいても、所詮は摂津の土豪をかき集めた上で構成されている寄せ集めの烏合の衆に過ぎない。伊丹大和の統制が行き届いているとは到底思えず、そんな無様をまじまじと眺めている範長としては、とにかく大袈裟に笑うしかなかった。

「御屋形様、先ほど少々厄介な喧嘩が起きました」

そこに、立花又右衛門が慌しく駆け込んできた。

「喧嘩？」

敵陣の仲違いぶりを、今まさに他人事の如く観察していた範長は、又右衛門の唐突な報告に、思わず耳を疑った。

「はッ！ 喧嘩をしたのは、越後殿配下の足軽と、我らの足軽です。城から打って出、総攻撃をかけたいと目論む越後殿の配下たちと、それを制した我らの足軽の間で口論になったのが、そもそものきっかけだそうですが、次第に規模が大きくなって、数十人の怪我人が出るほどの事態となっているようです」

そんな又右衛門の言葉に、範長の表情はいつぺんに曇った。

「…数十人だと？ たわけが…。これから戦というときに、何と愚かなことをしているのだ」

先ほどまで、敵陣の無様を散々笑っていただけに、範長の不満、怒りは、いつも以上に凄まじかった。いっそ喧嘩両成敗の原理原則を持ち出して、騒動に関わりし全ての者に死を命じてやろうとも思ったが、相手が三好越後の兵では、如何な範長といえど、容易く手を出せるものではなかった。

「はッ！ さ、されど、最近越後殿の配下たちの傍若無人な振る舞いは、目に余るものがあり、家中の者の不満も随分高まっているようです」

「…そうか」

範長は苦りきった。獅子身中の虫とは、彼のごとき者を言うのだらうと、彼は我侷な権力者三好越後守政長を呪った。

実際、ここ三好政長の横暴ぶりには、範長もすっかり手を焼いていた。主将は自分だというのに、副将に過ぎない彼は、細川政権の執政官たる己が身を誇り、我が物顔で城内を闊歩しているのである。範長が主催する軍議に顔を出さないこともあるし、範長の下知に素直に従わないこともあった。

範長としても、我慢は限界に近かったが、兎にも角にも連合軍を組んでいる以上、しかも細川晴元の信任厚い彼に対し、強く出ることはなかなか難しいのだった。だから、触らぬ神に祟りなしとばかり、彼の行動を無視してきたのだが、その八方美人に徹してきたツケが、今になって大いなる災いとして降りかかってきたのかもしれないなかった

「…所詮、越後も父の仇の一人。少なくとも友軍の大將ゆえに、下手に出ては見たが、やはり付け上がってきたか…。ま、今のところは越後の顔を立ててやることにしよう。そんなに攻撃を仕掛けたいなら、攻撃させてやるさ。…だが、木沢を滅ぼしたら、次は越後だ。ふん。それまで、せいぜい得意がっているんだな」

そんな捨て台詞のみ残して、範長は小さく苦笑いした。そんな主君の様を眺めつつ、立花又右衛門は声にならぬ笑みを、その内心に浮かべた。

十月七日。

三好範長と三好政長は、共同して軍を起こし、城を飛び出して包囲する伊丹勢に飛び掛った。

何より統制の行き届いていない伊丹勢に、もとより勝ち目などあるはずもなかった。両三好軍は怒涛の如く攻め寄せると、瞬く間に伊丹方の諸軍を蹴散らしてしまった。そして同日正午頃、自軍の

敗北を悟った伊丹大和守親興が居城たる伊丹城へと引き上げていったことで、伊丹軍の敗北は確定的となった。

「勝ったな」

勝利の感動というものは、何度味わっても案外飽きないものだった。勝つたびに、様々な興奮が体中を駆け巡っていく。

「ですが、これで我らの基本戦略は、少しばかり軌道修正を余儀なくされますが……」

常に三好範長の傍らにあつて、彼を支えている参謀役の松永久秀は、およそ清々しい勝利には似つかぬ苦りきった顔をして、溜息混じりにぼやいていた。

「ま、気にするな。軌道修正は余儀なくされるが、作戦そのものが破綻したわけではあるまい」

そんな主君が言葉に、久秀は「ははは」と苦笑いしていた。

上田館を攻め落とし、一庫城を包囲し……、という一連の三好方の軍事行動は、当然予め策定しておいた大まかな基本戦略に則って行われてきた。その戦略というのは、伊丹勢をはじめとする摂津展開中の木沢方だけでなく、最終的には木沢長政の主力すらも越水城に誘き寄せた後、池田城に退いた池田信正や、丹波の内藤国貞、波多野秀忠らが機を見て一斉に挙兵し、その上で木沢軍の背後を叩き、一網打尽にするというものであったが、伊丹勢を蹴散らした今、その作戦にも若干なりとも齟齬が生じた。少なくとも、越水に木沢長政を誘き寄せるといふ策は、ここに言うまでもなく破綻したのである。

「まあ、今更愚痴を申しても仕方ありませんが、準備万端整った越水で迎え撃つのが、最良策でございました。ただ、こうなってしまう以上は、伊丹城を包囲し、これを囿とした上で木沢長政の主力軍を呼び寄せる以外にありません」

などと相変わらず久秀は未練がましく呟いている。無理もない、とは思いながら、結局自分が総大将として総攻撃の判断を下した以上、彼の露骨な不満は、範長にとって余り聞き心地のよいものでは

なかった。

ともあれ、新たな作戦も定まったのである。範長に迷っている暇は一秒とて与えられてはいなかった。

だから、彼は早速全軍に出陣を命じた。伊丹勢が余りにあつけない敗走したことで、滾る戦意のやり場に困っていた兵士たちにしてみれば、早速の出陣命令は、何よりも有り難かった。

秋は深まり、時折強く吹き荒れる冷たき北風が、厳しき冬の到来を告げていた。

少し前まで真上にあつたはずの太陽は、気がつくとも西の空に消えていた。紅蓮色に輝き、世界を断末魔の如き朱色に染めた後、辺りはすっかり暗くなった。おもむろに空を見上げると、宝石のような星空がきらきらと煌き、それは己が存在を必死に誇示するための、哀れで寂しくも、力強き生命の象徴のような感じがした。

幼き頃、亡き父は、人は死ねば星になるなどと言っていたものだが、ひととき煌々と輝く星を見つけると、それが父のような気がして、範長は思わず苦笑いした。

「父上、見ててください。父上が仇は、この俺が必ず討ちます。曾祖父様も御覧あれ。あなたたちが追い求めた夢は、この三好筑前守範長が、必ずや実現して見せまする！」

一人小高き丘に登って、範長は誰に言うでもなく、大声で叫んでいた。側に控える立花又右衛門がぎよつとして駆け寄ってきたが、彼はけろりとした顔で、「気にするな」と言った。けれど、その眼に溢れ、きらきらと輝く涙を、又右衛門は決して見逃さなかった。

十月八日。

三好軍は伊丹城の支城たる西富松城を攻め落とした。けれど余りにあつけなき戦いに、猛りに猛った兵たちの欲求不満は容易く納まりそうもなかった。

「これより我らは伊丹城を包囲する！ 全軍、直ちに出陣の支度を



せよ！」

範長は、全軍を前にそう声高に叫んでいた。進軍、戦い、そして進軍。…全く休む間なき三好軍であったが、不満を述べる者などいなかった。

かくて八日午後。

三好軍一万余は、伊丹大和守親興の立て籠もる伊丹城を、完全包囲したのだった。

摂津において、三好方と木沢方の決戦が本格化している中、肝心の木沢長政は、その主力五千を従え、人知れず北上していた。途中、細川政権に批判的な過激な一向門徒たちを仲間に加えつつ、さらに友軍として駆けつけてきた大和最大の土豪筒井氏の援軍をも自軍に取り込むと、その総勢は一万人に達した。

彼が目指していたのは、摂津ではなかった。誰もが、彼は兵を集め次第、摂津に入って苦戦を強いられている伊丹親興、三宅国村ら同志たちを救うものだと思われて疑わなかったが、何よりも人の意表をつくことが三度の飯より好きな陰謀家が、誰もが予想するようなまともな道を選択するはずもなかった。

「摂津には赴かないのですか？」

側近は、木沢長政より基本方針を示されると、そう言っつて首を傾げた。

「たわけ。摂津などに出向いても、どうせ筑前守と決戦になるだけだろうが。よく考える。残念だが、俺の力では、筑前には到底勝てぬ。何しろ、奴にはいざとなれば四国より援軍を呼び寄せることも可能なのだ。阿波には豊前守之康、讃岐には十河、淡路には安宅……。三好に連なる与党は多い。これらが出てくると、我らの不利は否めん。そういう強敵に、わざわざまともに勝負を挑むことなどない」

「そんな風に言っつて、からからと笑う木沢であった。」「で、ですが、それでは伊丹殿らが危機に晒されることになりはしませぬか？」

側近たちとて、此度の戦が木沢家の大事と分かっているからこそ、彼の判断に対してもいつになく食いついてくるのだった。間違っているなら正すのも家臣の役目と、彼らもまた必死だった。

「ふん。所詮、奴らなどわしにとつては使い捨ても同然。生き残つたなら、いずれ助けてやるが、さもなければ、滅びようが構わぬ。た

だ、時間のみ稼いでくれればそれでいい。…例え滅びたとしても、俺が天下を取った暁には、いくらでも領地は与えてやるのだから、問題はなかるう」

からからと心の底から高笑いすると、木沢は改めて西の空を見上げた。元々、彼にとつて、伊丹親興らなど、強大な大名たる三好範長の足止め役に過ぎなかった。その任を、図らずも忠実にこなしている彼らの空しき労苦を思うと、ひたすらに笑いが止まらなかった。

木沢長政軍一万は、摂津ではなく、京の都を目指していた。ここを支配する者「天下人だと、広く信じられている。実際、ここには帝もいるし、將軍もいる。管領さえもいる。有名な寺社仏閣が軒を連ね、天下に名だたる豪商たちも所狭しと犇っていた。まさに政治文化、経済の中心都市である。これまでも天下を狙う数多の英雄たちが、ひたすらこの町を求め、その覇者となることを夢見ては、ついに叶わず滅びていった。

木沢の狙いは、はなから京都だった。この町を押さえ、帝を押さえ、將軍を押さえる。さすれば自ずと天下は己がものとなるのだと、彼はひたすらに、愚直に信じ込んでいた。

十月十一日に信貴山を発した木沢軍が都に迫ったのは、十月二十九日のことであった。

途中、山城南部の諸豪族を味方に取り込みながら、木沢軍の総勢は一万四千近くに膨れ上がっていた。

一方…。

都の幕府に、迫る木沢の圧倒的な軍事力に対抗する術などあるはずもなかった。無力の將軍は言うに及ばず、管領晴元すら、その手元には、僅か二千余騎の兵があるのみだった。

木沢長政も、一挙に攻め込めばよかったのである。せつかく細川政権を圧倒する武力をもって、都を窺うところまで辿り着いたのだ

から、この機を逃さず、上洛を果たして、將軍と管領を問答無用に拘束してしまうべきだったのである。

だが、彼はそうしなかった。巨椋池の南沿いに聳える榎島城に入ると、休憩と称し、そこに二日ほど居座ってしまったのである。

「將軍家より使者だと？」

そんな報告に、木沢長政はにやりと不敵な笑みを漏らした。

「通せ。……いや、お通ししろ。幕府の使者とあらば、丁重にな」

と、配下に命じつつ、嬉しそうに高笑いした。

しばらくすると、小姓たちに伴われて、幕府政所代を勤める蜷川親俊が、將軍家の特使として木沢の下にやってきた。

「これは蜷川殿。幕使御苦勞でござる」

何はともかく、將軍家の特使であるから、木沢も自ら上座にふんぞり返るほど無礼ではなかった。蜷川親俊を上座に仰ぎつつ、彼は早速用件を求めた。

「木沢左京殿が先日お求めになられていた上様御警護の任にござりますが、上様は左京殿にその気持ちがあるのなら、快く任すのとにございました」

と、蜷川は至極淡々と、事務的な口調で言った。

「ほお。上様は我らが願い、お聞き届け下されたか！」

木沢は身を乗り出し、興奮した面持ちで、じろりと蜷川を睨み付けていた。

「それは重畳！ ははは。これでわしは、晴れて上様の被官。もはや細川晴元如き者に従う理由もない。はっはっは。こいつは大いに愉快だ」

そんな風に、豪快に高笑いしながら、木沢長政は朗報をもたらしてくれた蜷川親俊の手を取り、その肩をぼんぼんと叩いた。

その後、木沢は蜷川を大いにもてなしつつ、自らの実力のほどを、この幕府高官に如何に見せつけようかと、必死になった。贅の限り

を尽くした陣羽織を羽織つてみたり、各地の村々から略奪して集めた金銀財宝を見せびらかしてみたり…。けれど、一番蜷川親俊が驚いた顔をしたのは、槇島城下に群れる木沢長政配下の兵士たちの余りの多さと、そして目に余る乱暴振りを見せ付けられたときのことであつたりした。

蜷川の接待に二日を費やした木沢長政が、その大軍とともに入京したのは、十月三十一日のことであつた。

けれど、そのとき既に肝心の將軍も管領も、都にはいなかった。即ち十月二十九日に、木沢軍の猛威を恐れた管領細川晴元が、まず都の北方に位置する岩倉に逃れたのを皮切りに、翌三十日には、將軍足利義晴が慈照寺（銀閣寺）を経て、六角氏を頼り、近江坂本方面へと落ちていったのである。

將軍も管領もない都など、所詮ただ人口が多いだけの大都市に過ぎなかつた。政治的に全く空虚な存在と成り果てた町の王者となつたところで、木沢長政にとっては何の意味もなかつた。

「無駄に時間を費やしたのがまずかつたのだ」

と、空っぽになつた都の中で、木沢陣営の不満不安は急激に高まつていった。管領はともかく、將軍を抑えて初めて、木沢方の政治的優位は確保されるのである。零落れたりといえども、將軍は紛れもなき武家の棟梁であり、多分に名目的だが、足利尊氏以来十二代に渡り天下を統べてきた超名門一族の総帥なのだった。

けれど、木沢長政の余裕と油断が、結局將軍家に逃げ出す時間を与えてしまったのである。速攻で都に攻め上り、將軍御所を制圧していれば、このようなへまはしなかつたらうと、同志たちの不安は、次第に木沢長政への不満に変化していった。

で、その木沢はというと…。

無人の館と化した管領御所内にあつて、連日連夜、盛大な酒宴に明け暮れていた。管領御所、將軍御所に残っていた女官たちを根こ

そぎ拉致し、その中でとりわけ美貌に秀でた数人を自らの妾にする  
と、政治を省みることなく、ひたすらに遊び呆けていた。

將軍も管領も取り逃がし、必勝と信じた政治的目論見が完全に破  
綻した今、もはや彼は腑抜けた廢人でしかなかった。で、自暴自棄  
になった挙句、高貴な女子を片っ端から抱いた。自分の権力は、既  
に管領家、將軍家をも凌駕したのだということを満天下に示すため  
というのが表向きの理由であつたが、実際は、目の前の女子たちに  
言いようのない不安と不満、焦りと空しさをぶつけたかっただけの  
ことに過ぎなかつた。

そして、十一月に入った。

総大将がこんな調子であるから、木沢配下の兵士たちも、次第に  
暴走するようになった。軍律などないに等しく、それこそ古の木曾  
義仲軍の乱暴狼藉を彷彿とさせるかのごとき暴虐行為が、日常茶飯  
と繰り返されたわけである。木沢勢の暴走に便乗するかのごとく、  
夜盗盜賊も所狭しと暴れまわつたが、当然、彼らを止め得る者など  
いるはずもなく、京の町は、僅か一週間で、一挙に地獄と化したの  
だつた。

十一月九日。

この頃になると、木沢長政の凌辱的欲情は、將軍家の女官程度で  
は到底満たされなくなつてきた。さらに高貴な、もつと自分という  
存在を誇示できる存在を欲するようになったわけである。要するに、  
木沢長政という男の好みは、どんどん高くなり、彼自身ですら制御  
できないほどに膨れ上がつていったのだつた。

「内裏なんてものが、都にはありますね」

あるとき、側近がふと、そう呟くと、木沢はにやりと不敵な笑み  
を漏らした。

「内裏か。帝の姫宮など犯したら、随分面白いことになりそうだ」  
などと呟きつつ、彼は管領御所を発すると、総勢五百騎の精鋭を  
従えて、大内裏へと向かつた。けれど、長年の戦乱のためか、散々  
荒んで、見る影もない内裏の様に、木沢は呆れ、苦笑いした。

「これが内裏か。…室町の御所すら、随分寂れていると思つたが、内裏はそれを上回るな。天子様などと誰もが敬うが、こんなところに住んでいる程度のお方なら、大したことはあるまい。わしの信貴山城のほうか、よほど宮殿に見えるぞ！」

そう言つて大声で高笑いすると、彼の興味は既に内裏から離れたらしく、配下を従え、逃げるように管領御所のほうへと戻つていった。

その後も木沢勢の乱暴狼藉は、延々と繰り返された。

まあ木沢本人の激しき欲情は、ここだいぶ収まつて、彼自身、ようやく政務に励む氣になつたらしいが、時既に大いに遅かつた。

もはや暴走する木沢勢を、木沢長政ですら統制しきれなくなつていたのである。彼らは、町娘を犯し、あるいは貧しき町人たちから略奪するだけでは飽き足らず、ついには公家や宮家にすら公然と乗り込み、その女官や姫を犯したり、貴重な文化財や財宝を悉く略奪していった。

そんな具合であるので、木沢長政に対する帝の不信感は大いに高まり、市民たちの不満や怨嗟の声は、日増しに急激に高まつていった。彼らは、法華宗や延暦寺などの宗教的連帯を基盤とし、木沢勢に対して武力抵抗するようになったので、十一月も中頃になると、専ら木沢勢は彼らとの熾烈な市街戦を繰り返さねばならぬ破目となつた。

さらに、この有様を見て、木沢長政を見限る善良な兵も少なくなき、彼らは皆、岩倉にあつて軍の再建を図つていた細川晴元の下に加わつたので、木沢としても、もはや都に長居するわけにはいかななくなつてきた。

かくて十一月二十四日。

木沢長政は、五千にまで減じた軍とともに、逃げるように都から去つていった。

翌二十五日。

岩倉の細川晴元は、総勢七千の軍を従え、畿かに入京した。木曾義仲以上とすら評された木沢長政の後だけに、誰もが晴元入京を歓迎し、拍手喝采とともに彼を受け入れたのだった。

十二月に入ると、晴元の招聘により、坂本亡命中の足利義晴が帰京した。晴元政権による京都復興が本格化すると、木沢の暴政を恐れて逃れていた市民たちも日に日に戻り、年も明けた天文十一年（一五四二年）には、早速、都はかつての威容を取り戻すようになった。



三好筑前守範長が、苦心の末に摂津一國を完全統一したのは、天文十一年（一五四二年）に入った頃のことであった。

その統一戦は、無論、決して楽な道のりではなかったが、摂津国内における反三好党の後ろ盾となっていた木沢長政の都における行状が知れ渡るにつれ、彼らの抵抗は急速に下火となっていた。

例えば…。

反三好党の中核的存在と自他共に認め、摂津に大きな政治的影響力を誇ってきた伊丹城城主伊丹大和守親興などは、木沢長政の呆れた虐政を知るや否や、愛想をつかし、その将来性に見切りをつけて十二月二日、それまでの抵抗が嘘だったかのように、実にあっけなく三好範長の軍門に降って、城を明け渡してしまったのである。

その伊丹大和守であるが、範長は彼が余り好きではなかった。長年抵抗を続けて、三好家の摂津支配における最大の障壁となってきた男なのだから、当然と言えば当然の話である。範長は決して聖人君子ではないのである。抵抗されれば嫌気もさす。人間である以上、そういう感情を抱くことは、当たり前のことだと言ってよかった。けれど、その伊丹大和はというと、全く開き直ったかのように、かつての仇敵の面前で従容と頭を下げていた。牙を抜かれた狼の如く、ひたすら従順姿勢を貫いている彼を眺めながら、範長はどう対応してよいのか分からなくなった。

「その方はいろいろな顔を持っているようで、便利なものよの」

範長は、精一杯苦々しげに笑うと、平伏す親興の頭上にそんな皮肉を思い切り浴びせた。

「ま、余とて鬼ではない。降伏に応じた者に死など命じたりはせぬし、領地とて安堵してやろう。無論、一部は没収するがな。…ま、

それでもそなたは運のいいほうだ。余が気分の良いときに降伏したのだからな。余の気分が悪ければ、この城も、上田某と同じ末路を辿っていただろう。そういう意味では、そなたはなかなかの男だ。余の下でも、十分にやっていけるだろう」

誰もがはらはらとした様子で、常とは明らかに違う主君範長の様を見守っていた。少なくとも、降伏した男に対し、これほど辛らつな皮肉をぶつけることは、一度もなかった。それだけ範長の怒りは強いのだろう。散々範長に抗い、楯突き、刃向かった男だから、当然といえば当然だったが、それにしても哀れなことよと、誰もが伊丹親興の今後に同情せずにはいられなかった。

「沙汰を告げる」

と、範長は、摂津守護代として、その配下に属すべき寄騎大名としての伊丹大和守親興に言った。

「伊丹大和守。その方、幕府より摂津守護代を仰せ付かった、この三好筑前守に楯突いた罪は重い。が、自ら降伏し、その罪を謝したことは評価に値する。ゆえに、伊丹家の存続及び大和守の身分は安堵しよう。ただし、西富松城及び周辺領地は没収とする。詳細については、後日伝える。以上！」

それは、勝者が敗者に下した、動かし難き厳命だった。降伏に応じた立場の伊丹大和守にしてみれば、屈辱以外の何ものでもなかったろうが、逆らうことは許されなかった。

伊丹家が降伏したので、三宅城の三宅国村や一庫城の塩川政年ら摂津各地の反三好諸豪族も、「もはやこれまで」とばかり、相次いで、悉く範長の軍門に降っていった。

かくして、範長は自身の摂津守護代就任より一年半の歳月をかけ、ついに摂津全土をその支配下に置くことに成功したのである。時に天文十一年は一月十日のことであった。

無論のことではあるが、降伏した豪族たちには、当然のように厳

しき処分が下った。降伏したからといって、免罪にしてもらえないほど三好体制というものは甘くない。臣従したからといって、それまでの事実を帳消しにしてくれるほど、三好筑前守範長という男も生易しくはないのである。また範長としては、処分に名を借りた今回の仕置をきっかけにして、摂津国主としての三好家の絶大な大名権力の確立……、即ち豪族たちの盟主に過ぎなかったこれまでの自分の立場を根本的に変革し、豪族たちに依拠することなく、単独で国全土を統治しうる力を身につけた絶対的存在への脱皮を目指していたから、甘い処分など下すはずもなかった。

一月十二日。

越水城において催された論功行賞で発表された正式な処分内容に、降伏豪族たちは、思わず耳を疑った。中には領地悉く没収の上、阿波への流罪を命じられた者もいるし、そこまではいかずとも、領地の半分以上を没収されたり、あるいは国替えと称して、全く別の城地を宛がわれたりした者もいた。伊丹、三宅、塩川ら有力土豪に対しては、それほど厳しい処分は下らなかったが、それにしても大幅に領地が削られたことに変わりはなく、中には「話が違う」と、三好家の重臣たちに詰め寄る者もいたが、基本的に誰も相手にはされなかった。

「これが余の決断である。逆らう者、異議ある者は、この場より去れ。一日だけ猶予をやるう。それでもなお考えが変わらぬなら、余は容赦なく兵を向けるぞ。そして、そのときに降伏などと生易しいことは認めぬ。一族縁者末端に至るまで、悉く根絶やしにしてくれるぞ」

先には、上田某の一族を悉く虐殺したこともある範長だけに、この発言には圧倒的な迫力があつた。そして何より、今更三好家に楯突いたところで勝ち目などあるはずもなく、ならば、これも一つの現実なのだ、従容と受け入れるほかなかった。

「此度、木沢方に組し者は、その嫡子を持って人質として差し出すこと。嫡子なき場合は、実の父母であれば、代わりとして認めよう。

嫡子も実の父母もなき場合は、自ら人質として越水に参ること。また、木沢方に組した者、そうでない者、全員が負うべき義務として、年に三度、越水に参府し、御屋形様に謁見すべきこと」

範長に代わり、そう声高に宣言する松永久秀の言葉に、誰もが絶句し、啞然とした。そして、それは何も処分を言いつけられた豪族たちだけでなく、居並ぶ三好譜代の家臣たちも同様だった。側近筆頭として今回の処分立案に大きく関与した久秀や、あるいは三好康長、三好長逸、岩成友通らの如く、事前に範長より知らされている者はいいとして、そうでない者たちは、

「少し厳しすぎるのではありませんか」

と、豪族たちが下がった後で、そう苦言を呈さずにはいられなかった。

けれど、範長に妥協する気は一切ない。こうでもしなければ、三好家はいつまでたつても豪族連合の盟主から脱皮できないのだと、彼は心を鬼にして、今後生まれるであろう多少の不満や反発には目を瞑るつもりでいた。だから、彼は松永久秀に処分の全権を委ねると、後はどんな批判や諫言にも、全く耳を貸さなかった。

摂津を固めた三好範長は、天文十一年一月十七日、その足で久方ぶりの石山御坊を訪れていた。

この日は、生憎の雪国だった。はじめは、ぱらぱらと儂げに舞っていただけの粉雪は、時間とともに勢いを増し、今ではすっかり豪雪となっていた。

石山御坊は、天文五年（一五三六年）に勃発した天文法華の乱以後、本願寺がその総力を注ぎ、改築を重ねてきた結果、既に見る者全てを圧倒しうるに足るだけの、壮大壮麗巨大な大宮殿に変貌していた。

「ほお、將軍家の？」

すっかり法主としての威厳を備え、本願寺教団の総帥たる貫禄を

身に着けたらしい証如上人は、昔と変わらぬにこやかな笑みを浮かべ、眼前に平伏す三好筑前守範長を見下ろしていた。

「はッ！ 此度は公方様の御命令により、はるばるまかり越しました次第でございます」

と言つて、ゆっくりと頭を上げる範長も、既に二十歳になっていた。きりつとした、かつての三好元長を髣髴とさせる聡明な青年の姿に、証如はただただ呆然と、驚きを隠せぬようにまじまじと見つめていた。

「人というものは、変われば変わるものでござるな。：我らを説得すべく、細川右京大夫殿の使者として単身参られたのは、いつのことでございますか。：あの折は、まだ元服すら済ませていない、ただの三好千熊丸殿でござったからな。それが、今や、今をときめく三好筑前守範長殿となつておられる」

証如のそんな言葉に、範長は少しばかり恥ずかしそうちに、ニコニコと苦笑いした。

「前回、このお城にお邪魔させていただいたのは、天文二年（一五三三年）のことでございますから、九年ほど前の話になりますか」

「九年？ はは、それはまた随分長い時間がたったものですね。九年というのも、実際に生きてみると、実に長いものでござるが、思い返してみると、実にあっという間なものでございますな」

「確かに…」

などと、お互いとりとめもない雑談に花を咲かせていたが、やがて、どちらからともなく真面目な雰囲気となるや、範長は懐からおもむろに一通の書状を取り出し、証如に手渡した。

「公方様直筆の御内書でございます」

と、範長が言つと、証如は恭しくそれを手に取り、まじまじとその一言一句を噛み砕くように、見つめていた。

冷たく寒い冬の風は、降り積もる雪と同じ、無機質な白色をして

いた。

障子の隙間から垣間見える外の景色は、見事なまでに白一色に染まっている。ささやかに雪化粧の施された庭先は、すっかり季節の中に溶け込んで、人間業ではなしえない独特の味を現出していた。芝生城や越水城のそれと似たような光景だが、故にこそ、ここが新興宗門の覇府であることも忘れ、筑前守範長は落ち着ききつた顔で、ほっと小さく息を吐いた。

「如何なされた？」

そんな彼の挙動不審な姿に、証如は不思議そうに首を傾げていた。

「何でもありません」

慌てた様子で、範長は「ははは」と苦笑いする。

「妙なお方だ」

などと呟きながら、証如上人は、その壮麗な法衣を上下左右に落ち着きなく揺らし、最後に「ふう」と、大きな溜息を吐いた。

「要するに、我らに木沢左京殿の支援をするなどのことにございませぬ」

証如は綺麗に書状を折り畳むと、側に控える小姓に厳かに下げ渡した。

「ま、掻い摘んで申し上げれば、そういうことになります」

と、範長は淡々と答え、

「…我らが、いつ木沢左京を支援したのか？ 我らは、常に局外中立を旨として生きておるつもりでござりますがね」

証如はニタニタと不敵に笑った。

「はは、左様なことは、我らとて重々承知。ただ、門徒衆の中には、木沢左京と密接な繋がりを保っている者も少なからずおられるとか、そういう者たちに、くれぐれも軽拳妄動に走らぬようお願い含めておいてもらいたいだけでございます。公方様は、出来うる限り、此度の戦で発生するであろう犠牲者を少なくしたいと思し召しでございますから」

「なるほど。…さすがは、慈悲深き公方様でござりますな」

その瞬間、ヒュウと、甲高い悲鳴とともに窓からこぼれた冷気が、猛然と二人の服を揺らした。

本願寺証如と、三好範長の二人は、お互い、じつと睨み合ったまま、微動だにしなかった。風は、どんどん勢いを増し、証如の左右に控える二人の小姓は、ぶるぶると寒そうに震え上がっていた。

それでも、しばらくの間、こう着状態が続いた。ドク、ドク、ドクと、無音の世界に、二人の心臓の高鳴りがけたたましく響き渡っていた。

先に折れたのは、証如だった。落ち着かぬ様子で、ゆっくりと立ち上がると、その足で、庭先のほうへと歩いていく。

「ま、公方様の御命令とあらば、逆らうわけにも参りませぬな」

そんな風に、諦めきった顔で、溜息混じりに呟く証如に、範長はにこりと微笑んだ。

「上人様の御英断、深く感謝いたします」

と言つて、深々と平伏す彼を、証如は不思議そうな面持ちで、何か物足りなさそうに「ふむ」と、静かに唸った。

障子を閉じる。上座に戻り、ゆっくりと腰を下ろす。用件を済ませた範長は、足早に彼の下から去ったが、その自信に満ち溢れた背中を眺めていると、これでよかったのかと、言いようのない不安や不満を、その内心に抱かずにはいられぬ証如であった。

「いよいよでございますな」

越後守政長の言葉に、晴元はニタニタと笑っている。

芥川山城から、酒など飲みながら眺める雪空は、これまた格別な趣があった。揺らぐことなき絶対の勝者として、その余韻に浸るべく晴元は朝からずっと、ぐびぐびと呷るように、酒ばかり飲んでいった。

「木沢如きに遅れをとる余ではないぞ。くっくく。木沢長政如きに天下を奪われる余でもないわ！」

と、大仰に騒ぎ、ひたすら楽しそうに高笑いする彼の様を、政長はまじまじと見つめている。

木沢の滅亡は、既に間近に迫っていた。戦はやってみなければわからぬ、などとよく言うが、今回に限っては、やる前から勝敗は誰の目にも明らかだと、政長などは思っていた。それは何も根拠なき油断でも、驕った末の余裕でもない。厳正に状況を精査し、あらゆる可能性を勘案した結果導き出された、動かし難き答えであった。

既に、芥川山城には一万の精兵が揃っている。彼らは皆、細川晴元直轄の精鋭部隊であり、晴元の命あらば、即出陣できるよう準備も整っていた。ばかりではない。和泉には、晴元の重臣たる細川元常が守護として国入りし、今まさに木沢討伐の兵を集めている最中だった。元常の和泉勢は、どれほど低く見積もっても、二千から三千は堅い。

他に、越水に君臨する大藩三好範長もいるし、河内には木沢長政と敵対する畠山植長と、彼を支える遊佐長教が健在だった。特に遊佐河内守長教などは、

「先主長経公を弑逆し、あろうことか勝手に偽家督を擁立して無用な騒乱を巻き起こした逆徒木沢長政には、断固として天誅を下さねばなりません。そのために右京大夫様の御力を賜りたく、失礼とは存知ながら、申し上げる次第です」

などといった文を寄越し、明確に木沢長政との敵対及び晴元方への帰参を宣言していた。

これならば、誰とて絶対の勝利を信じるだろう。それは決して油断でも、余裕でもない。誰が見ても、どう考えても、この状況では、負けるほうが難しいというものだった。

芥川山の細川晴元・三好政長、河内高屋の畠山植長・遊佐長教、和泉の細川元常、摂津の三好範長、丹波の内藤国貞・波多野秀忠……これだけの勢力が、木沢包囲網に名を連ねている。拳句、本願寺や法華宗といった宗門勢力は、どれも局外中立を徹底して、細川方にも与力しない代わり、木沢方にも一切手を貸さなかった。さらにそ



の上、包囲網の盟主として、室町幕府征夷大將軍足利義晴が加わり、木沢方の政治的敗勢は決定的なものとなった。

信貴山の木沢長政は、追い詰められていた。

既に摂津における木沢党は悉く筑前守範長により退治されているし、それ以外の味方も、今やどれも敵方に回っていた。彼の本領ともいえる河内の大部分は、遊佐長教の支配下に落ちているし、彼の勢力が比較的強い大和においても、筒井氏、興福寺をはじめとする有力者たちが拳って落ち目の木沢方を見限り、雪崩を打って細川方と誼を結ぼうとしている状況では、頼りになるとは言い難いものがあった。

木沢長政の味方といえるのは、彼自身の領地を割いて擁立した飯盛山の畠山政国のみ。…要するに、孤立無援といって過言ではない危機的状況下に立たされたのだった。

事ここに至り、得意の謀略も通用しそうになかった。軍事的にも、政治的にも、木沢方の劣勢は顕著だった。唯一最後に残された手としては、長期戦に持ち込み、越前の朝倉や、北近江の浅井、若狭の武田、あるいは美濃の土岐など近隣の有力諸藩の支援を仰ぐことなどがあつたが、最有力候補の朝倉氏は、目下加賀の一向門徒と対峙しており、大軍を中央に派兵する余裕はなかった。浅井氏や武田氏は、強大な細川政権と対峙するには明らかに力不足であり、何より、細川晴元の岳父にして、南近江に根を張っている雄藩六角定頼が彼らの行動を黙って見過ごしたりはしないだろう。朝倉が出張るならまだしも、浅井や武田が六角に勝てるとは思われない。

ならば美濃の土岐氏だが、こちらは守護代である斎藤新九郎利政（後の斎藤道三）の勢威が強大化し、守護の土岐頼芸は斎藤氏による下克上を防ぐので精一杯だった。とてもではないが、中央に援軍を派兵できるような余裕はなかった。

絶体絶命とは、まさに今の彼に最も似つかわしい言葉であった。

今更にして深く考えてみれば、畿内とその周辺地域には、細川政権とある程度互角に戦いうる国力を持った大名など、皆無に等しかった。唯一朝倉氏があるぐらいだが、背後に加賀の一向宗という強敵を抱えている以上、畿内情勢に本格的に手をつ突っ込めるだけの余裕はない。

「そつえば、伊勢の北畠殿など、如何ですか？」

弟の左馬允の言葉に、木沢長政は「なるほど」と、ようやく生気を取り戻したかのごとく、嬉しそくにパンと手を叩いた。

「伊勢国司の北畠中将殿（北畠晴具）なれば、確かに援軍を出してくれるやもしれぬ。…かの御仁は、細川高国が娘を正室としておられ、根っからの高国方だったお方。高国方への弾圧を強めている晴元の強大化を決して好まれまい」

もしも北畠が援軍を出してくれるなら…と、一人皮算用を弾いてみる木沢長政であったが、目下、もはや北畠氏以外に有望な援軍候補はいなかった。北畠が兵を出してくれるなら、あるいは勝ち目が見えるかもしれなかったが、逆に北畠が動かねば、木沢方の敗北は決定的となりかねない。今の木沢長政にとり、従四位下左近衛権中将北畠晴具は、最期の最期に残った、唯一無二の希望の光であった。

北畠氏というのは、公家の名門村上源氏の流れをくみ、伊勢国司という、随分古めかしい肩書きを持って同国を支配している名族のことであった。南北朝動乱の折、南朝方の重鎮として活躍し、『神皇正統記』などの名著を著した北畠親房や、その子で、鎮守府將軍として奥州を支配し、足利尊氏の大軍を寡兵にて撃破した名將北畠顕家らを輩出したことでも有名な一族だった。

当代の北畠晴具もまた名將として名高く、北畠氏をして一挙に強大な戦国大名へと脱皮させただけでなく、細川高国の娘を室に貰い、かつ高国方の主要大名の一人として畿内各地を転戦するなど、戦国初期の中央政界に大きな影響力を誇った人物だった。

「早速使者を出し、援軍を要請するのだ。北畠殿の援軍さえあれば、我らは何とか息を吹き返せるのだ」

と、木沢長政は叫ぶように怒鳴ると、嬉しそうな笑顔で、「ははは」と、豪快に高笑いしていた。

それから一ヶ月。

既に天文十一年（一五四二年）は三月になった。

三月七日。

木沢長政が首を長くして待ち続けた北畠晴具からの返答は、この日、遅ればせながら、ようやくやってきた。本来、伊勢と信貴山など、馬を飛ばせば、数日で往来できる程度の距離しかない。それが一ヶ月もかかった時点で、結果など目に見えていたが、兎にも角にも、僅かな希望に全ての望みを託し、木沢は晴具からの書状を受け取ったのだった。

「…な、なんだ、この文は…」

木沢左京亮長政の手はわなわなと震え、その全身はぶるぶると揺れていた。怒りの余り、この場で思い切り暴れ狂いたい衝動に駆られながら、家臣たちの手前、それだけは必死になつて堪えた。

「やはり、駄目ですか？」

そんな左馬允の言葉に、木沢左京亮はぎろりと睨み付けた。

「伊勢の統一にかかりきりで、援軍など出せる余裕はないらしい」「伊勢の？」

「ああ。北伊勢の長野大和守藤定との抗争が激しさを増しているとか、まあいろいろ御託を並べてはいるが、要するに、我らの将来を見限つたのだろう。…北畠中将などおだてられてはいるが、要するに臆病な御公家大名に過ぎん。晴元が怖くて、兵すら出せんのだ。我らが滅びれば、高国の娘を室にしている北畠が次の標的とされるに違いないというのに」

などとぼやきながら、木沢長政はふうと静かに深呼吸した。

とにかく、北畠の援軍が得られないとなると、もはや行動に移すしかなかった。細川方による木沢包圍網は、日に日に強大化し、彼らによる総攻撃も時間の問題となっていた。どう足掻いても不利は不利だが、先手を打たれるよりは、先手を打ったほうが、まだ勝利できる可能性もあった。

だから、彼も覚悟した。負けても勝つても、それが自分の宿命だったのだらうと、諦めるより他に仕方がなかった。稀代の陰謀家と影ながら蔑まれ、小ばかにされながらも、その力をもって、畠山家の中堅被官に過ぎなかった身の上から、天下を狙いうる立場にまで出世した自分の人生を思い返しながらか、木沢長政は思わず苦笑いした。

陰謀家、恐るべき鬼謀の持ち主と称えられ、あるいは貶されながら、下克上なるものを、その身をもって体現してきた稀代の梟雄はどうせなら、己が悪辣非道な人生に似つかわしい、華々しき最期を遂げたいものだ、心に思い、胸に誓った。

翌日、即ち三月八日。

細川方と木沢方の間で延々と繰り返されてきた戦いなき奇妙な睨み合いは、この日を持ってようやく終わった。嵐の前の静けさというべきか、危うい均衡の上に辛うじて保たれていた平和は、膨れ上がった泡が破裂するように脆く儂く、あっという間に崩れてしまったのだった。

これまでは、如何に衰えたりといえど、依然として河内・大和・山城に大きな影響力を誇る木沢長政との全面戦争に踏み切ることを他ならぬ晴元が躊躇していたこともあり、細川方はせいぜい軍力を強め、あるいは味方を集めて木沢への包圍網を強めるぐらいのことしかできなかった。一方、木沢方も日増しに力を強める細川方と戦端を開くことを好まず、兵を強引に集めたり、あるいは方々に使者を飛ばして援軍を要請したりと、必死に準備こそ整えていたが、自

ら進んで兵を動かすことはなかった。

ゆえに、しばらくの間、膠着した冷戦状態が続いていたわけだが、三月八日になって、ついに山は動いたのである。と言うのも、かねて木沢長政と親しく付き合い、畠山家中において木沢一派の中核的存在を担ってきた斎藤山城守親子が、飯盛山の畠山政国に通じたとして、遊佐長教により肅清されたからであつた。

実際のところ、斎藤山城守がどう考えていたかは別として、木沢長政が彼に調略の手を伸ばしていたことは事実だつた。木沢としては、彼を味方に取り込むことで、畠山植長方を混乱させて、少しでも木沢方優位に持ち込みたいと考えていたのだつた。また、味方にならずとも、彼が木沢方に通じているという疑いをもたすことができれば、それだけで十分植長方を揺さぶることができる。いずれにしても損はないわけで、この辺りは、さすがに稀代の陰謀家木沢長政の真骨頂だつた。

だが、この暗殺事件がきっかけとなつて、河内・大和の情勢は、それまでの平和から一転して、一挙に戦へと傾いていった。前日の北畠からの絶縁状のこともあり、決戦を挑むより他に仕方のなくなつた木沢長政は、いよいよその覚悟を固め、自らが盟主と仰ぐ畠山政国を飯盛山から信貴山に移すと、ついに動き出したのである。

三月十日。

木沢左京亮長政は、総勢五千の兵を従え、信貴山城を発した。目指すは、畠山氏の本城たる高屋城である。

高屋城には、総勢一万に及ぶ大軍が集結していた。遊佐長教率いる河内勢と、畠山家が守護を兼ねる紀伊の軍を合わせた数であり、現状、河内畠山氏が動員できる最大兵力であつた。

信貴山を発した木沢勢は、予想外の畠山方の大軍を警戒しつつ、まずは高屋城に程近い二上山城に入って、敵方の様子を窺うかがうことにした。

「敵の様子は？」

敵かな陣羽織に身を包んだ木沢長政は、側に控える重臣の柳生家やぎゅういえに、強い口調で尋ねていた。

「報告によりますと、遊佐河内守は総勢八千の兵を率い、高屋城を  
発したそうです」

と、柳生が答えると、

「そうか」

とだけ淡々と頷く木沢であった。

「で、遊佐勢は何処へ向かっているのだ？ こちらか？」

「いえ、高野街道を北上し、一路、信貴山方面を目指しているよう  
にございます」

「…信貴山だと？ 我らを見無視してか？」

「はッ！」

その瞬間、木沢長政は「勝った！」と、身を乗り出しながら、興奮を隠そうともせず大声で叫んでいた。

「ふふふ。河内め、我らを出し抜こうとしても、そうはいかんぞ。

密かに北上して、手薄となったわが本拠を攻め落とす気であろうが、くつくく。こちらに抑えの兵も寄越さず、ばかりか堂々と敵に背後を見せるとは、よほどのたわけじゃ！」

「全く、左様にございますな。我らも早速出陣し、遊佐勢の背後を叩けば、一挙に攻めつづけます。遊佐勢が信貴山に辿り着くには、途中に大和川がありますれば、追いつくのに造作はありません」

そんな柳生家敵が言葉に、木沢長政はすっかり勝ち誇ったような顔をして、「ははは」と豪快に高笑いしていた。

【飛翔編】第044章 太平寺合戦（後編）

三月十七日。

木沢軍は大挙して二上山を発し、高野街道を北上する遊佐軍を追撃すべく、必死になってその後を追った。

一方、その急報は、当然のように遊佐長教の陣にも伝えられていた。慌しく駆け込んできた斥候のもたらした報告に、彼は案外平然とした顔で、

「分かった」

とだけ言った。

てつきり驚くのかと思っていた諸将にしてみると、彼の冷静な態度は意外であった。しかし彼は、そんな諸将など気にする風もなく、ただいつものようにニタニタと楽しそうに笑うと、「勝ったな」と、小さくも、しかしはっきりとした口調で呟いていた。

その後、遊佐軍は、河内守長教の命に従う形で、落合川（石川と大和川の合流地点にある川）沿いの上畠という土地に布陣し、迎撃態勢を取った。

午後。

ようやく木沢勢が上畠に到着し、たちまち両軍による熾烈な攻防が始まった。

攻める木沢に、守る遊佐。

簡単に言ってしまうえばそんな構図だが、落合川を背にしている遊佐勢は、兵法的に愚策とされる背水の陣で戦うことを強いられていた。無論、自らを死地に追いやることで、人間の出しうる限界に近い戦闘力を引き出せるこの戦法は、守りに徹する場合に限り、実に有効なものである。だが、これを成功させるには、迫り来る死の恐怖に勝ちうる絶対的な精神力と、暴走しかねない兵たちを見事に束



ねる将の力量が何よりも欠かせないのである。

しかしながら遊佐長教には、それだけの将器はなかった。何よりも、寄せ集めに近い畠山軍には、死の恐怖に打ち克ち、死の中より己が生きる道を勝ち得るだけの精神力を持った者など、ほとんどいなかったのである。

だから、川に飛び込んだり、あるいは木沢勢があえて用意した逃げ道を使って、我先に逃げ出す者は後を絶たなかった。如何に遊佐勢の将校たちが、

「逃げるな！」

とか、

「死を恐れるな！」

などと叫んでみても、死への恐怖に囚われた兵たちの心に届くはずもなかったのである。

そこに、木沢勢は容赦ない猛攻を加えた。主将木沢長政以下、木沢左馬允、柳生家蔵、十市遠忠らの諸將に率いられた精鋭たちは、面白いほどに敵兵を次から次へと打ち倒していった。

日は次第に西の空へと沈んでいく。煌々と輝く紅蓮の日差しは、さながら血の色のようで、不気味だった。

響く絶叫、轟く喊声。

大地は物言わぬ屍で埋まり、川は夕焼けとは違う赤に染まった。

「申し上げますッ！ 沢木権兵衛殿、討ち死に！」

乱戦状態となっている遊佐の本陣に、慌しく使番が駆け込んでくる。遊佐長教はそれまでの余裕が嘘のような、苦渋に満ちた顔をして、その場に呆然と突っ立っていた。

遊佐勢の苦戦と、木沢勢の圧倒的優勢はもはや誰の目にも明らかとなった。後、半刻（約十五分）もあれば木沢勢の勝利は決定的となっていたであろう。

遊佐長教は、恨めしげに北の空を睨んでいた。早く来いと、心の

中に叫んでいた。

あと少しで、味方の総崩れは決定的となる。そうなつては、これまで苦心して木沢長政を追い落としてきた自分の努力も、水泡に帰してしまふことになりかねないのである。

時間は、刻々と過ぎ去つていく。一秒一秒が、やけに速く、無情に流れていく。

また一人、敵兵を斬つた。けれど、次から次へ溢れてくる敵は、長教を守る馬廻衆を一人ずつ着実に殺していき、このままでは、味方の敗走を待つ前に、遊佐河内守長教本人が戦場の露と消えることになりかねなかつた。

長教は焦っていた。そして、必死になつて祈つた。もうどれだけ心の中で念仏だかお題目を唱えたかしれなかつた。南無阿弥陀仏、南無妙法蓮華経……。もう何を唱えているのかすらわからない。

速く来い。援軍はまだ来ないのかと、じつと北の空を睨んでいる。すると……。

「ご、御家老！ あ、あれを御覧ください」

足輕の一人が、慌てた様子で、北の方角を指差し、力の限り叫んでいた。

「あ、あれは……」

その瞬間、許されるなら、わんわんと泣きたかつた。

見ればそこには無数の軍影がある。自分をこの窮地から救い出してくれる仏のような軍影が、そこにあつた。

あれこそ、待ちに待つた援軍。今日、このときほど、あの『松皮菱釘抜』の家紋が記された旗、即ち、三好筑前守範長の軍旗が有り難いと思えたことはなかつた。

「み、三好殿の兵だ……」

そう呟いた長教は、へなへなど、力なくその場に腰を落とした。

三好範長は、細川晴元の命を受ける形で、芥川山城より大野街道

を南下し、遊佐軍を救援すべく強行軍を続けていた。

その先鋒を受け持っていたのは、今回範長より正式に一軍の將に抜擢されていた松永久秀であった。かつて木沢長政に仕え、そのやり口を熟知している彼ならば、先鋒を任すに最も相応しいだろうと範長は考えたわけだったが、単なる側近から、將にまで栄達した久秀は、そうした主君の思いを理解しながら、それ以上に逸りに逸っていた。

「急げッ！ 河内殿を見殺しにするな！」

と、彼は馬上より、必死に兵たちに怒鳴っている。戦功を上げ、自分もまた堂々たる三好の部将なのだといいことを満天下に示したい。弟の長頼が内藤家の養子となり、いずれは大名となる道を実確なものとしたのである。弟に負けたくない、というのが、久秀の率直な思いであった。

そんな大将に率いられた松永勢は、やはり逸っていた。少しでも多くの手柄を挙げ、出世したい。考えていることは、皆、久秀と同じである。

その松永勢が、真っ先に木沢勢に突っ込んだ。遊佐長教がはじめに見た三好軍は、言うまでもなく松永久秀率いる一千の先鋒部隊であった。

三好軍の来援により、戦局は一変し、それまで圧倒的優勢を確保して、勝利に限りなく大手をかけていた木沢勢は、今や総崩れに等しい最悪の状態に陥っていた。

木沢長政も、全軍の先頭に立ち、必死になって奮戦したが、その程度で戦況が覆るはずもなかった。筑前守範長率いる三好軍は全く容赦なく、凄まじき猛攻を加えてきた。次から次に現れる敵兵を、いくら殺しても、大して意味はなかった。

「も、申し上げますッ！ 十市遠忠殿、返り忠いたしましてござります」

使番のもたらした凶報にも、木沢は「そうか」と、素つ氣無く答えるだけだった。もはや怒るだけの気力も、怒鳴るだけの力もなかった。ただ、がっくりと頂垂れ、「ははは」と、乾ききった、声にならぬ笑いを全身から吐き出すだけだった。

ただ、大和の有力国人の一人であり、かつ興福寺の国民（興福寺が組織した、春日社の氏子を勤めた大和武士のこと）として、木沢軍内でも有力な地位を占めてきた十市遠忠の寝返りは、ただでさえ劣勢な木沢方に、決定的な打撃を与えた。これにより、辛うじて持ちこたえていた木沢方諸部隊も、ついに総崩れとなった。

「お逃げください、兄上！」

そこに、実弟の木沢左馬允が、数十騎の足輕を従えて駆け込んできた。

「逃げる、だと？ …ふん、今更逃げたところで、どんな未来があるというのだ」

木沢長政は、すっかり気落ちした様子で、そんな風にぼやきながら、天を仰いでいた。

「いえ、逃げるのです。未来がどうなるかなど、誰にも分かりませぬぞ。逃げて再起を図る。歴史を見れば、そういう事例も多々あるではありませんか。古くは足利尊氏公、最近では、將軍職を追われながら、後に復歸した足利義植公はじめ、例を挙げだせばきりがないほどです」

「…」  
「兄上、お逃げください。…ここは、このそれがしが受け持ちますゆえ！」

そんな左馬允が必死の説得には、さしもの木沢長政も、心動かさずにはいられなかった。落ち込んでばかりいても、何も始まらない。死にさえしなければ、道は開けるのだ。

木沢は、決死の覚悟で、迫る敵を凝視している弟の顔をじっと見

つめた。共に今に至る波乱の道のりを歩んできた、最愛の弟であり、同志だった。ここで死なすのは、余りに惜しい。

「お主も逃げよ！」

だから、彼はそう言つて怒鳴つた。

「死んではならん。これから後も俺の側にあつて、俺の再起を支えてくれよ」

今にも泣き出しそうな兄の必死さに、弟は、にこりと微笑んだ。

「兄上。それはなりません。兄上は木沢家当主として、家を守るといふ義務があります。そして、それがしには、弟として、木沢家の家臣として、当主たる兄のために命を投げ出して尽くすといふ義務があるのです。…これは、互いに課された宿命。兄上は再起を期してください。我らの死を、決して無駄にはしないでください」

「…だ、だが」

「兄上！ 敵がきます。急ぎお逃げを！」

激しい口調で、そんな風に怒鳴る弟に、兄はただ呆然と立ち尽くし、そして全てを覚悟した上で、

「わかった」

とだけ言つた。

数人の衛兵を従え、木沢長政は慌しく弟の側から去つた。弟は、兄と同じ甲冑を身に纏い、兄そっくりな顔をして、

「我こそは、木沢左京亮長政なりッ！ 我と思わん者は、尋常の勝負をせよ！」

と、ひたすら声高に、大地を揺るがすかのごとき大音声を張り上げた。そして、十数人の配下とともに、怒涛の如く押し寄せてくる無数の敵勢に対し、無謀な特攻を仕掛けるのだった。

夕日も、既に西の端に消えた。

黒き空に、無数の星が点々と輝いている。

既に戦いは決着し、言うまでもなく、三好・遊佐連合軍の完勝と

いう結果で、熾烈な激戦もようやく幕を閉じたのだった。

残党狩りも始まっている。

重き甲冑を脱ぎ去り、僅かな郎党とともに大和川を泳ぐ木沢長政は、ふと、満天に広がる星空を見上げてみた。いつ見ても、どこで見ても、その美しさに寸分の違いもない。

かつて、というほどに昔のことではないが、少なくとも最近まで畿内にその名を轟かし、一時は天下までも大手にかけた木沢長政は、そうとは到底思えぬ無惨な有様で、命辛々、大和川北側沿いに聳える太平寺にやってきた。

まだ三好の追っ手は迫っていないようである。つい数時間前までの喧騒が、嘘、夢であったかのような静けさに、木沢はホッと小さな溜息を吐いた。

眠る。思いのほか、よく眠った。

疲れていたのだろう。敵の手が今まさに迫ろうとしている、緊迫した状況下でありながら、不思議なほど、よく眠れた。

夢を見た。

京にあつて、天下人として君臨している自分。無数の群臣たちを見下ろし、豪快に高笑いしている自分。この世の春を謳歌して、無限大の権力を行使している自分。

その全てが、夢であることを薄々感じながら、彼はひと時の栄華を思う存分に堪能していた。

「殿！」

ぼんやりとした意識の中、聞き慣れた声が、慌しく彼を呼んでいた。

「殿ッ！ 一大事にございますぞ！」

その声とともに、彼はゆっくりと起き上がった。

「一大事？」

一瞬首を傾げ、そして全てを悟った。

周りには、殺気が溢れている。それまでの静けさが嘘のような騒がしさが、寺全体を覆っていた。

「三好勢です」

側近の報告に、「そうか」と、観念しきつたような顔をして、木沢長政は静かに頷いた。

今更戦つても、勝ち目はなかった。かといって、逃げられるとも思えなかった。相手は三好範長。彼の父元長を殺したのが自分であることを踏まえれば、彼が自分を助けしてくれるとは到底思えなかった。

三好軍による一斉攻撃が始まった。

攻撃、といったところで、木沢長政には僅か六人の配下しかいないのである。戦いなど起きようはずもない。

たちまちのうちに、寺全土が三好勢の支配下に落ちていく。木沢たちは、寺内の片隅にある物置小屋に身を潜めていたが、ここが発見されるのも、時間の問題だった。

そして、案の定見つかった。

彼らは、大人しく捕虜になると、三好の兵により連行され、その本陣に向かった。途中、幾たびも三好の兵とすれ違ったが、規律の整った彼らの姿を見るたびに、自分たちの敗北が、至極当然のものだったのだということを感じ知らずにはいらなかった。

「故筑前より、今の筑前のほうが遥かに器量は上やもしれん」

などと心の中に呟きながら、かつて滅ぼした政敵ライバルのことを思い返し、「ははは」と高笑いする木沢長政であった。

やがて、彼らは本陣にやってきた。境内に設けられた、実に簡素な陣である。そこにいたのは三好筑前守範長ではなく、その側近として、最近飛躍的に存在感を示している松永久秀であった。

「木沢左京亮殿、お久しぶりでござる」

久秀は、そう言つてかつての主君に対し、静かに頭を下げた。

「…松永、ここは貴様の陣だったのか。貴様も、随分と出世したものだな」

そんな風に、儂げな顔をしてぼやく木沢を、松永久秀は困つたように見つめていた。

「かつて木沢様より与えられし格別の御厚恩、この松永久秀、一日とて忘れたことはありませんぬ」

明らかに見え透いた言葉を平然と吐く久秀に、木沢長政はふんとそっぽを向いた。

「ならば今こそその恩に報い、俺を逃がせ」

と、木沢が言えば、

「それはなりませんな」

久秀は、あつけなく、はっきりとした口調で言い切つた。

「この久秀、木沢様より受けた御恩に報いるため、木沢様には武士らしい最期を遂げてもらえるよう、最高の舞台を用意させました」

「…最高の舞台だと？」

「はい。ただでさえ、卑怯者だの、武士の風上にもおけぬ奴、などと散々罵られてきた木沢様でございます。最期の最期くらいは、誰より武士らしく死なせてやろう、と。これが、この松永久秀なりの恩返しにございます」

「…なるほど。実に素晴らしい、恩返しだ」

淡々と、実に事務的な顔をして、『死』を命じる久秀の姿に、木沢はかつての自分を見つけていた。昔の自分も、あんな風に、他人に平然と死を命じてきたのだろう。顔色一つ変えず、淡々と処理してきたに違いない。ならば、こういう死に方こそ…、即ち、自分とよく似た松永久秀という男に、虫けらの如く殺されるのが、最も相応しい最期であるような気がしてならなかった。

それにしても、と、心の中にふと思う。

松永久秀は、実に自分に似てきた。かつて彼を自分の家臣として



取り立ててやったのは、彼が様々な知識を誇り、誰より優秀な人材であったからだが、それ以上に、低き身分に安住することなく、飽くなき野望をきらざらと燃やしていた姿が、どこことなく自分と似ていたからであった。あの当時の久秀は、それでもどこか甘く、若者特有の短慮も目立ったが、今の彼は、まさに昔の自分そのものだった。伶俐冷徹、何事も自分の思うがままに全てが回っているのだと思いがついていた頃の自分とそっくりだった。

「お主も、ろくな死に方はせんぞ」

木沢長政のそんな言葉に、

「そのようなことは、百も承知」

久秀はそう言つて、ニタニタと笑った。

時は三月十八日朝。所は太平寺の本堂。

木沢長政は、ここで一人静かに腹を切ることになっていた。検分役として隣席していたのは、松永久秀と、その配下数人だけであった。三好範長はじめ、三好家の要人たちは、一切姿を見せなかった。「天下にその名を轟かせた木沢長政の最期としては、幾分物足りぬが、仕方あるまい」

そんな風にぼやきながら、それが、木沢長政としての最期の言葉となった。

彼は、後は無言のまま、握り締めた短刀を思い切り己が腹に突き立てた。途端、身に付けていた白装束が、朱色に染まった。

介錯人はいない。彼本人が拒んだのである。

彼は、自らの腹につきたてた刀を、まず右に左に少しずつ動かした。肉を斬り、骨を裂き、ゆっくりと、しかし確実に動かす。そのたびに溢れ出す血に、松永久秀を除く参席者たちは、どれも思わず目を背けた。

余りの激痛に、木沢長政はその場に倒れこんだ。けれど、まだ死なない。人間の生命力の凄まじさが、このときほど腹立たしいと思

えたことはなかった。

木沢は最期の力を振り絞り、再度座りなおした。短刀の柄を握り締め、今度はそれを上下に動かした。

歯を食いしばる。そして、何とか腹に十文字を刻み込んだ後、彼はその場に倒れこんだ。遠くなる意識の彼方に、昨夜の夢の続きがあった。それは、どんどん近づいてくる。けれど、次第に薄く、ぼやけてきた。

辺りはだんだん暗くなる。その分、意識も遠のいた。

彼は、夢を掴んだ。そして、その瞬間、それは彼の手から零れ落ちた。

全てが暗くなった。何も見えなくなった。そのとき、彼の意識も永遠に消えてなくなった。

【雪辱編】第045章 勢力争い

「何ゆえ、そなたは勝手に木沢を処分した？」

範長は、怒り心頭に達したといった様子で、烈火のごとく怒鳴っていた。

「はて、悪いことでもございましたかな？ 木沢長政は逆徒ゆえ、逃がせば厄介なことになると思い、処分を急がせただけのことです。実際、奴は太平寺に一夜を過ごした後、信貴山に赴いて再起を期そうとしておりました」

などと、松永久秀は、けろりとして答えるのだった。

「た、例えそうだとしても、余に決断を仰ぐのが筋というものであるう。それでなくとも、木沢は余が父の仇。出来うることなら、余の手で殺したかったのだ」

そんな風に声高に怒鳴る範長に、久秀は内心で苦笑いしていた。無論、久秀とて主君の気持ちなど百も承知だった。承知していながら、あえて独断で木沢長政を斬ったのは、主君を蔑ろにしたわけでも、もちろん嫌がらせでもない。いつまでも昔の恨みに囚われている主君を見ていれば、仇を目の前にしたとき、怒りの余りに冷静を欠き、取り乱さないとも限らないのである。そんな無様を満天下に晒すようなことになっては、行く末天下人を目指す範長にとって余りに都合が悪い。あくまで主君のため、御家のためと、涙をふるって処分したつもり久秀は、範長の怒りを軽く交わしつつ、

「で、信貴山城は如何相成りました？」

と、言った。

「信貴山？ ああ、落ちたよ。我らに内応した十市遠忠殿が先鋒役を勤め、案外あつけなく落城した。まあ、総大将が死に、主力が壊滅したのだから、無理もあるまいな」

「なるほど。されば、信貴山にいるはずの、畠山政国殿は？」

「政国？ ああ、彼ならば、さすがに殺すわけにもいかんからな。」

とりあえず、畠山植長殿の要望もあつて、紀伊に流罪ということを決まった」

「流罪？ なるほど」

妥当な決断だろうと、久秀も思った。後ろ盾である木沢長政が滅びた以上、畠山政国には何の力もない。畠山家は名門中の名門であるし、対立していたとはいえ、現当主畠山植長と政国は兄弟なわけ、殺すには忍びないのだろう。ならば紀伊に流し、形だけ罰しておけばそれでいい。苛烈に徹することだけが政治ではない以上、妥当な判決と思うしかなかった。

天下にその名を轟かせ、ここ十年、ずっと実力者として君臨してきた木沢長政が、案外あっけなく滅び去ると、人々は、栄枯盛衰の理なるものを、その身をもつて感じずにはいらなかった。

三好範長は木沢が横領していた旧元長領を回復し、三好政長も木沢が保持していた領地の一部を承継した。遊佐長教は正式に河内守護代となり、畠山植長も河内守護職となった。

しかし、木沢左京亮長政が滅びた後、俄然その存在感を示し始めたのは、三好筑前守範長であつた。騒乱の中で、摂津の大半を事実上その支配下に置き、さらには山城、大和などにもその勢力を伸ばしつつある。淡路の安宅氏、讃岐の十河氏、丹波の内藤氏、波多野氏などの同盟国は、形としては対等な同盟関係を維持しつつも、事実上三好家の盟下に入り、その支配を快く受け入れていた。

今の三好範長は、既に細川晴元すらも凌駕する絶対的な実力者となっていた。一般的な世論は、今後は彼と三好政長との間で、熾烈な政争が繰り広げられるものだとばかり思われていたが、実際のところは既に政長は範長の敵ではなくなっていた。

それからしばらくの間、範長は細川晴元とともに、京にあって政

務を執っていた。その実態は、細川晴元が主導し、側近筆頭の三好政長と重臣筆頭の三好範長が協調して行う、ローマ的な三頭政治に近いものがあつた。また、こうした政治体制の下では、三人の調停役であり、権威の裏づけ役となつている將軍足利義晴の存在感が俄かに高まることになつた。

ちなみに三好政長は、木沢長政が滅びたすぐ後に出家し、自らを宗三と号し、半隱齋を名乗っていた。ただ出家し、かつ嫡子三好政勝に家督を譲つてしまつたとはいつても、完全に隱居したというわけではなく、依然として三好越後守家の実権を掌握し、細川晴元の側近として、天下の政務にも大きな影響力を保っていた。

その宗三であるが、ここ著しく勢力を拡大している三好範長に対抗するかのようになり、自らの領国支配力を大幅に増強していた。例えば、自身の居城である江口城のほかには、堅城と名高き榎並城に三好政勝を入れたのも、その一環であつた。

摂津という国は、今のところ、大まかに三つに分割されている。最大勢力は北部及び西部一帯を完全掌握している三好範長であるが、他に芥川山を拠点に、東部地域に直轄領を持つ摂津守護職兼任の細川晴元と、江口城、榎並城を軸に、南部一帯を領有する三好宗三の二つの勢力があつた。ただ、想定以上に三好範長の勢威が拡大し続ける今、彼の影響力は次第に晴元、宗三の領内にも及び始めていた。例えば彼らに属しているはずの豪族たちが相次いで範長の居城越水に伺候したり、あるいは彼自ら仲介だの、調停だのと様々な理屈をこねて口を挟んでくることもあつた。だから彼は、家督を譲つた息子に領内の要衝を預け、支配力を固めなおしたのだが、それもこれも全て三好筑前守範長という一人の青年が持つ絶大な影響力への恐怖感の表れでもあつた。

大和の筒井氏に不穏な動きがあるという噂は、ここ最近、実にやかに囁かれていたものであつた。

筒井氏当主筒井順昭は、大和の一土豪に過ぎなかつた筒井氏を一躍大和最大の豪族へと成長させた人物として、とかく名高かつた。時の権力者木沢長政とは絶妙な距離感を保ち、彼の勢威が強大な時は、従順な臣下を貫き、彼が衰えたとなれば、一転して中立姿勢をとつた。機を見るに敏で、かつ妙なこだわりなく、実力者間を次から次へ渡りまわつた。そうした彼の処世術は、やがて筒井氏のお家芸となつて、彼の息子たる順慶にも見事に受け継がれることになるが、とにかく、彼の時代、筒井氏は大和を代表する国人勢力にのし上がつていた。

そんな筒井氏ではあるが、木沢滅後、大和への勢力拡大を本格化させた細川政権にとつては、最大の邪魔者であつた。また筒井氏にとつても、強大な細川氏が大和に乗り込んでくると、ようやく築き上げた一族の利権が悉く奪われることにもなりかねず、なので、両陣営はこのところ、激しく睨み合いを続けていたのであつた。

天文十一年（一五四二年）十月になり、筒井氏が兵を挙げたという噂が、洛中に広まつた。早速、管領御所では、真偽のほどを確かめ、かつ如何に対処すべきかを討議すべく、細川晴元、三好宗三、三好範長の三人が慌しく集結したのである。

三頭政治の決定に従い…、というより、範長が半ば強引に押し切る形で、細川政権は筒井氏征伐を目的とした大和出兵を正式決定したのである。さらにはその征伐軍を三好範長が担うこととなり、早速範長は三好の精鋭を大和に差し向けることにした。ただ、範長自ら軍を率いることはなく、松永久秀を総大将とする総勢五千の精鋭が、範長に代わり大和へ進攻することになった。

松永軍は山城南部、木津城に本陣を設けて、筒井城に立て籠もる筒井勢と睨み合った。

十月も、そろそろ半分が過ぎた。夏の暑さは既になく、冬の寒さが、次第に身に染みてくる、なんとも微妙な季節だつた。おもむる

に庭を見つめると、生い茂っていたはずの緑は、茶色に染まって地べたに転がっていた。

「此度の戦は、御家の力を大和にも扶植する絶好機である」

松永久秀は、そんな秋の空の下で、居並ぶ三好家の諸将を前に、そんな風に堂々と訓示していた。時折南の空を見つめながら、にやりと不敵な笑みを漏らしている。

大和といえ、古き都の連なる伝統と歴史の国である。また、北部を中心に肥沃な大地の広がる、畿内を代表する富国でもあった。かつて木沢長政が、この地に地盤を求めたのも、その豊かさに挽かれたからに相違なく、松永久秀もそのつもりで、ここ半年ほど、ずっと範長に大和出兵を進言し続けていたほどだった。

「筒井方の戦力は？」

秋風が爽やかに髪をなでる。久秀は気持ちよさそうに深呼吸しながら、そこに控える側近に尋ねていた。

「三千余騎とのこと」

側近の一人が、すかさずそう答えた。

松永勢五千と筒井勢三千。

戦って負けるとも思えないが、戦うならば、まずは万全を期すベきだろうと、彼の中に渦巻く陰謀家としての血が、めらめらと燃え滾ってきた。

「若狭！ 柳生家敵は我らに靡きそうか？」

声高に怒鳴る久秀に呼びつけられた林若狭守通勝は、「はッ！」と、大袈裟に平伏し、

「上首尾にございます。我らが大和へ入った暁には、筒井勢の背後を叩くとのことですよ」

と、嬉しそうな顔をして、そう言った。

「そうだろう、そうだろう。木沢左京が滅びた後、筒井に散々追い詰められていた柳生のことだ。我らの誘いは、まさに渡りに船だろ

うて。はっはっは」

高笑いする久秀に、林若狭守もにつこりと微笑んだ。

大和攻略に向け、松永久秀がこの半年間に注いできた努力は、並大抵のものではなかった。大和こそ、三好の将来に大きく関わる重要な土地であると信じる彼は、木沢亡き後、その後釜を狙って勢力を拡大する筒井氏に対抗すべく、柳生をはじめとする旧木沢方の国人たちに熱烈なアプローチを繰り返していた。

それが、今ようやく功を奏したのである。側近として、彼と共に奔走してきた林若狭守にとっても、何より嬉しく、喜ばしきことであつた。

柳生家敵をはじめとする有力国人たちが、一斉に松永方に同心したことで、筒井方の劣勢は誰の目にも明らかとなつた。

実際のところ、如何に筒井が大和に大きく勢力を広げていたとしても、松永勢の背後に控える三好範長に勝てるわけがないのである。例え松永勢を蹴散らしたとしても、そうなれば、面子のかかる範長が本格的に乗り出してくるだろう。そうなつたとき、はつきり言つて筒井に勝ち目はない。

そこで筒井順昭は、やむなく興福寺に和睦の調停を依頼したのである。自分の力を見せ付け、今後の細川政権内での立場をより高めんとするためだけの戦いで、自らの滅亡を招くようなことになつては、笑うに笑えない。泣くに泣けない。今回は少しばかりやりすぎたと、反省しつつ、恥も外聞もなく和睦調停を依頼する辺り、なかなかにしたたかな男であつた。

だが、それを松永久秀が受け入れるかどうかは、全く別の話だつた。とはいえ、大和を主戦場としたいくない興福寺にとっては、せつかくの依頼でもあるから、その任を完遂すべく必死になつた。

「というわけで、和議というわけには参りませぬか？」

十月二十六日、はるばる山城南部は木津の松永軍本陣までやつて



きた興福寺多聞院の僧侶英俊は、そう言って、久秀に頭を下げた。

「これは御高名な多聞院の英俊殿。…ははは、和睦斡旋でござるか。御苦労なことござる」

久秀はというと、そんな風にけらけらと笑うだけで、肝心の和睦については、素知らぬ顔を決め込んでいた。

「もしも松永様が和議を蹴られると仰せなら、代々室町將軍家より大和守護職を許されているわが興福寺としては、侵略者には徹底抗戦せねばなりません」

英俊は脅しに出た。それを受けた久秀がどういう態度に出るかは、それこそ神ならぬ仏のみぞ知るところであったが、英俊には自信があった。

興福寺というのは、藤原不比等（藤原氏の祖たる藤原鎌足の子）が建立し、以来貴族の名門藤原氏の氏寺として、長く繁栄を極めてきた伝統と歴史の大寺であった。平安期には、摂関家たる藤原北家の手厚い庇護の下、延暦寺や東大寺などと並ぶ大莊園領主として、大きな政治的影響力を誇っていた。鎌倉、室町と、武家の時代が到来した後も、大規模な僧兵集団を抱えて隠然たる勢力を保ち、室町期には実質的な大和守護として、同国全土を支配下に置いてきた。

如何に三好が強勢を誇っているといえど、不比等以来八百年以上に渡り大和に君臨し、根を張ってきた興福寺と全面戦争に陥ればどういうことになるか、分からぬほど愚かな松永久秀でもないだろう。「我らを侵略者と評されるか、英俊殿は？」

久秀は、ぎろりと睨み付ける。ここが正念場と、英俊はごくりと唾を飲んだ。

「無論、我らが八百年來守ってきた大和の地に、土足で兵を入れてくる以上、侵略者以外の何者でもありません」

「ほお。だが、我らは將軍家の命を帯びた、正式な幕府軍である。そして、筒井順昭は將軍家の命に楯突く逆賊。討伐するは当然であり、それを侵略者とは、聞き捨てならん」

「例え幕府の命を帯びていようと、我らの土地に土足で足を踏み入

れる者は、例外なく侵略者でございます」

今や三好家中にその人ありと言われる松永久秀を前にしても、英俊は一步も引かなかった。その堂々たる態度を見て、久秀は「ははは」と苦笑いした。

「ならば、我らが筒井と決戦するなら、興福寺は筒井方に与力すると申すのだな」

と、久秀が尋ねると、英俊は何も言わず、ただ静かに頷いた。

その後、久秀はひとまず返答を保留した上で、京の範長の下へ使者を送ると、如何にすべきか彼の決断を求めた。さすがの久秀も、大和平定という大事業の是非を、己が独断で決めるわけにはいかなかったのである。

そして十一月二日。

範長の上使として、立花又右衛門が都からやってきた。範長の腹心として、久秀とともに、ここ急激に頭角を現しているこの男は、常に笑みを絶やさず、温和で、人柄もよく、何から何まで松永久秀とは好対照を成していた。唯一、出自が低いという点にのみ共通点はあるが、所詮娘（お雅の方）の七光りで出世したに過ぎぬと、久秀自身は余り評価していなかった。とはいえ、上使として来た以上、久秀はこれを恭しく出迎えると、何より範長の決定を誰よりも聞きたがった。

「御屋形様は大和における全てを松永殿に委任されました。されば、和議を結ぶにしろ、戦うにせよ、全て松永殿の思うとおりになされよとの仰せです。松永殿の御決断に対し、御屋形様は全面的に支持なされるでしょう」

又右衛門はそう言って、につこりと微笑んだ。

「お、御屋形様は全てをそれがしに委ねてくださるのですか？」

さしもの久秀も、これには驚きを隠せなかった。如何に範長の側近として、その寵愛著しい松永久秀といえど、家中における立場は

まだまだ低く、本来ならば大和攻略という大事業の全権を委ねられるはずもなかった。今回の出兵にしても、隊長たる松永久秀に与えられた役目は、後に出張ってくるだろう三好家の主力の、いわば先発、先鋒的なものと、彼だけでなく誰もが認識していた。

「それと、このたびそれがしは御屋形様より、松永殿の軍監を仰せ付かりました」

「軍監？」

「はい。…されど、勘違いなさらないでください。それがしに発言権はありません。松永殿がどうという判断をなされるのか、その過程全てを見守る役です」

「…ふーん」

なにはともかく、久秀は嬉しかった。それだけ範長が自分を認めてくれているのだと思うと、それだけで心が躍った。

「ともかく、ならば今後はわしが全てを決める。誰にも文句は言わせんぞ」

そう声高に叫ぶ久秀を、立花又右衛門は顔色一つ変えず、淡々とした表情で、じっと見つめていた。

時は少しばかり戻って、天文十一年（一五四二年）は八月の頃だった。

夏真つ盛り。ミイイン、ミイインと、けたたましく響く蝉の声にも、随分慣れてきた頃のこと。

三好筑前守範長が居城たる越水城は、いつになく大騒ぎだった。家臣たちも、女子たちも、皆が皆、大いに慌て、落ち着きなく騒ぎあっていた。

「まだ陣痛は始まらんかね？」

お福もまた慌しく、奥付の侍医を呼び止めると、急かすように問い詰めていた。

「まだにございます」

侍医たちは、そう言って忙しく奥御殿のほうへと急いでいった。「そうか、まだか」

福はフウと大きく深呼吸すると、側に控える雅の方のほうを振り向き、

「いよいよ御誕生じゃ」

と、実に嬉しそうな顔をして、「ははは」と笑っていた。

「男子おのこであればよろしいですね」

と、雅が言えば、福もまた殊のほか大きく頷いた。

波多野御前、御台所、あるいは北の御方。

様々な敬称を持って遇せられている筑前守範長が正室は、三好家中の誰もが待ちに待った出産を、今日に控えていた。医者の見立てでは、今日辺りが出産予定日ということだった。

だからお福など、いつ御台所の陣痛が始まるか、朝起きてからずっと気が気でないといった様子だった。

男子だろうと女子だろうと、生まれれば、それは範長にとって初めての子となる。正室の腹から生まれる以上、男子であれば、確実に三好家の世子となるわけである。今のところ範長に世継ぎはいないから、家中の期待は、悉く世子、即ち男子おのこ誕生に染まりきっていた。

「御世継ぎがお生まれになれば、もう私は思い残すことはありませんぬ」

などと、お福は朝からずっと言っている。

之長の代より、ずっと三好家の奥向きを取り仕切っているこの老女は、元長が横死した後、残りの一生の全てを、幼き千熊丸少年のために投じてきた。少なくともそのつもりで、三好家のために尽くしてきた。その結果、千熊丸は父や祖父、曾祖父を遙かに超える英雄へと成長し、あの当時では考えられない繁栄を、今や三好家はその手に握んでいた。

もう思い残すことは何も無い。ただ唯一心残りだったのは、依然として範長に子がないことであった。もう二十歳になったのだから男だろうと女だろうと、とにかく子の一人や二人もなければ、おちおち引退すら出来なかった。

「早く御生まれにならぬかのう。御屋形様の御子様じゃ。若君様であるうと姫君様であるうと構わぬが、はようみたいものだ」

ここ最近、めっきり老けてきた彼女は、そんな風にぼやきながら、伝令役の女官たちを見回していた。

「それはそうと、お福様。その御屋形様も、後一刻もすれば、御城に到着なさいましょう。お出迎えの準備は既に整っておりますが、お福様は如何いたしますか？」

と、『西の丸様』こと雅の方は、疲れきったように脇息にもたれかかるお福を気遣うように、そう言った。

「如何も何もあるまい。御屋形様がお戻りになられるのなら、私もお出迎えせねばなるまい」

そんな風に強がり、弱みを見せまいと、必死になっているお福を

見ると、雅の方はただ困ったように溜息を吐いた。

家臣たちは、未だ不思議でならなかった。

子が生まれる。そのこと自体は、大いなる喜びであり、彼らとて嬉しいには違いないのである。だが、その子を産むのが、雅の方ではなく、御台所であることに、彼らは疑問を抱かずにはいられなかった。

御台所と範長の不仲は、今や城内で知らぬ者はないほどの通説になっていった。実際、二人が結婚して以来、最初の夜を除き、範長は滅多に奥泊まり（御台所の下で夜を過ごすこと）したことはなかった。

これでは夫婦生活などありえるはずもないと、家臣たちは皆、御台所の懐妊を半ば諦めていたのである。ならば世継ぎは、範長の寵愛を一身に受ける雅の方に期待するより他に仕方ない。だから一時、御台所は大奥、城内を問わず、完全にその立場を失い、孤立した。

範長にすれば、そうした御台所を哀れんだだけなのかもしれない。それは天文十一年になって間もない、一月のある日のことであった。当時は、ようやく摂津国内における反三好党を成敗し、三好家による摂津統治にも一区切りがつくなど、比較的順風な時ではあったが、大和信貴山に拠る木沢長政との対決を間近に控え、畿内全体が緊迫していた時期でもある。こうした殺伐とした雰囲気の中で、範長は、特に理由もなく、御台の下へ向かった。

で、そういう仲になった。

とはいえ、たった一夜のことである。その後、範長は一切御台の下には行かなかった。確かに、丹波の山国に育った割には、都にも滅多にいないような美貌と教養を誇っている。姫としては、まさに完璧な女子だったのかもしれないが、事あるごとに、

「父、秀忠様は……」

と、御国自慢を始めるところが、範長の癢に障るのだった。無論、

単なる国自慢ならば、さして気にはしない。彼自身、雅の方との会話の大半は阿波の話ばかりだし、雅の方も自分の生まれ育った土地のことをよく話した。国のことを聞くのは、嫌いどころか好きだった。けれど、御台の場合は、度を越えた自慢が余計だった。丹波のよさを話す余り、父秀忠の偉大さや、波多野家が如何に優れた家柄なのかということ、延々説明するのである。はじめは良くとも、次第に飽きる。そして、ついには嫌になってしまふのであった。

何はともかく、懐妊というのは何よりの吉事であるし、範長も自分が父親になるのだと思うと、もういてもたってもいられなくなつた。無論、たった一日の逢瀬で子ができたことへの漠然とした不信感もないわけではなかつたが、徐々に、そして確実に、だんだん大きくなる御台の御腹を見るたび、そこから現れ出てくるだろう新たな命というものに思いを馳せずにはいられなかつた。

男子であれば、それに越したことはないが、女子でも構わなかつた。父親としては、どちらにしても可愛い子供であることに変わりはないのである。

「よいか。出産が万事上手く執り行われるよう、祈祷でも何でも、できることは全てしろ」

忙しき政務の合間を縫って、彼はそんな風に、常に生まれてくるだろうわが子のことを考えていた。

「男子であれば、当然世継ぎとなし、女子であれば、婿をとり、そ奴に家督を譲るというのも一興だなあ」

子どもないうちから、すっかり親ばかりに染まっている範長は、まだ弱冠二十歳というに、既に隠居後の自分と、後を継ぐだろう子供のことを考えていた。

「されど御屋形様。御屋形様はまだ若うございます。御生まれになるのが姫君様であっても、次には御嫡男が生まれるということも十分考えられます。例えご冗談にせよ、御世継ぎのことは、くれぐれ

も御慎重に御考え下さりませ」

と、一門衆の重鎮としての三好長逸は、口を酸っぱくして、彼の軽率な発言を咎めるのだった。

そんなこんなで、やがて八月になった。

京での多忙な日々にはひとまず終止符を打ち、慌しく越水城に舞い戻ってきた三好範長は、大奥総取締役たる老女お福、その補佐の任に徹している雅の方の出迎えなど、一切気にする風もなく、勢いよく御台の待つ奥御殿へと駆けていった。

今日なのか、明日なのか。明後日なのか…。

女官たちに制され、やむなく奥より下がった範長は、連日連夜、お福にそう尋ねては、高ぶる気持ちを必死になって抑えていた。

そして…。

八月二十二日朝。

唐突に始まった陣痛を経、その日の正午頃には、立派な赤子の、

「おぎゃあ」

という、甲高くも元気な泣き声が、城内全土に響き渡った。

範長は慌しく奥へ駆け、そこで自分の子供が、ようやくこの世に誕生したことを知った。案外小さく、猿のような顔立ちをしているが、どこことなく可愛らしく、そして自分とよく似た特徴を見つけて、

「俺の子だ、俺の子！」

と、楽しそうに騒いでいた。

生まれた赤子は、待望の男子おのこであった。即ち、行く末三好家を継承することを確約された王子様であり、誰もがその生誕を受けて、

「これで御家は万々歳じゃ！」

と、大仰に歡びあっていた。



「おめでとうござる、兄上！」

豊前守之康は、そう言つてくすりと笑つた。範長の実弟として、誰よりも大きな信頼を寄せられている。三好家の本国たる阿波を守つて、三好家の隆昌を影ながら支えている功労者。温厚篤実、博学多彩、人望厚く、聡明……と誰からも高く評価されている青年だが、未だ弱冠十五歳なのである。十五歳にして『叔父』となつた之康の心境は案外複雑だが、新たな一門、将来の御世継ぎの誕生は、叔父として、三好の重鎮として、純粹に嬉しかった。

「兄上、おめでとうございます」

と言つのは、今年の春を持つて安宅氏の家督を承継し、晴れて瀬戸内の王者となつた安宅撰津守冬康であつた。今年十四歳になる彼は、既にすっかり屈強な海の男となつていた。

「はは、我らは、この歳で叔父になるわけですな。不思議なものでございますが、御世継ぎ御誕生とのこと。誠に執着至極に存じまする」

などと、随分堅苦しい台詞で、頭を下げる冬康に、範長は「ははは」と高笑いした。

「相変わらず堅い男だ。……だが、お主たちで不思議がつているなら、又四郎などはもっと不思議だろうな。まだ奴は十二歳ぐらいだろう。弱冠十二にして、叔父上と仰がれる身になつたのだ」

「ははは、それは確かに」

之康が大きく頷くと、冬康もまた日焼けした肩を上下に揺らし、クスツと微笑んだ。

「だが、又四郎は遅いな。まだ来ていないのか？」

そう言つて辺りを見回す範長に、

「もうすぐ来るはずですよ。ま、讃岐もいろいろあつて、又四郎も容易くは国を空けることができないのですが、今回は特別でございますから、何が何でも越水に参上したいと申しております」

と答える之康であつた。

又四郎こと、十河左衛門尉一存は、讃岐の有力土豪十河氏の養嗣

子となり、一年前に家督を相続して以来、阿波の兄三好之康と連携しつつ、僅か十二歳の若さで、讃岐国の統一戦争に明け暮れていたのだった。

「いずれにしても、お主たちが背後を固めてくれるからこそ、今の三好家といえよう。有り難いことだ。常に、わが四兄弟、鉄壁の絆を保っていききたいものよ」

そんな風にしみじみと語る範長に、之康も冬康も、恥ずかしそうにニコニコ笑いつつ、

「そうですなあ」

などと、長兄の言葉に大きく頷いていた。

この日生まれた男子は、千熊丸と名づけられた。これは言うまでもなく、父範長の幼名であり、範長とすれば、自らの幼名を与えることで、千熊丸が家督継承者であることを満天下に示したいという思いがあった。

何はともかく、三好範長は、ここに堂々たる父親となったのである。彼は大いに喜び、ほぼ連日に渡り、千熊丸を求めて奥に入り浸った。そのために政務が滞っても、彼は別段気にしなかった。

「千熊よ。いずれはこの俺を継いで、この国の全てを治めるのだぞ。見渡す限りの大地が、我ら親子のものだぞ」

などと嬉しそうに呟いている範長に、側で見守るお福もまた、嬉しそうになつこりと微笑んでいた。

「御屋形様も、ついに御父上となられたのですね」

まだ千熊丸と言って、幼かった昔が夢のような心地がした。それだけ確実に年月が経ったのだと思うと、それはそれで寂しい気もするが、お福としては使命を果たしたような気がして、ふうと小さな溜息を、一つ吐いた。

「御屋形様。私めの如き老人の出番は、もう終わりにございます。そろそろ御城を下がらせていただきたく存じますが…」

と、お福は言った。

既に九月。本格的な夏は、ようやく終わりを告げたが、じめじめとした残り香が、鬱陶しいほどに纏わりつく。範長は団扇などパタパタと扇ぎながら、例によって親ばかに徹していたが、そんな思いもよらぬお福の言葉に、彼もさすがに驚きを隠せなかった。

「辞めると申すか？」

ぎろりと、睨み付けるようにお福を見る。天下に英雄と名高き青年の眼光は、思った以上に鋭く、厳しかった。

「ならん！ そなたは、余が母も同然。ようやくわが子が生まれ、その養育にも力を入れねばならぬとき。そなたに辞められては、千熊はどうなる。誰が育てる？ ……待遇が悪いのか？ 仕事が辛いのか？ ならば、何でも余に言ってくれ。出来うる限りのことをする。これでも俺は、この城の主なのだからな」

「いえ、待遇でも、仕事が辛いわけでもありません。…ただ、私はそろそろ潮時にごさいます。既に齢も六十を超え、風邪をこじらせることも多くなりました。出来れば、私がかつて育った都で、のんびりと余生を過ごしたく存じます」

「…都で？」

範長は「ふうむ」と唸りながら、何やら一人静かに考え込んだ。そして、一つ名案など思いついたようで、

「今は辞めるな。だが、いずれ辞めることは認めてやる」  
と、言った。

「お主の後継者を、大奥のうちより見つけ出し、後継者として相応しいだけの技量を身に付けさせたなら、お主は辞めてもよい。それまでの功勞に応じ、お主の望むものは全て与えよう。隠居料も弾んでやる。…確か、お主の実家は公家であったな。その再興にも、この三好筑前守が尽力してやろう」

「…後継者」

「そつだ。何より、お主のほかに、散々増え続けた女子どもを統括できると思うか？」

ふと見渡せば、三好の急成長ぶりを物語るかのように、大奥に住まう女子の数も増え続けていた。特に、側室の『西の丸様』や正室たる『御台所様』が奥に君臨するようになってからは、彼女たちの世話役としての女官が大幅に急増し、既に大奥の人数は五百人近くに到達するほどになっていた。

これだけの女官たちを、総取締役としてお福が全て仕切っていたのである。唐突に辞められては困るという範長の言い分にも、一理あった。

「分かりました。されば、私めも跡継ぎを探します」

と、お福が言えば、

「よろしく頼む！」

範長は嬉しそうに、にっこりと微笑み、そして大きく頷いた。

【雪辱編】第047章 新たなる脅威

三好家が、世子誕生の吉報に浮かれあがっている頃、大和では、松永久秀による筒井氏討伐が、いよいよ本格化しようとしていた。

範長により大和方面の全権を委ねられている彼は、既に決戦を覚悟していた。柳生氏、岡氏、奥田氏、十市氏といった大小無数の豪族を味方に取り込みつつ、筒井包圍網を敷くと、十一月六日、ついには彼自ら五千の精鋭を従え、木津城を発したのである。

「よろしいですか。興福寺と全面戦争になりますぞ」

と、軍監として松永軍に従軍している立花又右衛門は、得意がっている久秀の傍らにあって、そう言った。

「構うものか。この際だから、我らに抗う興福寺とやらも一挙に叩き潰し、三好家の力の程を大和衆に見せ付けてやるというのも一興だ」

そんな風にかからりと笑いながら、久秀は又右衛門をぎろりと睨み付けた。

「不安なのかね、立花殿は？」

と、まるで立花又右衛門という人間を試すかのごとく、不敵な笑みを漏らしつつ、その華奢にして少しばかりくたびれた体をまじまじと見つめている。

齢にして、又右衛門は今年で四十歳という。一方で、久秀は今年で三十二になるから、年齢的に差はそれほどない。けれど、長年の労苦からか、又右衛門の外見は、五十にも六十にも見えた。低き出自より、三好範長という英主に見出されたという同じ過去を持つ二人だが、どこまでも実力で今の地位をもぎ取ってきた久秀と、あくまで娘の七光りによって出世のきっかけを掴んだ又右衛門では、やはり何かが違うのだらう。松永久秀という人は、三十を超えてなお、十代後半の如き澁刺とした精気を醸し出している

「不安？ まあ、興福寺と全面戦争に発展するのであれば、勝敗は

五分五分となりますゆえ、不安ではありませんな」

と、又右衛門は淡々と言った。

「五分五分？ ふふふ、勝ち目なら十分にあり申す。軍監殿には是非ご安堵いただき、この松永久秀が采配のほどを見届けられよ」

どこまでも圧倒的な自信をその全身に表しながら、「ははは」と、大仰に高笑いして見せた。

筒井順昭は、危機に立たされていた。

彼は筒井城にあつて、苦りきつたような顔をしつつ、右往左往していた。

「興福寺は、まだ動かんか？」

彼は、ひどく落ち着かぬ様子で、側に控える実弟の筒井順政に尋ねていた。

「はい。興福寺の高僧たちも、調停に失敗した今、内部では主戦はと、非戦派が激しく対立して、身動きがとれぬようにございます」

「くそ、頼りにならん坊主どもだ」

順昭はそう言つて怒鳴ると、腹立たしそうに上座に腰を下ろした。筒井氏は代々筒井城を拠点に、大和北部に勢威を誇ってきた在地豪族であつたが、大和の実質的支配者といつて過言ではない興福寺との特別な繋がりを背景に、勢力を広げてきた。順昭もまた、興福寺の権威を最大限に利用し、筒井氏を大和最大の大豪族へと成長させたのであるが、今回ばかりは、そうした恩義の一切を忘れて、興福寺に吐きつけてやりたいような衝動に駆られた。

「また、松永の根回しも徹底していて、はつきり申し上げますと、興福寺中枢は、既に非戦論に固まりつつあります」

「な、なんだと？」

順政の思いもよらぬ言葉に、順昭は愕然とした。

「おそらく、興福寺は松永の背後にいる三好筑前守の勢威に恐れを成したのでしょう。また、我らの間者の調べによりますと、三好筑

前は、三好家による大和掌握の後も、興福寺の既得権益は全面的に認めると、内々に伝えていようです」

「無論、これらは全て、三好筑前の名を借りて、松永がやったことでありましょう。ただ、興福寺の高僧どもは、この甘言に、随分心動かされているようです」

そう言つて、順政は悔しそくに齒噛みした。

興福寺とすれば、代々守つてきた大和守護の格式をはじめとする既得権益が認められるなら、あえて無益な戦を巻き起こす必要性もないのだらう。三好範長に支えられている細川政権は、思った以上に強大であり、政権と全面戦争に陥れば、例え負けなくとも、多大な損害を蒙ることは確かだった。

「腰抜け坊主どもめえッ！」

と、順昭はひたすらに怒鳴つていたが、弟の順政はというと、既に別のことを考えていた。今更、こんなところで怒鳴つていても、興福寺の心が変わるはずもないのである。興福寺が動かねば、どの道、筒井の命運もあと僅かで尽きる。かといって、筒井一門に連なる順政が、筒井氏を寝返るわけにもいかない。ならば、この絶望的状況下から助かりうる、他の手立てを考えるしかない。

そう思いながら、順政は、はたと気がついた。

「遊佐河内守殿など、如何でしょう」

「遊佐河内？ 河内殿が如何した？」

順昭は、弟のあげた思いもよらぬ名に驚きつつ、しばらくすると、彼にもなにやら気づくところがあったらしく、「なるほど」などと呟きながら、にやりと不敵な笑みを漏らした。

「河内殿か。…河内殿に助けを求めるといふのも、一つの手ではあるなあ」

「はい。そして、河内殿なれば、必ずや我らに手を貸してくれるはずにございます」

そんな順政の言葉に、順昭もまた大きく頷いた。

遊佐河内守長教は、木沢長政亡き後、畠山家の実権を握っている実力者だった。三好範長や三好宗三の影に隠れ、案外目立たないが、名門中の名門畠山家の宰相として、彼の政治的影響力は想像以上に大きかった。また河内守護代として、河内一国を支配しているだけでなく、今では木沢の後釜を狙い、大和への勢力拡大を虎視眈々と狙っている男でもあり、苦境に立たされている筒井順昭にとっては、唯一無二の頼みの綱であった。

「順政、されば早速、河内守殿へ密使を送れ」

と、ようやくにして落ち着きを取り戻したらしい順昭は、逸る気持ちは必死になって抑えながら、主君として相応しい重厚な声色で、そう命じるのだった。

十一月八日。

松永軍は山城南部、大和北部の小豪族たちを加えつつ、総勢七千ほどの兵力で大和に入ると、この日、奈良に入城した。

かつては平城京と称され、桓武帝の御世に、長岡京へ遷都されるまでの間、およそ八十年間に渡り、この国の首都であった町だった。ゆえに、いつからか古都とも称されているが、最近では商業が盛んな経済都市として、俄かにその存在感を高めつつあった。

久秀は、この町に筒井征伐の本陣を設けると、まずは興福寺に使者を送り、その意を確かめることにした。さすがの久秀も、興福寺との全面戦争に発展するようなことになっては、勝ち目も薄いと見ているらしく、彼の興福寺対策は、綿密かつ完璧だった。

十一日になって、興福寺からの返使がやってきた。興福寺多聞院の学僧英俊が言ったような強硬論が、まるで嘘のような、「冗談であったかのような弱気な態度に、久秀は苦笑いした。

「坊主どもはよう分かっておる」

などと呟きながら、今度は東大寺にも使者を送り、彼らにもその態度を明らかにするよう求めたのだった。



全ては、散々根回しをし終えた後の、事後確認のようなものであったが、あたかも三好の…、というよりは松永久秀本人の威力に屈服したかのように演出する久秀の技量には、軍監立花又右衛門はもとより、側近として、常に彼の側に侍っている林若狭守、楠木正虎らですら苦笑いせずにはいられなかった。

十一月十五日。

機は熟したと、松永久秀は、総勢八千にまで膨れ上がった軍勢を従え、奈良を発し、筒井城を目指した。

十七日、松永勢は筒井城を取り囲んだ。柳生家蔵、十市遠忠ら有力土豪の兵も加え、包囲軍の総勢は一万余まで拡大した。

「筒井を潰せば、大和はおのずから我らの掌に転がり込んでこよう。くく。そして、筒井如きに遅れを取る松永久秀ではないのだ」

と、勝ち誇ったような顔をして、高笑いする久秀に、誰も何も言えなかった。

「それにしても、御屋形様は実に御運の強きお方ぞ。春には、父君の仇であった木沢長政が滅び、夏には、待望の若君様が御誕生になった。そして冬には、大和一国が御屋形様のものとなるのだ。大和までも御家の支配下に入れれば、もはや細川晴元も、三好宗三も敵ではあるまい」

久秀とすれば、大和掌握の暁には、自分こそが大和の国主になれるものだとしている。貧しき家に生まれ、幼くして親を失った彼は、それこそ泥に塗れ、雑草で飢えをしのぐという極貧の環境下に育ってきた。そんな自分が、後一步で国持大名になれるかもしれないのだから、戦国という時代は、実に不思議なものだった。

世の中を見渡しても、案外、自分と似たような者は少なくない。下克上、などと表現されているが、要するにこれまでの家柄、血筋重視が、実力重視に変化したただけのことだと、久秀は思っていた。そして、それこそが正しい姿だと思っている。久秀は、身分低き生

まれなだけに、主君範長以外の高貴な人が、大嫌いだつた。

彼と似たような立場の者として、具体的例をあげるなら、関東に覇を唱えている北条氏も、初代早雲は出自にいろいろ説はあるが、平時であれば、到底大名になどなれない立場であつたことは確かだつた。また、最近主君土岐氏を追放して、美濃の国主の座を奪い取つた斎藤利政（後の斎藤道三）も、やはり出自にいろいろ説はあるが、北条早雲よりも遥かに低い身分から這い上がってきた苦勞人であることだけは動かし難き事実だつた。

無論、北条、斎藤だけではない。ただ、この二者だけは、その他多くの下克上と比べても、極めて特異な存在だつた。例えどのような身分の者であれ、実力さえあれば大名にまでなれるのだということとを、その身をもって表現した彼らは、下級階層の人たちにとって、一種の希望の星だつた。

そして十二月になつた。

筒井城は、依然として頑強な籠城を決め込み、なかなか落ちそうもなかつた。総攻撃を仕掛けても、松永勢に無用な犠牲が増えるだけと分かつた時点で、久秀はその方針を徹底した兵糧攻めに切り替えていた。とにかく筒井順昭が音を上げ、降伏してくるまでは、いつまでも包囲を続けるつもりでいたのである。

そして、そんなある日、厳密には十二月十五日のことであつた。

「申し上げます」

と、慌しく駆け込んできた伝令に、悠々と城攻めを続けていた松永軍諸将は驚いた。

「い、一昨日、さ、堺にて、ほ、細川氏綱が拳兵。討伐に出向いた細川元常様（和泉守護職）の被官日根野景盛殿を撃破したとのことでございます」

「ほ、細川氏綱？」

久秀ならぬ、誰もがその名に驚きを隠せなかつた。

細川氏綱といえば、かつて細川晴国の乱において、晴国方の副将とも評されていた男で、今は亡き細川高国の養子でもある。だが、ここずっと音沙汰なく、死亡説すらも公然と噂されていたほど、今の畿内政局においては、完全な過去の人とされていた。

そんな氏綱が、今になって挙兵したという。これを驚くなど言うほうが無理な相談であった。

そして、さらに数日が立つと、氏綱関連の続報が、相次いで松永軍の下にもたらされてきた。

「氏綱の勢威は殊の外大きく、既に和泉国の過半が奴の支配下に入りました。どうも、氏綱の背後には、遊佐河内守がいるようで、畠山方が、密かに軍需物資などを氏綱方に横流ししているようです」という林若狭守に、

「遊佐河内守だと？」

久秀以下松永軍諸将は、どれも啞然としたように、呆然と立ち尽くしていた。

そうこうして、年も明けた。

天文十二年（一五四三年）は一月。

筒井城は相変わらず落ちない。年末の細川氏綱の挙兵に始まるきな臭い雰囲気を受け、彼らの戦意は、日に日に高まっているようにも見えた。

「やはり、氏綱の背後には畠山がおりますな。畠山植長公が守護を勤めている紀伊国の根来寺宗徒が、氏綱方に同心し、和泉に兵を動かしました。畠山家は無関係を装っておりますが、根来寺の背後に畠山…、もとい家宰の遊佐河内守長教がいることは間違いありません」

そんな報告に、久秀の顔は、日に日に苦渋に歪んでいった。

実際、氏綱挙兵以後、彼の戦略は大きく破綻しつつあった。これまで松永方に与力していた大和国人衆の間には、遊佐長教との敵対

を恐れ、彼と昵懇の間柄にある筒井氏攻めを躊躇するようになった。遊佐河内が後ろで手引きする細川氏綱の勢威が拡大するにつれ、彼らの態度は、素っ気無くなった。

そして、一月十五日。

越水城の三好範長より急使として、立花小太郎がやってきた。又右衛門の嫡子、雅の方の兄として、範長の小姓衆に列しているこの青年は、

「情勢が変わりましたゆえ、松永様には、速やかに兵を引くようにとの、御屋形様の御命令にございます」

と、松永久秀を前にしても、決して臆することなく、堂々と言うべきことを淡々と言った。

「兵を引けと？」

全権を委任されている立場の久秀からすると、それは心外であったが、もとよりそれしかないと思いついて、異論などあるうはずもなかった。

三好範長は、ここ最近見せたことのなかった仏頂面を浮かべていた。

情勢は深刻の一途を辿っている。高国の残党勢力に擁立されている氏綱の勢力は、想定以上に強大化し、もはやただの野火では済まされなくなっていた。それこそ、細川晴元政権を大いに揺るがす癌的な存在として、早急な処置が必要不可欠であったが、肝心の晴元は、氏綱の勢力を侮り、本格的な討伐に前向きではなかった。

「氏綱如きに、余の総力を注いだことが天下にしれてみる。天下の諸侯に、余が笑われる。全力を注がねば、氏綱如きも倒せないのかと、余が侮られる。それが分からんか！」

と言つて、「気にするな」と公言している晴元の考え方が、範長にはどうしても分からなかった。

細川氏綱の乱を、これまでの高国党の叛乱と同一に考えると、痛い目を見ることになりかねなかった。何より、遊佐長教が水面下で積極的に支援している以上、氏綱方の地盤は磐石と見たほうがいい。如何に衰えたとはいえ、畠山家は三管領家の一角を占めていたほどの名門守護家なのである。その上、依然として根強い存在感を誇る細川高国残党勢力が氏綱方の中核を占めているとなると、一瞬の油断も命取りとなりかねないのだ。その辺りを、細川晴元は全く理解していないのだった。今も昔も、彼がこんな調子だから、晴元政権は強勢を誇りつつも、決して安定しないのだと、内心に毒づく範長であった。

「遊佐河内守は、案外木沢左京よりも、厄介な陰謀家かもしれませぬな」

芥川山城下の三好屋敷に戻った範長に、安宅撰津守冬康は苦笑い

しながら呟いた。

「確かに、木沢などより遙かに厄介な相手だ。…氏綱方を背後で支援しているのは、遊佐河内に間違いないのだが、証拠がないゆえ、問い詰めてものらりくらりと交わされてしまう」

そんな兄の愚痴に、冬康はにこりと笑う。

冬康は、兄と共に氏綱討伐を細川晴元に進言すべく、わざわざ淡路より芥川山に参上したのである。氏綱方の活動を制するには、冬康配下の淡路水軍が必要になるだろうからと、瀬戸内海を冬康の戒厳令下に置いてよいのかどうか、その許可を晴元に求めていたのだが、彼は例によってあの調子なので、手持ち無沙汰のまま、範長の屋敷に立ち寄ったというわけだった。

「ともかく、神太郎。お主はすぐ淡路に戻り、瀬戸内海を完全封鎖しろ。とりあえず、制海権は我らの手の内に入れておかねばならぬからな」

と、範長が言えば、

「よろしいのですか、管領様の許可もなく…」

と、冬康は顔を曇らせた。

「よい。俺が許可を出す。…これ以上、氏綱方をのさばらせておいては、やがては晴元殿が困ることになる」

そんな範長の言葉に、ようやく冬康は納得したようであった。外見は、すっかり豪快な海の男になったようでも、内面は、昔と全く変わらぬ律儀な青年だった。その愚直な律儀さに呆れつつも、兄として、三好宗家当主として、範長ははつきりとした口調で、

「制海権は何としても死守するのだ」

と、命じた。ならば冬康も、それに従うのみである。

安宅摂津守冬康が淡路に去ると、範長もまた、硬直化した細川政権の覇府から、逃げるように越水城へと戻っていった。

既に、冬は終わりを告げて、桜色緋く四月や五月を経て、ついに

は六月になった。

けれど、越水をはじめ、今の畿内に、春を堪能していられるような余裕など、どこにもなかった。

ただ、吉事もないわけではなかった。

これは二月ごろのことだが、範長の側室として、その寵愛を一身に集めていた雅の方が、ついに、ようやく懐妊したのである。無論、彼女が男子を産んでも、既に正室との間に嫡子を設けている範長の後継者となりうる可能性は極端に低い。だが、それでも吉事は吉事である。特に範長などは、愛妾の懐妊を何より喜び、

「これより一週間、城下の税は悉く免除してやる。皆、大いに喜び、大いに騒げ！」

などと、浮かれあがっていたものだった。

そして、六月になり、まだ顕著というわけではないが、徐々に御腹を大きくする雅の方を見ては、範長は新たな命の誕生に、心をときめかせた。

「氏綱党は、榎尾寺（まきののお）（現大阪府和泉市）に本拠地を設け、兵を集めているとのことにごさいます」

という三好康長の言葉に、

「そうか」

とだけ頷く範長であった。

「おそらく、奴の狙いは堺でしょうな」

と、孫四郎長逸は言った。

「堺をとられると、厄介だな」

康長は、そう言って唸る。

堺は、天下に名だたる経済都市であった。莫大な富が、この町を経由して天下に流れていく。この町を支配している商人たちは、その膨大な財力を背景に、事実上幕府や大名といった公儀の権力から独立し、いわば一種の都市国家であり、かつ武装中立都市となっていた。後にはその特異な政治形態から、イエズス会の宣教師ガスパル・ヴィレラやルイス・フロイスが「東洋のベニスである」と評し

たほどで、その知名度は、単に日本国内に留まらず、遙か欧州にまで轟いていた。

そういう町だけに、敵に取られるのは実に痛かった。何より、諸大名はこの町を経由して、様々な財物を『金』に変えているのである。農民から徴収する年貢も、それだけならただの『米』に過ぎないが、堺衆に売却することで、『金』になる。また、その『金』で、様々なものを仕入れることもできるわけで、堺の町は、特に畿内の諸侯にとっては、生命線ともいえる大事な存在となっていた。

細川氏綱が堺の間近に本拠を設けたのは、晴元方にしてみると、己が喉もとに刀を突きつけられたようなもので、どうにも居心地が悪かった。

「康長様が仰せの通り、堺だけは何としても死守せねばなりません。無論、そのために我らとて兵を差し向けますが、それだけでは足りませぬ。堺を守るには、堺に住まう者たちに守らせるのが、一番手っ取り早い方策かと思われませぬ」

というのは、松永久秀で、時折範長が頷いているところを見ると、それが主君公認の考えであることは、一目瞭然だった。

「即ち、堺の会合衆に脅しをかけます。もしも、氏綱党に堺が隨身するのであれば、堺衆の海外交易は一切認めぬ、と」

「脅しだと？　だが、これまでどんな大名家の脅しにも屈しなかった堺衆が、我らの脅しに応じるかな？」

長逸が不信感を露にすると、久秀はにやりと不敵に笑った。

「我らには摂津守様という最大のお味方がおりますれば、堺衆も我らの脅しに平然とはしていられますまい」

「摂津守様だと？」

長逸は、この松永久秀という中年男が、余り好きではない。だから、自然とその口調も刺々しいものになってしまっただが、久秀は余り気にしなかった。

「摂津守様は淡路水軍を率いておられます。淡路水軍が瀬戸内海を完全封鎖すれば、貿易で金を稼いでいる堺衆にとっては致命傷とな



りましょう。…無論、そんなことをして堺衆が衰退するようなことになっては、回りまわって我らの首を絞めることにもなりかねませぬので、あくまで脅しの策に過ぎませぬが、脅しとしては、これ以上ない脅しと思われませんが」

「なるほど」

久秀に対し、余りわだかまりのない康長が、パンと手を叩いて賛同してしまつと、基本的に異論のない長逸に、反論の余地はなくなつてしまった。

「ともかく、どの道、神太郎には海を封鎖するよう命じてある。完全封鎖が完成すれば、堺衆とて、こちらが脅しをかけるまでもなく、我らとの敵対を恐れよう。…後は、阿波の豊前（豊前守之康）や、讃岐の又四郎（十河左衛門尉一存）らに、いざというときのため、兵を集めるよう命じておかねばなるまいな。それと、勝瑞の持隆公にも助力を仰げるように、使者を出しておこう」

と、範長が言えば、

「丹波の内藤殿、波多野殿にも使者を出しましょう。内藤殿は、松永殿にお任せすればよろしいかな」

などと、精一杯の厭味を込めて、長逸は久秀のほうを見ずに、そんなことを言つた。

七月に入った。

槇尾寺にある氏綱は、戦意に燃え上がっていた。

「いよいよですな」

と、弟の藤賢が言えば、氏綱はニタニタと笑いつつ、

「うむ」

と、厳かに頷いた。

晴国が滅びたのは、天文五年（一五三六年）八月のことであったから、今より実に七年も前のことだった。即ち、氏綱たちは七年間もの間、逼塞を余儀なくされていたわけで、七年ぶりに娑婆しやばに出た

彼らの興奮は、尋常ならざるものがあつた。

「それにしても、遊佐殿には感謝せねばなりませんな」

藤賢はふとそんな風に言つて、にっこりと微笑んだ。

「たわけ！ …河内殿が我らの後援者たることは、最高機密なのだぞ。そんな風に公言して、もし誰かに聞かれてみる。厄介なことになるだろう」

そんな風に咎める氏綱に、「あ！」と、藤賢は慌てて口を嚙み、

「ははは」と苦笑いした。

「ともかく、堺を攻め取つた暁には、一挙に都に攻め上り、兄上が高国公の後を引き継ぐ形で、京兆家（細川宗家）の家督となられるわけですね」

「無論だ」

氏綱ははつきりと頷くと、その全身に漲る大いなる自信を見せびらかすように、寺の庭先に集まる兵たちを巡閲に出た。

七月二十五日。

細川氏綱軍総勢七千は、大挙して堺に迫ると、早速、堺を守る細川晴元方との間で、熾烈な攻防戦が開始された。

迫る氏綱軍に対し、晴元軍を率いるのは、晴元の有力被官の一人である松浦興信という男であつた。また、松浦の指揮下に、三好範長の派した岩成主税助友通率いる援軍五百騎の姿もあつた。

晴元軍の数は、岩成勢を合わせても四千足らずに過ぎなかつたが、彼らが総大将たる松浦の指揮下に、一糸乱れず頑強に抵抗したのに対し、寄せ集めの烏合の衆に過ぎない氏綱勢は、当初こそ数を恃みに優勢だつたものの、次第に浮き足立ち、統率が乱れるなどの、潜在的な弱点が表面化すると、戦いは想定外の晴元方勝利の下に決着した。

「案外、あつけないものだな」

などと、自分たちに背を向けて撤退する敵軍の後姿を眺めながら、

岩成主税助は、そんな風に呟いていた。

「ま、所詮寄せ集めの雑軍。我らの敵ではありませんまいて」

副将として岩成主税助の陣に加わる三好政康は、そう言っただけで、そうに笑っていた。今年十五歳を迎えた三好一門の若き将星は、今日の戦いがその記念すべき初陣であったりした。

細川晴元軍は勝利した。とはいえ、晴元方が圧勝したというわけでも、氏綱方が完敗したというわけでもなかった。形勢不利により、ひとまず堺奪取を諦めたというだけであり、彼の戦力は依然として維持されている。いわば優勢勝ち、判定勝ちといったほうがよいのかもしれない。ただ、このところ氏綱方の積極的な攻勢により、圧倒されっぱなしであった晴元方にとっては、こんな勝利でも、かけがえのない貴重なものには違いなかった。

【雪辱編】第049章 氏綱敗走

堺の戦いに敗れた細川氏綱だが、その高ぶる戦意に、衰えは一切見えなかった。

とはいえ、戦いを続けるにも、先立つものは必要である。目下、何より必要なのは軍資金と、兵糧であった。

けれど、堺衆は氏綱の借財要求を却下し、晴元方、特にその中核を担っている三好範長への従属姿勢を強めていた。ならばと、氏綱は本願寺に兵糧、金銭を融通してもらおうべく、石山御坊に使者を派したが、こちらも三好家に気兼ねしたのか、八月三日、法主証如の名を以って、

「我らの金、米は、皆、門徒たちの共有財産である。それを寄越せとは、実に迷惑至極である」と、明確に拒否してきた。

氏綱の戦意が衰えることはなかったが、軍資金、兵糧の不足が目に見えて深刻化してくると、氏綱軍は見る見る弱体化していった。やむなく畠山家へ再度使者を出し、支援してくれるよう要請したが、畠山方と氏綱方の繋がりを疑っている範長や、三好宗三の厳しい監視の目が光る中では、大っぴらな支援は非常に難しかった。

おりしも、季節は八月である。

氏綱方は、夏の暑さにやられたか、すっかり干乾びていた。金もなく、兵糧もないのでは、どうしようもなかった。兵は逃げ、残った者の士気も大幅に減退している。

「…もはや、賭けに出るより他に仕方がありませんねな」

と、藤賢が言つと、氏綱も静かに頷いた。

「我らの力の程を満天下に示してやれば、金など、我らが望まずとも、嫌というほど手に入ろう。…何としても、我らの武威を天下に

見せ付けてやらねばならぬ」

氏綱はそんな風に力強く叫ぶと、早速全軍に対し、出陣準備にとりかかるよう命じた。

一方、八月十六日。

三好筑前守範長は、総勢一万の大軍を従えて、堺に上陸していた。先の堺の戦いをきっかけに、ようやく氏綱討伐に本腰を入れ始めた細川晴元直々の命令によるものだった。

堺衆は、慌しく範長の下にやってきて、その武威を称えつつ、軍資金として、莫大な銭を競い合うように献金した。範長の将来性を認めた彼らの、浅ましいまでの処世術に、三好筑前守範長は、すっかり呆れていた。

二十一日。

範長は、軍議を開いた。

集まったのは、総大将たる範長を筆頭に、副将の三好康長、安宅冬康以下、三好長逸、三好政成、三好政康ら有力な三好一門衆と、岩成友通、篠原自遁、波多野秀忠、松永久秀、内藤長頼ら主だった三好家諸将が中核を占めていた。そのほか、晴元配下の日根野景盛や、松浦興信の姿もあった。

「まずは細川氏綱の完全な討滅が急務である。だが、槇尾寺には、依然として数千の兵が、氏綱に従ったままである。報告によれば、紀伊の根来寺宗徒たちが、本格的に氏綱支援の兵を挙げるつもりであるという。こうなると、我らとしても不利は否めぬ」

総大将として、範長は居並ぶ諸将をじろりと見回した。そのほとんどを占める家臣たちは、

「先制攻撃あるのみ！」

と、頼もしくも血気盛んな言に終始していた。

「日根野殿、松浦殿のお考えは如何に？」

範長は、そう言って評定の片隅に放置されていた二人の寄騎部将

に目をやった。

「筑前殿、此度の氏綱討伐。出来れば、我らにお任せ願いたい」  
すると、日根野景盛は、叫ぶように声高に宣言した。

「日根野殿に？」

範長はニタニタと笑っている。一方、三好家の諸将にとっては気に入らないようで、

「氏綱討伐は、それがしにお任せあれ！」

などと、必死な様子で自らをアピールしていた。けれど、範長はそんな家臣たちは歯牙にもかけず、ただじつと、睨み付けるように日根野景盛を見つめている。

「昨年末の失態、見事に挽回して見せます！」

と、必死の形相で主張する彼の根気に、ついに範長も折れた。だから、

「日根野殿には榎尾寺の氏綱征伐を任せる。副将として松浦殿、軍監として、内藤備前守を付けよう。これでよいか？」

と言って、改めて日根野景盛を見た。

「有り難き幸せにござりまする」

日根野は恭しく頭を下げると、嬉しそうな顔をして、早速出陣準備にとりかかるべく、与力として付けられた部将たちと共に己が陣へと戻っていった。

日根野勢は総勢六千である。

八月二十三日に堺を発し、二十六日には榎尾寺に迫った。

日根野景盛は逸りに逸っていた。何と言っても、昨年末の氏綱蜂起の折、彼が見事氏綱を退治してさえいれば、こんなことにはならなかったのである。そう思うと、武将として、やるせない気持ちになるのだった。

「この辺りは、既に氏綱の勢力下です。御用心なさりませ」

と、軍監として彼の下に従う内藤備前守長頼は、そんな大将を落

ち着かせようと、何度も進言を重ねていた。

「ふん。何を用心するのだ。この辺り、和泉国は皆、我らの庭のよ  
うなものなのだぞ」

和泉守護職細川元常の重臣たる日根野景盛は、不遜なまでの自信  
と血気を漲らせながら、内藤備前の進言など、一切耳に貸さなかつ  
た。

「されど、氏綱勢を侮れば、痛い目を見ることは日根野殿とてご承  
知のはず。それでなくとも、氏綱の背後には畠山や遊佐が控えてい  
ると専らの噂。油断は禁物と、お分かりになりませぬか？」

内藤備前にしてみると、完全に敵を侮り、勝利を信じ込んで、防  
御や斥候による調査を疎かにしている日根野は、愚かの極みとしか  
思えなかった。無論、氏綱は、今や三好方による強烈な兵糧攻めに  
より、干上がり、弱体化している。だが、だからといって油断して  
よい理屈にはならないのである。窮鼠猫を噛むの例え通り、切羽詰  
った氏綱が、どういう行動に出てくるかは、誰にも分からなかった。  
「五月蠅い！ 如何に三好筑前殿の軍監といえど、筑前殿より総大  
将を仰せ付かったこのわしに逆らうは、軍規違反であるぞ！」

そんな風に、日根野はきっぱりと言い切って、内藤備前の反論を  
塞いでしまった。

だから、備前守長頼も黙り込んだ。彼の口調の中に、出自の悪い  
長頼に対する侮蔑の感情が露骨に表れていることを敏感に察すると、  
「ならばご勝手になされよ」  
と、思い切り吐き捨て、以後は彼の方策に対し、何の関与もしな  
かった。ばかりか、自らの陣中に戻って、道連れは御免と、養父国  
貞より預かってきた内藤勢と共に日根野景盛の軍事指揮権から勝手に  
独立してしまった。

こんな調子であるし、日根野景盛は相変わらず、戦う前から勝つ  
たつもりでいるので、氏綱にしてみると、実にやりやすい相手だっ

た。

八月二十九日。

細川氏綱は、五千の手勢を三つに分け、うちの一つ、主力部隊を自らが率いて日根野勢に突進した。かくて始まった戦いは、当初こそ数に勝る日根野勢が優位であったが、しばらくして、日根野勢の左右両翼に回り込んでいた氏綱方の伏兵二部隊が、それぞれ左右より攻撃を加えたので、意表を突かれた日根野勢は、無様ともいえる完敗を喫してしまった。

日根野景盛は命辛々、旗本たちの奮戦により九死に一生を得たというほどの有様で、一人激しき戦場より逃げ出してきた。それでも氏綱方による追撃は凄まじかったが、この追撃は、待ち構えていた内藤備前守長頼のために失敗に終わった。

内藤勢は一糸乱れぬ隊列を守りつつ、勢いに乗って陣形を乱しつつ攻撃してくる氏綱勢に猛然と反撃を加え、手痛い打撃を与えた。結局、日根野景盛は、長頼の巧みな戦手腕のために命拾いしたようなもので、内藤の兵に助けられつつ、長頼の本陣にやってきたときは、随分ばつの悪そうな顔をして、

「かたじけない」

と、言った。

「負けたのか」

結果報告のため、堺の範長の下に参上した二人に対し、彼は素っ気無く、そう言った。

「申し訳ござりませぬ」

内藤長頼が深々と頭を下げると、  
「気にするな」

と、範長はにっこりと微笑みながら、そう言った。

「ま、追撃に出た氏綱に一矢報いた備前は見事である。とりあえず、疲れたであろう。今日は下がって、休め。ただ、日根野殿はいただ



けんな。氏綱を侮り、無様に敗北を喫するとは、将としての技量に、少々問題ありなのでは……」

ニタニタと不敵な笑みを漏らしつつ、床机の上にあつて、傷心の日根野景盛をじろりと見下ろす範長であつた。

「無論、その方を大将にして送り出した余が、一番問題であることは重々承知している。だが、軍監の諫言には一切耳を貸さず、防備すら怠つていたとは、いったい何を考えていたのだ？ そなたは、元常様の家来ゆえ、余にどうこうする権利はないが、もしも余の家臣であれば、即刻切腹を申し渡しているところだぞ」

「……」

「そのこと、理解したなら、もうこれ以上は言わぬ。そなたも下がつて休め」

範長はそう言つて、悔しそうにわなわなと肩を震わせている日根野を体よく本陣より追い払つた。

以後、氏綱方の活動は、再度活発化してきた。

兵力を増強し、さらには紀伊の根来寺宗徒を経由する形で、畠山家より金銭、兵糧を供給された氏綱方の戦意は大いに高まり、その総兵力は、既に一万に達する勢いとなつた。

氏綱の勢威拡大に伴い、範長としても容易く手を出すわけにはいかず、槇尾寺の氏綱と堺の範長の間で、しばらくの間、激しき睨み合いが続いた。

そして一ヶ月。

先に動いたのは、氏綱だつた。

彼は、配下の玉井某という男を先鋒部隊の大将とし、出陣させた。当然、この急報を受けた範長としても、黙つて見過ごすわけにはいかなかった。そこで、日根野景盛、松浦興信を大将とする軍を派し、迎撃に向かわせたのである。

両軍は菱木（現大阪府堺市）にて激突したが、先の敗戦に懲りて

いる日根野景盛は慎重に慎重を期して戦ったので、十月一日、ついに晴元方の勝利に終わり、玉井勢は敗走した。

だが、玉井勢も壊滅したわけではなかった。十月十二日、彼らは再度戦力を盛り返すと、横山（現在の和泉市）で、再び日根野以下晴元方と決戦した。ただ、既に兵力を大きく減らし、かつ寄せ集めとなっていた玉井勢に勝機などあるはずもなく、この戦いは、案外あっけなく、晴元方の圧勝に終わった。

そして十月十九日。

相次ぐ敗報を受け、戦意喪失著しかった氏綱方は、もはや戦いどころではなくなっていた。実際、三好範長自ら堺を出、氏綱討伐に乗り出すと、氏綱勢の士気は見る見る落ちていった。

「これでは戦いになりませぬぞ」

という藤賢の言葉通り、喜連杭全（現大阪市東住吉区）にて範長軍と決戦するや、あつという間に崩れ、見る影なく敗走した。

細川氏綱、藤賢兄弟は慌てふためいて和泉方面へ敗走したが、先手を打った範長方が氏綱の支配地域の要衝を電撃的に攻め落としたので、氏綱に逃げ込める場所はなくなっていた。

「…再起を期すより他に仕方ありませんぞ」

と、藤賢が言うと、

「また忍従しなければならんのか」

と、恨めしげに、槇尾寺を占拠する三好勢を睨みつけながら、貧農に身をやつした氏綱は、ハアと大きな溜息を吐いた。

「ま、されど、今回はかつての如く七年間などと長い年月はかかりませぬ。此度の一件で、兄上もお分りかと存じますが、晴元の支配も、さして長続きはいたしませんぞ」

「…」

「再び、兄上が必要となる時がやってきましょう。せいぜい我ら兄弟、そのときまで力を蓄えておくことといたしましょう」

そんな風にあっけらかんと言つてのける藤賢に、氏綱もまた、  
「そうだな」

と、静かに頷いた。

【雪辱編】第050章 範長の寵臣

十一月二日。

三好範長は、氏綱討伐の結果を芥川山の晴元に報告した後、ようやく居城越水へ帰還した。

ここずっと戦いの連続だった彼にとっては、久方ぶりの居城である。彼にとって気がかりなのは、妊娠中の雅の方のことであり、帰城するなり、一ヶ月ほど前に産まれたという姫に会うべく、西の丸御殿へ急いでいた。

「御元気な姫君様にございますよ」

と、お福が嬉しそうな顔をして言うと、

「左様か！」

範長もまた、興奮を隠し切れぬ面持ちで、そこにすやすやと眠っている可愛い、二人目のわが子を見つめた。

「又右衛門、お主にとっては孫が出来たわけだ。嬉しかろうな」

越水城表御殿の一角で、範長は眼前に平伏す側近の立花又右衛門を冷やかしていた。

「ははは、初孫でございますから、嬉しゅうございます」

又右衛門はそんな風に言っつて、にこりと笑う。その嬉しそうな笑顔に、範長も思わず楽しくなった。

「姫だぞ、姫。行く末は、有力な大名家の奥方様となる身の上だ。

お主は、どう思う？」

「どうと仰せられましても、まだ生まれたばかりの孫にございますから、結婚などと、なかなか想像できぬものです」

「ははは、左様か」

範長は豪快に高笑いし、又右衛門は恥ずかしそうに苦笑いした。

何と言っても、今回誕生した雅の方の娘は、三好筑前守範長の堂

々たる姫君様なのである。又右衛門は不思議な気がした。元来、立花家などというものは、先祖代々三好家に仕えてきたとはいっても、その身分資格は取るに足りない下級武士に過ぎなかった。それが、娘お雅が範長に見初められ、以後急速に側近として頭角を現したわけだが、ここ数年の日々は、ずつとうだつの上がらぬ下級武士生活を送ってきた又右衛門にとっては、まさに夢の如き時間であった。そして、今や、又右衛門だけでなく、嫡子の小太郎も、範長の寵愛を一身に受ける御小姓として、国政の枢機に携わるようになってい

る。  
「それはそうと、又右衛門。そなたに一つ頼みたいことがあるのだが、よいかな？」

ふと、真剣そのものの顔をして、範長は又右衛門の温和な顔を見つめた。

「今年、ようやく一歳となったわが子千熊丸だが、まだ傳役など具體的なことを一切決めてこなかった」

「…はい」

「そこで、そなたに傳役として、千熊を指導してもらいたいと思うのだが、どうかかな？」

「も、傳役ですか？ こ、この私が、わ、若君様の？」

驚きを隠しきれぬといった様子で、素っ頓狂な声を張り上げる又右衛門に、範長は平然と、ニコニコと笑っていた。

「で、ですが、私の出自は余りに低く、と、とても若君様の傳役なる大役は…」

と、恐縮そうに頭を下げる彼に、

「気にするな」

と、範長は言った。

「身分低きことは、断る理由にはならんぞ。というより、余としては、そなたの出自の低さというものも、一つの能力として、買っているつもりなのだ」

「…」

「わが子というのは、やはり何より可愛い。だが、そんなわが子だからこそ、いろいろな経験を積ませてやりたいと思うのも、親心だとは思わんか。…もし、千熊に身分高き傳役など付けてみる。身分高い家に生まれ、身分ある者に育てられたのでは、高い身分しか知らぬ狭量な人間に育ってしまうだろう。わが三好家は、公家になりたいのではない。いずれは天下の民を治める、この国の王になりたいのだ。民の大半は、身分低き者だろう。民のことを知らぬ王に、いったい何ができる。余の後を継ぐ嫡子なれば、様々な環境に身を置かせて、いろいろと学ばせたい。いつそ、許されるなら、しばらくの間、城から追い出して、下々のところで生活させてもよいと思っているぐらいなのだ」

などと範長は言うのである。正論だと、又右衛門も思う。ただ、範長ほどの男、それこそ天下に大手をかけんとしているような実力者「高貴なお方の口から、そんな言葉が聞けるとは夢にも思っていなかった又右衛門は、ただ呆然と、驚いていた。

「ま、お主を傳役に回した後の、余の相談相手には、そなたの息子の小太郎に任せる。そなたは安心して、千熊の養育に力を注いでくれ。それと、千熊の傳役ともあるう者が、微禄では、他に示しがつかぬ。ゆえに、立花家に撰津のうちより五百石を加増してやるう」

「は、はあ」

有り難い沙汰ではあるが、全く夢のような気がして、又右衛門は卒倒しそうになった。ただのうだつの上がない足軽から、一躍五百石取りの、三好家世子傳役に栄達したのだ。息子は引き続き主君の側近として仕え、娘は、主君の愛妾として、その寵愛を一身に受けている。

幸せすぎて、いずれ災いなど一挙に降りかからねばよいものだと、少しばかり恐怖しつつ、又右衛門は思いもよらぬ幸福なひと時を心の底から味わうことにした。

それから、再び月日はめまぐるしく流れていき、時は、天文十三年（一五四四年）六月になった。

細川氏綱党の乱が終息して、以来半年以上の月日が流れたが、世の中は不気味なほど平和そのものだった。範長も摂津越水城にあって内政に励んでいるし、細川晴元も、ここ最近では政権の基盤固めに必死といった様子であった。

世の中もせつかく平和になったので、三好範長は、亡父三好筑前守元長の十三回忌を盛大に執り行うことにした。これまでは、戦をはじめいろいろと忙しなき日々が続く、三好家を挙げて法要を行うということは難しい状態であったが、今年はそのような問題もなく、また三好家にも盛大な法要を行うだけの財政的余力が身につけてきたこともあり、範長はこの際、三好の力を満天下に示すべく、空前絶後の法要を催すことにしたのだった。

そして、その一切を取り仕切ったのは、立花小太郎であった。御小姓衆の一人から、法要奉行的な立場を任せられると、そのために必要な資金を調達すべく、堺に出向いては、豪商たちと折衝を重ね、最終的には潤沢な資金を持っている本願寺にも資金提供を要請すべく、石山御坊にまで足を運んだ。

「法主様におかれましては、是非、此度の法要のための費用をお貸しいただきたいのです」

きりつとした、如何にも有能な青年といった雰囲気から醸し出している小太郎青年は、三好家の特使として申し分ない迫力で法主たる証如に迫っていた。

証如は、筑前守範長の代官としてやってきた青年を、じろりと見下ろしている。例えどんな相手であろうと、決して臆することはない。彼の度胸に、若き高僧は思わず苦笑いした。お互い、知らぬ仲ではない。去年、証如に初めての男子（後の本願寺十一世法主顕如「本願寺光佐」）が産まれたとき、その祝いとして、無数の財物を持って石山御坊にやってきたのが、この立花小太郎であった。無論、その折の小太郎の立場は副使に過ぎず、正使は三好康長が勤めていたが、

とにかく、その折からの知り合いであった。

「君も変わらんね」

そんな風に証如が言うと、

「僅か一年やそこらでは、人間容易く変われませぬ」

小太郎は平然とした顔で、そう返した。

「ま、だろうがな。…ま、よかろう。銭のことなら、わしに異存はない。いくらでも用立ててやろう。他ならぬ三好筑前殿が頼みとあらば、断るわけにもいくまいしな。わが倅が生まれた折の借りもあることだし」

観念したように、にやりと不敵な笑みを漏らす法主は、ゆっくりと立ち上がり、下座に平伏す小太郎の下へ敵かに歩み寄った。

「ま、くれぐれも筑前殿よろしく頼む。…ま、それにしても、かつて元長殿を葬り去った張本人である我らが、元長殿の法要の支度金を出すというのも不思議なものだが、ま、仕方あるまい。今をときめく筑前殿に、親の仇と恨まれてはかなわんからな」

などと豪快に高笑いする彼に、立花小太郎は思わず苦笑いした。

石山御坊を去った後も、立花小太郎は大いに忙しかった。

まず法要が催されることになっている和泉国は顕本寺に赴き、自らその下準備を取り仕切った。三好の威信を注いで行われる法要だから、ほんの些細な落ち度とて許されないのである。だから、その責任者となっている小太郎は、それこそ死に物狂いだった。

法要担当の奉行に任命されて以後の立花小太郎は、尋常ならざる多忙の中にあつた。

ある時は、天下に名高き高僧を招くべく、法華の有力な寺院を駆け巡った。またある時は、各地の諸侯の下に精力的に赴き、あるいは文を飛ばしたりして、法要への参列を求めた。それらしい贅沢な調度品を調達すべく、堺、京都をはじめ、あちこちを飛び回ったりもした。それこそ、体が二つ三つあっても足りるものではないほど



の多忙さであったが、これは主君より与えられた崇高な使命なのである。何としても成し遂げて見せると、若き彼は大いに燃え上がっていた。

「六月二十日まで、後数日。余り残された時間はありませぬな」

と、小太郎の補佐役となっている和田新五郎という男は、苦りきった顔をして、溜息混じりにぼやいていた。

「ふん。後、三日もあれば全て滞りなく終わらせてみせるわい」

小太郎はどこまでも大いに強がって見せたが、寝る暇なき忙しさの反動か、ここ最近の彼の顔色は誰の目にも明らかかなほどに悪かった。それでも、「大丈夫だ」「平気だ」と言つて聞かない彼は、ついに力尽きてその場に卒倒した。

「ほら、言わんことではありませぬ。立花様は、ひとまずお休みになられませ。医者も、過労ゆえ、一日も休めば大丈夫だろうと申しっておりますぞ」

和田はそんな風に言つて、クスクスと笑った。

「たわけ！ 今日にも都に上つて、公方様が参列に応じるよう、幕府の役人どもに根回しせねばならんだぞ。寝ていられる暇などあるものか」

と言つて、小太郎は精一杯の力を振り絞つて起き上がった。その顔は、げっそりと痩せこけて、おぞましいほどに蒼ざめていた。範長に愛された端正な顔立ちの面影などどこにもなく、骸骨の如く成り果てた形相に、和田新五郎は苦笑いせずにはいられなかった。

「幕府への根回しならば、この和田新五郎にお任せあれ」

「……」

「それでも、それがしは幕府には顔の広い男ですぞ」

などと、誇らしげに胸を張る和田に、小太郎は「ふん」と、呆れたように鼻で笑った。

「ま、構わぬ。だが、余り女子は利用するなよ。巷では、『女たらし』などと評されていい気になっているそうだが、女子のことで問題になったことも、一度や二度ではないだろう」

「ははは。ご心配なく。『女たらし』の力は、いざというときのみに使うことにいたします。基本は正攻法。…何の。幕府の役人を口説き落とすことぐらい、この新五郎にかかれれば、赤子の手をひねるより容易いものでござる」

「…ならいいが」

その巧みな弁舌と、天下無双の美男子と評されるほどの端正な顔立ちを武器に、下級武士から、一躍範長の小姓衆に列するまでになった和田は、自分の能力に絶対的な自信を持っていた。小太郎にとっては、同じ小姓仲間で、弟分といった存在だが、幾たび彼の女子を巡る騒動に巻き込まれ、そのたび、彼の尻拭いをさせられてきたか分からなかった。それだけに、一抹の不安をその胸に抱きつつも、病身の彼は、もはや和田に全てを託す以外の道はなかった。

六月二十日。

顕本寺では、この世のものとは到底思えぬほど、壮麗壮大盛大な法要が、三好家主催の下に執り行われていた。

金に糸目はつけず、ただひたすら三好家の勢威を満天下に示すことだけが目的の法要には、將軍足利義晴の代理として、重臣の伊勢貞孝（政所執事）、蜷川親俊（政所代）らが参席したほか、管領細川晴元の代理として、細川元常（和泉守護）、細川持隆（阿波守護）らの姿もあつた。他に近江の六角定頼の代理として進藤貞治や後藤賢豊が参列し、また丹波の波多野秀忠、内藤国貞・長頼親子、摂津の伊丹親興、三宅国村、塩川政年、大和の筒井順政（筒井順昭の代理）、柳生家敵など、各地の有力豪族たちが勢ぞろいしていた。また、先の氏綱騒動以来三好家と対立していた河内畠山家からは、世論のあらゆる予想を裏切る形で遊佐河内守長教自らが参加し、諸侯たちの話題をさらっていた。

無論、主催者たる三好範長以下、三好之康、安宅冬康、十河一存、三好康長、三好長逸、三好政成、三好政康…、といった三好一門衆

や、岩成友通、篠原自遁、大西出雲守、松永久秀、立花又右衛門・小太郎親子など、三好配下の有力部将の姿もあつた。

まさしく、三好の総力を傾注した大法要であつた。中には、これほどとは想定していなかつた者も多かつたと見え、

「これが、三好筑前守殿の勢威か……」

などと、改めて三好家の凄まじさを痛感し、震え上がっていた。

和田新五郎は、範長のお気に入り、側近の一人であった。

顔立ちが端正で、絶世の美男子と評されているだけに、家中では範長の衆道（＝男色）の相手ではないかとも噂されていたが、真偽のほどは分からなかった。ただ、彼の巧みな弁舌能力を、範長が高く評価していたことは事実であり、実際、様々な交渉事に、彼は副使、補佐役の肩書きで随行させられることが多かった。

そして、この和田は、美男子だけに、当然のように女子からの人氣が異様に高いのだった。要するに、もてるのである。

三好家の大奥でも、彼は常に人気者だった。時には、大奥の女官と関係を持つて、範長から大目玉を食らったこともあった。この時は、立花又右衛門やその子たる小太郎のとりなしもあつて許されたが、彼を巡る女性問題は、もてる分、いつも厄介を極めていた。

六月中頃。

三好元長十三回忌法要を数日後に控えた、ある日。

幕府役人に、幕府高官の参列を求めべく、その根回しのために上洛した彼は、そこでもまた、相も変らぬ女漁りを繰り返していた。美男とはいえ、元々身分低き生まれの彼は、京の女子には大いなる憧れをもっていた。無論、ただの女子ではない。彼の標的は、朝廷や有力公家、あるいは將軍家に仕えているような高級女官であった。彼女たちと関係を持ちたい。これが、美男子と評される男の、最大の野望、夢となっていた。

ただ、彼はもてる。彼自身、嫌になるほど女子にもてるのだった。だから、彼のちつぽけな野望は、案外楽に実現した。空前絶後の美貌のほかに、今をときめく三好筑前守殿の寵臣であり、かつその使者という立派な身分を持っているのだから、鬼に金棒だった。女

子たちは、彼が来るたび、黄色い歓声を上げ、彼と一緒になるべく、必死のアプローチを繰り返していた。

彼は夜になるたび、いろいろな女子の下をまわって、精力的に係を持っていった。けれど、なかなか気に入る女子が見つからないのか、一夜ごとに、彼と交わっている女子は異なっていた。

そして、六月十七日の夜のことだった。

幕府高官の説得に、散々苦勞を重ねた彼は、日も沈む頃には、それこそ精も根も使い果たしたといったように、肩を落としていた。いつもなら、夜こそが本番と、有り余る体力を持って女子たちの下へ向かうのに、今日だけはそんな気力もないほど、疲れきっていた。「大変ですね」

と、そんな彼に、一人の女子はクスクスと笑った。

室町御所内の一室で、和田新五郎は、ごろりと寝転がっている。女子はそんな彼を見つめながら、

「甘菓子など如何ですか？」

と言つて、ニコニコと微笑んでいた。

和田は、彼女の顔を見て、少しばかり溜息を漏らした。確かに可愛らしい顔をして、なかなかの美貌を誇っているが、彼の眼鏡に適うほどではなかった。体軀はこじんまりとして、決して豊かとはいえない。

ただ……。なんともいえぬ魅力が、彼女にはあった。これまで無数の美女という美女を抱き続けてきた和田は、いつしかまじまじと、呆然と彼女を見つめていた。

「あ、そ、それがしは三好家被官にて、筑前守様の小姓をやっております和田新五郎と申します」

こうやって、慌てて頭を下げたのも、久しぶりだった。弁舌だけは誰にも負けないつもりだったのに、今日は、なかなか言うべき言葉を見つけれず、彼らしくもなく、ドギマギとしていた。

「ふふ。存じております」

女子は、そう言つて、彼の初心さに、にっこりと微笑んだ。

「私は、菊童丸様（後の足利義輝）の乳母様の侍女しております、梅と申しまする」

「き、菊童丸様の乳母の侍女…」

和田は、しばし呆然と、梅と名乗る女子を見つめていた。

「ふふ、所詮侍女に過ぎませぬ。今をときめく筑前守様の御小姓の和田様ほどではありませんぬ」

と言つて、梅は嬉しそうに笑っていた。

以後、二人はことあるごとに、密会を重ねるようになった。

相手が悪いことは、和田も梅も重々承知していた。けれど、お互い、いつしか惹かれあい、気がつくつと、好き同士になっていた。こうなると、二人は逆に、このスリル溢れる禁断の恋を思う存分に楽しむようになっていた。

無論、男と女である。会えば、当然のように関係を持った。お互い、獣に戻つたかのように、それぞれの身体を貪りあつた。裸体を晒し、重ね、ひたすら快樂を求めた。

だが…。

お互いに、相手が悪かつた。

和田新五郎は、三好範長の寵臣とはいえ、小姓の一人に過ぎない。一方、梅は、將軍世子の乳母の侍女という、身分的には、和田より遙かに高いところにいた。その上、この場合の侍女というのは、上司である乳母の世話をしつつも、いつ何時、將軍のお手がつくか分からない立場であつた。要するに、彼女は、他の誰でもない將軍足利義晴のものだつた。

そんな女子に、和田は手を出した。和田如き身分低き者が、いつ何時將軍の手がつくか分からぬ女子に手を出したというのは、如何に將軍家の権威低下が著しい現在といえども、決して許されざるこ

とだった。

だから、彼らは必死になって、互いの関係を隠し続けたが、狭き京の都にあつて、その熱愛がいつまでも発覚しないはずもなかった。で、八月六日、ついに事の詳細が、將軍足利義晴と、管領細川晴元に知れ渡ることとなった。

足利義晴は、烈火のごとく激怒した。

無理もない。

手こそつけていないとはいえ、自分の女子と思っていた女を、とるに足らぬ軽輩に奪われたのである。自分の女を、他の男に寝取られたという単純な嫉妬心も、義晴の怒りを構成する一つの要因であったことは間違いない。だが、それ以上に將軍の権威を大いに傷つけられたような気がして、彼は、それこそ尋常ならざる勢いで、怒り狂っていた。

そして、管領の晴元も、事の次第を重く見ていた。

「三好は、それほどに驕っているのか」

と呟く彼は、ニタニタと、実に楽しそうに不敵な笑みを漏らしていた。

「懲らしめる絶好機ですな」

すかさず、三好宗三が応じた。

細川晴元も、三好宗三も、三好範長の勢威声望の凄まじさに、このところ恐怖、不安、不信の念を強めていた。先の三好元長十三回忌法要の折に参列した諸侯の多さも、彼らを震え上がらせるに十分な威力を持っていた。ここらで、何らかの手を打たぬ限り、自分と範長の立場が逆転してしまうのではないかと、晴元は大いに焦っていたところであった。

そこに、和田新五郎の密通事件である。渡りに船とは、まさにこのことだった。

「將軍家の侍女に手を出すとは、三好家そのものが驕り高ぶってい

る証でしょう。この際、見せしめも兼ねて、厳罰に処するのが上策と心得ます」

と、宗三が言えば、

「ふふふ」

と、嬉しそうに笑う晴元であった。

和田の事件は、当然範長の知るところになった。

彼は、慌てて上洛すると、己が家臣の助命のために奔走した。不義密通は死に値する重罪といえど、彼の能力を高く評価している範長としては、こんなところで、こんなくだらぬ一件で彼を失いたくはなかった。

「筑前殿はいまいち分かっておられんようだが、和田某は、事もあろうに、公方様の侍女に手を出したのだぞ。ただの不義密通ではない。ただの死ですら、この場合、甘すぎる処罰というものだ」

と、晴元の代官として、今回の事件の一切を取り仕切ることになった三好宗三は、冷たい口調でそう言い放った。

「だが、命を奪うほどのことではあるまい。知行没収、無期限謹慎等くらいに止め、公方様の御人徳を天下に示すのも、一策ではござらんか」

範長も、簡単には引き下がらなかったが、宗三は一切耳を貸さなかつた。ばかりか、

「和田某の主君たる筑前殿も、本来は責任を負わねばならぬ御立場なのでござるぞ」

と、鋭い口調で言い切り、縋りつく範長を公然と突き放した。

ただ、範長とて不義密通を犯せば、どういうことになるか、一般常識として、嫌というほどに知っていた。しかも、相手は將軍家の侍女である。普通に考えて、死以外の罰があるとは思えなかつた。

だから、範長は鬱屈とした表情のまま、京の三好屋敷に戻った。

「…新五郎の阿呆が！」



と、彼は、腹立たしそうに、ぐびぐびと自棄酒を呷ると、持っていた酒盃をどこともなく投げ飛ばした。

「こんなことになるのなら、奴の女癖の悪さは徹底的に懲らしめておくべきだった。なまじ、あれの能力を高く買いつぎで、温情を注ぎすぎたのが、裏目に出た！」

苛立ちは募るばかりである。やり場のない腹立ちに、範長はぶるぶると震えた。

「かくなる上は、いたし方ありません。…こう申しては何ですが、和田の死は、自業自得にございます」

「…」

「されば、これ以上、この一件に御屋形様がお関わりになられませぬよう、この小太郎、伏してお願ひ申し上げます」

「なんだと？」

範長は、ぎろりと、おぞましき鋭き視線を、小太郎にぶつけた。

「今回の事件のために、御当家は大きいなる風評被害を受けました。それを考慮しても、和田新五郎は死罪に値します。その上、御屋形様が不義密通者の助命嘆願に奔走していた、などと知れますれば、御屋形様の御名を傷つけることになります」

「…」

「今回の一件ではつきりしたことは、御家中の中に、御家の隆昌を嵩に来て、身の程も弁えず、驕っている者がいるということ。勢力強きときは、何かと妬みやつかみなどを受けやすいものです。それは、御家の更なる発展を考えたと、邪魔にこそなれ、得には決してなりません。…今一度、御家中を戒める上で、此度の事件はよいきっかけになるではありませんか。ゆえに、我らから厳罰を求めるのも、一つの手であります」

立花小太郎は、既にかつての腹心を、捨石にするつもりで、きつぱりと見限っていた。その冷徹さに、内心呆れつつも、範長は、ふうと小さな溜息を吐いた。

「お主が言葉は、至極尤もだが、我らから厳罰を求める必要性はな

い

と、範長は言う。小太郎は、主君の顔をまじまじと見つめた。

「どうせ、我らが敵罰にするなど申しても、宗三入道は敵罰に処すだろう。それこそ、我らが想像も及ばぬような、おぞましきやり方で殺すだろう。…我らは、それをもって、奴らを非難する道具とすればよい。家中の傲慢を戒めることもできるし、家中の宗三嫌いを増幅し、いざというときの士気を高めることにも繋がる」  
「なるほど」

「せいぜい、宗三入道には、悪役になつてもらおうとしよう。それと、そのためには和田新五郎と侍女の、劇的な恋愛話などでうちあげてもよかるう。それこそ、民たちが喜び、悲しみ、哀れみそんな話を作って、流布させるのだ。さすれば、斬った宗三は、完全な悪役になる」

そんな風に言いながら、範長はニタニタと楽しそうに笑っていた。笑って、笑ううち、どんどん壊れた人形の如く、その声色もいつしか乾ききり、その眼からは、ぼろぼろと涙が溢れていたが、彼は気にする風でもなく、しばらくずっと、そうやって笑っていた。

そして、八月十一日。

三好宗三が立案し、足利義晴、細川晴元連名で下された処分案は、想定通り、凄まじく敵しいものであった。

不義密通罪に問われ、仏陀寺（上京区）に収監されていた和田新五郎は、この日、一条戻橋において『鋸挽き』という刑に処されることとなった。

鋸挽きというのは、古代より連綿と開発されてきた様々な刑罰のうちでも、最も残忍な刑の一つに数えられる、おぞましき処刑方法だった。

即ち…。まず、受刑者は首と頭以外の体全身を地中に埋められる。そして地上に露出している首に、鋸を備え付けるのである。これで、

基本的な準備は完了だった。この際の鋸は、普通の鋸を使う場合もあれば、錆びれていたり、あるいは木製のもの…、要するに際立つて切れ味の悪いものを使用するときもあった。

そして、罪状を記した高札を掲げ、その上で、それを読んだ民衆に、鋸を引くよう命じるのである。鋸を引く立場の民も、人間であるから、思い切り引いたりはしない。民が来るたび、鋸は少しずつ引かれる。引かれるたび、それは受刑者の喉に食い込み、徐々に、徐々にその命を蝕んでいく。朝も、昼も、夜も、それこそ死ぬまでずっとその場に放置され、鋸を引かれ続けるのである。いっそ、一瞬のうちに殺してもらえれば、どれほど楽か知れないが、引く側の民衆も、自分の一撃で受刑者が死んでしまつては、ばつが悪いので、結局少しずつしか引かない。

要するに、苦しみに苦しみぬいて死ぬ。これが鋸挽きという刑罰だった。余りに厳しい罰のため、実際に適用された事例は極端に少ないのだが、この刑により殺された代表的な人間を挙げるなら、織田信長暗殺を目論み、失敗した杉谷善住坊や、徳川家康に対して反逆を企てた大賀弥四郎の二人ぐらいであろう。

そして、今回は、まず左右の腕を斬りおとしてから、地中に埋められた。無論、止血処理も済ませてあるから、出血多量で死ぬことも出来ない。凄まじい激痛が全身を走る中、鋸を少しずつ引かれるのである。地獄以上の地獄を数日に渡り味わった後、和田新五郎は、その命を失った。

そして、義晴や晴元の手は、侍女の梅にも及んだ。

彼女は、全裸にされた上で、京の市中を車で引きずりまわされた拳句、六条河原で首を斬られた。

和田事件は、兎にも角にも、京洛の人々に絶大な影響を与えた。あんな刑罰が、この世にあったことを初めて知った者も多かった。総じて皆、和田新五郎と梅に対し、同情的であり、刑罰を立案した三好宗三や、執行した細川晴元を、憎むべき悪役として、心密かに蔑んだりするようになった。

全ては三好範長の手回しのよさであった。すかさず、やむにやまれず恋に陥ったという、同情的な物語をでっち上げて流布させ、和田を悲劇の主役に祭り上げた。梅を、將軍家に仕えながら、同僚である女官からは虐められ、將軍からは虐待され、散々苦勞を味わってきた女……と設定することで、まんまと將軍すらも悪役に追いやってしまった。

何はともかく、鋸挽きというのはやりすぎだった。晴元や宗三の、三好家に対する恐怖感情が露骨に表れていて、そのことを知った諸侯たちは、どれも眉を顰めた。結局のところ、今回の事件は、増長している三好家を懲らしめ、細川政権の強大を見せ付けるはずが、晴元・宗三の株を引き下げ、逆に範長の信望を高めるといって、皮肉な結果のみもたらして、決着することになった。

今回の事件処理を通じ、立花小太郎の存在感は飛躍的に高まった。和田と梅の、お涙頂戴の恋愛劇を脚本し、市中に流布させたのも彼なら、以後数ヶ月に渡り、和田の如く、三好の権勢を嵩に来て増長している家中を徹底的に取り締まって、家中全体に緊張感を取り戻させたのも、彼の功績だった。

というので、天文十三年（一五四四年）十二月。小太郎は小姓頭から、祐筆兼側用人に格上げとなった。それに伴い、『範政』と名乗るようになったが、言うまでもなく、この『範』は、主君範長よ

り賜ったものであった。

そして、時は天文十四年（一五四五年）を迎えた。

一月、二月、三月と、何事もない日々が続いた。それこそ、戦国とは到底思えぬ平和なひと時が、しばらくの間、ずっと続いていた。だが…。

四月になって、畿内情勢は再びきな臭い雰囲気にもまれていった。「国貞殿に、不審な動きだと？」

越水城に登城した松永久秀の、思いもよらぬ報告に、範長は思わず耳を疑った。

「弟からの知らせによれば、内藤国貞殿は、密かに何やら企んでいるようです」

「…何やら企んでいるとは、いったいなんだ？」

範長は不思議そうに首を傾げながら、久秀の言葉を待った。無論、検討が全くつかないわけではない。内藤国貞が、自分に黙って不審な動きをすとなれば、波多野家を巡る問題に違いない。

「ここ、内藤家と波多野家では、領地の境界を巡る争いをはじめ、様々な対立が深刻化しているようです」

と、久秀は淡々と言った。

「やはり、波多野か…」

ここずっと、三好家が調停役となる形で、丹波の両雄たる内藤、波多野両氏の対立は未然に防がれてきたが、両家が長年にわたり対立を重ねてきた因縁の間柄であることを考えれば、その蜜月関係がいつまでも続くはずはなかった。

特に…。三好範長に嫁いだ波多野の姫が、世子を産み、三好・波多野両家の関係が強化されると、内藤国貞は、決して面白くなかった。

「未だ、内藤殿が何を画策しているのかは分かりませぬが、ただ、用心するに越したことはない、というのが、弟よりの報告にござい

ます」

「…分かった」

範長は苦りきった。彼自身は、如何に波多野家の姫が世子を産もうと、波多野に偏重してきたつもりはない。だが、結果として内藤国貞は冷遇されていると感じ、範長と距離をとるようになった。政治というのは、実に難しいものだ、改めて実感しつつ、

「甚介にはくれぐれも気をつけるよう命じよ。もしも内藤国貞に、我らへの逆意があるなら、真っ先に八つ裂きにされるのは、甚介だからな」

と、言った。

「ふふふ、御心配には及びませぬ。甚介とて、軟な男ではありませんせぬ。養子として入ったときより、いざというときの備えぐらいは講じておりましょう。何しろ、それがしの弟ですからな」

そんな風に、ニタニタと笑いながら答える久秀に、範長も「ははは」と笑った。兎にも角にも、丹波情勢が不穏化していることは、三好家として、改めて考え直さねばならぬ重大問題だと思いつながら、範長はふうと小さな溜息を吐いた。

五月。

丹波が、ついに動いた。

ただ、内藤国貞ではなかった。上野源五郎元全という、丹波豪族の一人が、総勢三千に及ぶ兵を糾合し、山城国に殺到。五月六日、井手城（現京都府綴喜郡井手町）を攻略し、その父である玄蕃頭元治は、槇島（現京都府宇治市）まで南下し、そこに陣取った。

上野源五郎は、かつて細川高国の被官だった男である。要するに、高国残党勢力の一人であった。

油断といえば、油断である。

実際、京周辺には細川晴元方の兵力は、ほとんどいなかった。晴元は芥川山に帰っていたし、三好宗三も、江口城に戻って、領国の

内政に勤しんでいた。範長も越水にあつたから、見事なほど、畿内のど真ん中が、完全な空白地帯となっていたのである。

そこを、上野源五郎に突かれたというわけだった。井手城を落とされ、その勢いのまま、都までも奪われ、上野勢の一部は、榎島まで進軍してしまった。

「上野源五郎如きが、こうも手際よく行動できるとは、解せんな」と、範長は首を傾げていた。

「上野源五郎は高国の被官だった男。となると、やはり細川氏綱が背後にいますかな？」

三好康長がそう答えると、誰もが、「なるほど」と、静かに頷いていた。

「だが、今の氏綱に何の力がある？ 上野源五郎とて、高国の被官であるという前に、豪族だろう。今回の奴の武力上洛は、一步間違えれば、領地の全てを失いかねない賭けだ。奴には奴なりの勝算があつたに違いない」

と、範長が言うと、康長や諸将は「それもそうだ」とばかり、再び首を傾げてしまった。

すると、そこに松永久秀が、  
「内藤殿が背後にいることは間違いありません」と、言った。

「内藤殿だと？」  
条件反射の如く、すかさず反論する三好長逸は、久秀をぎろりと睨みつけ、「何を馬鹿な」と、呟いていた。けれど、それには構わず、久秀は続けた。

「今回の一件、上野源五郎には絶対の勝算があつたのでしよう。それが何なのか。御屋形様が仰られたように、氏綱の扇動では、少し物足りませぬ。無論、氏綱の背後にいる遊佐河内守長教という可能性もなきにしも非ずですが、ここで考えねばならぬのは、丹波を支配しているのは、いったい誰なのかということですよ」

「…丹波の支配者？」

誰もが一樣に首を傾げつつ、はっと気がついたように、

「内藤殿か！」

と、叫んでいた。

「左様。内藤殿は丹波守護代。即ち、丹波はあのお方の支配下にあります。もしも上野が拳兵するとしても、内藤殿の黙認がなければ、兵を集めた時点ですぐに発覚し、内藤殿より征伐されているでしょう。あるいは、我らに報告があってもいい。だが、それらは一切なかった。内藤殿は、少なくとも上野の行動を黙認していた。上野がこつも思い切った賭けに出た以上、内藤殿が裏で唆したのやもしれませぬ。何しろ、内藤殿もまた、かつては細川高国の配下だったお方。国貞の国は、高国の国」

無論、全ては可能性の域を出るものではなく、明確な確証があるわけではなかった。だが、久秀は自らの説に絶対の自信をもっているし、諸将も、彼の説を否定できるだけの論拠を持たなかった。言われて見れば、それが一番妥当なような気もした。

上野謀叛の一報は、たちまち畿内全土に轟いた。

そして、それは何より芥川山の細川晴元の逆鱗に触れた。彼が京を留守にしている間に、それを横取りされたのである。怒るのも、無理はない。しかも、大大名ならまだしも、上野源五郎如き丹波の小豪族如きに取られたということが、彼の怒りに油を注いだ。

晴元は、全土に大動員令を発した。管領として、細川京兆家総帥として、彼の持つ権力の全てを行使して、各地の大名という大名に、兵を率いて芥川山に参集するよう命じたのである。

かくて…。

上野源五郎の上洛から半月とたたぬ、五月二十日の段階で、芥川山城には、丹波の波多野秀忠、近江の六角定頼をはじめ、摂津からは晴元の直轄軍、三好範長、三好宗三がはせ参じたし、大和の筒井順昭、和泉の細川元常、阿波の細川持隆、讃岐の香西元成、さらに



は播磨からは、守護赤松晴政の代理として、守護代である浦上美作守政宗がわざわざやってきたほどだった。

かくて、細川晴元軍は、総勢六万余騎に達した。

まさに空前絶後の圧倒的大軍である。細川政権の底力の凄まじさを満天下に示すには、申し分なき大軍であつた。

そして、五月二十四日。

細川軍は、芥川山を発し、一路、怒涛の如き勢いを成して、京を目指した。こうなると、上野源五郎元全に勝ち目などあるはずもなかった。

「内藤殿は、まだ動かんのか？」

洛中にあつて、上野源五郎は、家臣たちに怒鳴り散らしていた。

「遊佐河内守は？ 氏綱様の挙兵は？」

彼は焦っていた。焦燥感のために、僅か数日で、げっそりと痩せこけてしまっていた。

彼が期待した、というより、彼をけしかけた内藤国貞や遊佐長教も、今や手のひらを返したように、中立姿勢を保っていた。内藤や遊佐が想像した以上に、細川軍の力が圧倒的だったためだが、捨石にされた上野源五郎にすれば、たまつたものではなかつた。

五月二十四日午後。

細川軍は、寺田（現京都府久世郡城陽町）一帯を占拠し、ここに布陣した。

翌日、即ち二十五日。

この日、細川軍は上野方に味方した宇治田原（現京都府綴喜郡宇治田原町）に攻め入った。三好宗三を総大将とする細川軍は、その圧倒的多勢を活かして、終始優勢に立っていたが、上野方の抵抗も激しく、宗三配下が八十人以上戦死するほどの激戦となつたが、結局、多勢に無勢で、その日のうちに、細川軍により制圧され、上野勢は退却していった。

二十六日、上野勢を片つ端からなぎ払い、都を奪回した細川晴元は、ようやくその軍を解散した。総勢六万を超えた圧倒的な細川軍は、僅か三日にしてその役目を終えたが、肝心の上野源五郎元全を捕えることはできず、彼の行方は、細川政権の徹底した残党狩りにも関わらず、杳としてしれなかつた。

一方、今回の細川軍に、一万の兵を率いて参加した三好範長は、三好宗三とともに、晴元より徹底した残党狩りを命じられていた。特に、主将たる源五郎元全と、その父たる玄蕃頭元治の逮捕は、晴元から直々に下された厳命だっただけに、範長も宗三も、必死になつてた。

三室戸の大法寺に入ると、残党引渡しに応じない住職らの頑強な態度に業を煮やし、宗三の号令の下、大法寺をはじめとする近隣各地を悉く焼き尽くし、見せしめとした。また木幡（現宇治市）に向かうと、やはり細川政権の意に従わないので、

「従わぬ者に対しては、何をしても構わぬ」

という非情な命令すら発し、村々を襲撃しては、乱暴狼藉の限りを尽くした。この辺りは、高国党の勢力が強く、日ごろ晴元政権に対し、何かにつけて楯突いていたので、政権の威力を思い知らせるにはちょうどよい機会になった。

この徹底した残党狩りは、宗三だけでなく、範長も積極的に行っていた。だから、彼らが醍醐寺に迫ると、醍醐寺側は彼らの乱暴を防ぐべく、範長の差し向けた査察官を受け入れ、上野方残党を匿っていないことを実証した後、礼銭として四千疋（米四十石に相当）を差し出して、そのご機嫌取りに必死になった。

ただ、範長はその程度で矛を収めるほど、甘い人間ではなかつた。いっそ、この際、醍醐寺をも自らの影響下に置くべく、醍醐寺を攻撃しない代わりとして、厳しき禁制を与えたのだつた。

即ち…、その禁制については、『醍醐寺文書』には、

禁制 御門跡領醍醐山上山下

一、当手軍勢甲乙人乱入狼藉事

一、伐採山林竹木事

一、相懸兵糧米事

右条々堅令停止訖、おわんぬ若違犯之輩在之者、速可処嚴科者也、仍如件。  
天文十四年五月二十七日

と記されている。要するに、三好の軍勢に、乱暴狼藉を振るうな。山林の竹や木を伐採しろ。三好軍に兵糧を支給しろ。ということをも命じただけであるが、それに叛けば、あるいは叛く者がいれば、嚴罰（死罪）に処すと、強い態度で迫っている点に、範長の覚悟の程が見えた。

さらに、その後も似たようなことを石田や、伏見の辺りでも行った後、日野寺（現京都市伏見区）や勧修寺（現京都市東区）に対しても、醍醐寺と同じ禁制を押し付けていた。

【雪辱編】第052章 高国の残党（後書き）

参考文献

『人物叢書 三好長慶』（著者・長江正一 発行所株式会社吉川弘  
文館 昭和四十三年六月十日）

この頃、丹波を巡る情勢は、いよいよいつそう、不穩の度を増していた。

というのも、丹波八上城城主である波多野秀忠が、武力上洛を果たした上野源五郎を討伐すべく、全軍を挙げて出陣したからであった。波多野氏は丹波守護代職を勤める内藤氏に匹敵する丹波国最大の土豪であり、また内藤氏とは、長年に渡り同国の覇権を巡って抗争を繰り返してきた犬猿の仲でもあった。

その波多野氏が国許を空けたのだ。虎視眈々、彼の領地を狙っている獍猛な狼が、このまたとない絶好機を、みすみす見逃すはずがなかった。

「八上城は今やもぬけの殻だ。攻撃するなら、今しかあるまい」  
言わずもがな。かく叫んで、満面に笑みを浮かべていたのは、丹波八木城主にして同国守護代の内藤国貞であった。

「兵を集めよッ！ これより直ちに八上城に攻め入り、これを攻め落とすのだッ！」

今しかない。内藤氏累代の宿願たる丹波統一を果たすのは、今をおいて他にない。

時は今！

内藤国貞はスクツと立ち上がり、落ち着きなくあちこちをきよるきよると動き回った。

やる気は十分。自信満々。

内藤国貞は高ぶる気持ちを隠そうともせず、先祖代々の陣羽織を羽織ながら、いつになくニタニタと不敵な笑みを漏らしていた。

「くつくく。今回こそ波多野を踏み潰してくれるぞ」

国貞の本音はともかく、建前としては、あくまで、かつて三好宗

三によりでつち上げられた謀叛騒動の際に、波多野家に横領された領地を奪還しようとしただけ…、ということになっている。けれど、状況が状況だけに、養子である長頼は、

「左様なことをすれば、三好家を敵に回すことになります。お控え下さりますよう」

と、必死に諫言していたが、国貞は一切耳を貸さなかった。

「…黙れ！ 三好が何だというのだ。せつかく丹波を統一できる絶好の機会だというのに、それをみすみす見逃せと申すのかッ！」

雷が落ちた。そのとき、長頼はそう思った。

国貞の怒りは、彼の想像を遥かに超えていた。

無理もないと思う。波多野を滅ぼし、丹波国を統一することは、内藤一族の悲願であった。長頼とて内藤家に婿入りした時点で、いつの日か丹波の統一を実現したいと思っていた。そして今、その絶好機が目の前に転がっているというのに、駄目だといわれれば、誰だって怒るだろう。が、国貞の怒りの原因がそれだけではないことを、長頼は薄々察していた。

「所詮、三好の間者のくせに…」

国貞のぼやき声も、長頼の耳には凄まじき大音声の如く聞こえた。国貞にとつて…。今となつては、三好家より迎え入れた、この養子が何より疎ましくて仕方がないのだ。三好との関係が疎遠になるにつれ、長頼はもはや養子ではなく、三好から差し向けられた目付役、間者のように思えてならなかった。自分から請うて貰い受けたにも関わらず、国貞は、厄介者を押し付けられたような気がして、どンドン彼に対する不満を募らせていった。

その上、今回の諫言である。波多野から領地を奪回し、彼に目にも見せてやると息巻いていた国貞は、ついに我慢の限界を超えたものらしく、凄まじき剣幕で激怒した。

「所詮、あれは三好の間者に過ぎんだ。これまで我慢して養子としてきたが、何で三好の手先、それも卑賤の生まれの輩に、名族内藤の家督を譲らねばならんだ」

と、散々怒鳴り散らした挙句、家臣に命じて、内藤長頼を捕縛し、拘束するよう命じたのである。その上で、嫁がせてあった娘とも離別させ、内藤姓を剥奪してしまった。

内藤国貞は、長頼だけでなく、多くの家臣たちが止めるのも聞かず、六月、波多野征伐と称し、総勢六千の大軍を従えて八木城を発した。

名目としては、守護代に従わぬ不届き者を成敗する、という形をとっているが、波多野秀忠の後ろに三好範長がいる以上、丹波の国人たちは、去就に困った。

ただ、国貞には自信があった。三好と密接に繋がる波多野家を潰すことは、即ち三好の勢力を削ぐことに繋がるわけだから、三好の勢威に恐怖している細川晴元や三好宗三の支持が得られるに違いない。彼らが支持してくれれば、如何いかな範長といえど、容易く波多野の支援には乗り出せないだろう。範長さえないければ、波多野家などは敵ではない。などと一人皮算用しながら、彼は悠々と軍を進めていた。

だが、従っている家臣たちは、余裕綽々の彼とは裏腹に、不安でいっぱいだった。

何しろ、国貞は、必ずそうなるに違いないと信じて、晴元や宗三に対し、事前の根回しすら怠っていた。彼らは自分の味方づくに違いないという希望的観測のみで動いている主君を見ていれば、誰しも不安に思うのは当然だった。

「殿は、筑前殿を侮っている」

家臣たちは、不安と不満をない交ぜにした顔で、主君たる国貞を睨んでいた。

「あのお方は、自分の利益になると分かれば、親の敵とも躊躇なく手を結ぶ人だぞ。管領様や宗三入道様をも味方に取り込んで、我らのほうに向かってくることは、十分考えられるのに」

と、皆思っている。だが、それを率直に言ったがために、養子の長頼は、養子たる身分を剥奪され、さらには八木城内に収監されてしまった。その他多くの重臣たちも同じような憂き目にあっている。だから、誰も何も言えなかった。ただなるようになれと、半ば自暴<sup>やけ</sup>自棄<sup>くそ</sup>のような心境で、事態の推移を見守るより他に仕方がなかった。

内藤勢と波多野勢は、六月三日に決戦し、これは内藤勢の勝利に終わっていた。というのも、波多野秀忠の本隊が未だ帰還しておらず、留守居の兵だけで応戦せざるを得なかったからだ。国貞は、この勝利を大つぴらに喜び、大いにはしゃいで、しばらくの時間を無意味に浪費してしまった。

その間に、波多野秀忠本隊は八上城に戻り、迎撃準備を整えた。そして六月十五日、秀忠は、総勢四千の手勢を従えて出陣し、十六日、内藤軍と再び決戦したのだった。

この戦いは、押したり押されたり、とにかく延々と三日ほど続いたが、実質的な引き分けに終わった。ただ、波多野軍を撃破することができなかったことで、堅城と名高き八上城を攻め落とすだけの力を失ってしまった内藤勢は、やむなく関城（現京都府船井郡日吉町辺り）に立て籠もって、態勢を立て直さざるを得なくなった。その後、猛然と押し寄せてきた波多野勢と、連日に渡り、愚にもつかぬ小競り合いを繰り返していたが、明確な勝敗がつくでもなく、ただ無為に兵と矢玉と時間を浪費するばかりであった。

「これでは、丹波統一どころではないぞ」

そんな具合だから、重臣たちだけでなく、ついには下級足輕に至るまで、そんなことを噂しあうようになった。このまま無駄な長期戦を強いられれば、いずれ三好範長が乗り出してくるだろう。そうなれば内藤勢に勝ち目などあるうはずがない。



三好範長が出兵したのは、七月も中頃に迫った頃のことだった。逆に言えば、それまでの間はさしもの範長も動けなかったのである。

というのも…。内藤氏への対応を巡り、徹底して討伐すべしと主張する範長に対し、あくまで内藤国貞の肩を持つ細川晴元、三好宗三の間で、延々と、飽くなき小田原評定が繰り返されていたからであつた。

「御所様、なりませぬぞ。内藤攻めなど断じてなりませぬ」

と、宗三は散々晴元にそう主張していたわけだが、

「先の上野源五郎の叛乱の背後に、内藤国貞がいたことは、もはや動かし難き事実ですぞ」

という範長の意見のほうに、晴元の心を動かすに大きな力を持っていた。

かくして最終的には範長の主張に、晴元が折れる形で、内藤征伐が正式決定することになったのであつた。

今の晴元は、反三好としての内藤、親三好としての波多野、といった複雑な相関図など、全く眼中になかった。それよりも、至極単純に、自分に楯突いた内藤に対して…、その楯突いたという行為に対し、凄まじき怒りを燃やしていたのだつた。

範長にとっては、そうした彼の単純さは、説得する上で実に好都合だつた。兎にも角にも、幕府管領細川右京大夫晴元の号令の下、範長は総勢一万五千の軍をまとめ、丹波へ急行したのである。副将に三好宗三が付けられたのは、彼が望んだことというより、晴元の命であり、何より宗三自身が望んだことでもあつた。

関城に立て籠もる内藤国貞は、そこで三好軍が都を発したことを知つた。

総勢一万五千という。

主将は三好筑前守範長、副将兼軍監が三好越後守宗三だと聞いた

とき、内藤国貞は当然のように絶句し、精気が抜けたかのごとく、呆然と青ざめていた。

「にゅ、入道殿が筑前の副将だと？」

信じられぬといった様子で、がっくりと項垂れている。

「それも、管領殿の正式な命を帯びた、紛れもなき『幕府軍』にございます」

酷く冷め切った顔をして、側近たちは眼前で無様に狼狽する主君をどこまでも見下しきったような目で見つめている。

「如何なさいますか？ 管領殿、筑前殿を敵に回した今、我らに勝機はありません」

「…しよ、勝機がないだと？ い、戦は、やってみねばわからん」

この期に及んでなお、必死に強がっている国貞を見て、家臣たちはどれも「はあ」と、大きな溜息を吐いた。

「殿…。今一度、よく御考えください。管領殿と筑前殿を敵に回したということは、即ち畿内全土を敵としたのと同義です。丹波一国すら支配しきれない我らに、勝ち目などあるとお思いですか？

勝負以前の問題です」

「…」

「このまま戦となれば、御当家に将来はありませんぞ」

家臣たちの、冷たくも厳しき言葉に、内藤国貞はへなへなと、力なくその場に倒れこんだ。そして、

「どうしたらよいのだ？」

と、藁にも縋るような気持ちで、そう尋ねるのだった。

「手なら、ないわけではありませんぬ」

家臣たちは、皆、口を揃えて言った。

「殿が、開戦前に幽閉した長頼様を、今一度養子に戻し、長頼様に仲介を頼むのです。長頼様は、何より筑前殿の寵臣でございますし、兄に当たる松永久秀殿は、筑前殿第一の側近といってよい御方でございます」

「…な、長頼に頼むのか？」

余り気乗りしないのか、国貞は腕組みしながら、「うーむ」と唸っている。だが、「それ以外にありませぬぞ」と、口をすっぱくして主張する家臣たちの言葉に、国貞も、ついには観念せずにはいられなかった。

「八木城に使者を出し、長頼を解放させよ。長頼の口添えで、筑前殿の怒りを和らげるのだ」

とだけ言うと、国貞は、がっくりと頂垂れ、「ははは」と、精気なきから笑いを、いつまでも、誰に対してもなく吐き続けていた。

内藤姓を剥奪され、松永長頼に名を戻していた彼は、国貞の命により出獄すると、かつての養父の指示に従う形で、兄久秀と、主君範長宛に、二通の書状を記した。

あくまでも、表面的には従順な養子<sup>むすこ</sup>を貫いているが、彼の本心は、別にあつた。

「御屋形様を裏切り、俺を幽閉するような男は、もはや親父殿とは思わぬ。親父殿がその気なら、俺も俺でやるのみだ」

と、薄暗き土牢の中で一人心に誓っていた彼は、出獄するなり、まず、これまで親しくしていた家臣たちに手を伸ばした。彼らを一人も多く味方に取り込み、その武力をもって養父国貞の支配から独立するつもりでいたのだ。

そして、内藤国貞を見限り、松永長頼へ隨身する者は、案外多かつた。三好の大軍がひた押しに迫って、内藤家そのものが絶体絶命の窮地に追いやられて以上、家臣たちが御家安泰を賭けて、三好氏と繋がり深い養子長頼に期待を賭けたのも無理なきことであった。長頼自身にとっても予想の範疇だったと見えて、大勢の家臣たちが彼の前に平伏しても、別段驚いたり、喜んだりはしなかった。さも当然のような顔をして、

「以後は、俺が内藤家を率いる。無能な親父殿に全てを委ねることはできぬ」

と、堂々と宣言していた。

「異議ある者は、この場にて名乗りだよ。構わんぞ。処罰はせぬ。だが、この八木城に留まることは許さぬ。即刻城を出、関城の親父殿の下へ向かうがよい」

そう言われて、「異議あり！」と唱えられるほど、度胸ある者などいるはずもなかった。どれも、三好範長という強大な力を背後にちらつかせる長頼に対して、絶対の臣従を誓うと、もはや関城の国貞のことなど忘れ去ったかのような顔で、

「長頼様万歳！」

と、唱えていた。

七月二十五日。

内藤国貞が立て籠もる関城は、総勢二万にまで膨れ上がった三好軍により完全包囲された。各地の丹波国人衆を糾合しつつ、その兵数を大幅に増やした三好軍であるが、中でも、内藤国貞が八木城に残してきたはずの守兵が、養子である松永長頼に率いられて参陣したという事実は、丹波諸侯の度肝を抜くに十分だった。

そして、七月二十七日。

内藤国貞は、白装束を纏って、僅かな配下のみ伴い、城を出た。当初はもはやこれまでとばかり、丹波守護代、名門内藤家当主としての意地を賭けて徹底抗戦する覚悟を決めた国貞であったが、三好の大軍を見るに及んで、何より兵たちの戦意が低下し、脱走兵が相次いだ。拳句、三好方の一員としてやってきた長頼の調略工作により、家臣たちが次々と切り崩されると、彼もついに観念せざるを得なかったのである。結局、僅か二日で、丹波守護代及び内藤家当主としての意地を全面的に取り下げると、この日、二万人の包囲軍の頂点にでんと構える筑前守範長に謁見し、深々と頭を下げ、無条件降伏の代償として、諸將の面前にて謝罪したのだった。

「内藤国貞」

三好筑前守範長は、その鋭くも冷たい視線で、じろりと国貞を見下ろした。

「余はそなたが嫌いではなかった」

「…」

「つまらぬ誤解が、此度の騒乱を招いた。その責は、そなたにも、そして余にもあるだろう。…だが、余は勝って、そなたは負けた。世の中、勝ち負けが全てだ。勝てば官軍とはよく言ったものだが、まさにその言葉どおりなのが、この世の理」

「…」

「だから余は、勝者として命じる。心して聞け！」

そう言つて、ハアと大きな溜息を吐く範長に、国貞は恐る恐る、再び頭を下げた。

「これまでのそなたの功績を鑑み、領地一切は引き続き安堵しよう。だが、此度の戦で波多野殿より奪い取った占領地は返還すべきこと。これが、内藤家に対する沙汰である。続いて、内藤国貞に対する沙汰だが…」

「…」

「国貞の稚拙な判断により、此度の騒乱が引き起こされた責は大きい。ゆえに、隠居謹慎を命じる。跡目については、養子である内藤備前守長頼に引き継がせることとする」

きつぱりとした口調で、範長は断言した。そして、その瞬間、国貞は、がっくりと肩を落とした。

「な、長頼に…」

これまで必死になつて作ってきたものが、全て音を立てて崩れていくような、なんともいえぬ無気力が全身を包み込んだ。時折、がたがたと五月蠅く響く障子の音さえも、哀れな自分を嘲笑っているように聞こえた。

範長は、哀れなかつての同志をじつと見つめつつ、おもむろに側に控える立花小太郎範政に目をやると、彼は阿吽の呼吸で立ち上がり、蹲る内藤国貞を強引に連行していった。

【雪辱編】第054章 氏綱の乱再び

丹波仕置を終えた三好範長は、ようやく京に帰還した。そして管領御所に伺候し、結果を報告すると、晴元はただ、

「そうか」

と、素っ気無く答えるだけだった。

彼とて、馬鹿ではない。だから、範長たちを丹波へ送り出した後、しばらく考えてみたのだろう。冷静になりさえすれば、本来は聡明な思考能力の持ち主なのである。宗三がなぜ内藤征伐に反対したのか。いろいろ考えた末、彼は出陣命令を出したことを、極端に後悔した。だからといって、ひとたび命令を出してしまった以上、容易く撤回できるわけもない。朝令暮改は、権力者たる者が絶対にやってはならぬ禁じ手だった。

そうこうするうち、範長は勝手に丹波仕置を終えて戻ってきた。満面に笑みを浮かべた彼の口から、全てが上手くいったと聞かされても、嬉しいはずがなかった。それに、主君にして管領でもある自分を差し置いて、内藤家の家督のことにまで口を挟んだ範長の行為は、大いなる越権行為であり、天下人細川晴元の威厳にかけても、簡単に許せるものではなかった。けれど実に用意周到なこの青年は、出陣に先だって、將軍御所に伺候し、他ならぬ將軍足利義晴より丹波方面における全権を委任されていたのである。だから、厳密に言えば、決して越権行為ではないわけで、管領…、即ち將軍の補佐役に過ぎない立場の晴元には何も言えなかった。

「公方様の御内書か…」

彼は、そんな風にぼやきながら、ひとしきり苦りきった。副将として討伐軍に参加していた宗三も、範長の晴元を無視した越権行為を散々非難したというが、御内書を示されては文句を言うわけにもいかず、

「あの小賢しい小童め！」

と、京に戻つてからの彼は、こんな風にぼやきながら、ただひたすらこうやって臍を噛んで悔しがっていた。

如何に天下の国政を司る管領職といえども、將軍は管領より上の身分、立場にあるのだった。そんな至極明快な論理を考えれば、將軍の命を帯びた範長の行動を、管領が咎めることなどできようはずもない。

將軍は管領の上にあつて、決して管領の下には来ないのである。

晴元や宗三は、ここにきて、ついに自分たちの目指す管領政治には根本的な欠陥があることを悟つたのだった。遅いと言えば遅い。この政治的欠陥をまんまと範長に利用された拳句、泣き寝入りを余儀なくされてしまった晴元たちの姿というのは、無様以外の何者でもなかつた。

「その方らの策は、全く図に当たつたわけだ」

範長は、実に嬉しそうな顔をして、眼前に平伏す二人の兄弟をジツと見下ろしていた。

「それにしても、つくづく恐ろしい兄弟だな。…これで、内藤家は甚介のものとなつた」

などと言つて、範長はクスクス笑つた。

「これも全て、御屋形様の御力あつてのことです」

そんな風に、恐縮そうに頭を下げる内藤甚介長頼は、言葉とは随分裏腹な自信を漲らせながら、にこりと微笑んだ。

「ま、そういうことにしておこう。いずれにしても、これで丹波一國は余の完全な支配下に入ったというわけだ。上出来だ。後は甚介、丹波のことは、全てそなたに任せるぞ。波多野殿とは上手く付き合ひ、決していざこざを起こすなよ」

「承知しております」

長頼が恭しく頭を下げると、範長は「うむ」と頷き、そして、長頼の隣に控える松永久秀に目をやった。

「將軍家の許可をとっておいたのは、実に妙策だった。そなたにも感謝するぞ」

「はは。それほどのことでもありません。ただ、管領殿の政権の、唯一の盲点が將軍家でございますからな。利用せぬ手はないと思っただけのことです」

「…盲点か。ふふふ、確かにそうだな」

そんな風に苦笑いしつつ、範長はふと、昔のことを思い出した。随分昔のこと。まだ千熊丸と名乗って、細川家の人質だった頃のことだから、十三年ほど前の話だ。

晴元は、自らの天下の在り方として、執権北条氏の如き体制を目指すと言った。鎌倉幕府を室町幕府に、執権を管領に、北条氏を細川氏に書き換えただけで、実態はそっくりそのまま瓜二つの執権政治を復活させるのだと、楽しげに宣言していた姿を思い返しながら、範長はクスクスと笑った。

「ま、何はともかく、これからが大変だ。そなたら兄弟にもいろいろと頑張ってもらわねばならん。以後も、よろしく頼むぞ！」

と、範長が言えば、

「ははーッ！」

と、似たような声で、大仰に畏まる久秀・長頼兄弟であった。

それから、一年近い歳月が流れた。

時は天文十五年（一五四六年）八月。

高野山に姿をくらましていた細川氏綱は、人が変わったかのように、読経三昧の日々を暮らしていた。

高野山金剛峰寺。

ここは、弘法大師空海が創業した平安仏教の雄、真言宗の総本山であった。伝教大師最澄が創始した天台宗（総本山は比叡山延暦寺）と並び立つ存在として、古く大きな存在感を誇ってきた。

彼が高野山に入ったのは、他でもない。はなから出家するつもり



などない彼にとって、古くより聖地として、あらゆる権力者も寄せ付けぬ宗門の砦は、晴元政権より身を隠す上で、これ以上ない好都合なところであった。

手引きしたのは、高野山周辺に領地を持つ畠山家。その宰相で、実権を握る遊佐河内守長教であった。

既に時は、八月になっていた。

晴元政権による丹波征討がひと段落した頃であり、上野源五郎蜂起に始まる一連の騒乱も鎮まって、畿内全土に平穏なひと時が戻りつつあった。そんな頃、高野の一落人の下に、数人の使者が仰々しくやってきたのだった。

「時は今ですぞ！」

と、彼らは口を揃えて言った。

「時は今、か……」

上野源五郎は破れ、内藤国貞も力を失った今、何が時は今なのか、氏綱にはさっぱり分からなかった。

「河内守様は、此度氏綱様が挙兵なされた暁には、全面的に支援なさるお考えです」

と、彼らは言う。

「……上野源五郎の如く、捨石にされたらたまらんがな」

精一杯の皮肉を込めて、そう返す氏綱に、使者たちは「ははは」と、困ったように苦笑いした。

「此度は、左様なことはありません。また、前回のように、我らが黒子役に徹することもありません」

「……と、言うこと？」

「既に、公方様の承諾も得てあります。されば、我らは、堂々たる『幕府軍』として、逆賊晴元を追討できるわけです」

「……公方様が、我らへの与力を確約されたのか？」

半分疑心暗鬼の氏綱だが、もしもそうなら、と、心密かにほくそ笑んでいた。

「無論です」

使者たちは、ここぞとばかり、大きく頷いている。

「また、当家においても、さる六月に先君植長公突然の薨去という不幸があり、それゆえ上野殿や内藤殿への与力も叶いませんでしたが、今では、河内守様の御尽力により、政国公を新たな当主に擁立し、体制も固まっております。ご心配は、無用にございます」

「…政国殿が、新たな畠山の惣領、か」

そんな風に呟きながら、氏綱は苦笑いした。如何に、昨日の敵は今日の友と言われる戦国時代といえど、畠山政国は、かつて木沢長政が擁立し、木沢滅亡後に紀伊へ流されていた、いわば戦犯ではないか。植長が死んだからといって、彼の宿敵だった男を平然と新たな家督に擁立する遊佐河内に、氏綱は小さな溜息を吐いた。

「ま、構わん。いつまでも高野山に朽ち果てているようなわしではないのだ」

と言つて、氏綱はにこりと微笑んだ。

細川氏綱が高野山にいるらしいこと、遊佐河内守が何やら企んでいるらしいこと…。その他諸々、キナ臭い陰謀の香りは、やがて芥川山にいる細川晴元の下にまで漂っていった。

ここ最近の晴元は、常に機嫌が悪かった。何をやっても、裏目に出ればかりな気がしてならないのである。一年前の、一連の丹波騒動にしてもそうだった。上野源五郎退治に六万の大軍を編成したまではよかった。だが、その後の内藤国貞を巡る問題では、三好範長に上手く立ち回られて、結局、丹波は完全に三好家のものとなってしまった。

彼の不満は、全て三好範長にあった。何をやっても失敗するのは、全て彼のせいであるようにすら思えた。何と言つても、範長はここ数年、旭日の勢いで勢力を伸ばしているのに、晴元はというと、ひたすら衰退の道を転がり落ちているような気がしてならなかった。

「氏綱が高野山にいると？」

そんな報告を受けた晴元は、その端正な顔を、苦々しげに歪めた。「ならば討伐せねばなるまいな。…とりあえず、越水の三好筑前守に使者を送り、奴に討伐を任せよう」

と、言つて、彼はパンパンと手を叩き、おもむろに祐筆を呼び寄せた。そして『管領奉書』と銘打った命令書を策定すると、早速、越水城へ急がせたのだった。

三好範長は、ひとまず五千の精鋭を率いて、八月十七日、堺に入った。

とはいえ、これは先遣隊に過ぎない。後数日もすれば、後詰の大軍が到着する手筈になっていた。弟の安宅冬康率いる淡路水軍が瀬戸内海を縦横無尽に動き回つて、増援部隊を輸送してくれることになつている。

ひとまず、それまでの間は、堺に留まつているつもりだった。どの道、この町は、高野山や畠山家を攻める上で、なくてはならぬ戦略上の要地であるから、その支配を固めておくという意味においても、範長自ら先遣隊を率いて乗り込んだのは、決して悪い策ではなかった。

「それにしても、さすがにあの木沢長政を追い落とした男だけはあるよな。遊佐河内守か。…氏綱を動かして、今度は何を企む？」

範長は、木沢長政よりも遙かに怖い鬼謀家の次の一手というものを、必死になつて考えてみた。

「なんにしても、木沢にしる、遊佐にしる、かつての敵だったお方を、平気で主君に祭り上げてしまうのですから、尋常ならざる人たちでございませぬ」

そんな小太郎範政の暢気な言葉に、範長はジトツと睨み付けた。「義堯公を滅ぼし、植長公を擁し、植長公を追放して、長経公を立て、長経公を殺して、植長公を立てる。植長公が死んだら、今度は政国公か。…たった十数年で、目まぐるしく変わったものだな。天

下の名門畠山氏も、もはや名ばかりつてことだな」

「…そうですね。されど、畠山家がそうなら、細川家とて同様の運命を辿るやもしれませんなあ。いっそ、御屋形様が木沢左京や遊佐河内を真似てみては如何ですか？」

「真似る？」

その瞬間、範長は静かに目を閉じて、

「たわけ…」

とだけ、静かに言った。

「とにかく、今、我らがやらねばならぬことは、細川氏綱を滅ぼして、河内の陰謀を崩すことだ」

「はッ！ 出すぎたことを申し上げました。平にご容赦を」

深々と頭を下げ、笑顔で謝する小太郎範政の態度に呆れつつ、範長は既に別のことを考えていた。そして、

「いつまでも晴元様に臣従しているわけにもいかんよなあ」

などと、一人静かに呟いていた。

八月二十日。

三好筑前守範長は、茶人として名高き、堺の豪商武野紹鷗しゅうおうの下に赴き、茶道の手解きを受けていた。彼に薦められるまま、随分高い茶器など購入して、準備万端整えたのだが、彼はどうにも、狭き部屋に閉じこもって、堅苦しい作法を守りながら飲む茶が好きにはなれなかった。

ただ、たった二人。何より静かで、作法のほかには面倒臭いことは一切ない茶席は、政治に疲れきった体を癒すには、それなりの効果があった。

だが…

せつかくの静けさも、

「大変でございます！」

という、立花小太郎範政の慌しい大音声により吹き飛んだ。空気

の読めない彼の態度に、範長はムツとしたが、とにかく「大変」というのだから、耳を貸さぬわけにもいかなかった。

「申せ」

と、彼が言うと、

「一大事です。せ、先日、高野山を下りた細川氏綱が、遊佐長教とともに総勢一万四千の兵を率いて、出陣し、彼らは後数刻後には、堺に到着するそうです」

小太郎範政は必死になってそう言った。

「あ、後数刻で？」

範長は、信じられぬといった顔をして、思わず持っていた茶器を取り落とした。

相次ぐ凶報に、三好範長はすっかり頭を抱えていた。

既に、西側に広がる海を除く、北、東、南の三方は氏綱軍により取り囲まれている。兵力面でも、紀伊の根来寺宗徒の援軍を加えてさらに強大化した氏綱軍に対し、三好軍は僅かに五千騎足らずであり、もしも今、総攻撃をかけられれば、如何に精強無比と称えられる三好軍といえども、ひとたまりもなかった。

だから、範長は会合衆と称される堺の有力商人たちに和睦の斡旋、仲介を依頼すると、彼自身は、武野家の屋敷に引きこもって、松永久秀や立花範政ら僅かな側近を除く、あらゆる者の出入りを禁じた。

範長は、今や絶体絶命の窮地にあった。

頼みの安宅水軍も、今は摂津沖に停泊中であり、摂津本国の増援部隊を乗せてやってくるまで最低でも三日以上の時間はかかると見られていた。即ち、三日間は少なくとも援軍が来る見込みはないわけで、その間に戦を仕掛けられると、三好方としては甚だ厄介なことになりかねなかった。

ただ…。

両軍の本格的な激突を望まないのは、何も三好軍に限った話ではなかった。堺という町に暮らし、商売を営んでいる商人たちにとっても、破壊と絶望、喪失と虚無のみ残して、これまで築き上げてきたあらゆる富や名誉、地位など全て奪い取っていく戦だけは、断固として願ひ下げだった。

だから、わざわざ会合衆が両軍和解の斡旋に乗り出すことになったのだが、窮地に追い込まれている三好方とはもかく、優勢に立っている氏綱方の説得は、決して容易いものではなかった。

「我らが和睦を結ばねばならぬ理由などない。…もしも戦を回避し

たいなら、筑前守自ら余の陣に参り、降伏せよ。さすれば、我らも軍を納めよう」

と、どこまでも強気に徹し、勝ち誇ったような顔をして言う氏綱であった。

ただ、これで諦めるほど、会合衆も甘くはない。ひとたび請け負ったからには、もはや自由都市・堺の支配者たる面子と意地に賭けて、断固として和睦斡旋を成功させるつもりでいた。これまで、あらゆる大名家、幕府さえも排除してきた彼らのプライドは、氏綱の素っ気無い態度を受けて、勢いよく燃え上がったのだった。

「もしも氏綱様が我らを攻撃なさるなら、それも結構。されど、我らが滅びれば、いったい誰が諸大名の軍資金を用立てするのですかな？」

商人たちは、口を揃えてそう言った。その言葉は、彼らが交渉に臨む際の常套句であり、脅し文句であり、かつ切り札であった。

「戦いとなれば、堺の町はたちまち焦土と化しましょう。そうなたとき、我らもただでは済みませぬが、氏綱様とただではすみませぬぞ。…それほどの覚悟がありなら、決戦なさればよろしくろ」

堺の町は、日本という国の、およそ半分近い富を握っている。と、皮肉や羨みを込めて、誰もがそう称するほどの力を持つ、国内屈指の経済大国だった。だから、この町を敵に回すのは、たとえどんな実力者であれ、自殺行為も同然だった。

氏綱は歯噛みし、後見役でもある副将の遊佐河内守長教に目をやった。遊佐河内守は困ったように、ハアと小さな溜息を吐くと、

「はつきり言って、それほどの覚悟はない」  
と、小さく、残念そうに呟いた。

「よろしいでしょう。我らとて、この町を焦土にしたくはありませんぬ。…ただ、和議ともなれば、具体的に中身を詰めねばなりません。そのために、三好殿かわが陣に参るなら、我らも前向きにお話を進めましょう」

遊佐河内守も、海千山千を潜り抜けて、ようやく今の地位を築いてきた実力者である。和議を斡旋され、そうせざるを得ない状況に追い込まれていたとしても、それで良しとするほど甘くない。すかさず逆襲に転じて、無理難題を吹っかけることなど、お手の物だった。

「ま、筑前殿にそのこと、よくお伝えあれ。されど、御返答はできれば、今日中に済ませていただきたいものですな。我らも忙しい身の上なれば、明日にも会談を終えておきたいので」  
などと言って、ニタニタと不敵に笑う遊佐河内守長教であった。

範長は呑むだろうと、遊佐河内は思っていた。彼がどう考えようと、現状、彼には条件を呑むより他に仕方がない。不利に立たされているのは、三好方なのだ。氏綱方は、その気になれば、堺に攻め入り、範長軍を蹴散らすことなど造作もなかった。

まあ、たかが頭を下げるだけである。たったそれだけのことで、三好家は窮地を脱することが出来るのだ。安いものだろう。長教はそんな風に思いながら、相変わらずニタニタと、食べぬ笑みを満面に浮かべていた。

「筑前がどう出るか。これは見ものですぞ。中途半端な意地に駆られて、容易く応じぬようなら、筑前など、我らの敵ではありませんせぬ」と、遊佐長教は言った。

ただ、氏綱本人は、長教とは違って、範長は容易く呑まないと思っていた。範長も、今や天下を左右する大大名として恐れられている男なのだ。意地もあるだろう。自分が彼の立場なら、おそらく応じまい。そう思っているだけに、氏綱は、絶対に範長は来ないと思っていた。いや、心のどこかで、そう願っていた。

そして、夜になる。

辺りはすっかり暗くなって、不気味なほどの静けさに覆われていた。夏の夜空は、実に澄み切って、無数の星々が、宝石のように美



しく輝いていた。

昼間の蒸し暑さが嘘のような心地よさに、氏綱の気分も爽快だった。家臣たちが切り分けた西瓜を頬張りながら、夏の夜を思う存分に堪能していた。

「殿、大変ですぞ」

そこに、困惑を隠し切れぬといった顔で、家臣たちが数人ほど慌しく駆け込んできた。

「何事だ？」

口に含んだ西瓜の種を思い切り吐き出すと、氏綱は家臣たちをぎろりと睨み付けた。

「きや、客人にございます」

「客人？」

氏綱は不思議そうに首をかしげ、

「こんな夜にか？」

と、言った。

「で、誰だ？ こんな夜遅くに、わざわざ陣中を訪ねてくるもの珍しい客とは？」

ゆつくりと立ち上がり、家臣たちの下に歩み寄る。流浪時代より、ずっと彼に従ってわづらわづらしている股肱の臣である。氏綱はにこやかに微笑み、彼らの肩をぼんと叩いた。

「そ、それが…。それが、み、三好筑前守と名乗っております」

その瞬間、氏綱は左手に握っていた西瓜を落とした。

きよとんとして、何を言っているのか理解できぬといった様子で、

「今一度申せ？」

と、尋ねた。

「み、三好筑前守が参っております」

「…三好筑前、だと？」

家臣のはつきりとした言葉に、氏綱は呆然とその場に立ち尽くした。そして、言葉を失った人形のように、全く微動だにしくなつた。

三好筑前守範長は、立花小太郎範政のみ従えて、威風堂々、氏綱の陣中にやってきた。

まだ夜も深い。

氏綱は慌しく威儀を正し、範長の前に姿を現した。

弱冠二十四歳。そんな青年が、自分の眼前に、深々と平伏している。それなのに、氏綱は最初から最後まで、ずっと圧倒されていた。彼の放つ、凄まじき迫力は、氏綱の度肝を抜くに十分だった。彼もこれまで様々な辛酸辛苦を舐め続け、多少のことで動じたりはしない精神力を身に付けてきたつもりだったが、彼の鋭き眼光に接すると、その瞬間、これまでの一生が何だったのかと思いたくなるような恐怖に、身が竦んだ。

一方、遊佐河内守は平然とした表情で、じろりと範長を見下ろしていた。

「氏綱公は早急な決着をお望みとお聞きしましたゆえ、失礼とは承知の上で、あえて今日中に、本陣へお邪魔させていただいた次第にございます」

と、範長が言つと、

「そ、そうか」

と、ひどくオドオドと答えるしかない氏綱であった。

後のことは、ほとんど覚えていなかった。全ては範長と長教の間で取り決められ、彼はほとんど蚊帳の外だったが、それも仕方ないと思えるほど、彼自身の心は、全く上の空だった。

範長が去った後、ようやく和睦の詳細を知ったという有様であったが、彼自身、話し合いの席に立ち会っていた以上、範長と長教の間で取り決められた和睦案に対して異議を唱えることは出来なかった。

かくして…。

三好方と氏綱方の和議は見事に成立し、八月二十七日、氏綱軍は

和睦協定に従う形で、包囲を解き、堺の町より退去していった。

和議が成立した夜、範長もまた、氏綱と似たような放心状態で、本陣へ帰ってきた。

「如何なされた？」

と、康長以下の諸将は、主君の思いもよらぬ姿に驚きを隠さなかったが、

「ただ、緊張の糸がほぐれただけでございますよ」

立花小太郎範政がそう言つと、誰もが呆れたように、「ははは」と苦笑いした。

そして翌日。

何もかも忘れきつたような顔で、諸将の前に姿を現した範長を、康長は叔父として笑っていた。

「それにしても、御屋形様には驚かされる。日ごろ、御聡明な英主で、それこそ非の付け所のない御方かと思えば、昨夜の如く、緊張の余りに気絶なされるとは……」

幼い頃より、ずっとこの甥の成長を眺めてきた康長としては、いろいろな面を持つ範長が可愛くてたまらないのだった。

「気絶？ 叔父上、それがしは気絶などしたのですか？」

すっかり、昨夜の記憶など失ったかのように、範長は、ぎろりと叔父を睨み付けた。そのいつもと変わらぬ鋭き眼光に、康長は、ようやくその笑いを止めた。

「忘れたのか？ …ま、無理もないか。下手をすれば殺されにくいようなもの。我らとて散々止めたのに、御屋形様は全く聞き入れず、小太郎のみ連れて、単身敵陣に乗り込まれたのだ。ま、そのおかげで和議は成立したとはいえ、誰しも、殺されるかも知れぬ場に乗りに込めば、緊張するだろうさ」

などと一人呟く叔父に、範長はきよとんとしたような顔で、「俺が気絶するわけないだろう」

などと、どこまでも強気に、負けじと必死に突っ張る範長であった。そんな主君を傍目に眺めつつ、小太郎範政がクスクスとこれ見よがしに苦笑いすると、範長はキッと睨み付けて、その目で、何やら訴えているようだった。

堺の包囲を解いた氏綱軍は、その後も矛を収めることなく北上し、飢えた狼の如く、貪欲に新たな標的を求めて動き出した。範長との間に結ばれた条約は、堺を主戦場としない、三好範長軍とは当面の間、戦を控える…、という二ヶ条を中心としたものであったから、彼の勢力圏にない大塚城（現大阪市天王寺区茶臼山）を攻めたとしても、別に約定違反ではない、というのが氏綱軍の理屈だった。

大塚城主山中又三郎は、細川晴元の被官であり、また三好宗三の寄騎の一人でもあった。

総勢二万の氏綱軍に取り囲まれた大塚城は、まさに絶体絶命の危機にあつた。立て籠もる山中又三郎は、僅か二千の兵を従えているに過ぎず、兵力差は絶対的だった。

三好宗三は、江口城にいた。

氏綱蜂起を受け、早速領国全土に動員令をかけたので、宗三の手元には総勢六千の兵がいた。だが、これでは到底、氏綱軍に敵うものではなかった。

とはいえ…。

山中又三郎は、晴元より寄騎として与えられている従属大名の一人であるし、彼を見殺しにすれば、宗三に従うその他の豪族たちも、宗三を頼りにならぬ主君と見て、見限らないとも限らなかった。

だから宗三としては、意地でも氏綱討伐に出向かねばならなかった。そこで、榎並に入れてある嫡子三好政勝までも呼び戻して、宗三の持てる全力、即ち総勢一万を率いて、九月三日に出陣したのである。

「負けるわけにはいかん」

と、宗三は唸っている。今年で四十五になる彼の長き一生の中で

も、今日こそが最大の正念場なのだと心に誓っていた。

不利ではある。だが、勝算がないわけではなかった。元来が、石橋を叩いても容易くは渡らぬ慎重派の宗三なのである。勝算もなく、全軍を率いて出陣するような賭けはしない。

「池田、三宅らからの返事はどうなった？」

宗三は、事あるごとに、側近に尋ねていた。

「まだ明確な返事はありませんが、これまでに交わしてきた文では好感触を得ております。必ずや我らの窮地を救うべく、はせ参じてくれましょう」

と、側近たちが口を揃えて言うと、宗三も安心したように、「そうか」と、頷いていた。

「そうだよな。これまで、わしがどれほど奴らのために便宜してやったか、その恩義を忘れたわけでもあるまいしなあ」

そんな風に呟きながら、何度も、

「そうに違いない」

とか、

「奴らは必ずわしを助けに来てくれる」

などと、自らに言い聞かせるかのごとく、必死にぼやいていた。

池田というのは、池田城城主池田久宗のことであり、三宅というのは、三宅城城主三宅国村のことであった。いずれも摂津を代表する有力国人であり、昔より摂津国内に隠然たる影響力を誇ってきた。先の木沢騒動の最中に、摂津の中部、西部、北部地域を統一した三好範長の支配下に入っていたが、依然として、大きな領地を有する有力な国人であることに違いはなかった。

ただ…。

彼らは不満だった。何と言っても、より強力な大名権力の確立を急ぎ、何かにつけて制約を加えてくる三好範長の支配に甘んじていることが嫌だった。

本来、国人というのは、幕府や大名といった上級権力に対しても、比較的自由が約束された身軽な存在だった。時にはこっち、時にはあっち、常に、強きを助け、弱きを挫くを信条に、彼らは荒れ狂う戦国乱世を生き抜いてきた。大名は国人の武力を借り、国人は大名の権威を借りて、それぞれ持ちつ持たれつの関係を保ちつつ、お互い勢力を伸ばしてきたのだ。大名も国人も、そういう視点から見れば、あくまで対等に近い存在であり、より厳密に言えば、大名なるものは、数多くの国人たちが担ぐ盟主に過ぎなかった。この場合の盟主とは、神輿と置き換えても良い。担いでくれなければ、担ぎ手がいなければ、どれだけ立派なものであるうと意味を成さない。永久に倉庫の中にしまいこまれて、一度たりとも人目に触れることなく、さびれていくだけだろう。

範長は、そうした常識を根底から覆そうとした。国人を完全な配下に組み込んで、単なる盟主から、絶対的な権力を握った君主になるうとした。それ自体が悪い試みではないし、時流は確実にそういう方向へ向かっている。ただ、事には順序があるように、何事もやりすぎは禁物なのである。範長とて、その辺りのことは重々承知していたが、何分まだ二十代の若者なので、血気に逸って、やりすぎてしまったのがいけなかった。

範長の専制政治に不満を募らせていた国人たちにとって、降って沸いたような氏綱の乱は、範長の暴政から独立する、まさにこれ以上ない絶好機であった。無論、氏綱に寝返るということは、範長だけでなく、細川晴元政権そのものを敵に回す行為であるから、氏綱の勢力が如何ほどのものなのか、しっかり見極めたうえで判断しなければならなかったが、氏綱軍は総勢二万に達し、各地に同志も多く、その勢力は比較的強大だった。ならば、彼らに躊躇う要素はどこにもなかった。それを見極めるまでの間、三好宗三に対しても色よい返事を出していたりしたが、見極めた後は、もう宗三など、どうでもよかった。

「我らはこれより、悪逆非道を貫く細川晴元を倒し、三好筑前守に

天誅を加えるッ！」

と、声高に叫んで、三宅国村と池田久宗は、それぞれの領国で決起した。その上で、細川氏綱に与力するのだと、天下に対し、堂々と宣言したのであった。

それが、九月三日午後のことである。

三宅や池田の援軍を恃みとし、彼らの力を合わせることによって氏綱軍を迎撃せんと考えていた宗三の戦略は、ここにあっけなく破綻した。要するに宗三は、三好範長の強引なまでの近代化政策の煽りを食った被害者と言えなくもなかったが、とにかく三宅と池田の離反は、宗三が描いていた必勝戦略を破綻に追い込んだわけで、「くそッ！」

と、彼はこみ上げる苛立ち、腹立ちを抑えきれぬといった様子であたり構わず叫んだり、暴れまわったりしていた。

けれど、彼らの離反がもたらした影響は、何もそればかりではなかったのである。

何しろ三宅、池田勢が宗三領に迫ったことで、宗三配下一万は身動きが取れなくなった。前門の虎、後門の狼とは、まさにこのことを表現するためにあるような言葉だった。残念ながら、今の宗三には、二方面作戦を戦うだけの力はない。

だから彼は、江口城に立て籠もったまま、様子を見るしかなかった。大塚城の救援などに赴けるはずもない。唯一の頼みは、芥川山城の細川晴元か、堺の三好範長らによる援護であったが、晴元は京あくたが堺こしじゅうろうたかはたはずのかみにいるし、彼に代わって芥川山を守る芥川孫十郎、高畠伊豆守、薬やく師寺元一くしじもとかずらは、目下、河内より芥川山に迫ってくる上野玄蕃頭元治の軍勢に対処せねばならず、援軍を出すどころの騒ぎではなかった。

一方、範長はというと、堺にあって兵力を集めているが、大塚城に援軍を派してくれるような雰囲気はなかった。無論、援軍要請の使者は何人も送っているが、そのたびに、



「我らには氏綱の軍を破るだけの力がない。いずれ阿波より、わが弟、豊前守之康と左衛門尉一存が大軍を率いてはせ参じることになつておりますので、彼らが到着した暁には、大塚城救援の兵を差し向けましよう」

と言つて、体よく断つてくるのだった。

そして九月四日夜。

圧倒的な氏綱軍の猛攻に、ついに耐え切れなくなった山中又三郎は、やむなく大塚城を明け渡して、降伏した。

幸先のいい勝利に、氏綱の気分も最高潮に達していた。彼は早速、この勢いのままに、細川政権の覇府たる芥川山城を攻め落とすべく、全軍に対して出陣命令を下したのだった。

やはり彼も、細川の間人であるから、晴元がここ十五年近くに渡り本拠を置いてきた芥川山城には、少なからぬ愛着があつた。ただ、そうした私的な感情を除外しても、芥川山を制圧するという行為には、大きな政治的意義があつたのである。何と言つても芥川山は細川氏の本拠地なのだから、これを攻め落とすことが出来れば、晴元政権の無力を満天下に晒すことが出来るし、かつ晴元に代わる細川家の惣領としての氏綱の存在感を知らしめることができる。何より芥川山城は、京と摂津、和泉を結ぶ戦略上の要地であるから、ここを攻め取ることができれば、氏綱方の優位はより決定的なものとなりうる。

だから、氏綱と遊佐長教は、大塚城を攻め落とした翌日、早速出陣して、一路芥川山を目指したのだった。

「くくく。全てが、わしの手の平の上で物事が動いておるわ」

遊佐河内守長教は、笑いがとまらなかつた。

こつも上手くいくとは、彼自身思つていなかったのである。全て

が全て、彼の考えた通りに進んでいるのだから、笑うなというほうが無理な相談であった。

彼の夢は天下取りである。畠山家の実権を握ったのも、言ってみればその足がかりに過ぎなかった。基本的に、彼という人は、かつての木沢長政とよく似た男であった。木沢が細川晴元を利用して勢力を伸ばしたように、彼は細川氏綱を使って、天下を狙うつもりでいた。

前回の氏綱蜂起は失敗に終わった。晴元の力を甘く見たのが全ての原因だったと、彼はひたすら反省した。だからこそ、今回は万全の策を講じたつもりである。あらゆる事態に備え、あらゆる策を考えた。…とはいえ、ここまでほとんど失敗といえる失敗もなく進んでみると、少しばかり不安であったりもするのだった。

ただ、策は図にあたった。万全を期しただけあって、結果は、申し分なかった。

「ま、唯一の失敗は、筑前守を葬り去ることができなかったことだが、それ以外は全て上出来。全体的に見ても、ここまでは、まず上出来と言ってよいだろう」

そんな風に一人呟きながら、改めて、その聡明な頭で、自ら立てた策というものを検証してみた。

今回の戦いは、高野山に匿っていた氏綱が蜂起したときより始まったが、彼の陰謀は、既にそれ以前から始まっていた。即ち、まず氏綱が高野山に隠れていること、そして彼が再び拳兵しようとする企んでいるということ、噂という形で流し、畿内中に不穏な雰囲気を作り出した。そうしておけば、必ず細川晴元は、三好範長に氏綱討伐を命じるだろうし、範長は高野山攻めに臨む上で、格好の前線基地となる堺に入ることは間違いないと踏んでいた。その上で、彼は用意周到に、堺攻撃の計画を立てたのである。

そして、全てが予想通りに展開した。晴元は範長に氏綱征伐を命じたし、範長は僅かな兵のみ率いて堺にやってきた。ここで範長を殲滅できれば上出来だったが、それだけは叶わなかった。即ち、今

回の作戦における、唯一の失敗がこれだった。

けれど、それ以外は全てが上手くいった。例えば、範長に不満を抱いている三宅国村や池田久宗といった有力豪族に手を伸ばして、彼らを味方に取り込むことにも成功した。これにより、三好宗三を無力化し、芥川山攻撃の前線基地となる大塚城を確保することが出来たのである。

さらに…。

大塚攻めにおいて、芥川山の晴元軍を食い止めるべく、陽動として派遣していた上野玄蕃頭元治は、大塚城陥落と同時に京へ急行し、九月十三日には、管領細川晴元を追い落として、入京することにも成功していた。まあ、上野元治の入京は当初の作戦にはなかったことではあるが、氏綱方にとって決して悪い話ではなかった。いずれ京は手に入れなければならぬと思っていたから、労苦が一つ除けたようなものである。そして何より、京が友軍の支配下に入っていれば、芥川山城を挟み撃ちにすることもできるのだ。

後は、芥川山城を攻め落とすだけである。

背後で、いちいち小うるさい三好宗三軍は、三宅国村や池田久宗らが応戦し、その動きを完全に封じ込めている。元々、三好宗三は、芥川山攻めにおける最大の障壁となりうる存在と見ていただけに、池田や三宅らの活躍は上出来だった。また堺にいる三好範長は、相変わらず兵を集めているだけで、積極的な軍事活動に転ずる気配は見えなかった。

今のところ作戦は完璧である。だが、逸つてはいけない。焦らず、慢心せず、ただ着実に歩を進める。今のところ完璧な作戦も、今後とも完璧であり続けるとは限らないのだ。全てが終わるまで、油断はならない。細心の注意を払いつつ、作戦を遂行せねばならぬと、慎重深い遊佐長教は、改めて胸に誓うのだった。

そして九月十八日。

芥川山城を守っていた芥川孫十郎は、氏綱方の提案した和議に応じる形で、城を明け渡した。如何に堅城と名高き芥川山城といえど、孤立無援の状況下で、いつまでも籠城できるものではなかったのである。

「全く、お主には恐れ入った」

念願の芥川山城に勝者として入城を果たした氏綱は、満面の笑顔で、豪快に高笑いすると、

「こつも上手くいくとは思わなかったぞ」

と、どこまでも子供のように無邪気に喜んでいた。

「されど、油断はなりませぬぞ」

長教は、常と変わらぬ淡々とした顔つきで、ぴしゃりと、彼の油断を戒めた。

「ふふふ。だが、都も、芥川山も、我らの支配下にある。もはや、晴元に何が出来よう。わははは。この余が、細川の当主となるのだ。養父上ちちうじがお亡くなりになられて、既に十五年。ようやく、この余が、養父上ちちうじの無念を晴らすのだ」

氏綱は、そう言ってニタニタと笑った。かつての養父譲りの陰気な顔は、眼前の長教ともよく似ている。

とにかく、細川政元が暗殺されて以来、延々と続く細川家の跡目を巡る内紛は、ここに一つの決定的局面を迎えた。圧倒的優位に立つて、まがりなりにも十数年間細川の統一を現出し、天下を支配してきた晴元の衰退は誰の目にも明らかとなり、彼の対抗馬としての細川氏綱の存在感が急激に高まった。

氏綱は、今や天下に大手をかけていた。だから、彼は大いに笑い、大いに喜び、そして大いに泣いた。養父高国滅亡後に味わった、あらゆる辛酸辛苦を思い返しながら、彼は誰に気兼ねすることなく、わんわんと泣いた。そして、あれほど夢見た天下が、目の前にあるのだと思うと、全てが夢のような気がして、少しばかり不安になった。

勢いに乗る細川氏綱とは対照的に、細川晴元は、彼自身情けなくなるほどの無様を、満天下に曝していた。

氏綱蜂起の後も京に留まって、自らが細川家の宗主であり、また天下人なのだと言ふ満天下に誇示していた彼は、当初、氏綱など早急に退治されるものだと言ふ信じて、範長を堺に送り込み、宗三を江口に配置した以上の策を講じなかった。本拠たる芥川山にも、通常の兵を配備していたに過ぎないし、都にも、それほどの兵を置かなかった。だが、予想に反し、氏綱軍は急激に勢力を広げた。堺を包囲して範長を追い詰め、優位な和議を取り付けると、一転、大塚城に押し寄せ、これを奪った。三宅国村、池田久宗以下摂津有力豪族を調略して宗三を無力化し、都には、かつて都を奪った上野源五郎元全の父親である上野玄蕃頭元治の軍勢五千が迫り、晴元軍はこれに対してなす術がなかった。

かくして九月十三日。

上野玄蕃率いる軍勢が入京すると、管領たる細川晴元は、嵯峨に入つて様子を見た後、翌十四日には、上野軍の凄まじき勢いに恐れをなしたのか、泡を食うように丹波へと敗走していった。將軍である足利義晴はというと、戦火を逃れるように、僅かな幕臣のみ連れて、一足早く御所から退散していた。とはいえ、將軍は元来氏綱党の盟主的存在であるから、氏綱方の一派である上野勢は、いわば友軍とみてよい存在であった。ゆえに上野勢が迫っているからと言って逃げる必要性はないのだが、逃亡する晴元により拉致される可能性もあったため、晴元方の影響力が強い御所を避け、東山の慈照寺（銀閣寺）に入ったのは妥当な判断であった。結局、晴元が嵯峨から丹波に逃れていったのは、將軍を確保できず、逆に敵方に取られたことで、政治的に劣勢にたたされたことが最大の原因であったりした。

何はともかく、晴元軍の脅威が去ったことで、都は完全に氏綱方の支配下に入ることとなった。上野玄蕃元治は、氏綱の代理人的立場で、しばらくの間、我が物顔で都内にふんぞり返ることになる。

氏綱方の優勢は、既に誰の目にも明らかとなった。氏綱の勝利は目前と見て、彼への鞍替えを検討する豪族、商人たちも相次いでいた。民衆は、いつ晴元が滅びるかを噂しあい、誰もが新たな権力者となった細川氏綱と、彼を支える遊佐河内守長教のことを楽しそうに語り合っていた。

けれど…。

誰もが、眠れる獅子として、依然として力を温存している三好範長のことを忘れていたわけではなかった。堺において、一敗地にまみれたとはいっても、実際に氏綱軍と対戦したわけでもないし、今回の一連の戦いの中で、彼だけは、まだ一人の兵も失ってはいなかったのである。

彼は、九月中頃に、情勢の暗転を見て、堺を離れていた。弟の冬康が用意した軍船に乗って、本国摂津に戻ると、越水城に入って軍備の増強を急いでいたのだ。

そして十月に入った頃、四国からは、三好之康率いる阿波衆七千を筆頭に、十河一存率いる讃岐衆四千と伊予からの援軍二千、さらに安宅冬康配下の淡路衆三千を加えた総勢一万六千の大軍が、大挙して摂津に上陸し、越水城に入ったのである。これに三好範長の直轄軍一万を加え、三好方の総兵力は二万六千にまで膨れ上がった。

「これだけの大軍があれば、氏綱など恐れるに足らん」

と、血気盛んな十河一存は、一人楽しそうに騒いでいた。弱冠、未だ十六歳。けれど、讃岐十河家の当主として、讃岐に阿波、伊予と、四国を所狭しと暴れまわってきただけあって、とても十六とは思えぬ迫力と存在感を持っていた。

「氏綱はともかく、遊佐河内は侮れんよ」

と、そんな血気盛んな弟を制しつつ、次兄三好之康は苦笑いした。「ふん。遊佐河内守がどれほどのものか知らんが、所詮、少しばかり頭がいいだけの男ではないか。之康兄者は少し気にしすぎだ。この俺様が、十河の精鋭を率いていけば、明日の夜には、奴の首を着に祝杯を上げられるものを」

そんな風に、一人強がっている一存であったが、之康に睨まれると、不貞腐れたような顔をしながらもそれ以上は何も言わなかった。

十一月に入り、丹波に亡命していた細川晴元が、内藤長頼、波多野秀忠ら、三好配下の諸大名に守られつつ、摂津に入り、十三日、越水城の北方近くにある神呪寺かんのうに到着した。

範長は、早速、三好之康、安宅冬康、十河一存、三好康長、三好長逸、三好政康ら有力な一門衆を従えて、神呪寺に入り、晴元に謁見した。

「御所様におかれましては、御無事の御到着、この筑前守、誠にお喜び申し上げます。御所様の御越しにより、兵の戦意は大いに高まり、暴虐暴政の限りを尽くす氏綱討伐の機運、大いに盛り上がっております」

などと、齒の浮くようなお世辞を述べる範長に、晴元もまた、至極淡々とした様子で、

「うむ」

と、小さく頷いた。

「時は今にございます。既に摂津には、わが三好党はじめ、総勢三万の大軍が集結しております。三好越後守殿（宗三入道）はじめ、各地には、未だ御所様に従う勢力も多く、御所様の命あらば、氏綱如きは、軽く退治して御覽にいれましょう」

などと言いながら、これみよがしに己が力を誇る範長を、晴元はぎろりと睨み付けた。言われずとも分かっている。そう言っ

たかった。けれど、できない。結局のところ、三好範長の武力がなければ、晴元は今ここに悠々と座っていることすらできないのである。細川京兆家当主ともあるう自分が、たかが被官に過ぎない三好範長の力によって、今の地位を辛うじて保っているのだと思うと、何ともいえず情けなく、空しく、そして腹立たしくなった。

その頃、都でも、晴元方の武装強化への対策が急ピッチで進んでいた。

氏綱方の最高実力者である遊佐長教は、何より都の防衛力の増強が欠かせないと考えていた。何といても、都は氏綱政権の正統性を確立する上で、欠かせない要地であるし、ここを支配している限り、政治的には、確実に優位に立つことが出来るのである。逆に言えば、ここを失うと、これまで苦心して築き上げてきたせつかくの氏綱優位の情勢も根底から覆ることになりかねず、ゆえに、遊佐長教は都の防衛力増強を急いだのだった。

「都の安定こそ、天下の安定。ゆえに、我らは早急に都の防衛力強化に乗り出さねばなりません」

という長教の進言を容れる形で、慈照寺に仮御所を設けていた足利義晴は、早速十一月に入った頃、都の北東に位置する北白川の谷を隔てた勝軍地蔵山（現在の瓜生山）に、新たな城を築城するよう命じたのだった。これは、晴元対策というよりは、晴元の岳父である近江守護職六角定頼の脅威に対抗するためのものであり、後顧に憂いなく、晴元軍と対戦するには、必要不可欠なものであった。であるからして、築城は氏綱政権を挙げた大事業となり、政権を率いる長教は山科七郷（現京都市東山区）をはじめ、あちこちから人夫を駆り出して築城にあたらせるとともに、その費用として、支配地域から臨時の年貢『御城米』を徴収したりした。

それら一連の防衛強化政策は、都の防衛強化という第一義的目的の実現のほかに、都を支配する氏綱政権の強大ぶりを天下に示すと



いう点において、十分すぎる効果をもたらしただ。またこれらの政策を通じ、氏綱政権は京都周辺の民衆を完全に掌握することにも成功したのである。即ち、人夫や年貢の調達を通じて、民衆の数や彼らの居住地域、生活様式から考え方に至るまで、全てを把握することができたわけだ。小さなことのようにではあるが、実際は何より大切なことだった。国は民あつてこそ成り立ち、土地も民あつてこそ富むのである。民のことを知る力。それは、政治を行う者がもつべき最低限にして最も必要な能力であつた。

ただ…。

かくのごとく、一見順風満帆に見える氏綱政権にも、当然死角はあつた。摂津において武力を増強している晴元方の脅威という外圧もその一つであるが、政権内部にも、深刻な問題が芽生えつつあつた。

その一つが、將軍足利義晴の病であつた。

このところ、義晴は体調を崩すことが多かつた。考えてみれば、無理もないことである。何と言っても、この人ほど肉体的、精神的に多忙を極めた將軍も珍しいだろう。何しろ彼が生まれた直後に、父である十一代將軍足利義澄は急死し、幼いながらにあちこち亡命せざるを得ぬ破目となつた。やがて將軍足利義植と管領細川高国の対立が激化し、義植が追放されると、高国により十二代將軍に擁立されるが、將軍とは名ばかりで、現実はというと、権勢を極める我假管領の顔色を覗いながら、何かと面倒臭い生活をしなければならなかつた。

その後、細川高国が衰退すると、今度は近江に逃れ、將軍でありながら、しばらくの間、肩身の狭い居候生活を余儀なくされた。やがて高国を滅ぼして力を握つた晴元により京都へ呼び戻されるも、ひたすら飽くことなく繰り返される戦いのたびに都を離れ、そして戻るといふ生活を繰り返してきた。そうした激動の一生が、彼の体に与えた影響は計り知れないほどに大きかつただろう。それだけでなく、細川、三好、畠山、木沢、遊佐といった時の実力者に翻弄さ

れ、將軍でありながら、全く思い通りにならない政治情勢に対する不満は、彼の精神を果てしなく蝕んだに違いない。

これでは体調を崩すのも、無理はなかった。

「公方様が、昨日もお倒れになられたと？」

そんな報告を受けた遊佐河内守長教は、

「ふうむ」と、腕組みながら、何やら一人考え込んでいるようであった。

「医者の見立てによりますと、過労が祟ったためだそうです。大事はないようですが、ただ、このところ、公方様はよくお倒れになりますし、御風邪も召されるようで、その御体調は、余り芳しくはないようです」

「そうか」

遊佐長教は、静かに溜息を吐くと、「これしかあるまい」と、不敵な笑みを漏らしつつ、そう呟いた。

十二月十八日。

遊佐長教は、近江坂本に亡命していた足利菊童丸の下に使者を飛ばすと、半ば強引に、彼を都に呼び戻した。

その上で、十九日、足利義晴の仮御所となっている慈照寺を、総勢二千の兵で取り囲むと、彼は義晴に対して、將軍退位を迫ったのである。

「公方様もお疲れであります。ここは、菊童丸様に將軍職をお譲りになり、静かな余生を過ごされては如何ですか？」

言葉こそ柔らかだが、拒否は許さぬという絶対の迫力を持って迫る長教に、義晴は、やむなく抵抗を断念した。元々、近いうちに菊童丸への家督譲渡を真剣に考えていた彼にしてみれば、長教のやり方は気に入らなくとも、彼の要求を拒む理由はどこにもなかったのである。

「だが、菊童丸はまだ幼い。余が出来うる限り補佐していくが、そ

れでもよいか？」

と、義晴はせめてもの意趣返しとして、そう言ったが、長教は別段気にする風もなく、

「よろしゅうござる」

とだけ、淡々と言った。

かくて、室町幕府第十二代征夷大將軍足利義晴は、同日中に菊童丸を元服させ、足利義藤（後の義輝）と名乗らせると、翌二十日、正式に將軍職を義藤に譲ったのだった。

この際、足利義藤の烏帽子親を勤めたのは、細川氏綱であった。この元服式は、足利將軍家と細川氏綱の密接な繋がりを満天下に示し、氏綱政権の正統性を証明するためのものであったから、近年まれに見る盛大さで執り行われることになった。

そして二十一日。

朝廷は、足利宗家の家督を承継した足利義藤を、これまでの従五位下左馬頭から、従四位下に昇叙させた。その上で、大内裏において、征夷大將軍宣下の儀式を執り行い、ここに、正式に足利幕府第十三代征夷大將軍足利義藤、即ち、この後、三好長慶（範長）と三好家にとって、宿命の好敵手ライバルとなる將軍足利義輝が誕生したのであった。

今や、遊佐河内守長教はすっかり時の人になっていた。

年末、大晦日、正月、年始と、目まぐるしく流れ行く日々の中で、この男は巨人になった。

粉雪舞う京の町は、いつものように、遊佐長教の手の中に転がっていた。畠山の筆頭家老…、とは言っても、將軍家から見れば、ただの陪臣に過ぎない男が、畠山はもとより、盟主と仰ぐ細川氏綱や將軍家をも凌駕する圧倒的な勢威と権力を握って、この町の頂点に君臨しているのだ。不思議といえば、これ以上不思議な話もなかった。

都も、今と昔では、大きく変わった。管領の細川晴元は既にない。彼に取って代わったのは、長く流浪の日々を過ごし、貧しき浪人にまで身を賣っていた、かつての細川高国の養子たる細川氏綱であった。そして將軍職も、高国による義植追放以来、二十年以上の長きに渡って在職してきた足利義晴から、その子供の義藤に代わっていた。

その全てが…、とは言わないが、その大部分は間違いなく遊佐長教がもたらしたものである。そんな風に、上に將軍、管領（氏綱）を仰ぎながら、全てを差配しているのが遊佐長教であることを誰もが知っているから、皆、遊佐河内守長教こそが、この町の、即ち天下の支配者だと思つうようになっていたのだった。

けれど…。

遊佐政権とて、決して磐石ではない。確かに氏綱党で固めた幕府内では、彼の地位と権勢は、まさに絶対的であった、けれど外野には、依然として氏綱政権に反抗する細川晴元が、強大な力を保つたまま健在だったのである。

年も明け、天文十六年（一五四七年）になった。

一月は、拮抗する両陣営の激しい睨み合いのほかには、何事も起きなかったが、二月になって、ついに三好範長が本格的な軍事作戦を開始し始めたのであった。

三好範長率いる三好軍総勢三万五千は、まさに、怒涛の勢いで、摂津国内の氏綱方諸豪族の領内に進撃していった。

即ち…。

二月十五日、三好軍は原田城を取り囲み、二十日、これを陥落させた。さらに三月に入って、三宅国村の立て籠もる三宅城を包囲すると、三月二十二日、ついにこれを攻め落としのだった。

しかし、こうした三好方の大攻勢を受けても、京の氏綱政権は、右往左往するばかりで、援軍を派兵することすらしなかった。それというのも、氏綱政権内部で、將軍家、管領家（細川氏綱）、遊佐長教三者が主導権を巡って対立するようになったからである。要するに、この当時の氏綱政権は、全くの機能不全に陥っていたのである。だから遊佐長教が、三好方の行動を見て、すかさず援軍を送り込もうとすると、彼の独断専行を快く思っていなかった氏綱が、將軍家と手を結んで、これに待ったをかけた。結局、それがきっかけとなって、三者入り乱れての、醜くも下らぬ権力闘争が延々と繰り広げられるようになったのであるが、三宅城が陥落した辺りから、彼らもようやく冷静を取り戻すようになった。このままでは三好軍に摂津全土を掌握されてしまうと、氏綱政権はおしまいである。そんなことは赤子でも分かる道理だった。

内輪で争っている場合ではない。

滅亡するかもしれないという絶対的な危機意識が、彼らを再び一つに纏め上げたわけだ。それにしても、三好軍の圧倒的な攻勢が氏綱政権の結束を取り戻させるきっかけになったというのは、これ以上ない皮肉であったが、ともかく、ここに至ってようやく、氏綱方は

三好方に対する反転攻勢に出られる態勢を取り戻したのだった。

三月二十九日。

將軍足利義藤とその父義晴は、勝軍地蔵山に築いた北白川城に入り、いざというときに備えた。…といえば聞こえがいいが、早い話が確固たる脱出ルートを確保しただけの話である。義晴の義兄である前さきの関白近衛かねはく植家えかねいもこれに随行するなど、將軍家に近い公家衆も、三好軍の上洛に備えて、いつでも亡命できるよう準備を整えていた。とりあえず、いったん後方に引いて、いつでも脱出できる準備を整えた上で、義晴は正式に、細川氏綱に対して、細川晴元及び三好範長の討伐を命じた。けれど、逃げ道を予め確保しておくという、完全に戻る向きな將軍家の態度が配下の士卒に好印象を与えるはずもなく、案の定、氏綱方の戦意は見る見る下がって、しまいには氏綱方の敗北を悟って、逃げ出す兵も相次ぐ始末であった。それゆえに、

「上様におかれましては、速やかに都にお戻りあり、兵たちを前線で督戦してくださいませ」

と、長教自らそんな書状を送らねばならなかったほどである。

そして、將軍家のそうした態度に愛想をつかしたのは、何も下級の足軽たちだけではなかった。政所執事という要職にある伊勢貞孝もまた、將軍退去の報に呆れ返った一人であった。

「普通、戦の折、戦況が苦戦であればあるほど、総大将は自ら死地に赴き、兵を鼓舞するものだ。だが、公方様は、後方に逃げられた。武家の棟梁ともあるう御方の振る舞いとは、到底思えぬ。即ち、既に勝敗は決まったも同然だ」

と言つて、彼は早速書状を記すと、それを三好範長の下に送った。領地を安堵してくれるならば、今後は三好方のために働くという内容であったが、何はともかく政所執事という、今で言うなら財務大臣と法務大臣を兼ねたような重臣中の重臣が、將軍家の家臣に過ぎ

ない細川晴元の家臣、即ち陪臣に降伏したのだ。これが指し示す意味など、あえて説明するまでもないだろう。即ち、範長の政治的立場は、既に管領細川晴元と同等か、あるいはそれ以上だと、幕府高官からも目されるようになっていたということだった。

それはともかく、伊勢貞孝までもが幕府を見限って、三好方に靡いたことが天下に知れ渡ると、氏綱方を取り巻く状況は、一挙に悪化した。兵の離脱は歯止めがからなくなり、士気低下は深刻な次元に達した。

負けるかもしれない。

一瞬でもそんな感情を抱いてしまった軍隊は、古今東西を問わず、脆い。勝つ意欲なき軍に、勝ち目などあるうはずもなかった。

四月。

三好範長は伊勢貞孝からの書状を、飽きもせず、くどくどと毎日のように読み返していた。

そして、そのたびに、

「俺は政所執事にも認められたのだ」

と、嬉しそうに騒いでいたものだった。

元来、範長という人には、旧来の権威を必要以上に尊ぶところがある。晴元を主君として仰いできたのは、彼が名門細川宗家の棟梁であり、かつ幕府管領であったからということも大きい。それでいて、昔からの常識を壊そうとしているのだから、随分矛盾に溢れた人でもあった。

「御屋形様という人は、さっぱり分からん」

と、旧来の権威なるものに何の興味関心もない松永久秀は、彼のそんな姿を見るたびに、そうばやいていたが、伊勢貞孝からの書状そのものには大きな政治的意義があったから、そういう意味では、久秀とて嬉しくないわけではなかった。

「ところで、久秀。六角殿の一件、どうなっている？」

それまで、子供のようにならぬに、一枚の手紙を有り難がついた男とは思えぬ真剣な眼差しで、範長は言った。

「あ、六角殿ですか。六角殿なれば、我らに与力してくれること、ほぼ間違いありません」

「誠か？」

「はッ！ 既に、六角殿の下に派した使者が戻り、その旨、晴元殿に報告したそうにございます」

「…そうか」

六角定頼は、晴元の岳父である。言ってみれば、晴元の後見役に近い。それだけ晴元政権にも重きを成してきたし、晴元の信任も厚かった。また都に近い南近江を領有しており、先祖累代同地を治める六角氏の国力は、定頼の代になって最高潮に達していた。晴元にとっては、六角定頼は、何としても味方としておかねばならぬ大切な存在であり、敵にとっては、何より厄介な相手であった。

氏綱政権が京と近江の狭間にある勝軍地蔵山に新城を築いたのは、將軍らの脱出ルートを確保するという目的のほか、強勢を誇る六角定頼への対抗策という意味合いもあった。それが功を奏したのかどうかは分からなかったが、ともかく定頼は、このところ傍観姿勢を決め込んで、とりわけ義理の息子である晴元を支援するわけでも、その敵である氏綱方に与力するわけでもなく、情勢の激変を虎視眈々と見守っていた。けれど、何もしていなかったわけではない。本城である観音寺城に精鋭一万五千を集め、いつでも出陣できる態勢を整えた上で、彼は激闘渦巻く京都情勢から背を向けて、暢気に堂々と昼寝していたのだった。

だが…。

その眠れる獅子が、ついに旗幟を鮮明にしたのだ。

これで戦局は動く。

範長は思わず、にっこりと微笑んだ。



六角軍が晴元方として動き始めると、京都情勢は一挙に変わった。氏綱方の盟主たる足利義晴・義藤親子は、北白川城に閉じ込められて、身動きがとれなくなつた。包囲する六角軍は一万を超え、一方足利軍は僅かに数千だつたから、このままでは陥落も時間の問題だつた。そこで、遊佐長教は、貴重な軍をわざわざ割いて援軍として差し向けたが、勢いに乗る六角軍の敵ではなかつた。

一方、六角軍が本格的に動き始めた頃から、三好範長も再び、活発な軍事作戦に打って出るようになった。四月中頃、彼は主力軍二万を率いて、芥川山城を取り囲んだ。同城を守るのは、氏綱方の有力部将である薬師寺元房であつた。

「…さすがに、堅いな」

範長は、山上に聳え立つ堅城を恨めしげに眺めつつ、そんな風にはやっていた。

「無理もありません。何しろ、晴元殿が、ここ十五年以上に渡り本拠を置いてきた城ですから。…気長にやるより、他に手はありません。すま」

と、知つたような口ぶりで、小太郎範政が言うと、範長は「ふん」と、少しばかり腹立たしそうにそっぽを向いた。

ただ、時間はあるのだ。

範長は、ニタニタと笑っている。こちらは、時間がたてばたつほど味方が増える計算になつている。何しろ、六角が味方したことで、情勢は一挙に有利になつた。考えてみれば、一目瞭然だろう。何しろ、西にいる摂津の三好方と、東にある近江の六角が、東西より同時に攻めるのである。挟撃される形となつた氏綱方の不利は、誰の目にも明らかだつた。

ならば、後は待てばいい。果報は寝て待つのが基本である。ならば、寝よう。範長はそう呟いた。さすが、いずれ、眼前の堅城も自分のものとなるだろう。

「寝る。万一のことあらば、すぐ報告せよ。諸事、叔父上に任せてあるから、その方は叔父上を補佐せよ！」

と言うと、範長はさつさと本陣を去って、近くにある寺に入ると、その場にごろりと寝転がって、目を閉じた。

範長が寝ているうち…、情勢はますます変わっていった。

まず、三好方優位であることに変わりはないが、六月二十五日になって、ようやく芥川山城が陥落した。城将薬師寺元房は降伏し、城は細川晴元に返還した。

さらに同日、三好之康を総大将に、三好長逸、岩成友通、篠原長房らを補佐につけて送り出していた別働隊は、池田筑後守久宗の居城たる池田城を攻略している。

かくて、三好方は、一年近い時間をかけたものの、ようやく摂津再統一を実現したのだった。

こうなると、もはや騎虎の勢だった。

三好軍は細川晴元を奉じて、怒涛の如く、京を目指して進撃を開始した。

ゆえに…。

七月十九日、北白川城の足利義晴・義藤親子は、圧倒的な三好・六角連合軍の攻勢に耐え切れず、城を焼き払った上で、近江坂本へ落ち延びていった。

都は、再び晴元政権の支配下に入った。

一方、京都陥落を知った細川氏綱、遊佐長教らは、やむなく本拠地である河内高屋城へ引き上げていった。とりあえず、紀伊や河内、大和ら氏綱政権の与党が多い地域で、兵を再建し、再び上洛しようと企んでいたのであるが、それを見逃すほどに、甘い細川晴元でもなかった。

細川晴元は、上洛するや否や、範長をはじめとする諸将に対し、高屋の氏綱政権残党を討伐すべく、出陣するよう命じた。休む間な

き電撃作戦だが、彼らの力が復活する前に叩かねば、厄介な泥沼戦争に陥りかねず、範長も誰も、この方針に異議は唱えなかった。

七月二十日。

三好範長、三好宗三、香西元成、三好之康、安宅冬康、十河一存、松浦興信、畠山上総介尚誠らが、三好宗三の嫡子政勝の居城である榎並城に集結したのである。

総勢四万。

そして、高屋城にも、氏綱軍主力が集結していた。即ち、細川氏綱、細川藤賢、畠山政国、遊佐長教らを大将とする総勢二万である。両陣営の対決は近い。

細川晴元、細川氏綱。

細川政元が、養子澄之の郎党により殺された永正の錯乱より、既に四十年。澄之、澄元、高国の三兄弟が、延々と繰り返し返した細川の後継争いは、それぞれの子供に引き継がれ、今に至った。

晴元と氏綱。

澄元の子、高国の養子。

それぞれの親から受け継いだ内乱を、自分の勝利で終わらせるべく、それぞれ、その全力を集結し、来るべき決戦に備えていた。

決戦は近い。

見上げれば、夏の空は、すっきりと青く、雲ひとつなく輝いていた。のどかに吹き抜ける風に、そよそよと大地が揺れる。けれど、そこには、何の気配も感じられない。薄気味悪いほどの不気味な静けさが、この世界の全てを包み込んでいた。

【雪辱編】第059章 舍利寺の合戦

榎並に集結した晴元軍は、軍議を開き、明日をもって出撃するところが、全会一致で決定した。

範長は、榎並城の一角に与えられた宿所に戻ると、そのことを各将に伝えた。誰もが当然といった顔をして、燃え上がる戦意をその全身に表していたが、範長本人は、余り気乗りしない風であった。「如何なさいました？」

そんな主君の様子を見て、不安そうに、三好康長がやってきた。

「いや…。なんでもないので、明日の決戦のことが少々気にかかるのです」

と、範長は言った。

「…御屋形様は、よもや明日の戦で、我らが負ける可能性があるとしても仰るのか？」

叔父として、何かと気苦労の多いこの甥を少しでも助けてやろうと、康長は、励ますような口調で、

「そんなことはないぞ」

と、言った。

「いや、負けるとは思っておりませんが…。おそらく大勝するでしょう」

範長は、そう言って、にっこりと微笑んだ。

「ならばよいではないか。…ならば、御屋形様は何ゆえ左様な顔をなされる？ 御屋形様はわが三好だけでなく、榎並に集まった全軍の、いわば御大将。御屋形様が左様な御顔をなされると、全軍の士気にもかかわりませぬぞ」

「…それは分かっているのです。だが…、だが、ここで氏綱が滅びれば、世の中がどうなるのだろうと、少し思っただままでのこと」

そんな風に呟く範長に、康長はぼんと胸を張って、

「そんなことははなから知れたことにごさいます。御屋形様の天下

です！」

と、きつぱりと断言した。

「余の天下、か…。ならばよいのですが。ただ、氏綱が滅び、晴元殿の天下が戻るようなことだけは、断じて防がねばならぬと思っております」

「…」

「天下はそれがしが取ります。断じて、断じて晴元殿には渡しませぬ」

範長が、その口で、はつきりと細川晴元への反抗を示したのは、これが初めてのことでないかと、康長は思った。だから、彼はただ呆然と常とは違う甥を見つめ、ただ絶句していた。

「晴元殿は、かつてわが父元長を殺し、さらに静の方も殺した。俺の側近だった和田新五郎も、惨いやり方で殺したのです。全て、俺が忘れていると思ったなら、大間違いだということを思い知らせてやる。晴元殿には、二度と天下はやらん。氏綱を滅ぼしたなら、天下はこの三好筑前守が握ってやる！」

いつしか口調が乱雑になっていることにも気づかず、叔父の面前にて、そんな風に怒鳴っている範長は、確かにいつもとは違うようだった。

「…静の御方、でございますか」

康長は、ここ二十数年、ずっと範長を見てきたが、彼がこれほどの怒りや憎悪を表したのは、元長が横死した直後以来のような気がしていた。それにしても、依然として静の方のことが彼の頭の根底にあつて、それが晴元に対する恨みの根源となつていることに、康長は驚きを隠せなかった。

七月二十一日、朝。

三好軍を中核とする晴元軍は、榎並城を発し、南進した。

総勢四万。

天下分け目の決戦を挑む軍としては、申し分ない大軍であった。  
一方、遊佐河内守長教率いる畠山軍を中核とする氏綱軍も、高屋城を發して、北上した。

総勢二万二千。

両軍は徐々にその距離を詰めながら、やがて、ぶつかつた。

場所は天王寺の東に位置する舍利寺（現大阪市生野区）を中心とする地域であつた。

両軍合わせて総勢六万を超える兵士たちが、敵味方に分かれつつも、同じ場に大集結したのである。これほどの数が一堂に会したのは、それこそ、応仁の乱以来ではないかと思われるほどで、人々は、どちらが勝つのか、固唾を呑んで見守つていた。

正午頃、両軍は激突した。

無数の矢が、空を舞う。青々と輝く夏の空が、矢一色に染まつたとき、おぞましき絶叫と喊声が、戦場に高らかと響き渡つた。

北と南に布陣する両軍の、凄まじき矢の撃ち合いは、しばらくして終わつた。すると、今度は両軍の歩兵足軽が前へ出、それぞれが総攻撃に打つて出た。

晴元方からは松浦興信の軍勢が、真つ先に押し出した。畠山上総介の軍も、負けじと進む。

激戦は、更なる激しさを呼び、敵も味方も分からなくなるような乱戦の中で、確実に、息のない動かぬ骸だけが確実に増えていった。悲鳴とも絶叫とも、喊声ともつかぬ大音声が響き渡る中、三好範長は本陣より、ジツと、激しさを増す戦場を眺めていた。

「其の疾きこと風の如く、其の徐かなること林の如く、侵掠すること火の如く、知りがたきこと陰の如く、動かざること山の如く、動くこと雷霆の如し……」

範長は、『風林火山』の由来となつた孫子の言葉を、ぼんやりと諳んじながら、まさに山の如く、床机の上で、彼は微動だにしな

った。

どんな報告にも、彼はただ首を縦に振るだけで、何一つ答えを返してやらなかった。代わって、側近の立花範政が代弁するようにいちいち指示を出しているが、範長はというと、睨みつけるような鋭い視線を、死闘渦巻く戦場のほうに向けたまま、変わることもなき仏頂面を保っていた。

何はともかく、戦況は、数に勝る晴元軍が終始優勢を維持したまま推移していた。そのためか報告を受け、範長に代わってあれこれ指示を出している小太郎範政の顔も、幾分晴れ晴れとしていた。

戦況は全体的に晴元方が優位であるが、氏綱方も意地を見せて抵抗してくるため、まだまだそう簡単に決着が付きそうな状態ではなかった。

晴元方が押せば、必死になって氏綱方も押し返す。綱引きの如く、引いたり押したりを繰り返しながら、次第に時間だけが流れていく。正午頃に始まった戦いは、気がつくくと夕刻を迎え、そろそろ夜にならんとしていた。

激戦は続く。次から次に人がゴミのように死んでいく。骸は山の如く積み上げられ、小川は真っ赤な朱色に染まっていた。

けれど、そんな無情かつ無意味な激戦も、夜を迎えた頃にはさすがに決していた。結局のところ、合戦開始よりこの方、ずっと優勢を維持し続けてきた晴元方の勝利で幕を閉じることになったわけである。兵力的には晴元軍が氏綱軍を圧倒していたわけだから、無難といえは無難であり、当然と言えば当然の結果が出ただけの話であった。

その日の夜から、次の日の朝にかけて、続々と、勝報が範長の下に舞い込んできた。

どれだけ討ち取ったとか、手に入れた首にはどれほどの値打ちがあるのか、などとといったことを比較したりして、どれも嬉々とした表情で範長の下にやってきた。諸將にしてみると、苦勞して掴み取った手柄なのだから、喜ぶのも当然であったが、小さき手柄に汲々として無邪気に喜んでいる家臣たちの姿は、範長にとって余りいい気がしなかった。

それでも、とりあえずは「ご苦勞であった」とか、「そなたたちの活躍で、此度の勝利は得られたのだ」などと散々おだて、励まし称えていたが、それらは範長の本心であって、本心ではなかった。

ただ、勝ったということに対しては、純粹に嬉しかった。もしも敗北していれば、自分も家臣たちが誇らしげに持ってきたものと同じように、ただの首だけになって、氏綱か遊佐長教の面前に晒されていただろう。そう思うと、途端に全てが怖く、恐ろしくなった。

結局、今回の戦いで両軍合わせて二千人近い死者を出したのだという。史上稀に見る激戦に相応しい、凄まじき、悲惨な結果に終わった。戦場には未だ血生臭い骸が山の如く転がっていたし、近くを流れる小川は、真っ赤な朱色に染まっていた。

「勝利、か……」

不思議なものだと思いつつ、範長は、改めてその余韻に浸っていた。合戦の悲惨さを差し引いても、勝利の味というのは、何度味わってもなかなか良いものだった。

「申し上げますッ！」

そこに、慌しく使番が駆け込んできた。戦場ではありふれた光景ではあるが、興を殺がれた範長は少しばかり不貞腐れたような顔を  
して、

「何事だ？」

と、尋ねていた。

「敗走した細川氏綱、遊佐長教らは若林（現大阪府松原市）に陣取って、反転の機会を狙っているようです」

「…若林に？」



「はッ！」

使番の威勢よい返事に、範長は思わず、にやりと不敵な笑みを漏らした。

「氏綱らは、性懲りもなくまだ我らに楯突くつもりらしい。…ならば、思い知らせてやるう。今更我らに立ち向かったところで、勝ち目など一切ないということをな」

と、咳きながら、

「全軍に伝えよ。準備が整い次第、若林に立て籠もる細川氏綱、遊佐長教を討伐すべく出陣するッ！」

凄まじき、それこそ天地を切り裂かんかのような大音声を張り上げて、居並ぶ群臣にそう命じる範長であった。

七月二十三日。

三好軍を主体とする晴元軍は、舍利寺を発した。そして二十四日、若林に陣する氏綱軍と、再び決戦したのである。

といつても、勢いに乗る晴元軍と、敗北の後遺症から抜けきれない氏綱軍では、到底勝負にならなかった。

「くそッ！」

氏綱は、悔しそうに舌打ちした。

「河内、どうすればいい？ このままでは我らの滅亡は必至ぞ」

彼は、ここずつと遊佐長教に対して、こみ上げる不満と不安を思い切りぶつけていた。舍利寺の一戦に敗れて以来、彼はすっかり自信を失い、自暴自棄になっていたのだった。

遊佐長教は、何も言わず、ただジツと敵陣の方角を見つめていた。時流とは実に不思議なものだと、彼は心の中で苦笑いしていた。半年前まで天下の全てを差配していた自分が、今や敗軍の将となつて、自らの政治生命すら危うくなりかねない危機の中に立たされている。盛者必衰とはよく言ったものだが、かつての木沢長政もこんな気持ちだったのかと思うと、長教はハアと大きな溜息を吐いた。

「氏綱様、お言葉は慎んでください。諸将の前でござる」

長教は、氏綱をぎろりと睨み付けると、

「まだ我らの負けと決まったわけではござりませぬ」

と、はつきりとした口調で言った。

遊佐長教には、僅かではあるが勝算があつた。無論、賭けに近い。成功するかどうかも分からない。だが、まだ希望が完全に費えたわけではないのだ。などと心の中に言い聞かせつつ、

「我らは勝ちます！」

と、動揺する氏綱に、ぴしゃりと言い切った。

その後…。

晴元軍の圧倒的攻勢を受け、氏綱軍の敗色は誰の目にも明らかとなった。こうした戦況を受け、遊佐長教も無意味な抗戦を諦めたのか、氏綱の了解を得て、全軍に撤退命令を下した。

これにより、その日のうちに氏綱軍は晴元軍の追撃を振り切りつつ若林から敗走し、最後の本拠地たる河内国は高屋城へと落ちていった。

【雪辱編】第060章 三好家御家騒動

ところ変わって、摂津国は越水城。

三好家家臣からは、『西の丸様』『西の御方様』などと敬称されているお雅の方は、深刻そうに頭を抱えながら、困ったように溜息を吐いていた。

「如何した？ 左様に溜息ばかり吐いて…」

と、彼女の面前で、ちょうど千熊丸をあやしていた立花又右衛門は、純粹に娘を思う父親として、そう言った。

「いえ、別に…」

言葉を濁しながらも、彼女は、ただぼんやりと窓の外に広がる青空を眺めている。又右衛門は困ったように苦笑いしつつ、

「あのことで悩んでいるのか？」  
と、言った。

ここ最近、立花又右衛門は、主君範長の嫡子たる千熊丸の傳役として、越水城西の丸を出入りすることが多かった。だから当然、娘を取り巻く環境や状況については、それなりに把握しているつもりだった。

「嫌なら、断るといふ手もある。お主はお主の道を行け。周りが何と言おうと気にするな」

又右衛門は父親として、必死に娘を励ますのだが、娘には娘の立場があり、もはや昔のような単純な親子ではいられなかった。だから娘は、

「そつですね」

と、力なく呟くだけで、心既にここにあらずといった風に、相変わらずぼんやりと空など見ては、しきりに溜息など吐いていた。

既に、立花家は、昔のような名もなき足輕一家ではなくなっていた。一家の主たる又右衛門は、天下の大大名三好筑前守範長の嫡子千熊丸の傳役という大任を担っている。その娘たる雅の方は、範長

の寵愛を一身に受ける側室であり、かつ範長との間に姫を儲けている母親でもあった。長男の小太郎範政は、範長の小姓衆から頭角を現し、今では松永久秀の後を引き継ぐ形で、範長の筆頭側近的な地位を占めている。

そんな一族であるから、又右衛門がいくら父親として、

「お前の道を歩め」

と言つても、『西の丸様』と仰がれている身の娘としては容易く応じられるはずもなかった。

このところ、三好家の奥御殿は、どす黒い陰謀と、薄汚い権力闘争に染まりきっていた。

権力闘争というのは、簡単に言つてしまえば、三好家大奥の主導権を巡つての、雅の方と御台所の間で繰り広げられている果てしなき対立のことであつた。これだけでも実に厄介な問題であつたが、それだけに留まらず、三好家家臣団の出世競争が複雑に絡み合ったことで、三好家を揺るがしかねない深刻な政治問題へと発展していったのである。

状況は複雑である。

今年、即ち天文十六年（一五四七年）四月のことであるが、これまで大奥を束ねてきた筆頭老女のお福が、かねてからの体調不良がさらに悪化したこともあつて、細川氏綱征討のために出征中の範長に隠居を願ひ出したことが、問題をより深刻にするきっかけとなつた。雅の方は、三好範長の寵愛を一身に受けている。その上、彼女と範長の間には姫までいる。父は三好家世子の傅役、兄は範長の筆頭側近という三好家の中枢を担う重臣にまで出世していた。だからこそ、彼女こそお福の後継者として、大奥を率いるべきだとする世論が沸きあがつたのも、当然といえば当然だつた。

だが…。

雅の方をもつて大奥の支配者とすることに、不満を持つ者もいた。

彼らは、如何に主君の寵愛を受けていても、側室に過ぎない以上、彼女に大奥を統べる資格はないと主張していた。奥というのは、基本的に正室を補佐するための組織であり、ならば大奥の支配者は正室たる御台所様以外にないと言い出したのだった。

北の御方とか、丹波御前、波多野御前などと称されている御台所は、形こそ範長の正室であるが、傍目からも哀れに思われるほど、夫から冷遇されていた。それゆえに、寵愛されている雅の存在感が急激に高まってきたわけだ。しかし、御台所と範長の間に、待望の嫡子たる千熊丸が生まれたことで、状況が変わった。如何に彼女が範長に冷遇されていようとも、いずれ千熊丸が家督を引き継げば、彼女は国母として、絶大な影響力を振るうことになるのだ。ゆえに、今のうちから彼女におもねっておこうとする者が後を絶たず、そういう者たちが、いわゆる御台一派を形成し、雅の方を中核とする西の丸派と対抗するようになったのであった。

というわけで…。

大奥は、御台と西の丸を中心とする二つの派閥に分裂してしまっただ。けれど、お福の引退と、その権限が西の丸に移行したことは、御台一派にとって大きな打撃であり、これ以後、拮抗していた両派の勢力図は、次第に西の丸派優位に展開していくことになる。

天文十六年も十月になった。

七月末の舍利寺の大勝から三ヶ月が過ぎた頃…。依然として喜びの雰囲気は抜けきらぬ越水城に、三好範長の命を受けた立花小太郎範政がやってきた。

この頃、三好範長は、未だ細川氏綱や畠山政国、遊佐長教らが立て籠もる河内高屋城を攻囲しており、容易く帰還できるような状況ではなかった。けれど、十月六日という日は、四月に暇乞いをして

了承されたお福が、自らの跡目を雅の方と定めた上で、ようやく城を出る日でもあったから、その見送りも兼ねて、自らの代理として、寵臣の小太郎範政を差し向けたというわけであった。

「断るのか？」

小太郎は、すっかり弱腰の妹を激しい口調で詰ると、

「それはならんぞ」

と、言った。

「せっかくの地位だ。権限だ。利用せぬ手があるものか」

小太郎はぎろりと、妹を睨み付けた。妹は、その鋭き眼光に、思わずたじろいだ。

「でも、これを引き受けたら、御台様と本当に対立することになるのよ。そんなことになったら…、そんなことになったら、大奥は真っ二つ。殿様だってお怒りになられるでしょう」

雅の方は、そう言って、目を伏せた。

「構うものか。御台様がなんだ。お前は御屋形様の御寵愛を一身に受けている寵妃だぞ。自信を持って！」

小太郎範政は、いつになく必死であった。

無理もない。

彼にとつて、雅の方は、自分の、そして立花家の更なる成長を約束してくれる強力な担保の一つであった。現状、お雅は範長の絶大な寵愛を受けて、大奥内に確固たる地位を築いているが、それとて水物、いつ何時、範長の気が変わるやもしれず、そうなれば、立花家や小太郎の飛躍的出世を妬む者たちに反撃の機会を与えることにもなりかねないのである。

そうなる前に手を打ちたい。小太郎は、常々そう考えていた。

その上で、何より邪魔なのは、御台所である。御台所を排除し、妹であるお雅を、完全な大奥の支配者とする。そうすれば、多少範長の寵愛が薄れても、小太郎の権勢は、容易く揺らいだりしない。

だからこそ、彼は、お福よりもたらされた、思いがけない大奥総取締の権限を、あえて自ら断ろうとする雅の方の態度が許せないのだった。

「御台殿との対決を恐れているなら、それは心配には及ばぬ。いずれ、この俺が御台を、御家から追放してみせる！」

「つ、追放？」

聞き捨てならない小太郎の不遜な言に、雅の方は思わず身を乗り出して、ぎろりと睨み付けた。けれど、どす黒い野心に燃え上がった兄は、ニタニタと笑うだけで、それ以上は何も言わなかった。

三好家中は、肝心の範長の知らないところで、御台所派と西の丸派の二つに、完全に割れていた。

西の丸派の筆頭は、小太郎範政である。その父たる立花又右衛門も、中核的存在と位置づけられていた。また三好長逸、三好政康、十河一存といった有力な三好一門も、とりあえず西の丸派とされていた。彼らの場合、純粹に『西の丸様』こと雅の方や、立花家を支持しているというわけではなく、単純に、御台派の中核を占めている松永久秀、内藤長頼兄弟に反発したがゆえの参加という面が大きかったが、とにかく西の丸派の中核を担っていることに変わりはない。

一方御台派には、その父である波多野秀忠と、松永兄弟が中核的存在として名を連ねていた。波多野秀忠はともかくとして、松永兄弟が御台派に肩入れしている理由としては、似たような経緯で頭角を現した立花家への対抗心もあっただろうが、それ以上に内藤長頼の個人事情によるところが大きかった。何しろ、丹波守護代として同国を纏めていかなばならぬ長頼にとって、丹波国内では内藤家に匹敵する有力国人の波多野家と敵対することは極力避けねばならなかったのだ。波多野秀忠が御台派の重鎮となつている以上、西の丸派に肩入れするわけにはいかなかったのだ。

また、御台派には、篠原自遁、篠原長房、岩成友通といった重臣も名を連ねていた。彼らは、御台や松永兄弟がどのとうというより、この政争を利用して、西の丸派の中核を占める一門衆を出し抜き、三好家中でより高い地位を得ようと考えているだけであった。けれど実力的に西の丸派に水をあけられている御台一派にとっては、心強い味方には違いなかった。

その後、小太郎範政は、西の丸御殿の一角にある、千熊丸の御殿に向かった。

ここは、どこよりも盛大な造りになっている。見ようによっては、城主たる範長の居住区よりも、遙かに立派であった。まあ、それだけ千熊丸は範長に愛されているのだろう。羨ましい話だと内心苦笑いしつつ、範政は御殿内を我が物顔で闊歩していた。

この御殿の一切は、まだ弱冠五歳に過ぎない千熊丸に代わって、傅役である又右衛門が取り仕切っていた。即ち、小太郎範政の実父である。小太郎が、わざわざここへやってきたのも、千熊丸をあやすためではなく、父と密議を交わすためであった。

「それしかないのか？」

又右衛門は、目を閉じたまま、苦りきった顔をして、そう呟いた。「それしかありませんな」

小太郎は、はっきりとした口調で、そう言い切った。

「…だが、小太郎よ。そこまですて、権力や地位、富を手に入れねばならんのか？ 今のままでも、十分だとは思わんのか？」

そんな風に言う父を見て、また始まったと、小太郎は呆れたように天を仰いだ。父はというと、いつものように息子の呆れ顔を鋭く睨みつけてくる。

小太郎にとって、父のこういう甘い態度が大嫌いだった。今は生きるか死ぬかの戦国乱世だ。甘っちょろいことを言っていてどうにかなる世界ではない。出世すると決めたからには、それこそ天下人



にだつてなつてやるぐらいの心構えでなければ、戦場に空しく散るか、あるいは中途半端な身分に燻つたまま人生を終えることになる。「父上は忘れたのですか？ 我らがまだ貧しかった頃、とるに足らぬ身分に燻っていた頃のことを…。父上は、度重なる苛めを受けて、どれだけ手柄を挙げてても出世できず、あろうことか、上司たちに手柄を横取りされては、泣き寝入りを余儀なくされていたではありませんか。散々身分が低いと、馬鹿にされました。悔しくはなかったですか？ 辛くはなかったのですか？ 俺は嫌だった。辛かった。…いや、それはまだ良いでしょう。母上は、なぜ死んだのですか？ 貧しく、明日食べるものもなく、ついに餓死してしまつたのでしよう。幼かつた私たちを育てるために、自分の髪まで売り払つて、それでも足りなくて、ついには自分の食べるものすら削つて、死んでいったのです。貧しくなければ、母上は死なずにすんだのです」

「私は、この程度の地位に甘んじる気持ちはありませんよ。世の中、金が全てです。力が全てですよ。この二つがあれば、何人も、黙らせることが出来る。どんな身分の者だつて、好き勝手にこき使うことができる。幸せは金で買うか、力で掴み取る以外にない。これがこの世の理ことわりにことわりございます」

小太郎にそう言われると、なかなか反論できない又右衛門であった。

又右衛門にとって、昔のことは、余り触れられたくない辛い記憶であつた。貧しさの中で妻を失い、それでも必死になつて二人の子供を育て上げてきた。その間の苦労は、尋常ではなかつた。時には乞食の如く、農家を巡つて食物を恵んでもらつたこともある。売つたところで二束三文にしかならない服など作つて、飢えを凌いだこともあつた。そんな頃の…、あの最悪な日々を思えば、出世の鬼と化している小太郎の気持ちも理解できる気がした。確かに幸せは金で買つしかない。金なき幸せなどあろうはずもないのだ。

やりすぎだとは思ふ。いずれ小太郎は大きな落とし穴に嵌るよう

な気がした。けれど、小太郎には幼い頃から散々苦労させてきただけに、又右衛門は余り強い態度で、この息子に接することができないのだった。

「…分かった。お主の好きなようにせよ。わしは、何も言わぬ」

すっかり諦めきつたような顔をして、又右衛門は小さな溜息をついた。小太郎は、にやりと不敵な笑みを漏らすと、

「今後ともお頼み申し上げます。父上のみが頼りなのです」

とだけ言つて、小太郎範政は、足早にその場から、逃げるように去つていった。

河内高屋の戦線は、相変わらず膠着したまま、ついに越年してしまつた。

時は天文十七年（一五四八年）になつた。

高屋城以外の世界は、細川晴元一色に染まっていた。舍利寺の合戦で晴元方の勝利が固まると、もはやこれまでと覚悟を決めたのか、近江坂本に亡命していた足利義晴・義藤親子は、恥も外聞もなく、晴元と和睦して、都に戻つた。

また、氏綱方の残党ともいふべき細川国慶（氏綱の一族）が、京に程近い高雄に立て籠もつて抗戦していたが、八月四日、晴元軍がこれを攻め、翌日の日没までに攻略を完遂した。その後、国慶は丹波方面へ落ち延びていったが、そこで再び氏綱党の勢力を糾合し、十月頃、性懲りもなく再度京を目指して進撃してきたのである。けれど……。今更氏綱残党勢力をどれほど糾合してみたところで、晴元政権に太刀打ちできるはずもなく、十月六日、六角定頼の軍にあつけなく敗れた彼は、敗走途上、蒲生定秀（六角氏の重臣）の兵に捕えられ、七日、晴元の命により、斬首されてしまつた。

これにより、京都周辺は完全に晴元政権の支配下に収まつて、晴元政権はようやく安泰をみたわけだ。けれど、何一つ問題が起ころなかつたというわけでもない。十一月になつた頃、再び、至極厄介な問題が、四国は阿波より、海を越えてやつてきたのであつた。

阿波国には、同国守護職細川持隆の庇護の下、平島公方と呼称されながら、細々と足利家一門の格式を保つてきた足利義維（よしつなかつての堺公方）という男がいる。先代將軍足利義晴の実弟に当たるこの男は、晴元と將軍家の関係が上手くいっていないのを良いことに、次期將軍の座を求めて、わざわざ自ら堺に上陸してきたのであつた。

これは、一見すると単純かつ何と云うこともない問題のように見える。けれど実際のところは晴元政権にとって、これ以上ないほど厄介で、面倒極まりない政治的大問題であったりした。というのも…。まあ、要するに晴元の変節が全ての原因であった。

かつて晴元は、細川京兆家の家督を巡り、義理の叔父である細川高国と対立していた。高国は十二代將軍足利義晴を擁立し、晴元方に対する政治的優位を保っていたわけだが、晴元としてもこうした状況に甘んじているわけにはいかなかった。高国方の神輿に対抗する形で晴元が擁立したのが、この足利義維であった。

その後の経緯については、今更述べるまでもないだろう。細川高国を大物崩れの合戦に撃破して勝者の座を確実のものとした晴元は、無用な騒乱を避けて、自身の政権基盤を早急に固めるべく足利義晴の將軍職続投を容認したのである。これにより、当然、將軍候補としての義維は、その役目を失い…、悪く言えば用済みとなったわけで、殺されることこそなかったものの、その直後に起きた元長叛乱事件の余波もあり、阿波に追放され、今に至るのだった。

というわけで、晴元にとり、足利義維はいろいろとやりにくい相手であった。

だからといって、義晴・義藤親子と和睦した以上、義維を今更將軍とするわけにもいかない晴元は、京の管領御所で、一人困ったように頭を痛めていた。

だが…。

この深刻かつ政治的に重大な問題は、案外あっけなく解決した。というのも、足利義維の実質的な後ろ盾となっていた本願寺証如が一転して彼に対する一切の支援を断るようになったためだった。その理由としては、義維擁立に晴元が乗り気でないことが証如にも伝わったからとされている。

元々、本願寺証如が足利義維を將軍候補に仕立てようと画策するようになったのは、晴元方と氏綱方の対立が激しさを増していた年初頃のことであった。その当時は、氏綱方の支配下に將軍家があり、

政治的正統性という点において、晴元方は大きな不利に立たされていた。それを克服するための非常手段として、阿波に逼塞する足利義維の存在に注目が集まったのは、当然といえれば当然のことであった。だからこそ、証如は密かに彼を呼び戻し、將軍候補として晴元に差し出すことで、天下人細川晴元の歡心を買おうとしたのである。しかし、そうする前に晴元の勝利が確定し、將軍家との間で和議が成立してしまった。ならば義維を將軍候補に擁立する価値などないわけで、晴元は彼に対し、阿波へ戻るよう命じたのである。けれど…。

長らく阿波の片田舎にあつて、ほとんど忘れ去られた存在となつていた男が、ほんの僅かとはいえ、再び世間の脚光を浴びたのである。世間の注目を浴びる快感を取り戻してしまつた男としては、舞台上に舞い戻るまたとないきっかけを、そう容易く諦められるはずがなかつた。実際、阿波に戻つた後も、本願寺からは度々金銭が届けられるなど、義維を勸進いさせるに十分な状況が整つていた。本願寺としては、退屈ながらも平穩な日々を謳歌していた義維を、まがりなりにも面倒な政治の世界に引っぱり込んだことに対する迷惑料的な位置づけで金を提供していたに過ぎなかつたのだが、これをもつて本願寺は味方だと思ひ込んだ義維は、空気も読まず、自分こそが正統な將軍候補だとして、堺に乗り込んだのであつた。

証如としては迷惑千万である。今更義維を支援できるはずもなく、また義維を支援しているなどと妙な風聞が立つのも困るので、早速堺に使者を飛ばし、半ば強引に阿波は平島まで送り届けることにしたのだつた。

こうして、激動の天文十六年は過ぎ去り、世の中は天文十七年一色に染まっていた。

相変わらず、細川晴元方による高屋包囲は続いている。いくら総攻撃を仕掛けても、立て籠もる畠山勢は、容易く晴元軍を受け入れ

なかった。

一方。

三好家中に渦巻いていた熾烈な権力闘争は、新年を迎えた頃からようやく鎮静化するようになった。無論、根本的な解決を見たわけではないのだが、とりあえず収束の方向で事態は推移しつつあったのである。

なぜか。

まあ、簡単に言うなら、三好範長が事の全容を知ったからだ。範長という人は、こつこつという内輪の争いを極端に嫌う。彼は両派の代表を戦陣に呼びつけると、これでもかというほど、こつこつと叱りつけた。その結果、両派は対立の矛を収めざるを得なくなったのである。彼の意向を無視して、引き続き対立を続ければ、もはや叱責だけではすまないだろう。範長は決して温厚なだけの主君ではない。必要とあらば、苛烈な暴君にもなる。例え家中の人間であろうとも、別段躊躇せず処刑命令を下すに違いない。というわけで、以後、両派は露骨な工作活動を行わなくなった…、もとい行えなくなった。

けれど…。

だからといって対立が下火になったわけではないのである。範長という強大な権力者に抑え付けられているに過ぎない。表ざたにならなくなった分、逆に、対立の火は、勢いよく燃え上がったといってもいい。

そして、水面下では立花小太郎範政と松永久秀が、引き続き両派を代表する形で、相も変らぬ謀略工作に奔走していた。

この一連の政争は、立花家と松永家という、範長の両翼と称えられる側近一族による熾烈な主導権争いという一面もあった。

ただし、範長の側近として、外交交渉などで各地を飛び回ることに認められている小太郎に対し、三好軍の宿将として、高屋城から動くことが出来ない松永久秀では、当然、やれることにも大きな違

いが生じてしまう。立場としては、小太郎範政の優位は、誰の目にも明らかであった。

実際…。

小太郎は二月の中頃のこの日も、京にあつて、六角家の重臣である進藤貞治と論議を交わしていた。進藤貞治といえば、湖南の名族六角氏の家老で、主君定頼の信任厚い重臣であるだけでなく、筆頭家老後藤賢豊と共に、『六角の両藤』とも称えられているほど有能な男であった。六角家では、主に外交政策を統括しており、今風に言えば、外務大臣的な立場にあつた。

そんな男と、小太郎範政は膝を交えて密議している。元をただせば下級足輕の家に生まれた青年が、随分と出世したものであつた。

「もはや、和議を結ぶ以外、高屋問題を解決に導く方法はありません。というのが、わが殿の御考えにございます」

と、小太郎範政が自信たつぷりに言えば、

「我らも同様にござる」

進藤貞治もまた、大きく頷いた。

「されば、つきましては、六角様より和議の斡旋をしていただければ、幸いに存じます」

試すような、実に挑戦的な瞳をして、立花小太郎範政は六角家家老の身分にある進藤貞治をぎろりと睨みつけていた。彼には、こういう悪い癖があつた。なまじ身分の低い家に生まれただけに、人の実力というものを必要以上に知りたがるのだ。

「ほほお。我らに和議をな」

貞治は気にする風もなく、淡々と言つた。

「左様です。和議です！」

そう言つて、深々と頭を下げる小太郎を、進藤貞治はまじまじと見下ろしていた。さて、どうしたものかと、自慢の髭を、何度も何度も摩つていた。

「六角様なれば、格式は細川様、畠山様と並びます。その上、管領様の御義父上様おちちいへでいらっしやいます。和議斡旋をしていただくに、

六角様ほどの適任はおられぬと、それがしは思っておりますが」

「ま、だろうね」

貞治は否定も肯定もしない。歴戦の外交官は、のらりくらりと言  
い交わしつつ、小太郎の実力を測っているようであった。

「何より、和議斡旋が成功すれば、六角様の御名はますます高まり、  
管領様も、当然わが殿も、六角様を一目も二目も置くようになるで  
しょう」

「ふむ」

小太郎範政の必死な説得に、貞治はようやくそれらしい反応を示  
した。それを見て、小太郎は畳み掛けるように、

「これを機会に、管領様に恩を売り、細川六角同盟を大いに強化し  
てみては如何ですか？」

と、言った。

そんな小太郎の説得に心を動かされたのか、あるいは元々そのつ  
もりだったのかは定かではないが、腕組んだまま、しばらくの間、  
黙り込んでいた進藤貞治は、

「それもそうだな」

と、ついに快い返事をその口から発するようになった。

「ただ、和議と言つても、口約束では意味があるまい。…例えば、  
その証拠として、両陣営の実力者同士で、縁組などするのが、一般  
的だと思うが」

と、進藤貞治が言うと、その瞬間、待つてましたとばかりに、小  
太郎はニタニタと勝ち誇つたように微笑んだ。

「それについては、それがしもいろいろ頭を悩ませていたところで  
す。…確か、遊佐河内守には年頃の姫がおりますので、これをわが  
陣営のどなたかに嫁がせればよいと思うのですが…。ただ、管領様  
には、六角様の姫君様が嫁がれておられますし、また管領様に御子  
はない。宗三入道様は、入道なされてからの妻帯というのは、御仏  
の教えに反しております。入道様の嫡子の政勝様は、未だ十二  
歳と若く、河内守の姫とは全くつりあいませぬ。…となると、誰が



よいものかと、ずっと考えあぐねておりました」

「なるほど」

「進藤様は、誰かよき人など思いつきませぬか？」

露骨に芝居がかつてゐる小太郎の物言いに、進藤貞治は呆れたような溜息を漏らしつつも、

「お一人、いるではないか」

と、わざと乗ってやることにした。

「貴殿の御主君。三好筑前守様でござるよ」

貞治はそう言って、にやりと笑った。

「さ、されど、わが主君にも正室はおりますわけで……」

白々しい物言いが、随分小面憎い。仰々しく驚く小太郎の姿を睨みつけながら、何から何まで自分に言わせるつもりかと、内心反発しつつ、

「御正室と筑前様の御仲は悪いと聞き及んでおりますがな」

と、答えずにはいられないところが、進藤貞治の悪い癖であったりした。

「な、なるほど……。い、いや、御夫婦のことは、主家のことゆえ、それがしには分かりかねます。た、例え、御仲が悪いとしても、それがしの一存にては決められぬこと……。再び殿の下に戻り、きつと進藤様が御助言、殿のお耳に入れましょう。ゆえに、和議の証としての婚姻はともかく、和議斡旋の一件、六角様によるしくお伝え願いたい」

などとすっかり狼狽した忠臣を装いながらも、そんな風に言つてのける小太郎の凄まじさを痛感しつつ、進藤貞治は、にこりと微笑み、そして静かに頷いた。

四月に入り、六角定頼が主導する形で進められた和議話は、いよいよ現実味を帯びて、両陣営の中にて実（まこと）しやかに囁かれるようになった。

実際のところ、このまま高屋城を延々と攻めていても、埒が明か  
なかった。既に八ヶ月近くに渡り、退屈な城攻めを繰り返している  
兵たちの戦意低下も著しかった。ここで和議にこぎつけなければ、  
何かと厄介な問題が起こりかねないのだ。

で、四月に入った頃、三好康長を全権代表、松永久秀らを副使と  
する晴元方の代表団は、何度か畠山方と六角家の代表団を交えた席  
で、和睦に向けた具体的な協議を重ねていたが、三度目となる協議  
の中で、

「和睦の証として、遊佐河内守殿の姫君を三好筑前守殿の御内室に  
するというのが、最良策だと、我らは考えます」

と、六角方の全権代表後藤賢豊が切り出すと、事は一挙に片付い  
た。畠山方全権の安見直政（遊佐長教の一族）などは、

「それは良い」

と、諸手を挙げて受け入れる姿勢を示し、寝耳に水の話に呆然と  
驚くばかりの晴元方代表の反論を許さなかった。

そのことは、康長より範長に伝えられた。

当然、松永久秀は猛反発した。

「既に御屋形様には、波多野家より降嫁された姫が御正室としてお  
られましょう。それなのに、新たに遊佐家より正室を入れれば、丹  
波御前の立場はどうなりますか。：離縁するより他に仕方ありません  
ぬが、左様なことをいたせば、波多野秀忠殿を敵に回すことになり  
かねませぬぞ」

彼の言い分も、至極尤もではある。けれど、その程度で押し切れ  
ると思つたところに、久秀の甘さがあつた。彼は、少しばかり小太  
郎範政という人間を甘く見すぎていたのだ。今回の縁談は、何も唐  
突にもたらされた話ではない。立花小太郎範政が各地を必死に駆け  
ずり回つて、懸命に工作した結果生み出されたものなのだ。そんな  
範政が、主君たる範長や、有力な重臣たちへの対策を怠っているは

ずがなく、気づいてみれば、縁組に対し、明確に反対を貫いたのは松永久秀ただ一人だけであつたりした。

「波多野家が離反したくば、させればよろしいではありませんか。所詮、波多野など丹波の有力な豪族に過ぎませぬ。一方、遊佐河内殿は三管領家に連なる畠山家の筆頭家老。どちらと結ぶのが得策か、赤子でも分かる簡単な計算でしょう。…この際です。遊佐河内殿と手を結び、いざというときに備えるのも、一興かと思えます」

小太郎範政は、勝ち誇つたような顔をして、そう言った。

「だが、波多野家が離反すれば、せつかく保たれている丹波の安定は一朝一夕のうちに揺らぎかねん！」

ひとたび反対姿勢を貫いたからには、どこまでも反対を貫かねばならなくなつた久秀に出来る唯一の反論は、まるつきりまともすぎで、意外性は全くなかつた。それでは、立花小太郎が時間をかけ、多大な汗を流して作り上げてきた、遊佐河内の娘との結婚に踏み切らざるを得ないような雰囲気突き崩すことなどできようはずもなかつた。

「立花殿が仰るとおりでござる。遊佐家との同盟も面白い策ではありません。それに、遊佐殿は、先君元長公の仇ではありますまい」

かつて波多野家が晴元軍に従軍して、三好元長討伐の陣に加わつたことを痛烈に皮肉りつつ、立花支持を明確に打ち出したのは、三好一門の重鎮として範長の信任厚い三好長逸であつた。その他、三好政康や三好政成ら有力な一門衆も口を揃えて、小太郎支持に回つたので、松永久秀の不利は誰の目にも明らかとなつた。

そして…。

「それも一つだな」

と、一門衆筆頭にして重鎮中の重鎮たる三好康長までもが、小太郎に靡いたものだから、久秀の敗北は決定的となつた。

かくて四月二十二日。

三好方からは、三好範長、三好之康、三好康長。

畠山方からは、畠山政国、遊佐長教。

六角方からは、六角定頼、進藤貞治。

彼らが、奈良の町に一堂に会すると、早速和睦に向けた具体的な協議が始まった。とはいえ、基本的な和睦内容は、これまでの実務者協議でほぼ決まっていたから、今回の首脳会合は、一連の和睦案を精査、確認し、正式に調印しあうものでしかなかった。

かくして、和議は成立した。

高屋城は攻囲を解かれ、四月二十四日、三好範長は堺に入り、五月二日には、ようやく越水城に戻ったのだった。

そして…。

三好範長と遊佐長教の姫が、正式に結婚したのは、五月中頃のことである。その式典は、三好家の権勢と、三好・畠山の友好関係の強さを満天下を示すべく、盛大に執り行われることになった。

ただ、それに伴って、波多野家の御台所は事実上離縁され、国許に送り返されることになった。その結果として、三好家と波多野家は、至極当然のように不穏な関係に陥り、丹波摂津国境及び波多野、内藤の境界線は、俄かにきな臭い戦雲に包まれるようになった。

時に三好筑前守範長は二十七歳。一方、新たに彼に嫁ぐことになった遊佐家の姫は弱冠十九歳であった。年齢に差がないとは言えないが、子や孫ほどの年齢の女性を妻や妾に迎えることも珍しくない時代にあつて八歳程度の年齢差はないも同然であり、政略のためであればたとえどんな年齢の女性であれ結婚せざるをえぬ立場にある範長としては、まず適当な後妻であつた。

新正室を迎えることになる三好家大奥の雰囲気もこのところ随分と変わつていた。御台一派と西の丸派で繰り広げられていた政争は肝心の御台が追放されたことで西の丸派の圧勝に終わり、奥の支配権は今や西の丸こと雅の方のその小さな手の中にすっぽりと収まつていたからである。即ち大奥内にそれまで巢食つていた殺伐とした空気は一掃され、良くも悪くも笑顔に満ちた勝者の時代が到来していったのだつた。

御台の失脚と雅の方の権力掌握に繋がる一連の大奥内の歴史を知つた範長は「ふーん」と軽く頷いただけでそれほど感情を示そうとはしなかつた。ただ、政争の道具として利用されるだけ利用された後、半ばゴミの如く捨てられる形となつてしまつた旧御台には一応夫であつた男の責任として憐憫の情を抱かずにはいられず、

「それで、奥は……」

と、側近に尋ねようとしたのだが、結局「いや、構わぬ」と答えを聞くのを躊躇つてしまつた。今更追放した旧御台のその後を知つたところで何かできるわけでもなく、例え何かできるとしても彼女の方が拒むだろう。気にせず無視を決め込むのがお互いのためだと言ひ聞かせ、範長はフウと小さく溜息を吐いた。

いずれにしても彼は雅の方の支配権を公認する意味も込めて彼女を大奥総取締役に任じ、奥向きの一切を取り仕切らせるだけでなく、何かと不便が多いであろう新御台の補佐役という大任を与えること

にしたのだった。

大奥総取締役となった雅の方は三好範長より一つ年下の二十六歳である。天下に名だたる大名三好氏の奥向き一切を取り仕切る影の実力者たるに相応しい豪華な衣装に身を包んだ彼女は、どこことなく悲しげな笑みを浮かべながら日がな一日空を見ていることが多い。

雅の方は頂点を極めた。しかし彼女は旧御台に味方した人々を決して弾圧しようとはしなかった。もちろん自主的に奥から下がり引退を望む者もないわけではなく、そして彼女はそれを引きとめもしなかったが、引退を望まぬ者まで強引に追放したり、あるいはその地位をいたずらに引き下げたりと言った強引な報復人事は行わなかったのである。

が、雅の方のそうした態度は、肝心の彼女に味方した者たちを落胆させた。何しろ彼女たちは御台一派を追い落とすことで一派が有していた既得権益を己がものにしようとする目論んでいたからである。だが雅の方の決断の背景に範長の意向があるとわかるや否や誰も文句の一つも言えなくなってしまう。もしも勝者だからというだけの理由を持って余計な権益主張を行えば、範長の怒りを買うことは必定であり、ゆえに黙っておくほかはなかったのである。

ただ、唯一雅の方の兄である立花小太郎範政だけは着実にその地位を固めて、いよいよその存在感を三好家中に轟かせていた。無論、公的には今回の一件で小太郎範政が何らかの恩禄に預かったわけではない。身分も地位も禄高も何一つ昔と変わってはいない。だがそうした目に見えるものではなく、今回の陰謀を成就させるべく各地を奔走したことで、期せずして有力者との人脈を築くことも出来たし、西の丸派に加わった有力一門とも密接なつながりを持つことができるようになった。そして、何よりも妹である雅の方が大奥を完全掌握したことで、兄たる彼の立場も今まで以上に強固なものとなった。

一方……。

あえなく敗者となった松永久秀、内藤長頼兄弟は範政とは打って変わって苦境に立たされていた。無論、三好家中において彼らの地位や身分に一切の変化はないが、立花小太郎との政争に敗れたことで家中に対する影響力はいくらか衰えてしまったのである。さらにその上、波多野家と本格的な敵対関係に陥ったことにより、波多野家との和合を前提に丹波の安定を模索してきた守護代内藤長頼はその立場と面目を失ってしまった。

当然、波多野秀忠は怒り心頭である。まあ無理もない。三好筑前守範長は半ば一方的に娘を離縁し、遊佐長教の娘を娶ってしまったのであるから。娘がどうのというよりも、波多野家を見限って遊佐家についたという範長の態度が許せなかった。これまで散々三好のために血と汗を流してきたのは何だったのか。彼でなくとも普通は怒るだろう。

三好と波多野の関係は一挙に悪化した。とはいえ畠山方と和睦し、乗りに乗っている三好家と本格的に対峙するほど秀忠も愚かではない。そこで彼は謀略を駆使し、内藤長頼により追い落とされたかつての養父国貞を唆し、彼とそのシンパを背後で操りつつ拳兵させたのである。

ゆえに長頼は慌てて本国に戻り、国貞の乱を鎮めねばならなかった。

範長が遊佐氏の姫を娶ったのは、何も単純に波多野御前が嫌いだったからとか小太郎範政の甘言に乗っただけとかいう、他愛もない理由では決してなかった。

まがりなりにも自らの正室のことであるし、三好家の大事となる重要問題である。彼とていろいろ考えた上で決断したつもりだった。既に彼は先の先の事まで考えていた。舍利寺に勝利した辺りから彼はいろいろと考えねばならぬことが多くなった。このまま晴元に仕え続けるのか、あるいは自ら天下を目指すのか。例え目指すとし

ても、どうしたら天下人になれるのか。そのためには何をしなければならぬのか……。考えるべきことは山の如くあった。

いろいろ考えに考えあぐねた末に見出した答えが、遊佐家との婚姻であった。即ち、氏綱党の最高実力者であり、かつ畠山家執政の遊佐長教と姻戚関係になれば範長の政治的立場は一挙に高まる。三好氏の近畿地方における地盤である摂津国の背後を固めるというだけの理由で結びついた波多野家よりは、はるかに価値の高い結婚となることは間違いないかった。

とまあ、戦国大名三好筑前守範長としては今回の縁組は政治的に仕方のない行為であったが、一方で、ただの青年三好孫次郎範長に戻ってみると、やはり辛かった。

「英雄というものは、何かをなすとき、常に何かを切り捨てねばならぬ。非情に徹せねばならぬ」

などと呟きながら容赦なく押し寄せてくる良心の呵責と必死に闘っている。どんな理由、理屈をつけようと、範長の個人的感情としては、散々冷遇した拳句追放同然に追い出した御台のことを考えると心が痛まずにはいられなかったのだ。

けれど、それに負けていては天下などとれるはずもない。範長は弱くなる自分の心に散々言い聞かせながら「はあ」といつになく深いため息を吐いた。

五月、六月はあつという間に過ぎ去っていつしか七月になった。

範長は、この際だから自らの覚悟と新たな門出を満天下に示すべく長らく使用してきた『範長』の名を改めることにした。波多野氏と離縁し、遊佐氏と結婚した今、もはや自分は昔とは違うのだということを知らしめる上で名前の変更は何より手っ取り早い方法であるような気がしたのだった。

「名前を変えられるのですか？」

大奥の覇者となった雅の方は、相も変らぬ笑顔のままにそう言った。



「まあな。散々『範長』で通してきたが、どうもしっくりこん。今一度、名を改め、俺の存在というものを満天下に示してやるのさ」  
などと言っているが、雅の方には彼の気持ち痛いほど分かる気がした。いろいろ理由をつけてはいるが、要するに波多野御前を一方的に離縁したことを未だ心に病んでいるのだらう。それを忘れるために、あえて名前を変えて、昔の自分を一方的に捨て去ろうとしているのではあるまいか……。

雅の方自身、波多野御前とのことは余り思い出したくない記憶であることに間違いはなかった。兄である小太郎範政の企みに乗っかる形で波多野御前追放の片棒を担いだ彼女ではあったが、それが彼女の本心、望みでないことは確かだった。彼女としてはできれば穩便に事を済ませたかった。けれど、気がつく和小太郎範政の企みは着々と進んで、いつの間にか自分が勝者として大奥に君臨することになっていた。

「で、お名前は何とするおつもりですか？」

と、雅の方が尋ねると、範長はニタニタと笑うだけであえて答えようとはしなかった。

「それはそうと、新たな御台は生活に慣れたか？」

その話題から逃げるように、彼は唐突にそう切り出した。問われれば答えられる限り答えようとするのが雅の方の性分でもあったから、少しばかり不満そうに頬を膨らませながらも、

「随分慣れたようです」

と、言った。

「そうか。それにしても、気づかぬうちわが大奥も随分大所帯となったものだ。芝生城にいた頃は、どれだけ多くとも、女子の数は百人程度だったというに、今では五百を超えて……、どれくらいいるのだ？」

「六百十六名にございます。無論、殿様に御目見え出来る女子となれば、百名程度にございますが」

「六百？ そりゃまた随分と多いものだ」

それだけ三好家が成長したのだと思えば、納得できないこともなかったが、ただ自分という存在に仕えるためだけに六百人も女子が城内にいるという事実は、年頃の青年にとつてみるとなんとも言えず不思議なものであった。

その翌日。

三好筑前守範長は、主だった一門重臣を越水城に集結させると、そこで自らの改名及び新たな名を堂々と披露したのであった。

「以後、余は三好筑前守範長改め、三好筑前守長慶と名乗ることにする」

と、言いながら彼は予め用意してあった紙と筆で自らの新たな名をすらすらと書き記していった。

『三好筑前守長慶』  
みよしちくぜんのかちがよし

と、そこには記されている。

「な、長慶、様？」

誰もがきょとんとした様子で、じつと範長……改め長慶と名乗った主君の顔を見つめていた。

「さ、されど御屋形様、何ゆえ『長慶』なのでございますか？」

と、三好康長が家臣団を代表して尋ねると、長慶は待つてましたばかりにやりと不敵な笑みを漏らして、群臣をじろりと見回した。「『長』は、あえて言うまでもあるまい。わが三好家にとってはかけがえない宝のようなものだ。これを外すことは出来ぬ。そして『慶』だが、これもあえて説明を加えるまでもあるまい。慶事とか申すように、慶いひゆびいひゆごとを表現する文字だ。即ち余と三好家が、よりもっと長く栄えてくれるようにとの願いを込めて、自らの名をこれまでの『範長』から『長慶』に改めるのだ」

「な、なるほど……」

この時代に生きる人々は何事かあるたびその名前を目まぐるしく変えている。元服の際の改名が一般的であるが、結婚や仕官、官位任官など何らかのきっかけがあればそれを機会に新たな名を称する

者は数多くいたのである。徳川家康にしても幼名竹千代から始まって松平元信、松平元康、松平家康、徳川家康と年を経るたびに名を変え続けている。上杉謙信にしても幼名虎千代から始まって長尾景虎、上杉政虎、上杉輝虎、上杉謙信と時代や政治状況に応じて名を変えていた。

今回の範長の改名もそういう時代状況から鑑みれば別段不思議なことではなかった。家臣たちも新たな名が家中の士気向上に繋がればよいと、どれも前向きに受け取っていた。

「ここで、はつきりと、皆に申し聞かせておく」

新たに三好筑前守長慶となった男は、そう言って居並ぶ家臣たちをぎろりと睨み付けた。ここぞというときの鋭い眼光は千熊丸といった幼い時分から全く変わらない。譜代の家臣たちは誰もがそんな風に思いながら、改めて、過ぎ去った時間の長さを思い返さずにはいられなかった。

「余が今回『長慶』と名乗ったのは、ひとえに、千熊丸とか利長とか範長とか名乗っていた昔とは違うということを示すためだ。即ち、三好長慶となった今、この名に相応しいのは、天下人たる地位である。ゆえに、余は誰が何と言おうとも、天下を目指す」  
誰もが、その瞬間、ごくりと息を呑んだ。

天下。

飛躍的急成長を遂げてきた三好家の家臣団にとっては随分昔から意識している言葉であった。ただ、それを主君長慶の口からじかに聞いたという点に家臣たちは驚き、そして何より喜んだ。

「そして天下を目指すうえで最大の障壁はいうまでもなく三好越後守宗三である。彼を滅ぼして初めて、我らが夢は実現するのだ。だから、以後の我らの敵は、宗三政長である。わが父の仇にして、わが夢の最大の障壁となっている奴は、断固として滅ぼさねばならん……。そのためにももしも晴元殿があくまでも宗三の肩を持つなら、やむを得ぬ。宗三もろともに、晴元殿も一緒に滅ぼす」

はつきりと断言するように三好範長改め三好長慶はもはや何の躊

踏いもなく堂々と細川晴元討伐に言及していた。これまでも、信の置ける幾人かの重臣たちには晴元討滅の意を伝えていた長慶であったが、そうとは知らぬ大部分の群臣たちは、唐突に主君の示した大方針に驚きを隠しきれぬといった様子で戸惑っていた。

だが長慶は本気だった。そして、家臣たちはそれを快く受け入れ、何より皆、彼の決断を称え、狂喜した。ようやく三好元長の仇を討てるのだ。そう思うと、古参の家臣ほど大いに喜び、かつ昔の無念を思い返しながら、誰に気兼ねするでもなく涙など流していた。

三好家の意向は、内々に摂津諸豪族に伝えられることとなった。諸豪族のうちで、有力なものは伊丹氏と池田氏である。いずれも三好長慶の勢力圏内に領地を有する有力な国人であった。

かつてであれば、塩川氏や三宅氏などもこの中に名を連ねていたであろう。けれど、彼らは先の氏綱の乱において、氏綱方に味方し、晴元方に刃を向けたため、今や全く落ち目となっていた。特に三宅氏などは、摂津守護代たる三好長慶の怒りをもろに受け、塩川氏などより遙かに厳しい衰亡の淵に追い込まれていた。当主である三宅国村は事実上追放されているし、領地の一切も三好家により没収されていた。三宅氏そのものは存続が許されたが、領地もなく、城もないのでは、その辺にいるただの牢人と大差はなかった。

逆に最初から最後まで晴元方を貫いた伊丹親興は、ますますその存在感を高めて、今や摂津国内では、三好長慶、細川晴元、三好宗三に次ぐ第四勢力と評されるほどの勢力を誇っていた。形の上では長慶の配下となっているが、従順な家来であるとは言いがたく、彼の命令を聞かず、勝手な行動をとることも多かった。また晴元からも何かにつけて重用されており、主君たる長慶よりも晴元の命令を重視することも決して少なくないのだった。要するに、長慶にとつてはこれ以上ないほどやりにくい相手であり、それだけ伊丹親興の存在感が高まっている証であるともいえた。

一方、伊丹氏と並ぶ雄藩池田氏の場合は少し事情が異なっていた。何しろ彼らは伊丹親興の如く、これといって晴元を支持してきたわけではなく、そればかりか三宅国村らと並び立つ生粋の氏綱党として活躍してきたという過去をもっている。それでも今までと変わらぬ領地を保ち、伊丹氏に次ぐ立場を維持しているのは、当主たる池田久宗が晴元方の重鎮三好宗三と縁戚であったからといっても過言ではない。

けれど、晴元に楯突いたことに対する代償は彼らが想像していた以上に大きかった。如何に宗三の庇護下にあるといっても、彼らの運命を決めているのは、宗三ではなく細川晴元であった。結局、久宗は晴元の怒りをもろに受ける形で、切腹を余儀なくされていた。それが天文十七年（一五四八年）五月六日のことである。一度氏綱方に味方した男を、晴元は決して許さなかったのである。言ってみれば、当主久宗の命と引き換えに、池田氏は摂津国人衆の旗頭としての地位を保てたのだとも言える。

こつという諸事情があつたので、長慶傘下の二大雄藩の取つた態度は、はつきりと分かれた。即ち、伊丹親興は、あくまでも晴元方、即ち三好宗三に与力することを明確に打ち出したのだが、逆に池田久宗に代わつて池田家の新当主となつた池田長正は、父の仇を討つべく、三好長慶に与力することにしたのだった。

八月十二日。

長慶は一拳に行動に打つて出た。

彼は、都の晴元の有力な被官五人に宛てて、一通の書状を送つた。言ってみれば一種の弾劾状である。弾劾する相手は、言つまでもなく、三好越後守宗三その人であつた。

弾劾状を送付した被官五人というのは、平井丹後守、田井源介、高畠伊豆守、波々<sup>ほつかへ</sup>伯部左衛門尉、堀<sup>ほが</sup>和道祐であり、どれも晴元の信任厚い側近であつた。

彼らは早速、その弾劾状を晴元に見せ、晴元は、それを三好宗三に下げ渡した。その時点で、晴元に長慶の弾劾を受け入れる気が毛頭ないことは、誰の目にも明らかとなつた。

「今や長慶とか名乗っている筑前守も、随分偉くなつたものですね」と、宗三は腹立たしそうに呟いていた。

「なるほど。一族の和を乱す越後守宗三入道を討つ、と……。だが、それがしに言わせれば、一族の和を乱しているのは、こつというわけ

も分からぬ書状を、御所様に送って、讒言を繰り返している筑前守だと思えますがね」

そんな風に呟きながら、宗三はその手で、握り締めた弾劾状をぐしゃぐしゃに潰した。

「されど、筑前守がこういう書状を送ってきたということは、即ち、彼は我らと決戦する腹を固めたということではありませぬか？」

と、高畠伊豆守長直は、不安そうな面持ちで、晴元と宗三を見上げた。

「だろうな。……言うまでもなく、これは筑前守の不敵な宣戦布告である」

晴元はそう言って、苦々しげに溜息を吐いた。

「勝てますか？」

と、田井源介が言った。

「勝てるか、だと？ ……余が、この余が、筑前如きに負けるとでも思うのか？」

吐き捨てるように怒鳴り散らすと、晴元は憤然と立ち上がり、庭に飛び出した。そして、思い切り刀を抜き払い、側にあつた松の木に勢いよく斬り付けた。

「ちい、刃毀れしたな。なんとも脆い刀よな」

晴元は、崩れた刃先を眺めながら、腹立たしそうにぼやいている。「そういえば入道、その方は随分と、良き刀を持っているそうだな。噂に聞いたぞ」

と言って、彼は平伏す宗三の下に歩み寄った。

「はッ！ これにございましょう」

と言って、宗三は常日頃肌身離さず持ち歩いている愛刀を、晴元に手渡した。

「なるほど。これは見事だ」

鞘から抜いてみると、どことなく不気味で、無機質な鈍い光が、これみよがしにどこまでも眩く、いつまでも輝いていた。

二尺二寸一分（約六十六センチ）ほどの大きさの太刀である。後

に、『宗三左文字』とか、『義元左文字』などと称され、様々な戦国の荒波に巻き込まれつつも、現代に伝えられている不思議な名刀であった。

宗三の死後、わが子武田晴信（後の武田信玄）に甲斐国主の座を追われて、駿河今川氏の下に居候していた武田信虎が、上洛中にふとしたことから手に入れ、その後、信虎の庇護者たる駿河国主今川義元の手に移ったのだという。やがて義元が桶狭間に戦死すると、勝者である織田信長が自らの愛刀として所持し、信長死後は、彼を本能寺に滅ぼした明智光秀を経て、やがて豊臣秀吉が入手した。以後、秀吉、秀頼と豊臣二代が受け継いだ後、大坂の役で秀頼が滅びると、徳川家康の手に渡り、以後ずっと徳川將軍家の宝刀として、現代まで伝えられてきたというわけだった。

いろいろと曰くつきの刀であるが、この当時は、宗三がその財力にものを言わせて作らせた名刀の一つに過ぎず、晴元も、その輝きや鋭さに目を奪われながらも、その刀にそれほど執着はしなかった。「ま、ともかくだ。筑前如きに侮られてたまるか。これまでも散々奴には苦勞させられたが、もう許せん。奴を滅ぼし、天下を再び余が下に取り戻してやる」

と言つて、一人腹立たしそうに怒鳴っている細川晴元であった。

以後、両陣営は激しい睨み合いを続けつつも、本格的な決戦にいたることはなく、一触即発の冷戦状態を延々、半年近くに渡り維持し続けていた。

ただ、その間、両陣営が何もせず、ただ眠っていたわけではなかった。その水面下では、熾烈な調略合戦が繰り広げられていたわけである。

まず、三好長慶は、岳父である遊佐河内守長教に使者を送り、協力を取り付けた。その上で、畠山家が庇護している細川氏綱を再び表の舞台に呼び戻し、三好方の盟主、即ち晴元に代わる細川京兆家



家督継承候補として擁立することにしたのであった。

さらには和泉の有力国人である松浦興信を味方に加えて、晴元方の有力者たる和泉国守護細川元常の勢力に大きな楔を打ち込んだ。また、阿波の小守護代（守護代三好長慶の代理）である三好之康に命じて、同国守護の細川持隆を半ば強引に陣営内に引きずり込ませることに成功した。これにより三好方の拠点ともいえる四国の安泰を図ったわけである。

対する晴元も負けじと地盤固めに勤しんでいた。晴元の岳父である六角定頼との同盟強化策をはじめ、和泉の細川元常や岸和田兵部大輔のほか、紀伊国の根来寺宗徒にまで援軍を要請した。こうした外交政策は、おおよそ功を奏し、六角定頼などは、

「三好筑前守の謀叛は断じて許されぬ」

と、彼の行動を『謀叛』であると断じた上で、晴元方への与力の姿勢を明確に打ち出したのであった。

天文十七年（一五四八年）は、結局、戦らしい戦もなく終わり、かくして天文十八年（一五四九年）を迎えた。まあ、越年したところで、相変わらず両陣営が一触即発の危機的状况にあることに変わりはない。たわけだが、年内に戦があるに違いないと思って避難していた人々してみると、拍子抜けするような展開であった。

同年二月十八日。

長慶は堺にいた。茶など飲みつつ、のんびりと過ごしているところへ、午後になった頃、ようやく遊佐河内守長教が彼の下にやってきたのだった。

「義父上殿。お久しゅうござる」

と、恭しく頭を下げる長慶に、長教は恥ずかしそくに頭を掻いた。「筑前殿に義父上などと言われると、実に不思議な気がするものぞござるな。…ま、それはともかく、いよいよ世の中はきな臭い雰囲気

気に包まれて参りましたな」

そんな風に長教が言つと、長慶はニタニタと笑つて、無言のまま静かに頷いた。

差し出された甘菓子などを美味しそうに頬張りながら、

「いよいよ、積年の夢が叶うときが参りました」

とだけ、言つた。

「…元長殿のことでござるか。あのお方は、確かに優れたお人でございましたなあ。ただ、少々血気に逸られたところが、唯一の欠点といえば欠点。…とはいえ、あれから、既に十七年。あの折のわしは、今とは比べ物にならぬ若輩。木沢長政には遠く及ばず、まだまだ畠山の家中で、出世を夢見つつ燻っている中堅に過ぎませんでし  
たな」

「そう申すなら、それがしなど、あの当時十歳にござる」

「おや、左様か。十歳でござつたか。いやはや、左様な御歳で、あのような難儀に遭いながらも、今のような地位に上り詰めるとは、なかなかわが婿殿は凄まじい御方じゃ」

などと、白々しく驚く岳父に、長慶は苦笑いした。

「わが父の仇のうち、木沢長政は既に滅ぼしました。残るは、細川晴元と三好宗三入道の二人」

「…なるほど。されど、仇と申せば、本願寺の証如上人なども、父君の仇の一人ではござらんか？」

遊佐長教は、じろりと婿の顔を見つめている。彼が何と答えるか。その一挙手一投足をまじまじと眺めていた。

「上人を仇と思つたことはありませんよ」

あつけらかんと、淡々とした表情で、長慶は言つてのけた。

「ほお。されど、元長殿に直接引導を渡したのは、証如上人がけしか睨けた一向門徒どもはず」

長教は、相変わらず人の悪い笑みを浮かべながら、婿の顔を見ていた。

「あの当ても、あの当時よりずっと以前から、一向宗と法華宗は対立を重ねてきました。わが父は法華の大檀那として、これを庇護し

てきました。一向宗の総帥たる証如上人が、わが父を目の仇とするは当然。父とて、折あらば証如上人を滅ぼそうと思っていたに違いありません。証如上人がわが父を殺したのは、彼の立場からすれば当然のことで、それがしとしては決して嬉しくはありませんが、恨むほどのことではありません。」

「…なるほど」

「されど、晴元、長政、宗三の三名は違う。特に晴元は、わが父の補佐を受けて、ついに天下をとったというに、その父が邪魔になつたことから、父を裏切つて粛清した。しかも、自分の力では倒せないからといって、わざわざ一向門徒を利用するという汚いやり方でわが父を葬り去つた。こればかりは断じて許せぬ」

「…」

「宗三は、同じ三好一族でありながら、父を滅ぼすことで、その跡目を襲おうと考えていた。たつたそれだけのために、晴元に讒言を繰り返し、わが父を殺した。その上、人質としてやってきた私に散々な扱いをした。それだけでも殺すに値する」

「…」

「木沢も然り。いずれにしても、この三人だけは、断じて許せないのです。木沢は既に死に、次は晴元と宗三の二人のみ…」

三好長慶という青年の体内に滾る、凄まじき復讐の焔に長教は思わずたじろいだ。おそらくは、父元長が死んで以来、今に至るまでずっと復讐の気持ちその体の奥深くに隠して、必死に生きてきたのだらう。隠して、耐えて、ひたすら堪えて生きてきたに違いないのである。十七年間に渡り、蓄えられ続けた怒り、恨み、憎しみの強さは、もはや長教の想像の域を遙かに超えていた。

「ま、それでも晴元や宗三とも、仲良くやれるものなら、やっていきたいものだと考えていたのです。が、そうではなかった。晴元は民のことより、自分の天下を如何に守るかといったことにしか興味がない。宗三は如何に出世し、己が力と權益を守るかということしか考えていない俗物。そんな奴らに天下は渡せぬ。ならば、わが父

や曾祖父（三好之長のこと）が目指した夢を、天下取りの夢を、この俺の手で実現してやる。奴らを滅ぼし、この手で天下をつかみとってやる。そう思うようになりました」

言葉こそ穏やかだが、その中に見え隠れする刺々しさに、遊佐長教は呆れたように絶句した。

とはいえ、どの道、遊佐長教には長慶に与力するより他に道はなかった。さもなければ滅びるのみである。彼を助け、彼を天下人にした後、隙を見て彼をも倒し、自分が天下を取る。そういう粗筋を胸に描いている長教にしてみると、とりあえず今のうちは、それこそ持てる力の全てを三好長慶という婿のために注がねばならなかったのだった。

「ま、ともかく、作戦についてはですがな。まず我らは、和泉に兵を進めて、松浦興信殿と連携しつつ、細川元常を牽制します。また大和の筒井順昭殿も、我らへの与力を確約しておりますゆえ、筒井殿をはじめとする大和勢を北上させて、都の晴元を牽制させましょう。その上で、芥川山城の城代となっている芥川孫十郎殿（長慶の妹婿）をこちらに引き込めば、京の晴元殿と江口の宗三を分断することができます」

と、長教が言うと、  
「ならば、その上で、我らが摂津を南下し、三好宗三の居城江口に迫る」

長慶も、阿吽の呼吸で答えた。

「そうですね。宗三が滅びれば、晴元など無力。後はどうにでも料理できましょう。何と言っても、宗三を何とかすることが先決でござりましょうな」

そんな長教の言葉に、長慶は大きく頷いた。

全てはこの戦いで決まる。長かった十七年間は、今日を持って終わる。復讐は成就し、その後は、父や曾祖父すら叶えられなかった

大いなる夢へ飛翔するのだ。

長慶はそんな風に思いながら、ニタニタと一人静かに笑った。そんな彼を見つめつつ、長教も「ははは」と、楽しそうに高笑いしていた。

ここ最近の政治情勢は、実に複雑で、かつ目まぐるしいほどに激しき変化を繰り返していた。

何しろ、僅か一年前までは、細川晴元も三好宗三も三好長慶も、同じ仲間として、手を携えながら細川氏綱討伐に精を出していたはずだった。それがどうだろう。気がつけば、細川晴元陣営は晴元・宗三勢力と長慶勢力の二つに分裂していがみ合うようになった。その結果、風前の灯といって差し支えないほどに追い詰められていたはずの細川氏綱は、長慶方の盟主となることによって息を吹き返すことに成功している。

世の中とは分からぬものであった。一寸先は闇とは、よく言ったものである。

昨日の敵は、今日の友。今日の友は、明日の敵。などとよく言われるほどに殺伐とした戦国時代ではあるが、未だかつて、これほどの激変はなかったのではないかと思われるほどの目まぐるしい状況変化に、人々は開いた口がふさがらなかつた。

長慶は二万の大軍を従えて越水城を発すると、二月二十六日、尼崎に入り、その後、摂津は中島のほうへと兵を進めていった。

中島という土地は、ちょうど石山御坊（本願寺の総本山。後の大坂城）の北側に位置する中洲で、淀川の分流神崎川と天満川に挟まれた地域のことを指す。またその中に中津川という川があり、この川より北側を北中島、南を南中島といった。さらに南中島は長柄川（現在の新淀川）によって、柴島と長柄の二つの地域に分割されていた。そして、この中島一帯は悉く三好宗三の所領となっていたのだった。

彼の居城である江口城は、淀川から神崎川が分かれる、そのちよ

うど分岐点に位置している。そのことから分かるように、ここは宗三にとって単なる所領というより、自領の中核を占める本領、本拠地といってもよい場所であった。

そんな土地であるから、三好長慶が攻略目標として目をつけ、真っ先に攻撃を仕掛けてきたのは、ごく自然なことであった。何しろ宗三の拠点である中島を制圧することができれば、晴元陣営に与える影響は果てしなく大きいのだ。

そこで彼は圧倒的な三好軍を引き連れ、南中島を目指して進軍を重ねたのだが、宗三方が防御を怠っているはずもなく、中島北方の防衛ラインの拠点となる柴島城には、三好宗三方の細川晴賢（氏綱の従兄弟）が、総勢二千の兵で立て籠もっていたのだった。

「たかだか二千足らずの兵力で我らに立ち向かうとは、度胸があるというべきか、無謀というべきか……。氏綱の従兄弟ならば、従兄弟と行動を共にすればよいものを」

と、長慶は一人ぼやいていたが、基本的に、この程度の城は三好軍の敵ではなかった。

「一両日もあれば確実に陥落するでしょう」

と、立花小太郎範政も、そう言って自信満々に胸を張った。長慶はニタリと笑い、そして眼前に聳え立つ柴島城を睨み付けた。

単純な城攻めなら、さして問題なく勝利をもぎ取れるだろう。だが、ここで問題となってくるのは、江口城に温存されている三好宗三の主力軍の存在であった。要するに、宗三が今後どう出てくるのか。それ次第によっては、長慶としてもいろいろ作戦を組み立てなおしたりしなければならなかった。

「宗三入道が何もせず、座してみているわけもあるまいしな」

長慶がぼやくように呟くと、

「左様でございますな」

と、小太郎範政も小さく頷いた。

三好長慶軍が南中島を制圧することを何よりも恐れているのは、宗三入道に間違いないのである。何と云っても、中島は彼の本領。南中島が落ちれば、長慶方は江口攻めにおける格好の前線基地を手に入れたも同然となり、宗三の立場は一挙に悪化する。それだけならまだしも、万が一にも江口が落ちるようなことにでもなれば、それは中島全体の陥落と同義であり、中島の戦略的価値を考えれば、断固として阻止せねばならなかった。何しろ、堺にも越水城（長慶の本拠）にも、芥川山城（晴元の本拠）や京の都にも近いという、実に絶妙な位置に存在する交通の要所たる中島が長慶軍の勢力下に入ると、晴元軍全体が大きな窮地に追い込まれかねないのである。だから、宗三が援兵を派してくる可能性は十分に考えられた。彼も晴元の権勢を背景に、摂津南部に侮りがたい勢力を誇っているから、長慶としても、油断するわけにはいかなかった。

三月四日。

三好軍に攻囲されている柴島城の細川晴賢を助けるべく、三好宗三の派してきた援軍が、この日ようやく到着した。

総大将は宗三の一門である三好加介という男が勤めていた。彼は総勢五千余騎の兵を率いている。今のところ、宗三が出しうる全力に近い戦力であったが、その程度は、戦歴豊富な精鋭長慶軍二万にとって、怖れるほどの敵ではなかった。

両軍は柴島城に程近い西の方浜という土地で戦い、激戦となった。宗三勢は寡兵ながらも懸命に奮戦したため、長慶方の早期の圧勝という当初の下馬評は完璧に覆った。長慶はというと、すぐ終わると思っていた戦いが、比較的激戦となったことに驚きつつも、さして動揺することもなく、床机の上にとんと構えて微動だにしなかった。この辺りは、さすがに歴戦を重ねてきた経験豊富な大将である。結局、彼の堂々たる態度が功を奏したか否かは分からないが、戦いそのものは三好軍の圧勝に終わった。蓋を開けてみれば、何のことは



ない。下馬評と寸分違わぬ圧勝をもち取っていたわけだが、宗三軍の奮戦ぶりが凄まじかったことの証として、戦場一帯に所狭しと両軍兵士の息のない冷たき骸が山の如く転がっていた。

宗三軍も頑張った。けれど、戦歴豊富にして兵力に勝る長慶軍の敵ではなかった。それだけの話だ。決して宗三軍の兵士たちが武門の名に恥じるような戦いをしたわけではない。それどころか、彼らは大いに誇ってよい。何しろ四倍近い兵力の敵を前にしても、一歩もひかずに挑んだのだ。

ともあれ、宗三軍は大敗した。怒涛の如く押し寄せてくる長慶軍の猛攻の前に、順次、宗三軍は総崩れ状態に陥っていった。それでもなお抗戦しようとする彼らの気構えは見事なものであったが、勝敗が決した以上、いくら徹底抗戦しようとも、それは無意味な犠牲を出すばかりで何の意味もなかった。結局、激戦、乱戦の中で、宗三軍の総大将三好加介は、長慶配下の足軽により討ち取られてしまった。

「勝ったな」

長慶は、別段喜ぶわけでもなく、逃げ去る敵を見つめながら、いつものように淡々と呟いていた。

「申し上げますッ！ 敵将三好加介、主税助様（岩成友通）の兵が討ち取ったとのことにごさいます」

という報告が入ったのも、この頃のことだった。けれど、相変わらず長慶は平然とした顔で、

「そうか」

と、軽く頷いただけだった。

その後、長慶軍は柴島城を攻め落として南中島一帯を掌握し、江口攻撃に向けた格好の拠点を手に入れることになった。一方、三好宗三はというと、苦虫を噛み潰したような顔をして、予想通りの敗報に耳を傾けていた。

「このままでは、我らは江口に孤立することになりかねん」

圧倒的な三好軍の勢いを見れば、宗三が怯え始めたのも無理はな

かった。何しろ、江口城は北と東と南の三方を川に取り囲まれた水城であり、防御は堅いが、一方でいざというときに脱出しにくいという致命的欠陥を抱えていた。江口に立て籠もって三好軍を迎え撃つというのも一つの手ではあるが、いつ晴元軍が応援に駆けつけてくるか分からない以上、逃げ場のない江口に閉じ込められるのは、得策ではないように思えたのだった。

かくして三好宗三入道は配下の手勢三千を引き連れ、三月五日朝に慌しく城を離れると、嫡子三好政勝に与えてあつた榎並城へと引き上げていったのであつた。

情勢は明らかに三好方優勢に進んでいる。

この頃、細川晴元が何をしていたのかといえば……。基本的には何もしていないと答えるのが妥当なところであろうか。……とはいえ、彼も辛い立場であつた。長慶軍が宗三の領内に進撃を開始したとき、彼の本心とすれば、即刻援軍を差し向けて、腹心中の腹心を助けてやりたかつた。

だが、彼にはそれができなかつた。

晴元の下には、一万を超える大軍がある。だが、芥川山城の留守を任せていたはずの芥川孫十郎が三好方に寝返つたことで、あるうことか本拠地が敵方の手に落ちてしまつた。これにより京と摂津戦線は真つ二つに分断されてしまつたわけで、京にある晴元には、どう足掻いても摂津戦線に援軍を送り込むことが不可能になつてしまつたのであつた。そればかりでなく大和より筒井順昭、柳生家蔵をはじめとする軍勢が三好方に与力して、山城南部に進軍してきたので、容易く都を留守にするわけにはいかなかつた。

けれど、だからといって座して事態の暗転を見守っているわけにもいかなないのである。ゆえに、窮余の一策として、晴元は和泉守護の細川元常に宗三救援を命じたのだが、その元常も、配下の有力国人松浦興信が三好方に内通して挙兵したことで、容易く動けない状

態に追い込まれていた。その上、松浦興信を支援するかのよう  
河内より遊佐長教率いる畠山軍が進軍してきたので、援軍を派遣す  
るどころか、彼自身が援軍を晴元に要請しなければならぬ立場に追  
いやられてしまっていたのだった。

打つ手がない。というのが、晴元の偽らざる本音である。けれど、  
何もしないわけにはいかなかった。このまま事態が推移すると、三  
好宗三や細川元常らは間違いなく、三好長慶や遊佐長教により滅ぼ  
されかねなかった。宗三や元常が滅びて、摂津・和泉が三好軍の勢  
力下に入ったなら、次は間違いなく京の晴元である。そんな単純か  
つ明快な論理が分からぬほど、晴元も愚かではなかった。

「義父トウフチにおかれては、是非、大和の筒井らを牽制してもらいたい」

晴元は、四月に入った頃、自身わざわざ近江に赴いて、岳父たる  
六角定頼と事態の打開策について協議していた。

「だが、どうするのだ。三好軍の攻勢は凄まじいぞ。ここで打つ手  
一つ間違えれば、筑前の思う壺だ」

定頼は、じろりと自らの婿を睨み付けると、晴元はにやりと不敵  
な笑みを漏らして、

「お任せあれ」

と、大きく頷いた。何やら勝算があるらしい。いつもとはどこか  
違う晴元の笑顔に、後方に控えていた側近たちは不思議そうに首を  
傾げていた。

「婿殿に勝算があるのなら、我らとて全力で与力しよう」

定頼がそう言うと、晴元はにっこりと微笑みながら、自信ありげ  
にその胸をぽんと叩いた。

晴元軍一万は、四月五日、京を発して丹波に向かった。

目指すは、摂津である。苦戦する重臣三好宗三を助け出すべく、

彼はその総力を率いて出陣したのだが、あえて遠回りである丹波を経由したのは、京と摂津を結ぶ交通の要所に堂々と聳え立っている彼の居城、芥川山城が三好方の手に落ちてしまったためであった。

何はともかく、意気揚々京を発した晴元軍であったが、これを受けて、すかさず筒井勢を中核とする大和軍が、都に程近い槇島まで進軍してきた。都を奪い取るには、もぬけの殻となった今を置いて他に好機はない。大和衆がそう考えたのも当然である。何しろ、今の都には、晴元が残したほんの僅かな兵が残っているだけで、ほとんど無防備状態のまま、彼らの前に晒されていたのだ。さながら獐猛な肉食獣の前をうろつく手負いの草食獣のようなものだ。腹をすかした肉食獣が格好の獲物を逃すはずがないように、大和衆も隙だらけの都を奪うべく、俊敏に動き始めたのだった。

けれど…。

晴元とて馬鹿ではない。何一つ対策せずに都を留守にするほど愚かではなかった。

それは近江からやってきた。

大和軍が都に迫った四月七日。まさにその日の朝方、六角定頼が派遣した軍勢一万が、晴元の要請に応じる形で入京していたのである。率いているのは、彼の嫡子たる義賢である。彼は管領御所内に本陣を設けると、そこで大和軍の来襲に備えたのだった。

「退いた？」

義賢は、重臣蒲生定秀からの報告に、呆氣にとられたように呆然とその場に立ち尽くしていた。

「はッ！ 大和軍、拳って槇島方面に退却を始めましてございます」

「…逃げたのか？」

と、義賢が尋ねると、

「おそらく」

自信満々にそう答える定秀であった。

一方、丹波に入った晴元軍は、波多野秀忠をはじめとする同志たちの支援を得つつ、三好方の内藤長頼の妨害を排除すると、四月二十六日には、摂津多田にある一庫城に入って、城主塩川政年の軍を配下に加えた。

四月二十八日には、武庫郡に出陣し、周辺村落への放火、略奪に明け暮れた。これらは全て、中島に展開中の三好軍主力に対する、露骨なあてつけであり、牽制だった。

その翌日、即ち二十九日には、かねて晴元方への与力の姿勢を明確に打ち出して三好方と対立していた伊丹城の伊丹大和守親興が、一庫城まで出張ってきた晴元軍に呼応する形で行動を開始し、三好方の勢力下にあった尼崎に攻め入った。

何はともかく、晴元軍が一庫に入り、武庫郡を勢力下に置き、さらに伊丹軍が尼崎まで進出したことにより、三好長慶のいる中島と、彼の本拠たる越水城は完全に分断されることとなった。

晴元軍の快進撃は、ここから始まった。

一庫にいた彼は、伊丹親興の動向を確認すると、摂津中部における三好方の拠点となっていた三宅城に侵攻し、これに猛攻を加えた。晴元軍は総勢一万三千に膨れ上がっており、三好方の守兵だけでは、到底太刀打ちできるものではなかった。

四月三十日夕刻。

三宅城は陥落した。晴元は意気揚々と入城して、次第に自分のほうに傾きつつある戦況に浮かれあがっていた。

「はっはっは。筑前など恐れるに足らぬわ。このまま、一挙に中島に押し寄せて、筑前を袋叩きにしてくれるぞ」

と、豪快に酒など呷りながら、彼は高らかに笑っていた。

「後は、芥川山を奪回すれば、我らの優勢は確実なものとなりましょう。ここが敵方にある限り、京と摂津の味方は分断を余儀なくされておりますので」

重臣の香西元成の言葉に、晴元は苦々しげな顔をしつつも、大きく頷いていた。

「それにしても、芥川孫十郎め。これまで余が散々かけてやった恩義も忘れて、筑前に寝返るとは……。全く許せん」

などと怒り狂う晴元の様子を眺めながら、香西元成は思わず苦笑いした。だから言わんことではない、と、彼は心の中でそう舌打ちしていた。

長慶の妹婿という、白とも黒ともつかぬ男を、わざわざ自身の本拠たる芥川山城の城代に任じたのは、他ならぬ晴元だった。あらゆる群臣、とりわけ三好宗三や香西元成らが散々諫言したにも関わらず、彼は、

「芥川孫十郎が余を裏切ることはないだろう。余が取り立ててやらねば、芥川家は衰退の一途を辿って、いずれ滅亡していたらうからな」

と云って、全く聞かなかつたのだ。昨日の敵は、今日の友。今日の友は明日の敵……。といった殺伐とした戦国時代を地で行っている今のご時世で、恩義だの、信義だの、そんなものが効力を発するとは思えなかつた。それに、恩義や信義が大きな威力を発揮するような男なら、義理の兄たる三好長慶に弓引くことも難しいだろう。結局、芥川孫十郎は形勢の有利、不利で全てを決めるに違いないのである。晴元方が優位ならば、それに越したことはないが、万が一不利にでもなれば容易く寝返りかねない男に、本拠地、それも今回の戦いで重要な戦略拠点となる土地を苦もなく預ける晴元に、宗三だけでなく、香西元成もあきれ果てたものであった。

で、蓋を開けてみれば、何のことはない。あっけなく孫十郎は三好方に寝返り、細川政権の本拠地は、労せず、一滴の血すら流さず、三好方の拠点の一つに成り下がってしまった。

「元成、芥川山攻めはそなたに任す。三宅城も、とりあえずそなたの裁量に委ねるとしよう」

晴元は自らの判断ミスなど、毛ほども気にする風もなく、今はた

だ幸先よい勝利に嬉しそうな笑顔を浮かべながら、重臣の香西元成に命を下していた。

「…それがしが、芥川山攻めを行うのですか？ 御所様御自ら御出馬はなさらないのですか？」

香西元成は、少しばかり驚きを隠せぬような顔で、ジッと晴元を見つめていた。

「たわけ。余とて、それほど暇ではないわい。榎並の越後入道（宗三）を助けることが此度の戦の最大の目的だぞ。そのためには、伊丹大和ら配下たちとも連絡を取り合わねばならん。芥川山まで出向いている余裕はない」

と言つて、晴元はにやりと、勝ち誇つたような不敵な笑みを見せた。

「されば、御所様は、如何なさるおつもりですか？」

そんな風に香西元成が、不思議そうな顔をして尋ねると、

「ひとまず一庫城へ戻る」

と、晴元ははっきりとした口調で言った。

五月一日。

午前中に細川晴元が一庫城に引き上げると、午後になつて、三宅城の守備及び芥川山城攻略を一任された香西元成は、その任務を達成すべく、総勢五千の兵を率いて出陣した。

壮大に散り行く桜並木の下を、肅々と軍兵が歩み行く様というのは、いつ見ても、どう見ても、なかなか圧巻なものだった。そんな様を眺めつつ、香西元成はニヤニヤと笑っていた。

「楽しそうですね」

と、側近は言った。

「分かるか？」

元成はいつになくやる気に燃えている。何しろ、芥川山奪回作戦は、成功すればそれが晴元方勝利の決定的要因となるやもしれぬ大作戦であった。言ってみれば、元成にとって、これは手柄を挙げる上での一世一代の好機であつたということである。やる気が湧きあがらぬはずもない。

芥川山城は京と摂津を結ぶ交通の要所に聳えている。即ち、ここが敵方の手にある限り、京・摂津間を往来するには、わざわざ丹波か大和を経由しなければならぬのである。しかしその丹波とて、三好方の守護代内藤長頼の勢力下であり、簡単に通過できるものではない。まあ、丹波国には波多野秀忠はじめ、晴元方に属する勢力が根強い力を保っていることを考えれば、完全に三好方の勢力下にある大和国を通過するよりは幾分マシなのかもしれないが、さりとて難しいことに変わりはない。

しかし芥川山を奪回して、京と摂津を直接接続することができれば、状況は一変する。何しろ、いざとなれば京に展開中の六角義賢（近江守護職六角定頼の嫡子）の精兵一万に援軍を依頼することも容易くなるというわけで、そうなれば、戦況は一挙に晴元方優位に



傾くであろう。それでなくとも、最前線と本拠地が分断されているということは、既にそれだけで大きな不利であり、逆に最前線と本拠地を最短ルートで結ぶことができれば、戦を優位に運ぶことも難しくないので。それゆえに、最前線たる摂津と京の間に厳然と聳え立つ芥川山城の奪還は、目下、晴元方の最重要戦略課題となっていたのであった。

「わしが戦局を握っているのだ」

と思うと、晴元方の芥川山攻略軍司令官たる香西元成は、興奮の余り、いてもたってもいらなくなるのだった。

元成という男は、讃岐国の有力国人の一人である。勝賀城（現在の香川県高松市）の城主であり、讃岐国内では、十河氏と並び立つ大豪族として広く知られていた。けれども、このところの讃岐国では、阿波の三好氏と深く結びついた十河氏が目覚しく勢力を拡大して、逆に香西氏は誰の目にも明らかかなほかに落ち目となっていた。それでも必死に細川晴元に仕え、その力を背景として三好・十河家と対立する道を歩み続けてきた香西元成にとって、今回の戦いは、三好家を葬り去って、自らが讃岐の国主となる唯一にして最大の好機であった。

だからこそ、彼はやる気に漲っていた。この好機を逃すまいと焦っていた。何しろ宿敵十河の後盾となっている三好長慶を葬り去り、かつ、晴元政権内での自身の立場を高めるといふ、これ以上ない一石二鳥を実現できる立場に、彼はいるのだ。故にこそ、その前提条件となる芥川山城攻略の任は、何としても実現しなければならぬと、強く胸に誓っていたのであった。

一方、芥川山城。

晴元をまんまと出し抜いて、この城を奪い取った芥川孫十郎の下には、長慶より援軍として派遣されてきた三好日向守長逸の姿もあった。

「香西勢は五千とのこと。その程度、わざわざこの城で迎え撃つまでもありませんまい。ここはいつそ、出撃して、蹴散らしてやりましよう」

と、日向守長逸は力強く、自信満々の表情をその満面に浮かべながら、そう言った。

「日向殿は勝てると思いか？」

と、実に不安そうに、孫十郎はおろおろと落ち着きなくあちこちを動き回っていた。

「勝てまする！」

長逸ははつきりと、そして大きく頷き、そう断言すると、

「芥川殿、出陣の御命令を」

と、しきりに催促していた。

ゆえに芥川孫十郎は、三好長逸に総勢三千の兵を預けて出陣させたのだった。

五月二日。

香西元成軍五千と三好長逸軍三千は、芥川山城に程近い総持寺の西川原（現大阪府茨木市西河原）にて激突した。

押しては引き、引いては押す。

両軍共に、一歩も引かぬ激戦を演じた。数に勝る香西軍が若干優位ではあるが、長逸軍も負けじと押し返し、戦況は、ほぼ互角だった。

「いかな」

香西元成は、床机の上で、思わず爪を噛んだ。

「後詰の兵も出せ！ この際だ。総攻撃をかける」

彼は、スクツと立ち上がって、居並ぶ諸将をぎろりと見回すと、声高にそう命じた。

ほら貝が、ボオオオと、その独特な音色を響かせる。すると、香西軍の陣所は、俄かに騒がしくなった。

その報は、当然長逸の陣にももたらされてきたが、総大将たる日向守長逸は、別段驚く風もなく、淡々とした顔で、

「そうか」

と、答えたのみであった。

「よろしいのですか？ 敵が総攻撃をかけてきたとなると、こちらも総力戦で臨まねば……」

そう言うのは、長慶より長逸の副官兼軍監の任を仰せ付かって、三好長逸の下に従軍している篠原長房であった。

「構わんさ。総攻撃をかけてきたということは、本陣はがら空きというわけだからな。そこを突けば、まだまだ我らにも勝機はあるさ」

日向守長逸は、勝ち誇ったように、からからと笑っていた。そんな大将の様を眺めつつ、篠原長房は恥ずかしそうに頭を掻いた。

五月二日午後。

総力戦に打って出た香西軍であるが、その大攻勢は、花を咲かすことなく、ものの見事に散る破目となった。

期せずして長逸が指摘した香西軍の弱点は、彼らの決定的な致命傷となった。即ち、総力戦と銘打って、後詰の兵など全てを最前線に投入したことにより、肝心の本陣ががら空きとなってしまうたのである。確かにそのおかげで香西軍の攻撃力は格段に高まった。実際、兵力に劣る長逸軍は苦戦を強いられていたわけだから、元成の作戦を頭ごなしに間違いと断言できるものでもない。けれど、攻撃に特化しすぎると、当然防御が疎かになるのは当たり前のことである。攻撃こそ最大の防御、なる言葉が常に通用するとは限らないのであった。

攻撃に特化した香西軍も、例に漏れず、防御を怠っていた。しかも、あるうことか本陣を手薄にしまったのである。敵から見れば、これ以上ない反撃の好機である。無論、手薄と言っても、本陣には依然として百騎ほどの兵が総大将たる香西元成を守るべく配置

されていたが、虎視眈々と獲物を狙って攻撃の機会を窺っていた獐猛な肉食獣にとつて、その程度は、何の障壁でもなかった。

手薄極まりない香西軍の背後を叩き、本陣を潰したのは、これまでもと芥川山城に立て籠もっていた芥川孫十郎であった。彼は長逸からの援軍要請を受けるや否や、すかさず籠城兵のうち八百の精鋭を引き連れて城を出、凶々しいほどの無防備を晒していた香西軍に向かつて、猛然と攻撃を仕掛けたのだった。

これによって、香西元成本陣は壊滅した。元成本人も泡を食って逃げ出さざるを得なくなり、これがきっかけとなって、香西軍全体もたちまちのうちに総崩れとなった。

「も、元成が負けたと？」

一庫城にて三好軍に備えていた細川晴元は、思わず身を乗り出して、思いもよらぬ凶報に愕然と立ち尽くしていた。

「はッ！ 香西様はさる二日、三好日向守の軍と戦い、芥川孫十郎の奇襲を受けて、あえなく敗北したとの事にございます」

使者の報告に、晴元はがっくりと腰を落として、腹立たしそうに、「たわけがッ……」  
と、唸っていた。

兎にも角にも、香西勢が敗れ、芥川山城奪回に失敗した今、晴元としては、三宅城に入ってその防備を固めることが、何よりも急務となった。何と言つても、三宅城は芥川山城に次ぐ戦略上の要地なのだ。ここまでも敵方に奪われてしまうと、晴元の立場は一挙に悪化する。

「やむを得まい。全軍に命じよ。これより我らも出陣し、三宅に入つて、三好日向を迎え撃つ」

晴元はそう命じて、家臣たちを下がらせると、どう転ぶか全く見当のつかない戦況のことを考えてみた。

負けるわけにはいかないのである。ここで敗北すれば、晴元が苦

心して築き上げてきた細川政権は、今度こそ、間違いなく崩壊してしまうことになる。晴元の手の中にあつたはずの天下は、ただの家臣に過ぎなかつた三好長慶の手に移つてしまつたろう。それだけは断じて阻止せねばならぬ。晴元はそんな風に胸に誓つと、フウと大きく息を吸い込んだ。

「それにしても…。それにしても、三好とは、実にしぶとき一族よな」

晴元はそんな風にぼやきながら、思わず苦笑いした。

元来、三好氏は、阿波に数多く存在する豪族の一つに過ぎなかつた。それが之長（長慶の曾祖父）の代になつて飛躍的に勢力を伸ばし、細川京兆家を代表する重臣にまで上り詰め、特に細川政元死後の三兄弟（澄之、澄元、高国）による後継戦争では、細川澄元に属し、澄元方の最高実力者として活躍するまでになつたのだつた。そんな三好家に訪れた最初の危機は、その之長が高国に敗れて処刑されたときのことだ。それ以前に嫡子である長秀を失つていたので、後継者となつたのは、長秀の息子であつた元長だが、生憎、彼はまだ若かつた。

この当時は三好家のみならず、澄元陣営そのものが崩壊寸前の危機に立たされていた。一步間違えば、三好家どころか澄元陣営そのものが崩壊しかねぬ大危機にあつたのだが、まあ、結局、若き元長が之長に勝るとも劣らぬ名将であつたこともあり、幼君晴元（澄元の子）を擁立して勢力を盛り返し、ついには細川高国をも滅ぼして、晴元政権を樹立するに至るのだつた。もちろん、元長は細川家中において右に出る者のない最大の功臣となつた。

しかし出る杭は打たれるの例え通り、力を持ちすぎた元長は、晴元により殺され、ここに三好家は二度目の危機を迎えた。文字通り、絶体絶命と呼ぶにふさわしき大危機であつた。誰の目にも、三好家は風前の灯に見えたし、実際、あの当時の三好家は、生かすも殺すも晴元の自由だつたわけだが、彼は元長の遺児たる千熊丸に同情して、ついにこれを助けてしまった。期せずして、幼き源頼朝の境遇

に同情し、伊豆に流すという形としつつも、ついに殺さなかった平清盛と同じ轍を踏んでしまったわけだが、伊豆に流罪となった頼朝がそうであったように、長じて後、曾祖父之長や父元長を遙かに上回る英雄へと成長した千熊丸は、利長、範長、長慶と名を変えらるたび、その勢力を飛躍的に伸ばして、晴元政権の屋台骨を担う重臣中の重臣となり、曾祖父や父以上の勢力を築き上げてしまった。

そして今、彼は晴元がこれまで対峙したあらゆる敵よりも強大な存在として、眼前に立ちはだかつてきた。そして彼は、ひたすらに親の仇と、死に物狂いの攻勢をかけてくる。まさに、何から何まで頼朝のようだと、晴元は自嘲気味に呟いたが、末路までも平家と同じになるのでは、笑うに笑えなかった。

細川晴元は六千の兵を従え、三宅城に入った。

これを受けて、三宅に急接近していた三好長逸勢は、三宅近くで進軍を停止すると、晴元軍を威嚇しつつ、芥川山城へと引き上げていった。

その頃。

三好長慶軍は中島の柴島城に、三好宗三軍は榎並城にあつて、それぞれ様子を覗っていたが、情勢の急変を受け、三好宗三は榎並城を発し、江口城に入ることにした。榎並城よりは遙かに堅固なこの城に立て籠もることで時間を稼ぎ、京都に展開している六角定頼の援軍を待つ。芥川山攻略に失敗し、情勢刻々悪化の一途を辿る今は、それ以外の手はないと考えた上でのことだった。

「宗三が江口に入ったか……」

柴島城の長慶は、使番からの報告に、にやりと不敵な笑みなど漏らしつつ、大きく頷いた。

彼が柴島城を攻略してから、ある程度月日は流れていた。その間、彼はほとんど微動だにしていな。もちろん何もしていなかったわけではない。というよりは何もできなかったと言ひ直すべきだろう

か。と言つのも宗三の残党勢力による蜂起が相次ぎ、その討伐に四苦八苦していた長慶軍には江口攻略に乗り出す余裕がなかったのである。そうこうしているうちに、先に江口を離れ、榎並に逃れていった宗三が再び江口に戻ってきた。自分との決戦を覚悟したのである。望むところだと思いつつ、難攻不落の名城と名高き江口攻めのことを考えると、ひたすらに気が重くなる長慶なのであった。

「籠城戦に臨むつもりでしょうな。江口は堅城と名高き城でございますから」

と、松永久秀が言う。

「だろうな。だが、それはそれでこちらにとっては好都合。江口城は北と南と東側が川に挟まれ、故にこそ堅城といわれているが、逆に言えば、川を越えねばならぬ以上、脱出もそう簡単にはできません。故にこそ、余が細川晴賢を破って中島に乗り込むと、奴はあっさり榎並へ引き上げていったわけだが……。ま、いずれにしても、宗三入道には、ここで死んでもらわねばならぬ。自らの居城で死ねるとあらば、奴も本望だろう」

そんな風に呟きながら、長慶は楽しそうにからからと笑う。大好きな阿波の酒など、思い切り呷りながら、「はっはっは」と、どこまでも楽しそうに大笑いしていた。

【雪辱編】第066章 江口の合戦（後編）

安宅冬康、十河一存の兄弟は、長兄長慶の命を受け、別府川（現三島市付近）畔に兵を進めた。冬康配下の水軍衆が淀川を埋め尽くし、川の畔には、十河一存配下の精鋭が勢揃いしている。その様は、なんとも言えず壮観なものであった。

「兄上、いよいよでございますな」

血気盛んな末弟は、楽しげに笑い、嬉しそうに、眼前に聳え立つ江口城を見上げていた。

「まあな。…父上が殺されて、既に十七年。我ら兄弟も、今や大人となったが、まさか、本当に父上の仇を討てる日が来るとは思わなかった」

摂津守冬康は、そんな風に呟きながら、元長が死んだ日のことを思い出していた。

あの折、まだ三好神太郎といった彼は、まだ四歳かそこらの子供であった。当然、物心もついていない。その頃の記憶などほとんど失われていたが、しかしあの日のことだけは、二十一になった今も、鮮明に記憶していた。

「又四郎、お主は父上が死んだ日のことを覚えているか？」

と、冬康は呟きつつ、苦笑いした。自分より、さらに年下の一存に、そもそも父の記憶があるとも思えなかった。

「無論、覚えておりますとも」

そう言つて、ぼんと胸を張る一存に、冬康は驚いた。

「覚えているのか？ お主、あの頃はまだ確か二つか三つだろう」

「ははは。そりゃ、まあ、父上のごときは、ほとんど覚えてはいませんがね。でも、あの日のことは、漠然とではありますが、覚えていられるのです。長慶兄者が涙を堪えてあやしてくれたこととか、之康兄者が、そんな長兄を慰めていたこととか、家臣たちが大慌てで城内を駆け巡り、中には普段は強がっていて、恐ろしいように見えた者



「たちが、ざめざめと泣いていたり…」

「…左様か」

かく言う冬康とても、実父元長のことは、余り記憶にはないのだ。幼くして父を失ったこの二人にしてみると、父なるものは、基本的に存在せず、ただ長兄長慶を父代わり、次兄之康を兄と慕って育ってきた。だから、父がいなくて悲しいとか、寂しいとか思ったことは一度もないのである。

だからといって、実父元長を裏切つて殺した晴元に対する恨みが皆無というわけでもなかった。やはり自分の父を殺した男であるから、長慶や之康と同じだけの怒りや不満、憎しみを持っている。何より、その後の晴元の言動ややり口を見ていると、到底許し難いものがあった。

「だが、この戦に勝てば、いよいよ長慶兄者が天下人だなあ。想像できるか、兄者。天下だぞ、天下。我ら兄弟が、曾祖父様おじいさまや父上とてなし得なかつた偉業を成し遂げられるんだ」

などと興奮気味に叫ぶ一存の言葉に、冬康も静かに頷いた。

天下人、などといえば、随分滑稽で、夢物語の如く聞こえるが、けれど、今や三好家はそこに最も近い位置にいる。足利將軍家や細川管領家よりも近い。かつての將軍家の地位を、三好家が占めるのだと思うと、日ごろ温厚で、温和な冬康の血も、弟と同じぐらい騒ぎ出した。

「ま、何はともかく、この戦に勝たねば話は始まらぬ。…取らぬ狸の皮算用など、何の意味もない」

と言って、増長しがちな自らの心を宥めつつ、冬康はずっしりと床机の上に腰を下ろした。

六月十二日朝。

六角義賢が差し向けた援軍が、どうにかこうにか、芥川山の三好方の目を潜り抜けて、江口まで辿り着いた。

総勢二千。

総大将は、近江朝妻城主新庄直昌である。

同日昼。新庄率いる近江軍と、安宅冬康・十河一存率いる三好軍が決戦し、結果は三好軍の圧勝に終わった。新庄直昌は、敗走途上、追撃に出た十河一存自身によって討ち取られている。

この戦いで、十河一存は自ら将であることも忘れて奮戦した結果、敵将首は新庄直昌を筆頭に四つ、足軽その他諸々を含めると、十六の首を取って、その勇猛果敢を満天下に見せ付けていた。

鬼十河。

それは戦場を所狭しと暴れまわる彼の様からついたあだ名ではあるが、今の彼は、まさに鬼と表現するしかないほど、圧倒的な強さを誇っていた。誰もが啞然と、呆然と立ち尽くし、あれが本当に長慶の弟なのだろうか、首を傾げていたほどだった。

「お前は、阿呆か」

と、冬康は呆れていたが、一存は気にする風もなく、あっけらかんと笑っていた。

「だが、近江軍は何が何でも、江口の援軍に出ようとしているようだ。芥川山の日向殿（三好日向守長逸）だけでは、近江軍を制しきれまいな」

冬康がそんな風に呟くと、

「そうじゃ、そうじゃ。ならば、いつそそれがしが出向いて、日向殿を助けよう。新庄などと申す雑魚くらいなら問題はないが、義賢自ら出張ってきたら、せつかくの江口攻めも水泡に帰すばかりか我らの不利は誰の目にも明らかとなります」

と、相も変らぬ豪快さで叫ぶ一存であった。

「ま、ともかく、このことは長兄…、御大将の御指示を仰いだ上で決断すべきことであろう。軽々しく我らの一存のみで動いてよいものではない」

「…ちえッ。相変わらず律儀で慎重な冬康兄者じゃ」

などと舌打ちしつつ、しかし兄の命にはとことん従順な一存であ

った。長慶の命を仰ぐという冬康の意に、彼も明確な異議を唱えたりはしなかった。

### 三好長慶本陣。

長慶は、江口城を見上げつつ、側近の持ってきた握り飯を美味しそうに頬張っていた。

「又四郎が日向の援軍に出向きたいと？」

背後に平伏す立花小太郎の言葉に、長慶は「ふーん」と、唸った。「ま、気持ちは分からんでもない。が、どうするべきかな。奴の手勢はわが軍の中でも屈指の精鋭。いざというとき、宗三入道を実に捕捉できる存在ゆえ、ここに残しておきたい気もするがな」

と、長慶は一人小さく呟いていた。

「されど、六角義賢の大軍が迫れば、日向殿御一人では防ぎきれません。何より、日向殿は、三宅城の晴元本隊とも立ち合っており。やはり、十河様を援軍として差し向けねば、六角軍を防ぎきることはできぬかと心得ます」

そう言うのは、松永久秀である。小太郎を押しつけるように、自ら長慶の側に歩み寄った彼は、

「安宅勢だけでも、確実に宗三を捕捉できましょう」

と、付け加えておいた。

長慶は、なおも考えている。ただ、久秀が言うように、六角の主力が、万一にも到着するようになれば、今度はこちらが一転して不利にたたされかねないのである。

「ま、よからう。又四郎に、日向の援軍に出向くよう命じよ。だが、大将はあくまでも芥川孫十郎殿と、日向ぞ。又四郎はあくまでも副将として、芥川殿と日向を補佐し、その下知に従え」

「御意！」

長慶の命に、久秀は嬉しそうに頷き、早速、使者を安宅・十河の陣に飛ばした。

そのとき、ぽたぽたと、静かに雨が降り始めた。厳かな陣羽織に身を包んだ長慶の肌を、雨露が撫でるようにたれていった。

「久秀、小太郎ッ！」

長慶は怒鳴るように腹心を呼びつけると、

「全軍に下令！ 雨が上がり次第、総攻撃を開始する」

常の彼とは到底思えぬような大音声を張り上げ、そう命じた。久秀や小太郎範政は、ただ、

「ははーッ！」

と、恭しく、大仰に平伏すだけであった。

雨は連日に渡り続き、上がったのが、六月二十四日のことであった。

空を覆っていた雨雲は、既に消え、さっぱりとした快晴が、頭上の世界に広がっていた。

六角軍は京を発し、山崎に入ったという。既に長慶の命に従い、総攻撃の支度を整えていた三好軍は、晴れ晴れとした空の下、猛然と江口城への総攻めを開始したのだった。

「…いよいよ、か」

江口城の一角で、宗三入道は苦りきったような顔をして、溜息を吐いた。

「まだ、近江の兵は来ぬか？」

あくる日も、あくる日も、飽きることなく問い続けたが、返ってくる答えは、

「まだにございます」

常にこうだった。

だから宗三も、既に諦めていた。いや、それでもなお心の底では諦めきれないのだろう。だから、昨夜などは、酔いに任せ、

川舟を 留て近江の勢もこず 問んともせぬ 人を待かな

などという、未練に満ちた歌を詠んだりしていた。

「申し上げます！」

そこに、晴元より預けられていた寄騎の平井丹後が慌しく駆け込んできて、宗三の前に平伏した。

「今日の朝早く、六角義賢殿率いる総勢一万の近江軍が、山崎に入つたとのことでございます」

「なに？ 山崎にだと？」

宗三は嬉しそうに声高に叫ぶと、「誤報ではあるまいな」と、平井丹後の顔をぎろりと睨み付けた。

「誠にございます！」

平井はそう言つて、胸を張つた。

山崎から、江口までは、およそ半日の距離である。ただ、芥川山に芥川孫十郎、三好日向守、十河一存らが展開している今、彼らを迂回して進軍するとなると、到着は、早くて一日はかかるだろう。だが、一日、二日もすれば援軍がくるかもしれぬ、そう思うと、宗三はそれまでの絶望が嘘のような期待と希望をその満面に表すようになった。

「も、申し上げますッ！」

そこに、使番がやつてきた。

「申し上げます。み、三好軍の総攻撃を受け、表門が突破され、既に西の丸全域が敵軍の手中に落ちましてございます」

「な、なに！」

宗三は慌てて窓のほうへ駆け寄ると、確かに西の丸御殿は、三好軍の制圧下に入ったと見えて、彼らの猛々しい凱歌の音が、高らかに響き渡っていた。

「申し上げます。た、田井源介様、討ち死に！」

「またも凶報である。宗三は頭を抱えた。」

「既に全軍、本丸御殿に引き上げております。…このままでは、落城は時間の問題でございます」

「な、なんだと…」

宗三は苦りきった。信じたくなかった。後一日もすれば、待ちに待った近江軍がやってくるかもしれないのだ。助かるかもしれないのだ。勝てるかもしれないのだ。それなのに、勝利を待たずして滅亡するなど、断じて許容できることではなかった。

「か、数が違いすぎます。三好軍の勢い、凄まじく…」  
と、平井丹後は無念そうにぼやいていた。

迫る三好軍は、三好長慶本隊だけで二万。安宅冬康勢四千を加えると、総勢二万四千になった。一方、宗三以下江口籠城軍は、僅かに三千。その上、劣勢を悟った兵たちの脱走や、長慶方の調略工作に応じた兵たちの離反も相次いでいる。如何に要害堅固を誇る江口城に立てこもっていても、不利は当然といえば当然であった。

今にして思えば、榎並の政勝に三千の兵を預けて残しておいたことが、何より悔やまれる宗三だった。

「も、申し上げます」

またしても、血塗れの伝令が、宗三の下に駆け込んできた。聞くまでもない凶報に、宗三は肩を落とした。

「波々<sup>ほっかへ</sup>伯部左衛門尉様、討ち死になさいましてごさいまする」  
「…そうか」

もはや怒る気力も、嘆く体力すらなく、宗三はその場に崩れ落ちた。これまで何のために戦ってきたのか。何のために同胞、同僚たちを葬り去ってきたのか。何のために生きてきたのか…。こうやって窮地に追い込まれてみると、人生の空しさがよく分かった。

分家の出でありながら、三好宗家の家督を狙った時点で、宗三の命運は尽きていたのかもしれない。元長を殺しても、その子千熊丸は殺せなかった。晴元が甘いといえ、それまでだったが、晴元にそこまで強く迫れなかった自分の甘さであるともいえた。

結局、こういう定めなのだろう。生まれ持った宿命に抗って、己が道を歩もうとしたために、仏罰が当たったに違いない。

「逃げましょう」

と、平井丹後は言う。

「逃げて再起を期すのです」

「再起、だと？」

宗三は、呆れたように笑った。

「どうやって逃げる？ 西の陸地には、三好軍。北、東、南の川には、安宅摂津の水軍が、わしの首を求めて待っている。逃げたところで、逃げ切れるわけもあるまい。ならば、わしも武士じゃ。武士として、武士らしく死ぬ。かつて、元長殿も、火炎の中に死んでいった。少なくとも元長殿に劣っているとは言われたくない」

そう言つと、彼はにっこりと微笑んだ。

謀略も、計略も、策略も、今は全くない。ただ武士として死ぬだけ。宗三は、おもむろに脇差を取り出すと、それを眺めつつ、にやりと不敵な笑みを漏らした。

「それがしは自決はいたしませぬぞ」

平井丹後は、そう言つて、宗三を睨んだ。

「御所様配下にも、それがしの如き強者もいるのだということ、三好の奴輩に思い知らせてやるべく、単身特攻します」

「…そうか」

丹後の悲壮な決意に、宗三はにやりと笑った。

彼はおもむろに立ち上がり、大切に飾ってあつた愛刀を取り出すと、それを丹後に手渡した。

「それをやる。わしの命の次に大切な刀だが、お主にやる。それをもつて、敵に斬り込め。さすれば、わしの無念も少しは晴れよう。わしはここで自害するゆえ、そなたはそれを持って斬り込むのだ」

「…分かりました」

宗三の命に、丹後は嬉しそうに、ニコニコと微笑んだ。

三好軍は、怒涛の如き勢いで迫ってきた。

既に本丸の大半は、三好勢の手中に落ちている。

平井丹後は、僅か十二人の配下を従えて、押し寄せる三好軍に斬り込んだ。ぎらぎらと、銀色に輝く刃を振り回しながら、平井丹後守は、次から次へ、敵兵を斬り殺していった。

宗三は、自室に火を放ち、ゆつくりと、窓の向こうに広がる青空を眺めていた。

「全く、本当に千熊丸が、頼朝になるとはなあ。…御所様も、今頃はあの折の御決断を、大そう後悔なされておられるだろうな。清盛入道の二の舞とは、全く馬鹿なことをしたものだ」

などと呟きながら、ゆつくりと脇差を抜き払った。

火は、勢いよく燃え上がった。ばちばちと豪快な音を張り上げながら、あらゆるものを突き崩していった。

「くつくく。ま、楽しい人生ではあった。ただ、わしも散々殺しすぎたからなあ。少なくとも地獄落ちは間違いあるまい」

もはや笑うしかない。笑う力だけは、何とか残っているようだった。

刻々と、敵兵は迫ってくる。威勢のよかった平井丹後らの大音声も、既がない。どたどたと、何やら騒がしい足音が聞こえてくるが、味方とは思えなかった。

炎は、勢いよく燃え上がって、やがて、宗三の陣羽織に灯った。凄まじき熱気が、ひしひしと押し寄せる。流れる汗をその肌を感じながら、未だ生きていることを、ただ不思議に思った。

そこに、敵兵がなだれ込んできた。敵将宗三の首を求め、彼らは勢いよく押し寄せてきたのだった。

「下がれッ！ 下郎ども！」

宗三はそう怒鳴ると、足軽たちは、思わずたじろいだ。

「これが、従五位上三好越後守宗三入道が最期である。よく見ておけ。そして、筑前守長慶に伝えよ！ これが、三好の血を受け継ぎし、誇り高き武士の堂々たる最期ぞ！」

そう言っ、彼は脇差を思い切り、力強く、勢いよく己が腹に突き立てた。介錯は、当然ない。激痛が走る。しかし耐える。



崩れ落ちそうになる。けれど、耐えた。

「…その家紋は…、ゆ、遊佐河内守の、か、家中よな」  
薄れ行く意識の中で、宗三は足軽たちを睨み付けた。

「か、河内にも伝えておくがいい。…き、木沢長政、そしてわしと、陰謀を弄して出世を遂げてきた男に、こ、こ、幸福な未来などないくつくく。や、奴もまた、我らと同じく非業の最期を遂げることになるだろう。くつくく。覚悟しておけよ」

そこまで言つて、宗三はぐったりと力尽きた。溢れんばかりの鮮血が、美しく整えられた畳を真っ赤に染めていた。

三好宗三は、その後もしばらく息はあつたが、意識はなかつた。けれど、彼が死にゆくまで…、いや、彼の身体を、紅蓮の業火が飲み込むまで、遊佐家の兵士たちは、ただジツと、何もせず、見守るしかなかった。

三好宗三入道は、やがて火の中へと消えていった。

その瞬間、ガラガラと音を立てて、全てが崩れ、やがて彼をその身体ごと永遠の闇の中へ突き落としていった。

【絶頂編】第067章 三好政権

江口城が陥落し、宗三入道が跡形もなく滅び去ってみると、世の中は既に三好家一色に染まった感すらあった。

宗三は、所詮細川晴元に仕える家臣の一人に過ぎないが、けれど、彼という人間があつたからこそ、細川政権は軍事的に三好長慶に対抗できたのである。それは決して言い過ぎでも、過剰評価でもない。実際、宗三亡き後の細川政権というものは、随分あつけなく滅びの道を歩んでいった。

まず…。

江口陥落後、三好軍は大挙して三宅城を包囲した。細川晴元は慌てて兵を集めたが、江口陥落の凶報を受けて脱走兵が相次いだこともあり、集まつたのは僅か二千だった。一方、宗三の敗残軍を加えた三好長慶軍は総勢三万にまで膨れ上がっており、勝敗は誰の目にも明らかだった。

「この際、晴元は徹底的に討つべきだ！」

と、十河一存などは声高に主張していたが、長慶はなかなか首を縦には振らなかつた。最終的に、三好長逸、三好政康、遊佐長教、松永久秀、立花小太郎ら諸将が挙つて十河に同調したが、

「ならん」

その一点張りで、長慶はついにそれを受け入れなかつた。

長慶があくまで晴元討滅を嫌がつたのには、諸説あつて、依然定かではない。かつての主君を殺すのが忍びなかつた…、というのが当時も今も、半ば定説の如く扱われているが、長慶はそれほど甘い男ではない。殺したいと思えば…、あるいは殺さねばならないだけの理由、必然性があるなら、躊躇わず処刑命令を下しただろう。それがかつての主君だろうと、そんなことをいちいち気にかける長慶ではないのである。

「晴元殿を殺せば、その残党どもは、余をどこまでも宿敵と睨んで

付け狙おう。かつて余は、父を殺され、ゆえに晴元殿をどこまでも宿敵と思つてきた。もし余が今ここで晴元殿を殺せば、今度はかつての余のように、余を仇と付け狙う者が現れよう。さすれば、天下安寧は程遠い。ひいては余の天下をも揺るがしかねぬ」

などと説明して、長慶は、いきり立つ諸将を制していた。要するに、長慶は、今ここで晴元を殺すのは、長期的に見て得策ではないと考えていたのだった。

とにかく、長慶は半ば強引に諸将を説得して、晴元方の無条件に近い降伏を受け入れた。この辺りは、さすがに彼もぬかりはない。当初、いろいろな条件を付けて、少しでも優位な和議に持ち込もうとした晴元であったが、長慶の容認した条件は、

「晴元殿及び城兵の命は安堵する」

たった、それだけであった。それ以外のあらゆる条件は認めず、それが呑めないなら総攻撃をかけるのみだと迫った。

既に晴元には、交渉の余地すらなかった。他ならぬ長慶から命を安堵すると言い出してきているだけで、最高の成果と受け取るより他に仕方がないのであった。

で、細川晴元は六月二十五日、三好軍本陣に出頭した。上座にでんと構える長慶の前に、敗軍の将として引きずり出されたのである。屈辱といえ、これ以上の屈辱はなかったろう。長慶は平然とした顔をして、我が物顔でふんぞり返っている。かつての主君に遠慮し、上座を譲る気など毛頭ない様子だった。

「お命のみは安堵しましょう。以後は余計なことは考えられませぬよう、筑前守、伏してお願い申し上げます」

とだけ言って、彼はゆっくりとその場を去っていった。

六月二十六日。

山崎まで進出していた六角義賢は、江口陥落、晴元降伏と相次ぐ凶報に接すると、慌しく兵を引き、本国近江へと退却していった。

降伏した細川晴元は、安宅冬康の手勢に護送される形で帰京し、慈照寺に入った。その上で、容易く晴元が逃げ出さないよう、慈照寺全体を冬康配下の淡路勢が嚴重に取り囲んでいた。

六月二十七日。

松永久秀が三好長慶の代官として、都に乗り込んできた。検断奉行の肩書きを長慶から許されていた彼は、都に入るなり、徹底した残党狩りを遂行した。上は將軍家から、下は乞食に至るまで、晴元に組したと思われる者は片っ端からしよっ引き、奉行所において、彼自ら裁いていった。

そのやり口は、実に強引かつ暴力的であった。

ある時は、公家の屋敷に乗り込んだ。怪しいと見れば、久秀配下の大将たちは、容赦なく、完全武装の兵を率いて土足で乱入した。その最たる例が、近衛家に対するものであった。

「松永殿、近衛家は如何いたしますか？」

と、配下たちは困ったような顔をして、久秀の方針を確かめにきた。

「近衛？ 知らん。怪しいのであれば、例外なくしよっ引いてくるように命じたであらう」

久秀は淡々とした口調でそう命じたが、彼とても近衛家がどういふ存在なのかは重々承知していた。彼にしてみると、だからこそという思いがあった。元々身分低き家に生まれ、自力で這い上がったきた男なのである。彼には、古くからの権威というものを、必要以上で否定したがるきらいがあったのだ。

近衛家は、いわゆる五摂家の筆頭である。五摂家というのは、藤原鎌足以来連綿と続く藤原一門の主流となった藤原北家（鎌足の子不比等の次男房前ふひらのむねを祖とする家柄）の嫡流のことで、かつあらゆる公家の中でも、摂政関白の座に就くことができる家を指しており、現在五つある。近衛、二条、一条、九条、鷹司であるが、その中で、近衛家は筆頭と目されるほどの権威と名声を誇っている。

とにかく、そんな近衛家であらうと、晴元に与力していた以上、

久秀は容赦がなかった。すかさず兵を差し向け、前関白で准后じゆんごの近衛植家以下、近衛一門を片っ端からひっ捕らえると、どれもこれも、慈照寺に送り込んでいった。

そんな具合、松永久秀は徹底的に残党狩りを行った。近衛家だけでなく、前將軍足利義晴も、晴元に味方したということで、例外なくひっ捕らえられ、慈照寺送りとなった。そのほか、大納言の久我晴通をはじめとする高級公家も相次いで逮捕され、同様に慈照寺に送り込まれていった。

そうした殺伐とした都に、三好長慶がやってきたのは、七月九日のことである。松永久秀や安宅冬康ら、在京の三好党幹部が出迎える中、彼は盟主と仰いだ細川氏綱を擁して、総勢三万の大軍を従え、肅々と入京したのだった。乱暴の限りを尽くした松永久秀の主君であり、かつ晴元に代わる新たな天下人だけに、人々は皆、興味津津の顔で出迎えた。

長慶は無人の館と化した管領御所に入ると、そこを氏綱に明け渡した。未だ將軍家より正式に管領職に任命されたわけではないが、晴元が没落し、長慶が権力者となった今、長慶に擁されている氏綱こそが実質的な管領であると、誰もが思っていた。

長慶はというと、市内の三好屋敷に入って、とりあえず休息をとった。その間も、無論、三好の精銳は休むことなく戦いを続けていたわけだが、長慶自身は、全ての裁量を三好康長、三好之康の二人に委ね、その補佐として、松永久秀、立花範政、今村慶満ら側近をつけること、「疲れた」

と言つて、奥のほうに引きこもってしまった。

一方、全権を委託された康長、之康の二人は、久秀や立花範政ら補佐役たちと協議を重ね、各地の晴元党に対する征討を強力に推進していった。

例えば…。

彼らが最初の標的としたのは、和泉である。同国には経済的、戦略的要衝たる堺の町があり、畿内の安定を図る上で、何よりも制圧しておかねばならぬ重要な土地であった。

和泉国を支配しているのは、守護の細川元常である。細川一門として、当然のように晴元に従っていた彼は、主君たる晴元が失脚し、三好長慶が権力を揮うようになった今も、そのことを決して認めず、徹底抗戦の姿勢を貫いていた。

「日向殿、主税助ちからのすけ殿らに一万を預け、向かわせれば、それで片付くでしょう」

という松永久秀の進言に従う形で、康長と之康は早速三好日向守長逸と岩成主税助友通に一万の精鋭を預けると、彼らは七月十一日、京を発して、和泉を目指した。

ただ、和泉には、既に畠山家執政にして長慶の岳父たる遊佐長教率いる河内軍が進攻し、元常の有力被官であった松浦興信を味方に取り込むなど、優勢に戦いを進めていた。そこに、三好長逸率いる三好軍一万が到来したのであるから、元常軍の敗勢は決定的となった。

「降伏するより他に、もはや手はありませんね」

居城岸和田城に追い詰められた元常に対し、養子の與一郎よといちろう藤孝（後の細川幽斎）は、はっきりとした口調でそう言つと、怯える養父に覚悟を迫った。

「こ、降伏だと？ み、三好筑前如きに、このわしが、降伏だと？」  
今年で十五歳になる養子を、ぎろりと睨み付けながら、元常は落ち着きなく、あちこちをうろつろと動き回った。

「既に管領様も降伏なさっております。これ以上戦えば、我らの敗北は必至。もしも父上が降伏せぬと仰せなら、もはや城を枕に討ち死にするより他に仕方ありませんね」

と、藤孝は淡々と呟き、小さく頭を下げた。

七月十七日。

細川元常は、養子藤孝の説得を容れる形で、三好軍に降伏を申し出ると、案外素直に岸和田城を明け渡した。日向守長逸や主税助友通ら三好軍首脳は、遊佐長教と談合した上で、

「都に上り、直接筑前殿に謝すべきこと」

というのを条件に出し、降伏を受け入れた。ゆえに、細川元常・藤孝親子は十八日、都に引き上げる三好長逸軍に護送されつつ、敗軍の将、虜将として、京に赴く破目となった。

その後、岸和田城には岩成友通が残留し、遊佐長教と連携しつつ、果断に戦後処理を済ませていった。かくして和泉国は三好家の制圧下に入り、やがて、長慶が和泉守護代に任じられるに及び、同国もまた三好家の領土の一つに編入されることとなった。

また、京の三好方大本営は、和泉平定が片付いた七月中頃から、摂津において依然として踏ん張っている伊丹親興の討伐を本格化させた。ただ、こちらは和泉のように簡単に片付くものではなく、如何に強大な三好軍といえども、苦戦を余儀なくされることになった。

伊丹攻略軍は、当初、三好政康を総大将とし、池田長正や、この戦いで復権を狙う三宅国村らを寄騎につけ、総勢七千の軍で構成されていた。しかし、摂津最大の大国人勢力である伊丹大和守親興が、その程度の戦力で倒されるはずもなく、また、それゆえに未だ若年で、経験が不足している政康ではどうにもならず、やむなく、三好之康自ら総勢一万五千の大軍を率いて、伊丹征伐に出向かねばならぬ破目となった。

さらに、丹波においても、三好方の作戦活動は活発化した。即ち、主な標的は波多野秀忠であるが、彼と対峙する内藤長頼への援軍として、和泉征伐から帰京したばかりの三好長逸を総大将、松永久秀を副将兼軍監とする総勢一万の兵を差し向けたのであった。

各地の征伐戦は、ほぼ順調に進んだ。

和泉はあつけなく三好軍の制圧下に入り、やがてここは三好家の領国の一つになった。丹波方面も、内藤長頼、三好長逸ら三好方が大攻勢をかけたことで、耐え切れなくなった波多野秀忠は、八月末、ついに観念して降伏した。領地のいくらかは没収され、秀忠自身が単身上洛して長慶に謝罪するという屈辱も味わったが、状況が状況だけに、我慢するより他に仕方がなかった。

問題は伊丹親興である。

三好之康の援軍一万五千を加えてなお、三好軍は攻めあぐねていた。無論、片っ端から晴元残党を片付けていった三好方にとって、別段伊丹攻めを急ぐ必要性もなかったのだが、あちこちをものもの見事に平定していった三好軍にとって、“苦戦”していること事態が断じて許せなかったのである。

とはいえ、伊丹親興とて、孤立無援の状況下では、いつまでも徹底抗戦できるはずもなく、年が明けた天文十九年（一五五〇年）三月二十八日、遊佐河内守長教の仲介工作もあり、ようやく降伏して城を明け渡した。

江口の勝利及び三好長慶の入京を持って、細川政権は崩壊し、代わって三好政権が成立したとされる。明応二年（一四九三年）、細川政元が時の將軍足利義材（義植）を追放した、いわゆる明応の政変以来、都合五十六年間に渡り、まがりなりにも保たれてきた細川政権は、ついに終焉の時を迎えたのである。

実際、長慶の勢威は天下最強になった。細川氏綱を擁立して、事実上細川京兆家の実権を握り、足利將軍家を追い出して、幕政をも手中に収めた。

考えてみれば、一昔前まで阿波の土豪でしかなかった三好家が、都の実質的な主となり、これほどの権勢を握ったのである。実力本位の戦国時代だからこそなし得た偉業であり、かつ、これ以上ない



典型的な下克上といってよかった。

八月に入つてしばらくした頃、権力の頂点に立つた三好長慶と、彼の盟主たる細川氏綱は、朝廷よりそれぞれ、従四位下の位階を賜つた。氏綱はともかく、その被官に過ぎない長慶が、従四位などという高位を賜ふことなど、他に例がなく、それだけ三好長慶という存在が天下に重きを成してきた証であるといえた。

江口の合戦以後、三好家の勢力範囲は飛躍的に拡大した。

領土的には、本領である阿波・讃岐・淡路三ヶ国のほかに、新たに摂津・丹波・和泉・山城の四ヶ国を加えた。特に、古来より大國と名高い摂津を統一したことや、古くより都が置かれ、政治的中心を占めてきた山城を支配下に置いたことは、三好政権の強大ぶりをより明確に表していた。また、和泉国を支配したことで、この時代屈指の経済圏を形成していた堺の町を勢力下に置くことも可能となり、三好家の財政状態は、格段に改善した。

三好政権は前途洋洋であった。

着々と基盤も固まっている。総大将たる三好長慶は、従四位下筑前守の栄位栄職に昇り、位階の面でも細川京兆家当主と遜色はなくなっていた。

だが…。

故にこそ、絶大な権力を握った三好党の中には、乱暴な振る舞いを強行する者が少なくなかった。無論、乱暴狼藉といっても、民衆に対して行うものではなく、あくまで、専ら公家や親王家といった高貴な身分の人々に対するものであったが、それでも乱暴には変わらず、特に被害にあった人々の中には、

「木曾義仲の再来だ」

と、噂する者もあった。

けれど、長慶はそうした配下たちの暴走を制するわけでもなく、実質的に黙認していた。かと思えば、足輕の一人が市民に暴行を加えたという事件が起きるや否や、彼自ら死罪を命じていたから、兵たちの暴走に対して、彼が一切無関心というわけでもないようだった。要するに彼としては、ひたすら民草から不満の声があがることを恐れていただけで、公家衆など、はなから眼中に入れてはいなかったのだった。

三好軍の乱暴狼藉の具体的事例をあげれば、以下の通りである。丹波方面が安定し、そのお礼と改めて三好家への臣従を誓うべく上洛した内藤長頼は、しばらくの間、都に留まっていたが、兄である松永久秀の片棒を担ぐ形で、將軍家の領地である山科七郷の収入を横領した。残党狩りや各地の征伐戦など、とにかく出費が嵩んだ三好家の財政基盤を確立するためであったが、細川家の被官に過ぎない三好家の、さらに被官が、細川家の主君に当たる將軍家の領地を横領するなど、言うまでもなく前例のないことであった。

他に、長慶の側近衆の一人である今村慶満は、公家の一人たる山科言継が内蔵頭として直接支配していた禁裏御料所内蔵寮領の陸路河上四方八口率分役所の下代（下級役人）を追放して、これを無理押しに横領した。それだけでなく、彼は前大納言広橋国光の莊園である山城国の声聞師村までも奪い取って、三好家の直接支配下に置いてしまった。また、十河一存は、時の後奈良天皇の従弟にあたる伏見宮邦輔親王が治めていた山城国の上三栖（現京都市伏見区）を横領していた。

兎にも角にも、三好党は軍事力にものを言わせた様々な行為を容赦なく行っていたが、基本的に、三好政権の強大さを見せつけ、今後の統治をやりやすくするための、いわばショック療法的なものであったから、彼らの行動の全ては、総帥たる長慶了承の下に行われたとするのが、一般的な見方であった。

「わが世の春よのう」

越水城より呼び寄せた雅の方と、駕籠に乗って、都中を練り歩いている。総勢三百余騎の、煌びやかな軍装に身を包んだ精銳に守られながら、彼らは肅々と、暮盤の目の如く画一的に整理された町並みの中を進んだ。

「ほら、雅よ、見てみる。俺の手で、この町がどんどん変わっていくぞ。今に見よ。この町は大きく変わるぞ。いや、変えてやる。桓武帝がこの町を作りし人なら、余は、この町を変えた男になってやる」

などと、一人楽しそうに大騒ぎしながら、長慶はあっちへ行ったり、こっちへ行ったり、方向感なく、とにかく町中をさまよい続けた。その間、頭を下げ続けねばならない民衆にしてみれば、迷惑極まりないことであつたが、長慶は気にせず、町の中を進んだ。

やがて、彼らは將軍御所にやつてきた。今や、無人の館と化している、かつての天下の中心は、雅の方にとって、ただの廢墟にしか見えなかつた。散々越水城や三好屋敷のような壮大盛大なものばかり見てきたからか、ここが將軍家の居所だといわれても、

「本当ですか？」

と、半信半疑といった様子であつた。

九月も中頃に入った。

長慶の権勢は、日に日に高まるばかりで、いつこうに衰えるということを知らなかつた。彼の存在感が高まるにつれ、管領御所の細川氏綱は、あつてもなくても変わらないような存在になつた。無人の將軍御所など、誰も気にかけないようになつた。長慶一人あれば、都は纏まっている。三好家あれば、都は平穩だつた。だから、人々は、足利、細川といった名を、いとも容易く忘れていった。

氏綱にしてみると、全く気に入らない。

管領御所だけでなく、長慶からは淀城を、自らの居城として宛がわれていたが、彼には何の実権もなかつた。本来、室町御所か、あるいは管領御所にて行われるべき政務は、全て三好屋敷にて決済されてきた。三好康長、三好之康、三好長逸、三好政康、岩成友通といった有力一門、重臣が立案した政策は、長慶の承認を経て、松永久秀、立花範政、今村慶満ら長慶側近の奉行衆の手によって実行に

移される。けれど、そういう統治システムの中に、盟主である氏綱の果たすべき役割はなかった。

不満といえ、これほどの不満もない。

將軍不在の今、幕政を仕切るのは、実質的な管領である自分だと彼は固く信じていた。だが、実際は三好家が全てを仕切り、長慶が幕政を壟断している。政所執事の伊勢貞孝と連携しているから、如何に自分が管領だと称していても、まだ実際には管領ではない氏綱に、長慶・貞孝の連立政府の決定を阻止しうるだけの権能はなかった。

「いつそ、新たな敵が現れれば、我らの存在感も高まるというものでしょうな」

弟の藤賢は、そんな風に言って、兄の無聊を慰めていた。

「新たな敵、のう」

九月の風は、案外冷たい。氏綱は庭先に出て、ハアと静かに溜息を吐いた。

こんなはずではなかった。氏綱は苦笑いする。

結局、自分は何のために戦ってきたのか。確かに当初の目標であった、晴元を追い落として、細川京兆家の総帥の座は手に入れた。けれど、それは形だけ…。実態は何にも伴っていない。名のみ貰って、実はとられた。何のことはない。自分は長慶に体よく利用されただけに過ぎないのである。

「よかるう。新たな敵とやら、我らで拵えてやるう。少しばかり増長に過ぎる筑前を懲らしめるにはよい機会であるう」

などと呟きながら、氏綱は主だった重臣に集まるよう命じた。無論、信の置ける股肱の臣たちであるが、とにかく、今は策を考えるが先決と、藤賢をひたすらに急かしていた。

九月二十八日。

三好屋敷の長慶の下に、思いもよらぬ凶報が入った。

長慶はその日、珍しく何もせず、ただ松永久秀や立花範政ら奉行衆が持つてきた無数の政治文書に、何気なく目を通していた。

「も、申し上げますッ！」

と、そこに、松永久秀が、表の奉行所より慌しく駆け込んできた。「何事だ、騒々しい」

長慶はムツとしたような顔で、ぎろりと久秀を睨み付けた。

「じ、慈照寺に捕らえていた前將軍義晴様、將軍義藤様、管領晴元以下全員が、昨夜、逃げ出した由にございます」

「…逃げた？」

長慶は、思いもよらぬ凶報に、思わず首をかしげた。

「だが、慈照寺には、撰津（安宅冬康）の手勢で固めておいたはず。それが何ゆえに…」

あの冬康が与えられた任務を疎かにするとは思えないし、如何に義理堅く、信義に厚い彼といえど、わざわざ彼らを逃がすような真似はするまい。となると、どういうわけなのか。長慶はその真相を知りたがった。

「撰津守様が申されますには、昨日夕刻頃、淀城の氏綱様より使者が参り、火急の用件だからと、すぐ来るようにと命じられ、淀城に出向いている隙に、六角の配下辺りにやられたとのことです」

「…氏綱様、だと」

そこに上がった思いもよらぬ名前に、長慶の顔は、たちまち朱に染まった。

「待て。撰津はおらずとも、奴の配下が嚴重に警護はしておつたのだらう。なのに、何ゆえ容易く、捕らえていた全員が逃げ出すことができたのだ？ 六角と申したが、昨日、六角勢が都近くに出張ってきたなどという報告は受けておらんが」

長慶という男は、やはり聡明である。鋭い、と久秀は思った。故にこそ、彼に対しては、半端な言い訳は通じず、ありのままの事実を、そのまま伝えるしかなかった。

「六角軍ではありませんせぬ。あらゆる報告から勘案しますに、おそら

く、甲賀の忍びの者の仕業と思われませう」

「忍び？」

「はッ！ それがしも、古く甲賀には厄介になっていた身ゆえ、そのやり口はよく存じているのです。また、甲賀忍軍の本拠地は、六角の領内にありますれば、六角家は代々、強力な忍軍を編成して、日々訓練鍛錬に励んでいるとの事です」

「…ならば、そやつらの仕業と、弾正！ そなたは考えるのだな」  
長慶に問われ、弾正久秀は大きく頷いた。

「將軍や管領を六角に取られたのは痛すぎる。…弾正、その方、この一件に関与したと思われる者を片っ端からしよっ引いて、真偽のほどを明らかにせよ」

と、長慶が厳しい口調で命じると、

「万一、淀御所（氏綱）の関与が疑われし時は、如何なさいましょ  
う」

と、すかさず尋ねる弾正久秀であった。

「言つまでもあるまい。…例外はない」

「御意のままに」

長慶の意を受け、久秀は嬉しそうに頷き、そして平伏した。

將軍、管領以下の大脱走事件は、前途洋洋、磐石に見えた三好政権を、根底から揺るがしうる大事件となった。

人々は、新たな戦雲を予感して恐怖した。特に、將軍や管領を擁立した六角定頼と、三好長慶の間で全面戦争が勃発するのではないかと、誰もが固唾を呑んで、近江の動向を注視するようになった。

一方。

都では、脱走事件に関与したと思われる者たちが、次々と逮捕され、三好方による弾圧の嵐が、猛烈に吹き荒れていた。そして、その嵐は、淀城の細川氏綱にも及び、松永弾正久秀と、立花信濃守範政が率いる総勢五千の三好軍が淀城を取り囲むと、氏綱は案外あつ

けなく投降した。

「されば、脱走に関与したことはないと仰せか？」

長慶は、ぎろりと氏綱を睨みつけ、その意を確かめていた。

「関与したことなどない。何ゆえ、このわしが晴元を逃がさねばならぬ。わしの宿敵だというに、逃がしたところで、何の利益があるというのだ」

氏綱はそう言って開き直ったが、長慶には通じない。長慶は、彼の意の全てを理解した上で、

「ならばよろしゅうござる。ただ、晴元が逃げ出した今、奴らが狙うは細川家当主の氏綱様のお命でございましょう。されば、氏綱様をお守りすべく、我らも警護を強化せねばなりません。

以後、氏綱様におかれましては、我らの許可なく淀城より外にはお出ましになりませぬよう、この筑前守、伏してお願ひ申し上げます。無論、生活には不自由させませぬ。身の回りの警護は、この松永弾正に委任しますゆえ、以後、何か申したきことあらば、全て弾正に申してください」

と、あくまで淡々とした顔で言うのであった。

氏綱は苦りきったが、後の祭りだった。晴元を逃がして、彼らを新たな脅威と祭り上げることで、盟主としての自分の存在感を高めるつもりが、逆に、長慶に自分への拘束を強化させる大義名分を与える結果になってしまったのだから、これ以上の皮肉もなかった。

これに先立つ九月初頭。

従四位下筑前守となった三好長慶だけでなく、三好家の有力な重臣たちにも、朝廷より正式な官位任官の沙汰が下っていた。

即ち。任官者及び位階官職は以下の通りである。

正五位下山城守……………三好康長

正五位下豊前守……………三好之康



従五位上撰津守……………安宅冬康  
従五位上讚岐守……………十河一存  
従五位上日向守……………三好長逸  
従五位上下野守……………三好政康  
従五位上伊予守……………岩成友通  
従五位下弾正少忠……………松永久秀  
従五位下信濃守……………立花範政  
従五位下備前守……………内藤長頼

大まかに列挙すると、こうなる。他にもいろいろいるわけだが、他はこの際、割愛しよう。ただ、長慶の岳父であり、畠山家筆頭家老の遊佐長教は、正五位上河内守に栄達し、今ではすっかり、三好政権内の有力者の一人という位置づけに収まっていた。

何はともかく、家臣団に対しても正五位、従五位という官位が与えられるようになった三好家の勢威というものは、やはり凄まじかった。

【絶頂編】第069章 揺らぐ政権

十月になった頃。

南近江の太守たる六角定頼は居城たる観音寺城内にあつて、二夕二夕と笑っていた。

既に五十四歳。いい歳ではあるが、近江源氏佐々木氏に連なる名門六角氏の当主としての……、いや、内政、外交、軍事等あらゆる方面で卓越した手腕を発揮して最盛期を築き上げた英主としての気概は依然として失われておらず、特に最近などは、若かりし頃に戻つたような気持ちになつて、新たな好敵手たる三好長慶と対決する日を心待ちにしていたのだった。

「三好長慶、か……。よもや、これほどの男になろうとは思わなかつたが、この老人が最期の敵とするに、申し分ない強敵じゃわい」などと呟きながら、定頼はすつくと立ち上がると、

「但馬！ 方々は無事に坂本に入られたか？」

側に控える重臣後藤但馬守賢豊にそんな風に尋ねていた。

「無論にございます」

と、賢豊は大きく頷く。

「既に若殿（六角義賢）の御指図により、將軍家（足利義晴・義藤親子）並びに閑白家（准后近衛植家）、管領家（細川晴元）ほか、三好方より救出した方々は、坂本城にて匿われてございます。坂本には若殿の手勢三千が入り、嚴重に警護しておりますゆえ、三好軍とても容易く奪還には動けませんまい」

「そうか」

とにかく磐石な体制が整っていることを確認した定頼は、安心してようにホッと溜息を吐く。

「いずれはわしも坂本に伺候し、公方様や管領殿に謁見せねばなるまいな」

「左様にございますな。その折は是非、二万の兵をお供につけて、

正々堂々出向かねばなりません」

「……二万？ はっはっは。それだけの兵を持って坂本に出向けば、さしもの筑前も、少しは肝を冷やそう」

豪快に高笑いしつつ、定頼はようやくその場に腰を下ろした。けれど、老いてなお盛んな彼の鋭き頭脳は、少しも休むことなく今もぐるぐると目まぐるしく回転を続けていた。

「ところで但馬よ。あの一件、準備は滞りなく進んでおるか？」

そう言って定頼はじろりと後藤但馬守を睨みつけた。

「無論にございます。若殿の下、蒲生定秀殿を総奉行として、下準備は既に整っております」

「左様か」

老人は、ようやく安堵した。上座にごろりと寝転がると、定頼は静かに「疲れた」と呟きながら、ハアといつになく深き溜息を吐いていた。

近江坂本に將軍家以下貴人たちを迎えた六角家は、三好家との決戦に備えて着々準備を整えていた。

十月中頃、六角義賢が総勢五千の精銳を率いて慈照寺方面まで進出し、その南方にある如意ヶ嶽に新たな城を築き始めた。六角家の重臣たる蒲生定秀を築城総奉行とし、近江中の人夫を駆り出して行った土木事業は、いつ何時、三好軍の妨害を受けるか分からぬ危険作業であったが、いずれ六角軍が上洛する折に欠かせぬ最前線基地となる場所であるから、定頼はいくら犠牲が出ようとも、どれほど出費が嵩もうとも、必ず完成させるようと、しきりに嚴命を下していた。

けれど楽な作業ではない。

何より、自らの膝元でそんなことをされている三好方が何もせず見逃してくれるはずもないのである。

「如意ヶ嶽に城を築いているだと？」

報告を受けた長慶は、呆れたように溜息を吐いた。あくまでも三好家と徹底抗戦する腹らしい六角定頼の決意に辟易しつつ、「弾正。六角のことはそなたに一任する。何とかしてみろ」

と、今や立花信濃守範政と並び立つ側近となった松永弾正久秀にそう命じた。

それを受け、弾正久秀は早速動き出した。長慶より付けられた寄騎たる小泉秀清、今村慶満らを従えて、総勢四千の精鋭を率いて都を発すると、築城部隊を護衛する六角軍と激しく激突したのだった。

十月半ば以来、六角方による断続的な攻勢もあつて、京都周辺の情勢は極めて不穏であつた。

年も明け、天文十九年（一五五〇年）になつたが、三好と六角の対立は激しさを増すばかりで、全く解決の糸口は見えなかつた。ゆえに長慶は、天下人になつて初めて迎えた正月だというのに、不機嫌そうな顔をしてずっと不貞腐れていた。

「今や天下に並ぶ者なき筑前守様が、左様なお顔をなされるというのは、なんとも不思議なものでございますな」

臨濟宗大徳寺派九十世住持の大林宗套だいらんそうとうの皮肉に、長慶は恥ずかしそうに苦笑いした。

「ははは、どれほどの力を握つても、この世というのはままならぬものでございます」

長慶がぼやくと、

「ま、左様でございましょうな。ただ、力で何事も片付けようとする昨今の筑前様の所業は余り褒められたものではありません」

宗套は厳しい口調で、咎めるように言った。それに対しても、長慶はただ「ははは」と、苦笑いするだけだった。

「和尚には敵いませんな、全く……。ただ、実力でここまで昇つてきた我らには、力以外に頼るものがないということも和尚にはお察し願いたい。もしも我らが力を示さねば、天下は再度乱れ、收拾の

つかぬ最悪の事態ともなりましょう。我らが強くあつてこそ、天下は一つに纏まるのです」

「……なるほど。確かに力あつてこそ纏まる部分がないとは申しませぬ。されど何事もやりすぎは失敗に繋がります。筑前様のやり方は、少々やりすぎと言えましょう。あれでは、必要以上に敵を作つてしまいますぞ」

宗套の言葉も尤もではある。長慶も頭から否定する気はない。だが、今の彼が天下に君臨しているのはその圧倒的武力あつてこそであり、だからこそ、逆にこれまで以上に強力な武断政治を行わなければ国を一つにまとめ上げることが不可能なのではないかと考えている長慶なのであつた。

「ま、天下が安泰になるまでは力による政治もようございましょう。が、それだけでいつまでも天下を纏められると、筑前様はお思いか？」

「……」

「力による統治は至極簡単。だが、それでは天下人としては相応しくない。それは、あれほど北越で強勢を誇っていた木曾義仲が入京より半年足らずで滅び去つた事例を見ても明らか。唐の国においても、力に頼つたがゆえに滅び去つた事例は数多く……。近くは、唐王朝が滅び、次から次へ王朝が入れ替わつた五代十国の世など、その最たる例といつてよいでしょう。力に頼つたがゆえに、力を失えば最期、どれも無惨に滅亡の道を歩みました」

「……では、和尚は、力のほかに何を頼りに、天下を治めるべきとお考えでござるか？」

肝心要はそこだと、長慶の顔色はきらりと光つた。具体的にどうすべきなのか。そこをはつきりさせてくれない限り、宗套上人の御高説はただの陳腐な理想論になり下がってしまうのだ。

「和尚、お答えください。具体的にそれがしは何を頼りに天下を治めるべきなのか？」

こつこつという風にぐいぐいと迫ってくる時の彼は、実に良い顔をす

る。さすがに一代で天下をつかみ取った梟雄だと思いながら、宗套はにこやかに微笑んだ。

「秩序を作ることです」

「秩序？」

長慶は、きよとんとした顔をして、不思議そうに首を傾げている。「要するに、支配の仕方と申しましょうか。……力による支配というのも一つの秩序ではありませんでしょうか、先ほども申しましたように、力に重点を置きすぎると、力を失ったときが、即ち滅びに直結する。それでは安定政権などいつまでたっても築けませぬ」

「……」

「力も秩序を構成する一つの柱ではありませんでしょう。が、それが全てではない。力と並ぶほかの柱をいくらか作るのです。さすれば、政権は容易く倒れぬ。そして、力以外の柱というのは、まあいろいろあるわけですが、例としてあげるなら、血筋に頼るのも一つの手ではあります。あるいは、既存の権威を利用するのも一つです。全く新たな秩序を作り上げるというのもよろしゅうござるが、これはなかなか現実的ではありませんから、既存の権威を利用するのが得策かと」

大林宗套の言いたいことは長慶にもよく分かった。要するに、どういう政権を志向しているのか。それを今のうちから明確に意識しておけと言いたいのであろう。

長慶とて全く考えていなかったわけではない。いつまでも軍事力にのみ頼りきった統治体制でやっていけるとは思っていなかったし、その気もなかった。政権を取り巻く情勢が鎮静化し、政権が軌道に乗ったなら、順次武断政治を改めて別の政治体制を確立するつもりでいた。ただ、具体的にどういう政治体制を確立すればよいのか、それが彼には分からなかった……もとい、候補はいろいろあっても容易く決められなかったのである。

例えば細川晴元が目指した政権モデルはどうだろうか。晴元はかつて自らの政権を執権北条の如きものにするといった。要するに、

それは既存の権威である室町幕府という存在を最大限に利用するということであり、元から土台があるだけ、一番手っ取り早く、手軽な方法であるともいえた。だが、そこには名目的であれ將軍家と言う主君が存在することになり、少なからぬ制約が生じる点に欠点があった。結局、その欠点を上手く克服できなかったがゆえに、細川政権は脆弱なままついに崩壊してしまった。

ならば血筋に頼ってみるのはどうだろう。かつての藤原摂関家や平氏政権の如く、帝、あるいは將軍家に姫を嫁がせ、生まれた子供に跡を継がせ、その外戚という立場で政治を執るといやり方。だが、これも結局、上記の方法と余り変わらないような気がした。即ち自分が頂点に立つわけではないから、名目なりとはいえ頂点にたった人間との関係が悪化すれば、政権は途端に不安定となる。

「全く新たな秩序を作り上げる、と申して、例えばどういうものがありますでしょうか」

長慶は、興味津々といった顔をしてジッと宗套を見た。けれど宗套は「さあ」と、ニコニコと笑うだけで、それ以上の答えはくれなかった。

だから一人で考える。宗套が去った後も、ジッと考えてみた。

新たな秩序。要するに、平安王朝時代とも、鎌倉時代、室町時代とも違う新たな時代を自分の手で作り上げること。室町將軍家を追い落とし、自身の幕府を作ってみるのも一つの手であるように思えた。ただ、將軍家が足利から三好に代わっただけで、自身は従来の室町幕府と同じではやはり意味がないような気がした。どうせやるなら一から自分の幕府を作り上げたい。けれど、どうやればよいのか分からなかった。いや、今と全く違う幕府というものが、彼には思いつかなかった。

それからしばらく経った、天文十九年二月十五日。

如意ヶ嶽において再び六角軍による築城作業が本格化した。だが、

その当時長慶は依然として摂津で踏ん張っている伊丹大和守親興の討伐のために自身八千の兵を率いて増援に出向いていたから、都には代官として残しておいた三好康長と五千の兵があるのみだった。

築城部隊の支援として六角定頼自ら総勢二万の兵とともに観音寺から出向いてくると、多勢に無勢ということもあり三好康長としては容易く都の外に出向くわけにもいかず、結果として三月ごろになると、六角方が築いていた最前線拠点は大まかではあるが、確かに完成をみるようになった。

そこで定頼は、早速前將軍足利義晴と將軍足利義藤の二人をこの新城（中尾城という）に迎え入れようとした。けれど足利義晴は坂本を発し、三月七日に穴太（あなう現在の滋賀県大津市）に入ったところで病に倒れ、人事不省の危機的状态に陥ってしまった。ようやくこれから、というときの出来事であり、義晴としては無念だったろうが、こればかりは仕方のないことだった。

まあ、義晴が病に倒れるのも無理無きことであった。何しろ將軍に就任して以来、京都に入っては逃げるといふ日々を繰り返す、常に針の筵の上に暮らしているような精神状態のまま生きていくことを余儀なくされていたのである。これでは肉体的、精神的に限界を迎えるのも無理はなかった。

何より義晴の体はそれほど頑健ではない。これまでも病に倒れることは多々あったが、今回はいつになく酷いと、侍医たちは口を揃えて言った。

とまあそんな具合に初っ端から出鼻を挫かれた形となった六角方であったが、とにかく將軍足利義藤を中尾城に入れた定頼は、細川晴元やその被官である三好政勝（宗三入道の遺児）とともに、西院（現在の京都市右京区）や大原（同左京区）に出没しては、三好政権を朝昼晩、連日に渡って脅かした。



【絶頂編】第070章 將軍死す

天文十九年（一五五〇年）五月四日。

かねてよりの病のために人事不省状態に陥っていた前將軍足利義晴が、この日、ついに死去した。

享年四十歳。將軍在職二十五年。わが子義藤の後見期間三年半。

もはや全国政權とはお世辞にも言えなくなっていた室町幕府の頂点に立つて、その復興のために必死になって戦ってきた義晴の孤独な一生は、結局、天下にいろいろな混乱のみ残しただけで、空しく終わりを告げることになった。

哀れといえばこれほどに哀れな將軍もいないだろう。生まれて間もない頃に実父義澄は病死し、將軍となった後も、高国や晴元ら細川一門の熾烈な争いに巻き込まれて、身の休まる日など一日たりとてなかった。高国が滅び、晴元の下で細川一門が統一され、ようやく天下に安寧がもたらされたかと思えば、今度は晴元の被官である三好長慶や三好政長（宗三入道）、畠山家の被官であった木沢長政、遊佐長教らが台頭して、争いは深刻化した。拳句の果てに、実力はあっても家格、身分の低い彼らは、將軍家の権威を自らの政權の正統性の確立に利用すべく、義晴を散々に弄んだ。だから彼は度々京都から逃げ出しては、肩身の狭い流人生活を強いられた続けたわけだが、いくら月日が経とうとも、次々実力者たちが滅んでも、彼は変わらず、地獄の如き日々を過ごさねばならなかった。

「義藤、そなたに將軍家を託すぞ」

臨終間際、義晴はわが子義藤の手をとると、今まさに死なんとする者とは思えぬほどの力でぎゅっと握り締めた。

「わ、わしは、これまでずっと幕府の再興を宿願としてきたが、わしの目の黒いうちに、その宿願は果たせそうもない。だ、だが、お主はまだ若い。聡明なお主になら、わが夢を託すことが出来る。わが父義澄公や先代義植公ら、歴代の公方が必死になって目指してき

た夢。わが幕府に、義満公時代が如き栄光を、ふ、再び、取り戻すのだ」

義晴は、ずっと、ずっと室町家の復興を、足利義満時代の如き將軍家を夢見てきた。それだけを生き甲斐にして、やたら面倒臭いだけの將軍職を、愚直なまでに勤め上げてきたのだ。だが、その夢半ばで……、というよりは、何も出来ていない状況で、あっけなくこの世から去らねばならない。それが悔しくてたまらなかった。

だからこそ、義晴は義藤をぎろりと睨み付けて、  
「任せたぞ！」

と、何度も何度も、くどいくらいに何度も言っていた。

もはや自分の力で幕府再興は果たせない。ならば、息子に委ねるより他に仕方なかった。幸い、息子は思った以上に聡明で、天下人に相応しき覇気を生まれつき備えているようだった。逆にありすぎると義満時代の如き……、そこまではいかずとも義教時代ぐらいの幕府を取り戻すことができるかもしれない。なかった。

「お任せください、父上！」

と、健気に答える義藤の逞しき姿に義晴は安堵した。そして、彼は力なく静かに目を閉じた。もう二度と開くことはない。わかつているが、目を閉じる。ようやくこの煩わしき世界から抜け出せるのだと思うと、なぜだか心が躍った。

義晴は死に、將軍家は義藤一人になった。臨終を看取った者は僅かな側近と息子たる義藤だけという、実に哀れで、およそ將軍の最期とは思えない難きものであったが、兎にも角にも、戦国の荒波に吞まれ続けた哀れな公方、即ち室町幕府第十二代將軍はここに没したのである。

義晴死後、十三代將軍足利義藤はその名を義輝に改めた。それは父の夢、歴代の足利公方の夢を受け継ぎ、義満、義教時代のような輝かしき栄光の幕府を取り戻さんとする、弱冠十四歳の少年將軍の決意の表れであった。

六月九日。

細川晴元は將軍足利義輝と共に中尾城に入り、そこで同志を募つた。香西越後守元成や堀<sup>はが</sup>和道祐ら従来の晴元党に対しても、晴元に与力するよう書状を飛ばしていたが、それ以上に彼が熱中していたのは三好方の動揺及び離間を誘うための工作であり、そのために彼はあえて三好一門の一人である三好下野守政康に対しても自らに同心するように檄文を飛ばしていた。

その頃……。

都の三好長慶は、前將軍足利義晴の法要を大々的に営み、その勢威の強大さと三好政権の室町將軍家に対する忠誠心の厚さを満天下に示しつつ、一方では細川晴元・六角定頼連合軍の脅威に対抗すべく、軍の編成も急いでいた。

「前公方の中陰（死後四十九日間）を終えた途端に兵を出してくるとは……。全く、奴らの戦好きには困つたものだ」

長慶は腹立たしそうにぼやきながら、中尾に入った晴元方の行動に舌打ちしていた。

「拳句の果てに、わが一門の切り崩しを始めるとは……。相変わらず食べぬお方だ」

と、彼の怒りはなかなか収まりそうもない。

三好下野守政康に晴元からの檄文が届けられたことは、他ならぬ政康からの密告によつて既に判明していた。政康にすれば、晴元からの文など迷惑以外の何者でもない。もとよりそんなくだらぬ誘いに応じる気持ちなど更々なかったが、いたずらに隠して、意味のない疑いを抱かれてはつまらない。ならば、正直に告白する以外にないと、彼は文の届いたその日のうちに上洛し、長慶に謁見した上で差し出したのだった。

「それがしに他意はありません」

と、政康は神妙に頭を下げた。今年で二十二歳になる。長慶の大

叔父（祖父長秀の実弟）にあたる三好頼澄の子で、兄には三好一門の重鎮三好政成がいる。ここ目覚しく家中で勢力を強めている男で、先の除目では、従五位上下野守に任じられている。

「気にするな。その程度のもので、そなたの忠誠を疑うほどに狭量な余ではない。ただ、その方を籠絡して、鉄の結束を誇るわが家臣団を乱そうとした晴元のやり方には、大いなる怒りを感じる」

長慶はそう言って、政康を慰めたが、この調子だと、晴元の手は様々な家臣に伸びているとみてよいだろう。籠絡される者がいるとは思えなかったが、それがきっかけになって、家臣団に妙な軋轢が生じるようなことになる、厄介だった。

だから、政康が去った後、彼は立花範政を呼び寄せると、

「これは、事を急がねばならぬ。各地に散っている諸將に文を飛ばし、都に参集するよう命じろ」

と、言った。

「諸將に、都にですか？」

今や押しも押されぬ従五位下信濃守となった立花範政は、きよとんとした顔つきで、長慶を見つめていた。

「そうだ。わが三好の全軍を集結し、晴元と六角定頼に、我らの力を見せ付けてやるのだ」

それは天下人としての三好長慶が示した絶対的な決意であり、覚悟であり、何より厳命だった。だから範政は恭しく平伏すと、

「承知いたしました」

と、大きく頷いた。

七月八日。

足利義輝、細川晴元の両名は、中尾城の麓にある吉田、浄土寺、北白川に出兵して、三好政権を本格的に脅かした。

一方、三好方も臨戦態勢を整えていた。

三好長慶自らは山崎に布陣して、ここを最高司令部としつつ、十

河一存や三好長逸、三好弓介らに一万八千の大軍を預けて進軍させ、彼らは十五日、一条付近まで進出した。

そして七月十六日。

三好軍と晴元軍は京都郊外にて激突した。戦いそのものは、あつけないほど、数に勝る三好軍の圧勝に終わったが、特筆すべきことが一つだけあつた。即ち、この戦いにおいて、種子島銃（火縄銃）が実戦使用され、三好弓介配下の足軽が被弾して死亡していたのだ。俗に言う鉄砲伝来は、この年から数えて七年前、天文十二年（一五四三年）のことであるが、少なくとも、近畿地方において、この最新兵器が実戦使用された例は、この戦いが初めてのことであつた。

「あの音は、何だ？」

と、生まれて初めて、けたたましき轟音に接した十河一存などは、驚きを隠せぬように周りの側近に尋ねていたが、当然彼らにもわかるはずはなく、ただ、

「さあ」

と、どれも不思議そうに首を傾げていた。

晴元軍が所持していた火縄銃は、決して多くない。まだまだ高価なものであつたし、実戦においてどれほど有効なのかがいまいち分からなかつたこともあり、ただでさえ落ち目の晴元には、大枚をはたいて購入するだけの金銭的余裕も、必然性もなかつたのである。それでも鳴り響く轟音と、弾丸の凄まじき威力は三好軍の度肝を抜くに十分で、実際、足軽が被弾して倒れたときなどは、誰も何が起こつたのかわからぬといった風に、動揺し、混乱状態に陥つたものだった。

とはいえ、数丁の火縄銃程度で戦局が覆るはずもなく、戦いはあつという間に三好軍圧勝で終わった。

それにしても、敗軍の将というものは、いつの世も無様なものであつた。

京の人々は、晴元が負けたと知るや、

「あれが、かつて権勢を極めた細川の末路か……。哀れなことよな」などと哀れんだり、蔑んだりしていた。そもそも都の人々は、細川晴元という人が余り好きではなかった。名門出身であることを殊更強調して、お高くとまっているようなイメージを誰もが抱いていた。何より、自分を健気に支えてくれた功臣を騙し討ちに近い形で滅ぼし、あるいは見捨てて、今なお余命を保っている彼は、人々の目からすると、ただの卑怯者にしか見えなかったのである。

結局、晴元は再び近江坂本に亡命して、再起を期さんとした。六角定頼の支援があれば、三好軍を打ち破ることも不可能ではないと、未だ思い込んでいるらしい。

「かつて高国おしも、一時的に坂本に亡命しながら逆襲に転じ、三好之長を葬り去ったことがある。余もその輩に倣い、坂本より反撃に転じて、長慶を葬り去ってやろう。余が高国の甥で、長慶が之長のひ孫であることは、単なる偶然ではあるまい」

などと、相変わらず強がっていたが、肝心要の六角家は、既にそんな彼を見限って、三好家との和睦を密かに考えていた。その急先鋒となっていたのが、定頼の嫡子たる義賢であり、彼を支える重臣後藤賢豊や進藤貞治、蒲生定秀らであった。

当主である定頼は、相変わらず義理の息子である晴元を支えて、三好家との決戦を決意していたが、義賢以下六角家の主だった重臣たちは、これ以上三好長慶との関係を拗らせることを望んではいなかった。

「下手をすると、勢いに乗った三好軍が近江に攻め込んでくる可能性もあります。そうになると、今は当家に従属している浅井久政辺りが、三好と結んで離反する可能性も捨て切れませぬ。そうになると我らは西から迫る三好と、北から迫る浅井により挟撃されることになります。劣勢は誰の目にも明らかでしょう」

と、後藤但馬守は言って、困ったように「はあ」と苦笑いした。

全ては主君たる定頼次第であったが、最近すっかり年老いた定頼

は、一昔前に比べてめつきり思考能力が衰えており、彼らの諫言を素直に受け入れてくれるかどうかは不透明だった。逆に意固地になつて、どこまでも晴元支援の姿勢を強めるかもしれない。

「こうなつては、晴元殿には近江より去つてもらふ以外に手はありませんまい。あのお方が坂本にある限り、殿の御考えが変わることはありませんませぬ」

蒲生定秀が強い口調で、はっきりと断じると、六角義賢もまた大きく頷いた。

かくして八月三日。

六角義賢は、自ら二千の兵を率いて坂本城を取り囲むと、抵抗する細川晴元を強引に拘束し、越前は朝倉氏の下へと連行していった。

【絶頂編】第071章 終わりなき戦い

「貴様らは、誰の許可を得て、管領殿を越前に追放したのだ？」  
観音寺城に、凄まじき、さながら雷が落ちたかのような大音声が響き渡った。

定頼は、まさに鬼になっていた。烈火の如く激怒している。一連の騒動は、当主である彼に無断で、かつ彼を全く蚊帳の外に放り出した上で行われたものだったから、彼の怒りも当然といえば当然だったが、息子の六角義賢は、むすつと不貞腐れたように、ジツと父の顔を睨み付けていた。

「その顔はなんだ！ 文句があるならば、この場にて申せ。…いや、父が申すことに異議があるなら、即刻この城を去り、どこへなりとも立ち去るがよいわッ！」

怒り心頭、もはや誰の手にも止まらぬ勢いで怒鳴り散らしている定頼は、義賢だけでなく、その後ろにて恐縮そうに頭を下げる重臣たちをもぎろりと睨み付けた。

「その方らを息子の補佐役としてつけたは、息子に愚かな行為をさせぬための目付役としての役割を期待したからであるぞ。それが、そなたらから率先して息子を扇動し、管領殿を追放するなど、愚かしい行為をしてくれるとは…。そなたらを信頼して息子に付けたわしが愚かだったのか…。とにかく、わしは情けない」

「さ、されど父上…。もしも管領殿を我らが支援し続け、三好殿と決戦するようなことになれば、我らの不利は否めませぬ。…悔しゅうございますが、既に三好筑前は本領阿波、讃岐、淡路に加えて、摂津、丹波、和泉、山城の計七ヶ国を支配下に置き、さらに河内、紀伊を治める畠山家とも強い同盟関係を維持しております。大和にも勢力を広げており、言ってみれば、既に畿内全土が三好方となつたようなもの。それに対し、我らの勢力範囲は近江一国のみ。それとて、小谷の浅井久政は面従腹背の輩にございますれば、信頼する



わけには参りませぬ。畿内全土を手にした三好筑前と、近江一つ満  
足に支配できていない我らでは、勝敗は火を見るよりも明らかでし  
よう」

まさに正論である。こんな風に理路整然と三好と戦う愚を諭され  
ては、さすがの定頼も二の句が告げなかった。いや、そんなことよ  
りも、日頃暗愚だとばかり思ってきた愚息義賢からこんな言葉が聞  
けるとは夢にも思っていなかった定頼は、ただ呆然と、困ったよう  
に戸惑っていた。

定頼とて、強勢を極める三好氏と戦う愚は十分に分かっていた。  
それでもなお、あえて決戦に拘ったのは、何も義理の息子たる細川  
晴元や足利幕府を助けたかったからではない。一言で言ってしまう  
ば、三好筑前守長慶という男と戦ってみたかったのだ。一度でよい  
から、阿波の小土豪より身を起こし、ついに天下人の座まで手中に  
入れてしまった不世出の大英雄と真つ向勝負を試してみたい。そう思  
い、願っていたからこそ、彼は三好との決戦に執着していたのだっ  
た。

「殿のお気持ちも分かりますが、若殿の仰せの通りかと存じます」  
すかさず、後藤但馬守賢豊が口を挟んだ。いつもの定頼ならば、  
ここで必ず自らの非を悟って、自分たちの意向を受け入れてくれる  
に違いない。そう信じ、賢豊は仰ぎ見るように定頼を見つめたが、  
既に怒りと悔しさに日ごろの冷静さを完全に失っていた彼は、  
「たわけたことを抜かすなッ！」

と、いつになく大音声を張り上げて、義賢や賢豊らを一喝した。  
「三好筑前と戦って負けるなどと、誰が決めた？ このわしは、こ  
れまで百戦百勝。一度も負けたことはない。故にこそ、今の六角家  
がある。ふふふ。此度も三好筑前に決戦を仕掛けて、奴を押し分け  
て、わしが天下を握ってやる」

もはや、そこで騒いでいるのは、聡明と叡智を誰からも称えられ、  
あらゆる尊敬を集めてきた六角定頼という英主ではなかった。怒り  
に目が眩み、目先の欲望に血道を上げている、ただの年老いた凡人

に過ぎなかった。

後藤但馬や進藤貞治、蒲生定秀ら重臣たちは、思わず顔を見合わせて溜息を吐いたが、けれど、如何に定頼が年老いた凡人に成り果てようと、彼が六角家の総帥であることに代わりはなく、彼が、

「決戦あるのみ」

と強く主張している以上、家臣としては、その命に従うより他に仕方がなかった。

かくして、三好と六角の和議交渉は不調に終わった。

結局、和議の締結を急いで、事前の根回しも欠いたまま、強硬路線に打って出た重臣たちの失策といえなくもなかった。少なくとも、予め定頼に事の次第を報告し、説得した上で行動に移していれば、彼もあれほどのヒステリックは起こさなかったかもしれない。全ては結果論だが、後藤や進藤らは、

「少しばかり焦りすぎたようだ」

と、あの当時の自らの判断を思い返しては、ひたすらに嘆いていた。

また、六角家内で対三好強硬論が羽振りを利用するようになった要因の一つに、足利義輝の存在があった。義輝は、定頼や晴元に輪をかけたような強硬論者であり、穩健派により晴元が追放されたと知るや、観音寺の定頼に宛てて文を送り、六角家の心変わりを痛烈に非難したりしていたほどだった。定頼も、この義輝の血気盛んな強硬論に影響された部分が少なからずあるようで、ことあるごとに、「將軍家にはあれぐらいの覇気がなければ困る」などと言っていた。

何はともかく、盟主である義輝と、主君である定頼が誰よりも過激な強硬論を唱えているのだから、家中も当然、対三好強硬派が主流を占めるようになっていた。穩健派は日に日に力を失い、後藤但馬、進藤貞治らは強硬派主導政権の中で、肩身の狭い思いを余儀な

くされている。拳句、彼らの後盾といつてもよい存在であった六角義賢が、穩健派の劣勢、強硬派の優勢を見て、あつけなく強硬派に鞍替えすると、穩健派は決定的打撃を受け、その政治的衰退は誰の目にも明らかとなった。

「やはり、決戦を挑んでくるか…」

長慶は、嬉しそうにニタニタと笑っている。

「これでいよいよ、近江も我らの支配下に組み込むことができまするな」

側近の立花信濃守範政もそう言って、につこりと微笑んだ。

「近江、か。近江をとれば、次は越前か、あるいは美濃。越前には朝倉がいるし、美濃には斎藤か…。いずれも強敵だが、それらも滅ぼしてしまえば、余の手で日ノ本六十余州を統一できる日も案外近いというものだ」

などと、長慶は楽しそうに呟いていた。

六角定頼は、居城たる観音寺に二万の大軍をかき集め、さらに最前線基地である中尾城に入った足利義輝に、増援軍として五千の兵を新たに付与したという。これらは全て、三好家との全面戦争に備えた布陣であることは明らかであり、彼らがそういう考えなら、長慶とて迎え撃つ覚悟くらいはあった。逆に、いっそこれを契機に近江すらも領国に加えてしまおうという野心をその胸に燃やしつつ、

「浅井の動きはどうだ？」

と、至極愉快そうに微笑みながら、いつものように範政に尋ねるのだった。

「既に小谷城の浅井久政は、我らと六角が全面戦争に陥れば、我らに内応して、六角領に攻め入ると確約してございます」

「そうか。我らに内応するか」

「はい。さすれば、六角など我らの敵ではありませんまい。北と西から、同時に攻め立てられれば、さしもの定頼とて太刀打ちできます

「まい」

「ま、そうだろうな」

今の長慶ならば、鬼神とても敵うまい。範政はそう信じている。今や、畿内に七ヶ国を領し、都を支配下に置いて、事実上幕政を専断している。彼が白と言え、この世の全てが白になるし、黒と言え、黒になった。馬を鹿にすることも、鹿を馬にすることも、彼の権力をもつてすればどうということもない。

世の中は全て三好家を中心に回っているような気さえした。今となっては、名門の意地なのか、あるいは名君と称えられた男の誇りなのか、ともかく、あくまで三好長慶に対抗し続けようと、徹底抗戦を唱えて無意味な行動を続ける六角定頼が哀れにすら思えてきた。かつてはその強勢を誰からも恐れられ、一目も二目も置かれた存在であつたらしいが、今となっては、時代遅れの、年老いた競走馬に過ぎなかつた。

「御屋形様、此度の六角攻めには、是非ながしも参加させてくださいませ」

深々と頭を下げ、そんな風と言う範政に、長慶は不思議そうに首をかしげた。

「小太郎は六角攻めに従軍したいのか？」

「はッ！」

「何ゆえに？」

長慶は、いつも通りの冷静な、突き刺すような瞳で、まじまじと範政の顔を見つめていた。彼の覚悟の程を推し量ろうとしているかのように、長慶は時折「ふーむ」と唸っていた。

「それがしも部将になりたいからです」

至極正直な、露骨なほどの本心を思い切りぶつけてくる範政に、長慶は呆れたように「ははは」と笑った。

「部将になりたいから、六角攻めに従軍したいと申すか？」

「御意！」

無論、これまでも立花範政は軍を率いて何らかの作戦活動に従事

したことはある。だが、本格的な戦に、自ら一軍の将として臨んだ経験は一つもなかった。政敵である松永弾正久秀が、既に長慶の側近であり、かつ一軍の将として自他共に認められている地位を築いていることを考えれば、彼とて、いつまでも長慶の側近の地位に安穩としているわけにはいかない。要するに焦りであり、逸りであり、若さゆえの血気盛んの表れであつた。

「余の側近だけでは、やはり物足りぬか？」

皮肉と嫌味と、からかいを込めた長慶の言葉に、

「滅相もありません」

と、範政は慌しく否定した。その様に、長慶はからからと笑つた。「ま、よからう。そなたはこれまでも余のためにいろいろ尽くしてくれた。その恩賞としての意味も込めて、その願い、聞き届けてやる。六角との戦が始まれば、その方にも一軍を預けて戦ってもらふこととしよう。だが、言うまでもないことだが、一軍の将というのは、決して容易い仕事ではないぞ。兵を率いる以上、彼らを束ね、如何に最小限の犠牲で、最大の勝利を掴むか、いろいろ試行錯誤せねばならぬ。負ければ…、負け方にもよるが、とにかく、今まで築いてきたそなたの全てが失われるかもしれぬ。それでもよいか？」

そんな長慶の鋭くも厳しい言葉に、

「無論、承知の上でございます」

と、立花信濃守範政は、はっきりとした口調で、大きく頷いた。

十月二十日。

中尾城の足利義輝は、総勢六千の精鋭を率いて出陣し、鴨川畔まで進出した。

一方、三好方は十河一存を総大将、三好長逸、芥川孫十郎を副将、立花範政や松永久秀、今村義満、小泉秀清らを寄騎部将とした総勢一万六千で迎撃し、激戦の末に、六角軍が主体の足利軍を撃破した。この戦いにおいて、立花範政は、一軍を率いることの難しさという

ものを、嫌というほどに思い知らされることになった。

それは、合戦が始まる、まさにその直前のことであった。立花勢の陣所は、他の三好軍陣所に比して、何かと騒がしかった。

「御大将、またも喧嘩にございます」

部下たちは、そんな風にぼやきながら、その顔を苦々しげに歪めていた。

「喧嘩だと？ またか……」

範政は呆れたように溜息を吐きつつ、困ったように床机の上に腰を下ろした。

立花範政は、今回三千の兵を率いている。だが、一言で三千といっても、三千人も人間を束ねるのは、そう簡単なことではない。

しかも、どれもこれまでの激しき戦乱を潜り抜けてきた荒くれ者揃いの精兵たちである。彼らには、大した武功もなく、ただ妹の七光りで栄達を遂げてきた立花範政に対する、潜在的な不信任感、反発があった。だからこそ、兵たちは彼の命に抗い、立花隊の指揮命令系統は、気がつけば崩壊寸前の状態となっていた。

「仕方ない。喧嘩している者はもとより、その周りにいて、それを傍観していた者も片っ端から逮捕して、その全員を処刑しろ」

こうなれば、強硬策以外に手はないと、範政も覚悟を決めたようであった。

「しよ、処刑ですか？」

当然のように仰天する部下たちに対し、範政は何も言わず、ただ軽く頷いた。

かくして、範政は兎にも角にも部隊の指揮権を掌握し、十河一存の号令の下に行われた総攻撃では、それなりの手柄も挙げた。もとより足利軍など、精強無比と称えられる三好軍の敵ではなく、戦いそのものはあっけなく終わった。けれど、部隊の指揮権を掌握するという、たったそれだけのために、二十人も味方を軍律違反の名の下に手をかけねばならなかった範政の心境は、実に複雑であった。

十一月に入ると、今度は三好軍が攻勢に出た。

十河一存率いる三好軍は、十一月十九日に中尾城に迫って、その麓にあつた聖護院や北白川、鹿ヶ谷などを焼き討ちした。さらにこれに連動する形で、同月二十日、内藤長頼率いる丹波軍は近江に入り、やがて大津に攻め入つたのである。

特に内藤軍の大津進攻は、よほど足利義輝の肝を冷やしたようで、彼は慌しく中尾城を引き払うと、坂本に落ち延びていった。けれど、その坂本にも内藤軍の脅威が迫ると、

「こうなつた以上、坂本も駄目でござる。堅田まで落ち延びましよう」

群臣たちのそんな勧めに従う形で、義輝は十一月二十二日未明、僅か十五騎の家臣だけを引き連れて、坂本北方に位置する琵琶湖西畔の鄙びた漁村たる堅田まで逃げていったのだつた。

同日朝。

坂本城に内藤軍が入つた。抵抗らしい抵抗もなく、難なく入城を果たした長頼は、つまらなさそうな顔をして、眼前に広がる壮大な琵琶湖の光景をまじまじと眺めていた。

「申し上げます。立花信濃守様、御屋形様の御下知を受け、ご到着なされました」

そこに、そんな報告が入つたので、長頼は露骨に嫌そうな顔をした。

「信州殿が着たのか」

などとぼやくように呟きながらも、それが“御屋形様”の命であるなら、拒むことなどできるはずもなく、困つたように苦笑いしつつも、とりあえず通すよう命じたのだつた。

「堅田まで攻め入るべきであろう」

立花信濃守範政は、ひととき強い口調で、内藤備前守長頼に決断を迫っていた。

「この際だ。公方殿を滅ぼして、災いの芽は完全に断ち切っておかねばならぬ」

坂本城内全土に響くかのような範政の大音声に、長頼は鬱陶しそくに、ジトツと睨み付けた。

「攻め入って如何する？」

「無論、將軍を逮捕し、処分する」

範政はきっぱりと言い切り、長頼は呆れたように溜息を吐いた。

「依然として観音寺には六角の大軍がある。そんな状況下でいわずらに坂本を留守にし、深入りすれば、それを見逃すような六角でもあるまい。我らの不利は歴然となる。ここは、足場を固めるが先決。臆病な公方殿など、どうでもよい」

長頼には長頼の考え方がある。だからこそ、範政の強気な主張を受け入れるわけにはいかないのである。そして何より、彼は範政が嫌いだった。

松永兄弟と立花範政は、共に下級身分から身を起こし、主君長慶に引き立てられる形で大いに栄達した、三好家屈指の出世頭である。けれど、似たような境遇、立場ゆえに、両者は激突することが多いのだった。それが決定的となったのは、先の波多野家騒動であり、松永弾正久秀も内藤備前守長頼も、姑息な陰謀を弄して、波多野の御台所を追放した立花範政に対し、強烈な対抗意識を抱くようになった。

「とにかく、堅田まで攻め入ることはまかりならん。御屋形様より総大将を命じられているのはそれがしでござれば、信州殿には、それがしの下知に従っていただく」



長頼がきつぱりと命じると、副將に過ぎない立花範政は、苦々しげに顔を歪めながらも、

「承知」

と、悔しそうな顔をしながら、小さく頷いた。

天文二十年（一五五一年）になった。

六角勢を、とりあえず都周辺から追っ払ったことで、京都は久方ぶりの平穩に包まれていた。

三好長慶は、大改築を済ませて、既に都屈指の大宮殿へと変貌を遂げていた自らの屋敷の中で、新年祝いにかこつけて、久方ぶりに上洛してきた岳父の遊佐河内守長教と会っていた。

「畠山家のほうは、如何でございますか？ 昨年、政国公が薨去なされたと聞いたときは驚きましたが…」

と、長慶が言えば、遊佐長教は、「ははは」と笑って、自信に満ちたいつもの如き顔をして、

「新たな当主も立ち、ひとまず安泰といったところでござろうかと、言った。

「新たな当主？ と申せば、やはり政国公の嫡子の…」  
「高政公でござる」

長教の言葉に、長慶は納得したように大きく頷いた。

河内・紀伊の国主であり、かつ大和にも勢力を広げている、畿内第二の勢力者たる畠山家は、昨年、大きな不幸に見舞われていた。それが、畠山政国の唐突な急逝であった。

政国は、先代にして実兄である植長の急死を受けて、天文十六年（一五四五年）に遊佐長教が新たな守護として擁立したのであり、以後五年間に渡り、畠山家の名目的な総大将として君臨してきた。ここで名目的と記したのは、実権は遊佐長教にあつて、政国は飾り物の傀儡に過ぎなかったからだ。それでも“飾り物”があっけなく壊れてしまうと、次に飾る物を見失った家中には言いようのない

不安が渦巻くようになった。

こうした雰囲気の中で、遊佐長教は、政国の嫡子である畠山高政を新たな守護に擁立したのであった。覇気に満ち、才気溢れるこの青年は、幼い頃より将来を囑望されてきた貴公子だが、貴族というより、野武士を髣髴とさせるような豪快な出で立ちをしていて、それゆえに数年前に一度会っただけの長慶もよく覚えていた。

「ともかく、本来ならば高政公も上洛して、政国公の薨去と、高政公の守護職就任を公方様に認めていただきたいのでござるが、その公方様も今は都になく、ゆえにやむなく、それがしが代理として上洛したのでござる」

と、長教は言う。長慶は「ははは」と苦笑いするのみであった。

天文二十年になると、都では、堅田より將軍を呼び戻そうという風潮、雰囲気、世論は大いに高まっていた。

京の町が三好政権下に安定しつつあることも、一つの要因ではあった。だが、それ以上に、いつまでも將軍不在の状態が続けば、次第に人々は“將軍無き世”に慣れ、やがてそれを当然のものと認識するだろう。ただでさえ衰退の一途を辿って、今や見る影もなく零落している幕府にとって、それは致命傷ともなりかねないのである。考えてみると、今の室町幕府というものは、いつ何時滅びてもおかしくないような、凄まじく危ういバランスの上に存在しているに過ぎなかった。けれど“幕臣”であることを唯一の政治的基盤としている伊勢貞孝、進士賢光らにとってみれば、幕府と自分たちはどこまでも一蓮托生。幕府の滅亡は即ち自分たちの失脚と同義なわけだ、こんな状態が続くことは、まさに死活問題であった。

「何としても筑前殿に承諾してもらわねばならん」

と、伊勢貞孝が力いっぱい宣言すると、進士賢光や一色七郎、和田惟政といった主だった幕臣たちも、殊更大きく頷いていた。

將軍帰還を望む世論というのは、こうした彼らの積極的な活動が

生み出したともいえる。特に長慶と公私に渡り交友の深い伊勢貞孝などは、しきりに長慶と面会しては、そのたびに、

「公方様のこと、よしなにお頼み申し上げます」

と、進言していた。

一方の長慶はといえば、彼らほど將軍家を必要としているわけではないが、かといって、いつまでも対立したままというのは、政治的に面白い話ではなかった。万一、將軍が敵の手に渡れば、三好政権の正統性は大きく揺らぐことになる。無論、その程度で自らの政権が崩れるとも思わないが、災いの芽というものは早いうちに摘み取っておくに越したことはないのであった。

ただ…。

「いっそ、この際ですから、幕府を滅ぼして新たな政権を模索してみるのが一興ですぞ」

そんな風にしきりに勧めてくるのは、松永弾正久秀や立花信濃守範政らであったりした。

長慶は迷っていた。どうすべきか、必死になって考えていた。もはや、將軍を帰還させるか、否か…、といった単純な話ではなく、この決断次第で三好政権の大まかな方向性を決定付けることになるのだから、彼が逡巡するのも、無理なきことであった。

「かつて唐の国に後漢なる国がありました。その最後の皇帝は獻帝といいましたが、当時の皇帝は、今の將軍と同様、何の力もありませんでした。しかし、何と言っても皇帝ですので、権威はあったのです。これに目をつけたのが、後漢末の戦乱で台頭した群雄の一人、曹操であります」

と、必死になって熱弁する伊勢貞孝の健気な姿を、長慶はまじまじと見つめていた。

貞孝は、彼が応じなければ死ぬぐらいな覚悟をもって、今と言う日に臨んでいた。何と言っても彼は、長慶の判断に今後の政治生命の一切がかかっているといっても決して過言ではない幕臣勢力の代表として、あらゆる期待と責任を一身に背負っているのだった。だ

から頭とて下げるし、敬語も使う。幕府内の序列においては、長慶などより遙かに上位の貞孝のそんな態度に、三好長慶は呆れたように苦笑いしていた。

「当時の多くの群雄たちが、皇帝など意識することなく、あちこちで勝手に戦いを繰り返しておりましたが、その中で、一人曹操は、都（＝洛陽）に攻め上って、献帝を庇護し、その権威を背景に、敵を片っ端から滅ぼしていきました。自らに立ち向かう敵は、即ち皇帝に逆らう逆賊である…、という構図を作り、政治的な優勢を確保したので。曹操は力を失った皇帝の権威を最大限に利用し、三国屈指の強国、魏を作ったのです」

伊勢貞孝が何を言わんとしているのか、長慶にはよく分かった。力を失おうとも、権威ある限り、將軍にも使い道がある。曹操の輩に倣って、三好家の覇業に、將軍を利用すべきだと主張しているのである。

「なるほど…。曹操、か。ならば、余も將軍を擁立して、余に逆らう者は、皆、幕敵だと主張すればよいわけだな」

長慶がそう言うのと、

「左様です」

と、貞孝は大きく頷いた。

將軍帰還計画は、こうして三好長慶承認の下、伊勢貞孝、一色七郎、進士賢光、春阿弥、祐阿弥ら、將軍義輝の側近たちが主導する形で実行に移されることとなった。

だが…。

堅田に入った彼らは、そこで、

「三好討伐だ。それ以外にない」

と、すっかり意固地になっている將軍の頑固さに手を焼くことになった。義輝は三好が滅びぬ限りは都に戻らぬと、強い口調で断言すると、

「お主たちもここに残り、余と共に戦え」と、言った。

「上様。今一度お考え直してください。上様は六角家を大そう信頼なさっておいでだが、六角家はどれほど頼りになりましょう。先の戦でも、六角家は二万もの大軍を観音寺に集めておきながら、ついに援軍に出ることもなく、上様を見殺しになさったではありませんか」

伊勢貞孝は必死である。如何に政所執事だといっても、それは將軍あつてこそ効力を發揮するもので、將軍不在の現状がいつまでも続けば、貞孝ら幕臣たちが存在する理由や意義は喪失することになるだろう。それは幕府に寄生し、代々権勢を誇ってきた名門伊勢氏の棟梁たる貞孝にとつて、容易く許容できることではなかった。

「たわけたことを申すな。六角定頼は幾たびも余のためにいろいろ便宜を取り計らつてくれる。この堅田の仮御所とて、定頼の手筈により造られたものだぞ」

と、義輝は言った。聡明で、覇気もあり、あと少しの経験さえあれば、室町十三代の將軍の中でも、屈指の名君になるかもしれないが、何分、まだ彼は若く、経験も不足していた。ゆえに血気に逸り、物事が見えなくなっている。彼には六角家内部に渦巻く主戦派と和睦派の主導権争いの実態が分かつていない。

六角家は、いざとなれば義輝を見捨てて三好家と和議を結ぶ気である。その程度のことは、赤子でも分かる道理だった。実際、今もなお頑強に主戦を唱えている定頼を除けば、家中の総意は和議に傾いている。後藤賢豊、進藤貞治、蒲生定秀といった中枢を担う重臣たちが和睦派の中核を占めていることを考えれば、六角家が和議に傾くのは時間の問題であった。

「とにかく、都には戻らん。余が都に戻る時は、三好筑前が滅び去つたときか、奴が都からいなくなつたときだ」

と言つて、義輝は意固地になった。結局、彼らは將軍の説得を諦めると、かといって將軍の下で働くつもりもないから、仕方なく坂本に逃れ、都に帰つていった。

二月七日。

粉雪がばらばらと舞う中、冷たい冬風に打たれつつ、長慶は石原城（京都市南区）に入ると、そこを本陣とした。

将軍がその気なら、あえて将軍に拘る気もない長慶だった。六角家との全面戦争も辞さぬ覚悟で、坂本の内藤長頼、立花範政に対して、近江大津へ進撃するよう命じたのだった。かくして。

長頼、範政率いる三好軍七千は大津に入り、瀬田山（大津市）において六角方の武士と激突した。

二月十日。

足利義輝は三好軍が堅田に押し寄せてくる可能性を考慮し、さらに北方の朽木へ移って、万が一に備えた。また越前国主の朝倉義景（孝景の子。父の死後家督相続）に使者を飛ばして援軍を要請しつつ、朽木氏をはじめとする周辺豪族を糾合して軍備を増強していた。「朝倉が動けば、まだまだ勝算はある。朝倉と六角が手を結べば、三好などどれほどのことがあるう」

と、義輝は朽木城において誇らしげに公言していたが、そう上手くいくものかと、付き従う家臣たちはどれも不安の色を隠さなかった。

「朝倉が味方となってくれば、よいのですが…」

と、側近の一人がぼやいたように、足利陣営の不安の全ては、その一点に凝縮されていたと喋っていた。

この頃の朝倉氏は、若年の義景に代わって、一門衆の筆頭たる朝倉宗滴が事実上の最高権力者として君臨していた。けれど、この食えない老人は、先に六角家より晴元が追放されてきたときも、これを匿って、いざというときの政治的担保としておきながら、結局、形勢不利と見るや体よく晴元を追い出している。こんな具合であるから、義輝の群臣が不安がったのも無理なきことであつたが、肝心

の義輝はすっかり信じきった様子で、

「朝倉ならば、心配するには及ぶまい」

と、根拠も無いのに、朝倉家の兵力、精強さを、己が戦力の一つとして皮算用していたのだった。

ともあれ、こうした義輝の策謀を知ってか知らずか、長慶軍は電光石火の勢いで、近江に押し寄せてきた。

二月二十四日、三好長慶自ら率いる三好軍二万は、近江に入り、走井（大津市）において六角軍と激突し、これを完膚なきまでに叩き潰している。二十六日には、大津に入り、二十七日には北白川に出没していた六角軍の残存部隊を蹴散らし、二十八日は、鹿ヶ谷、若王子、岡崎（以上京都市左京区）のほか、山科、日ノ岡、粟田口（以上京都市東山区）にも出没していた六角勢を片っ端からなぎ払って、都周辺の六角軍を悉く倒していった。

【絶頂編】第073章 長慶暗殺？

権力者には、その胸一つで人の命を左右できるだけの力がある。どんな人も、権力者の言葉には敵わない。権力者は、その権力下にあるありとあらゆる人の生殺与奪の権を一手に握っているのである。けれど…。

そんな、さながら神の如き存在たる権力者にも、唯一思いのままにならぬものがあつた。どれほどの権力を握ろうとも、どうにもならないことが一つだけあつた。それが、他ならぬ自分の命である。

これまでも、ありとあらゆる権力者たちが、自分の命を自らの支配下に置こうとしてきた。その権力で、自分の命を左右しようとした。いや、できると信じていた。不老不死の仙薬を求めて、遙か東方の島国に徐福を差し向けた秦の始皇帝などはその代表的な例といつていい。始皇帝をはじめとする権力家は、権力と金さえ駆使すれば、いくらでも命は買えると、本気で信じていたのだった。

けれど、どうにもならなかつた。始皇帝は巡幸中に死に、そのほか、数多くの権力者たちも、ありふれた人間と変わらぬ死を迎えて、歴史の中に消えていった。

三好長慶とても例外ではない。今や天下でも有数の最高権力を握っている男だが、そんな彼にも死は例外なくやってくる。無論、まだまだ若い彼には、“死”などと言っても、実感の沸くものではなかつたが、しかし、彼が安泰と信じてやまぬ自らの命は、案外砂上の楼閣の上に、辛うじて成り立っている危ういものでしかなかつた。実際、彼の死を今か今かと待ちわびている男たちもいた。彼らは密かに爪を研ぎ、牙を磨いて、三好長慶の暗殺の機会を虎視眈々と窺っていたのだった。

最初の暗殺未遂事件は、天文二十年（一五五一年）三月七日に発



生した。

三好長慶はこの日に先立つ三月四日、伊勢貞孝に招待されて、彼の屋敷に出向いていた。わざわざ総勢一千の兵を率いて、仰々しく街中を練り歩いた上で、彼は伊勢邸に入ったのだった。

そこで、貞孝をはじめとする幕臣たちと、酔いつぶれるほどに飲み明かし、移ろいゆく気分の中で、今後のこと、国事のこと、女のこと、兎にも角にもいろいろなことを思う存分語り合った。

長慶も、よほど楽しかったのだろう。それから三日ほどたった、七日。今度は吉祥院の宿所に貞孝を招聘したのである。

「方々、今日は思う存分楽しんでくれ。無礼講だ」と言つて、長慶は嬉しそうに高笑いしていた。

酒にはそれほど強いほうではないが、酒は何より好きな長慶なのである。ほうつておくと、いつまでも飲み続け、結局翌日には体調を崩して使い物にならなくなる。だから家臣たちは、彼が酒を手にし、酒盃を口に運べば、その都度、ジツと睨んで、無言の圧力を加え続けていた。

伊勢貞孝も、心ゆくまで楽しんでいる。酒に肴、女子もよく、夜空に輝く満月を眺めながら、彼は愉快そうに笑っていた。

「筑前殿、天下に臨みながら飲む酒はまた格別でござろう」  
貞孝はすっかり酔っ払っている。すつくと立ち上がって、あちこち落ち着きなく歩き回っているが、ふらふらと、だらしない千鳥足であった。

「ははは。この世をば、わが世とぞ思ふ、望月の…」

そこまですつて、長慶は再び杯に手を伸ばした。

「欠けたることも、なしと思へば…、でござるか。ふふふ、筑前殿は御堂関白気取りか？」

茶化すような貞孝の言葉に、長慶は「ははは」と笑った。

「御堂関白気取りではない。あんな奴と、俺を一緒にするな。如何に藤原撰関の最盛期を築いた道長とて、所詮、名門に出自し、生まれながらに栄達を約束された立場ではないか。それに比べ、俺は阿

波の田舎土豪の嫡子に生まれ、幼くして父を殺された。そこから這い上がって今の地位を築いたのだ。一緒にするな」

酔っている。誰もがそう思った。実際、長慶は酔っていた。絡み酒なのだ。

家臣たちは頭を抱え、貞孝は一緒になって笑っている。これが、今や天下を治めている三好筑前守長慶と、政所執事の伊勢貞孝とは到底思えなかったが、二人は気にせず、

「そつだ。筑前殿は御堂関白程度に納まる器ではないぞ！」  
と、酔った勢いに任せて、思い切り騒いでいた。

そんな頃のことである。

夜は深く、空には満月に照らし出された薄白き雲のほかは、何もなかった。ただ月光に照らし出された世界は比較的明るく、それがまた、常とは違った独特の情感を醸し出している。

月見酒とは、なかなか風流で、長慶たちもついつい酒が進んでしまったが、彼らのそんな騒がしき酒宴の片隅で、一人の少年が、屋敷の一角に潜みこんで、おもむろに火を放ったのである。

「何事だ？」

バチバチと、何やらただならぬ気配を感じた番兵たちは、どれも不思議そうに首を傾げていたが、よもやそんなことになっているとは夢にも思わぬ彼らは、

「殿様方がまた何やらなされておられるのだろう」

と言つて、あえて深く考えなかった。

その間も、つけられた火は、猛然と燃え上がって、凄まじき炎となった。宿所の一角がまるまる燃え上がった頃、ようやく事の重大を察した兵たちは、慌しく消火の手配を整え、かつ、

「大変です。火です。炎です」

と、本殿にあって大騒ぎしている長慶たちの下に伝えたのだった。長慶も貞孝も、すっかり酔っ払っていたから、「火」と言われて

も、その深刻性が全く理解できていない様子で、けらけらと楽しそうに笑っていた。とはいえ、居並ぶ家臣たちは、

「御屋形様、危のうございます。一刻も早く脱出を」

そう急かして、半ば強引に、彼らを屋敷の外へと運び出したのだった。

火はその後も勢いよく燃え上がったが、必死の消火活動が功を奏したのか、全焼という最悪の事態だけは何とか避けたようであった。また、長慶や貞孝だけでなく、小者に至るまで、けが人は多少なりとも出たが、死者は皆無だった。とにかく不幸中の幸いとはこのことであり、酔いがさめた長慶も、

「それはよかった」

と、安堵したようにホツと溜息を漏らしていた。

やがて、下手人たる少年も逮捕され、早速事情聴取が始まった。

無論、他ならぬ三好長慶の命を狙った上での放火であるから、取調べも容赦なかった。容易く言葉で言い表すことができないような、おぞましき拷問にかけられると、それまでは貝の如く堅く口を閉ざしていた少年も、ついに観念して、全てを白状した。

三月八日。

少年の供述に基づき、今回の暗殺未遂事件に関与したと思われる全ての者が、この日のうちに三好軍により逮捕され、長慶の下に引きずり出されていった。その数は六十人に達したが、長慶は、その全員に対して例外なく死罪を命じた。

結局、三好方による徹底捜査の結果、判明したのは下手人と、その一味であったが、その黒幕が誰だったのか、肝心なことは一切分からぬままに日々は流れ、ついに三月十四日になった。

長慶は不満であったが、分からないものは仕方がなく、そうした鬱憤を晴らすかのように、下手人たちの一族を探し出しては、都に連行し、見せしめの如く、その全員の首を例外なく斬り飛ばした。

女であろうと、子供であろうと老人であろうと、一切容赦しない彼の方針に、人々は大いに震え上がった。

実に、この六日間で、合計百人以上の老若男女が、洛中にて首を斬られたことになる。長慶暗殺計画に参加した者の一族…、ただそれだけの理由で、日々を普通に生きてきた平民たちが無惨に殺されたのである。如何に殺されそうになったからとはいえ、これは少しばかりやりすぎだと、三好康長や安宅冬康らは、口を揃えて諫言してきたが、長慶は全く聞き入れなかった。そればかりか、

「余に逆らう者は、楯突く者は、例外なくこうなるのだ」

と言つて、平然と、処刑の執行を命じた朱印状を次から次へと発給していった。

これは後日の話になるが、諫言が受け入れられなかった冬康は、長年飼ひ続けてきた鈴虫を数匹ほど長慶の下に送つて、

「かような虫けらとても、無意味な殺し合いはせぬというに、何ゆえ兄上は、それほど人の血を欲しがるのか」

と、兄の苛烈な方針を痛烈に非難していた。温和で人望厚く、今やすっかり海の男として、淡路水軍を見事に束ねている歴戦の闘将は、一方で不自然なほどの平和主義者であつたりした。幼い頃から血を見ることが嫌いで、それゆえに、対照的な弟一存とは凄まじい喧嘩になつたこともある。

冬康のそういう性格を誰よりも知っている長慶は、幼い頃より全く変わらぬ彼の純真さに呆れつつも、困つたように、恥ずかしそうに、ハアと大きな溜息を吐いた。

「少しばかり、やりすぎたかな」

と、そのときは、そう思わずにはいられぬ長慶であつたりした。

そして、三月十四日である。

この日、長慶は伊勢貞孝の宿所に赴いていたが、そこで、彼は再び殺されかける破目となつた。

即ち…。

長慶がこの日、貞孝の下に向かったのは、貞孝が長らく庇護下に置いてきた狂言師たちの公演を見物するためであり、それ以上でも以下でもなかった。煩わしい政治の一切を忘れて、思う存分演劇に浸るのもよいだろうと、長慶は何一つ疑うことなく、軽やかに足を運んだのである。

だが…。

狂言もようやく佳境を迎えようかと言う頃、長慶は、背後におぞましき殺気を感じて、すかさず身構えた。けれど…。

「うぐうッ！」

と、彼は声にならぬ悲鳴を上げて、その場に崩れ落ちた。

長慶を狙った刀は、彼の身体を容赦なく貫いていた。急所は外れていたが、貫かれた体からは、とめどなく鮮血があふれ出ている。

「お、御屋形様ッ！」

たちまち、場内は騒然となった。よもや、こんなところで主君が窮地に追い込まれようとは、夢にも思っていなかった家臣たちは、どれも悲鳴のように叫びながらも、何をすればよいのか分からぬと言った風に、しばらく呆然と、その場に立ち尽くしていた。

下手人は、仕留め損ねた標的に、止めを刺すべく、再び立ち上がって、血塗れの刀を構えたが、攻撃態勢に入るより前に、彼自身が凄まじき激痛に耐え切れなくなって倒れこんだ。

「この下郎ッ！ 御屋形様のお命を狙う不届き者め」

立花範政は、赤く染まった血刀をぎゅっと握り締めて、そんな罵声を下手人に対して、思い切りぶつけていた。

「く、くそッ…」

下手人は慌てている。肩から背中にかけて、ぱっさりと斬り付けられたので、受けたダメージは予想以上に大きかった。それでも、ここで討ち漏らすわけにはいかぬと、下手人は必死になって立ち上がった。けれど、既に長慶の周りには、範政以下、三好家の郎党たちが鉄壁の壁を作って、主君を守らんと必死になっていた。こうな

ると、もはや手など出せるはずもなく、無念そうに唇をかみ締めながら、

「もはや、これまで…」

と、持っていた短刀で、その喉を思い切り掻き切ると、壮絶な自害を遂げてしまった。

下手人が、幕臣の一人たる進士九郎賢光であることは、一目見れば、誰の目にも明らかであった。かくして、館の主にして、進士賢光の上司である伊勢貞孝の関与も疑われたが、彼自身、この激闘で大いに負傷しており、一歩間違えば殺されていたかもしれないという状況を考えると、その容疑は限りなく薄くなった。かつ、進士の配下たちの証言も出揃い、改めてそれを検証してみると、彼は黒幕というより、長慶と共に命を狙われた標的ターゲットといったほうが良かった。

とにかく、命は助かったが、重傷には違いないのである。その日と、翌十五日は、ずっと意識不明の昏睡状態が続いたが、十六日になって、ようやく意識を取り戻した。けれど、その間、都の市民たちは長慶が殺されたのだと噂しあい、それが流布するにつれて、都全土が驚天動地の大混乱に包まれていった。混乱に乗じて六角が攻め込んでくるかもしれないと、恐怖に駆られた人々の中には、慌しく都を離れる者もいたぐらいだった。

けれど、十六日以降は、そうした噂も一挙に下火となった。肝心の長慶が復活して、三好屋敷にて三好政権を陣頭指揮していることが伝わるようになったからであった。ただ、下手人が進士賢光であることが知れ渡ると、人々の不安は、よりいっそう高まることになった。

「進士様は、幕臣だろう。伊勢様が黒幕ではないようだが、だとすると、進士様の背後にいるのは、朽木の公方様に違いない」

そんな風に噂しあいながら、人々は、いずれ必ず三好家と足利家の間で決戦になるに違いないと思うようになった。

実際、三月十六日には、長慶暗殺（未遂）事件を受け、待つてましたとばかり、旧晴元党が一斉蜂起した。香西元成、三好政勝らが総勢五千の軍勢を編成して、丹波の宇津を経由し、都に攻め入ったのである。

ただ、死んだもの、少なくとも意識不明の昏睡状態にあると信じられていた三好長慶が、突如として復活し、彼の指揮下に三好軍が猛然と反撃を開始すると、晴元残党軍はさしたる戦いもせず、無様に敗走してしまった。三好軍の数は二万を超えていたし、復活した長慶の堂々たる姿を目の当たりにして、戦意も大いに高まっていた。これでは、たとえ戦になったところで、政勝らに勝機などあるはずはなかった。

二度に及ぶ暗殺未遂事件の黒幕が、足利義輝や細川晴元であったことは、調査すれば、すぐに明らかとなった。と言っても、相手が将軍家ともなると、如何な三好長慶といえども、容易く手は出せないのである。しかも、目下、将軍も管領も、長慶の勢力下にはない。受けた傷を癒しながら、とにかく国政にあたっている彼の下に、四月中頃、阿波より弟がやってきた。見舞いであり、かつ、今後の方針を協議するという、重大な使命も帯びている。

三好之康と名乗っていた弟は、今では名を義賢と改めて、ますます兄に勝るとも劣らぬ大尽の風格を備えつつあった。長慶留守中の阿波を任されている彼は、三好の急成長に伴い、国主である細川持隆を差し置いて、事実上の国主となっていた。さらに、讃岐国で勢力を増し、同国の盟主的存在に収まった十河一存や、淡路の安宅冬康ら、優秀な弟たちを指揮下に置き、四国における三好家の最高権力者として君臨している。

「兄上、あれよりお変わりはありませんか」  
と、いつもと変わらぬ笑みを浮かべながら、そうやって頭を下げる義賢に、長慶は苦笑いした。

「変わりはないよ。ま、たまに傷が疼くが、どうということもない。…それより、そなたのほうはどうだ？ 大事無いか」

長慶は長く留守にしている本国のことを思い、少しばかり悲しそうに目を背けた。



「無論、万事無事でございます。…と、言いたいところですが、このところ、持隆公と対立することも多く、何かと気苦労が多い日々でございます」

「…そうか。持隆公、か…」

その名を聞いて、長慶の顔は、少しばかり朱色に染まった。

長慶は、細川持隆という男が、嫌いでもなければ、好きでもない。ただ、気に入らないことだけは確かだった。

義賢が言うまでもなく、三好家と細川持隆の間で、このところ対立が絶えないことは、長慶も知っていた。あくまで三好の主筋たることを誇り、それを以って三好のやり方に反発する持隆に、既に長慶はうんざりしていた。かつては、彼に命乞いしたこともあったが、昔と今では時代が違う。主君たる細川晴元を追放して実権を握った長慶には、もはや細川家を主君と仰ぐ気持ちは更々ない。それなのに、昔の如き絶対的な主従関係に固執し、すがり付いて、そこにもみ自らの存在価値を見出している持隆が、哀れにも、腹立たしくも思えてくるのである。

ただ、邪魔であることは確かだった。

「それと、平島の足利義維様よしつなのことでございますが、あの御方も、相変わらずでございます。兄上の勢威を知って、兄上の御力を借りれば、將軍となることも夢ではない、そんな風に思っているようです」

「…義維様、のう」

かつて亡父元長が擁立し、將軍とすべく奔走した存在。一時は堺公方などと称えられて、権勢を極めた足利一門の一人。晴元に見捨てられて没落した後は、阿波国平島に居を設けて、ひたすら機を待ち続けた哀れな人…。

長慶はそんな風に、義維という人を規定していた。まあ、元長と縁の深い人であるから、案外他人のような気はしないが、さりとて、彼を持って將軍候補とするとなると、話は別であった。

ただ、目下の状況を鑑みると、義維にも利用価値があるようには

思う。義輝がいつまでも徹底抗戦を貫くなら、彼に代わる將軍として、義維を立てるのも悪くない。何しろ、前將軍故足利義晴の実弟であり、現將軍義輝の実の叔父に当たる男だから、血統的には全く問題ない。

「ただ、義維様も、最近は歳のせいかめつきり衰え、ゆえに家督を嫡子の義栄様（後の室町幕府第十四代將軍）に譲りたいそうです。いずれ將軍になるかもしれぬお方の家督相続ゆえ、盛大に執り行いたいようで、我らにしきりに金を無心してくるのです」

「：我らに、金の無心？」

「はい」

「はっはっは。それはまた、大した將軍候補になりそうだ」

長慶は豪快に、腹を抱えて高笑いすると、義賢もまたニコニコと笑っていた。

「ま、金ぐらいは出してやればよからう。いざとなれば、我らの盟主になってくれるかもしれぬ貴重なお方だ。それに、いつまでも貧乏公方のままでは、いざというときに神輿に担いでも、いまひとつ有り難味に欠けることになるやもしれぬ。それなりの生活費ぐらいは面倒を見てやるのも、一つの政治だ」

と、長慶が言うと、

「はい。それゆえ、持隆公の反対を押し切って、それがしの独断でとりあえず家督相続に相応しいだけの金子と、御所の威厳が保たれる程度の生活費は提供することにいたしました」

すかさずそう答える義賢であった。

「さすがは豊前。いちいち余が指図するまでのこともないな。全く以って、余は優れた弟たちに恵まれたものだ。こればかりは、父上に感謝せねばならぬ」

嬉しそくに笑いながら、長慶はおもむろに、すつくと立ち上がった。そして、庭先のほうへと歩いていって、障子をパツと開いた。思い切り差し込める眩い日差しを存分に味わいながら、

「四国のことは、全てそなたの裁量に任す。お主の好きなようにす

るがいい。余はそなたの決断ならば、全面的に支持しよう」と、言った。

三好義賢が去った後、長慶は、しばらく一人で考え込んでいた。足利義維、その子義栄。

利用価値があるのか、ないのか。足利義輝がいつまでも徹底抗戦を貫くなら、確かに彼らを将軍に擁立するより他に手はなくなる。かつて、細川晴元が将軍候補にしていたほどの人であるから、義輝に代わる将軍候補とするに、全く申し分ない。

「義栄様など、まだ十二か十三のお歳と聞きました。されば、今の公方様を追放して、義栄様を新たな将軍に立てれば、幕府はおのずと御屋形様の支配下に入りましょう」

立花範政のそんな進言に、長慶は「そうよなあ」と、力なく、ぼんやりと頷いていた。

「ま、何にせよ、問題は細川持隆だ。…あれがいる限り、わが三好家が阿波を完全掌握したということにはならぬ。今後のことを考えても、何らかの手を打っておかねばならんかもしれぬ。…何と言っても、阿波はわが本国」

「されど、持隆様は細川家中では、京兆家に次ぐ名門阿波守護家の当主にございます。下手なことをすれば、御屋形様への風当たりが強くなるようなことにはなりませんか？」

そんな風に、事態を案じる範政を見て、長慶は思わず苦笑いした。「今更名門も糞もあるか。余は京兆家当主の晴元公をも追放した男だぞ。持隆殿をどうしようと、余の名誉は上がりもしないし下がりもしないさ」

妙に自信だけは漲っている長慶である。ただ、強がってはいても、内心は少しばかり不安であったりもするのだった。その辺りの機微を敏感に察しつつ、範政は何も言わず、ただジッと主君の顔を見つめていた。

それからしばらくたった五月六日。

都の長慶の下に、思いもよらぬ、驚天動地の凶報が舞い込んだ。

この日、彼はちょうど、越水城より一門着族を集め、三好政権の栄華を思う存分に味わっていたところであった。久方ぶりに会う御台所（遊佐御前、河内御前とも）や雅の方（西の御方、西の丸様）らは、なかなか和気藹々として、傍目にも仲睦まじい家族のように思えた。実際、新たな御台と雅の方は、随分気が合うようで、正室側室の垣根を越えて、無二の朋友の如く、付き合っていた。そんなところへ、である。

長慶たちは狂言や能などを堪能しつつ、京都料理に舌鼓を打っている。平家一門の栄華を髣髴とさせるかのごとき、三好一門の煌びやかな出で立ちは、見る者全てに、三好政権というものを強く印象付けることに成功していた。

「御屋形様、大変にございます」

そこに、松永弾正が慌しくやってきた。

「何事だ？」

興を削がれた長慶は、不貞腐れたようなむすっとした表情で、弾正を睨み付けた。けれど、弾正はそれに構うことなく、素早く主君の耳元に口を寄せると、

「河内殿、御落命の由」

とだけ、至極簡単に伝えた。

「な、なに？」

信じられぬ、といった顔で、彼はまじまじと弾正を見た。けれど、弾正ははつきりと頷き、真面目な顔をして、

「殺されたそうです」

と、言った。

「…だ、誰にだ？」

「珠阿弥とか申す坊主で、河内殿がここ最近、熱を入れて帰依していた時宗の僧侶だそうです」

「そ、僧侶に殺されたのか？」

「御意」

弾正の言葉は、一言一句、なかなか信じられぬ…、もとい信じたくない凶報であったが、彼が冗談を言うわけもなく、その顔を見ていれば嘘であるとは到底思えず、長慶はがっくりと肩を落とした。

遊佐河内守長教は、長慶にとっては有力な後援者で、かつ岳父だった。河内、紀伊を治める畠山家が、三好家と強い同盟関係を結んでいたのは、ひとえに畠山家の執政である遊佐長教の存在があったからであり、彼がいなくなった後、やたら名門意識だけが強い当主畠山高政が主導権を握るようなことになれば、三好家との同盟関係にも亀裂が生じることもなりかねない。

「報告によれば、珠阿弥を裏で動かしていたのは、やはり、朽木の公方様だそうです」

「…そうか」

思いのほか、陰謀好きな將軍義輝の度重なる策動に、長慶は怒りを通り越して、呆れていた。ただ、遊佐長教が死んだことは、三好政権にとってはかなりの打撃であった。これで、万が一、畠山家との同盟関係に亀裂が生じようものならば、三好家は、背後に畠山、前方に足利、細川、六角という強敵を抱え込み、一転して窮地に追い込まれかねないのである。

「五里霧中…。先のことは、全く分からぬものだ」

などと長慶はぼやいていたが、次から次へ、信じがたきことが度重なる世の中は、一般の人々にとっても、全く“五里霧中”であった。

天文二十年（一五五一年）五月五日。

畠山家の最高権力者であった筆頭家老、正五位上河内守遊佐長教

は、その居城たる若江城にて、あつけなく死去した。ありとあらゆる陰謀を弄して、数多くの政敵を葬り去りながら、戦国の非情非道をその身をもって体現してきた一人の英雄にしては、実に他愛のない死ではあった。

その後、畠山高政は、後任の河内・紀伊守護代に遊佐長教の一族である安見直政を指名し、遊佐家とその領地など、長教の遺した遺産の大部分は嫡男である遊佐新次郎信教に引き継がせた。ただ、安見直政にしても、遊佐信教にしても、智勇に秀で、その実力で畠山家の頂点に立った遊佐長教ほどの指導力はなく、結局、畠山家は、主君高政、守護代安見直政、有力重臣の遊佐信教による、実質的な三頭政治体制を採らざるを得なくなつた。

遊佐河内守長教が唐突に逝去すると、河内情勢は一挙に不穏になった。

長教に代わって畠山家の主導権を握った畠山高政は、その粗野な外見とは裏腹に、名門守護家の当主たることを大いに誇りに思っているような典型的な貴公子だった。それゆえに、細川家の被官に過ぎない三好家と同盟関係、要するに対等の関係を結ばざるを得ない立場に甘んじていることが許せなかった。

足利幕府草創以来、常に細川と畠山は同格の存在であったという歴史的事実を踏まえれば、細川の被官に過ぎない三好など、当然畠山より格下の存在に過ぎない。そういう思いがあるから、高政は必要以上に三好家を一方的にライバル視するようになっていた。無論、そういう考え方も、決して間違っていないが、今は実力が何より重視される戦国の世である。昔はこうだった、ああだった、などという論議は、何の役にも立たない。実際、三好家の勢力は、畠山家のそれを遙かに上回っている。こういう時代にあつては、それが全てであり、世間の人々も三好より畠山が偉いなどとは少しも思わなかった。

何にせよ、未だ若く、それゆえに血気盛んな高政は、三好家を嫌っている。そんな人物が、遊佐長教に代わって新たな畠山の総帥となったのである。三好家にとっては、これほどの不幸もなかった。

陰謀好きな將軍は、当然のようにこれに目をつけた。もとより、そうなることを狙って長教を暗殺したのである。義輝はかねてより、やたらと自尊心の高い畠山高政という貴公子を注目していた。

足利義輝という人は、その圧倒的な武芸を高く評価され、世に劍豪將軍などと称えられているが、彼の真骨頂は、そんな個人的武勇

などよりも、外交や謀略など、主に頭を使った複雑な頭脳戦にあつた。

足利十五代の將軍の中で、これほど外交、謀略能力に長けた將軍もいないだろう。彼を除けば、彼の弟たる足利義昭（十五代將軍）が唯一張り合えるかもしれないが、ともかく、義輝は何から何まで異色の公方様であつた。その上、劍才に秀で、かつ幼い頃より散々辛酸をなめたことで、忍耐力も十分ある。まがりなりにも將軍家に生まれた貴公子でもあるから、知識のほうも申し分ないほどにあつた。

もしも足利十五代の個人的能力を比較することができるなら、義輝は間違ひなく首位に入るだろう。世が世であれば、尊氏や義満、義教などを遙かに上回る名君英雄として、長く後世に伝えられていたであろうが、生憎、彼の生まれた時代は、そんな彼の力量を以つてしても、どうにかなる次元を遙かに超えていた。

それでもなお、義輝は足掻いている。やたら秀でた能力を授かつてだけに、彼は衰亡極まる幕府の現状が許せなかつた。なぜ？ どうして？ 幼い頃、彼はいろいろと考えた。天下で一番の名家と称えられる家に生まれながら、物心ついた頃からずっと、彼は流人としてどん底の日々を過ごしてきた。これが栄華を極めた足利將軍家の末路なのか？ 天下の支配者たるべき幕府はここまで零落れてしまったのか。

いや、違う。

彼はずつと思つていた。自分ならこうする。不甲斐無き父の後姿を眺めながら、いろいろと考えてきた。そして今、彼は將軍として天下に臨んでいる。相変わらず実権はないし、名ばかりの將軍職は、常に空しさと哀愁と同じところに漂つていた。

將軍家、幕府の復活を成し遂げるためなら、どんな手だつて使う。非情、卑怯と罵られようと、構わないと思つていた。だから彼は暗殺という、どちらかといえば卑怯な手も使つた。長慶暗殺には失敗したが、遊佐長教暗殺は成功した。結果、畠山氏は揺らいでいる。



義輝の思惑通りである。後は畠山を取り込み、三好を滅ぼして、まずは山城国、そして近畿地方、最終的には天下全土の支配権を將軍家の手に取り戻す。

「見ていてくださいまし。必ずやそれがしはやりませぬ」  
彼は思う。彼は願う。そして誓う。

必ずや幕府は自分の力で立て直して見せるのだ、と。將軍家にかつての威光を取り戻してみせる。実力偏重の戦国時代であれば、自らの実力で、再び天下人の座に返り咲いて見せるのだ。

義輝の戦いは始まったばかりである。今はただ、畠山家に差し向けた使者が吉報とともに帰ってくるのを、今か今かと待ち侘びていた。

義輝の当面の目標は、京への帰還である。

だが、それは三好家を京より追い出した上で、勝者としての入京でなくてはならない。征夷大將軍としての威厳を取り戻すためには、何としても、その武力で三好氏を追い払う必要性があった。

畠山家に楔を打ち込んだのも、そのための策である。畠山高政の挙動が怪しくなると、三好家は京都周辺に展開していた軍の一部を河内方面に移動させて、彼らの行動を監視せざるを得なくなった。

だが、それだけで三好家を追い払えるものでもない。何より、三好家を倒したくば、彼らを倒すに値する戦力を持たねばならなかった。だが、頼みの六角家では、和睦派が急激に勢力を持ち直し、今では定頼の影響力も低下の一途を辿っている。一時、主戦派に転向していた六角義賢も、後藤賢豊らの説得に応じて、再び和睦派の盟主に返り咲き、その上で、彼らの支持を受け、事実上、父に代わり、藩政の実権を握っているという。

六角家は頼りにならない。だが、兵力は必要なのである。そこで、細川晴元を匿っている朝倉氏に援軍を要請し、彼らから一千の兵を借り受けると、さらに、晴元残党勢力にも呼びかけて、反三好の兵

を挙げるよう扇動したのである。

かくて…。

七月十四日。

三好政勝、香西元成、織田近大夫、十川左介、岸和田可也や、柳本氏、山本氏、山中氏といった晴元残党軍を糾合し、彼らを京に進軍させたのである。総勢三千。

一方、都では、畠山家が怪しいとの急報を受け、長慶自ら河内方面に出馬していたので、義輝の差し向けた残党軍は、案外あつけなく入京し、等持寺を経て、相国寺に入って、ここを本陣とした。

丹波八木城に、松永弾正忠久秀はいた。

悔しげに、何度も何度も床を叩きつけている。

「くそッ！」

と、激しい口調で叫んでいた。

無理もない。

松永弾正は、長慶が留守にしている間、代官として都を任されていた留守居軍の司令官だった。結局、油断だったのだらう。残党軍の接近に気づかず、彼らが入京したときには、既に遅かった。今更兵を集められるものでもなく、残党軍が怒濤の勢いで都全土を掌握すると、とるものもとりあえず、慌てて丹波に逃れざるを得なかったのである。

丹波八木城は、彼の実弟内藤長頼の居城である。ゆえに、さながら自らの城の如く、遠慮なくふんぞり返っているが、自らの立場が敗軍の将である以上、居心地はあまりよくなかった。

「ま、こういうこともありましょう」

と、家臣の林若狭守などは、そう言って慰めたが、弾正の腹立ちはなかなか鎮まりそうもない。

「備前ッ！ 兵は整ったか？」

弾正はそんな風に叫びながら、弟の下へと向かった。逸りたつ兄

の大音声に、弟は呆れたような溜息を吐きつつ、

「あと少しでござる。」

と、言った。

弾正とすれば、長頼配下の丹波勢が集まり次第、再び京へ進撃して、これを奪還するつもりだった。弾正配下の摂津衆だけでは、さすがに残党軍を倒せない。

松永弾正久秀は、今やこれでもいっぱしの城主であった。半年ほど前に、主君長慶より、摂津の滝山城を与えられていたのである。滝山城は摂津の最西部に位置する城で、摂津の西隣である播磨から万一敵が攻め寄せてきた場合、防衛の戦略拠点となる城であるし、また三好方が播磨に攻め入る場合でも、最前線基地となる要の城である。そんな大切な城を預けられているだけでも、長慶がどれだけ弾正を信任しているか、一目瞭然だった。無論、播磨を支配している守護の赤松氏や、その実権を握る守護代の浦上氏とは、特別敵対関係に陥っているわけではないから、滝山城主となった彼に喫緊の仕事はない。だが、自分を信頼して滝山城を預けてくれた長慶の気持ちを考えれば、無様に都を明け渡したまま、無意味に日々が流れることだけは、断じて許せないのである。

松永弾正、内藤備前率いる摂津、丹波勢八千は、怒涛の勢いで都に迫り、七月十六日、残党軍と都の郊外で決戦した。

特に弾正以下摂津滝山衆が奮戦したこともあり、戦いは終始三好軍優勢に展開した。また残党軍は、言ってみれば寄せ集めの連合軍であり、明確な総大将もいなかったから、意思の統一を図ることが難しかった。これでは、到底三好軍に勝てるはずもなく、十六日の昼までに、彼らは無様に敗走する破目となった。

かくして義輝の計算は狂った。

本来、彼の考えていた作戦としては、畠山家を挙動不審にさせることで、三好の主力を京から離し、手薄になった都を、晴元残党軍に制圧させる。また各地の反三好勢力を蜂起させ、主力軍以外の三好軍をも無力化し、その上で、六角定頼を説得して、六角の大軍をもつて、自ら上洛する…、というものだった。

畠山家を挙動不審に追いやり、三好の主力を京から引き上げさせたことまでは、順調に進んでいた。だが、各地の反三好勢力を蜂起させるという策は、なかなか上手くいかなかった。義輝は、三好軍主力が不在となれば、最大の敵となるだろう丹波の内藤長頼対策として、彼の養父たる国貞を扇動して挙兵に追い込み、長頼軍を無力化することを考えていた。だが、既に国貞にはそんな気力も体力もなく、かつ既に内藤家の完全掌握を終えていた長頼に、あえて楯突き、国貞に従おうとする殊勝な家臣など皆無であった。

ほかにも、大和の筒井氏を扇動して、大和衆を味方に取り込もうとしたが、当時の筒井氏は、去年、即ち天文十九年（一五五〇年）六月に、当主である筒井順昭を失っており、かつ跡継ぎである嫡子の順慶は当時まだ二歳であったため、とてもではないが、そんな騒動に関わっている余裕はなかった。ただ、筒井順昭が既にこの世の人でないことは、筒井氏の中樞を担う幹部以外は知らぬことで、義輝をはじめ、世間の人は、依然として順昭は健在であると思っていた。というのも、筒井氏では、順昭死後、彼に良く似た茶坊主を影武者として立てて、あくまで順昭の健在を強調し続けていた。実際、順昭の実弟である筒井順政が主導権を握り、順昭が死んだとは一切思えないほどの安定した体制を保っていたから、外部の人間が、筒井氏の異変を察知することは、事実上不可能といってもよかった。これは余談であるが、元の木阿弥という言葉がある。いったん良くなったことが、再び元に戻ってしまうことを指す故事成語であるが、その由来は、この筒井氏から来ているといわれている。

筒井順昭死後、その影武者に立てられた茶坊主の名を木阿弥と言い、元々は奈良に住む普通の平民であった。それが、ただ順昭に容

貌や声質が似ているというだけの理由で、二年から三年ほどの間、影武者として、筒井城の主となったのである。無論、多分に名目的な地位であり、実権は順政が握っていたが、影武者を勤めている間は彼はありとあらゆる贅沢が許されていた。けれど、歳月が流れ、筒井氏の新体制も安定し、順昭の死が正式に発表されると、用済みとなった彼は影武者の任を解かれ、奈良に戻ったわけだが、筒井家がその後の面倒まで見てくれるはずもなく、また昔の貧しさに戻ってしまった。この故事こそが『元の木阿弥』という言葉の由来になったのだという。

また、義輝は、阿波の国主たる細川持隆を動かして、三好家の本國たる阿波を動揺させようとしたが、既に阿波国を完全掌握している三好義賢の前には、持隆が少しばかり策動しようとも、何の効果もなく、これもあっけなく失敗に終わった。

とにかく、義輝の策動は、ここに大きく狂い始めたのである。挙句、電撃的に丹波より進撃してきた松永弾正、内藤備前の三好軍により、残党軍が蹴散らされ、都は奪回されてしまった。これを受け、ますます六角家内部では和睦派が力を増し、もはや、彼らが義輝のために三好家と戦ってくれるはずもなかった。

かくして、義輝も観念した。  
無理もない。

京情勢の異変を受けて、河内出兵中の三好長慶も、一万の兵を率いて都に舞い戻ってきているし、何より、六角氏が完全に和睦派で固まってしまったことが、彼を失望と絶望に追いやった。

六角義賢が仲介する形で、三好長慶と足利義輝の間で和議協定が結ばれることになったが、そこで長慶が示した条件は以下の四条であった。

一つ、細川晴元殿、京兆家家督を氏綱殿に譲り渡すこと。

- 一つ、晴元殿、以後家督を望まず、その証として出家すべきこと。
- 一つ、晴元殿の嫡子を三好家の人質として差し出すこと。
- 一つ、公方様、御上洛すべきこと。

基本的に、長慶はこれ以外の条件で和議を結ぶ気はなかった。

ただ、長慶と義輝の間で結ばれた和議ではあるが、細川晴元に対して厳しい処置となっている点が、注目すべきところであろう。晴元はこの和解協議に参加していないが、彼を匿っている朝倉家は、強勢を誇る三好との全面戦争を望まず、いざとなれば晴元を差し出すことを認めていたから、晴元に、これを拒む権利はなかった。

かくして、和議は結ばれた。

そして、天文二十一年（一五五二年）一月二十三日、ようやく足利義輝は和議内容を履行する形で、朽木を発し、比良・坂本を経て、二十八日、逢坂（現在の京都府及び滋賀県の境）において、長慶の差し向けた三好日向守長逸や松永弾正久秀らの出迎えを受けたのである。そして、その日の未下刻（午後三時）頃に入京を果たすわけだが、長慶は自らの勢威声望を満天下に示すべく、義輝の護衛として、摂津・丹波・大和・和泉など、三好政権に属する各国の兵三万をつけていた。

また戌刻（午後八時）には、人質として三好家に差し出されることになった晴元の嫡子聡明丸（後の昭元）は、長慶の嫡子である千熊丸に出迎えられる形で、東寺に入ったのであった。

その後。

細川晴元は剃髪して、自ら心月一清と号し、さらに一月二十六日には、淀御所、即ち細川氏綱が正式に細川高国の跡目と認められた上で、朝廷より従四位下右京大夫に任じられ、足利義輝より管領に任命されることとなった。

また、二月二十六日には、三好長慶も、義輝より御供衆に任じられている。御供衆というのは、將軍の直轄部隊である奉公衆（將軍の親衛隊）の番頭のことであり、格式は、管領家や侍所頭人、政所

執事、守護家に次ぐものであった。かくして彼は、名実共に細川家の被官という立場から脱し、足利將軍家の直臣に列して、戦国大名としての記念すべき第一歩を歩み始めたのであった。

## 【絶頂編】第076章 晴元の反攻

三好長慶は、まさに順風満帆、向かうところ敵なしの勢いであった。

三好政権の骨格も、徐々に固まってきた。

ここで一つ、三好政権の中核を担う重臣たちの配置を見てみよう。まず、三好一門のうち、総帥である長慶は摂津越水城を居城とし、また都を地盤に、三好家全土を総括している。その補佐として、三好康長や三好長逸、三好政康ら一門衆、岩成友通、立花範政、今村慶満といった重臣たちが従っていた。

阿波には芝生城を拠点に、同国を支配している三好義賢がおり、彼の補佐役として篠原自遁、篠原長房らがついている。讃岐には十河一存、淡路には安宅冬康があり、義賢が十河、安宅兩名を統括して、四国三好党の総帥となっていた。

その他、丹波には内藤長頼がおり、和泉国は長慶の直轄支配下に置かれている。

これが基本的な政権の地方支配の大まかな構図であったが、これら国持級の大名だけでなく、各地域の要となる城が与えられて、地域支配の一翼を担うようになった重臣たちも多かった。

例えば、松永弾正久秀は摂津滝山城城主として、摂津国西部の支配を委任されている。芥川山城には芥川孫十郎がいるし、三好長逸には山城南部の飯岡城、三好政康には同国の木津城が与えられている。また、比較的京に多い長慶に代わって、三好千熊丸が越水城の城代を勤めているが、幼い彼に摂津一円を統治できるはずもなく、実質的に傅役にして後見役たる立花又右衛門が、城代代行の任にあたり、その補佐を松永弾正が勤めているという状態であった。

將軍足利義輝が都に戻り、細川氏綱が管領となったことで、幕府



の体制は、とりあえず、義輝が主導し、氏綱が補佐するという形になつていた。だが、それが多分に名目的なもので、この二人に実権がないことは、都の人なら誰でも知つていた。

幕政が行われる場所は、室町御所でも、管領御所でもない。そんなことは誰もが知つている公然の秘密であつた。建前の上では、幕政は、今も室町御所で行われていることになつてはいるが、ここでの仕事は、専ら事後承諾だけだつた。全ては三好屋敷にて行われている。もはやそれは人々の常識として、その頭に刷り込まれていくようになった。

ただ、一見すれば実に複雑な体制である。誰が最高権力者なのか、一目では分かりにくい。將軍である義輝には何の力もなく、その義輝から力を奪つたことになつている氏綱にも、やはり力はない。全ての力を握つている三好長慶は、立場としては、ただの御供衆に過ぎないのである。いわば、將軍の親衛隊長が全権を握つているようなもので、外国人からすれば、わけが分からぬものであつた。

長慶も、外国人、それも朝鮮とか明（中国）の人ではなく、南蛮人（ヨーロッパ人）と、一回だけであるが、会つたことがある。それは昨年、即ち天文二十年（一五五一年）一月のことであつた。

その南蛮人は、自らをフランシスコ・ザビエルと名乗つていた。キリスト教という宗教の主流派たるカトリックに属するイエズス会の宣教師だと、彼は言つたが、長慶には全く分からなかつた。ともあれ異国からの来訪者が、わざわざ都までやってきたとあつて、興味本位もあり、彼はザビエルを三好屋敷に招聘してみたのである。

「日本とは不思議な国です」

と、ザビエルは片言の日本語を操りながらも、そんな風に言つた。「皇帝（天皇）や、大君（將軍）などがこの国にはいますが、どつちが支配者なのか、私たちには分かりにくいですし、それに、今ではそのどちらも力がありません。さらに、カンレイなるお方が最近は力を握つておられるようでしたが、今、都に参りましたら、そのカンレイも力を失つたと聞きました」

長慶は、殊更異国人を差別する気はないし、彼らがもたらした南蛮渡来の珍品名物を愛用していることもあり、彼らの意見、考え方というものを常々聞いてみたいと思っていたのである。ゆえに、ザビエルの疑問には、彼自身思うところもあって、

「ははは」

と、愉快そうに高笑いした。

「帝も將軍も、今や有名無実。言ってみれば、余が帝であり、將軍のようなものだ。ま、お飾りだ。気にするな。何か申したきことがあれば、余に申せ。この国の全てを決めるのは、余の仕事だ」

自信満々、自らの力をひけらかすような長慶の態度は、具体的なことは分からないがザビエルにすれば、まさに帝王そのものに見えた。これまでも、彼は鹿児島や山口に赴いては、島津貴久や大内義隆などの地方王と出会っていたが、そんな彼らとはまるで違う長慶の態度に、「ほお」と驚いていた。

ザビエルとの会見で、長慶はとりあえず彼の願いであった布教に關しては、認めてやった。その後、ザビエル本人は、都を去って平戸、山口を経て、インドへと去っていったが、後任の宣教師たちの手で、西国から畿内にかけて、キリスト教徒（切支丹）たちの数は劇的に急増していった。

ただ、長慶はそんなことより、見知らぬ異国の世界を知ったことが何より嬉しかった。ザビエルからの献上品である地球儀を眺めながら、一日をぼんやりと過ごすこともあった。そのたびに、日本という国の小ささと、世界の巨大さを痛感するのである。そして何より、そんな狭い日本一国すらも統一できない自分の無力をひしひしと感じるのだった。

なにはともかく、ザビエル来訪から一年が過ぎ、天文二十一年（一五五二年）を迎えたわけである。義輝、氏綱を擁立することで、完全に幕政の実権を握った長慶の有頂天は、なかなか納まる気配を見せなかったが、この年の三月末ごろになって、その鼻っ柱をへし

折るような、余りよろしくない事件が早速勃発した。

その原因を作ったのは、出家隠棲したはずの細川晴元であり、依然として京都への復帰を夢見る彼の、性懲りもない策動が全てのきっかけとなった。

晴元は依然として京奪回及び細川政権の復活を夢見ていた。彼は畿内情勢への関心を急速に失い、三好家との和合を模索する朝倉氏に愛想を尽かして、若狭の武田氏の下に逃れていた。けれど、そんなことをしている間にも、三好政権の骨格は急激に固まり、三好長慶の勢威が強大化するにつれ、彼の焦りはどんどん深まっていった。

そこで彼は、まず三好政権の栄華を快く思わない、潜在的な反三好勢力に声をかけていった。その筆頭が、丹波における波多野晴通であった。亡父秀忠の後を受けて、丹波の有力国人波多野家の家督を引き継いでいた彼は、三好政権の強力な支援下に勢力を増す内藤長頼に苦慮していた。これまでも幾たび内藤勢と刃を交えてきた晴通であるが、戦、外交、謀略とあらゆる才に長けていた父とは違い、要するに何をやっても凡庸なこの男は、一代で丹波守護代までのし上がった長頼の敵ではなかった。

だから、晴元から誘われると、彼は真っ先に飛びついた。家臣たちが始めるのも聞かず、

「晴元殿の下、憎き内藤備前を討ち滅ぼすのだ」

と、声高に叫んでいた。

で、波多野晴通に率いられた波多野勢は拳兵したわけだが、それを見逃すような内藤長頼でもなく、

「波多野が謀叛？」

と聞けば、すかさず兵を動員して、たちまち波多野軍を蹴散らし、身の程知らずの謀叛人を、その居城たる八上城に追い詰めてしまった。

だが…。

晴元の策謀は、波多野を扇動するに留まらなかった。

所詮、波多野の拳兵は、彼の抱く壮大な作戦の一端に過ぎない。三好長慶が内藤長頼の支援のために、二万の大軍を率いて京を離れた隙に、長慶の妹婿たる芥川孫十郎をはじめ、池田出羽守長正らを籠絡して、拳兵させたのである。

そのことを長慶が知ったのは、五月に入った頃のことである。特に芥川孫十郎の離反は、彼には衝撃的だったようで、

「まさか……」

と、しばらく呆然と立ち尽くしていた。

無理もない。

他ならぬ妹を嫁がせて、三好一門の一人と遇してきた男である。芥川山城という戦略的要地を預け、三好政権の枢機にも参与させてきた。そんな男が、長慶に背いて、叛軍に与力したなどと、容易く信じられるものではなかった。

だから、五月二十三日、長慶は八上城攻めの全権を内藤長頼に委任し、自らは二万の兵を率いて、ともかく地盤の再整備が急務だからと、都には戻らず、居城たる越水へと戻っていった。

一連の離反劇の背後に細川晴元がいることは、一目瞭然だった。

越水城に入った三好長慶は、事ここに至って、ようやく、先の江口合戦時に晴元を捕虜としたとき、彼を殺しておけばよかったと、自らの甘い判断を嘆いたりしていた。

「聡明丸殿は如何いたしますか？」

松永弾正はそう言つて、長慶の判断を仰いできた。

聡明丸とは、細川晴元の嫡男で、今年で四歳になる。先の和睦により三好家の人質となり、今は細川氏綱の居城である淀城に軟禁されている。

松永弾正久秀の目は、見せしめのための処刑を強く訴えていた。晴元は離反したのである。これが明確になった今、人質である聡明丸を生かしておく必要性はない。そのための人質なのだから、見せしめとして、盛大に殺してしまうのが得策だと、松永弾正は思つて

いた。

「まあ、殺すか殺さぬかは余が決める。今のところは、とりあえず京においておくのは危険ゆえ、越水に戻すでしょう。手筈は、弾正、そなたが整えよ」

長慶のそんな命に、

「御意」

と、弾正は大きく頷いたが、その内心は「甘いことよ」と、口には出さぬが、すっかり呆れていた。

弾正久秀には、長慶の気持ちを手にとるように分かるのだった。聡明丸に同情している。そんなことは、あえて聞かずとも一目瞭然であった。おそらくは、自分の幼い頃と重ね合わせているのだろう。長慶も父元長が殺された後、人質として晴元の下にあったが、その頃の記憶は依然として彼の考え方、思いの中核を占めている。似たような境遇に立たされている聡明丸に同情したとしても、無理はない。

ただ、だからといって、聡明丸を助けておく理由にはならないと、弾正久秀は思っている。かつて人質だった長慶を殺さなかったために、ついに政権を失った晴元の如く、ここで聡明丸を殺さねば、彼により長慶の政権を奪われぬとも限らないのである。

そんな風に思いながら、弾正は手筈を整えるためと称して、部屋を去った。厳しいながらも、時折甘い。やはり、三好という名族に生まれたからか、長慶は非情に徹しきれないところがあった。自分ならば、聡明丸など何の気兼ねもなく八つ裂きにしてやるのに、長慶にはそれができないのだ。そこらに三好長慶という男の限界があるな、などと考えつつ、弾正久秀はニタニタと不敵な笑みを漏らしていた。

細川聡明丸は六月三日、淀城を発した後、鳥羽（京都市伏見区）に入り、やがて淀川を舟で進み、大物（尼崎市）を経て、六月五日に、越水城にやってきた。

その後、長慶は摂津における地盤を固めるべく、叛いた池田氏や芥川氏の居城を取り囲んで、三好政権の強力な武威を示した。彼らはしばらく抵抗したものの、結局、三好家の圧倒的武力の前には無力で、まず池田氏が降伏し、芥川氏も事実上降伏を余儀なくされた。ただ、細川晴元方の勢力が増す中、如何な長慶も背いた兩名に対して、強烈な仕置はできず、それぞれの領地を安堵した上で、その罪を悉く免じると言う寛大な処置を取らざるを得なかった。

その晴元であるが、八月二十六日になって、逗留していた若狭武田氏の下を出発すると、丹波の豪族宇津氏や波多野氏らの支援を得つつ、山城に入って、小野（京都市右京区）に到着した。そのときの従者は僅かに八十人と言われ、前管領にしてかつての天下人とは到底思えぬほどの貧弱さであったが、晴元の入京により、各地の晴元党の戦意は大いに高まった。

【絶頂編】第077章 親子の絆

内藤長頼は八木城にあつて、物思いに耽つていた。

長頼は、幼い頃に父母を失つて以来、兄以外の親族を知らず、ひたすら自分の実力だけでこの世を渡り歩いてきた。その結果、明日はおろか、今日すらどうなるか分からぬほどに貧しき家に生まれながら、今や内藤家の当主として丹波一国を支配するまでになった。だが…。

やはり兄以外の家族を知らないというのは、何とも言えず寂しく、悲しいものだった。どれほどの栄華を掴もうと、権力を極めようとも、この悲しさを埋めるには至らなかつた。

そして、そんな長頼にも、ついに新たな家族が出来た。一ヶ月前、念願の子供、それも嫡男（幼名千勝丸。後の内藤如安）が生まれたのである。長頼は大いに喜び、大いにはしゃいだ。実際、あの時抱いた興奮は、今後二度と忘れないだろうとも思った。家族の誕生、それもわが子の誕生が、これほどに嬉しいものとは、長頼自身少々驚きではあつたが、兄たる弾正久秀には、もう九歳になる嫡男久通がいる。長頼にとっては甥にあたるが、そのときも嬉しかったのである。それを思えば、わが子の誕生が嬉しいのは、至極当然であるような気もした。ただ、ああいう兄なので、久通が誕生したときも、

「ただの子供だ」

などと、淡泊に答えていたものだが、内心は嬉しかったに違いない。自分がこれほどに嬉しいのだ。ならば兄とても…、などと思いつながら、ふと、今度は義父たる国貞のことを考えずにはいられなくなつた。

国貞にとっては、実の孫なのである。婿に迎えた長頼によって当主の座を追われ、家中からの支持もすっかり失い、今では一人空しく八木城の一角に余生を送っているが、孫の誕生は、やはり嬉しい

に違いない。長頼は、無性にそんな義父のことが気になった。これまで、ただの敗軍の将と、さして気にもとめなかったのだが、彼もまた紛れもない自分の家族なのだと思うと、これまで無視を決め込み、冷遇し続けてきたことを後悔せずにはいられなくなった。

長頼が義父に会うことにしたのは、それからしばらくたった後のことであつた。波多野家や宇津家など、丹波国内における反三好勢力との対立が顕在化する中、彼は忙しき日々の合間を縫って、城内の国貞の居所に足を運んだのであつた。

「義父上、お久しぶりでございます」

今や従五位下内藤備前守長頼として、三好政権の枢機にも参与している実力者となつた婿を見て、国貞は自嘲気味に苦笑いした。

「何の用だ？　今をときめく内藤備前守殿が、何の力もない、零落れ果てた老い耄れを訪ねてくれるとは……」

国貞はそう言つて、すっかり白くなつてしまつた髪を悲しそうにさすつた。

「相変わらずの義父上でございますな。ま、ようござるが、ともかく、息子も生まれたことですし、ここらで我ら親子も和睦いたしませぬか？」

「和睦？」

「左様です。…血こそ分けていないとはいへ、我らは紛れもなく父子の契りを交わしたわけで、その二人がいつまでもいがみ合っているのは、生まれたばかりのわが子に対しても、教育上よろしくありません」

「…和睦、のう」

国貞は淡々と呟きながら、「ふーむ」と唸っている。彼の中における長頼に対する不満や怒りなどというものは、とうの昔に消え去つていたが、それでも地位を追われたかつての当主としての意地が、彼を意味のない意固地に追いやっていた。

「我ら親子が和議をすれば、内藤の家も統一されましよう。これよ



り我らは、波多野や宇津ら、御屋形様に叛く逆賊どもを討伐せねばなりません。内藤家が二つにいがみ合っているのは、敵の付け入る隙を与えるだけで、何の益もありませぬ」

と、長頼は言うのである。国貞は苦笑いしつつ、

「わしに何の力があるのやら……。内藤家は既にそなたの下に統一されておろう。今更和議など結ばずとも、丹波一国はそなたの思うがままであろう」

と、小さく溜息を吐いた。

「ま、それはそうでしょうが、ともかく、せつかく孫が生まれたことです。ここらでお互い、意地と面子の垣根を取り払って、親子に戻りましょう。妻も和解しろと、ことあるごとに五月蠅いです」

「…そうよなあ」

国貞はしばらく腕組みしながら、「ま、よかろう」と、内心、少しばかり苦笑いしつつ、そんな風に心の中に呟いていた。考えてみると、今までずっと激しくいがみ合ってきたことが、なぜだか馬鹿馬鹿しく思えて仕方がなかった。あらゆる意地や面子の垣根を取っ払ってみると、そこには父と子があるだけで、親の仇の如く、いつまでもいがみ合う理由はなかった。

「ふん。ま、千勝丸に免じて、仲直りしてやらぬこともない」

国貞はそんな風に言って、あくまでも強がっていた。長頼は苦笑いしつつも、楽しそうに「ははは」と笑った。

九月十二日。

内藤長頼は、八木城の守備を国貞に委任すると、自ら三千の精銳を率い、宇津家の領内に攻め入った。晴元の入京を手助けしただけでなく、波多野家と同盟を結んだ彼らは、長頼にとって敵以外の何者でもなかった。丹波の安定と、内藤家の勢力拡大という二つの大きな軍事目標の実現を目指して、彼は怒濤の勢いで進撃したのだ。た。

お気に入りの、朱色の陣羽織に身を包んだ長頼は、本陣を設けた小寺の境内から見える宇津城を、まじまじと見つめていた。

「宇津家の兵力は、およそ一千とのことですが、老人から子供まで、領内の男という男を悉く糾合した数だそうですね。」

との報告に、長頼は「ふーん」と軽く頷いた。

「ならば戦える数は如何ほどだ？」

「おそらく、四百以下と思われませう。」

と、答えるのは一門衆の一人たる内藤貞弘であった。

「四百程度か。それに毛の生えた戦力など、我らの敵ではあるまい。力の限り攻め入って、踏み潰してくれ。」

長頼は自信満々である。とかく、ここ最近の彼は少しばかり浮かれあがっていた。

無理もないが、貞弘は少し不安だった。長頼が稀に見る名将であることを、彼は否定しないが、たとえどんな英雄であれ、油断すれば負けるというのは、古今東西を問わぬ戦の常識であった。

無論、宇津城如きの攻略に手間取るとは、貞弘とて思っていない。ただ、丹波には依然として多くの反三好勢力が犇んでいるのである。如何に内藤家が守護代として、丹波国を支配下に置いているとはいっても、内藤方が実効支配している地域は、丹波のおよそ七割程度で、残る三割は、反三好・反内藤方で占められている。そして、その筆頭格である波多野晴通の存在が、貞弘は気になるのであった。

「八木城に父上を入れてある。もしも波多野が動けば、父上は黙ってはいまいよ。」

と、長頼は言うのだが、こればかりはなんとも言えない。よもや国貞が裏切るはずもないが、波多野勢が本格的に動けば、国貞だけで、その勢いを食い止めることが出来るだろうか…。

そんな貞弘の不安をよそに、長頼は全軍に対し、総攻撃を命じた。けたたましく響き渡るほら貝の音に耳を傾けながら、

「仕方あるまい。」

と、観念したように戦陣へと戻っていく貞弘であった。

内藤軍による丹波平定戦が本格化した頃、畿内においても、三好長慶による大々的な反攻作戦が開始されていた。

十月二日。

三好長慶は一万五千の兵を伴って入京し、晴元方の諸軍を次から次へと蹴散らした。晴元方により追い詰められていた淀城の細川氏綱もすかさず打って出て、落ち目となった晴元軍を徹底的に追い散らしていった。

さらに十月二十日。

伊勢貞孝が総勢二千の兵を率いて入京し、三好軍の一角に合流した。かくして戦力を大幅に増強した三好軍であったが、一方で、都を追われた晴元軍のうち、晴元本隊は京に程近い小野の地に入つて逆襲を期し、香西元成ら一部は、晴元方の生命線といつても過言ではなかつた丹波国の完全掌握を目指して、内藤長頼の居城たる八木城に迫つたのである。

この頃、内藤軍は宇津城を攻め落として、波多野家と激しく睨み合っていた。内藤軍四千に対し、波多野軍は三千である。戦力的には限りなく互角に等しい両軍は、激しく激突しながらも、なかなか決着のつかない泥沼の戦いを飽くことなく繰り返していた。

けれど……。それも決して長い話ではなかつた。膠着状態に陥つた戦線に、香西軍が波多野方の援軍として到着すると、戦局は一挙に内藤方不利に転じていった。実際、前門の虎、後門の狼ならぬ、前に波多野、後ろに香西と両面に敵を抱えてしまった内藤軍の不利は誰の眼にも明らかであり、いざ戦いになると、長頼は生まれて初めてともいえる記録的な大敗を喫して、八木城に逃げ戻つたのである。

「ま、人生に負けはつきものだ。そう落ち込むな」

と、国貞は落ち込む息子をそんな風に慰めていたが、長頼の受けた衝撃は、かなり大きかつた。

既に八木城は勝勢に乗った香西・波多野連合軍により包囲されている。一転して形勢不利に追い込まれた長頼には、もはや籠城を決め込んで、主君長慶の援軍を待つより他に方法がなかった。幸い、この頃、京都の制圧を完全に終えていた長慶には、重臣の窮地を救うべく、出陣できるだけの余裕があった。なので彼は、自ら一万の兵を率いて丹波に入ると、その勢いで、八木城を包囲する連合軍を十月二十七日に撃破し、翌二十八日には、敗走した連合軍が立て籠もった河瀬城を包囲するに至った。

その頃、足利義輝は京都靈山に築いた城の中で、のんびりと静観の構えをとっていた。近臣と囲碁やら床机に明け暮れてみたり、趣味の剣術の特訓に励んだり、戦乱の只中にある人とは思えぬほどの暢気さで、日々を過ごしていた。

一見すると、義輝は今回の騒乱には一切興味を抱いていないようにも見える。町外れの靈山城に立て籠もっているのも、戦乱を避け、ほとぼりが醒めるのをジツと待っているかのようなのである。けれど、晴元と長慶の間で繰り広げられている飽くことなき騒乱において、稀代の陰謀家たる将軍が全く関与していないなどということはあり得なかった。これまでも三好家の打倒と將軍家の復興を至上命題に掲げ、散々策謀を弄してきた人なのである。義輝にしてみると、晴元と長慶が真っ向きって激突しているこの状況は、望みうる最高の状態であるはずだった。何しろ、晴元と長慶が互いに潰しあえば、義輝の下にはこれ以上ない漁夫の利が舞い込むことになるのだ。

実際、義輝は黒幕という形で、今回の戦乱に大きく関与していた。例えば、表面的には三好方の盟主を装いつつも、裏では細川晴元を唆し、彼の武力入京を積極的に助けていた。かと思えば、晴元軍の入京により蹴散らされた三好方の京都留守居役、小泉秀清や中路修理らを靈山城に匿ったりしている。要するに、絶大な力を握る三好家と本格的な敵対関係に陥らぬよう細心の注意を払いつつ、一方で晴元軍を支援することにより、両陣営の死闘を陰ながら演出してい

ただだった。

何はともかく、入京を果たした細川晴元は、十一月二十八日、鴨川を越えて、五条坂に押し寄せ、ついで建仁寺塔頭大竜・十如両院を炎上させるなどして、その武威を洛中全土に示していた。

晴元はというと、都に戻れたことが何よりも嬉しかったらしく、すっかり涼しくなった頭を揺らしながら、

「はっはっは。愉快愉快」

と、一人楽しそうに騒いでいた。

いつまでも長慶の思うがままにはさせない。元々、天下は自分のものだったのだ。それを横取りしたに過ぎない長慶などは、必ず自分の手で打ち滅ぼしてみせる。

江口の合戦に破れて以来、彼はずっとそう思ってきた。いつの日か、あのにっくき長慶の首を肴に酒を飲む日などを夢見ながら、屈辱に満ちた流人生活を過ごしてきたのである。そして、ようやく機会は巡ってきた。晴元は都に振り返り、配下の兵力も随分増えている。

「時は今だ」

彼は本気でそう信じている。

だが…。

晴元軍の将兵は、基本的に寄せ集めである。その大半も、武士というより盗賊や山賊崩れの男たちであり、その軍はひどく統一性に欠いていた。その上、領地らしい領地を持たない晴元には、彼らに十分な兵糧、武器、給金を支給できるだけの経済的余力などあるはずもなく、だから、彼は仕方なく京の市民に臨時の税をかけて、軍資金の調達に躍りになったのであるが、無秩序に兵力だけが増えていくと、それだけでは全く足りず、ついには統制も上手くとれなくなってきた。元が乱暴を生業とする賊徒たちであるから、ひとたび規律が乱れ、秩序が意味をなさなくなると、もはや誰の手にも負えない暴軍と化していった。彼らは次から次へと商家に押し寄せて

は金品を奪い、これと見た女子は片っ端から拉致して、快樂のままに陵辱した。暴虐の限りを尽くした、という表現がこれほど似合う軍もそうそうないだろう。そんな状況に、ついには主將たる晴元までも匙を投げてしまい、管領御所内で、家臣がとめるのも聞かず、自棄酒に明け暮れるようになった。

「これでは、三好様の御支配のほうで、数千倍マシというものではないか」

などと、晴元軍の暴虐な振る舞いをみるにつけ、人々の不信感はいよいよ急激に高まっていった。秩序や治安は大いに乱れ、盜賊は横行し、何より、それらを取り締まるべき晴元軍が盜賊の如き振る舞いに終始したので、

「かつての木沢左京亮より酷いぞ」

と言う声も、ちらほらと上がり、やがて洛中市民全員の共通した世論となつていった。

こうした世論の影響もあつたのだろう。晴元を入京させた張本人たる義輝は、手のひらを返したかのように、彼の暴虐非道な振る舞いを非難して、小泉秀清や中路修理らに晴元討伐を命じて出陣させたのである。他ならぬ“幕命”を掲げた三好軍の猛攻に、統制の乱れた晴元軍が敵うはずもなく、両軍は清水坂で激突したものの、勝敗はあつけなく決まり、細川晴元以下敗残軍は禁裏の東側一帯を焼き払った上で、丹波方面に落ち延びていった。

【絶頂編】第078章 千熊丸元服

晴元軍が撤兵した後、京には続々と三好方の精銳が集結しつつあった。そうした状況の中で、特に諸人の注目を集めたのは、河内・紀伊守護職畠山高政の動きであった。

誰もが彼は晴元方に与力して、三好家と敵対するものだとばかり考えていた。日頃三好家に不満を漏らしている高政の態度を見れば、そう考えるのが普通というものだった。しかし、いざ蓋を開けてみると、何ということもなく、彼は配下の安見直政に五千の兵を預けて送り出し、あらゆる下馬評や期待を裏切る形で、肅々と、何事もなかったかのように上洛したのである。そして十二月一日に長慶が敵かな大軍を仕立てて、威風堂々と入京したときには、

「わが主に他意はなく、以後三好筑前守様とは遊佐河内存命の折の如き友好関係を未永く維持していきたいものと申しております」などと、畠山高政の代理たる安見直政は、齒の浮いた、露骨なほど見え透いた言葉を吐きながら、長慶の前に恭しく平伏していたものだった。

晴元軍が丹波方面に撤退した後、京都及び畿内は比較的小康状態となった。畠山家も三好方への与力姿勢を明確に打ち出しているし、晴元に与力して三好家に背いた芥川孫十郎や池田長正らも、三好軍の圧倒的な力を前に全面降伏を余儀なくされていた。

長慶にすれば、ようやく一息つけるといった状態であった。ともあれ、彼は政権の安定と強勢を満天下に見せ付けられるべく、政治的な行事を盛大に執り行うことにした。その一つが、自身の嫡子たる三好千熊丸の元服であった。

「千熊も既に十歳になる。余の父が死んだとき、余は十歳だった。ゆえに、元服するにはちょうどよい機会だろう」

後見役となつている立花又右衛門と、その母代わりである雅の方

を、わざわざ京に呼びつけて、彼らに、この方針に対する意見を求めていた。

「よろしいではありませんか。千熊丸様も、日夜学問、武芸に励まれ、傳役の鼻肩目を引いても、行く末が楽しみな御聡明な若君となりました。この際、元服させて、より責任ある仕事をお与えになりますれば、御屋形様に並ぶ英君となられることは間違いありません。」

と、又右衛門は言い、雅の方も大きく頷いていた。

「そうよなあ。千熊がもつと成長して、もつと遅しくなれば、三好の栄華は、あと百年は安泰というものだ。余としても、心置きなくあれに家督を譲ることが出来るのだ。」

未だ幼さを残しながら、遅しき少年へと成長を遂げた息子のことを、あれこれと考えながら、長慶はニヤニヤと嬉しそうな、しまりのない笑みをその顔に浮かべていた。

「それはそうと、又右衛門。そなたにはどれだけ感謝したらよいやら分からぬ。わが息子を、無事にここまで育ててくれたのは、傳役たるそなたのおかげと申して過言ではあるまい。」

不意に、そんな風に長慶が切り出すと、

「は、はあ。されど、それがしとしては、御屋形様より与えられた御役目を遂行していたに過ぎませぬし、若君様と過ごす時間は何より楽しく、それがし自身、若君様に教えられることも多々ありますれば……。」

と、恥ずかしそうに頭を掻く又右衛門であった。

「はは、そなたの如き歳となっても、若に教えられることもあるのか。」

「はい。いくつになっても、人生日々是勉学にございますれば……。また歳が違いますので、考え方にもおのずと違いが生じます。私では到底思いつかぬようなことを、若君様は難なく思いつかれるのです。私の思考能力の硬さを、いちいち思い知らされる日々です。」

「なるほど。…そういえば、気づけば余も三十二になっていたが、



昔の如く柔軟な考え方はできなくなっているかもしれない」

長慶は苦笑いしつつ、改めて流れた年月の長さを、その身をもつて感じていた。既に息子は十歳となった。父が死んで、二十二年もの歳月が流れたのである。

不思議な気もするが、その間、三好家もその長さに見合うだけの成長を遂げた。父や曾祖父がなし得なかった偉業も成した。もちろん、それが自分の力だけで成し遂げられたと思うほどに、長慶も傲慢ではなかった。父祖が流した血と汗と涙が、やがて強固な土台を造り、その上に、自分は見る目麗しい家を作ったに過ぎない。彼らが土台を作ってくれたから、今の自分があるのだ。さもなければ、天下人はおろか阿波の国人領主の一人として、しがなき一生を無難に過ごしていたに違いないのである。

「又右衛門。何はともかく、そなたの功績を認めて、朝廷に奏上し、正五位下に任じてやろう。息子の小太郎が従五位下信濃守になつているのに、父親のそなたが無位無官では、外聞も悪かるう。何より、三好家世子の傳役としての威厳に欠ける」

「じゅ、正五位にございますか？」

又右衛門は大いに仰天して、長慶をまじまじと見た。真面目な顔をしている。こういうときの長慶は、嘘も冗談も言わない男だと言うことを、又右衛門や雅の方は知っていた。

「千熊丸には従四位下を奏上するつもりだから、心配するな」

そういう問題ではない、と又右衛門は思うが、ともかく思いもよらぬ栄転であった。

正五位下。

正五位といえば、有力な公家、あるいは武家の生まれでもない限りは、まずなりえない地位である。平安の昔であれば、従五位下を以って貴族と称されたというから、正五位ならばれっきとした中堅貴族であった。そんな栄位に自分になるというのか？ 元々、三好家の下級武士に過ぎなかった自分が？ いくら旧来の秩序や法則、常識が何の役にも立たない時代だからといって、こればかりはそ

う簡単に受け入れられるものではなかった。

「嫌か？ それとも正五位下では不満か？」

長慶は、戸惑う又右衛門をからかうように、そんな風に言った。

「め、滅相もありませぬ。あ、有り難く、お受けいたします」

勢いのままにそう答えてしまったが、その直後、又右衛門はそんな自分の短慮を大いに後悔した。考えてみれば、いや、考えてみるまでもなく、ここで自分が正五位下などになれば、何かと面倒なことが多い気がした。何と言っても、既に息子の小太郎範政は、従五位下信濃守になっていただけでなく、長慶の側近筆頭として、事実上三好政権の庶政を司る有力官僚に出世していた。その権勢は強大で、家中にはやつかむ声も次第に高まっていると聞く。また、息子だけでなく、他ならぬ又右衛門自身も世継ぎ傳役として、将来をほぼ約束されたも同然の身分にある。その上、娘は波多野御前失脚後、『西の丸様』として大奥を支配している長慶の寵妃であった。

もし、ここで自分が正五位下などという栄誉を賜れば、立花家に対する嫉妬の声が一拳に高まるだろう。ただでさえ、反感の声が高まってきたているのだ。それ以上の反感反発をあえて買う必要性はない。

物事には順序があり、そして限度がある。何事もやりすぎはいけない。出世することは、無論決して悪いことではない。けれど、しすぎは身を滅ぼす毒ともなりかねないのだ。出世すればするだけ、周囲の動向、感情に気を遣い、細心の注意を払いつつ行動しなければならぬ。それが厳しき戦国の世に生きる男の、鉄壁の処世術であった。

「余り喜ばぬ風であるな？」

長慶はそんな彼の心配など齒牙にもかけず、じろりと睨むように見つめてきた。なので、今更断るわけにもいかない又右衛門としては、滅相もありませぬと答えつつも、必死に笑顔を装って、主君の不興を買わぬよう努力していた。

十二月二十五日。

三好長慶は、京都屋敷において、嫡子千熊丸の元服式を盛大に執り行った。三好家配下の主だった重臣から、將軍家、畠山家、本願寺、六角家なども、祝いの使者を派すなど、三好政権の強勢ぶりを満天下に示すには十分すぎる式典となった。

自ら烏帽子親も兼ねた長慶は、この息子に対して、孫次郎慶興という名を与えた。孫次郎は、かつての長慶の通称であるし、慶興の『慶』は長慶の『慶』である。政権の後継者として相応しい存在になつてほしいという長慶の願いのこもつた堂々たる名であった。

その後、朝廷では除目があり、この新たな世子三好孫次郎慶興は、従四位下に序せられて、三好家中では、総帥たる長慶の従四位下筑前守に並ぶ高位に立った。

そのほか、三好家重臣たちもそれぞれに朝廷より官位を賜つたり、昇叙を受けたりした。全ては長慶と、その盟友たる伊勢貞孝の手筈によるものであり、立花又右衛門が正五位下に昇つたことをはじめ、様々な者たちが英爵を賜つた。その中で、ひととき目立っていたのが、三好日向守長逸であり、彼は今回の除目で、従四位下となつていた。三好一門とはいえ、宗家出身ではない彼が、三好義賢ら長慶の兄弟を差し置いて、真つ先に従四位下になつたことを誰もがいぶかしんだが、長慶に言わせれば、理由など至極単純明快であつた。というのも、

「此度の除目で、日向守様を是非従四位下に昇叙させてくださいますよっ」

そう強い口調で立花又右衛門に迫られたからだ。

「日向を従四位下にのう」

と、長慶も始めのうちは驚いていたが、最終的には又右衛門や雅の方の強い説得や、長逸のこれまでの功績も勘案した上で、長慶も長逸の従四位下昇叙を認めることにしたのだった。

又右衛門としては、この意外すぎる人事を自分の昇叙と同時に打ち出すことで、出来うる限り自分たち立花家に関心が集まるのを防

ごうとしたのだった。正五位下となった又右衛門の栄達に関心が集まれば、当然嫉妬する者も出てくるだろう。逆に関心が集まらなければ、そもそも関心がないのだから、嫉妬を抱く理由もない。自らの栄達もたらずであるうマイナス効果を最小限に食いどめんとする、彼なりの苦肉の策であった。実際、三好家の諸将や京の市民たちは、日向守長逸の従四位下叙任のことばかりに関心をもって、立花家のことなど、全く気にもしなかった。

無論、それだけが推薦の動機ではない。彼を従四位下に推したのは、立花家の強力な庇護者となっている一門衆の有力者三好長逸への恩返しという意味合いもあった。まあ、長逸とすれば、気に入らない松永弾正久秀への対抗措置として、立花家と同盟関係を結んでいるに過ぎなかったのだろうが、長慶からの寵愛以外に抛り所のない新興勢力である立花家にとっては、彼の庇護は政治的に大きな意義を持つていた。即ち、彼との密接な関係を保つことこそ、立花家の更なる繁栄を確固たるものにするたった唯一の方法なのだった。

一方、松永兄弟に対しては、今回昇叙の話はなかった。ただ、官位任官の沙汰はなくとも、決して冷遇されていたわけではない。実際、松永弾正久秀は三好家の家宰に任じられており、これによって一門衆を除けば、重臣の筆頭も同然の立場となったわけである。ただ、立花範政も家宰格に昇り、弾正の補佐及び監督役を長慶より命じられることになった。

そうして、また年が明けた。

天文二十二年（一五五三年）。

戦乱は収まる気配がない。年末年始と続いた平穩は、所詮、嵐の前の静けさに過ぎなかったわけだが、いずれにしても、強勢極まる三好政権は、もはやその程度の戦乱で動じるほどに弱弱しくはなかったのだった。

三月に入って、三好政権と足利將軍家の関係が一挙に悪化した。というのも將軍義輝に仕える奉公衆の上野民部大輔、みんぶだゆう細川刑部少輔

らが、流寓中の細川晴元に内通して、長慶暗殺を計画するという事件が発生したのである。結局、計画は実行寸前で失敗に終わり、上野民部、細川刑部ら関係者が悉く首を斬られるという形で、ひとまずは決着した。けれど、彼らの背後に足利義輝がいることは明白であり、人々も義輝が黒幕に違いないと信じていた。いわば公然の秘密というやつで、長慶以下三好家中の者たちもそうだと信じ込んでいた。

けれど…。

したたかな將軍は、自らが黒幕であるという証拠をほとんど残していなかった。唯一、彼の側近であった上野や細川が実行犯であったという点に証拠らしい証拠があると言えなくもなかったが、それとて決定的な証拠ではない。義輝が自らを無実だと主張すれば、それを否定することは誰にもできなかったのである。

人々は三好と足利の間で内乱が起きるに違いないと思った。実際、義輝もそういう事態に備えて兵を集めていたが、もとより強大な三好軍と真つ向勝負に臨んで勝てるとは思っていなかった。長慶暗殺に失敗したと分かると、すかさず伊勢貞孝を通じて長慶との友好関係強化に勤めたのだ。かくして將軍家との全面対決に備えて淀城に引いていた長慶も、將軍警護の名目で再度入京することになった。

將軍家の変節を受けて、梯子を外された形となったのが細川晴元だった。彼はわざわざ高雄に入つて兵を集めていたが、肝心の長慶暗殺が失敗に終わっただけでなく、盟主たる義輝までもが裏切ったので、形勢は一挙に不利となった。三好軍は攻勢に出て、晴元軍を散々に打ち破つたが、ここでまた、変節將軍義輝は態度を変えた。

義輝は靈山城に入つて軍備を整えると、一方的に晴元を支持し、さらに昨年末に三好家に降伏していた芥川孫十郎を扇動して再び離反させることに成功した。

「またか…」

長慶は怒ると言うより、もう苦笑いするしかなかった。義輝の変節ぶりは、汚いとか卑怯の域を超えて、もはや一つの芸術となりつつあった。かつて裏切った相手に、再び平然と擦り寄るその凶太い神経を見ていると、やはり並の男ではないと思うのだった。

かくて西と東にそれぞれ敵を持つ破目となった長慶は、それまでの優勢が一転して窮地に立たされた。ように見える。だが何度も言うが、その程度は、三好政権の強勢の前にはどうということもなく、松永弾正率いる軍勢が晴元軍を容易く蹴散らし、その後、三好軍は芥川山城を包囲して、猛攻を加えたのだった。そして八月、ついに観念したものが、芥川孫十郎は城を明け渡して降伏した。

けれど、長慶はこの際、断固たる処置に出た。妹婿だからと二度も裏切った男を許しおくほど、長慶も甘くはないのであった。

「いったんは許した長慶であるが、彼が陣中にやってくると、腹を切れ」

と、淡々と命じた。孫十郎は大いに驚き、

「約束が違う」

と、散々喚いたが、それを聞くような長慶ではない。

「そなたとて約束を破った。昨年末に降伏した折、二度と逆らわぬと散々約束した。それを、そなたは破った。そんなそなたに、余の約束違反を咎められるだけの資格があると思うのか？」

彼は相変わらず冷め切った目で、そう言つと、相変わらず不服そうな顔をして睨んでいる孫十郎の下に歩み寄り、その顔面を、思い切り蹴り飛ばした。

「妹婿だからとて、これまで寛大な処置を取ってきた余が愚かしい。妹の婿を殺さねばならぬ兄の気持ちを探すれば、そなたはこんなところに出頭する以前に腹を切っているべきだろう。それをこの命令乞いのためにわざわざ出頭して、義兄に切腹を命じさせるなど、何たる兄不幸者。本来なら、打ち首にしてやってもよいのだが、余とてそれほどに残酷ではない。武士らしく切腹させてやるのだから、

素直に従え」

ひとたび言い出すと、決して意を変えない頑固な長慶である。それに、居並ぶ三好家の諸将も、二度逆らった愚かな孫十郎を庇おうとはしなかった。そればかりか、卑怯な裏切り者の、哀れな最期を、半ば楽しんでいたりした。

孫十郎は立花範政配下の衛兵に引つ立てられて、その場を去った。長慶は腹立たしそうに、ジッと芥川山城を睨んでいたが、ともあれ妹婿であることに変わりはない。芥川孫十郎の死をもって、芥川家の罪は全て免じることにした。

とはいえ…。

領地は奪った。城も奪った。その上で、戦略的要地たる芥川山城が再び敵の手に渡らぬように、彼自身が入城すると、越水城に代わる新たな居城にする、と堂々と満天下に宣言してしまったのである。越水城には引き続き三好慶興を置いて、立花又右衛門を城代として、摂津西部支配の要としたが、三好政権の本拠地としての機能は、この日を持って失われてしまった。

【絶頂編】第079章 阿波動乱 く見性寺の変く

ところ変わってここは阿波。

天文二十二年（一五五三年）。世の中は三好一色に染まっていた。三好氏発祥の地であり三好氏の本国ともいえる阿波においても当然のようにその風潮は強まり、勝瑞城にある阿波国守護職細川持隆など、もはやあってもなくても同じような、形だけの存在と成り果てていた。

実権を握っているのは阿波守護代三好長慶の代理人、即ち同国小守護代たる三好義賢であった。彼は三好家累代の居城たる芝生城にあって阿波のみならず四国三好党全体を統括する実力者でもあった。そんな彼の下には阿波だけでなく讃岐や淡路、伊予など三好政権勢力下にある諸豪族がひっきりなしに来訪して忠誠を誓っていくが、誰も勝瑞城にちっばけな勢力を保っているに過ぎない持隆には会おうともしなかった。

日に日に阿波国主の地位を義賢に奪われつつある持隆は、当然のように不満でいっぱいだった。

「ふん。何が三好政権だ」

このところ酒の量がめつきり増えた。

不満と不安でいっぱいなのである。酒でも飲まなければこの究極的な精神状態を維持することは不可能だった。

三好家の勢威はいよいよ強大化している。彼らが支配している国をみれば一目瞭然だった。阿波だけでなく讃岐、淡路、摂津、和泉、丹波、山城の七ヶ国を一円支配しているだけでなく、伊予、播磨、近江など近隣諸国の一部も支配下に置いていた。一方の持隆には阿波一国の支配権すらないのだ。守護職などといってもそんなものは全く名ばかりで、そこに本来あったはずの権威も幕府の弱体化に伴ってこのところ急激に低下していたのだから、彼が焦るのも無理なきことであった。



細川持隆は復権の機会を狙っていた。単なるお飾り守護ではなく、阿波国の真の支配者としての守護に返り咲くべく様々な策を巡らしていたのだった。

が、上手くいかない。長慶ほどの派手さはなくとも彼に匹敵する名将にして名君たる義賢に付け入る隙など全くなく、打つ手打つ手の全てが全部失敗に終わった時、彼は本気で自らの失脚した哀れで情けなき姿を妄想するようになった。

「なんとか豊前を排除する方法はないのか！」  
怒鳴る持隆。

「されど、三好家の勢威は強大。これ以上下手な手を打てば守護様の御身に万一のことが起こりかねませぬ。何しろ今や天下では次々と守護職が守護代や国人たちにその座を追われている秩序もへつたくれもない世の中でございますから」

そんな主君を諫めるように重臣の久米義広は言ったが、持隆は不満そうに「ふん」と鼻を鳴らして、相も変らぬ仏頂面をその顔に浮かべていた。

世の中では下克上なる言葉が大流行しているようだった。何しろ將軍家の権力を管領家が奪い、管領家の権力を三好家が奪うなど、中央政界がその格好のお手本を全土に示しているようなご時世なのだ。これを見た各地の実力者たちが、ならば自分たちも！ と意を決し、本来の支配者たる守護職を追い落として自らが支配者の地位に就こうとしたとて何の不思議もない。事実、守護代や有力な国人さらには浪人出身の者が新たな支配者として唐突に歴史の表舞台に登場したという事例は数え切れぬほどに多かった。

例えば越前国。ここは元々三管領の一角として細川、畠山に並ぶ名門と称えられていた斯波氏が代々守護職を世襲していたが、応仁の乱のどさくさに紛れて重臣の朝倉氏が取って代わり、守護職を継承するようになった。初代孝景に始まり今の義景で五代目となる。既に朝倉氏は名門守護家の一つと称えられるまでになったが、元来

は下克上の先駆者に過ぎなかった。

他にも今では伊豆・相模・武蔵に勢力を広げている後北条氏、その初代として名高き早雲は、氏素性の知れない身分の出身だった。早雲自身は自らを伊勢新九郎長氏と名乗って、幕臣の名門伊勢氏の一族と称していたが、実際のところはよく分からないのが実態だった。また美濃においても今から数えて十年前に守護である土岐氏は追放され、やはり氏素性の知れない斎藤利政なる男が国主として君臨するようになった。言うまでもないことだが、この斎藤利政はあの有名な斎藤道三である。道三入道は自らの娘を尾張の実質的な国主となりおおせた織田備後守信秀の嫡男三郎信長に嫁がせるなど政治、軍事、外交で優れた手腕を見せ、美濃を天下有数の大国に押し上げた。

その織田備後守信秀にしても、元をただせば二つに分かれていた尾張守護代織田家（岩倉織田家と清洲織田家）のうち、清洲家の重臣の家に生まれたに過ぎなかった（信秀の家系を弾正忠家と言い、因幡守家、藤左衛門家と並び清洲三奉行と呼ばれた）。そこから持ち前の才腕を活かして勢力を伸ばし、今では主家である清洲織田家や岩倉織田家を凌駕し、かつ尾張守護である斯波氏すらも圧倒する勢力を手に入れて事実上の尾張国主となっていた。後に彼の息子である織田信長の代に織田家は大いに飛躍することになるが、信長時代の急成長は下剋上によって成りあがった信秀が築き上げた土台があったからこそなしたともいえた。

そのほかこうした事例は数えだしたらきりがないほどあった。越後の支配権を握った長尾氏（後の上杉）然り、播磨・備前の支配権を握った浦上氏（後に宇喜多氏に支配権を篡奪される）なども代表例であろう。毛利元就が急成長したのもこの頃のことである。元々は安芸国の国人領主の一人に過ぎなかったが、中国地方の二大強国、大内氏と尼子氏の抗争を利用して勢力を拡大し、後に大内義隆を滅ぼした陶晴賢を厳島の合戦にて撃破することにより、一挙に中国地方の覇者へと飛躍していくのである。

「大内家のこともありますれば、守護様も行動はくれぐれも慎重になされませ」

と、不安そうな顔をして言うのは久米義広である。

「大内義隆、か……」

名門守護家の棟梁でありながら、配下の守護代に裏切られて殺された大内義隆の末路を思い出し、阿波国守護細川持隆は苦りきった。それは今から数えて二年前のことだった。天文二十年（一五五一年）九月に発生した大内家の内紛事件ほど天下に大きな衝撃を与えた事件はなかつただろう。

大内家といえば、中国地方屈指の大大名としてその名を天下に轟かしているほどの名門守護家であった。周防・長門両国を地盤に、安芸や石見の一部、さらには北九州では筑前・豊前・筑後などにもその勢力を広げていた。室町幕府衰退後は日明貿易（勘合貿易）の一切を取り仕切り、そこから生み出される巨額の利益を原資として築き上げた山口は、西の京都と称えられるほどの繁栄を誇ったと言われている。大内義隆の先代である大内義興などは、かつて細川高国と結びつき、足利義植を擁立して天下の国政に大きな影響力を誇った実力者だった。出雲国の尼子氏が勢力を広げたこともあって、やむなく国許に戻ったが、以後も中国・北九州地方最強の大家家として君臨し続けていたのである。

そんな大内家の総帥たる義隆が、天文二十年九月にあっけなく滅び去った。原因は簡単に言ってしまうえば大内家内部で繰り返されてきた主導権争いが深刻化し、爆発したためである。よくありがちな話ではあるが、逆に言えばありがちな話だからこそ、天下の耳目を集めたのだともいええた。

栄華を極めた大内義隆政権も末期になると、尼子氏との戦いに敗れるなど衰退の兆しを見せつつあった。特に尼子に敗れたことで戦への関心を失った義隆の下、急激に文治主義に傾きつつあった大内家では、主導権を握る文治派と非主流派に追い込まれた武闘派の対

立が激しさを増すようになったが、これに対し、主君たる義隆はこれといった処置をとらなかつた。結局そういう彼の態度が自らの滅亡を招いたわけだから、大内家の滅亡は義隆の自業自得であると言えなくもない。それはともかく、武闘派の筆頭格として文治派と対峙してきた重臣の陶晴賢（当時は隆房といい、西国一の侍大将と称えられるほどの猛将だった）は、文弱に走る義隆に愛想をつかしてこの日ついにクーデターを起こしたのである。よもや家臣、それも家中屈指の重臣が裏切るとは夢にも思っていなかつた義隆にはなす術もなく、彼は僅かな家臣たちとともに自害したのである。

大内義隆の滅亡は下克上の代表的事件として天下に大いなる衝撃と不安を与えた。特に、配下の守護代や有力国人たちと対立している守護たちを恐怖のどん底に突き落とすには十分な効果があつたといえる。

細川持隆とて例外ではなかつた。下手をすれば、陶晴賢の如く三好義賢が蜂起するかもしれないのだ。そうならば自分は大内義隆と同じ運命を辿ることになるだろう。いや、立場的には義隆より悪いと言わねばなるまい。何しろ、少なくとも守護として大きな権力を握っていた義隆に対し、持隆には何の力もないのだつた。もしも義賢が立てば、持隆には逃げる以外に打つべき手立てがなかつた。それだけは嫌だと、持隆は困つたように溜息を吐きながら、

「なんとかせねばならぬ」

と、一人小さくぼやいていた。

天文二十二年（一五五三年）五月二十六日。

讃岐十河城より実弟の十河一存が芝生城の三好義賢の下にやってきた。とりあえず熱にかかつて倒れた義賢の見舞いという名目を掲げていたが、いつ何時義賢と持隆が激突するかもしれぬという情勢下で阿波と讃岐の実力者二人が顔を合わせたのだから、これは何かあると思つのが普通であつた。実際、阿波や讃岐の土豪たちは、誰もそんな見え透いた嘘を信じなかつた。

けれど、二人にはそんな声など全く意に介する風もなかった。あくまで病に倒れた兄を見舞うのだと、十河一存は堂々と公言し、自らが生まれ育った芝生城に入ると、着替える時間も惜しいからと砂にまみれた薄汚い服装のまま義賢の寝所に押し入った。

「大丈夫ですか、兄上」

ニタニタと笑いながら一存は律儀に布団の中で眠っている義賢の頭上にそんな声をかけた。義賢はムツとしたような顔をしてゆっくりと起き上がると、すっかり豪傑然としてきた弟を睨み付けた。

「ふん。それが生憎元気ではない。厄介な問題を背負い込んだからか頭が痛いのだ。満更仮病でもないさ」

と、義賢が言えば、一存は「ははは」と豪快に高笑いした。

「ところで間者からの知らせによれば、どうやら持隆公は密かに平島御所に足を運んでいるようですね。さては昔の栄光と我らに対する愚痴を肴に酒でもかつ食らっているのですかな。ははははは」

そう言って高笑いする一存を見て、義賢は悲しげに笑い、

「本当にそれならばよいのだがな」

と、言った。

「まあ、如何に昔の人になったとはいえ、平島公方と阿波守護が頻繁に密談しているとすると、その議題はおのずから明らか。我らとしては無視しておけません」

一存は容赦なく本題に足を踏み込み、義賢の覚悟のほどを探るかのようにその端正な顔立ちをぎろりと睨みつけた。一方の義賢は苦笑いしつつも、小さく、けれどはっきりと頷いた。

「何やら勘違いしているらしい守護殿と零落れ公方殿が結託してなにやら密かに企んでいる。ま、見え透いていて、笑いを堪えるのが必死といった状態だが……」

「はははは。ではいつそ、身の程知らずの守護殿と公方殿に己が立場を思い知らせてやるのも一興ですか。それこそ大内義隆公と同じ末路を味わわせてやれば、守護殿は自らの判断の誤りを悟りまし

ようし、義維殿とて無意味な策動は諦めましょう。……ま、守護殿  
がいくら自らの判断の誤りを悟ったところで反省する時間などあり  
ませんがね。それはともかく、都でも、相変わらず長兄に服さぬ晴  
元殿への何よりの威圧となりましょう」

そんな風に平然と言つてのけ、楽しそうに高笑いする十河一存を、  
義賢はぎろりと睨み、

「……又四郎、少し言葉が過ぎる」  
すかさずそう言つて嗜めた。

「ただそれも一つではある。又四郎、その方もそのつもりで準備だ  
けは整えてくれ。万一のとき、阿波勢だけでは手に負えんかもしれ  
ん。無論、神太郎にも加勢するよう命じるが、やはり三好家中屈指  
の精鋭である十河勢の力は必要だ」

「……承知。では兄上は既に御決意なされたのですな」

一存が確かめるように尋ねると、

「ああ。やむを得ぬ」

唇をかみしめ、辛そうにその顔を歪めながら小さく頷く義賢を見  
て、「兄上もお辛い立場ですな」と呟く一存だった。

「とにかく又四郎。そなたは即刻讃岐に戻り兵を集めよ。俺も集め  
る。……細川持隆殿は、この手で、殺す」

それは義賢の示した壮烈な決意の表れだった。それゆえに十河一  
存は驚いた。あの温和で、温厚篤実を絵に描いたような次兄義賢の  
口から主君でもあり、恩人でもある細川持隆を殺すという言葉が飛  
び出したことが未だに信じられないのである。一存としては、おそ  
らく義賢は持隆肅清に躊躇うだろうから、自らの一命を賭けても次  
兄を説得するぐらいの覚悟で芝生城まで足を運んだのである。

「されど、この一件、長兄……御屋形様は御承知か？」

一存が問うと、

「いや……」

義賢は首を振った。

「まあ、おそらく兄上は俺の考えを承知しており、半ば黙認してお

られるだろうが、俺は直接この件を兄上に告げてはおらん」

「……」

「兄上はこの一件に関わりない。世間に対してはそのように押し通す。飽くまでこの一件を首謀し、主導したのはこの俺、即ち三好豊前守義賢である。そのこと、又四郎もよく理解しておくように」

細川持隆は三好兄弟にとって紛れもない主君であり、恩人でもある。だが三好の更なる繁栄のためには彼を排除しなければならぬ。避けては通れぬ道なのだ。しかし、如何に下剋上が流行りの昨今といえども紛れもない主君を殺すとすると如何にも世間体が悪い。大内義隆を殺した陶晴賢はついにその汚名を晴らすことができずに死ぬ破目となった。持隆殺害を長慶が主導した、などと流布されれば彼の名に傷がつくことにもなりかねず、それは三好政権の安定と繁栄を考えたときすこぶる厄介である。ならば長慶に代わり自分が泥をかぶる。義賢は兄のために鬼となる覚悟を固めていた。

それを知った十河一存はごくりと唾を飲み込み、長兄と家のために泥をかぶることになる健気な次兄のためににっこりとほほ笑んだ。「次兄という立場はいろいろと大変ですな」

末弟たる一存がそう言うのと、

「俺はお前がうらやましいよ」

義賢は楽しそうに笑い、

「なあ、又四郎。俺はな、昔、誓ったのだ」

こう続けた。

「兄上のために三好家のために鬼になるのだ、とな。父上が殺され、一人孤軍奮闘なされていた兄上を見て、俺は兄上に代わって鬼にならねばならぬと思ったのだ。これまで俺は兄上より多大な恩を蒙ってきたが、しかし、その恩に報いてこれたかといえば、そうともいえぬ。……この際である。俺は鬼となり、修羅となって兄上のために戦おう。そう決めたのだ。兄上の障害となるのであれば、細川持隆であろうと足利義維であろうとも、細川晴元、足利義輝であろうと、俺は容赦なく斬るよ」

義賢の決意を知つて、一存は静かに、そしてはつきりと大きく頷いた。鬼十河と称えられている一存ですら、今の義賢は真正正銘の鬼であるように見えた。それぐらい断固たる決意と覚悟で持隆肅清に臨むつもりなのだろう。温和で、律儀な、冷静沈着ながらも、その聡明さゆえに悩んだりすることが多い次兄のことだ。修羅の衣装を身にまとい、心を鬼で固めながら、その中に深刻な後悔を蓄えねば良いがと一存は一人思つたりした。

六月に入った頃、一存は本国たる讃岐十河城に帰つていった。

けれど義賢の作戦は既に始まつていた。十河一存が帰国したのも、いざと言つときに備えて軍備を整えるためであつた。また、義賢の使者は、淡路洲本城に赴き、彼の命を城主たる安宅冬康に伝えていた。

「そうか。義賢兄者は、ついに決断なされたか」

冬康はそう呟くのみで、それ以上は何も言わなかつた。彼としては、それなりの恩がある持隆の肅清には、余り乗り気ではなかつたが、このところ三好家への反発姿勢を強めている持隆を、放置しておくこともできないとは思つていた。

何より、四国三好党の総大将たる次兄義賢が決断したのである。冬康としては、その意に従うほかはない。だから彼は、早速配下の淡路水軍衆に動員令を発し、瀬戸内海の警護を固めるよう命じた。いざというとき、持隆を海路から逃がさぬための手配であつた。

そして……。

六月十七日。

細川持隆が先祖の法要も兼ねて、勝瑞城に程近い見性寺に入ったのを知ると、三好義賢は早速行動を開始した。

既に、義賢の下には五千の阿波勢が集結していた。さらに、讃岐からは十河一存率いる三千の精銳が南下している。形の上では、伊予への出陣のための軍備だとしているが、阿波の諸豪族たちは、い



よいよ義賢が持隆肅清を決意したのだと、大いに驚き、どよめいていた。

そうとも知らぬ哀れな持隆は、既に彼らの動きを調べるだけの謀報能力すら失っていたのである。哀れといえ、これほどの哀れもない。さもなくば、阿波全土が殺伐とした雰囲気に包まれる中、暢気に見性寺などに赴いてはいないだろう。

義賢軍が見性寺を包囲したのは、十七日の午後のことであった。「如何いたしますか？」

重臣の篠原長房は、重苦しい顔をして床机の上に座っている義賢に、決断を仰いできた。

「…包囲は完了したのか？」

おもむろに義賢が尋ねると、

「ありの子一匹這い出る隙間もありません」

長房ははつきりとした口調で、そう答えた。

「そうか」

義賢も、ようやく観念した。鬼になる。とはいっても、案外楽なものではないと、彼は心の中で自嘲した。

陶晴賢は、主君義隆を殺したことで、悪臣、奸臣の汚名を一身に背負った。逆賊だと散々蔑まれている。自分もそうなるのだろう。そう思うと、義賢の心は大きく揺れ動いた。

思い切り、首を回して、空を睨んだまま、一瞬静止した。青々と広がる夏の空を眺めながら、彼は何を思ったのだろう。一瞬の静止を経て、彼は篠原長房をぎろりと睨み付けた。

「やれ」

たった二言。されど、二言。

この主従にはそれで十分だった。長房は何も言わずに去り、全軍に対して突撃を命じた。

ほら貝の音が、ボオオオと、けたたましく鳴り響く。

義賢は何もしない。床机の上に腰を下ろしたまま、少しも動かなかった。

持隆は、本堂にあつて、全てを観念していた。

三好軍が怒涛の勢いで迫る。味方はいない。

たった一人、薄暗き本堂で、和やかな目をしている仏像をぼんやりと眺めていた。

殺されるのだ。死ぬのだ。

なんとも不思議な気分である。

「それにしても、千熊丸がわしの下に命乞いにきたのは、もう二十一年も昔の話になるんだな。世の中も、変われば変わるものだ」

あの折、いつそ殺しておけばよかつたと、今更になつて後悔している持隆であつた。ただ、何を言つても後の祭り。後悔は先にたたぬものだった。

これが宿命だったのだろう。

全てを観念して、持隆は脇差を取り出した。

篠原長房率いる三好勢が本堂に入ったとき、既に持隆は、たった一人、空しく息絶えていた。

長房にしても、後味の悪い粛清劇ではある。ただ、持隆の挙動を考えれば、やむを得ぬことでもあつた。

「成仏なされよ」

と、手を合わせて祈りながら、配下たちに、その遺骸を丁重に葬るよう命じた。

持隆の死を本陣にいる義賢に伝えると、

「そつか」

と、彼は淡々と答えるだけだった。けれど、その奥底に宿る悲しみの焔を察して、長房は軽く頭を下げると、逃げるようにその場を立ち去つた。

その後…。

持隆の粛清に激怒した阿波国内の反三好党、即ち久米義広や佐野

丹波ら、持隆の重臣だった豪族たちが反旗を翻したが、義賢軍やその援軍として到着した十河一存軍の猛攻を受けては、勝ち目などあるはずもなかった。

世に、鎗場の義戦と称される合戦に勝利した三好軍は、勝瑞城に入って、阿波の完全掌握を宣言した。一方、敗北した久米義広や佐野丹波らは、海を渡って畿内に落ち延びようとしたが、安宅冬康配下の水軍に捕捉され、安宅勢により殺されている。

勝瑞城に入った義賢は、そこで持隆の遺児である細川六郎真之を跡目とし、阿波守護職に擁立した。長慶もこの行為を全面的に追認し、將軍義輝に奏上し、真之の守護就任を認めさせた。けれど、当時十二歳の真之に政治ができるはずもなく、結局、義賢が後見役として勝瑞城に居座り、かつ真之の母にして持隆の正室だった小少将の方を自らの妻に迎えると、守護家そのものを完全に乗っ取ってしまった。

三好豊前守義賢は、今や阿波国内においては並ぶ者なき絶大な権勢を誇るようになっていた。細川持隆を滅ぼしてからというもの、それだけの力を、この男はその小さき手の中に握るようになっていたわけである。無論、形の上では阿波守護、勝瑞城主である細川真之を主君と仰いでいるが、彼には何の力もなく、義賢が事実上の阿波守護、勝瑞城主となって、阿波一国のみならず、讃岐、淡路にも君臨していた。

長慶は、彼のこの功績を称えて従四位下へと昇叙させた。かくして従四位下豊前守となった義賢は、四国内において今まで以上の強勢を誇るようになり、四国、特に阿波・讃岐・淡路三国と伊予東部に属する諸豪族は、挙って義賢の下に伺候しては、これまで以上の忠誠を誓っていった。

「此度、従四位下となられましたこと、誠にお喜び申し上げます」と、口を開けば、決まりきったお世辞を吐いて、型通りに頭を下げる諸侯を見下ろしながら、義賢はうんざりとしたように、「はあ」と、幾たびも溜息を吐いていた。

「ま、今や殿は名実共に四国の王となられたわけですし、御家の中でも、御屋形様に次ぐ御立場になられたわけですから、無理もありませんぬ」

と、篠原長房は言うのだが、そんなつもりは一切ない義賢にしてみると、ただ苦笑いするしかなかった。

四国の総大将とか、三好の副総帥とか、義賢の呼称は目まぐるしく変わっていったが、そのどれも、この至って平凡な英雄にはしつくりとこないのだった。

何はともかく、細川持隆を滅ぼした後の三好義賢は、誰が何と言

おうと、四国最強の権力者になっていた。三好家中にも様々な実力者が犇んでいるが、三ヶ国もの広大な領土を、たった一人で束ねているほどの部将はいない。官位においては、長慶や慶興だけでなく、三好日向守長逸と同格であるが、誰も彼と長逸が同格であるとは思わなかった。今や彼は誰からも、兄であり、かつ三好家総帥である長慶に次ぐ地位に立ったと見られていた。

けれど、肝心の義賢にはそんなつもりは一切ないのである。元々政治は好きだが、権力への執着はそれほどないこの男にとって、権力を得たことより、主君である持隆を殺したことの罪悪感のほうが遥かに強かった。

それはともかく、義賢は小少将の方に一目惚れしていた。彼女は持隆が迎えた後妻で、十二歳になる真之の母ではあるが、まだ三十九路前と若く、かつ四国屈指の美貌の持ち主とかねて評判の人だったから、義賢が一目ぼれしたのも無理なきことであった。

義賢と小少将が出会ったのは、鎗場の義戦に勝利して、勝瑞城に乗り込んだ折のことだった。無論、初めての出会いではない。ただ、立場が限りなく対等に近くなった状態で会ったのは、当然、これが初めてのことであった。

義賢が勝瑞城の奥御殿に乗り込んだとき、小少将は、今まさに死なんとしている直前であった。

夫が死に、阿波細川家は滅び去ったのである。ならば、妻である自分も死ぬべきなのだろうと思っていた。実際、持隆の側室や彼に仕えていた女官たちの一部は、この世を儚んで、次から次に首を掻き切って死んでいた。そんな彼女たちは、揃って、

「敵の慰み者になるぐらいなら、死んだほうがマシです」

と、悲鳴のように叫んでいたが、正室でありながら、一人冷静を

保っていた小少将は、ずっと困ったように迷っていた。

夫とはいえ、細川持隆のために死ぬほどの義理など持ち合わせていないし、それほど恩を受けた記憶もない。阿波の名家に生まれ、かつその美貌を見込まれて、勝手に正室とされたが、それは持隆や親たちの勝手な都合であり、彼女自身の気持ちなどなら反映されてはいないのである。持隆とはかれこれ夫婦生活を十数年続けていくわけだが、最近は何の側室たちにつつつを抜かして、自分など一切省みてはくれなかった。そんな夫のために、なぜ死なねばならないのか…。

夫との夫婦生活で、唯一良かったと思えることは、息子の真之を儲けたことぐらいであったが、その真之さえも彼女の下から取り上げられてしまったので、ここ数年は同じ屋根の下に暮らしながら、小少将は一度もわが子を見たことがなかった。

敵の慰み者になるぐらいなら…。と、皆は言ったが、これまで散々持隆の慰み者になってきた彼女にしてみると、そんなことは別段大した問題ではないような気がした。とはいえ、皆が死んでいく様を見ていくと、やはり死なねばならないのかとも思うのである。

だから彼女は、家臣たちが手渡した短刀をぎゅっと握り締めて、その鋭き刃先を白き首筋にちょこんと当てた。

ちくりと痛い。その瞬間、刃先を伝って、朱色が柔肌に一つの線を描いた。

死んだらどうなるのだろう。ふと、そんなことを思った。側には、数人の側室たちが、息もせず、ただの骸となって転がっている。自分もこうなるのだと思うと、途端に恐怖がこみ上げてきた。

「やめなされ」

そこに、唐突に、そんな優しき温和な声が響き渡った。

小少将は思わずぎよっと振り返る。幾人かの武者が、その凄惨な地獄以上の惨劇を目の当たりにして、どれも啞然としたように絶句していた。

「あなたは…」

聞かずとも、見れば一目瞭然だったが、聞かずにはいられない。三好家が代々受け継ぐ伝統的な陣羽織に身を包んだ、立派な武将の姿がそこにあつた。

「三好豊前守義賢でござる」

と言つて、その男は深々と頭を下げた。

三好豊前守義賢。

と言えば、彼女にとっては憎むべき仇敵のはずだったが、なぜだか、それほど怒りも憎しみも抱かなかつた。夫といったところで、持隆への思いがそれほどでもなかつたからなのか、それとも、夫を殺した典型的な戦国武将とは思ひもよらない凜々しい顔立ちに、純粹に“女”として惹かれたからなのかは分からなかつたが、とにかく、彼女は自分でも不思議なほど、この豊前守義賢という人に興味を持っていた。

「細川讃岐守様が御内室、小少将の方とお見受けする。…死にたくば、我らとしてはお止めする権利はない。だが、個人的な考えを言わせてもらえるなら、今更、無意味に血を流す必要もあるまい。我らとしては、天下に混迷をもたらす持隆公を、やむにやまれず討ち取つたが、細川家への忠義を忘れたことはなく、真之様を持つて新たな守護職とするつもりでございます。とはいえ、真之様は今なお若く、多事多難な国政を司るにあたっては、母君の支えも必要となりましょう」

「…六郎殿の支えに…」

小少将はその瞬間、力なく肩を落として、がっくりと頂垂れた。握っていた短刀は、手元を離れて、畳の上に突き刺さつたまま動かなくなつた。

「死ぬのは容易い。されど、生きなさい。六郎真之様の御為にも、生きなされ」

持隆を滅ぼした自分がそんなことを言える義理ではないのかも知れない。そんなことは重々承知している。けれど言わずにはいられない。一言で言えば、義賢は一目惚れしていた。彼女が、自分が殺

した男の妻であつたことを思えば、それが容易くは許されぬ恋であることを、彼もよくわかつていた。けれど惚れてしまったものは仕方がないではないか……。などと思ひながら、彼はゆっくりと小少将の下に歩み寄り、すつとその手を差し出した。

義賢が小少将を妻に迎えたのは、それからすぐ後のことであつた。当初はそこまでする気はなかつた。夫を殺した男としての引け目が、彼の腰を重くしていた。好きなのだが、好きとはいえない。女を奪うために主君を殺したのだ、などと言われては、義賢だけでなく、三好家の名をも傷つけることになりかねないのである。

けれど、彼も今年で二十六歳になるのである。女というものにも当然興味はある。彼もいっぱしの権力者であるから、これまで幾人かの女子と関係を持ったが、小少将ほどの女子は初めてだつた。四国屈指の美貌を誇り、一児の母とは思えぬほどの若さを、今なお保っている。聞けば、歳は二十八という。年齢的にも大差はない。義賢はいつの間にか彼女に夢中になり、彼女は彼女で、生きるために息子を守るために、この権力者と関係を持ったほうが得策であると考えようになつた。

義賢と小少将が正式に婚姻を交わしたのは、六月末のことである。三好家と細川家の和解を象徴するものだとして、結婚そのものは好意的に評価されていたが、中には、殺した男の妻を略奪したも同然の義賢の所業を非難する声も、ないわけではなかつた。

ともかく、結婚式は勝瑞城において、盛大に執り行われた。阿波、讃岐、淡路など、義賢の管轄下にある諸豪族が次々と参列した。義賢の権勢だけでなく、三好家の力の程を見せ付けるには十分すぎるもので、さらに義賢は、勝瑞城に一万もの大軍を集め、安宅冬康配下の水軍衆を阿波沿岸部分に集結させるなど、圧倒的な武威を四国中に示していた。

「いよいよ、兄上も結婚だなあ」



と、十河一存などは嬉しそうに高笑いしていた。そんな彼も、気づけば二十歳を超えている。既に妻もいれば、側室だっているのである。去年生まれたばかりとはいえ、熊王丸（後の三好義継）というれっきとした嫡男もいるわけで、そういう点においては、次兄より遙かに進んでいる一存であった。

「ふん。これでようやく、お前らに女子のこととやかかく言われんでもすむな」

義賢は恥ずかしそうに顔を赤らめながら、そんな風に呟いていたが、

「後は早く世継ぎを儲けねばなりません…。何と言っても、兄上は三好家の柱石にございますれば、世継ぎの一人や二人もたねば、三好の行く末にもかかわりまする」

などと、そんな初な兄を茶化すように、クスクスと、楽しそうに笑っている安宅冬康であった。

その夜のこと。

「よいのか。わしの妻などになつて…」

義賢は、かねて聞きたかつた疑問を、この際だからと、思い切つてぶつけてみた。

彼には負い目がある。彼女の夫である持隆を殺したのは、他ならぬ義賢なのである。そのことについて、彼女は何と知っているのだろう。持隆の一件は、言ってみれば二人にとつて、踏み込んでならぬ聖域のようなもので、義賢もこれまでずっと自重してきたのだが、結婚という一つの門出を迎え、記念すべき初めての夜に挑むにあたって、彼の中で急激に膨れ上がる疑問は、もはや口にして表現せずにはいられなくなった。

「よいのです」

小少将は悲しそうに目を背けると、それ以上は何も言わなかった。彼女は既に、真之を守るために仕方のないことだと割り切っている。

そのためなら義賢に春を売ることくらい、なんとも思っではないのだった。

そんな彼女を見て、義賢はただ苦笑いした。所詮、自分は夫を殺した男に過ぎない。それでも好いてしまった以上は仕方ないではないか。などと開き直りつつ、彼は思い切り強引に、小少将の方を押し倒して、獣の如く、荒々しくその服を脱がしていった。

【絶頂編】第081章 絶頂の始まり

天文二十二年（一五五三年）も十二月になってみると、三好政権というものは、信じられないほどに強大化していた。

六月には細川持隆が滅び去って、かねてからの懸案であった阿波国は、今や完璧に三好家の領国になった。既に細川晴元を追放して幕政の実権を握った三好長慶にとっては、これにより、完全に主家としての細川を凌駕し、下克上を完了させたことになる。

持隆に取って代わった三好義賢の結婚も決まった。持隆の妻たる小少将の方だと知ったときは、長慶も少々意外ではあったが、それが義賢の気持ちならば、あえて反対する気はなかったし、彼女と結婚することにより、新たな阿波細川家当主細川真之の義父という立場を得られるのだから、三好家の阿波支配強化には得策だろうと、長慶は長慶なりに、結婚を歓迎するつもりだった。

八月になると、芥川山城に立てこもっていた芥川孫十郎も滅び去り、京と越水を繋ぐ最重要戦略拠点である芥川山城を確保することにも成功した。長慶はここを固めるため、居城を越水から移し、九月ごろから、三好政権の強大を示すための大規模な大増築を敢行した。

そのほか、八月ごろから再び蠢動し始めた將軍足利義輝や前管領細川晴元を撃破して都から追放しているし、彼らに随行していた有力幕臣や公家たちを恫喝することで、彼らも完全な支配下に置いた。何より、獅子身中の虫であった將軍が朽木谷に落ち延びていったことは、京都情勢の安定には欠かすことの出来ない決定的な要因となり、以後都は、三好政権の絶対的な軍事力を前提とした大いなる平和を謳歌することになった。後残すは、相変わらず騒乱打ち続く丹波であったが、これとていざれ三好方の勝利に終わるだろう。

三好政権の強大、安定に、もはや死角はなかった。文字通りの順風満帆ぶり、三好長慶は天下に君臨していた。

「まさに、わが世の春とはこのことだな」

芥川山城から見下ろす景色を、まじまじと眺めながら、長慶はぼんやりと呟いていた。

眼下では、相変わらず無数の人夫たちが、普請作業に従事すべく、必死に働いている。その数はおよそ三万という。三好家支配下の領国からかき集められた男たちは、皆、少しでも多くの銭を稼がんと懸命になっていた。

「給金については、きちんと支払っておろうな」

ふと、そんなことが気にかかる。長慶としては、三好政権の偉大さを示すための普請なのだから、少なくとも、自分がケチであるとは思われたくなかった。だから人夫たちに支払う給金の額は、相場 of 常識を遥かに超越していたし、かつ一日二食確実に支給するなど、普通の普請では考えられぬほどの厚待遇を約束していた。嘘つきだとも思われたくはない。長慶は必死に働く人夫たちの健気な姿を眺めながら、その労力にどうやって報いてやろうかと、そればかり考えていた。

「無論、完全支給しております。財政面については少々厳しいものもありますが、我らの天下が固まったと見た堺の豪商たちが挙って献金してきますので、とりあえず、何とかありませんよう」

と、家宰の松永弾正久秀は言うのであった。

「ならばよい。ただ、豪商たちの御用金に頼る財政というのも、少しばかり危うかるう。我らも勘合貿易など再開してみたら、莫大な金が手に入るかもしれん」

長慶は、いろいろなことを考えている。政権の主催者としては、あらゆる可能性に手を伸ばして、如何に政権を強め、民を富ますかということを考えなければならないのだ。

「勘合貿易にございますか。それも一興ではございますが、明国は大内家のみを貿易相手と定めておりましたので、容易く事が運びま

しょうか。その大内も、今や滅びておりますし……」

と、弾正は言つて疑義を示したが、

「しかし大内が貿易を独占する以前は、細川と大内の両家が貿易の実権を握っていたはず。細川氏綱殿名義にすれば、明国側も貿易を認めるのではないか」

長慶はなおも諦めきれぬといった様子で、しつこく尋ねてきた。

ただ、松永弾正にしても、貿易というのは一つの手であると思つていた。堺の町衆があればほどの財力を手に入れたのは、堺という優良な貿易港を基盤に、海外貿易を一手に握っているからである。海外のものを仕入れて国内で売り、あるいは国内のものを海外に売り飛ばす、といった極めて単純な取引であるが、そこから上がる利益は莫大で、堺や博多といった有力貿易港の商人たちは、どれも、下手な大名家など遙かに上回る財力を誇つていたのだった。

「ただ明国とか、朝鮮とか、そうした国との貿易では、利益も限られましょう。もしも御屋形様が海外交易をお望みなら、南蛮の国々と交易することも考えてみては如何ですか？」

「南蛮？」

「はい。実際、かの国のもつ技術力は凄まじいものがあります。火縄銃にしても、元々は南蛮より渡来しもの。彼らと交易すれば、利益が上がるだけでなく、様々な知識を習得することも出来ましょう。それは即ち、御家の更なる発展につながります」

「…なるほどのう」

かつて、フランシスコ・ザビエルなる南蛮人と会見したこともある長慶は、あの青い目をした大柄な男の異様な姿を思い出しながら、おもむろに、パンと手を叩いた。

「ともかく、弾正。その方にこのことは任せよう。貿易のこと上手く取り計らい、より多額の利益を上げられたなら、お主のかねての望みであった大和平定のこと、前向きに考えてやるう。…何はともかく、今は金が物入りだ。丹波のこともあるし、大和を攻めるにしても、国内の整備を固めるにしてもだ」

などと長慶が言えば、弾正久秀は嬉しそうに、その皺くちな顔を小汚く歪めて、

「御意」

と、つとめて平静な顔をして、恭しく頭を下げた。

一通り仕事を終えて、くたくたになつた挙句、大奥に引つ込んだ長慶は、相変わらず急ピッチで工事の続く奥御殿の一角で、雅の方と、とりとめもない雑談に花を咲かせていた。

「すまん。いくら急かしてみても、普請というものは容易く終わるものではないのだ」

と言つて、ところどころつぎはぎだらけの壁を眺めながら、長慶は「ははは」と苦笑いした。

「別に構いませんよ。…貧しかった頃を思い出せば、天国のようなものでございますから」

雅の方はクスクスと、にこやかに微笑んだ。

「そうか。…ま、何はともかく、今日は眠い。膝を貸せ」

長慶はすっかり冷たくなつた冬風をその肌に味わいながら、ごろりと寝転がると、雅の方の上で、落ち着ききつたような顔をして目を閉じるのだった。そんなときの彼は、実に子供らしい無邪気な顔をするので、雅の方の密かなお気に入りであつたりした。

少なくとも、こんな青年が天下を背負っているのかと思うと、彼女は不思議な気がした。実際、自分とはたつた一つしか違わないはずである。自分が三十歳であるから、彼は三十一になるのだらう。

およそ、天下人とは思えぬ寝顔を眺めながら、時折それが無性に愛おしく感じられるのだった。この顔は、この姿は、自分だけのものだ。誰のものでもない。いつの頃からか生まれた果てしない独占欲は、彼女自身驚きだったが、実際、ここ相次いだ暗殺未遂事件などを経て、すっかり用心深くなつた三好筑前守長慶という人が、何の警戒もせず接してくれるのは、兄弟を除けば自分だけなのである。

遊佐家から入ってきた御台所でも、このところ彼が寵愛している若い側室たちでもない。

奥の支配者として、今やすっかり貫禄のついてきた雅の方は、ふと、女性としての自分の存在に思いを馳せた。もう三十。されど、まだ三十ともいえる。子供だつて、まだ産める。彼女も長慶との間に一女を儲けた身だが、やはり、男子がほしい。独占欲を補完し、彼との関係を未来永劫に渡つて完璧なものとするためには、男子が欲しかった。無論、孫次郎慶興も可愛い。父又右衛門が傅役となつている関係上、彼女が事実上母代わりを務めてきたこともあり、わが子の如く可愛がつてきた。けれど、やはり彼は、自分の腹から生まれた子ではない。

そんな風に、いろいろと考えていると、やがて長慶も目を覚ました。どれほど時間がたつたのだらう。相変わらず外は暗いので、いまいちよく分からなかった。

「雅、孫次郎はどうしている？」

眠い目をこすりながら、越水においてきた最愛の息子のことの思いを馳せる。父親らしい顔をして、嬉しそうに尋ねる長慶の顔に、少しばかり嫉妬しつつ、

「父上からは、健やかにお育ちとのこと。越水城代の任も見事にお勤めになり、最近では、孫次郎様御自ら、御家来衆を指示して政治を行うこともしばしばとか」

と、言った。

「そうか。やはり、わが息子よな。俺も、十歳の頃から現役だったが、あれも気づけば既に十を超えた。それくらいな行動力を身に付けてもらわねば、三好の跡取りとして相応しくないからなあ」

「左様にございますね」

慶興は聡明だと思う。雅の方も、それは認める。幼いながらに武芸に秀で、学問に長じ、さらに優しさの中に厳しさも併せ持つ見事な性格をしていて、家臣からの信望はすこぶる厚い。三好の血筋に凡君なしと、昨今よく称えられているが、まさにそうだと思うので

ある。もしも何事も無く孫次郎慶興が成長すれば、三好家は少なくとも慶興の代までは安泰だろうと、雅の方は確信していた。

「あ、そうです。最近、兄上などが、時折大和攻めのことを話したりしておりますが、また、戦にでもなるのですか？」

雅の方は思い出したように、突然不安げな顔で、そう呟いた。

「…小太郎の奴、そんなことをぬけぬけと公言しているのか？」

大和攻めは、秘中の秘である。三好政権の最高機密なのだ。ゆえに長慶の顔は朱に染まり、不快そうな仏頂面になった。

「いえ、私が聞きだしたので、兄上に他意はありません。」

「聞き出した？」

「は、はい。せっかく世の中平和になりましたのに、また戦などになれば、人々はさらに苦しむことになる。それは嫌だと、女子心に思っただまでにございます。」

「…ふーん」

そういうことならよかろうと、とりあえず不問に処すつもりで、長慶は彼女から目をそらした。

「ま、お主には打ち明けてもよかろうが、大和には攻め入る。いずれな」

「…そうですか」

理由は聞かない。聞かずとも分かっている。雅の方とて馬鹿ではない。戦が嫌いで通るような、生易しい世の中でないことも分かっている。三好政権をさらに強大化、安定化させるには、畿内のご真ん中であつて、古来より大国と名高き大和国の掌握は欠かせないのである。

「大和攻めは、弾正に任せるつもりでいるが…」

と、おもむろに長慶が言つと、

「弾正様、ですか…」

余り気乗りしないような顔をして、悲しそうに俯く雅の方であつた。

「お主は弾正の起用に不満か？」



「…い、いえ、そういうわけではありませんね」

女子が政治に口を挟むものではない。そう教えられ、そうあるべきものだと思ひ込んで、今まで生きてきた雅の方だから、長慶に問われても、ただ恐縮そうに畏まるだけだった。

「そういえば、小太郎の奴も自分が大和攻めをしたいと、しきりに申しておったな。…ほほう。弾正よりは、兄を起用してもらいたいのか？」

長慶は面白おかしく、楽しそうに雅の方の反応を試していたが、彼女は彼女で、この瞬間、何やら決意したかのように、きっぱりとした顔つきで、

「私の個人的感情を言わせてもらえるなら、弾正様よりは兄上が適任かと思われます」

と、言った。

「ほお。では、何故だ？」

彼はどこまでも面白がっている。ただ、笑ってはいるが、その目はどこまでも真剣だった。

「兄だからです。というのも、一つの理由です」

「…兄だから？ はっはっは。相変わらず正直な女子じゃ」

長慶は手を叩いて笑い、愉快そうに腹を抱えた。

「ただ、そればかりではありませんせぬ。女子が政治に口を挟むなど仰せなら、それまでにございますが、それを覚悟であえて申し上げますれば、弾正様は少しばかり危険でございます」

「危険？」

「はい。何しろ、弾正様はかつて木沢長政に仕えていながら、あつけなく寝返つて、その木沢を容赦なく討ち取りました。無論、その後の忠誠心を疑うわけではありませんが…。ただ、信用しすぎるのはどうかと思われます。また弟であらせられる内藤備前守様が丹波を持ち、弾正様が大和を持てば、その勢力は凄まじく強大化するこ  
とになりますよう」

讒言しているようで、彼女としては気が進まなかつたが、思い切

って思いの丈をぶつけてみたのである。言ってみると、案外気持ちのよいものであった。

長慶は、しばらくじっと考え込んでいるようであった。実際、似たような台詞は、実弟の十河一存やら、一門の重鎮たる三好長逸をはじめ、様々な重臣から聞かされ続けていた彼なのである。ただ、彼がこの世で誰より信頼する女子の口から聞かされたということが、彼には衝撃らしかった。

「ま、これについてはまた考えてみることにしよう。ともあれ、今宵は政治の話は抜きとしよう。ともかく、酒だ。あれだけ美しき星空を見ながら、酒も飲まずにいては惜しい。今宵は月見酒じゃ。酒を持って！」

と、彼は話題をそらすように苦笑いしながら、慌しく庭先のほうへと走って行って、そこで、再びごろりと寝転がった。

【絶頂編】第082章 丹波騒乱

その頃、丹波では…。

畿内は三好政権によりおおよそ統一されて、安定の兆しも見えてきた。殺伐とした戦乱も、ひとまず収束しつつある。

けれど、丹波のみは違った。相変わらず、細川晴元方に属する勢力、とりわけ波多野晴通を筆頭とする反三好勢力が盛んで、守護代たる内藤長頼軍による武力統一を阻んでいた。

九月に入った頃、長慶は松永弾正を総大将とする一万の援軍を差し向け、長頼率いる内藤軍七千と合わせた総勢一万七千の大軍で、波多野の本拠たる八上城を取り囲んだ。ただ、天然の要害と名高き堅城八上は、三好の大軍をもつてしても容易く落ちるものではなく、拳句、同月十八日になって、晴元方の有力部将である三好政勝や香西元成らが、八上を救うべく三好軍の背後に迫ってきたので、一転して窮地にたつた。しかも、三好政勝らは、内藤家の本城たる八木城を取り囲んで、これを攻め落としている。

「な、なにい？」

思いもよらぬ報告に、長頼は思わず采配をぼとりと落とした。

「や、八木城が落ちたと？」

堅城と名高き自分の城が、確かに留守居の兵はそれほど配置してはいなかったが、けれど、こうもあつけなく落ちるとは夢にも思っていなかった長頼は、信じられぬといった顔で、がっくりと腰を落としていた。

いや、長頼の衝撃は、何も八木城が陥落したことのみにあつたわけではない。

「気にするな。所詮、義父だ」

と、兄たる弾正久秀は言っていたが、長頼はそんな言葉も耳に入らぬほど、放心状態で、その場に立ち尽くしていた。

八木城陥落に伴い、城の守備を司っていた内藤国貞は自決したという。妻や子は国貞の配慮により、予め脱出していたために助かったというが、国貞と家臣数名は、内藤の武名を守るべく、薄暗き一室に閉じこもって、見事に腹を切り裂いたのだという。

「父上が、し、死んだと…」

国貞とは、和解して以来誠の親子の如く付き合ってきた長頼なのである。受けた衝撃は果てしなく大きく、彼はその場に昏倒して、二日三晩は物言えぬほどの人事不省状態に陥ってしまった。

弾正久秀は、そんな弟の様に呆れつつも、ともかく、兄として内藤軍を含めた全三好一万七千を指揮下に置くと、  
「とりあえず、八上からは兵を引く」  
と、下令した。

弾正久秀にも意地はある。

国貞の死などに、彼は何の感慨も抱いてはいない。味方の一人が死んだくらいにしかなんて思っていないのである。

だが…。

長慶より援軍の大任を任されているながら、守るべき八木城を敵方に奪われたと言つのは、何よりの屈辱であった。このまま捨て置いては、沽券に関わると、

「断じて奪い返さねば」

と、思っていた。

一方、弟の長頼は、人事不省状態から復活すると、亡父の恨みを晴らすべく、復讐の鬼となって、八木城奪還を目指していた。

ともあれ、双方いろいろ考え方は違うが、八木城を攻め落として、敵を倒すと言う共通の目的の下、兄弟は一致団結した。弾正久秀が総大将として八木奪還を下令すると、長頼も副将として、全軍を叱咤激励していた。

かくして、八上城を離れた三好軍は九月二十四日、八木城に殺到して、立て籠もる三好政勝ら晴元残党軍を追い散らして、これを奪

回することに成功したのだった。

以後、丹波情勢はにらみ合いが続いた。

八木の内藤長頼、八上の波多野晴通。

何かにつけて忙しない松永弾正は、丹波にばかり留まっているわけにもいかず、十月も半ばを越えると、膠着した丹波情勢に見切りを付けて都に戻り、以後しばらくの間、家宰として三好政権の実務を取り仕切っていた。

やがて天文二十三年（一五五四年）を迎えた。

弾正は長慶から命じられた堺奉行の任を遂行すべく、年始からしばらくの間は、ずっと堺にいた。町衆を指揮して、町並みを整備し、港も大幅に増築した。これまで無秩序に広がっていた堺の町も、弾正の下で急速に調えられて、経済の都と呼ぶに相応しき壮大な貿易都市へと変貌を遂げていった。

けれど、弾正が堺にあつて、その街づくりに全力を注いでいられたのは、三月までのことだった。四月に入ると、再び丹波情勢が深刻化したのである。彼は長慶の命により京に舞い戻ると、

「よいか。此度の戦は、余の威信のかかった戦となる。そなたは滝山の兵（弾正久秀は摂津滝山城主）を率いて、先陣として丹波へ向かえ。その後、余が後詰として丹波に入るであろう」

と、言った。

「御屋形様直々に出向かれるのですか？」

弾正は驚ききつたような顔で尋ね、長慶は子供のような無邪気な笑みを浮かべると、

「無論だ」

と、頷いた。

松永弾正率いる三千の滝山軍が丹波に北上すると、それからしばらくして、三好長慶自ら率いる四万の三好軍も都を発した。

こうなると、もはや勝負云々の問題ではない。

三好軍は無人の野を行くが如く、向かうところ敵なしの勢いで、丹波国内の反三好党を叩き潰していった。また弾正久秀も、大いに活躍して、三好右衛門大夫政勝の軍と戦い、これを破っている。

長慶自身は、物見遊山的な気分のまま、丹波に入ると、悠悠と八木城に入城した。何しろ、四万である。松永弾正の先手三千や、内藤長頼の七千を加えると、総勢五万になる。まさに無敵である。天下広しといえども、この時代、五万単位の兵力を動員できる大名家など、そうざらにあるものではない。しかも、長慶は今回の軍編成で、実弟義賢の指揮下にある四国軍は一切動員していないのである。即ち、全力でもないのに、これほどの大軍を一つの戦線に投入しえたというわけで、それだけをみても、三好政権が如何に強大であるかということ、誰の目にも明らかだった。

「御屋形様、これまでの不首尾、誠に申し訳ありませぬ」

と、長頼は長慶の前であつて、深々と謝していたが、

「国貞のことは、気の毒であつた」

長慶は気にすることなく、逆に義父を失つた形となつた長頼を慰め、励ましていた。

「ともかく、明日にも八上に進軍するでしょう。お主の父が仇も、必ずや討てるであろう。明後日には、波多野晴通の首を肴に、勝利の酒を飲んでいるであろうよ」

三好長慶はニタニタと笑いながら、八木城より見える夜景を、じつくりと見つめていた。

総勢五万。

これほどの大軍があれば、どんな敵とて怖くない。長慶はそう思い、ふうと静かな溜息を吐いた。

「そういえば甚介。そなたにも子が出来たらしいな。できれば、余にも見せてくれ」

長慶の言葉は、いつも不意である。長頼は急のことではばらく驚いたが、ともかく、主命である。

「御意！」

と、彼は彼なりに嬉しそうに微笑むと、早速配下を奥へ走らせると、息子たる千勝丸を呼んでくるよう命じた。

後の内藤如安は、この人である。この当時はまだ生まれていないが、妹には内藤ジュリアという、高名な女性キリシタンがいる。彼女は宇喜多秀家（豊臣秀吉の養子で、宇喜多直家の嫡子。備前岡山城主。豊家五大老の一人）の正室豪姫（秀吉の養女にして、前田利家の娘）らをキリスト教に改宗させたことなどで有名である。

それはともかく、彼は洗礼名をドン・ジュアンと言って、世に言う切支丹大名の一人であった。長頼の死後、内藤の家督と八木城を引き継ぐも、織田信長と対立した足利義昭を支持したことで、信長により所領を没収されてしまう。その後各地を転々とした後、最終的に小西行長の配下に迎えられている。小西行長というのは、商家の息子ながら、秀吉に取り立てられて宇土城を中心に南肥後二十四万石を領するに至った新興大名であり、また戦国時代より数多と現れた切支丹大名の代表格ともいえるほどの、熱心な切支丹であった。豊臣政権の有力な官僚でもあった小西行長の下、二度に及ぶ朝鮮征伐では、特に外交面で活躍した。その後、主君行長が関ヶ原に破れ、殺された後は、小西の旧領を併呑して、肥後一国五十万石の太守となった熊本城主加藤清正の家臣となるが、やがて、高山右近（彼もまた有名な切支丹大名）の斡旋で、加賀藩前田家の客将に迎えられている。やがて徳川家康がキリスト教禁教令を出すと、高山右近や妹ジュリアとともに日本を離れてフィリピン（当時は呂宋<sup>ルソン</sup>といつた）はマニラに亡命し、かの地で没している。

とかく壮絶な一生を遂げた如安だが、今はまだ物心もつかぬ赤子に過ぎなかった。すやすやと眠る可愛らしい顔を眺めながら、長慶は楽しそうにクスクスと笑った。

「国貞はかつて、余のために尽力してくれた功労者だった。余が波多野の姫を妻に貰って、波多野と結びついたがゆえに、対立する破目となったが、決して人間的に嫌いあっていたわけではなかった。

…だが、世の中とは不思議なものだ。波多野と結びついて国貞と敵対したはずが、今では国貞の死を悼み、波多野と対峙しているのだからな」

全ては自分の変節が招いたことなどと思うと、長慶としてはいたたまれない気分になった。

「甚介。…内藤家と丹波は、以後もそなたに託すぞ。亡き国貞の分も、そなたが頑張れ」

長慶はそう言って、抱き上げていた千勝丸を侍女に下げ渡した。

長頼は「はッ！」と大仰に頷いていたが、その眼からは、大粒の涙が、一つ二つ三つと、ぼろぼろ情けないほど思い切り流れていた。

その後。

三好軍五万は八上城を取り囲んだ。波多野晴通はこの圧倒的な三好軍に恐れをなして、何度も降伏を要請したが、長慶はこれを突っぱねて、あくまでも波多野家の壊滅を求めている。

けれど、鉄壁の八上城は、五万の大軍をもつてもなかなか落ちるものではなく、そうこうして時間がたつと、今度は摂津三田城城主有馬重則からの注進で、彼と対立していた三木城の三木次郎を救援すべく、播磨・備前両国守護代の浦上政宗が大軍を編成しているという恐るべき事実が判明したのであった。

「浦上が？」

長慶は驚いたが、しかし、播磨・備前両国を事実上乗っ取ってしまった浦上氏の實力を侮ることは出来ない。落ち目の守護赤松氏であれば、大して恐れるには足りないが、既に両国の全てを実質的な支配下に置いている浦上氏となると、その兵力は少なく見積もって二万、多くて三万は確実である。無論、尼子氏はじめ中国地方の有力大名と対立している浦上氏が、その全軍を摂津方面に割けるとは思えなかったが、一万以上の兵を向けてくることは、まず間違いないと見てよかった。

だから、彼はやむなく兵を引き上げていった。とりあえず内藤長



頼と松永弾正に二万の兵を預け、残る三万を伴って都へと帰っていた。

都に戻った長慶は、すかさず摂津は越水城に入って、万一の攻勢に備えていた。浦上政宗は播磨・摂津国境付近に兵を集めて、いつでも攻撃できる態勢を整えていたが、なかなか動かなかつた。

八月に入り、延々と続く睨み合いに業を煮やした長慶は、浦上政宗の実弟で、このところ政宗と対立することが多くなっていた浦上宗景を扇動し、赤松・浦上氏の宿敵ともいえる山陰地方の覇者尼子氏を動かして、浦上氏の背後を脅かすと、時は今とばかり、重臣の三好日向守長逸に二万の兵を預けて播磨へ進撃させたのだった。

【絶頂編】第083章 播磨進攻

播磨問題は、長慶にとって、同国に勢力を扶植する絶好の機会でもあった。

その先陣、というよりは、三好政権の播磨方面軍司令官的な役割を任された形となった三好日向守長逸は、二万の兵を従え、逸りたっていた。

長逸率いる三好軍は、まさしく怒涛の勢いで播磨に雪崩れ込むと、浦上方の三木城主三木次郎軍と激突した。けれど、頼みの綱であった浦上政宗は、実弟である宗景や、尼子晴久の動向が気になって前に帰国していたので、彼の支援はあてになりそうもなかった。

「くつくく。一挙に播磨全土を掌握して、さらには備前もとれば、我らの天下はよりいっそう固まるであろうな」

長逸は嬉しそうにからからと笑っている。

側には、軍監として立花信濃守範政が従っていた。長逸は彼のほうを見て、

「播磨を取れば、いずれは大和であろう。その折は、是非そなたに頑張ってもらわねばならんなあ」

などと言っていた。

この正月、範政は妻を娶っていた。彼も、今年で三十二になるのである。妻の一人や二人あってもおかしくない。無論、これまでも妻はいた。決して彼も独り身ではなかった。けれど、彼がまだ下級身分に甘んじていた頃に娶った妻であり、その当時は最良の妻だと自負していた彼も、今の如く栄達した後になってみると、

「あなた様は少しばかり夢を見すぎです。地に足着いて、しっかりと歩むことも大切です」

とか、

「贅沢の味を覚えすぎて、昔の質素を忘れるのは、いけません」  
などと、いちいち小うるさいので、次第に疎むようになった。

そこに、縁談が舞い込んだのである。相手は三好日向守長逸の娘であった。まだ十五歳と若かったが、器量よしとして知られ、何より、三好一門の重鎮として、従四位下に列している長逸の令嬢である。家柄は果てしなくよい。更なる栄達を夢見る範政にとっては、口煩い貧乏妻よりは、遙かに魅力的に映ったのも無理はなかった。かくして彼はあっけなく妻を離縁して、長逸の姫を正室に迎え入れた。ただ、こうした彼の態度には、父である又右衛門や妹である雅の方は良い顔をせず、

「これまでそなたのために影ながら尽くしてくれた良妻を、一方的に離縁するとは、何事か！」

と、特に又右衛門は厳しい口調で咎めたが、肝心の範政はどこ吹く風、全く気にする風もなく、淡々と受け流していた。

で、その離縁された妻は、これと行って行く宛てもなく、最終的に雅の方の配慮で莫大な慰謝料が与えられたが、それも受け取ることなく、どこともなく姿を消した。死んだらう、というのが専らの噂であったが、そのことを雅の方から追及されても、範政は昔の妻のことなど忘れ去ったかのように、

「あ、そうですね」

と、平然と答えていたという。

ともあれ、三好長逸と立花範政は、姻戚関係で結ばれている。一門衆の筆頭格である長逸と、長慶の側近衆の筆頭格である範政の同盟は、三好政権内に確固たる勢力を形成していた。

そんな二人が率いる三好軍は、とにかく播磨国内では敵なしの勢いを誇っていた。

九月一日になって、三木次郎を盟主とする播磨軍と決戦したが、三好軍は難なく勝利している。この戦いで、立花範政は先陣を勤め、敵兵四人の首を取る戦果を挙げた。

その後も三好軍は快進撃を続けて、九月十二日までに、三木方の属城を七つも陥落させて、播磨東部一帯は完全に制圧した。さらに

一挙に攻め入ってもよかつたのだが、三好軍の攻勢を受けて、警戒感を強めたらしい浦上政宗が援軍を派してきたので、

「ここは御屋形様の増援軍を仰ぐべきでしょう」

という範政の進言に従う形で、日向守長逸は全軍を留めて、休息をとるよう命じたのだった。

一方、長逸の派した使者は越水の長慶の下に到着し、これまでの連戦連勝と、浦上政宗が出張ってきそような情勢とを、明確に伝えて援軍を要請した。

「播磨を攻め取る絶好機ですな。ここは、わが三好家の全力を見せ付けてやるのは如何ですか？」

と、三好山城守康長は言うのである。長慶とて、もとよりその気であつたから、早速各地の配下たち、とりわけ、四国三好党に播磨出兵を命じる朱印状を送りつけると、自らも越水に摂津・和泉・山城の兵を糾合し始めたのだった。

十月に入った。

勝瑞城主三好豊前守義賢は、兄長慶の命に従う形で、阿波の兵を集結させて、さらに讃岐の十河一存軍をも加えると、淡路を通過し、播磨に入った。途中、淡路島主である安宅冬康軍も合流させたが、冬康自身は配下の淡路水軍を従えて、播磨沿岸部を固めていた。

三好義賢率いる四国軍は、総勢二万に上る。

内訳は、義賢率いる阿波衆一万を中核に、十河一存率いる讃岐・伊予衆六千、安宅冬康率いる淡路衆四千である。

これに、長慶率いる二万の摂津・和泉・山城衆、さらには三好長逸率いる二万を加え、三好軍の総勢は六万に達していた。

これら圧倒的な三好軍は摂津西部の兵庫に入ると、そこで、久方ぶりに、三好長慶、三好義賢、安宅冬康、十河一存の四兄弟が一堂に会することになったのだった。

「お主らも随分と遅しくなつたものだな」

と、長慶が感慨深げに呟くと、

「兄上は、見る見る御立派になられますね」

茶化すように、末弟の一存が言った。

「ま、これでも天下人だからな」

長慶は楽しそうに苦笑いすると、上座の上にゆっくりと腰を落とした。

兄弟たちはそれぞれに座る。幼い頃に父を失い、以来、紆余曲折を経て、今に至る。四人のうち、二人は姓が変わり、それぞれの家の主として君臨している。

「これほどの大軍があれば、何を恐れることがあるう。播磨だ、備前だと、小さきことを申さず、いつそ中国地方全土を呑み込んでしまおう。これだけの兵があれば、赤松、浦上など恐れるに足らん。尼子とて滅ぼせよう。陶晴賢など論外だ。後、他に、山名とか毛利とか、まあいろいろいるが、そんなのはどれも雑魚だ」

どんなときも大風呂敷の大言壮語が好きな一存の強気すぎる態度に、三人の兄は揃って苦笑いした。

「ま、これだけの数があれば、赤松や浦上程度は滅ぼせよう。無論、中国地方の統一が一朝一夕に叶うとは思えぬが」

真面目な顔をして、そう答える義賢に、一存はムツとした。けれど、何も言わない。不満そうに座り込むと、

「俺に全軍の指揮を任せてくれれば、絶対にやってみせるのに」と、ぼやいていた。

「ただ、これだけの数があると、長期戦はやはり難しいでしょうな。兵糧だの、軍資金だの、そう容易く確保できるとは思えませぬし」

安宅冬康はいつも冷静である。平和主義者だが、いざというときの戦は辞さないくらいの度胸は持っている。水軍衆を従え、見るからに屈強な体躯をしているが、彼の真骨頂は、冷静な思慮深さにあった。

「確かに……。軍資金にしても、堺から稼げる額には、おのずと限度があるしな」

長慶はそうぼやき、困ったように溜息を吐いた。

大軍を集めたら集めたで、それはそれで問題なのである。兵が多ければ、その分、消費も多い。払わねばならぬ給金の額も天文学的に増えていく。

堺の町やら、京の町といった大都市を支配下に置いたことで、三好政権の財政力は以前に比べ、格段に向上していた。領土も増えたから、年貢収入も増加している。だが、六万単位の大軍をいつまでも展開してられるほどのゆとりはない。それでなくとも、丹波方面では今もなお断続的な戦いが続き、松永弾正、内藤長頼指揮下に二万の兵を投入している。こちらにも十分な兵糧や金銭を供給し続けねばならないのだ。

長期決戦は難しい。

四兄弟の意は、そこに一致を見た。事実上、三好軍の最高意思決定機関となっている兄弟会議は、続いて具体的な作戦の立案作業に入った。

「まずは三木を滅ぼすのが先決だな」

と、長慶が言えば、他の弟たちは大きく頷き、異論は唱えなかった。

十一月二日。

三好義賢、安宅冬康率いる軍勢が明石に出陣し、十一日には長慶自身も同地に入って戦闘態勢を整えた。

一方、三木軍は浦上政宗の援軍を加えて、決死の抵抗を重ねた。さすがに地の利に明るい彼らの防御力は堅く、如何に六万の三好軍といえども、容易く抜けるものではなかった。

で、月日のみいたずらに流れて、天文二十四年（一五五五年）を迎えた。ただ、これほど長丁場になると、長期戦に耐えられるほどの国力をもたない三好方の焦りは深まってきた。

一月十三日。

長期戦に飽いて、越水に引いていた長慶も、再び明石に舞い戻り、明石の北東部に位置する大山寺（神戸市）に入ると、そこで、三木

方と和議を結ぶことにしたのだった。

「以後、三木氏は三好家に臣従すべきこと。その証として人質を差し出すなら、我らとて、滅ぼそうとまでは思わぬ」

長慶はそう言い放って、とりあえず三木方の出方を待った。

既に三好軍の財政余力は限界に近かった。あくまで天下人の威厳を守るため、強気を装っている長慶だったが、その懷事情は火の車なのである。これ以上の対陣は難しい。無論、それは三好軍の最高機密で、知っている者はほんの僅かな最高幹部に限られていたが、万一、三木方に悟られているとなると、厄介だった。

とはいえ、無理を重ねれば三木勢如き踏み潰せないわけではないのである。如何に堅固とて、六万の大軍が一气呵成に攻め寄せれば、いずれ落ちるだろう。ただ、被害は嵩み、かつ落城時期を見誤れば、財政危機にも陥りかねないが、ともかく、倒せないわけではない。それゆえに長慶は、どこまでも強気を通していった。

結局、三木方は三好軍の苦境など知る由もなく、命と領地が安堵されるならと、快く降伏に応じた。無論、いくらかの領地を没収され、さらに人質を三好家に差し出す破目となったが、滅亡よりはマシというものである。

三木方が和議に応じたことで、三好軍は潮が引くかのように、あっという間に兵を引いていった。

【絶頂編】第084章 越後からの来訪者

播磨や丹波の問題に一区切りをつけた三好政権の勢力は、今や天下に並ぶ者などないほどに圧倒的なものとなりつつあった。

支配領国は、阿波・淡路・讃岐の三ヶ国、摂津・和泉・山城・丹波の四ヶ国に加えて、近江・播磨・伊予・大和の一部をも領有している。さらに、畠山氏の領国である河内や紀伊に対しても、事実上大きな勢力を誇るようになっていた。

三好長慶は、天文二十四年（一五五五年）になって、管領代なる地位に昇った。文字通り、管領の代行者である。無論、そんな地位があるうとなかろうと、彼は今や幕政の総覧者であるし、天下の最高権力者であったが、形の上でもそれが裏付けられたことにより、彼の権勢は完璧なものとなった。

この辺りは、後の織田信長とは実に対照的な長慶である。信長は自らが將軍に擁立した足利義昭から副將軍、あるいは管領への就任を打診されながら、あっけなく断ったという。その理由については諸説あるが、基本的には、足利將軍家の配下、即ち幕府という旧態依然とした組織の枠内に嵌め込まれなくなかったというのが通説になっている。無論、そういう考え方が信長の中になかったわけではないだろう。ただ、非常に合理的な信長が、それだけの理由で断ったとも思えない。

要するに、信長から見ても、当時の幕府にはそれほどの魅力がなかっただけの話だ。管領や副將軍になったところで、何の利益もないし、即ちプラスよりはマイナスのほうが大きいと判断したからこそ、信長は断ったのだ。もしも管領や副將軍の座につくことが、自らの天下布武の野望を実現する上で欠かせない要素だとしたら、彼は一も二もなくこれを受け入れたろう。將軍の家臣になるうがなるまいが、そんな些細なことにいちいち拘るような男ではあるまい。

一方、長慶も、基本的には信長と似たような人である。彼もまた



合理主義的な考え方をする。そんな彼が御供衆やら管領代となつて、幕府の高官職を手に入れていったのは、彼にとって、まだ幕府は利用するに値するだけの価値をもった存在だったからだ。即ち、マイナスよりはプラスのほうが大きいと判断できるだけの力を、この当時の幕府が保持していたということでもある。実際、長慶時代の幕府は、まだ辛うじて権威を持つていた。少なくとも、近畿地方の統一を目指していた長慶にとっては、將軍家の権威は大いに役立つものだった。

室町幕府というものは、その成立から今に至るまで、ずっと不安定だった。義満時代の絶頂とか、義持時代の安定、義教時代の復興などいろいろあつたが、兎にも角にも、室町幕府というのは、上下の幅の大きなダイナミックな政権であつた。そんな幕府が、まがりなりにも二百年以上の長きに渡り存続しえたのは、権威があつたからの一言に尽きるといつても、決して言い過ぎではあるまい。源氏の実質的嫡流とも評される圧倒的な家柄、兎にも角にも十三代に渡り將軍職を世襲してきた実績…、その他諸々からはじき出される権威は、一朝一夕に費えるものではない。

しかし長慶時代までは保たれていた権威も、信長時代にはほとんど皆無となつていた。長慶死後に勃発した、とある大逆事件が、將軍家を將軍家たらしめていた権威を完全に吹き飛ばしたのである。無論、全くななくなつてしまつたというわけでもない。その辺は、やはり腐つても鯛である。最後の將軍となつた足利義昭は各地の大名家を糾合し、二度にわたつて信長包囲網を作り上げることに成功した。彼をして対信長連合の盟主にまで押し上げたのは、將軍の権威に拠るところが大きかった。ただ、それだけではない。万一足利義昭という人が無能であれば、包囲網など作り上げることはできなかつたろう。義昭の有能さが、不足する権威を補い、その結果として出来たのが、信長包囲網なのである。即ち、將軍個人の器量で補完しない限り、何の役にも立たなくなつた將軍家の権威など、信長が欲するはずもない。ゆえに信長は、長慶とは異なり、義昭の要請を

蹴り飛ばしたのだ。

何はともかく、管領代として幕政を完全掌握した三好長慶は、この頃ようやく完成した芥川山城にて、盛大な就任式を催した。それこそ將軍や管領の就任式など遙かに上回る盛大な規模で行われ、人々は改めて三好家の天下というものを再認識するようになったのだ。

そんな式典の中で、長慶は何やら物思いに耽っていた。ここ数年、瞬く間に流れていった年月の中で、とにかくいろいろなことがあった。人々の拍手や祝いの言葉などに耳を傾けつつも、彼の心は、いつしか昔のことではいっぱいになった。

時は少しばかり戻って天文二十二年（一五五三年）。

なんだかんだと三好政権にとっては大きな節目となった、この年六月に阿波守護細川持隆を葬り去り、八月には足利義輝を近江に追放して、以後、幕府の権威というものを利用しつつも、別段それに依拠せずとも天下を統治しうる実力を持った、正真正銘の三好政権が確立した。

こうした華々しい業績の中であって、長慶が未だ忘れられないのは、その年の九月、遙か北の彼方、越後の地よりはるばるやってきた青年のことであった。長尾景虎といって、当時まだ二十四歳の若者に過ぎなかった。まあ、かく言う長慶も、当時三十二歳だったから、年齢差がそれほどにあるわけではなかったが、その凜々しくも逞しい、堂々とした青年の迫力に、かつてない衝撃を覚えたものだった。

「長尾殿、と申されたか？」

朝廷に参内して、後奈良天皇に謁見し、退廷してきた景虎は、長慶の招きに応じて三好屋敷にやってきていた。そこで、彼は上座にでんと構える長慶をジッと見つめていた。

「この度、従五位下弾正少弼を仰せ付かりました長尾景虎にございます。筑前守様にはお見知りおきくださりませ」

と、景虎は恭しく頭を下げた。

弱冠二十四。けれど、遠く越後の地で、彼が乗り越えてきた道のりはよほど険しかったものらしく、とても二十四とは思えぬ存在感を漲らせていた。

長慶とて、地方の状況に全く無知ではない。熟知しているというほどのこともないが、近年越後の国主となって、四隣に存在感を示し始めた長尾景虎のことは、大まかには知っているつもりだった。

長尾氏というのは、元来越後の有力な国人の一つに過ぎなかったが、彼の父である為景の代に飛躍的に勢力を伸ばして、事実上越後の国主的な地位に上り詰めた。その為景が越中にて一向一揆と対戦中に戦死すると、兄である晴景が家督を継ぐも、柔弱な彼に、長尾氏に取って代わらんと野心を燃やしていた国内各地の国人勢力を統御する力などなかった。結局、長尾氏の被官や国人たちは、晴景に愛想をつかして、弟で、当時から武勇の誉れ高かった景虎に期待を寄せるようになった。

景虎は晴景と熾烈な争いを繰り広げた後、彼から強引に家督を奪い取ることで、越後国主となった。以後、彼は北条氏の圧迫を受けて勢力を失った山内上杉氏の当主たる上杉憲政を庇護して、上野国に勢力を伸ばしたり、あるいは武田晴信（後の信玄）に圧迫されていた信濃の村上氏らを支援する形で、同国に兵を入れたりしていた。「で、長尾殿。都はどうでござるかな？ やはり、御国とは違うものでござるか？」

長慶はいろいろ聞いてみたかった。若くして激動の時代に巻き込まれながら、遅く生き抜いている彼を見ると、なぜだか他人のような気がしないのだった。

「思った以上に禁裏の荒み方が激しく、帝の御気持ちを慮りますと、臣下として、悲しまずにはいられませぬ」

「ほお。禁裏が荒んでいると……。だが、あれでも昔と比べれば、随分ましになったのだぞ」

彼は、果てしなく戦乱の打ち続いていた頃を知らない。それこそ、

細川家が真つ二つに割れて、都をめぐり、取つたり取られたりの分捕り合戦に明け暮れていた頃や、足利、細川、三好、畠山、木沢、遊佐、一向宗、法華宗、延暦寺…。その他諸々、いろいろな勢力が京都周辺に入り乱れて攻防を繰り返していた時代。都は常に戦争の中心であり、その都度焼けて、人は死に、その屍は片付けられることなく散らばっているなど、まさしくこの世の地獄と化していた。將軍御所、管領御所ですら荒廃していた世の中で、禁裏など、ただの廢墟に過ぎなかった。

そう言う時代をひたすらに生き抜いてきた長慶だから、今の禁裏は見違えるほど立派になったと思えるのかもしれない。けれど、越後という田舎に生まれ、そこしか知らずに育ってきた景虎にしてみると、今の禁裏も、まだまだ物足りないのだった。日本の中心として、神武以来ずっとこの国を支配してきた万世一系の天皇の宮殿なのだ。それこそこの世のものとも思われぬほど壮麗壮大を誇っているものだと思っていた。それが、蓋を開けてみれば、何のことはない。彼の居城春日山城のほうがよっぽど宮殿らしかったという、皮肉な悲劇を痛烈に味わわされる破目となった彼の衝撃は、果てしなく大きかった。

「ま、ようやく都も安定したばかりだ。不肖、都を預かるこの三好筑前、以後全力を賭して、天子様が御為に尽くすつもりだ。長尾殿にも、是非ご安心なされよ」

と、長慶は言ったが、ジトツと睨むように見つめる景虎の視線は、相変わらず鋭く、何より厳しかった。

「何ゆえ、筑前殿は公方様を追放したまま、呼び戻そうとはなされないのか？」

ある日、景虎は厳しい口調で、そんな風に長慶を咎めてきた。

「公方様、か…。だが、公方様を呼び戻すと、都は再び騒乱の渦に巻き込まれかねん。これまでも幾たびあのお方の策動によって、都の民が塗炭の苦しみを強いられてきたかしれぬ。…余とすれば、今

の公方様に、征夷大將軍たる資格はないように思うのだ」

と、長慶は率直に答えていた。何と言っても、景虎は純真無垢である。嘘と偽りに染まりきった都で人生の大半を過ごしてきた長慶にしてみれば、滑稽なほど正直で、純粹だった。だが、それゆえにこそ、嘘偽りで飾り立てた言葉を吐けば、自分という存在を貶めているような気がして嫌だった。

「筑前殿は誠に左様にお思いですか？ この世に武士と生まれた以上、將軍家を主君と仰ぎ、従うは当然の定めでございます。君が臣を左右することはあっても、臣が君を左右するなど、聞いたことがありません。左様なことが許される世では、秩序も何もなく、ますます乱れる一方かと思われませぬ」

景虎は景虎なりの、確固たる考え方をもっているらしかった。よく言えば保守派、今時珍しい律儀な男である。もはや旧来の権威などないに等しく、実力なければ將軍だろうと管領だろうと、守護だろうと、容赦なく追い落とされる時代だ。かく言う景虎の実父為景は守護上杉氏から実権を奪って勢力を拡大したし、景虎自身、兄である晴景を追い落とすとして国主の座に居座った立場である。

「かといって、君にひたすら盲従するだけが良臣ではないだろう。我ら武士は、民の安寧と幸福を守るために存在するのだ。主君がその民に危害を及ぼすようなら、臣としてお止めせねばなるまい。それで聞かねば、君を除くのも、一つの手だ。…貴殿とて、そう思ったからこそ、晴景殿から家督を奪われたのである」

それを言われると、極端に弱くなる景虎であった。その点は若いので、理論防御はまだまだ完璧ではない。理想論だけ膨れ上がっていても、その程度で押し込められるほど、長慶は甘くないのである。ただ…と長慶は思った。戸惑う景虎を見つめながら、不思議そうに、ジッと、まじまじと眺めている。

長尾景虎と言う青年は、実に不思議な男だった。実兄晴景を追い落として国主の座に立った、典型的な戦国大名かと思えば、先のように、天皇家や將軍家の安否に必要な以上に気を遣っている。また国

許においては、北条氏康に追い落とされた上杉憲政を庇護し、彼のために強勢を極める北条軍と決戦したりしているらしい。

旧来の権威に媚びている、というわけでもないようだが、とにかく必要以上に旧来の権威を称える傾向が、彼にはあるようだった。上杉憲政は関東地方屈指の名族山内上杉氏の当主であり、関東管領として、公的に関東地方を支配している存在だった。言うなれば、東国における旧来権威の象徴的存在である。

「されど、都には將軍家もなく、筑前殿は幕政を勝手に決済なされておられるとか。これでは奸臣と評されても無理なきことと思われが、如何思われますか？」

景虎は必死になって反論してきた。その青さが、長慶には楽しかった。

「いずれ將軍家には都にお戻りいただく。ただ、そのとき、幕府に何の実態もなく、形だけの飾り物になっていては、將軍家とて御不快であろう。そうならぬよう、管領殿が將軍家に代わって政務を執り行っているだけのこと。それがしが勝手に決済と申されるが、それがしは管領殿を補佐しているに過ぎず、全ては管領殿がなされていることだ。無論、管領というのは、そういう役目として設置された職であるから、別段問題もないと思う。…ただ、いつまでたっても將軍家が御改心なされぬときは…。朽木谷の公方殿には御退任いただき、阿波におられる義栄公を新たな將軍に立てるつもりでいる」

「義栄公？」

「御当代義輝公の従兄弟にあらせられる御方だ。今は亡き前公方義晴様の実弟義維様の御嫡男で、先年、御家督を継承なされた」

「…」

景虎は黙り込んだ。長慶はにこりと微笑むと、頃合だろうと、おもむろにパンパンと手を叩いた。すると、数人の小姓たちが待つてましたとばかり、そろそろとやってきて、長慶と景虎に茶菓子など差し出した。

「これはの、長尾殿。南蛮より渡来し菓子じゃ」

と言って、美味しそうに頬張る長慶に、景虎もおもむろに手を伸ばした。

長尾景虎は、その後年末まで京に留まり、やがて帰国の途についた。およそ、戦国大名の多くが国許にあって、内治や隣国との戦争にかまけ、天皇や将軍のことなど一切気にもかけない時代で、わざわざ自ら出向いてきた景虎に、人々は大いに驚いたものだった。

長尾景虎。

彼こそが、戦国最強と称えられた越後軍を率いて武田信玄や北条氏康ら戦国屈指の最強大名たちと覇を競い、やがて北陸地方をおおよそ統一して、天下一統に大手をかけた織田信長をも圧倒せしめた、あの上杉謙信である。

それから二年。

天文二十四年（一五五五年）になった今も、長慶は彼の事を鮮烈に覚えていた。天下人として、安定した政権を構築した長慶は、後奈良天皇のために、毎年毎月多額の銭を献金するようになったし、かつ、壮大な大内裏だつて作つてやった。

「これで文句はあるまい」

彼は遙か北の空を睨むように見上げながら、出来上がった大内裏の側で、そんな風に呟いていた。

「どうなさいました？」

そこに、松永弾正がやつてきた。

「いや、二年前に上洛してきた越後の龍のことを思っていた」

「…越後の？ ああ、長尾殿でござるか」

あの折は、弾正が接待役として長尾景虎をもてなしたものである。その剛毅な武略や武勇には驚嘆したものの、田舎者にありがちな理想主義というべきか、無知さには、少しばかり呆れていた。総じて、当面の間は気にすべき男でもない、というのが弾正の考え方であった。

「長尾景虎…。案外、侮るべからざる男かもしれんぞ」

長慶がそんな風に言うと、弾正久秀はきよとんとしたように、  
「左様でございますかね」  
と、不思議そうに首を傾げながら、そんな風に呟いていた。



何はともかく、順風な日々ではある。

一方、安定した時代が長く続くと、油断が生じ、戦意は萎え、緊張感が下がっていく。当然、組織内部では、主導権を巡り、陰湿な対立が生じてくるものだった。それは、組織というものが根本的に併せ持つ欠陥ともいえるが、三好家とて、例外ではなかった。

天文二十四年（一五五五年）も中頃に入ると、三好政権は、相変わらず長慶独裁ではあるが、彼の独裁政権を主導している側近の立花範政、松永久秀の対立が深刻化するようになった。

二人の対立の根本にあるのは、大和問題であった。

大和問題というのは、大和の征伐を誰が受け持つのか。即ち、大和方面軍司令官には誰がなるのか。これを巡って、水面下で繰り広げられていた果てしなき激しき対立のことを指した言葉である。大和というのは、近畿地方のど真ん中にあつて、古来より都が置かれてきた大国である。三好政権としても、ここは何としても抑えておかねばならぬ要地である。少なくとも、敵方に回られると、いろいろと厄介なのである。

だから、長慶は大和平定を本格的に考えるようになった。ただ、誰に大和征伐を委ねるのか。大和には、統一的な勢力がない代わり、興福寺や東大寺といった強大な宗教勢力、筒井氏をはじめとする根強い支配力を持った強大な国人たちが犇んでいる。これらをなぎ払って、大和を完全支配下に置くためには、生半可な部将を差し向けるわけにはいかないのであつた。

で、その候補として名前が挙がっているのが、立花範政と松永久秀であつた。他の部将、特に有力な一門衆たちは静観の構えを示している。結局、この二人が最終候補として上がってきたというわけだった。

立花範政を支持している有力者は、彼の父たる又右衛門、妹にし

て三好家奥向きの総括者たる雅の方など、立花一門のほか、岳父である三好長逸や、十河一存、三好政康、岩成友通といった有力重臣たちであった。

一方、松永久秀は、実弟である内藤長頼のほか、伊丹親興、池田長正、有馬重則、三宅国村ら外様の豪族衆や、三好義賢配下の筆頭重臣である篠原長房、篠原自遁からも支持を得ている。

勢力的には立花範政が有利である。実際、それゆえに、ひとたび弾正久秀の起用を考えていた長慶も、翻意せざるを得なくなったほどである。

ただ、日に日に悪化するこの問題は、安定しつつある三好政権の屋台骨をも揺るがしかねない大問題になりつつあった。

「兄上、早急に決めたほうがよい。例え、弾正にするにしろ、信州にするにせよ」

と、義賢は芥川山城に伺候した折、そんな風に言つて、兄らしくない優柔不断を咎めていた。

「分かつてはいるのだがな、こればかりは…。だが、豊前。そなたならどうすべきと思う？」

義賢はじろりと兄を見、長慶は恥ずかしそうに頭を掻いた。

「…かつて兄上は、弾正を大和攻めの総大将にすると仄めかして、結局やめたそうですね」

「…ま、まあ」

「それがしが思いまするに、天下人の御言葉は、例え私的な場面において、決して軽いものではあつてはならないのです。…左様なことがまかり通れば、家臣たちは、兄上のお言葉をなかなか信じられなくなりませぬ。天下人たる者、いや、権力を握る者に、朝令暮改は許されないので」

「…朝令暮改、か」

長慶とてその程度のことばは百も承知である。ただ、雅の方も反対するし、重臣たちも拳つて反対するので、すっかり弱気になっていたのだ。一度、弾正久秀に委ねる。そう明言した以上、それが私的

な場であれ、覆すことは、自らの権威を自ら汚していることにもなりかねない。

主君というものは、実に厄介なものだと、内心思いながら、長慶はハアと大きな溜息を吐いた。

長慶は、しばらくの間考え込んでいた。

その間も、大和征伐を巡る騒動は激しさを増していった。これを受け、ついに安宅冬康や三好康長といった重鎮たちまでもが彼の下にやってきて、

「早急にお決めにならねば、三好の御家を揺るがすことにもなりかねませぬぞ」

と、口煩く言ってきたものだった。

特に、冬康などは、

「もしも松永弾正、立花信州のいずれも御気に召さないなら、いっそ別の誰かを総大将に選ばれては如何か？」

と、厳しき口調にて言ってくるのだった。

長慶にとっては、この弟に非難されるのは、何より辛い。温和で優しく、日ごろ余り怒ったりするような男ではないだけに、ひとたび怒ると、それこそ果てしなく怖いのだった。

長慶は困ったように溜息を吐くと、とりあえず冬康を下がらせて、また一人静かに、考え込んだのだった。

天文二十四年六月。

梅雨の季節だからなのだろう。連日の土砂降りが、殊のほか鬱陶しい。ザアザアとけたたましいほどに響き渡る雨音に耳を傾けながら、長慶は大徳寺の高僧大林宗套と向き合っていた。

「いけませんな」

宗套はきつぱりと言い切った。

「権力者に逡巡は禁物。迷うのも悪くはありませんが、家臣に悟られてはなりません」

「…」

「また、朝令暮改も禁物」

義賢と同じ台詞に、長慶は苦笑いした。

「とにかく、早急に決めてしまわれることですな。ただ、大和攻めは、筑前殿が考えておられる以上に厳しき仕事でありますぞ。興福寺は不比等以来、悠久の歴史を誇っておりますし、筒井、柳生その他豪族たちの勢力も侮れませぬ」

「…では、和尚は誰に任せればよいと、お思いか？」

長慶は答えを欲していた。どうすればよいのか。いつもなら即断即決、迷ったりはしない。だが、今回は彼が重用している側近二人の意地と面子をかけた全面戦争なのである。手の打ちかたを誤ると自分の両腕とも思っている二人が、累代の仇の如くいがみ合って、将来に禍根を残しかねない。

「それを決めるのは、拙僧の仕事に非ず。ただ、此度のこととは、筑前殿にとっては、一つの試練でござろう。上手く差配しようとは思わず、道理に従い、筋道に沿った決断を、なるべく素早く下すことです」

宗套はそんな風に言っ、につこりと微笑んだ。

とにかく、迷い、悩み、戸惑った。こんなはずではなかったと、長慶は苦笑いしていた。

側近たちの乱は、長慶にとって随分と頭の痛い問題であった。

立花範政も松永久秀も、必死に多数派工作を繰り返して、家中に勢力を伸ばしている。確かに、決断を先延ばしにしていると、とりかえしのつかぬ事態に発展しかねなかった。

だから長慶は六月二十六日。有力な重臣たちを芥川山城に集結させて、己が判断を各人に示すことにしたのだった。

かくして…。

芥川山城には主だった重臣たちが次々と集まってきた。三好家を二分する大和騒動の真っ只中であつたから、誰もが、

「弾正殿が任じられるに違いない」

とか、

「いや、信州殿だ！」

と言つて、飽くことなき口論を繰り返していた。

で、あらゆる期待と不安、興味を抱いた諸将は、次から次へと大広間へと入つていった。

「御屋形様の御成り！」

そこに、小姓衆のけたたましい大音声が響き渡つた。

その声に応じるように、群臣は恭しく平伏した。長慶はゆつくりと入り、そして上座に腰を下ろした。

見渡せば、三好康長、三好長逸、三好政康、岩成友通、池田長正、伊丹親興、三宅国村、立花又右衛門、内藤長頼といった有力な重臣たちが軒を連ねている。そして、そんな家臣たちの中に、渦中の人たる松永弾正久秀と立花信濃守範政の姿があつた。

「筒井以下、大和の国人どもが將軍家と結びついて、密かに我らへの反逆を企んでいることは、そなたたちも承知のことと思う。大和は近畿地方の中心。ここを制圧しなければ、我らの安定も、更なる発展もない」

と、長慶が声高に宣言すると、群臣たちはたちまちどよめきだつた。彼が何と言うのか。それで全てが決するだけに、彼らは、どれも興味津々と言つた様子で、ただジツと、彼の一挙手一投足を見守つていた。

「その大和征伐だが、余自ら出向く、という手もあるが、生憎、余もそれほど暇ではない。そこでだ。松永弾正忠久秀！ そなたに大和攻めの一切を任せる。以上だ！」

まさに単純明快、朗々と響き渡る大音声に、一方は狂喜、一方は無念の表情を浮かべ、面白いほど対照的な顔をしていた。

命じられた松永弾正は、

「承知しました。必ずや大和一国を御屋形様の下に献じて御覽に

入れましょう」

と言つて、嬉しそうに、楽しそうに、満面に笑みを浮かべながら、恭しく頭を下げるのであった。

立花範政は落選した。

けれど、そればかりでは彼も不満だろうからと、長慶は、松永弾正の居城である撰津滝山城を範政に与えることにした。言ってみれば、ひどく八方美人的な妥協策である。とにかく長慶としては、有能な側近二人がいがみ合い、対立した拳句、機能不全に陥ることを何より懸念していた。それを防ぐために、これが最良の措置だと長慶は思っていたのである。

「要するにだ。弾正に大和を委ねるが、信州には播磨方面を委ねる、ということだ」

と、彼は言い、いきり立つ両派を必死になつて宥めていた。

形としては、念願の大和平定を任された松永弾正久秀の優勢勝ちといつてもよい。ただ、立花信濃守範政も新たに撰津滝山城を与えられて播磨攻めを一任されたのだから、満更敗北ともいえなかった。結局両派ともに「勝った」と主張していたが、そんな彼らの様を見るたび、長慶は困つたように、ハアと深きため息を吐いた。

「政治とは難しきものよ」

その夜、奥に引きこもつた長慶は、そんな風にぼやいていた。これまで楽しくて仕方がなかった政治というものが、このときほど嫌だと感じられたことはなかった。彼は深きため息を一つ吐くと、杯に注がれた酒を、豪快にぐびぐびと飲み干した。

「されど、御見事な裁量だったと、私は思います」

そんな彼を眺めながら、雅の方はニコニコと笑っている。

「そなたは弾正を外し、小太郎に大和攻めを任せるべきだと申していただろう。だが、余はそうしなかった。それでも見事な裁量だと思ふか？」

彼はじろりと、最愛の妻の笑顔をにらみ付けた。苛立ちを隠せぬ

彼の心境を代弁するかのように、その声色にはいちいち棘があった。「私としては、此度の一件で御家が真つ二つに割れてしまうようなことになってはいけないと、心を痛めていたのです。兄上を推した事も、後悔しておりました。ただ、全てを決めるのはお殿様であつて、また私が余計な口を挟めば、殿様のお気持ちを揺るがすことになる。そう思つて黙つていたのです。で、此度殿様はお決めになりました。妻としては、これほど嬉しいことはありません。」

それが、大体雅の方の率直な本音であつた。嘘偽りなど一切感じられぬ彼女の正直さに、長慶はホツとした。

なんにしても、今日ほど政治が嫌と思つたことはなかつた。何より、自分の弱さや脆さを思い知らされたようで、辛く、悲しく、そして情けなかつた。最初からこうだと決めておけば、これほどの問題にはならなかつたのだろう。結局、彼の判断ゆえに家臣たちは従つていながら、その心境は複雑である。明確に立花派、松永派に分裂していがみ合つていただけに、形だけ解決しても、後味の悪いところがそれぞれの胸の中に残つた。それがどういふ風に三好家を蝕むか、そんなことはまだ分からなかつたが、とにかく、順風満帆に見える三好政権の前途に、ほんの僅かながら、しかし確かな影が差したことだけは確かだつた。

その後。

松永弾正久秀は大和攻略事業に着手し、天文二十四年七月十二日、信貴山城に入つて、ここを居城とした。かつては木沢長政が大和支配の本拠地とした城であり、木沢に仕えていたこともある弾正久秀が、新たな城主として大和支配に手を伸ばし始めたのは、なんともいえぬ歴史の因縁であつた。

一方、松永久秀が信貴山に入ると、彼の居城であつた滝山城は立花範政の居城となつた。長慶の側近として、目覚しく頭角を現してきた二人は、こうして大和、播磨という二つの地域の攻略を受け持つ、堂々たる軍司令官となつた。

【絶頂編】第086章 わが世の春

天文二十四年（一五五五年）は十月二十三日。

この日、三好長慶のごり押しもあつて、朝廷は長らく使用してきた天文の元号を、弘治に改めていた。ゆえに、天文二十四年は弘治元年に変わったわけである。この改元は、三好政権が、朝廷をも支配下に組み込んだことを示す象徴的な事件であり、政権の強大、ここに極まれり、といった感もあつた。

で、あつという間に、世の中は弘治二年（一五五六年）を迎えた。この頃、摂津滝山城主となつた立花範政は、しきりに播磨に兵を出しては、赤松氏や浦上氏の軍勢と対峙していた。松永弾正が着々、大和攻略の実を挙げていることが、彼には悔しくて仕方がないのだつた。有馬氏、三木氏といった三好氏に従属する国人領主たちを従え、度々加古川を越えて、姫路辺りまで攻め入っていたが、なかなか戦果らしい戦果は上がらなかつた。

「くそッ！」

三度目の播磨遠征に失敗した夜、彼は滝山城内で、そんな風に唸っていた。

弘治二年六月。

三好筑前守長慶は、嫡子である孫次郎慶興を総奉行とし、今は亡き実父元長の二十五年忌法要を営むことにした。政権の安泰と磐石さ、強勢を天下に示すための一大イベントであり、また、後継者としての孫次郎慶興の存在を公然のものにする…、という、主に二つの政治的目的の下に行われるものだから、当然、三好政権を挙げた盛大極まる法要になつた。

総奉行に任じられた慶興は、内心大いに焦っていた。いや、逸っていた。何より緊張している。

今年で彼も十四になる。凜々しき若武者姿も、今やすっかり板に



ついできた。家中からもその聡明を大いに称えられ、実際、智勇に秀でた彼は、三好政権の二代目としては、申し分のない存在だった。けれど、そんな彼でも、緊張はするのである。祖父の法要と銘打っているが、事実上は慶興の政治的御披露目を目的としたイベントであり、それゆえに失敗するわけにはいかないのだった。

「なあ、爺。成功するものかな？」

彼はそんな風に言つて、側に控える傅役にして後見役の立花又右衛門を見つめた。

「若様次第にございます」

又右衛門は、半ば突き放すように、淡々と答えた。

彼にとつて、孫次郎慶興はわが子も同然である。そんな彼が、聡明を謳われる青年に育つたことは、傅役冥利に尽きるといふものであった。だが、気がかりなのは、少しばかり又右衛門に頼りすぎていることだ。何か困つたことがあれば、迷つたり悩んだりすると、その都度、いちいち又右衛門に尋ね、その答え次第で自分の考えをこころろ変えたりする。行く末三好家の総大将となるべき人なのだから、確固たる意思を持ち、それを貫く度胸と忍耐力、根性を持たねばならぬと、又右衛門は常々思っていたのだった。

その孫次郎慶興が主導する形で行われた法要は、それこそ空前絶後の規模と盛大さで執り行われることになった。

場所は三好元長最期の地として、以後三好家と深い繋がりを誇つてきた顕本寺である。三好政権の重鎮たちが続々と集まり、寺の周囲は俄かに騒がしく、賑やかになった。そしてそれは、三好政権の総大将たる従四位下筑前守三好長慶がやってきたときに最高潮に達した。

長慶は三千の兵を率いていた。完全武装した精兵、というよりは、儀仗兵に近いものがある。三好政権の偉大さを見せ付けるための軍であるから、彼らが持っている全ては、必要以上に贅沢で、豪勢で立派だった。

一千人と言ふ僧侶が一堂に会し、果てしなく広い境内に彼らの読経が朗々と響き渡る様は、なかなか圧巻だった。長慶はその中で何を思つたろう。既に実父のことは、遠い彼方の記憶の一つに埋もれてしまつてゐる。楽しかつたこと、悲しかつたこと、嬉しかつたこと……。ただ、あの時とは自分も随分変わつた。十歳だつた少年は、もう三十四歳になつた。世間のなんたるかも知らなかつた御曹司は、あらゆる苦難と激動を乗り越えて、畿内の全土を支配する天下人になつた。

全てが終わつた後、長慶は見る目麗しい好青年に成長した息子のほうに歩み寄つて、

「よくやつた」

とだけ言つた。

何分、何をするにも一方的な父である。今回のこととでも、長慶が「やれ」と言つたから、慶興は「はい」と応じただけである。専制君主である父の命は絶対的なものであり、それに逆らうことは断じて許されない。ただ、何はともかく、褒められれば純粹に嬉しいものである。慶興は満面に笑みを浮かべて、

「ありがとうございます」

と、礼儀正しく、恭しく頭を下げた。

ただ、今回の法要における実務の一切を取り仕切つていたのは、慶興というより、立花範政であつた。

何と言つても、慶興はまだ十四歳の少年に過ぎないのである。複雑過大な雑務を全て取り仕切れるような能力などあるはずもなく、結局、奉行並となつた範政がやらざるを得なかつたのである。それもあつてか、今回の法要は大成功に終わった。孫次郎慶興は大いに喜び、嬉しがり……。特に長慶から褒められた後などは、すっかり得意氣になつて、

「信濃、お主のおかげだ」

と、自らが御曹司であることも忘れて、頭を下げていた。

「何を申されますか。若君様は常に堂々とあらねばなりません。少なくとも、家臣に過ぎぬそれがしに頭を下げる必要はありません。」  
範政は恥ずかしそうにはにかみながら、「ふふふ」と笑った。あの幼かった子供も、既に十四歳。智勇兼備と称えられてはいるが、父に似て、どこか御人好しの感もある。そんな彼の様を分析しつつ、彼はにやりと不敵な笑みを漏らした。

「そうだな。だが、礼を申すぐらいは許されよう」

慶興はそう言って、からからと笑い、

「父上はこの度、堺の郊外に、祖父様おじさまを供養するための、新たな寺を建立なさるおつもりらしい。で、またしても俺が奉行を仰せ付かったのだが…。お主には、再び補佐してもらいたいのだ」

と、彼の肩をぽんと叩いた。

「ほお。新たな寺でござるか」

「そうだ。大徳寺の宗套上人に開山をお頼みすることになっているのだが、とにかく、御家の盛大を具体的な形として天下に表す大事業だからな。法要以上に大変なのだ」

「なるほど」

そう言う話があることを、範政とて知らぬはずもなかった。ただ、その総奉行に慶興が任命されていたことは、今始めて知ったのだ。法要が終わって間もないのに、再び大役を任された彼の難儀に、密かに同情しつつ、一方、さらに彼と密接な繋がりを持つには絶好の機会だと、彼の計算高い脳は瞬時にそう考えたのだった。

三好慶興を総奉行、立花範政が補佐役として始められた新寺建立事業は、それこそ三好政権の持つあらゆる力を総動員して行われ、その結果として、翌年、即ち弘治三年（一五五七年）には、早くも完成を見ることになった。

臨濟宗大徳寺の住持たる大林宗套を開山、三好長慶が開基（建立者）として作られたこの寺は、今は亡き三好元長の菩提を弔うとい

う大義名分の下、実質的には三好政権の偉大さ、強大さを示す具體的な一例として、凄まじき威容と壮大さを誇っていた。

名を南宗寺なんしゅうじと言つて、武野紹鷗や千利休といった有名な茶人たちが修行し、さらには、徳川家光の相談役として、家光時代の幕政に大きな影響力を誇つた沢庵和尚が住持を勤めていたことでも有名な寺であるが、それは後のことで、当時の南宗寺は、どこまでも三好長慶と三好家、三好政権の強大を満天下に示すためのものではしかなかつた。

弘治元年から同二年における畿内は、平和と言えは平和であつた。無論、戦いが全くなくなつたというわけではないが、これまでのような複雑極まりない、飽くことなき騒乱は身を潜め、ところどころ散発的な蜂起はあつても、そのどれも三好政権の圧倒的軍事力によつて、大事になる前に鎮圧されていた。

ただ、三好政権の拡張戦略に基づく侵略戦争、というのはこの時代も度々起こつていて、そう言う意味では、まだ畿内は戦争状態にあるのかもしれない。例えば、松永弾正による大和征伐などが代表例であり、同国制覇を目指す松永軍と、主に筒井氏をはじめとする在地国人勢力との抗争が本格化していた。

弘治元年及び同二年に渡る二年間は、三好政権の下で安定化した近畿地方より、その他の地域において、後の世へと繋がる大いなる地殻変動が起きた時期であつた。そう言う意味では、三好政権にとつても重大な時代ではあつたが、この当時の長慶たちに、そんなことは分かるはずもなく、ただ無邪気に平和と繁栄を謳歌していた。

例えば…。

弘治元年十月、大内義隆を滅ぼして中国地方に強勢を誇つていた陶晴賢が厳島の合戦に敗退して自害している。この戦いに勝利した毛利元就は、以後飛躍的に勢力を伸ばして、中国地方の覇者となつていく。

また弘治二年四月二十日には、美濃において内乱が勃発し、この

戦いに敗北した斎藤道三が滅び去っていた。以後、勝者となった彼の息子である（かつて道三が滅ぼした土岐頼芸の息子との説あり）斎藤義龍が美濃の国主となるが、戦国屈指の梟雄と称され、一代にして美濃一國を奪い取った下克上の権化は、実の息子によって滅ぼされると言う、因果応報な死を遂げてこの世から消える破目となった。

ただ、この事件が後の戦国史に与えた影響は、道三や義龍ら当事者が思っていた以上に大きかった。というのも、道三の娘婿である織田信長に、後の美濃攻略を推し進める上で格好の大義名分を提供することになったからである。実際、桶狭間に勝利した信長は、岳父道三の仇を討つという名目の下、時間はかかったが、美濃を滅ぼして天下統一の大いなる一步を踏み出している。まあ、この当時の美濃は、義龍ではなく、その子龍興の時代になっていたが、ともあれ、道三の死は、信長の天下取りには欠かせぬ大きな事件であった。また、織田信長の飛躍に繋がったという意味では、弘治元年の話になるが、同年十月の太源雪斎の死去というのも大きかったろう。雪斎は駿遠三の大大名今川義元の軍師を勤めた有能な禅僧で、今川義元や武田晴信、北条氏康との間で結ばれた甲相駿三国同盟の締結に大きく貢献するなど、今川氏の発展に大いに貢献した人物であった。彼の死により、今川家中では、専制君主たる義元に諫言しうる存在がいなくなり、結果として、桶狭間の悲劇に繋がっていくわけだった。

とまあ、世の中はいろいろ動いていた。ただ、畿内においては三好政権を揺るがすような、これといった大事件が起きるでもなく、弘治二年はあっけなく終わって、世の中は弘治三年になった。

【絶頂編】第087章 驕る長慶

弘治三年（一五五七年）九月六日。

この日、都は大いなる悲しみに包まれていた。今や何事も己が思い通りにならぬことはない、などと評されている権力者の長慶ですら、この一報には驚いたものだった。

「み、帝が？」

側近として、ここ最近長慶の側に侍っている伊沢大和守の報告に、長慶は驚きを隠せぬように呆然とした。

「はい。昨日の昼頃から、侍臣に頭が痛い、などと申されておられたようですが、夜頃に病状が悪化し、そのまま崩御あそばされたとのことにございます」

「…み、帝が崩御…」

突然のことに、長慶の頭はすっかり混乱していた。

彼は、帝が嫌いではなかった。否、好きだった。やたら権謀術策を弄して、戦いのみ巻き起こす將軍などより遙かに好意を持っていた。帝は戦を嫌い、清廉潔白な御人柄で、衰微した朝廷の建て直しに尽力しつつも、常に民衆の幸せを考えていた。

その帝が、崩じたのである。長慶は天下のために、民のために、そして哀れな帝の一生を想って、人知れず涙した。もう少し、自分が帝のために何かなせたのではないか。確かに衰微の一途を辿っていた朝廷のために、財源となる御料地を寄進したり、毎年多額の金を献金したりした。だが、もっと何か出来なかったのか。政権の強化ばかりに力を注いで、帝の存在を忘れてはいなかったか…。

かくして、後奈良天皇は崩御した。享年は六十歳という。

実父である後柏原天皇が大永六年（一五二六年）四月に崩じて以来、実に三十一年の長きに渡り、天子の座にあり続けた。ただ、そ

の治世は多難に多難を極めており、正式な即位式を挙行できたのは、即位から十年もたった天文五年（一五三六年）二月のことであった。そのことから分かるように、当時の朝廷は極端な財政危機に立たされており、酷いときには、帝自ら記した和歌や書などを売り払って生計を立てていたともされ、日本の歴史上、数多いる歴代天皇の中でも、最も厳しい時代であったといえる。

ただ後奈良天皇自身は高潔で、清廉な人であった。財政状態が非常に悪化し、日々の生活すらままならない状況に立たされていた折、土佐の公家大名である一条房冬が左近衛大将の官職叙任を条件に一万疋もの大金を献金すると言ってきたこともあったが、この露骨な売官行為に激怒して、断っている。

後奈良天皇が崩御したことで、跡目は東宮である方仁親王みちひとが引き継ぐことになった。

ただ…。  
この方仁親王と三好長慶は、どうも人間的に馬が合わなかった。無論、東宮である親王への敬意や、彼が味わってきた辛さや苦しみは長慶とても分かっているつもりだった。ただ、皇室という、日本で屈指の名族に生まれたからか、親王は三好家を明らかに蔑視していた。従四位下として、昇殿を許されている長慶は、殿中をはじめ度々親王に会っているが、そのたびに聞かされてきた三好家蔑視の言葉の数々に、長慶の不満や怒りは、容易く表現できないほどに膨れ上がっていたのだった。

だから、  
「先帝の御葬儀に金を出すは、無論、やぶさかではない。だが、即位式にまで出す金は持ち合わせておらん」

金の無心を主たる目的として、朝廷からの使者が長慶の下にやってきたとき、彼はそんな風に突き放した。

栄華の絶頂を極めた長慶という人は、英雄的な気質と、天下人として十分すぎる重厚な器量の持ち主であったが、一方では、ひどく

我俣だった。

で、後奈良天皇の葬儀は、三好政権主催の下、盛大に執り行われたのだが、肝心の新帝の即位式は全く行われることはなかった。三好家が金を出さなかったから、という至極単純で、空しい理由により、神武以来長き伝統を誇る天皇家の当主を決める儀式が行われなかったのである。

兎にも角にも、即位式こそ済ませていないが、践祚せんそ（天子の位を受け継ぐこと）はしたわけだから、ここに、正式に新帝、即ち第百六代正親町天皇が誕生したのだった。ただ、この正親町帝と三好政権の関係というものは、こういう一件もあつてか、終始冷たいものが付き纏い、ついに長慶は、帝のために金を出すということをしなかった。最終的に天皇がその即位式を挙げたのは、これから三年後のことであるが、そのスポンサーとなったのは、中国地方に覇権を広げて旭日の如き勢いを誇っていた毛利元就であり、長慶ではなかった。

十月になり、先帝の喪も明けると、長慶は早速、ようやく完成した南宗寺の視察と称して、堺の町にやってきた。

ただ、天下人たる彼の行動というのは、その一挙手一投足が、既に儀式の固まりであった。三好政権総帥の権威というものを満天下に見せ付けるべく、煌びやかな衣装に身を包んで、その中に自我というものを押し隠していた。

権力を極めれば極めるほど、長慶は次第に不自由になった。権力の捕虜とでもいうべきか、彼は巨大な組織のてっぺんで、身動きがとれなくなってしまうていた。無論、そう言う自分が、そんな立場に立たされている己が、嫌だと思ふこともある。うんざりしたこともある。怖いと思つたことは、何度もある。辛いと思つたことは、それこそ数え切れないほどにあった。けれど、それが自分の選んだ道なのだ。故にこそ我慢するより他にないと思うのだった。



で、南宗寺の視察を終えた後、彼は堺に入り、一泊した。翌日、即ち十月十二日になって、阿波から三好義賢が、その妻小少将、さらには今年で四歳になるといふ彼の嫡男三好千鶴丸（後の三好長治）や、三歳になる三好孫六（後の十河存保）も伴ってやってきた。

「そなたの子たちも、随分大きくなったなあ」

初めてというわけではない。無論、新年に一度は必ず会っている。長慶にとっては可愛い甥なのである。ただ、この頃の子供というのは、見る見る成長するので、たった一年でも、以前と以後では随分様変わりしているものだった。

「まだまだ無邪気な子に過ぎませぬ。ただ、いずれは孫次郎殿の如く、聡明な子になってくれればよいと、親として願うのみにございます」

義賢はそんな風に神妙に言つて、「ははは」と苦笑いした。

「いやいや、孫次郎が優れていると決まったわけではない。これからあれもいろいろ試練を潜り抜けて、余の跡目に相応しき男となるのだ。今のところは、磨く前の原石に過ぎん」

そんな風に謙遜しながら、内心ではわが子が一番と、誇っている長慶の感情ぐらい分からぬ弟でもなかった。義賢はそんな兄に苦笑いしつつ、

「話は変わりますが、何ゆえ天子様の御即位に金を差し出してあげないのですか？」

と、言った。

すると、長慶はぎろりと弟を睨み付けた。この一件は余り指摘されたくないことだったのか、不満の色がありありと分かりやすいほど露骨に表れていた。

「…親王殿下が気に入らなかつたからだ。それだけだ」

長慶はそう言つて、プイツとそっぽを向いた。

「左様でございますか。…されど、左様な至極個人的理由で天子様

と対立するのは、我らにとって良いことなのでしょうか？」

「…何が言いたい？ それに、個人的理由ではない。殿下は我らを常に貶してきた憎むべきお方だ。如何に天子になられようと、我らが積極的に支持する理由はない。…先帝の御世であれば、いくらでも支援してやったがな」

そんな風に平然と言つてのける長慶に、義賢は思わず天を仰いだ。独裁者として、既に長慶は有頂天になっている。いや、それすら通り越して傲慢になっていた。無理もないとは思うのだ。何しろ、敵らしい敵は一人もない。三好政権は日々磐石と強勢を加え、長慶の勢威の前には、將軍も管領も、天子ですら敵わない。彼が本気になれば、即位された正親町天皇とて、すぐに廃位に追い込んで、別の親王を天子に擁立することも不可能ではない。

義賢とて人のことを言えた義理ではないと思うのだが、それにしても長慶の奢りぶりは異常である。奢れる平家は久しからず…、などという言葉もある。ただでさえ、今の三好一門の栄華は、在りし日の平家一門と比較されることが多いのだ。少しは自重しないと、その奢りはやがて、他者の嫉妬を生み、嫉妬はさらに不満や羨望に変わって、ついには三好家に牙を向くことになるだろう。

「兄上も変わられましたな」

それは皮肉であり、諫言であり…、とにかく義賢の思いの全てが凝縮された、痛烈な一言だった。

「変わるさ。…変わらねばならんのだ。天下人って奴はな」

長慶はそう言つて、苦笑いした。

その後、都に戻つた長慶は、淀城の細川氏綱からも同じ一件で追及される破目となつた。おそらくは朝廷の衰微を憂慮した公家衆辺りが、氏綱に泣きついたのだろう。何と言つても彼は、名目的には管領であり、長慶の主筋に当たるのだ。

けれど、長慶は氏綱の意など全く耳にも貸さなかつた。ばかりか、

「淀御所（氏綱）はこの一件を通じて、御屋形様の主君としての威厳を回復しようと躍起になっておられます。御所の思惑通りになれば、我らとしては若干由々しきことになります。彼の思惑を打破し、立場を思い知らせてやるには、いっそ強い態度も必要でしょうな」

という立花範政の進言を受け、長慶もついにその気になった。

かくして彼は範政に四千の兵を預け、至急淀城に向かわせた。その上で範政は城内に入り、氏綱の御殿に乗り込むと、

「先の管領様がお言葉、筑前守様とて重々承知。ありがたき御忠言と、肝に銘じておきましょう。されど、管領様には管領様の御仕事があるはず。我らのやるべきことに、いちいち口を挟まれるのは感心いたしませぬな」

と、凄まじい迫力で、はき捨てるように言つてのけたのだった。

氏綱は震え上がり、

「分かった」

と、言つた。

その後、範政は淀より去つていったが、彼の行動を監視するためとして、二千ほどの精兵を残しておいた。ゆえに氏綱は、管領というより三好政権の捕虜に近い立場になり下がり、その権威はみるみる低下していった。

時はさらに流れて、弘治四年（一五五八年）になった。

弘治四年、という元号も、二月二十八日を持ってめでたく終わり、新たに永禄と改元されたので、西暦一五五八年は、永禄元年になった。

この年の三月頃から、畿内もまたきな臭い戦雲に包まれるようになった。

その口火を切ったのは、五年間もの長きに渡って近江に亡命していた將軍足利義輝である。彼は三月十三日、京都まで歩いて一日の距離にある下竜華の地に移り、軍備を整えると、五月三日には、坂本に程近い本誓寺に入ったのだ。その際、義輝に随行していたのは、律儀に彼の亡命生活に従っていた和田惟政や細川藤孝、藤孝の実兄にあたる三淵藤英といった有力な幕臣たちのほか、細川晴元と彼が率いる三千の軍勢であった。

機が熟したと見たのか、それとも長い流人生活に耐え切れなかったのか、五年間もの間、逼塞していた義輝が、今になって挙兵した理由は、いろいろ考えられるものの、彼が立ち上がったことにより、ここ数年平穩無事に推移してきた畿内は、一挙に危うい雰囲気にも包まれるようになった。

一方、三好政権とて、こういう状況を黙って見過ごすはずもない。既に彼らの支配地域は大幅に拡大し、義輝がどう策動しようとも微動だにせぬ勢力を誇っている。領地は摂津・和泉・山城・丹波・淡路・阿波・讃岐の七ヶ国に加えて、播磨の東部一帯、大和の半分程度にも支配地を広げ、さらに河内・紀伊を領有する畠山家とも強い同盟関係を維持しているのだ。何より、この数年間、ずっと天下人という地位を安定的に保ってきた三好政権の威信にかけても、足

利義輝の策動は押さえ込まねばならなかった。

五月九日。

松永弾正久秀、三好日向守長逸を総大将とする三好軍が京都西南の吉祥寺、梅小路、七条千乗寺、六条中堂寺などに布陣した。さらにこれに、内藤長頼や伊勢貞孝、栗津修理亮らの軍勢が加わり、総勢は一万五千に達した。

そのほか、岩成友通、松山安芸守、寺町左近らの軍が都に入るとこの三人に伊勢貞孝を加えた三好軍は、六月二日、勝軍山（現在の瓜生山）を制圧した。

こうした三好方の迎撃準備に対し、將軍方も手を拱いて、みすみす見守っていたわけではなかった。

六月四日。

晴元配下の三好政勝、香西元成らは、近江六角氏の援軍を加えた総勢八千の兵で、坂本を発すると、如意ヶ嶽に入った。さらにその麓にある鹿ヶ谷や浄土寺まで進出して放火するなど、積極的な武威を示している。その勢いは凄まじく、勝軍山にあった岩成友通らが率いる三好軍を蹴散らしてしまったほどで、

「不甲斐無き三好の者どもだな」

と、勝軍山を制圧した政勝は、勝ち誇ったように高笑いしていた。「やはり、五年の泰平は、三好の精鋭を墮落させるに十分だったというわけだ」

香西元成もそれに応じる。政勝や元成は、この五年、ずっと屈辱に塗れた日々を過ごしてきたから、今回の勝利も、ひとしお嬉しかったに違いない。

ただ、その程度で崩れるほど三好軍も脆くはない。岩成友通らの軍は、所詮先遣隊に過ぎず、六月八日になって、松永弾正、三好長逸率いる軍勢が逆襲に転じてくると、彼らはあっけなく勝軍山を手放して退却せざるを得なくなった。

その後も三好軍の軍容強化は見る見る進んだ。

摂津からは伊丹親興、池田長正、三宅国村らがやってきて、神楽岡（吉田山）に布陣した。

一方、こうした三好方の攻勢を受けて、震え上がったのが近江の太守六角義賢である。実父定頼の死後、密かに三好長慶の後釜を狙っていた身の程知らずのこの男は、彼我の実力差も弁えず、興味本位で義輝を支持し、三好軍と対峙したのである。けれど、実際の三好軍の底力を見せ付けられると、それまでの絶対的な自信や豪語などすっかり忘れてしまったかのような臆病さで、

「どうしたらよいのだ？」

と、重臣たちに対応策を求めていた。

「だから言わんことではありませぬ。これ以上、三好筑前殿と敵対すれば、三好の大軍が我らの領内に進撃してくることも十分考えられます」

筆頭家老である後藤賢豊の鋭くも厳しい物言いに、義賢は悔しそうに「ぐぬぬ」と唸った。もとより自尊心だけはやたらと高い彼である。勝てないと分かっているにもかかわらず、あからさまに「勝てぬ」と明言されることは、何より悔しく、辛く、腹立たしいことであった。

とはいえ、勝てないものは勝てないのである。なので、義賢は重臣たちの進言に従う形で、三好方との和議を模索するようになった。だが…。

京にあつて自信を深めていた三好長慶は、六角家からの書状を見ても、鼻で笑うのみで、相手にもしなかつた。

「先の和議を一方的に破つて戦を仕掛けてきたのは、公方殿だ。それを支えている六角義賢の和議など、誰が信じられるか」と言つて、書状すら破り捨ててしまった。

長慶が強気に徹している背景には、各地から三好の全軍が集結しつつあるという現実があつた。

特に、彼は四国軍にまで動員令を発したのである。その威容を天下に示す前に和議に応じてしまったのでは、何のための総動員命令なのか分からない。彼としては、三好政権の総力の凄まじさを見せ付けて、その上で、彼らが全面降伏するのなら、和議に応じてよいと思っていたのだった。

実際、四国軍は続々と上陸を始めていた。

七月二十五日には、三好義賢の後見役として、阿波にあった三好康長が、四国軍の先発部隊を率いて兵庫に上陸し、尼崎に入った。八月十八日には、義賢も阿波軍を率いて兵庫に着き、尼崎に入っている。

その後、同月三十日には安宅冬康、翌九月三日には十河一存や三好慶興や立花範政らも尼崎にやってきたので、彼らは三好慶興を総大将とし、長慶の待つ京を目指したのだった。

既に十月になった。

三好軍と六角軍は激しく睨み合ったまま、どちらもなかなか動かなかった。

秋は深まり、冬の到来を告げる冷たき風が吹き荒れる中、長慶は得意満面の笑みを浮かべて、三好屋敷の中に咲き乱れる紅葉を眺めていた。

「で、どうだ。浅井や斎藤は動きそうか？」

長慶はしきりに側近の立花範政のほうを見て、そんな風に尋ねている。六角家の後方攪乱を目的とした外交戦略の是非は、彼の今後の方針にも関わってくるから、一にも二にも、目下彼の最大の関心事となっていたのだった。

「浅井のほうは色よい返事を見せているのですが、何分斎藤義龍は食えませぬ。彼奴は密かに六角と通じて、浅井の領地を狙っているようです。それに、斎藤の背後には織田上総介（信長）がおりますれば、彼も容易く国許を空けるわけにはいかないようです」

と、範政は言った。長慶は残念そうに、「そうか」とぼやいてい

る。「されば、六角には後顧の憂いはない、というわけだな。…それはそれで厄介だ。六角と全面戦争などになれば、無論負けるわけはないが、浦上や朝倉、北畠辺りが妙な行動に出んとも限らん」

長慶はそう言って、ハアと深い溜息を吐いた。

「それに、筒井や興福寺も、ここぞとばかり出てくるでしょうな」それに、範政も続ける。その口調の裏には、依然として大和を平定できていない松永弾正久秀に対する蔑視が透けて見えた。そんな彼の感情を敏感に察しながらも、長慶は何も言わず、ただ、

「そうよなあ」

と、筒井や興福寺の出方のみに気を配っているようだった。

「河内の畠山も、我らが苦戦していれば、裏切らぬとも限りませぬ。何しろ、高政公はああいう御方でござりますゆえ」

「…畠山か。考えてみると、余の周りは敵ばかりだな」

平和なとき、勢いのある時は気づかぬものだが、ふと冷静になってみると、三好政権を揺るがす問題は、あちこちにごろごろしていた。長慶は困ったように「はあ」と溜息を吐くと、困ったように頭を掻きながら、その場にちょこんと腰を下ろした。

そんな折、嫡男である三好孫次郎慶興が、三好義賢、安宅冬康、十河一存、三好康長ら有力な一門衆を伴ってやってきた。すると、長慶はすつくと立ち上がって、平伏す慶興らの下に歩み寄った。

「孫次郎。そなたなら、今の状況をどう打開すればよいと心得ているか？」

孫次郎慶興は言うまでもなく後継者である。いずれ三好政権を引き継いで、自分の次の天下人になる定めのある青年である。今年で既に十六歳。立派な大人である。

慶興はそんな父の問いに対し、にこりと微笑むと、  
「和睦以外の道はありません」

と、はっきりとした口調で断言した。



「和睦以外にない、と、そなたは申すか？」

「はい」

慶興の顔に迷いはない。彼なりに散々悩みぬいた結果としての答えなのだろう。きっぱりとした口調に、長慶は、その中身云々は別として、ただ父として安堵していた。

「まず父上は六角の後方攪乱を策して、美濃の斎藤義龍、北近江の浅井久政を動かそうと考えておられたようですが、義龍の狙いは、かねてより北近江の浅井領の併呑にあります。六角とて、こうした義龍の感情を知らぬはずはありませぬゆえ、既に使者を送るなどして誼を結んでいると考えるべきです。さすれば、斎藤が六角を攻撃するはずもなく、浅井も下手に六角と戦端は開けない。織田を唆して斎藤を牽制させるという手もなくはありませぬが、目下、織田上総介は今川治部大輔（義元）と敵対しており、その今川は三河の松平を事実上併呑して、ひしひしと尾張に迫っている状況です。織田とて容易く美濃に兵は動かさないでしょう」

「…」

「そのほか、播磨からは赤松、浦上の軍が迫り、伊勢の北畠中納言（晴具）の動向も気になります。また大和には筒井があり、興福寺も我らと敵対しておりますれば、彼らが北畠と連動して攻勢に転じてくると、我らは一挙に不利となりましょう」

「…」

「また、浅井と同盟している朝倉を動かして、六角を牽制させるという手もあります。が、朝倉家の大黒柱であった宗滴が、天文二十四年（一五五五年）に没して以後、凡庸な義景の下で纏まりを欠き、とてもではありませんが、對外攻勢に打って出る余裕などありません。それに、宗滴の死を受け、加賀の一向門徒たちが越前を圧迫しているとか。それを考えても、朝倉は動かせませぬ」

慶興が、すらすらと、並べ立てるようにそう言い切ると、長慶だけでなく、居並ぶ一門諸將、どれもが驚きを隠せなかった。聡明、聡明と評判の慶興ではあったが、実際どれほどのものなのか、依然

として未知数なところも多かったのである。だが、ここまで理路整然と述べている姿を見れば、誰もが噂を真実だと思わざるを得なかった。義賢や冬康、一存ら、慶興の叔父たちは、彼がこうであれば、三好家は安泰だと、大いに安堵していた。慶興の大叔父にあたる康長もまた、ホツとしているようだった。

「なるほどな。…よかるう。この一件は全て孫次郎、そなたに委ねる。そのほうの裁量で、見事に解決に導け」

誰より安堵し、喜び、嬉しがっている長慶は、そうした感情を必死になって押し隠しながら、殊更厳かな口調で、そう命じた。慶興はといえば、

「ははーッ！」

と、別段平然とした様子で、いつものように頭を下げるだけだった。

その後、三好慶興の裁量の下、三好家と六角家は和議交渉に入り、十一月六日、正式に和議が結ばれることになった。とはいえ、それほどこまでも三好家優位なもので、一見すれば、六角家が三好家に屈服したように見えなくもなかった。

ともあれ、こうして最大の後援者である六角義賢を失った義輝には、もはや三好政権に対抗する術はなく、やむなく彼も和議に応じて都に戻った。

義輝の帰京は、実に五年四ヶ月ぶりのことになる。相国寺に入つた彼の下には、細川氏綱、藤賢兄弟らがやってきて、久方ぶりの帰京を祝した。

そして永禄二年（一五五九年）となり、二月二日。

芥川山城に帰っていた三好長慶は、嫡子慶興を伴って上洛し、將軍御所に伺候して、足利義輝に謁見した。この際、慶興は義輝より、“義”の字を賜って、その名を『義興』に改めている。

永禄二年（一五五九年）という年は、一面的には三好政権が絶頂に至る最終過程のようなものであった。相変わらず三好家は栄華を極め、総帥たる長慶の権勢は、空前絶後といってよいほどに圧倒的なものとなってきた。もはや三好政権は室町幕府に代わる永続的な権力機関として、長く畿内全土を支配するものだ、と、人々が認識するに十分な権勢と安定性を誇っていた。

けれど、別の面から見ると、長慶の次を担う有望な若き実力者たちだが、その名を天下の中心である畿内に轟かせた年でもあった。とりわけ、尾張の若き国主であった織田上総介信長や、既に越後の龍と天下にその名を轟かせつつあった長尾景虎の二人が単身上洛したことは、都の人々を大いに驚かせたものだった。

信長がやってきたのは、二月二日である。即ち、三好長慶・義興親子が上洛して、將軍義輝に謁見した、まさにその日に、彼もまたやってきたというわけだった。

まあ、織田信長と言ってみても、当時はさして注目を浴びている武将ではなかった。何と言っても、依然として尾張一国すらまともに統一できていないし、何より周囲に今川義元、斎藤義龍という二大強国を敵として抱え、いつ滅び去るか分からぬような状況にあった。そんな人物に、都の人々が関心を寄せるはずもないのである。せいぜい、尾張の虎と恐れられた織田備後守信秀の嫡子…、として、それなりの関心を集めたかもしれないが、それだけだった。

実際、信長は入京した後、足利義輝に謁見し、数日の間京都見物をした後、堺、奈良を巡るだけ巡って、あっけなく国へと帰っていた。その間、斎藤義龍の放った刺客を追い払ったりと、少なからぬ修羅場をくぐっていたが、だからといって注目を集めるわけでもなく、都人の中には、彼がいつ帰国したのかすら知らぬ者も多かった。

そんな信長に比べれば…。越後よりはるばるやってきた長尾景虎は、彼とは対照的に、都人の度肝を抜いた。

何しろ、彼は総勢五千に及ぶ精鋭を引き連れ、さらにその軍事力を背景に、三好政権の対朝廷、対幕府政策を痛烈に非難したのである。人々は大いに驚き、そして慄いた。下手をすると、三好長慶と長尾景虎の間で決戦になりかねない状況だったから、無理もあるまい。

長尾景虎率いる越後軍はその精強さで、既に天下に名高かった。武田晴信率いる甲州軍や北条氏康率いる関東軍と何度も、何度も攻防を繰り返してきた越後軍なのである。たった五千とはいえ、侮るわけにはいかなかった。その上、長尾景虎に六角義賢や足利義輝が与力するようなことになれば、情勢は一挙に流動化しかねない。

実際、三好方も長尾軍が近江坂本まで進出してきたことを知ると、大いに色めきだって、万が一に備え、大いに軍力を増強していたのである。

ただ…。

景虎は別段、戦をするために、はるばる都までやってきたわけではなかった。あくまで、自らの軍事力を誇示し、それを背景とした交渉でもって、三好政権を動かそうとしたに過ぎない。景虎とて馬鹿ではないから、三好家と全面戦争に陥って、勝てるなどとは思っていなかった。

だから彼は、三好長慶承認の下に、四月二十七日には將軍御所に向いて、足利義輝に謁し、五月一日には禁裏御苑を拝観中、正親町天皇に拝謁している。

「ふふふ。長尾景虎、か…。随分前に会ったときと全く変わらぬ理想家ぶり。ま、五千程度で勝負に打って出たことなかっただけ、分別があると言えるが、だが、その程度の力をもって余に物申すとは、十年早い」

長慶はこのところ、連日に渡ってむしゃくしゃしていた。何やら全てが気に食わないようで、常に仏頂面を浮かべている。側近たちは、普段温厚な彼らしくもない形相に慄きつつも、彼の怒りを買わぬよう、必死になって日々の業務をすませていた。

「御屋形様、河内情勢がますます悪化の兆しを見せております」

伊沢大和守はそんな風に言つて、長慶の御前に小さく頭を下げた。「そうか」

長慶は再び腹立たしそうな仏頂面を浮かべつつ、「うーむ」と、腕組みながら、困ったように考え込んでいた。

「大和、景虎の動きはどうだ？」

「はッ！ 今のところ、妙な行動を起こすつもりはないようですが、ただ近江坂本には五千の精銳があり、油断はなりません」

「：そうか。引き続き、監視は怠るな」

「御意！」

伊沢大和が去ると、長慶はおもむろにすつくと立ち上がると、庭先のほうへと歩いていって、ハアと小さな溜息を吐いた。なぜこうも面倒臭いのだろうと、相変わらずの仏頂面を浮かべつつ、日ごろの憂さを晴らすかのごとく、眼前に聳えていた梅の木を思い切り斬りつけた。

五月十二日。

三好長慶は、京の留守を三好長逸、三好政康らに委ねると、彼は精銳六千を率いて、本拠たる芥川山城へと帰っていった。

このところ、畠山家の動向が三好政権最大の懸案事項となっていた。長尾景虎の如きは、実際、どうという問題でもなかった。

畠山家に妙な気配が見えるようになったのは、昨年十一月のことであった。即ち、畠山家筆頭重臣である河内・紀伊守護代の安見直政が、主君にして両国守護の畠山高政を紀伊に追放するという事件が勃発したのである。

問題の背景には、守護権力の再強化を目論んで、次々と改革政治を断行した畠山高政と、遊佐長教の如き強権を握らんとして、それに対抗していた安見直政の路線対立があった。それでもしばらくの間は、両者は遊佐長教の嫡子でもあった遊佐信教らの仲介もあって辛うじて主従関係を維持していたのであるが、安見直政が性懲りもなく高政暗殺を画策したりしたので、両者の関係性は一挙に悪化する破目となった。

結局、独自の軍事力を持たない高政には、安見直政の脅威を排除する術がなかった。拳句、高政が自らの軍事力として大いに期待を寄せた遊佐信教は、土壇場になって安見方に寝返ったので、もはやどうすることもできなくなった。

そこで高政は、猶子<sup>ゆっし</sup>である畠山貞政を紀伊より呼び寄せた上で、河内守護職を譲り、自らは永禄元年（一五五八年）十一月三十日をもって、居城である河内高屋城を退去し、紀伊に移ったというわけだった。

かくて安見直政の専権下に畠山氏は新たな道を模索するようになった。

とはいっても、本来、それは三好家にとって悪い話ではなかった。元々安見直政は、対三好強硬派であった畠山高政とは違い、畠山家中における親三好派の領袖といふべき存在で、事実上、これまでの三好・畠山の友好関係は、この安見直政によってもたらされてきた面も大きいのである。

だが…。

紀伊に逃れた畠山高政が、自らの復権を期して三好長慶に応援を要請した辺りから、一挙に情勢はきな臭くなった。無論、長慶も当初は高政など相手にもしなかったのだが、これをもって三好・畠山の絆を断ち切る絶好機と見た足利義輝の策動によって、長慶と高政の間に、安見直政を仮想敵とした密約が結ばれたとの噂が、実しや

かに畿内中に流されることになった。安見直政は当然警戒し、かつ、それまでの親三好姿勢から、反三好姿勢へと傾斜するようになった。そうした情勢下、長尾景虎が五千の大軍とともにやってきたのである。安見直政は早速彼に接触し、同盟を打診した。そして、その事實は三好方にも伝わり、かくして長慶も安見直政討伐を決意したというわけであった。

芥川山城に入った長慶は、まず松永弾正久秀、十河一存の軍を和泉国に集結させ、安見直政方に味方する紀伊の根来寺衆徒と対峙させた。十河軍、松永軍は、岸和田城にて合流し、総勢一万の大軍で紀伊へと進撃した。

五月二十七日。

十河一存を総大将、松永久秀を副将とする三好軍と根来寺軍が紀伊・和泉国境近くで激突した。ただ、我武者羅な力攻めを主張していた十河一存に対し、弾正久秀は、根来寺が天下に誇る鉄砲隊の威力を懸念し、一存の方針に反発するなど、戦う前から、三好軍は既に真つ二つに割れていた。

「そなたは臆病ぞ。火縄如きに臆して、武士もののぶと言えようか」

何と言っても、天下に鬼十河と称えられているほどの豪傑である。配下の十河軍は、数ある三好軍の中でも屈指の精鋭と称えられている。故にこそ、力攻め以外にないと主張する一存の気持ちも分らないでもない。が、弾正久秀はそれほど単純ではない。

で、結局、両者の意見は全くかみ合わず、ついに二人の意が一つになることもなかった。十河一存が松永弾正を大いに嫌っていたということも、理由の一つに上げてもいい。弾正が反対すればするほど、一存は意固地になって主戦論を主張した。

「総大将はこのわしだ。弾正、逆らうなら軍律違反に問うぞ」

最終的に一存は一方的にそう言い切ると、弾正の反論を押さえ込んでしまった。こうなると、弾正には何も言えなかった。一存が総

大将で、自分が副将であることに間違いはないのだ。

けれど…。

負けると分かっている戦に、わざわざ挑むほど彼もお人よしではなかった。一存がその気なら、自分も勝手にやると、弾正は自らの陣に閉じこもって、微動だにしなかった。

結局、根来寺が誇る圧倒的な火力の前に、十河軍は無力だった。無惨に敗走した十河軍は、後方に待機していた松永軍の支援もあって、辛うじて岸和田城に落ち延びることができたのだった。

十河一存は、この戦いで左肘に銃弾を受け、その治療もあって、数日の間は岸和田城を離れられないようになった。傷口が炎症を起こし、高熱を発するようになると、鬼十河の異名が嘘のように、彼は日々魔されながら、布団と格闘するようになった。

かくして岸和田城における三好軍の指揮権は松永弾正が仕切るようになったが、彼は紀伊の有力国人湯川直光を調略し、拳兵させることで差し迫る根来寺軍を牽制した。その上で岸和田城の守備を十河軍に預けると、自身は手勢四千を従えて北上し、十七箇所（現在の守口市）まで進出していた三好長慶と合流した。

長慶と久秀は六月二十六日、河内の中央部に兵を進めた。摂津からは有馬重則、伊丹親興、三宅国村、播磨からは三木次郎はじめ、明石や赤松、浦上といった諸勢力の援軍を得て、総勢三万まで膨れ上がった三好軍は、二十九日をもって、安見直政の立て籠もる河内高屋城を包囲したのだった。

その後の長慶は破竹の勢いである。

八月一日、根来寺軍を撃破した湯川直光は、十河一存の軍と合流して堺に入った。同日、長慶は高屋城を陥落させ、八月四日には天王寺を経て飯盛山を包囲し、翌日、これを攻略した。



こうなると、安見直政には何の力もなかった。拳句、有力な同盟者であった遊佐信教は、形勢不利を見て、三好軍に寝返っている。これで彼の敗北は決定的となり、大和方面へ落ち延びていった。

かくして長慶は、高屋城に畠山高政を復帰させると、高政は、長慶の意もあつて、湯川直光を安見直政に代わる守護代に任命した。その上で、長慶は岸和田城を十河一存に与え、畠山家の監視を命じている。

しかし、長慶もこの程度で矛を収める気はさらさらなかった。何と言つても、今回の戦乱の首魁である安見直政は、大和に亡命して依然として健在なのである。しかも、その直政を筒井藤勝（後の順慶）が匿っていることを知ると、彼の怒りは頂点に達した。

「筒井はまたしても裏切つたのか」

長慶はぎろりと松永弾正を睨み付けた。弾正の報告によれば、筒井氏は松永軍に降伏し、三好家に臣従しているはずだった。筒井氏の降伏をもつて大和統一の達成としていた弾正久秀の面子は丸潰れであり、かつその言葉を信じて、大和掌握を幕府に奏上していた長慶の面子も丸潰れであった。

かくて怒りに燃える長慶は、弾正久秀を総大将、伊丹親興を副将につけて、筒井攻めを再開しよう命じた。続いて長慶自身も、弾正の居城たる信貴山城に入り、筒井攻めの総指揮を執った。

かくして八月十日。

三好長慶を総大将、松永弾正を前線指揮官とする三好軍五万に取り囲まれた筒井藤勝は、泡を食つたように降伏した。けれど、既に安見直政の姿はなく、弾正久秀らは彼が逃れたとされる春日神社などを荒らしまわったりして探索したが、ついに彼の行方は掴めなかった。

長慶は筒井氏の領地を大幅に奪い取った上で、その全てを弾正久秀に与えた。さらに、

「そなたが奈良に築きたいと申ししていた城だが、認めよう。ついでに、その築城費用は、大和国内よりそなたの裁量で調達することを

認めよう。もしもそれで足りぬようなら、余が貸し出してやる」

と、言つて、大和一国の仕置を全面的に弾正に一任すると、長慶は颯爽と都へと歸つていった。

十月二十六日。

三好長慶が都に歸つて、しばらくたったこの日。長尾景虎は、坂本に留めてあつた五千の兵とともに、帰国の途についた。長慶の策動もあつて、武田晴信が信濃進攻を再開したが、最大の理由であつた。武田軍が信濃を取れば、次は景虎の越後であるから、彼としては、いつまでも都に留まっているわけにはいかなかったのである。

ともあれ、かくて厄介な客はいなくなつた。都は、また三好家の単独支配の下に歸した。さらに、河内・紀伊・大和の三ヶ国が、新たに支配下に入ったことにより、三好長慶の権勢はますます強まり、ついに絶頂に達した感すらあつた。

【絶頂編】第090章 繁栄する三好家

永禄二年（一五五九年）はかくして終わり、世の中は永禄三年（一五六〇年）を迎えた。後の世に生きる我々の視点から見れば、戦国時代における一つの大きいなる画期となる年であったが、無論、当時の人々には、そんなことは分からなかった。

都では、長慶の威勢がいよいよ高まって、絶頂に達していた。さながら満ちた満月の如く、彼はわが世の春を思う存分に謳歌していた。

そんな長慶も既に三十八歳である。老いたというほどの歳でもないが、若いとも言えない。ただ、彼はこのところ複雑極まりない政治に飽いてきたのか、茶とか、歌とか、風流に明け暮れることが多くなった。増改築を繰り返した結果、今や都屈指の大宮殿となった三好屋敷には、連日の如く公家たちを招いて、歌会や茶会が催されている。そうした彼の行状を家臣たちは余り快く思っていない。特に松永弾正などは、

「御屋形様は文弱に走りすぎだ。我らは公家ではない。武家は武家らしく、武芸に励むべきだ」と、密かに彼の墮落を嘆いていた。

ただ、そうした長慶の態度とは裏腹に、彼の政治的地位は見る見る高まった。

永禄三年一月十五日。

彼は嫡子孫次郎義興を伴って、將軍御所に伺候すると、そこで足利義輝より御相伴衆おしよばんしゅうに任命されることになった。御相伴衆というのは、役職そのものにさしたる権限があるわけではないが、格式面では、管領家（細川、畠山、斯波の三家で、これを三管領家＝三管と呼ぶ）に次ぎ、侍所頭人（これに就任できるのは山名、赤松、一色、

京極の四家で、俗に四職ししきと呼ぶに匹敵するもので、政所執事の伊勢貞孝や守護家よりも遙かに身分は高かった。従来、この御相伴衆に任ぜられていたのは、日野・広橋・烏丸・三条といった公卿たちであり、特に日野家といえは、足利將軍家と婚姻を重ねてきた名門中の名門として知られている。そうした一族と、長慶は同格であるとされたのである。細川の一被官に過ぎず、元来阿波の土豪でしかなかった三好家としては、まさに破格の厚遇であった。また、それに伴う形で、長慶は自らの支配下にある七ヶ国、即ち阿波・讃岐・淡路・摂津・和泉・丹波・大和の守護職に任命されたほか、山城守護代（山城守護職は細川氏綱）に任命されている。これもまた慣例や家格など、当時の守護就任基準を完全に無視した破格の人事であったが、何はともかく、御相伴衆及び各国守護の座を得たことで、三好長慶は名実共に、細川氏からの自立を果たしたわけであった。

ついで一月二十一日。

朝廷は三好長慶を従四位下修理大夫に任命し、かつ義興を従四位下筑前守に任じた。

この頃の長慶は、先の長尾景虎上洛の一件もあつてか、朝廷との関係修復に腐心していた。折りしも、毛利元就からの金銭支援により、正親町天皇の即位式が催されることになること、長慶はその警護役を買って出、三好の精鋭一万を都に集め、また三好義興を総奉行、立花範政を補佐役として、彼らに即位式一切の実務を取り仕切らせることにしたのだった。

一月二十七日に挙行された即位式は、結局盛大を極めて、大成功を収めた。正親町帝の意向に基づいて、一般民衆の拝観も許可されたことから、数万に達する拝観者たちが一堂に会する中で行われたのである。これにより、余りに盛大な即位式に度肝を抜かれた民衆は、天皇家の存在を改めて認識するとともに、主催した三好長慶の威勢の凄まじさというものを思い知らされる結果となった。無論、

資金を拠出した毛利元就という人間の知名度も、抜群に上がったことは、あえて書くまでもあるまい。

こうした功績を称えてか、二月一日、足利義輝は三好家に対し、新たな役職を与えた。即ち、三好義興、松永久秀、立花範政の三名を御供衆に任じ、彼と長慶連名の奏上により、朝廷は松永久秀を従四位下弾正少弼、立花範政を従四位下左近衛権少将に任命した。

栄華を極めた三好政権だが、この年の二月、悲しい別れがあった。即ち、三好義興の傅役として、長年見事に勤め上げてきた重臣立花又右衛門が、かねてよりの病が悪化して、ついに死去してしまったのである。息子の立花範政が、幕府御供衆、従四位下左近衛権少将に就任した直後であったから、彼の出世を妬む者の中には、

「罰があたったのだ」

と、あからさまに公言する者もいたぐらいだった。ただ、総じて人望に厚かった又右衛門を悪く言う者はなく、特に、彼を父代わりとして慕っていた三好義興の感情を考えれば、又右衛門の悪口など言えるはずもなかった。

長慶もまた、又右衛門の死は大いに衝撃だったようで、彼のために従四位下の位階を贈った。かつ、又右衛門の功労に報いるためと称し、四位少将範政に対する信任の度を、よりいっそう強めていく結果となった。

一方、従四位下弾正少弼となった松永久秀は、いまや大和一国の国主となっていたが、その地位、身分に相応しい本拠地を新たに築こうと、奈良近郊に新城の築城を始めていた。これが世に言う多聞山城であり、本格的な天守閣を備えた壮大壮麗な巨城として、その名は日本史上に大いに轟くことになる。

「小太郎範政如きが四位少将とは…。御屋形様も、随分甘い」

と、弾正久秀は不満でいっぱいだった。

有力な一門、重臣を差し置いて、従四位下となったことは、彼にとっても大いに誇りであり、嬉しかった。けれど、同時に範政も従四位下に列し、近衛権少将という栄職を賜ってしまった。その上、又右衛門死後は、何かにつけて「少将に任す」であり、弾正が大和統治に専心せねばならぬ隙を突く形で、少将範政が三好政権の宰相の地位を占めてしまった。それが何より悔しく、腹立たしい弾正久秀なのである。

かくして三好政権は磐石に磐石を重ねて、誰の目にも強勢を極めているように見えたが、その足元は再びぐらつき始めるようになっていた。

その最大の理由は、河内にあった。

河内の支配者は、前年の政争以来、守護である畠山高政となっていたが、彼は配下である国人勢力の統御に苦心していた。新たに守護代とした湯川直光は、紀伊の国人であり、河内衆は余所者に過ぎない湯川の指揮下に入ることを快しとはしなかったのである。

で、結局高政は河内国人勢力を代表する存在である安見直政を復帰させることにしたのであった。彼ならば国人たちを制御できる。そう考えた高政の判断は、決して間違つてはいないが、直政が三好政権にとつてのお尋ね者であることを考えれば、長慶が直政の守護代復帰を快く認めるはずもなかった。

それどころか、長慶は激怒した。この点、高政は長慶の反応を見誤ったというほかはない。

「高政はやはり、どこまでも余に楯突く腹らしいな」

芥川山城を経て、堺に入った長慶は、叔父三好康長を前にして、そんな風にぼやいていた。

「左様ですな。されど、この一件は使えませぬ。河内と紀伊を、名実共に三好家の領地に組み込む絶好の機会と心得ます」

康長に言われるまでもなく、もとよりそのつもりの長慶なのである。今度こそ畠山家を踏み潰して、畿内全土を完全統一してみせる。長慶の野望は泡の如く、はちきれんばかりに膨れ上がっていた。

「叔父上、畠山家の戦力は如何ほどと思われるか？」

と、長慶が問えば、

「河内衆だけで四千から五千。紀伊衆を合わせると、最大二万くらいにはなりませんかな」

淡々と答える康長であった。

「だが和泉には又四郎（十河一存）を入れてある。紀伊と河内が連携することは、現実問題あり得ん」

「はい。されば、我らとしては河内と紀伊の畠山軍を分断して、各個撃破するという手が使えます。ま、連動したところで、畠山高政如き、我らの敵ではありませんが」

康長は自信満々の笑みを浮かべ、はつきりとした口調でそう言った。長慶はそれほど樂觀的ではないが、しかし自分の力が畠山に劣るなどとは夢にも思っていない。それだけの自信が、彼にはあった。

「ともあれ、実休（三好義賢の入道名）には四国の兵を催して、早急に余の下に参るよう命を出せ。三好家の力を再び思い知らせてやるのだ」

「承知いたしました」

康長は深々と平伏し、そしてゆっくりと立ち上がった。長慶は静かに目を閉じたまま、がつくりと、力なく脇息にもたれかかっている。そのたびに、「はあ」と大きな溜息を吐く甥の姿を眺めながら、少なからず不吉な予感を抱かずにはいられない康長であった。

四月八日。

三好長慶は淡路洲本に入り、そこで城主である安宅摂津守冬康と、阿波よりやってきた三好義賢と会談した。ちなみに、義賢は二年前

の永禄元年（一五五八年）に入道して、物外軒実休と名乗っている。ともあれ、三人の兄弟が一堂に会したのである。口火を切ったのは、頭を丸めて、すっかり容貌の変わった三好実休入道であった。「畠山など踏み潰して、河内や紀伊は全てわが三好の領内に組み込むべきであろう」

およそ彼の出で立ちからは想像できぬ過激論に、長慶と冬康は驚いた。実休は別段気にする風もなく、己が持論をいつになく激しい口調でぶつけていた。

「ま、畠山如きは我らの敵ではあるまいが…。実休よ、一つ、お主が畠山征伐の指揮を執ってみるか？」

「私が、ですか？」

実休は意外そうな顔をして、まじまじと兄の顔を見た。長慶はとくと、本気も本気。大真面目である。

「長兄が指揮を執らないのですか？」

冬康が横槍を入れると、長慶は「ははは」と高笑いした。

「いいよ。それに俺は天下人だぞ。毎度毎度、兵を率いて戦っている、三好家の威厳にもかかわろう。ま、俺も出向くには出向くが、せいぜい物見遊山を楽しませてもらうことにする」

「物見遊山、でございますか」

実休や冬康は、そんな長慶のあつけらかなとした態度に、思わず苦笑いした。

「ははは。兄上の命とあらば、それがしが畠山攻めは承りましょう。ただ、四国のことは如何いたしますか？ 既に又四郎は岸和田城にあり、それがしも河内に出兵するとなれば、四国はがら空きとなります」

ふと思いついたような実休の問いに、長慶はにやりと笑って、おもむろに冬康の肩をぽんと叩いた。

「それはもう、摂津以外におるまいよ。摂津、実休が河内攻めを終えるまで、お主が四国を率いるのだ。出来るな？」

念押しするかなのような長慶の言葉に、



「無論です」

と、自信満々といった様子で、冬康は実に嬉しそうな顔をして、大きく胸を叩いた。

畠山攻めを目前に控え、三好軍は大集合を始めていた。

それに先立ち、五月一日、三好長慶は畠山高政の不信を非難し、絶縁する旨の宣言書を幕府に提出して、事実上の宣戦布告を行っている。

六月になると、三好実休率いる四国軍が尼崎に入り、立花少将範政、有馬重則、三宅国村、伊丹親興ら摂津衆を糾合しつつ、六月二十九日には、十七箇所（守口市）にて、三好長慶本隊と合流した。

この時点で、三好の総戦力は四万近くにまで膨れ上がっている。彼らは大挙して河内に突入すると、七月三日には同国の玉櫛という土地で畠山高政軍と激突し、これを撃破した。その後も破竹の進撃を続けて、七月十九日には、畠山氏の本拠地である高屋城に程近い藤井寺に本陣を置いた。この寺と高屋城までは、約三キロほどの距離しかない。

長慶はまさに物見遊山の気分である。

金銀珠玉で飾り立てた本陣は、戦争のための陣というより、動く宮殿だった。長慶はそこの中にあつて、連日に渡り、能だの狂言だの、様々な演劇鑑賞に明け暮れていた。

けれど、長慶の楽しみは、そんな露骨な享楽よりも、今まさに動きつつある世の中の流れを、側近たちの口から逐一聞くことであつたりした。

「信長はその後どうなつた？」

というのが、最近の長慶の口癖になっている。

「おおよそ今川軍は撤退を終え、織田軍が奪われていた要所を次々と奪回して、信長による尾張統一は名実ともに完了したようです」  
そんな報告に、長慶は「だろうなあ」と、他人事のように呟いて

いた。

今年五月のことだから、二ヶ月前のことになる。かねてより尾張の制圧を目指していた今川義元が、総勢二万五千とも四万とも言われる大軍を従えて、本拠たる駿府を発し、尾張に攻め入ったのである。対する尾張方は、若き織田信長を総大将に、総勢二千とも五千ともいう戦力しかなかった。

下馬評は明らかに今川方の圧勝に決していた。織田方に勝機などあるはずもない、というのが一般的な見方だった。実際、長慶も今川軍が動いたと知った時は、信長には万に一つも勝ち目はないと考えたものだった。

「おそらく、信長の取れる道は二つだろう。降伏するか、あるいは玉砕するか。いずれにしても、尾張の虎と称えられた信秀時代の栄誉は、ここで終わるだろう」

と、呟いていたものである。

だが、蓋を開けてみると、戦いはあらゆる期待と予想を裏切つて織田軍の圧勝に終わった。田楽狭間と呼ばれる土地において、今川軍本隊に奇襲攻撃を仕掛けた織田軍は、激戦乱戦死闘の末に、総大将である今川義元の首を討ち取ることに成功したのである。

結局、義元の油断が最大の敗因であり、それを見逃さず、果敢に攻勢に出た信長の勇氣こそが最大の勝因であった。

「信長、か……。それにしても、あれほど強勢を誇った今川治部も、随分とあっけなく滅びたものだな」

桶狭間で織田軍の圧勝を聞くたび、長慶は何とも言えぬ空しさを感じずにはいられなかった。駿河・遠江・三河の三ヶ国を支配して、東海一の弓取り、などと称えられていたほどの男も、運が悪ければ、ああもあっけなく死ぬのだ。ならば、自分とてそうならないとも限らないではないか……。

世の中というものが、ひどくあっけなく、素っ気無く、空しく思えてきたのも、この頃からだった。人は何のために力を求め、何のために名誉を求めるのか。義元は力を極め、あらゆる名誉を一身に

掴んできたが、あの日の一戦で、全てを失った。己が命も、力も、名誉さえも、一日で露と消えた。

「東海一の弓取りも、一朝のうちに稀代の愚将になってしまった。ははは。世の中とは不思議なものだなあ」

などと呟きながら、彼は思わず苦笑いした。

七月二十二日、河内の大窪において、三好実休軍が安見直政の軍勢を撃破したことが伝わると、長慶は軍を率いて、安見直政の居城である飯盛山城を包囲した。

長慶直率の主力軍は、総勢二万七千である。一方、安見直政軍は僅か三千であった。まともに考えれば、安見軍に勝ち目はない。けれど、長慶は異常ともいえるほど、全軍に警戒を怠らぬよう厳命していた。

「義元とて、信長にやられた。余もそうならぬとは限らぬ」と、長慶は心の中に何度も何度も呟いていた。

義元の二の舞は踏まぬ。ここ最近の彼は、それが合言葉になっている感すらあった。

包囲している最中も、長慶は義元のことをよく考えた。彼は、足利一門の一つに数えられる名門中の名門、今川氏に生まれた。父は北条早雲の甥にして、今川家中興の祖と称えられていた今川氏親である。兄である氏輝の死後、激しい家督継承争いを経て、今川家の惣領となった。その後、巧みな外交戦略を駆使しつつ、勢力を三河に広げ、尾張の織田信秀と激しく争った。一方、長慶は、別に名門の家に生まれたわけではないし、家督争いをしたこともない。けれど、何とも言えず親近感が沸くのだった。

義元が尾張へ出兵したのは、尾張全土を掌握した後、上洛して天下人になることが最大の目的であったとされている。当時から、そういう説は実しやかに流れていたが、しかし現実に考えて、それはあり得ないといえるだろう。何より、例えば尾張を攻略しえたとし

ても、美濃には斎藤、伊勢には北畠、近江には六角といった有力大名が犇（む）いていて、これを何とかしようと思ったとき、二万五千では明らかに足りない。その上、都には、今まさに最盛期を迎えている三好長慶が健在なのである。

長慶は、この当時既に阿波・讃岐・淡路・摂津・和泉・山城・丹波・大和の八ヶ国を完全支配しているし、そのほか、近江・播磨・伊予・丹後・河内・紀伊にも勢力を伸ばしている。一方、義元の勢力は駿河・遠江・三河の三ヶ国である。まともに戦って、勝ち目などあろうはずもない。

それはともかく、三好軍は破竹の進撃を重ねていた。

八月十四日、堀溝（四条畷）において、畠山軍を三好方の池田長正が撃破しているし、十月八日には、三好軍に攻囲されている飯盛山城を救援すべく、畠山方の香西道印、波多野右衛門、木沢新太郎らが出張ってきたが、丹波より来援した内藤長頼軍によって完膚なきまでに叩き潰されていた。

その上、紀伊から現れた根来寺衆徒の大軍も、十月十五日の戦いで撃破している。この戦いにおいて、和泉岸和田城主の十河一存が大いに活躍し、彼は前年、根来寺軍によって味わわされた雪辱を見事に晴らしていた。

ともあれ、畠山方の増援部隊が悉く蹴散らされていくと、畠山高政や安見直政は絶体絶命の窮地に追い込まれることになった。かくして十月二十四日、安見直政は降伏して、飯盛山城を開城した。続く二十七日には畠山高政の立て籠もる高屋城も開城した。

長慶は相変わらず悠々と、とても戦に臨んだ総大将とは思えぬような出で立ちで、高屋城に入った。

既に三好軍の数は七万近くにまで膨れ上がっていた。長慶の下に

は、三好実休、十河一存、三好長逸、三好政康、三好康長といった一門衆のほかに、立花範政、内藤長頼、岩成友通、池田長正ら重臣たちが一堂に会している。

そこで長慶は今回の論功行賞を発表した。というよりは、新たに三好家の領国に編入された河内国を、如何にして支配するのかという基本方針を居並ぶ群臣たちに示したのである。

「高屋城には、実休が入れ」

長慶の朗々とした大音声が響き渡ると、命じられた三好実休は深々と頭を下げ、

「承知いたしました」

と、答えた。

「余は以後、飯盛山城に移ることにする。芥川山城は、わが嫡子義興に与えることとする。以上だ」

専制君主らしく、彼の決定は常に一方的であり、かつ絶対的だった。家臣たちは「はッ」と頷き、応じるしかない。そんな殊勝な家来衆をぐるりと見回しながら、長慶は疲れ切ったような顔をして、溜息混じりに、足早に去っていった。

十一月になり、長慶は早速新たな居城と定めた飯盛山城に入った。彼の発した号令の下、増築工事が盛大に開始されており、そのための人夫が三好政権下のあちこちからかき集められて、城下町は俄かに活況を呈していた。

長慶はそんな城郭の一角で、

「疲れた」

と言つて、雅の方の膝の上にごろりと寝転がった。

「なあ、お雅。義元はあつけなく滅んだ。義元だけではない。九年前には大内義隆が、そして義隆を滅ぼした陶晴賢も、皆、実にあつけなく滅びた。…如何に権勢を握つても、こつちもあつけなく滅びるのでは、人生とは実にあつけないものだと思うにはいられんな」

そんな風に悲しげに呟く長慶に、雅の方は、にっこり微笑むだけで、何も言わなかった。否、言えなかった。こんな長慶は、彼女も始めてみる気がした。どんなときも自信に漲って、先へ先へと歩んできた人とは思えぬほど後ろ向きになっている。

長慶は今年で三十八になる。けれど、ここ最近、彼はめつきり老けて、三十八とはとも思えぬ容貌になっていた。一方、雅の方は三十七になるが、長慶とは対照的に、まだ若々しさを保っていた。二十台といわれても、嘘とは思わないだろう。全身に、瑞々しさが残っていた。

「なあ、俺はこれからどうなるのだろう。ひとたび栄華を極めると、後は落ちるだけ。満ちた月は、欠けるのが宿命だ。…余も似たような運命を辿るのかのう」

いつからだろう。気がつけば、三好長慶という人は、力を得れば得るほど、それに反比例するかのように、精力、体力を失っていった。雅の方とて、気持ちは分かるのだ。如何に強大な権勢を握っても、容易くは思い通りにならぬ現実。力を握れば握るほど、人間のできることの限界を思い知らされる。無理だと分かれば分かるほど、次第にやる気を失っていく。

長慶は無気力感に苛まされていた。最近では、政治の一切を立花範政に委ねてしまって、彼は風流三昧に明け暮れている。

「御屋形様は天下人にございます。それに、御歳も三十八にございます。まだまだお若いのです。頑張りましょう」

と、雅の方は必死になつて励ますのだが、長慶は「そうだな」と、力なく呟くのみであった。

時は永禄四年（一五六一年）。

天下人三好長慶は、いながらにして近畿地方全土を支配し、かつ日本全国に絶対的影響力を及ぼしうる戦国屈指の大権力者になりおおせていたが、今の彼は自らの覇業の終着地に築き上げた壮麗壮大な大宮殿たる飯盛山城の奥深くに鎮座し、わずかな側近と親しい人間を除いて誰にも会おうともしない、いわゆる引きこもり人間になり下がっていた。世界との接触を断ちきり、三十九歳の若さにして早くも御隠居生活を送る気満々の彼は、將軍家からの使者が来ても「そうか」の一言で済まし、自らその使者の口上に耳を貸そうとはしなかったのである。

とはいえ……。

長慶がいくら墮落しようとして三好政権そのものは早々容易く揺らぐものではなく、形だけなら三好政権の実力は成立以来絶頂に達しようとしていた。事実、幕府や朝廷も彼と三好氏の権勢ぶりを無視することはできなくなり、特に長慶と長年にわたり対立してきた將軍足利義輝などは、彼の嫡子である義興までも御相伴衆に任命して御機嫌取りに腐心している始末だった。また朝廷にしても自らの庇護者となっっている三好氏を軽んじることなどできようはずもなく、議論の末、三好父子に対し桐の御紋の使用を許可すると言う破格の処置をとることにしたのであった。ちなみに桐の御紋というのは、鎌倉時代より皇族の御紋の一つになっていたほどの由緒ある代物で、皇族以外では唯一足利將軍家のみが使用を許されているものである。武家では將軍家のみで使用が許されている家紋を使用することが許された……とは即ち、朝廷が三好氏と將軍家は同格的な存在であるとみなしたことの格好の証明であり、また朝廷にそうだと認めさせられるだけの實力を三好政権が備えているのだと言うことを満天下に示すに十分な事件ともなった。



このところの三好政権は長慶というよりその嫡子である義興が主導するようになっていた。幕府御相伴衆に列し、従四位下筑前守でもある義興は今年で十九歳になり、その武勇や聡明さは朝廷や幕府でも評判となつているほどの貴公子だった。

長慶は飯盛山城にあり、義興は芥川山城にいる。言ってみれば三好政権の権力構造は飯盛山と芥川山の二つに分かれた形……、即ち二元政治状態となつたわけで、これは普通に考えれば非常に極めて危険な状態であると言わざるを得なかった。古来より権力が分散したがために対立し、崩壊に至つた国家や組織の例は非常に多いわけで、下手をすれば三好政権もそれらと同じ末路を歩むことになつたかもしれないのである。

だが事実はその可能性を単なる杞憂で終わらせた。というのも最大権力者である長慶は義興にかなりの裁量を委ねていたし、一方の義興は父を大いに尊敬し、決して軽視したりはしなかったため、二元政治といつてもその弊害は一切出なかったのである。要するに特に口出ししない長慶に、常に長慶の顔を立てる義興という構図。二元政治の良い点のみを抽出した完璧な体制の下に今の三好政権は運営されていたというわけである。まあ、逆に言えば、長慶の政治意欲がどれだけ低下しても三好政権そのものが不動の地位を保ちえたのは、彼の権力のかんりの部分を、既に義興が代行するようになっていたためだともいえる。

とはいえ義興もまだ若い。如何に聡明と称えられている貴公子といえども、父の如くたった一人で政権を動かすほどの力はない。ゆえにそんな彼を補佐し支えているのが義興付家宰となつた立花範政であつた。かくして範政は三好父子の絶対的信任を背景に事実上三好政権を牛耳るようになった。無論、何かにつけて用心深い彼は、岳父である三好長逸をはじめ、三好政康、十河一存といった有力一門の根強い支持を取り付けて己が権力基盤の強化に努めていたわけだが、長慶・義興父子、特に権力を握つた義興の信任を受けている

以上、彼の権勢は凄まじいほどに絶対的なものとなっていた。

三月に入った頃、室町幕府第十三代征夷大將軍足利義輝は、権勢を極める三好長慶に招かれる形で彼の京都屋敷に赴くことになった。と言ってしまうと実にあっけない話に思えるが、実態はともあれ形の上では將軍家の重臣である細川家の重臣、即ち陪臣に過ぎない三好家の屋敷に將軍が赴くなど、長い室町時代を通じても実に異例中の異例の事態であるといつてよかつた。

ただ、もはやそんな名分論など問題にならぬほど三好家は権勢を極めていたのである。さしもの義輝も長慶から直接「来てください」と言われれば、断れるような力など持ち合わせてはいなかつたのだつた。

かくして將軍御成の実務を取り仕切ることになった松永久秀、三好長逸の二人は、幕府側の担当者である伊勢貞孝、上野信孝、大館晴光らと協議を重ねて、とりあえずその『御成』の日を三月三十日とし、準備を整えることにしたのだつた。

御成の日の京の町の空には、ちょうど青々とした快晴が広がり、町全体が爽やかな春風に包まれていた。全てを祝福するような自然の恵みは、一つの時代が頂点に達したかのような満足感と虚無感に溢れていた。

二十六歳になつた將軍義輝は、立烏帽子・檜皮色袴・同色しじら香直垂袴という服装で、塗輿に乗つて剣持を勤める細川藤賢らを従えて將軍御所を発した。そして伊丹親興、三宅国村、池田長正らが警備する通路を経、午後二時頃に立売町にある三好屋敷に到着したのだつた。

一方、三好屋敷では三好義興が三好長逸や三好政康らを従え、屋敷の北門にて將軍一行の到着を待ち構えていた。

將軍の輿が到着すると、三好義興らに案内されて義輝は屋敷の奥深くへと入つていった。大広間には三好長慶のほか、管領の細川氏

綱も控えており、彼らが恭しく平伏す中、義輝は大広間の上座に着座したのだった。

將軍に従ってやってきたのは、御相伴衆に列する有力公卿の勸修寺一位尹豊、広橋大納言国光、飛鳥井中納言雅教、高倉宰相永相らであり、彼らは將軍から見て左側の列に着座した。また右側には細川氏綱、三好長慶、三好義興が座っている。そのほかこの大広間に続いた北の部屋には、將軍に随行してきた御供衆や諸侯衆が集まり、この部屋の西隣には女房衆が列座した。女房衆の中には、三好長慶正室の遊佐御前や、側室筆頭の雅の方、さらには三好義興の正室らも加わっていた。

宴は始まった。

まず三好義興、細川氏綱、三好長慶、松永久秀、三好長逸、三好政康らが順番に太刀を主とした品物を將軍に献上した。それが一通り終わると、今度は大広間に面した庭に予め設けられた舞台で盛大な能やら狂言などが催され、その豪華絢爛さに將軍以下幕臣たちは、どれも度肝を抜かれていた。

昼頃は大いに晴れて、一寸の曇りなき青空が広がっていたが、夕刻を迎え、夜が次第に深まっていくにつれて、次第にはらばらと、不穏で不気味な黒き雨が降り始めた。

依然として式典は盛大に続けられて、歌舞音曲は都中に響き渡っている。將軍も管領も、今日ばかりは全てを忘れて、大いに楽しみ、大いに喜び、大いに盛り上がっていた。時折、

「よいぞ！ やれやれ」

と、少しばかり下品な声援も飛び交ったが、酩酊しきった將軍や管領の発した言葉だと分かれると、誰も何も言わなかった。

そんな中で、一人長慶は浮かぬ顔だった。酒を飲んでも、能だの狂言だの、いろいろ見ても、やはり退屈そうに欠伸していた。彼はただ、ジッと義輝を睨んだり、氏綱を見たりしている。無邪気に喜んでる彼らを見ては、ハアと溜息を吐くのである。

そんな長慶の不満そうな態度が、唯一の気がかりとなったものの、基本的に式典は大成功のうちに終わった。義輝や氏綱は、改めて三好家の盛大さを思い知らされたわけで、酔いが醒めると同時に、それまでの高笑いが嘘のような恐怖に包まれるようになった。

四月一日。

足利義輝は將軍御所へ戻り、都には再び常の如き平凡な日々が戻った。けれど、將軍家をも自邸に招き、その権威権勢の凄まじさを満天下に示した三好政権の勢威はますます高まっていた。中には將軍家さえも屈服させたのだと、実しやかに語り合う都人もいたぐらいいであった。とにかく何から何まで前代未聞のことであったから、人々は固唾を呑んで、今後の情勢を見守っているといった感じだった。

四月十九日になると、河内高屋城にあって、河内国を治めている三好実休入道（義賢）が幕府の御相伴衆に任じられている。これもまた三好政権が大いに強大化したことを表す、一つの具体的な例であるといえた。

そうこうして、五月になった。

京屋敷にて、長慶は栄華の余韻に浸っていた。連日茶会や歌会などを開いて、招いた客に、自分の権勢の凄まじさを見せ付けている。贅の限りを尽くした茶器などを見せびらかしたりするのが、今の長慶の最大の趣味になっていたのだった。

そんな長慶の下に、側近の伊沢大和守がやってきた。それが五月五日のことであった。

「細川晴元殿が都にまかり越した模様です」

と、大和守は言う。長慶は「そうか」と、淡々と答えたのみである。

「目下、若殿がお出迎えしておりますが、如何いたしますか？」

開かれた障子の向こう側から、散り遅れた桜の花が、ぱらぱらと舞い込んでくる。伊沢大和の言葉などほとんど上の空で、長慶は自らの足元に落ちた、桜色のそれを拾うと、思わずにんまりと微笑んだ。

「御屋形様！」

大和が強い口調で問うと、

「…そうさな。とりあえず、余の下につれて来い」

長慶は少しばかり慌てたように、けれどきっぱりとした口調で、そう命じたのだった。

細川晴元が長慶の屋敷にやってきたのは、五月六日のことである。かつての天下人も、今や四十七歳になった。白髪白髭が際立ち、その風貌は、明らかに実年齢を上回っていた。あくまで長慶に立ち向かわんと気概を燃やしていた頃の精力は既になく、今更恥も外聞もないのか、かつての家臣の前に恭しく頭を下げていた。

「この度は修理大夫殿の御厚恩により、御目通り叶いましたこと、感謝に耐えない次第です。…つきましては、以後のことは修理大夫殿に御一任いたしますが、できうれば、隠居料など賜って、しがなき余生を過ごしたいと思っております」

と、弱弱い口調で、晴元は言うのだった。もはやそこにいたのは、かつての天下人でも、長慶の宿敵でもなく、精も根も使い果たして、ほとんど抜け殻となった哀れな廃人だった。

長慶は上座からまじまじと見下ろしていたが、そんな彼の様に呆れつつも、無性に同情を感じた。結局、権力を極めても、こういう末路しか歩めないのが人間なのだと思うと、長慶の中で、また一つ、何かが音を立って崩れだしたような気がした。

晴元は深々と平伏して、長慶の判断を待っていた。殺すも生かすも長慶次第である。ただ、既に彼に、晴元を殺す気は更々なかった。「よかるう。…晴元殿は前管領であるし、余のかつての旧主でもあ

る。隠居がお望みとあらば、叶えてつかわそう。とりあえず、摂津富田の普門寺に入るがよい。沙汰は追つてする」

と、長慶は言つて、にっこりと微笑んだ。

「承知いたしました」

晴元は再び、仰々しく頭を下げる。

なんとも、隔世の感があつた。

諸行無常、盛者必衰……。よく言つたものである。かつて栄華を極め、天下人と称えられていた細川晴元は、かくして三好政権の軍門に降り、怒涛の如き歴史の渦の中に埋没していった。彼が死ぬのは、これから二年後の永禄六年（一五六三年）三月のことである。管領として、細川京兆家当主として、戦国初期にその名を轟かせた男も、死ぬ時は実にあつけなく、また空しいものだった。

また晴元の死から約一年が過ぎた永禄六年（一五六三年）の十二月には、晴元に代わつて京兆家当主となつていた細川氏綱も没している。結局、最初から最期までずっと長慶の傀儡に甘んじ続けた哀れな男は、管領でありながら、誰の注目を集めることなく、ひっそりと死んだのである。これもまた実に哀れであり、隆盛を誇つた細川家の没落を決定付けたといつていい。

ともあれ、晴元が降伏したことで、彼に最後まで付き従つていた重臣たちも、続々と三好長慶に降伏していった。即ち、三好政勝や香西元成らである。特に三好宗三入道の遺児として、ひたすら長慶と対立し続けてきた政勝の降伏は、歴史の移り変わりを象徴しているようで、不思議な感じがしたものだつた。

「そなたも元々は三好一族の一人。以後は余を支え、三好家の発展に力を尽くせ」

長慶はそう言つて、積年の宿敵の帰参を快く許した。

「ありがたき幸せにございます」

政勝は深々と頭を下げ、その言葉で、態度で、長慶と三好宗家に

対する絶対の忠誠を誓っていた。

ただ…。

不甲斐無き晴元、氏綱に代わって、細川家を守らんと、その隆盛を取り戻さんと、ひたすら気概を燃やしていた青年もいた。いくら落ち目になろうとも、かつての長慶の如く、虎視眈々復権を目論んでいた若者もいたのである。

彼の名を細川晴之と言って、晴元の次男である。まだ十歳と若い  
が、気骨溢れるこの貴公子は、晴元の降伏を潔しとせず、近江に留  
まって、相変わらず六角義賢の庇護を受けていた。

【衰運編】第093章 不吉な死

十河一存という人は、三好長慶の末弟であり、かつ讃岐の有力国人十河氏の当主である。三好政権の強勢を背景に、讃岐一国を完全に従え、その勢力を伊予にまで広げていた。今のところは、長兄長慶の命もあり、岸和田城主として、和泉一国を統治している。讃岐のことは、とりあえず息子である重存しげまさ（後の三好義継）に預けてあるが、まだ十歳と幼いので、その補佐は兄である三好実休や安宅冬康に委ねていた。

官位は正五位上民部大輔である。

年齢は今年で三十一歳になる。まだ若い。

剛勇無双で名高く、異名は鬼十河。家臣団からの信頼信望は厚く、家中では彼の髪型を十河額などと言って、真似するのが流行になったりしたほどだという。ともあれ、十河一存はその圧倒的な武勇で、軍事面から長兄長慶を支え続けてきた、一門衆の大功労者だった。

そんな彼だが、このところ病に倒れることが多くなった。全ては二年前の根来寺衆徒との戦いで受けた弾丸傷が原因であったが、一存自身は大したことはない、常に強がって、家臣たちが制止するのも聞かずに無理に無理を重ねたので、ここ一挙に病状が悪化してきたというわけだった。

特に、足利義輝の接待が終わってしばらくたった四月中頃から、彼の病状は深刻化した。よく昏倒して、意識不明の重態に陥った。そのたびに、その凄まじき生命力で息を吹き返したが、侍医の診察によれば、これ以上無理を通せば、長くないとのことだった。

「このままでは殿は誠に死なれてしまうぞ」

と、家臣たちは口を揃えて危ぶんでいた。

何しろ、和泉の統治というのは、大役であると共に、難役でもあ



った。堺衆との折衝から、気難しい国人たちの統御、さらには紀伊に跋扈する反三好勢力の討伐など、やらねばならぬことは山の如く積み重ねてきた。長慶としては、実弟であり、かつ武勇の誉れ高い彼ならば、国人たちを纏め上げ、かつ紀伊からの脅威に対抗できると思ひ、配置したのであるが、病状の深刻化する一存には、「死ぬ」と言っているようなものであった。

「ここは御屋形様にお頼みして、殿を讃岐に戻すより他に手はあるまい。少なくとも、こんな大役を勤めていては、尋常の人とて、いくら命があっても足りんというに、今の殿の御状態では……」

家臣たちの考えは至極尤もであり、主君を思う忠臣としては当然の思ひだった。

だから、彼らの忠言に接した長慶は、主君として……、というよりは兄として、純粹に弟の身を案じて、自らが主治医としている曲直瀬道三を岸和田城に送り込んだのである。

道三の見立てでは……。

よほど病状が深刻化しているらしく、一刻も早い養生が不可欠とのことだった。長慶はその急報を受け、さすがに慌てていた。万が一にも、一存の身にもしものことがあつては、三好政権にとって大損失であるばかりでなく、何より長慶自身が一番辛かった。

「されど、殿は依然として強がられ、仕事に励むといきり立っている次第にございます」

泣きつくような十河家家臣たちの言葉に、長慶は困ったように苦笑した。

「馬鹿な奴だ。仕事も大事だが、それ以上に己が身のほうがもっと大事であるように……。くそ……。奴の身に万一のことがあつては一大事だ。ここは何とかしなければならん」

長慶は、とりあえずすつくと立ち上がって、落ち着きなくあちこちを動き回った。どうすればよいのかと、必死になって考えている。

そして何やら思いついたのか、彼はパンパンと手を叩くと、姿を現した小姓たちに、

「筆と紙を持って！」

と、命じたのだった。

すらすらと、流れるように文を書く。大林宗套直伝の字体は、なかなかに見事で、陰ながら文弱と評されている彼の名に恥じぬ腕前であった。

「弾正！」

全てを書き終わると、長慶は、ちょうどそこに控えていた松永弾正久秀を呼びつけて、それを手渡した。

「とりあえず、お主にこれを授ける。何としても又四郎…、民部を説得し、養生させるのだ。さしあたって、奴はかねがね有馬温泉に行きたいなどと申しておったから、湯治に行かせるのも一つの手である。とにかく、お主の手で、何としても奴を説得しろ」

「…それがしが、ですか」

弾正は戸惑った。無理もない。十河一存の弾正嫌いは、三好家中では知らぬ者はいないほどに有名だった。その程度のことは、長慶とて承知しているだろう。なのになぜ、自分にそんな大任を任せるのだろうかと、弾正久秀がいぶかしんだのも無理はなかった。

「ふん。とりあえず、奴が余の命に叛きそうなら、引つ叩いても養生させる。縛り上げたっていい」

「…し、縛り上げるのですか？」

「そうだ。それくらいのことをせねば、奴は余の言うことを聞かんだらう。そして、又四郎を恐れず、そんなことができるのは、お主と少将（立花範政）ぐらいのものだが、生憎少将は倅の補佐で忙しい。ゆえに、お主に任すのだ」

物は言いよう、事は考えようである。確かに、十河一存の強情を動かすには、それぐらいしか方法はないのかもしれない。実際、自分なら徹底してやるだろうと思う。三好一門だからとか、長慶の弟だからとか、そんなことは気にしない。長慶の命なら、それを徹底

的に履行するだけである。

老けたように見えて、まだまだ聡明な長慶の様に、弾正はにたりと笑った。

松永久秀が岸和田城にやってきたのは、四月二十日のことである。長慶の敵命を帯びている。そういうとき、彼はなんにでもなれるような気がした。

久秀は悠々と城門をくぐると、十河一存の居所に赴き、抵抗する彼を強引に縛り上げて、半ば強引に養生させてしまった。

「何をする！」

と、一存は凄まじく反発したが、

「御屋形様の上意である！」

弾正が強い口調で、はつきりと言いつけると、一存は「ぐぬぬ」と唸った。その証として、長慶直筆の朱印状を示されると、

「ふん！」

と、腹立たしそうに鼻を鳴らしながらも、やむなくそれに従うことにしたのだった。

そして二十一日。

病に効くというので、看護役とされた久秀は、一存を駕籠に乗せて、はるばる有馬温泉まで連れていった。総勢五百に及ぶ軍勢を従えての小旅行であるから、近隣の人々は何事かと危ぶんだが、戦ではなく、権力者たちの趣味に過ぎないのだと分かると、彼らは呆れたような顔をして、その後姿を見送っていた。

二十二日。

一行は有馬温泉に辿り着いて、一存は病を癒すため、その他の者たちも旅の疲れを癒すために、それぞれ温泉へと入った。

この日、一存は比較的快調だった。

このところ、数日前のように倒れこむことも、意識を失うようなこともなかった。すこぶる元気があって、彼の機嫌も大いによかった。唯一、松永弾正が側にいるというのが、彼の反発を誘ったが、それはそれで、弾正に情けなき姿を見せたくないという強い気概に繋がりが、決して悪い話ではなかった。

「あの調子ならば、大丈夫だろうな」

と、久秀も呟いていたほどである。

「されど、民部大輔様は、言ってみれば殿の政敵。いっそこで、万一のことあらば、殿にとつては…」

そんな風に側近の林若狭守などは呟いていたが、それを聞くなり、久秀はムツとしたような顔で、

「たわけ！ 声が大きい」

と、たしなめていた。

「それに、こんなところで万一のことがあれば、わしが疑われるではないか。そんなことになれば、御屋形様の御信任は一朝の下に費えよう。…今は、とりあえず奸智は弄さず、正々堂々、正攻法を歩むが上策だ」

「…申し訳ありません」

若狭守はすかさず頭を下げたが、本気でないことは一目見ればすぐに分かった。不敵な笑みをその面に浮かべて、ニタニタと性懲りもなく笑っている。そんな彼を見て、久秀もまた呆れたように苦笑いした。

久秀はその日の夜、一存の下に赴いた。

布団の中に包まって、大人しく寝込んでいる彼は、とても鬼十河と恐れられた人とは思えなかった。神妙な顔で、病魔と闘っている。そんな彼が、何とも言えず、哀れに見えた。

「病に貴貧なし、か…」

などと呟きながら、彼は一存の枕元近くに腰を落とした。

「弾正、か…」

一存はムツとしたような顔で、冷たく言い放った。

「はッ！ 松永弾正少弼久秀にございます」

久秀は深々と頭を下げて、恭しく言った。

「…弾正少弼、か。ふん、長兄も随分とそなたには甘いことよ。どこの馬の骨とも分からぬそなたに、従四位下を許すのだからな。わしですら正五位上だというに…」

一存は何から何まで不満であると言わんばかりの顔をして、久秀をぎろりと睨み付けた。

「御屋形様より賜りし御厚恩は、この弾正、一日たりとて忘れたこととはありませぬ。この身命を賭しても、御屋形様の御為に働く覚悟にございます」

「…身命を賭して働く、か…。俺も、できればそうしたかったが、そうもいかん」

一存は苦々しげに顔を歪め、そしてぴんぴんとしている久秀を恨めしげに見つめた。

「俺はまだ三十一。三十一なのだぞ。なのに、なのに、何ゆえ死なねばならぬ。何ゆえかような病に倒れねばならぬ。…そなたは五十を超えたと申しておったが、何ゆえ俺のほうが先に…」

弾正久秀は、今年で五十一になるが、そうとは思わせぬほどの若々しさを依然として保っている。一方、一存は三十一と、久秀より二十歳も若い、このところの病のためか、久秀よりも老け込んだように見えた。

「まあ、よい。ここに弾正しかおらんのも、一つの定めだろう。弾正。お主に申し聞かせておくことがある。しかと聞け！」

「はッ！」

一存の言葉に、久秀はすかさず頭を下げた。

「お主は長兄により取り立てられた。長兄なくば、どことも分からぬ馬の骨に甘んじていたことを忘れるな。…俺を含め、多くの者たちから嫌われながら、ついに大和一国の国主となったのは、お主の

力量もさることながら、長兄のおかげぞ。…長兄のために身命を賭すと、お主は言った。その言葉に嘘偽りはないな。必ずや長兄を守り、その後は孫次郎殿を支えて、三好が家の繁栄に勤めよ。俺に出来ない分、お主に全てを託す。不本意だが、お主に全てを託す！」

散々久秀を忌み嫌って、その排斥を目論んでいた男の遺言としては、ひどく一方的であったが、久秀は、

「無論のことにございます」

と、相変わらず恭しく、自分と言う存在を押し隠しながら、従順に頭を下げていた。

「…ふん。お主の、そういう本性の分からぬところが、俺は大嫌いだったのだ。それに比べれば、幾分分かりやすい立花少将のほうがマシというものだ」

そんな風に言う一存に、久秀は恥ずかしそうに頭を掻いた。

十河民部大輔一存の容態が急変したのは、翌日、即ち四月二十三日のことであった。

この日の朝、彼は少しばかり頭が痛い、布団から離れようとはしなかった。状況が状況なので、側近たちは早速侍医を呼び、診察させた。侍医はとりあえず養生が一番と断言するので、家臣たちは彼を起こすこともせず、ただ様子を見守ることにしたのである。

そんな家臣たちが異変に気づいたのは、昼頃のことである。

「おい、殿の息がないぞ」

と、交代要員として看病にやってきた家臣が、すやすやと眠る一存の異変をいち早く察知した。

「な、なんだと？」

ぞろぞろと家臣たちが集まってきた。「何事だ？」と、皆、慌てふためいている。

控えていた侍医もすぐにやってきた。けれど、このときすでに、一存に息はなく、脈もなかった。

侍医はそれを確認すると、無念そうに顔を歪めながら、神にも縋るような顔をして診断結果を待つ家臣たちに向かって、

「残念です」

とだけ、搾るように言った。

正五位下民部大輔十河一存が薨去したのは、永禄四年（一五六一年）四月二十三日のことである。享年三十一。

三好家を軍事面で支えてきた一門衆の大功劳者の、余りに若く、余りにあつけない死であつた。

そして、この死は、栄華の絶頂にあつてあがいていた三好政権を、奈落の底へ突き落とす、衰運の序章となつた。一存の死後、僅か数年の間に、次から次へ三好家一門に訪れる不幸など、この時は誰も知る由もない。

一存の死で、一つの時代が終わつた。それだけは、紛れもない事実であつた。

【衰運編】第094章 権力争い

思わず、箸を落とした。

そのとき、彼が何を言っているのか、全く分からなかった。頭の中が混乱して、一種の放心状態になった。

晩飯に手を付けている最中のことだった。伊沢大和守が慌しく駆け込んできて、急報を告げた。

「バカな」

と、言ったのみで、三好修理大夫長慶はそれ以上、何も言わなかった。

大和守は真面目な顔をしている。続いて、松永久秀や十河家からの急使が次から次へと現れて、どれも面白いほど真面目な顔で、面白いほど同じ事を告げていた。

長慶は、何が何だか分からなくなった。いや、分かりたくなかった。受け入れたくなかったのだ。

彼はがっくりと腰を落とすと、膳を下げさせ、人も追い払うと、たった一人その場に蹲った。

「ま、又四郎が…。又四郎が、死んだ…」

その瞬間、全てが壊れたような気がした。あの剛毅で、逞しかった弟が、病のために命を落とした。戦場でもなく、畳の上で…。生涯武人。死ぬなら戦場と、日ごろ豪語していた彼らしくもなく、あつけなく凡人らしく死んだ。

長慶は全てが信じられなかった。家臣たちが、皆ぐるになって騙しているのではないかとさえ思った。まさか、と思う。思えば思うほど、嘘だと思う。いや、嘘だと思いたかったのだ。

十河一存の死は、繁栄の極みにあって、絶頂を謳歌していた三好政権の根底を覆すだけの凄まじき影響があった。



ともあれ、辛うじて正気を取り戻した長慶は、一存の遺児となつた孫六郎重存を自らの手で扶育することにした。まだ十歳なので、当然といえば当然の処置であつた。ただ、十河家の家督を承継したこの少年を自らの手元に置いたのは、単に幼かつたから、という理由だけではなく、長慶の養子も同然の待遇とすることで、十河家の家格をさらに高めてやろうという彼の配慮があつた。それがせめてもの一存への供養だと、長慶は思っていたのだつた。

また十河家旧領の讃岐は、重存に与えつつも、安宅冬康を後見役として、事実上藩政の実権を握らせた。また一存が城主を務めていた岸和田城と、彼が治めていた和泉国については、河内高屋城主としてある三好実休に委ねることにした。

こうして十河家の仕置は終わったが、一存の死がもたらした政治的影響というものは、そんな程度で解決するほど生易しい問題ではなかつた。

即ち…。

十河家家臣団のうち、松永久秀に批判的な過激派が、主君は弾正久秀により暗殺されたのだという奇説を、実しやかに訴えるようになった。当然、濡れ衣を着せられた形となつた久秀は、大いに反発し、たちまち家中は二つに割れた。十河一存と同様に、久秀に批判的だつた三好長逸や三好政康ら一門衆は、

「彼の関与があつたかなかつたか、とりあえず調べる必要がある」と言つて、彼への疑いを隠そうともしなかつた。

久秀による十河一存暗殺説の出所は、立花範政であつた。

そんなことは、少し調べればすぐ判明した。範政が十河家家臣団を唆して、言わせていることであつたが、何はともかく、久秀は一存最期の夜、紛れもなく二人きりになつてゐるわけで、そこで彼が何らかの謀略を弄したのではないか、と疑われても仕方はなかつた。

「少将めッ!」

久秀は飯盛山城下の松永屋敷で、憤懣やるかたない怒りのやり場に困っていた。

「とりあえず、御屋形様に釈明しておいたほうがよろしくはありませんか？」

と、彼の息子たる松永久通は恐る恐る言った。

今年で、久通も十八歳になる。なかなか聡明で、久秀自慢の息子であった。そんな彼の言葉に、

「そうよなあ」

と、久秀は静かに頷いた。

長慶とて、馬鹿ではない。よもや、久秀が一存を殺した、などという流言を本気で信じるはずもなかった。

「ははは。いちいち釈明に来るとは殊勝だが、もしもその方が誠に又四郎を殺すほど愚かな男なら、余は元々そなたを重用したりはせぬ。あの状況では、どんな姦策を弄そうとも、お主が一番の容疑者となるからな。それに、又四郎の病は重かった。殺したいと思っていたなら、あえて殺すまでのこともないだろう」

と、長慶は言つて、からからと笑った。なんとも、壊れた人形のような乾ききつた笑みに、久秀は悲しくなったが、けれど、主君から絶対的な信頼を寄せられていると言うのは、何よりも嬉しいことである。

「有り難き幸せにございます」

と、彼は恭しく頭を下げて、本心からそう言った。

「ただなあ……。此度の一件で、又四郎を慕っている面々が大いに騒ぎ出している。余が口だけでお主は悪くない、と言つても、奴らは信じまい。ただでさえ又四郎がいなくなつて、家中一致団結せねばならぬ折、これを放置しておくのは、よくない」

「はッ……」

なまじ自分に関わる問題だけに、久秀は何も言えなかった。長慶

が何と言わんとしているのか。久秀は、主君の一挙手一投足を必死になつて見守つていた。

「ゆえに…。ゆえに、余の娘を、お主の倅久通に嫁がせようと思つが、どうだ？」

「…お、御屋形様の姫君様を、ですか？」

これには、さしもの久秀も大いに驚いた。姫、と言つて、長慶には姫はたった一人しかいない。余り子沢山とはいえない長慶なのである。正室、側室含めて多くの女性と関係を持った彼であつたが、生まれた子供は、嫡子義興と、この姫一人だけだつた。そして、その姫の母親は雅の方であり、立花範政の姪にあたるのであつた。

「…されど、倅久通には既に正室がおります。無論、御屋形様たつての御命令とあらば、離縁させても、倅の妻に迎え入れたく存じますが…」

主君の姫を降嫁されるというのは、久秀にとつて、そして松永家にとつても大いに栄誉なことであつた。即ち、三好家と松永家は縁戚関係となるわけで、晴れて久秀は三好一門衆の一人に列することになるのだ。これ以上の出世が他にあるだろうか。

だが、気に入らないのは、姫の母方の血筋が、久秀にとつては宿敵ともいえる立花家のものだという点であつた。特に、立花範政は、久秀にとり、最大の政敵となつてゐる。彼の血を受け継ぐ者を松永家の嫁に迎えるなど、断じてあつてはならぬことだつた。

「そうか、正室がいたのか。…で、その正室は何と申す？」

一方、長慶は少しばかり残念そうな顔をして、そう尋ねてきた。

余りごり押しするつもりはないらしい。そんな主君の繊細な感情を敏感に察知すると、久秀の中に渦巻く迷いは一気に増幅し、歯止めが利かなくなつてきた。

「大和の国人十市遠勝の娘で、おなへと申す者にございます」

「おなへ？」

「はッ！」

久秀の言葉に、長慶は困つたように、ハアとおもむろに溜息を吐

いた。

「ともあれ、正室がいたのでは、ごり押しはできんなあ。それも十市家の姫か。…ごり押ししたら、十市家は面白くなかろう」

長慶は、かつて政治的配慮の下で正室を追い返した結果、根強い敵となった波多野家のことを思い出していた。家中を固めるためと称して、外部に根強い敵を作ってしまうのでは、余り上策とは言えなかった。

「されば御屋形様。その姫君様を、それがしの正室に貰いとう存じまする」

「な、なに、そなたの？」

これにはさしもの長慶も驚いた。素つ頓狂な声を張り上げて、まじまじと久秀の顔を見つめている。

松永久秀。今年で五十一歳。

一方、長慶の姫は今年で十八歳である。まるで釣り合わない。何と言っても、長慶自身、未だ三十九歳なのである。自分の父親を遙かに上回る年齢の男が夫になる、などといえれば、姫はなんと思うだろう。

ただ、久秀には今のところ妻はいない。久通の母となった正室は、もう五年も前に死んでいた。以来、妾はいても正妻はいないのである。そういう意味では好都合な気もしたが、娘を思う父親としては、複雑な気持ちをしえない長慶であった。

「まあ、いい。ともあれこの話は保留だ」

長慶は苦りきった顔をしてそう言うと、久秀はニヤニヤと相も変らぬ不敵な笑みを漏らしつつ、

「御意のままに」

と、言った。

だが…。

十河一存の死を契機として吹き上がった松永派と反松永派の対立

は、三好家そのものを根底から揺るがしかねない大事件へと発展しかねない危険性を孕んでいた。特に、反松永派の筆頭格として立花範政が浮上してくると、彼の栄達に反発する者たちが弾正久秀を支持するようになり、対立は一挙に激化<sup>エスカレート</sup>していった。

長慶としては、至急の打開策を講じねばならず、そのための一策として、松永家への姫降嫁は、目下取りうる現実的な策となっていた。

「弾正様に嫁がせるのですか」

母親として、雅の方は大いに反対であった。

「…いや、弾正でなくとも、久通でもよいのだが…」

長慶はそう言って、頭を掻いた。

「久通殿、ですか。…それならば、私としては、別に…」

雅の方の感情も、少しばかり収まった。久通は今年で十八である。姫も同じ年だから、五十一歳の久秀に嫁がせるよりは幾分マシであった。

「だが、久通には既に正室がいるわけだしなあ」

「正室、ですか」

「ああ。弾正には、正室はいない」

などという長慶に、雅の方は露骨に嫌そうな顔をした。

「されど、弾正様は女癖が非常に悪いと評判のお方でございます。陣中に女子を伴って、遊んでいるとか、攻め落とした敵の姫や、領民の娘など、片っ端から略奪して、慰み者に行っていると、いろいろ噂があるではありませんか。…娘を左様なお方の妻になど、母親としては不承知です」

過去に例がないほど、きっぱりとした口調で断言する雅の方に、長慶は意外そうな顔をした。

「そうか…」

長慶に返す言葉はない。松永弾正の悪行については、彼も知らないわけではなかった。無論、不快であったことは言うまでもない。けれど、その一方でしっかりと功績を挙げているのだから、あえて

目くじら立てて咎めたてる必要もないだろうと、長慶はずっと大目に見ていたのである。

長慶は困った。困って、悩んで、迷って……。その末に、やむなく決断を下した。

かくして五月二十三日。奇しくも十河一存の死から僅か一カ月後のことであるが、自らの姫を松永久秀の妻とすることにした。久秀か久通か。いずれにしても松永家に降嫁するに違いないとは思いつながら、下馬評はほとんど歳の近い久通で一致していたから、明らかになった長慶の意に家中は大いに驚き、ざわめいた。他ならぬ久秀もまた意外そうな顔をしていたが、何より主君の娘である。大いなる栄誉と、実に嬉しそうな顔をして、ニタニタと笑っていた。

「弾正殿、ようござったな。これで晴れて三好一門に加わられたわけだ。同じ御屋形様に仕える者として、心よりお祝い申し上げる。また以後は、我ら両家は縁戚ということになり申す。よろしくお願いいいたしますぞ！」

ぞろぞろと重臣たちが退出を始める中、立花範政は言葉とは裏腹に、余り嬉しくなさそうな顔をして、久秀の側に歩み寄ってきた。「左様か。いや、こちらこそよろしく」

冷たく醒め切った笑顔で、弾正久秀は少将範政を睨みつけた。範政には、そんな久秀の態度が気に入らない。

「あ、そうだ。十河民部大輔様の一件でござるが、あれは、それがしの早とちりだったようで、誠に申し訳ない。やはり、噂なるものは、如何に信憑性があるうと容易く信じてはいかんものなんですなあ。それがしも弾正殿ほどの御方が、露骨な手で民部様に手をかけるなどとは思っておりませんでした。ただ状況が状況ゆえ、つい誤ってしまいました。ははは。誠に申し訳ない。それがしの浅慮

で、弾正殿に濡れ衣を着せてしまいかねなかった。ははは」

これほど人を小ばかにした態度が、他にあるだろうか。久秀はわなわなと震え、その内心はふつふつと煮え滾っていた。ただ、久秀もさる者。この程度で、己が感情をぶつけるほどに若くないし、甘くもない。

「いや、濡れ衣が晴れたようで、それがしとしても大いに喜ばしい。以後、わが松永家は御家の一門衆。民部大輔様の分までも、大いに働く覚悟でござる」

そう言つて、彼は軽く頭を下げると、逃げるように範政の前から立ち去つてしまった。そんな彼の後姿を眺めつつ、ニタニタと不敵な笑みを漏らす立花少将範政であった。

【衰運編】第095章 名門守護たちの叛乱

琵琶湖の南にあつて、小高く聳え立つ観音寺城は、近江守護六角氏の本拠地として、長く大いに栄えてきた。特に先代六角定頼の時代に、樂市樂座をはじめとした革新的新政策が断行されたこともあり、畿内では、京の都や堺の町に次ぐ巨大都市となっていたほどだった。

観音寺城を支配しているのは、定頼の嫡子として、彼の死後家督を引き継いだ六角義賢だった。若くして名門有力守護大名家の当主となつた彼は、ここ最近、専ら不安と恐怖に苛まされていた。

「十河民部が死んだとて、三好家の勢威は依然として強大にございます」

城内の広間では、今も飽くことない議論が交わされていた。

義賢は心ここにあらずといった様子で、落ち着きなくあちこちを見回している。重臣たちは、そんな彼を気にする風もなく、「ああでもない」「こうでもない」と議論していた。

「だが、十河民部が死した今こそ、三好に攻勢をかける唯一無二の機会であろう。これを見逃せば、三好家の勢威はますます高まり、もはや我らの力ではどうにもならなくなるぞ」

議論は白熱の一途を辿り、いよいよ紛糾してきた。

いつもこうなのである。ここ数日、ずっとこうやって議論し、紛糾し、結局決まらず、翌日また同じ議論を交わしている。

結局、守護である義賢が一言、

「こうする」

と決めればよいのだが、優柔不断、凡庸を絵に描いたようなこの男にそれを求めるのは、酷というものだった。



元来、重臣たちに三好家と対立する気は更々なかった。そういう状態ではない、というのが彼らの偽らざる本音であった。

実際、今の六角家はその圧倒的名声とは裏腹に、随分と苦境に立たされていた。特に一年前の野良田の合戦において、北近江の浅井長政に大敗を喫したことが、未だ尾を引いていたのである。領土もかなり奪われたし、六角氏に従っていた小豪族たちが悉く浅井氏に靡いてしまうなど、その勢力は大きく減退していた。だがそれ以上に、あの戦い以来、当主義賢と重臣たちの関係がぎくしゃくし始めたことが、何より痛かった。

義賢としてみれば、野良田合戦の汚名を雪がんといい思いが強くある。それに付け入ったのが、彼の庇護下にあつた細川晴之だった。「十河民部亡き今、三好家討伐の絶好機。三好を滅ぼせば、浅井如き敵ではありませんまい」

と、晴之は言った。

「滅ぼせるのか？」

義賢は当然のように興味を抱いた。三好家を倒し、浅井を屈服させることが出来れば、何かと口煩い重臣たちを黙らせ、父時代の如き守護権力を回復することもできるのだ。

「無論です」

まだ十、十一歳ぐらいの少年の言葉に、真剣に耳を傾けては「そうか」と、何度も頷く義賢の姿というのは随分と滑稽であった。かくして義賢は晴之の積極論に心を動かし、

「十河民部が死んだ。三好討伐の絶好機だと思つが、どうだ？」

と、重臣たちに諮つたのである。これにより、家中は主戦派と非戦派…、より正確に言い表すなら、主君派と重臣派の真つ二つに割れて激論が交わされる破目となつたというわけであった。

けれど…。

何に付けても優柔不断。大いなる野心のほかには、これといった信念も方向性も持ち合わせていない義賢は、三好の国力の凄まじさ

を厳密に検証したりした結果、兵を挙げる無謀さを思い知ると、  
「やはり止めるべきだろうか」

と、呟いてみたり、晴之はじめ主戦派の重臣たちに説得されると、  
再び、

「いや、戦うべきだろう」

と、言ったりした。ころころと方針を転換するので、そうした彼の態度が、ますます混乱に拍車をかけたとも言える。ともあれ、義賢という人は、大いなる野心と現実的な不安や恐怖の狭間にあって、ひたすらに悩み続けていた。要するに、彼と言う人は、何と言うこともない、ただの凡人に過ぎなかった。

六角家での議論は、なかなか決まりそうもなかったが、時を同じくした紀伊国でも、同様な議論が、延々と繰り返されていた。

紀伊国は、形の上では三好軍の占領下に入っている。河内・和泉両国を束ねている三好実休の軍政下に置かれていた。けれども、三好家の支配は多分に名目的であり、実態としては、従来の紀伊守護である畠山高政が依然として大きな勢力を保っていたのだった。

そして、この高政は根っからの反三好党なのである。十河一存の死と、それに伴う和泉の混乱は、捲土重来を期す高政にとって、これ以上ない朗報となっていた。

「まずは岸和田を攻め落として、和泉を取る。その上で河内に攻め入り、実休を討ち取って、失地回復を果たすのだ」

勇将と名高き高政は、自ら拳を振り上げて、居並ぶ諸將に大音声  
を張り上げていた。

「左様でございますな。確かに岸和田を攻め落とすなら、今が最良の機会。…それに、これ以上三好の行動を捨て置いては、奴らはいずれこの紀伊に攻め込んでまいりましょう。そうなる前に行動を起こさねば…。奇しくも、六角殿も同様に三好への反感を強めているとか。六角殿と同盟し、東西より挟撃すれば、如何な三好軍とても

決して敵ではありませんまい」

と、殊更強気な言葉で、そう言うのは、安見宗房であった。先の敗北で河内を追われた彼は、心機一転を期し、自らの名を直政から宗房に改めていた。

「だが、三好の力を侮るわけにもいきませんぞ」

とは遊佐河内守信教の言葉だった。先の河内騒乱において、三好方に寝返りつつも、その節操のなさを長慶に咎められ、居城若江を追われていた彼は、高政に泣きついて、彼の部将に返り咲いていたのだった。

「そんなことは百も承知だ。だが、今を置いて三好討伐の好機はない。ここで臆せば、我らは永久に三好の臣下となるか、あるいは滅びの道を歩むしかない。その二つも、余には耐えられぬ！」

高政はそんな風に叫ぶように宣言すると、ぎろりと群臣を見回し、「立つか、立たぬかだ。異議ある者は、名乗りでよ！」と、怒鳴った。

立ち上がる者は誰もいなかった。誰もが、高政の積極論を支持していた。それ以外に生き残る方法はない。皆、そのことは重々承知している。このままジリ貧に陥って滅びの道を歩むぐらいなら、僅かでも勝利できる可能性のある、拳兵に全てを賭ける以外ない。

群臣の意思を一通り確認すると、高政はおもむろに腰に下げている刀を抜き、自らもたれかかっていた脇息に思い切り斬りつけた。スパンと、見事な音を張り上げて、真つ二つになったそれを睨みながら、

「以後、弱気なことを抜かしたり、余の方針に逆らうような者あらば、どれもこれと同じ運命を辿ると思えよ」

と、大音声を張り上げながら怒鳴る畠山高政であった。

以後、六角家と畠山家是对三好を旗印に、友好関係を強化していくことになった。

お互い、使者を行ったり来たりさせながら、拳兵に向けた下準備を進めていった。そのほか、かつて畠山家に従っていた河内の土豪をはじめ、各地の反三好姿勢の豪族たちにくまなく書状を送って、与力してくれるよう訴えていった。無論、紀伊や近江の豪族たちにも使者を送って、両家の地盤たる両国の支配強化も怠らなかつた。

だが、こうした動きが三好方の耳に届かぬはずもなかつた。三好長慶に代わって三好政権を主導している義興は、そのことを知るや、烈火のごとく激怒した。

「性懲りもなく、また動き始めたのか。…叔父上が死んで間もないというに、何と卑怯な奴らだ」

その整った顔立ちを怒りに歪め、体中から憎悪を醸し出している義興は、まさに修羅さながらの形相をしていた。

「こうなると、問題なのは都の情勢でございますな。陰謀好きな公方殿が万一、六角、畠山に手を貸すような事態になれば厄介でございます」

阿吽の呼吸で口を挟む範政に、義興もまた大きく頷いた。

「とりあえず都に兵を入れ、將軍家を抑えよう。どうせ、六角の攻勢に備えて、都には軍を入れておかねばならんのだからな。早いに越したことはない」

「はい」

「そうだ、少将。お主、文など得意であつたな」

「はッ…」

「ならば早速、起草しろ。各地の豪族どもに飛ばすのだ」

義興はそう言つて、ニタニタと笑つた。

「されば、如何なる文面にいたしますか？」

と、範政が尋ねると、

「そうさな」

彼は腕組みながら、「うーむ」と唸り、何やら真剣に考え込んでいる様子だった。そして、何やら思いついたのか、ポンと手を叩くと、

「万一、我らに楯突くなら……。楯突いた者は例外なく、我らが勝利した暁に処刑する。それぐらい厳しい文面にしろ」

と、言うのであった。

「処刑、ですか？」

範政は淡々と尋ねている。義興は、

「無論だ」

と、大きく頷いた。

芥川山城主、三好家世子、従四位下筑前守にして幕府御相伴衆。

僅か十九歳にして、様々な肩書きを背負い込んだ白面の貴公子は、総勢七千の兵を率いて、上洛した。

彼は上洛するなり、まず將軍御所と宮中を制圧し、彼らを半ば強引に味方に取り込むことに成功した。特に足利義輝は、義興の武力に恐れをなしたのか、それまで三好と畠山・六角のいずれにつくか旗幟を鮮明にはしていなかったが、

「畠山宮内大輔（高政）、六角左京大夫（義賢）は、三好父子及び義賢（実休入道）に引き続き与力すべきこと」

と、明確に記した御内書を天下に向けて発給せざるを得なくなつた。

何はともかく、義興の政治工作はまんまと成功した形となった。

これにより、もしも畠山、六角連合軍が三好軍に勝負を挑んできたとしても、三好軍こそが幕府軍であり、連合軍は幕府に仇名す賊軍だという政治的レッテルを貼ることが出来る。依然として畿内では根強い権威を誇る幕府であるから、その敵の烙印を押されることは、政治的にかなり不利であった。

「若殿、いよいよ六角左京や畠山宮内が動き出しましたぞ」

慌てた様子で、義興の居殿に駆け込んできた立花範政の言葉に、  
「そうか」

と、軽く頷く義興であった。

義興の入京と、それに伴う幕命公布は、言ってみれば、三好方からの宣戦布告であった。挙兵に向けた準備を整えている彼らが、このまま矛を収めるとは考えられない以上、数日の間に動き出すことは、想定内の範囲内であった。

畠山方、六角方は、かねて示し合わせた通りに同時に動き始めた。紀伊からは、畠山高政が安見宗房、遊佐信教、湯川直光、根来寺衆徒らを従え、総勢二万の兵で、十河一存死後、防備が手薄になっていた和泉国の要所岸和田城を攻略すべく進軍を開始した。

一方、近江からは六角義賢配下の永原重隆が総勢三千の兵で、七月二十八日、慈照寺（銀閣寺）の北の勝軍地蔵山城に入って、義興率いる三好軍と対峙した。

東と西から、まさに挟み撃ちする格好で、両軍が攻め込んだのである。一方、三好方もかねてより迎撃準備を整えていたこともあり、それほど混乱状態に陥ることなく、粛々と軍を動かしていた。即ち…。

京には三好義興以下七千の兵があり、彼は梅津に本陣を置いた。またその増援として、松永弾正率いる七千の大和軍が到着し、彼らは梅津の東側に位置する西院に布陣している。これが、六角義賢軍に対する備えである。

一方、畠山軍の備えも万全である。対畠山方面軍司令官ともいべき三好実休が、安宅冬康、三好長逸、三好康長、三好政康、三好盛政らの一門衆や吉成勘助、篠原長房、岩成友通といった有力部将を従えて、岸和田城に入っていた。その数は二万を超えている。

岸和田城に入った三好実休以下二万の三好軍に対し、畠山軍はさらに兵力を増し、総勢三万近い数になって、同城に迫っていた。さすがに代々紀伊守護を勤めてきた畠山家の底力というものは、計り知れぬほど根強いものがあつた。そこが、新興勢力に過ぎない三好家とは大きく違う点であつた。

ただ、総大将たる畠山宮内大輔高政は、日本屈指の名門一族の惣領とは到底思えぬような出で立ち、風貌をして、しきりに兵たちを督戦していた。彼は、貴公子というより、如何にも軍記物に登場しそふな豪傑、猛将、勇将そっくりな感じであつた。

「六角殿も本格的に動いたようです。その数、最終的には二万を下らぬと思われます」

と、重臣の安見宗房が言つと、  
「左様か」

淡淡とした声色ながらも、いつになく嬉しそうな顔をして大きく頷く高政であつた。

京周辺では、六角義賢自ら率いる一万七千の大軍が続々とやってきたので、情勢は一挙に緊迫化した。これにより、永原重隆率いる先遣隊三千に加え、六角軍の総兵力は二万となつた。一方、三好方もこれに対抗する形で兵力を増強したので、総勢二万に達している。両軍二万。

都郊外で激しく睨み合っている。兵力が近いだけに、互いに先に仕掛けるわけにもいかず、戦局は緊張の度合いを増しながらも、膠着化していった。

「義賢も案外本気だな」

三好義興は楽しそうに笑っていた。勝軍地蔵山（現在の瓜生山）に本陣を設けた六角軍を睨みつけながら、彼はニコニコと微笑んでいる。

「ま、いずれ六角は滅ぼさねばならぬと思っていたのだ。この際ちようどいい。六角も畠山も踏み潰して、近江・紀伊両国を完全に我らの支配下に組み込んでしまえば、畿内全土はわが三好家の下に屈服したも同義だ」

義興にとつて、今回の戦いこそが、実質的な初陣になるのである。逸る思いを抑え、高ぶる気持ちを堪えて、大きく深呼吸した。

側には副将である立花範政、松永久秀の両名が従っている。彼らはそんな若大将の素直な様に、クスクスと笑っていた。

京の三好屋敷は、まさに夏真っ盛りといった感じである。ミイイン、ミイインと泣き喚く蝉の声などは五月蠅いよう、案外耳心地は悪くなかった。盆地ゆえの蒸し暑さがひしひしと身体を蝕むが、そのたびに溢れ出す汗の味は、如何にも夏らしく、義興は決して嫌いではなかった。

その後、両陣営は激しく睨み合いを続けたまま、全く動かなかった。両陣営、両戦線ともに、なまじ同数の戦力を保持していただけに、果てしないこう着状態に陥ってしまったのである。

無論、戦いが全く行われなかったわけではない。

十一月に入った頃、松永弾正は配下の松山新太郎を先手とする軍、総勢一万を率いて六角軍の立て籠もる勝軍地蔵山と神楽岡に押し寄せた。戦いそのものは優勢に進み、六角方のうち永原重澄をはじめとする有力部将を討ち取る戦果を挙げたのだが、六角軍そのものを崩すには至らず、逆に六角義賢本隊の反撃を受けて、やむなく都へ逃げ戻らざるを得ぬ破目となった。

また十一月二十四日、和泉戦線においても戦いがあったが、これ



は戦線膠着を快しとしなかつた三好軍内の過激派が暴走した末に起きた事件であり、当然待ち構えていた畠山軍に勝てるはずもなく、無惨に敗北した。

「だから言わんことではない」

実休は腹立たしそくに、逃げ戻ってきた敗軍の將たちを睨みつけた。

「如何なさいましょう？」

阿吽の呼吸で、篠原長房が口を挟むと、

「…死罪にするよりほかに仕方あるまい。この次、わが命に叛いて無謀な行動に出る愚か者を出さぬためにも、見せしめにするのだ」

温和温厚として名高き実休とは思えぬほど厳しい沙汰に、長房は少しばかり驚いた。けれど、彼自身そうすべきだと思っていたから、「承知いたしました」

と、軽く頷くと、早速、そこに頂垂れている敗將たちを連行して、切腹すら許さず、その首を斬りおとしてしまった。

戦いはさらに長期化の様相を呈して、両軍はひたすら飽くことのない睨み合いを続けていた。下手に動けばやられてしまうのだから、無理もなかった。

かくして一ヶ月間は何も起こらなかつた。兵たちにしてみれば、これほど辛く、退屈な戦もなかつたろう。そして將たちにとつても、どうしてもだらけていく兵たちの士気の調整に奔走せねばならず、下手な戦より大変だつたりした。

けれど一ヶ月が過ぎた十二月二十五日のことだ。

この日、ついに山が動いた。

三好軍の総大将たる三好長慶は、飯盛山城にあって、京と和泉の両戦線の総指揮を執っている。だが、両戦線に大軍を配備したため

か、長慶の下にある兵力は貧弱であり、言ってみれば、無防備に近い状態であった。戦線膠着を何としてでも打破したい畠山高政が、これに目をつけたのは、当然といえば当然の話だった。

かくて高政は飯盛山奇襲の是非について、重臣たちに下問してみたのであるが、

「飯盛山城は名つての名城にございますし、如何に手薄といつても、三好修理の下には五千の兵があります。これを落とすのは、はつきり言つて、難しいといつてよいでしょう」

遊佐信教がそう言つと、彼はムツとして、露骨に嫌そうな顔をした。非常に短気な彼は、全てを聞かず、勝手に判断しては怒つたり喜んだりする。そこが最大の欠点であった。ゆえに信教は、そんな主君を宥めつつ、

「されど」

と、話を進めた。

「されど、飯盛山城は敵の本拠地であり、ここが脅かされれば、三好軍全体が動揺することは、まず間違いありません。動揺した敵が飯盛山を救援すべく動き出せば、儲けもの。わが軍の力で、浮き足立った敵軍を粉碎してやりましょう」

要するに、脅かすだけでよいのだ、と、信教は言った。少しばかり危険な中入り策ではあるが、ともかく敵が動揺して動き出せば、勝機は見える。

「上手くいくか？」

高政は不安げな顔をして、じろりと遊佐信教を睨みつけるように見つめた。

「いくでしょう。既に河内方面の三好方はほとんど京か、和泉、あるいは飯盛山に集結しておりますので、奇襲部隊が発見される可能性も低いです。飯盛山にさえ到着すれば、後は攻撃を仕掛けられただけ。ま、奇襲部隊が殲滅する可能性は大いにありますが、この際、この程度の犠牲に躊躇している場合ではありませんまい」

と、信教が胸を張って、自信満々の笑みとともに言うので、これ

まで神妙に耳を傾けていた高政も、この策には大いに喜び、賛同し、それ以外ないと絶賛した上で、

「早速行動を開始しよう。善は急げと言うからな」

と言つて、信教以下重臣たちに作戦の具体的内容を早急に策定し、行動に移るよう命じたのだった。

かくして十二月二十五日である。

畠山軍の奇襲部隊は高政配下の部将宮崎隠岐守に指揮されて、前日の二十四日までに密かに飯盛山城に迫っていた。

だが、飯盛山城には、その防衛を司る支城が周囲四方にいくつもあった。これを落とさぬ限り、本城には迫れないような仕組みになっている。そこで宮崎隠岐守は、支城の一つ、三箇城に猛攻を加え、これを攻め落とすことに成功したのである。これにより、畠山軍は飯盛山本城に直接攻撃を加えることができるようになった。…とまあ、一見すると畠山軍優勢に見えるわけだが、いくら本城を直接攻撃できるようになったからといって、即ち本城が落ちるわけでもないのである。数万に及ぶ三好軍の中から選びぬかれた精鋭中の精鋭で構成されている長慶直轄軍の立て籠もる稀代の堅城を、たかが数千の軍勢で攻め落とせるはずもない。ゆえに普通に考えれば、三箇城の陥落は、長慶にとって目障りではあっても、致命傷にはなりえぬはずであった。

けれど、急報を受けた長慶は、

「なんだと…」

と、茫然自失といった風に、がっくりと腰を落としていた。まるで世界が終わってしまったかのような、全てが絶望に包まれてしまったかのような顔をして、「まさか」と、何度も何度も繰り返すようにばやいていた。

三箇城の陥落、そのものに愕然としているわけではない。問題は、この三箇城を守っていた男である。

名を三好政成と言って、その名の如く、三好一門の一人であった。今や三好一門の最有力者の一人となった三好下野守政康の実兄でもある。長慶の信任厚く、側近の一人として、三好政権の枢機に参与していた。今回の戦いで三箇城の守備を命じられていたのも、長慶の信任の厚さの表れといえた。実際彼は三箇城を守りつつ、度々飯盛山に登城しては、総指揮官である長慶の下、作戦立案に大きく関わっていた。

その政成が、乱戦の最中、戦死してしまったのである。流れ矢に当たって死ぬという、実に他愛のない死に様であったが、三好一門の有力者の一人だった彼の死に、長慶は大いに驚き、悲しみ、そして嘆いた。

「又四郎に続いて、政成までもが死んだか……」

長慶は無常観に苛まされていた。

無論、政成を殺したからと、調子に乗って飯盛山まで攻め込んできた愚かな宮崎隠岐守などは軽く撃破し、三箇城陥落の汚名はきっちりと雪いだ。そして哀れにも捕虜となった宮崎隠岐守を、長慶は自らの手で惨殺した。両手の指を一つずつ斬りおとし、それが終わると両腕両足を斬った。鼻、耳を殺ぎ、目を抉り、散々痛めつけた上で、斬り殺した。その折の長慶は、まさに常軌を逸した狂人だった。家臣たちも、余りの残虐さに目を背けたが、彼の凄まじき怒りを知っているだけに、誰も何も言えなかった。

長慶は、宮崎隠岐守だけでなく、捕虜となった畠山軍兵士の全員を処刑した。それだけ長慶の怒りは凄まじかったのである。

けれど、殺し終わってみると、ただ空しさだけが残った。殺したところで、十河一存や三好政成らが生き返ってくるわけでもないのである。殺した命の分だけ、彼の気はどんどん滅入るようになった。

畠山軍による飯盛山奇襲は、三好軍に大きな衝撃を与えた。士気もがくと下がった。畠山・六角軍にとっては一挙に攻め入る好機

であつたが、下がつたといつても、戦国の荒波を乗り越えて今に至る地位を築いてきた精鋭三好軍は、その程度で崩れるほど柔ではなかつた。無論、岸和田の実休軍や都の義興軍の中には、飯盛山を救うべきだと、あるいは万一に備え、飯盛山にも兵を配備すべきだと主張する者もいないわけではなかつたが、動揺し、浮き足立てば、それだけ敵に付け入られることを嫌というほど承知していた実休、義興は、下手な軽挙妄動は敵に憤むべきとの通達を幾たびも出して鎮静化に奔走したのだつた。

その甲斐もあつてか、畠山軍が期待した三好方の動揺や、それに伴う動きもなかつた。高政は大いに地団駄踏んだが、  
「策は不調でしたが、我らが致命的打撃を蒙つたわけでもなく、まあ地道にいきましょう」

という安見宗房、遊佐信教らの説得を受けると、ようやく怒りを堪え、黙る高政であつた。

結局、この作戦は三好政成という有力部将を殺したという、これだけの戦果を残して失敗に終わった。戦いは引き続き膠着化し、気がつくくと新年を迎えて、永禄五年（一五六二年）を迎えたわけだが、相変わらず決着がつく気配は見えなかつた。

【衰運編】第097章 久米田の悲劇

永禄五年（一五六二年）も一月は、基本的に何事もなく終わった。そして、二月になった。

相変わらず両陣営は京と和泉の両戦線にて睨みあっている。本格的に矛を交えることなく、ただ延々とにらみ合うだけの戦いを、人々は「奇妙な戦」と呼び、中には「静戦」とか「冷戦」などと呼ぶ者もいた。

とにかく、両軍が本格的に対峙してから、はや一年近くの歳月が流れたのである。長期戦にしても限度がある。これほどの長期間に渡り、大軍を常時展開させておかねばならない両陣営の財政的負担は甚大なものであり、このままでは、かつての応仁の大乱の如く、勝者なき決着を迎える破目ともなりかねなかった。

こうした理由から、両陣営にとって膠着状態の打破は喫緊の最優先課題となっていた。

ただ、それはあくまで自軍の有利を前提としたものでなくてはならず、かといって軍事的手段によって優勢を勝ち取ることが難しい以上は、外交的な手段によって、少しずつ優勢をもぎ取っていくほかなかった。

ゆえに、この頃になると、両陣営の密使が畿内中を、所狭しと飛び回るようになった。そうした情勢下で、その去就に注目が集まるようになったのは、大和の筒井氏であった。

「もしも我らに与力してくれるなら、大和守護代職を約束いたしますよ。」

畠山高政の特使は、そう言って、筒井藤勝（後の順慶）を説得していた。

筒井氏は、強大な三好政権をバックに持つ松永弾正久秀の猛攻を

受けて、事実上彼に臣従していたが、元来大和屈指の国人領主として、絶対的な意地と誇りを持つ名族だった。松永弾正如きどこの馬の骨とも知れぬ者に、いつまでも臣下の礼をとる気など更々ない。それでなくとも、多聞山城の築城をはじめ、弾正が行ってきた様々な大事業に対し、多大な出費を強いられてきた筒井家では、弾正久秀と松永家に対する反感反発が根強いのだ。

彼らが畠山方の説得に心を動かしたのも、当然といえば当然であった。もしも畠山方が勝利し、三好が没落すれば、その配下に過ぎない松永弾正も仲良く凋落するに違いない。子供でも分かる単純明快な論理だ。それゆえに、結局、藤勝に代わって筒井氏の実権を握る叔父の筒井順政は、今一度男を上げるつもりで、大和全土の掌握を目指し、六角・畠山連合陣営に与力する姿勢を明確化することにしたのだった。

筒井の離反により、京都戦線は一挙に流動的になった。

とりわけ、筒井対策のため、兵の一部を大至急、奈良の多聞山に戻さねばならなくなった松永久秀が、その旨を報告すべく、本陣にやってきたとき、総大将たる義興の不満や怒りは頂点に達した。

「お主が筒井を封じ込めておかなかったから、こういう事態になったのだぞ」

言っても詮無き言葉を、やるかたない憤りに乗せてぶつけてくる義興に、久秀は恐縮そうに頭を下げるだけだった。

「されど、弾正殿。佐殿すけどの（右衛門佐のことうえもんすけ）従五位下右衛門佐松永久通をさす）に二千足らずの兵を預けて、多聞山城に戻すということだが、それで筒井勢を防げるのか？」

立花範政が示した懸念に、義興もまたこれみよがしに頷いた。けれど久秀はぽんと胸を張ると、

「こ懸念に及ばず」

と、きっぱりと言いつつ切った。

松永久通が総勢二千の兵を引き連れて去った後、待つてましたといわんばかりに、六角軍による総攻撃が始まった。

後藤賢豊、永原重隆、蒲生定秀、蒲生賢秀といった六角配下の武将たちが京都市内に怒涛の勢いで押し寄せてくると、これを迎え撃つ三好軍との間で、たちまち激戦になった。

「かかれーッ！」

凄まじき大音声が、あちらこちらから響き渡る。

「死を怖れるなッ！」

「命を惜しむな！ 名を惜しめッ！」

将たちの様々な叱咤激励が飛び交う。兵たちは、今こそ手柄の拳げ時と、これまで延々と続いてきたにらみ合いの鬱憤を晴らすかのように、猛然と互いの敵陣に押し寄せていった。

矢を撃ち合い、火を放つ。狭い京都盆地で総勢四万近い両軍が熾烈な攻防を重ねる様というのは、もはや現世の地獄であった。次から次へ上がる悲鳴に絶叫。そのたびに、息のない骸が山と詰まれ、川という川は鮮やかな朱色に染まっていった。

「ああ、燃える。一千年の歴史が、ああ燃える」

洛中で繰り広げられる激戦は、ありとあらゆる全てを破壊した。応仁の大乱が再び蘇ったかのような死闘の中で、一千年の歴史が、再び灰燼に帰そうとしている。人々は大いに嘆き、悲しみ、そして力なく頂垂れた。

「故郷が……。花の都が、ああ、滅びる」

誰もが大いに涙し、そして終わることのない戦いを、ただひたすらに呆然と眺めていた。

三月に入った頃、畠山軍に問題が起こった。

発端は退屈を紛らすための遊びを巡る、兵たちの些細な喧嘩であ



つたが、次第に事は大事となつて、畠山軍首脳部の頭を悩ます大問題に発展した。

元々、畠山軍は紀伊、和泉諸豪族で構成される連合軍であつた。寄せ集めの烏合の衆と言ひ換えても、問題はない。これらは全て、紀伊守護職たる畠山高政の権威と、対三好の名の下に一つに纏まつているに過ぎず、決して統一性のある組織とは言えなかつた。その上、一年近くに及ぶ長期戦の中、凄まじき財政負担を強いられるようになった豪族たちの中には、軍首脳部に対する不満や不信感が高まつていた。

そうした状況下に起きた、喧嘩騒動である。軍に対する絶対的な統制権力を持ち得ない弱き総帥、畠山高政に、この問題を收拾するだけの力はなかつた。

「畠山軍で内紛？」

岸和田城内の実休は、側近である篠原自遁のもたらした報告に、思わず首を傾げた。

「畏ではあるまいな」

実休が疑つたのも無理はない。これまで、畠山軍は膠着状態を打破すべく、あの手この手様々な策謀を弄してきた。今回の一件も、三好方を誘きだすための策である可能性は否めず、もしそうだとすれば、下手に動けば、畠山軍の思う壺ということにもなりかねない。「それが、満更策というわけでもないように」

篠原自遁の言葉に、「ほお」と、実休は驚き、そしてようやく興味を持ち始めたようであつた。

事情を聞き、かつ精細な諜報結果を知るに及んで、実休は困つたように考え込んだ。彼としても、これ以上の膠着状態は望むところではない。何とかして状況を打破しなければならぬと考え込んでいたところに舞い込んできた、この朗報だ。実休は迷い、そして大いに悩んだ。兄の如く即断即決というわけではないが、決して優柔不断ではない実休らしくない逡巡に、自遁はじめ居並ぶ諸将は少なからず驚いていた。

「…よかるう。これより総攻撃に入る」  
散々調べ、考えた上で、実休はついに判断を下した。自遁や篠原長房、さらには安宅冬康はじめ宿将らの説得を受けてのことでもあったが、とにかく実休という人は、ひとたび判断を下すと、後は決して迷わなかった。

実休の号令を受けた三好軍は一気呵成に城を打って出、そして畠山軍を追い散らした。

もとより畠山軍の混乱は、彼らの策ではなかった。現実に混乱しているのだ。指揮命令系統は完全に崩壊し、事態を収拾できない高政の権威は大幅に低下していた。そうした状況下、三好軍が大挙押し出してきたのだから、彼らに勝ち目などあるはずもなかった。

かくして畠山軍を撃破した三好実休軍二万は、進軍を重ね、ついに久米田と呼ばれる土地に本陣を設置した。一方、辛うじて態勢を立て直した畠山軍も、久米田に陣を敷き、臥薪嘗胆を期している。

三月四日。

冬なのか、春なのか。少しばかり分かりづらい微妙な季節の境目。極端な寒さは影を潜めたが、暖かいというほどのこともない。時折ヒュウウと吹き抜ける風が、必死になって春の到来を告げているような気もするが、ごくたまにはばらばらと降る雪を見ると、まだ冬なのだと思わざるを得なくなる。

三好実休はいつになく物憂げな顔をして、眼前に犇く畠山軍を見つめていた。

「兄上、どうなさいました？」

そこに、副将の安宅冬康がやってきて、そんな兄の小さな背中に向かって頭を下げた。

「いや…。少しばかり、昔のことを思い出していたのだ」

「昔、でございますか？」

冬康は、いつもとは何か違う、何とも言いがたい不思議な次兄の姿を眺めながら、おもむろに首を傾げていた。

「兄者のために鬼になつたつもりで、俺も今までの日々を歩んできたが、時折思うのだ。出世するとはいったい何なのか。権力を掴んで、天下を取るということに、いったい何の意味があるのか」

「力を握つたところで、死ねばそれで終わりだ。又四郎は死んで、ただの骸になつた。どんな榮譽も栄光も、権力も、黄泉の国には持つていけない」

などと、どこまでも悲しげな顔をして呟いている兄を、冬康はなんともいえぬ表情で見守つていた。少なくとも、こんなことを言う兄ではなかった。長兄もそうだが、この次兄も、十河一存の死を依然として気にかけているに違いなかった。

冬康には何もいえなかった。彼自身、一存のことを思うと、人生とはいつたい何なのか、その空しさ儂さに思いを馳せずにはいられなくなる。長兄、次兄の気持ちは痛いほど分かるのだ。

「そうだ。神太郎」

実休は不意に懐から一枚の紙を取り出すと、おもむろにそれを冬康に渡した。

「これは」

そこには、おそらく和歌と思わしき二つの文字列が、整然と並び、一つの、なんともいえぬ寂しく悲しい芸術を作り出していた。

草枯らす 霜又今朝の 日に消えて 報のほどは 終にのがれず

草枯らす 霜又今朝の 日に消えて 因果はここに 廻りに来に  
けり

おそらくは遺書のつもりで記したのだろう。一目見れば、この優しき兄が、依然として細川持隆を肅清したこと、その他諸々、三好家の天下のためにやってきた全てのこと、言いようのない自責の念を感じていたということが分かる。天下のため、三好家のため……、そんな題目の下に全てを包み隠して、誤魔化して、ひたすらに今に至る道を歩んできた。けれど、その先にあつたものは何だろう。

一存の死はいろいろな影響を三好家にもたらした。その大きさ、凄まじさを改めて実感したようで、冬康は愕然とした。何と言つても実休は三好家の実質的な副総帥である。今こそ兄弟三人、力を合わせて三好家を守り立てていかねばならないのだ。とりわけ、長兄長慶の政治への気力が低下しているという。ならば、自分と実休の果たすべき役割は、これからもっともっと大きくなる。

冬康は側近に文と紙を持たせると、何やらすらすらと書き始めた。実休はまじまじと、そんな彼を不思議そうに見つめていた。

因果とは 遙か車の輪の外を 廻るも遠き 三芳野の原

「兄上、元気を出してください。兄上は、今や三好家の柱石中の柱石。兄上がそんな調子では、御家はますます傾いてしまいますぞ」  
冬康はそう言つて、兄の背をパンと叩いた。しゃきつとすると、弟なりのエールを送ってみる。

実休は苦笑いしながら、  
「すまん」

とだけ言つて、人知れず、一筋の涙を、ポロリと流した。

翌日。

即ち三月五日。

久米田の地に対峙した三好軍と畠山軍は、この日、ついに激突した。

三好軍のために岸和田包囲を解かれ、今また敗北を喫するようなことになれば、それこそ軍崩壊の危機といっても過言ではない畠山軍は、それこそ死に物狂いで奮戦した。

一方、三好軍は今こそ畠山軍に止めを刺すときだと、俄然、凄まじき猛攻を加えた。

世に言う久米田の合戦。

激戦は激戦を呼び、乱戦は更なる乱戦を招いた。

「戦況はどうなっている？」

実休は涼しくなった頭を摩りながら、側に控えていた篠原自遁に尋ねた。

「我らの優勢にございます」

自遁は興奮を隠し切れぬような表情で、そんな風に言った。

見れば確かに、味方の旗色が有利のように見えた。数的には畠山軍も三好軍もほぼ互角。それでもなお有利を維持し続けられているのは、それだけ三好軍が強いからなのだろう。

実休は思わず苦笑いした。

「三好家も、随分栄達したものだ」

と、心の中に、小さくぼやいていた。

まだ千満丸といった頃、三好家はまだ阿波の国内に領地を持つ、単なる豪族に過ぎなかった。父は死に、兄は人質となって、若千六歳だか、七歳だった千満丸が留守居役として国を守っていたものである。

それから何年が過ぎたのだろう。気がつけば、千満丸は三好実休入道などと評され、従四位下豊前守、幕府御相伴衆などという高位に列していた。河内高屋城主として、河内・和泉両国を支配し、その立場は三好政権の副総帥などと称えられていた。

兄は天下人になり、三好家一門はそれに伴い、大いに栄達栄進した。不思議といえば、これ以上ないほどに不思議だった。けれど、

その過程では様々なことをした。悪逆非道な振る舞いも辞さなかった。後悔しているわけではないが、今思えば、どれも辛い思い出であった。

味方の優勢はいよいよ極まり、実休としては、一挙に勝利をもぎ取るべく、本隊の一部を割いて前線に差し向けるなど、事実上の総攻撃、総攻め、総力戦体制に入っていた。

既に畠山軍は壊滅寸前である。次から次に舞い込んでくる朗報が、それを裏付けていた。

「勝利、だな」

実休はそう思った。長年の戦歴からはじき出される感覚が、彼にそう告げていた。

けれど…。

彼は油断していた。勝った、と思い込んだときから、彼は敵に対する配慮を怠っていた。

見れば彼の周りには、たった百人の旗本がいるだけだった。総力戦の名の下に、次から次へと援軍を送り出していった結果、本陣の兵力がこれほど手薄となってしまうたのである。

そして…。

「も、申し上げますッ！」

伝令が駆け込んできたとき、既に敵軍は実休本隊の側面に猛攻を加えていた。

「敵襲にございますッ！」

遅すぎる報告に、実休は思わず舌打ちした。見れば分かる。そう言わんばかりの彼は、伝令をジトツと睨みつけた。

形勢は一挙に不利となった。

何しろ、たった百人。しかも不意打ちを喰らって、どの兵も混乱している。

「殿ッ！」

そこに、篠原自遁が慌しく駆け込んできた。

「もはやこれまで。ひとまず、お逃げくださりませッ！」

逃げて態勢を立て直す。それ以外ないと、自遁は強い口調で迫ってきた。

実休はすつくと立ち上がり、兵たちの用意した愛馬に跨る。自遁はあちらへ逃げるようにと、西の空を指差していた。だから、

「分かった」

と、頷くだけである。

実休はおもむろに愛馬に鞭を入れた。ヒイインと、独特のけたたましき悲鳴を上げて、馬が走り始めた、まさにそのときだった。

ダアアアアアアアン

凄まじき轟音が、けたたましき一発の銃声が、空気を切り裂き、大地を揺らがして、あちらこちらに響き渡った。

一人の武将が、力なく崩れ落ちる。

馬は、何が起きたか分からぬように、きよとんと立ち止まっていた。

「殿……」

篠原自遁はしばらくその場に立ちすくみ、主君と仰いだ男が、ガラガラと崩れ落ちる様、その全てを呆然と見つめていた。

「と、殿ッ！」

彼は慌しく駆け寄り、部下たちもまた必死になって主君の周りを固めた。

「殿！」

けれど、そこにいた男に息はなかった。どれだけ呼びかけても、返ってくるはずの言葉は、永久になかった。

「と、殿……」

篠原自遁は茫然自失の体で、力なくその場に腰を落とした。バカな……。

誰もが今起きた現実が嘘であればよいと思った。これは悪夢に違いないと、信じられぬ現実を受け入れられずに呆然と立ち尽くしていた。けれど、法服を身に纏った三好実休入道は、確かに息のない骸と成り果てて、その場に空しく転がっている。

「おのれえええッ！ 殿の、殿の仇を討てッ！」

篠原自遁があらん限りの大音声を張り上げて怒鳴る。言われずとも、怒り狂った拳句、制御の利がなくなった兵士たちは、その声に呼応して堰を切ったように怒濤の勢いで、眼前にて火縄を構える敵兵に突撃した。

三好実休は、永禄五年三月五日を持って、この世の人ではなくなつた。

一発の弾丸が、一人の英雄の命を奪つた。

鉄砲なるものが伝来して、既に十数年の年月が流れていたが、名のある武将が射殺された事例というのは、少なくともこの三好実休が初例であつた。

享年三十六歳。

十河一存に続いて、また一人、三好一門の有力者が、露と消えた。



久米田の敗報が伝わると畿内は大いに動揺し、震撼した。

三好軍敗北。それもただの敗北でなく総大将の戦死という最悪の結果を伴ったまさしく真正正銘の大敗である。人々が驚き、不安を抱いたのも無理はない。この戦いの結果三好氏が衰退の道を歩むようなことにもなれば、ようやくつかみかけた平和を再び失い、最悪の戦乱が自分たちの目の前に蘇るかもしれないのだ。

「これから天下はどうなるのかのう」

「さあ。じゃが、再び戦の世となるのは嫌じゃな。長慶様のおかげでようやくわしら農民も枕を高くして眠れるようになったというに」  
「戦が再び蘇るようなことだけは困るのう。なんとかならぬものかのう」

わずか十数年前まで近畿地方では足利、細川、畠山、大内、六角三好など各種軍事勢力が京都の覇権を巡り熾烈な激闘を繰り返していた。奪い奪われ、殺し殺され、焼いては焼かれる。犇めく群雄たちの興亡の歴史の陰で密かに涙していたのは言うまでもなく無辜の民、それも貧しき農民たちであった。労働力となりうる息子は徴兵され、なけなしの蓄えは年貢と称して奪われる。拳句、先祖より受け継ぎ、精魂こめて守ってきた田畑すら戦争の舞台となって荒らされるのだ。

一部の人間を除き戦争などというものは常に百害あって一利もない最低最悪の存在でしかなかった。その無益極まりない戦争を三好長慶という英雄が鎮静化してくれたのだ。だが今、三好が敗れ、長慶の権勢にも衰退の兆しが見えつつある。

特に人々の不安を駆り立てたのは、この合戦で三好実休入道が戦死してしまったことである。

三好実休。本名三好義賢。河内高屋城主であり、また阿波・讃岐・

淡路など四国における三好領で絶大な影響力を持つこの温和で堅実な、有能極まりない『三好の副将』が三好氏の躍進にどれだけ貢献してきたか知らぬ人間は少なくとも近畿地方に暮らす民の中では誰もいないと言つていい。そしてこの大功臣が三好政権内でどれほど重要な存在であるか知らぬ者もない。

その実休が死んだ。

三好政権にとって、先の戦いで戦死した三好政成よりも、また一年前に病没した十河一存などよりも遥かに大きな損失であると言えた。三好家中の中には、肝心の長慶があんな風であるので、これから三好家がどうなるのだろうかと本気で心配しだした者もいたほどであった。

何はともかく三好家発展の最大の原動力となってきた三好四兄弟のうち、たった二年間で二人がいなくなつたのである。残つたのは、最近めつきり指導力の落ちた三好長慶と安宅冬康のみ。ただそれでも世間一般の人々や三好家家臣団は一切の期待や希望を失つたわけではなかつた。実休、一存と立て続けに実力者を失い、さらに長慶の指導力が低下しようとも、まだ冬康がいるし、また将来を大いに囑望されている有能な世子たる三好義興が健在だつた。四兄弟以外にも三好康長とか長逸、政康……、その他諸々有能な一門衆や重臣たちが引き続き重きを成しているのだ。

実休の死により三好氏は衰退するかもしれない。そう思う民がいる一方で、まだまだ三好家は磐石だ、と主張する者も決して少なくなかつた。

それはともかく、久米田の敗戦の影響をもろに受ける形でまず岸和田城が畠山軍により攻略された。これにより和泉一国が事実上畠山軍の制圧下に入ったわけで、畠山軍総帥たる畠山高政はここ最近得意の絶頂にあつた。

一方、急に三好長慶に匹敵する実力者の一人に浮上した畠山高政に対し、露骨にすり寄る姿勢を打ち出していたのが堺の会合衆たち

である。堺の周囲四方が畠山軍の支配下に入ったことも彼らを動かした原因の一つではあつたろうが、機を見る敏な彼らは新たな実力者にもすり寄っておくことで、来るべき三好・畠山の最終決戦でどちらが勝利してもよいようにしておいたのである。

その畠山高政は今、岸和田城内にあつて、平伏す重臣安見宗房をじろりと見下ろしていた。

「三好軍主力は河内方面へ引き上げた模様です」

宗房はいくらか楽しそうな顔をして、高政に対しそう言った。

「そうか。くつくく。ならば、我らが南から攻め上つて六角が北から攻め下れば三好軍は河内で袋叩きに来るな」

と、呟く彼は自信満々既に三好軍に対し、完全勝利したような余裕をその満面に漲らせていた。

「だが、それはそうと、実休を討ち取つたのだから、ついでに安宅撰津も討ち取ることが出来れば三好に止めを刺すことができたのになあ」

悔しそうに苦笑いしながらばやく高政に、

「どうせ河内で討ち取ることが出来ましょう。三好修理もろともに

……」

と、宗房は間髪いれずにそう言った。

「ははは。そうよの。十河民部が死に、今また三好実休が死んだ。

安宅撰津と三好修理が死ねば、もはや三好など滅びたも同然！ 子倅義興も父と叔父を失えばとるにたらぬわ」

これまで散々畠山家を苦しめ続けてきた仇敵。その滅亡も指呼の間にある。畠山家が代々目指した天下も伸ばせば掴めるところまできた。

「よし。和泉が片付けば一挙に河内へ進軍する！ 六角殿にも書状を送つて、義興如き子倅を早急に踏み潰して河内へ進軍してくれるよう要請しろ」

高政は殊更声高に叫ぶように命じると、安見宗房は、

「御意のままに！」

と、彼もまた嬉しそうな顔で大きく頷き、そして平伏した。

京都戦線においてもこの勝報に勢いづいた六角軍が俄然攻勢に打って出てきたので、同戦線を担う三好義興、松永久秀、立花範政の三名はとりあえず軍を山崎まで撤退させ、まず防備を万全なものにすることにした。

それが三月六日のことである。

無論、敗北して撤兵するわけではないから、彼らもいざというときの反撃に備え、様々な手を打ってあった。

例えば將軍義輝やその生母たる慶寿院、有力公家の広橋国光、高倉永相らを男山八幡に立ち退かせている。これは言うまでもなく將軍家や公家衆が六角軍の手に渡るのを防ぐためであった。また主力軍を山崎に撤退させたものの、一方で勝龍寺城（山崎の東側）に今村慶満、その北側に位置する西岡の地に松山新介、池田長正らを配置するなどして防衛体制の完璧を期していた。

三月七日。

撤兵を完了した三好軍に代わって今度は六角軍が都の支配者として我が物顔で入京してきた。

その数、総勢二万余騎。

総大将たる六角義賢は、まず朝廷警護の名目で禁裏を制圧すると、自らは無人の將軍御所に入ってそこで陣頭指揮を執ることにした。

無論、こうなると將軍がいようがまいが幕政の実権は義賢の思うが侭であった。形の上で権力を極めた彼は、その権力を行使して依然三好軍の制圧下にある山崎の北方にある西岡諸郷などの地域に対し徳政令を出している。この際の徳政令は、幕府名義で出していたが、それが義賢の命であることは誰の目にも明らかだった。

その他、三月二十三日には、都の人々に対して、三好方に内通したり、それに準じる行為をした者を嚴罰に処する旨の法令を出している。これもまた幕府名義の命であったが、義賢の独断により下さ

れた命であることは、今更言うまでもないことだった。

六角義賢は、言ってみればいわば子供だった。

都の主となつた自分の立場に大いに浮かれあがつて、それ以外のことには一切興味を示さなかつた。まあ、無理もない。あれほど六角家を苦しめてきた三好家を追い出し、長慶に取つて代わつて都の覇者となつたのである。名君と称えられた実父定頼ですらなし得なかつた偉業を自分の手でなしたのだから、彼が喜んだのも当然といえば当然だった。

けれど……。義賢の喜びようは、度を越していた。

「既に義興軍は山崎からも撤兵し、河内方面に移動しております。我らも追撃を仕掛けるべきでしょう」

「左様です。畠山宮内殿からも援軍要請の使者が参つていて、すし……。我らが一拳に河内へ攻め下れば、三好軍を南北から挟み撃ちにして殲滅することも可能なのでございます」

と、重臣の後藤賢豊や蒲生定秀らは口をすっぱくして進言していたが、すっかり京都に浸りきつた義賢は聞く耳一つ持たなかつた。

「別に我らから攻撃を仕掛ける必要もない。河内へ行きたいなら行かせてやればよい。どうせ畠山が何とかしてくれるだろうさ」

などと言つてけらけらと笑っている。

「さ、されど、それでも畠山軍が敗北するようなことになれば、三好軍は我らに攻撃を仕掛けてきますぞ！」

「……五月蠅いな。そんなこと知つたことか。それに畠山軍は容易く負けんよ。先の久米田の戦いでも、なんだかんだ言つて勝利したではないか。もしも我らが北から攻めていって、あつけなく勝敗が決すれば、畠山が三好の如き勢威を握らんとも限らんだろう。ここは三好と畠山が泥沼の抗争を繰り返して、二つとも一緒に衰退してくれるのが、我らにとっては一番好都合。つまりは漁夫の利を得るつて奴だ」

などと本気で考えている、全くどうしようもなき主君の様に、後

藤賢豊は苦りきったような顔をして、天を扇いだ。

畠山軍は久米田に勝利して以後、凄まじく勢いづいていた。連日のように新興の実力者と誼を結ばんとする商人やら豪族たちがひっきりなしに畠山高政の下を訪れ、どこかで聞いたような阿諛追従の弁を吐いて去っていく。高政の鼻っ柱は高くなる一方だった。

既に畠山氏は紀伊国と和泉国の二つを完全な支配下においた。そんな彼らの次なる目的は、本国河内の奪還であった。

そこで畠山高政は兵を河内に進め、最終目標を三好長慶の本拠である飯盛山城攻略と定めて怒涛の勢いで進撃を開始したのである。

三好義興、松永久秀、立花範政らが山崎より兵を引いたのも危うさを増した河内戦線を救援するためである。万一、河内戦線が崩れると、三好政権そのものの崩壊にも繋がりがかねない。幸い、京の覇権を握った六角義賢が積極的な行動に出る気配はなかったから、兵を動かすにはまたとない好機ではあった。

無論、六角軍が動かないのは何も義賢の臆病だけが原因ではなかった。下手に深入りして、その間に北近江の浅井氏にから空きとなった本国を狙われてはたまらないという潜在的な不安感が彼らの思考回路の根底にあった。それゆえに動くに動けないというのが本音だったのである。義賢が臆病であることも理由の一つには違いなかったが、それだけではないところに六角氏の苦境を感じ取ることができる。

何はともかく京奪取以来の六角軍に目立った動きが見られないことだけは確かだった。ならば京都戦線に大軍を貼り付けておく必要性などない。臨機応変に徹するは兵法における常道である。

かくて義興は撤退を決断したわけだが……。さすがに聡明と称えられている若君だけのことはあった。如何に久秀や範政らの進言があったからとはいえ、敵を眼前に控えた状態で兵を引くなどという冒険は、容易くできるものではない。けれど彼は六角軍の様子や内部事情、総帥たる義賢の行状を逐一把握し、精査した上で、

「大丈夫だろう」

と、見切りをつけ、思い切りよく判断を下したというわけだった。実際、彼らの予想通り六角軍は行動に出なかったわけだが、この折の義興の英断がなければおそらく三好政権は一挙に崩壊して、畠山高政と六角義賢が新たな支配者として天下に君臨していたことだろう。

ともあれ義興は兵を引き、河内に入った。

一方、畠山軍も河内に入って進軍を重ねている。

両軍の激突は近い。

時は三月。まだ冬の匂いを残した、微かな春の季節だった。

総力戦の様相を呈している。

それは両陣営共に言えることだった。

まず畠山軍。

こちらは河内に入り、飯盛山攻めの最前線拠点となる教興寺に陣を敷いた。その数当初三万。だが大和から筒井順政はじめ、澤房満、秋山教家、芳野民部大輔や片岡氏、箸尾氏、島氏、井戸氏、十市氏などの諸豪族が合流したので総勢四万にまで膨れ上がっていた。

対する三好軍。

こちらも教興寺付近まで兵を進めていたが、当初の戦力は久米田からの敗残軍二万を主軸に、さらに三好義興、松永久秀、立花範政ら京都方面からの援軍部隊一万を加えて総勢三万。さらに丹波の内藤長頼や摂津の伊丹親興、塩川政年、三宅国村、有馬重則ら各地の武將を糾合し、最終的な総兵力は六万近くに達する見込みであった。

三好軍六万、畠山軍四万。総勢十万に達する空前の大軍が教興寺周辺に大集結したのである。

およそ……。

およそ、これほどの大軍が集結して戦った事例は、応仁・文明の乱を除けば他にない。戦国時代始まって以来の大戦争といってもよ

いだろう。

「……この世に、人間とはこれほどいたのだなあ」

前線総大将として教興寺の合戦に挑んでいる三好義興は、夢でも見ているような心地の中、所狭しと轟く敵味方の兵力をただ呆然と眺めていた。

「勝てるか、少将？」

義興は困ったように頭を掻きながら、側に控える立花少将範政に下問した。

「無論です」

はつきりとした口調でそう答える範政だったが、彼とてもこれほどの大規模決戦は始めてなのである。兵力的には三好方優位であるが、久米田のこともある以上、慎重にならざるを得ない。

ただ、ここで負ければ三好に未来はない。それだけは確実に確かだった。三好政権の繁栄あってこそその自分の更なる栄達もありうるのだと心に決めている範政としては、何が何でも勝利が欲しかった。少なくとも久米田の悲劇を繰り返すようなことだけはあってはならぬと思っていた。

「勝てます」

再度、そう言う範政に、

「そうか」

と、少しばかり震えきった口調で小さく頷く義興であった。



永禄五年（一五六二年）五月十四日。

桶狭間から二年が過ぎた。織田信長は、依然として美濃平定に梃子摺っている。それでも今川家から事実上独立した松平元康（後の徳川家康）と和睦し、清洲同盟と呼ばれる強固な同盟関係を築き上げるなどして、後の雄飛に向けた地盤を着々と整えていた。

甲信越地方では、相変わらず武田晴信と長尾景虎が激しい攻防を繰り返していたが、晴信は着々と信濃に勢力を拡大しているし、景虎はいえ、かねて匿っていた上杉憲政より山内上杉氏の家督及び同家が代々受け継いできた関東管領の職掌を譲り受けるなどして、その政治的地位を飛躍的に拡大していた（この際、名を上杉政虎に改名）。さらに関東の安定を保つためという名目の下、総勢十万とも言われる大軍を率いて、北条氏康の居城である小田原城を取り囲んだり、積極的な軍事活動を行っていたのだ。

無論、こうした上杉軍の積極的活動を快く思わない武田晴信軍との激突も本格化した。その最たるものが永禄四年（一五六一年）八月に勃発した、第四次川中島の決戦である。数多い川中島合戦の中でも、最も名高く、最も激しかったこの戦いは、勝敗こそ決さなかったが、武田方の重臣武田信繁（晴信の実弟）や山本勘助らが討ち死にするなど、比較的上杉軍が優勢を保ち、政虎の軍事的才能の高さを満天下に示す結果となった。

関東地方では、上杉軍の猛攻を退けた北条氏康が再び勢力を伸ばして、事実上関東制覇に大手をかける勢いで快進撃を続けていた。下野の宇都宮氏や常陸の佐竹、房総半島の里見氏など、依然として強力な大名は健在だったが、北条軍の猛攻の前には、風前の灯であるといったも決して過言ではなかった。

奥州地方はというと、伊達、最上、蘆名、佐竹、南部、安藤…、その他諸氏が攻防を繰り返して、文字通りの群雄割拠状態にあった。伊達や蘆名の勢力が伸びつつあるが、どنگりの背比べのようなものであり、どれも似たようなものだった。

中国地方では陶・大内家を滅ぼした毛利元就が着々と地盤を固めていた。ただ、その尼子氏では、当主晴久が永禄三年（一五六一年）十二月二十四日に急逝したこともあり、その衰退ぶりは誰の目にも明らかとなってきた。後を引き継いだ義久は明らかに凡庸であり、旭日の如き勢いで勢力を増す毛利軍に太刀打ちできるものではなかった。

九州では、豊後の戦国大名大友宗麟がその勢力を広げている。大友軍はかつて大内家の領地だった北九州地方を呑み込むなど、劇的に勢力を広げ、最盛期には九州の半分を実効支配下に置いていた。挙句、幕府からは九州探題の栄職を認められており、まさに鬼に金棒。宗麟の勢力は絶頂に達していた。

一方、後に九州全土に強勢を誇ることになる島津氏は、貴久の下でようやく薩摩一国を統一し、大隈にも勢力を伸ばすようになっていたが、いまいちパツとする存在ではなかった。同様に、後に島津大友と並んで九州三強の一角と評された西九州の雄、竜造寺氏もこの当時は肥前国の有力国人の一つに過ぎなかった。

とまあ、こうした諸国の情勢下である。畿内では、新興勢力三好長慶と、旧勢力畠山高政が、それぞれの力を選びすぐった大軍を率いて、河内は教興寺を挟んで対峙していた。

歴史は、動きつつある。

三好長慶は、全軍の総司令官として、飯盛山城にあった。

二人の弟を失い、重臣を失い…、あらゆる悲しみを乗り越えて、

復讐の鬼と化した今の彼は、往時の如き聡明さを取り戻していた。蠟燭は燃え尽きる寸前に、その勢いを増すという。さながら、それにも似た長慶の空元気であった。

三好長慶も、今年で三十九歳になるのである。父が死に、家督を承継してから、二十九年。果てしない乱世を生き抜き、三好家の栄華を築き上げた彼は、その先に何を見出していたのだろう。定まらぬ焦点の先に、ぼんやりとした虚空を眺めている彼は、ただひたすら、ハアと溜息を吐くだけだった。

「全軍、布陣を終えた由にございます」

伊沢大和守が報告にやってくると、長慶は大いに頷いた。

「孫次郎に伝えよ。…ゆめゆめ油断して、叔父の轍を踏むな、と」  
そう言つて、悲しそうに頭を下げる長慶に、伊沢大和守は、  
「承知いたしました」

と、対照的なほどに淡々とした仕草で、大きく頷き、軽く頭を下げた。

大和が去った後、長慶はしばらくの間、その場に立ち止まっていた。がつくりと項垂れながら、側に転がっていた地球儀を睨み付けた。

既に二人、弟が死んだ。この世で、一番好きだった、信頼するにたる存在だった弟たちは、もういないのだ。そう思うと、長慶は無性にやるせなくなつた。どんな野望も、どんな夢も、今や儚き幻想に過ぎなくなつた。どれほど強大な権勢を握ろうと、第一人守ることが出来ないのだ。そう思うと、全てがやるせなく、無意味に思えて仕方がなかった。

飯盛山城から南にしばらくいったところに、教興寺は聳え立っていた。

元来は、真言律宗系の、平凡な仏教寺院の一つに過ぎなかった。それが今、天下分け目の大戦の舞台として、俄かに脚光を浴びてい

る。

三好軍六万。

畠山軍四万。

総勢十万に及ぶ空前の大軍が、教興寺を挟み、その周辺に布陣を完了していた。まさに、河内盆地を埋め尽くしてなお余りある、空前絶後の圧倒的大軍だった。

「これぞまさしく、天下分け目の大決戦だな」

義興本隊の一角を構成し、総勢三千の兵を従えて従軍していた立花少将範政は、自らの陣地内にあつて、思わず苦笑いした。

これほどの戦いに、自身も一指揮官、高級幹部として臨んでいることが、範政には不思議でならなかった。そんな彼も、既に四十歳になった。妹に長慶の手がついて、その縁で範政が小姓に取り立てられたのは、二十年も昔の話になる。以来ずっと、この激動の戦国を彼は、彼なりの才知才腕で生き抜いてきたのだ。

いまや範政は、三好家の副家宰となり、特に三好義興付きの筆頭家老として、三好政権を事実上牛耳るまでになった。従四位下左近衛権少将などという栄位栄職まで賜り、知行地は摂津滝山城を中心に十五万石を数えている。

「勝てますか？」

側近の新井権助がそんな風に、不安げな面持ちで呟くと、

「勝てるさ」

と、彼は常と変わらぬ自信満々な笑みを浮かべながら、はっきりとした口調でそう言った。

勝てる。そうに違いないと、範政は信じていた。無論、根拠などない。けれど、何となく勝てるに違いないと思っていた。

両軍はしばらく睨み合いを続けた後、ついに永禄五年（一五六二年）は五月十九日を迎えた。

この日、戦いは始まった。

世に言う教興寺合戦。

戦国時代が始まり、豊臣秀吉によりその幕が閉じられるまで、およそ百年。それほどの長き歴史の中でも、一、二を争う大規模な戦いが、今、ここに幕を開けたのである。

前線左翼に布陣していた安宅冬康は、荘厳な甲冑姿に身を包み、ぱらぱらと降り注ぐ小雨の中に佇んでいた。

まだ夜明け前である。東の空は、次第にぼんやりと明るくなり、これまでずっと世界を覆っていた漆黒の闇は、東からやってくる新たな光の下に、西の片隅に追いやられつつあるようだった。

兄と弟が死に、天下にその名を轟かした三好四兄弟は、長兄長慶と彼だけになった。世の中の空しさ、儂さを感じながらも、兄実休、弟一存の分までも自分が頑張らねばならないのだと、彼は必死になって気力を引き出していた。

「父上、そんなところにおられては、御身体を壊しますぞ」

そこに、今年で十三歳になる嫡男安宅甚太郎信康が、不安げな顔をして、おろおろとやってきた。

「甚太郎か…。気にするな。この程度で身体を壊すほど、海の男は柔ではない」

そう言っただけで強がる冬康を、信康は呆れたように見つめている。

「いえ、お体には御気をつけませぬと、叔父上の如く、病に倒れるということも十分考えられます。…今や、父上こそが三好家の柱石なのですから、父上に万一のことがあれば、誰が御屋形様や若屋形様（義興）をお支えするのですか」

「…そう、だな」

あれほど剛毅で、殺されても容易くは死にそうもなかった、あの一存が、病でぽっくりと逝ったのだ。それを思えば、冬康もゆめゆめ身体には気をつけねばならないのかもしれない。実休も一存も死んだ今、冬康の存在感は俄かに高まっている。既に、彼の身体は、

彼一人のものではなくなっていた。

「摂州様、日の出を持って、先鋒の下野守様（三好政康）が攻撃を仕掛けることになっております。…我らもそれに合わせて攻撃するようにとの若屋形様よりの御命令にございます」

と言うのは、安宅軍の補佐役兼軍監として配置されていた松山新介という部将だった。

「分かった」

冬康はそう言って軽く頷くと、信康や松山新介らに伴われて、自らの陣へと戻っていった。

三好下野守政康以下、三好軍先鋒が攻撃を開始したことにより始まった戦いは、一挙に全軍に波及し、総勢十万に達する敵味方両軍が入り乱れて争う、凄まじき乱戦、激戦となった。

昨夜来から降り続ける小雨は、夜明け頃からますます勢いを増して、朝を迎えた頃には、ザアアアとけたたましい音の響き渡る土砂降りとなっていた。

ゆえに、兵たちは雨に打たれ、泥に塗れながらも、生き残るために必死になって戦っていた。

「やはり、雨を待っていたな」

畠山高政は、悔しそうに舌打ちした。

幔幕で覆われた本陣にも、ぼつぼつと雨水が漏れ落ちてくる。その一つが、彼の顔にかかり、一筋の線を描いて、地上へと落ちていった。

高政は眉をびくびくと震わせながら、

「くそッ！」

と、誰に対するでもなく、こみ上げる怒り不満憤懣をぶつけていた。

「だから言わんことではありませぬ」

そんな声がどこからともなく聞こえてくるようだった。高政はますます不機嫌になった。

重臣たちは、先制攻撃をかけるべきだと散々主張していたのである。それを抑えて、敵の出方を覗うべきだと押し切ったのは、他ならぬ高政だった。

無論、高政にも考えはあった。何しろ、畠山軍四万に対し、三好軍は六万。兵力的には畠山方が大きく劣っている。下手に総力戦と

なれば、数に劣る畠山軍の不利となる可能性が高い。ならば、畠山配下の雑賀衆、根来衆が誇る強力な鉄砲部隊を活用するしかない。何しろ、この鉄砲隊あつたればこそ、先の久米田の戦いでは、三好実休を討ち取るという奇跡的勝利をもぎ取ることができたのだ。高政が兵力的劣勢逆転の切り札として、鉄砲隊の力に大いなる期待を寄せていたのも、無理なからぬことであつた。

だが、そんなことは三好軍とて百も承知だつた。そのために三好実休まで失っているのだ。だからこそ、彼らは鉄砲隊を無力化できる、“雨”をずっと待っていたのである。

そして雨になつた。

待つてましたといわんばかりに、三好軍は総攻撃を開始した。当然、雨の中で、火縄銃は使えない。畠山高政が切り札として大いに期待した鉄砲隊は、逆に大いなるお荷物として、畠山軍にのしかかるようになつた。

ともあれ、戦いは初っ端から激戦になつた。

まず最初に攻撃を仕掛けた三好政康であるが、彼の部隊は畠山方の紀伊国人衆の軍勢と激突した。

政康の軍は、主に池田長正、伊丹親興、三宅国村といった摂津国人衆たちで構成されており、また補佐役として三好長逸が従つていた。

三好軍は兵力差を生かし、終始紀伊国人軍を圧倒した。時には総大将たる政康自ら最前線に立つて、督戦することもあつたほどで、両軍の攻防は凄まじさを増していった。

ただ、味方の劣勢を知つた畠山方の部将安見宗房が急遽援軍として駆けつけてきたので、とりあえず両軍は、一時兵を引いている。

明け方になつて、雨脚が弱まると、三好長逸以下、池田長正、伊



丹親興らが再び前進した。これに対し、畠山方からは湯川直光以下湯川衆、土橋種興以下雑賀衆が迎撃し、乱戦となっている。

その直後、三好方には安宅冬康や三好康長らが率いる部隊が、畠山方には澤房満や秋山教家、筒井順政ら大和衆が、それぞれ援軍に回ったので、この日一日の攻防戦の中で、最大の激戦となった。

「押セツ！ 押し崩セツ！」

安宅冬康は珍しく最前線に立って、兵たちを叱咤していた。

「殿！ 危のうございます。陣の中に……」

家臣たちは不安であった。彼の身に万が一のことがあれば、取り返しがつかない。冬康の身は彼自身のもので、安宅家だけのものでもないのだ。三好実休、十河一存亡き今、三好長慶、三好義興とともに三好政権を背負って立つ屋台骨。三好家の安寧と更なる発展のためにも、こんなところで万一のことがあってもらっては困るのだった。

冬康もそうした家臣や軍監たちの意を受け入れて、陣に戻った。既に彼は濡れ濡れだ。小姓たちがさかさず手拭を差し出し、彼はそれを受け取ると、とりあえず顔と頭に滴る雨露を拭った。

「当分、雨だな」

床机の上にとっかかりと腰を下ろした彼は、おもむろに灰色の空を見上げ、そう呟いた。

「……天、我らに加勢す、か……」

あちこちから、凄まじき激戦を裏付けるかのような喊声、悲鳴、絶叫が響き渡っていた。聞きなれた音のはずなのに、今日だけは、なんとも言えず物悲しかった。

これが戦なのだ。

冬康はそう思い、静かに目を閉じた。

昼前になると、膠着した戦線を打破すべく、十河重存率いる讃岐衆が大きく西側より迂回して、畠山軍に側面奇襲をかけんとする。

これに対し、不意を突かれた形となった畠山軍は一時混乱するも、安見宗房、甲斐庄正治らが率いる河内衆が防戦に回り、これもまた容易く決着のつかない激戦になった。

昼頃。再び雨脚が強まった。

十河重存率いる讃岐軍の増援として、篠原長房率いる阿波軍が戦線に加わっている。これに対し、畠山方では紀伊の国人堀内氏虎が加勢に回るが、兵力に勝る三好方の猛攻もあり、次第に畠山軍の劣勢が際立っていく。

昼過ぎ。

この頃になると、兵力に勝る三好軍の優勢が際立ち、自慢の鉄砲隊が使用できない畠山軍の不利は誰の目にも明らかとなっていた。相変わらず、雨脚は強い。

総大将として、戦局の推移を眺めていた三好義興は、ニタニタと勝ち誇ったような顔をして、床机の上に舞い戻った。

「弾正、少将両名の下に伝令を出せ！ 奴らも戦線に投入する」  
若々しき、澁刺とした身体を覆うように、厳かな陣羽織に身を包んだ彼は、緊張の余り震える声色で、そう命じた。

「承知ッ！」

と、簡潔明瞭な答えが返り、義興は満足そうに頷いた。

ワアアア、ワアアアと、戦場特有の掛け声が、あちこちに響き渡る。ギャアアアとか、ぐうえ、といったおぞましい悲鳴も、絶えず響いていた。

床机の上でんと腰を下ろした彼は、後はそこでジツとしていた。かつて立花又右衛門に教えてもらった孫子の言葉などを改めて思い浮かべながら、彼はひたすらに名将であろうと努力していた。

義興の号令の下、松永弾正率いる大和軍、立花少将率いる摂津滝山衆のほか、内藤備前守率いる丹波軍が戦線に加わったので、もはや三好軍優位の戦局は決定的な流れとなりつつあった。

午後三時ごろになる。

三好軍の圧倒的優位ながらも、名門としての意地がある畠山高政が、本陣の兵を割いてまで、劣勢の部隊を必死に挺入れしているので、畠山軍もなかなかしぶとく、容易く崩れそうもなかった。

「敵は寡兵ぞツ！ そら、一挙に押し崩せ！」

そんな風に怒鳴りながら、立花範政は自ら戦場に立って槍を揮っていた。

立花勢は総勢三千。範政としては、松永兄弟よりは手柄がほしいところだった。

時折、敵の足軽たちが、格好の大将首とばかり範政めがけて押し寄せてきたが、彼はそれらを難なく討ち取り、蹴散らして、日ごろ文官と蔑まれている印象を払拭するに十分な強さを示していた。

「雑兵如きに討ち取られる少将範政ではないわッ！」

朱色の甲冑が特徴的なこの男も、基本的には武士である。摂津滝山城主として、一国一城の主となった後も特訓は欠かさなかった。

雑兵如きがどれほど群れを成したところで、打ち負かされるほど弱くはない。

「殿！」

ひとしきり敵兵を蹴散らしたとき、側近の新井権助が彼の下にやってくる。

「殿、空を御覧ください」

権助の言葉に、範政は馬上よりおもむろに空を見上げた。

「…な、なに」

それまで、頭上全てを覆いつくしていた灰色の空は、ところどころ

る途切れている。鬱陶しい日差しが、宝石のようにきらきらと輝いていた。

「雨脚も弱まっております」

言われずとも、見れば明らかだった。範政は腹立たしそうに唸ると、

「雨が上がれば、鉄砲隊が出てくる。…それまでに何としても決着をつけるのだ。…権助ッ！ 全軍に下令。総攻撃だ。死に物狂いで敵に押し寄せよッ！」

と、声高に怒鳴った。

「御意ッ！」

権助は大きく頷き、そして「全軍、突撃！」と、高らかに叫んでいた。

雨脚は、次第に弱まってきた。空は晴れ、これ以上の雨は期待できそうもない。

「雨がやむのか…」

畠山高政は、絶るような気持ちで空を見上げている。雨よ止めと必死になって願っていた。事ここに至ったからには、もはや雨が上がり、雑賀や根来の鉄砲隊が復活してくれるのを待つしかないのである。鉄砲隊が使えるようになれば、先の久米田の戦いの如く、一発逆転の機会を掴み取ることとて夢ではないのだ。

「止め！ 止んでくれ！」

心の中で必死になって祈っていた。日頃猛将と評されている畠山高政らしくなく、オドオドと、落ち着きなくあちこちを動き回っていた。

一方、義興は困ったように干上がる空を見上げていた。

「このまま雨が止むと、厄介だな」

彼は苦りきった顔をして、そんな風に呟いていた。

時は一刻を争う。時間はない。畠山軍が態勢を立て直す前に…、いや彼らの切り札が復活する前に決着をつけねばならない。さもなくば、現下の優勢も一瞬の夢幻となりかねないのだ。

義興はさして迷うことなく、おもむろにすつくと立ち上がった。

「これよりわが本隊も戦線に加わるッ！ 者ども、すぐに戦支度にかかれッ！」

もはや、山の如くずっしりと構えたままではいられない。風となつて、雷となつて、早急に敵に決定的な打撃を加えなければならなかった。

義興は決して情弱な男ではない。勇気と、それに見合っただけの武

勇、少しだけの冷静さも併せ持った、若いながらも智勇兼備の名将だった。

彼の号令の下、義興本隊は素早く攻撃態勢に入った。義興は自らの愛馬に跨り、

「進めええッ！」

と、居並ぶ将兵たちに向かって、凄まじき大音を発していた。

義興の加勢により、三好軍の士気は大いに高まった。

何しろ、総大将である。三好長慶の嫡子として、いずれ三好家を受け継ぐ世子でもある。

それほどの男が、自ら戦線に出張ってきた。その凜々しき姿に、皆が見とれ、惚れていた。何より、彼ほどの男が出張ってきた以上、戦いはいよいよクライマックスである。ならば、最後に、世子の御前で一手柄挙げんと、兵たちは大いに奮い立ったのであった。

俄然、三好軍の攻撃力は高まった。

午後四時ごろ、畠山軍の有力武将の一人だった湯川直光が、乱戦の最中、討ち死にした。

四時半頃、湯川勢の敗退に伴い、雑賀、根来、大和衆が相次いで総崩れ状態に陥った。強力な鉄砲隊を有する雑賀、根来衆に狙いを定めて、重点的に猛攻を加えたのが功を奏した形となったのである。その報に接した義興は、

「そうか」

とだけ淡々と答えていたが、内心は高笑いしたいぐらいの興奮に包まれていた。

勝った。

とさえ思った。けれど、油断は禁物だ。一瞬の油断が、名将与称えられた叔父をこの世から葬り去ったのだ。義興はにやけた顔をぎゅっと引き締めると、

「油断するな。圧勝などいらん。確実な勝利のみを求めよ」

と、側に控える配下たちに怒鳴っていた。

午後五時ごろ。

相次ぐ勝報により、三好軍は強攻状態となった。士気は大いに高まり、戦意は最高潮に達した。

「今こそ手柄を挙げるときぞ！ 若大将に我らの武勇を御覧いただくのだ！」

武将たちは必死になって兵たちを叱咤している。勢いに乗り遅れて、挙げられるはずの手柄を挙げ損ねては、一代の…、いや末代までの恥となるう。誰もが必死に戦い、それが三好軍の圧倒的な強さの秘訣となった。

かくして、彼らは凄まじき勢いで、それこそ死に物狂いの勢いで、怒涛の如く、畠山軍本陣に押し寄せていった。既に本陣の兵力は手薄である。例え多量の兵があつたとしても、今の三好軍の勢いを防ぐことは不可能だつたらう。

「くそッ！」

高政は苦りきつた。もはや自軍の敗勢は決定的である。

「守護様…。ここはひとまず御退却を…」

側近たちが慌しく彼の下に駆け込んできた。高政はがっくりと頂垂れ、放心状態で床机の上に腰を下ろした。

「よ、余が、三好に負ける？」

名族畠山の一族として、棟梁として、圧倒的な自負を抱いてきた。三好如きに負けたりはしない。本気でそう思っていた。それなのに、負けた。完膚なきまでに負けた。

時代は変わる。栄枯盛衰。

もはや細川や畠山など旧来の名族たちの時代は終わったのかもしれない。考えてみれば…、いや、考えてみるまでもなく、阿波の土豪に過ぎなかつた三好家が、主家であつた細川家を圧倒し、畿内全土を掌握している事実を見れば明らかだつた。時代は変わったのだ。

必死になって抗ってきたが、怒涛の如き時代の波には、どう足掻いても勝ち目などなかった。

「は、はは……。余は、余は長慶に負けたんじゃない。三好に負けたのではない。時代に負けたのだ。時代が……時代が、もはや我らを欲さなくなったのだ」

それは、彼の最後の意地であり、強がりだった。

盛者必衰。

平安時代よりの名族畠山氏は、既にその歴史的役割を終えたのだ。

五時半ごろ、畠山軍総大将畠山高政が戦線を離脱した。同時刻、三好政康の軍勢が畠山軍本陣を制圧している。

六時ごろ、日没を迎えた。

義興は全軍に対し、引き上げの命を下した。撤退する敵軍を追撃する余り、深入りすることを恐れたのだった。油断は禁物。既に雨もやんでいる。下手に攻めていって、万が一にも敵の鉄砲隊が反撃に転じてくれば、せつかくの大勝利に水を差す大打撃を蒙りかねないのだ。

激戦乱戦の中で、すっかり荒廃し、廃墟と化した教興寺の一角に仮の本陣を設けると、義興は無数の武者たちを従えてやってきた。その凜々しき姿は、まさしく戦勝將軍の名に相応しい。堂々とした姿に改めて圧倒された武将も多く、

「民部様、実休様がなくなるとも、若屋形様お一人あれば、三好の御家は大丈夫だ」

と、思った者も少なくなかった。

義興は床机の上に腰を下ろして、手柄を挙げた武将たちを祝していた。日も暮れ、空に大いなる星々が輝くようになっても、延々と続く武将の列が途切れることはなかった。



その夜遅く、義興は一人静かにぼんやりと夜空を眺めていた。まるで宝石のように、星の一つ一つがきらきらと輝いている。この一日で無数の人間が死んだが、そんな彼らの分だけ、いつになく煌々と輝いている気がした。

教興寺合戦に勝利した彼の名は、その日のうちに伝説となった。義興自身、想像がつかぬほど、彼の名は天下に轟いていた。何しろ、この戦いを境に、家中の見る目が一変したのだ。如何に聡明といえど、どこか貧弱な御曹司…、などと見られていたものが、一朝のうちに、長慶に勝るとも劣らぬ大器だと、誰もが認め、称えるようになった。

この上なく恥ずかしい。

義興は困ったように苦笑いする。

「お前がいてくれて、よかったよ」

彼は、叔父冬康のこの言葉が、今もなお忘れられない。どんな褒め言葉より、これが一番嬉しかった。

翌日から、義興はまた多忙の人になった。

五月二十日。

義興率いる三好軍は、河内における畠山方の勢力を一掃しつつ南進し、まず高屋城に入った。既に畠山高政の姿はなく、残った畠山方の豪族たちは、皆、挙って高屋の義興の下に伺候して、許しを乞うていた。

彼らに対する仕置をひとしきりすませると、翌二十一日には、松永弾正久秀を総大将とする軍を大和に派して、畠山方の諸豪族を一掃させた。筒井氏、十市氏はじめ、三好家に抗った諸豪族は悉く松永軍により領地を奪われた挙句、屈服した。かくして、松永弾正久秀は、ようやくにして完全なる大和国統一を実現したのであった。

一方、三好義興自身は高屋城に留まって、全軍の作戦指揮にあたっていた。大和に松永弾正を差し向け、さらに和泉国には安宅冬康

を総大将、立花範政を副将とした軍を送り込み、これを奪回している。

教興寺の大勝により、三好方は久米田の敗戦で失った全てを一挙に回復した。ばかりではなく、それ以上の勢威を手に入れたともいえる。実際、和泉国を制圧した三好軍は、その勢いそのまま紀伊に雪崩れ込み、その大半を制圧した。

その上で、六月になると、義興は兵を北上させて、都に蛮拵する六角義賢の軍勢と激突した。

といつて、勢いに乗る三好軍の猛攻を、六角の独力で防備しきれはるがなかった。義賢は慌てふためいて都を明け渡すと、観音寺まで引き上げて、これに立て籠もった。

だが…。

それで六角を野放しにするほど、三好義興も甘くはない。六月二日、彼は総勢五万の大軍で近江に攻め入ると、まず大津、さらに坂本を制圧して、観音寺に迫った。

「若屋形様、六角よりの使者が参りました」

六月三日午後、三好政康が慌しく義興の下に駆け込んできて、そう告げた。

「通せ！」

いまや見違えるような武将となった義興は、大津に設けた本陣の一角で、ニタニタと不敵に笑いながら、金平糖（南蛮渡来の甘菓子の一つ）を一つ二つ美味そうに頬張っていた。

やがて六角の使者としてやってきた後藤賢豊は、恭しく義興の御前に平伏した。義興は、そんな使者をジッと睨みつけると、

「何用あつて参ったか！」

と、殊更強気な口調で、そう言った。

「此度の御戦勝、誠に執着至極に存じます。つきましては…」

「和議なら、受けぬ」

きつぱりと言い切る義興に、後藤賢豊は困ったように頭を掻いた。「されば、よろしゅうござる。我らとて意地がござれば、観音寺を枕に討ち死にする覚悟で、三好殿と合間見えましよう」

賢豊とても名門六角家の全権代表としての意地がある。取り付く島もなく断られた今、だからといって安易に義興の情けに縋るほど、情弱な男ではなかった。

「勘違いするな」

途端、不意を突くように義興はからからと笑った。

「和議とは即ち、対等の関係を指す。ゆえに、和議は受けられぬ。

だが、六角家が降伏するというなら、こちらも検討するにやぶさかではない」

「こ、降伏…」

「そうだ。無論、嫌なら、これより観音寺攻めを断行するのみだ。

既に小谷の浅井長政殿と我らとの間には盟約が結ばれている。我らが観音寺に攻め入れれば、浅井勢も加勢に回ることになる。聞くところによれば、一昨年（一五六〇年）、野良田とかいう場所で、浅井殿の軍と六角殿の軍が戦い、六角殿が完膚なきまでに敗れたと聞き及ぶ。凡庸な久政殿と違い、勇猛果敢の聞こえ高い長政殿の率いる浅井勢までも敵に回すとすれば、六角殿の命数は見えたも同然」

義興は勝ち誇っている。絶対の自信を全身に漲らせ、余裕満々の笑顔で、はつきりと降伏勧告の受け入れを迫っていた。

「…条件は？」

悔しそくに臍を噛みながらも、余りに的を射た義興の指摘に、返す言葉もない賢豊には、もはやそう聞くしかなかった。

「そうさな。まず、六角左京大夫殿（義賢）には隠居剃髪してもらうことにしようか。それと、新たに家督を受け継がれる者が誰かは知らぬが、その者と、左京大夫殿には、早速飯盛山城に赴いていただき、わが父、三好修理大夫の御前にて、臣下の礼をとってもらう」

「し、臣下の礼…」

「当たり前だろう。嫌なら、別に構わん。ここにある五万の兵と、

浅井殿の軍を合わせた数で、観音寺を攻め立てるのみ。無論、大和や紀伊、和泉のことが片付けば、そちらの兵も観音寺攻めに回すから、総勢十万にはなるかな。それだけの大軍に勝てる自信があるなら、どうぞご自由になされよ」

「……」  
義興の絶対的強気の前に、賢豊はただだんまりを決め込むより他に仕方がなかった。実際、今の六角軍の力で、三好・浅井連合軍に勝利できるとは、到底思えなかった。

何しろ、一昨年、浅井家との間で勃発した野良田の合戦に敗れて以来、六角家の軍事的衰退は目に余るものがあつた。今回の戦いで、六角軍が積極的な軍事行動に出られなかったのも、野良田の敗戦で受けた傷が依然として癒えていなかったことも大きかった。

野良田の合戦は、六角家からの完全独立を宣言した浅井久政の行為に激怒した六角義賢が、総勢二万五千の大軍を率いて浅井領内に攻め入ったことで勃発した。浅井方の兵力は一万に満たなかったが、六角軍の足並みが乱れていたことや、浅井方の総大将となった浅井長政の勇猛果敢さに奮い立った浅井軍が猛攻をかけたこともあつて、数に勝る六角軍の無惨な敗北で終わっていた。

この戦いの結果、浅井家では、凡庸な久政が追放され、武勲を挙げて名を高めた長政が新たな家督に擁立されている。一方、六角家では義賢の指導力が大幅に減退し、後藤賢豊に代表される家臣団の勢威が大幅に高まった。

まあ、その後の近江情勢を語る上で欠かせない決戦となつたわけだが、ともあれ、その後遺症もあり、大幅に弱体化していた六角軍では、どう足掻いても、三好の大軍に敵うはずもなかった。

結局、六角家はこれを受け入れ、三好家に全面降伏を誓うことになつた。

即ち、六角義賢は出家し、承禎と名乗り、その上で家督を、嫡男

の義治に譲った。

そして六月二十日。

六角承禎、義治父子は三好長慶のいる飯盛山城に伺候し、恭しく臣下の礼をとった。近江佐々木源氏の嫡流にして、代々同国守護を務めていた名門一族が、阿波の成り上がり者に過ぎない三好家に臣従したのであるから、これは歴史的大事件だった。

【衰運編】第102章 驕る範政

教興寺合戦に勝利した三好政権は、形の上では、最盛期を迎えることになった。無論、その実態を知っている者にしてみれば、そんな見せ掛けの繁栄など鼻で笑うだろうが、ともかく、支配領域だけは最大に達したわけである。

その三好家の領国だが、以下の通りとなる。

阿波、讃岐、淡路、摂津、河内、和泉、紀伊、山城、大和、丹波の十ヶ国を一円支配しているほか近江、播磨、伊予、丹後などの一部も支配下に置き、若狭の武田氏や南近江の六角氏などを従属下に入れていた。即ち、畿内や四国といわれる地域の大部分が、悉く三好政権の支配下に編入されることになったわけである。

こうした凄まじき隆昌の一方で、肝心の三好長慶の士気低下は見る見る進んでいった。

とりわけ、今回の戦いで三好実休を失ったことが、彼の心を大いに傷つけ、廃人同然の状態に追い込んだのであった。そして教興寺に勝利し、ひとしきり復讐を果たしてしまうと、辛うじて保たれていた精神状態は、一瞬のうちに、脆く儂く崩壊した。後の彼は、もはやただの抜け殻である。政治への興味関心をほとんど失った拳句、日々何をするでもなく、ただぼんやりと過ごすことが多くなった。さもなければ飯盛山城内にあって、贅沢の限りを尽くした風流三昧に明け暮れるようになった。

「御屋形様があれではのう」

重臣たちは、困ったように噂しあっていた。長慶の行状を知らぬ者など一人もない。誰もがどうすべきかと、頭を抱えていたのだった。

「ま、若屋形様が御聡明であられたことが、何よりの救いであろう

て…。民部様（十河一存）、実休様亡き今、若屋形様の存在感はますます高まるう」

「ああ。いっそ、若屋形様に御家督をお譲りになればよろしいのだ。されば、いろいろ面倒なこともなくなる」

「はは、確かにそうよな。いちいち飯盛山の顔色を覗って政治をするのも、疲れるわな」

芥川山城内にあつて、彼らの会話は大いに弾んだ。

長慶の政治力低下を補う形で、事実上の三好政権最高権力者となつたのは、彼の嫡子たる三好義興であつた。久米田合戦に敗北し、苦戦していた三好家を教興寺の大勝利に導いた英雄として、彼の名は既に天下に轟いている。彼が長慶に代わって政務を執ることに不満な者などいるはずもなかった。

「何を無駄な話をしておるか！ 父上の悪口なれば、許さんぞ！」

そこに、ひよっこりと現れた三好義興に、重臣たちは仰天した。

「も、申し訳ござりませぬ」

慌てて平伏し、非を詫びる。すると、

「気にするな。からかっただけだ」

義興はカラカラと楽しそうに笑い、悠然と自らの居殿に向かつて走っていった。

立花少将範政は、ここ最近、得意満面である。

飛ぶ鳥落とす勢いとは、まさに彼のためにあるような言葉だつた。実際、彼は義興政権の大番頭として、事実上三好政権の実権を握っていた。

「少将殿だ」

彼が歩くたび、彼がやってくるたびに、群臣たちは大いに恐れ、敬った。何しろ三好義興だけでなく、長慶からも絶対的信頼を寄せられている彼は、まさに最強の権力者だつた。

「この状況では、少将殿と弾正殿の政争は、少将殿の勝利で終わり

そつだな。弾正殿は、専ら大和に閉じこもつて、飯盛山には伺候するも、芥川山にはなかなか来ないしな」

三好家の群臣たちは、出会えばそんな話をした。所詮噂話なので、話半分に聞く必要はあつたが、ともあれ、どの噂も、共通していることは立花少将範政の凄まじき権勢に対する羨望とやつかみだつた。

範政は三好政権を牛耳っているだけでなく、今回の論功行賞で、新たに岸和田城と和泉一国を賜つていた。さらに堺奉行を兼ね、紀伊の国人衆に対する監督権も与えられていたのである。

「貰いすぎだ」

との声が上がつたのも実に自然なことであつた。けれど、義興の下した判断では、否と唱えられるはずもなく、皆、これを認めるよりほかに仕方がなかつたのである。

和泉一国二十万石相当を領有し、堺の支配権を一任されているほか、紀伊国に対する軍事指揮権すら委ねられた男。

もはや立花範政は、一介の小姓ではなかつた。堂々たる三好の重臣にして、三好政権の実権を握つた最高権力者であつた。

教興寺合戦が終わつた後、義興は、実父長慶承認の下、新たな国割を行つていた。

それによると、摂津滝山城主だつた立花範政が、和泉岸和田城主に国替えとなり、同国の一円支配を委任されたほか、河内高屋城には三好康長が入り、河内国南半分の統治権は康長に一任されていた。紀伊国の監督権は和泉国主の範政と南河内国主の康長の両名に与えられ、主に範政が軍事面で、康長が政治面での指揮を執るよう命じられていたのだつた。

またこの論功行賞の席上、三好実休の跡目を彼の息子である三好長治が相続することが正式に認められ、これに伴い、長治には阿波守護代の座と、三好家本貫の地である三好郡をはじめとする領地が与えられた。ただ、長治はまだ九歳と幼いため、重臣筆頭の篠原長



房と、淡路国主である安宅冬康の兩人が後見役に指名されて藩政を主導することになった。冬康はまた、実休に代わる四国三好党の旗頭として、阿波の三好長治だけでなく、讃岐の十河氏など四国衆を率いる権限が与えられていた。

そのほか、大和は引き続き松永弾正久秀の支配となり、丹波も内藤長頼が治めることを認められた。また内藤長頼に対しては、丹波だけでなく若狭国の監督権も与えられ、万一、若狭国主武田氏に不穏な動きがあれば、彼の判断で武力介入できるようになった。

国割その他諸々、やらねばならぬ仕事が一としきり終わった七月十五日。

都は一条戻橋。

ここで、一人の罪人が首を斬られるとあつて、野次馬根性丸出しの群衆たちが、見物と称して群れを成していた。

「聞いたか。殺されるのは、細川晴之様だよ」  
人々は口々に、そんなことを言い合っている。

「ああ。何でも、先の畠山様と六角様の謀叛を扇動して、三好様に楯突いた罪で、打ち首なんだとか」

「ああ。だが、晴之様といやあ、今でこそ普門寺つてとこに隠居しておられるが、かつての管領晴元様の御次男だろう」

「そうらしい。何でも、立花少将様の御判断らしいが、教興寺の御戦勝以来、猫も杓子も立花少将様だから、やんなるよ」

噂というものは、時にどんな情報よりも正確であつたりする。人々は皆、三好家の実質的な権力を立花範政が握っているということを知っていた。

そして範政という男は、民草からの人気は余りない。確かに下級足輕の家に生まれながら、今や従四位下左近衛権少将、和泉国主、堺奉行、三好義興付家老の座にまで上り詰めたことに対しては、人々も大いに誉めそやしたものである。彼の如くなりたいものだと思

う者も少なくはなかった。けれど、彼は余りに民に対して厳しかった。

年貢米を引き上げたり、払えなかった者を厳罰に処したこともある。朝廷や幕府、あるいは淀城の細川氏綱や普門寺の晴元に対して厳しい態度で迫ることも少なくなかった。そうした所業が、人々から見ると傲慢に映るのである。何様のつもりだと陰ながら誰もがそう思ったものであった。

そして今、名門細川家の次男が範政の手により殺されようとしている。晴之という若者がどういう人なのか、そんなことは誰も知らないが、とにかく細川家の次男坊である。管領として、長らく幕府と天下に君臨してきた細川京兆家嫡流が、どこの馬の骨とも知れぬ男の命令によつて殺される様というのは、やはり見えていて、儂く、辛いものであった。

「だが晴之様と申せば、まだ十三、四の少年だつて言う話じゃないか。打ち首なんて、余りに残酷……」

そんな風に、人々が口々に噂しあっていると、やがて一人の哀れな少年が、三好方の兵士に引つ立てられて、処刑台に引きずり出されてきた。まだ年端もいかない子供である。それが、罪人としてしよつ引かれ、乱暴に扱われている。

「打ち首かよ。切腹ならまだしも……」

と、人々はそれぞれの心の中で、三好家の強引なやり方に怨嗟の声を張り上げていた。

「そこ、黙らぬかッ！」

役人が怒鳴ると、控えていた兵たちが、待つてましたとばかりに民衆たちを威嚇する。完全武装の精鋭たちであるから、何をしでかすかしたのではない。人々は黙り、ただひたすら、眼前で執り行われることになった死刑の執行を緊張した面持ちで見守っていた。

「細川晴之！ 汝はいたずらに六角、畠山を誑かし、天下に大乱と

害悪をもたらした。その罪は万死に値する。よって、今日を持って打ち首とするものである！」

といったようなことを、役人たちは朗々と宣言していた。そして最後に、

「以上は三好修理大夫様の御命令である」

と、付け加えると、民衆の顔色が少しばかり変わった。

名門細川の宗家嫡流に属する少年が、かつて細川家の被官だった三好長慶の命により斬られる。要するに、そう言うことである。下克上、ここに極まれり、といった感もあった。人々にしてみれば、世の中が変わったのだということを改めて思い知らされたような気がして、愕然たる気持ちになった。

細川晴之が斬られたのは、それからまもなくのことだった。

晴之処刑を推進し、執行したのは、立花範政である。民衆だけでなく、三好家中からも、これはやりすぎだという意見が上がったが、範政は聞く耳を持たなかった。

「晴之のような奴を生かしておけば、いつ何時、御家の災厄となるか分からんではないか」

というのが、彼の論理である。また何よりも、既に三好は細川の被官ではない、ということ満天下に示す目的もあった。実際、依然として三好家は細川の被官だとして侮る声も少なくないのである。淀城の細川氏綱を擁立して、何やら密かに策動する愚か者もないわけではなかった。そういう動きを封じ、三好政権の絶対性を示す。そのためのデモンストレーションとして、彼は断固たる態度で晴之を処刑するつもりだった。そしてそうした彼の考えを、義興は全面的に支持していた。と、いうよりも、晴之処刑の黒幕は、飯盛山の三好長慶であったりした。それが分かっているだけに、義興には範政の行動を非難したり、否定したりすることはできなかつたのである。

従四位下左近衛権少将。室町幕府御相伴衆。

和泉岸和田城主。堺奉行。

三好家家老（副家宰）、義興付き筆頭家老。

…。

これが今の立花範政を彩る全てであったが、こんなややこしき身分をいちいち示すより、たった一言、三好家の宰相と言ってしまつたほうが、より簡潔明瞭に、今の彼という存在を表現できた。

ただ、栄達を極め、凄まじき権勢を誇る彼を嫌う者も少なくなかった。これまでは三好長慶・義興父子の絶対的の信任だけでなく、三好長逸や十河一存、三好政康ら有力一門の支持も取り付けることで、そつした声を押さえ込んできた。だが十河一存は既になく、三好政康も彼の権勢ぶりに眉を顰めて、今ではすっかり反立花、親松永派に変わりつつあった。唯一の味方といえた三好長逸も、細川晴之処刑の一件で、彼の反対を押し切つて処刑を強行したために、蜜月といわれた間柄にも隙間風が吹くようになっていた。

これは、かねがね、生前の立花又右衛門が言っていたことである。「我々は成り上がり者。出世したいという気持ちは分かる。わしとてほしい。だが、分限というものを弁えねばならぬ。我らが出世しすぎると、当然、妬みややつかみを一身に受けることになりかねん。出世したくば、よほど周到に根回しを済ませて、慎重に慎重を期さねばならんだ。石橋を叩いて叩いて、それこそ壊してしまつぐらゐに叩いて、なお渡らぬぐらゐの慎重さを持たねばならんだ」

又右衛門は、範政ほどの野心家ではないし、人生経験豊富な人格者であったから、出世しすぎることの危険性を嫌というほどに承知していた。

そんな彼だから、かつて長慶に正五位下の位階を授けられたときも、同時に三好長逸を従四位下に推薦することで、自分に対する注目をそらし、かつ長逸との間に強い政治的絆を築くことに成功した。

範政には、こういう政治的配慮が欠けている。栄達すれば言いというものではない。その辺りが、彼には分かかっていないのだった。

だから彼は、目立つことばかりしていた。

例えば、自分の権勢を示さんとして、居城岸和田城を大幅に増築しだしたことや、三好義興政権下の要職に、自派閥の人間を次から次へと登用し、他派の者を省いていったのもよくなかった。結局、省かれた者は、彼を敵視するようになった。

要するに、今の彼は驕っていた。世の中の全てが自分を中心に回っているのだと、思い上がっていた。

「少将の権勢ぶりは目に余る」

そんな彼の行状に対し、ついに三好長逸までもがそっぽを向き始めた。範政の岳父として、長慶・義興父子を除けば最大の後ろ盾であった彼の離反は、範政の専権に眉を顰めていた三好家中に大きな波紋を呼んだ。

「これ以上、奴の思うがままにさせておいては、三好の御家が乗っ取られてしまうということにもなりかねませぬ。今や殺伐とした戦国乱世の世の中ゆえ」

正五位下下野守に留まっている山城木津城主三好政康は、困ったように溜息を吐きながら、そんな風に呟いていた。

「ふん。…ま、これまでは義理の倅ゆえにだんまりを決め込んできたが、これ以上の専断を放置しておくわけにもいかんかなあ」

従四位下日向守、山城飯岡城主。

三好長逸は三好実休、十河一存亡き後、三好義興、安宅冬康、三好康長に次ぐ三好一門の重鎮となっていた。けれど、ここ最近はそれも名ばかりで、長逸に与えられた役目といえば、せいぜい飯岡城を中心とした山城南部地域の統括であり、本来の役目であった都の支配も、事実上、立花範政に取って代わられつつあるのが現状だった。

「こうなると、大和で神妙にしている松永弾正が可愛く見えてくる  
ものでござるな」

などと自嘲気味に苦笑いする政康に、  
「そうだな」

と、静かに頷く長逸であった。

【衰運編】第103章 伊勢貞孝謀叛

永禄五年（一五六二年）は、三好政権がまがりなりにも頂点に達した時期であり、細川政元の横死以来ひたすら続く果てしなき動乱に、一つの終止符<sup>ピリオド</sup>を打った年でもあった。

教興寺合戦により、細川に並ぶ名門と称えられていた畠山氏が没落し、六角氏も衰退が決定的となった。その上、細川京兆家嫡流の細川晴之が処刑されたことで、ただでさえ衰亡の極みにあった管領細川氏は滅亡したも同然の状態に追い込まれた。

そして、伊勢貞孝が滅びたのも、この頃のことであった。

伊勢貞孝は政所執事の要職にある有力幕臣であり、三好政権の成立と発展に尽力した功労者でもあった。長慶の信任厚く、それゆえに三好家と幕府の橋渡し役を務めてきた有力者であったが、そんな彼が一転して転落の憂き目に遭ったのは、教興寺合戦終結から間もない九月のことになる。

「おのれッ！ このところ、三好殿は我らに冷たい。…事あることに弾正、少将なのだからな」

貞孝は不安で仕方がなかった。何しろ、三好義興が政権を引っ張るようになってからというもの、長慶時代に築き上げてきた人脈や影響力というものが、ほとんど失われてしまったからである。その上、室町將軍家と三好家の絶妙なパワーバランスの上に自らの存在価値を見出してきた貞孝にとって、教興寺の合戦以後、三好家の力が著しく強大化してきたことも痛かった。

「されど、如何なさいますか。義興は立花少将を京都奉行に任じ、朝廷や幕府との折衝の全てを委ねております。我らの立場はますます

す悪化する一方です」

嫡子貞良の言葉に、貞孝は苦りきったように爪を噛んだ。

「分かつておるわ。そんなこと……」

などとぼやきながら、今後どうすべきか、考えるべきときが来たのかもしれない。

自分とて、累代幕政に重きを成してきた名族伊勢氏の棟梁だ。貞孝にはそれなりの自負がある。たかが阿波の土豪上がりの成り上がり者のために屈辱を味わうことはない。伊勢氏の力を見せ付けて、三好家に参ったと言わせてやりたかった。

貞孝はひとまず室町御所に伺候し、足利義輝に謁見した。

「三好と袂を分かつのか？」

夕焼けが、やけにまぶしく輝いていた。義輝は庭先に立って、小さく呟いた。

「……そのために、上様より三好討伐の御内書を発していただきたく、参上仕りました次第にございます」

「討伐の御内書？」

義輝は困ったように苦笑いすると、貞孝の下に歩み寄った。

「お主も、少々呆けたのではないか」

「……ほ、呆けたですと？」

「左様じゃ。何ゆえ、今なのじゃ。もう少し前であれば……、畠山宮内と六角左京が三好軍と対峙していた折に離反していれば、三好に止めを刺すことができたというものを……。今更決起したところで、三好に勝てる、誠に思っておるのか？」

將軍は比較的冷静だった。幾たびも三好討伐を唱えて戦い続けてきた男とも思えなかった。

「勝てまする！」

貞孝は胸を張った。

「まず六角承禎に使者を送り、拳兵を促します。彼とて三好に臣従



を余儀なくされ、内心腸が煮えくり返っておりましよう。さらに紀伊に潜伏中の畠山高政や備前・播磨の浦上、若狭の武田、伊勢の北畠にも同様に使者を送ります。彼らが動けば、あるいは彼らに不穩の動きありと伝われば、三好方は主力軍を西、北、東にそれぞれ向けざるを得ませぬ。さすれば中央、即ち京はがら空きとなります。そこで我らが拳兵し、一挙に叩くのです」

「…それで、勝てると?」

多分に懐疑的な視線を向ける義輝に、貞孝ははっきりと、大きく頷いた。

「たわけめ。…少なくとも、余がそのほうを支持することはない。よって御内書もなしだ」

「さ、されど!」

「黙れツ! …お主も利口なら、左様な暴挙は諦め、大人しく三好家の被官であれ。されば、健やかな余生ぐらいは許されよう」

義輝は、ずっと三好家に従い、時には將軍家と対峙することも厭わなかった貞孝が、こういうときに限って自分を頼ってきたことが何より許せなかった。やりたければ、勝手にやるとよい。突き放したような物言いの裏には、こうした將軍の思いがあった。

將軍に見限られた形となった貞孝は、失意のままに、伊勢邸に戻った。政所執事として権勢を極めた男の面影は、もはやどこにもなかった。

「くつくくく。伊勢貞孝め。愚かなことよ」

三好屋敷は奉行所も兼ねている。臨時の主となっている京都奉行兼任の立花範政は、將軍家より届けられた密書を眺めつつ、ニタニタと笑っていた。

「如何なさいますか?」

新井権助の言葉に、

「言わずとも知れたことだ」

範政ははつきりとした口調で、そう言った。

「権助。とりあえず、この文を芥川山の義興様と飯盛山の御屋形様に届けよ。伊勢貞孝に謀叛の疑いあり、とな」

「承知しました」

権助は恭しく頭を下げて、足早に彼の下から去っていった。

範政はしばらく考え込んでいる。

「そういえば、弾正殿が都におられたな。とりあえず、ここに呼べ。事は重大ゆえ、余り先走りすぎんほうがよいだろう。ただでさえ、わしは独断専行が過ぎて不人気らしいからな」

などと呟きながら、相変わらず不敵な笑みを漏らし続ける立花少将範政であった。

伊勢貞孝は追い詰められていた。

彼の屋敷に、立花範政の使者として、三好家被官今村慶満のほかに、幕臣の細川藤孝と和田惟政の両名がやってきたのは、永禄五年（一五六二年）七月末のことであった。

「謀叛之儀は誤報であると、申されるのだな」

共に幕臣として、將軍家に仕えてきた同志たちに問い詰められると言つのは、余り気持ちよくはなかった。

「無論だ」

貞孝は力なく胸を張り、藤孝をぎろりと睨み付けた。

「されば、これは何か！」

今村慶満が指し示したのは、貞孝直筆の檄文であった。諸国の大名に飛ばした、紛れもない援軍要請書である。

「偽文でござろう」

貞孝はあくまで白を切るつもりであった。さもなければ殺される。だったら、徹底的に嘘を吐き続けるつもりでいた。

「偽文か……。まあ、よい。だが、ここにある花押、伊勢家のものと良く似ている。累代政所執事の栄職にあられた伊勢家の花押そっく

りだ。だが、少しばかり違つうのう。この花押は、少しばかりひねくれている。代々幕府に忠節を尽くしてきた律儀な伊勢家の花押とは思えぬくらい曲がつておるわ」

今村慶満はこれ見よがしに大笑いすると、細川藤孝、和田惟政兩名を従えて、何も言わぬ貞孝を尻目に伊勢邸を立ち去った。

九月。

度重なる三好方の詮議に耐えかねた伊勢貞孝は京都近郊の舟岡山に入り、そこで挙兵した。

総勢三千余騎。

その急報は直ちに三好屋敷の立花範政、松永久秀の下に届けられ、ついに来たとはかり二人はいきり立った。

「いよいよ獅子身中の虫を成敗することができるわい」

弾正久秀は、嬉しそうに叫んでいた。

「敵の総勢は三千。ただ寄せ集めの烏合の衆にて、内部には乱れもあるようです」

久秀の子久通の報告に、範政、久秀兩名は大きく頷いた。

「たかが三千。バカな奴だ。こちらには一万の兵がある。戦って勝てるだけでも本気で思っているのかな」

範政は勝ち誇ったような顔で、すつくと床机から立ち上がった。

既に都には立花軍五千と松永軍五千を合わせた総勢一万の大軍が犇っていた。しばらくすれば、飯岡より三好長逸の兵二千、木津より三好政康の兵二千の総勢四千の援軍が合流する手筈となっている。伊勢貞孝軍三千など、物の数でもないのだ。

「弾正殿。されば出陣いたそうか」

と、範政が言えば、

「無論のこと」

弾正久秀は大きく頷いた。

舟岡山を取り囲む三好軍と、籠城する伊勢軍の間で激戦が始まったのは、九月十二日のことであった。

ただ三好長逸軍、三好政康軍を加え、総勢一万五千を超えた三好軍に対し、伊勢軍は逃亡兵も相次いだため、既に一千を割り込んでいる。勝ち目などない。

「戦えッ！ 逃げずに戦えッ！ 伊勢家の武勇、満天下に示してやるぞ！」

貞孝は怒鳴り、貞良は奮戦する。

伊勢勢は圧倒的戦力差にめげることなく奮戦し、代々幕府の名門と称えられてきた家名を決して穢さなかった。けれど、多勢に無勢どれだけ奮戦しようとも、圧倒的な三好軍の攻勢を防ぎきれぬものではなかった。

「申し上げますッ！ 佐久間権兵衛殿、討ち死に！」

「申し上げますッ！ 平岩十兵衛殿、討ち死に！」

「申し上げますッ！」

次から次へともたらされる凶報に、貞孝はがっくりと項垂れた。握る采配は、汗に塗れて錆付いていた。体の震えはなかなか止まらない。

その頃、麓の三好軍本陣では……。

「一千足らずの敵に対し、何を梃子摺っているのだ！」

立花範政の怒号がところ構わず響き渡っていた。

「攻めて攻めて攻めまくるのだ。犠牲がどれだけ出ても構わん。攻めて攻めて攻めまくれッ！」

「しよ、承知！」

彼の怒号に追い立てられるように、伝令が次から次へ、ひっきりなしに最前線へ飛んでいく。

「少将殿。しばし落ち着きあれ」

そう言つて、弾正久秀が、相も変らぬひょうきんな顔をしてやつてきた。

「戦に臨む大将たる者、動かざること山の如しですぞ」

「…弾正殿に言われずとも、その程度のことは承知してござる」

「左様かな？ ならば失礼。はっはっは」

弾正はひとしきり笑つと、己の床机の上にとっかかりと腰を下ろした。

「されど、伊勢貞孝もなかなか手強いものでござるな。我ら一万五千の兵を相手に、未だ奮戦しているとは…。軟弱な公家武士かと思つておりましたが、どうしてどうして。さすがに室町公方に代々仕えた名族伊勢氏の棟梁じゃ」

「…敵を褒めて、どうするのでござる」

範政の苦言などどこ吹く風。久秀は「いや凄い」と、いつまでも伊勢貞孝の奮戦を褒め称えていた。

「そうこうしていると…」

「申し上げます」

再び伝令が駆け込んできた。

「山頂の砦が陥落し、伊勢貞孝及びその嫡子貞良、逃走途上、我らの放つた流れ矢に当たり、討ち死にしたとのことでございます」

「な、なに？」

思いがけぬ報告に、範政は身を乗り出して伝令を睨み付けた。

「誠か？」

久秀が代わつて尋ねると、

「はッ！」

そうはつきりと頷く伝令だった。

かくして伊勢氏は滅びた。代々幕府の政所執事の座を世襲し、幕府官僚の筆頭格として権勢を誇つた名族の末路は、かくもあっけなく、空しいものであった。

その後、貞孝及び貞良の首は、範政の意向により、六条河原に晒し首にされることとなった。三好家に楯突いた者はかくの如しであると示すための見せしめであり、また幕府の政所執事を務めたほどの名族であろうと、三好家には抗えぬのだということを示すデモンストレーションの一つでもあった。

伊勢氏の残党狩りも進み、畿内は再び平和を取り戻した。戦後処理を通じて、三好政権の畿内支配力は大幅に強まり、彼らの天下、ここに完成したと言ってよいような状態となったわけである。そして時は流れる。

時代はついに永禄六年（一五六三年）を迎えたわけであった。

三好義興に、待望の嫡男が生まれたのは、新年を迎えた頃のことである。

正室との間に生まれた子というわけではなかったが、ともかく、十河一存の病死に始まり、次々と有力一門を失っていた三好家にとつては、これ以上ない朗報であった。また順当にいけば、三好政権三代目を引き継ぐ可能性のある子なのである。誰もが大いに喜び、三好家は久方ぶりの吉事に沸きかえった。中でも初めて祖父となつた長慶などは、

「孫じゃ、孫じゃ」

と、いつになく嬉しそうにはしゃいでいたものである。

そして二日ばかりが過ぎた。

相変わらず、生まれたばかりの若君は飯盛山城奥御殿にあって、祖父たる長慶、実父義興のほか、雅の方、御台所（遊佐御前）らそうそうたる面子に取り囲まれていた。

「孫次郎。この子の名は千熊丸としよう。朝廷に奏上し、従五位下の官位を授けてもらえるよう運動せねばならぬな」

長慶はそんな風に言つて、楽しそうにカラカラと笑っていた。日頃飯盛山城内の奥御殿に閉じこもり、ほとんど引籠もり状態となっている男とは思えぬほど明朗快活な物言いに、義興は少しばかり驚いた。

「はい。朝廷が如何に我らの意に従うかを見定める好機にもなりましょう」

と、義興が言えば、

「うむ」

満足そうな顔をして、殊更大きく頷く長慶であった。

この頃、松永弾正久秀は、ようやく完成した居城多聞山にあつて、一人静かに大和支配の完璧を期していた。

多聞山城は、後世、織田信長の居城安土城の模範になったとされるほど、当時としては凄まじく革新的で、かつ盛大な城だったといわれている。安土城だけでなく、現代に残る城の大半は、ほとんど多聞山城の流れを受け継いでいるとさえ言われており、名築城家と評された松永久秀の経験と技量の全てを余すことなく注ぎ込んだ、松永流築城術の集大成ともいえる代物だった。

摂津伊丹城に続き、史上二番目の本格的な天守閣を備えた城であり、その威容は見る者聞く者、あらゆる人々の度肝を抜いた。派手好きな久秀の性格そのままの造りになっていて、特に彼の居殿たる奥御殿などは、ところどころ金銀珠玉で彩られ、一見すると極楽浄土を思わせるような荘厳な雰囲気には満ち溢れていた。

「凄いだろう」

久秀は聳え立つ天守閣から、広がる奈良の町を悠然と見下ろしていた。側には、厳かな服装に身を包んだ女子が一人、恭しく控えていた。

「はい」

と、静かに頷く女子に、久秀は少しばかり物足りなさそうな顔をして小さく溜息を吐いた。

「それにしても、わしも随分と出世したものだ。この城もそうだが、御屋形様の姫君たるそなたを妻として迎えているのだからなあ」

「…」

「くつくく。こんな爺に嫁がされて、お主も大変だろうな。御屋形様の姫と生まれながら、どこの馬の骨とも分からぬわしに穢される。腹立たしいだろう。だが、憎むなよ。これもそなたの宿命じゃ。我慢してさえいれば、生活に不自由はさせんぞ」

ニタニタと勝ち誇ったように笑う久秀に、女は悔しそうに俯き、悲しげな顔をして、

「嫁いだ以上、私は御殿様の妻でございます。腹立たしいなどと思



ったことはありませんぬ  
と、言った。

妻が去り、入れ違いにやってきたのは、側近の楠木正虎であった。久秀は彼の顔を確認すると、

「これがわが力ぞ」

と、相も変らぬ上機嫌で、窓先に広がる己が栄華を見せびらかしていた。

「はい。これで奈良の町は完全に掌握いたしましたし、大和衆も殿には金輪際逆らえませぬ」

正虎がすかさず相槌を打つと、久秀は「ははは」と笑った。

「それにしても、少将殿には感謝せねばなりません」

南北朝時代の英雄楠木正成の直系子孫でもある正虎は、純忠無比で知られた先祖とは似ても似つかぬ顔をして、そう言った。

「まあな。奴が阿呆みたいに華々しく活躍してくれたおかげで、わしとしては何かとやりやすかったがな」

「はい」

久秀は現在、完全に息を潜めて、大和国内に逼塞していた。三好政権中枢で繰り広げられる熾烈な権力闘争からも一歩引いた立場を保ち、目立たず騒がず、ひっそりと地盤固めに勤しんでいたのである。

そういう立場の彼からすると、政権中枢で栄華を誇る立花範政の存在は、脅威というより逆にありがたかった。彼が常に衆目を集めてくれるおかげで、久秀は影の如く、一切目立つことなく水面下で密かに動くことが出来た。実際、これほど盛大な城を建てたというに、咎め立てしてくる者は皆無だったし、また範政が派手に振舞えば振舞うほど、彼に反感を抱く勢力は久秀を頼って、その盟下に次から次へとせ参じてきた。何しろ、これまで反松永党の領袖格であった三好政康らが松永久秀と誼を結ぼうとしてきたほどである。

笑いが止まらぬとはまさにこのことだと、久秀は常々思っていたものだった。

「それと、再び日向殿（長逸）が下野殿（政康）と会談したようですが、忍びの知らせによれば、少将殿の専横ぶりにどう対処すべきか、といったことのようにです」

正虎がそう言うと、

「ふーん。いよいよ、日向殿も愛想をつかしたというわけか」

久秀はにたりと笑った。茶をぐびぐびと呷るように飲み干し、それでも物足りないのか、「酒だ。酒を持って」と、声高に怒鳴るように叫んでいた。

松永久秀は、立花範政に代わって、三好政権の実権を握るべく、着々と準備を整えていた。多聞山城を建設するなどして大和の支配を固めつつ、三好政権内での同志を増やすことにも余念はなかった。三好政康や三好長逸といった従来の反松永党に調略の手を伸ばしつつ、一方では、有馬重則、伊丹親興、塩川政年、池田長正ら摂津衆、阿波国主三好長治の後見役たる篠原長房などの有力者を、せつせと松永陣営内に取り込んでいた。

「いよいよだな。あの小面憎い少将範政を踏み潰して、このわしが御家を牛耳る日も近い」

すっかりみすばらしくなった禿頭を撫でながら、ニタニタと笑う久秀である。

「左様ですな。ところで、丹波の内藤備前守様が若狭に出兵なされるとか。備前守様が若狭を取られれば、殿の御力はさらに強まりましようなあ」

正虎は相変わらずだった。

「さて、どうなることか。甚介（内藤備前の通称）のお手並み拝見といったところだ」

言葉とは裏腹に、久秀は、兄として弟の勝利を決して疑ってはいないようだった。時折窓先に広がる北の空を見上げながら、楽しそうにからからと笑っていた。

三好政権の強大化に伴い、丹波国主内藤備前守宗勝（長頼から改名）の勢威は、北隣の若狭国にも及びつつあった。

既に内藤宗勝は波多野氏をはじめとする丹波国内の反三好党を一掃し、同国全土を統一していた。そんな彼が、新たな勢力の拡大先として若狭国を見出したのは、単に丹波と若狭が隣接していたからというだけでなく、若狭を支配する武田氏内部が家臣たちの離反で揺らぎ、介入しやすい状態となっていたからだ。それと、かねてより細川晴元に従い、度々丹波に軍事介入してきた武田氏に対し、宗勝が反感を抱いていたことも理由の一つではあった。

当時、若狭守護の任にあったのは、武田義統よむねという男だが、守護権力の拡大を模索して強権政治を行ったために、はやみまごね圧迫された国人勢力は義統に対する反感を強めていた。その筆頭が、逸見昌経はやみまさつねという男で、彼は内藤宗勝の支持支援を得る形で、ついに武田氏に対して兵を挙げたのだった。

逸見軍は二千騎。対する武田軍は四千騎である。兵力的には、若干逸見軍の劣勢であった。実際、武田軍はその数にものを言わせて、じわじわと逸見方を圧迫した。このまま何事もなく事態が推移したならば、間違いなく武田軍が勝利を収めていたに違いない。

だが、逸見昌経とて座して滅びを待つわけにはいかなかった。そんな彼が最後の頼みの綱として頼ったのが、他ならぬ丹波国主内藤宗勝であったわけだ。そして宗勝が本格的に支援するようになると、形勢は一挙に逆転したのだった。

「朝倉が出てきた？」

永禄六年（一五六三年）は一月の中頃、宗勝は居城たる八木城にいたが、準備が整い次第、大軍を従えて若狭に出兵するつもりでい

た。そんな折にもたらされた急報だったから、別段驚きもしなかった。

「はッ！ 武田義統の援軍要請に応じたようです」

配下の報告に、宗勝は「そうか」と、小さく頷くのみだった。

武田義統が隣国越前の太守朝倉義景に援軍を要請することは、既に想定内の範囲内だった。丹波の内藤氏が逸見氏らの後ろ盾となった以上、もはや朝倉軍を味方につける以外に、武田方に勝ち目はない問題は、朝倉がどれだけの兵力を若狭方面に繰り出してくるかであったが、少なくとも万を下ることはあるまい。内藤氏独力で戦う相手としては、余りに強大な敵であった。

だが、負けぬ。

宗勝には意地がある。如何に朝倉が天下に名だたる大藩であろうと、自分も丹波一国を完全に制圧した堂々たる大大名なのだ。兄の松永弾正久秀は大和を制圧し、主家たる三好家は畿内全土を掌握した。自分を丹波国主の座に押し上げてくれた主家の恩に報いるためにも、何としても若狭は制圧しておきたかった。

負けられないのだ。

そう思い、宗勝はしばらくの間、まじまじとその場に佇んで、ぶつぶつと静かに「南無妙法蓮華經」と唱えていた。

永禄六年二月。

内藤宗勝は、総勢一万四千の大軍を従え、若狭に入った。朝倉の支援下に戦力を建て直し、攻勢に出た武田義統軍に対抗して、逸見氏の勢力復興をてこ入れするというのが目的であったが、宗勝としては、当然、これを機会に一拳に若狭一国を掌握してしまうつもりでいた。

とりあえず、内藤軍の戦略目標は二年前に武田軍により攻め落とされた逸見氏の居城碎導山城こいぢやまを奪回することであった。内藤軍一万四千に、逸見昌経以下国人衆二千が加わり、総勢一万六千の大軍が、

一路砕導山を目指して進軍した。

「申し上げます。武田治部（武田義統）の要請に応じた朝倉左衛門督（朝倉義景）が朝倉景鏡かほあきかみに兵一万を預けて、一乗谷を進発させたとのことですよ」

もたらされた報告に、内藤宗勝はむっとしたように顔を曇らせながらも、

「そうか」

と、殊更厳肅そうな顔をして、大きく頷いていた。

内藤軍はその後も着々と歩を進め、武田方に属する武將を次々と攻め落としていった。

砕導山城を挟んで、内藤軍と朝倉・武田連合軍は対峙した。

内藤軍一万六千に対し、連合軍は一万四千。

兵力的にはほぼ互角。後は、時の運と、将及び兵の質次第である。内藤軍は丹波統一戦や、三好政権の畿内制覇の戦いに数多く従軍し、戦歴は豊富である。一方の朝倉軍も、国内及び加賀の一向一揆の征伐に夥しい血を流しており、戦闘経験にもさしたる差があるわけはなかった。

かくして二月二十五日。両軍は激突した。

表面的には若狭の主導権を巡る守護武田義統と、それに対抗する国人連合の盟主逸見昌経の対立だが、その実態は、内藤氏と朝倉氏の代理戦争であり、かつ内藤氏の背後にある三好氏と朝倉氏の間で繰り広げられる湖北地方における熾烈な覇権争いの一つでもあった。

戦いは白熱を増し、一進一退の攻防は、数日に渡り続いた。劣勢でも優勢でもなく、ただ血だけが流れ行く戦いの連続に、内藤宗勝、朝倉景鏡二人の苛立ちは頂点に達していった。

結局、戦いが決着することはなく、三月二日になって、ついに勝

敗を断念した両軍は、とりあえず和議を結んで、兵を引くことにしたのだった。

「碎導山からは手を引く代わり、以後、朝倉殿、武田殿は、逸見殿ほか我らに随身した勢力に手出ししないことを確約して欲しい。さすれば我らも武田殿や朝倉殿には手を出さぬ」

内藤宗勝が出した条件は、以上だった。

「よからう」

朝倉景鏡も応じ、かくて和議は成った。けれど、そこに肝心の武田義統も、逸見昌経らの姿はなかった。ひどく一方的に、内藤と朝倉の両名が彼らの頭越しに取り決めてしまったのである。

けれど、後ろ盾である彼らあってこそ、内乱を継続することができる武田、逸見両陣営にとって、和議の内容がどんなものであれ、受け入れるよりほかに仕方がなかった。

和議が成り、若狭国は正真正銘、真つ二つに割れた。

即ち内藤宗勝の影響下に入った国人連合の勢力圏と、朝倉義景の影響下に入った武田氏の勢力圏である。若狭一国の完全掌握を目指していた宗勝にとっては、これでも不本意の結果だったが、やむなしと諦めるしかなかった。

ともあれ、宗勝は丹波八木城に兵を引き、丹波一国と若狭半国の支配に専心することにした。

【衰運編】第105章 それぞれの思い

台頭する松永兄弟と、立花範政の間で、再び三好政権が割れつつある。

そうした状況を嫌った三好一門の重鎮三好康長と安宅冬康の両名は、三好家の奥向き一切を取り仕切る雅の方と共同で、両陣営の和解工作に尽力していた。松永久秀の妻は、三好長慶と雅の方の娘である。雅の方は立花範政の妹だから、この縁を使えば、立花、松永両家の関係改善も図れるのではないかと、康長や冬康は考えていたのだった。

「ただでさえ実休殿が死なれて以来、御家のたがが緩んでいる。これ以上、弾正殿と少将殿の間で対立が深まることは、御家の将来にとってよくない」

河内高屋城主として、いまや三好一門筆頭に位置している康長は、そう言って困ったように溜息を吐いた。

「私もつねづねそう思ってます。私にできることがあれば、是非、仰ってくださいまし」

雅の方は、煌びやかな衣装に身を包んで、一門衆筆頭二人の上座に座っていた。

「ともあれ、少将殿の専横が過ぎると、家中では専ら不評だ。無論、少将殿が若屋形に忠誠を尽くしていることを、認めぬわけではないが、少し自重してもらわねば、御家が割れる。…西の丸様には、是非、そのことを少将殿に申し上げてもらいたい」

と、冬康が言うと、雅の方は大きく頷いた。

「後は弾正殿だな。…だが、これはいろいろと厄介だ。別段何かをしているというわけでもない。せいぜい多聞山に城を築いたこととか、弟の内藤備前殿が若狭に出兵したことぐらいだが、これらはいずれも御屋形様や若屋形様の承認の下で行われたことだし」

「…されど、とにかく、弾正殿と少将殿を和解させねば、なんとも

なりませぬ。叔父上の領地は河内でしょう。河内と大和は隣接しておりますので、弾正がことは、叔父上にお任せしたいが、如何ですか？」

冬康の言葉に、康長は困ったように苦笑いしつつも、

「分かった」  
と、言った。

実に厄介な話だと思いながら、康長はハアと大きな溜息を吐いた。なぜこんなことになってしまったのだろう。根が温和で、多分に事勿れ主義的性質を持つ彼には、実に気の重い問題であった。

昔の三好家なら、こんなことは起こらなかつたろう。皆、内で争っている暇があるぐらいなら、外に出、勢力を伸ばそうと必死になつていた。之長時代も元長時代も、長慶がまだ千熊丸、利長、範長といった時代もそうだった。けれど、今は違う。

それだけ三好家というものが大きくなってきた証なのだろう。大きくなりすぎて、目指すべき目標を見失っているのかもしれない。昔は上を目指していればよかった。上を見ていれば、それで万事が上手くいったのだ。けれど、上に登り詰めてしまった今、上を見上げて、途方もなく大きな空以外に何一つなかった。

「兄上、か……」

康長はふと、ずっと昔に横死した元長のことを思い出していた。

聡明で、勇猛果敢だった兄は、主君細川晴元に裏切られて殺された。考えてみれば、それから既に三十一年もの月日が流れたのだ。その間に、元長を殺した晴元を滅ぼし、細川家もまた風前の灯同然の状態に追い込むなど、三好家は急激に発展し、畿内全土の覇者として栄華を極めるようになった。康長もまた名門畠山家が代々居城としてきた高屋城の主となり、さらに河内南半国を統治している。

「妙なものだな」

兄が死んだとき、よもやこんな日が来ようとは思ってもよらなかつ



た。自分もまた兄と同じく若くして死ぬものだと思っていた。けれど、気がつけば、いつしか五十七歳になっている。白髪が目立つようになった頭を撫でながら、案外長生きしている己が身に小さく溜息を吐いた。

「兄上、あなたの息子たちは皆、思いのほか聡明でしたよ。もう二人もあなたの下に行ってしまったが、できれば、残る二人は、もうしばらくこの世に残しておいてくださいよ」

そんな風に呟きながら、康長は飯盛山城を下がった。三好政権の根拠地として、急速に発展する城下町の風景を眺めていると、改めて隆昌を極めた三好家の凄まじさを実感する。

わが身は他の有力一門衆に等しく従四位下に昇り、山城守となっている。幕府の御相伴衆にも列した。総帥長慶の叔父として、十分すぎるほどの格式、地位を得た。ただ、そんなことより、これほどの町を、あの腕白小僧だった長慶が築いたという事実が、彼にとつては何より嬉しかった。

芥川山城の陰の支配者になりおおせた立花範政が、妹の呼び出しに応じる形で飯盛山城にやってきたのは、四月に入った頃のことだった。

長慶の命により、特別に植えられた桜並木が、見事なほど満開に色づいている。ぱらぱらと豪雨の如く吹き荒れる花びらが、なんともいえぬ自然の壮大さを醸し出していた。

「後、俺は、この桜を何度見られるかな？」

そんな風に悲しげな顔をしてばやく範政に、従者の一人として随行している新井権助は、

「何を弱気になっておられますか。殿らしくもない」

と、殊更強い口調で咎めていた。

「いや、別に他意はないよ。ただ何度桜を見られるかと、少しばかり考えてみただけさ。十回、二十回？」

「左様ですか」

権助は、いつになく寂しそうな顔をして、定まらぬ虚空をぼんやりと眺めている主君の姿に、なんともいえぬ不安を感じた。ただでさえ、範政の専横ぶりに対する不満や不信が高まっている状況下である。立花家の命運はひとえに当主たる範政の力量にかかっているといつて過言ではない。

「ただ、権助。最近、少し思うのだ。人間どれほど栄華を極めても死ぬ時はあつけない。十河民部殿も、三好実休様も、あれほど権勢を握りながら、あつけなく死んだ。…死んだといえば、三月の頭に一人空しく普門寺に没した晴元公とて、かつては御屋形様の主君として、天下人と称えられていたほどのお方だ。そんなお方が、誰に看取られるわけでもなく、儂く死んだのだ。そう思うと、人生とは実に空しきものだと思わざるを得ぬ」

「…」  
相変わらず、範政らしくない言葉である。今日の主君はどうもおかしいと、権助はずっと訝しがっていた。

ただ、彼は彼なりに、今の自分の立場というものを他の誰よりも明確に理解していたのかもしれない。権勢を極め、大いに栄達した。位人臣を極めたといつても過言ではないほどの出世を遂げたが、そんなものは砂上の楼閣のように、脆く柔なものでしかなく、所詮、すぐに消えてなくなってしまう夢幻のようなものに過ぎないのだ…、ということ。

西の丸御殿に登城した範政は、その余りの様変わりぶりに、少しばかり度肝を抜かれた。

ここずっと、妹の顔を見ていない。飯盛山に伺候することはあつても、表御殿で長慶に謁見したり、政務に参与したりするだけで、妹に会うことはなかったのである。

それが今、妹を主と仰ぐ御殿は、彼の想像を遥かに凌駕する贅沢

さに満ち溢れていた。飯盛山城そのものが長慶の号令下に大改築を済ませて、天下人の居城に相応しきものに生まれ変わっていたが、その一角を構成する西の丸もまた、長慶の御座所に勝るとも劣らぬ規模と壮麗さを保っていた。

働いている女官たちも、煌びやかな衣装に身を包んで、その全身を見事なまでに贅沢で包み込んでいた。

「いやはや、凄いいものですな」

範政の背後に控える権助などは、そんな風に呟きながら、啞然としたように、この世のものとは思えぬ現実を、きよるきよると見回していた。

飯盛山城の大奥には、一千名を遙かに超える女子が仕えているという。長慶に御目見え出来る幹部格だけでも百人近くに達する。その中には御部屋様と称される、長慶お手つきの側室たちもいれば、彼女たちに直属する女官もいる。けれど、そうした無数の女子たちの頂点に立っているのが、『西の丸様』『西の御方様』など、様々な敬称を持って遇せられる雅の方、即ち立花少将範政の妹であった。範政は不思議な気持ちの中で、ただひたすら、その“妹”が現れるのを待った。

そして、彼女はやってきた。

「御方様の御成り！」

おそらくは妹付きの高位級女官であろう、中年女の甲高い声色が、けたたましく響き渡った。

すかさず、範政と権助は深々と頭を下げた。妹はゆっくりと入室し、一段高い上座にちょこんと腰を下ろすと、平伏す兄をじろりと睨みつけた。

「少将殿、此度はお忙しいところ、わざわざ私のために時間を割いていただき、誠にありがとうございます」

今やすっかり大奥支配者たる姿が様になっている雅の方は、齢四十とは到底思えぬ若々しさを漲らせながら、軽く頭を下げた。

「で、用件ですが、単刀直入に申し上げます。是非、御家の

ために、松永弾正殿と和解して欲しいのです」

「弾正殿と、和解？」

「そうです」

雅の方はきつぱりと言い切った。範政はきよとんとしたように首を傾げると、

「はて、いつそれがしと弾正殿が仲違いいたしましたかな？」

と、例によつてすつ呆けていた。

「この期に及んでは、そういう建前は抜きにいたしましょう。兄上、私としては、このまま弾正殿と対立したまま……、いや、兄上が孤立して、立花の家が没落していく様を眺めているのは嫌なのです」

「……孤立、ですか」

「そうです。厳しいようですが、既にあなたの味方といえるのは、私を除けば、御屋形様と、若殿様のみでございます」

雅の方の鋭い追及にも、範政は別段気にする風もなく、

「ま、私の味方が御方様や御屋形様、若屋形様のみというのは、少々暴論の気もいたしますが、ともあれ、この御三方の支持があれば、それがしとしては十分と考えておりますが」

「本当にそうお思いですか？」

「無論」

はつきりと頷く範政に、『西の丸様』こと雅の方は、思わず天を仰ぎ、ハアと、殊更大きな溜息を吐くと、

「兄上は、何ゆえそれほど力を求められるのですか？」

と、彼女は、大奥の支配者としてではなく、ただの妹として尋ねていた。

「何ゆえ、でございますか。……世の中に生きるあらゆる人は、それぞれ理想とか夢とか、いろいろなものをもっておりましよう。が、実現できる者は少ない。だが、力があればどんな夢も理想も実現できる。この世とは、力が全ての、至極単純明快なものでござる。ゆえに、それがしは力を求めるのです」

「……そう、ですか」

兄の理想とは、夢とは、いったい何なのか。雅の方には分からなかった。

少しばかり幼かった日々のことを思い出してみる。まだ、立花家そのもの取るに足らない、三好家の下級家臣に過ぎなかった頃のことだ。家は貧しく、日々の生計にも困る有様だったが、小太郎と称していた幼き範政は、近所の悪がきたちと遊び呆けては、なかなか家に戻らず、そのたびに父母がやきもきしていたことを、彼女はよく覚えていた。

考えてみれば、あの当時から範政は、古くから連綿と受け継がれてきた権威…、それがさも当然のことにように、生まれながらに幸福な一生が約束されていた貴公子たちに対して、並々ならぬ反感を抱いていたように思う。

彼の夢や理想…。それも大体その辺りにあるのかもしれない。実際、範政は必要以上に旧来の権威を否定してきた。先に細川晴之を、あらゆる反対を押し切って処刑したのは、彼のそうした感情が根底にあるのかもしれない。必要以上に権力や地位を求めて、自身の手で三好家を牛耳っていることも、一門や譜代というだけで、大きな権力が与えられている重臣たちへの反発の現われなのかもしれない。

そういう意味では立花範政と松永久秀は似ているような気もするが、似ているがゆえに対立せざるを得ないのだろう。雅の方は再度困ったように大きな溜息を吐くと、

「ま、いいでしょう。されど、一度強く申し上げておきます。…もしも兄上が、いや少将殿が御家を二つに割るような愚挙に出た場合、そうなる可能性を引き起こした場合、私は必ずしもあなたを支持いたしません。そのときは是非々で行動いたします。よろしいですね」

と、きつぱりと断言した。

「…承知いたしました」

範政は静かに頷き、そして恭しく深々と、仰々しく平伏した。

【衰運編】第105章 それぞれの思い（後書き）

今回をもって、ついに細川晴元が死にました。というわけで、細川家及び細川澄元、晴元父子の列伝を軽く記します。

細川家

元々は足利氏の分家であり、三河国額田郡細川郷（現在の愛知県岡崎市細川町辺り）を地盤としたので、細川と名乗る。室町幕府草創の功臣として、長く幕政に重きを成し、三管領家の筆頭と称された。

細川勝元の代になり発生した応仁の乱では、東軍の盟主となる。その子、政元が明応の政変で10代將軍足利義材を追放して以後、幕政の実権を完全掌握し、細川政権が確立。政元がその養子澄之に暗殺されると、同じ養子である澄元、高国の間で熾烈な抗争が繰り返され、澄元の子、晴元の代になって収束する。しかし晴元政権下で台頭した三好長慶が離反し、1549年の江口合戦で長慶に敗れると、細川政権は崩壊する。以後、細川氏は三好氏と戦いつつ急激に衰え、晴元の子、昭元は織田信長の庇護下に辛うじて京兆家（細川宗家）の格式を保つが、政治的な意味での京兆家復興は二度とならなかった。

ちなみに肥後熊本藩主となった近世細川氏（第79代内閣総理大臣細川護熙を輩出した家系）は、京兆家の分家の一つ和泉守護家の当主だった細川元常の養子となった藤孝（幽斎）を祖とするため、勝元・政元・晴元らの血筋は受け継いでいない。

細川晴元（1514～1563）

細川澄元の子。1520年に父が阿波勝瑞城で没すると、重臣三

好元長に擁立されて家督を相続。その後、1531年、政敵の細川高国を大物崩れの合戦で破り、高国政権に代わる晴元政権を築く。しかしこの過程で力を握った功労者三好元長を1532年に殺したことが、後年裏目に出る。元長の子、三好長慶が急激に台頭し、さらに1549年に起きた江口の合戦にて長慶に敗北したため、政権が崩壊する。以後は三好家と激しい攻防を重ねるが、都の奪取及び政権復帰の夢はついに叶わず、1561年、長慶に降伏し、摂津普門寺に隠棲。1563年3月1日に薨去。享年50歳。

主な官位及び幕府役職。

官位官職 従四位下右京大夫

幕府役職 管領、摂津・山城・丹波国守護

細川澄元（1489～1520）

阿波守護細川義春の子。その後、管領細川政元の養子となる。政元が同じ養子の澄之に殺されると、高国と共同で澄之を滅ぼし、管領となる。しかし、澄元政権内で台頭した三好之長と澄元が対立すると、その隙を突く形で1508年に高国が謀叛し、彼は中国地方の大大名大内義興の支援を受けて上洛し、澄元政権は崩壊する。

その後、高国と攻防を繰り返しつつ、1520年には三好之長の力で高国を破り、上洛。しかし5月になり反撃に転じた高国軍に敗れて、阿波に亡命。同年6月、勝瑞城内で病死。享年32歳。

主な官位及び幕府役職。

官位官職 不詳

幕府役職 管領、丹波・摂津守護

【衰運編】第106章 思わぬ死

芥川山城の主でもある三好義興の権勢は凄まじいほどに強大化していた。

基本的な政治は、今や全て彼が仕切っている。もはや、彼こそが実質的な三好家の当主であるといってもよかった。本来の当主である三好長慶は、相も変らぬ様子であったから、結局、義興が実質的な当主として君臨せざるを得なかったのである。

何はともかく、長慶が政治への情熱を失った分、義興の体内には大いなる理想と野望と夢が燃え滾っていた。やりたいことはいろいろある。あれもこれも、全部やりたい。若さもあいまって、やる気と行動力は十分だった。

ところで、この当時三好政権の懸案事項となっていたのが、三好長慶の昇叙の一件であった。

いつまでも従四位下修理大夫では、天下人として示しがつかないと、誰もが考えていた。もっと上の地位でなければならぬ。さもなれば天下人としての威厳を示せぬ…、と考えるのは自然の流れであろう。

教興寺合戦に勝利したことで、三好家は足利將軍家を遙かに凌駕する地位を手中に入れた。また畿内全土を完全に統一し、細川、六角、畠山といった旧来の名族をも屈服させたことで、天下人に相応しい圧倒的な勢威を誇るに至った。それほどの三好家の総大将が、従四位下修理大夫では、確かに軽い感は否めなかった。

ゆえに義興は、立花範政を担当奉行に任命して都に送り込むと、せめて従三位、できれば正三位の位階を貰えるよう運動させることにしたのだった。



「帝は修理大夫殿の従三位昇叙の一件、やぶさかではないとの仰せですが、ただ、今、修理殿は従四位下ですので、いきなり従三位というのは、少しばかり難しいというのが、我らの総論であります」  
朝廷を代表する形で、京は三好屋敷にやってきた前関白太政大臣近衛植家が苦々しげな顔をして言うと、

「そこをまげて、早急に従三位昇叙の宣旨を出していただきたい」  
範政は容赦なく、きっぱりと断言し、そう迫った。

「せめて、まず正四位に昇叙してから後、従三位にするのが、常道というものですので…」

「常道？ 天下人に常道はない」

どこまでも強気に徹して、妥協するということを知らない範政に、近衛植家は頭を抱えた。従四位下から、いきなり従三位とは、そんなことがまかり通るなら、慣例や常識のへつたくれもない。常識とか、慣例とか、先例など、そういうものに縛られて生きている公家の筆頭格たる近衛植家にとって、三好家の強情は容易く受け入れられるものではなかった。

無論、三好政権の実力を考えれば、受け入れざるを得ないのも、また事実だった。植家は困ったように顔を曇らせながら、範政をジツと睨み付けた。

「それと、官職についてでございますが、従三位に相当するものとなれば、いろいろあるでしょうが、近衛中将か、中納言か、参議、弾正尹…。ともあれ、早急をお願いする。それと、万一我らの要望が受け入れられぬときはやむを得ませぬ。それ相応の処置を取らねば、わが家中も納得いたしませぬので、お覚悟くだされよ」

これ以上ない痛烈な脅し文句で、範政は五摂家筆頭近衛家の先代当主に対し、容赦なく迫っていた。

「…分かりました。前向きに考えることにしましょう」

近衛植家の半端な答えに、範政は苦笑いしつつも、これ以上は無意味だろうからと、

「御尽力、感謝します」  
と言つて、とりあえず恭しく平伏した。

その頃、松永久秀は飯盛山城にあつて、三好長慶に謁見していた。長慶という人は、上座にあつて家臣を見下ろしている時は、昔と変わらぬ主君らしい顔をする。不思議な人だと、会つたび常に久秀は思つたのだつた。

「御屋形様の従三位昇叙の一件について、朝廷工作はほぼ終えましてでございます。おそらく、近日中に朝廷より何らかの沙汰が下ることでございますよう」

そんな風に久秀が言つと、  
「そうか」

と、素つ氣無く頷く長慶であつた。

「また、それに伴い、若殿には正四位下昇叙の辞令が下るとのことです。即ち、既に朝廷は御家の支配下に入ったも同然ということにございます」

「…そうか」

力なく頷く長慶の動作からは、昔のような力強さは微塵も感じられなかつた。堂々としていて、確かに君主としては見事な風格を備えつつある。けれど、それだけだと、久秀は思った。昔の彼と今の彼は違つのだと、違つてしまつたのだと、彼のために嘆き、そして自分のために喜んだ。

それからしばらくたつて八月。

正親町天皇の意を受けた勅使が、飯盛山城にやつてきたのは、同月十二日のことである。

長慶はこれを大仰に出迎え、三好政権の主たる自らの存在を見せ付けるかのように、厳かな城内にあつて、でんとふんぞり返つてい

た。

そこには事実上の最高権力者たる義興もいれば、有力一門の安宅冬康、三好康長、三好長逸、三好政康、三好政勝、さらには重臣の岩成友通、松永久秀、立花範政、篠原長房、伊丹親興などが勢揃いしていた。

彼らの視線は全て、勅使に集中していた。彼が何と云うか。圧倒的な期待の裏には、万一、意に食わぬ言を吐けば容赦はせぬというおぞましき殺気が漲っていた。

勅使は言う。

「三好修理大夫長慶をもつて、九月一日を持って従三位権中納言に昇叙任官させるとの帝の思し召しである。修理大夫がこれまでに果たしてきた功労を評価したものであり、また今後の更なる活躍を期待するものである」

帝の代理人としての立場から朗々と告げる勅使の言葉に、長慶は、別段いつもと代わらぬ淡々とした顔で、

「はッ！」

と、頷き、軽く平伏した。

彼自身は、従三位権中納言だろうが、従四位下修理大夫だろうが、そんなことははっきり言うてどうでもよかった。荣誉には違いないのだろうが、既に政治への関心を失っている彼にしてみれば、そんな高き身分、重い権威は、ただのお荷物に過ぎなかった。

けれど、家臣たちにとってはこれ以上なき朗報である。阿波の土豪に過ぎず、その家柄の低さを散々陰ながら馬鹿にされてきた三好家の人々にとって、総大将たる長慶が従三位に列すれば、もはや三好家は単なる田舎武士ではなくなるのだ。

「父上、おめでとうござりまする」

勅使が去った後、群臣を代表する形で義興が嬉しそうな笑みと共に祝すると、

「おめでとうござりまする」

居並ぶ重臣たちも、それに応じて、深々と恭しく主君に向かって

頭を下げた。そんな彼らの様を眺めつつ、長慶は困ったような顔をして、逃げるように足早に立ち去ってしまった。

「御屋形様も、ついに従三位ですか」

長慶の出世を、雅の方は誰よりも喜んでいた。他ならぬ常人以上に嬉しがっているのだった。長慶はそんな彼女の様を眺めながら、呆れたように溜息を吐いた。

「従三位だろうと、従四位下だろうと、別段どうでもよい。結局面倒が増えるだけだ。大体、そんな高い地位を得たところで、それを冥土にまでもっていけるわけでもあるまいし」

相次いで弟を失い、一門の重鎮を失い…、ここ最近、辛い別れを経験しすぎた長慶は、すっかり死というものに取り付かれてしまっていた。死んだらどうなるのか。そんなことばかり考えるようになっていたのだ。

死んでしまえば、今ある全てに何の意味もなくなってしまふ。これまで自分が苦心して作り上げてきた三好政権とて例外ではない。人の一生とは何と空しく、悲しいものなのだろう。そう思うと、思うたび、長慶の中で何かが確実に壊れていった。

雅の方は、そんな彼の様に少なくない不安と不満、悲しさを感じていた。昔の彼は、もう戻らないのだろうか、無性に辛くなることもしばしばだった。

「ですが、あなた様の御名前や事跡は、未永く後世に伝わりましょう。それでよいではありませんか」

「名前が残る、か…」

それに何の価値があるのだろうか。後世に大いなる名が残ったところで、そこに自分はいないのだ。

長慶はひたすら深く、ハアと溜息を吐くと、窓の外に広がる夏の青き空を見上げた。西の空に、のっばの如く聳え立つ入道雲をぼんやりと眺めながら、好物の金平糖などの甘菓子を口の中に放り投げ

ていった。

自分はこれからどうなるのだろう。どれだけ生きられるのだろう。そんな風に思つて、再び、ハアと、この日一番の溜息を吐いた。

八月二十五日。

夏も終わりに近づいているというのに、ミイーン、ミイーンと、蝉たちはけたたましく鳴いていた。己が命の最終章を締めくくらんとしているかのごとく、彼らはひたすら必死に泣き叫んでいた。

この日は極端に暑く、湿度も高かった。風もさしてなく、どんよりとした空気の中に佇んでいると、まさに地獄の中に彷徨っているような感じがした。

摂津は芥川山城。

山頂部分に聳え立つ城の中ですら、相変わらずの蒸し暑さが続いていた。

この日の昼頃、飯盛山から小さな珍客がやってきた。十河孫六郎重存と言つて、今は亡き十河一存の忘れ形見であり、かつ三好長慶がわが子の如く可愛がつている王子だった。

「孫六郎殿か」

義興は少しばかり疲れきった顔をして、孫六郎重存の下に駆け寄つた。義興にとつても、孫六郎は可愛い従兄弟であつた。最近はその弟である、とさえ思うようになっていた。

「伯父上様より、一度は芥川山を見ておくべきだと言われましたので、参上しました」

今年で十二歳になる孫六郎は、剛勇無双と称えられた父とは余り似ていなかった。どちらかといえば伯父長慶に近い、理的で聡明さを誇っているように思われた。

「義興様はお疲れのようですね」

孫六郎が気遣うように言つと、

「まあな」

義興は隠そうともせず、率直に頷いた。

「…お主は、わが叔父十河民部殿が子にして、わが父長慶の子でもある。即ち、俺の従兄弟にして実の弟でもあるのだ。ゆえに、一つ言っておくことがある。よい機会だから、申し聞かせておこうと思ふ」

「はい」

義興の言葉に、孫六郎重存は素直に頷き、頭をぺこりと下げた。

「…わが三好家は随分と大きくなったが、しかし俺の目から見てもまだまだ十分ではない。もっと大きくなれる。俺はそう信じている。だが、既にお主の父民部殿も、実休入道殿もこの世の人ではない。父上もああいう状態だ。…ならば、我ら兄弟が…いや、実休殿の子長治、孫六や、冬康殿の子信康、清康ら、若き世代が叔父上らに代わり、御家を背負っていかねばならん」

「はい」

「今後、我らが果たすべき役割はもっともっと大きくなる。特に、お主は俺の弟として、より大きな役割を担ってもらうことになる。そのとき、動じぬぐらいの身構えと準備を整えておけ。そして…。そして、俺に代わって、父上を補佐しろ。俺は芥川山から動けん。お主は、今となっては父上の唯一の希望なのだ」

神妙な顔をして、そう言う義興の言葉に対し、孫六郎はなんとも言えない不吉さを何となく感じていた。あくまで直感で、根拠などないが、疲労しきった義興の顔が自分の感覚を裏付けているような気がして、嫌になった。

「分かったか？」

義興が念押しすると、

「分かりました」

十河孫六郎重存としては、大きく頷くしかなかった。

かくして長かった一日がようやく終わりを告げようとしていた夕

暮れ時のことだった

孫六郎重存は、城内に宛がわれた宿所に休んでいる。

カア、カア、カア。

今日は特に、烏の鳴く声が多いような気がした。

いつものように陽が沈もうとしている。真つ赤に、煌々と輝く空は、全く血の色のような気がして、居心地のよいものではなかった。そして…。

芥川山城城主にして幕府御相伴衆、従四位下筑前守の栄位栄職にあつた三好孫次郎義興が、あっけなく死んだ。享年未だ二十二歳の若さであつた。

九月一日。

この日に予定されていた朝廷の除目は、ついに行われることはなかった。

都は連日のように陰鬱とした雰囲気に包まれている。空を見上げると、今が夏だとは到底思えぬような、どんよりとした灰色の雲がその全てを覆い尽くし、冷たき風が、ヒュウヒュウと、あたり構わず吹き荒れていた。

【衰運編】第106章 思わぬ死（後書き）

前章後書きの続き。

細川高国（1484～1531）

細川政春の子。後に細川政元の養子に迎えられる。1507年に起きた永正の錯乱で養父政元が養子兄弟の澄之に殺されると、同じ養子兄弟の澄元とともに澄之を滅ぼす。澄元とその重臣三好之長が対立を始めると、その隙を突く形で挙兵し、大内義興と連携して澄元軍を撃破。上洛を果たすと、養父政元により追放されていた足利義植（追放当時は義材と名乗っていた）を将軍とし、自らは管領となつて政権を樹立する（高国政権）。

1520年初頭に澄元軍に都を明け渡すが、同年5月頃逆襲に転じ、三好之長を討ち取り、都を回復する。1521年に足利義植を追放して、足利義晴を12代将軍に擁立するなど権勢を誇るが、1526年、細川尹賢の讒言に従い、重臣香西元盛を肅清したのが裏目に出、高国政権は混乱する。その隙を突く形で阿波より挙兵した晴元（澄元の子）と摂津天王寺（大物崩れ）で戦い、敗北。晴元軍主力の三好元長に追い詰められ、自刃。享年48歳。

主な官位、幕府役職。

官位官職 従四位下右京大夫・武威守・民部少輔

幕府役職 管領



【衰運編】第107章 凋落する権臣

がつくりと力なく頂垂れ、物一つ言わずに、毎日飽きることなく青々と輝く空を見上げている長慶は、もはや廃人以外の何者でもなくなっていた。

最愛の息子、三好孫次郎義興が急逝して、半月程が立った。長慶は飯盛山城の奥御殿にある居室に閉じこもったまま、ろくに食事も食わず、ただジツと、放心状態のまま、無為に日々を過ごしていた。

十月に入ると、義興の葬儀もひとしきり終わった。誰もが享年二十二足らずで急逝した若者の、あったであろう果てしなく大きな未来を思つて涙し、そして彼の背に乗つかつていた責任の重さに恐怖した。

これまで三好義興はたった一人で三好家を支えてきた。三好実休、十河一存ら有力一門が相次いで死に、総帥たる長慶の意欲が低下するなど、権力中枢の空洞化が著しく深刻化する中、三好政権が相も変らぬ強勢を保ち続けられたのは、ひとえに義興の功績であるといつてよかつた。安宅冬康や三好康長ら有力な一門衆は依然として健在だったが、だからといって義興の抜けた穴を埋められるほどではない。

「若屋形様までもお亡くなりになられるとは…。御家はこれからどうなっていくのだろう」

そんな世論が俄かに巻き起こったのも、別段不思議なことではなかった。義興の死は、着実に斜陽へ向かいつつあった三好家の衰運を決定付けるに十分な影響力をもっていた。

安宅冬康が、思わぬ訃報に驚き慌てて、居城たる淡路洲本城から

飯盛山城にやってきたのは、九月三日のことであった。

安宅撰津守冬康。

彼は、義興亡き今、三好家の今後を占う上で欠かせぬキーマンと見られている。三好家飛躍の最大の原動力となってきた三好四兄弟のうち、長慶と共に生き残っている最後の一人であり、またそれゆえに長兄たる長慶から絶大な信頼を寄せられ、三好実休亡き後、彼に代わって四国三好党を束ねていた。

従四位下撰津守、淡路守護代。

それが今の彼を彩る全てである。

その冬康が、わざわざ飯盛山にやってきたのは、ただ義興の葬儀に参列し、その死を悼んで、昔語りに明け暮れるためではなかった。後継者の選定。

これが、三好政権最高実力者となった冬康に課せられた使命である。無論、これは彼の独断と偏見で決められるほど簡単な問題ではないから、三好康長、三好長逸、三好政康、三好政勝ら有力一門衆のほかに、岩成友通、松永久秀、篠原長房ら重臣たちが続々と飯盛山に集まってきた。彼らを束ね、議論を主導する役目を冬康は担っていたのだった。

「まず御世継ぎのことであるが…。御屋形様の世継ぎは、重存様しげまさを置いて他に候補はあるまいと存ずる」

議長役の冬康が口火を切ると、集まった有力重臣たちもまた静かに頷き、基本的に異議らしい異議は出なかった。ただ、

「義興様には遣児千熊丸様がおられるが…」

と、康長が口を挟んだ程度だった。

「千熊丸様は今年御生まれになったばかり。さすがに跡目とするには幼すぎます。重存殿の次の当主にするということにすれば、別段問題はないでしょう」

すかさず冬康がそう反論すると、康長もそれ以上は何も言わなか

った。

重存とは、今は亡き十河一存が遺したたった一人の息子である。長慶とは伯父甥の間柄にあたるわけで、血筋的にも、三好家の後継者として申し分ないのだが、伯父甥の関係性のみ強調するなら、何も重存に限らずとも、他にも候補はいるわけである。例えば、実休の子である三好長治や同孫六、そして安宅冬康の子たる安宅信康と同清康……。そうした数ある甥の中で、冬康があえて重存を後継候補に推したのは、ひとえに重存が、長慶より実質的な養子同然の待遇を受けて可愛がられているためだった。

居並ぶ評定衆にも異存はない。重存であれば、長慶も反対はしないだろう。今は何より事を穩便に凶る必要性があった。とかく後継者問題は、ひとたびもつれると、果てしなく厄介な事態となりかねない。それを防ぐためにも、重存は実に無難な後継候補であるといえた。

「ただ、そうなると十河家の後継者がいなくなりますな」

と、三好長逸が困ったように苦笑いする。

「そうさな」

冬康は溜息混じりに腕組みした。

本家を守るためと言って、十河家を潰すような真似はしたくない。十河一存が必死になって守り、育ててきた家なのである。何より、十河家の断絶と言う結末を、他ならぬ長慶が断じて認めないだろう。冬康だつて認めたくはなかった。

「されば、故実休入道様の御次男であらせられる孫六様を、十河家の跡目に入れては如何か？」

と、言うのは松永久秀だった。立花範政が没落した今、久秀は、岩成友通と並ぶ三好家の筆頭重臣の座に上り詰めていた。

「孫六様？」

その岩成主税助友通が首を傾げる。けれど、その瞬間、手を叩いて、

「なるほど」

と、大きく頷いていた。

「既に実休様の御跡目は、御嫡男の長治様が引き継がれておられる。孫六様を十河家にやったとしても、別段問題はないと思われるが、篠原殿は如何思われる？」

久秀に問われ、篠原長房は、

「それが上意とあらば、別段問題はありませぬ」

と、淡々とした様子で、そう頷っていた。

篠原長房は、三好実休の筆頭重臣であったが、主君の死後、その後を引き継いだ幼君長治の後見役として、実質的な阿波国主と評されるほどの権力を誇っていた。松永久秀とは比較的親しい間柄であり、彼と共に立花範政追い落としにも大きな功績を挙げたことで、ここ急激に三好政権内で頭角を現している男でもあった。

「よかるう。後は御屋形様の御意向を確かめるのみだが、基本的に、それでいこう」

この場における最高意思決定権者たる冬康がそう言うと、誰もが「そうですな」と、大きく頷いていた。

長慶は、

「そうか」

と言っただけで、余り興味はないようだった。ただ、日頃大いに可愛がってきた甥の重存が跡目となったことは嬉しかったようで、時折にやにやと嬉しそうに笑っていた。

「ともあれ摂津に全てを一任する。お主の好きなようにするがよいさ」

全てから逃げるように、ピイツと背を向けて立ち去る長慶の後姿を眺めつつ、冬康は悲しげな顔をして、「はあ」と決して小さくない溜息を一つ吐いた。

ともあれ、許可は得たのだ。冬康は早速、奉行たちに対し、この人事を天下に公布するよう命じたのだった。

即ち、それは以下の通りである。

まず三好義興の死により空席となった宗家世継ぎの座には、十河重存が入った。その際、重存は三好長慶の養子となり、名を義継に改めている。この場合の“義”は義興の“義”であり、義興の分までも活躍してもらいたいという長慶の願いが込められていた。また義興の遺児である千熊丸は、弱冠一歳と幼いこともあって、今回跡目からは外されたものの、義継の養子として、彼の次の宗家当主となるよう定められることになった（後に彼は義資よしすけと名乗る）。

十河重存が三好義継となって宗家入りしたことで空席となった十河家督については、三好実休の次男孫六が相続することになった。これに伴い、孫六は名を十河存保まひやすと改めている。実休長男の三好長治は引き続き阿波勝瑞城城主として、同国を統治していた。

そのほか、安宅冬康が正式に執政の座に就き、三好政権の最高権力者として飯盛山城に常駐することになった。このため領国である淡路の支配は嫡男の信康に委ねたほか、四国三好党の旗頭としての責務及び権限は事実上、補佐役となった篠原長房の手に移ることになった。

特筆すべきは、松永久秀の立場である。

彼は当主代行（執政）となった冬康の補佐役として、実質的に三好政権を差配する権限を獲得した。かつて三好義興の下で、立花範政が握っていたものと同じだけの地位と権力を、彼はまんまとせしめてしまったのである。で、その立花範政はというと、彼は義興在世時の栄華が嘘のように、没落の一途を辿っていた。

範政の没落は、人々に大いなる衝撃と動揺を与えた。

それまでの彼は、三好政権の第一人者として、中には長慶や義興らよりも強大な権勢を握っていたと評する者もいたほどだった。時代が時代なので、いずれ彼が下克上を起こして、主家を乗っ取ってしまうのではないかといった根も葉もない噂を流す者や、それを信

じ込んでしまう者もいたぐらいである。

だが、彼の権勢は、義興の死によって脆く儂く、あっけなく崩壊した。

まあ、無理もない。

何しろ、彼は長慶・義興父子の絶対的信任を後盾として権勢を誇ってきたに過ぎない。言ってみれば、典型的な虎の威を借る狐であった。けれど、肝心の義興トウがいなくなってしまうと、彼の立場は、音を立てて崩れ始めたのである。

それでも、長慶からの信任が引き続き健在であれば、範政とてここまで没落はしなかつただろう。だが、生憎、既に長慶は彼を見限り、ばかりか嫌うようにさえなっていた。

それもこれも全ては、松永久秀の陰謀が原因だった。範政は、稀代の陰謀家久秀の能力を見誤ったのだ。

久秀の逆襲は、義興の死を契機として幕を開けたのだった。

義興が死に、一日が過ぎた八月二十六日のことである。

絶望のどん底に追いやられた長慶の下に、松永久秀はやってきた。陰鬱そうな顔をして、今にも泣き出しそうな悲しさを漲らせながらやってきた彼を、長慶はできうる限り歓待した。

そして、彼は言ったのである。

「此度の若君様の突然の御逝去ですが、毒殺されたという噂も、ちらほら耳にいたします」

ぼそぼそと、それこそよく聞いていなければ聞き取れないぐらいの小音量で呟いた久秀の言葉を、長慶は決して聞き逃さなかった。

「毒殺だと！」

それまでの絶望と悲しみが、凄まじき憎悪に代わって、長慶は久秀をぎろりと睨み付けた。

「い、いえ、ただの噂にございます」

そう慌てて付け加える久秀だが、もとより長慶は聞いていない。

「弾正ッ！ 知っていることあらば、早く申せッ！ 噂であろうとなかろうと構わぬ。知っていること全て言わぬと、お主をここで斬り殺すぞ！」

「は、はッ！」

それはまさに修羅の如き凄まじき形相であり、確信犯である久秀でさえ驚きを隠せなかったほどだ。長慶は側に飾り立ててあつた刀を掴むと、おもむろに抜き払って、久秀の老いた首筋に照準を定めた。

「これは根も葉もなき噂にございますが、毒殺の主犯は、立花少将殿だということですよ」

「な、なにッ……。しよ、少将が？」

既に正気を失っている長慶には、なぜ彼がそんな行動を起こさねばならなかったのか、本当に彼がやったのか……といったことを冷静に考えるだけの思考力も判断力もなかった。ただ、「少将がやった」という言葉だけを捉えて、

「おのれ、少将ッ！」

と、怒鳴っていた。

範政はそれからまもなく飯盛山城に呼び出され、長慶より直々の詰問を受ける破目となった。

彼にしてみれば、根も葉もなき噂であり、寝耳に水の濡れ衣だった。だから、理路整然と、必死になって反論し、抗弁した。濡れ衣だと主張し続けた。

結局、九月中ごろになって、安宅冬康や三好長逸、三好政康らの諫言もあり、長慶はようやく矛を収めたが、けれど怒りは収まらなかった。義興の死因は毒殺だ、という噂が聞こえるたび、彼は範政を思い出し、ゆえに次第に遠ざけるようになったのだった。

抜け目ない久秀は、さらに策謀を弄して、範政の追い落としを図った。即ち、濡れ衣が晴れるまでの間、長慶より謹慎を命じられ、

結局葬儀に参列できなかった彼の態度は、義興を軽んじるものだと、強い口調で糾弾したのである。

「例え謹慎中だとしても、他ならぬ若殿の御葬儀。無理をおしても出席すべきだったのです」

と、久秀は言った。もとより無理な論理だということは分かっていたが、既に正気を失っている長慶には有効だろうと、見切りをつけて、開き直ったかのごとく猛然と攻勢に打って出ていたのだった。その上、篠原長房までもが、止めを刺すように、

「此度のご処分には反発した少将殿は、かくの如き書状をそれがしに送りつけてまいりました」

と言つて、長慶に一枚の書状を差し出したのである。それは要するに謀叛を促すもので、明らかに松永久秀や篠原長房がでっち上げた偽文であったが、長慶はそれを信じ込んでしまった。

結局、これもまた範政の反論によつて偽文だと分かったが、相変わらず抜け目のない久秀たちは、足利義輝辺りが三好家の離間を圖つて行つた陰謀に違いないと、罪を義輝に擦り付けて、長慶の怒りが自分たちに向かぬよう、細心の努力を払っていた。

かくして範政は長慶の信任を失つたのである。もはや虎なき狐に力などない。久秀は追い討ちをかけるかのように、三好家執政安宅冬康の補佐役たる地位を利用し、事あるごとに彼の地位や役職を剥奪していった。彼の狡猾なところは、こつした命令を自ら出すわけではなく、あくまで安宅冬康の名を持つて行っている点にあった。

ともあれ、こつして立花範政はあつという間に没落した。辛うじて家老の座は維持したものの、三好家の副家宰、堺奉行といった役職や、幕府御相伴衆といった地位を失い、さらに従四位下左近衛権少将から、正五位下土佐守に格下げとなつた。



## 【衰運編】第108章 管領の死

波乱の永禄六年（一五六三年）は幕を閉じ、世の中は永禄七年（一五六四年）を迎えていた。

義興の死により、三好政権の衰退は決定的となった。それでも安宅冬康や三好康長が必死になって支えているが、衰退と決まった流れを押し戻すのは、決して容易なことではなかった。

そんな中、松永弾正久秀だけは、目覚しい躍進を遂げていた。落ち目の主家を飲み込んでしまいそうな勢いで、急激にその勢力を拡大しているのである。

そんな久秀にとって、今、最大の障壁となっているのが、安宅冬康だった。三好義興はいなくなり、立花範政も排除した。後は冬康だけだと、彼の薄汚い陰謀の魔の手は、徐々に、温厚篤実な、三好家最後の砦に及びつつあった。

そうした情勢の中、管領たる細川氏綱が、人知れず静かに没した。享年五十。

永禄六年（一五六三年）十二月二十日の夜のことだった。

細川高国の養子として、ずっと細川家の家督を求めて戦ってきた一人の英雄は、実のない家督のみ貰って、ついに多分に名目的な君主に甘んじ、かくの如き空しき余生を過ごさねばならなくなった。

思えば哀れな一生だった。

管領だというのに、ほんの僅かな一族や家臣のほかは、ほとんど見舞いにすら来ない有様だった。唯一、和泉細川家の棟梁となっていた細川藤孝がきたぐらいなものであるが、それ以外の有力者は、たった一人とて姿を現さなかった。

かくして管領氏綱は死んだ。そして、これ以後、後任の管領は二度と任命されなかったから、期せずして氏綱は、史上最後の管領と

なつてしまつたわけである。

およそ一年近く前に細川晴元が死に、また氏綱までもが死んだことで、細川京兆家は実質的に滅亡したといつてよいような状態になつた。無論、長慶の下に養われている晴元の嫡子信良（幼名聡明丸後の昭元）や、氏綱の実弟細川藤賢らは健在だったが、彼らには父や兄ほどの力もない。

兎にも角にも、晴元に続く氏綱の死は、確実に一時代の終焉を象徴していた。

細川家の没落など、人々にとっては、あえて意識するまでもない些事に過ぎなかつた。氏綱がどうなるうと、彼らにしてみれば、はっきり言つてもよいことだつた。ただ、昔の細川の栄華を知つている者たちが、時代の変遷を嘆いたり、思い知らされたりするぐらいの影響はあつたが、それ以上でも以下でもないのが現実だつた。

目下、人々の関心を浚つているのは、三好家の行く末である。即ち義興死後、衰退の道を一途に辿っている三好家が、今後どうなつていくのかということだつた。安宅冬康を中心に一門が一致団結して守りたてていくのか。それとも、松永久秀の権勢がより強まって、彼が下克上を果たしてしまうのか。その次第によつては、畿内は再び大戦乱に陥りかねないのである。人々の注目が集まつたのも無理はない。

ただ、そうした三好政権の内幕とは裏腹に、諸国の動静は、確実に三好家にとつて好都合な状態に変化しつつあつた。

例えば伊勢の名族北畠氏では、名君と称えられた先代当主北畠晴具が永禄六年（一五六三年）九月中頃に病没し、新当主北畠具教は体制固めに奔走せねばならず、対外進出に本腰を挙げられるような状態ではなくなつていた。そのほか、未だ家中が迷走状態にある伊予の河野氏に対して、十河存保が攻め込み、優位な戦いを進めてい

るといふ。

そして六角氏。この家で発生した騒動は、衰運極まる三好家にとつて、これ以上ないほどの朗報となった。

今や三好家に臣従し、没落の一途を辿っている湖南の名族は、永禄六年（一五六三年）十月に発生した御家騒動により、その勢力をさらに減衰させていた。

世に観音寺騒動と称される一連の権力闘争を整理すると、以下の通りになる。

六角家では、重臣筆頭の後藤賢豊の権勢が強大化していた。元々、先代定頼の時代から重用され、今は亡き進藤貞治とともに、『六角の両藤』と称えられるほど優秀な男だった。定頼を継いだ義賢（今は承禎と名乗っている）も、当然賢豊を重用していたのだが、義賢が野良田の敗戦、さらに三好家に敗れて臣従するという一連の失態を繰り返していくうちに、家中に対する指導力を失っていったのに対し、その事後処理に奔走した後藤賢豊の声望は大いに高まり、その権勢は確実に義賢（承禎）、義治父子を上回るようになった。ゆえに承禎や義治は、後藤賢豊による下克上を本気で警戒しただけだった。

そして永禄六年十月一日。

六角義治は観音寺城内にて、後藤賢豊を粛清した。狙いは言うまでもなく、守護権力の復興である。しかし、温和で人望厚かった賢豊の粛清に、六角家家臣団は猛反発した。当然、承禎・義治父子は彼らに対しても強い態度で迫ったのだが、その際、父子は念には念をと、三好家、特に宰相として大きな実権を握っていた安宅冬康と松永久秀の支持を得た上で、反抗的な家臣たちを追い詰めていったのである。一方、劣勢に追いやられた家臣たちは、六角氏の仇敵浅井長政と同盟して、主家に立ち向かう構えを示した。

かくして、三好、浅井の代理戦争の様相を呈するようになった騒動に憂慮した日野城城主蒲生定秀、賢秀親子が仲裁に乗り出したことで、間一髪、一触即発の事態は鎮静化したわけだが、一連の騒動

により、六角家は大きく弱体化した。また守護権力は著しく衰退し、逆に蒲生親子を筆頭にした家臣団の台頭が目覚しくなった。特に承禎・義治父子が、守護権力の制約を明記した分国法『六角氏式目』に調印させられたことは、守護権力の失墜をこれ以上ないほど明確に象徴していた。

ここからは、永禄六年から永禄七年初頭にかけての天下の情勢というものを見てみることにしよう。

畿内情勢は、三好家における相次ぐ不幸や、六角家の内訌など、様々な問題はあったものの、基本的に強大な三好政権下で、引き続き安定していた。ただ、六角や斎藤と対立する浅井長政が、従来からの同盟国たる朝倉だけでなく、織田信長とも度々使者、文を交わして友好関係を築くなど、積極的な外交を展開して、その勢力を飛躍的に拡大していた。噂によれば、織田信長の妹が浅井長政に嫁ぐのだという。もしもその政略結婚が成れば、織田・浅井同盟は、清洲同盟に匹敵しうる強固なものとなるう。

中部地方に目をやると、美濃では、永禄四年（一五六一年）に斎藤義龍が逝去して以来、その嫡子である龍興が国主の座を引き継いでいたが、桶狭間に勝利し、松平元康と同盟するなど、勢いに乗る尾張の織田信長の攻勢を受けて、劣勢に立たされていた。とはいえ、斎藤道三以来、大国と名高き美濃の底力は凄まじく、如何な信長といえども果てしなき苦戦を強いられていた。

そして、信長と同盟する三河の松平元康だが、こちらはこちらで、永禄六年（一五六三年）十月ごろより本格化した、三河一向一揆の対応に苦慮していた。本多正信といった重臣たちが一揆方に寝返るなど、この頃が独立したばかりの元康（後の徳川家康）にとって、

以後も戦国大名としてやっていけるか否かの最大の正念場であった。

また桶狭間に名君義元を失った今川家は、凡庸な氏真の下、家臣団の離反が急速に進み、かつての栄華が嘘のような斜陽の道をまっ

しぐらに突き進んでいた。

甲信越地方では、相変わらず武田信玄と上杉輝虎（後の謙信）の攻防が激化していたが、信濃一円は事実上武田軍の支配下に入り、上杉軍は、信玄の扇動により上杉の敵に回った会津の蘆名盛氏や、越中の神保氏などとの抗争が激化して、比較的劣勢に追い込まれていた。

関東では北条氏康が引き続き勢威を伸ばして、下野国の宇都宮氏とか、常陸の佐竹、あるいは安房、上総など房総半島に勢威を持つ里見氏などと激しく争っていた。けれど、北条軍の勢威は凄まじく、氏康の下に関東制覇が達成されるのも、時間の問題だろうと思われる。

奥州は相変わらず主役不在の群雄割拠が続いていた。ただ、蘆名氏が名君盛氏の下、会津地方を統一して勢威を伸ばしていた。また岩出山を本拠にしている伊達氏は、ちょうど晴宗から輝宗に世代交代する時期であったが、順調にその勢力を拡大している。

一転、目を中国地方にやってみると、毛利元就の勢力拡大が著しい。一方、山陰の覇者たる尼子氏は、当主晴久が没し、彼以上に暗愚な新当主義久の下で、ますます毛利に対し、劣勢に追い込まれていた。ただ、その毛利も、永禄六年（一五六三年）八月に、元就の嫡男で家督を相続していた毛利隆元が没するなど、決して順風満帆というわけでもなかった。

四国地方は、阿波、讃岐両国と、伊予の大半を支配する三好氏が最大勢力として君臨し、その他は、土佐の長宗我部氏、安芸氏、一条氏、伊予の河野氏、西園寺氏などがいたが、どれも規模は小さく、各地で取るに足らない小競り合いを繰り返している程度だった。

九州地方は、いよいよ大友宗麟の天下になりつつあった。彼は三好政権下で存在感をなくしている室町公方に目をつけ、これに多大な援助を行うことで、九州探題やら御相伴衆などの要職を勝ち取り、自らの九州支配の正統性を確立していった。ちなみに、南九州の雄たる島津氏は、貴久の下で着実に勢力を拡大していたが、依然とし

て、その勢力は薩摩、大隈の二ヶ国に留まっていた。日向では、飢肥を拠点とする伊東義祐が強大化し、同国の覇権を巡って、島津氏と対峙していた。また肥前では、『肥前の熊』と称された猛将竜造寺隆信が勢力を増し、同国統一に向けて怒涛の快進撃を見せていた。

とまあ、こういう情勢の中である。

まだまだ世の中、大いに戦乱状態だった。

一方、飯盛山城に閉じこもった三好長慶は、そうしたことには一切興味もないようで、毎日公家衆や僧侶を招いては、連歌とか、茶会とか、そういった風流に明け暮れていた。

そして…。

義興死後、家中に立場を失った立花範政は、一人寂しく岸和田城に無念の涙を流していた。けれど、彼とて、このまま座して滅びを待つはずもなかった。何としても捲土重来を果たして見せると、流した涙の量だけ、強く大きな決意を固めていった。

「まずは軍の強化だ。御屋形様のあの状態を見て、紀伊では再び畠山の残党どもが騒がしくなっている。これを鎮めることが出来れば、我らは再び脚光を浴びよう」

範政はそう言っ、重臣の新井権助や阿部雷蔵、青木甚介、猪飼要之助などを奉行に取り立てて、領国和泉の総力を挙げた軍編成に勤しんでいた。

だが、そうした行動が、三好政権中枢にとって不審に映らぬはずがなかった。如何に彼が紀伊に備えるためだと言っても、状況が状況であるから、謀叛のための軍事力強化だと思われても仕方がなかったのである。

そして、案の定、飯盛山から使者がやってきた。

永禄七年（一五六四年）は二月十二日のことである。上使としてやってきたのは、三好政権の実質的主催者となっている安宅冬康の家臣だった。

「謀叛の疑いでございますか」

上使の言葉に、範政は苦りきったような顔をして、

「再び、それがしに濡れ衣を着せるおつもりか」

と、彼は吐き捨てるように言った。

「だが、そういう疑いがかかっている。無論、我らとて土佐殿が謀叛するなどは夢にも思っていない。だが、そういう疑いがかかるような真似はせぬほうがよいと、わが殿は仰せなのです」

冬康の家臣は勝ち誇ったような顔をして、平伏す範政の頭上から、棘の刺さった言葉を次から次へと吐いてきた。

「…承知いたしました」

逆らっても無意味だからと、範政は静かに頭を下げて、恐縮そうに畏まった。けれど、彼は腸が煮えくり返るような怒り、腹立ち、やるせなさ、空しさを覚えていた。全ては三好のためと思い…、無論、自分の復権も目当てではあるが、けれど御家のためと思っしてきたことを、「謀叛の疑いあり」として制止してくる冬康に、彼は凄まじい怒り、それこそ憎しみに似た思いを感じていた。

無論、分かっている。おそらく、謀叛の疑いあり、などと讒言しているのは松永弾正なのだ。けれど、それにまんまと乗せられて、わざわざ詰問の使者まで出してきた冬康に、彼は憎しみを抱かずにはいられなかった。

三月も終わりに迫ったある日のことだった。

今をときめく松永弾正久秀の居城多聞山に、篠原長房がやってきた。阿波国主三好長治の後見役であり、かつ安宅冬康の補佐役として、三好家の勢力下にある阿波・讃岐・淡路・伊予の四ヶ国に絶大な影響力を行使している実力者は、ほとんど供すら連れず、お忍びで多聞山城にやってきたのだった。

「これは篠原殿。お待たせして申し訳ない」

久秀は「ははは」と高笑いしながら、相も変らぬ禿頭を摩りながら、篠原長房の前に腰を下ろした。

「いや、勝手にやってきた拙者の不手際。弾正殿のせいではござらぬ」

と、長房が言うと、

「左様か」

久秀はクスクスとひとしきり笑った。

多聞山城表御殿内に併設されている茶室は、豊臣秀吉の黄金の茶室とまではいかずとも、十分久秀の贅沢趣味が反映された荘厳な造りとなっていた。

久秀はそれを見せびらかすように長房を連れてくると、

「茶など差し上げよう」

と言って、自ら素早く茶席についた。

「…生憎、それがしは茶は不得手でございますぞ」

「おや？ 左様か。それは失敬。故実休入道様は茶道の達人と聞かえておりましたので、その重臣であらせられる篠原殿もまた、茶には通じているものと勘違いいたしました」

「…左様か。だが、生憎、拙者は堅苦しい茶道はどうも慣れんので



す

長房は吐き捨てるようにそう言うと、久秀は思わず苦笑いした。

「ま、ともかく席にお着きなさい。作法などどうでもよろしい。とりあえず、茶など飲みながら、政まつりごとなど語り合いまししょうや」

「…承知」

久秀に言われるまま、長房は慣れぬ仕草で、オドオドと茶席に腰を下ろした。

茶室なるものは、実に狭い。窮屈な感じがするので、長房は嫌なのだった。

一方、久秀は武野紹鷗や今井宗休、千宗易（後の千利休）らに時折茶道を習っていたようで、実に手馴れたものであった。彼は素早く茶を点てると、厳かにそれを長房に差し出し、

「どうぞ」

と、しおらしく言った。

「さて、四国のほうはどうなつてござる？」

茶を飲み終えた頃、久秀は唐突にそんなことを尋ねてきた。

「順調でござる。阿波は無論のこと、十河家のほうも、存保様の下でとりあえず固まり、四国も着々新体制でまとまりつつあるといった感じですね」

長房は自信満々といった様子で胸を張った。

「ははは、左様か。そういえば、来島城の河野通直が、実質的に臣従なされたようですね。四国における御家の地盤はますます磐石。まさに執着至極に存ずる」

そんな風に、見え透いたお世辞をぺらぺらと吐く久秀に、長房は苦笑いした。

「存保様の下、十河勢が伊予に攻め入りましたからな。存保様はお若い、これがないかな、さすがに実休様の御子でござる。養父たる亡き民部殿が武名を決して辱めぬ武人ぶり」

「はっはっは。左様か。だが、それもこれも、篠原殿が存保様の後見の任を勤めておられるからこそでござろう。まずは四国全土を御

家のものにして、後顧に憂いなく、畿内制覇に乗り出さねばなりませんからな」

久秀は、ニタニタと笑いながら、

「そういえば、実休様の御正室小少将の方様は、御一族の自遁殿に嫁がれたと聞くが、誠か？」

おもむろに、そんな風に言うのだった。

長房は何も言わず、ふっと苦笑するのみだった。分かりきったことを聞くなど、ジトツと睨みつけているかのような視線に、久秀もまたにやりと不敵な笑みを漏らした。

「だが、小少将の方様はお美しいお方と聞き及ぶ。できうれば、それがしも一度は抱いてみたい…、いや、これは失敬」

「気になさるな。美しいお方であることに変わりない」

「左様か」

久秀は豪快に高笑いすると、南蛮渡来の菓子をぱくぱくと口の中に放り込んでいった。

小少将の方は、夫たる実休の死後、篠原自遁に嫁ぐことになった。これは、篠原長房が画策し、松永久秀が全面的に支援することで、ようやく成立にこぎつけた、典型的な政略結婚だった。

自遁は篠原家の一族であり、長房の弟とも兄とも言われる。長房より早く長慶に仕えていたが、今ではすっかり彼に追い抜かれ、実質的に長房が阿波の名族篠原家の棟梁の座を占めていた。そんな長房を、自遁は健気に支えている。

ともかく、自遁と小少将を結婚させることで、長房は自らの権力基盤の更なる強化を図ったのである。小少将は、阿波三好家の総帥である長治や讃岐十河家の当主となった十河存保の実母であり、彼女を篠原一族内に取り込めば、篠原家の地位は格段に高まる。そんなことは赤子でも分かる計算だった。

久秀は、長房のために運動することで、彼と強い同盟関係を結ぶことに成功した。四国三好党を実質的に支配している長房と密接に繋がっておくことは、彼の大望を実現する上で、まさに必須事項と

いってよかった。

「後、問題は少将殿でござるなあ」

長房がぼんやりと呟くと、

「少将ではない。土佐守だ」

と、鋭い口調で誤りを指摘しつつ、

「土佐守など、もはや問題ではない」

久秀はきっぱりと言った。

「奴は自滅する。そういう筋書きになっている。そして、もう一人の厄介者も、彼と道連れに滅びる手はずになっているのだ」

自信満々といった表情で、ぼんと胸を張る彼に、

「大丈夫だろうな」

と、長房は少しばかり不安そうな顔をした。

「大丈夫さ。案ずるな」

久秀はニタニタと笑っている。長房は、それ以上は何も言わず、彼から差し出された茶菓子などを頬張りながら、ひたすら飯盛山の空を見上げていた。

三月が終わり、四月になった。

三好家の新たな世子と定められた三好義継は、飯盛山城内の西の丸に居殿を与えられ、今はひたすら学問と鍛錬に明け暮れる毎日を過ごしていた。

「若様、若様は必ずや義興様を超える名君にならねばなりませんよ。それが、三好宗家の跡目となったあなたの責務なのです」

そう言うのは、義継が飯盛山に入って以来、母代わりとなってきた雅の方であった。十河重存と言った頃から、何かと親身になってくれる彼女のことを、義継は実の母のように慕うようになっていた。それゆえに、このところ、兄の範政が政権中枢から失脚するなど、彼女の立場は実に微妙であったが、義継はそんなことなど全く意に介する風もなく、今までどおり、彼女の下に通い続けていたのだっ

た。

春風に浸りながら、爽やかな汗を流す。義継はまだ若い。実父には似ても似つかぬ、端正な優男といった顔立ちの彼は、ニコニコと絶えることなき笑みを浮かべながら、ひよこひよここと雅の方の下にやってきた。

「母上様。義興様とはどういう御方だったのだ？」

義継は未だ、義興と最期に会った日のことを覚えている。それは、期せずして義興最期の日ともなったわけだが、ともかく、最近の彼は、三度の飯より、義興のことを知りたがった。

「うーん。一言で言えば、努力家？　かしらね」

「努力家？」

首を傾げる義継に、

「そう。世間は天賦の才と持て囃していたようだけれど、あのお方は父上様の期待に応えるべく、日々精進を重ねて努力を怠らなかつた。武芸にしても、学問にしても…。芥川山城で父上様に代わって政務を執られていた頃も、父上様に代わり、御家を支えるのだという理想に燃えて、努力に努力を重ねてこられた…。まあ、行き過ぎの過労が祟って、あんな最期を遂げられてしまわれたけれど」

少しばかり悔しそうな顔をして答える雅の方であった。

「そう、ですか…」

義継はしばらく考え込み、そしてにつこりと微笑んだ。「努力」という言葉が、殊のほか気に入った様子だった。彼はすかさず庭に戻ると、「えい」「やあ」と、必死になって武芸に励んでいた。

何はともかく、義継は努力の人だった。

そして、優しい男でもあった。

あるとき、こんなことがあった。

「これは、京の菓子にございます」

西の丸御殿の一角。義継と、西の丸様こと雅の方を上座に仰ぎ、

有力な女官たちが勢ぞろいしている。そんな中、運ばれてきたのは  
昨今、美味しいと専ら評判の京菓子であり、有力公家からの献上品  
とのことだった。

「美味しそうですね」

雅の方は嬉しそうに微笑み、義継のほうを見た。

「まずは御毒見を……」

それは、別段普通の光景、日常だった。特段、変わったことなど  
ない。美味しそうな献上品を前に、まず女官の一人が毒見する。毒  
見がすめば、ようやく義継や雅の方も食べることを許されるのだ。

だが……

今日は、いつもとは明らかに違った。

「うぐうッ！」

毒見役の女官は、激しく嘔吐し、苦しそうにもがき出した。

「ど、毒よ……」

女官たちが騒ぎ始める。

「医者者を！ 薬師を呼べッ！」

雅の方が怒鳴り、義継は何が何やらさっぱり分からぬといった様  
子で、きょとんと動揺する世界を見つめていた。

結局、その女官は一命を取り留めたが、問題はそんなことではな  
く、誰が毒を仕込んだのか。その一点にあるといっても過言ではな  
かった。

とりわけ、三好長慶は寵愛している養子義継の危機とあって、烈  
火の如く激怒した。それこそ、毒菓子に関わった者全てを斬罪に処  
せと怒鳴り散らしていたほどで、安宅冬康や三好康長らが説得しな  
ければ、本当に飯盛山城奥御殿に血の雨が降りかねぬ勢いだった。

だが、ここで動いたのが義継だった。彼は養父長慶の御座所に赴  
くと、

「此度の事件、それがしの差配にお任せ願いたい」

と、言った。

「お主の？」

長慶はきつぱりとした物言いで迫る義継の堂々たる態度に驚いた。何やら幼い頃の十河一存を見ているような気がしたのである。

「だが、お主はまだ若かるう。…采配が執れるのか？」

「執れまする！ それがしは、三好宗家の跡取り…。いや、十河一存と三好長慶の子。天下に聡明と聞こえた三好義興の弟にございます」

「…そ、そうか」

一存の子で、義興の弟。そう言われると、長慶には何も言えなくなってしまう。何より義継の堂々たる態度が、彼には嬉しかった。十河一存の若き頃、そして往時の三好義興そっくりの顔をしていた。

全てを任せられた義継は、毒を仕込んだのが誰なのかということに軸足を置いた捜査を開始させた。それがはつきりとするまで、とりあえず処分は保留状態としたのである。

その結果、毒を仕込んだのは、女官の一人であることが判明した。甲賀辺りの女忍びらしく、あらゆる拷問にかけたが、何一つ吐かず死んでしまった。結局、黒幕が誰なのか判然とせぬまま事件は幕を閉じることになったのだが、義継はその女忍び以外の誰も殺さなかった。毒入り菓子を献上した公家も、それを義継の御前に運んだ女官、その他一切誰も殺さず、その罪全てを不問に処したのだった。

「殺さぬのか？」

不思議に思った長慶が、そんな風に義継に尋ねると、

「殺しませぬ」

彼ははつきりと断言した。

「そうか」

彼に任せると言った以上、長慶には何も言えなかった。

以来、義継は慈悲深き若様と、その名声と評判を大いに高めるこ

とになった。結局、黒幕こそ分からなかったが、この毒菓子事件は、義継の名声を高めたという点で、災い転じて福となったと言えたのだった。

【衰運編】第110章 危険な決意

永禄七年（一五六四年）四月末。

和泉一國二十万石余の国主たる立花範政は、日々国政の充実と和泉国の発展に全力を注いでいた。

法令を定め、新田を開発し、産業を興した。堺奉行の座こそ失ったものの、これまでに築いてきた堺商人との繋がりを背景とした海外交易を積極的に推進して、莫大な交易収入をはじき出していた。

これらの努力もあつて収入はこのところ劇的に増えた。ゆえに、農民からの年貢比率も四公六民まで引き下げ、三好家中屈指の低率さを誇っていた。目安箱のようなものを設置し、民草の意見に耳を傾けることも怠らなかつた。また家柄、血筋、そういったものを一切無視した実力重視の人材登用を行ったので、諸国に群れる有能な浪人や夢を求める農民の子たちが、次から次へと仕官してきたのだつた。

皮肉な話ではあるが、松永久秀の陰謀により三好家中枢での立場を失つたことで、彼は自らの領国統治に専心できるようになった。これまでは三好政権宰相としての責務に忙殺され、領国のことなどほとんど顧みることがなかつた。そうした忙しさから解放された彼は、まさしく名君として、民草の厚い信望を勝ち取ることに成功していた。

彼は田園風景をぼんやりと眺めているのが、何よりも好きだつた。元々幼い頃は、近所の悪がきたちと飽きることなく、大地を駆け巡っては泥に塗れて遊び呆けてきたのである。武士の子と言いながら、ほとんど武士とは言えないような下級身分の家に生まれた彼にとって、どれだけ出世しようとも、田園風景は自らの故郷のような気がしていたのだつた。



今年で四十三歳になる。けれど、彼は幼き頃の童心を忘れることなく、暇さえあれば民草の中に紛れては、昔のように相撲などとして遊んでいた。お忍びとはいえ、一国の大名が、ほとんど護衛すら連れずに出歩くことなど滅多にないことだったし、家臣たちも危ないから止めてくれと何度も諫言してきたが、彼は一切耳を貸さなかった。

「なあ、権助」

あるとき、彼は重臣の新井権助を伴い、岸和田城城下郊外にある寺にやってきた。立花寺りっかしと名づけられたその寺は、範政が和泉国主となった後に建立したものであり、彼の父たる立花又右衛門を弔うためのものであった。

「こうやってのんびりと過ごすのも、悪くないものだなあ」

寺のすぐ裏手にある草むらの上に、ごろりと寝転がりながら、燦燦と輝く太陽の暖かさをその肌に感じている。不意に、そんな風に範政が呟くと、

「左様ですな」

権助もまた主君とともに寝転がりながら、昔のことなどいろいろと考え込んでいる様子だった。

新井権助にしても、元々はただの農民の子供に過ぎなかったが、摂津滝山城城主となった立花範政に仕官したことで運命が変わった。立花家への仕官も、本来、窮乏極まる家族の生活を少しでも支えてやるうと思っただけに過ぎないが、生まれつき武勇に秀で、聡明だった彼は、実力重視の範政の人材登用方針の下、急激に出世を重ね、今や立花家の筆頭家老にまでなったのである。

権助はまじまじと主君の横顔を眺めている。すやすやと眠っている彼は、一見普通の中年男に見える。最近では心労のためか、頭にも白いものがいくらか見えるようになってきた。昔は若々しかった彼とは思えぬ様に、権助は少なからぬ衝撃を受けたものだった。

「殿は、少々損な性格をなさっておられる」

と、権助は常々思っていた。

「：殿ほど忠義な御方はおるまいに、この性格のために、かくの如き哀れな仕儀に至るとは…。全く、損すぎる性格だわさ」

権助は、常に範政の側にあつたから、彼と言う人を骨の髄まで知っていた。

少なくとも、陰で囁かれているような奸臣とは違う。彼は根っから三好家を好んでいる。彼の体は、頭から手足の指先に至るまで、自分を大名にまで取り立ててくれた三好長慶に対する忠誠心でいっぱいだった。三好家を、三好政権をより完璧なものにせねばならぬという崇高な理想を夢に描き、それだけを思つて、これまで必死に生きてきたのだ。

けれど、そうした思ひは、往時の三好長慶や、生前の義興以外には、なかなか理解されなかつた。長慶・義興父子の信任の下に権勢を誇る彼の姿は、その他の人々から見れば、主君を誑かして私的に権力を乱用する奸臣以外の何者でもなかつたろう。実際、彼は情け容赦なく、駄目と思えば認めず、悪いと思えば罰してきた。また能力があると思えば登用し、さもなければ切り捨てた。家柄、血筋…。そんなものには一切拘らなかつた。それが、結局血筋や家柄を誇りとする旧来の有力者の不興を買つてしまった。

硬すぎるのだ、と権助は思つていた。もう少し柔らかい思考能力を持つていれば、これほどの窮地に追いやられることはなかつたろう。

範政はすやすやと眠っている。権助は苦笑いした。例え彼がどんな人間であれ、その本意は、せめて自分ぐらいは理解してやらねばなるまい。そして、彼が減びる時は、自分もまた一緒に減びるのだと、改めて決意を新たにしていた。

四月もあつという間に過ぎ去つて、いよいよ五月になった。

永禄七年五月二日。

立花範政は、岸和田城内にあつて、思いもよらぬ書状と、ここ数

時間に渡り睨めつこを繰り返していた。

「これは、誠なのか？」

信の置ける重臣のみ集めた小さな一室で、彼は困ったように首を傾げていた。

「されど、紛れもなく、御屋形様直筆の御朱印状にございます。……花押も、確かに御屋形様のものかと……」

新井権助の言葉に、他の重臣たちも大きく頷いていた。

「だ、だが、こんなことを御屋形様がお命じになるものかな？」

範政はなおも疑っている。

「されど、これは紛れもない御屋形様の直筆にございます。それに、文面を読めば、御屋形様がかような御決断をなされた理由も、それなりに分かるかと思われませんが」

「……まあ、そうだが」

範政は苦りきった。いずれにしても、彼は今、人生の正念場にたっている。ここで長慶の命に叛き、彼の信をさらに失えば、もう二度と這い上がることはできないだろう。かといって、この命を履行すれば、三好政権そのものがどうなるか分からなくなる。

容易く選べぬ二者択一だった。

範政は困りきって、その場にごろりと寝転がった。

『立花土州へ』

と、記された文には、長慶直筆と思われる文体で、凄まじき命令が記されていた。

「摂津守に謀叛の疑いあり。世子の将来を鑑み、早急に対処せねばならぬ。その全てをそなたに任す」

範政は、何度も頭の中に文面を思い浮かべては、声に出すことなく呟いていた。

撰津守。

と言うからには、その指し示す人間は、今や三好政権最高権力者となりおおせた安宅撰津守冬康をおいて他になかった。

だが、冬康は長慶の弟である。彼が絶対的な信任をおいていた三人の弟の最期の一人だ。そんな人物を、他ならぬ長慶が直々に殺せなどと言うだろうか。

考えてみれば疑念は尽きないが、しかし、長慶の状態を考えれば、決してありえないことではない。また、長慶が新たな世子となった義継を凄まじいほどに溺愛していることを考慮に入れると、義継の将来を考えて、彼は冬康排除を決意したのかもしれない。

実際、冬康を巡ってはいろいろと不穏な噂が流れていたものである。

例えば、冬康は義興死後の三好宗家跡目には、義継ではなく自分の息子である信康が清康のどちらかを入れたかったのだ…、とか、先の毒菓子事件は、義継を亡き者にして宗家を乗っ取らんと企む冬康の陰謀だったのだ…、といった類のものである。

人々がそう噂しあったのも無理はない。何しろ冬康は義継の実父十河一存の兄なのだ。長幼の序の観点から言えば、一存の子である義継より、兄冬康の子たる信康のほうが宗家を引き継ぐ上での正統性は高いのである。しかも今の冬康は三好政権の事実上の最高権力者となっており、それをわが子に引き継がせたいと考えるのは、自然の道理といえた。

だが…。

噂などというものは、常に根も葉もない戯言であることが多い。今回の噂にしても、いろいろと腑に落ちない矛盾点は多かった。

まず前提となっている、長慶の跡目に義継がなったことに冬康が不満を抱いているという点だが、これは改めて言うまでもあるまい。何しろ他ならぬ冬康が義継を推薦したのである。ならば冬康が不満を抱く理由などない。そして何より、十河一存の兄である冬康の系統のほうが正統性が高いと言うのなら、冬康の兄である実休入道の

系統のほうで、冬康の系統より正統性があるということになる。しかも安宅冬康にしろ、十河一存にしろ、長慶の弟とはいえ、厳密には安宅家、十河家の人間である。その点、実休は三好家の人間であることに変わりはない。そこから考えても、宗家継承における正統性は冬康や一存より実休のほうにあると言えるだろう。そして実休には二人の遺児があり、共に宗家を引き継ぐ上で別段これといった問題を抱えているわけではなかった。

尊などというものは、こうやって理路整然と考え出していけば、いとも容易くその矛盾を指摘できるものだったが、生憎、立花土佐守範政とその家中は冷静さを欠いていた。少しでも長慶の信任を取り戻さねばならぬと、必死になって焦っていた。その結果、これほど単純明快な、露骨なまでの流言に過ぎないというのに、その是非を見抜くことができず、ついに長慶は本気で冬康排除を決意したのだと思ひ込み、彼自身、長慶の信任を裏切って宗家乗っ取りを企む冬康に対する憎悪の念を強めていったのだった。

「やはり覚悟を決めずばなるまいか」

もう何度この文を読み直したかしれなかった。そして、何度悩み考えてきたかも分からなかった。ただ悩んでいても、迷っていても仕方がないのである。主命なら、遂行するしかない。それが家臣たる者の勤めなのだ。

結論はたった一つしかなかった。

範政はフウと大きく息を吸い込むと、ハアと思ひ切り吐き出した。そして重臣たちに再び集まるよう指示を出した。

やがて家臣たちがぞろぞろとやってきた。彼らが勢揃いした後、範政はしばらくの間、黙り込んでいたが、

「殿！」

権助が急かすように仰ぎ見ると、それに促されるようにして、範政はついに意を決したのだった。

「…主命に従い、安宅摂津守冬康を斬るッ！」

彼は、既にいつもの如き冷静さを失っていた。こうするより他に手はないのだと、思い込んでいたのだ。

重臣たちもまた彼の覚悟を聞くに及んで、これといった異議は唱えなかった。

かくして…。

立花土佐守範政は、二千の兵を率いて岸和田城を発した。ちょうど、若狭方面で再び活動を強めた同国守護の武田義統や、その背後にいる朝倉義景を退治すべく、丹波の内藤宗勝が出兵することになつており、立花範政には援軍として若狭に出兵するよう命令が下つていたのだつた。

彼の領地たる和泉国から若狭へ赴くには、河内国を通過することになる。大兵を率いて、飯盛山城に赴くには、これ以上ないほど絶妙な状況であつた。

【衰運編】第111章 冬康自決

永祿七年（一五六四年）五月九日。

昼過ぎのことである。

この頃、城での多忙な政務をようやく片付けた安宅冬康は、数日振りに城下の安宅屋敷に戻っていた。城下町でも、最も城に近い一等地を割り当てられており、それだけを見ても、彼の存在感の大きさが見て取れた。

冬康は知り合いの僧侶と茶など飲みながら、久方ぶりの休息を思う存分に堪能していた。強大な三好政権の全てを、彼一人で支えていたのだ。疲労の度合いは、果てしないほどに凄まじかった。

「長兄は、こんな忙しなき政務を日々こなしておられたのだな。今は亡き若殿もだが、こんな多忙振りでは、身体もおかしくなるだろうな」

などと笑いながら、長兄長慶より与えられた茶器を手にとった。長慶や実休とは違って、彼は、余り茶道なるものが好きではなかった。茶そのものが苦手なのである。ただそれでも有力者なら習得しておかねばならぬ嗜みの一つだからと、散々実休に教えられたこともあって、決して上手くはないが、作法はひとしきり理解している。

「実休兄者、か…」

温和ながらも厳しかった次兄のことを思い出しながら、冬康は苦笑いした。一緒に実休に教わった一存などは、堅苦しい作法全てが嫌だと言って、兄たちがどれほど勧めても、全く受け付けなかった。温和な兄と剛毅な弟。けれど、もう二人はいないのだ。

そう思うと、改めて世の中が悲しく感じられた。あれほど聡明だった甥の義興も、あっけなく逝ってしまった。代々優れた一族を輩出し続けてきた三好家だが、そのどれも、最期は決して良いものではなかった。曾祖父之長は処刑され、祖父長秀は戦死し、父元長は

主君に裏切られて自害した。弟一存は、齡三十一の若さで急逝し、甥の義興にいたっては二十二の若さでこの世を去った。そして、兄実休は弾丸の直撃を受けて戦死した。

天は人に二物は与えないというが、まさにその通りだと、自嘲気味に苦笑いした。能力はあっても、運がない。それが三好家の宿命なのだと思うと、自分はどいう最期を遂げるのか、冬康は無性に気になった。

それから少しだけ時間が流れた。

わずか数十分だったが、なぜだか何時間、何日も過ぎ去ったかのような気がした。

冬康は大切に飼いつけてきた鈴虫の下に赴き、餌をやった。

すると、何やら外が騒がしいようで、冬康は腹立たしそうに立ち上がると、

「何事だ、騒々しい」

と、部屋の外に控える小姓たちに向かって思い切り怒鳴った。けれど、しばらく何も答えはない。

「どうしたのだ？」

冬康は不思議そうに顔をひねりながら障子を開き、廊下に飛び出した。

そこに…。

「も、申し上げますッ！」

と、小姓たちが慌しく駆け込んできた。

「か、完全武装の大軍に、や、屋敷全体が取り囲まれております」「完全武装の大軍？」

馬鹿など、冬康は耳を疑った。

ここは三好家の本拠地である。敵などいるはずがない。味方だとしても、完全武装になる必要性などあるまい。彼はそう思って、ふと足を止めた。



「よもや、立花の兵か？」

内藤宗勝の援軍として、丹波に赴く途中、飯盛山にやってきた立花範政のことを思い出し、冬康は苦虫を噛み潰したような顔をした。そして、その直後、彼の推測を裏付けるような報告が、続々とやってくる。

「立花家の家紋です。立花土佐守の兵と思われませぬ」

「立花勢に間違いありません。御屋形様の上意だと申して、今まさに攻撃を仕掛けてきそうな気配にございますッ！」

まさかと、冬康は思ったが、その瞬間、鬨の声らしき喊声が響き渡ると、彼も観念せざるを得なかった。散々戦場で聞きなれた声であり、音だった。

立花範政は包囲が完了したとの報告を受け、静かに頷いた。

自分が攻撃命令を下せば、安宅冬康はこの世の人ではなくなるのだ。

主君長慶の命であるとはいえ、無情な感じがした。冬康がいなくなれば、三好家はどうなるだろう。これ以上ないほどに衰弱しきってしまうかもしれない。けれど、これは主命なのだ。範政は必死にならざるを得ない。床机の上に、でんと腰を据えていた。

「…権助。蟻一匹たりとも逃がすなよ」

側に控える重臣にそう命じつつ、範政はすつくと立ち上がった。

見慣れた飯盛山が眼前に聳え立っている。隆昌を極めた三好家の覇府らしく、盛大荘厳な大宮殿である。京の大内裏や室町御所など目でもない。

自分が三好家に仕官したのは、いつ頃のことだったろう。大奥入りした妹が長慶に見初められ、以来、立花家は三好家とともに隆昌を極めてきた。立花範政は、最盛期には従四位下左近衛権少将、幕府御相伴衆、堺奉行、三好家家老の座にあり、今もなお和泉岸和田

城主の座を維持していた。

それも、今回の事で失ってしまうかもしれない。漠然とした不安の中で、範政は小さな溜息を一つだけ吐いた。

「殿！ 攻撃命令を！」

そこに、重臣の一人阿部雷蔵が範政に声をかけた。

範政はしばらく何も無い虚空をぼんやりと見つめながら、じっと天を仰いでいた。

自分の鶴の一声で、歴史が動く。範政はゆっくりと息を吸い込み、そして大きく吐き出した。

「…攻撃、開始」

立花軍が大挙して押し寄せる。

その数、総勢二千。

寄せ手の大将は新井権助だった。

一方、安宅冬康の手元には、女子供合わせても二百人程度があるだけだった。その中でも戦闘要員となりそうな人数は、わずか六十人ぐらいときている。

勝てるわけがなかった。

「血迷ったか、土佐守め」

と、冬康は心の中で舌打ちした。

兄の命だと彼は言う。だが、兄がそんな命を出すはずがないと、冬康は確信していた。これが範政個人の野望の上になされた行為でないのだとすれば、彼はまんまと騙されているのだ。あの狡猾な大和の狸に…。

「松永弾正、か…。食べぬ男だ」

全てが彼の手の平の上で起きていることなのだろう。自分も範政も、全て彼によって操られている。冬康はこれまで別段久秀をどうとも思ってはこなかったが、今回ばかりは、その狡猾なやり方に、反吐が出そうなほどの反発反感を抱いていた。

そこに家臣の一人が、血塗れになって冬康の下にやってきた。

「もう駄目です」

と、言って事切れた。

あちこちから鬨の音が響き渡る。多勢にものを言わせて押し寄せてくる立花勢に対し、寡兵の冬康勢は思いのほか奮戦しているらしかった。

「…おのれッ！」

冬康は心の底から、怒鳴るように叫んでいた。

死にたくない。まだやるべきことは山とあるのだ。長兄を支え、死んでいった次兄実休、弟一存、甥の義興らに代わって三好家を真正銘の天下人に押し上げると言う責務が、彼にはあった。それを果たさずして死にたくはなかった。

けれど、現実は無情である。

「申し上げますッ！ 立花勢が館内に突入いたしました」

度々やってくる血塗れの報告に、

「そうか」

冬康は力なく頷いた。

既に冬康も覚悟を決めていた。彼とて戦国を生きる武人である。最期くらいは見事に決める。それくらいは度胸はあった。死にたくないが、だからといって惨めで情けなき最期を遂げる気はない。英雄三好長慶の弟であり、そして安宅氏の棟梁だ。相応しき最期を遂げてやる。冬康の意はついに固まった。

けれど…。

兄は戦死、弟は病死。そして自分は仲間裏切られて殺される。ほとほと、三好家とは運がないものだ、他人事のように、彼は笑っていた。

「新介、屋敷に火を放て」

冬康は側に控える小姓の一人にそう命じると、

「承知！」

森新介は恭しく畏まると、足早に立ち去っていった。

だから冬康は、たった一人静かに狭い座敷に腰を下ろした。

おもむろに脇差を抜き払い、まじまじと眺めた。青白く、無機質に輝く閃光に、少なからぬ恐怖を感じた。

これから死ぬのだ。

怖いし、辛い。けれど、死を臆するわけにはいかなかった。その間にも火は勢いよく燃え盛り、冬康の側まで迫ってきた。躊躇っている場合ではない。三好家の、そして安宅家の一族として、その名に泥を塗るわけにはいかなかった。

冬康は鋭い短刀を己が腹につきたてた。介錯は、いない。

冷たい感触が、腹の中に響き渡る。凄まじき激痛。けれど、それを通り越すと、そんなことを感じられるような体力的余裕すらなくなってしまうた。

曾祖父である三好之長は、細川高国軍によって捕らえられ、その直後に斬首された。父である三好元長は、和泉国顕本寺で、一向一揆軍に包囲され自決した。あの折の曾祖父や父も、こんな気分だったのだろうか、冬康は薄れ行く心の中に思った。

「父上…、兄上、又四郎。…若。この撰津も、今参ります」

そこまで呟いて、冬康はついに事切れた。

従四位下撰津守。幕府御相伴衆。

三好政権最後の黒柱だった安宅冬康は、かくして死んだ。享年三十五歳である。

天下にその名を轟かせた三好四兄弟は、ついに長慶一人になった。

立花範政は焼け落ちた廃墟の中にあつて、ただぼんやりと佇んでいた。

安宅冬康が死んだという報告を受けたのは、少し前のことだった。完全に焼け焦げた彼の首を眺めながら、範政はひたすらこの世の無常と対峙していた。

安宅氏の郎党は皆殺しにした。殺す気はなかったのだが、皆、主君冬康を守るべく必死になつて戦い、玉碎したのだ。男だろつと女だろつと、老人だろつと子供だろつと、誰もが構わず、圧倒的な立花軍に突撃して、花の如く鮮やかに散つていった。

「申し上げます。摂津守が次男清康には逃げられましてございます」  
新井権助が報告のためにやってくるつと、

「そうか」  
とだけ、範政は淡々と頷いた。

別段、安宅清康などに興味はなかつた。逃げたいなら逃げればよい。

「死した者も、懇ろに弔つてやれ」  
範政がそう命じると、

「承知！」  
と言つて、権助は足早に彼の下から去つていった。

城下の立花屋敷が、立花軍の本陣となつている。

城を除く城下町の全てが、今や立花軍の軍政下に置かれ、人々は立花土佐守範政の一挙手一投足に全神経を注いで注目していた。よもや彼が謀叛するとは、誰も想像すらしていなかつたが、実際に彼は二千の軍兵を率いて安宅屋敷を強襲し、ついに安宅摂津守冬康を滅ぼしてしまつた。ならば、彼らは次に飯盛山城を攻撃するに違い

ない。三好政権の本拠地として、長らく平和を謳歌してきた町衆は、ただ困ったような顔をして、範政の次なる一手を見守っていた。

けれど、範政に飯盛山を攻撃する気など更々ないのだった。殺した安宅家の被官を弔い、ひっ捕らえた者たちを解放しつつ、範政は屋敷内にあつて、ひたすら「南無妙法蓮華経」と唱えていた。

「殿！」

しばらくして、戦後処理を担当していた新井権助が範政の下に駆け込んできた。

「どうした？」

範政はゆつくりと振り返ると、すぐ側で畏まる権助の顔をまじまじと見つめた。

「飯盛山城より使者が参りました」

「使者だと？」

「はッ！ 御屋形様の側臣伊沢大和守殿と思われませう」

「大和が？」

範政は腕組みながら、「ふーむ」と唸りつつ、

「通せ！」

と、命じた。

その頃、飯盛山城内は……。

あえて言うまでもなからう。驚天動地、青天の霹靂……。どんな言葉が一番今の状況を形容できるだろうか。兎にも角にも、上へ下への大混乱となっていた。

立花土佐守殿謀叛！

驚き、慌てるのも無理はなからう。その上、三好家執政たる安宅撰津守冬康が殺されたのだ。

本城表御殿の一角に、三好山城守康長、三好日向守長逸、三好因

幡守政勝の三人が集まった。ちょうど城内にいた一門の重鎮たちは、この思いもよらぬ事態に対し、どう対処すべきか、大至急定めねばならなかった。

「土佐守は二千の兵を従えている。…城内に控えている兵力は一千足らずだ。攻め込まれて負けるとは思えぬが、一千足らずの兵では守るにしても、これほど広き城を守るには、手が回らんぞ」

長逸が苦りきった顔をしてばやくと、

「しかもあの用心深い土佐殿のこと。よもや、城内に奴と内応している者がいないとも限らぬ」

政勝もまた、困ったように溜息を吐いた。

「とりあえず、土佐の陣に対し、此度の経緯等々、詰問の使者を出さねばなるまい。それと、問題は御屋形様だ。撰津殿が殺された今、ただでさえ精神状態がよろしくないのに、さらに止めを刺すことにもなりかねぬ」

三好一門の最長老として、大きな権威と存在感を誇っている康長の言葉に対し、長逸や政勝も何も言わなかった。

三人の一門宿老を代表する形で、三好康長が三好長慶の下に赴いたのは、それからすぐ後のことであった。

奥御殿西郭に長慶の居殿はある。さすがに三好政権総帥の居住区域だけに、その壮大荘厳さは、松永久秀の多聞山城の比ではなかった。あちこちに金銀珠玉が煌き、襖などには当代屈指の絵師たちの絵画が所狭しと描かれていた。南蛮渡来の珍品名物がずらりと並び、中でも朱色の玉座は余りに場違いすぎて、面白いほど目立っていた。南蛮、特にイスパニア（スペイン王国）なる国の国王が使用していたものの模造品らしいが、初めて見た長慶は大いに気に入って、それを高値で買い取っていたのだった。

ともかく、不思議な空間である。康長は相変わらず溜息混じりにその部屋に入ると、そこで、言葉を失った。

そこにいたのは、鬼の如き形相の……いや、それ以上、もはやこの世の人とは思えぬほどの顔をした修羅が、冷え切ったような顔をして微笑んでいた。

「おう、叔父上！ 何をしておる。早く入れ！」

言葉こそ、往年の長慶らしさがあつたが、口調、語感、その全てはおぞましいまでの殺気が漲っていた。嵐の前の静けさというべきか。今にも爆発しそうな雷雲というべきか。ともかく、康長はいつになくオドオドとした様子で、ゆっくりと長慶の居室に足を運んだ。

「お、御屋形様……。た、立花土佐……」

そこまで言つて、不意に長慶がすつくと立ち上がった。

「叔父上」

彼はゆっくりと叔父の側に歩み寄ると、その首筋をとんと叩いた。「連れて来い。土佐守を、この場に連れて来い！」

「は……」

「は？ ではない。連れて来い」

冷え切つた、なんともいえぬ不気味な声である。康長はこれまで味わつたことのない凄まじき恐怖を感じた。

「連れて来いと言っているのだッ！ あの腐れ外道を、直ちにこの場にしょつ引いて来いッ！」

ついに切れた。と、康長は思った。

無理もない。何しろ、長慶にとつて、冬康はただの一族ではなかつた。最愛の弟である。彼が誰より信用し、信頼してきた三人の弟の、最期の一人だつた。一存や実休、ついには義興までも死んだ今、彼が辛うじて精神力を保っていたのは、冬康が健在だつたからといつても、決して過言ではなかつたのである。

その冬康が死んだ。しかも、殺された。敵ではなく、味方に……。

それは怒るだろう。特に精神状態がこのところ非常に不安定だつた長慶である。ひとたび怒りだすと、もはや誰にも手が付けられなかつた。

「範政をしょつ引けッ！ 余の面前につれて来いッ！」



長慶は烈火のごとく激怒し、あたり構わず怒鳴り散らした。

かくして康長は逃げるように甥の御前から立ち去ると、長慶の側臣たる伊沢大和守を呼びつけて、立花範政の陣に赴くよう命じたのであった。

立花屋敷大広間に通された伊沢大和は、そこで立花土佐守範政に謁見した。

範政はというと、思ったより平然としていた。側には新井権助はじめ、立花家の重臣たちが勢ぞろいしていた。彼らは皆、固唾を飲んで、長慶からの上使の言葉に耳を傾けていた。

「土佐守殿、御屋形様の上意です。至急登城せよとのことです」

けれど、伊沢大和とてもさる者。殺気立った立花家中の雰囲気は飲み込まれることなく、あくまで事務的に、淡々と用件だけ告げた。

「それだけか？」

範政が尋ねると、

「それがしは、それだけしか聞いておりませぬ」

大和守は相も変らぬ様子で、そう言った。

「そうか…。登城せよ、か」

範政は薄々察している。結局、長慶の命により冬康を討つたと主張してはいるが、要するに自分自身が冬康を討ちたかっただけなのだ。長慶が冬康を討て、などと命じるはずがないことは、長年彼に仕えてきた範政ならよく分かっていることだった。そして長慶が登城せよと言う。良い話であるはずがなかった。

「…あい分かった。早速登城しよう。だが、しばし待ってくれぬかと、範政が言うのと、

「待つ？」

伊沢大和は訝しげに、彼の顔を睨みつけるようにして見つめた。

「案ずるな。わしは御屋形様の命に叛く気はないし、叛いたこともない」

「左様か」

大和守は静かに頷くと、軽く頭を下げて、範政の下から立ち去った。

立花範政はしばらくの間、青く広がる空をぼんやりと眺めていた。見納めになるかもしれない空だった。せめて、腹いっぱい味わっておきたかった。

「殿。御登城なさるおつもりですか？」

新井権助と阿部雷蔵の二人が、彼の下にやってきてそう言った。

「何を申す？」

範政は二人をぎろりと睨み付けると、「当たり前だ」ときっぱりと言いつ切った。

「されど、登城なされれば、殿は殺されますぞ」

二人にも、既に全てが分かっているようだった。いや、分かってきたといったほうがよいかもしれない。安宅冬康を殺した辺りから、何やら雰囲気が違うことぐらいは、誰だって理解できた。

新井権助も阿部雷蔵も、その他の多くの重臣たちも、今回の事は全て長慶の命によるものだと思っていた。だが、そうだとすれば、長慶の態度はかなりおかしい。もしかすると、あの命令書は偽文…。自分たちを貶めるための、何者かの策略だったのではないか。彼らがそう思い始めたとしても、無理はない。

そんな重臣たちの不安げな顔を眺めながら、範政はにやりと不敵な笑みを漏らしつつ、

「それも運命さ」

とだけ、淡々と言った。

「されど…」

雷蔵が食い下がり、

「いっそ、飯盛山を攻め落としては、如何ですか？」

権助が付け加えた。

「な、なに？ 飯盛山を攻め落とせ、だと？」

何を馬鹿など、範政は苦笑いした。冗談だろうと思ひ、二人を見ると、案外二人は本気らしかった。その瞬間、範政はカァアとなつて、

「たわけッ！」

と、怒鳴つた。

「そなたらは俺を本当の謀叛人にしたいのか？」

「…」

「俺は御屋形様に取り立ててもらひ、大名にまでなつたのだ。その御屋形様に刃を向けるなど、断じて出来ん。御屋形様に死ねと言われれば、ただ素直に死を受け入れるのみだ」

「さ、されど、摂津守様を殺したとなれば、切腹では済まされませぬぞ」

権助は相変わらず食い下がった。

「ふん。斬首だろうと何だろうと、構わん」

範政はそう言つて、ふんと鼻で静かに笑つた。

【衰運編】第113章 捕まった寵臣

立花範政が登城したのは、その直後のことである。

伊沢大和守に伴われ、城に入った彼は、そこで待ち構えていた三好康長の手勢により拘束され、罪人として、三好長慶の下に引つ立てられることになった。

範政は初めから観念していた。それを知らぬ側近たちが、

「何をするか！」

と、怒鳴り、暴れていたが、

「構わん。大人しくしろ」

主君たる範政がそう命じると、彼らも観念したように大人しくなった。

しばらく歩くと、見慣れた飯盛山城の光景が広がっていた。やはり素晴らしいものだ。と、範政は息を呑んで「ははは」と笑った。

「何ゆえ、何ゆえそなたは冬康を殺したのだ？」

康長はじろりと睨みつけるように範政を見つめると、そう聞かすにはいられぬといった様子で尋ねてきた。

「…何ゆえと問われましてもな。…これは主命であると思ったがゆえに実行したまで。他意はござりませぬ」

「主命だと？ 左様な命令を、御屋形様が出すわけもあるまい。そんなことぐらい、長年御屋形様に近侍したそなたなら、嫌というほど分かっておろうが」

日頃、温和で知られた康長とは思えぬほど刺々しい物言いに、範政は思わず苦笑いした。康長にとっても、冬康は可愛い甥なのだ。殺されれば怒るだろう。それでなくとも、冬康が果たしていた役割を思えば、三好家の安泰を第一義に考えているこの老人が怒らぬはずもないのだった。

「…最近の御屋形様を見ていると、昔の知識は全く役に立ちませぬから…。ただ、あれが主命でないのだとすれば、それがしはまんま

と嵌められたことになりすな

「嵌められた？」

「山城様もお気をつけなされ。大和の古狸は、なんにでも化けますからな」

「…」

範政の言葉に、康長はごくりと息を呑んだ。

そうこうしていると、小さな部屋に通され、そこで沙汰があるまで待つよう伝えられた。守衛の兵が数人ほど、入り口近くに待機している。さすがの康長も、見張りだけは怠っていないようだった。

「…俺も、ついに最期か」

範政は小さくハアと溜息を吐いた。

「どうせなら、もう少し女子を抱いておきたかったなあ」

などとぼやきながら、まだまだ若い己の体をまじまじと見つめていた。

狭く、殺風景な部屋だった。畳と壁のほかには、何もない。罪人には実に似つかわしい場所だと思った。

「…俺も、ついに死ぬのか。…死ぬつてのは、どういう感覚なんだろうな」

そんな風に考えながら、結局、自分とは何とバカな生き物なのだろうと思わずにはいられなかった。松永久秀の如く狡猾にはなりきれず、座して死を選ぶことしかできないのだ。他に生き方があるのなら、教えて欲しかった。まあ、教えてもらったところで、どうせこういう生き方しかできない自分ではあるが…。ただ、和泉一國二十万石の太守にまで登り詰めながら、こんな最期しか遂げられないのだとすれば、出世するというのも考え物だと思わずにはいられなかった。

しばらくして、松永弾正久秀が長慶の使者として、範政の下にやってきた。

相変わらず薄ら笑いを浮かべて、勝ち誇ったように範政を見下ろしている。彼のそういうところが気に入らないのだと心の中では思いつつ、口には決して出さなかった。

「土佐殿。残念だったな」

そんな久秀の言葉が、今の範政には何より憎たらしかった。やはり全ての黒幕は、眼前にいる禿頭の古狸だったのだ。あの書状も、冬康を巡る不穏な噂さえ、この狸がでっち上げた出鱈目に違いあるまい。自分が冬康に抱いてきた不信感や憎悪も、狸が演出した幻想だったのだろう。自分はまんまと乗せられたのだ。元から分かっていたことではあったが、松永弾正少弼久秀の醜く歪んだ笑顔を見ると、嵌められたのだという現実を改めて思い知らされたようで気分が悪かった。けれど久秀は構うことなく、相変わらずニタニタと笑っていた。

「全ては時の運。…全ては拙者の不運が招いた悲劇。お主もせいぜい、運に足をすくわれんように気をつけることだ」

精一杯の皮肉を吐き捨てながら、範政の目は既に久秀ではなく、その先にある遙か大きな空に移っていた。いつそ、鳥のようにあの空に飛ばたいといけたら…。何も気にすることなく、ただ縦横無尽に空を舞えたら、どれだけ気持ちよいだろうか。そんなことを思いながら、彼は久秀に言われるがまま、すつくと立ち上がった。

思えば…。

昔が一番楽しかった。幸せだった。まだ立花家が三好家の下級武士に過ぎなかった頃…。日々生きていくのでやっとというほどに貧しく、実に辛い日々ではあったが、一番満ち足りていた気がした。必死に働く父を見、母なき家の家事に奔走する妹を眺めながら、範政は一人悪がきたちと遊んでいたけれど、そんな彼を咎める父や妹たちの小言を疎ましがりながら、喧嘩したり、怒ったりしていた頃のほうが、今より遙かに幸せだった。

三好長慶の御前は、お通夜のようにひっそりとしていた。

そこには三好康長、三好長逸、三好政康、三好政勝、岩成友通、篠原長房、伊丹親興、香西元成ほか、三好政権の中核中核を担う重臣たちが勢揃いしていた。唯一内藤宗勝の姿がなかったが、若狭攻めにかかりきりになっている彼ならば、飯盛山に伺候している暇などないのだろう。

ともあれ、内藤宗勝以外の重臣たちはほとんど勢揃いしていた。何しろ、三好家の実権を握っていた一門の最高実力者たる安宅摂津守冬康が、あろうことか同じ三好家配下の立花土佐守範政に殺されたのだ。今後のこともあるし、何より怒り狂う長慶に、冬康の死を無視したなどと思われたら、どんな目に遭うか知れたものではないのだ。だから皆が慌てふためいて飯盛山城に登城し、この場に参席したのは当然といえは当然のことだった。

そしてその中には、三好家の世継ぎたる三好義継の姿もあった。これは長慶が直々に命じたものであり、義継は上座の長慶の隣にちよこんと腰を下ろして、少しばかり落ち着きなくあちこち、きよろきよろと見回していた。群臣の関心は、実際のところ、死が決まった立花範政のことより、長慶の後継者と定められたこの少年に集中していたといってもよかった。本来の後継者だった三好義興や三好実休、十河一存もなく、そして安宅冬康までも死んだ。長慶に万一のことがあれば、…いや、例え万一のことがなかったとしても、義継少年の存在感は今以上に高まるというのが、専らの下馬評なのだった。

そこに、松永久秀に連れられた立花土佐守範政が姿を現し、彼は長慶の面前に腰を下ろすと、恭しく深々と頭を下げた。突き刺すような冷え切った視線を頭上に浴びながらも、範政は顔色一つ変えなかった。

「貴様は、何ゆえ摂津を殺したのだ？」

爆発寸前の怒りを、必死になつて堪えている。そんな長慶の冷たき顔に、範政は苦笑いした。

「全ては御屋形様のお気持ちと思つたればこそその行為です。他意はありませんが、口惜しいのは、奸賊の姦策を見抜けず、まんまと嵌つて、かくの如き仕儀にいたつたことです」

範政の態度は、相変わらずである。開き直つているのか、いつになく堂々としているようにも見えた。

「よ、余の気持ちだと……。たわけたことを抜かすなッ！ 余が、余がなぜ撰津を殺さねばならぬ。全てはそなたの邪悪な心が成した謀叛であるう？ 撰津を殺し、余を殺し、天下を我がものにせんと企んだか？」

長慶が怒鳴ると、

「天下を我が物？ それは少々心外でございます」

範政はそう言つて、キツと主君の顔を睨み付けた。

「……それがしは常に御屋形様に忠節を尽くして参つたつもりです。御屋形様のおかげで、それがしは今の地位を得られたのです。何ゆえ御屋形様に刃を向ける真似などいたしましょう」

「ならばなぜ撰津を殺した？ 撰津は我が弟。いや、余と一心同体撰津を殺すは、即ち余を殺すも同義じゃッ！」

長慶の怒りはなかなか収まりそうもなかった。まあ、こんな口八丁で彼の怒りが鎮まるとも思つてはいないわけだが、それでも範政は、殺されるにしても、自分の忠誠心だけは疑つて欲しくなかったのであつた。

「……全ては、それがしの読みの甘さが招いたことにございます。そこにおられる古狸の正体に気づかなかつたそれがしの甘さが招いた悲劇なれば、何なりと御処罰下さりませ」

範政はあつけらかんと答え、時折松永弾正のほうを睨みつけながら、腹立たしそうな顔をして苦笑いした。

長慶にとつて見ると、そうした彼の態度が気に入らない。冬康を殺した男なのだ。怯え、震え、命乞いするぐらい卑屈になつてもら



わねば困るのだった。この世のものとは思えぬほどの恐怖を思う存分味わわせた後に殺す。それぐらいのことをしなければ、長慶の気持ちは納まらない。

「処罰、か。…撰津を殺した男に下す処罰は、たった一つしかない。そなたも覚えておろう。和田新五郎のことを…」

いろいろと考えた挙句、ふと思いついたのが和田新五郎のことだった。これならば、範政も怯えるに違いない。長慶はにやりとおぞましき不敵な笑みを満面に浮かべつつ、居並ぶ群臣たちをじろりと見回した。

「…シラケ鋸挽きにございますか」

範政はすかさず応じ、思わず苦笑した。相変わらず淡々とした物言いである。長慶が期待したほど、臆するような気配はなかった。

「そ、そうだ。和田の如く、殺してやる」

もはや意地である。長慶は金切り声を張り上げながら、範政をぎろりと睨み付けた。

「左様でございますか」

全く気にする風もなく、相変わらずニタニタと笑っている範政が、長慶には憎たらしくて仕方がなくなつた。

怖がれ！ 怯えろ！ 恐怖に震えて、命乞いしろ！

長慶は心の中で、そう叫びたい衝動に駆られていた。怖がり、怯え、震える男を、冷徹に殺す。こうでもしなければ、彼の中に渦巻くどうしようもない怒りや悲しみを抑えきることはできなかつた。

「和田新五郎…。ははは。これはまた、随分と懐かしい名前でございますなあ」

などと呟きながら、範政はふと昔のことを思い出していた。

和田新五郎とは、今の公方である足利義輝がまだ菊童丸といった頃、その乳母の侍女に手を出してしまったために、時の將軍足利義晴と、管領細川晴元の怒りを一身に浴びて、京都は一条戻橋にて鋸挽きにより処刑された、かつての部下のことだった。その事件の見事な処理がきっかけとなって出世したのが、他ならぬ範政であった。

あれは天文十三年（一五四四年）八月のことだったから、ちょうど二十年前のことになる。あの当時の自分は、範長といった当時の長慶に仕える小姓の一人でしかなかった。長慶とても、昇竜の如き勢いで勢力を伸ばしていたとはいえ、管領細川晴元に仕える重臣の域を出てはいなかった。それが二十年後の今、このような立場で、このような最期を遂げるとは思いもよらなかったが、これも一つの宿命なのだろう。そう思うと、漏れるのはただ溜息ばかりで、それほどの恐怖は感じなかった。

「無論、お主だけでなく、お主の一族縁者末端に至るまで、例外なく罰してやるぞ」

憤怒の鬼となっていた長慶は、既にその言葉の意味が分かっていた。ただ如何にしてこの悲しみを発散しようか。範政を苦しめて殺してやるうかと、それだけを考えていたのであった。

【衰運編】第114章 狂気の長慶

立花土佐守範政は、零落れていた。

かつては従四位下左近衛権少将、室町幕府御相伴衆、三好家家老、堺奉行、和泉岸和田城主……。他、いろいろな地位と権限を握って、三好政権の宰相とまで言われたほどの男であったが、気がつけば、謀叛人として、飯盛山城内の土牢の中に閉じ込められて、いつになとも知れぬ処刑の日を待つ身となっていた。

人の世とは移ろいやすいものだ。かつて親しく付き合っていた者たちも、失脚してしまつと、会いに来ることさえしなかった。結局、範政は明日になるかもしれない処刑の日に怯えながら、孤独とも闘わねばならぬ破目となつた。

いつそ、自害してやろうと何度思つたかしれなかつた。

けれど、常に番兵が彼を監視しているし、舌を噛み切らぬよう、猿轡まで填められている。無論、刃物のようなものが獄中にあるはずもない。要するに、死にたくとも死ねないのだ。三好長慶が死を命じるその日まで、彼はほとんど生ける屍として、恥を満天下に晒していなければならなかつた。

永禄七年（一五六四年）五月十三日。

三好長慶の命を帯びた松永弾正久秀は、総勢一万の兵を率いて和泉国に進撃していた。

そこは立花土佐守範政の旧領である。弾正久秀の任務は、基本的には立花家より和泉国を接收することであつたが、万一抵抗するなら、一万の軍を持って攻め潰すことも認められていた。何を持って抵抗とするのか、その辺りの基準は全面的に弾正久秀の判断に任せられていたから、要するに立花家の人々の命は、生きるも死ぬも、全く久秀の気持ち一つであつた。

「降伏するより他に仕方があるまい」

重臣たちは、口々に言う。主君が捕まっている以上、戦ったところで勝ち目などないのだ。

「いや、御屋形様は殿の御忠心を裏切り、捕虜の如く扱っておるといではないか。例え御屋形様といえど、そんな所業を許しおいては武門立花家の名誉に関わる。我ら郎党の忠誠心も天下に疑われることになる。ここは大いに戦って、城を枕に討ち死にしよう。立花家にも骨のある武者が大勢いたのだということを、御屋形様に、天下に見せ付けてやるのだ」

そんな風にあくまで強気な主戦派もいないわけではなかった。

けれど、既に立花家の中核を担っていた重臣たちの大半は飯盛山に赴き、捕らえられるか、殺されるかしていた。生き延びて岸和田城内に入った者もないわけではなかったが、主力軍二千が壊滅している以上、徹底抗戦といったところで、そう容易くできるものではない。

第一、総大将がいない。立花範政は拘束されたままである。とりあえず、彼の子供として、妾に産ませた小太郎範秀がいたけれど、まだ若干四歳である。総大将と仰ぐには、余りに心もとない。

「とりあえず兵だけは集めよう。降伏するにしても、徹底抗戦するにしてもだ」

筆頭家老だった新井権助が捕虜となった今、実質的な家老首座となり、混乱の極地にある藩政を主導している阿部雷蔵がそう言う、「承知」

居並ぶ家臣団は、とりあえず頷き、そして誰もが絶望的な顔をして、ハアと溜息を吐いた。

岸和田城の包囲を完了した松永軍の中にあつて、弾正久秀は二タ二タと楽しそうに笑っていた。

全く、これほど楽しいことはない。何度となく立花範政には煮え

湯を飲まされてきた過去があるだけに、彼を謀略によって追い落とすことが出来たのは、これ以上ない喜びであった。

何もかも上手くいった。自分でも恐ろしくなるほど、全てが上手くいった。

ぶるぶると体中が震えだす。いてもたってもいられないような気分は、初陣のとき以来だと思った。

「申し上げます。岸和田城内には三千ほどの兵が立て籠もっているようです」

そこに、重臣の林若狭守通勝がやってきて、そう告げた。

「三千だと？」

案外多い。そんな風に思いながら、久秀は苦笑いした。

「が、それでもわしの敵ではない。一挙に踏み潰して、立花と名のつく全てを血祭りに挙げてくれるぞ」

と、呟きながら、久秀の関心は既に戦からは離れていた。

彼は林若狭守を下がらせると、床机の上にとっかかりと腰を下ろし、おもむろにパンパンと手を叩いた。すると、小姓衆が数人ほどやってきて、彼の前に深々と平伏した。

「例のものを連れて来い」

久秀は淡々と命じ、小姓たちは、

「承知」

と、素直に頷き、そして足早に彼の下から下がっていく。

しばらくして再び戻ってきた彼らは、それぞれに見る目麗しい女子を伴っていた。久秀はすつくと立ち上がり、彼らの下に歩み寄ると、フウと小さな溜息を吐いた。

「余り良き娘ではないのう。…ま、よいわさ」  
などと呟きながら、

「これで良い。他は下がってよいぞ」

と、まるで物でも選ぶかのような感覚で、淡々と告げる久秀であった。

女子と戯れながら、陣中を過ごすのは、最近の久秀の悪い癖となりつつあった。

元々、彼は女癖が良いほうではない。特に一国一城の主となつてからというものの、とつかえひつかえ、いろんな女子と交わつては、漲る性欲の発散に必死になっていた。

この日も女子と交わっている。服を脱がし、その艶かしき全裸をじつとりと眺めながら、下品な笑みを浮かべる。相も変らぬ久秀の姿は、もはや欲望に塗れ、本能だけで動く、ただの獣だった。

「申し上げます」

そこに、割つてはいるように側近の楠木正虎が慌しく駆け込んできた。

「たわけッ！　こういうときは滅多なことで入ってくるなと申し聞かせてあつたはずだ」

せつかくのお愉しみを邪魔された久秀は、実に不快そうな顔をして、正虎を睨み付けた。

「お、御愉しみのところ、申し訳ありません。…ただ、城方より、阿部雷蔵が使者としてまかり越しましたので、ご報告申し上げますように…」

正虎は恐る恐る答え、少しばかり恥ずかしそうに目を背けた。如何に主君の行いとはいえ、男と女が本能のままに交わっている姿というのは、余り見たくないものだった。

「なに？　阿部雷蔵と申せば、土佐守の家老だったな」

「はッ！」

「それほどの男が、わざわざ直々に参つたのか？」

ならばただ事ではないと思ひながら、久秀はにんまりと微笑んだ。そして女子には下がるよう命じると、素早く衣服を羽織つて、

「通せ！」

と、命じた。

立花家が降伏したのは、それからまもなくのことであった。

土佐守範政の子、小太郎範秀や阿部雷蔵以下主だった家老衆は、悉く松永久秀軍により拘束され、揃って飯盛山に送られることになった。

それが五月十八日のことである。

そして五月二十日。彼らは皆、三好長慶の命により、飯盛山城下において悉く処刑されてしまった。僅か四歳の立花小太郎範秀も例外ではない。新井権助、阿部雷蔵……その他諸々、無数の郎党たちがいつせいに首を斬られる様は、壮観というより、ただのおぞましき地獄であった。

そのことを獄中の範政が知ったのは、翌日のことであった。門番たちの噂話を、ふとしたことから聞いてしまったのである。範政としては、ただ愕然と頂垂れ、絶望に打ちひしがれるほかなかった。ついに家臣たちも、家族も、皆殺されたのだ。自分の浅慮のために、皆が死んだ……。そう思うと、さすがの範政も、いてもたってもいられなくなるのだった。

「すまん」

ただそう呟く。もう流す涙もない。今日一日、ずっと泣いてきたのだ。涙は池の如く溜まり、そして、その池も既に乾いて、冷たき地べたと一つになった。

五月二十三日。

この日、立花範政は、西の丸の主たる雅の方が、長慶の命令により拘束されたことを知った。ついに雅にまで被害が及んだのだと思うと、範政の中に渦巻く後悔の念は、いよいよ大きなものとなってきた。

そして二十五日は朝のことであった。

「立花範政！ 主命により、外へ出よ！」

長慶の使者としてやってきたらしい今村慶満が、仰々しく宣言すると、番兵たちがぞろぞろと土牢の前にやってきて、堅く重く閉ざ

された鉄格子の中から範政を強引に引つ張り出した。

彼はようやく土牢を出されたかと思うと、慌しく駕籠に乗せられて京都に連行された。おそらくは、ついに処刑命令が下ったのだらう。周りの兵たちの殺気立った顔を見ていれば、すぐに分かった。

「ついに、俺にも最期のときがきたわけだ」

漏れるのは、ただ苦笑いだけだった。それに、例えどんな方法であれ、死ねるものなら早く死にたかった。これ以上生きていると、こみ上げてくる後悔の重みに負けて、どんどん自分がおかしくなっていくような気がした。

死にたい。何度、そう思ったかしれなかった。死ねるのだ。望むところだと、駕籠の中で範政はニタニタと笑っていた。

けれども、さすがに一条戻橋が近づいてくると、なんともいえぬ不安が体中を駆け巡った。何しろ、鋸挽きだ。簡単な処刑方法ではない。和田新五郎の死に様を思い返すたび、どれだけ表面的に強がっていても、こみ上げてくる恐怖感を隠し切ることはできなかった。

六月一日。

既に立花範政は、一条戻橋の上で事切れている。

かつては立花少将範政などと呼ばれて、畿内中に権勢を誇った男だが、そこで空しく絶命している姿は、ひたすらにおぞましく、哀れで、とても往時の彼からは想像できぬものであった。

実際に死んだのは、昨日の晩である。即ち、五日間もの長きにわたって、彼はまがりなりにも生き永らえていたのである。その生命力の凄まじさに、誰もが驚いた。

ともあれ、範政は死んだのであった。享年四十三。妹や父の力も借りたとはいえ、下級武士の家に生まれながら、ついに和泉一国の太守にまで登り詰めた出世頭も、その最期は、あつけなく、情けなく、哀れで、無惨なものであった。

彼が死んだ翌日の朝、長慶は手勢二千を大奥に突入させると、軟



禁していた雅の方と、その側近たちを根こそぎひっ捕らえて、悉く土牢に閉じ込めてしまった。

既に長慶は狂気の人である。昔の如き聡明さは欠片もない。怒りと憎しみ、悲しさと空しさ、その全てが彼を支配し、そしていつしか彼の体を蝕んでいた。まともに考える力を失ってしまった修羅は、ひたすらこの世に地獄をもたらすだけの害悪と成り果てていた。

けれども…。

雅の方を拘束したことは、群臣の度肝を抜いた。確かに彼女は立花範政の妹ではあるが、しかしそれ以上に長慶の寵愛を一身に受けてきた寵妃ではないか。彼の信任を受けて、長らく三好家大奥を取り仕切ってきた実力者でもあり、世継ぎたる三好義継の母代わりを勤めてきた有力者だった。それを殺すというのだ。群臣が驚いたのも、無理はなかった。

「西の方様まで殺されるのですか？」

と言つて、最後まで長慶に食い下がっていたのは、三好山城守康長であった。彼は長慶の叔父であるばかりでなく、安宅摂津守冬康の死後、彼に代わって執政の座に就き、三好政権の一切を取り仕切っている実力者だった。

「何ゆえですか？」

何も答えぬ長慶に、康長は激しい口調で詰め寄った。

「あれも、…あれも、範政の一族だ」

そうきつぱりと言いつける長慶に、康長は思わず天を仰いだ。

「如何に範政の一族といえど、西の方様が摂津守殿の一件に関与したわけでもありますまい。処刑とは、重すぎると思われませんが」

そんな康長の言葉も、長慶の耳には届かない。既に憤怒の権化となつている彼は、

「立花一族は死あるのみだ」

と、殊更大声を張り上げて叫んでいた。

西の方様こと、雅の方が処刑されたのは、六月三日のことである。兄とは違い、人望のあつた彼女である。三好康長だけでなく、三好長逸、三好政康といった一門の重鎮から、岩成友通、内藤宗勝などの重臣まで、様々な人が必死になつて命乞いしていたけれど、長慶は全く聞かなかつた。最終的には、彼が寵愛している養子義継も、養母的存在である彼女を救うべく、積極的に運動したが、それすら聞く耳を持たぬ強情な長慶であつた。

かくして、六月三日。雅の方は死んだ。享年四十一である。打ち首ではなく、毒殺だつたところに、長慶の最後の温情があつたといえなくもない。小さな部屋に、毒酒を宛がわれた彼女は、遺書一つ遺さずに死んだ。

「はっはっは、死ね。死ね。死んでしまえ！ 皆、皆、死んでしまえ。はははは……」

雅の方の処刑が完了したという報告を受けた長慶は、そんな風に完全に壊れきつた人形のように高笑いしていた。

「死ね。はは、死ね！」

がっくりと頂垂れ、「ははは」と笑う。長慶は完全に壊れていた。

その後、雅の方に近侍していた女官から、立花家に連なる人々がいつせいに処刑された。京の六条河原や粟田口に連れ込まれた大勢の人々が、次から次へと殺されていく様は、地獄以上の地獄であり、見物していた人々の度肝を抜いた。誰もが呆然と立ち尽くし、啞然とした様子で、

「長慶様はどうなされてしまわれたのか」

と、思わずにはいられなかつた。

全ては長慶直々の命である。狂気に満ちた瞳で、いつになく興奮した様子で命令する彼の姿は、もはや昔の彼とは違つのだということとを群臣に示すに十分すぎるものとなつた。

六月四日。

そんな長慶の様子を見て、安宅冬康死後の三好家を担っていた康長が全てに愛想をつかして、隠居した。居城である河内高屋城に引込んだ彼は、入道して笑岩しょうがんと号し、家督を嫡男の康俊に譲ると、彼を補佐して、高屋城と領地である南河内の統治に専念するようになった。

代わって、松永久秀が全権を掌握した。

長慶は康長が隠居して帰ってしまった日、彼を呼びつけ、

「以後のことはお前に全てを任す」

と、命じてしまったのである。ほとんど思考能力を失っていた長慶には、久秀が何を考えているのか、それすら見抜くことができなかったのであった。

かくして…。

以後の三好家は、もはや久秀の私物となった。彼の思い通りにならぬことはない。既に、彼の権勢は長慶すらも上回って、事実上、彼の下克上は完成した形となっていた。

一方、長慶はますます腑抜けになって、飯盛山城の奥御殿から一歩も出ないようになつた。そして、彼の体が異変をきたすようになったのは、この頃からであった。立て続けに起きた不幸のために、彼の生命力は著しく減退していたのだつた。

【衰運編】第115章 繰り返される下克上

目まぐるしく日々が過ぎて、六月も半ばを迎えていた。

季節はすっかり春から夏へと変わり、爽やかで穏やかだった気候も、いつしか蒸し暑き、厳しきものに変わっていった。

今年で四十二歳になる三好長慶は、このところめつきり老け込み、体力気力全てが急激に衰えたためか、病に臥せて寝込むことが多くなった。特に、一時の激情に燃え上がって処刑した雅の方のことを時折思い出すらしく、人知れず涙することも多かった。今更になつて、命の重さを痛感する長慶の姿は、哀れ以外の何者でもなかった。

雅の方を失つて以後の彼は、何をやるにも自滅的だった。相談する相手も、会話する相手もいなくなった。彼女は側室であるというより、気の許せる、たった唯一の親友だった。そんな彼女を、長慶は自らの命令で殺してしまったのである。彼がおかしくなったのも、無理はなかった。

「御屋形様、何かお口に入れませぬと、お体を壊しますぞ」

伊沢大和守などは、そう言つて絶食している長慶を説得するのだが、彼はついに聞く耳を持たなかった。

三好修理大夫長慶が心身ともに弱体化していく中、松永弾正少弼久秀だけは一人生き活きと積極的な政治活動に従事していた。

既に彼は三好政権の大宰相的立場となつて、政権を主導していた。例え有力な一門衆であろうとも、今の彼の権勢に敵う者は一人もいないといつて過言ではなかった。

松永弾正の権力の源泉は、長慶の世継ぎとして、俄かに存在感を高めていた三好義継を実質的な庇護下に置いていることにある。かつて反弹正派の急先鋒だった十河一存の嫡男が、めぐり巡つて自

身の錦の御旗となつてゐることに、複雑な皮肉を感じつつも、利用できる者は悉く利用するつもりの際は、義継という若者を、骨の髄まで利用しつくすつもりでいた。

そうした久秀の権勢ぶりが露骨に表れた事件が、六月二十五日に起こつた。

六月二十五日、昼。

松永弾正は飯盛山城に伺候し、すっかり腑抜けた三好長慶の御前に平伏していた。弾正を目の前に見ても、彼は心ここにあらずといった様子で、しきりに大奥のほうに目をやっては、落ち着きなくオドオドとしていた。

弾正は苦笑いした。長慶はこのところ、女狂いに精を出しているという。見る目麗しい女子とみれば、片っ端から関係を持つてゐるらしい。まあ、弾正も散々女と交わつてきたから、人のことは言えない。時には陣中にまで女子を伴い、伯仲堂々、獣の如く快楽を樂しむときもある。けれど、そんな彼から見ても、女狂いに明け暮れている長慶は異常に見えた。

「御屋形様に申し上げる。御家督讓位の件でござるが」

と、久秀は、容赦ない口調で長慶に迫つた。

「既に御屋形様はお体悪く、御家の当主たる激務に耐えられるとは思えませぬ。ここはお静かに静養なさるが最善と考え、臣としてご隠居をお勧めいたします」

久秀が何を言っているのか、長慶にはさっぱり分からなかつた。

ただ、

「隠居？」

と、呆けたように、何度も同じ単語を呟いているだけだつた。

こつはなりたくないものだ、久秀は密かに思った。かつての英雄も、こつなつてしまつと形無しだつた。

「既に義継様は御器量優れ、当主に相応しきお方に育ちました。御屋形様の跡目を継ぎ、三好の御家に更なる発展をもたらすこともできるでしょう」

「…そうか」

長慶には、既に久秀の言葉に逆らえるだけの力がなかった。気力もないし、権力とてない。かつて長慶が保持していた圧倒的な君主大権は、いつしか義継の下に移動し、その義継を支配している松永久秀の玩具になっていた。

久秀は殊更強い口調で隠居を迫り、伊沢大和守がその横暴を咎めたが、久秀の権勢の前には、暴風の前の塵芥に等しかった。

六月二十六日朝。

三好長慶は正式に家督を義継に譲って隠居した。世間的には、死した十河一存、三好実休、三好政成、三好義興、安宅冬康ら一門衆の菩提を弔うためだと触れていたが、誰より事実を知る一般民衆はいよいよ松永久秀による篡奪が本格化したのだと、三好家と松永久秀の動向を、固唾を呑んで見守るようになった。

かくて家督の座に立った三好義継に対し、二十七日、幕府は養父長慶と同じ管領代、御相伴衆の格式を許し、朝廷も、彼を従四位下左京大夫に任命して、新たな家督継承者の誕生を祝った。

だが…。

長慶の病状が深刻化するにつれ、生来の陰謀家、足利義輝は、これまで引つ込めてきた悪い虫を、再びその体内に飼い始めるようになった。

將軍家の復興を至上命題に掲げる義輝にとって、長慶の没落はこれ以上ない吉事であった。とりあえず三好義継を管領代、御相伴衆に任命して、三好家との友好関係を演出して見せたが、今年で十三歳になったばかりの少年に何の力があるう。松永久秀が権力を握るにしても、三好長逸、三好政康、三好笑岩（康長）、三好政勝といった有力一門や岩成友通をはじめとする重臣たちが許すまい。

確実に三好家は二つに割れる。

義輝がそう考えたのも、無理はない。そこで彼は、権臣松永久秀は世に稀な大奸臣だと痛烈に弾劾する御内書を、密かに長逸をはじめとする有力一門に発給して回ったのである。彼らが久秀に対して反感を強めてくれれば、大成功。例えそうならずとも、將軍家が反松永派に肩入れしていると分かれば、松永久秀一派は反松永派への警戒を強めるだろう。即ち、それは三好家が松永派と反松永派で割れることを意味している。どちらに転んでも、義輝が損することはない。

「秦の趙高、漢の梁冀、唐の安祿山に勝るとも劣らぬ奸臣、か……」

久秀は、將軍御所から発給された御内書を眺めながら、ニタニタと笑っている。怒るでもなく、ただ笑っていた。不気味な笑みではある。けれど確かに笑っていた。

「如何なさいますか？」

林若狭守や、楠木正虎といった重臣たちが、しきりに彼の判断を求めている。捨て置いては厄介と、彼らの顔はそうはつきりと言っていた。

「いやはや、公方殿は大した御方だ。あれほど徹底的に我らに叩かれておきながら、未だ將軍家復興などと下らぬ夢を諦めてはおられないようだ」

「……ですが、これに応じて三好日向守（長逸）や下野守（政康）らが敵方に回ると、何かにつけ厄介かと。……新たに御家督となられた義継様のこともありますし」

林若狭の言葉に、久秀は、

「気にするな」

と言って、再びニタニタと笑う。

「くつくくく。公方殿は全く分かっていない。自分の立場がどれほど累卵の危つきにあるのかということをご存じないようだ。ま、

いずれ思い知らせてやるが、ともあれ、ここは我らも行動を移さねばなるまい。せっかくの三好政権が、瓦解してしまったのでは、わしとしても困る」

「されば、早速重臣の方々に飯盛山に集まるよう書状を差し向けましょう」

阿吽の呼吸でそう口を挟んだ楠木正虎に、久秀は静かに頷いた。

久秀の呼び出しに応じる形で、三好長逸、三好政康、三好笑岩、三好政勝、岩成友通、篠原長房、内藤宗勝の七人が集まった。これに久秀を加えた八人が、三好政権の中核、中核を担う最高幹部であった。俗に、人々は、彼らを指して八奉行とか、八人衆などと称しているが、ともあれ、八人が新たに集まって論じた議題は、言うまでもなく、足利義輝のことだった。

「それがしを奸臣と弾劾して、御家分裂を策動する將軍を、座して見守るわけにもいくまい」

久秀が口火を切ると、

「無論だ」

世間から反松永の急先鋒と見做されている三好長逸が、真っ先に応じた。

「今は、義継様が新たな御家督に立たれたばかりで、何かと問題が起こりやすい時期。我ら一門衆や重臣が一致団結して、新君を支え、守り立てて、御家が栄華を守りきらねばならん」

三好政康の言葉に、残る七人も大きく頷く。

見れば少なからず異様な光景ではあった。何しろ、長逸も政康も、いっぱしの反弹正党の領袖格として天下に鳴らしていた。そんな彼らが、久秀の呼び出しに応じ、かつ彼の言葉に続いて義輝の策動を非難しているのだ。

結果から見て、義輝の策動は全く逆の結果を招いたわけである。

即ち義輝は、長逸ら有力一門と、久秀を離間させることで、三好家



を分裂させようと図ったわけだが、蓋を開けてみると、足利義輝という共通の敵が再び顕在化したことで、久秀と長逸らが対義輝、対幕府の題目の下に一つに纏まってしまったのである。

「ただ、こうなると、公方殿が目障りでござるな。御隠居（長慶）があのような状態で、新君は未だ十三とお若い。この後も公方殿が何かと策謀を弄してくることは間違いない」

岩成友通がそう言うと、

「災いの芽は早急に断ち切るが、上策かと」

久秀は、そんな風に言つて、重臣たちを焚き付けていた。

「だが、そんなことをすれば、我ら三好家は天下の非難を一挙に買うことにもなりかねぬ。虎視眈々、中原を狙う虎たちに大義名分を与えることになりはしまいか」

三好政勝は、かつて義輝や晴元と共に戦い続けてきたからか、依然として義輝には愛着を持っているようだった。

「気になさるな。そんな小さき虎など、我らが一挙に叩き潰してくれる。それに、公方殿を廃して、新たな公方殿を立てれば、こちらの大義名分も立つ」

「新たな公方？」

久秀の切り出した言葉に、誰もがきよとんとした。すると、待つてましたと言わんばかりに、篠原長房がパンと手を叩いて、

「足利義栄公にござるな」

と、言った。

「義栄公とは、即ち阿波平島に住しておられるお方で、義維公の御嫡男。義維公は、皆様ご存知の通り、かつて、三好元長公が將軍職に擁立しようとなされたお方でござる。即ち、義維公の後を継がれた義栄公こそ、我らが將軍と仰ぐに相応しきお方であると思われませぬか？」

篠原長房は、自らの管轄下に寂しき余生を過ごしている義維のことを思い出しながら、そんな風に熱弁していた。

かつては堺公方と称された足利義維も、今の世の中では、全くも

つて過去の人であった。その息子である義栄のことも、よほど政治に興味がなければ、存在すら知らぬ人も多かった。

けれど、かつて三好元長が擁立した義維の嫡子であるという経歴や、当代足利義輝の従兄弟にして、先代將軍義晴の甥に相当する、筋目正しい血脈などを勘案すれば、次期將軍候補として、これほど最適な存在もいなかった。

「ならば、足利義輝公がこれ以上策動するようなら、これを廃し、義栄公をもって次期將軍とする。それでようございますな」

議長役として議事を取り仕切る久秀の言葉に、誰も異議を唱えなかった。

【衰運編】第116章 長慶復活！

永禄七年（一五六四年）は六月末。

従四位下弾正少弼松永久秀の権勢は絶頂に達しようとしていた。

その身は三好家家老にして執政。室町幕府御相伴衆。それだけでなく、大和多聞山城城主として、大和一円を支配する国主大名となつている。弟の内藤備前守宗勝も、兄の栄達に伴つて正五位上備前守に昇り、幕府の御供衆として幕政にも重きを成す立場にあつた。丹波八木城城主として、丹波一円を領有しており、若狭にも絶大な影響力を誇っている。嫡男の久通ですら、従五位下右兵衛佐の位階官職を賜っているほどだ。

ほとんど名もなき下級身分に生まれた松永兄弟は、今まさにわが世の春を迎えようとしていた。彼らが三好家に仕えるようになってから、既に二十五年以上の歳月が流れているわけだが、たった二十五年の間に、随分と出世を遂げたものであつた。

けれど…。

如何に松永弾正久秀が三好政権内での地位を高め、権力を強めようとも、全てが全て、彼の思い通りになるというわけでもないのだつた。確かに彼は政権の執政として、事実上政権運営の全権を担う存在となつていたが、だからといって反松永派を無視した専制政治を行えるものでもない。実際のところ、三好政権内における反松永勢力は依然として強大な力を保っている。三好長逸、三好政康、三好政勝、岩成友通…。並べていくだけで、ざつとこんな顔ぶれが、反松永の中核面子に名を連ねていた。一人当たりの実力は小さいものの、数は多いし、何より政治的に大きな影響力を持つ一門衆が徒党を組んでいる以上、総合的な勢力では、松永派に匹敵すると言つてもいい。それゆえに、さすがの弾正も、彼らを完全に無視して政治を行うことは不可能だつた。何しろ、下手に独裁政治を強行して、反松永派の反感を買えば、それこそ三好政権は松永派、反松永派で

真つ二つに割れることになる。そうなれば足利義輝もここぞとばかりに攻撃を仕掛けてくるだろう。政権の崩壊を何よりも怖れている弾正久秀としては、義輝の介入を招くことだけは避けねばならなかった。

というわけで、弾正は反松永派にも配慮した政治を行わねばならず、それゆえに思い通りにならないことが多いのだった。

松永弾正の計算が狂い始めたのは七月に入つて間もない頃のことだった。

それというのも、七月一日。

この日、弾正久秀が主導する形で進められていた足利義輝肅清計画が、突然破綻してしまつたのである。別に三好日向守長逸ら反松永派が反対派に鞍替えしたわけでもなく、彼を含めた三好政権の最高首脳部は、既に計画の実行を動かし難い規定路線と考えた上で行動し始めていたのだ。それなのに、計画は御破算とせざるを得なくなつた。計画の実行をもつて自らの権力を満天下に示し、計画の実現をもつて、三好政権の盛大さを見せ付けるつもりでいた弾正としては、これほど悔しい話もなかつたに違いない。

全ては、この日唐突に下された命令のおかげだった。下したのは、飯盛山城の御隠居、三好修理大夫長慶である。

家督を譲り、飯盛山城の奥深くに閉じこもっていたはずの長慶であつたが、そこは腐つても鯛である。三好家を隆昌に導いた英雄としての名声は依然として圧倒的なものがあり、家中には彼を信奉する者も多い。義継に家督を譲つたといつても、宗家の支配権が長慶の手の中にあるというのは、三好家家中に留まらず、天下全土の常識にまでなつていた。

そんな彼の意向であつた。如何な弾正久秀といえども、簡単に抗えるものではない。

「ならんッ！」

弾正から報告を受けたときの長慶は、一瞬、昔の彼に戻ったかのような気迫に満ちていた。弾正は呆気にとられ、彼と共に長慶の御前にやってきた日向守長逸なども、ただ呆然とその場に固まっていた。

「されど、このまま足利公方を見逃せば、ますます彼は凶に乗り、御家に仇名すことになります」

弾正も引かなかったが、長慶も一步も引かなかった。ひとたびこつたと決めると、梃子でも動かなかった昔の彼が復活したかのような輝きが戻った。三好家を天下第一の大大名へと押し上げた大英雄に相応しい鋭き眼光は、弾正久秀を圧倒するに十分すぎる威力を持っていた。

「愚か者ッ！ 左様なことをすれば、わが三好家を滅ぼさんと、虎視眈々牙を磨いている英雄たちに、大義名分を与えることになるだけであろう。三好の家名にも大きな傷がつく。義輝殿を追い落とすぐらいは、まあ考えてもよからうが、殺したりするのは、断じてやめよ」

長慶は、弾正の考えなど誰よりも一番知っているようだった。何しろ、弾正はまだたったの一言も「義輝を殺す」などとは言っていないのだ。それなのに長慶ははつきりとした口調で断言してきた。確かに、弾正としては、この際、鬱陶しい足利義輝を血祭りにあげて三好政権の絶対性を満天下に示すつもりであったから、長慶の感は間違いではない。いっそ、

「殺すなど考えたことはありません」

と、白々しく抗弁してみてもよかったのであるが、全てを見抜いているらしい主君に鋭く睨みつけられると、ただ苦笑いして、「はッ！」と頷くより他に仕方がなかった。

「よいか。余の目の黒いうちに、左様なことをしたら、そなたの命もないものと思えよ」

長慶はぎろりと睨みつけ、きつぱりと言い切ると、平伏す弾正久秀を放つて奥のほうへと引っ込んでしまった。そんな御隠居の堂々たる後姿を眺めつつ、密かに舌打ちする弾正であった。

長慶が猛反対したので、話は取りやめになってしまった。

何と言つても相手は三好長慶である。隠居しようがしまいが、彼の影響力は絶大だった。無論、家督である義継の意向だと言って、隠居に過ぎない長慶の意など無視して強引に押し通すという手もあった。だが、そんなことをすれば、家中に渦巻く反松永感情が一拳に噴出して、將軍家討伐どころか、弾正が家中で孤立することにもなりかねなかった。それに、日ごろ養父への尊敬の念を隠そうともしない義継が、養父長慶の意に背いて行動するとも思えなかった。

「ま、仕方あるまい。御隠居にも花を持たせてやるさ。…無論、いずれば血祭りに挙げてやるがな」

家臣たちを前にして、久秀はそんな風に強がっていたが、無念は無念に違いないのである。その辺りの感情を察してか、家臣たちは、「そつですな」

と、頷くのみだった。

その一件以来、長慶はしきりに政務に口を挟むようになった。というよりも、彼が政務の全てを取り仕切るようになったといったほうが良いかもしれなかった。

こうなると、幼君義継よりは、皆、長慶の意に従う。なんだかんだといつても、三好家の家臣たちは、長慶が好きなのだ。彼が復活すれば、彼に家督があるうがなかるうが、彼のほうに伺候するようにするのは当然のことであった。

「不思議な人だ」

そんな主君の後姿を疎ましげに眺めながら、弾正は心の中に思う

のだ。日に日に精力を増していく長慶を、苦々しげに見つめながら、なぜ彼がここまで復活してきたのか、考えずにはいられなかった。

「やはり、あれが御屋形様なのでしょう。腐つても鯛」

などと呟く松永久通に、弾正は苦りきったような顔をして、小さく頷いた。

「阿波の小土豪から、まがりなりにも天下を掴まれたお方だ。油断すると、痛い目を見ることにもなりかねんな」

「左様ですね」

久通は軽く頭を下げながら、かつて見た、偉大な英雄だと言われていた頃の三好長慶の顔を思い返して見た。弾正の嫡子たる久通にとって、長慶は幼い頃からいろいろと目をかけてくれた恩人であり、忠節を尽くすべき主君であることに変わりはない。彼としては、全てが再び元の鞘に戻って、長慶と父の両方に忠節を尽くせるような環境になつてくれれば、それが一番だと思つていたのであった。

まあ、そんな彼も、父同様、天下に野心を抱いたこともないわけではなかった。何しろ、その当時の長慶は政治などに一切の興味も示さず、日々飯盛山城の奥深くで文弱にのめり込んで、空しき余生を過ごしている、ただの人に過ぎなかった。かつての英雄も、はつきり言つて、完全な廃人に成り果てていた。主君がそんな状態ならば、久通でなくとも、夢ぐらいは見るだろう。この主君に取つて代わつて、自分が彼の位置に立つ事も出来るのではないか、と……。

けれど、今は違う。長慶は復活した。ならば、昔のように主君に忠節を尽くすべきなのだろうと、久通は漠然と考えていたのであった。

「ふう。よもや、御屋形様が回復なされるとはなあ」

弾正は先ほどからずっと、そんなことばかりぼやいていた。何となく父らしくない弱気ぶりに、久通はクスクスと笑った。

実際のところ、少なくとも弾正を初めとするあらゆる重臣たちは、長慶の病はもはや治るまいと思ひ込み、半ば諦めていたのである。今風に言えばうつ病のようなものだったろう。今ですらうつ病を完

治させることは難しいのだ。況や、この時代であれば、病であるとする受け取られず、当然治す方法など誰も知らなかった。とにかく、三好義興や安宅冬康、三好笑岩らが権力を代行して政権を担ってきたのも、弾正久秀が半ば強引に義継へ家督を譲位させたのも、全ては長慶が回復不能の廃人状態にあると思っていたからこそであった。

三好義興や安宅冬康が死んだとき、天下の人々があれだけ困惑したのは、長慶が腑抜け同然の状態にあつたからだ。もしも長慶が往時の聡明さを保ち、天下に君臨していたなら、誰もさして不安には思わなかつただろう。何しろ、三好長慶はまだ四十二歳なのだ。當時からすれば、それなりの年齢ではあるが、それでもまだまだ若い。長慶があと十年頑張れば、その間に、後継者たる義継も成年となり、義興のような立派な跡目へと成長したかもしれない。十年という年月があれば、依然として未熟な政権構造も、ある程度磐石なものとなりうるのだ。

だが、生憎と長慶は廃人同然の状態。十三歳になつたばかりの少年義継の肩に背負わせられるほど、三好政権は軽くない。そして、内輪で権力闘争をしていられるほどに磐石でもなければ、余裕もない。

だからこそ人々は不安だつた。兎にも角にも、近畿地方が安定を保ちえているのは、強大な三好政権が覇者として君臨しているからに他ならない。その三好氏が崩壊するようなことになれば、畿内は再び騒乱の坩堝と化すだろう。細川家が分裂し、飽くことなき内乱を繰り返してきた、あの暗黒の時代が再来するかもしれないのだ。

それなのに……。

そんな不安や恐怖などを完全に吹き飛ばすように、三好長慶は、土壇場で息を吹き返した。ここに至って、地獄の淵から蘇つたのである。ならば三好政権はまだまだ安泰。そんな雰囲気がこの数日のうちに俄かに高まつてきた。けれど、それは弾正久秀にとっては、三好政権の最高権力者の座を失うことと同義であり、決して喜べるものではなかつた。また下手に長慶が覚醒し、全権を回復すれば、



強大な実力を握りすぎた弾正久秀の存在を警戒するようになるかもしれない。

それ即ち、身の破滅。

「…困ったなあ。御屋形様の力量を少々見誤ったかな？」

などと呟きながら、焦りを隠せぬようにいらだつ弾正久秀を、右兵衛佐久通よじえのすけはジツと見つめていた。

このところ、三好長慶は、昔を髣髴とさせるような聡明さで、忙しなく働いていた。これまでの腑抜けぶりが嘘のような精力的な働きぶりには、日頃彼の側に侍っている側近たちから、重臣たちに至るまで、誰もが驚きを隠せなかった。

ともかく、長慶は大いに働いている。朝早くに目を覚ますと、一人表御殿に赴き、山の如く積み上げられた書類と格闘する。次から次に、流れるように決済していく姿は、まさに往時の彼そのものだった。

その上、度々、

「これは違う」

「あれはこうしろ」

などなど、逐一指示を出しては、家臣たちの反応が鈍いと、

「たわけッ！」

昔顔負けの迫力で怒るのだった。

そうして忙しない朝、昼、夕を過ごす、長慶はようやく一息をついた。外は既に暗く、月明かりが、そんな彼を慰めるように煌々と輝いていた。

恒例だった女漁りも、このところ控えるようにしている。たった一人、居室に閉じこもりながら、小さな庭先で青白い月光を見上げていると、いろいろと昔の記憶が脳裏に蘇ってくるのだった。父元長と過ごした頃のことや、弟たちと遊んだ日々のこと。父が死に、自ら荒れ狂う戦国の世に飛び出すと誓った日のこと。

けれど、一番は雅の方のことであつた。彼女と過ごした日々を思い出しては、絶えることなき涙を流す。彼女の言葉を思い返しながら、歌でも歌うかのように口ずさんでいるときが、最も心が落ち着くのである。

「この身は一代、されど名は末代……。などと申しますように、あなた様が活躍する分だけ、名前だけはよりいっそう後世まで残ります」  
あるとき雅の方は、確かにそう言った。

弟たちが、息子が、相次いで死んで絶望的になつていたとき、彼女が言つた言葉だつた。ここ最近の長慶は、ずっとこの言葉を胸に唱えながら、辛いこと、大変なこと、面倒なことを乗り越えてきた。「名を穢してしまつてはいけません。せつかく天下人として、御屋形様の名は良い風に末代まで残るのです。穢してしまつては勿体ないでしょう。それに、もしも御屋形様がご自分の名に泥を塗るようなことをすれば、御屋形様のために戦い、そして死んでいった民部様、実休様、義興様……。その他大勢の御家来衆の名にも泥を塗ることになります」

雅の方の言葉は、今も深く長慶の心の中に刻み込まれていた。実際、失つてしまつたからか、今の彼にとつて、雅の方は絶対的な存在となりつつあつた。長慶が義輝肅清を止めさせたのも、自らの名をこれ以上傷つけたくなかつたからであるし、人が変わったように精力的に働くようになったのも、このまま腑抜けていると、彼女が言つたように、自分や弟たち、あるいは息子義興がこれまで必死になつて戦つてきた成果が、全て無意味となつてしまうような気がしたからだつた。

彼らの活躍とその役割を無駄としないためにも、生き残つた自分が頑張らねばならない。

そう思つたとき、彼はもう女と交わっている気にはなれなかつた。寝込んでいる暇もないと思つた。やらねばならぬことは山の如くあ

るのだ。三好家の栄華を磐石のものとして、義継に譲らねばならぬ。彼は、十河一存の息子だ。彼から預かった大切な子供だ。彼のために……いや、彼だけでなく、阿波にいる三好長治、讃岐にいる十河存保、淡路にいる安宅信康、安宅清康らの甥たちのためにも、自分が頑張つて三好家を立て直さねばならない。特に、自分が腑抜けていたために殺してしまった安宅冬康の遺児、信康や清康のことを思うと、長慶は頑張らねばならぬと奮起するのだった。

長慶が親政するようになると、久秀の存在感は一挙に低下した。そして当主である義継には何の権限もなくなった。全ては今までどおり、飯盛山の長慶が決済し、実行に移されるようになっていく。

長慶の独裁なら、もとより誰も反発したりはしない。元々、それが当たり前を通ってきた三好政権なのだ。三好日向守長逸も、下野守政康も、三好政勝、岩成友通、篠原長房、今村慶満、香西元成……。その他諸々の重臣たちが、昔の鞘に戻つて、長慶の下、三好政権の基盤強化に力を尽くしていた。

かくして三好家は長慶の下に完全に纏まり、一見すると、昔の如き磐石さを取り戻したように見えた。無論、内を固めなおすだけでなく、外に対する積極的な行動も怠つてはいなかった。例えば、妙な策を弄して、三好政権の分裂を図つた足利義輝を武力で圧倒し、懲罰した事件などが典型といえようか。即ち、七月三日、三好長慶は総勢五千の兵を率いて上洛し、室町御所を十重二十重に包囲した。その上で、將軍を御所から引きずり出して、金輪際このような行為をしないという誓約書を出させ、かつ口頭にて謝罪させたのであった。

七月四日。

京にあった三好長慶は、たまりにたまつた仕事を片付けるべく、

急ぎ足で飯盛山に戻っていた。休む間一つないほど忙しい彼である。青ざめて、露骨なほど疲れきったような顔をしていたので、

「お体は大丈夫にございますか？」

伊沢大和守あたりがそう諫言してきた。けれど、

「構わん」

そう言っつて、全く聞く耳を持たない長慶なのであった。

かくして、彼は城に戻った。当たり前のように流れ行く時間と共に、朝、昼、夕と空の表情も目まぐるしく変わっていく。

別段、普段と変わらぬ日常が淡々と広がっていて、誰もが、このまま普通に明日を迎えるものだと思っていた。

けれど…。

事態が急転したのは、その日の夜のことだった。

永禄七年（一五六四年）七月四日。夜。

従四位下修理大夫たる三好長慶は、いつもと変わらぬ満月をぼんやりと眺めていた。

昨日、京に赴いて將軍を恫喝した男は、今日の昼頃には、既に居城に戻って政務に励んでいた。休んでいる暇などほとんどない。このところ働きづめの長慶は、ひどく疲れきったような仕草で、畳の上にごろりと寝転がった。ハアと深いため息を何度も吐き、かつ青白く輝く彼の顔は、見ていてなんとも痛々しいものがあつた。

「左様な御無理を重ねられては、御体に障りますぞ」

伊沢大和守はそんな風に言いながら、彼の下にやってきた。

「ははは。気にするな。この程度で倒れるほど、余は柔ではないぞ。余はな。天下にその名を轟かす三好修理大夫長慶であるぞ」

殊更強がって見せる長慶の白々しい態度を、伊沢大和は、見透かしたような冷え切った目で睨み付けた。

「御屋形様には是非とも御理解いただきたいが、御屋形様の御命は、もはや御屋形様お一人のものではないのです。万一、御屋形様の御身にもしものことがあれば、御家はどうなりましょう。幼君義継様御一人で支えきれぬほど、御家は小さくないのですぞ。結局、松永弾正辺りが実権を奪って、御家の衰亡を招くことにもなりかねませぬ」

大和の弾正嫌いも筋金入りである。特に、ここ最近の彼は、口を開けば弾正を否定し、弾正のやりようを非難していた。何しろ、長い間、主君長慶の側に仕えて、忠節を尽くしてきた伊沢大和守にとって、半ば公然と主家篡奪を企む弾正久秀は、憎むべき敵以外の何者でもなかったのだ。もしも長慶が許可してくれるなら、己が身を刺客に賣してでも、弾正の暗殺を決行するぐらいのつもりでいたのだ。

「ま、弾正という男はいろいろと曲者だが、けれど奴も稀代の能力者であることに変わりはあるまい。三好家がさらに発展するには、弾正の力が必要なのだ。だからな、そなたも弾正をそう毛嫌いするな。ただでさえ、弾正を支持する者と支持しない者で、家中は真つ二つに割れている。余としては、昔のように一枚岩の三好家を取り戻したいのだ。余の意を一番承知してくれているはずの側近が、左様なことを滅多に口走ってもらっては困るぞ」

「…左様ではございますが」

長慶に窘められると、それ以上は何もいえなくなる伊沢大和守なのであった。

無論、如何に弾正嫌いな大和守といえども、今の三好家において弾正久秀が果たしている役割の大きさを否定することはできない。何と言つても統治が難しいとされている大和一国をまがりなりにも一つに纏め上げて、強大な三好政権の一翼を担っているほどの男だ。もしも弾正を除いてしまえば、興福寺、筒井氏はじめ有力な勢力が犇く大和国は再び戦乱状態に陥ってしまうだろう。その意味するところが分からぬほどに、大和守も愚かではない。

「ともかく、今は三好家が一つに纏まることが肝要だ。既に実休も、民部（十河一存）も、摂津（安宅冬康）も、筑前（三好義興）もない。余の下に…、いや、孫六郎（三好義継）の下に家中が一致団結して初めて、三好家は昔の如き力を天下に示すことができるのだ」

拳を振り上げ、目を輝かせながら叫ぶ長慶の姿は、完全に昔の彼のものだった。ここ最近、ほとんど廃人と成り果てて、飯盛山城奥御殿内で風流三昧、女子漁りに明け暮れていた男とは思えぬものがある。長年長慶に仕え続けてきた伊沢大和守としては、これ以上に嬉しい話もない。後は松永弾正に対する盲目的な信任を改めてくれさえすれば、これに勝ることはない、などと思いつながら、小さく溜息を吐いた。

長慶はおもむろにすつくと立ち上がると、冷たき夜風の打ち続く庭先へと降り立った。そこには、今は亡き義興が生前に植えた木々

が、ずつしりと根を生やして、堂々と聳え立っていた。

「これは、余が飯盛山に入城した折に、筑前がわざわざ植えてくれたものだ。…雅とともに、これを眺めながら、芥川山の筑前の雄姿を思い浮かべるのが、何より楽しかったものだが…。そうか。余が飯盛山に入ったのが、永禄三年（一五六〇年）のことだったから、あれから既に四年が過ぎたのか」

その間に、十河一存、三好実休、三好義興、安宅冬康と、一年おきに有力な一門が次々と命を失ったのだ。そう思うと、長慶はがっくりと肩を落として、悲しげに歪んだ顔を洗い落とすかのように、大粒の涙を、ぼろぼろと滝の如く流した。

考えてみると、この四年は、三好家にとって悪夢のような年月であった。五十年代の隆昌から一転して、急激な衰退の坂を転がり落ちてきた。無論、その間にも教興寺の大勝など、喜ぶべき吉事があったわけでもない。けれど、そんなものは形だけだ。見かけだけ泡の如く膨れ上がってきたが、所詮泡は泡に過ぎない。肝心の中身がすっぽりと抜け落ちていた。

三好長慶が倒れたのは、それからまもなくのことであった。元々、彼は体が強いほうではない。幼い頃は、度々風邪をこじらせて、父元長や、教育係のお福を困らせることも少なくなかった。その上、ここ数年のうちに相次いで家族を失うなど、精神的に非常に脆い状態が続いていた。そこに追い討ちをかけるような、最近の激務と重ね合わせてみれば、長慶が倒れたことも、別段不思議なことではなかった。実際、侍医などは、いつ倒れたとしても、不思議ではないと散々忠告していたほどだったのである。

この日の長慶は、たった一人静かに、いつものように書物を読んでいた。それが、女漁りをやめた彼の日課になっていたのだ。暇つ

ぶしと勉学を兼ねた読書は、思いのほか楽しく、ふとしたことから読み始めた『平家物語』などは、既に木曾義仲の最期にまで指しかろうとしていた。

側近たちも、その程度のことは承知している。けれど、こうも長い間、ずっと声一つしないのはおかしい。そう思っ

「御屋形様？」

と、何度呼びかけてみた。しかし、全く声はない。いつもなら、

「五月蠅い！」

などと、小言の一つや二つ飛んでくるものだったが、今日に限っては、不気味なほどに静かだった。

「どうかしたんだろうか？」

小姓たちはどれも不思議そうに首を傾げつつ、万一のことがあるてはいけないと、とりあえず叱られるのを覚悟の上で、主君の様子を確認すべく、ゆっくりと部屋へと入っていったのだった。

すると…。

「お、御屋形様ッ！」

彼らは異変を察し、慌てて主君の下に駆け寄った。その場に力なく倒れこんでいた長慶は、辛そうに荒々しい息を吐いている。

「医者だッ！ 医者を呼べ！ ま、曲直瀬道三殿を、早く呼ぶのだッ！」

小姓たちはしきりに怒鳴り、たちまち城内は騒がしくなった。

長慶の容態が急変したとの情報は、たちまちのうちに飯盛山城内を駆け巡った。何しろ、三好政権の総帥にして、飯盛山城の主たる男が倒れたのだ。皆が驚き、慌て、騒ぎ出したのは、至極当然のことであった。

けれども…。

三好長慶が倒れた！

などと、諸国に伝わっては一大事である。三好政権に取って代わ



ろつと野心を燃やしている大名衆は依然として数多いのだ。長慶が倒れたことを知れば、彼らは時は今とばかりに兵を催して攻め込んでくるに違いない。それを避けるためにも、長慶の病状が外部に知れることは断じて避けねばならなかった。

「城を封鎖しろッ！ 今後、わしの許可なき者を城より外に出してはいかん。無論、中に入れてもならんぞ！」

慌てず騒がず、冷静に松永弾正久秀が出した指図は、実的確で見事なものだった。彼の号令の下、飯盛山城内は戦時下にも似た厳重警戒態勢が敷かれることになり、城内を騒がせた長慶の容態なるものが、城下の一般大衆に伝わることはなかった。

「とりあえず、ここに名を記した者に、至急早馬を飛ばし、この書状を届けよ」

弾正は主だった重臣たちの名が記された複数の書状を、信の置ける飛脚に手渡すと、大至急それを届けるように命じたのだった。

長慶の容態は深刻だった。それは名医と名高き道三ですら、手がつけられないほどであった。

「残念です」

そう言つて、ぺこりと頭を下げる名医に、居並ぶ家臣たちは絶句した。

つい先ほどまで…。先ほどまで、長慶は元気だったではないか。それが何でいきなりこうなるのか。医学の知識など、まるで知らぬ家来衆は、「なんとかしろ」と、激しい口調で、罵るように道三に迫ったが、駄目なものは駄目なのである。道三としては、

「申し訳ありません」

というより他に仕方がなかった。

一方、死期を察したらしい長慶は、とりあえず世子の義継を枕元に呼び寄せると、

「すまん」

とだけ、静かに言った。

「義父上、義父上！ お元氣になつてくださいまし」

と、義継は必死になつて叫んでいるが、長慶は、悲しそうな顔をして、にっこりと笑うだけであつた。

しばらくして、抜け目なく仕事を済ませてきた松永久秀が、ゆつくりと寝込む主君の下にやつてきた。

「弾正、近う寄れ」

長慶は、か細き声で言った。そして、「弾正以外は下がれ」と、命じること忘れなかつた。

弾正久秀は首を傾げながらも、命じられるままに彼の口元まで膝を進め、

「御屋形様、御元氣をお出してください」

と、白々しい言葉を堂々と吐いた。けれど、長慶は気にする風もなく、ただ辛そうに顔を歪めながらも、

「余が、お主に目をかけてきたのは、お主に天下を狙えるほどの器量があると思つたからだ。そのような男が、余の臣下にいれば、余にも天下を支配できる器量が備わると思つていた。少なくとも、お主を統御できているうちは、余には天下人の資格があると思つていた」

と、精一杯の力を込めて言った。

「だが、生憎、余にはもはやそなたを制御しうる力はない。即ち、天下人としての資格を失つたのだ。…この後、お主がどういう行動に出るか、余には分からん。だが、お主には器量はあるが、冷静さが足りない。その辺りの欠点を何とかせぬ限り、お主に天下は無理だ」

「…」

「それと、諦めも肝心だぞ。無理と分かれば、今ある地位に留まつて、機を見るのも一つの手である」

「ま、独力で天下を掴むことが無理だと判断したら、せいぜいわが子義継を助けて、三好家のために尽力してくれ。さすればお主は、未来永劫、我が家の宰相として、大きな力を握れるであろうよ。」  
そこまで言つて、長慶はにっこりと微笑んだ。

松永久秀は、そんな主君の顔をまじまじと見つめている。今にも死にそうな顔をして、なお自分の将来を気遣う彼を、哀れみに満ちた目で見ていた。余計なお世話だと思いつつ、しかし自分の能力を誰より評価し、取り立ててくれた人の言葉である。全く無視するわけにもいかない。弾正はいろいろと考えながら、複雑そうな顔をして黙り込んでしまった。

長慶は静かに目を閉じた。

振り返つてみると、この四十二年の生涯は、いろいろなことが起きた。波乱万丈と叫びたい。父元長が横死したことで落ち目となつた三好家を復活させ、ばかりでなく畿内と四国の大半を支配する天下人にのし上がった。

歴史は自分を何と評価するだろう。主家たる細川家を追い落とし、て実力を握つた謀叛人と評するだろうか。それは余り嬉しくない、などと思ひながら、再び目を開ける。

そこには既に、弾正久秀のほかに、三好義継以下主だつた重臣たちの顔が揃つていた。長慶は満足そうに微笑むと、フウと小さく息を吸い込んだ。

「義継、そして皆の者。よく聞け」

身体の奥底から振り絞るような声を出しながら、彼は家臣たちの顔をぐるりと見回した。

「余が死んだ後、余の死は決して口外してはならぬ。少なくとも、二年から三年は徹底的に、余の死を隠し通すのだ。さもなければ、足利公方が黙つてはいないだろう。三好の栄華を狙う輩は天下には数

多といる。余が死ねば、彼らは我らに取って代わるべく暗躍し、もしかすると攻め込んでくるかもしれん。そうなれば、せつかく纏まった畿内は、再び戦乱の坩堝となる。それだけは、断じて避けねばならぬ。余と、弟たち、わが息子…、そして大勢の家臣たちの努力を決して無にするな」

必死になつて畿内を制し、天下を掴み取った男の最期の命令である。義継や久秀をはじめとする重臣たちはそれぞれに大袈裟といえるほど大きく頷いていた。

「義継を支え、以後も変わることなき磐石を満天下に示してこそ、畿内は安定し、三好家はさらに発展できるのだ。天下にその名を轟かした三好の武名を、決して辱めるな」

側には、三好義継のほか、松永久秀、三好長逸、三好政康、三好笑岩、三好康俊、三好政勝、岩成友通、篠原長房らの姿があった。

基本的には、三好政権の中枢中核を担う重臣中の重臣である。

「甚介がおらん」

少しばかり不満そうに長慶が顔を背けると、

「備前は、後もう少しで八木城より駆けつけて参りましょう」

兄である弾正久秀が慌てて弁明した。

「…まあ、構わぬ。とりあえず、弾正、日向、下野、主税助。以上四名を、義継の後見役に任命する。義継が一人で政治が取れるようになるまで、四人合議の上で政務を行うように」

長慶はそう言って、四名の顔を見回した。

松永弾正少弼久秀、三好日向守長逸、三好下野守政康、岩成主税助友通の四人は、

「承知いたしました」

と、口々に頷き、大仰に平伏した。

「政勝と笑岩の両名には、四名の補佐と監督を命じる。四人とともに義継を支えよ」

「御意！」

三好笑岩、三好因幡守政勝の両人もまた、四宿老に続いて大きく

頷いた。

「篠原長房。その方は引き続き、四国の甥たちを支えよ。ただし、独断専行は認めぬ。主君である長治を蔑ろにすることも許さん。長治も存保も、信康も清康も、皆、我が弟、三好実休、安宅冬康の子であることを忘れるな！そして逐一、後見四人衆の指示を仰ぎ、その上で行動すべきこと。よいな」

「承知しました」

長房もまた頭を下げる。長慶はにっこりと微笑んだ。

「それと最後に義継に申し聞かせることだが、そなたの跡は、必ず千熊丸に引き継がせよ。わが息子義興の子に継がせるのだ。それと、千熊丸は、これより義資と名乗らせ、次代の当主に相応しき帝王学を学ばせるのだ」

女官に抱かれ、すやすやと眠っている千熊丸のほうに目をやりながら、長慶ははっきりとした口調で言った。義継はというと、

「承知いたしました」

と、今にも泣きそうな顔をして言うのだった。

言うべきことを言い終わると、長慶は再び目を閉じた。

次第に重くなる瞼の感覚に、改めて死を実感した。もう二度と目を開けることはないだろう。薄れ行く感覚の中、長慶はそう思った。父が死に、既に三十二年。

波乱万丈を極めたわが一生も、ついに終わろうとしている。そう思うと、何だか不思議な気がした。結局、こうやって畳の上で死なんとしている自分は、案外幸せ者なのかもしれない。散々いろいろな人間を殺し続けてきたのに、これでよいのだろうかとも思った。

冬康は、あるとき言った。

「虫けらとて、仲間内で殺しあつたりしない。なのに、なぜ兄上は無用に人を殺すのか」

と…。

全くだと、長慶は思った。

あの世には、父元長も、顔も知らない祖父長秀や曾祖父之長がいる。先立った弟たち…、即ち三好実休、安宅冬康、十河一存や、嫡男の義興もいるだろう。彼らに会えることが、何より嬉しい。

永禄七年（一五六四年）七月四日。

午後十時ごろ。

三好長慶は、かくして息を引き取った。阿波より立ち、細川晴元を追い落として天下を牛耳った一代の英雄は、天下人と称えられながらも、天下人になりきれず、ついに黄泉の国へ旅立つことになった。

享年四十二。

従四位下修理大夫、幕府管領代、御相伴衆など、様々な栄位栄職を占めて権勢を極めた男の最期は、結果としてみれば、実にあつけないものであった。

三好長慶という人は、戦国時代中期の、即ち織田信長が本格的に登場する前の世界において、天下人の座に大手をかけていた、唯一無二の大名であった。実際、日本の政治的・文化的中心である京都を支配下に置いて、室町幕府とは異なる新政権の樹立を模索したのは、長い戦国時代の中でも、三好長慶と織田信長の二人を置いて他にはない。もう少し彼が長生きをしていれば、室町政権とも、織豊政権とも、徳川政権とも異なる、堂々たる三好政権を築き上げていたかもしれない。あるいは優秀だった彼の弟たちが、たった一人でも生き延びていれば、歴史の流れも大きく変わっていたであろう。さしもの栄華を極めた三好長慶だったが、晩年は哀れだった。

長慶は死に、彼を中心にして作り上げられていた一時代は、こうして幕を閉じた。

三好長慶は死んだ。主役を失った戦国乱世は、以後いよいよ迷走を深めていくことになる。

【衰運編】第117章 巨星墮つ（後書き）

というわけで、ついに三好長慶までもが死んでしまいました。三好長慶伝と銘打った以上、長慶の死をもって最終話としてもよいのですが…。

ですが、まだまだ続きます。次からは長慶に代わり、幼君三好義継を主役として、長慶や実休ら三好四兄弟を失った三好家のその後と、松永久秀の暗躍、織田信長の台頭などを描きます（予定）。



延々と広がる大地の上を、勢いよく駆け抜けるそよ風をその肌を感じながら、おもむろに空を見上げてみた。青々と広がる空の雄大さに比べ、余りにちつぽけな自分という存在が実に哀れなものに思えてくる。結局、人間などというものは、どこまでいっても、大自  
然からしてみれば、この程度の存在に過ぎないのだ。

父は既にこの世の人ではなくなった。あれだけ天下の人々に怖れられ、畏怖された大英雄も、死んでしまえば、普通の人と同じく、冷たき骸となるだけだった。

「俺も、いずれ死ぬのか」

僅か十三歳だというのに、このところ、彼は死というものを意識することが多くなった。だからといって、死にたいなど思っていないわけではない。死にたくない。どうせなら、ずっと生きていたいけれど、二人の父、二人の叔父、従兄弟のように、いずれは死ぬの  
だろう。そう思うと、人生というものがなんとも空しく、他愛のないものに思えてくるのだった。

とにかく、少年は草むらの上にごろりと寝転がって、ゆっくりと目を閉じた。

ヒユウ。ヒユウ。

まるで泣き声のような風の音。少し物悲しげな音色に耳を傾けつつ、少年はぼんやりと物思いに耽っていた。

三好家の家督継承者。従四位下左京大夫、室町幕府管領代兼御相伴衆……。

それが少年三好孫六郎義継を取り巻く全てだった。  
けれど実感はない。

まだ十三歳だ。小難しい政治などより、思い切り遊びたい年頃だ

った。けれど、そんなことが許されるような立場ではなかった。何しろ彼は、今や三好宗家の御大将なのだ。即ち、天下人。その小さき肩の上には、阿波・讃岐・淡路・摂津・河内・和泉・紀伊・山城・大和・丹波の十ヶ国と伊予・近江・播磨・丹後・若狭の一部に至る広大な領土と、そこに暮らす何百万という民人、そして十万人以上に及ぶ家臣の行く末が乗っかっている。全ては養父が作り上げて遺してくれたかけがえのない遺産であるが、弱冠十三歳の少年にとっては、なんとも気の重い話であった。

義継は従者を伴って、久方ぶりの休息を思う存分堪能していた。既に九月。まだまだ暑いが、真夏の折に比べれば、幾分涼しくなった気がした。

「若殿、よろしいのですか。かようなところにお一人で……」

従者は不安そうな面持ちで、絶えず辺りをきよきよと見回していた。もし、万が一義継の御身に何かあれば、当然、従者たちの責任問題ともなりかねない。

「構わん」

義継はそう言って不安がる郎党を制すると、相変わらず、ぼんやりと空など見上げていた。

城に戻ると、重臣たちの小言もそこそこに、彼は湯殿に向かった。美しい女子たちが、世話役として控えている。義継も既に十三だ。女子に対する興味ぐらいはあった。

「あれ、いつもの顔とは違うようだが……」

全裸になって、湯殿に入った義継は、そこに控えていた女子を見て驚いた。見れば、十四、五とも思われる少女だった。義継が十三だから、似合いといえれば似合いである。熟しきっていない、多分に幼さを遺したちっばけな乳房が、なんともいえぬ可愛らしさを引き立てていた。

義継の顔がぼっと赤くなる。下のほうが、何やら熱くなってきた。

「お、大御台様より、お世話するよう申し付かって参りました」

少女はそう言って、ぎこちない仕草で、恭しく頭を下げた。

「大御台様が？」

「はい」

少女は今にも泣き出しそうな顔をしていた。義継は困ったように頭を掻くと、

「と、とりあえず頼む。今日はさすがに疲れた。体も結構汚くなっているだろう」

と、言って、ゆっくりと彼女の下に歩いていった。

「大御台様と申したが、その方は、大御台様付の女中か？」

湯船に浸かり、疲れを落とす。だだっ広い浴場には、義継と少女のほかには、誰の姿もなかった。

「は、はい」

少女は恐る恐る頷く。相手が三好政権二代目継承者だと思つと、自然と体が震えるのだろう。彼女は当然、長慶が死んだことを知らないが、それでも義継が家督を相続したことは知っている。彼に実権があるうとなかろうと、彼女にとって、三好宗家の家督を継承した三好義継という人は、雲の上に存在する神仏のような尊きお方であつた。けれど、神仏どころか、生まれが少々良いだけで、実際はただの少年に過ぎない義継にしてみると、そんな初々しい彼女の様が、何とも言えずいじらしく、愛おしく思えたりした。

「大御台様、か……。このところ、事あることにいろいろと口を挟んでくるが、所詮は遊佐の娘であろう。兄の遊佐信教が、教興寺の御合戦の折に父上に楯突いたこと、俺は今も忘れてはおらんぞ」

義継は大御台こと、故長慶の正室であつた遊佐御前（長慶死後、新寿院と名乗る）のことは余り好きではないようだった。吐き捨てるような口調の端々に、大御台に対する激しい反感反発が露骨に噴出していた。

「お、御殿様は、お、大御台様がお嫌いですか？」

恐る恐る、それでも比較的積極的に話しかけてくる少女に、義継は少しばかり驚きつつ、けれどはつきりと大きく頷いた。

「嫌いだね」

「そ、そうですか」

少女は悲しげに、困ったように目を叛けた。

「なぜ嫌いか、理由を教えてやろうか」

こういうとき、義継は如何にも無邪気な少年らしい顔をする。少なくとも、明らかに殿様らしくない彼の態度に、少女は驚いた。

「俺は、大御台様が、西の方様を殺したと思っっているからさ」

「西の方様？」

「ああ」

義継の言葉に、少女は不思議そうに首をかしげ、

「されど、西の御方様は、謀叛を起こした立花土佐守様の御妹君でございまして、ゆえに御屋形様に成敗されたと聞き及んでいます」  
「が」

と、言った。

「ま、建前はね」

義継は吐き捨てるように、そう言った。

「無論、俺の思いに確実な証拠などない。けれど、どう考えたっておかしい。あの養父上ちちうへが、西の方様はほうえを殺すなんて……。おそらく、養父上ちちうへに讒言したのは、大御台様に違いないのだ。何しろ、大奥の実権は西の方様はほうえにすっかりとられて、ほとんど忘れ去られた存在だった大御台様にとって、西の方様はほうえは最も憎らしい存在であつたらう」  
一方的な決め付けではあるが、事情を詳しく知らない少女は、そんなこともあつたのかもしれないと思つた。

大御台という人は、考えてみると、実に哀れな人であつた。三好家と遊佐家の同盟関係を強化するという、たつたそれだけの理由のために、道具の如く三好家に押し込まれ、その上、良人おつととなつた長慶は、彼女のことに一切の興味も示さなかつた。夫婦として同じ褥

に夜を過ごした回数もこの十年来、五本の指で足りるほどしかない。当然、子など生まれるはずもなく、また機を見るに敏な女官たちは、良人の寵を得られぬ御台に愛想を突かして去っていった。

それでも実父たる遊佐河内守長教が生きている時代は、まだマシであつた。長慶としても、盟友たる長教の顔に泥を塗るわけにもいかず、彼女もまた、名族畠山家筆頭家老遊佐長教の姫として、かなりの厚遇を約束されていた。しかし、その長教が天文二十年（一五五一年）に、足利義輝の放つた刺客に暗殺されると、彼女の立場は限りなく不安定となつた。無理もない。何しろ、長教なき遊佐家には、名族畠山家を自由に動かすだけの力はなく、実際後継者たる遊佐信教は、長教が遺した若江城と広大な領地を継承したものの、河内・紀伊守護代職は一族の安見宗房に奪われてしまつた。その上、信教は主君高政について三好家に楯突いたり、あるいは高政を見限つて三好家に寝返つてみたりと、腰の定まらぬ変節を繰り返した。長教の鬼謀には、大いに畏怖した長慶も、信教の変節には、ただ呆れ、怒るだけだつた。

そんな具合である。大奥内における遊佐家の姫の立場は、見る見る悪化して、もはや無いも同然の存在となり果ててしまつた。殺されなかつただけ良かったと言えなくもないが、所詮、その程度である。奥向きの実権は西の丸殿こと雅の方の手中にあり、女官の大多数は彼女に従い、御台所には見向きもしなかつた。

けれど、波多野御前ほどではないにしろ、実家たる名門遊佐家の血筋たる自分に絶対の自信と誇りを抱いてきた御台所にとつて、この馬の骨ともしれぬ雅の方如きに唯々諾々と従つていなければならぬ現状は、耐えがたき屈辱であつたに相違ない。その辺りの経緯は、ずっと側近くに仕えてきた少女のほうか、義継より遙かに詳しくかつた。実際、雅の方が殺されると、御台所はすかさず大奥の実権を掌握し、西の丸派の女官を次々と追放した。そして今や大奥の最高権力者として、三好政権に対しても大きな権勢を誇るようになっていた。

「お主が俺の下に来たのも、大御台の策の一つだろう。大御台の息がかかったお主と俺が関係を持てば、大御台の地位は確固たるものとなる」

「……」  
全て見抜かれている。義継は案外、思った以上に聡明な人物らしかった。

その義継は、少女をじろりと睨みつけていた。少女は思わずたじろぎ、恐怖の余り湯殿の片隅に縮こまってしまった。

「何もせん」

そう言つて、義継は「ははは」と高笑いした。

「別にお前が大御台の手先だろうとなんだらうと、別に構わん。刺客なら少々困るが……。ま、ともかくそんなところで怯えるんじやない。俺が恐ろしい殿様に見えるではないか！ 近う寄れ。主命だぞ」

「……は、はい」

それでも相変わらず震えた様子で、落ち着きなく近づいてくる。そんな少女の様子を見つめながら、義継は何となくからかってやりたくなつた。

「今宵はお主と夜を明かそう。俺の寢所に来い」

「え？」

「俺の子でも産んでくれ」

義継はニタニタと、ひとしきり笑つと、おもむろにすつくと立ち上がり、慌しく湯殿を出てしまった。一人取り残された少女は顔を真っ赤に染め上げながら、きよとんとした様子で、その場に呆然と立ち尽くしていた。

翌日。

義継はいつになく大人しく、城内奥御殿の一室で、少女と囲碁を打っていた。

「そつういえば、その方、名は何と申すのだ？」

おもむろに彼が問うと、

「藤と申します」

少女は恐縮そうに、そう答えた。

「藤？ お藤か。…よい名であるな」

パチンと、自らの石を並べる。義継は次の手を考えつつ、未だ幼いお藤の顔を、じろじろと見つめていた。

「若殿様、私の勝ちにございます」

と、彼女が勝ち誇ったような顔をして言うと、

「あ！」

義継は改めて碁盤を眺め、いつになく悔しそうに「くそッ」と唸っていた。

「そなたは碁がやたらと強いな」

完敗だった。もはや打つ手が無い。義継は観念したように、そんな風に呟くと、

「父上より学びましたので…」

藤は恐る恐る頭を下げた。

碁を打ったり、将棋をしたり…。

義継はこの日一日、ずっと藤と過ごしていた。これほど楽しいのは久しぶりだとすら思った。思い切り遊んで、思い切り騒いで、思い切り笑う。その結果、ずっと、たまりにたまってきた鬱憤や不満、腹立ちも、今日一日だけで全部綺麗さっぱり晴れてしまったような気がしたほどだった。

そして夜になる。煌々と輝く月明かりが、いつになくまぶしい感じがした。義継は相変わらずお藤ととりとめのない雑談に花を咲かせていたが、そこに割ってはいるかのように、松永弾正久秀と三好日向守長逸の二人が、厳かにやってきたのであった。

「若殿に申し上げます」

彼らはいっになく重苦しい顔をして、幼君の御前に平伏した。

「どうした。宿老二人が揃って余の下に来るとは…。何か大事でもあったのか？」

義継は訝しがった。何しろ、この二人は長慶の遺言により、義継の後見役に指名されていた重臣中の重臣である。幼い義継に代わり、諸事雑務の一切を取り仕切っている最高実力者であり、そんな彼らが、徒党を成して幼君の御前にやって来た以上、何事があったと考えるのが普通であつた。

「足利將軍家に、妙な動きがございます」  
久秀が口火を切ると、

「將軍家に？」

義継の顔色が少し変わった。

「將軍家が、何やら企んでいるようです」

三好長逸が続け、久秀も頷く。義継は困つたように小さく溜息を吐くと、

「相変わらず性懲りもない、呆れた公方様よな」と、ぼやいていた。



【落日編】第119章 劍豪將軍

足利義輝は、三好家に何が起きたのか、その鋭い頭脳で薄々察しているようであった。

室町幕府第十三代征夷大將軍…、なのだが、この男を見る限り、そんな秀囲気は一切ない。世に劍豪將軍と称えられているように、どちらかといえば、猛者、豪傑といったほうがよいようなイメージである。公方という言葉より、將軍という言葉がこれほど似合う男もないように思われた。

劍術について言えば、劍豪塚原ト伝ほくてんに師事し、奥義『一の太刀』を伝授されたほどの腕前であった。彼自身、劍術が好きで、時折、名の知れた猛者たちを御所に招いては、試合を催していた。けれど、未だ義輝に勝てた者はいない。

「まさに、公方様は天下随一の猛者であらせられる」

そう言ったのは、天下に劍豪と名高き上泉伊勢守秀綱であった。義輝と伊勢守が出会ったのは、今から半年前のことであった。ちょうど用あつて上洛していた彼を、義輝がわざわざ御所に招いたのが、出会いとなつたわけだ。その後しばらく、伊勢守秀綱は將軍の劍術指南役的な役目を担つて御所に逗留し続けたが、つい、二、三ヶ月ほど前に再び彼は御所を去り、流浪の身に戻ってしまった。

「余を負かしたのは、塚原ト伝を除けば、上泉伊勢守のみである」  
そんな風に、義輝は事あるごとに伊勢守の武勇を称え、いつまでも彼の不在を惜しんだりしていた。

けれど、足利義輝という男の真骨頂は、劍術などに代表される個人的武勇より、その鋭い頭脳にあった。これまでもその頭脳で、權威以外には何の力もない將軍家の主ながら、強大な細川家や三好家と互角に張り合ってきたのである。

そして最近の義輝は、妙に焦っていた。長慶が死んだかもしれな

い。そう思うと、いてもたってもいらなくなるのだ。彼の夢は幕府再興である。その絶好機が目の前に転がっていたのだから、彼が焦るのも無理はなかった。

「焦りは禁物ですぞ」

そう言つてしきりに義輝を諫めていたのは、弟の覚慶という坊主であつた。今年で二十七歳になる。興福寺一乗院門跡の地位にあり、世が世であれば、そのまま人生を終える定めの人であつた。後に、織田信長に擁立されて、室町幕府第十五代征夷大将軍足利義昭になるうとは、この当時、夢にも思つてはいなかつた。

「焦つてなどおらん」

義輝は剥きになつて反論し、覚慶をぎろりと睨み付けた。

「ただ、兄上。兄上は三好家の討伐を宿願とされておられるようですが、それがしが思いまするに、余り三好を刺激しないほうがよろしいではありませんか」

「…なんだと？」

義輝は弟の坊主頭をぎろりと睨み付けた。けれど、覚慶もなかなかの男である。剣豪將軍義輝の鋭き眼光など気にする風もなく、逆に思い切り見返してやった。この辺りはさすがに兄弟といったところで、にらみ合う二人の顔は、実によく似ていた。

「三好を刺激し続ければ、いずれ彼らの怒りも頂点に達しましょう。下手をすれば、義教公と同じ末路を歩むことにもなりかねませぬ」

覚慶は心配でならなかつた。幕府の再興を最大の悲願とする義輝は、ひたすら三好家を敵と定め、その討滅ばかりにひた走ってきた。無論、そんな兄の気持ちは痛いほどに分かる。彼だつて將軍家の衰亡を座して見守るつもりはない。出家し、興福寺の主となっているが、もしも自分になすべき役割が巡ってきたなら、この身の全てを投げ出して、兄と共に室町家の復興に尽くすつもりでいた。けれど、夢の実現のためには手段すら選ばず、盲目的に突き進む義輝の姿は、傍目から見れば、実に危険なものに思えるのだった。

「長慶がその気になれば、將軍家など一瞬で息の根を絶たれる」

覚慶はずつとそう思ってきた。結局のところ、將軍家が今もなお存続し続けていられるのは、三好長慶が本気で幕府を滅ぼそうとは思わなかったからだ。もしも長慶がたった一言、「幕府を滅ぼせ」と命じれば、その瞬間、室町幕府と足利將軍家は、この世から跡形もなく消え去ることになるだろう。三好家と將軍家の実力差は歴然としている。近畿・四国に十ヶ国以上を領する三好家と、山城国内にほんの僅かな領地を保っているに過ぎない將軍家では、とても勝負になるものではない。

「兄上は、修理大夫こそがかけがえのない味方だということを、分かつてはおられん」

そんな風に思いながら、覚慶は困ったように苦笑いした。

実際、強勢を誇る三好家の世論の大部分は、強烈な討幕論に染まっていた。それを総帥たる長慶が食い止めていたからこそ、幕府は幕府として、將軍家は將軍の座を保ったまま、まがりなりにも京都にあつて、今日まで存続しえたのである。

そう考えていくと、皮肉な話ではあるが、義輝が最大の宿敵と思いついて入っている三好長慶こそが、幕府存続を図る上での最大の後ろ盾になっていたともいえるのである。それなのに、義輝は必死になつて長慶を除こうとしていた。そうした兄の軽拳さを、覚慶はどうしようもなく「阿呆」と思うのだった。

「余は三好を潰す！ 最近の三好家を見れば、三好修理（長慶）に何らかのことが起こったのは間違いない。この隙を逃すわけにはいかんだ。既に、十河民部も三好実休も、安宅撰津も、三好義興すらない。長慶に万一のことあらば、それは三好の終焉と同義。このまたとない好機を逃すわけにはいかん」

義輝はきつぱりと言い切つて、覚慶を睨み付けた。

「そう、ですか」

これでは、もはや取り付く島もない。覚慶は、頭がよすぎるがゆえに、逆に自分の首を絞めている哀れな兄を見て、ハアと大きな溜息を吐いた。

覚慶が都を去ったのは、十一月に入った頃のことであった。

一方、義輝は着々と、三好討伐に向けた準備を進めていった。兵を集めたり、室町御所の堀を深くしてみたり、あるいは諸国に三好討伐の軍を起こすよう命じたりと、その活動はいよいよ積極さを増してきた。

けれど、こうした露骨な動きが、三好方の耳に届かぬはずもなかった。そこで、松永弾正久秀、三好日向守長逸、三好下野守政康、岩成主税助友通ら宿老四人と、一門衆の最長老たる三好笑岩を加えた政権の最高首脳が飯盛山城に集結して、善後策を討議することにしたのだった。

「いよいよ、あの狸公方が動き出しましたな」

まず下野守政康が苦々しげな口調で、そう切り出した。

「如何に公方様の所業であろうと、捨て置くことはできません」とすると日向守長逸は、きつぱりと断言した。

「ま、確かに……。各地に書状を送りつけたり、兵を集めてみたり、御所の堀を深くしてみたり……。そんなに戦がしたいなら、いっそお望みを叶えてやるのも一興だ」

岩成友通が続ける。基本的に、宿老たちの意見は、將軍討伐で一致しているようであった。

「ただ、將軍家に刃を向けるとなると、これは相当の覚悟が要りま

すぞ。何しろ、相手は將軍ですからな」

笑岩の言葉に、四人の宿老たちは苦りきった顔をしつつも、大きく頷いていた。

「ならば新たな將軍でも立てますかな」

松永弾正の言葉に、

「新たな將軍？」

他の四人は不思議そうに首を傾げ、そして「なるほど」と、口々に相槌を打ち始めた。

將軍の候補なら、今もなお阿波にいる。かつて細川晴元や三好元

長が擁立した堺公方足利義維よしつなの嫡子義栄である。三好家にとって、縁浅からぬお方であるし、何より現將軍足利義輝の従兄弟であり、先代將軍足利義晴の甥でもあった。血筋的にも立場的にも、三好家が推す次期將軍として、なんら問題はなかった。

「鬱陶しい公方殿には、この際、退場していただきますか」

岩成友通は逸りに逸っていた。ようやく、あの將軍を殺せるのだと思うと、いてもたってもいられない、といった様子であった。

三好義継は、もう一時間近くに渡って、松永弾正久秀と、三好日向守長逸の二人と睨み合いを続けていた。

「誠にやるのか？」

義継はぎろりと二人を睨む。

「無論です」

久秀が宿老たちを代表して、そう断言した。

「…相手は公方様だぞ」

先ほどからずっと、この会話を延々と繰り返していた。相手は將軍。ゆえに躊躇する義継に対し、將軍だろうと何だろうと、事ここに至ったからには、殺るしかないと覚悟を決めている久秀と長逸。

両者の意見は激しく対峙し、しばらくは結論が出そうにもなかった。

「それに、養父上キウフウジも反対なされておられた」

義継がぎろりと二人の宿老を睨みつけると、

「あの折とは情勢が変わりましてございます」

弾正久秀は淡々と答えた。

「それに公方様だからとて、我らの敵であることに変わりはありません。かつて御屋形様と、故実休入道様は、御家に敵対した細川持隆公を肅清いたしました。持隆公は紛れもない我らの主君でございましたが、我らに仇名すようになったがゆえに、斬ったのです。…例え相手が誰であろうと、敵である以上は殺らねばならないのです。殺らねば、殺られる。それが、この乱世でございます」

弾正に続いて長逸が畳み掛けるように言うと、その瞬間、義継は

返すべき言葉を失った。

細川持隆肅清事件（見性寺の変）のことは、義継もよく知っていた。何しろ、彼の実父十河一存も、実休入道を補佐して大いに関わっていたからである。長慶や実休、一存が何を考え、どのような覚悟で主筋の持隆に手を下したのか。その裏事情全てを嫌というほどに承知している義継だけに、持隆のことを持ち出されると、何も言えなくなってしまうのだった。

「若殿！ 御決断を」

長逸が厳しい口調と激しい顔で迫り、

「御家の力、天下に示してやりましょう」

久秀が続ける。

宿老衆筆頭格の二人に迫られて、否と言えるほどの力はない無力な義継であった。彼らが將軍家を倒す、と決めた以上、義継としては、これを追認するしか道はなかったのである。

「…そなたらの好きにするがよい。ただし、その戦には、余も参加する。余自ら兵を率いて、將軍家に引導を渡すことにする。それが、せめてもの償いになるう」

義継としては、これが精一杯の抵抗だった。少なくとも、將軍攻めという三好家の一大事に、当主たる自分が蚊帳の外に放り出されることだけは避けなかった。

「無論にございます。…若殿が御出馬なされれば、兵の士気、大いに高まり、勝利は確実のものとなりましょう」

久秀の言葉に、義継は「ああ」と頷くほかはなかった。

足利義輝と戦う。そのこと自体に、義継も何の異存もない。ただ、義輝が身に纏う將軍の衣が厄介だった。赤松満佑に続いて、將軍殺しの汚名を背負うことになるのかと思うと、義継の気持ちは、暗澹たるものになった。

【落日編】第120章 揺らぐ四国

年は明けて、永禄八年（一五六五年）二月。

その頃、三好政権の総大将たる少年は、居城たる飯盛山城を遠く離れた阿波は勝瑞城にあつて、城主たる三好長治や、筆頭家老にして実質的な四国三好党の執権者となつている篠原右京進長房らを見下ろしながら、なにやら気に入らぬといった様子で、フウと大きな溜息を吐いていた。

「右京進！」

義継はぎろりと睨みつけるように、篠原長房に向かって怒鳴りつけた。

「はッ！」

長房は慌しく頭を下げて、唐突な幼君の怒声に畏まった。

「余は昨日、芝生城に参つたが…、何やら幾らか荒んでいるように思われた。手入れは怠りなく行つておるのか？」

「…はあ。芝生城にございますか」

長房は困つたように苦笑いすると、

「怠つたつもりはありませんが、若殿の御心に合はぬと仰せなら、早速改めるよう指示いたします」

と、淡々と答えていた。

「うむ。芝生城は我が父祖、三好家累代の居城であるぞ。今でこそ飯盛山にあるが、昔のことを忘れてはならん。…というのが、養父<sup>ちち</sup>上の仰せである。わしも同感だ。わが父長慶、祖父元長、曾祖父長秀、高祖父之長はじめ、たくさんさんの三好家の先達の汗と涙と血の上に、今の栄華があるのだからな」

言いたいことをひとしきり言い切ると、義継はおもむろにすつくと立ち上がり、整えられた庭園のほうへと歩いていった。そこには立派な石庭をはじめ、様々な人工美が雄大に広がっている。まるで京都の町を髣髴とさせるような、雅にして上品、それでいて、朴訥

とした阿波の情緒を見事に表現した芸術に、義継は感心したようにぼんやりと見とれていた。

「ところで、真之殿は如何した？ とりあえず、守護職であるゆえ、お会いしておきたいと思っただが」

不意を突くような義継の言葉は、何も今に始まったことではない。長房は困ったように苦笑いしつつも、

「本丸御殿にて、お静かにお暮らしにございます」と、言った。

細川真之という人は、今は亡き細川持隆の遺児であり、今年で二十七歳になる貴公子だった。形の上では、亡父の後を引き継ぎ、阿波国守護の座を継承した事になっているが、実権などあるうはずもなく、彼はいつまでも三好家の傀儡に過ぎなかった。ちなみに母親が小少将の方なので、阿波国主三好長治、讃岐国主十河存保の異父兄ということになる。

「一度は会っておくべきかな？ 少なくとも、守護職にある御方を蔑ろにしたとあっては、左京大夫義継の名に関わろう」

「壮大な庭園を眺めながら、そんな風に呟く義継に、

「必要はありません」

篠原長房はきっぱりと言いつつ切った。

「何故だ？」

義継が尋ねると、

「若殿は三好家の御大将にして、堂々たる天下人にございますぞ。

細川如き衰家の末裔に謁見なされて、何とするのは。わざわざ、御家と御隠居様の御名に傷をつけ、泥を塗るようなものです」

などと、至極堂々と、淡々と、冷たく言い放つ長房であった。

「そんなものかな」

かつては三好家の主君だった細川家である。それを、こんな風にこき下ろす長房を眺めながら、義継はハアと小さく溜息を吐いた。

結局、これが戦国という時代なのだ。そう思うと、義継少年は、な



んとも言えず恐ろしくなった。三好家と自分が、いずれそうならな  
いとも限らないのである。

その夜。

煌々と輝く満月の下、三好左京大夫義継は、三好阿波守長治と二  
人きりの時を過ごしていた。

お互い、同じ三好の血を受け継ぐ従兄弟同士であった。滅多に会  
うことはなかったが、それでもかけがえのない従兄弟なのである。  
義継としては、久方ぶりに再会したのだから、今は政治のような小  
難しい話を抜きにして、膝を交え、心行くまで語り合いたかった。

「で、長治殿は女子などに興味はあるのか？」

義継の問いは、いつでもどこでも単刀直入である。今年で十二歳  
になる長治は、恥ずかしそうに頭を掻きながら、

「ない、とは言えませぬね」

と、率直に答えていた。

「はっはっは。そうか、興味はあるのか」

一方の義継は、今年で十四歳になる。もうれっきとした青年であ  
った。

「で、勝瑞城の奥には、それらしい女子はおるのか？」

年頃の男子の会話など、身分の上下、時代の新古、洋の東西を問  
わず、似たようなものだった。

「いや、余りいませんね」

長治は相変わらず正直である。義継はパンと手を叩いて高笑いし、  
「ならば、飯盛山より、それらしい女子を選んで、お主に与えよう  
か？」

などと、実に楽しそうな顔をして言うのだった。

「いえ、それぐらいは自前で用意しますので、ご心配なく」

多少ムツとしたような顔で、長治がきっぱりと言い切るよ、

「そうか？」

義継は残念そうにハアと小さな溜息を吐き、おもむろに「ごろりと

その場に寝転がった。

「阿波の統治は大変か？」

いつしか話題が政治のことへと変化していたが、大して気にする風もなく、義継は隣に寝転がる長治に向かって尋ねていた。

「大変ですね」

長治は相変わらず正直な少年であった。

「ま、三好家の本国ゆえな。…はつきり言つと、わしも大変だ。何の因果で、宗家の跡目を引き継ぐことになったのか、未だに分からんが、とにかくこの身は、天下最強の大大名三好家の総帥ってことになってる」

「…そう、ですか。まあ、伯父上もお亡くなりになられて、御家の全ては、義継様の双肩にかかっていると云つても、過言ではないですからな」

「まあな。…だが、長治殿。養父上ヤウフウジウのことは、極秘事項であるから、軽々しく申されるなよ。どこに誰の耳があるとも分かん」

義継に窺められて、長治はハツとしたように、

「申し訳ありません」

と、すかさず頭を下げた。

「…ま、何はともかく、お主たち従兄弟衆が見事、四国を束ねておるゆえ、わしとしても随分気は楽だ。阿波にはお主、讃岐には存保殿、淡路には信康殿…。そう言えば、存保殿は、十河城から虎丸城に居城を移したそうだな。普請のほうは進んでおるのか？」

十河一存を父に持つ義継にとつて、讃岐のことは、やはり気になるようであった。まあ、無理もない。何の因果か、長慶の養子となつて、宗家を引き継ぐことになったが、本来であれば、彼が一存の息子として讃岐と十河家を引き継いでいたはずなのである。結局、自分が宗家入りしてしまったため、長治の実弟である三好孫六が十河存保と名を改めて、十河家の名跡を継ぎ、讃岐国の主として君臨することになった。

「孫六からは、順調だと知らせが参りました」

と、長治が答えると、

「そうか」

義継は嬉しそうな顔をして、ホツとしたように小さく溜息を吐くのだった。

ここで改めて、三好四兄弟亡き後の四国について記してみる。とりあえず、永禄八年（一五六五年）二月現在において、四国内にて三好政権の支配力が及んでいるのは、阿波・讃岐・淡路の三ヶ国と、伊予の東半分ほどであるが、そのうち、阿波を三好長治、讃岐・伊予を十河存保、淡路を安宅信康が治めていた。

四国が三好家にとってどれほど大切な土地であるか、今更あえて言うまでもないだろう。何と言っても、元来、三好家は阿波三好郡を根拠地とする国人領主であり、之長、元長、長慶と代を重ねるごとに存在感を強めていったが、兎にも角にも、三好郡の国人領主を振り出しに、やがて阿波を取り、讃岐や淡路に勢力を扶植した後、近畿地方へ進出していったのだ。要するに、四国があつてこそその近畿の覇者なのであり、決して、近畿があつたから四国の覇者となつたわけではない。

ただ、このところ三好家の四国支配力は大幅に低下しつつあつた。というのも、新たに四国を統治することになつた三人の貴公子たち……、即ち、阿波の長治、讃岐の存保、淡路の信康であるが、いずれも支配者として万民の上に君臨するには、明らかに若すぎたからであつた。何しろ十六歳の信康を筆頭に、長治は十二歳、存保に至つては十一歳ときている。他に、信康の実弟にして、兄を補佐し、淡路水軍の大幹部となつている清康も、まだ十四歳に過ぎない。

それでなくとも統治が難しい四国を、なんら経験を積んでいない少年貴公子たちに治められるものでもなく、結局、四国三好党の実質的執権者となつている篠原長房が巧みに纏め上げているに過ぎなかつた。けれど、それとて、決して完璧ではない。三好実休や安宅

冬康ら、三好一門の最有力者であった二人とは明らかに格が落ちる長房がいくら命令を出しても、それに素直に従わぬ国人領主も少なくなかったのである。

そこで篠原長房は様々な手を打った。先君三好実休の正室で、故細川持隆の後妻でもあった小少将の方を、兄弟の篠原自遁の正室に迎え入れたのも、その一環であるし、また十河存保が居城を十河城から虎丸城に移し、それに伴う大規模な普請を開始したのも、彼が打ち出した数多くの手の中の一つであった。即ち、長房は、普請事業に十河家配下の讃岐・伊予国人衆を総動員することで、国人たちに対し、改めて国主たる十河家の強大な支配力を見せつけ、支配体制の万全を図ろうとしたのだった。無論、その負担に反発し、異議など唱えれば、その瞬間、容赦なく踏み潰すつもりでいた。実際、彼はいざというときに備えて、いつでも十河存保の援軍に赴けるよう、阿波より援軍として五千余騎の大兵を讃岐・阿波国境近くまで差し向けていたほどだった。それほど長房の決意と覚悟を見せ付けられては、讃岐国人衆としては、ただ黙々と、普請事業に従事するより他に仕方がなかった。

その他、阿波国内の支配を固めるため、『新加制式』しんかせいしき という名の、いわゆる分国法を制定し、布告している。これは長慶の死後から間もない永禄七年（一五六四年）八月に作られ、全部で二十二ヶ条の条目からなる。中身はというと、簡単に言ってしまうえば、三好実休時代に出された法令や掟、あるいは長慶や実休の考え方などを、法令集として纏め上げたものであり、散々実休の支配に慣れてきた阿波の人々にとっては、別段真新しいものではなかった。けれど、法度として明文化し、曖昧だった罰則規定なども明瞭なものとしたので、国人対策としては、これ以上ない武器となった。

【落日編】第120章 揺らぐ四国（後書き）

用語説明

『新加制式』

阿波三好家が定めた分国法。全部で二十二ヶ条の条目からなり、制定者は篠原長房。元々、『大日本史』などでは、室町幕府の法とされていたが、近年の研究により三好家の分国法であることが判明。以下はその大まかな内容である。

- 第1条 神社を崇拜し、寺塔をうやまうべきこと
- 第2条 堅く賄賂を禁止すべきこと
- 第3条 旧の境を改めて、相論すること
- 第4条 訴訟審理中の乱暴についての罪科のこと
- 第5条 三たび召喚状を受け取りながら、訴訟の場に出頭しない罪科のこと
- 第6条 訴訟のときに証人をだすこと
- 第17条 所領を子孫に譲与すること
- 第18条 父祖の讓状ゆすりじょうであつても場合によつては適用しないことがあること。
- 第19条 恩賞として与えられた地を質入すること
- 第20条 党を結成して、たがいに盟約を誓うこと
- 第21条 科人とがにんと称して、追及しているときに、他方から人がであり殺害すること
- 第22条 被官人が私闘におよんだ場合、その罪が主人に懸かるか否かのこと

（以上、クロニツク戦国前史より抜粋）

【落日編】第121章 義輝と義栄

永禄八年（一五六五年）二月十六日。

三好義継は勝瑞城を発し、阿波国は平島御所にひっそりと過ごしている足利義栄の下を訪れていた。

義栄という人は、かつての堺公方足利義維の嫡男であり、今ではその家督を引き継ぎ、平島御所の主となっていた。今年で二十七歳というから、もう立派な大人である。けれど、別段力があるわけもなく、三好家の庇護下に人知れず生きているに過ぎない哀れな方であった。

けれど…。

この零落れ貴公子に、最近、注目が集まることが多くなった。何と言っても、彼は將軍家に連なる筋目正しき御曹司であるし、何よりも、三好政権と足利義輝の対立が先鋭化する中、彼は義輝に対抗しうる権威を持つ唯一無二の存在だったから、世人の注目が集まるのも当然といえば当然であった。

実際、それまで閑散としていた平島御所を訪問する客人の数は、ここ激増していたし、篠原長房の差配により、御所の大増築も行われるようになった。今も増築工事に従事する人夫が忙しく働いており、完成すれば、勝瑞城ほどとは言わぬまでも、少なくとも都の二条御所（將軍御所）には勝る程度の大宮殿となる予定であった。

三好義継の来訪は、千客万来にうんざりとしていた御所の人々を仰天させるに十分であった。

従四位下左京大夫、管領代兼御相伴衆。摂津・河内・和泉など、様々な国の守護職や守護代職を兼務する天下最大の实力者。見かけはたった十四歳の少年だったが、彼の背負っているものは、義栄とは比べ物にならないほど圧倒的であった。

「これは左京殿、わざわざの御越し、痛み入ります」

入道して、すっかり老け込んだ隠居、足利義維以下、平島家の郎党たちが出迎える中、義継は数十人の従者とともに悠々と進んだ。彼の後ろには、勝瑞城主たる三好阿波守長治や、その筆頭家老たる篠原長房、さらに義継自身の家臣たる多羅尾右近や野間長前なども随行していた。

「出迎え、ご苦労にござる」

御所内の一室に通された義継は、そこでようやく義維の好意に頭を下げた。

「何の。左京殿直々の御運びとあらば、この老骨に鞭打つても出迎えねば、足利將軍家に連なる平島家の面目に関わるというものでござる」

かつて堺公方と称されて権勢を誇った男とは思えぬほどやつれた姿に、義継はなんとも言えぬ哀れを感じた。世が世であれば、自程度の方に、これほど卑屈な態度をとることもなかつただろう。何しろ義維は、今は亡き十一代將軍足利義澄の次男にして、十二代將軍足利義晴の実弟、十三代將軍足利義輝の叔父に当たる人だった。

「時に義維様、義栄様は御元気であらせられますか？」

義継としては、至極当然の疑問を淡々とぶつけたつもりであった。けれど、畿内の実力者から散々冷遇されてきた不運の名士にしてみると、その優しい口調が何より嬉しかったらしく、

「無論にございます」

と、今にも涙でも流しそうな顔をして、そう言うのだった。

義継が義栄に謁見したのは、翌日のことであった。

足利義栄。今年二十七歳。

一方の三好義継は今年で十四歳になったばかりである。

上座にあつてでんと構える義栄と、下座にて頭を下げる義継。けれど、傍目から見れば、何となく立場が逆であるような感じがした。恐れ多そうにぶるぶると震える義栄に対し、堂々と彼を見据える義継では、人間的な器量からして、随分と差があるように思われた。

「足利義栄様におかれましては、御壮健なようで何よりでございます」

と、義継が言うと、

「そ、そうか」

義栄は緊張の色を隠しきれぬといった様子で、オドオドとしながら、小さく頷いた。

「時に義栄様は、天下というものに興味はありますか？」

単刀直入。不意を突くような義継の言葉に、義栄はドギマギとした。

「言い方を変えましょう。將軍職に、興味は御有りですか？」

あからさまに露骨な質問であり、義栄は困ったように側に控える実父義維を見つめた。けれど、義維は、わが子からの援護を求めるような視線を完全に無視すると、黙ったまま、ジツと義継と義栄の対面を見守っていた。

「あるのか、ないのか。はっきり申してください」

義継は相変わらずである。これでは、どちらが上で、どちらが下なのか、さっぱり分からなかった。

「ま、よろしいでしょう。されど、義栄様はいざというとき、我らの盟主として、將軍職に就く可能性が高い御方。それぐらいな御覚悟はもってもらわねば困るというものにございます」

義継に強い口調で迫られると、元々気の弱い義栄としては、

「申し訳ない」

と、頭を下げるしかなかった。

対面が終わり、義栄が去ると、今度は彼のいた場所に義継がでんと居座り、三好長治や篠原長房ら重臣たちを見下ろしていた。

人扱いはすませてある。平島公方家の人間といえども、決して近づけないよう徹底した警備体制を敷いていた。そんな中、篠原長房が苦笑いしつつ、

「困ったものですな」



と、口火を切った。

「ま、逆に申せば、あの程度の御方であれば、我らとしても操りやすいといえますが」

長房はニタニタと笑っている。義継はそんな彼をぎろりと睨み付けると、

「口を慎め。將軍になられるやもしれぬ御方ぞ」と、嗜めた。

目下、三好政権内にて密かに進められている謀議…、即ち、室町幕府第十三代將軍足利義輝肅清計画の全容を知っている者は、推進者たる四宿老を除けば、総帥たる三好義継は当然として、三好笑岩入道、三好因幡守政勝、篠原長房ら宿老級の重臣だけである。本来は、阿波国主たる三好長治ですら知らされていなかったのだが、計画の肝心要となる平島公方足利義栄を庇護している長治が蚊帳の外では、何かとやり辛いというので、数日前に篠原長房の口から伝えられていた。

「ですが、本当に公方様を…」

長治は、未だ信じられぬといった顔をして、呆然と義継を見つめていた。

「それ以外ないというのが、宿老たちの考えらしい。そして、余も認めた」

「…何ゆえですか？」

「それ以外、方策がないからだ。…これまで、幾たび公方様が我らに仇名してきたか、知らぬそなたでもあるまい」

義継にそう言われると、長治は何も言えなくなってしまった。確かに、義輝は散々、三好家に仇名してきた。時には細川晴元や六角家に肩入れして戦を仕掛けてきたり、あるいは刺客を放って、長慶や、三好家配下の有力者の暗殺を図ってきたこともある。

三好政権が安定して存続するには、もはや義輝を排除する以外にない。既に三好家を支えてきた長慶以下の四兄弟はいないのだ。災いの芽は早いうちに摘み取るしかない。

「昨今、將軍家の権威は大幅に回復しつつありますからなあ」  
まるで他人事のようにばやく長房に、義継は何も言わず、長治は  
観念したように頷いた。

ここ急速に進む將軍家の権威復興は、三好政権にとって、大きな  
誤算であり、最大の厄介ごととなりつつあった。この辺りは、謀略  
だけでなく、外交戦略にも長けた足利義輝の真骨頂であった。義輝  
の優れた外交能力により、將軍家はその力を急激に回復しつつあっ  
たのだった。

義輝の外交といっても、別段真新しいものではない。基本的には  
彼の実父たる十二代將軍足利義晴が積極的に行った方策を踏襲して  
いるに過ぎない。けれど、義輝の場合は、義晴より遙かに壮大な規  
模で、かつ精力的に行っていた。その結果として生み出される成果  
は、当然義晴より義輝のほうが遙かに大きいわけで、義輝は、義晴  
にはなしえなかった將軍家再興の夢に大手をかけたつつあった。  
ここで義輝の外交戦略の具体例を挙げてみることにしよう。

まず義輝は、各地で相次ぐ武力紛争に対して積極的に介入し、そ  
の仲介工作に奔走した。例を挙げるとすれば、とにかくいろいろあ  
るわけだが、代表的なものとしては、中国地方で激闘を重ねていた  
毛利氏と尼子氏の和睦斡旋が挙げられるだろう。この際は、毛利元  
就が強硬策に出たことで失敗に終わるが、中国地方において將軍家  
の名が大いに轟ききつかけとなった。またここ最近体調を崩すこと  
が多かった元就のために、名医と名高き曲名瀬道三を差し向けるな  
ど、中国地方の新興勢力毛利家と根強い関係を結ぶことに成功して  
いた。

それだけではない。他にも、北九州地方の覇者となっていた大友  
宗麟のために、九州探題や豊前、筑前などの守護職を授与し、さら  
には御相伴衆の身分すら許すなどして、彼の歡心を買っている。豊  
後の守護職を代々世襲してきた名族大友氏に生まれたこともあり、  
古き権威に目のない宗麟に対して、次から次へ高位の役職を与えて

いった義輝の作戦は、これ以上ないほどの中した。その結果として、大友氏からは、返礼の意味を込めた莫大な財貨が毎年のようにもたらされるようになり、逼迫を極めていた幕府財政を少なからず潤すことになった。無論、義輝の対大友外交は、単なる役職授与に留まるものではない。北九州の覇権を巡って死闘を繰り広げていた大友氏と毛利氏の和睦を斡旋したりして、大友氏あるいは毛利氏に對し、救いの手を差し伸べてやることもしばしばだった。

また義輝は、北越の雄たる上杉輝虎にも手を伸ばしていた。具体的には関東地方の覇権を巡り、上杉氏と敵対していた武田氏、北条氏らとの和睦を斡旋したほか、將軍として、輝虎の山之内上杉氏の家督継承の承認及び関東管領職就任を追認している。そして、輝虎の『輝』は、言うまでもないだろうが、義輝から与えられたものである。

そんな具合、義輝は各地の諸侯に手を伸ばして、將軍家の存在を天下に示していた。上述した大名家以外にも、武力紛争の仲介や、役職授与、あるいは『輝』の字を与えるなどして、將軍家とつながりを持った大名は多い。例えば、伊達輝宗（伊達政宗の実父）や毛利輝元（元就の嫡孫）、大内輝弘（周防大内氏の一族で、大友宗麟の重臣）などが典型例だろう。また『輝』の字ではなく、義輝の名である義藤の『藤』や『義』の字を与えられた者も多く、例えば細川藤孝（後の幽斎。肥後熊本藩藩祖）や細川藤賢（管領細川氏綱の実弟）、一色藤長（幕臣）などがいる。そして、『義』の字であるが、こちらは、將軍家が代々受け継いできた通字ということもあり、義輝個人から与えられたという意味合いが強い『輝』や『藤』とは若干異なるが、それでも將軍からの偏諱であることに変わりはない。『義』を与えられた主な者としては、最上義光（出羽山形城主、山形藩初代藩主）、島津義久（薩摩国主）、三好義興（三好長慶の嫡子）、朝倉義景（越前守護）、武田義信（武田信玄の嫡子）、尼子義久などがいた。

「公方様には、この際、消えてもらうしかないのだ」

義継がきつぱりと言いつつ切ると、長房はニタニタと笑いながら、大きく頷いていた。

「そして、義栄様を擁立し、三好政権の基盤を確固たるものにしなればならん」

もはや彼は義輝肅清を完全に決意しているようであった。ならば、一門衆筆頭格とはいえ、家臣の一人に過ぎない長治に異議など唱えられようはずもなかった。

ただ、不安ではある。何しろ將軍に手をかけるのだ。そんな暴挙を公然とした者は、幕府なるものがこの世に誕生して四百年近い中でも、鎌倉幕府第二代將軍源頼家を殺した北条時政が、同三代將軍源実朝を殺した公暁（頼家の子）、建武新政期に將軍となった護良親王<sup>なが</sup>を殺した足利直義、室町幕府第六代將軍足利義教を殺害した赤松満祐ぐらいなものである。いないわけではないが、これまで単純に数えて三十人を数えた將軍就任者の中で、殺害された者は、五本の指で数え切れるぐらいしかないのである。そして、將軍殺害を決行した者は、例えそれがどんな動機に基づいて行われていたとしても、後世にはそれほどよい風に伝えられていない。將軍を殺したことや、かつ牧氏事件（注釈参照）などで晩節を汚してしまった北条時政などのように、自らの子孫たちからも、ほとんどその功績を省みられなくなってしまった事例もあるのだ。

「成功しますか？」

長治が不安げに尋ねると、

「させねばならん」

義継は断固たる口調で、きつぱりと断言した。

（注釈）牧氏事件

牧氏事件とは、鎌倉時代初期に発生した政治事件の一つである。具体的には、初代執権北条時政と、その側室である牧の方が起こした事件。

北条時政は鎌倉幕府二代將軍源頼家を伊豆国修善寺にて暗殺し、頼家の弟である実朝を三代將軍に擁立。自らは執権として幕政の実権を掌握した。権勢を極めた時政はライバルとなりうる存在だった有力御家人の排斥を始め、元久二年（一二〇五年）に畠山重忠父子を殺害。その勢いで、時政は牧の方と共謀して、將軍実朝を廃し、娘婿である平賀朝雅を新將軍に擁立しようとした。しかし息子である北条義時と娘である北条政子の反発を受け、敗れた時政は出家した後、伊豆に追放されることになる。

この事件の結果、義時が第二代執権として幕政を掌握。その後の北条氏の歴史の中でも、時政の存在感は急激に低下し、義時が執権北条氏の実質的な祖という扱いを受けるようになる（例を挙げると、北条宗家の別名である得宗家の得宗は、義時の法名に由来する）。

五月になろうとしている。

春真つ盛り。山には桜が咲き乱れ、穏やかな春風が大地を覆う。空は青く、のどかな雲がゆつくりと舞っていた。

至極ありふれた世界が、いつものように広がっている。別段、どこもおかしくない。人々はようやく訪れた春のひと時を思う存分に堪能し、殺伐とした世相とは思えぬほど、笑みとやる気に満ち溢れていた。

けれど…。

それは、あくまでも一般民の世界においてのみ言えることであり、それ以外…、即ち、飯盛山城を中心とした地域は、春とは思えぬほどに冷え切った雰囲気包み込み、どれも重苦しい顔をした重役たちが、ひっきりなしに出入りしていた。

「二条御所の警備は予想以上に堅い」

筆頭宿老の松永弾正久秀が口火を切ると、

「ここ最近は、かなり浪人者を雇い入れているらしく、兵力は想像以上に多いらしい。相当念入りにやらねば、負けることはないにしても、取り逃がすことはあるやもしれん」

彼と並ぶ宿老の三好日向守長逸が苦りきった顔をして言った。

義輝とて馬鹿ではない。このところの三好方の動きなど、百も承知だった。だから彼は、自らの居城ともいえる二条御所の堀を深く巡らし、兵力を増強したりして、いざというときのための準備を怠ってはいなかった。

「これまでは、今は亡き御屋形様の御温情により、公方殿の悪行を見逃してきたが…。だが、御家が混乱している隙を突く形で、城を強化し、謀略を巡らす公方殿に忠義を尽くす必要性はない。一挙に叩き潰して、必ずや討ち取って見せる」

松永弾正は日頃の冷静さが嘘のような反発反感をその眼に表しながら、吐き捨てるように言い切った。

けれど、義輝による二条御所の大幅増築や、兵力増強策は厄介だった。彼が動員をかければ、五千ぐらいは集まるう。無論、その程度は三好家にとってどうということもなかったが、しかし各地の反三好勢力と結託されると痛い。

「とりあえず、兵力は二万もあれば足りよう」

下野守政康の言葉に、

「足りるだろうが、それだけの大軍を編成すれば、將軍に逃げられる恐れもあるぞ」

岩成主税助友通はそう言って溜息を吐いた。

「ならば策が要るな」

と言うのは、弾正久秀である。

「策、とは？」

長逸が尋ねると、

「要するに將軍に逃げられなければよいのだ。ならば、手はいくらでもあろう」

弾正は自信たっぷりに答えた。

二条御所は、もはや御所というより、一つの要塞だった。無力ながらも、各地の諸侯からかき集めた献金を原資として、足利義輝が精魂込めて作り上げてきた代物は、花の御所と称えられた往時の室町御所とは比較にならないほど小規模ではあるが、それでも、応仁の乱以来、荒廃を極めていた最近の室町御所に比べれば、格段に宮殿らしい建物となっていた。

建設にあたっては、京の実質的支配者たる三好家からの妨害もなかったわけではない。けれど、ここ数年間、肝心の三好家が十河一存、三好実休、三好義興、安宅冬康ら、一門の相次ぐ死によって混乱していたことは、義輝にとって、これ以上ない好機であった。

そして永禄八年（一五六五年）五月初旬。

完成して間もない二条御所は足利義輝の下に、幕臣の細川藤孝がやってきた。仏頂面で、相変わらず愛想のない顔をしている彼に、「縁起でもない顔をするな」

と、義輝はムツとしたように怒鳴っていた。

細川藤孝という人は、本来、細川家分家の中でも、阿波守護家に次ぐ名族と称えられていた和泉守護家の当主であつた。けれども、父祖累代の領国である和泉は三好家に奪われており、彼自身は、形こそ従五位下兵部大輔であるが、実際は義輝の側近として、微禄を食んでいるに過ぎぬ身にまで零落っていた。

「おや、兵部、その隣におる男は誰ぞ？」

義輝は訝しげに首を傾げながら、藤孝の隣に付き従つ浪人風の男を見つめた。

「ああ。この者は、美濃の浪人にて、明智十兵衛光秀殿と申される」  
「美濃の浪人？」

義輝の顔はますます疑問に満ちていった。如何に將軍家の権威が零落れているとはいへ、名もなき浪人風情の者と気安く話せるほどには、將軍家も安くはない。けれど、そんなことは藤孝ともあろう男なら、嫌というほどに承知しているはずだつた。

「浪人とは申しまして、美濃守護土岐氏の一族にして、実父の明智光綱殿は、美濃の明智城主として知られた御方。その死後は、後を引き継がれた叔父の光安殿を養父と仰ぎ、育たれたそうです。光安殿は先代公方義晴公に謁し、従五位下兵庫頭に任じられたほどの人物です。されど……。上様も、道三入道がその子義龍により滅ぼされたことは御存知とは思いますが、その際、明智家は道三入道に与力したため、光安殿はじめ一族は悉く滅び、あるいは離散し、十兵衛殿も浪人とならざるを得なかつたそうにございます」

「なるほど。土岐の一族にして、道三入道の家臣か」

ある程度の身分の者なら、義輝は殊更身分の高下を問うようなこととはしなかつた。だから恭しく頭を下げる十兵衛光秀をじろりと、ひとしきり見つめた後、



「そなたにはどんな能力があるのだ？」

と、尋ねた。家柄、身分よりは能力を重視するところ、義輝はなかなか合理的な男であった。

「美濃を出奔して以来、諸国を巡り、その動静をつぶさに観察して参りました。中国は毛利、東海は今川、北陸は朝倉……。無論、畿内の三好、畠山、六角……。とにかく、いろいろな地域を回り、諸侯に接した経験は、上様の今後に必ずや必要となりましょう」

十兵衛光秀は今年で三十七歳になるというが、苦勞のせいか、歳以上に年老いて見えた。義輝は「ふーん」と頷きながらも、

「ならば、毛利元就をどう思う？」

とか、

「今川は今後どうなると思うか？」

などと矢継ぎ早に尋ねていた。十兵衛光秀はにやりと不敵な笑みを漏らしながら、

「毛利家は今後、守成の時代を迎えましょう。創業の人元就公は既に年老い、ここ最近、病にお倒れになることも多いとか。既に嫡子隆元公はなく、元就公に万一のことあらば、隆元公の嫡子たる輝元殿が毛利宗家を引き継ぎましょう。ただ、輝元公はまだお若く、とても戦国乱世に自ら船出していける力はない。当然、補佐には、一門の筆頭たる吉川元春（元就の次男）、小早川隆景（元就の三男）の二人……。即ち毛利両川りょうせんが付きましようが、彼らも拡大しきった毛利領の安定を最優先に考えるでしょうから、自ら畿内に打って出ることはないと思われます」

と、淡々と答えた。さらに、

「今川家については、いずれ滅びましよう」

と言う。

「何ゆえに？」

すかさず義輝が尋ねると、

「桶狭間に義元公を失った後、跡目を引き継いだ氏真公は、必死になつて改革政治を遂行しているようですが、有力な国衆の離反が相

次ぎ、もはや今川氏の崩壊は時間の問題と行って過言ではありませぬ。実際、三河の松平元康（今は松平家康と名乗っている。後の徳川家康）は、桶狭間の後、今川から離反して織田信長と同盟しました。結果として、今川は西に松平という厄介な敵を抱えた形となりました」

「だが、松平と申して、まだ三河一國とて完全に纏め切れてはいない。駿河・遠江を保つ今川なら、さして問題なく倒すだろう」

「すかさず口を挟む義輝に、光秀は相変わらずニタニタと笑っていた。」

「国衆の離反により、氏真には三河に兵を出す余裕はありません。松平を苦しめてきた一向一揆もこのところ鎮静化しつつあります。」

「さすれば、織田と同盟し、背後に憂いのない松平家康は、近いうちに必ず遠江に進撃いたしましょう。国衆が松平勢に離反すれば、遠江が陥落するのも時間の問題。そうなれば、山深い甲斐にあつて、虎視眈々、海を目指している武田信玄入道が黙ってはおりませんまい」

「武田？　だが、武田と今川は同盟しているはずだ」

「そんなもの、狡猾な信玄入道が気にするはずありません。光秀はきつぱりと言い切り、義輝は再び「ふーむ」と腕組みながら、何やら複雑な顔をして考え込んだ。そしてしばらくたつと、今度は藤孝のほうに目をやって、

「お主、余の軍師役として、こやつを連れてきたのか？」  
と、尋ねた。

「はは。それがしとしては、十兵衛殿の知識を利用せぬ手はないと思ひ、上様の下にお連れいたしました。上様が十兵衛殿をどのような立場に取り立てるか、臣の知るところではありません。せぬ」

藤孝は相変わらず淡々とした口調で答える。そんな彼の様に、義輝は少しばかり苦笑いしつつ、明智十兵衛光秀を睨み付けた。

「余の下で働きたいと申すなら構わぬ。以後は余の側にあつて、その豊富な知識を余のため、幕府のために役立てよ」

「上様は誠に三好家とやりあうおつもりですか？」

藤孝は鋭い口調で、咎めるように義輝を睨んでいた。

「そのつもりだ」

一方、義輝は淡々と答え、にやりと不敵に微笑んだ。

「勝てるとお思いか？」

藤孝の言葉には、一切の容赦がなかった。どんな相手であろうとも、齒に衣着せぬ物言いが出来るところは、藤孝という人の最も優れたところであった。

「そなたは、余が負けるとでも申すのか？」

義輝は自信満々である。

「上様には勝算があると言われるのですか？」

「なくてするものか。戦は勝つためにするのだ」

「：さればお聞かせ願いたい。畿内・四国に十ヶ国以上を領する三好家と真つ向勝負して、勝てるという根拠をお聞かせください」

無論、藤孝もいずれは三好家を滅ぼすべきだと考えていた。さもなければ、足利將軍家には未来永劫、繁栄の機会は巡ってこないだろう。だが、少なくとも今はまだ時期尚早だと思っていた。せつかく義輝の努力が実る形で、將軍家の権威が急激に復興しているのだ。今はひたすらに耐えて、三好家が衰退するのを待つべきだと思っていた。どうせ、三好四兄弟を欠いた三好家など、いずれ自壊せずにはいられないのだ。わざわざこちらから動いて、危険を冒す必要性などない。

しかし、焦り、逸る將軍には、この論理が通じなかった。藤孝は困ったように溜息を吐きながらも、一方で、無理もないとは思っていた。何しろ、義輝は將軍に就任してからずっと三好家と戦い続けてきた。剣豪將軍の異名を地で行くほど、壮絶で熾烈な戦陣生活を繰り返してきたが、その結果、彼が得たものはなんだろうか。確かに三好家を大いに苦しめ、細川晴元を上回る強敵として、長慶の覇業の前に立ちはだかった。けれど、それだけだった。長慶は着実に勢力を拡大し、逆に足利將軍家の存在感は急激に低下していった。

「勝算ならある。まず、浪人衆をかき集めて新たな奉公衆（將軍の近衛兵）とし、三好軍に備える。その上で、六角承禎を味方に取り込み、武田義統、朝倉義景、北畠具教ほか、三好の栄華に不満を抱いているだろ。諸侯を糾合すれば、決して分の悪い勝負にはなるまい」

「ここらで起死回生の手を講じる必要性があると堅く信じている義輝は、これで勝てるかと確信しているようだった。けれど、ひどく冷静な現実主義者である藤孝には、それが成功するとは、お世辞にも思えなかった。

「上様！」

そこに、藤孝の隣に控えていた明智十兵衛光秀がおもむろに口火を切った。

「上様は少々お人が良すぎます。六角、朝倉、北畠？ 彼らが、わざわざ強大な三好家に勝負を挑むほど度胸があるとは思われませぬ。特に、六角などは、相次ぐ敗戦、相次ぐ御家騒動にて、その力は、ほとんど失われています。北畠も、先代晴具公時代ならともかく、今の具教公は、剣豪と称えられているわりに消極的で、事勿れ主義なお方です。物産豊かな伊勢国の支配に甘んじ、他国へ攻め入るなどど面倒なことをするとは思えませぬ」

要するに、だから今は時ではないということ、光秀は言いたいのだ。けれど義輝はまるで聞く耳を持つとせず、

「余が立ち上げれば、誰もが言うことを聞こう。余は將軍ぞ。天下を統べる征夷大將軍ぞ」

「ここ最近の成功が、よほど身に染みているのだろう。有頂天になつて、日頃の冷静さ、慎重さを失っているようであった。

藤孝や光秀は、互いに困ったような顔をして、ハアと溜息を吐くと、これ以上何を言っても無駄だろうからと、すこすこと義輝の御前から退出していった。

【落日編】第123章 永禄の変 〱 剣豪將軍の最期〱

永禄八年（一五六五年）五月十九日。

時に、午前八時頃という。

夜が明けて、東の空に煌々と輝く朝日が眩しくなりはじめた頃、松永弾正少弼久秀率いる大和軍の先発隊、即ち弾正の重臣林若狭守通勝の手勢三百が、浪人に化けて都に入り、二条御所の周りを静かに取り囲んだ。

その直後、楠木正虎の手勢五百が同様の手段で都に入り、林勢に合流しつつ、二条包囲の一翼を担った。さらに、松永久通の兵一千、柳生家蔵の兵七百、奥田忠高・岡国高・土岐頼次らの兵一千五百が都に入った後、松永弾正の本隊三千がこれに続いた。即ち、総勢七千に及ぶ大和軍が午前八時から、正午頃までの四時間の間に、都に入って二条御所を取り囲んだのである。

それだけではない。

大和軍による包囲が完了すると、三好日向守長逸の兵四千、三好下野守政康の兵三千、岩成主税助友通の兵三千が大和軍に合流。その後、三好左京大夫義継率いる主力軍一万が到着した。

総勢二万七千。

一方、二条御所に立て籠もる足利軍は、僅かに三百余騎であった。

包囲を完了したとの知らせを受けた三好義継は、ただ、「そうかとあつけなく頷いただけだった。

総勢一万に及ぶ主力軍を束ねる義継は、二条御所に程近い本門寺に本陣を置いていたが、包囲が完了したと聞いても、首尾よく義輝を二条御所内に閉じ込めることが出来たと聞かされても、余りよい気分はしなかった。

当主となって、初めての戦が將軍殺しというのは、義継でなくとも嫌だろう。しかも、先君長慶が大いに反対していたことなのだ。

今の自分の行動は、敬愛する養父を裏切るようで、何より辛かった。「敵軍総勢三百に対し、こちらは二万七千か。…卑怯といえば、これほど卑怯な戦もないだろうな」

それはさながら、巨象が犬ころを踏み潰すような感覚。例えどんな作戦を駆使しようとも、援軍が来ない限りは、三好方の勝利が覆ることはない。

「申し上げます！」

そこに、伝令が駆け込んできた。

「弾正様より、総攻撃の準備は整ったとのことにごさいます。また、日向守様、下野守様、主税助様は、既に攻撃準備を終えておるとのこと」

言うべきことを言って、足早に去る伝令の後姿を眺めながら、義継はフウと小さな溜息を吐いた。後は、自分が攻撃命令を下せば、十三代目室町公方は、この世から跡形もなく消え去ることになるのだ。彼が苦心して築き上げてきた將軍家復興の象徴とともに、燃え上がる紅蓮の炎に包まれながら死んでいくのだろう。

全ては自分次第。と言っても、今更攻撃命令を出さないわけにもいかなかった。事ここに至った以上、如何に三好家の総帥といえども、怒涛の勢いで流れる時の勢いは、容易くとめられるものではなかった。

細川藤孝、明智光秀は苦々しげな顔で、二条御所を取り囲む三好軍を呆然と眺めていた。

「やはり動いたか！」

藤孝は拳を何度も床に叩きつけ、吐き捨てるように怒鳴った。

「上様は三好を侮りすぎたようだ。あれだけの大軍を相手にしては、さすがの上様も勝ち目はあるまい」

名門の出にして、当代一流の文学者。けれど、非常に冷静な現実主義者たる藤孝は、既に主君義輝の運命を見定め、自分たちが次に起こすべき行動を考え始めているようであった。

「問題は、次の將軍」

間髪いれず、藤孝の考えを察したらしい光秀が口を入れると、

「そつだ」

藤孝は大きく頷いた。

「おそらく三好は、阿波の流れ公方を次の將軍に擁立しようとするだろう。実際、左京大夫が平島を訪れて、義栄と面会していたらしい。…だが、三好の思惑通りにさせるわけにはいかん。將軍殺しを公然と行うような輩が擁立する者を、將軍と認めるわけにはいかんのだ」

冷静であるようで、そうでもない。この当時の藤孝は、まだまだ若かった。後に、その冷静沈着、時に残酷なまでの冷静さで、あらゆる苦難を乗り越え、肥後熊本五十万石の藩祖となった男は、まだ三十一歳の青臭い青年であった。

一方、三十七歳になる光秀は、藤孝よりは冷静である。彼以上の苦難を乗り越えてきたからか、その仕草一つ一つに、なんともいえない貫禄が漂っていた。

「公方様の御弟君は何としてもお守りせねばなりません」

と、光秀が猛る藤孝を宥めるように言うと、彼もまたようやく持ち前の冷静さを取り戻していった。

「公方様の弟君は御二人。興福寺一乗院の門跡であらせられる覺慶様と、鹿苑寺（金閣寺）院主となっておられる周嵩様」

と、藤孝が言うと、

「何としてもお二人はお助け申し上げねばならん」

光秀は断固たる口調で、そう言い切った。

その頃、三好軍は、二条御所を包囲下に置き、ひたすら総帥たる義継の攻撃命令を待っていた。

義継は迷っていた。いや、悩んでいた。このまま時の流れに身を任せ、將軍殺しを執行してもよいのか、否か。相手は將軍だ。武家の棟梁である。まがりなりにも十三代に渡り、この国を統治してきた

た將軍家の当主。武家の伝説的英雄である八幡太郎義家の血を受け継ぐ河内源氏の実質的嫡流足利氏の当主。それは、帝にも勝るとも劣らぬ権威を持った高貴な存在なのだ。

それを殺すのだ。迷うのも、悩むのも、当然といえば当然だった。何しろ、義継はまだ十四歳の少年に過ぎないのである。

「御大将！」

松永弾正や三好日向、下野、岩成主税助ら諸將の派した家臣たちが、しきりに義継に攻撃命令の発動を求めてきた。義継はというと、床机の上にとんと構えながら、ああでもない、こうでもないと思っている。

「御大将、即刻攻撃命令を！ さもなくば、將軍に逃げられてしまいまする」

既に昼も終わり、太陽は西の空に沈もうとしていた。松永弾正の重臣である高山友照が、主君の使者として義継の御前にやってきて、強い口調で攻撃命令を求めている。

「御大将！」

高山友照のみならず、あらゆる武將たちから「攻撃命令を！」と強い口調で求められれば、義継としても、これ以上迷ってはいられなかった。如何に聡明でも、まだ十四歳。強面の武將たちの強い要求を退けられるほどの精神力はなかった。

「…攻撃、開始せよ」

観念したように呟く義継の言葉に、高山友照以下諸將は大いに喜び、

「承知！」

と、浮き足立って彼の下から離れていった。

「命令が出たぞ！ 許可が出たぞ」

家臣たちの嬉しそうな騒ぎ声を聞きながら、義継はがつくりと頂垂れ、ぎゅっと拳を握り締めた。唇を噛み締めながら、ひたすら、自分の判断が間違っているのではないかと、悩み続けていた。



ボオオオオ。

法螺貝が鳴り響き、その瞬間、三好軍は大挙して動き始めた。待ちに待った攻撃命令。どの顔も、いきり立っていた。

深く掘り巡らされた御所の堀に、圧倒的多勢を誇る三好軍が押し寄せた。一方、立て籠もる足利軍も矢や鉄砲を放って、必死に応戦してきたが、もとよりたつた三百しかいないのである。勝ち目など、あろうはずがなかった。

けれど、絶望的な戦を前にしても、足利軍の戦意が落ちることは決してなかった。何と言っても、彼らには將軍の奉公衆、即ち親衛隊だという誇りがある。元々、単なる浪人、夜盗崩れの、全く武士とは言い難き存在ばかりで構成されている足利軍であったが、それでも一人一人、自分はれっきとした將軍の兵なのだという意地と誇りを持っていた。將軍の兵らしく、堂々と戦い、死んでやる。そう覚悟している兵たちは、三好軍が想像した以上に、遙かに強かった。

「まだ落ちんか」

松永弾正は苛立っていた。

伝令が相次いで彼の下にやってきて、戦況を報告する。けれど、どれも余り芳しいものではなく、それゆえに弾正は苛立つのだった。「申し上げます」

そこに、汗まみれの伝令が、慌しく駆け込んできた。

「林若狭守様の兵、表門を突破したとのございます」

「突破したか！」

弾正は小躍りしたいほどの嬉しさを覚えた。あの分厚き城門さえ突破すれば、後は時間の問題である。たかが三百足らずの兵で、三万に達しようかという三好軍の猛攻を、どこまで防ぎきれんだろうか。

弾正は何とも言えず楽しくなった。この自分が、元々どこの馬の骨もしれぬ家に生まれたこの自分が、天下の公方を殺すのだ。嬉しくて仕方がない。これ以上の喜びがどこにあるかと、ニタニタ

と下種な笑みをいつまでもその顔に浮かべていた。

「くつくく。死ね！ 皆、死ね！ はっはっは。権威、身分？

糞喰らえ。將軍だろつと、貴族だろつと、皇族だろつと、わしに楯突く全ては、皆殺しにしてやる」

弾正久秀はひとしきり豪快に高笑いすると、しばらくして、床机の上にゆっくりと腰を下ろした。

城門が突破された後の御所内は、まさに凄惨な地獄絵図であった。三百足らずの足利軍は、奮戦しながらも、怒涛の如き三好軍に飲み込まれて、一人残らず討ち死にしていた。

その中でも、將軍足利義輝の奮戦振りは凄まじかった。

「我こそは従三位参議左近衛権中将、室町幕府十三代征夷大將軍足利義輝である！」

そんな風に怒鳴りながら、次から次、片っ端から敵兵をなぎ倒していく。劍豪將軍、劍聖將軍などと称えられた彼の實力は、只者ではなかった。何しろ、三好方の兵が数十人、束になって押し寄せても、彼は傷一つなく蹴散らしてしまったのだった。

とはいえ…。

如何に個人的武勇に卓越した將軍といえども、三万に及ばんとする三好軍の猛攻を、たった一人で防ぎきれぬものではなかった。

「上様！ もはやこれまでにございます！」

涙ながらに、側近たちが義輝の下に駆け込んできた。

「くそッ！」

義輝は悔しそくに唸りながら、それでも天下に劍豪將軍と評された男らしく、見事に散ってみせる覚悟であった。

義輝が居室に戻ると、そこには母親である慶寿院（先代將軍足利義晴の正室）や、嫡子の足利輝若丸、重臣の摂津晴門（政所執事だった伊勢貞孝の後任）、その息子である摂津系千代丸など、一門眷族、重臣数名が集まって、しくしくと、この世の無情に涙していた。

「すまん」

彼らの哀れな様を眺めながら、義輝はそう言って小さく頭を下げた。結局、自分の焦りが、今の事態を招いたのだ。彼らには、何と云って謝ればよいのか分からなかった。

「母上、かくなる仕儀となり、誠に申し訳ない。されど、母上は近衛家の姫。その伝を頼れば、三好とて、容易く手は下すまい」

義輝はそう云って、母の下に歩み寄ったが、慶寿院は聞かなかった。

「私は近衛の姫である前に、公方様の母であり、先の公方様の御台所であります。公方様が御自害の覚悟を固められた今、私一人、おめおめと逃げることなどできません」

「されど！」

「それ以上申されますな。これは、五摂家筆頭近衛家に生まれ、武家の棟梁足利將軍家に嫁ぎし女子の意地にございます」

「女子の意地？」

そう言われると、義輝はもう何も言えなくなった。

「上様、辞世を」

側近がそう云って、紙と硯を手渡した。

燃え上がる紅蓮は、既に義輝の側まで迫ろうとしていた。配下たちが防いでくれているのか、それとも三好方が攻撃を控えているのか、それまでの激戦が嘘のように、ここだけはひっそりと静けさを保っていた。

「辞世、か……。そうよな」

義輝はしばらく考え込んだ上で、何やら思いついたらしく、すらすらと筆を進めて、自らの人生を締めくくるに相応しき辞世の句を記していった。

五月雨は

さみだれ

露か涙か

ホトトギス  
不如帰

我が名をあげよ

雲の上まで

志半ばで、こんな最期を遂げねばならなかった男の無念が、露骨に溢れた辞世は、これ以上ないほど剣豪將軍義輝に相応しいものなのかもしれない。

まず慶寿院が腹を斬り、続いて一門眷族、重臣たちが、次々と腹を斬っていった。

最後に残ったのは、足利義輝であった。

彼はじつと上座に留まったまま、燃え上がる炎の中にジツとしていた。何が間違っただろうか。いろいろ考えながら、結局、將軍家とはこうなる定めだったのだという結論に至った。

自分が死ねば、次の將軍は誰になるだろう。三好の推す足利義栄だろうか。けれど、將軍殺しなどという暴挙をなした三好に、將來があるとは思えなかった。自分には弟が二人いる。彼らのどちらかが、いずれ自分の恨みを晴らしてくれるだろう。

などと思いつつ、義輝は思わず苦笑した。

「兎にも角にも、楽しき人生ではあった」

足利義輝。

従三位参議左近衛権中将兼征夷大將軍。

室町幕府の権威復興に全力を注ぎ、それなりの成果を残した將軍は、その成果ゆえに、この世から滅び去る破目となった。

悔いはない。

義輝は、死の淵に臨んで、満面の笑みを浮かべていた。

炎が容赦なく彼の周りを取り囲んでいく。彼は己が刀を、自らのわき腹に突き立て、思い切り掻き切った。凄まじき激痛が体中を駆け巡り、耐え切れず、その場にぐったりと転げ落ちた。

かくして、室町幕府第十三代將軍は死んだ。

享年三十歳という。

【落日編】第124章 戦後処理

二条御所が陥落し、室町幕府第十三代将軍が紅蓮の炎の中に消えてしまうと、世の中は、とりわけ京の町は騒然となった。

既に市内は三好軍の徹底した戒厳下に置かれている。三好の旗印を背負った兵士たちが、忙しく巡回を繰り返し、義輝に従った浪人や商人、公家衆の逮捕に躍り起になっていた。

中でも、鹿苑寺（金閣寺）院主にして、足利義輝の実弟だった足利周嵩が松永弾正の手勢により逮捕されると、人々は哀れな貴公子のために涙し、そしてこれからどうなるのだろうか、本気で心配するようになった。

悪夢のような惨劇から一夜が明けた五月二十日。

細川藤孝と明智光秀は、貧民に身を賣して、三好方の追捕から必死になって逃れていた。とりあえず、都を少し離れた寂れた廃寺の中にて休息をとりつつ、同様に都から逃れてきた幕臣の一色藤長と合流し、今後のことを協議していた。

「先ほど、都より和田殿より知らせがあつて、鹿苑寺の周嵩様は、松永弾正の兵に捕らえられたそうな」

藤孝が無念そうに呟くと、

「そうか」

と、光秀は悔しそうに臍を噛んだ。

「…おそらく、残念だが、周嵩様は殺されるだろう。となれば、残るは興福寺一乗院の覚慶様のみ…」

一色藤長の言葉に、光秀や藤孝は静かに頷いた。少なくとも、彼らには、三好政権が擁立するであろう足利義栄を将軍と認める気は更々ないのだった。周嵩が駄目なら、覚慶を擁立するしかない。もはや彼以外に、足利義晴の血筋を受け継いだ将軍候補はいないのである。

「だが、覚慶様の下にも弾正の兵は向かっていると見ると見るべきだ。…救出するにしても、そう容易きものではないぞ」

光秀は、どこまでも沈着冷静な男であった。藤孝や藤長も、当たり前に過ぎる彼の指摘に、グツと唸り、頭を抱えてしまった。万一、覚慶にまで三好の手が及ぶようなことがあれば、自分たちは、いったい誰を將軍候補として推せばよいのだろうか。義輝の子は、既に三好軍により殺されている。周嵩も殺されるだろう。残りは覚慶しかいない。彼すらも失えば、三好の推す足利義榮より有力な將軍候補は皆無といっても過言ではなくなってしまうのだった。

「だが、手がないわけじゃない」

慌て、焦り、悩む藤孝に対し、光秀は励ますようにそう言った。

「おそらく周嵩様は殺されるだろう。ならば、我らはそれを利用してやればよいのだ」

「利用？」

十兵衛光秀の思わぬ言葉に、藤孝や藤長は不思議そうに首を傾げていた。

「そうだ。…兵部殿は、今の三好左京大夫（義継）が一番何を怖れていると思う？」

「…左京の怖れているもの？」

細川兵部大輔藤孝は、さて何だろうと呟きながら考えてみた。けれど光秀は彼の考えが纏まる前、間髪いれずに、

「世論さ」

と、言った。

「世論？」

一瞬、彼の言わんとしていることが理解できなかつた藤孝であるが、少しばかり冷静に考えてみると、確かに三好義継が一番怖れそうなのは、世論、即ち人々の声であるような気がした。

「要するに、公方殺しの義継を非難するような世論を我らの力で作り上げればよいのだ。幸い、將軍家に愛着を抱く市民は多いからな。弱冠十七歳の周嵩様が殺されれば、人々は三好の横暴を嫌い、非難

するに決まっている」

「…だが、義継はそれで動くとしても、弾正が容赦するとは思えん。あの古狸は、一時の世論など無視して行動するに決まっているぞ」  
すかさず一色藤長が反論すると、光秀はにやりと不敵な笑みを漏らした。

「一色殿は何やら勘違いなされておられるようだが、今のところ、松永弾正は、三好左京の配下の一人に過ぎぬ。左京を動かせば、弾正とて独断専行は出来まい。そんなことをすれば、三人衆（長逸、政康、岩成友通のこと）の反発を買うことにもなる」

「…なるほど」

「そして、肝心の左京大夫は、如何に聡明でも、所詮十四か十五の少年。世論が猛反発する中、覚慶様殺しはできまいよ」

自信たっぷりな光秀の態度は、常時であれば、腹立たしいほど鼻につくのさるうが、こういう非常時にあっては、これ以上ないほどに頼もしかった。

細川藤孝も一色藤長も、それ以外に覚慶を救い出す手立てはないだろうと結論付けると、早速光秀の方策を実行に移すことにしたのだった。

三好義継は、木立売（今の中京区辺り）にある三好屋敷にあって、結果報告に耳を傾けていた。

五月二十日。春も終わり、桜は散った。梅雨時の曇天が、これ以上ないほど、自分の心境を表しているようで、義継は思わず苦笑いした。

「既に公方様、その御生母慶寿院様、公方様の御嫡子輝若丸様ほか、御所内に立て籠もっていた貴人の方々は皆、死亡したとの報告にございます」

伊沢大和守の報告に、義継は目を背け、耳を覆った。

ついに、自分は將軍を殺したのだ。後世の人々はこんな自分をどう評価するだろうか。赤松満祐のような扱いを受けるのだけは、嫌

だった。

「また、松永弾正様の配下、平田和泉守殿が鹿苑寺院主の足利周嵩様を捕縛したとのございます」

「…捕縛？」

「御意」

そんな大和守の報告に耳を傾けながら、義継の気持ちはますます鬱屈としたものになった。どうせなら、弾正の手で周嵩を殺してくれればよいものを、と、少しばかり思った。どのみち殺す以外に道はないのだ。弾正がその独断で殺してくれば、自分が処刑命令を出す必要はなくなる。弾正を悪者にしておけば、自分の中に渦巻く良心にも、それなりの言い訳が立つ。

「で、興福寺の覚慶はどうした？」

ふと、義継はその脳裏に浮かんだ疑問を伊沢大和にぶつけてみた。義輝も、その息子も、さらに弟である周嵩も手にかけたとなると、自分たちが擁立せんとしている足利義栄に対抗しうる存在は、覚慶一人ということになる。

「目下、弾正様の手勢が興福寺に向かっておるとのことです」

「…そう、か」

覚慶さえも殺せば、將軍継承者としての義栄の立場は確固たるものとなる。何しろ、他に將軍の座を継承するに足る資格を持った人間はいないのだ。

事ここに至ったからには、徹底してやらねばならぬ。將軍に手をかけてしまった以上、もはや後に引くわけにはいかない。そう思い、決意した義継は、

「大和守。弾正の下に使者を出し、こう命じよ」

と、言つて、彼は伊沢大和守を睨み付けた。

「捕らえた足利周嵩は、即刻斬つて捨てよ、とな」

「承知！」

大和守は大きく頷き、そして去った。



足利周嵩が斬られたのは、それから間もなくのことだった。義継の命が下った以上、弾正久秀は、足利一門の御曹司に対し、一切の容赦をしなかった。

足利周嵩。今年で十七歳というが、いずれにしても將軍家に生まれ、世が世なら、この世の苦しみなど一切味わわず、無難な一生を過ごせたであろう御方の哀れな最期には、人々も思わず涙せずにはいられなかった。

「殺すにしても、あんな惨い殺し方をしなくてもよかつたらうに」人々は処刑の名所たる栗田口にて公開処刑された御曹司の哀れな様を眺めながら、

「弾正様も惨いことをなさるものだ。切腹では駄目だったのか？」などとぼやいていた。とにかく、こういう人々の声が、やがて圧倒的な世論となり、木立売の三好邸にいる左京大夫義継の耳にまで達することになった。

「やはり周嵩様を殺したのは、早まったかな？」  
義継も、まだ十四歳の少年に過ぎない。世論の猛反発に接してお、微動だにせず振舞えるほどの精神力は持ち合わせていなかったのだ。とにかく、足利周嵩を殺して以来の義継は、いろいろと悩み、迷い、考えることが多くなった。

そして…。

五月二十五日。

松永弾正の差し向けた軍勢は、大和は興福寺を包囲し、門跡たる覚慶の引渡しを求めていた。興福寺側はこれを拒否し、徹底抗戦の構えを示していたが、

「もしも引き渡さぬなら、焼き討ちにしても奪い取る！」  
と、弾正久秀が厳しい態度で迫ると、坊主たちは震え上がってしまった。

まあ、無理もない。

何しろ、五月も二十八日ごろになると、興福寺は松永軍一万に加え、三好義継が差し向けた援軍三万を加えた総勢四万にも及ぶ三好

軍により取り囲まれていた。一方、興福寺の僧兵集団は、僅かに三千足らずに過ぎず、戦となれば、興福寺側の敗北は決定的であった。

結局、覚慶自身が観念して投降した。彼としては、長年世話になった僧侶たちを、自らの意地のために巻き添えにしたくはなかったのであった。自分一人死ぬだけで、興福寺が助かるのなら、それでよいと、主戦論に染まる僧侶たちを説得して、降伏したのだった。

けれど、興福寺側にも意地がある。寄せ手の大将たる松永弾正との間に、覚慶は殺さぬという覚書を締結させ、その上で引き渡すことにしたのである。

「笑止！ わしがそんなことを守ると思うか」

弾正はそう言って高笑いしていたというが、ともかく興福寺側としては、覚書を締結させたということだけでも大成果であった。かくして覚慶は松永軍に引き渡されることになったのであるが、ここにきて弾正にも誤算が生じてきた。

一つは…、というより、これが最大の誤算であったのだが、京の三好義継から、覚慶を殺してはならないと命じられてしまったことであった。義継の命令を記した御朱印状には、三好日向守長逸、三好下野守政康、岩成主税助友通の三人、即ち三好三人衆と評されている宿老たちも連署していたから、弾正としても無碍に扱うわけにはいかなかった。

「たわけた若殿よ。ここで覚慶を殺さねば、我らの立場は危ういものとなると言つのに」

弾正は一日中朱印状を睨みつけながら、そんな風に怒鳴っていたと言う。とにかく、興福寺との間に結んだ覚書のこともあり、弾正はやむなく覚慶殺害を諦め、彼を再び興福寺に戻すと、とりあえず監視の兵をつけて幽閉することにしたのだった。

永禄四年（一五六一年）をもって三好長慶政権の最盛期と規定するなら、永禄八年（一五六五年）六月から数ヶ月間は、三好義継政権の最盛期だと言えるだろう。無論、当時を生きていた人々にとつて、このときが義継政権の最盛期であるなどとは思ひもよらなかつたろうが、後世に生きている我々は、この時期を越える義継政権が二度と現れないことを知っている。実際、これ以後の義継政権は、というより三好政権そのものが、奈落の底に引きずりこまれるかの如く衰退の道を歩んでいくことになるのだが、それについては、今述べるべきことではないだろう。

兎にも角にも、永禄八年六月から数ヶ月間、義継政権は最盛期を謳歌していた。

最盛期…。

一言でそう言っても、三好義継と先代である三好長慶ではやはり違うわけで、長慶の最盛期と義継の最盛期を見比べてみると、異なる点が多かった。

まず、大名権力という点で見たとき、絶対的な独裁君主だった長慶に比して、義継は比較的弱体である印象を否めなかった。まあ、ほとんど土俵際まで追い詰められていた三好家を復興させ、天下人にまで押し上げた大英雄たる長慶と、その跡目を継いだに過ぎない義継では、家臣たちの目や接し方も格段に違うわけで、彼に養父と同等の権力を期待するのは、難しいというべきだった。

そして、家臣団の権力も格段に高まった。例えば、ほとんど筆頭重臣といってよい存在になりおおせた松永弾正久秀などは、義継の君主権を脅かすまでの権勢を誇るようになっていた。彼による篡奪を辛うじて防いでいるのは、彼と並ぶ宿老衆、即ち三好三人衆と称される三好日向守長逸、三好下野守政康、岩成主税助友通の三人が

強い同盟関係を保ちつつ、弾正と対峙してきたからだ。三人衆一人の力は、確かに弾正には遠く及ばないが、彼らが同盟して結託している限り、その勢力は決して弾正に劣るものではない。三好家からの独立ではなく、三好家そのものの乗っ取りを最大の宿願としている弾正にしてみると、三人衆と対立して、肝心の三好家が分裂してしまうことは困るのである。ゆえに、義継としては、弾正と三人衆の勢力を上手い具合に制御、調整しつつ、その上に調停者として乗っかっていれば、君主としては無難な立場を維持できるわけであるが、それでは長慶時代の如き君主独裁制を確立することは難しい。要するに、独裁者であった長慶とは違い、義継は調停者に過ぎないのだ。いずれにしても、義継の君主権力に匹敵する力を握った家臣団勢力が、確実に二つは存在するわけで、そこも長慶時代とは大きく違う点であった。

とまあ、一見、順風満帆に見える三好政権も、内部事情はいろいろと複雑な問題を抱えていたわけである。そして、三好義継は、足利義輝滅亡後の山城国の扱いを巡り、頭を悩ませていた。

当たり前の話ではあるが、山城国には平安京がある。第五十代桓武帝以来、平氏政権期の福原や鎌倉時代の鎌倉という例外を除いて、八百年近くに渡り、まがりなりにもこの国の中心であり続けた空前の大都市は、室町＝戦国の世においても変わらぬ存在感を保っていた。

その都を、山城国を、いったい誰が支配するのか。無論、三好氏の支配下にあることに変わりはないのだが、三好氏の中で誰が京都と山城国を管轄するのか。これが目下、三好家の急速な問題となりつつあった。

「これまで、御屋形様より京都支配を委ねられてきたのは、我らだ」と、強く主張していたのは、三人衆筆頭格の三好日向守長逸であり、彼に続く三好下野守政康であった。長逸は飯岡城主として山城国南部地域を統治し、かつ実質的な京都奉行として、朝廷や幕府と

の折衝に当たってきたという実績がある。しかも、今は亡き長慶（といっても公には生きていたことになっているが）より直々に命じられたと言う自負もあった。また、三好政康にしても、木津城主として、山城国内に領地を有しており、長逸の補佐として京都支配に長らく参与してきた。

何ゆえ今になって山城国の取り扱いが問題となってきたのかと言えば、詳細を言い出せばきりがないわけで、簡潔に説明すると、要するに松永弾正久秀が、自分も山城支配に参与する資格があると主張しだしたからであった。弾正としては、先の將軍肅清において最大の功績を挙げたと言う自負があった。動員兵力も三人衆より多かつたし、足利周膏をひっ捕らえて殺したのも彼なら、足利覺慶を幽閉しているのも彼だった。それなのに、山城国と京が引き続き三人衆の影響下に置かれるのは納得ができない…、という理屈だった。

將軍家崩壊後、山城国と京の存在感は俄かに高まっている。何しろ、ここを押さえる者は、即ち次期將軍となる足利義栄を影響下に置くも同義となるからであった。今の三好家では、義栄は、当主たる義継に次ぐ権威の象徴であり、最終的な主家篡奪を目論む弾正にしても、義栄だけは何としても抑えておきたかった。

かくて両派の対立が深刻化しだしたわけだが、決定権を握っているのは、言うまでもなく義継であった。それゆえに、両派の有力者が次から次へ、飯盛山の義継の下に伺候しては、

「弾正殿が適任と思われませう」

とか、

「日向殿が適任です」

などと言って、彼を惑わすのだ。悩みの種となるのも、無理ならぬことであった。

「京のことは、やはり日向守殿らに委ねるのが最上策と心得ませう」

義継政権の最高顧問、あるいは相談役と言うべきか、ともかく絶大な権威を持って三好一族内に君臨している最長老、三好笑岩の言

葉に、義継は素直に頷いていた。

「ですが、弾正は承諾しますか？」

義継は不安だった。たかだか山城国と京の管轄権争い如きで、三好政権が松永弾正と三人衆により分裂するようになってはたまらない。より上手い具合に軟着陸させる方法はないものかと、必死になって考えた末に、経験豊富な笑岩入道を、高屋城より呼び寄せ、その意見を聞いてみることにしたのだった。

「御家の総大将は、若殿でござる。弾正が何と言おうと、弾正は若殿の家臣に過ぎませぬ。若殿の決定に従えぬなら、それは即ち謀叛人も同義」

と笑岩は言つて、ぽんと胸を張った。けれども、事はそう単純ではあるまいと、義継は苦笑いした。ただでさえ、三好政権の後釜を狙い、虎視眈々と畿内情勢を覗っている周辺大名は多いのだ。内部分裂などしていたら、敵が押し寄せてくる可能性も否定できない。何しろ、足利義輝を殺害したばかりで、敵には三好家を攻撃するだけの十分な大義名分があるのだ。

とにかく、何かにつけて厄介なことだと、義継は困ったように溜息を吐いた。

飯盛山城の夏は、長慶時代のそれと何も変わらなかった。

纏わり付くような蒸し暑さにうんざりとしながら、義継はその場にごろりと寝転がった。

「義継殿、御気分が優れぬとか。三好の御大将たるあなた様は、常に壮健でなければなりませんよ」

そんな風に、大御台所たる新寿院が言くと、義継はプイッとそっぽを向きつつ、「分かっております」とだけ言った。

「藤、義継殿を元気付けてやるのじゃ」

大御台はそう言つて、側に控えるお藤の肩をぽんと叩くと、何やら楽しそうに、ほほほと高笑いしていた。藤は恥ずかしそうに俯きながら、「はい」と頷いている。

義継は相変わらずそっぽを向きながら、去っていく大御台の背中など見向きもしなかった。

「で、そなたは大御台に何を言われてきたのだ？」

このところご機嫌斜めな義継は、日頃の鬱憤を晴らすかのような刺々しい言葉を吐くと、恐縮そうに畏まる藤の頭上に冷たい視線を向けた。

「ま、構わん。とりあえず、お主、大御台に仕えるのはやめて、俺に仕えよ。ああやって、いちいち小うるさい婆を見るのは、耐え難い苦痛だ。どうせ、俺の下に侍って、子でも作れと勧められているのだから」

そんな風に冷たく言い放つ義継に、藤は恥ずかしそうに頭を下げた。

「ふん。全く、皆は俺を何だと思っているのだ。大御台は子を作る道具としか見ておらず、重臣どもも、力を握るための神輿としか思っていない」

怒鳴り、詰り、自棄になる。このところ、義継はめっきり酒量が増えたという。今も酒盃を片手にぶらぶらと下げながら、空になったそれを鬱陶しそうに睨んでいた。

藤はそんな彼を眺めつつ、少しばかり悲しげに微笑んだ。そこにいたのは、彼女が想像してきた華やかな天下人とはまるで違う、どうにもならぬ現実の中で足掻いている哀れな少年に過ぎなかった。年齢十四、五歳にして、天下という途方もなく巨大なものを背負わされているのだから、無理もなかったが、勝手気ままに遊び呆けている同年代の少年たちの無邪気な姿を思い出すと、今の義継は可哀想としか思えなかった。

「お主もどうせ、俺の子を生み、力を握りたいと思っているのだから」

義継はお藤をぎろりと睨みつけ、プイツとそっぽを向いた。彼女はこの不機嫌な少年王の言葉一つ一つに畏まり、震え上がって、

「め、滅相ありません」

と、答えるしかなかった。

「ふん。まあ、いい。どうせ、俺との間に子供ができて、その子に家督を継承する資格はない。今は亡き義興様の御子義資殿が引き継ぐのだ。…大御台め。どうせ義資殿を手元に置くことができなかつたから、息のかかつたそなたを俺の下に差し向けて、子を産ませ、それを跡目に立てようとの魂胆なのだろう。だが、子が出来ても、俺が今は亡き養父上様の御言い付けに叛くとも思っているのか！」

酒が入っているためか、既に冷静な思考能力を失っていた義継は、ついつつかり、事情を知らぬ藤の前にて、長慶の死を暴露してしまつていた。少なくとも公には、長慶は生きているわけで、彼の死は政権の中樞幹部しか知らない超極秘事項であつた。それを漏らしたのだから、義継がハツとしたのも無理はない。

「…お主、今、何か聞いたか？」

彼は焦つた。こういうところから、万一にも長慶の死が流布していくようなことになれば…。ただでさえ迷走気味な三好家に止めを刺すことにもなりかねない。良くも悪くも、依然として三好長慶の存在、カリスマ性によって保たれているといつても過言ではないほど脆弱な三好政権なのである。長慶の死が露見すれば、虎視眈々と三好氏討伐を狙う諸侯だけでなく、政権内部からも不安の声が高まることになるだろう。それがどういふ結果をもたらすか、分からないような義継でもなかつた。

「聞いたであろう」

義継に強く迫られ、藤は困つた。聞いてない、とはいえないし、かといつて聞いたと言え、どういふ目に遭わされるかしたものでではなかつた。如何に彼女とて、未だ生きて、病氣療養中とされている長慶が、実際に死んでいたという事実の中に、どういふ意味が込められているか分からぬほど愚かではなかつた。即ち、国家機密だ。それを知ってしまったのだから、下手をすれば、口封じのため

に殺される可能性もある。

「もし聞いたとしても、誰にも言うなよ。もし他の誰かに言ったな



ら……。俺はお主を殺さねばならなくなる。いや、お主だけではない。お主と関わり合いのある者、即ち家族から友人、同僚、さらにはお主とたつた一言でも喋った者まで、悉く皆殺しにしなければならなくなる」

「…は、はい」

義継の念押しは、あどけない少女を震え上がらせるに十分であった。うつかりと喋ったりすれば、それこそ地獄以上の地獄が自分の周りに降り注ぐことになる。それでも、ここで自分を手討ちにしないところは、義継なりの優しさなのかもしれない。なかつた。

「こうなつた以上、仕方がない。そなたは以後、正式に俺の側室に迎えてやる代わりに、大御台とは二度と会うな。文のやり取りをすることも許さん」

とだけ言つて、彼はすつくと立ち上がり、そのまま去つていった。その直後、彼女の下に数人の屈強な兵士がやってきて、護衛と称したまま、そこに居ついてしまった。監視であることは誰の目にも明らかであつたが、殺されないだけマシだと、ただ諦めるしかない哀れなお藤であつた。

その後。

三好義継は三好長逸、三好政康、岩成友通の、いわゆる三人衆に山城国の支配権を一任し、三名をもつて京都奉行に任命すると発表した。松永弾正久秀は猛反発したが、義継はまるで聞く耳を持たず、「これが余の決定である。逆らう者は、どれも反逆者と見做す」と、強い口調で押し切つたのであつた。

【落日編】第126章 内藤宗勝戦死

山城国と京の支配権を獲得し、ようやく松永弾正久秀と同じ舞台に立つ権利を得た三人衆は、今やすっかり勢いづいていた。特に、三人衆の中でも一番の強硬派たる岩成主税助友通などは、この勢いのままに松永弾正勢力の一掃を図るべきだと、声高に主張していたのだった。

「弾正方の有力者といえば、まず実弟の内藤備前守であろうな」

岩成友通を宥めるように、三好日向守長逸が言つと、

「篠原大和守長房も同様だがな」

付け加えるように、三好下野守政康が続いた。

「内藤備前は丹波一国のみならず、若狭や丹後にも大きな勢力を持っている。備前守の実力は、決して兄に劣るものではない。…この兄弟が結託している以上、如何に我らが山城を抑えたとして、松永兄弟の勢力には遠く及ばぬ」

長逸が苦りきった顔をして呟くと、三人衆は揃いも揃って、困つたように溜息を吐いた。

考えてみれば…、いや、考えてみるまでもなく、三人衆の勢力基盤たる山城国は、大和の松永弾正と丹波の内藤備前により包囲されているようなものだった。何しろ大和は山城の南隣であるし、丹波は北隣にあつた。万一のと看、松永軍は南北から同時に進撃してくるだろう。そうなれば、三人衆に勝ち目はない。

「ならば、弾正か備前か、どちらかを潰さねばなりませんな」

と、岩成友通が言えば、

「そうよなあ」

三好長逸は何やらジツと考え込んでいるようだった。

「そういえば、丹波では、赤鬼などと称えられている赤井直正なる男が、備前守と対立していると聞きますが…」

「…赤井直正？」

政康の言葉に、長逸が首を傾げると、

「丹波黒井城主であった養父の萩野伊予守とか申す男を、酒宴の席で殺害し、まんまと黒井城を乗っ取った男です。ただ、奴の兄である赤井家清は、弘治三年（一五五七年）頃に備前の兵に敗れて戦死しており、それ以後は備前に臣従していたようです」

岩成友通がすかさず説明し、長逸は「なるほど」としきりに頷いていた。

「で、その赤井直正が、最近になって活発な動きを見せるようになってきた、というわけか？」

「はい。何しろ、奴の妻は、前関白左大臣近衛前久卿の妹君とのこと。先の將軍肅清で、我らは近衛の姫である慶寿院を殺しましたからなあ。奴はカンカンだそうですよ。まあ、それだけでなく、備前との対立を度々前將軍家に調停してもらっていたようですから、將軍家を殺した我ら、特に松永弾正の弟たる内藤備前に反発するようになったのではありませぬか」

政康の説明に逐一頷きながら、日向守長逸はしきりにニタニタと不敵な笑みを漏らしていた。

「なるほど……。だが、それにしてもおかしな話ではある。近衛前久卿は、既に我らの義拳を認めておられる。義栄公の將軍就任も、前久卿がお膳立てしてくれる手筈になっておるのだ。それなのに、赤井某とかいう奴は、近衛の出たる慶寿院を殺した我らを恨んでおるのか？」

「ま、近衛云々の話は、表向き理由でしょうがね」  
すかさず政康が口を挟むと、長逸もまた静かに頷いた。

藤原北家嫡流五摂家筆頭の近衛家当主たる前久は、朝廷内における親三好党の領袖であり、三好政権を支える有力者の一人であった。先の足利義輝肅清を真つ先に公認したのも彼なら、足利義栄の征夷大將軍就任を全面的に支援しているのも彼であった。

「とりあえず、近衛卿のことはともかく、赤井某は使えるな」

にやりと相も変らぬ不敵な笑みをその満面に浮かべつつ呟く長逸

に、  
「まずは内藤備前を潰しましょう。さすれば弾正の力も半減いたします」

と答える岩成友通であった。

#### 丹波八木城。

ここは内藤備前守宗勝の居城である。正五位上備前守、丹波守護代の地位にある彼は、永禄八年（一五六五年）七月上旬頃も、城内にあつて忙しなき政務に励んでいた。

今でこそ松永弾正久秀の弟と見られることが多くなった彼であるが、けれど兄たる弾正より早くに国持大名となるなど、出世ペースは決して兄に劣っていたわけではない。今だって、確かに三好家の筆頭宿老となり、三好政権を牛耳っている兄に比べれば見劣りするが、それでも三好家の宿老格の重臣であるし、丹波一国三十五万石を中核に、若狭や丹後にも影響力を広げている家中屈指の実力者であることに変わりはないのである。

そんな彼だから、その動向は、当然、三好家中の注目的であった。そして今、彼の膝元たる丹波国内で赤井直正が兵を挙げようとしている。誰もが、これをどう処理するのか。宗勝の打つ次の一手に注目せずにはいられなかった。

「赤井直正は黒井城に三千ほどの兵をかき集めたそうです」

重臣の報告に、宗勝はうんざりとしたように溜息を吐いた。

「父上、これは早急に赤井攻めを敢行し、災いの芽を断ち切っておくべきかと存じます」

そう言うのは、彼の息子で、従五位下飛騨守の栄位栄職を賜っていた内藤忠俊（後の如安）であった。今年で十五歳になる彼は、幼くして聡明で知られ、宗勝にとっては、目に入れても痛くない自慢

の息子だった。

「そうよなあ」

宗勝はしばらくの間、腕組みながら何やらジツと考え込んでいた。このまま赤井直正の反逆を許しおいては、丹波国主たる内藤家の権威や威勢は低下する一方である。この辺りで、再び内藤家の力の凄まじさを丹波の国衆どもに見せ付けて、支配力の安定と増強を図るのも悪くない。

「動員すれば、如何ほどの兵が集まるかな？」

と、宗勝が尋ねると、

「一万以上は確実です」

間髪いれずに、重臣の内藤貞弘が答えた。

「一万以上、か。…だが、今回の戦は内藤家の力を見せつけるためのものだ。一万では少ない。一万五千は動員する。それぐらいの覚悟で動員をかける」

「い、一万五千？」

「そうだ」

「…承知いたしました」

無謀な動員であることは、宗勝とて承知していた。だが、三好政権内で三人衆と対峙する兄のことを考えれば、ここで松永兄弟の圧倒的な力を見せつけ、旗幟を鮮明にしている諸将を引き付けておく必要性があった。一万五千と言う兵力は、自分の力を満天下に誇示する上で、申し分ない大軍であった。

「されど、父上。赤井直正は名うての名将。決して油断なされぬよう、この忠俊、伏してお願ひ申し上げます」

と、飛騨守忠俊が言つと、

「わかっているさ」

歴戦の名将たる宗勝は、ぼんと胸を叩いて、自信に満ちた笑みをその顔に浮かべた。

内藤宗勝が八木城を発したのは、永禄八年七月六日のことであつた。

総勢一万五千に達する空前の大軍を従えての出兵である。人々は、その数に、ひたすら度肝を抜かれていた。何しろ、宗勝の領土は、丹波一国三十五万石と、若狭、丹後の一部など、合わせても四十万石には満たない。平均的な軍役は、一万石あたり二百五十人とされているから、仮に宗勝の所領を四十万石と仮定するなら、一万人が平均的動員兵力ということになる。しかし、実際にはそれを遙かに上回る一万五千人を動員したのだ。無理に無理を重ねた大動員であることは、あえて言うまでもないだろう。

とにかく、宗勝はこの戦に全てを賭けるつもりでいた。相手は、名将と名高き赤井直正である。負けるとは思っていないが、苦戦する可能性は十分ありうるのだ。だが小豪族に過ぎない赤井氏との戦いで苦戦を余儀なくされるようなことにもなれば、守護代たる内藤氏の面子は丸潰れとなる。政敵たる三人衆も、ここぞとばかりに自分の失策を咎めたててくるだろうし、何より、波多野秀治など、潜在的な反内藤勢力が再び牙を剥きかねない。圧倒的な兵力を動員した以上、圧倒的な勢いで大勝するしか道はないのだ。

黒井城には三千の赤井勢が立て籠もっていた。

対するは一万五千の内藤勢である。戦力差は歴然。まさに絶体絶命の窮地に追い込まれていたはずだが、当の赤井直正本人は、別段不安がる風でもなく、いつものように淡々とした顔で、己が勝利を毛ほども疑っていない様子であった。

「勝ち目はあるのですか？」

援軍として、直正の下に駆けつけていた甥の赤井忠家（故家清の嫡子で、名目的な赤井一族の棟梁）が、叔父とは対照的な不安げな顔をして尋ねると、

「勝てるぞ」

直正は淡々と答えて、胸を張った。

「忠家殿は何やら我らが孤立しているように思われているようだが、そんなことはない。いざとなれば波多野秀治とて、備前に刃を向けるだろうし、何より、三好家内部が一つに纏まっていけない状態では、少なくとも三好が内藤に援軍を出すことはない」

「…どういう意味ですか？ 松永弾正は必ず弟のために援軍を出すと思われませんか？」

赤井忠家はまだ若い。叔父たる直正の言葉が、いまいち理解できなかった。

「くつくく。ま、そのうち分かる。三好家は既に一枚岩ではないということだ」

と言つて高笑いする叔父に、忠家は不思議そうに首を傾げながらも、ともかくは、叔父の絶対の自信とやらに賭けてみることにした。いずれにしても、今回の戦は、彼にとつて亡父の敵討ちなのだ。負けるわけにはいかない。内藤備前守宗勝を討ち取り、彼によって殺された実父家清の無念を晴らさねばならないのだ。

「ところで、忠家殿には、この城の守備をお願いしたい」

ふと、直正がそう切り出すと、

「それがしが？ 叔父上は如何なさるおつもりか？」

忠家は思わずきよとんとして首をかしげた。

「わしにはわしの考えがある。三好が分裂しているとはいえ、眼前の内藤備前の軍を破らぬことには我らの未来はない。こんな城で、暢気に籠城戦など決め込んでいては、いずれ内藤勢にやられる。数の差は歴然としているのだからな」

「…ではありましようが、さりとて、如何にして敵を破るおつもりですか？」

「ふふふ。案ずるな、忠家殿。そなたはわしに成り代わつて、見事城を守ってくればいい。わしは五百騎ほどの兵を率いて、とりあえず城を出るつもりだ」

戦巧者の直正のこと、何か考えがあるに違いないと、忠家はそれ

以上、尋ねたりはしなかった。実質的に赤井一門の棟梁となつてゐる直正の言葉なら、従つしかないと思つてゐる律儀な忠家であつた。

七月八日。

内藤軍一万五千は黒井城を取り囲み、赤井勢二千五百余りの兵は、同城内に立て籠もり、あくまでも内藤軍との決戦の構えを崩さなかつた。

黒井城城下町外れの小さな寺の中に本陣を置いた宗勝は、そこで降伏勧告の使者が斬られたことを知ると、当然のように烈火の如く激怒した。

「赤鬼などと称されて調子に乗つてゐる田舎者に、この内藤備前守が舐められてたまるかッ！」

と、散々怒鳴り散らした拳句、全軍に対し、総攻撃を開始するよう命じたのだつた。

かくして決戦が始まつた。熾烈な猛攻を続ける内藤勢に対し、赤井勢は兵力的劣勢にもかかわらず、果敢な抵抗を続けていた。

黒井城を守つてゐるのは、赤井忠家である。今年で十六歳になる若き大將は、朝からずっと、声を張り上げ、喉を枯らして、兵たちを叱咤し、自ら最前線に立つて戦つていた。

火縄も矢玉も、とりあえず十分すぎるほどにあつた。それは田舎豪族に過ぎない赤井氏の所有量としては、違和感を覚えずにはいられぬほどであつたが、とにかく、あるに越したことはないのである。「敵を引きつけよッ！ 組頭の下知があるまで撃つてはならんぞッ！」

忠家の大音声が響き渡るたび、鉄砲足軽たちは、適度の緊張感を保つたまま、怒涛の如く押し寄せる内藤勢に向けて、照準を定めていた。



「放てッ！」

頃合と見た組頭が、忠家に勝るとも劣らぬ大声を張り上げて命じると、鉄砲足軽たちは、待ってましたとばかりに、一斉に引き金を引いていった。

ダダダダダダダダン

けたたましい銃声が響き渡り、その瞬間、内藤軍の兵士が一斉に倒れていった。南蛮より渡来して以来、たちまちのうちに弓に代わる最強の飛び道具となりおおせた火縄銃の威力は、確かに絶大であった。

けれど、だからといって弓矢に一切の価値がなくなったわけではない。威力はあれど、連射が効かないという致命的欠陥を抱える火縄銃の補完武器としては、弓矢は未だ大きな力を保っていた。

「弓隊！ 放てッ！」

弓兵足軽が次から次へと矢を放つと、空はたちまち無数の矢でいっぱいになった。その様は、いつ見ても壮観なものである。続いて投石足軽が、無数の礫つぶてを放り投げ、迫り来る敵兵の出鼻を挫いた。

それでも、圧倒的な内藤勢の全てを倒せるものではなかった。彼らはやがて城門に殺到し、丸太を思い切りぶつけて、その破壊に躍りになった。城方も、城壁の上より熱湯を浴びせたり、弓を放ったり、銃をぶつ放したりして抵抗したが、もとより多勢に無勢。内藤勢の人海戦術の前には、大した意味をなさなかった。

「申し上げます！」

内藤宗勝の本陣に、使番が慌しく駆け込んできて、

「城門、突破したとの報告にございます」と、告げた。

宗勝は別段驚きもせず、ただ「そうか」と頷いているだけだった。

床机の上にでんと腰を構え、ジツと城のほうを睨むように見つめていた。

城門が落ちたなら、陥落は時間の問題である。宗勝は勝ったと思っていた。後はひたすらに攻めるのみであった。

「勝利、か……」

何度味わつても、勝利というのは良いものだった。

小うるさい赤井直正を滅ぼしたなら、丹波は完全に内藤家のものである。いつそ家督を忠俊に譲り、彼の成長を見守るのも悪くないかもしれぬ。などと心の中に思い描きながら、宗勝はすつくと立ち上がった。

「遊軍を繰り出し、一挙に総攻撃を加えよ。赤井方に属した者に情け容赦はいらぬ。手当たり次第、皆殺しにするのだ」

居並ぶ家臣たちに向かつて、いつものように命令を下す。当たり前前の光景なのだが、ふと不思議な感じがした。何と言つても、彼らは皆、本来内藤家の家臣であつて、自分の家臣ではないのだ。自分とはというと、本来松永甚介長頼と言つて、内藤家とは縁もゆかりもない存在だった。それが、何の因果か、内藤家に婿入りし、三好家の勢威を背景に乗っ取る形となつてしまった。

今は亡き岳父国貞のことを思い返すと、悪いことをしたような気がした。無念だつたらう。自分のために当主の座を追われ、最期は波多野勢に敗北し、戦死してしまつた。

「岳父上、あなたが宿願としていた丹波統一も、いよいよ完成いたします」

宗勝はぼんやりと呟きながら、再び床机の上にとっかかりと腰を下ろした。高ぶる気持ちを堪えながら、フウと静かに溜息をつくとき、彼は再び城のほうに目をやった。

外が何やら騒がしい。

宗勝は不機嫌そうに家臣を睨みつけると、

「調べてまいります」

阿吽の呼吸で、数人の家臣たちが本陣より去っていった。しばらくして…。

「申し上げますッ！」

陥落も間際となった頃、勝利を確信した宗勝の下に、先ほど去っていった家臣たちが慌しく戻ってきた。

「て、敵襲にございますッ！」

「敵襲？」

何を言っているのだと、宗勝以下内藤家の重役たちは、きよとんとしたように揃いも揃って首を傾げていた。

「数は五百ほど。猛然と押し寄せ、既にこちらに迫っておりますッ！」

「な、なんだと？」

宗勝はすつくと立ち上がり、慌しく陣幕の外に飛び出した。すると、そこには城のほうで繰り広げられているはずの死闘が、そつくりそのまま、この場で繰り返されていた。

「あ、赤井の伏兵か？」

側に控えている家臣に尋ねると、

「はッ！」

家臣たちは大きく頷いた。

世間からは『丹波の赤鬼』と怖れられ、悪右衛門と称されている猛将赤井直正が率いる精鋭部隊は、混乱する内藤軍本隊を蹴散らしつつ、一路、敵方総大将内藤備前守宗勝を目指して、怒涛の如き攻勢を繰り返していた。

「目指すは内藤備前の首ぞ！ それ以外はいらん。桶狭間の奇跡を、この丹波に再び蘇らせるのだッ！」

直正の凄まじき叱咤激励に、兵たちは「おおおうッ」と地響きの如き喚声を張り上げた。

赤井勢は猛然と進み、そして片っ端から内藤勢を蹴散らしていった。そして、ついに内藤備前守宗勝の下に辿り着いた。まさに赤鬼さながらに、全身を真っ赤に染め上げた豪傑は、鉄色の甲冑に身を包んだ宗勝をぎろりと睨み付けた。

「兄の仇、今こそ晴らすぞ！」

直正が怒鳴ると、

「……そうか」

宗勝は観念したように、ハアと溜息を吐いた。

既に宗勝の旗本衆は蹴散らされ、代わりに無数の殺気立った赤井勢が取り巻いていた。もはやこれまでと、全てを諦めるには十分すぎる危機的状况にあった。

「だが、俺とても天下に聞こえた男。この首、容易くはやらぬぞ」  
そう言いながら、かつて主君長慶より授けられた太刀を抜き払い、ゆっくりと身構えた。剣術は余り得意ではない。けれど、自分は堂々たる武士。丹波の名族内藤氏の当主なのだ。見苦しい死を遂げるわけにはいかない。所詮、下級身分出身の男の最期とはこんなものなどと蔑まれたくはなかった。

「我こそは、正五位上備前守内藤宗勝であるッ！」

張り上げる大音声。これで、自分の波乱に満ちた生涯も終わるのだ。そう思うと、何とも言えず不思議な感じがした。あっけないものだと心の中に思いながら、彼は猛然と、思い切りよく、豪傑と名高き鬼に向かって突進していった。

【落日編】第127章 丹波処理

永禄八年（一五六五年）七月。

青い空。小ぶりの入道雲が西に東に、至る所に聳え立ち、吹き抜ける生暖かい風の中には、明けたばかりの梅雨の香りがまだ仄かに漂っている。

これといって不思議なことはない、至極ありふれた光景。けれど、何となく物悲しいのはなぜだろう。見上げてみると、あれだけ高かった陽も、西の空に引きずりこまれるようにして、次第に傾き始めていた。

内藤備前守宗勝の死は、いろいろな点で、三好家に大きな衝撃をもたらしていた。少なくとも、旭日の勢いで勢力を拡大していた長慶時代とは違うのだと言うことを、これ以上ないほど明確に表現してくれた。満ちた月は、必ず欠けるといふ。もはや衰退以外に歩むべき道はないのかと、人々は諦めにも似た気持ちで、三好家という巨艦をぼんやりと眺めていた。

「備前、か」

義継は、温和ながらも厳しかった重臣のことを思い返しながらか、ハアと溜息を吐いた。

「宿老衆の評議の結果、備前守様の跡目については、飛騨守殿に継がせることに決まったそうです」

伊沢大和守が報告のためにやってくると、義継はただ「そうかと頷くだけだった。

「どんどん死んでいく。義継は何とも言えず物悲しい気持ちを隠しきれなかった。

もう父はいない。養父だっていない。叔父は皆死んだ。従兄弟の義興も、そして宿老格の重臣であった内藤備前までも死んでしまった。いつたい、これから何人の死を見送らなければならぬのだらうか。いや、自分だって彼らの如く思わぬ死を遂げるかもしれない

のだ。そう思うと、義継は無性に怖くなった。

「飛驒守と申しても、まだ十五かそこらであろう。…赤井直正が勢力を拡大している中、丹波をまとめ切れるのか？」

ふと疑問を抱いたらしい彼がそう尋ねると、

「日向守様が総勢二万の兵を率いて、丹波に出兵することも決まったそうにございます」

と、伊沢大和はすかさず答えた。

「…日向が？」

「はッ！」

弾正ではないのか。義継は苦笑いしつつ、「まあよかろう」と静かに呟き、そしてその場にごろりと寝転がった。

三好義継の正式な許可を得て、三好日向守長逸を総大将とし、下野守政康、岩成主税助友通を副将とした、いわゆる三好三人衆軍二万は七月十二日、丹波に向けて出兵した。松永弾正久秀はというと、居城たる多聞山に閉じこもったまま、三人衆たちの積極的な軍事活動をジツと見守っているようであった。

三人衆軍は十四日、八木城に入り、内藤飛驒守忠俊と合流した。忠俊は今年で十五歳になったばかりのあどけない少年だが、亡父の志を引き継ぎ、丹波を統治せんと大いなる気概を燃やしていた。とりあえず亡父が率いていた軍勢の残党一万程度を束ねつつ、三人衆軍の到着を待っていたのだった。

「そなたが、飛驒殿か？」

援軍部隊の総帥たる長逸が、じろりと忠俊を睨みつけると、

「はッ！ 飛驒守忠俊にございます」

忠俊は恭しく頭を下げて、恐縮そうに畏まった。

「ま、せいぜい頑張りたまえ。亡き父上の武名を辱めることのないようにせよ」

そう言って、長逸は足早に彼の下から立ち去ってしまった。はな

から、彼など眼中にもないかのような淡々とした仕草に、忠俊はムツとしたが、けれど相手は今をときめく三好三人衆の筆頭格に位置している最高実力者であり、下手に怒りを買えば、内藤家は丹波国の支配権を喪失することにもなりかねないのである。忠俊としては、ひたすら恭順の意を示し続けるより他に仕方がなかった。

内藤備前守宗勝を討ち取って以後、黒井城主たる赤井直正の勢力は劇的に拡大していた。

既に赤井軍の総兵力は五千を数えており、その勢力範囲も、旧来の氷上郡だけでなく、その周辺地域にまで広がるようになった。八上城主の波多野秀治など、丹波国内の有力な国人からもひっきりなしに使者がやってきて、いざとなれば、内藤忠俊を見限り、赤井方に与力するだろうと、わざわざ明言する殊勝な者もいたぐらいであった。

けれど…。

三好三人衆が二万の大軍を持って乗り込んでくると、情勢は再び一変した。敗北したとはいえ、内藤忠俊の下には、依然として一万に届かんとする大軍が犇いており、これに三人衆軍を加えると、三好方の総兵力は三万にも達するのだ。一方の赤井勢は、どれだけかき集めても五千から六千程度に過ぎない。不利は誰の目にも明らかだった。内藤宗勝軍を撃破したような奇跡など、そう何度も続くまい。ひとたび赤井直正に誼を結ばんとした国人たちも、こうした情勢の中では、積極的に赤井氏を支援できるものでもなく、ただひたすら国許に閉じこもって、三好軍の出方を窺うようになった。

「叔父上！」

歴然たる形勢不利に震え上がった赤井忠家が、黒井城は直正の下に慌しく駆け込んできたのは、七月十五日のことであった。

「叔父上は三好方が援軍に出てくることはないと言われましたが、ついに三人衆が二万もの大軍を引っさげて出張って参りましたぞ。

…此度ばかりは、先の戦のようにはいきますまい。敵は三万。こちらには五千、よくて六千。…勝負になりませんぞ！」

忠家は、だから言わんことではないと、ひたすら叔父を咎めたてるように怒鳴っていたが、一方の直正はそんな甥など意に介する風もなく、「気にするな」と、相も変らぬ冷静さを保ったまま呟いていた。

「き、気にするなと申されますが、相手は三万ですぞ！ どうやってこの難局を打開なさるおつもりか？ その手立てを是非お伺いしたい」

「手立て、ねえ」

激昂する甥に、冷静さを保つ叔父。けれど、若さゆえに感情が先にたつ忠家は、まるで他人事のように冷静沈着を貫いている叔父の態度が、何よりも許せなかった。

「叔父上！ それがしはこれまで叔父上を事実上の大将と崇めて参りましたが、赤井一族の大将はそれがしにござる。…何か策があるなら、お教え願いたい。叔父上が指揮を執られることに、異存などありませんが、それがしを若輩とみて軽んじることだけは許せませぬ！」

「…若輩などと、軽んじたことは一度たりとてないが…」

直正は「ははは」と、困ったように苦笑いすると、おもむろにすつくくと立ち上がり、そして庭先のほうへとゆっくりと歩いていった。何を言うべきか、何と言うべきか、とにかくいろいろ考え抜いた末に、

「三好とは和議を結ぶつもりである」

と、言った。

「わ、和議？」

思いもよらぬ言葉に、素っ頓狂な声を張り上げて驚く忠家に、直正は「和議でござる」と、念押しするように言った。



「さ、されど、和議など結べるものでございますか？ 三好方とて、我らを攻め滅ぼして丹波の安定を図る絶好の機会。これをみすみす見逃すとは思えませぬが……」

忠家の疑問も尤もである。が、直正は相変わらず自信満々な笑みを浮かべて、問題はありませぬと、きっぱりと言い切った。

「忠家殿はまだまだお若い。それゆえに、未だ大局的に物事を見ることが出来ぬ様子。それでは、立派な御大将とはなれませぬぞ……」

「よく考えられよ。今の三好家の実態を。…なぜかは分からぬが、ここ最近、三好家は不協和音ばかりが目立つようになってきた。その原因が何だか、忠家殿にはお分かりか？」

じろりと、睨みつけるような叔父の視線を感じながら、

「…弾正と三人衆の対立でござるか？」

彼は辛うじて合格点の答えを返した。

「その通り。修理大夫が病に陥っているのとか何か関係があるのかもしれんが、この際、そんなことはどうでもよい。とにかく、あれだけ一枚岩だった三好家が二つに割れていることだけは確かだ。即ち、我らはこれを利用する」

「利用？」

「そうだ。時に忠家殿が、三人衆…、いや日向守長逸の立場であれば、丹波がどういう存在であれば一番良いと考えるか？」

「それがしが日向の立場なら？」

忠家はきよとんとしたように、しばらく腕組みながら、ジツと考へ込んだ。自分が日向守長逸なら…。そんなことは、これまで余り考えたこともなかったが、とにかく言われるまま、自らを長逸と仮定し、その上で、最善の策というものを考えてみた。

「…丹波を自らの影響下におくことが出来れば、それに越したことはないかと……」

そんな彼の答えに、直正はにたりと微笑んだ。

「なら、それが難しいとなれば、どうする？ 即ち、丹波は引き続

き政敵の影響下にあり続けるとしたら？」

「……」

「もしも丹波を自分の影響下に置きぬとなれば、日向としては、丹波の弱体化を図るだろう」

忠家が答えるまでもなく、そう続ける直正の言葉に、「なるほど」と、忠家はしきりに大きく頷いていた。

「さて、ここからが本題だ。もし日向が丹波の弱体化を図るとして、どうすれば丹波は弱体化すると思う」

直正はジツと、未だ若き甥を見つめると、不意にけらけらと高笑いして、

「要するに、敵、即ち我らを温存しておくことさ」と、言った。

自信たっぷりだった赤井直正の予想通り、和睦交渉は思いのほか上手くいった。

七月十七日。

三好方の全権代表たる岩成友通と、赤井方全権の赤井直正の間に結ばれた条約は、一見すると、どちらが勝者で、どちらが敗者なのか、いまいち分からぬほど絶妙なものであった。要約すれば、三好にとっても赤井にとっても、双方の面子が潰れないような玉虫色の和議であったが、大名三好氏を相手にこれほど対等な和議を結ばせた赤井直正の力量は凄まじいといべきだった。

兎にも角にも、大名三好氏と小大名赤井氏との間に結ばれたものとは思えぬほど、奇妙な和議であったが、その中でも特に、赤井氏が三好氏に臣従するなら、今までに自分たちが得た戦果は悉く追認するという条文が若き赤井忠家には信じられなかった。何しろ、赤井氏は元から三好家に臣従していたわけだから、臣従云々の話は現状維持の確認に過ぎない。その上、拡大した領地は悉く追認するというのだから、条文だけ見れば、赤井氏の全面勝利といっても過

言ではなかったのである。もしも忠家が三好家の立場なら、こんな条件は絶対に呑まなかったろう。もつと厳しき条件を示して、三好の力を思い知らせようとしたりに違いない。別に三好家からしてみると、和議など結ばずともそれほど問題はないのだ。総勢三万の大軍をもって赤井氏など踏み潰せばいい。けれど、なぜか三好はこれを受け入れた。その背景には、三人衆と弾正久秀の間で繰り広げられる政争が絡んでいるとしか思えなかったが、もしそうだとするならば三好家も案外先は長くないかもしれぬと、思わずにはいられぬ忠家であった。

「どうだ、忠家殿。大成功だろう」

ひとしきり和睦協議を済ませて、堂々と黒井城に戻ってきた直正は、勝ち誇ったような顔をして、呆然と立ち尽くす忠家を見つめていた。

「我らは三好に臣従するのであって、内藤に臣従するわけではない。即ち、立場は内藤と同格になったのだ。領地も大きく拡大したし、申し分のない条約だとは思わんか」

「…は、はあ」

こつも上手くいくとは、夢にも思わなかった忠家は、ひたすら直正の洞察力の凄まじさを感じ入るばかりだった。はなから、こつなることを見越して内藤に喧嘩を吹っかけたのかと思うと、忠家にはもはや何も言えなくなった。

【落日編】第128章 覚慶脱出

永禄八年（一五六五年）七月。

夏の香りが辺り一帯に広がって、なんともいえぬ蒸し暑さに人々がまいり始めてきた頃。歴史と伝統が漲る大寺院たる興福寺の一角には、覚慶と言う坊主が、飽くことなき読経三昧の日々を過ごしていた。

言わずもがな、今は亡き前將軍足利義輝の実弟にして、十二代將軍足利義晴の血筋を受け継ぐ唯一の貴公子であった。兄將軍の死後、三好氏が強力に推す足利義栄に対抗しうる唯一無二の將軍候補でもあり、それゆえに三好氏、特に興福寺の膝元たる大和を支配する松永弾正久秀の強力な監視下に置かれていたのだった。

「覚慶様、御食事の支度ができませんでございます」

下僕の僧侶が、堂の中に閉じ籠もった覚慶の下に近づき、そう告げると、覚慶は何も言わず、ただ静かに頷いた。

こと、彼はここ最近、物思いに耽ることが多い。何ゆえ兄は死んだのか。自分はこんな窮地に追い込まれているのか。今のところ、自分は殺されていない。だが、いつ何時松永弾正の気持ちが変わらないとも限らないのだ。そうなれば、この命など、暴風の前の塵芥の如く、いとも容易く吹き飛んでしまふに違いなかった。

室町幕府第十三代將軍が、臣下により殺害されると言う衝撃的な事件が勃発してからというもの、畿内情勢は驚くほど混沌としてきた。

丹波では内藤宗勝が戦死し、後を引き継いだ忠俊は弱冠十五歳ときている。赤井直正は三好政権の直属大名という形で、事実上内藤氏から独立し、丹波国内は内藤、赤井の両立体制に入ってしまった。波多野氏などの従来の有力国人の去就も読めず、同国は再び、泥沼

の戦乱状態に陥りかねない状況となっていた。

また山城国を本拠地とする三好三人衆と、大和の松永弾正久秀の対立も激化し、直接刃を交えることこそなかったが、両者の対立は、三好政権の安定性をも揺るがしかねぬ政治的大問題として、政権関係者だけでなく、虎視眈々と畿内を狙う群雄たちも注目せずにはいられなかった。

そして…。

こうした状況を利用し、目的を完遂すべく奈良の町に続々と集結を始めていたのは、明智十兵衛光秀、細川兵部大輔藤孝、一色式部少輔藤長をはじめとする旧幕臣たちであった。その目的と言うのが、奈良に程近い興福寺に幽閉されている覚慶の奪回であることは、あえて言うまでもなく、集結した旧幕臣は、彼らの他に、和田惟政や仁木義政、三淵藤英などで、また大覚寺門跡である義俊（近衛尚通の子）などという僧侶もいた。

「覚慶様の周りには、常に数十人の兵が取り巻いているらしい」

と、和田惟政が切り出すと、

「さすがに弾正。警戒厳重だな」

細川藤孝が苦りきった顔をして、ハアと溜息を吐いた。

「だが、方法は幾らかあるだろう。幸い、弾正の目は、今、三人衆のほうに向いている。覚慶様を奪回するには、今をおいて他に時はないのだ」

十兵衛光秀がきつぱりと言うと、「そうよなあ」と、一色藤長や仁木義政など、居並ぶ幕臣たちは、それぞれに腕組みながら、深刻そうな面持ちをしつつ、深く考え込んでしまった。

「そういえば、その弾正だが、丹波の処理を巡り、三人衆…、特に主導していた日向守に抗議すべく、飯盛山に向かうと聞いたが」

そう言ったのは、三淵藤英であった。細川藤孝の実兄たる彼は、今は亡き義輝に奉公衆として長らく仕えてきたが、先の政変におい

ては、ちょうど御所を離れていたために難を逃れていた。しかし、主君最期の戦に間に合わなかったことへの自責の念は大きく、それゆえに、今は意地でも覚慶を奪回し、將軍家を復興させて見せると、大いに息巻いていたのだった。

「弾正が飯盛山に向かうとなれば、またとない奪回の絶好機であるな」

異母弟たる藤孝が応じると、

「詳細な日時は分からぬのか、三淵殿？」

仁木義政が三淵藤英に尋ねていた。

「おそらく七月中頃と思われる」

三淵に代わり、そう答えたのは和田惟政である。近江南部、甲賀地方に領地を有する土豪でもある彼は、当然、甲賀衆と称される忍者部隊を配下に持っていた。

「ならば、その辺りをもつて決行する以外にありませんな」

最終的には十兵衛光秀が言葉に、

「うむ」

と、皆が応じ、とりあえず、今日のところの評議は終わった。

七月二十日。

松永弾正は多聞山を発して、飯盛山に向けて出立していった。その豪華絢爛な出で立ちは、なんとも成り上がった彼の贅沢趣味を象徴しているようで、見る者聞く者、全てを圧倒するに十分な威力を持っていたが、

「下品すぎる」

偵察も兼ねて見物していた細川藤孝などは、そう言って、汚物でも見るかのごとく不快そうな顔をして、その場に唾をペツと吐き捨てた。

それはともかく、弾正が多数の兵を伴って飯盛山に向かった以上、彼らも行動を始めねばならなかった。即ち、如何にして興福寺に忍

び込み、覚慶を奪回するのか。いくら弾正がいなくなったからとて、彼の兵が覚慶への監視を解いたわけではないのだ。

問題は、如何にして松永勢を出し抜くかということであった。

興福寺の僧侶たちならば、それほどの問題はない。既に同寺の有力高僧は、和田惟政の派した間者を通じて、旧幕臣勢力に内通する意向を明らかにしていたほどだった。

幕臣側の兵力としては、和田惟政配下の甲賀衆が数十人ほどいたが、それ以外だと、細川藤孝の郎党である松井康之とか、明智光秀の郎党たる明智光春、明智光忠、三宅弥平次（後の明智秀満）、あるいは仁木義政、三淵藤英、一色藤長らの郎党数人ぐらいなもので、兵力というには余りにみすぼらしい、微々たる数であった。

彼らが行動を起こしたのは、七月二十八日は夜のことであった。

まず、和田惟政の忍軍が興福寺に忍び込んで、予め内通していた僧侶たちの力を借りつつ、裏門を突破すると、続いて細川藤孝、明智光秀、一色藤長らが突入し、残る仁木義政や三淵藤英らは、その郎党とともに、脱出路の確保及び周囲の監視のために、寺内には入らず、外でジツと待機していた。

一方、まんまと寺の中に侵入した藤孝、光秀、藤長らは、和田惟政に案内されるまま、覚慶のいる堂へと駆け足で急いでいった。時間が立てばたつほど、彼らの不利は明らかとなる。とりあえず、興福寺側の策動により、松永方の警戒は限りなく薄れていた。しかし、時がたてば、やがて彼らも正気を取り戻すだろう。即ち、それまでの間が、彼らにとっての勝負時であった。

覚慶はその日、いつもと変わらぬ静かな夜を迎えていた。

長らく僧侶して暮らしてきたからか、こつやつて何も無い簡素な部屋で眠ることに随分と慣れていた。…まあ、如何に將軍家に生まれただからとて、当時（天文六年、即ち一五三七年頃）は一向宗だの法華宗だの、強大な宗教勢力が入り乱れて攻防を繰り返したり、管領細川氏が栄華の絶頂を極めていたり、決して恵まれた環境にあるとはいえなかった。それゆえに元から贅沢を嗜む趣味など持ち合わせていないのだが、それでも、初めて寺に入った頃などは、味気ない精進料理に飽いたり、退屈な修行生活に耐え切れなくなって、何度逃げ出そうと試みたかしれなかった。

けれど、今やすっかり慣れてしまった。逃げたいと思う気持ちも完全に失せて、興福寺一乗院門跡たる役目を果たすべく、必死に働こうと言う意欲すら抱くようになった。

とまあ、そんな覚慶である。このままのんびりと寺の高僧として人生を全うできれば、どれほど幸せだったろう。けれど、激動の乱世は、足利將軍家に生まれ、將軍の座を継承しうる唯一にして最高の血を受け継いだ彼を、決して放つてはおかなかった。こつやつてすやすやと眠っている最中も、激動の時代という奴は、彼の身柄を求めて、静かに、けれど着実に彼の下に迫っていたのだった。

「覚慶様」

一瞬、夢かと思つて、覚慶は鬱陶しそうにごろりと寝返りを打つた。

「覚慶様！」

静かながらも、ドスの利いた声色に、覚慶は「何事だ！」と、叫ぶようにして飛び起きた。もしもいつもの小坊主なら、怒鳴りつけてやろうと、そんな風に思いながら、彼はそこにいる数人の屈強な男たちの顔を見つめた。

「お、お前たちは？」

月明かりに照らされて、微かに見えるその顔は、見覚えがあるよ



うで、ないようで、いまいちよく分からなかった。

「何者だ？」

覚慶が尋ねると、

「それがしは、今は亡き公方様にお仕えした細川兵部大輔藤孝と申します。ここに控えますは、同じく公方様にお仕えした一色式部少輔藤長殿、明智十兵衛光秀殿にございます」

と、幕臣たちを代表するように、細川藤孝がそう答えていた。

「兵部だと？」

覚慶とて、その名を知らぬはずはない。というより、実際に二条御所などで会つたりしているから、顔も薄々だが、何となく細川藤孝なのだろうということぐらいは分かった。けれど、何ゆえ彼らがこんなところにいるのか、それが覚慶にはいまいち分からなかった。「これより、覚慶様をお助け申し上げます」

藤孝が早速本題を切り出すと、「助ける？」と、覚慶はきよとんとした顔をして、彼らの顔をまじまじと見つめていた。

「左様でございます。覚慶様は、今や將軍の座を継承できる、唯一無二のお方でございます。覚慶様には、是非、我らの旗頭となつていただき、幕府再興に尽力していただきたく」

明智光秀がそう言つと、覚慶は困つたようにハアと溜息を吐くと、居並ぶ幕臣たちをぎろりと睨みつけて、

「そんなことが可能なのか？」

と、疑心暗鬼を隠せぬ面持ちで尋ねていた。

「可能にございます」

藤孝が断言すると、

「誠か？」

再び、覚慶が尋ねた。

「可能です」

そう言ったのは、一色藤長である。零落れたりといえども、三管さんか四職んししき（三管四職とは、管領となる三家、即ち細川、畠山、斯波と、侍所別当となる四家、即ち山名、赤松、京極、一色の七家の総称）

の一つに数えられたほどの名門一色家の当主は、その顔に絶対の自信を漲らせて、覚慶を見つめていた。

「…分かった」

覚慶とて、法衣を脱ぎ払ってしまったえば、兄に勝るとも劣らぬ野心家であつた。志半ばで殺されてしまった兄の遺志を受け継ぎ、将軍となつて幕府再興を実現する。少なくとも兄を殺した三好の擁立する足利義栄に將軍職を与えるわけにはいかないのである。ならば、自分が將軍となるより他に仕方がないではないか。

覚慶は法界を抜け出し、劍豪と称えられた兄をも葬り去つた修羅の世界に踏み出す決意を固め、ゆつくりと立ち上がった。

【落日編】第129章 松永弾正少弼久秀の反撃

誤算、と言い出せば、きりがないほど、このところ誤算続きの松永弾正であった。既に七月は過ぎ去り、八月、九月、十月と月日が光の如くあつという間に過ぎ去つて、季節は夏から秋に移り変わっていた。冷たき秋風をその肌に感じながら、思わず溜息を吐く。弾正の不運は、これから冬に向かう季節のように、いよいよ厳しさを増す一方、なかなか終わりそうもなかった。

弱り目に祟り目、泣きつ面に蜂……。その他ありとあらゆる諺が嫌というほど身に染みる状況に、さすがの彼もすっかり参っていた。ひとたび落ち目になると、人だけでなく、運までも逃げていくものなのか。弾正は飯盛山城下の一等地に建てられた自らの屋敷の中にあつて、怒涛の如き時流の中に、苦りきった顔をして、ぼんやりと漂っていた。

最初の躓きは、内藤宗勝の戦死であつたらうが、二度目の誤算は、自らの監視下にあつたはずの覚慶に、まんまと脱走されてしまったことであつた。何と言つても、覚慶だ。將軍の弟。足利義栄を將軍とする上で最大の障壁となりかねぬ存在。それを逃がしてしまったのだから、弾正久秀の責任は重いと言わざるを得なかった。

「くそ。覚慶め、まんまと逃げおつてからに」

振り返ってみると、覚慶の脱走こそが、全てのけちのつけ始めであるように思われた。弾正はしきりに酒を呷りながら、腹立たしそくに、落ち着きなく部屋中をうろつくと歩き回っていた。

「このままでは、ジリ貧だ。何とかせねばなるまい」

天下に謀略家と称えられた男としては、このままおめおめと引き下がるわけにはいかなかった。ようやく、今の地位まで上り詰めたのだ。立ち止まるわけにも、引き返すわけにもいかない。振り返る

わけにもいかなかった。ひたすらに前へ向かって駆け抜けなければ、この激動の乱世を乗り切っていくことなどできるはずもない。

だが…。

果たして、自分にはどんな手が残されているというのだろうか。覺慶に逃げられたことで、彼の政治的権威は全く、完膚なきまでに失墜してしまった。有力な同志といえた篠原大和守長房とも、最近ほとんど連絡していない。聞くところによれば、三人衆としきりに書簡や使者などをやり取りして、彼らとの友好関係強化に勤しんでいると言う。まあ、機を見るに敏な長房の事だ。落ち目の自分から勢いに乗る三人衆に鞍替えしたとしても、全く不思議ではない。

「申し上げます」

そこに、唐突にやってきたのは、重臣の林若狭守であった。

「若狭か…。で、大和守の動きはどうだった？」

弾正は苦々しげに顔を歪めながら、藁にも縋るような気持ちで、林若狭に尋ねていた。

「…噂通りにございます」

わなわなと怒りと悔しさに打ち震えながら、必死に言葉を選びながら喋る若狭に、弾正は「そうか」と、淡々と頷くだけであった。

「彼の居城上桜城に、度々三人衆の使者が参っていることが確認されております。また、大和守本人も、先日、堺は南宗寺にて、下野守（三好政康）と会談しております」

「…裏切りは、確実、か」

篠原長房が自分を見限ったとなると、これからどうなるのだろうか。漠然と考えながら、ふと脳裏をよぎった最悪の結末に、弾正の顔は一瞬青ざめた。

「それと…。余りよろしくない報告にございますが、御国許においても、三人衆の手が及びつつあるようで…」

「国許？ 大和のことか？」

「はッ！」

「…筒井、か？」

何となくではあるが、弾正には全てが分かっていた。自らの本領たる大和に問題が湧き上がるとすれば、それは長らく松永弾正と激しく対峙してきた最大国人の筒井藤勝（後の順慶）を置いて他にはいないのだ。

「筒井城にも三人衆の使者が度々出入りしていることが確認されました。…ここは、大至急多聞山に御戻りになり、筒井に備えることが肝要かと思われませんが」

若狭守でなくとも、松永家の郎党たちは皆、早急に国に戻って防備を固めるべきだと思っていた。どうせ、飯盛山にいても三人衆たちの栄華を眺めているだけに過ぎないのだ。大和に戻り、支配を固め、いつそ三好家から独立するのも悪くない。そんな風に考えている強硬派も、松永家中には多いのだった。けれど、肝心の弾正は、なにやらジツと考え込んでいたが、最終的に、

「大和には戻らぬ」

と、はつきりと断言した。

「何ゆえですか？」

若狭が不思議そうな顔をして尋ねると、

「戻れば、ますますジリ貧となる。日向らは、わしが大和に戻るのを手薬煉てくすね引いて待っているのだ」

「さ、されど、戻らねば筒井が蜂起しますぞ」

「戻ったとて蜂起するだろう。多聞山には、久通を入れてある。奴とてわしの子。愚かではない。筒井勢如きに遅れをとることもあるまいよ」

「…さ、されど」

それでもしつこく食い下がる若狭を、弾正はぎろりと睨みつけると、ゆっくりと上座にでんと腰を下ろした。

「よいか。ここがわしの正念場ぞ。ここで飯盛山を離れば、三人衆は必ず義継様の名を持って攻め込んでくる。わしに謀叛人の濡れ衣を着せてな。内には筒井、外に三人衆。勝てると思うか？ ならば、手は一つしかない」

「手、と申しますと？」

「言わずもがな。義継様を、こちらで押さえる！」

弾正がはつきりと言いつつ、林若狭守通勝は、思わずごくりと息を呑んだ。

その頃。肝心の義継はというと、どうにもならぬ政情の中で、必死にもがき、苦しんでいた。なまじ聡明なだけに、彼にはこの状況が許せなかった。

今の彼は、もはや三人衆の傀儡でしかなかった。権力のほとんどは彼らに奪われ、義継には何の力もない。重要な決定は、三人衆の合議の上で決められ、義継はというと、全てが終わった後の事後承認機関としての役割を果たすだけであった。

「くそッ！」

このところ、めつきり酒の量も増えていた。

「…このままでは、俺はいつたいどうなるのだ。日向らに全てを奪われた拳句、殺されるのか？」

三好政権なるものが、実に微妙で、危うい基盤の上に成り立っていたのだと言つたことを、義継は痛烈に感じていた。結局、三好長慶というカリスマ性溢れる有能な独裁者がいたからこそ成立しえたものであり、如何に聡明とはいえ、養父ほどのカリスマ性を持ち得ない義継の手に負えるものではなかったのだ。

義継は腐っていた。何をやっても、思い通りになることはない。不満は募る。けれど、その一方ではたまらなく怖かった。やがて、自分も足利義輝の如く殺されるのではないか。そう思うと、いてもたってもいられなかった。

そんな折の事であった。彼の下に、松永弾正久秀がやってきたのは…。

弾正は随分老けたように見える。

他人事のように、そう思う義継もまた、齡十四の少年にしては随分とやつれていたが、ともかく二人はジツと睨み合うと、

「宿老の意向に従う必要はありませんぞ」

弾正久秀がまず口火を切った。

「三好の御大將は義継様にござりますれば、宿老の意に構わず、政治を行われませ」

そんな弾正の言葉に、義継はしばらくきよんとしていた。宿老の意に構わず、と彼は言うが、その宿老の一人が弾正ではないか。そう言いたげな彼の視線を感じながら、弾正はにつこりと微笑んだ。「既に義継様も当主と御成りあそばれて、一年半以上の歳月が流れました。ならば、これ以上後見役に過ぎぬ宿老たちが出しゃばるはよろしくありますまい。義継様には是非、御先代にも劣らぬ名君となられ、民草に号令なされますよう、この弾正、伏してお願ひ申し上げます」

結局、彼は何が言いたいのだろう。義継にはいまいち分からなかった。号令を下すと言っても、三人衆がいる。義継には何の権力もない。

「弾正。そなたの言葉は嬉しい。だが、わが意を無視し、勝手に政治を壟断する者も多い。奴らが無視して、余が勝手に政治を行うは難しいのだ」

と、率直な思いを伝えると、弾正はそんな弱気な義継をぎろりと睨み付けた。

「左様な弱腰で何となされますか。三好の御大將は義継様にございますぞ。義継様の御意向を無視し、政治を壟断する者がいるとは、言語道断にござるが、ともかく、義継様が御親政を御執りあそばすなら、この弾正、全力を挙げて支援いたしましょう」

「…そなたが支持するというのか？」

「はッ！」

義継はしばらくジツと考え込んだ。弾正が支持してくれるなら、

あるいは自らが実権を取り戻すことができるかもしれない。三人衆の圧倒的な権勢を嫌っている者もいるだろう。三好家当主たる自分と弾正が組めば、実力的には三人衆と互角。ならば、こちらに味方してくれる者も出るかもしれない。

「弾正。そなた、本当に余を助けてくれるか？」

どうせ、このまま事態が推移すれば、ジリ貧に陥るだけなのだ。ならばいつそ弾正と手を結び、起死回生の一手を打つのも悪くない結果、失敗したなら、それはそれ。そうなったときぐらいの覚悟はもう出来ていた。

「無論にございます」

弾正がきつぱりと断言すると、

「よかるう。ならば、これからは余が全てを仕切る！」  
義継もまた、はつきりと言いつつ切った。

三人衆が違和感を感じ始めたのは、その直後のことであつた。何しろ、彼らが全てを決めて実行に移そうとしても、

「義継様は左様なこと、一切許可を出していない」

と言つて、積極的に妨害を加えてくるのである。それだけならまだしも、義継自ら積極的に政治を執り、矢継ぎ早に指示を出しているものだから、三人衆の意向など、何の意味もなさなくなつた。

三人衆が地団駄踏んで悔しがつたのは、言うまでもない。けれども各地の諸侯は、元々三人衆の余りの台頭に眉を顰めていたこともあり、当主たる義継の命令に背くような真似はしなかつた。かくして三人衆政権はあつてなく崩壊したのである。その余りの脆さに、義継などは拍子抜けしていたが、結果から言うと、当主たる義継の権威と、三人衆政権の脆弱さを明確に突いた松永弾正の懸命な謀略工作が功を奏しただけともいえる。

即ち、彼は義継の御朱印状という形で、三人衆の頭越しに命令を次々と発布させた。その朱印状に彼自身が連署することにより、義



継が弾正を支持していること、逆に義継の命令を弾正が支持していることを各地の部将に印象付けることに成功したのである。そのほか、篠原長房の専横に頭を悩ませていた三好長治、十河存保、安宅信康にも手を伸ばし、四国三好党の分裂も策していた。とりわけ、長房の意向に唯々諾々と従わねばならぬ現状に不満の念を強めていた十河家、安宅家では、弾正の謀略を待つまでもなく、長房を無視した独自路線に突き進みつつあった。また阿波三好家内部においても、筆頭家老として絶大な権勢を誇る長房に不満を抱く勢力が、主君長治を擁して、主導権を握ろうと必死になって画策していたのである。こうした四国三好党に稀代の謀略家たる弾正が目をつけぬはずもなかった。

永禄八年（一五六五年）十一月八日。

三好三人衆と称される三好日向守長逸、三好下野守政康、岩成主税助友通の三人は、京の都にあつて、善後策を協議していた。弾正の猛烈な反撃にあつて、一転、窮地に追い込まれた彼らとしては、ここらで一発逆転の手を打たねば、かつての弾正の如く、一挙にジリ貧に追い込まれかねなかった。

「問題は、義継殿」

日向守長逸が、そう切り出すと、他の二人も大きく頷いた。

「彼を何とかすれば、弾正の姦策も尽きると言つものだ」

長逸は既に何か、大いなる決意を固めていたようであった。政康、友通両名も、思ひは長逸と同じらしく、

「やりますか」

と、少しばかり緊張を隠しきれぬ面持ちで、そう言った。

「やるほがあるまい」

長逸がきつぱりと断言すると、

「やりますしよ」

三好政康、岩成友通は大きく頷き、フウと静かに小さな溜息を吐

いた。

【落日編】第130章 三好家大分裂

永禄八年（一五六五年）十一月十五日。

夕刻。

西の端に輝く紅蓮が、次第に地平線の彼方へ消えていく。カア、カアと、物悲しげに鳴くカラスの声が、なんともいえぬ風情を生みだしていた。

このところ、義継は上機嫌である。親政の名の下、三人衆を排除し、自らが主導する政治体制を確立した。無論、後ろ盾となつていゝる松永弾正久秀の影響力は無視しきれぬほど強大ではあるが、今のところ、弾正は進言こそすれ、義継の示した方針に異議を唱えたりはしなかつた。目下、今の彼は自らが政権を主導することより、三人衆及び政敵の排除に忙しなく、政治のほうは、ひとまず義継とその側近たちに一任しきつていゝる様子であつた。

ともあれ、こつという状況である。義継は大いに上機嫌だつた。

そんな余裕と上機嫌を吹き飛ばすかのように、世の中が百八十度ひっくり返つたのは、その日の夕方のことであつた。

即ち、三好日向守長逸、三好下野守政康、岩成主税助友通以下一千名の奇襲部隊が、まさに唐突に飯盛山城を取り囲んで、これを占拠、続いて三好義継を高屋城に連行するという、誰もが夢想だにしなかつた驚くべき大事件が勃発したためであつた。

計画そのものは、決して用意周到に練られたものではなく、どちらかといえば切羽詰つた三人衆の、行き当たりばつたりの暴挙であるといえたが、意表を突くという点においては、これ以上の策はなく、よもや三人衆がこつという実力行使に打つて出てくるとは夢にも思つていなかつた松永弾正久秀は、大和は多聞山城にてそのことを知ると、地団駄踏んで悔しがつたのだつた。

高屋城は三好笑岩の居城である。だが、今は三人衆の武力制圧下にあった。城主たる三好康俊（笑岩の子）は、困ったような顔をしながらも、ともかく彼らを出迎え、彼らが拉致してきた三好義継を上座に仰いでいたが、根が生真面目なこの貴公子は、今後どうなるのか不安で仕方がないといった様子で、がたがたと震えていた。

一方、高屋城の奥座敷にて、半ば幽閉される形となった義継は、目下、三人衆と面会していた。

「何ゆえ、かようなことをした？」

そう咎める義継に、

「こうするより他に手がなかったのをごさいます」

日向守長逸は、淡々と、開き直ったかのように、そう言った。

「手がない、だと？ 余の居城たる飯盛山に軍勢を率いて押し寄せ、余を拉致するとは、謀叛以外の何者でもない！」

義継が激怒したのも、無理はなかった。しかし、三人衆とて、幾多の修羅場を乗り越えてきた老練な武将である。その程度に臆するほど弱弱しくはない。こういう行為に打って出ってしまった以上、もはや後には引けないことを百も承知しているから、最後まで、行けるところまで突っ走るつもりでいた。

「謀叛を企むは、松永弾正。奴は義継様を誑かし、箆絡して、御家の乗っ取りを画策していたのです。∴それを防ぐには、かような手を打つより他に仕方なく」

と、岩成友通が言うと、

「左様。松永弾正の魔の手より御家を救うための、これはいわば義拳でござりまする」

三好政康もまた、あたかも自分たちが絶対正しいのだと言わんばかりの自信を漲らせながら、そう言い切った。

「そ、そなたらは弾正を悪く申すが、あれもあれなりに三好家のためを想うて行動してきた忠臣の一人ぞ」

彼の脳裏には、兎にも角にも、ここ一ヶ月近くに渡って、自分に実権を取り戻してくれた松永弾正の精力的な姿があった。確かに義継とて、弾正が密かに抱いている野望に全く気づいていなかったわけではないが、それならば、今こうやって自分を拉致している三人衆とて同じことではないか。そう言いたげな義継のジトツとした瞳に、下野守政康、主税助友通の両名は少しばかりビクツとした。

「とりあえず、御家の害虫駆除が完了するまでの間、義継様には、是非我らの庇護下に入っていたたく」

最終的には、三人衆筆頭格の日向守長逸がきっぱりと断言し、義継に二の句を告がせなかった。

三人衆の武力蜂起と時を同じくして、阿波国でも動きがあった。

阿波国の上桜城主たる篠原長房は、このところ主君たる三好長治との対立に頭を悩ませていたわけだが、三人衆の武力蜂起は、こうした状況を打破する、またとない絶好の機会となった。

彼は十一月十六日朝。即ち、三人衆が蜂起した翌日の朝であるが、この日、早速勝瑞城に伺候すると、半ば強引に長治を説得し、平島御所に待機している足利義栄を淡路へ移送することを認めさせたのであった。

「もはや、後には引けんだ」

長房も、今このとき一瞬一瞬が正念場であった。三好実休、安宅冬康が相次いで没してから、今に至るまで、四国における三好勢力を実質的に主導してきた実力者としては、このまま大人しくジリ貧状態に甘んじているわけにはいかなかった。起死回生の一手を打ち、一挙に形勢挽回を図る必要性があった。

「だが、良いのか。三人衆に味方すれば、弾正殿とは完全に手切れ状態になるのだぞ」

篠原自遁がぎろりと長房を睨みつけ、そう尋ねると、

「構わぬ。どうせ、いずれ弾正殿とは手切れにならざるを得なかつ

た。ならば、少しでも有利に戦える可能性のある今、彼と手を切り、攻勢に出たほうがよかるう」

彼はそう言つて、常と変わらぬ自信に満ちた笑みを浮かべた。

「：そうか」

自遁はなんともいえぬ顔をして苦笑いすると、

「これで、御家は分裂だな」

実に悲しげな顔をして、そうばやくのだった。

「仕方ないさ。：御屋形様亡き今、こうなるは宿命のようなもの」

「：宿命、か」

長らく長慶に仕え、その覇業をその側で見守り、かつ一緒に戦ってきた自遁としては、こういう結末ははつきり言つて最悪であった。いったい何のために、長慶は、そして自分は、あれだけ凄惨な戦いの日々を過ごしてきたのか。こうやって分裂し、仲間同士でいがみ合ふのなら、あの頃の自分の努力や汗、涙は、全て無駄であつたよ  
うな気がしてならなかつた。

三人衆動く！

この報に、畿内は震撼した。

時は永禄八年（一五六五年）十二月末頃。

淡路に移つた足利義栄及び高屋城の三好義継がほぼ同時に発令した、松永弾正討伐命令に従う形で、三人衆が総勢三万に及ぶ大軍を引き連れて大和に進攻したのであつた。

すかさず、筒井城主筒井藤勝がこれに内通した。一方、松永弾正は本拠たる多聞山に総勢一万七千の軍をかき集めて防戦態勢を固めたが、勢力的に劣勢は否めなかつた。

「筒井城には、およそ三千の兵が集まつておるとのこと！」

伝令の報告に、弾正は苦りきつた。

「三人衆の軍が三万。筒井が三千。合わせて三万三千。対して、こちらは一万七千。各地の与党をかき集めても二万がやっと」

勝てるわけがないと、右兵衛佐久通は腹立たしそうに唸っていた。  
「たわけッ！ 戦は決して数ではない」

そう怒鳴り、とりあえず諸将の動揺を防がんと必死になっている弾正であったが、肝心の彼自身も、少なからず動揺していた。何しろ、山城、河内、摂津の武將たちが悉く三人衆に与力し、大和に進攻してきたのだ。これまで弾正派と評されてきた面子も、随分三人衆に鞍替えしているようだった。

「申し上げますッ！」

そこに、重臣の楠木正虎が駆け込んできた。

「何事だ！」

不安げな面持ちを押し隠すように、殊更大声を張り上げて怒鳴る弾正に、正虎は素早く畏まり、頭を下げた。

「興福寺に向かった使者からの報告によりますと、興福寺には、我らに味方するつもりはないものと思われます」

「…やはりか」

弾正の顔色は、ますます悪くなった。まあ、これまで散々興福寺の既得権益を奪い続けてきた弾正なのだ。いざというとき自分に味方しろと言っても、容易くは従うまい。三人衆方に味方すると言わなかっただけでも、上出来と思わねばやっていられなかった。

三人衆軍は主に、河内より進軍する部隊と、山城より進軍する部隊の二つに分かれて進撃していた。即ち、河内方面から迫る軍は、三好政康を総大将、三好笑岩を副将として、総勢一万三千。対して山城方面から進む軍は、三好長逸を総大将、岩成友通を副将として、総勢一万七千で編成されていた。

しかし…。

圧倒的な優勢を確約されていたはずの彼らであったが、思いもよらぬ松永方の徹底抗戦を受け、苦戦を余儀なくされていた。例えば、河内から進撃した三好政康軍は、松永方の信貴山城を取り囲んだが、

かねて要害堅固と名高き同城には、弾正の重臣たる林若狭守以下二千の精兵が立て籠もっており、彼らは政康軍の猛攻を決して受け付けず、涙ぐましいまでの孤軍奮闘を重ねていた。

さらに、山城から南下し、大和に迫った長逸軍も、松永弾正自身が率いる一万の軍に迎撃されて、苦戦を強いられていた。そのほか筒井城に立て籠もった筒井藤勝も、松永久通率いる八千の軍に取り囲まれ、身動きが出来ぬ状態に追い込まれていた。

「このまま座して滅亡を待つほど、愚かなわしではない」

三好長逸軍一万七千と対峙する弾正久秀は、使い古された床机の上で、腹立たしそうに、ずっとそう呟いていた。

「ふふふふ。日向め。このわしと勝負を挑むなど、十年、いや百年早いわ。所詮、御一門ゆえに出世したようなくだらぬ御方。実力で大和国主にまで成り上がったわしの敵ではない」

弾正には自信があった。政略では、確かに三人衆に遅れを取った形となった弾正ではあるが、実戦なら、絶対に負けるつもりはなかった。

厳かな陣羽織を身に纏い、白き陣幕の中にでんと構えている老人は、今や従四位下弾正少弼の身分をもつれっきとした大名であるが、元々はどこの馬の骨もしれぬ貧しき家に生まれた、ありふれた庶民の一人に過ぎなかった。そこから、裸一貫で大和の国主にまでのし上がったのである。その過程では、ありとあらゆる凄惨な戦いを繰り返し、死を覚悟したことなど、一度や二度の話ではなかった。そんな彼なのだ。例えば兵力的に劣勢だからといって、長逸軍に負けたつもりはない。

「よいか。長逸は兵力にものを言わせて総攻撃をかけてくるだろう。こちらは鶴翼陣形かくよくで迎え撃つ」

数時間前の軍議で、居並ぶ諸將にそう告げた弾正は、ひとしきり布陣が完了したのを確認すると、フウと小さく溜息を吐いた。



戦うからには、断じて負けぬ。もはやこつなつた以上、実力で三人衆を撃破し、天下をもぎ取ってやる。弾正は心の中にそう呟きながら、再び床机の上に腰を下ろした。

【落日編】第131章 熾烈な内乱

年が明け、永禄九年（一五六六年）になった。

昨年未より本格化した松永弾正と三好三人衆の戦いは、新たな年を迎えても、収まるどころか、ますます激しさを増すようになった。戦線も広がった。本来、弾正の本領たる大和を主戦場として始まったはずが、今では河内や紀伊にまで飛び火し、もはや畿内全土が戦場化したと表現しても、決して言いすぎではないほどの戦乱状態となってしまうたのである。というのも、弾正の策略により、紀伊にて哀れな亡命生活を過ごしていた畠山高政が拳兵したからであったが、高政は旧臣など総勢五千の兵を糾合すると、紀伊や和泉の半ばを制圧した後、二月ごろ、かつての自身の居城たる高屋城に迫ったのだった。

畠山高政。

随分と懐かしき、今やすっかり過去の人と化した感があるが、それゆえ、少しばかり彼の略歴及び経歴を説明してみることにする。

彼の父は畠山政国と言う。かつて木沢長政に擁立されて、兄である畠山植長と家督の座を巡り、激しく争った人物である。木沢の敗北とともにいったん失脚を余儀なくされるが、植長の死後、遊佐河内守長教に擁立される形で守護の座に就いた。無論、実権などはない。守護在任五年間、彼はずっと遊佐長教の傀儡に甘んじざるを得なかった。…とまあ、名門畠山氏嫡流に生まれながら、波乱万丈の日々を過ごしてきた、言ってみれば哀れな人ではあったが、高政はそんな実父政国が天文二十一年（一五五〇年）に逝去した後を受けて守護となり、細川晴元失脚後の反三好勢力の中核的役割を果たしてきた。永禄五年（一五六二年）三月には、久米田の合戦にて、三好方の重鎮三好実休を討ち取り、続く五月には、河内国教興寺付近

で六万に及んだ三好軍と一戦を交えた。この戦いであえなく敗北して、以来逼塞を余儀なくされていたわけだが、天下の三好政権を相手に五分五分の勝負を挑んだ高政の能力は、案外高く評価されており、今回も、高政立つと知れ渡ったときには、畿内中がそれなりに動揺したものであった。

松永弾正久秀に扇動された畠山高政が高屋城に迫ったとの急報は、早速、信貴山攻めに従事していた三好政康の下に届けられることになった。

政康軍の副将たる三好笑岩は、高屋城主三好康俊の実父である。彼としては、愚にもつかぬ信貴山攻めで無駄な犠牲を費やすぐらいなら、即刻高屋に戻り、畠山軍の迎撃に当たりたかった。

「高屋には義継公もいる。万一のことあらば、我らの不利は否めんぞ」

三好一族の最長老でもある笑岩に強く迫られては、政康としても引き続き信貴山攻めを遂行するとは言えなかった。それに、確かに高屋が落ちるようなことになれば、三好義継を敵の手に奪われてしまいかもしれず、そうなれば三人衆の政治的威信は失墜する。また高屋城が陥落すれば、畠山軍はその勢いのまま、政康軍の背後を叩くだろう。そうなれば、当然政康軍に勝ち目はない。

「やむを得ませんな。とりあえず兵を引き、高屋の救援に向かいましょっ」

事ここに至った以上、もはやそれ以外に取るべき道はなかった。政康とても馬鹿ではないのだ。無意味な意地に拘り、大局を見失うような愚は犯さなかった。

兎にも角にも、総大将たる政康が素早く下した英断に、笑岩はにっこりと嬉しそうに微笑んだ。

ひとたび決断を下すと、政康軍の行動は素早かった。

まず彼らは飯盛山城に入って態勢を立て直すと、三好笑岩勢三千を先発隊とする、総勢一万の軍勢で、南河内は高屋城を目指したのである。

一方、政康軍接近の急報を受け、慌しく迎撃準備を整えた畠山軍は、上芝（現在の堺市）に陣取った。その数、およそ六千。

対する政康軍が上芝に到着したのは、二月十七日のことである。総勢一万。

兵力的には三好軍のほうが優勢である。けれど、戦というものは、常にやってみなければわからぬものであった。数に勝っているからといって、確実に勝てるというものでもない。寡兵を持って大軍を撃破した事例など、古今東西、いちいち例を挙げていたらきりがないほど多いのである。それに、両軍の間にある戦力差は、たかだか四千である。絶対的有利といえるほどではない。

要するに、気を抜いたほうが負ける。故に政康も、高政も、それぞれの陣にあつて、配下の諸将に対し、くれぐれも油断しないようにと、くどいほど念押しすることを忘れなかった。

「畠山高政、か」

政康はその名に、なんとも言えず不思議な感覚を抱かずにはいらななかった。彼を完膚なきまでに叩き潰した教興寺合戦から、既に四年近い歳月が流れようとしている。あの頃、三好家は長慶の下に纏まり、まがりなりにも栄華の絶頂にあつた。それが、今はどうだろう。長慶は死に、彼だけでなく、教興寺合戦の際に三好軍を指揮した義興も死んだ。この四年の間に、三好実休、三好義興、安宅冬康、立花範政、三好長慶、内藤宗勝……あらゆる実力者が次から次へとその命を失っていった。そして、気がついて見ると、自分を含めた三人衆と、松永弾正久秀が激しく争い、既に三好政権は真つ二つに分裂してしまった。

そして今、かつて叩き潰したはずの高政が、亡霊の如く蘇ってきて、自分の眼前に立ちはだかっている。

「…もはや情け容赦は一切無用。畠山の総帥だろうと、今度こそ、その首、貰い受けてくれるぞ」

そんな風に呟きながら、政康は再び戦場を見つめた。肌寒い冬風に揺れる軍旗を眺め、フウと小さな溜息を吐いた。

戦いは始まった。

数にものを言わせて、猛攻を加える三好軍に対し、総帥たる畠山高政自ら戦陣に立って、果敢に奮戦する畠山軍。両軍の死闘は凄絶を極め、一進一退の互角の攻防が続いた。犠牲は山の如く膨れ上がり、大地は息のない遺骸で埋まった。小川は朱色に染まり、あちこちから喚声、悲鳴、絶叫…、その他諸々、凄まじき大音声が響き渡っていた。

けれど、馬鹿の一つ覚えの如く、ひたすら猛攻を加えるだけだった両軍の戦いは、最終的に、数に勝る三好軍の勝利に終わることになった。無難と言えば、至極無難な決着であったが、結局、両軍が出した死者数は、軽く二千人を超え、特に敗者たる畠山軍からは、千五百人を越える膨大な戦死者を出すという最悪の結果に終わる破目となった。

兎にも角にも、かくて両軍の戦いは決着し、畠山軍の制圧下にあった和泉国の一部や紀伊なども、再び三好軍の支配下に戻った。政康は二月二十一日、岸和田城に入り、そこで残党狩りの指揮を執りつつ、三月に入ると、再び河内に戻り、そこで大和の松永方の動きに気を配るようになった。

その頃、山城方面から大和に攻め入っていた三好長逸軍も、松永弾正軍の凄まじき抵抗に手を焼き、やむなく撤退を余儀なくされて

いた。彼は京の都を拠点とし、隙あらば、再三に渡り大和へ進攻しようとしたが、長逸軍、政康軍を相次いで撃退し、窮地を脱した松永軍の士気は高く、これ以上の攻撃は不可能だった。また丹波において内藤忠俊が弾正方につく姿勢を鮮明に打ち出し、赤井勢に備えつつ、都を覗う姿勢を示したので、長逸としては、下手に都を留守にするわけにはいかなかった。

そして、弾正は攻勢に出た。

即ち、彼は二月十九日、総勢一万八千の大軍を引き連れて筒井城を包囲すると、三月六日、これを陥落させたのである。肝心の筒井藤勝はあわやというところで取り逃がしてしまっただが、これにより、筒井氏の勢力は壊滅し、松永軍による大和国の完全制覇が、ここに実現したことになった。

三月を通じ、三人衆陣営と松永陣営は激しく睨み合い、しばらく戦らしい戦もなかったが、四月に入ると、再び三人衆の動きが活発化するようになった。

即ち…。

赤井直正や波多野秀治らに働きかけて、丹波の内藤氏の動きを封じた三好長逸は、総勢二万に及ぶ大軍を従え、怒涛の勢いで大和に進攻した。続いて、三好政康も一万五千の兵を率い、河内より大和に入って、松永方を北、西より圧迫した。

「またか」

そのことを多聞山城で知った弾正は、呆れたような顔をして、ハアと溜息を吐いた。

「性懲りもない小僧どもには、一度我が力を思い知らせてやらねばならんようだな」

そう呟きながら、弾正はしばらくジッと考え込んでみた。力を思

い知らせる…、といったところで、彼我の戦力差は、明らかに三人衆のほうが上なわけで、このまま延々と戦が続くようなことになれば、物量面で遙かに彼らに劣る弾正の不利は明らかだった。だからといって、三人衆軍を完膚なきまでに叩き潰す妙案があるわけでもない。

「こうなれば、和議というのも、一つの手ではありませぬか」

そう言ったのは、重臣の柳生家蔵であり、彼だけでなく、弾正配下の有力部将たちは皆、同様の考えで意見の一致を見ているようであった。

「和議と申して、容易くできるものかな」

弾正としても、和議が結べるなら、結んでもよいと考えていた。このまま戦いを続けても、弾正の得るところは少ない。不毛な戦は、両陣営の力を削るのみで、それは結局、三好に取って代わらんと野心を燃やしている第三勢力に漁夫の利を提供することにもなりかねないのだ。

「義継様や義栄公を動かせば、さして難しい問題ではありませんまい」と、柳生家蔵は言うのだが、弾正はしばらく考え込んだ。そう上手いくものだろうか、内心、半信半疑の彼は、それでもやってみぬよりはマシだろうと、駄目もとで、とりあえず義継のいる高屋城に使者として、重臣の一人たる高山友照を差し向けることにしたのだった。

四月十二日。

三好義継と会見した高山友照は、そこで、彼の口から直接和議斡旋の確約を得ると、その足で主君たる弾正の下に戻り、結果を報告した。さらに、三好長逸の陣に赴き、具体的な和議交渉に入ると、兎にも角にも、両軍が相争うことの無意味さ、無謀さを説いて、ついに長逸を説き伏せることに成功したのだった。

「まあ、義継様の御意向であるなら、逆らうわけにもいくまい」

と、日向守長逸がその重き口を開いた瞬間、高山友照は、あらゆる重荷が取れたような、なんとも言えぬ開放感を抱かずに入られなかった。



## 【落日編】第132章 足利義秋誕生

今年で三十歳になる。この歳になって、男は、彼自身思いもよらなかつた新たな人生の、記念すべき第一歩を踏み出した。

と言つても、それは三好政権の追捕の手から逃れて、ようやく一時の休息を得た一乗院覚慶の話であつた。彼は、永禄九年（一五六六年）二月、還俗した上で、その名を足利義秋に改め、ここに正式に、自らこそ兄たる室町幕府第十三代將軍足利義輝の後継者に相応しいのだと公然と宣言したのであつた。

彼は今、南近江は矢島という土地に居を設け、迫り来る三好方の脅威を振り払いつつ、六角氏の支援下に、着々と亡命政府の形態を整えつつあつた。

細川藤孝、和田惟政、一色藤長、明智光秀、仁木義政、三淵藤英……。その他大勢の幕臣たちが彼の下に集つたことで、三好氏が擁立している足利義栄と並び立つ將軍継承権保持者たる足利義秋の存在感は、日増しに高まるようになった。

義秋の居館は矢島御所と呼ばれ、また、矢島御所を中心として成立している亡命政府は、一般的に矢島幕府と称されていた。無論、幕府と言つても、義秋本人はまだ將軍ではない。それゆえ、この場合、『矢島幕府』という呼称は決して適当なものとは言えなかつた。それでも、彼の居所を持つて『矢島幕府』と人々が称しているのは、それだけ彼が有力な將軍候補だと見做されている証だと言えた。

四月になり、足利義秋は従五位下左馬頭に任命された。幕臣の一人にして、朝廷とも付き合いの深い細川藤孝の積極的な工作の成果といえたが、長き室町時代において、有力な次期將軍候補にのみ与

えられることが多かった左馬頭となつたことは、矢島幕府の存在感を満天下に示すに十分な材料となつた。実際、彼の対抗馬たる足利義栄は、三好政権の内紛に巻き込まれる形で、未だ京都にすら入れぬ有様であり、当然、今のところほとんど無位無官に近い状態で、淡路島に留め置かれていた。そう考えると、義秋は義栄に対し、一歩優位に立つたと言えなくもない。

何はともかく、従五位下左馬頭となつた義秋は、自らの存在を強調すべく、また三好を倒して、自分こそが將軍の座を勝ち取るべく、各地の諸侯に対し、三好討伐を命じる書状を次から次に発給し、送りつけたりしていた。例えば、先代將軍義輝の時代より懇意にしている上杉輝虎や、毛利元就、朝倉義景、北畠具教、あるいは、矢島幕府の御膝元たる南近江の六角承禎、北近江の浅井長政など、とにかく手当たり次第、何枚も何枚も一方的に送りつけては、彼らの反応を確かめたりしていた。

義秋は一人静かに物思いに耽ることが多かった。元が坊主なだけに、一人静かに御経を唱えているときが、一番落ち着くのだつた。

このところ、度々彼が考えていることは、今は亡き兄の事であつた。劍豪將軍と称えられるなど、従来型の將軍とは明らかに異質な存在であつた兄は、一方で、これまでのどんな將軍より將軍らしい人に見えた。

幕府の再興、將軍家の復興を最大の目的に掲げて、荒れ狂う戦国の乱世を、將軍として生き抜いた兄は、ある程度目的を果たしたところで、志半ばに死んでしまった。ならば、弟である自分がこれを受け継ぐしかないではないか。聡明だつた兄が、あれだけ努力しても達成できなかった仕事を、今度は自分が受け持つのだと思うと、気が重かつたが、とにかく逃げるわけにはいかなかった。少なくとも、兄を殺した三好政権が擁立する義栄に將軍の座を渡すわけにはいかない。

「…兄が死んで、一年、か」

義秋は、たまらなく悲しくなった。けれど、それ以上に何より、將軍が死して一年たった今もなお、次の將軍が決まっていない現状に、なんとも言えぬもどかしさを感じずにはいられなかった。このまま事態が推移すれば、幕府そのものが自然消滅することにもなりかねない。そうなれば、次期將軍候補などという言葉も、何の意味もなさなくなる。そうなる前に、出来る限り早く、自分が都に復帰し、將軍の座をもぎ取らねばならぬ。

そう思い、決意した彼は、自らの居室の外に控えている気配を察して、

「誰だ？」

と、尋ねた。

「御所様」

そこから現れたのは、細川藤孝であった。旧和泉守護家当主にして、従五位下兵部大輔の地位を持つ男。和田惟政と並び、義秋を支える幕臣勢力の筆頭に位置している。

「何やら、大和方面できな臭い動きがございます。…松永弾正が、何か画策しているのは、明らかかなようでございます」

「…弾正が？」

忌まわしき兄の仇の名前に、義秋は苦りきった顔をして、吐き捨てるかのように呟いた。

「万一、弾正と三人衆が再びぶつかるといふようなことになれば、そのときこそ三好の分裂は決定的になったといっても過言ではありませんまい」

藤孝は実に嬉しそうな顔をしている。義秋も満更ではなさそうだった。三好が内部分裂の果てに、勝手に衰退の道を転げ落ちてくれるのなら、自分が將軍職となる日も近い。とにかく、今の自分は、各地の諸侯に文を送り、味方を増やして、いざというときの力を蓄えておくに尽きるのだ。そして、宿敵三好の落日を傍目に眺めていればいい。

義秋はにやりと不敵に笑い、いつになく楽しそうに、「酒をもて！」と声高に叫んでいた。

永禄九年（一五六六年）五月二十四日。

ついに、三好氏は破裂した。

三好政権を牛耳り、強大な勢力を誇る三人衆に対抗すべく、松永弾正が打った奇策。それは、三人衆の地盤の一つとなっている、河内国は高屋城に奇襲攻撃を仕掛け、そこに鎮座している政権の盟主たる三好義継を奪取するというものであった。

そのために弾正は総勢一万の軍を編成し、夜陰に紛れ、密かに高屋城に進撃させた。この当時、紀伊に逃れた畠山高政追討のため、高屋城主たる三好笑岩・康俊父子は和泉・紀伊方面に兵を繰り出しており、高屋城そのものは手薄に近い状態であった。目敏い弾正がこれに目をつけぬはずもなかったのである。

しかし…。

この策は、見事に失敗に終わった。高屋城の守備兵が予想外の奮戦を示し、松永軍を容易く受け付けなかったため、その間に飯盛山に待機していた三人衆軍が援軍として駆けつけてしまったのである。こうなると、弾正には打つ手がなく、仕方なく和泉国は堺に逃れて独自の政治力を誇る会合衆に調停工作を依頼せざるを得ぬ破目となった。

六月八日。

松永弾正が堺にあって、三人衆軍と対峙している最中、弾正の本国たる大和では、この隙を突く形で、筒井藤勝がその勢力を急激に回復させつつあった。

藤勝は、弾正がために筒井城を追われ、以来旧交のあった国人領主の下を転々としていたのだが、今回、弾正が堺にあって身動きで

きぬ状態に追い込まれたと知るや否や、すかさず旧臣をかき集めて挙兵し、かつての居城たる筒井城を取り囲んだのだった。

筒井城を守っていたのは、弾正久秀の重臣たる多羅尾源太という男であった。しかし、圧倒的な筒井勢の猛攻を受けては、耐え切れるものでもなく、ついにこの日、彼は、筒井方の降伏勧告を受け入れて、城を明け渡すことにしたのだった。

かくして、筒井藤勝は筒井城主の座に復帰し、一躍、大和国内では松永弾正に次ぐ第二勢力の座を確固たるものにしたのであった。それを記念してか、彼は自らの名を藤勝から藤政に改め、さらにこの年の九月には、興福寺成身院（たふしんいん）に得度し、陽舜房順慶（やうしゆぼう）と改めている。

六月も半ばを迎えると、堺を巡る情勢もようやく変化の兆しを見せるようになった。

それまでは、堺の町に立て籠もり、いわば会合衆を人質に取る形で、三人衆軍の攻勢を凌いでいた松永弾正と、三人衆との間に、ようやく和議が成立したのである。堺の町を焼かれない会合衆の懸命な和睦工作が功を奏した格好であったが、当然、圧倒的優勢に立つ三人衆に有利な和議案であることは言うまでもなく、しかし弾正としては、泣く泣くこれを受け入れるより他に仕方がなかった。

一つ、義栄公が儀、日向、下野、主税助三名に一任すべきこと。

一つ、以後、御家のことに、弾正は関わらぬこと。

一つ、御先代が薨去を天下に公表し、それに伴う葬儀は、御当代義継公が行うべきこと。

一つ、葬儀の喪主たる義継公の補佐は、日向、下野、主税助三名が担うべきこと。

とまあ、これが大まかな和議案であるが、要約すると、松永弾正は金輪際、二度と三好政権の枢機に参与してはならぬ、ということ

だった。

やむなく合意した弾正であるが、これにより彼の政治的威信は完全に失墜した。まあ、無理もない。けれど、その一方で無事に大和に帰国したことにより、筒井勢の勢力拡大は防げたわけである。とにかく今は、大和の支配を固めなおして、いざと言うときに備えなければならなかった。少なくとも、筒井藤政の存在を何とかしなければならぬ。

そう思い、弾正は溢れ出す悔しさを拭い、苛立ちを堪えて、とにかく多聞山城で、内政に明け暮れる日々を過ごすようになった。

六月二十四日。

河内は真観寺（八尾市）にて、三好長慶の葬礼が盛大に執り行われることになった。長慶が死して、既に二年近い歳月が流れようとしている。兎にも角にも最重要機密事項として、長らく天下に伏せられてきた長慶の死は、ここにこうして、白日の下に晒されることになったのであった。

【落日編】第133章 義栄と義秋、そして義継

永禄九年（一五六六年）八月三日。

矢島御所。

この日、ここに、三好日向守長逸率いる総勢三千の兵が、唐突に押し寄せてきた。松永弾正との抗争にもひと段落がつき、三好長慶の葬儀も終わって、とにかく新体制がようやく軌道に乗り始めた頃、長逸としては、目の上のたんこぶ以外の何者でもない足利義秋を討ち取るべく、思いもよらぬ不意討ちを仕掛けてきたのだった。

矢島御所の守備軍は、どれだけかき集めても、二百、三百がよいところである。三千を超える三好軍には、本来敵うはずもない。長逸としても、はなから負ける気などなかった。義秋を討ち取り、速やかに都へ帰還する。その上で、足利義栄を将軍とし、新幕府を作り上げれば、三好政権は…、というより三人衆、なかでも筆頭たる自分の権力、地位は圧倒的に磐石となろう。そんな政治的思惑をもって攻め込んだ長逸は、矢島御所から少し離れた先にある小高い丘の上に本陣を築くと、既に義秋を滅ぼした後の政治体制のことなど、いろいろと考えていた。

そんな具合だから、負ける気はなかった。唯一問題があるとすれば、それは、確実に義秋を討ち取れるか、否かという点だった。義秋軍を破っても、肝心の義秋に逃げられたら、何の意味もないのである。

矢島幕府方の総大将たる足利義秋は、三好軍により包囲されて以後、軍議にすら姿を現さず、ただ御所内の本堂に閉じこもって、がたがたと震えていた。彼にとって、これが実質的な初陣のようなものだった。相手は三千。こちらは三百。勝敗は誰が見ても明らかである。義秋が恐怖の余り、震えてしまうのも無理はなかった。

一方、彼の配下たち、即ち細川藤孝、和田惟政を筆頭とする幕臣たちは、ここで三好軍に敗北するわけにはいかず、彼ら自身戦陣に立って奮戦しつつ、一方では、六角承禎に援軍を要請したりして、決して勝利を諦めてはいなかったのである。

「六角軍が出張ってくるまでの辛抱ぞ！ それまで、何としても御所様をお守りするのだ！」

細川藤孝は、後に当代屈指の学者と称えられたほどの知識人であるが、一方、戦場にあつては修羅さながらの形相で、兵たちを叱咤していた。

その他、明智光秀も、一色藤長も、仁木義政も…、ありとあらゆる幕臣たちが、自ら戦陣にあつて、次々と敵兵をなぎ払いつつ、奮戦していた。光秀などは、彼の郎党、即ち三宅弥平次、明智光春、明智光忠らと一緒に戦い、既に雑兵首ばかりではあるが、六人の敵兵を殺害していた。

なかなか落ちない。

夜が明け、八月四日は朝頃、三好日向守長逸は腹立たしそうに、案外堅固な矢島御所を睨みつけていた。

「申し上げます！」

駆けつけてきた伝令は、サツと頭を下げ、仏頂面のままムツとした様子で床机の上に腰を据えている総大将に対し、

「観音寺城主六角義治の兵、五千が先ほど、観音寺を発したのとにございます」

と、告げた。

「な、なにに。ろ、六角が出てきたと？」

長逸ではなく、彼の子たる久助が、父に代わって伝令に怒鳴りつけた。

「はッ！ 義治の家老、蒲生賢秀を大将とする兵にございます」

「…なんと」



久助が驚き、慌て、苛立つのも、無理はなかった。本来、六角軍と長逸との間には、相互不介入の条約が結んであった。即ち、三好軍が六角に手を出さぬ代わり、六角も三好に手を出さぬというもので、それがあつたから、長逸は足利義秋討伐のため、わざわざ六角領内に乗り込んできたのである。

しかし、六角が出張ってきたとなると、それは紛れもない条約違反である。そして、それが事実なら、下手に矢島御所攻めに拘っていると、しまいには敵中に孤立して、取り返しのつかぬ最悪の事態に陥ってしまいかねなかった。

「父上……。撤退、なされませ」

悔しさの余り、噛み締めた唇からは、朱色の鮮血がぼたぼたと溢れ出していた。父以上に戦闘的な久助には、こんな結果は許せるものではなかった。必ず義秋を血祭りにあげてくれると、散々威張り散らして出陣したのだ。それなのに、六角に裏切られ、尻尾を巻いて撤退しなければならぬ。自尊心だけは人一倍高い久助は、わなわなと震え、そしてがっくりと肩を落とした。

「あい分かった。撤退しよう」

長逸とて、久助の気持ちは痛いほどに分かっていた。彼自身腹立たしいのだ。だが、そんな無意味な感情に囚われ、ここに留まっていたのは、それこそ自滅を待っているようなものだった。そんな愚を犯すわけにはいかない。

かくして長逸軍は撤退し、後一步と言うところに迫った義秋討伐は、頓挫した。逆に言えば、義秋軍は九死に一生を得たわけで、戦いが終わってみると、義秋方の人々は、何があつたのかすら分からぬ様子で、きよとんと、高く聳え立つ朝日を眺めていた。

八月二十九日。

この日、足利義秋が唐突に矢島を去り、若狭は武田氏の下に亡命したとの急報が、畿内中に轟いた。六角氏との同盟関係を強化し、

再度の義秋討伐を画策していた三好長逸としては、青天の霹靂というほかはない、驚天動地の大事件であった。

義秋が矢島を捨てた理由としては、六角の心変わりなど、とにかく様々な理由があるとされている。実際、先の長逸による矢島襲撃から、半月とたたぬうちに、六角承禎・義治父子は、度々長逸と接触し、外交交渉を重ねていた。そんな様を見せられれば、義秋とて警戒するだろう。万一、六角と三好が結託して自分の討伐を画策したなら、もはや勝ち目などないのである。

義秋が亡命先に若狭武田氏を選んだのは、長らく三好氏（主に三好配下の内藤氏）と敵対してきたこともあり、三好の天敵ともいえる足利義秋を快く受け入れてくれるに違いないと思われたからであった。また、今こそ零落の一途を辿っているが、かつては、応仁の乱において東軍の副将を務めたほどの名門一族なのだ。その折の誇りを忘れていないなら、あるいは、自分を擁して上洛軍を起こしてくれるかもしれない。そんな仄かな期待も抱きつつ、彼らは一路琵琶湖を越えて、若狭は武田氏の下に向かったのだった。

けれど…。

長年の内部抗争により、武田義統の力は、義秋らが想像していた以上に弱まっていた。何しろ、若狭一国すら完全に纏め切れてはいないのである。いくら武田義統が上洛に意欲を示したところで、彼の力では、三好どころか、丹波の内藤氏にすら敵わないだろう。況や、三人衆に勝てるはずもあるまい。

かくして九月八日。

義秋たちは、若狭をも捨てて、今度は越前朝倉氏の下に向かった。長らく北の大国と評され、今もなお圧倒的な国力を誇って越前のみならず、若狭・加賀など周辺国にその名を轟かせている朝倉なら、強大な三好軍を倒すことができるかもしれない。後は朝倉義景の気分次第ではあるが、とにかく、弱体化した武田氏の下に居候しているよりは可能性もあるだろうと、彼らは、一乗谷に入り、そして、太守たる義景に謁見したのだった。

飯盛山城には、久々に、三好義継の姿があった。

荒れ狂う畿内情勢において、最近急激に存在感が低下しつつあったこの幼君は、意のままにならぬ政治に、完全に嫌気が指したのか、最近では、寵妃のお藤とともに、風流三昧に明け暮れる毎日を送っていた。さながら、末期の長慶にも似た光景であるが、彼の場合は、長慶ほどの存在感もなく、遊び呆けていれば、その分だけ世間から忘れ去られるようになった。

「…くだらぬ」

義継は、このところこうやって愚痴ばかり叫んでいた。

「ふん。日向め、奴はいつたいわしを何だと思っっているのだ。…義栄公を淡路から越水に移すらしいが、わしは最近になるまで、聞かされてもいなかったのだ」

ぐびぐびと酒を呷り、こみ上げる憂さを晴らすかのように、空になった酒盃を、思い切り投げた。修羅の如き顔をした義継の怒りは収まるどころを知らず、側室たるお藤の方は、困ったような顔をして、苦笑いしていた。

「…ならば、御殿様御自ら越水城に赴かれ、義栄様をお出迎えなさつては如何ですか？」

ふと、気づいたこと、思いついたことを、何となく口に出してしまった彼女は、慌てて平伏し、「口幅つたいことを申し上げ、申し訳ありません」と謝した。

「わしが越水に赴いて、義栄様を出迎える、とな？」

悪くない策だと、義継はいろいろ考えているようだった。

「そうだ。案外面白い策かもしれん。どうせわしの存在など、皆、忘れていなのだ。ここでわしがいるということをお願い知らせてやるのもよいかもしれん」

などと呟きながら、義継は久方ぶりの笑みを、その顔に浮かべながら、ずっとニタニタと楽しそうに笑っていた。

九月二十三日。

実質的には三好三人衆が呼び、篠原長房が応じる形で、淡路は洲本城に逗留していた足利義栄が、ついに摂津越水城に姿を現したのだった。

越水城といえは、畿内に進出して間もなかった頃の三好長慶が、江口の合戦により畿内の覇権を完全掌握するまでの間、長らく居城としてきた城である。今でこそ、三好政権の政治的拠点としての地位は薄れたが、それでも西摂津の要地として、三好政権が飯盛山城、芥川山城、高屋城に次いで重要視している城であることに変わりはない。

ここに、義栄がやってきた。出迎えているのは三人衆、のほろほろが、三好義継となっていた。本来三人衆は、義継など蚊帳の外に放り出して、自分たちだけで義栄を出迎えるつもりでいたのだが、義継自身が越水にやってきた以上、無碍に扱うわけにもいかなかった。何しろ、如何に力衰えたといえど、三好政権の総帥が義継であることに変わりはないからである。

そして、その義継は松永弾正久秀、三好笑岩入道康長、三好因幡守政勝、香西元成といった、このところ三人衆の台頭に不満を募らせていた重鎮たちや伊丹大和守親興、池田長正ら摂津の有力国人たちを従えて、自分こそが三好政権の総帥なのだというのを、改めて満天下に見せつけていた。

「義栄様、わざわざの御動座、痛み入ります。以後は、この左京大夫義継が、義栄様をお守りいたしますゆえ、ご安心なさりますように」

そう言って、足利義栄を出迎える様は、最近俄かに囁かれるようになった、酒に溺れた暗君たる汚名を払拭するに十分な存在感を誇っていた。

ともかく、義継の出迎えを受けた義栄は、余りに仰々しい歓迎に

驚きつつも、肅々と越水城に入り、將軍候補に相応しき格好で上座に着いた。その下に義継が平伏し、左右の脇には、三好日向守長逸、三好下野守政康、岩成主税助友通ら三人衆のほか、松永弾正久秀、三好笑岩、三好政勝、香西元成、伊丹親興、池田長正、篠原長房ら主だった重臣や、三好長治、安宅信康、十河存保ら四国三好党を束ねる有力一門の姿もあつた。

「大いなる歓迎、大義である」

緊張の余り、ぶるぶると震える体を必死になつて堪えながら、そうやって堂々と宣言する義栄に、

「ははーッ！」

義継以下、三好家の重臣たちは、一斉に頭を下げ、深々と平伏した。

【落日編】第134章 義継出奔

永禄九年（一五六六年）九月二十四日。

場所は美濃・尾張国境地帯。墨俣。

木下藤吉郎という男がいる。外見が貧相で、兎にも角にも人受けしない容姿をしているというので、いつからか「猿」などと、余り嬉しくないあだ名で呼ばれるようになっていた。しかしながら機知に富み、決断力、行動力ともに抜群で、人たらしと評されたほどの人心掌握術を誇っていたので、貧農の出身でありながら、今や織田信長配下の有力部将の一人にまで出世していたのだった。

とにかく、そんな木下藤吉郎が、不可能と評された墨俣築城を成し遂げたと言うので、濃尾周辺は大騒ぎであった。何しろ、墨俣は美濃斎藤氏の居城たる稲葉山城の膝元にあり、ここに砦を築かれると、本城たる稲葉山が敵軍の攻勢に晒されることとなる。ただでさえ、織田軍の凄まじき攻勢の中で、次第に劣勢に追い込まれつつあった斎藤方なのだ。こんなところに砦を築かれ、直接稲葉山に攻撃を仕掛けられるようなことになれば、戦局の更なる不利は否めなかった。

なので、散々邪魔をした。実際、斎藤軍の妨害のために、織田軍は墨俣にどれだけの人と金と物資を消耗したかしれなかった。指揮に当たった佐久間信盛や柴田勝家といった織田氏の名だたる宿老たちは、その面目を失い、信長も怒るだけ怒ったが、結局、墨俣に城を築くなど、不可能なのだという世論も次第に蔓延していった。だが……。そうした世論や常識を悉く覆して、ついに墨俣砦を完成させたのが、木下藤吉郎であり、彼のこの偉業は『墨俣一夜城』の名をもつて後世にまで伝えられている。無論、一夜で城を作った、などということはありませんが、兎にも角にも、蜂須賀小六（彦右衛門正勝。後の阿波徳島藩藩祖）ら地侍の力を利用しつつ、斎藤方を出し抜いて、数日のうちに、簡易ながらも高い防御能力を持つ

皆を完成させることに成功したのだった。

かくして、織田信長の美濃攻めは最終段階を迎えることになる。信長の岳父たる斎藤道三が、その息子たる義龍に滅ぼされてから、既に十年近い歳月が流れていた。道三の義理の息子たる信長と、義龍の子たる龍興の間で長らく繰り返されてきた美濃争奪戦にも、いよいよ終止符が打たれようとしていた。

十月頃。

三好義継は京都にあり、三人衆に成り代わり、政務を執るべく必死に奔走していたが、そんな彼は、自分の肝煎りで建設が開始されるこの頃ようやく完成した大徳寺山門内の聚光院じゅうこういんを訪れ、開山となつた笑嶺宗訴しょうらいそつぎんと面会していた。

「いやはや、素晴らしいものですね」

笑嶺宗訴は鷹揚に笑い、義継もにつこりと微笑んだ。

聚光院は義継自らが建設を命じ、かつ細部に渡つても、こうしろ、ああしろといちいち指示して作らせたものである。言ってみればわが子のようなもので、壁一つ、床一つとっても、全てが全て、目に入れても痛くないほど可愛かった。

建設目的は養父たる三好長慶の菩提を弔うためである。しかし、それ以上に義継の力を天下に示すためでもあった。それゆえ、金に糸目はつけていない。聚光院とは、要するに三好氏の権力の象徴であり、際限なく注がれた金の力で作り上げられた、この世の浄土であつた。

「襖に描かれし絵もまた見事なものでござります」

と、義継が言つと、

「そちらにあるのは『四季花鳥図襖絵』と申すようで、描かれたのは、狩野永徳殿。先日お会いしたが、まだ二十代半ばの若者でござつた。それなのに、これほど見事なものを描かれるとは、凄まじいものでござりますなあ」

そう答える笑嶺宗訴であつた。

襖絵はじめ、院内に描かれた様々な絵は皆、優れた絵師と名高き狩野父子に依頼していた。即ち、狩野松栄と狩野永徳である。院内に描かれた絵のうち、有名なものは、『四季花鳥図襖絵』のほかに檀那之間に描かれた『琴棋書画図襖絵』きんぎしよがすふすまゑなどがある。いずれも力強い筆遣いで描かれ、なんともいえぬ輝きを保ち、それまでの水墨画などとは明らかに異なる、豪快な表現様式となっていた。後に永徳は、織田信長や豊臣秀吉の寵愛を受けて、いわゆる豪華絢爛な桃山文化の立役者の一人となるが、まだ二十四歳に過ぎない青年であったこの時から既に、類まれなる画才の片鱗を見せていた。

聚光院訪問を終えて、三好屋敷に戻った義継は、いつになく上機嫌だった。

その後、彼は、今やほとんど廢墟に等しくなった二条御所に赴き、今は亡き足利義輝のことを思った。自分たちが、義輝を滅ぼしてから、既に一年半近い歳月が流れている。それなのに、依然として次期將軍は立っていない。三好方としては足利義榮を推しているが、肝心の三好家内部が三人衆一派と弾正一派の二つに割れて内乱を繰り返すようになり、將軍擁立どころの騒ぎではなくなってしまった、というのも大きい。今でこそ、両派の対立も収束し、義継の下、同じ鞘に戻った感もあるが、しかし水面下では、依然として両派の激しい権力闘争が繰り返されており、そのために、越水まで義榮を連れてきながら、彼を將軍に擁立することができないでいたのだった。義輝の実弟である義秋は、今、朝倉氏の庇護下にあるという。それゆえ、先日の大評定では、朝倉討伐をしきりに主張する強硬派も多くいた。ただ、相手は北辺の大国朝倉氏である。傘下には数万騎と評される大軍があり、これと下手に正面衝突すれば、如何な三好家とて無傷ではいられない。それに、朝倉の影響下には、長らく同盟を結んできた北近江の雄たる浅井氏や、若狭の武田氏などがある。勢力減衰が際立っている武田氏などはどうでもよいとしても、今や旭日の勢いで勢力を広げている浅井長政を敵に回すのは、明らかに



愚策だった。何しろ、一ヶ月前の九月九日には、浅井氏討伐を目論んで、総勢二万余の大軍でその領内に攻め込んだ六角承禎が、浅井長政の前に完膚なきまでに叩き潰されている。

「如何なさいました？」

二条御所の畔に流れる小川に佇みながら、ぼんやりと考え込んでいた義継を訝しがったのか、側近たちがそう尋ねると、

「なんでもない」

と言いながら、彼はゆっくりと立ち上がった。

「ただ、いずれにしても、早急に義栄様を將軍とせねばなるまいなあ。幕府が、あんな状況では、天下も収まるまい」

そう言つて、彼が指差したのは、ほとんど廃墟同然の二条御所だった。義輝を攻め潰した際に炎上したこの城は、以来、ほとんど修理されることなく、ずっとここにあつた。それゆえ、都の汚物と、口汚く罵る市民もいたほどで、急速に復興が進む市内にあつて、明らかに浮いていた。

月日が流れ、永禄十年（一五六七年）となつた。

二月。

三好三人衆と松永弾正久秀の対立も収まり、比較的小康状態を保つていた三好政権は、この頃になつて、再び混乱の兆しを見せるようになった。

元々砂上の楼閣のように、脆い基盤の上に成り立っていたに過ぎない三好政権なのである。ほんの些細なきっかけでもあれば…、いや、そんなきっかけなどなくとも、勝手に崩れだすのは時間の問題といえた。

「もう、嫌だ！」

十六歳になつた義継は、匙を投げてしまった。

「…日向め、よほど俺が政治を執る事が嫌なんだな」

彼の不満は頂点に達しつつある。このところ、力を回復しつつあつた義継に業を煮やした三人衆は、彼から力を奪うべく必死に策動

していた。例えば、政策決定過程から、露骨なまでに義継を排除したり、無視したりした。重要な情報も、悉く三人衆で囲い込み、義継には一切伝えなかった。

義継の怒り、憤り、不満は高まる一方だった。

「このまま奴らの言うがままにされていたら、本当の傀儡になつてしまいかねん」

彼は必死に考え、必死に悩み、そして迷っていた。何かしなければならぬ。そうは思うのだが、何をすればよいのか分からない。政治を行いたくとも、肝心の情報がない以上、何も出来ない。命令を出しても、それが下々まで伝えられなければ、何の意味もなかった。

飯盛山城は、既に三人衆の支配下にある。もはや三好義継は彼らの操り人形でしかなかった。

「そういえば、堺に松永弾正殿がおられるとか。…一つ、弾正殿に相談してみるのも手でございますようなあ」

「というのは、側近の池田丹後守教正が言つと、

「弾正になあ」

義継はハアと溜息を吐きながら、ぼんやりと、三人衆に並び立つ実力者たる禿頭の爺のことを考えていた。

永禄十年二月十六日。

この日、飯盛山城主にして三好政権総帥たる従四位下左京大夫三好孫六郎義継が、飯盛山を離れ、堺に赴き、松永弾正の庇護下に入ったという、衝撃的な急報が畿内中に轟いた。

要約すれば、義継が三人衆の下から逃げて、松永弾正久秀の庇護下に入ったということである。これほど驚くべき事件が、他にあるだろうか。これにより、三人衆は、三好政権を主導的に運営する政治的根拠を喪失したことになるのだ。

そして、四月六日。

堺の松永久秀は、三好義継を擁して、堂々と信貴山城に入り、そ

して同月十一日、彼らは多聞山城に入城した。その上で、義継を擁している自分こそが政権の主導権を握ったのだということを満天下に示し始めたのだった。

【落日編】第135章 第十四代將軍足利義栄誕生

永禄十年（一五六七年）六月に入った頃、京都は二条御所に、朝鮮国王が派遣した特使がやってきた。外交交渉を主たる目的とした使節団であり、如何に乱世に喘いでいるからとて、これを無碍に扱うことは、国際社会における日本国の立場をさらに悪化させることにもなりかねず、ゆえに出来うる限り丁重に扱わねばならなかった。かといって、將軍不在の今、日本国政府を代表して外国の使節団に対応できる人間がいけないことも事実だった。

朝廷…、といったところで、そんなものに実権がないことぐらい、朝鮮王とて熟知していよう。帝と対面させ、お茶を濁した程度で彼らが帰国するとも思えない。彼らとしては、応永の外寇以来、ギクシヤクとしている両国関係を改善し、その上で、倭寇など、山積する問題を解決する糸口を掴みたいという思惑があった。即ち、実利を求めて来日した外交使節である以上、彼らも、実利をもたらしてくれる実力者との会談を求めているのだった。

とまあ、この程度なら、さして問題はなかった。都を支配し、近畿地方一円を掌握しているのは三好家なのだから、三好家の然るべき人間が対応すればよい。もしも將軍に会いたいというなら、足利義栄と対面させればいい。どうせ、いずれ將軍になるお方なのだからだ。

三好側が交渉に乗り出す前に、使節団側は、自らの交渉相手として、越前に亡命中の足利義秋を指名したのだった。これは、三好政権にとって、青天の霹靂というべきか、痛恨の大打撃となりかねぬ最悪の事態であった。何しろ、朝鮮王の特使が、義秋を交渉相手に指名したということは、即ち朝鮮王が足利義秋を日本という国の国家元首だと認識していると言うことであり、三好家が擁立している足利義栄は国際的に、日本国の元首、即ち將軍であるとは認められていないと言うことになるのだ。

そんなことが世間に露見すれば一大事である。無論、その程度で義栄擁立を引っ込めるほど、三好家とて柔ではないが、しかし、ただでさえ義秋の権威が高まり、義栄の存在感が霞みつつある昨今。朝鮮王までも義秋が次期將軍として相応しい存在だと認識している。なんてことが知れ渡れば、義栄擁立論は一挙にしばみかなくなかった。それでもなお強引に義栄を擁立すれば、それは三好家の横暴だと受け取られかねない。ただでさえ足利義輝を殺害したことで、世情の反発を買っている三好家なのだった。

朝鮮王特使事件は、結局、三好三人衆が無難に処理し、何事もなく終結した。三人衆が徹底した緘口令を敷いたこともあり、人々は、摂津普門寺に滞在していた義栄を訪問した後に、朝鮮王の特使は帰国したのだと思っていた。

けれど…。

こうした事件が勃発した以上、三好方としても、手を拱いて、義秋の存在を見守るわけにはいかなかった。とはいえ、強国朝倉の庇護下にある彼をどうにかできるものでもなく、ならば、足利義栄を持って將軍とし、それを既成事実化させることで、義秋の存在感を低下させるほかはない。

「義栄様をもつて將軍とする」

だから、飯盛山城における討議で、日向守長逸がそう切り出しても、異論を挙げる者などいなかった。

「されど、問題は朝廷でござるな」

と、下野守政康が苦りきった顔をして言うと、

「問題はない。朝廷には圧力をかける！」

長逸はきっぱりと、断言するように言った。

弱体化した三好政権による朝廷折衝というのは、三人衆が想像していた以上に難航した。朝廷の最高実力者の一人たる近衛前久の支援もあつたので、彼らとしては一ヶ月もあれば、即ち七月から八月

くらいになれば、足利義栄に征夷大将軍宣下が下るものだと考えていたのだが、朝廷が要求した金銭が支払えなかったことや、松永弾正に敗北したこともあって、実際に、義栄をもって將軍にすると朝廷が命じたのは、翌年、即ち永禄十一年（一五六八年）二月八日のことであつた。

兎にも角にも、朝廷、即ち正親町天皇の勅使が、普門寺に赴き、義栄を將軍にするという、いわゆる征夷大将軍宣下を下したことで、三好政権としては、最大の懸案事項が、ようやく解決を見たことになった。後は、新將軍足利義栄を中心とする新幕府を軌道に乗せて、これを絶対的な既成事実として満天下に知らしめていくだけである。かくして、室町幕府第十三代將軍足利義輝が殺されて、実に三年近い歳月が流れた後、ようやく、後任たる第十四代將軍が誕生したのだつた。

所変わつて、ここは美濃。

時は少し戻り、永禄十年（一五六七年）は九月初旬である。

岐阜城。旧名、稲葉山城。

いわずとされた、美濃齋藤氏の本拠である。齋藤道三以来三代に渡り齋藤一族が支配してきた城であるが、今ではすつぱりと名も変わつて、尾張の国主たる織田信長の居城となつていた。まあ、信長は道三の義理の息子なのだから、そう言う意味では、齋藤氏との関係性が絶たれたわけではなかったが、道三以来二十年近くに渡り保たれてきた齋藤の名が消えたことは、人々にとり、大きな衝撃と新たな時代の幕開けを感じさせるに十分な効果があつたといえた。

何はともかく、織田信長は長年の夢であつた美濃攻略を、ここに実現したわけである。桶狭間に勝利し、その名を天下に轟かせてから、実に七年以上の月日が流れている。織田軍のその後の急激な勢力拡大を思えば、余りに長い戦いであつたといえるが、兎にも角にも、濃尾両国の覇者となつたことで、信長の存在は、一躍、天下を動かさしめるキーマンの一人として認識されるようになった。

濃尾両国。石高にすると、百万石は下らない。だだっ広い平野の中に、三つもの大河が通っている。京の都にも近く、また広大な農耕地や豊富な水資源を誇る、豊穣の代名詞のような地域を自らの支配下におさめたことは、この後の織田氏の急激な勢力拡大を支える大きな原動力となった。また、信長はかねて尾張国内にて実現していた常備軍制度を新領土たる美濃にも適用し、常時大規模な兵力展開が可能な体制を整えただけでなく、大規模な鉄砲隊の編成、あるいは楽市楽座などの画期的な新政策を次から次へと打ち出し、斎藤氏時代とは比べ物にならない強大な国力を手に入れていくようになるのだった。

永禄十年（一五六七年）十月。

畿内では、再び戦乱があった。

きっかけは、三好三人衆が、本格的に足利義栄を將軍職に擁立すべく、朝廷に働きかけるようになったからだが、これに、松永久秀の下にあり、全く蚊帳の外に放り出されていた三好義継が公然と異議を唱えたのである。

かくして三人衆と松永弾正の間で、再び戦いが開始されることになった。足利義栄を擁する三人衆と、三好義継を擁する松永弾正という構図である。

三人衆のうち、山城国にあった三好長逸は、総勢三万の軍で南下し、大和に進攻した。これに対し、松永軍は一万五千で迎撃し、十月六日、両軍は奈良郊外のただっ広い野原にて激突。当初は数に勝る三好軍が圧倒したものの、最終的には弾正久秀の内応工作や奇襲作戦などが功を奏し、松永軍の逆転大勝利で終結した。

そして、問題はこれからだった。

無様な大敗を喫した長逸軍は、松永軍による追撃を恐れ、やむなく東大寺に駆け込んだのである。聖武天皇以来、数百年間もの歴史を誇る大寺院なら、さしもの松永弾正も手出しが出来ないだろうという思惑の下、長逸はここに駆け込んだわけだが、包囲した松永弾

正は、生憎、そんな感情など持ち合わせてはいなかった。

「バカめ」

弾正は、日向守長逸が東大寺に逃げ込んだと知るや、勝ち誇ったように、豪快に高笑いしていた。

「如何なさいますか？」

重臣の林若狭守が、彼の下にやってきて、そんな風に尋ねながら、自らの席に腰を下ろした。

「如何なさいますか、だと？ 知れたことを抜かすな。東大寺だろうとなんだろうと、日向を匿うなら、焼き払うだけだ。…とりあえず、寺側に使者を出せ！ 応じぬなら、聖武天皇以来の歴史ごと悉く焼き払ってやる！」

弾正が声高に宣言すると、居並ぶ諸将は少しばかり驚いたもの、あえて反論はしなかった。弾正という男は、やるといったらやるのである。今更、「なりませぬ」と言ったところで、聞くような主君でないことは、長年従っている彼らなら十分分かっていることであつた。

かくして…。

東大寺側が三好長逸引渡しに応じなかったこともあり、松永軍は東大寺に対し、情け容赦なき猛攻を仕掛けた。鼠一匹、蟻一匹たりとて逃さぬ、完璧な包囲態勢を敷くと、その上で、火矢を放ち、長逸以下籠城兵を焼き殺そうとしたのだつた。

燃える。

東大寺が燃える。

聖武天皇がその総力を挙げて作り上げ、源頼朝によって再建された歴史的建造物が、紅蓮色に輝き、燃え尽きようとしていた。三好長逸配下の兵士たちは、襲い来る業火の中を、必死に逃げ惑い、そして殺された。辛うじて炎から逃げ出せた者も、完全包囲している松永軍の集中砲火を浴びて、やはり殺された。



まさに地獄以上の地獄。悲鳴に喚声、何百年もの歴史を背負って崩れ落ちる建物の発する轟音は、確実に古き時代の終わりを告げているようだった。

結局、三好長逸は取り逃がし、東大寺大仏殿は焼け落ちた。即ち松永弾正久秀は、源平合戦時代の平重衡に続いて二人目の東大寺焼き討ち実行犯となったわけであった。後に織田信長は、同盟者たる徳川家康に松永弾正を紹介した際、彼が成し遂げた三大悪事の一つとして、今回の東大寺焼討ちを挙げたという（残る二つは主家三好氏関係者を暗殺したとと將軍義輝を殺害したこと）。けれど、東大寺大仏殿もろとも長逸軍を殲滅したことで、彼の勢力は急激に回復し、筒井順慶の攻勢に押されて危うくなっていた大和国主の座も、これで完璧なものとなった。

しかし三好長逸を取り逃がしてしまったことは、弾正にとっても、三好家にとっても痛恨の凶事というべきだった。長逸が死んでいれば、三人衆はその力を失い、弾正久秀による三好家統一が実現されていただろう。まあ、彼による篡奪は防げなくなるかもしれないが、とにかく、これまで飽くことなく繰り返されてきた無意味な内部紛争には、とりあえず終止符を打つことができたかもしれない。だが、長逸が生き延び、三人衆が引き続き力を維持したことで、両陣営の争いは終わるところか、いよいよ激しさを増していくようになる。辛うじて保たれてきた三好政権としての絆は完全に断ち切れ、後は累代の仇の如くいがみ合う両陣営が、畿内全土を舞台に、血で血を洗う醜くも情けない死闘を繰り返すだけだった。

【落日編】第136章 信長の野望

美濃は岐阜。

織田上総介信長は相も変らぬ仏頂面を浮かべながら、のっぽのよ  
うな金華山の上に聳え立つ城の一番高いところから、発展途上の岐  
阜の町を睨みつけていた。

岐阜の町。旧名井ノ口。

長い斎藤氏の支配が終わり、織田氏の支配が始まると、名前が井  
ノ口から岐阜に変わったことが、些細なことに思われるほど、何か  
ら何まで、全く新しくなった。

信長は新しい物好きである。まず、斎藤道三時代にも行われてい  
ながら、義龍・龍興時代を通じてなおざりになっていた楽市楽座政  
策を徹底的に推進し、そのほか革新的とも言える経済政策を数多く  
断行して、岐阜の急激な発展を後押ししていた。また、普請事業も  
数多く行われ、とりわけ、岐阜の町の一等地には、織田家の重臣た  
ちが次々と役宅を設けていったから、そのための普請で、人夫たち  
は大忙しだった。

織田の重臣というと、林秀貞（通勝ともいう）、佐久間信盛、柴  
田勝家、丹羽長秀、森可成らが代表的であるが、その他にも、滝川  
一益や木下秀吉、前田利家、佐々成政らもこのところ急激に頭角を  
現し、重臣の座に列するようになっていた。

信長の不機嫌は、毎度の事である。今や美濃・尾張百万石の太守  
となりおおせたが、無論、自ら天下布武を唱えている以上、その程  
度で満足するような彼でもない。岐阜という名前も、本来は、周の  
文王が岐山に拠って天下を取ったという故事から取っており、文王  
の如く自らも天下を取ってやるという気概の表れだった。

「足りんツ！」

彼の怒鳴り声は、今や岐阜城の日常を語る上で、欠かせぬ要素の

一つとなっていた。目下、彼の怒りは、その手の中で空っぽになっている。酒盃にあるらしく、控えていた小姓たちを鬼の如き形相でぎろりと睨み付けると、

「酒だ！ ワインだ！」

と、怒鳴っていた。

「はッ！」

小姓たちは慌てて退出し、すかさず、ワインなる洋酒を持ってきた。新し物好きの彼は、堺の町より取り寄せた南蛮渡来の、この奇妙な色をした酒が大好きだった。

「猿ッ！」

信長は何やら思いついたかのように、唐突に振り返ると、後ろのほうで小さくなっている木下藤吉郎秀吉を睨み付けた。その卑屈な態度が、如何にも猿らしいが、しかし、今の彼は、名もなき貧農の倅でも、取るに足らぬ草履取りでもなかった。織田軍内にこの人ありと、既に知られた有名武将たる木下秀吉なのである。

「上様！ お呼びですか」

秀吉は、相変わらずおべっかが上手い。いきなり『上様』もないだろう。そんな表現は、およそ足利將軍家か、それに準じる存在にのみ使うことが許される高貴なもので、織田信長は美濃・尾張の太守とはいえ、『上様』と評されるほどの力も権威もない。

しかし、あえて『上様』と呼んでみることで、天下人にならんと欲する主君の機嫌をとったのである。秀吉は、なかなか目ざとい男だった。

「たわけ！ 上様はやめよ」

信長は満更でもなさそうな笑みを浮かべながら、皺くちな笑みを浮かべる猿を睨み付けた。

「畿内の情勢はどうなっておるか？ そなたの考えとともに、聞かせよ！」

信長の問いは、いつでもどこでも単刀直入である。回りくどい問いかけ、答えを極端に嫌う彼らしい。故に秀吉は、

「松永弾正の勢力が急速に回復しつつあります」

と答え、にやりと笑った。

「それがしの考えとしては、まだ待つべきと心得ます」

「…待つべき、とな？」

信長はゆっくりと腰を下ろして、ごろりとその場に横になった。

誰に対しても、露骨なまでに横柄な態度をとるのは、彼の癖の一つになっていた。

「松永弾正と三人衆の対立が激化すればするほど、三好の勢力は衰えましょう。ただ、拙速は禁物。衰えたりといえど、二十年以上に渡り畿内を支配した三好の底力は侮れませぬ」

「ふん」

「されど、それも時間の問題。まずは我らは力を固め、三好の衰弱を眺めているが上策と心得ます」

知った風な口をきく秀吉は、すかさず、

「申し訳ありません。この猿めが、知った風な口をききましたこと、伏してお詫び申し上げます」

などと言って、床に頭を擦り付けるが如く、深々と頭を下げた。

「構わぬ！ とりあえず、余は力を蓄える。それと、滝川に使者を出せ。伊勢の問題、早急にかたを付けよ、とな」

信長の怒号に似た命令に承服しつつ、秀吉や小姓たちは、慌しく彼の下を退散していった。

美濃をとり、めでたく百万石の太守となりおおせた信長は、目下、伊勢攻めに全力を注いでいた。

その総奉行となっていたのが織田家の新参家老の一人たる滝川一益で、彼は一万を越える織田軍を従えて北伊勢に進攻、永禄十一年（一五六八年）二月半ばになって、ついに北伊勢地方の名族神戸氏を降伏させることに成功したのだった。

「降伏の証とし、神戸家には、信長公が御三男、信孝公を入れて、信孝公に家督を引き継がせること」

一益が要求したのは、以上である。神戸家は引き続き温存させる  
と言いながら、その実、信長の子たる三七郎信孝に引き継がせるこ  
とで、神戸家の乗っ取りを画策したわけであった。こうした手法は、  
戦国時代にあつては割と多く使われており、毛利元就が、自らの次  
男元春を吉川家に、三男隆景を小早川家に入れて、両家に乗っ取っ  
てしまったように、あるいは三好長慶が、弟たる冬康を安宅氏に、  
一存を十河氏に入れて、両家を三好家の支配下に入れてしまったよ  
うに、とにかく事例は豊富だった。

後に信長は、そうした手法をさらに進めて、伊勢支配の完璧を期  
していく。例えば、北伊勢の名門長野氏に対しては、自らの実弟た  
る信包のぶかねを入れ、さらに伊勢国南部から中部にかけて大きな勢威を誇  
っていた北畠家には、次男の信雄を入れ、これに乗っ取ってしまった  
ている。

とまあ、とにかく、神戸氏が織田軍に屈したことで、北伊勢地域  
の大部分が織田氏の領国に加わった。本国尾張の安泰を期すため  
も、伊勢の掌握は必須であり、信長としては、この勢いのまま、大  
挙して伊勢中部から南部に進撃したかったのだが、信濃には武田が、  
南近江には六角が、越前には朝倉が、数多くの強豪が犇く中、新領  
国たる美濃の支配も安定していない状況での積極策は極力控えるべ  
きだった。

永禄十一年（一五六八年）も三月ごろになると、畿内の情勢は凄  
まじく悪化するようになった。

二月に、足利義栄が待望の將軍職を勝ち取り、第十四代征夷大将  
軍となっている。この際には、松永弾正、三好三人衆両者が、共同  
で朝廷工作に励んだものの、以後一ヶ月としないうちに、再び両軍  
は刃を交えるようになっていた。

昨年末頃の東大寺合戦で、三好長逸軍が記録的大敗を喫して以後、  
両陣営の形勢は逆転し、松永弾正軍の優勢は歴然たるものとなって  
いた。彼は京の都を奪取し、さらに各地の三好氏配下の豪族たちを、

擁立している三好義継の名を持って寝返らせ、三人衆を孤立させた。三人衆の勢力は、河内国と摂津、和泉に一部を残すのみとなり、もはや松永弾正の勝利は誰の目にも明らかとなりつつあった。

新年を迎えた頃、三人衆は四国の支配者たる篠原長房の支援を得ると、すかさず反撃を開始し、とりあえず戦線は膠着状態となった。二月になり、両者は暫定的な和議を結んで、足利義栄を共同で將軍職に擁立したが、二月末頃から再び対立し、激突した。

四月になり、越前国。

ここは朝倉義景の領国である。王朝時代風の貴族文化に憧れていた義景の下、本拠地たる一乗谷は、小京都と称えられるほどの繁栄を誇っていたが、余りに貴族化しすぎたために、武士の気概を失っていた義景は、自らの庇護下にある足利義秋を擁立して、三好討伐の兵を興す気は毛頭ないようだった。

義秋の不満は極度に高まっている。

「十兵衛さへもんのかみッ！ 左衛門督（義景のこと）はいつたい何を考えておるのだ！」

義秋の代官として、朝倉家の重臣に列するようになっていた明智十兵衛光秀は、義秋の屋敷内で、先ほどからずっと、彼の怒りを浴びていた。

「も、申し訳ありません」

彼は平身低頭、ひたすら謝している。

「義景公には、上洛の意なく、あのお方が申されるには、御所様には、是非いつまでも一乗谷に御逗留いただき、安らかな生涯をお過ごしあれ、と…」

光秀としても辛いところである。義景に散々出兵を求めても、彼は鬱陶しそうに彼を睨むだけで、何一つ行動しようとはしなかった。朝倉家譜代の重臣の中にも、今こそ天下を掴む好機と主張する者がいないわけではない。しかし、総じて足利義秋の権威を背景に、朝倉家内部で頭角を現す光秀に不快感を抱く者ばかりで、彼の主張に

潔く耳を傾けてくれるような殊勝な者は皆無だった。

「たわけッ！ 誰がこんな山深い田舎で、一生を終えるものか！ それなら、興福寺で坊主をやっておったほうがマシじゃッ！」

義秋の怒りは、既に我慢の限界を超えていたようだった。光秀は困ったように、側に控える細川藤孝を見つめた。救いを求めるような彼の視線を受けて、藤孝はすかさず義秋の御前に歩み寄ると、

「とりあえず、今後の方策を考えましょう」

と、必死になって宥め始めた。

「それがしが思いまするに、美濃をとった織田上総介など、頼るに値する男かと思われませう」

十兵衛光秀は、これまでの失態を挽回することく、必死になつて自らの案を主張していた。

「織田上総介だと？」

義秋の眉がぴくりと動く。

「上総介は、父祖の地を受け継ぎ、のうのうと過ごしておられる義景公とは違い、その実力で美濃を奪い取ったお方です。もし御所様が上総介殿をお頼りになられれば、彼は必ず、御所様を擁して上洛なされるでしょう。織田の力は、今や美濃・尾張・北伊勢で百万石を遙かに越えており、動員兵力も、三万から四万は軽く超えませう」

「…三万から四万？」

「はッ！ さらに、浅井長政には、自らの妹お市を嫁がせて、同盟関係にあります」

光秀の説得に、義秋の心もようやく落ち着きを取り戻したらしい。彼とて、信長の事は知っている。じかに会ったことはないが、かつて彼と会ったことがある義輝から、彼の事を聞いたことがあった。

「今川治部（義元）を桶狭間に討ち取った男に、この余が頼るわけか」

今川家は、足利家の分家の中では、吉良家に次ぐ名門とされていた家である。江戸時代風に言うなら、御三家に匹敵する家といつて

過言ではない。その当主たる義元を討ち取った男を頼れという光秀に、義秋はにやりと笑った。

「世は戦国乱世。義元公は、上総殿を討ち取るべく尾張に攻め入り、逆に討ち取られただけ。自業自得です。上総殿が悪いわけではありません。」

藤孝がそう答えると、義秋は「分かっておる」と言った。

義秋は、その直後、自らの名を義昭と改めた。秋というのは、少しばかり不吉な感じがする、という理由からだだったが、実際には、名前を変えることで心機一転、今までの不運から解放されたいという彼の思いの表れでもあった。

その後、足利義昭の使者として、明智光秀が密かに美濃に入り、岐阜城に上った。信長に謁見し、義昭を擁立して上洛する意思があるのかないのか、それを確認しようとしたのであった。

「義昭公か」

上座にあつて、ニタニタと楽しそうに笑う信長を、譜代の重臣たちは不思議そうに見つめていた。

「面白い！」

扇子をパンと閉じて、信長はすつくと立ち上がった。

「光秀殿、それは面白き案じゃな」

下座にて平伏す光秀の下に歩み寄った信長は、信じがたいほどの笑みをその満面に浮かべながら、彼の肩をぽんと叩いた。

「ま、ともかく事は大事。後でじっくり話をするとして、十兵衛殿もお疲れであろう。とりあえずゆるりと疲れを癒すがよい。確か、十兵衛殿は、かつて我が父道三入道に仕えた明智家の末裔と聞いた。道三入道の住んだこの城には、格別の思いいれもあるう」

世間で聞くところの信長と、じかに見る信長では、こつも違つものかと、光秀は驚きを隠せなかった。鬼神の如き人。それが世間的な信長評である。光秀もそうだと思っていた。何しろ、実力で尾張を統一し、今川義元を討ち取り、美濃を攻め取った人なのだ。そう



いう恐るべき人でなければ、そんな偉業はなし得まい。そう思って、信長に謁見したわけだが、案外、信長は凜々しい顔をした、普通の青年であった。

光秀は疲れを癒すべく信長の下を退散し、信長は、一人静かに黙考を重ねていた。義昭を擁し、上洛する。願ってもない大義である。上洛し、都を取れば、天下はおのずから信長のものだ。三好長慶死後、誰もが狙い、求め続けた彼の後釜には、自分が座るのだ。

信長はふうと小さく溜息を吐き、そして、自らが書き記した『天下布武』の文字を見つめた。

「俺が天下を取る」

信長は静かに目を閉じ、そして、ゆっくりと寝転がった。

【落日編】第137章 苦悩の義継

三好孫六郎義継。

永禄十一年（一五六八年）をもって、めでたく十七歳を迎えた。けれど、彼を巡る情勢は、とんと改善の兆しを見せず、どころかどんどん、悪くなっていく一方だった。

というより、義継の存在感は日に日に低下し、彼の事が人々の話題に上ることは明らかに少なくなった。松永弾正がどうした、三好三人衆がどう出たか、そんな会話の中でも、義継の名前は、とんとあがらなかった。

その義継は、松永弾正の居城たる多聞山城にあって、側室に迎えたお藤の方と、囲碁など打ちながら、こみ上げる憂さを晴らしていた。

「大御台様は、このごろ、何事かあれば、弾正の下に向かっておべつかに励んでおられる」

気に入らないことを洗いざらい並べ立ててみれば、紙がいくらあっても足りなかった。自分を無視して進んでいく情勢のことも、松永弾正、三人衆が争っているうちにどんどん衰退していく三好家のことも、そして、松永弾正に擦り寄って、殊更自分を無視しようとする大御台の存在も許し難かった。

「…気に入らんッ！」

このところ、ますます酒が多くなった義継は、この日も、何杯目になるかしれぬ酒をぐびぐびと飲み干して、ハアアと深き、重い溜息を吐いた。

何をやっても、全く思いのままにならぬ不自由な権力者、義継は、既に彼の判断で多聞山城を出ることも叶わず、ほとんど、松永弾正により軟禁されたも同然の状態に追い込まれていた。

一方、その松永弾正は、二月中頃に足利義栄を三人衆と共同で擁

立したかと思うと、二月末頃から再び戦い始め、今では、畿内狭しと暴れまわっている。当初、圧倒的優勢に立っていた松永軍であるが、三人衆側に篠原長房が与力したことで、形勢は一変し、今では両軍、ほとんど一進一退、互角の攻防を重ねつつ、無意味かつ無駄な犠牲を流し続けていた。

「…これじゃ、いつ、攻め込まれても仕方ないな」

義継は、無駄に贅沢を極めている多聞山城本丸御殿の一角にあつて、そうぼやいていた。

「養父上<sup>ちやうじやう</sup>…。どうやらそれがしは、養父上の御期待に沿えそうもありませんぬ。…三好家は、奈落の底に突き落とされるかの如き衰亡の道を極めております」

十河一存の子に生まれながら、三好義興亡き後、三好宗家の後継者に選出された義継は、大いなる英雄三好長慶と、不運にして将来を誰よりも囑望されていた聡明な後継者義興の狭間にあつて、もがき苦しんできた。

彼らを超える。

それは、家督継承以後の義継が常に心の中に抱いてきた目標であった。それなのに…。今の自分はどうかだろう。三好家は見る影もなく衰退し、自分の存在力は無に等しい。これが養父であつたら…。いや、言うまでもあるまい。誰も長慶を無視することはありえない。あれだけ廃人同然の状態になつても、長慶ある限り一つに纏まっていた三好家なのだ。養父がいれば、松永弾正も三人衆も戦つたりはするまい。長慶の存在感は、それだけ強烈に大きかつた。

義興が生きていたら？ できればはよく分らないが、しかし、これほど最悪の事態にはなつていなかっただろう。義興は自分よりはるかに年上だし、教興寺合戦では、三好六万を束ね、見事勝利に導いた。廃人と化した長慶に代わつて三好家を率い、その勇猛かつ聡明さを満天下に示していた。彼がいれば、彼は弾正や三人衆の横暴を決して許さなかつたらう。

結局、そう考えていくと、自分の非力が今の如き事態を招いたの

だといえる。義継はがつくりと頂垂れ、悲しそうに涙した。なんで、自分はこんなに非力なのだろう。なんで…。

四月のある日。

義継は一人の女を斬った。

大御台である。遊佐河内守長教が娘。養父長慶の後室、後妻。

「義継様、御乱心！」

家臣たちは、そう絶叫しながら、多聞山城内を駆けていった。しかし義継は気にしない。乱心？　そう言われれば、確かにそうかもしれなかったが、彼の心は、いつも以上に晴れ晴れとしていた。一人斬ったにもかかわらず、不思議なほど落ち着いていた。

出征中の松永弾正に代わり、松永久通が騒ぎを聞きつけて、義継の下にやってきた。そこには、血みどろのまま即死している大御台の姿があつて…。

「と、殿！　い、如何なされました」

久通は凄絶極まる殺害現場をまじまじと眺めながら、血塗れの鬼と化した義継の顔をじつと見つめていた。

「如何もくそもない。余を辱めたゆえ、斬った。それだけである」  
開き直るかのように、義継は淡々と答えて、刀を鞘に戻した。久通は呆然と立ち尽くしている。城内における刃傷沙汰は、当然御法度であるが、相手が主君たる三好義継では、さしもの久通もどう対処すればよいのか分からない。

義継はそんな彼を無視するかのようになり、すたすたと己が部屋に歩いて行って、閉じこもった。殺す気はなかったのだ。あの婆おばがいけないのだ。

などと思いつつ、彼はゆっくりと目を閉じた。

永禄十一年（一五六八年）七月二十二日。

美濃国は立政寺。

何やら物騒なまでに物々しい。織田の旗指物をつけた将兵が、絶

えず巡回して、不審者がいないか、近づいていないか、いろいろ確認しては、野次馬の如く集まった見物客をしきりに威嚇していた。どうやら、貴人が来るらしい。

人々はそんな風に囁きあって、さてそれが誰なのか、皆、不思議そうな顔をして、事態の推移を見守っていた。

「なんでも、信長様御直々に御出ましになられるって話だ」

「信長様が？」

昨年の今頃、長らくこの国を統治してきた斎藤氏を蹴散らし、新たな支配者に浮上した織田上総介信長。美濃のみならず、本来の領国たる尾張も支配し、さらに北伊勢の神戸氏を臣従させるなど、このところ急激に存在感を増している。

そんな信長が、わざわざこんな寺まで足を運ぶという。信長自ら足を運ばねばならぬほどの貴人とは、果たしていったい誰なのか。人々の期待は高まるばかりである。

「信長は誠に余を出迎えてくれるのだろうか」

盛大な駕籠の中には、まるで置物のように足利義昭がちよこんと座っていた。明智光秀、細川藤孝、和田惟政ら重臣たちがあつらえた数百人の供を従えながら、肅々と行軍する彼は、六角承禎や朝倉義景はじめ、無力な庇護者のために散々失望させられてきたこともあり、織田信長という新興の実力者に対しても、それほど期待している風には見えなかった。

「既に信長公は立政寺に入られたと聞き及びます。信長公のみならず、佐久間信盛、柴田権六勝家、丹羽五郎左衛門長秀、木下藤吉郎秀吉、前田又左衛門利家、佐々内蔵助成政以下、織田方の重臣が勢揃いしておるとのことです」

「…ふーん」

義昭も満更ではなさそうな笑みを浮かべ、

「信長が本気で余を支援してくれるなら、よいがのう」

などと、楽しそうに呟いていた。少なくとも、自分の出迎えに重

臣一人寄越さなかつた朝倉義景よりは遙かにマシだと思えたのだらう。

「上洛し、三好を潰して、今は亡き兄上が無念を晴らすとともに、必ずや余が手で幕府を再興させてみせる」

それが義昭の夢。それが義昭の目標。

少なくとも、三好方の不当な武力によって拵しこむえられたお手盛り將軍義栄など、將軍とは断じて認めない。たとえ朝廷が、彼に將軍宣下を下したのだとしても、そんなことは関係ない。

義昭はそう心の中に思いながら、フウと思い切り息を吸い込んだ。空を見上げると、夏色の雲が辺り一面に広がっていた。

澄み切った青空。

これこそ夏だと、義昭は雪深き越前での生活を思いながら、にっこりと微笑んだ。

立政寺では、足利義昭の来訪を、今か今かと待ちわびていた織田信長と、その郎党たちが、纏わりつくような夏の暑さにも耐えて、じっと座り続けていた。

信長が下座中央、彼の重臣たちが、左右の列に整列している。当然、上座は今のところ空席。

しばらくして、明智十兵衛光秀が入室し、信長の背後にて、深々と頭を下げた。

「足利義昭様、御越しにございます」

光秀がそう告げると、盛大な衣装に身を包んだ足利義昭が、ゆっくりと入室し、そして空席となっている上座に、ちよこんと腰を下ろした。

そして…。

「大義である」

と、彼は不必要なほど大仰な声を発し、平伏す信長をじろりと見下ろした。

「その方が、織田上総か？」

義昭がそう尋ねると、

「はッ！ 織田上総介信長にござりまする」

信長は淡々と答えて、再び深々と頭を下げた。

「面を上げよ。…それと上総よ。その方、かつて我が兄…、いや、今は亡き公方様にお会いしたことがあるう。それ以来、亡き公方様はことあるごとに末頼もしき男じゃと、漏らしておったそうな。そして今、そなたは濃尾両国の太守となり、余を支えて幕府復興に力を貸してくれるという。亡き公方様が眼鏡は決して間違っていないかっただといふことじゃ」

そう言つて、からからと楽しそうに笑う義昭を、信長は実に醒めた目で見つめていた。

「お褒めに預かり、恐悦至極」

そう答えただけで、実に味気ない。

「と、とにかくだ。以後は正統なる將軍継承者たる余に忠勤を励み、必ずや幕府を復興させるのだ。よいな」

これ以上話してもつまらない。既に自分のお披露目は終わったのだ。そう思つた義昭は、謁見式も軽く切り上げて、すたすたと逃げるように立ち去ってしまった。

そんな後姿を眺めつつ、信長はにんまりと笑みなど漏らしている。そして、彼はすかさず上座に歩み寄つて腰を下ろすと、

「権六ッ！」

と、怒鳴つた。

呼ばれた柴田勝家は慌しく平伏し、「何か？」と尋ねた。

「六角に使者を出し、義昭公御上洛につき、道をあげよと申せ！」  
「承知ッ！ が、もし六角が応じぬ場合は？」

実に扱いにくい主君の顔をキツと見据え、勝家は信長の答えを待った。

「その時はそのときで対処のしようがあるう。そなたに任す。…余が前に抗う者は、何人たりとも踏み潰す！ よいな」

「承知ッ！」

権六勝家は軽く頭を下げ、引き下がる。

「猿、犬ッ！ 余は岐阜に戻るぞ」

そう言つて、信長はすつくと立ち上がると、彼の意を汲んだ猿と木下秀吉は、

「馬を引けッ！ 殿が岐阜に御戻りになられるぞ！」

などと、生まれ持った大声を張り上げながら、怒鳴り散らしていた。



【落日編】第138章 三好政権、崩壊！

織田軍動く！

そんな急報に畿内全土が揺れ動いたのは、永禄十一年（一五六八年）九月のことであった。

この日に備え、信長は領下にある美濃・尾張・北伊勢の三ヶ国に大動員令をかけており、さらには、盟国たる三河の徳川家康にも援軍を頼み込むなどして、総勢にして六万という空前の大軍を編成していた。

それが、雪崩のように南近江は六角承禎の領内に攻め入ったのである。九月七日のことだった。

しかしながら、三好、浅井との相次ぐ戦い、さらには家臣団の離反などにより衰亡の極みにあつた六角氏に、この圧倒的脅威に太刀打ちできるだけの力があるはずもなく、織田軍は、まさに怒涛の快進撃を見せて、次々と六角方の要所を攻め落としていった。

九月八日。

前日七日に岐阜を発した信長が、この日、南近江に入った。彼は美濃・南近江国境地帯に陣取ると、戦にきたのか、物見遊山にきたのか、さっぱり分からぬような暢気さで、時折琵琶湖の雄大さや、甲賀山中の神秘さに心をときめかせながら、次から次ともたらされる朗報に耳を傾けていた。

織田軍の先鋒を率いているのは柴田勝家であり、その寄騎には木下秀吉、前田利家、佐々成政らが従っていた。

そして九月十二日。

六角方の支城の一つであつた箕作城みつくりを攻め落とし、続く九月十三日。即ち箕作城陥落の翌日であるが、この日、ついに六角氏の居城

たる観音寺城を陥落させることに成功したのだった。

#### 居城観音寺の陥落。

それは即ち、六角氏の滅亡を意味していた。実際、城主たる六角承禎・義治父子は、とるものもとりにあえず甲賀山中に逃げ込んで、辛うじて織田軍の追捕から逃れたという有様であり、もはや六角氏の旧領であつた南近江全土は織田軍の支配下に入ったも同然となつた。

それにしても…。

長らく南近江の覇者として圧倒的勢威を誇つて、中央政局にも大きな影響力を誇つてきた六角氏が、たつた半月足らずで崩壊するのは、誰も想像できなかったろう。かつては足利幕府が差し向けた討伐軍を一度ならず二度までも撃破し、その武名を天下に轟かせたほどの名族だったのに…。いや、半月ですらない。信長が六角攻めを決意し、出陣したのが九月七日で、観音寺が陥落したのは、九月十三日であるから、たつた六日である。即ち、一週間もたたぬ短期間に、湖南の名族は、新興勢力織田氏のために完膚なきまでに攻め潰されてしまったというわけであつた。

この思いがけぬ急報は、畿内で無意味かつ無駄、あほらしい内戦を延々と繰り返してきた三好三人衆並びに松永弾正にも、果てしなく大きな衝撃を与えることとなつた。

#### 織田軍、総勢六万。

それはまるで、往時の三好軍を彷彿とさせる数である。しかし、衰弱しきつた今の三好にそれだけの兵力を動員する力などあるはずもなく、挙句の果てに、三好政権は松永弾正、三人衆により真っ二つに割れていたから、とてもではないが、織田軍に太刀打ちできるはずもなかった。

しかも、織田軍は僅か一週間足らずで、名族六角氏を完膚なきまでに叩き潰してしまった。尾張兵は弱兵揃いと言われるが、そんな

評判など軽く吹き飛ばしてしまつぐらい、今の織田軍は桁外れに強かった。

このところ松永軍を圧倒し、優勢を取り戻しつつあった三人衆としては、六角軍が抵抗している間に態勢を立て直し、六角を支援するという形でもって織田軍と決戦するつもりでいたのであるが、前提となる六角がいとも容易く崩れてしまったのでは、もはや作戦などあろうはずもなく、

「これでは織田軍には到底勝てませんぞ」

と、下野守政康が、悲壮感漂う顔で、そんな風に嘆かざるを得ぬほど、三人衆は精神的にも肉体的にも、状況的にも、非常に危うい土俵際に追い詰められることになってしまったのだった。

「織田軍は六万と言います」

多聞山城内にあつて、松永久通は苦りきつた顔をして、父たる弾正久秀を睨み付けていた。

「六万なあ。…それだけの数なら、さすがに日向たちの手に負えないだろうな」

全く他人事のように呟きながら、弾正は先ほどからずっと、溜息ばかり吐いていた。

弾正にとつて、織田信長軍がいとも容易く六角軍を撃破してしまったことは大いなる誤算であつた。少なくとも長らく湖南の名族として君臨してきた六角氏なら、その意地にかけても、半年ぐらいは織田軍の進撃を食いとどめてくれるに違いないと思つていたので。

半年ぐらい時間があれば、如何に織田軍が強大といえども、打つ手はいくらでもあつた。武田信玄を扇動して、美濃を圧迫させるとか、あるいは越前の朝倉、伊勢の北畠を動かして織田軍の動きを封じ込めることだつて可能だつたらう。また織田に援軍を派していた徳川家康とて、今川氏真が三河に進撃すれば、撤退せざるを得なかつたらう。

しかし、僅か一週間で六角が潰れてしまつては、もはや、どんな策動も全く意味を成さない。三好家に仕官して以来、稀代の謀將たる評価を確固たるものにしてきた松永弾正ですら、怒濤の如く押し寄せてきた時代の流れに抗うことは不可能だつた。

そう。

これは時代の流れなのだ。かつて新興勢力の旗手として、圧倒的な時代の風を、思い切り帆に受けて走り続けてきた三好家は、いつの間にか新興勢力の旗手たる地位を失い、それに仇名す抵抗勢力の一つになり下がっていたのだつた。三好に抗つた細川のように、今度織田に抗う三好という構図である。

自分たちは、既に時代遅れ。新時代の旗手ではなく、旧時代の藩屏と成り果てている。

そんな厳然たる事実を突きつけられた弾正は愕然となつた。新しい城を築いてみたり、旧来権威の象徴たる將軍を殺したり、東大寺を焼いてみたりと、とにかく常に時代の最先端、自分こそ新興勢力の旗頭だと信じてきた彼には、そう簡単に受け入れられぬ現実ではあつた。

「…織田信長、か」

八年前、桶狭間にて今川義元を奇跡的に討ち取つた男は、今や濃尾両国を掌握し、六角氏を蹴散らして、三好家に取つて代わりうる存在にまで成長してしまつた。

弾正は奇妙な既視感を覚えずにはいられなかつた。そう。今の信長は、かつての長慶そっくりだつた。新たな時代を作るのだと言つて、理想に燃え上がっていた若かりし頃の長慶そのもののような気がしたのである。

いずれにしても、今の信長がかつての長慶のような存在なのだとしたら、自分がいくら抵抗しても勝ち目はないだろう。さながら、かつて自分の上司であつた木沢長政が、長慶の武力の前にあえなく滅亡したように、自分もまたそうならないとは限らない。

「若狭。もしわしが動員をかけたとして、どれだけの兵が集まるか

？」

側に控えし重臣、林若狭守通勝にそう尋ねながら、弾正はすっかり白くなつた髭を摩りながら、「ふーむ」と、なにやら一人考え込んでいる様子だった。

「織田軍に立ち向かうとの仰せであれば、二万…、いや、一万五千が限度でしょう」

「一万五千」

少ない。少なすぎる。弾正は心の中で腹立たしそうに唸っている。しかし、そんな彼に追い討ちをかけるかのように、楠木正虎がこう続けた。

「筒井順慶などは必ず織田方に与力しましょうから、そちらにも兵を差し向けねばなりません。そうなりますと、織田に割ける兵は一万程度となりましょう。…後は、三人衆の出方及び彼らの力ですが、何分、畿内の国人たちは、寄らば大樹の陰ともいふべき性質を持っておりますゆえ、彼らの最大動員兵力は多く見積もっても二万が限度でしょう」

「…わしが一万。奴らが二万。合わせて三万。なるほど。我らも随分と零落れたものよの」

もはや漏れるのは乾ききつた苦笑いしかない。これが、天下に覇を唱えた三好の末路だというのが。長慶が死んで、僅か四年足らずで、三好政権は見る影もなく零落してしまった。その主因を作った元凶ともいえる松永弾正に、本来衰弱を嘆く資格などはないのであるが、とにかく、この事實は、未だ三好家こそ天下最強であると信じて疑わなかつた彼を衝撃のどん底に突き落とした。

「如何なさいますか？」

父ほどではないにせよ、それなりに落胆の色を隠せない久通の問いに、

「決まつておろう」

弾正は、力なくそう答えた。

「…義継様と協議せねばならぬが、織田に抗えるはずもあるまい」

織田軍は、もはや怒涛の如き勢いとか、津波の如きとか、そんな言葉で表現するのが惜しいぐらいの勢いで、大挙して畿内に乗り込んできた。

対する三好軍は、既に都を捨てている。六角滅亡の急報を受け、日向守長逸、下野守政康、主税助友通ら三人衆は、取るものもとりあえず、命辛々、一目散に脱出したのだった。さながら、木曾義仲軍に圧倒されて都落ちを余儀なくされた平家を彷彿とさせる有様であるが、そんな彼らの無様を呆然と眺めていた都の市民は、改めて急激に変わり行く時代というものを感じずにはいられなかったようであった。

とはいえ…。

京を明け渡したとはいえ、一時なりとも長慶死後、畿内にその名を轟かせてきた三人衆なのである。そんな彼らがこのまま引き下がるはずがなく、実際、彼らは織田軍の来襲に備えて準備を着々と整えていた。例えば、三好日向守長逸が山城国は勝龍寺城に入り、三好下野守政康は芥川山城、岩成主税助友通は越水城に入って徹底抗戦の構えを維持しているし、室町幕府第十四代將軍足利義榮を擁する篠原長房も、摂津国は富田城（高槻市）にあつて、いざとなれば、三人衆と連携して織田軍に立ち向かうつもりでいた。

しかしながら…。

だからといって圧倒的勢いを誇る織田軍に勝てるものでもないのである。実際、彼らの築いた俄仕立ての防衛線は、あつという間に織田軍に抜かれ、瞬く間に崩壊した。九月二十九日には三好長逸軍の立て籠もった勝龍寺城が陥落。他の諸城も、その後数日のうちに悉く陥落し、三好軍はやむなく本国とも言える四国に撤退せざるを余儀なくされてしまったのだった。

即ち！

三好長慶が、まだ孫次郎利長といった時代から、苦勞に苦勞を重

ねて勝ち取ってきた畿内の領地は、ここにあえなく喪失の憂き目を見たのである。長慶が、当時の実力者細川晴元に抗い、挙兵したのは、天文八年（一五三九年）のことであったから、三好家の畿内支配は、都合三十年間で空しく幕を閉じることになった。

はつきりと、かつ簡潔明瞭に、厳然たる事実のみ述べるとしよう。かつて繁栄を謳歌した三好政権は、ここに完全に崩壊した。

存続期間は天文十八年（一五四九年）から永禄十一年（一五六八年）。即ち約十九年間であった。これを短いとるか、長いとるか。人はそれぞれであろうが、兎にも角にも、一時代を築いた三好政権は、このようにして歴史の表舞台から消えたわけである。

かくして、織田政権が始まる。即ち、ブレ安土桃山時代の開幕である。

三好政権についての考察

歴史的に見たとき、三好政権が後世に対し、どのような影響を与えたのかは極めて分かりにくい。信長や秀吉のように、短期政権ながらも革新的政策を打ち出し、後世、即ち今の我々を含めた後世の人々の生活に影響を及ぼすような政治を行ったわけではない。

そんな三好政権であるが、織田信長政権の地ならしをしたという点において、大きな歴史的存在意義があるように思う。例えば三好長慶や、その実質的後継者といえた松永久秀は、旧来の権威に抛らず実力によって政権を握ったが、幕府を滅ぼすことなくこれを利用してしたこと（とはいえ、長慶は足利義輝を一時的に数年間、京都から追放しているし、久秀に至っては義輝を殺害しているが）、その結果、自らの政権が幕府（將軍）に左右されるという皮肉な結果を生み、旧体制の変革など重要な政策も容易く実行に移せなかった。信長が足利義昭からの管領、あるいは副將軍就任の打診を断り、極力幕府とかわらぬ方針を採ったのは、こうした三好政権の失敗例を反面教師としたのではあるまいか。

また、信長と長慶（あるいは松永久秀）の共通点も多い。

例えば、長慶はいち早く堺の町に関心を持ち、この経済力を利用した。信長も政権掌握後、堺の町をフル活用している。あるいは、長慶や信長は度々、その居城を変えている。長慶の場合だと、阿波芝生城に始まり、越水城、芥川山城、飯盛山城といった具合である。信長だと、那古屋城に始まり、清洲城、小牧山城、岐阜城、安土城である。一方、上杉氏は春日山城、武田氏は躑躅ヶ崎館<sup>つづしがさきやかた</sup>、北条氏は小田原城、毛利氏は吉田郡山城、長宗我部氏は岡豊城と、戦国大名の多くは常に居城が一定である。

また長慶は畿内におけるキリスト教布教をいち早く容認している



が、信長もキリスト教をある程度庇護していた。その他、松永久秀に代表されるように、長慶は比較的身分や出自に囚われない、能力重視の人材登用を行っており、この辺りも信長と似ていると言えるだろう（ただ、二人とも、自分の死後、実力重視で取り立てた者に権力を篡奪される辺りは、歴史的皮肉と言えるが）。

松永久秀と信長の共通点は、はっきり言えば、旧時代の権威を叩き壊した点にある。久秀は將軍を殺し、東大寺を焼いた。信長は將軍を半永久的に追放し、比叡山延暦寺を焼いている。

とにかく、三好・松永政権というものを簡潔に表現するとなら、『プレ織田政権』。これ以上の表現もないだろうと思う。

以上、私なりに三好政権というものを考えてみました。これは私の独断と偏見による勝手な解釈、考察であり、他に三好政権が果たした具体的役割や存在意義があるのかもしれませんが、もしあるのでしたら、教えていただけると幸いです。

三好政権という言い方自体、余り使われず、拳句歴史ゲームなどでは、三好氏は、信長によりあっけなく滅ぼされた雑魚大名的扱いを受けることが多いのですが（長慶、義賢あたりはともかく、冬康、一存らの評価が余りに低い！）、彼らは間違いなく幕政を支配し、戦国中期の日本の頂点に立っていたのです（形だけですが）。

【落日編】第139章 義継、久秀、降伏！

織田信長、入京す！

世の中の激変を告げるこの知らせに、畿内中が震撼していた頃、三好義継は多聞山城内にあって、松永弾正と果てしなき激論を交えていた。

「降伏、だと？」

義継は、眼前にて平伏す弾正久秀をぎろりと睨み付けて、何度も、「ならんツ！」と怒鳴っていた。

「されど、もはや降伏する以外に手立てはありません。…怒涛の如き織田軍に抗えるはずもなく…」

いつもの弾正らしくもない余りの弱気ぶりに、義継は腹立たしそうにハアと溜息を吐いた。

「織田に抗えぬほど我らが弱体化してしまったのは、お前たちが、無意味な内戦に明け暮れたからであろう。…今こそ、そなたと三人衆が余の下に一致団結して、織田軍を迎撃すれば、あるいは勝利することも不可能ではあるまい」

「いや、無理にござります」

弾正はきつぱりと言いつ切り、そしてすつくと立ち上がった。

「織田の基礎戦力は六万。これに各地の国人たちが結集すれば、七万、八万は下らないでしょう。一方、三人衆や篠原長房らの動員可能兵力は最大二万。そして、拙者が一万程度。合わせて三万。…これでは、到底勝ち目はありません」

そう言いながら、天守閣の下に広がる壮大な城下町をジッと見つめている弾正久秀であった。

「織田は、そんなに強いのか？」

義継は茫然自失の体で、がっくりと頂垂れている。

「残念ながら…。既に、高屋城の笑岩入道様も、因幡守殿（三好政

勝)も、織田方に帰属する方針を固めたようにございますし…」

「…な、お、大叔父上までもがが？」

「はい」

それは義継にとって、六角が敗れたことや、織田信長が六万もの兵を率いて進撃してきたこと以上の衝撃であつたりした。何しろ、笑岩入道は、今は亡き三好元長の実弟であり、長慶の叔父として、三好家の発展に尽力してきた大功労者なのである。

「もはや、我らに打つ手はありません。…ただ、唯一無二の手として、織田信長の衰退を待つという手もなくはありません」

「…信長の衰退を待つ？」

「はッ！」

弾正の野心的な眼光は、年老いてなお、衰えてはいないようだった。むしろ、老いてますます盛んと言うべきか、あるいは逆境に追い込まれば追い込まれるほど、彼の瞳は鋭さを増すばかりのようである。彼の不屈の闘志には、義継もただ圧倒されるばかりであった。

「信長は今や都を支配し、天下人の座に王手をかけましたが、果たして彼がいつまで政権を維持できますかな。確かに六角は滅びましたが、しかし彼の周りを御覧あれ。背後、即ち美濃の東側には甲信両国を押さえ、さらに上野西部、駿河にも勢力を伸ばしている甲斐の虎、武田信玄入道がおりますし、北側には百年の大国朝倉義景、南には、国司家の名誉を今に保っている古豪北畠具教が依然として健在でございます。また、三好日向、下野、岩城主税助らも容易く織田には降伏しますまい。となれば、畿内はまだ不穩地帯となります。織田が畿内の処理に梃子摺れば、西から毛利などの大国が攻め込んでくる可能性も十分考えられます」

「…」

「それに畿内には、今は亡き御屋形様ですら対処に苦慮された本願寺が依然として健在でございます。今は十一世法主顯如が統治しておりますが、顯如の下、本願寺の勢いはますます盛んとか。」

信長の頼みの綱は、三河の徳川家康、北近江の浅井長政でござり

ましようが、徳川は目下、今川氏真との攻防で手一杯。浅井長政も、長年朝倉家と同盟してきた誼がありますれば、朝倉をこちら側につければ、容易くは動けますまい。若狭の武田、丹後の一色、丹波の内藤、赤井……。その他諸々、各地の豪族大名を大結集すれば、必ずや信長の政権は崩壊いたします」

「こつも延々と、こつだからああ、ああだからこつと説明を加えられると、義継も「なるほど」と頷かずにはいらなかった。実際、冷静になって考えてみれば、信長の周りは敵ばかりなわけで、これを上手く利用すれば、確かに復権の機会は、案外近くに転がっているのかもしれない。」

「それまでの間、我らは信長に頭でも下げつつ、意地でも力を保ち続けるのです」

と、弾正が言うつと、

「そつかもしれん」

ついに観念した義継であった。

義継としても苦渋に苦渋を重ねた決断ではあった。

何しろ、これまでずっと天下最強の大家の名を欲しい俛にしてきた三好宗家の当主が、数年前まで尾張の弱小大名に過ぎなかった男に平伏すのだ。臣下の礼をとるのである。悔しくないはずがない。長慶や義興、あるいは数多の如き一門家臣たちから預けられた三好家を、こんな末路に導いてしまった己が責任を痛感しつつ、彼はフウと小さな溜息を吐いた。

今更考えていても、悩んでいても、迷っていても仕方がないではないか。こつなつた以上、仕方ない。弾正久秀が言うように、次の手を打つほうが、よほど建設的である。

「信長の滅びを待つ、か……」

それも、弾正の話によれば、さして遠くない未来のようであった。義継は側室のお藤の方に酒を持たせると、そよそよと吹きぬける、

秋の夜風に浸りつつ、その場にごろりと寝転がった。

永禄十一年（一五六八年）九月二十八日。

三好義継及び松永久秀の両名は、僅かな供廻りのみを従えて入京し、そして、今や京洛の霸王となった織田信長に謁見した。

時代は変わる。諸行無常。

盛者必衰。

このときほど、人々はそれらの言葉を意識したことはなかったろう。ここ二十年、ずっと都の支配者として君臨し、栄華を極めてきた三好政権の総帥が、織田信長という男に頭を下げに来たのである。

信長は本能寺にいる。

彼の態度は、今も昔も、大そう偉そうであった。如何に家臣たちとはいえ、重臣と評されているような人たちを前にしても、彼は構わずごろりと寝転がっていた。会議が始まって、彼はけろりとした顔で、上座の上で居眠りを決め込んでいたりする。

義継、弾正がやってきたときも、彼の態度は、そんなものだった。「殿、三好左京大夫、松永弾正が参りました」

と、丹羽五郎左衛門長秀が報告しても、彼は「そうか」と言ったきりで、さして驚く風でもなかった。

とにかく、長秀が目で合図すると、二人はゆっくりと入室し、そして、いつものように上座でくつろぐ信長の前に深々と頭を下げたのだった。

「その方が、修理大夫が養子、左京大夫か」

信長はおもむろにすくと立ち上がり、ゆっくりと義継の下に歩み寄ると、

「ふーん」

と、まるで品定めでもするかのように、まじまじとその顔を見つ

めていた。

「かつて余が上洛した折、修理大夫は紛れもなく天下人として、この町に君臨していたが……。それから十年。今や、余が、かつての修理大夫の位置に座って、彼の倅を平伏させている」

くつくくとかみ殺したような笑みを漏らしながら、信長は素早く上座に戻っていった。

「まあよい。ところで、そこな老人！ 松永弾正と申したな。悪行の限りを尽くして、天下にその名を轟かせし御老人」

笑っている。いや、怒っている？

どちらなのか、いまいちはずきりしない信長の顔色を逐一覗っている家臣たちは、いつ何時彼が怒り出すのか、はらはらとした表情で、眼前の光景を見守っていた。

「左様。拙者は、この世にあつて出来うるあらゆる悪事を一代に成した男。もし織田様が、かような拙者の力を欲されるなら、粉骨碎身の思いで、忠勤を励みましょう」

開き直ったかのような弾正の態度は、かつて畿内狭しと暴れまわり、その名を轟かせた松永弾正少弼久秀とは思えぬものがあつた。けれど、こつこつという奇妙な受け答えを何より好む信長は、「はっはっは」と高笑いすると、

「面白い。ならば、悪行三昧を繰り返して手に入れたであろう珍品か何か、あるなら余に差し出せ。さすれば、余が閻魔大王に代わつて、そなたの罪業を許しおいてやるぞ」

などと言っていた。

弾正はにやりと笑い、そして、信長の顔をじろりと見つめた。そして、

「無論、御用意しております」

と言いつつ、側に置いてあつた小さな包みを開いて、その中身たる茶器を信長の眼前に差し出したのだった。

「これは天下に名だたる名器『付藻茄子』つくもなすにございます」

弾正の顔は自信に満ちている。よほどの名器なのだろう。茶好き

では、誰にも負けぬと自負しているらしい信長の顔色も、茶器の名を聞いた瞬間、綻んだ。

「これが音に聞く『付藻茄子』か。我朝無双と称えられし唐物の茶入れよな」

「左様にございます」

改めて、深々と頭を下げながら、弾正はにやりと笑う。こんなこともあろうかと、財力に物を言わせて買い集めていた名器の一つ。信長如きに献上するのは惜しいが、これで命と領地が保たれるなら、安いものだった。

「くつくく。よかろう。そなたの悪行を償って余りある、見事な献上品じゃ。気に入った」

そう言つて、信長は側に控えていた丹羽五郎左に目配せした。以後は彼に任ずという、信長なりの合図である。長らく信長に仕えてその性向は熟知している丹羽五郎左は、軽く頷いて、すつくと立ち上がった。

「三好左京大夫並びに松永弾正少弼。両名に対し、足利義昭公並びに織田上総介様からの下知を伝える。畏まって聞け！」

五郎左は、戦でこそ柴田勝家や木下秀吉らに遅れをとることが多いが、こういう実務的作業をさせれば、織田家随一の実力者であった。

とにかく、五郎左が信長に代わつて大声を張り上げると、三好義継、松永久秀両名は「ははーッ！」と叫んで、大仰に平伏した。

「左京大夫に対しては、北河内守護職に任命する。以後は若江城を居城とし、領国の安定を図るべし！ 弾正少弼に対しては、多聞山城並びに大和支配を引き続き安堵する。もしも弾正の支配に背く者あらば、弾正の判断により、適切に処理し、可及的速やかに大和の安定を図れ！」

と言つのが、丹羽五郎左を通じて伝えられた信長の命令である。ならば、義継、久秀両名、頷き、応じるほかはない。

以後、信長は矢継ぎ早に畿内の仕置を発表していった。

北河内半国守護に三好義継を任命する一方、南河内半国守護の座には紀伊に亡命していた畠山高政を復帰させ、彼は高屋城に入った。三好長慶により河内守護の座を追われて以来、実に十年ぶりに、高政は河内国（南半分だけだが）と高屋城を回復することができたわけである。ちなみに、従来の高屋城主であった三好笑岩・康俊父子は、些細なすれ違いにより信長の怒りを買ってしまったため、とるものもとりにあえず、城を捨て、阿波に遁走してしまっていた。

また、摂津国は和田惟政（高槻城主）、池田親正（池田城主）、伊丹親興（伊丹城主）の三名が守護に任じられ（これを摂津三守護という）、実質的には筆頭守護格の和田惟政の下で統治が進められることになった。

そして山城国であるが、これは同年十月十八日をもって、正式に室町幕府第十五代將軍となった足利義昭の直轄領となり、細川藤孝、三淵藤英、仁木義政ら重臣たちを要所に配置するなどして、急速に統治体制を固めていった。ただし、京都には、信長の代官として、明智光秀や木下秀吉らが入っており、京の都及び山城国が完全に義昭の支配下に入ったわけではないことを、ここに注記しておく。

その後、丹波の内藤忠俊が足利義昭に降伏。一方、黒井城主の赤井直正らは徹底抗戦の構えを崩さなかったが、最終的に、織田氏の勢力が飛躍的に拡大する中で、永禄十三年（一五七〇年）になって、ついに降伏している（その後、再び離反）。

畿内の処理が大まかに片付いた後、織田信長は足利義昭の將軍就任祝いもそこそこにして、美濃に帰国し、岐阜に戻った。幕政に深入りしすぎた結果、手足を縛られた三好長慶の轍を踏むまいとする信長の意気込みの現れであり、これ以後、彼は武田信玄ら近隣の強国の脅威に備えつつも、伊勢方面への進出を強化するなど、引き続



き積極的な勢力拡大策を追求していくことになるのだった。

【落日編】第140章 猿と狸

河内若江城。

三好義継は今、この城の主である。しかしながら、かつて三好政権の総帥として、畿内に十数ヶ国を領有した頃の面影は皆無であった。今の彼の領地は、河内北半国に留まり、もはや一地方大名の域を出るものではなくなっていたのだ。

それにしても、三好氏の広大な領土は、見事なほど完全に分断され、かつ空中分解してしまった感がある。確かに、義継は北河内を保ち、松永久秀も大和を保った。だが、摂津は筆頭守護和田惟政の支配下に入り、和泉国は織田信長の実質的直轄下に置かれている。南河内は、三好家宿命のライバルともいえた畠山高政のものとなっているし、山城国は足利義昭と織田信長の共同統治下にある。

こうなると、もはや笑うしかない義継である。まあ、四国を中心に、三好氏は依然として強大な勢力を誇る大名家の一つではあるが……。しかし、今の義継に四国三好家を統治する権限も資格もなかった。既に彼は、織田政権下の一大名家に成り下がっている。あくまで織田政権と決戦の構えを崩していない四国三好家は、義継にとっても倒すべき敵となっていたのだ。

ここで一つ、三好政権に利用されるだけ利用され、挙句、滅亡の憂き目を見た哀れな將軍足利義栄のことを記そう。

永禄十一年（一五六八年）九月末。

彼は、織田軍が怒涛の勢いで畿内全土の掌握に大手をかけていた頃、人知れず、寂しく、摂津富田は普門寺にて没した。享年三十一歳という。

それにしても、これほど哀れな將軍が他にいただろうか。何の権限もないばかりでなく、ほとんど誰からも將軍と認められることなく、しかも將軍在職たった九ヶ月足らずで、病のためにこの世を去

らざるを得なかった。これほど哀れにして存在感の薄い將軍は、鎌倉、建武、室町と続く時代の中でも、まずいまい。鎌倉二代將軍源頼家だって、三代將軍実朝だって、彼以上の存在感は持っていた（少なくとも頼家は北条氏から幕政の実権を取り戻すべく活動的に動いているし、実朝は比較的長い在任期間、ある程度主導的に幕政を動かしていた）。執権北条氏に擁立された摂家將軍、皇族將軍も、彼ほど哀れな待遇は受けなかった。まあ、彼に対抗できるほど影の薄い將軍といえば、室町五代將軍足利義量よしかずや同七代將軍足利義勝くらいであろうが（二人とも早世している）、いずれにしても、義栄の存在感のなさは、十五代を数える室町公方の中でも屈指である。

何より、彼は將軍在職中……、というより生まれてこの方、室町幕府の本拠地がある京の都に入ったことすらないのである。そんな將軍は、他に徳川慶喜がいるのみであったが、慶喜は少なくとも將軍在任時には二条城にて主導的に幕政を仕切り、西郷隆盛らに「家康の再来」と怖れられたほどの器量を示した。そして、將軍を退任した後には、徳川宗家家督として江戸へ帰還している。將軍在任期間こそ、慶喜一年、義栄九ヶ月と似ているものの、存在感という点で見ると、義栄とは比べるまでもない（ちなみに慶喜はその後、公爵に任ぜられ、徳川慶喜家を起こしている。逆に義栄の家系たる平島公方家は、これ以後完全に零落し、江戸時代になると、初期は徳島藩藩士となるが、中期頃からほぼ庶民となる）。

実際、義栄が死んだと伝えられても、人々は何一つ驚かなかった。というより、

「誰、それ？」

という次元の話であり、ほとんど話の種になることもなく、義栄は歴史の彼方に忘れ去られることになった。

いたかいなかったか、はっきりとしないほど影が薄い十四代將軍義栄の生死よりも、世間の注目関心は、新たな將軍に就任した足利義昭と、その庇護者たる織田信長の関係及び動向に集まっていた。

この頃、待望の將軍就任及び幕府再興を成し遂げた義昭は得意満面の絶頂にあり、その立役者になった信長との関係も比較的良好だった。信長は幕政に関与するより、伊勢への侵攻など、支配地域の安定及び発展に力を尽くすほうが急務だと思っている節があり、義昭の為政方針にそれほど異議は唱えなかつたのである。

だから義昭はやりたい放題、いろいろやった。

例えば…。

自分の兄である先々代將軍足利義輝の殺害計画に関与した…、あるいは三好三人衆や松永久秀を擁護し、足利義栄の將軍就任を画策した罪で、近衛前久を追放したり、彼だけでなく、多くの公家や武家が、義昭による肅清の餌食となつていった。

信長の代わりとして、京都に常駐していた木下秀吉は、そうした義昭のやりようを、それほど快くは思つていなかったが、しかし、將軍家との間に決定的対立を招くわけにもいかず、とりあえず、様子を見守るといふスタンスを保つていた。

目下、秀吉の身分は京都奉行である。後に、織田信長が設置する京都所司代と役割は似ている。草履取りから始まり、ここまで出世した秀吉の器量は素晴らしいものであるが、しかし、これで満足するようない彼でもない。この辺りは、在りし日の松永久秀にも共通するところがあつた。

そして、その秀吉と久秀は、十一月も呉れたある日、京都奉行屋敷にて、会見していた。

「木下殿は、上様（信長）の覚えめでたきお方と聞き及んでおりますが、此度は京都奉行職に御成りとのこと。まずはお祝い申し上げます」

恐縮そつに頭を下げる男は、これでもかつて、畿内にその名を轟かせた松永弾正久秀なのである。秀吉は苦笑いして、

「それを申せば、弾正殿も大和国御安堵と聞き及びました。お祝い申し上げます」

と、答えた。

猿と狸の化かしあい。ともに低き出自から成り上がってきた苦勞人。しかし、お互い警戒の色を隠そうともしない。

「さて弾正殿。弾正殿は、今は亡き修理大夫殿（長慶）に取り立ててもらい、今の身分を得られたと聞き及びます。：上様と、修理殿お二人を見比べたとき、どういう違いを感じられますか？」

秀吉は好奇心旺盛な男である。かつて畿内の覇権を握りとった三好長慶という英雄に、少なからぬ興味を抱いているようであった。

「さて、どうぞでございますか。御二人とも、拙者には遠く及ばぬ大英傑にございますからなあ」

はぐらかすように答える弾正に、秀吉は「左様か」と答える。なんともし難い殺気のようなものの漂う、不思議な会見であった。

「それがしが思うに、修理大夫殿は大きな間違いを犯した」

「間違い？」

「左様！　そもそも、幕府などと旧態依然とした、あるのかないのかいまいちわからぬ下らぬものを頼ろうとしたこと。これが一番の大間違い。その点、弾正殿は將軍を殺し、幕府を葬り去ろうとしたお見事な着眼にござる」

馬鹿にしているのか、褒めているのか。秀吉の笑顔からは、いまいち分かりづらいが、とにかく弾正は、

「ならば木下殿は今の將軍家も、義輝公の如き末路を歩むべきとお考えなのかな？」

と、尋ねてみた。

「ははは。そればかりは上様のお心次第ゆえ。微臣のそれがしには到底分かりかねますな」

秀吉との対面を終えた弾正は、その足で二条御所に向かい、足利義昭に謁見した。

まあ、義昭にとっては、兄殺害の主犯格が、のこのことやってきたわけだから、快く出迎えられなかったのも無理はない。弾正とて、

大歓迎など期待していなかった。

「筒井順慶以下、大和国内にて公方様に仇名す勢力は悉く掃討いたしました。その旨、公方様にご報告すべく、参上した次第でございます」

と、彼は言う。

「そうか」

義昭は淡々と答え、そして弾正をぎろりと睨み付けた。早く去れ！  
！ とも言いたげな顔をしている。

義昭の周りには、細川藤孝、仁木義政、三淵藤英など、有力な幕臣が勢揃いしている。いずれも、義輝肅清の後、弾正や三人衆が血眼になって追い求めた首である。しかし、今は義昭の側近として、それぞれ新幕府に重きを成している実力者となっていた。

「もし、この弾正の力が必要とあらば、遠慮なく御命じ下さりませ。この弾正、公方様が御為、粉骨碎身の思いで働きますゆえ」

などと齒の浮くような台詞を堂々とはき捨てて、弾正久秀は淡々と將軍の御前から退席した。その後、將軍義昭が激怒の余り、家臣たちに八つ当たりしたのは、言うまでもない。

松永弾正は永禄十一年（一五六八年）十月末ごろまでに、大和国内で自分に楯突いてきた勢力の首魁たる筒井順慶を追い落とすことに成功していた。

それもこれも全ては織田信長の支配下に屈したからである。信長から大和国主の座を正式に認められた彼は、織田軍の強力な支援の下に筒井勢を圧倒したのだった。筒井順慶が頼みとした三好三人衆は、往時の勢いが嘘のように、見る影もなく撤退を重ねており、とてもではないが、筒井氏の援軍に出られるような余裕はなかった。

再び、大和国主の座を確固たるものにした弾正は、織田方の京都奉行、明智十兵衛光秀、木下藤吉郎秀吉の許可を得て国に戻った。とりあえず、時期が来るまでは国力を固めておく。いざというときに備え、若江城の三好義継と連絡を取り合っておくことも忘れては

ならない。

いずれ時は来る。そのときまで、せいぜい義昭には將軍ごっこ、信長には天下人ごっこをさせておくのさ。弾正久秀は、にやりと不敵な笑みを漏らしながら、多聞山までの道のりを急いでいた。

【落日編】第141章 本圀寺の変（前編）

年が明け、永禄十二年（一五六九年）一月一日。  
元旦。

都において新年祝賀の式典が盛大に執り行われている頃、摂津国は石山御坊に、三好日向守長逸の姿があつた。

ちなみに…。

石山御坊とは、一向宗（浄土真宗）、即ち日本全国津々浦々、宗門ネットワークを張り巡らせている日本史上屈指の最強宗教勢力たる本願寺教団の総本山である。現在の城主…、即ち本願寺一門の総帥たる法主は、始祖親鸞より数えて十一代目にあたる顕如上人であつた。

顕如。<sup>いみな</sup>諱は光佐という。今は亡き本願寺十世法主証如上人の長男であり、天文十二年（一五四三年）生まれ。二十六歳。妻は公家三条公頼の娘にして、細川晴元や六角定頼の猶子<sup>ゆうし</sup>でもあつた如春尼という女性であつた（ちなみに、彼女の実姉は武田信玄の正室三条夫人）。

二十六歳の青年法主顕如上人と、三人衆筆頭三好長逸が、極秘裏に会合を重ねている以上、穏やかな話であるはずがない。三好長逸は言うまでもなく、生粋の反織田勢力の旗頭であるし、顕如率いる本願寺勢力もまた、織田政権とは余り上手く付き合っているわけではなかつた。まあ、無理もあるまい。何しろ、信長は上洛直後、本願寺や堺衆に対し、莫大な矢銭の提供を求めたり、あるいは本願寺に石山御坊からの撤退を暗に要求してくるなど、三好政権に比して圧倒的に強硬な態度に出てきたからであつた。

信長に不満を抱く二人による会談。そこから生み出される結果が、不穏なものでないはずがなかつた。顕如とて、それは百も承知。それゆえ、法主御殿内にあるこの一室には、ほんの僅かな側近を除い



て、何人も出入りできぬよう、徹底した警戒態勢を敷いていた。

「それで、日向殿は、いよいよ織田攻めを決意なされたのか？」

顕如は、坊主というより、武士の家に生まれたほうが良かったほど、好戦的な性格をしていた。御経を覚えるより、武芸を学ぶほうが合っていると言頃公言しているほどだし、実際、仏典などより、孫子などの兵法書を隙あらば読み漁っている、奇妙な法主殿であった。

そんな彼である。長逸から織田攻めの話をされれば、興味を持たぬはずがなかった。

「まずは織田攻めではなく、義昭攻めでございますがな」

長逸が淡々と答えると、顕如は「ふーん」と静かに頷いた。

「で、日向殿は拙僧に、果たして何を望まれるのか？」

強大なる一向軍団を束ねる法主として、自信に満ちた笑みを浮かべながら、顕如は聞かずとも明らかかな質問を、あえてぶつけてみた。「無論、我らと織田勢が正面衝突した暁には、上人様の御力をお借りしたく、まかり越した次第」

長逸もまた、実に単刀直入な答えを返した。

「力とは？」

顕如が問う。

「一向門徒を動かし、拳兵していただきたい」

「…拳兵？」

顕如はニタニタと笑い、そしてじろりと長逸を睨み付けた。まるで長逸の器量を見定めてでもいるかのように、その全身を舐めるように見回した後、

「勝算は？」

と、尋ねた。

「我らはこれより油断している足利義昭を都にて討ちます。その後、織田と対峙している北畠具教と同盟し、さらには甲斐の武田、越前の朝倉など、信長の急成長に反感を抱いているであろう勢力を糾合し、包囲網を作り上げます。その上で、若江の義継公、多聞山

の弾正久秀に呼びかけ、旧三好勢力の統一を図り、一挙に織田軍と雌雄を決する」

「…ほお」

「その際、一向軍が織田軍を霍乱してくれれば、我らの勝機はますます確固たるものとなります」

ひとしきり言つべきことを言い終えた長逸は、ふうと溜息混じりに苦笑いした。

それにしても…。長逸は一向門徒たちが誇る世紀の法城を眺めながら、不思議な思いを抱かずにはいられなかった。考えてみると、先々代当主三好元長は一向宗によって滅ぼされたのであり、そして千熊丸といったかつての長慶が、出世の階段を駆け上がることになつたきつかけも、一向宗と法華宗の抗争を鎮定に導いたことであつた。

そんな一向宗の覇府に、自ら乗り込んで、援軍を依頼している。それが不思議でならない。ただ、あの当時、一向門徒の総帥は証如であつたが、今はその子供である顕如になつていた。

振り返つてみると、随分と時間が流れたものだった。堺公方こと足利義維（第十四代將軍足利義栄の実父）の扱いを巡り、時の実力者細川晴元と対立した末に拳兵に追い込まれ、晴元の援軍要請に応じた一向軍によって、三好元長が殲滅されたのは、天文元年（一五三二年）のことであるし、一向宗と法華宗の対立が最頂点に達した天文法華の乱が勃発したのは天文五年（一五三六年）のことだ。長慶の勢力が近畿に広がるきつかけとなつた拳兵上洛事件は天文八年（一五三九年）のことであるし、彼が畿内に覇権を築き上げるきつかけとなつた太平寺合戦は天文十一年（一五四二年）。その覇権が決定的なものとなつた江口の合戦は天文十八年（一五四九年）のことになる。

いろいろあつた。その過程で、自分もいつしか大いなる出世を遂げて、三好三人衆の筆頭と目されるまでになつたが…。しかし、どうも自分のやってきたことは、若き日の長慶が抱いた理想とは正反

対のことばかりであつたような気がした。結果として三好政権を叩き壊したのも自分なら、長慶が苦心の末に纏め上げた畿内に、再び果てしない戦乱をもたらしたのも自分だつた。

三好長逸も、今年で五十一歳になつた。身分は従四位下日向守。不思議なものだ。

困つたように苦笑する長逸に、

「どうなされた？」

相も変らぬにやけ顔で、そんな風に尋ねる若き法主顕如上人であつた。

一月五日。

京都本圀寺には、新年祝賀気分が冷め遣らぬ征夷大將軍足利義昭が逗留していた。

今の義昭は、まさに得意絶頂にあつた。まあ、無理もない。つい最近まで、流浪に流浪を重ね、あるいはあらゆる冷遇迫害を受けて貧乏公方などと罵られてきたほどのお方なのである。それが今や、征夷大將軍となり、京の町に君臨している。

義昭は高笑いしたい気分だつた。けらけらと笑い、誰に気にするでもなく、大いに遊び倒してやりたかつた。やりたいことはいろいろあるのだ。女に狂つてもいい。酔い潰れるほど酒びたりの日々を過ごしたつて構わない。能や狂言に明け暮れるのもいいかもしれない。

「兵部、何か楽しいことはないか？」

今や、とりあえず天下の主の座に立つている男は、浮かれ顔で、

重臣の細川兵部大輔藤孝の渋顔を睨みつけていた。

「ありませぬ」

藤孝はここ数日、ずっとこの調子だつた。仏頂面を浮かべたまま、しきりに何かを訴えるかのような視線を將軍にぶつけていた。

「兵部！ いったいどうしたのだ？ 最近、そなた、変だぞ」

義昭にとって、藤孝はただの家臣ではない。自分を將軍職に押し

立ててくれた大功労者の一人。今や摂津筆頭守護職に収まっている和田惟政や、織田信長の重臣に列してしまつた明智光秀らと並ぶ存在。…いや、和田が摂津に、明智が織田に、それぞれ義昭の下から巢立つてしまつた今、藤孝は依然として自分の側近にとどまっているかけがえのない重臣なのだつた。

「公方様！ 新年祝賀は重々承知しておりますが、さりとて限度がありません。依然として、畿内のあちこちには三好の残党が犇んでいるのです。彼らが襲撃を仕掛けてこないとも限らず、このような無警戒、無防備は、無謀すぎまする」

それは藤孝だけでなく、一色藤長や仁木義政らほかの重臣たちにとつても同意見だつたらしく、皆、逐一頷いては、ぎろりと義昭を睨みつけていた。

「気にするな。三好の残党と申したところで、どれだけの力があるうや。まして、京の都に攻め込んでくることなどありえぬ」

義昭は確かに聡明で、散々苦勞を強いられてきたからか、度量も大きい有能な將軍ではあつたが…。しかし、自らの能力や家柄を誇つて、他者を侮る性質があつた。自らの力を過信し、敵の戦力を過小評価することも多々あつた。

藤孝が憂慮したのも無理はない。如何に都落ちしたとはいえ、三好氏の底力は、未だ基盤が脆弱な義昭政権が余裕で構えていられるほど弱くはないのだ。

一月五日、午後。

三好長逸、三好政康、岩成友通の三名が率いる奇襲部隊、総勢二千は密かに山城国に入ると、各地に犇く三好残党の手引きを受けながら、ついに都に迫り、そして義昭が滞在している本圀寺の間近にやつてきたのだつた。

「よいか。此度の戦は、わが三好家の復活の第一歩となる大事な戦ぞ。負けるわけにはいかぬ。そして、目指すは義昭の首。それ以外はいらん」

長逸の訓示を受け、将兵は静かに、しかしはつきりと頷いた。

「申し上げます！」

そこに、義昭の動向を探っていた斥候が戻ってきて、

「義昭の下には二百ほどの手勢があるのみで、しかも全員、我らの接近には全く気づいておりませぬ」

と、告げた。

「そうか」

長逸に代わって、三好政康が小さく頷くと、彼は側に控える長逸、友通兩名に目をやった。

「日向殿！ 攻撃命令を」

と、岩成主税助友通が進言すると、

「そうよな」

三好長逸はゆっくりと目を閉じ、フウと深呼吸した。

【落日編】第142章 本圀寺の変（後編）

「な、なんだと？」

美濃は岐阜。

濃尾平野にでんと聳え立つ金華山の頂上に乗っかる岐阜城の本丸御殿内。

主たる独裁王織田弾正忠信長が、素つ頓狂な声を張り上げて、呆然と突つ立っていた。

「さる一月五日。本圀寺に三好三人衆率いる三好勢が突入し、公方様の手勢と一戦交えたとのございます」

報告しているのは、前田又左衛門利家という男だった。信長の寵愛を一身に受けている側近の一人であり、信長からは幼名犬千代からとつて、『お犬』と呼ばれている。まあ、『犬』と呼ぶのは信長ぐらいなもので、親しき人は『又左』と呼び、敵からは『槍の又左』と呼ばれて恐れられている無類の豪傑でもあった。

「で、公方様はどうなった？」

信長は回りくどい返答を嫌う。常に単刀直入、分かりやすい答えが好みだった。

「辛うじて助かったとのございます」

「助かった？」

「はッ！ 報告によりますと、三好軍は二千、公方様は二百騎程度の兵であつたようですが、細川兵部殿らが奮戦なされたことや、明智十兵衛殿、三好左京大夫殿、伊丹大和守殿（摂津守護の一人、伊丹大和守親興のこと）らが援軍として駆けつけられたため、辛うじて三好軍を撃退したとのございます」

「…なるほど」

とりあえず最悪の事態を回避できたことに、信長は満足そうにふうと小さなため息を吐いた。そして、何を思ったか、すつくと立ち上がり、

「犬！ 準備せよ」

と、唐突に怒鳴りだした。

「はッ！」

信長の気まぐれはいつものことである。又左衛門も、あえて尋ねたりはせず、いつものように軽く頭を下げながら、従順な飼い犬の如く、ひたすら主人の命令を待った。

「京へ行くぞ！ ついて来い」

そう言つて、信長はすたすたと居室から出て行つたかと思うと、その足で、家臣たちの準備もほとんど整っていないというのに、城を飛び出し、まるで隣の家にも出向くかのように京へ向かったのだった。

永禄十二年（一五六九年）一月六日。

三好軍による襲撃から一夜明けた本圀寺は、見る影もないほど全くの廢墟と化していた。

「…ああ、これが今の余の現実なのか…」

このところ、わが世の春とばかりに大いに浮かれあがっていた室町幕府第十五代征夷大將軍足利義昭は、眼前に広がる惨状を眺めながら、呆然と立ち尽くしていた。見れば昨日までぴんぴんしていたはずの家臣たちが、動かさず冷たき骸と成り果てて、あちこちに転がっている。幸い、重臣と呼ばれる人間に死者は出なかったが、自ら乱戦に参加し、三好軍撃退の殊勲者となった細川藤孝は腕辺りに大怪我を負つて、先ほどからずっと治療を受けているし、彼だけでなく、仁木義政、三淵藤英、一色藤長らも同様に傷を負つて、辛そうに悲鳴を上げていた。そんな様をぼんやりと見つめていると、自らの油断が招いた犠牲の重さを痛感せずにはいられぬ義昭なのであった。

今合戦における殊勲者は、言うまでもなく細川兵部大輔藤孝であるが、しかし特筆すべきなのは、援軍として駆けつけた三好左京大

夫義継であろう。彼は援軍部隊の主力として三人衆撃退に尽力した後、足利義昭に謁して、捕虜などを引き渡すなど、ひとしきり仕事を終えると、本圀寺から少し南に行ったところにある金光寺に戻っていた。

「左京殿、此度は援軍としていち早くはせ参じていただき、誠に忝かたじけない」

織田方を代表する形で、三好義継軍の本陣が置かれた金光寺にやってきました明智十兵衛光秀は、先ほどからずっと、義継に頭を下げていた。

「明智殿。お顔をおあげください。公方様に仇名す者、例えわが一族といえど、許しおくことはできません」

わざわざ若江城から二千ほどの手勢を率いて駆けつけた義継は、ぼんと胸を張って、光秀の手をとった。

しかし…。

考えてみれば、いや、考えてみるまでもなく、押し寄せてきた三好三人衆というのは、紛れもなく義継の旧臣だったわけ…。三好政権の復活を目論んで事を起こした三人衆を撃破したのが、かつての三好政権の総大将であったという事実は、皮肉などという言葉で片付けられるほど簡単なものではなかったが、当の義継はさして気にする風もなく、

「既にそれがしは公方様と織田様に仕える身。公方様に仇名した彼らを討伐するは当然のことでございます」

と言つて、「ははは」と笑っていた。

一月十日。

織田信長が僅かな手勢とともに入京し、仮御所本能寺に逗留中だった足利義昭に謁見した。その上で、とりあえず何事もないことを確認すると、彼は明智光秀、木下秀吉ら現地指揮官から詳細な報告を受けつつ、本圀寺の変をきっかけにして蠢動し始めた三好三人衆対策を本格化させるよう、矢継ぎ早の指示を下した。



そして…。

「三人衆が此度の暴挙をなした背後には、堺衆がいたに違いない。奴らを徹底的に締め上げ、もしも三好に味方していた奴がいたなら、必ずや血祭りにあげよ」

という厳命を下したのだった。

それから、数日が過ぎたある日。

居城たる若江城に戻ったばかりの三好左京大夫義継の下に、追い討ちをかけるかのようにやってきた織田信長の使者は、

「此度、公方様をお助けした功績はお見事なり。その功を称え、公方様の妹君を左京殿の正室に輿入れさせるとの思召し召しである」

唐突にそう告げて、彼に判断を迫ってきた。

拒否は許さぬ。

使者の顔には、明確にそう書いてあった。それゆえ義継は苦笑いしつつも、とりあえず畏まってこれを受け入れたが、内心は複雑だった。無論、足利將軍家の姫を正室に迎え入れれば、三好家の格式は格段に高まる。將軍家一門に列することになるわけだから、当然といえよう。普通に考えれば、断るまでもない良縁のように思えるのだが、しかし、彼女は、將軍義昭の妹であると同時に、自分が殺害した第十三代將軍足利義輝の妹でもあるのだった。義継の個人的感情からすると、実に寝覚めが悪い。

「それにしても、正室、か…」

若江城の奥御殿の一角にあり、義継はふうと小さくため息を漏らした。

自分も気がつけば既に十九歳。そろそろ正室を迎えて、しかと身を固めておくべきなのかもしれない。だが…。半ば強引に、信長にこり押しされる形で妻を娶るという事実が、義継には許せなかった。少なくとも一年前まで、形ばかりとはいえ、天下の頂点に立っていた。そんな自分が、妻一人自由に選べぬほど落ちぶれてしまったという事実、言いようのない情けなさを感じるのだった。

「俺も随分と落ちぶれたものよな」

もはや、もれるのは乾ききった苦笑いだけだった。笑うことも、怒ることも、喜ぶことも、泣くことも、悲しむこともない。ここ最近の間にめまぐるしく起こった出来事の中で、ありとあらゆる感情が自分の中からきれいさっぱり消え去ってしまったような感じがした。そっけない、乾ききった笑みを浮かべるたび、全身から生気が抜け落ちていくような気分になるのである。

十河一存の子に生まれながら、三好長慶の養子となり、義兄義興に代わって宗家の家督を相続した自分が、こんな哀れな末路を歩むとは…。空しい以外の何がある。というより、父や養父、義兄たちに対して、果てしなく申し訳がなかった。

俺は何をやっているんだろう。

義継は憂鬱そうな顔をして、その場にごろりと寝転がった。

どれだけ時間がたつたらう。

外はすっかり暗くなり、なんともいえぬ肌寒き夜風が、そよそよと彼の体を舐めていく。

そこに。

「殿！ 義よしすけ資様にございます」

側室のお藤の方が、そんな風に言いながら、一人の少年を伴い、義継の下にやってきた。

「お、義よしすけ資殿か」

顔を綻ばせ、嬉しそうに微笑みながら、ちょこちょこ可愛らしい仕草でやってくる少年を、義継はまじまじと見つめていた。

三好孫次郎義資。

とりあえずそう名乗っているが、まだ六歳になったばかりの少年に過ぎない。しかし、今は亡き三好義興の遺児で、三好長慶の命令により、義継の次に三好宗家を引き継ぐ権利を与えられた貴公子でもあった。

「俺の次、か…」

少年を見ていて、義継はふと物憂げな顔をした。果たして、自分の次、などというものが本当にあるのだろうか。あつたとしても、それは河内北半分だけを領有しているに過ぎない小大名の主の座であり、畿内十ヶ国以上を支配下に置いて、天下人と称えられていた頃の三好家当主の座ではないのである。

「ま、それはそれでよいかもしれんな。下手に天下人なんてものを与えられても、保ちきるのは至難の業。保ちきれなければ、俺のよくな苦惱を永遠に味わわねばならなくなるのだ。それなら、初めからそんな大そうな地位はないほうが幸せというものだ。小大名の主として、平凡ながらも幸せな一生を過ごせれば、孫次郎殿にとつてはよいことなのだろう」

などと考え、そして彼は孫次郎義資を手招きした。孫次郎少年は不思議そうに首を傾げながらも、とりあえず兄と慕う義継の命だ。素直に従い、そして、彼の前にちよこんと腰を下ろした。

「さて、お主の人生はこれからどうなるのかな？ 俺のように無駄に波乱万丈でなければよいのだが。…そなたは、養父上ちちうえと義兄上あにいづえより預かりし大切な御子。出来れば、俺のような人生は歩むなよ」

小さな子供の頭を撫でながら、義継は心の中で、今後というものを考えてみた。これから、自分たちはどうなるのだろうか。出来れば、若江城と河内北半分の領地はずっと保つていきたいが…。しかし、それも難しいかもしれない。領地を失い、城を失い、本当に何もかも失って放り出されるようなことになったら…。

いや、殺されるよりはマシだろう。かつての將軍足利義輝のように、壮絶な死を遂げるよりは遙かにマシだ。いつそ全てを失い、全てを忘れて、義資や藤の方たちと、平凡ながらも長閑な日々を過ごせたら、どれだけよいだろうか。

なんて思ってみたりする。

「私は、必ず爺様や父様に劣らぬ武将になつてみせます」

そんな義継の懸念などど吹く風。毅然とした態度で、そう言うのける義資に、義継は思わず苦笑いした。ま、それぐらいの覚悟

や夢がなければ、荒れ狂う戦国の世を生き抜くことなどできないの  
だろう。

「そうだな。孫次郎殿、そなたは必ず、爺様や父様を超える武将に  
なれよ！」

自分には無理。だが、この少年なら、あるいは可能かもしれない。  
自分が完膚なきまでに壊してしまった三好家を見事に立て直して、  
再び天下の頂点に立っている少年の姿を思い浮かべて、義継は「は  
はは」と笑った。

だが、不可能じゃない。かつて、養父長慶は、祖父たる三好元長  
の死をきっかけに窮地に追い込まれた三好家を立て直し、ついには  
天下まで掴み取った。その祖父元長も、高祖父三好之長の死により  
窮地に追い込まれた三好家を立て直し、細川晴元政権の筆頭家老に  
まで登り詰めたではないか。窮地からの復興は、三好家のお家芸み  
たいなものだ。そして、孫次郎義資は、之長・元長・長慶・義興と  
続く三好宗家嫡流に属する唯一の生き残り。ならば、可能性はある。  
危機に陥るたび復活を遂げてきた宗家の血筋が彼にも流れているこ  
とを期待しつつ、義継はぎゅっと拳を握り締めた。

自分は、彼が成長するまでの繋ぎだ。今ある三好家を、出来る  
限りこのままの状態に、必ず彼に引き継がせなければならぬ。

凜々しくも逞しい、聡明な義資少年を眺めながら、義継の決心も  
固まった。これまでのようにぐだぐだと軟弱な弱音を吐き、果てし  
なき後悔に耽っている場合じゃないのだ。過ぎたことをくよくよと  
ぼやいていても仕方がない。とりあえず、次の世代に必ずバトンを  
渡す。それこそが、今の自分に課せられた紛れもない役目なのであ  
る。

「お藤、水を持って！」

義継の顔色は、いつしかすこぶる良くなっていた。藤の方は少し  
ばかり驚いた風であったが、

「分かりました」

と言って、素直に退出していった。

【落日編】第143章 永祿から元龜へ

時は流れ…。

永祿十三年（一五七〇年）は四月二十日。

この日、織田信長は総勢三万の大軍を従えて越前に出兵した。目的は、越前国主朝倉義景の討伐。理由は、信長が再三にわたり呼びかけてきた上洛要求に義景が応じなかつたため…。

ま、いずれにしても信長にとってみれば、目の上のたんこぶ以外の何者でもなかつた朝倉義景を葬り去り、越前一国を自らの支配下に組み入れる絶好の機会であつたから、周囲の反対を押し切り、問答無用で攻め込んだのだつた。

しかし…。

四月二十八日。

金ヶ崎城を攻め落とし、幸先よく越前攻めを遂行していた織田・徳川連合軍の下に舞い込んできたのは、思いもよらぬ凶報であつた。

「お市が？」

信長は不思議そうに首を傾げていた。

お市というのは信長の妹で、今は北近江の太守、小谷城主浅井長政の下に嫁いでいる。そんなお市がわざわざ早馬を飛ばして、兄たる信長にもたらした代物。それは豆の詰まつた袋を両側から縛つてあるという、実に奇妙なものだつた。

「誰もが首を傾げ、お市の真意を疑っている。そんなとき、  
「上様！」

と、誰よりも真つ先に名乗りをあげるのが木下秀吉という男の特性であつた。

「袋の中に閉じ込められている豆とは、即ち我が織田軍を指します。そして縛つてある両側とは即ち、朝倉と浅井」

秀吉の具体的説明に、居並ぶ諸将はいっせいに顔色を変えた。

「木下ッ！ そなたは浅井が裏切ったとでも言うのか？」

色をなして怒鳴っているのは、織田家次席宿老の柴田権六勝家であつた。

「左様！ 浅井長政、謀叛にござりますッ！」

持ち前の大声を張り上げ、猿のような雄叫びで怒鳴る秀吉を、信長はぎろりと睨み付けた。

「浅井殿が謀叛したとなると、大変でござりますな。まさに我らは文字通りの袋の鼠……」

言わずもがなの台詞を平然と吐いているのは、徳川三河守家康だ。浅井長政と並び、信長が絶対の信を置いている同盟者で、三河・遠江の二ヶ国を領有している。苦労人だけに、烈火の如く怒り狂う信長を見ても、それほど驚く風でも、動じる風でもなく、淡々としていた。

「ここは殿軍しんがりを置いて、早急に撤退なさるが上策と心得ますな」

かく言うのは、松永弾正久秀。大和一国の主にして、かつて畿内にその名を轟かした古狸であるが、今ではすっかり織田信長政権下の一宿老に収まっていた。

信長は憤懣やるかたない形相のまま、床机の上に腰を下ろすと、

「おのれ、浅井長政ッ！」

と、怒鳴っていた。

そこに……

「上様！」

すかさず名乗りを上げたのは、またしても木下秀吉であつた。

「この猿めが、殿軍しんがり、承りますッ！」

無謀と分かっていることを、あえて引き受けるのが秀吉流。清洲城の堀普請然り、墨俣一夜城然り。しかし、今回ばかりはさすがにまずい。如何に何事も器用にこなす秀吉といえども、ほとんど捨石しんがりに等しい殿軍を率いて助かる可能性はほとんどない。こと、今回は二万に及ぶ朝倉軍の猛攻を一身に引き受けねばならないのだ。

「構いませぬ！」

秀吉は、居並ぶ諸將たちの懸念を察して、先手を打つかのように、そうきつぱりと言い切ると、

「上様ッ！ この猿めに、殿軍をお命じ下さりませ」と、大仰に叫んでいた。

信長は、しばらくの間悩んでいる。まあ、信長のしばらくというのは、常人的には一瞬なのだが、とにかく、彼なりに悩み、迷った拳句、

「任す」

と、言つと、さらに、

「だがそなただけでは心もとなない。内蔵助ッ！ その方も鉄砲隊を率いて猿を援護せよ」

彼は居並ぶ重臣の中でも武勇の誉れ高く、また鉄砲の取り扱いに長けた佐々内蔵助成政の方に目をやり、そう命じた。

「御意！」

難しい任務ではある。しかし内蔵助に異存はない。日ごろ馬鹿にしてきた秀吉が、自ら率先して引き受けたのだ。ここで断つたら男ではない、とでも言いたげな顔をして、彼はすつくと立ち上がると、秀吉の下に歩み寄り、

「木下殿！ よろしく頼む」

と、言った。

木下秀吉率いる…、と書くとき少々語弊があるので、正確には池田勝正が名目的に率い、実質的に秀吉が率いた殿軍部隊は、徳川家康や佐々成政らの援護射撃を得て、兎にも角にも越前軍の追撃を振り切ると、命辛々、何とか撤退することに成功したのだった。

世に金ヶ崎の退き口と称される、戦国時代屈指の撤退戦が成功裏に終わったのは、確かに殿軍を率いた木下秀吉や援護に回った徳川家康、佐々成政らの優れた指揮能力が見事に開花したからだと言える。

しかしながら…。

今回の撤退戦の成功要因は、決してそれだけではなかった。即ち、戦意の低下や秩序の乱れが著しく、弱体化しきっていた越前軍の弱さを忘れてはならないだろう。かつて北国の最強軍と称えられた朝倉軍であったが、朝倉孝景（初代孝景。別名敏景とも言う）以来、五代に渡り、大国と評されてきた越前国を百年以上も支配し続ける中で、彼らはいつしか富貴に馴れ、懦弱しきっていたのだった。

まあ、かくして撤退に成功し、信長は桶狭間に続く窮地をここに脱したわけだが……。しかし、今回の撤退戦における影の功労者は、なんとと言っても松永弾正久秀であった。確かに、彼の功績は、秀吉や家康、成政らの華々しい功績に比べれば幾らか見劣りするものの、信長を窮地から救い出したという点においては、彼ら以上の働きをしたといえるのだった。

彼の功績とは、ずばり朽木元綱を説得し、味方につけたことであつた。何しろ、朽木元綱の領国たる朽木谷は、金ヶ崎を脱出して、京を目指した信長の逃走ルートのと真ん中に位置しており、もし朽木が朝倉・浅井方に寝返つて信長討伐に乗り出していたら、信長の命運もここで尽きていたかもしれないのだ（ちなみにこの時点で信長に従っていた家臣は、松永弾正、前田利家ほか数名だけ）。

幸い、弾正と朽木元綱は親しかった。そこで彼は信長の命を帯びて朽木城に赴き、説得交渉に当たつたのだった。交渉そのものは大いに難航したものの、最終的に彼の粘り腰が功を奏して、ついに朽木元綱は織田方に与力する姿勢を鮮明にしたのだった。

とまあ、世の中はそんな状況。

さて、しばらくここで、これまでの経緯についてひとしきり説明を加えてみることにする。即ち、永禄十二年（一五六九年）一月五日に勃発した本圀寺の変から、金ヶ崎の退き口、即ち元龜元年（一五七〇年）四月末までの約一年半である。

永禄十二年三月。三好義継と足利義昭の妹が結婚。ここに義継は



晴れて將軍家一門に列した。そして同月中に、正親町天皇は信長のいる岐阜に勅使を送り込み、副將軍就任を正式に打診しているが、彼はこれを断っている。

四月十四日。二条御所が完成し、足利義昭がこれに入居。

五月六日。かねて遠江方面に進攻していた徳川家康が、掛川城を攻略し、遠江一国を事実上完全掌握する（ちなみに、徳川軍と連動して今川攻めを行っていた武田信玄は、同年十二月になり、今川氏を完全に滅ぼし、かつ今川を援助していた北条氏を排除して、駿河一国を完全掌握している）。

八月十一日。土佐において岡豊城主の長宗我部元親が、東土佐の雄たる安芸国虎を滅ぼして、土佐国の大部分を握る。以後、元親は西土佐の雄たる一条氏との戦いに移り、天正二年（一五七四年）に一条氏を滅ぼすことで、土佐一国を統一する。

十月四日。織田信長軍が伊勢国司北畠氏の居城たる大河内城を攻略し、伊勢一国を完全に統一した。

十月六日。後北条氏の居城小田原城を包囲しながら撤退を余儀なくされた武田軍が、追撃に出てきた北条軍を三増峠にて撃破している。これにより、武田軍は西上野地域の支配を固めることに成功し、さらに駿河方面で対峙する北条軍との戦いも有利に進められるようになった。この結果、同年十二月、北条軍が撤退したことにより、武田軍は駿河全土を制圧した。

翌年、即ち永禄十三年（一五七〇年）一月二十三日。

織田信長が足利義昭に対し、いわゆる、五ヶ条に及ぶ『殿中御掟』を強要。信長と義昭の蜜月関係に亀裂が入る。

四月二十日。信長、朝倉攻めに出兵。

四月二十三日。永祿から元龜に改元。

これが、この一年半の（大雑把な）歴史である。

この間に、信長の勢力は新たに伊勢一國を加え、さらに強大化している。また同盟国である徳川家康も従来の上三河に加えて遠江を手の中に入れており、織徳同盟の順調な勢力拡大ぶりが見て取れよう。

このほか、長らく三好氏の覇権下に置かれてきた四國にも地殻変動の兆しが見えつつあり、後に覇者となる長宗我部元親が着々と勢力を拡大していることがわかる。

そして、その後のことを少し記すと…。

六月四日。

復権を狙って、南近江にて挙兵した六角承禎、義治父子の軍勢が、織田方の柴田勝家、佐久間信盛の軍に大敗。再び甲賀山中に命辛々落ち延びるといふ無様を晒している。

そして六月二十八日。

織田信長と徳川家康は連合軍を組み、近江姉川に進出。待ち構えていた朝倉義景、浅井長政の連合軍と激突する。織田・徳川連合軍二万七千に対し、朝倉・浅井連合軍は一万八千と言われ、両軍、特に浅井勢と徳川勢が奮戦したこともあり、熾烈な激戦となる。浅井軍と戦っていた織田軍は、磯野員昌以下浅井勢先鋒に信長本陣にまで迫られるほどの苦戦を強いられたが、朝倉軍を蹴散らした徳川軍が援軍に出向いたことで形勢は逆転。かくして世に名高き姉川の合戦は、織徳軍の勝利で幕を閉じることになった。

【落日編】第144章 野田城・福島城の合戦 その一 対峙

元亀元年（一五七〇年）七月二十一日。

三好三人衆、摂津は中島に進出す！

この急報に、畿内は震撼した。

何しろ、彼らは依然として四国や近畿地方に強大な勢力を保っている反織田勢力の中核的存在である。かつて都落ちを余儀なくされながら、西国を中心に強力な国力を保った平家のように、三人衆も四国を地盤に隠然たる影響力を保ったままなのである。そんな彼らが、摂津は中島に出張ってきたとなると……。織田方との全面戦争は避けられまい。源義経のような伝説的英雄がポツと現れ、短期決戦のうちに片付くなら、それに越したことはない。しかし、万一戦が長引こうものなら、ようやく安定を迎えつつある近畿地方は再び戦乱の渦中に巻き込まれることになりかねないのだ。

そんな人々の不安、恐怖、不満など悉く気にする風もなく、七月二十一日の段階で、既に三人衆は中島の地に、野田城、福島城という二つの軍事要塞を設けて、織田軍との決戦に備えていた。その上で、中島の南隣に位置する石山御坊の主たる本願寺顕如と友好関係を保ちつつ、着々と戦力増強に励んでいたのだった。

ちなみに、七月二十一日の段階で三人衆に従い、中島入りした兵数は約六千である。その後、細川信良（故細川晴元の嫡子）が四千、紀伊の有力国人鈴木重秀（通称、雑賀孫一）が三千の兵を率いて馳せ参じたため、最終的に中島の三好方総戦力は一万三千にまで膨れ上がることになった。

しかし！

こつした三好方の露骨なまでの戦力強化を受け、織田方が黙って見過ごしていられるはずがなかった。

三人衆の積極的行動に対し、織田方で真つ先に動いたのは、大和国主にして多聞山城主である松永弾正久秀であった。彼は、嫡男の松永久通や養子の松永永福、重臣の林若狭、柳生家蔵、楠木正虎、岡国高、奥田忠高、土岐頼次らをはじめとする総勢三千の精兵を仕立てて、信貴山城に入ると、七月二十七日、河内国は若江城に入つて、三人衆軍による河内進撃に備えたのだった。

「弾正、久しぶりよな」

若江城の主たる三好孫六郎義継は、いつになく楽しそうな、もとい嬉しそうな顔をして、広間にて健気に待ち続けているかつての重臣の下に歩み寄り、そう言った。

「はッ！ 御無沙汰いたしました。義継様におかれましてはお変わりないようで、この弾正、安堵いたしました」

今現在、義継と弾正の関係は微妙である。かつては、確かに弾正久秀は義継の臣下であったかもしれないが…。しかし、今は両者ともに織田信長の家臣という点において対等である。それどころか、信長の覚えめでたく、織田政権の中樞を担う重臣の一人となりつつある弾正の地位は、既に義継以上といつても決して言いすぎではないのだった。

「此度の一件、わしも随分と憂慮していたのだ。そなたが着てくれて、わしとしては百万の味方を得た思いだ」

と、義継は言う。開き直ったかのように、淡々と喋るかつての主君を眺めながら、弾正は「ははは」と、恥ずかしそうに苦笑いした。「されど、此度の一件でござるが、三人衆の背後には間違いなく顕如上人がおりますな」

「顕如上人、か…」

強大極まる宗教勢力『一向宗』の領袖たる顕如。その名に、義継

は苦虫を噛み潰したような顔をした。

「また、三好長治殿や安宅信康殿ら、四国の三好勢も積極的に三人衆を支援しているようで…。此度の一戦は正真正銘、織田と三好の全面戦争になります」

「織田と三好の全面戦争、か…」

三好氏の主は自分だというのに。

義継が苦笑いすると、弾正もまた「ははは」と微笑した。

「で、弾正は、織田と三好、いずれが勝利すると思うか？」  
と、義継が尋ねると、

「分かりかねますな。…五分五分、といったところでございますかな」

そう答える弾正久秀であった。

「五分五分、とな。だが、今や天下に敵なしの勢いで勢力を伸ばす信長殿が負けるとは思えぬが」

義継の顔は疑問色に染まっている。好奇心旺盛な少年のような表情をする彼に、弾正は「ははは」と笑った。

「冷静にお考えあれ。信長殿の周りは敵ばかり。先の姉川の戦で朝倉・浅井を撃破したとはいえ、彼らを完全に滅ぼしたわけではありませぬ。依然として彼らは信長殿の敵として健在ですし、そこに三人衆が本願寺の支援を得て拳兵したわけです。三人衆と朝倉・浅井に挟撃される格好となった信長殿の不利は誰の眼にも明らかでございます」

「…ふーん。そんなものかな」

なら、自分や弾正が三人衆を支援する形で信長に叛旗を翻したらどうなるのだろう。信長の不利はいよいよ決定的なものとなり、彼の政権は一拳に瓦解することになるのかもしれない。

「それはやめたほうがよろしいかと思いますが」

と、弾正が言うので、

「なぜだ？」

義継は不思議そうに、弾正久秀の老けた顔をまじまじと見つめて

いた。

「この戦いは、確かに織田軍が劣勢かもしれませぬが、しかし、長い目で見たとき、三人衆や本願寺、朝倉・浅井の連合勢力などが、いつまでも仲良く結託しているとは思えませぬ。反織田勢力をかき集めたに過ぎない烏合の衆。それに対し、織田軍は信長の下、磐石でございます」

「…長期戦になればなるほど信長殿が有利になるというわけか？」

「左様にございます」

義継の言葉に、弾正久秀ははつきりと頷き、そしてにつこりと微笑んだ。

八月二日。

征夷大將軍足利義昭は、三人衆の動きを受け、彼らを牽制すべく、河内高屋城主の畠山昭高に使者を送り、いざというとき織田軍に合力するよう命令を下した。ちなみに畠山昭高という男は、畠山高政の実弟であり、兄たる高政が永禄十一年（一五六八年）に重臣の遊佐信教によって追放された後、家督を相続し、南河内守護となった人物である。

昭高は南河内や和泉、紀伊の兵を糾合して、摂津国に陣取る三人衆を牽制した。一方、こうした畠山昭高の動きを受けた三人衆も、戦局のジリ貧化を恐れたのか、すかさず攻勢に打って出、河内国は三好義継領に攻め入ったのだった。

八月十七日。

三人衆軍七千は、三好義継の属城たる古橋城を取り囲み、数にものを言わせた総攻撃を開始した。守る義継方の兵力は総勢六百騎。当然のように十倍以上の敵軍の猛攻に苦戦を強いられたわけだが…。しかし、若江城より義継本人や畠山昭高、松永弾正らが援軍として

駆けつけてきたため、戦況は膠着化し、古橋城を巡る戦いは、血で血を洗うような熾烈な激戦へと発展したのであった。

最終的に勝者となったのは三人衆である。義継、昭高、弾正はそれぞれ撤退を余儀なくされ、古橋城は同日中に陥落した。この際、古橋城兵は三人衆軍により、悉く撫で斬り（皆殺し）にされている。その後、三人衆軍は榎並城を攻略して地盤を固めつつ、来るべき織田軍主力との決戦に備えた。

一方。

岐阜城にいた織田信長は、緒戦の劣勢を受け、

「これはまずい」

と、金ヶ崎に追い詰められた頃に匹敵する、苦虫を噛み潰したような顔をして、腹立たしそうに舌打ちした。

そこで彼は、とるものもとりあえず岐阜城を発すると、慌てて追いかけてきた馬廻衆三千とともに、八月二十日、京都は本能寺に入った。そして、その頃になると、信長入京の報に釣られて集まってきた織田軍の総戦力は四万近くにまで膨れ上がっており、八月二十五日、彼らは京を発し、二十六日には、中島に程近い天王寺に布陣したのであった。

天王寺周辺に織田軍が大集結した頃、中島は野田城、福島城に、三好軍も大集結を始めていた。

三人衆軍六千を筆頭に、紀伊からの援軍雑賀孫一勢三千や四国からの援兵、浪人衆を加えて総勢一万五千余騎という。援軍部隊を率いていたのは三好笑岩入道、安宅信康、十河存保らであり、また浪人衆を束ねているのは斎藤龍興をはじめとする旧大名級の武将であった。

かくして、天王寺を中心に布陣した織田軍四万と、野田城・福島

城を軸に布陣した三好軍一万五千が、畿内の覇権を巡って対峙したわけである。

八月二十八日。

細川信良（晴元の子。後の昭元）と三好政勝が織田軍に内通し、三好軍を離れている。

九月三日。

織田軍に加勢すべく、將軍足利義昭が奉公衆（將軍親衛隊）二千人を率いて、中島城に入城。これにより、織田軍は正式な幕府軍となり、三好討伐の大義名分を獲得する。

そして、九月八日。

三好義継軍と松永久秀軍が、野田城・福島城の西の対岸にあつた浦江城に押し寄せ、これを攻略した。この際、義継軍と松永軍は多量の火縄銃や、大鉄砲（通常の鉄砲より口径を大きくした代物で、主に攻城戦の際に使用したとされる）等を使用するなど、圧倒的な火力にものを言わせた城攻めを行ったといわれているが、兎にも角にも、たった一日で織田方が三好軍本拠地の喉元に位置する前線拠点を確保したことは、大きな戦果であるといえた。



「浦江が陥落したのか」

愕然とした様子で、三好日向守長逸は困ったようにため息を吐くと、がっくりと頂垂れ、頭を抱え込んでしまった。

浦江城は三人衆の根拠地たる野田城・福島城の喉元に位置する、戦略的に非常に重要な土地であり、ここが三好義継、松永久秀軍によって攻略されてしまった今、三人衆軍本陣は織田軍の猛攻に晒されることになってしまったのであった。

「…おのれ、このままではいかん」

兵力的には、遙かに織田軍に劣っている三好軍なのである。このままの戦況が続くと、じりじりと土俵際に追い込まれて、敗北という最悪の事態に繋がりがかねなかった。

打開策を講じる必要がある。無策のままでは敗北は確實であった。

「おい、篠原殿はまだ来ぬか？」

側に控える重臣に、長逸は怒鳴りつけるかのように尋ねてみた。いずれにしても、この戦況を打破するには、四国軍の主力を束ねる篠原長房の援軍に頼るしかないのである。

「ま、まだ…」

家臣たちは、申し訳なさそうに、力なく呟いている。

「まだ、か…」

長逸は苦虫を噛み潰したような顔をして、ふうと小さなため息を吐いた。早く来てくれ、篠原殿！ 三好日向守長逸は心の中で、必死に願っていた。

義継の心境は、実に微妙であった。

今の彼は、浦江城を攻略して、現在の織田軍優勢を作り上げた最

大の立役者なのであるが……。しかし、彼が戦っている相手は、かつて彼の家臣であった三好三人衆であり、その三人衆のバックにいるのは、三好長治であり、安宅信康であり、十河存保……。即ち、れっきとした、紛れもない義継の従兄弟たちなのだった。

言ってみれば、今回の戦いは三好家そのものの同士討ちに過ぎないのだ。確かにこれまでも三人衆と松永弾正が激しくいがみ合い、三好氏を真つ二つに割る内紛が繰り返されてきたけれど……。それでも、両軍ともに自分が三好政権を担うのだという気概に燃えていた。自分たちこそが三好長慶が苦心の末に作り上げた政権を引き継ぎ、それをさらに大きなものにするのだという野心に燃えていた。

だが……。

今は違う。三人衆側はそうかもしれないが、少なくとも自分は違う。義継は悲しげに自嘲し、苦笑いした。そう。今の自分は、所詮、織田信長の覇業を支える手駒の一つに過ぎないのだ。この戦いに勝ったからといって、三好政権が復活するわけでもない。それどころか、三好政権復活のきっかけを潰し、芽を摘み取り、三好氏そのものを衰亡の淵へ追い込むことになりかねないのだ。

何をしているのだろう。

義継は時折よく思う。分家である日向守長逸や下野守政康、三好長治、安宅信康、十河存保らが、あるいは重臣であった岩成友通、篠原長房らが、三好家復興のために全力を挙げて織田氏に抵抗しているというのに……。宗家の当主たる自分は、織田信長の走狗と成り果てて、御家復興、再興のために必死に働くかつての家臣たちを攻撃している。

「殿！」

そこに、重臣の池田丹後守教正が駆け込んできた。

「どつした？」

義継はゆつくりと顔を池田丹後に向けて。

「援軍が到着いたしました」

「援軍？」

不思議そうに首を傾げる義継に、

「紀伊よりの援軍です。雑賀、根来衆徒、総勢二万とのこと」

淡々と、そう答える池田丹後であった。

「そう、か」

勝負あつたな。義継は一人そう思う。ただでさえ兵力的に優位に立っている織田軍に、さらにそれだけの大援軍が合流すれば、もはや三好軍に勝ち目はあるまい。確かに、中島という非常に攻めにくいデルタ地帯に立てこもっている三好軍ではあるが……。しかし、圧倒的兵力差で押しつぶせばいい。敵の本拠地に対する格好の攻撃拠点も手に入れたのだ。

銃撃戦が始まる。

今回、援軍として駆けつけてきた雑賀衆及び根来衆は、鉄砲戦術に非常に長けており、実際、三千丁にも及ぶ大量の火縄銃を保持していた。織田方は、その圧倒的火力でもって、猛攻を加えてきたのである。けたたましい銃声が中島を中心とした地域に響き渡り、三好軍の軍兵はなす術なく倒れ……。とはいかない。彼らとて意地がある。後に武田勝頼が犯すことになる愚を、彼らは犯さなかった。

というより、三人衆軍にも豊富な鉄砲があつた。例えば、三人衆軍に合力する雑賀孫一の雑賀衆傭兵部隊は、雑賀衆正規軍に劣らぬ火縄銃を常備していたし、何より三人衆自体が、こういうときに備えて鉄砲を買い集めていたのである。このあたりは、さすがに二十年以上天下の中心にあつて、ありとあらゆる先進文化を真つ先に享受してきた三好氏であるといえた。先代君主三好長慶の新しい物好きの性格も、多分に影響を与えたことだろう。長慶はその治世の中で、キリスト教を認め、南蛮貿易を推進し、そして鉄砲を買い集めた。偉大なる英雄であつた彼は、いずれ鉄砲こそが戦いの主役になる日が来ることを、薄々察していたのかもしれない。鉄砲の売買を独占的に取り扱う堺衆との友好関係を維持しつつ、大量にかき集めた鉄

砲は、今日の三好軍の大きな戦力となっている。先に、浦江城を攻め落とした三好義継軍と松永久秀軍は、その圧倒的火力によって立てこもる三好軍を圧倒したが、その圧倒的火力なるものは、長慶時代に蓄えられたものだった。

とはいえ…。

援軍二万を加えた織田軍の猛攻は凄まじく、如何に火力で互角を誇る三好軍といえど、後退を余儀なくされることになった。九月十三日には浦江城に続く要地であった畠中城が陥落。かくして三好軍の不利、劣勢は誰の目にも明らかなき情勢となった。

「講和以外、ありませぬ」

長逸の下に、三好政康がやってきて、彼はしきりにそう進言していた。

「これ以上戦いを重ねれば、わが軍はジリ貧に陥り、最終的には敗北いたしましょう。そうなれば、もはや我らに再起の道はありませぬぞ」

浦江、畠中両城が落ちた今、野田城・福島城は丸裸にされたも同然となった。こうなった以上、如何に中島が守るに易く、攻めるに難い、難攻不落の、天然の要塞だとしても…、野田城・福島城が堅城だとしても、織田軍の猛攻をいつまでも食い止められるはずもないのである。

政康が講和するよう進言したのも無理なきことであった。ある程度実力を保っている今のうちなら、比較的対等な講和を結ぶことも可能だろう。逆に潰されてしまった後なら、織田軍は三好方の要請など歯牙にもかけないに決まっている。

「篠原殿の援軍が来る」

長逸は、そう言っただけを向いた。

「篠原殿の援軍と申して、いつ来るのですか！ 明日ですか？ 明日でございますか？ まあ、明後日、明々後日ぐらいに来るとわ

かっているならよろしゅうございますが、それ以上の時間がかかるとなると、意味はありませぬ。それまで我らが織田の猛攻を防ぎきれるとお思いか？」

織田軍の総勢は既に六万近くにまで膨れ上がっている。一方の三好軍は、相変わらず一万五千なのだった。

「日向殿！」

政康にせつつかれ、急かされ、長逸は困ったようにため息を吐きながらも、「やむを得ぬか」と呟きつつ、小さく頷いた。確かに、いつ篠原長房が到着するかわからぬ今、彼を頼りに厳しい戦いを強行するのは危険である。ならばいっそ、いざとなれば篠原軍の到着を待つて戦えるのだという気構えをもって交渉に挑み、より割のいい和議に持ち込むのが良策というものである。

三好日向守長逸とて愚かではない。自らの意地に拘り、その程度の分別がつかぬ男ではなかった。

しかしながら…。

圧倒的優勢を確保した織田信長は、今更三好方と和議など結ぶ気はなかつたらしく、そっけなく拒否した。

そして、その報告は早速日向守長逸らの下に届けられることになった。三好軍首脳部は、沈鬱な雰囲気にも包まれ、特に講和を強力に主張した下野守政康などは、

「これで三好も終わりか」

などと公然と呟いているほどだった。

岩成友通、三好笑岩、斎藤龍興ら有力部将は、総大将たる長逸に目をむけ、どうすべきか、彼の判断を仰ぐことにした。講和が認められなかった以上、後は篠原長房の到着にあらゆる期待と希望をかけて戦いを続行するしかない。今更、降伏するわけにもいかないのである。

「…やむを得ぬ。かような辱めを受けた以上、我らは断固として織

田と戦わねばならぬ。織田軍は必ず我らが倒す。今は亡き修理大夫様の下、天下を支配した我らの意地にかけても、必ずや織田軍を撃破してやるのだ！」

長逸は大仰に怒鳴り、叫び、そして居並ぶ諸将をぎろりと睨み付けた。異議は許さぬ。とでも言いたげな彼の顔に、当然、誰も異議など唱えなかった。

三好の意地に賭けても、必ず織田を倒す！

彼らの顔は、誇りに満ちていた。長慶時代、自分たちは天下を取っていた。英君長慶の下、天下を安寧に導き、荒れ狂う戦国時代を収束させるのだという夢と理想に燃えて、ひたすら命を削って戦ってきたのだ。最近、その夢や理想を忘れがちになっていたが、しかし、忘れたわけではない。

「我らは必ず勝つ！」

長逸が怒鳴ると、

「おおおおおつッ！」

大地を切り裂き、揺るがすような大音声が、野田城大広間に木霊した。我らは三好長慶の薫陶を受けた戦士なのだ。負けるわけにはいかぬ。少なくとも主君長慶が、信長に劣っているなどと思われない。信長以上の存在だったのだということを天下に思い知らせるためにも、必ずここで自分たちが勝たねばならないのだ。

誰もがそう思い、そう胸に誓った。

苦戦は覚悟の上。敗北も覚悟の上。しかし、だからといって諦めるわけにはいかない。かつて長慶は、どんな厳しい状況下でも、その忍耐力と叡智で切り抜けてきた。その長慶の薫陶を受けた自分たちが、如何に苦戦を強いられているからと、逃げ出すわけにはいかないのだ。

両軍はにらみ合う。

織田軍の総攻撃は間近に迫っていた。

織田と三好。

畿内の覇権を巡り激突する新旧両雄の命運をかけた決戦は近い。  
両軍の旗が、秋風に揺られながら、ぱらぱらと揺らめく様は、なん  
ともいえぬ緊張感を象徴しているような感じがした。

九月十四日。

阿波国は上桜城主たる篠原長房は、今日もまた勝瑞城にあつて、先ほどからずっと主君たる三好長治の説得に励んでいた。しかしながら、ここ数日間、全く首を縦に振ってくれない長治の呆れるほど頑なな態度に、長房の我慢も限界を迎えつつあった。

三好実休（三好義賢。長慶の弟）、少少将の方の間に生まれた長治も、今年で十七歳になる。父たる実休が久米田の合戦にて射殺された後、家督を相続し、約八年間に渡り阿波国を統治してきたわけなのだが……。しかし実権はない。筆頭家老たる篠原長房が全権を掌握しており、幼君長治の出る幕などなかったのである。

それが長治にはたまらなく辛い。腹立たしい。憎らしいのだ。既に十七歳。家督を相続した八年前ならいざ知らず、十七歳の青年にはやりたいことが腐るくらいにあるのだった。自分で政治をしたい。そんな感情は、このところいよいよ高まり、そしてそれは、執政たる篠原長房に対する反感という形で現れていた。

「ならん」

最近の長治は、さながら駄々っ子のように異議ばかり唱えていた。反対のための反対というべきか、とにかく長房のやることなすことに全て「嫌」「駄目」「ならん」と言っていたのである。

今回も、いつものように「ならん」だった。駄々っ子を主に持った権臣の頭は痛い。

「殿！ 此度の戦は、三好一族の命運を賭けた戦にございますぞ。我らが出兵せねば、三人衆は滅びてしまいます」

と、彼はしきりに説得する。しかし、長治は聞かなかった。

「援軍なら出してある。大叔父に兵を預け、送り出したではないか」  
「駄々っ子幼君は、そう言っつてぶいっつとそっぽを向いた。」

「笑岩殿に預けた兵など、たかが数千騎でございましょう。主力軍



を出さねば、日向殿らに勝ち目はありませぬ」

そんな長房の言葉にも、

「…何ゆえ日向を助けねばならんのだ？」

と、実に素っ氣無い。

「既に宗家の当主たる義継殿も織田に臣従しているではないか。松永弾正も因幡守（三好政勝）とて、既に織田に従っている。日向殿を助け、織田と戦うことが、本当に三好のためなのか？」

確かに正論ではあるが…。しかし長房の目から見れば、それほどこまでも反対のための反対としか思えなかった。要するに自分に対する反発、反感の表れ。自分に主導権を握られたくないという、実にちっぽけな意地のなせる業だ。

一方、心にもないことをべらべらと喋りながら、長治は一人したり顔で、戸惑う長房を見つめていた。

「本気で仰せでございますか？」

長房がぎろりと長治を睨みつけると、幼子の如き青年君主は、困ったように目を泳がせながら、「そうでもないが…」と、齒切れの悪い答えに終始していた。

「義継様には何らかのお考えがあるに相違なく、因幡殿は元々三好宗三入道の嫡子にて、御一門衆の一人とは申せ、織田に寝返ったとしてもなんら不思議ではありませんまい」

とりあえず長治の愚かしい質問に律儀に答えておいて、

「いずれにしても援軍を出さねばなりません。もし三人衆が滅びたなら、次は我らにございます。あの信長が、弱体化した我らを野放しにしておくはずがありません。四国に領地を得る絶好の機会を逃すはずもなく、三人衆滅亡と同時に大軍を持って乗り込んでまいりましょう」

と、言った。しかしながら相変わらず長治の洪顔に変化はない。

とはいえ長房の言いたいこともそれなりに理解したようであった。腹立たしくはあっても、ここは篠原長房の言い分に沿って援軍を派兵するしかないのだ。その道理がわからぬほど、長治という青年

も愚かではなかった。

「…よう分かった。以後のことは、そなたに任せよう」

長治が観念したように頷くと、

「御英断、痛み入ります」

長房は恭しく頭を下げ、そして足早に立ち去り、早速援軍出動の準備を始めさせたのだった。

九月十四日、夜。大雨。

夜空は曇天に包まれ、ザアザアとけたたましい雨音が響いている。障子が揺れる。カタカタと煩い。

福島城の一角。三好の旗に並んで、斎藤氏の家紋が描かれた旗がずらりと並んでいる。そう。ここはかつての美濃国主、斎藤龍興の陣所であった。

「雨、か…」

土砂降りだ。龍興は不安そうな面持ちで、真っ暗に染まった夜空を見上げていた。

「如何なされました？」

側近が、不思議そうな顔をして龍興を見上げる。

「いや、なんでもない」

美濃を失って既に三年。龍興は困ったようにため息を吐くと、サツと障子を閉じ、ゆっくりと腰を下ろした。さて、これから世の中はどうなるのか。不安は尽きない。

既に三好軍の劣勢は誰の目にも明らかかな情勢となっている。起死回生の策であった信長との和議交渉も不調に終わった今、圧倒的な織田軍との正面衝突は避けられないだろう。そうなれば三好方の敗亡は必至。三好方では既に玉碎覚悟の決戦に挑み、三好長慶以来の意気地を見せつけることで意見の一致を見ているようだが…、しかし生憎と、三好氏に対してそれほど義理や愛着など持ち合わせていない龍興にとって、他の三好家家臣たちと同様に扱われ、さも彼

らとともに玉砕することが当然のことのように思われるのは甚だ心外であり、不満であった。

「援軍は、着そうもないな」

龍興は頭を抱える。

「はッ！ まだ…」

側近は苦しそくに言葉を吐いた。

「そう、か」

最期の頼みは阿波よりやってくるであろう篠原長房の軍勢。阿波をはじめ、四国に残っている三好方の主力軍が動けば、その兵力は二万近くに達しよう。これが到着すれば、戦局は動く。

しかし来ない。いっこうに姿を現さない。中島に布陣して、既にいくらかの月日がたっている。当初の計算通りなら、とっくの昔に到着していて然るべき篠原軍が依然として到着していないという事実は、不安に慄く龍興を苛立たせるに十分すぎる効果があった。

「よもや、誠に日向殿らと運命をとみにせねばならんのか？」

稲葉山陥落の折ですら自害しなかった龍興である。美濃を失い、生き恥を晒してなお戦い続ける彼にとって、こんなところで命を失うわけにはいかないのだ。彼は腹立たしそくに、「酒だ！」と叫ぶと、小姓たちが慌しく運んできた酒をぐびぐびと飲み干して、ふうと静かにため息を吐いた。

その頃…。

三好軍総大将たる三好日向守長逸は、野田城内にあって、一人物思いに耽っていた。

苦戦は必至。しかし、敗北する気もない。諸将に対しては、三好の名誉にかけても玉砕すべきだと宣言していたが、実際、彼は玉砕するぐらいなら逃げてでも再起を期すべきだと考えていた。

逃げないのは、勝算があるからだ。

「…朝倉、浅井が動けば、勝てる」

彼はそう踏んでいる。そのための使者も送った。彼らがバカでなければ、必ず動くだろう。朝倉・浅井連合軍が動けば、信長を挟み撃ちにすることができるとだ。

しかし、彼らが動く前に自分たちが潰されてしまっただけでは意味がない。そうならぬようにするためにも、篠原長房の援軍がどうしても欲しいのだった。彼の援軍が来れば、まさに鬼に金棒。如何に織田軍が数に物を言わせて猛攻を仕掛けてこようが、気にするまでもない。

「だが、篠原殿が来ずとも、まだ手はある」

長逸はふうと小さなため息を吐き、そしておもむろにすくと立ち上がり、窓辺のほうに歩み寄った。

「日向殿、如何なされました？」

側近の一人が、そんな彼の様を訝しげに見つめた。

「いや、なんでもない」

彼はとりあえず困ったように苦笑いすると、もといた上座にちょこんと腰を下ろした。

元龜元年（一五七〇年）九月十四日、深夜。

ザアザアザアと、相も変らぬ土砂降りの中、

カアアアアン、カアアアアン。

唐突に鳴り出す鐘の音。「何事だ？」と、誰もが仰天して飛び出した。

カアアアアン、カアアアアン。

まだ響いている。

「何事だ？」

動揺は両軍の幹部級にまで広がっていた。三好三人衆の一人、三好下野守政康は、その独特の音色に驚き、飛び起きて、飛び出した。「申し上げますッ！」

そこに側近が慌しく駆け込んできた。

「本願寺が動き出しましてございますッ！」

「本願寺？」

政康は不思議そうに首を傾げながらも、しかし何か思い当たる節でもあったのか、おもむろにパンと手を叩いて、にっこりと、実に嬉しそうな笑みを漏らしていた。

「ついに顕如が動いたか！」

彼とても三人衆の一人である。即ち全軍の副将格なのだ。当然、総帥たる日向守長逸の考えている作戦は一通り承知していた。そして、その作戦の中に、本願寺顕如の名があったことを思い出したのである。

本願寺顕如。

一向宗総本山本願寺一門第十一代法主。強大なる一向門徒たちを束ね、政治的に絶大な影響力を誇っている青年高僧。そして、彼こそは、三好軍の総大将たる三好長逸が、篠原長房の次に期待を託していた人間なのであった。彼さえ来れば…。そう長逸が漏らしていたのを、政康もよく覚えていた。

その本願寺が動いた。

顕如以下門徒勢一万という。

「勝った！」

政康はひとしきり「ははは」と豪快に高笑いすると、興奮の余韻おさまらぬうちに、

「出陣準備にかかれッ！ 大至急だ」

と、配下の手勢に対して、そんな下知を下したのであった。

一向宗の神聖なる仏旗が土砂降りの雨の中に翻る。ぱたぱたと揺れながらも、ぐっしりと濡れきったその旗の下、総勢一万に達する屈強な門徒たちが轟いていた。

彼らは織田軍の南側側面に布陣した。そして夜陰に紛れ、猛烈な雨風にもめげることなく、仏敵討伐を叫びながら、猛然と攻撃を開

始したのだった。

九月十五日、早朝。小雨。

戦況は…、膠着状態。両軍、動きがとれず睨みあいが続いていた。というのも…。

本願寺軍の加勢を得て、一気呵成に攻勢に打って出た三好軍であったが、その過程で、織田軍が築いていた堤防を決壊させてしまったのである。これにより、昨夜来の土砂降りにより増水した川の水が一拳に中島一帯に流れ込み、両軍ともに戦いどころの騒ぎではなくなってしまうたというわけであった。

「くそッ！」

長逸は悔しそうに唸っている。まあ、無理もなかるう。せつかく織田軍を追い詰め、あわよくば信長をも葬り去る絶好の機会であったというに…。それが御破算になってしまったのだから、彼の悔しさも推して知るべしといったところであろう。

流れ込んだ水は、既に長逸の下まで迫っている。地べたは泥塗れ。歩けば、ぴちゃぴちゃと音が鳴る。

「殿！ 下野殿、主税助殿がお越しです」

そこに家臣が慌しく駆け込んできて、小さく頭を下げた。

「わかった。通せ！」

長逸の憂鬱は尽きそうもない。とりあえず、そう命じると、彼は床机の上にとっかかりと腰を下ろして、ハアと殊更大きなため息を吐いた。

その後。

戦線は膠着したまま、十六日、十七日と月日が流れた。

そして九月十七日。

三好方は織田方に再度和議を申し出た。しかし、これを信長は拒

否。その知らせを本陣で受けた長逸は「ふーん」と唸ったほかは、さして気にする風もなく、比較的淡々としていた。

「既に朝倉・浅井も我らに連動して動くことを約定してございます。信長が和議を蹴ったのは勿怪の幸いにございます。一拳に彼を叩き潰して、討ち取ってしまえば、御家に再び天下が転がり込みましょう」

と、岩成主税助友通がさかさ口を挟んだ。

「そうよのう」

長逸はひとしきり満足そうな笑みを浮かべつつ、

「我らに本願寺、そして朝倉・浅井。ふふふ。今の信長は、まさに袋の中の鼠よ。必ずや袋叩きにして、討ち取ってくれる。金ヶ崎の折の朝倉の如きへマは犯さん」

と、怒鳴った。そして、おもむろにすつくと立ち上がると、彼は居並ぶ諸将をぎろりと睨み付け、「今こそが正念場。心してかからねば、織田軍は倒せぬ。長慶公時代の栄光を取り戻すは今なのだ！」と、ひとしきり絶叫した後、ようやく床机に腰を下ろして、興奮する諸将を尻目に静かに目を閉じた。

九月十六日。

朝倉・浅井軍二万が織田信長の背後を突くべく進軍を開始。これに対し、織田方の森可成よしなりや織田信治らは坂本城を占拠して迎撃。朝倉軍は、余りに激しい織田方の抵抗に手を焼き、やむなく同日中に撤退している。

続く九月二十日。

三好・本願寺連合軍と織田軍が睨みあう中島を中心とした主戦場にも変化があった。

即ち、ひたすら睨みあうだけの膠着状態を打破すべく、本願寺頭

如率いる門徒軍が織田軍主力に対して攻撃を仕掛けたのだった。嚴かな法衣の上に莊嚴な甲冑を纏い、完全武装した顯如上人自ら門徒軍六千余の先頭に立って奮戦する様は、もはや血に飢えた狼とでもいふべきか…、とにかく俗世を捨てた僧侶の所業とは到底思えぬものがあつたが、兎にも角にも、総帥たる顯如自ら戦線に立ったことで、門徒軍の士気は大いに高まり、彼らは瞬く間に浮き足立つ織田軍を蹴散らしてしまった。

同日。

四日前の戦いで、いったん引いた朝倉・浅井連合軍は、顯如上人の働きかけにより三好方への同心を確約した比叡山延暦寺の援軍を得ると、再び攻勢に打って出、森可成・織田信治らが率いる織田軍と激突した。延暦寺の僧兵軍団に加え、連合軍の数にものを言わせた圧倒的猛攻も相俟つて、ついに織田軍は壊滅。森可成、織田信治ら織田軍の首脳陣は、撤退途上、連合軍の手にかかつて戦死した。

九月二十一日。

三万近くにまで膨れ上がった連合軍は、森可成の居城たる宇佐山城を攻略し、その勢いのまま京は山科方面まで進出。上洛一步手前の位置まで歩を進めた。これに対し、信長は慌てて柴田勝家、明智光秀、村井貞勝らを京に派遣し、彼らは二条御所に入って連合軍の武力入京に備えた。

九月二十三日。

朝倉・浅井連合軍が京に迫り、さらに、こつした情勢を受けて意気上がる三好・本願寺連合軍の前に、織田信長はついに観念して中島からの撤退を決断する。彼は足利義昭とともに帰京し、以後は京



の守備力強化に全力を注ぐことにしたのであった。  
そして…。

時は九月二十七日のことであった。

「申し上げますッ！」

中島を発し、芥川山城に入った三好長逸らの下に、慌しく急使が  
駆け込んできた。

「何事だ？」

長逸に代わり、政康が尋ねると、

「篠原長房様以下二万、兵庫に入られたとのございますッ！」  
急使はとるものもとりあえず、早口のまま言い切った。

「篠原殿が？」

ついに来たか。長逸、政康ら軍首脳部の顔色がいつぺんに笑みに  
変わった。篠原軍二万。これが加われれば、まさしく鬼に金棒。織田  
軍など敵ではない。

「よしッ！ これで信長は完全に袋の鼠だ！」

岩成主税助などはそんな風に叫んで、

「後は叩き潰すのみ！」

三好笑岩や斎藤龍興らほかの幹部たちも、楽しそうに豪快に高笑  
いしていた。

九月二十七日午後。

三好長治を総大将、篠原長房を副将（実質的総大将）とした総勢  
二万の大軍が兵庫に到着した。そして二十八日、彼らは織田方の制  
圧下にあった越水城や瓦林城を取り囲んで、同日中にこれを攻め落  
としたのであった。

ついで十月一日。

篠原軍が野田城・福島城に到着。二日には芥川山城にて三好三人

衆軍と合流した。

【落日編】第147章 野田城・福島城の合戦 その四 く決着く

中島天王寺より撤退し、辛うじて無事に帰京を果たした織田信長は、この頃、本能寺にあつて、山積み状態のまま、さらに膨れ上がる一方の様々な難題や、こみ上げる頭痛と必死に戦っていた。

それにしても、  
負けた！

という動かし難い事実が、彼には許せない。しかし、現下の情勢は、誰の目にも織田方の劣勢だと判別せずにはいられないほど、信長は窮地に追い込まれていたのだ。何しろ、西に三好・本願寺連合軍、東に朝倉・浅井連合軍（加えて比叡山延暦寺の僧兵軍、六角氏の残党軍）が都にいる信長の下にひしひしと迫っているのだ。対する織田方は、信長のいる京都を中心にそれなりにまとまった兵力を維持しているものの、圧倒的な反織田連合軍に比べると、明らかに貧弱であった。

こうなると信長も愚かではない。くだらぬ意地に拘り、無意味かつ無謀な徹底抗戦に拘ったりはしなかった。目下、自分にとりうる最善の策として、『和議』というものを真剣に考えるようになったのだ。

「和議だ！」

腹立たしそうな顔をして、観念したように、彼はあたり構わず怒鳴り散らしていた。

「和議、にございますか」

彼の傍に侍っている側近は、前田又左衛門利家という男であった。通称、『槍の又左』。あるいは『犬』。

「そうじゃ！ 和議を結ぶよりほかに仕方あるまい。犬。お主が手筈を整えてみよ」

「は、はッ！」

「お主もたまには槍働き以外でも手柄を上げてみよ。期待しているぞ」

彼らしくもなく、にこやかに微笑む信長に、利家は困ったように苦笑いした。元より槍働き以外に自らの働きどころはないと信じ込んでいる『槍の又左』にとって、それ以外というのは、はっきり言っただけの世界であった。

そんな又左衛門利家であるが、彼の勇名は既に天下に轟いていた。特に先の中島からの撤退戦（春日井堤の戦い）において、追撃に打って出てきた三好・本願寺連合軍に単騎で立ち向かい、逃げる織田軍を窮地から救い出した功績は高く評価されており、『槍の又左』といえば前田利家、と誰もが認識できるだけの知名度を得るようになったのだった。

「出来るか？」

出来んとは言わさぬ。言下にそんな意味合いをこめた信長の言葉に、出来ませぬとは答えられない利家とすれば、

「出来ます」

と、答えるよりほかに仕方がなかった。

芥川山城に集結した三好・本願寺連合軍の数は、総勢五万余にまで膨れ上がっていた。三好三人衆軍一万五千、篠原長房以下四国軍が二万、本願寺顕如以下門徒軍が一万五千である。

総帥格たる長逸はニタニタと笑い、先ほどからずっと織田方の動静を伝える伝令からの報告に耳を傾けていた。

「日向殿。既に朝倉殿、浅井殿の兵も山科に陣取り、いつでも武力入京できる手筈を整えたとのこと。朝倉殿らの兵は総勢三万余。織田など袋の鼠にございます」

そこに、岩成友通が勝ち誇ったような顔をして、長逸の下に乗り込んできた。

「左様か」

長逸の態度は常に素っ気無い。

「朝倉殿らは三万か。こちらには五万ある。総勢八万。もはや織田は終わったな」

三好笑岩はからからと笑い、

「これで美濃に復帰できるぞ」

斎藤龍興も嬉しそうに高笑いしていた。

河内国は若江城に戻っていた三好義継の下に、織田信長の特命を受けた前田利家がやってきた。

義継は思いもよらぬ珍客に困ったような苦笑いを浮かべつつも、とりあえず歓待した。前田又左衛門利家といえば、今や信長の側近として天下にその名を轟かせている勇者であった。

「左京大夫殿、此度まかり越しましたは、上様よりの御命令をお伝えするためにございます」

利家はそう言っつて静かに頭を下げた。

「なるほど。で、上様はなんと？」

わざわざ信長の側近がやってきたのだから、その用件などはなから分かりきっている。どうせ…、なんて考えていると、その前に利家が切り出した。

「三好方との和議交渉を斡旋していただきたい」

ほら来た！ と、義継は心の中でパンと手を叩いた。しかし、表情は相も変らぬ仏頂面。

「今のそれがしに、三人衆らへの影響力などありません」

義継としても辛いところだった。実際、三好軍と刃を交えた彼に、三人衆への影響力は皆無と行ってよいだろう。宗家当主なんて言っても、そんなのは形だけ。三好氏を裏切り、織田に寝返った彼を、誰が宗家当主と崇めるだろう。

「されど、左京大夫様は三好の御大将であらせられる。上様も、左

京殿のお働きに期待なさっておられる」

「…ふーん」

義継は困ったようにため息を吐き、そしてゆっくりと庭先のほうへと歩いていった。

「そういえば前田殿。先の戦では随分と御立派なお働きをなされたそうで…。『槍の又左』でござるか。いやはや、凄まじい」

他人事のような台詞を吐きながら、義継は傍にある紅葉の木をまじまじと見つめた。既に秋。真つ赤に染まった紅葉が、なぜだか血の色のように見えて、彼は苦笑いした。

「それを申されれば、左京殿の御父上、故十河民部大輔殿（みんぶだゆう）（十河一存）は、かつて鬼十河と評されたほどの猛者であらせられたとか。一度手合わせしたかったものです」

「…左様か」

今は亡き実父。父が死んで、既に九年という歳月が過ぎ去っていた。長いようで早い。しかし、その間に三好家は急激に衰退し、鬼と称えられた男の倅は、織田氏の庇護下にあつて、空しき命を保っているに過ぎなくなっていた。

「ま、よろしかろう。又左殿。三人衆への働きかけ、必ずや成し遂げて見せましよう。が、余り期待はなさらぬように。今のそれがしには、昔の如き力はありませんゆえ」

などと言いながら、義継は「ははは」と笑った。

織田方と三好方の和議交渉は十月末ごろより本格化した。

元龜元年（一五七〇年）十月二十九日。

織田方の全権代表として三好義継が芥川山城に入り、早速、彼は三人衆筆頭三好日向守長逸と、具体的な和平協定について協議を始めたのだった。

「で、織田殿は、要するに和議を結びたいと仰せなのですな」

長逸はニタニタと笑いながら、じろりと義継の顔を睨みつけてい

た。

「されど、我らが二度に渡り、和議を要請したときは、けんもほろろに却下した織田殿が、此度は一転して御自分から和議を持ち出すとは…。何ぞ、お心が変わるような変化でもありましたかな」

ありとあらゆる皮肉をこめて、長逸は吐き捨てるように言い切った。

「日向殿」

義継は苦りきった顔をして、そう言った。

「もしも和議を結ばれるなら、織田殿は摂津一国を割譲してもよいと仰せてござる」

「…ほお。摂津一国」

如何にも馬鹿にするなど言いたげな顔をして、長逸はにやりと不適な笑みを漏らした。

「されど、織田殿より摂津一国を割譲してもらわずとも、我らは既に摂津全土を掌握しておりますしなあ。和議を結ばず、織田殿を倒せば、我らは他に和泉、河内、山城、大和、近江、美濃、尾張が手に入る。織田殿はどうか知りませぬが、我らには今や和議を結ぶ理由がありません」

今や織田信長は絶体絶命の窮地に追い込まれている。反織田連合勢力は東から西から信長を圧倒し、その上、信長が支配している伊勢では北畠氏の残党勢力が武力蜂起の姿勢を示したり、美濃国内では旧国主斎藤龍興の復権を求める声が強まったりと、彼に対する風当たりは日増しに強まっていた。

「義継殿も、いつまでも織田殿の手先に留まっておられず、我らに与力なされては如何か？ 今は亡き十河民部様が今の義継殿をご覧になれば、さぞやお嘆きになりましたよな」

「…」

「ま、いずれにしても織田殿の命数は後わずか。義継殿も真剣に考えるべきときに来たようすな」

勝ち誇ったような長逸の態度に、義継としては何と答えればよい

のか分からなくなった。確かに、三好方が和議を蹴れば、織田氏の滅亡は決定的である。そして、滅亡間際の織田氏に義理立てして、共に仲良く滅びの道を歩むほど、義継もお人よしではない。

だからといって…。

今、義継がこのこと三好方に復帰したとして、居場所があるのであろうか。少なくとも宗家当主として、三人衆らの上に立つことは絶対に不可能だ。それは先ほどの長逸の態度を見ていると明らかである。彼は決して義継に上座を譲ろうとはしなかったし、何より『義継殿』としか呼ばなかった。既に長逸にとって、義継は宗家当主でもなんでもなく、三好一族の名の下に対等な存在でしかないのだった。

「ま、和議については、以後持ち帰って具体的に検証するつもりですよ」

長逸は「ははは」と勝ち誇ったようにひとしきり高笑いすると、「用があるので」と言って、逃げるように義継の前から立ち去ってしまった。

和議工作は極めて不調。

とはいえ、そんなことはなから分かりきっていたことで、信長も一度や二度の失敗で諦めたりはしなかった。まあ、和議を結ぶより他に、今の窮地を脱する方法はないのだから、信長が和議工作に執念を燃やすのも無理なきことであった。

しかし三好義継を使った和議工作は完全に不調。信長の苛立ちも頂点に達しつつあった。

「光秀ッ！」

本能寺に、いつものように彼の大音声が響き渡る。

呼ばれた明智十兵衛光秀は慌しくひれ伏し、「はッ！」と言った。「朝廷工作はどうなっている？」

義継に具体的交渉を進めさせる一方、奥の手として信長が用意し



ていた秘策。その実行にあたっていた明智光秀は、

「公方様のお力添えもあり、帝や有力公家衆も、和議斡旋やぶさかではないと確約を得ましてございます」

と、自信満々、堂々と答えた。

「左様か」

さして喜ぶ風でもなく、淡々と頷きながら、信長はハアと静かにため息を吐いた。

「勅命が出次第、三好方と具体的な交渉に入れ！ 以後は光秀、あなたが正使を勤めよ。義継と又左は光秀の補佐を勤めよ。よいなッ！」

信長の命令は常に一方的。そこが独裁者といわれる所以であったりするわけのだが……。しかし、こういう窮地に追い込まれているとき、信長のような即断即決型の君主は、家臣にとってこれ以上ないほど頼りがいがあった。

「承知仕りました」

光秀、義継、利家の三名が同時に平伏し、それを確認した信長は腹立たしそうな表情のまま、そこから立ち去っていった。

十一月二十日。

征夷大將軍足利義昭の働きかけもあり、この日、正親町天皇は、おのおのまぢ 両軍に対して勅使を派遣し、そろそろ無意味な戦に終止符を打ち、和議を結ぶべきだと諭した上で、『和議結ぶべし』という勅命を下したのだった。

かくして反織田連合軍も、織田方との和議を成立させるべく、具体的な検討に移らざるを得なかった。とりわけ反織田連合軍の中核を占めている顕如が、勅命を重視し、和議締結もやむなしという姿勢に転じたことが大きかったといえる。また三人衆としても紛れもなき『勅命』が下った以上、それを蔑ろにすることは出来なかったのである。『勅命』に背く者。それ即ち逆賊。如何に朝廷や帝の権

威低下が著しい戦国時代とはいえ、賊軍の汚名を着せられることを何より嫌う日本独特の気風は依然として根強く残っている。それは三人衆とて例外ではないのだった。

かくして十二月十四日。

織田陣営と反織田陣営の間に和議が成立。とりあえず、信長は摂津一國を反織田方に割譲することで、絶体絶命の窮地から脱することが出来たのだった。

即ち、野田城・福島城の合戦は、具体的戦闘及び大局的には反織田陣営の勝利。しかし政治的には、帝を引き込み、絶体絶命の状況下から引き分けに持ち込むことが出来た織田陣営の勝利というべきなのだろう。兎にも角にも、これ以後、反織田勢力は急激に勢いきき、信長はその討伐に苦慮することになるのだった。

年が明けて、元龜二年（一五七一年）。

激動の乱世に収束の気配は見えない。畿内は相変わらず、果てしなく戦乱が繰り返されて、荒廃に荒廃を極めていた。

前年に行われた野田城・福島城の合戦が三好氏を中核とした反織田勢力勝利の下に幕を閉じると、織田氏はその急激な勢力拡大から一転、窮地に追い込まれることが多くなった。

例えば、かねて悪化していた信長と足利義昭の関係が、極度に悪化するようになった。まあ、無理もないだろう。何しろ信長が『殿中御掟』を義昭に強要して以来、両者の蜜月関係は終焉していたし、以後はとりあえず反三好の名の下に共闘関係を維持していたものの、信長は事あるごとに義昭の幕政に異議を唱え、あるいは無視して独自の政治を推進していったから、二人の関係は完全に冷え切ってしまったのだった。

まあ、無力な將軍義昭だけが信長の敵に回ったのなら、信長にも打つ手はいろいろあったろう。彼の實力なら、彼を京から追放して新たな將軍を立てるか、あるいは幕府そのものを潰してもさして問題はなかった。

だが…。

今日、足利義昭という人の評価は低い。凶らずも最後の將軍となつてしまつたがゆえに、仕方ないと言えなくもないが、しかし、彼の能力は決して兄たる十三代將軍足利義輝や、初代將軍尊氏、三代將軍義満、六代將軍義教らに劣るものではなかった。いや、外交や謀略能力という点にのみ比重を置くなら、彼は歴代將軍最強と言ってもよい頭脳を持っていた。

義昭は確かに最後の將軍である。しかし、だからといって懦弱な將軍だと決めつけるのは尚早過ぎる。彼は決して懦弱ではない。もしも彼が懦弱な男であるなら、まず織田信長と敵対する道など歩ま

なかつたらう。信長の庇護下で無難な傀儡将軍に甘んじていたに違いない。しかし、彼はあくまでも信長に伍そうとし、幕府権力の復興に全力を注いだ。それが良かったのか悪かったのか、なんてことはこの際、横に置いておくとして、外交能力、謀略能力に非常に特化した男を敵に回すと言うのは、非常に厄介であると言わざるを得なかった。それでなくとも、今の信長は、厳しい状況に追い込まれているのである。その上、義昭は将軍だ。腐っても鯛である。

とかく王朝や幕府、あるいは各種政権の最後を担当した者は、極めて評価が低くなるものである。真正正銘、日本史上最後の将軍となった徳川慶喜とて、賛否両論あるかもしれないが、無能ではなかった。どこか彼の非常に勇氣ある決断及び行動のおかげで、日本国は欧米列強による植民地化を免れたともいえるのだ。彼は明治維新を成し遂げた陰の功労者といえよう。そのほか、紫禁城内にて首を括つて自害した明王朝最後の皇帝たる崇禎帝、フランス・ボナパルト朝最後の皇帝たるナポレオン三世ほか、不当に評価が低くなっている英雄は多い。

要するに、足利義昭を甘く見てはいけない。

信長包囲網という歴史用語がある。

一種の対織田大同盟とでも言うべき、大規模な諸侯連合である。加盟していたのは、時期にもよるが、武田信玄、上杉謙信、三好義継、松永久秀、三好三人衆、朝倉義景、浅井長政、本願寺顕如、毛利輝元ら堂々たる面子ばかりである。

この大同盟の主催者…、というよりも黒幕は、足利義昭その人である。彼は将軍としての権威と、各地に漲る反織田感情をフル活用し、これだけの大規模同盟を作り上げたのであった。まあ、将軍の権威を利用して各地の諸大名を動かすやり方は、彼の父たる十二代将軍足利義晴が始め、兄たる十三代将軍義輝が確立したものであるが、義昭はそれを応用し、かつ大規模化することに成功したのだっ

た。

ともかく…。

信長との決別を本格的に意識し始めた義昭は、元龜二年に入った頃から、各地の諸侯に使者を飛ばして、内々に織田討伐を打診するようになった。そして、そうした諸侯中、義昭が最も期待を寄せていたのが、甲斐の虎こと武田信玄であった。

武田信玄。

本名、武田晴信。信玄というのは出家した際につけた法名であり、幼名勝千代という。

父親は武田信虎と言い、武田氏発展の基礎を築いた猛将として知られているが、政治的才能はさしてなかったらしく、とりわけ家中、領民からの人望のなさは致命的であった。しかし戦術家としては天才的能力を持ち、甲斐に乱入した今川氏の部将福島正成率いる一万五千の大軍を、たった二千の兵で撃破したりしている。

ただ、武田氏というのは、どこまでいっても国人領主たちの盟主に過ぎず、強力な守護権力は発揮しづらい状況にあった。いくら信虎が武勇に秀でていようと、荒れ狂う戦国時代を生き残るには、そうした状況、体制からの脱皮、即ち戦国大名化は急務であった。そのため信虎は、非常に苛烈な改革政治を推進していくことになるのだが、理想はあっても具体的な政治能力に欠けていた彼は、強引に改革を押し進めるしか能がなく、当然、有力な領主たちの反感を買い、その結果として、有力国人たちの支援を得た長子晴信によって駿河に追放される破目となる。まあ、その晴信も、ちゃっかりと信虎の改革政治を受け継ぎ、それを成就させることにより大幅に国力を高めることに成功。ついには信濃、西上野、駿河に勢力を広げ、武田氏の最盛期を築き上げることになるのだが、追放後の信虎は数奇な運命を辿って、元龜二年当時、京都にあつて足利將軍家の庇護を受けていた。

それはともかく、世に常勝無敗の名将と称えられる武田信玄ではあるが、信濃攻略の過程では、手酷い大敗を喫したこともある。また越後の龍と称された上杉謙信や相模の虎こと北条氏康と激しく争っているが、決着はつかなかった（まあ、武田、上杉両氏は信濃国の覇権を巡り争っていたので、信濃を事実上支配下に置いた武田信玄の勝利といえなくもない。北条氏とはまさに文字通り五分五分の戦い）。

信玄はその治世において、上杉謙信率いる越後軍と並び、戦国最強と称えられた甲州軍団（俗に武田騎馬隊と言われるが、武田軍全体に占める騎馬隊の割合は、後北条氏以下であつたといわれている）を築き上げたが、しかし武田氏を最盛期に導いた彼の最大の能力は、その冷徹さにあつたといつても過言ではない。例えば、彼は武田氏の家督を相続するにあつて、実父信虎を追放しているし、さらに長らく同盟関係にあつた今川氏が衰退したと見るや、あつけなくこれを見限り、駿河に進攻。今川氏に止めを刺している。またこの際、今川氏討伐に反対した嫡男武田義信にも自害を強いている。

武田氏の領地は、元龜二年頃には、甲斐・信濃・駿河の三ヶ国に加えて、上野国の大半、飛騨や遠江の一部にまで広がり、武田の名は強国中の強国の代名詞のような形で、既に天下全土に轟くようになっていた。

義昭が武田信玄を頼つたのも、無理なきことであつた。圧倒的な勢力を誇る織田信長に対抗しうる唯一無二の存在。それが信玄入道なのである。

「信玄入道が動けば…」

義昭はにやりと笑う。彼が動けば、間違いなく天下は変わる。ただでさえ、前年の野田城・福島城合戦により、反織田勢力は大いに勢いづいており、これに武田信玄が加われば、信長の敗亡は決定的なものになるに違いなかった。

「しかし、織田殿は公方様にとって大の恩人のはず。その織田殿に刃を向けるような真似は慎まれたほうがよろしゅうございます」

そう言つて、主君の策動を諫めているのは、細川兵部大輔藤孝であつた。

「兵部。そちは何を寝ぼけたことを抜かしているのだ？ もしこのまま信長の力が強まれば、余は容易く奴の前に滅ぼされてしまうだろう。…あれは、今は亡き三好修理大夫よりも遙かに冷酷な男だ」  
それについては、明確に否定することが出来ない藤孝であつたが、しかし、だからこそという思いも彼にはある。

今は亡き足利義輝があのように惨き最期を遂げざるを得なかつたのは、義輝が異常なほど三好討伐に拘つたことが最大の理由であると、藤孝は考えていた。

「義輝様は修理大夫という人を見誤つたのだ」  
常々、彼はそう思っている。

何しろ、三好長慶は世に類なき名君と称えられていた男だけあつて、義輝が誠意を見せてさえいれば、あるいは將軍家を蔑ろにすることなく、幕府のため、將軍家のために働いてくれたかもしれないのだ。少なくとも三好家中にそれだけの反義輝感情を生むことはなかつただろう。まあ、藤孝とて、彼が將軍家に忠実な純粹なる佐幕派であつたとは思わないが、しかし実際、義輝がどれだけ長慶に刃を向けようと、彼は將軍家や幕府を滅ぼそうとはしなかつた。

確かに彼はその実力で幕政を壟断し、將軍家を蔑ろにしたかもしれない。が、しかし、逆に言えば、幕府など完全に無視し、あるいはそれを滅ぼしても別段問題はなかつたほどの権力を握つた実力者たる彼が、まがりなりにも幕政を壟断してくれたおかげで、幕府は中央権力としての存在感を保てたとも言えるのだ。即ち、形だけでも幕府を通して政治を行つてくれたことにより、幕府はその存在意義を失わずにすんだという理屈である。無論、そうすることが長慶

にとつても得策であつたのだろうが、結果論から見て、幕府にとつて三好長慶ほどの恩人はないといえるのだつた。しかしそれがわからなかつた義輝は、どこまでも三好を忌み嫌い、敵対行為をとり続けたがゆえに、長慶の死を受けて箍が外れた松永弾正、三好三人衆によつて殺されてしまった。

そのことを踏まえれば、不必要なまでに織田信長を刺激する義昭は、兄將軍と同じ末路を歩みかねない気がしてならなかつた。いや、義昭が殺されるだけならまだいい（よくはないが）。しかし義昭の身に万一のことがあつたとき、將軍職を継承するに足る資格を持つた人間はいないことが最大の問題であつた。義昭が死に、あるいは將軍職から追われ、そのとき將軍職を継承する人間がいなければ、それが意味するところはたつた一つである。言うまでもあるまい。幕府の滅亡だ。

義輝のときは、弟の周高や覚慶（義昭）、あるいは従兄弟の義栄がいたが、義輝も周高も義栄も死んだ今、義昭の跡を継げる人間は誰もいない。即ち、義昭に子が出来、その子が成長するまでの間、彼の身に万一のことがおきることは断じて許されないのだつた。

そのあたりも、義昭は全くわかつていない。將軍家の復興に力を置くばかり、幕府の存続を図らねばならぬという、將軍に課された大前提の使命を忘れてしまつていようだつた。

「武田を動かし、信長を潰す！　そして將軍家の力を復活させるのだ」

父義晴、兄義輝が抱きし夢を、なんとしても自分の代で実現させて見せるのだと、やる気に燃え上がつていゝ義昭は、それゆえに広い視野で物事を見る力に欠けていた。それは義輝にも言えた事だつたが、義昭は特に顕著であるように思われてならなかつた。即ち、外交・謀略の才は異常に長けているのだが、肝心の政治的才能が欠けている。軍師、参謀であるなら、それもよいだろう。だが義昭は



幕府の頂点に立つ將軍なのだ。彼がこの有様では、幕府も長くあるまいと、一人嘆息する細川藤孝であった。

「兵部！ その折はお主にも活躍してもらうぞ。そうさな。もし余の時代が来た日には、和泉守護に任じて、和泉細川家を復活させてやるぞ」

なんて言いながら、意味のない皮算用をしたり顔で弾いている義昭を眺めながら、藤孝の心は暗澹たるものになった。

応仁の乱に端を發し、明応の政変（室町幕府第十代將軍足利義材が管領細川政元により追放された事件）及び北条早雲（当時は伊勢新九郎長氏といった）による伊豆進攻により激化した戦国乱世は、主役の顔を度々と変えながら、しかし一向に収まる気配もなく、引き続き日本史の中にでんと居座り続けていた。

応仁の乱が勃發したのは応仁元年（一四六七年）のことであったから、都合百年間近くこの国は乱世の真つただ中にあるということになる。これほど長い間、戦国の荒波にもまれ続けてきた民衆たちにとつては、戦乱状態こそが通常、常識、普通であつて、太平だの平和な世などというものは、一種の夢物語、とるにたらぬ戯言に過ぎないと思つようになっていた。

兎にも角にも、世の中は果てしない乱世のただ中であつて彷徨い続けていた。人々の中に、諦めにも似た感情が生まれてくるのも、無理なきことであつた。

それにしても…。

百年余に及んだ長き戦乱の中で、様々な英雄が現れては消えていった。

足利義尚よしひさ、足利義材（義植）、足利義澄、足利義晴、足利義輝、足利義栄、山名持豊（宗全）、細川勝元、細川政元、細川澄之、細川澄元、細川高国、細川晴元、細川氏綱、三好之長、三好元長、三好長慶、三好義興、三好義賢、安宅冬康、十河一存、内藤長頼（宗勝）、三好政長（宗三）、木沢長政、遊佐長教、六角定頼…。

そのどれも、かつては大いに活躍して、世間の注目を大いに集めていた英雄たちであるが、今となつては遠き過去の人となりつつある。彼らの浮沈、興亡の歴史というのも、戦国を語る上で欠かせぬ

ロマンなのであるが、しかし栄枯盛衰、盛者必衰とはよく言ったものであった。例えば、戦国初期に絶大な権勢を誇った管領細川氏などというものは、時代が下るとともに衰退に衰退を重ねて、今や大名家ですらなくなっていた。あるいは畠山氏、斯波氏、山名氏、赤松氏、京極氏、六角氏、一色氏、土岐氏、今川氏、大内氏…。これらは全て、室町期及び戦国初期に名門雄藩と称えられていた家々であるが、今や見る影もなく衰弱しきっていた。中には大内氏や今川氏、京極氏、土岐氏、六角氏などのように完膚なきまでに叩き潰された家もあるぐらいで、彼らの衰退ぶりをみると、実力本位の戦国という時代の冷たさを嫌というほど感じる事ができる。

逆に、この乱世を利用して勃興してきた新勢力も多々あり、例えば中央政界に絶大な影響力を誇るようになった織田信長や三好氏などは典型例といえよう。他に地方勢力の盟主として存在感を示している北条氏や毛利氏、上杉氏（長尾氏）、徳川氏なども新興勢力の代表的存在であった。そして…。

新興勢力の代表格ともいえる織田氏と三好氏による近畿地方の覇権争いは、引き続き激化の一途をたどっていた。

元龜二年（一五七一年）五月。

形だけは今も昔も変わることなく三好宗家の御大将である河内国若江城城主三好左京大夫義継は、このところ悶々とした日々を過ごしていた。

「酒を持って」

彼はそばに控える近臣にそう命じると、ため息交じりに、手元に無造作に広げられた書状を思い切り蹴り飛ばした。

「くそッ！」

今年で晴れて二十歳を迎える彼であるが、最近は何をやってもさっぱり楽しくなかった。全てが全て気に入らない。とりあえず彼は、

近臣が持つてきた酒をぐびぐびと飲み干すと、

「まずいッ！」

と言つて、空になった酒杯を近臣めがけて放り投げた。

こうなると、かつての天下人も形無しであつた。義継はごろりとその場に寝転がると、落ち着きなく、ごろごろとあちこちを動き回つた。

「殿、如何なされました？」

そこに家老の池田丹後守がやつてきて、そんな主君をぎろりと睨みつけた。

「フン。如何なされました、ではないわ！ そちも家老なら、少しはわが苦しみを察しろ」

「苦しみ、にございますか？」

きよとんとした顔をして、わざとらしく首を傾げる池田丹後に、義継はぷいっとそっぽを向いた。

「その書状、日向殿からのものですか」

丹後は、おもむろに書状を手に取ると、ニタニタとほほ笑みながら、まじまじとそれを眺めた。

「なるほど。日向殿は、殿に内応を勧めておられるわけですか」

「そうです！」

義継はすつくと立ち上がり、そして腹立たしそつに唸りながら、庭先のほうへと歩いていった。

「今年の戦以来、日向殿らの勢力は強大化する一方にございますからな。悪い話とは思われませぬが。実際、これ以上織田殿に肩入れする義理が、殿におありとは思えませぬ」

「……」

「織田殿の周りは敵ばかりにございましょう。見渡せば、摂津に日向殿ら三人衆、阿波には三好阿波守殿（長治）、讃岐には十河民部殿（存保）、淡路には安宅信康殿が引き続き健在。その上、顕如上人率いる本願寺門徒勢もあり、西から迫りくる脅威だけでも相当なもの。そこに加えて越前の朝倉左衛門督殿（朝倉義景）、北近江の

浅井備前守殿（浅井長政）らも反織田の旗幟を鮮明にしております。西と北、両面より攻勢に晒されている織田殿の不利は誰の目にも明らかにございましょう。さらに付け加えるなら、中央、即ち都においても、比叡山延暦寺は反織田の方針をすでに固めておりますし、足利將軍家も織田殿とは不仲の御様子」

理路整然と説明しだせば、確かに織田信長を取り巻く状況は最悪と言つてよかつた。その上、將軍足利義昭の策動により、このところ反織田姿勢を強く打ちだすようになった武田信玄という最強の敵も抱えている。信長の味方といえるのは、東海に二ヶ国を領有する徳川家康のみであり、その家康とて、武田の圧倒的軍力の前には、象の前の蟻に等しい。事実、四月十九日、武田信玄とその息子たる勝頼の率いる武田軍団は、三河に攻め入り、徳川方の部將鈴木重直が守る足助城を攻め落としている。

武田が本格的に動き出せば…。

まず間違いなく天下の流れが変わる。少なくとも織田信長の滅亡は決定的となる。まあ、そんな無敵な武田信玄の野望を妨げる数少ない障壁といえるのは、北国最強の軍と国力を誇る『越後の龍』上杉謙信と、関東地方の覇権掌握に大手をかつつある東国の最強国たる北条氏政の存在ぐらいであろうが、上杉は、信玄入道の依頼に応じた本願寺顕如によつて引き起こされた一向一揆の討伐に苦慮しており、また北条氏政にしても、信玄の外交戦略により反北条親武田の姿勢を顕著に示し始めた常陸の佐竹氏、房総半島の里見氏らを警戒せねばならず、やはり武田軍の動きを阻止できるだけの余裕はどこにもなかったのである。その上、北条氏の場合、当主氏政の実父にして、実質的な最高権力者でもあった北条氏康がこのところ病に臥せつて、正常な判断ができない状態に追い込まれており、そのことを考えても、彼らに積極的な軍事行動ができるとは思えなかつた。

即ち…。

畿内地方における反織田連合の勢威が強大化している以上、用意

周到かつ綿密な外交戦略により、周辺強国の手足を縛ってきた武田信玄が、その総力を挙げた上洛作戦に乗り出してくるのは、まさしく時間の問題なのであった。

「殿。ここは冷静に御判断なされたほうがよろこびますぞ。少なくとも、我らには織田殿のために戦い続けねばならぬ義理などないのです」

そこまで言つて、池田丹後守は義継の下から立ち去った。

義継は、しばらく一人になって考えてみた。確かに、滅びゆく織田にいつまでも従う義理はない。恩義だつて受けた覚えはない。だからといって、ここで織田を見限り、おめおめと三好方に帰参することが許されるのだろうか。

いや…。

義継はひとり呟く。許される、許されないではない。自分には、今は亡き三好義興が遺した忘れ形見たる孫次郎義資に、今ある地位をそっくりそのまま引き渡すという責務がある。そのためであつたら、表裏定かならぬ卑怯者と罵られようと、ここは恥を忍んで三好方に帰参するしかない。このまま織田家と心中するようなことになれば、現時点で辛うじて保っているにすぎない北河内国の領地と若江城までも失うことになるのだ。

ならば、選択肢はたった一つしかない。

「…やむをえぬ、か」

義継はふうと静かに息を吸い込み、そしてハアと吐いた。

はたしてこの判断が吉と出るのか凶と出るのか。

それは誰にもわからない。しかし吉と出る。そう思い込むよりほかに仕方がなかった。

元龜二年（一五七一年）五月中ごろ。

三好左京大夫義継は、摂津越水城に陣取る三好長逸らの下に使者を送って、いざというとき彼らに味方する意向を正式に通達した。そして、それから間もない頃、大和国主たる松永弾正少弼久秀もまた、織田を離れ、三好につく方針を鮮明に打ち出したのだった。

かくして、信長はその人生における最悪ともいえる極端な窮地に陥った。西の北に、東に、そして膝元に…。四方八方、強力な敵を抱え込んでしまったこの当時の彼の心境とは如何ほどのものだったろう。現代に生きる我々としては、推測するよりほかに仕方がないが、彼なりに不安ではあつただろう。

とにかく人間というものは、運のないときはとことん運がないもので、伊勢国は長島に陣取る一向一揆軍を討伐すべく、信長が差し向けた柴田勝家以下の軍勢が完膚なきまでに大敗。重臣の氏家直元（西美濃三人衆の一人たる氏家ト全のこと）が戦死するなど、手痛い打撃を被っている。

ちなみに…。

元龜二年という年は、世代交代が進展したという意味において、戦国史上、案外見過ごせない重要な年であつた。

即ち。

六月十四日には、一代にして中国地方に確固たる覇権を築き上げた英雄毛利元就が没している。また同じ六月二十三日には、薩摩国主であつた島津貴久が病没。貴久は島津氏の戦国大名化を強力に推進し、次の義久の代における島津氏隆昌の土台を築き上げた名君であつた。以後、毛利氏は幼君輝元（元就の嫡孫）を中心に、輝元の叔父たる吉川元春、小早川隆景が引っ張っていく新体制が確立し、島津氏では、いよいよ戦国史上に名高き島津四兄弟、即ち長兄島津義久を筆頭に、次男義弘、三男歳久、四男家久らが本格的に登場し、島津氏を九州地方の覇者へと飛躍させていくことになるのだった。

そして、十月三日には、後北条氏三代目当主たる北条氏康が病没

した。初代早雲が築き、二代氏綱が固めた北条家を最盛期に導いた、戦国屈指の大名君。巧みな政治手腕により、統治が難しいとされた関東地方を見事に束ねた名政治家であり、かつ、上杉謙信や武田信玄、今川義元といった英雄たちを相手に一步も引かずに立ち向かい、互角以上の戦いを演じた名将でもあった。

その氏康が、ついに没した。享年は五十七歳と伝えられている。

以後、北条氏は当主氏政と、その子たる氏直を中核に、氏政の実弟たる氏照うじてる、氏邦うじくに、氏規うじのりの三人（長兄氏政を加えて、北条四兄弟と称される）が国政運営において中心的役割を果たす新体制へと移行することになる。



【落日編】第150章 河内騒乱

元龜三年（一五七二年）四月。

河内国若江城主の三好義継は、南河内半国を領有する畠山昭高を滅ぼすべく、総勢六千の大軍を従えて進軍を開始した。これに対し、畠山昭高が動員した兵力は三千余であり、義継軍の優勢は誰の目にも明らかな状況であった。

「必ずや、河内の統一を実現してみせるぞ」

義継の士気は高い。養父長慶より受け継ぎし南蛮鎧を身につけながら、

「くっくくく」

と、これみよがしに高笑いしている。

「ですが、ゆめゆめ御油断なさりませぬよう」

老臣の池田丹後の諫言に、

「わかつておる」

ムツとしたような顔をして答える義継であった。

畠山領内に進撃した三好義継軍は、大和国主松永弾正からの援軍部隊を合わせつつ、畠山軍をじわじわと圧迫していく作戦を取った。義継軍は六千にも達する。弾正が差し向けてきた大和軍は二千余騎であったから、総勢八千だ。対する畠山軍は三千足らず。兵力のみで考えるなら、明らかに義継軍の優勢であるといえよう。

かくして義継軍は各所で畠山軍部隊を蹴散らし、ついに畠山昭高を、その居城たる高屋城に追い詰めたのだった。

「なに？」

こうした戦況を受け、畠山方も浮足立ったのだらう。義継の下に

もたらされたのは、思いもよらぬ朗報であった。

「遊佐が？」

義継は不思議そうに首を傾げ、報告に来た池田丹後をぎろりと睨みつけた。

「はッ！ 遊佐信教のぶのりの陣所より先ほど矢文がもたらされ、そこに……」

と言つて、彼が差し出したのは一枚の書状であった。義継はおもむろにそれを受け取ると、

「ふーむ」

と、唸つた。

「偽文ではあるまいな？」

遊佐信教といえば、父親譲りの陰謀家として、つとに名高かつた。それゆえに、この書状にもある程度の信憑性があると言えたが、しかし謀略である可能性も否定できない。万一、謀略であつたりしたら、義継軍の優勢は一朝の下に潰えることにもなりかねず、ゆえにこそ義継は警戒の色を隠そうともしないのだった。

「偽、とは思えませぬが、ただその可能性も無きにしも非ず。されば早速、遊佐の陣に文を送り、何らかの証を示すよう諭します」

池田丹後はそう頷くと、素早くそばに控えていた部将たちに逐一、詳細な指示を下していった。

遊佐信教は、今は亡き遊佐河内守長教の嫡男であつた。実父が帰依していた禅僧によつて暗殺された後、家督を相続し、今では安見宗房と並んで畠山家に重きをなす重臣中の重臣として名を馳せていた。

が……。

父譲りの野心家であつた彼は、自らも父時代と同等の権勢を掌握することを夢見て、ついに主君畠山高政を追放、その弟である畠山昭高を新守護に擁立するという荒技に打つて出たのだった。さながら、かつて畠山植長を追放し、彼の実弟であつた畠山政国を新守護

に擁立して全権を掌握した実父長教を彷彿とさせる行為ではあった。まあ、畠山高政ほど他人の傀儡に収まるのが似合わぬ男もおりまい。何しろ名門の貴公子に生まれたとは思えぬほどの胆力を持ち、この激動の乱世を生き抜いてきた人なのだ。例えば、当時圧倒的な勢威を持つて天下に君臨していた三好氏とどこまでも対立し、久米田の合戦においては三好方の重鎮三好実休を討ち取るという大戦果をあげている。教興寺の合戦において惜敗したものの、以後数年間の雌伏生活を経て、信長上洛という絶好の機会を見逃すことなく彼に取り入り、見事畠山氏の復活を実現した。

そんな人間が容易く他人の傀儡に屈するはずもない。というよりも、傀儡に甘んじるほど、彼は大人しい性格をしていなかった。何事も自分で決めなければ気が済まない独裁者気質の男なのである。それゆえ、畠山家の実権掌握を目論む遊佐信教は、彼を追放し、昭高を新守護に擁立したというわけであった。

しかし！

畠山昭高も長く忍耐を重ねた苦勞人であった。そんな彼が、いつまでも信教の傀儡に甘んじるわけもなく、実際、彼は安見宗房と結びついて独自の政治を行うようになっていた。織田信長の娘を室に娶るなど、後ろ盾である織田氏との関係を深めたのも、自らの君主権力の絶対性を家臣団に見せつけるためであった。

かくして遊佐信教の計算は外れた。実権掌握を目論見、そのために行動していたはずの彼は、いつしか昭高政権下における非主流派の立場に追いやられていたのだった。

なんとなく、全てが上手くいかない。

信教は不満である。畠山高政を追放し、昭高を擁立した。これ全てが上手くいくはずだったのだ。畠山家の実権は己がものとなり、やがては畠山家そのものに乗っ取って、河内一国は自分の領地とする。そんな野望を密かに抱いてきた信教の計画は、昭高を擁立した

後から、次第に崩れていった。

なぜ？

信教にはわからない。

実父長教と同じ手法をとったはず。長教は暗殺されるまでの間、ほとんど畠山家の君主と違って差し支えないほどの権勢を握ったではないか。それなのに、なぜ自分にはできないのか。

一言で言ってしまうえば、同じ謀略家でも、信教は肝心なところで詰めが甘いのだった。例えば、彼は自分と並ぶ重臣筆頭の安見宗房を生かしている。もしも彼が完全な実権掌握を目論むなら、自分の対抗馬となりうる安見宗房は確実に粛清しておかなければならない相手である。それを生かしておいた時点で、彼の器も知れたものと言わざるを得まい。

遊佐長教の場合であれば、自分と双璧をなしていた筆頭重臣の木沢長政を着実に追い詰めて、そして滅ぼしている。しかも木沢を父の仇と憎んでいた三好長慶や、彼の離反に苛立ちを強めていた細川晴元や畠山植長ら、当時の実力者を上手く利用し、自分の手を余り汚すことなく粛清することに成功したのだ。

遊佐信教には、父に劣らぬ謀才がある。しかし、先を見通し、その上で綿密に計画を練る慎重さが足りなかった。結果として、彼は行き当たりばつたりの行動をとってしまい、行動に結果が伴わぬ事態を招いているのだった。

そして今回も…。

彼は苦しい政治状況の打破を目論んで、三好義継への内応を画策した。即ち、義継軍をバックに…、というより、義継と結びつくことで畠山家を信長包囲網に加盟させ、その上で、反織田陣営全体の勢力を背景に畠山家の実権掌握を目論んだというわけである。

だが…。

そんなせこい策が通じるはずもなく、とりわけ遊佐長教に、彼こ

そはと認められて取り立てられた安見宗房の目を騙せるものではなかつた。

かくして。

遊佐信教は安見宗房の厳しき監視の目が光る中、やむなく内応策を断念した。下手に行動を起こせば、その瞬間、主君昭高の許可を受けた安見勢により信教自身が滅ぼされかねなかつたからである。

「やはり、か」

初めから期待などしていなかつた義継は、さして気にする風もなく、淡々と頷いていた。

「されど、こうなると厄介ですな」

家老の一人、野間長前がそう言った。

「何が厄介だというのだ？」

義継がぎろりと睨みつけると、

「たかが八千足らずの兵で、あの高屋城を攻め落とせると、本気で  
お思いか？」

と、野間は答えた。

「落とせんのか？」

真面目顔で義継が尋ねる。

「落とせませぬ」

野間のはつきりと答えた。

池田丹後守教正や多羅尾右近など、他の家老たちも同様に頷いている。高屋城攻略は難しい。彼らの顔は総じてそうばやいていた。

「高屋城は、まがりなりにも代々、三管領家の一つと崇められてきた名門大藩畠山家が居城としてきた城にございます。その上、笑岩入道様が入城なされてからも、度々増築を重ねております。この城を攻め落とすには、少なくとも籠城兵の十倍はいります」

「じゆ、十倍……」

敵の兵力は三千だから、十倍なら三万だ。しかし、義継の手元に

は八千の兵しかない。なるほど。確かに兵力不足は致命的だ。

「だが、何か打つ手はないのか？」

義継が尋ねると、

「されば、その策が遊佐殿の内応だったわけで……」

申し訳なさそうに答える池田丹後であった。

「なら、その方らはどうするべきと考える？」

「……和議しかありません」

野間長前がそう言った。

「わ、和議だと？」

激昂する義継を、池田丹後らが必死になって宥める。それしか、もはや手がないのだ。まあ、三好三人衆や松永弾正にさらなる増援部隊の派遣を要請するという手もないわけではなかったが、少なくとも三人衆の力を借りる気は更々ない義継の感情を思えば、彼らの援軍を求める、とは口が裂けても言えなかった。松永弾正はというと、迫りくる織田軍や、織田軍に結びついた筒井順慶ら大和国内の反松永勢力と対峙せねばならず、これ以上の援軍要請は難しかった。「和議を結び、今はひとまず引くのです。されど、畠山家の土台はほとんど崩壊寸前。そのときになって再び攻め込めばよいのです」

野間長前がそう言うのと、  
「そうです。時が来るのを待ちましょう。焦りは禁物にございますぞ」

と、続ける多羅尾右近であった。

かくして両軍の間に和議が成立した。

四月末ごろのことであった。

畠山氏が、その領地の一部を義継に割譲することを条件に、義継は兵を引き、若江城に引き上げたのだった。また、義継は条件の一つに、遊佐信教を罰しないこと、という条文を付け加えることを忘れなかった。

とりあえず、時限爆弾は仕掛けた。後はいつ破裂するか。そのときこそ、畠山氏を滅ぼして河内一国を統一する最大の機会となるのだ。

彼はニタニタ笑いながら帰路についた。途中、松永弾正より差し向けられていた援軍二千を率いる林若狭守に謝意を述べたり、あるいは畠山氏から割譲された領地の視察に赴いたり、それなりに忙しい時を過ごした義継であった。

## 【落日編】第151章 信玄の死

元龜三年（一五七二年）という年は、織田信長が、その生涯において味わった最大級の危機であることに疑いを差し挟む余地はないだろう。西に三好・本願寺、北に朝倉・浅井、南に松永及び長島一向一揆、中央には足利將軍家、そして東に武田信玄である。その上最近では西の大国たる毛利輝元との関係も良くない。信長が毛利氏と敵対する尼子の残党山中鹿之助らを庇護したことが、両家の関係が悪化した直接的要因であったが、ただでさえ敵ばかりの信長にとって、毛利氏までもが敵方につくとなれば、果てしなく痛かった。

まさに四方八方敵ばかり。特に、元龜二年（一五七一年）九月十二日に彼が断行した比叡山焼討事件は、これら反信長勢力の結束を強化させるといふ皮肉な結果を生みだした。これにより、とりあえず反信長勢力の一角を占めてきた延暦寺は崩壊したものの、本願寺などは、彼を『仏敵』と罵り、攻勢を強めるようになった

信長にとって辛いのは、反信長連合に加わる勢力のいずれも、独力でもある程度彼と互角に対決しうる実力を持った雄藩であるといふことだった。とりわけ、これら反信長連合の筆頭格に位置している武田信玄は、紛れもなく、その独力で信長と互角以上に戦いうる実力を保持していた。

一言でいえば、信長は窮地に立たされていた。

それでも信長は必死の打開策を試みている。

例えば、同年七月中ごろ、筆頭重臣の佐久間信盛が、大軍を率いて摂津国に乱入し、本願寺門徒勢の拠点となっていた金森城と三宅城を攻略。三好・本願寺連合の地盤となっていた摂津国に大きな楔を打ち込むことに成功している。

さらに九月。



反信長連合の黒幕であり影の盟主たる將軍足利義昭の行動を制約すべく、信長は新たに『異見十七ヶ条』と呼ばれる代物を突き付けていた。これには、義昭がこれまでに犯してきた様々な失政を、例を挙げ連ねて糾弾し、それゆえに今後は自分の許可なく勝手な政治を行ってはならない、ということが記されていたのだった。即ち、信長が先に示した『殿中御掟』（一五六九年）や『五ヶ条条書』（一五七〇年）よりもさらに手厳しいものであった。

これをもって信長と義昭の関係は、完全に決裂するのだが、しかし信長はそれに先立ち、義昭の重臣であった細川藤孝を事実上、味方に取り込むなど、將軍家の弱体化策を怠りなく推進していた。

しかし。

同年十月三日のことである。

「し、信玄入道が動いたと！」

岐阜城本丸御殿の一室。

信長の怒声が辺り構わず響き渡った。

「はッ！」

答えるのは、羽柴秀吉。今や織田家中でも、佐久間信盛、柴田勝家、丹羽長秀らに次ぎ、明智光秀、滝川一益らと並ぶ位置にいる重臣中の重臣であった。元は木下秀吉と言ったが、半年ほど前に、自ら信長に願い出て『羽柴』に姓を改めていた。羽柴の由来は、織田家宿老に列する柴田勝家と丹羽長秀から取ったとされ、この辺りにも、秀吉流人心掌握術が垣間見えていた。実際、これ以後、とりわけ丹羽長秀は秀吉の強力な支持者となり、長秀が没するまで、両者の同盟関係は維持されることになるのだった（逆に柴田勝家とはライバル関係となるが）。

「今のところ、武田の重臣山県昌景を総大将とした五千騎程度の先

発隊のようにございますが、武田の本軍は総勢三万とも三万五千とも言われております。兎にも角にも武田軍は遠江に進攻し、三河殿の諸城を攻撃しているとのことでございます」

秀吉の答えに、信長はぐぬぬと唸った。

「入道めは本気だな」

信長はムツとした表情のままに腰を下ろすと、その瞬間、秀吉をぎろりと睨みつけた。

「されば、いずれ三河殿より急使が参り、援軍を求められましょう。上様、如何なさりますか？」

主君の考えを素早く先取りし、先回りして答えるのは秀吉の常套手段であった。そのたび、小賢しいと怒られるが、結局、そういう秀吉の頭の良さを買っている信長は、引き続き彼を重用していくことになるのだった。

「黙れッ！」

案の定、信長は癩癩の虫を爆発させた。

実際、信長には援軍に出向けるような余裕はない。武田が動いたとなれば、四方八方を取り囲む敵国は俄然、攻勢に打って出てくるだろう。朝倉、浅井、三好、松永、本願寺、その上、足利將軍家だ。これらにも十分な抑えの兵を配備しなければならぬ以上、信長の手元に残る軍勢などたかが知れていた。

「猿ッ！ 夕庵せきあん（武井夕庵。信長の祐筆）を呼べ。良いことを思いついた！」

信長は怒鳴る。しかし笑顔だ。怒っているのか笑っているのか、いまいちわからぬ主君であるが、主命が下った以上、秀吉は何も言わず従うだけだった。

十一月十四日。

武田信玄の重臣秋山信友が美濃に進攻。岩村城を攻略する。

これは、言うまでもあるまいが、信玄による陽動作戦の一つだっ

た。即ち、信長の本国たる美濃を襲わせることで織田軍をけん制し、徳川への援軍をできうる限り少なくするという目的の下に行われた作戦なのである。それゆえ、秋山信友も、岩村城を攻略しても、それより西へ進撃しようとはしなかった。

かくして着々、信玄の西上作戦は進行しているわけだが、こうした状況に対し、信長が何一つ手を打たなかったわけではない。

即ち、十一月二十日。

この日、織田信長と上杉謙信の間に同盟が成立した。お互い、武田信玄を共通の敵として抱えており、信長としては、上杉軍を動かすことで、武田の背後を脅かそうとしたのであった。とはいえ、その上杉も、信玄とその義弟である本願寺顕如によって巻き起こされた一向一揆の討伐に苦慮しており、武田攻めといっても、そう簡単にできる状態ではなかった。

十二月。

この頃、いよいよ武田軍主力が動き始めた。

総勢二万三千。無論、これが全軍ではない。先遣隊として派遣してあった山県昌景以下五千の兵は三河に入って、武田軍主力の到着を待っているし、秋山信友に預けた美濃攻撃隊は五千に達し、これは今も岩村城にあつて織田軍に備えている。これら全てをひっくりめた武田の全軍は三万三千であった。

とにかく、武田軍主力は二万三千である。これに、北条氏康の死後、武田との同盟に舵を切った北条氏政の差し向けた援軍二千を加えて、総勢二万五千。それだけの大軍が一挙に遠江に入り、徳川軍を圧迫したのだった。

元龜三年（一五七二年）十二月二十二日。

武田軍二万五千が三方ヶ原に布陣。これに対し、徳川家康は総勢

一万一千の軍勢を率いて迎撃。ちなみに徳川軍一万一千のうち、三千騎は佐久間信盛、滝川一益、平手汎秀、林秀貞らが率いる織田軍であり、純粹な徳川軍は八千騎であった。

とりあえず武田、徳川両軍が集結したところで、合戦は始まった。これが史上に名高き、三方ヶ原の合戦である。

合戦は当初、死に物狂いの奮戦を示した徳川軍が優勢であった。家康自ら戦場に立つて奮戦したといわれるほどの熾烈な激戦となったが、合戦中盤、信玄の嫡男である武田勝頼の軍勢が、手薄になった家康本陣に猛攻を仕掛けたことで、形勢は逆転。以後は、数に勝る武田軍がじりじりと徳川軍を圧倒し、そしてついに壊滅したのだった。

かくして武田軍の圧勝に終わった三方ヶ原の合戦は、信玄にとっては、期せずしてその生涯最期の合戦となり、また家康にとつてはその生涯で唯一の敗戦となった（彼自身が直接指揮を執った戦いの中では、三方ヶ原が唯一の敗戦であるが、彼が直接指揮をしていない戦では、徳川軍は何度か敗北している。例えば、真田氏との間で繰り広げられた二度に及ぶ上田合戦が典型。また彼が指揮を執った戦いでも、敗北こそしていないが、敗北寸前まで追い詰められたことがある。例として大坂夏の陣の際に起きた天王寺・岡山合戦。この際、家康は大坂方の真田幸村に追い詰められ、一度は自害を決意したといわれる）。

三方ヶ原に圧勝した武田軍は、さらに進軍を重ね、元龜四年（一五七三年）二月には三河の野田城を攻略している。一方、敗北した家康は、居城である浜松城に逃げ帰った後は（この際、武田軍の追撃を振り切るために家康が使ったとされるのが空城の計）、ほとんど武田軍の動きを傍観するより他に打つ手がなく、まさに絶体絶命の窮地に追い込まれることになった。

しかし、野田城攻略戦の際、偶然か、あるいは故意なのか、現代

に生きる我々にとっては確かめようもないが、兎にも角にも信玄入道の体に流れ弾が直撃。即死は避けたものの、重傷であることに変わりはなく、以後信玄は病に倒れることが多くなったのであった。

そして四月十二日。

野田城攻略戦の際に負った傷から発症した病は、ついに治ることなく、かくして戦国を代表する大英雄、武田信玄は戦陣の中に病没したのだった。享年は五十三という。

信玄の死。

一 昨年には毛利元就、島津貴久、北条氏康らが相次いで没しており、またここに武田信玄までも死したことで、我々が今現在、こうと信じる華々しい戦国時代を作り上げてきた主役たちは、上杉謙信、松永久秀、大友宗麟ら数人を残して、ほとんどが死に絶えたことになった。

【落日編】第152章 三好長逸の憂鬱

「な、なに…」

三好日向守長逸は、思いもよらぬ凶報にがつくりと肩を落として、そのまま力なく崩れ落ちた。

「こ、これは誠なのか？」

従四位下日向守。三好三人衆筆頭。反信長連合における最高首脳の一人。

元龜の世の中を代表する戦国武将は、越水城の一角で、青ざめていた。

「間違いありません。武田軍は既に全面撤退を始めております」

三好政康の言葉に、三好長逸は思わず目を閉じ、眉間に皺を寄せながら、静かに「そうか」とだけ言った。

武田撤退！

長逸とてバカではない。それが意味するところは十二分にわかっている。

「なぜ武田が撤退したのか、詳細はわからんのか？」

「…今のところ不明。ただ、噂によれば、信玄入道の身の上に何か起きたという話です」

「何か？」

政康は答えない。無言。それが答えなのだろう。長逸とて鈍感ではないのだ。

何かあった、というからには死んだと考えるのが妥当だ。死んだ。

武田信玄が、死んだ。殺しても死にそうもなかった俗物坊主が、こんな肝心な時に死んだというのか？ そんな、バカな…。

長逸は柄にもなく頭を抱え込んで、呆然とため息を吐いた。これから、自分たちはどうなるのだ？ 武田という強力な後ろ盾を失った今、織田信長が反転攻勢に打って出てくるのは必至だ。

「立ち向かうより他に仕方がありますまい」

政康は淡々と答えた。

「下野殿は勝てると思うか？」

長逸が尋ねると、

「勝てまする」

政康はきつぱりと答えた。

元龜四年（一五七三年）。

四月十二日に武田信玄が病没。このことは極秘事項とされ、武田氏内部でも、跡取りの勝頼以下主要幹部にしか知らされていなかったのだが、まあ、人の口に戸は立てられないもので、根も葉もない噂という形で、信玄の死は着実に人々の知るところとなっていたのだった。

何はともかく、武田軍は信玄の死（公式には病氣）により撤退を余儀なくされ、武田勝頼指揮の下、肅々と甲斐国へと引き上げていった。これにより、圧倒的な武田軍の脅威の前に、ほとんど風前の灯同然の状態に追い込まれていた徳川家康は息を吹き返し、武田軍により奪われていた三河や遠江の大半を回復することに成功したのだった。

武田撤退！

三好長逸は未だに信じられなかった。というより、信じたくなかったというべきだろう。越水城内を行ったり来たり、落ち着きなく動き回りながら、これからどうすべきか、いや、どうなるのか、必死になって考えていた。

武田抜き反信長連合。

まあ、もしも連合勢力が一致団結して織田軍に立ち向かえるというなら、十分勝ち目はある。長逸とて、それほど反信長連合という

ものを過小評価はしていない。連合勢力内では、武田に次ぐ国力を誇っていると目されている朝倉義景は、先の姉川の合戦をきっかけに衰退の道を歩みつつあるが、それでも五代に渡り、富国越前を支配してきた朝倉家の力は依然として強大だ。確かに単独で織田に立ち向かうには厳しいものがあるが、しかしある程度張り合うことはできるだろう。それに、長年朝倉家を苦しめてきた一向一揆とも和解し、それどころか対織田という名の下に共同戦線を張るまでになったから、彼の背後に憂いはない。

その朝倉と強固な同盟を結んでいる浅井長政は、国力の面で少し弱体だが、しかし彼自身は新進気鋭の名将で、彼の配下たる浅井勢は精鋭揃いとして天下に名高い。とりわけ、姉川の合戦において、圧倒的に数に勝る織田軍を圧倒した実績は、今でも語り草になっているほどだ。

本願寺は言うまでもないだろう。特別、これといった領地を支配しているわけではない（加賀は別）が、全国津々浦々、あちこちに膨大な門徒を持ち、しかも彼らの結束はやたらと堅い。その上、本願寺上層部の意向に忠実ときている。潜在的な実力という点で見ると、反信長連合内で彼らが一番力を持っているようにも思われた。実際、顕如の扇動により、長島では加賀一向一揆に勝るとも劣らぬ強烈な大反乱が発生し、伊勢国を支配する織田軍を常に苦しめてきた。他にも、越中で発生した一向一揆は、同国を勢力下に置いていた上杉謙信相手に善戦し、武田軍と並んで戦国最強と称えられている上杉軍を越中に縛り付けていた。また随分昔の話になるが、三河で発生した一向一揆は、徳川家康（当時は松平家康といった）を大いに苦しめ、一歩間違えば滅亡していたかもしれないほどの窮地に追いやっている（結局、家康が勝利し、これにより三河国は徳川家により統一される）。

松永弾正久秀は大和一国を束ねているだけでなく、戦国時代中期から現在に至るまで、一貫して激動の乱世に身を委ね、そこから大名にまでのし上がった立志伝中の人だ。国力面では、織田や武田に



は比べるまでもなく弱体だが、しかし、その経歴、経験から醸し出される梟雄のイメージは、今も相対する人間を圧倒するに十分な威力を持っていた。

三好義継は若いが、それでもかつての天下人。今もなお三好一門の名目的総帥として、畿内全土に隠然たる影響力を持っている。かくいう長逸を筆頭にした三人衆も、義継を名目的総大将に崇める三好勢力の実質的指導者として、畿内から四国にかけて絶対的権勢を誇っていた。

そのほか、足利義昭は將軍として、形だけではあるが、天下を支配する権限を有しているし、毛利輝元は中国地方の覇者だ。これら諸大名が完全に一致団結することができたなら……。織田信長など敵ではない。

要するに、反信長連合が一致団結して織田に立ち向かうことができたなら、武田がいようがいまいが、信長の不利な情勢に変化はないのだ。

しかし……。

「司令塔がいませんな」

岩成友通が簡潔明瞭に答えると、長逸は否定せず、ただ、「そうだ」と頷いた。

そう。司令塔がない。

盟主たる足利義昭には、権威はあっても力がない。武田信玄が大軍を率いて乗り込んできたら、問答無用で彼が司令塔となってくれたというのに……。甲斐源氏嫡流武田氏当主であるから、家柄に関しても申し分なく、また一代で甲斐一国から、信濃・駿河二ヶ国と上野・遠江・三河・飛騨にまで勢力を広げた手腕は、戦国時代に数多く現れた英雄たちの中でも屈指とといっていい。配下の武田軍団は、天下最強の精鋭部隊として名高く、ついた異名は常勝軍。

まあ、そんな彼が都に上れば、単純に彼が信長に取って代わるだ

けであるうが、しかし、今現在、広く天下を見回しても、信長に取って代われるほどの実力と能力を併せ持った人間は、武田信玄か、上杉謙信ぐらいなものであった。

「司令塔、か」

せつかく強大な力を持ちながら、肝心の司令塔がないがゆえに迷走した事例は、枚挙に暇がない。長慶死後の三好家など、その典型だろう。長慶死後、みるみる衰退の道を歩んでいった三好家のことを思い出しながら、三好日向守長逸は思わず苦笑いした。

「わが三好家も、御屋形様亡き後は、今の同盟の如き状態となつて、いとも容易く崩れていったのだな」

長逸はふと思う。そして、おもむろに目を閉じた。

御屋形様。

懐かしい名だ。今や、こう呼べる人もなく、何とも寂しい世の中になつたものよ。などと思ひながら、長逸はため息交じりに目を開けた。

考えてみれば、いや、考えてみるまでもなく、自分が今の地位にいられるのは、全て長慶のおかげなのだ。先々代の当主であった三好元長が細川晴元や三好政長により滅ぼされて、三好家が絶体絶命の窮地に追い込まれた時も、当時千熊丸といった長慶の果敢な行動があつたからこそ、危機を脱することができたのだ。もしもあるとき、千熊丸が凡庸な普通の御曹司であつたら、三好の名はそこで潰えていただろう。歴史の流れも、全く違つたものになつていたに違いない。

あれから何十年と月日が流れている。思い返せば、昨日のこのようであるが、あの時十四、五歳だった長逸も、既に五十を超えているのだ。しかし、その間に三好家は長慶の下で急成長を遂げ、それに釣られるように、彼もまた三好三人衆筆頭という地位を得た。しかし、もしも長慶がそこまで優れた人間でなかつたとしたら、今頃、自分はどうなつていただろう。おそらく、三好家の一部将のまま一生を終えていたに違いない。まあ、それはそれで、悪くない

ような気がしないでもなかったが……。しかし、そんなものは自分の性格に合わない。

波乱万丈といえ、確かにそうかもしれないが、長慶のおかげで自分は平凡とは程遠い人生を歩むことになった。いくら感謝しても、すぎることはないだろうと思う。

三好長慶が死んで、そろそろ十年になろうとしている。時の流れとは、実に早い。光陰矢の如しとはよくいったものだ。

「如何なされた？ 日向殿」

岩成友通が不思議そうな顔をして尋ねると、

「いや、御屋形様のことを思い出していたのだ」

彼は率直に、そう答えた。

「御屋形様？ ……ああ。お懐かしき御方にございますな」

友通は寂しそうな、悲しそうな顔をして、フウと小さなため息を吐いた。

「あの頃は何をしても楽しかったのに、今は何をやっても、まるで楽しくない。酒とても美味くない」

長逸がぼやくと、「そうですね」と友通も頷いていた。

お互い、必死になって長慶を支え、助けてきた。かたや一門衆の筆頭格（長慶の弟を除く）、かたや重臣中の重臣。差こそあれ、二人とも長慶に対する忠誠心だけは誰にも負けない自負をもっていた。

三好家が大いに発展したのは、何も長慶だけの功績ではない。自分たちのような家臣たちがいたからこそなしたのだ。とも思うのだが、実際のところ、自分たちは独裁者でもあった長慶の命に忠実に従い、それを実行に移してきただけなのだ。余り威張れるものでもない。

今、自分たちはそれぞれ一軍の将となり、一国の主となって、天下に君臨しているわけだが、それゆえに分かることもいろいろあった。人の上に立つ者は、それだけ大いなる責任と苦痛を伴うものだ、

ということ。その点、長慶の部将に過ぎなかった頃の自分たちは気楽なものだった。あらゆる難しい判断、および決断。そしてそれに伴う責任の全てを主君たる長慶に押しつけて、ひたすら彼の下した決定に従っていればよかつたのだから。そして、長慶は自ら独裁者とふるまうことで、あらゆる苦勞を自ら背負いこんでいった。その精神的な疲勞は大変なものだったに違いない。今の自分たちですら辛いのだ。況や、真に天下を背負っていた長慶の味わった苦勞は、自分たちのそれと比べ数倍にも達しよう。

それだけの辛さを、たった一人で背負ってきたのだ。自分たちは三人だというのに……。彼が四十二歳という若さで病没してしまった理由もなんとなくわかるといふものだった。

そして今、長逸も長慶とほぼ同じ立場にある。難しい判断、厳しい決断を下さねばならない時もある……。というよりそんな時ばかりだった。そして、その結果生まれる責任は全部自分が背負わなければならぬのだ。改めて、三好長慶という人を尊敬せずにはいられぬ長逸であった。

「なあ、岩成殿」

長逸は夜風に浸りながら、かつて長慶が居城としていた越水城奥御殿から見える壮大な星空をぼんやりと見上げていた。

「何でしよう、日向殿」

岩成友通が不思議そうな顔をして尋ねると、長逸はいつになく悲しげな、悲壮感に満ちた顔をして、

「何でもない」

とだけ答えた。

ヒュウウウ。

そろそろ夏になろうという季節にも関わらず、夜風は相変わらず

肌寒かった。体はブルブルと震え、余り長居していると、風邪でも引きそうな感じがした。ゆえに、

「日向殿。お体に触りますゆえ、お早く御戻りを」

などと岩成友通は言ったのだが、長逸はさして気にする風もなく、「構わん」と言つて、相も変わらず夜空を見上げていた。

自分はなにをやっているのだろう。

ふと思う。

気がつけば、三好家はこんな風になってしまった。全ては、自分たちがいけないのだ。長慶の意に従い、幼君義継を忠実に補佐していれば、あるいはこんな風にはならなかったのかもしれない。一軍の総大将として、三人衆筆頭として、自分はこの責任を取らなければならぬ。

長逸は静かに深呼吸すると、いつになく朗らかな顔をして岩成友通の下に戻った。そして一言、

「織田と戦おう」

とだけ、言った。「最期までな」と付け加えることも忘れない。

## 【落日編】第153章 権臣の死

元龜四年（一五七三年）六月。

畿内の情勢は、一向に改善する気配を見せず、逆に悪化するばかりであった。武田信玄逝去をきっかけに、反転攻勢に打って出てきた織田軍に対し、反信長連合の実質的盟主であった信玄の急死を受けて士気下がる連合軍は、勢力面では、連合側が勝っているにもかかわらず、終始劣勢に追い込まれていた。

よく、一寸先は闇と言うが、まさしくその通りだと思わずにはいられぬほど、ここ数カ月うちに、情勢は劇的に変化していった。

こうした状況に対し、呆然自失となっていたのは、自分こそ天下の主であると自認する征夷大將軍足利義昭であった。信玄が死に、かつ反信長連合勢力が各地で敗退している。このままでは、信長の矛先が黒幕たる自分に向きかねなかった。

既に義昭は信長に対し、公然と反旗を翻していた。二条御所を増築し、奉公衆や浪人からなる軍を集結させて、いつでも織田軍と戦える状況を整えていたのである。少なくとも、兄義輝の轍は踏まない。それが義昭の考え方の根本を占めていた。

「やはり、兵部殿が来る気配はありませんか」

幕臣の一人たる仁木義政が腹立たしそうにぼやくと、

「あの阿呆が」

細川兵部大輔藤孝の実兄である三淵藤英は、眉に皺を寄せて怒っていた。

細川藤孝は、足利義昭が絶対の信任を寄せていた幕臣の筆頭格であり、その実力も他の幕臣たちとは比べ物にならぬほど大きかった。とりわけ、和田惟政が摂津守護筆頭として高槻城に入り（ちなみに彼は元龜二年に三好三人衆方に属した池田知正の重臣荒木村重によ

り討ち取られている)、明智光秀がちゃっかりと織田信長の重臣の座に収まってしまった今、藤孝は義昭にとってなくてはならぬ重役であるはずだった。

その藤孝が来ない。

幕府軍に動揺が走ったのも無理はなかった。

これが二月のことである。

それから四ヶ月が過ぎたわけである。その間、四月には武田信玄が病没、肝心の武田軍が撤退するという悪夢のような出来事があり、それに伴って、近江まで出張ってきていた朝倉義景軍も越前に撤退するなど、足利義昭率いる幕府軍を取り巻く状況は一挙に悪化していった。

そこで、義昭は六月十三日。戦局の打開を目指し、中国地方の大名たる毛利輝元に対し、織田信長を討伐するため、即刻出兵上洛するようにとの御内書を届けさせた。武田軍が動かぬなら、毛利軍を動かすしかない。まだ若い毛利輝元に、武田信玄ほどのカリスマ性などあるうはずもなかったが、しかし毛利家自体は武田家に匹敵する大勢力だ。もし、毛利軍が上洛を開始すれば、状況は変わる。

そう義昭は踏んだのであるが、肝心の毛利家は、目下、北九州地方の覇権を巡って大友宗麟らと激しく争っている最中で、さらに尼子氏の残党狩りにも忙しく、とてもではないが上洛軍など起こしていられる余裕はなかった。とはいえ、將軍家の意向を無視するわけにもいかず、とりあえず申し訳程度の兵糧米を送ることで、義昭の命令に応えたのだった。

とまあ、畿内はそんな状況下にある。

七月になった。

四国。

阿波国主たる三好長治は不満でいっぱいだった。  
なぜか？

今さら言うまでもなからう。篠原長房だ。執政として全権を握る彼のことが、どうしても気に入らないのだ。なぜ彼は自分に国政の実権を譲らないのか。阿波国の国主は自分なのだぞ。自分がまだ幼いなら話はわかるが、既に二十歳だ。

しかし、彼の不満はそればかりではなかった。

篠原長房の政治方針にも不満であった。というのは、このところ長房が、落ち目の三人衆と距離を置き、織田信長との友好関係維持に腐心し始めたためである。長治としては、同じ三好家として、最期まで信長と戦うつもりでいたのである。それなのに、長房は彼の独断によって信長との和議交渉を始めてしまった。家の方針を決める重大事項を、当主である自分に諮ることなく決めた長房に、長治が怒るのも無理はなかった。

「兄上、それだけはやめなされ」

七月上旬。讃岐国からやってきた実弟十河存保と久方ぶりに再会した長治は、そこで存保からこんな言葉を受けた。

「そんなことをしたら、家が潰れますぞ」

存保はぎろりと兄を睨みつけた。

「確かに、気に入らぬ理由はわかります。それがしとて、篠原長房は嫌いにございます。しかし、彼がこれまで果たしてきた功績を考えれば、致し方ないことにございます」

「たわけッ！」

長治はついに怒鳴った。元々、我慢強い性格ではない。三好実休の嫡子として、幼いころから何の苦勞もなく育ってきた、典型的御曹司なのだ。我儘で、不遜で、お世辞にも賢いとは言えない。そんな長治は、駄々をこねる赤子のように、ぎろりと存保を睨みつけた。「こつするより他に仕方がないのだ。さもなければ、俺も持隆公のよ



うになりかねん」

長治はそう言つて、静かに目を落とした。

今の彼には、篠原長房の姿が、かつての父実休に見えるのだろう。阿波国守護でありながら、実権を家臣である実休に奪われ、拳句の果てに彼によつて殺された細川持隆。さながら、今の長治と篠原長房の関係にも似ている。

下剋上は繰り返す。いつまでも長房が長治の重臣の座に収まっているとは思えない以上、十河存保には、兄の考え方を根本から否定することはできないのだった。

「されど、何故今なのです。畿内では織田軍の勢力が飛躍的に強まり、ここで長房を斬れば、信長は好機到来とばかり、四国に兵を進めて参りましょう。左様なことにもなれば、阿波三好家は滅びますぞ」

十河家当主とはいえ、存保も元々は阿波三好家の出身である。父が築き、発展させてきた阿波家には大いに愛着があつた。

「ふん。もし、このまま織田軍が日向殿らを滅ぼして畿内を掌握したら、どうなると思う？ 信長と昵懇の長房の力はますます強まり、しまいには俺の存在は不要になる。俺が反信長の考え方をしているって分かつた瞬間、信長は長房を新たな阿波国主に立て、俺を追放するか、あるいは切腹を要求してくるに違いない」

長治の不安は、存保にもよくわかる。おそらくそうなるだろう。漠然と、そう思う。

だが……。だが、今ここで長房を殺せば、確実に阿波家は終わる。存保としても、どうすればよいのかさっぱり分からなくなった。

「既に、真之殿の許可は取つてある」

長治はにやりと笑つた。

「真之殿、ですと？」

細川真之。それは、今は亡き細川持隆の遺児にして、長治、存保兄弟の異父兄でもあつた。そして何より、依然として彼は阿波国守護の座にある。無論、非常に名目的なもので、彼にはなんの力もな

いが、しかし守護は守護なのである。長治は、阿波国守護細川真之の命により、篠原長房を討つのだと言いたいに違いない。

守護職の命なのだから、従わざるを得ない…。  
どうやら長治あには、それをもって篠原討伐の大義名分とするつもりらしい。

「もはや、お気持ちは変わらないのですか？」

存保が尋ねると、

「当たり前だ」

長治はきつぱりと言い切った。

かくして元龜四年（一五七三年）七月十六日。

阿波国守護細川真之及び阿波国守護代三好長治の号令の下、篠原討伐軍は勝瑞城を発した。総勢八千。

総大将は篠原自遁。篠原長房の兄とも弟ともいわれている人物である。篠原一族の重鎮として、長らく長房を補佐してきたが、織田信長との対応を巡る問題などで、最近では彼とも対立関係にあった。長治に対し、真つ先に長房討伐を勧めたのは、この自遁だった。

篠原自遁軍八千は、同日中に篠原長房の居城上桜城を包囲した。これに対し、長房軍も懸命に抵抗したのであるが、よもや長治により攻撃されるとは夢にも思っていなかった長房方の兵力は手薄であり、とてもではないが、八千もの大軍に太刀打ちできるはずもなかった。

「これで、俺の一生も終わりか」

戦国時代という激動を、必死になって生き抜いてきた一人の男は、寂しそうな顔をして、燃え上がる紅蓮を見つめていた。

上桜城本丸。

城主篠原長房は、ただ一人、ぼんやりとその場に佇んでいた。

もとより彼に謀叛するつもりなどなかった。阿波家に乗っ取る気など更々なかったのである。彼はただ、敬愛する主君三好実休の遺志を継ぎ、阿波家をより強大な、三好家をより大きな存在にしたいという夢を追い求めて、ひたすら邁進してきたに過ぎないのであった。

しかし、今、三好実休の実子である三好長治の差し向けた軍勢の前に滅びようとしている。かつて自分が滅ぼした細川持隆も、こんな気分だったのだろうか。

長房は小さくため息を吐いた。そして、すつくと立ち上がり、窓越しに広がる空を見上げてみた。

「全く、ここからみると、人がゴミのようだな」

思わずもれる小さな笑み。見慣れた三好の旗印を掲げた兵士たちが、自分の首を求めて押し寄せてくる様は、何とも言えず奇妙だった。

「これで、よいのだ」

そう呟いて、彼は静かにその場に腰を下ろした。

篠原長房が自害したのは、それから間もない頃のことであった。

それと同時に上桜城は陥落し、長房勢の兵士たちは全員、玉砕した。

三好実休、安宅冬康ら相次ぐ実力者の死を受けて、長らく四国三好家を束ねてきた男は、こうしてあっけなく滅亡したのである。

時は元龜から天正へと変わろうとしている、節目の時期のことであつた。

そしてこれ以後、阿波三好家は急激に没落の道を突き進んでいくことになるのだった。

## 【落日編】第154章 室町幕府滅亡

元龜四年（一五七三年）七月十八日。

この日、足利尊氏以来十五代、二三年間に渡りこの国の頂点にあつた室町幕府が崩壊した。

いや、ここは崩壊したとされると言い直した方がいいだろう。厳密に言えば、この時点ではまだ、幕府が滅びたかどうかなど、誰にも分かつてはいなかったのだつた。

鎌倉幕府の建国年にいろいろな説があるように、室町幕府の滅亡年にも諸説あつて依然として定まっていない。今現在、広く世間に通用している室町幕府崩壊年月日は、元龜四年七月十八日で間違っていないが、ならば、なぜこの日が幕府崩壊の日となつたのだろうか。答えは、室町幕府第十五代將軍足利義昭が、織田信長により都から追放されたために他ならない。

だったら、この年をもつて幕府滅亡と定めてしまえばよいではないか。そういう声も聞こえてきそうだ。しかし、室町幕府末期の歴史を振り返ってみると、義昭追放という事件を持つて幕府滅亡と規定するのは、余りに暴論であるということが分かる。

具体例をあげてみよう。

分かりやすい例として、義昭の兄で、十三代將軍だつた足利義輝を挙げよう。彼は天文十八年（一五四九年）に勃発した江口の合戦に勝利した三好長慶により、都から追放され、都に帰還したのは三年後の天文二十一年（一五五二年）のことだつた。さらに翌年、長慶と再び対立した義輝は、再度追放され、以後五年間に渡り、彼は近江朽木谷にて亡命生活を送ることを余儀なくされていた。

ここから分かることは、義輝も、このときの義昭と同様に当時最高の実力者だつた三好長慶によつて追放されているということだ。しかし、誰も義輝追放を持つて幕府滅亡とは思わなかつた。事実、義輝はその後、長慶と和睦して都に復歸している。であるからして、

今回、義昭は都から追放されたが、織田信長と和睦して都に復帰する可能性が残されている以上、此の事件をもって幕府滅亡と扱うわけにはいかないのだった（実際、元龜四年以後も義昭は將軍職から解任されていない）。

ならば、正式な幕府滅亡はいつなのか。

これまた随分と分かりづらい話だが、説としては、織田信長亡き後に覇権を握った羽柴秀吉が、関白職を授与された天正十三年（一五八五年）のことか、あるいは足利義昭が出家引退を表明した天正十六年（一五八八年）などがある。

とはいえ…。

織田信長により義昭が都から追放されたことで、辛うじて残存していた幕府組織というものは完全に瓦解。幕府体制とは全く異なる織田政権が築かれることとなるわけで、名目はともあれ、実質的には元龜四年（一五七三年）をもって幕府が滅びたと定義してもよいのかもしれない。

幕府の滅亡。

それは言うまでもなく、日本史上に轟く歴史的イベントであるわけだ。…。何しろ、まがりなりにも二三六年間もの長きに渡り存続してきた権力機関が、この世からほとんど消え去ったのだ。

以下はその経緯である。

元龜四年（一五七三年）二月十三日。

前年の武田信玄による拳兵上洛を受けて、ついに足利義昭も武力拳兵に舵を切った。これまで反信長同盟を裏で差配する黒幕役に徹してきた彼だが、いよいよ反信長連合の盟主として、表舞台に名乗りを上げることにしたというわけである。

だが…。

同年四月十二日、肝心の武田信玄が病没。嫡子勝頼に率いられた武田軍が甲斐に撤退してしまう。これによって、階を上った直後に階段を取っ払われた形となった義昭は、一転して窮地に追い込まれることになった。

切羽詰まった彼は、六月、毛利氏に援軍を要請するなど、いろいろ策を講じてきたものの、全てが不調に終わって、窮地から脱するまでには至らなかった。そして七月三日。この日、追い詰められた義昭は、宇治の槇島城に立て籠もって、再び挙兵したのである。

「ふーん」

京都は本能寺に滞在中の信長の下に、義昭の動向が逐次伝えられる。

「あの阿呆公方は、性懲りもなく余に楯突くつもりなのだな」

彼はニタニタと笑っていた。彼にとっては、獅子身中の虫に過ぎない足利義昭を倒し、面倒極まりない幕府を叩き潰す絶好の機会であった。

「光秀ッ！ 全軍に命じよ。これより槇島に進軍し、義昭の首をとるッ！」

織田信長は、すつくと立ち上がり、重臣明智光秀以下、居並ぶ側近たちにいつものような怒鳴り声を張り上げた。

「はッ！」

命じられた光秀の気分は非常に複雑である。何しろ、彼はかつて興福寺より義昭を救出し、將軍の座に押し立てるべく奔走してきた幕府再興の功労者の一人なのであった。そんな自分は今、その幕府と義昭を滅ぼそうとしている。

しかし、光秀には信長の気持ちがいほどよくわかる。非常に短気な彼らしくもなく、ここ数年間、ずっと將軍家の横暴を耐え忍び、あるいは妥協してきた。それにもかかわらず、身の程も知らずに信長討伐を求め続けた義昭など、滅びて当然だとも思っている。しか

し、義昭を滅ぼし、幕府を倒せば、自分のこれまでの努力が全く無駄になってしまおうようで、何とも気が重かったのである。

七月十六日。

織田軍は動き出した。

総勢五万。

彼らは宇治川を突破し、槇島城を目指した。その様は、さながら源平合戦時代、木曾義仲軍と源義経軍の間で繰り広げられた宇治川の合戦にも似ている。義経軍の部将梶原景季と佐々木高綱が真っ先に宇治川を渡河し、激しい先陣争いをしたように、信長軍の将兵たちも、先を競うように怒涛の勢いで宇治川を渡河していった。

そして七月十八日。

織田軍が槇島城に殺到。対する足利軍はわずか三千足らずに過ぎなかった。

「これでは多勢に無勢。勝ち目はありませぬ」

重臣の三淵藤英が悔しそうな顔をして、義昭の下にやってきた。

既に槇島城は圧倒的な織田軍により取り囲まれている。これでは確かに勝ち目はない。

「…朝倉や浅井、三好に動く気配はないのか？」

義昭は祈るような口調で、藤英ら側近たちに尋ねていた。

「三好勢は、長治殿が篠原長房を肅清したことで、実質的に彼が束ねていた主力の四国軍が混乱状態にあります。また摂津・河内の三好三人衆、義継軍は佐久間信盛以下織田軍の牽制を受けて動くに動けない状態。朝倉は家臣団の離反が相次いでおり、浅井も、羽柴秀吉によって重臣の磯野員昌（佐和山城主）らが切り崩されるなど、とてもではありませんが、こちらに兵を出す余裕はないようです」

「…くそッ！」

まさしく絶体絶命。義昭はがっくりと頂垂れ、悔しそうに舌打ちした。

しかし、武田軍撤退をきっかけに、世の中はがらりと変わってしまった。あれだけ優勢に立っていたはずの反信長連合は、一転してこれだけの窮地に追い込まれてしまったのである。信長の果敢な軍事行動も、こうなった要因の一つではあったろうが、しかし、ここでは武田信玄と言う男の存在感の大きさをこそ特筆すべきだろう。

武田信玄。彼はまさしく、戦国の大英雄の名に相応しき存在感を持っていた。彼の死は、後の武田の滅亡に繋がっただけでなく、日本史の流れをも一変させてしまったのである。

「降伏するより他に仕方ありませんね」

仁木義政がそう言うのと、

「こ、降伏だと！」

義昭はいきり立った。

「しかし、相手は五万。こちらは三千。援軍はなし。勝ち目はありませんねぞ」

と、三淵藤英が宥めにかかる。

「松永弾正は何をしている？」

義昭はふと思いついたように、かつての仇敵の名を挙げた。

「弾正は、織田方の筒井順慶と対立しており、兵を出せる余裕はないようです。また、あの寝業師は密かに信長と内通しているとの噂です」

「…なに？」

怒るといふより呆れる。あの松永弾正が、信長と内通？

弾正らしいと言えはらしいが、しかしだ。三好を裏切り、織田に味方し、そしてその織田を裏切って三好についた男が、再び織田に寝返る？

「それは本当か？」

義昭が尋ねると、

「あくまで噂にございます」

仁木義政は腹立たしそうな顔をして、そう答えた。

しかしだ。もし噂が本当なら、義昭に援軍を出してくれそうな勢



力は皆無だ。近在の有力大名といえば、三好義継、三好三人衆、松永弾正ぐらいなものだが、義継や三人衆は佐久間信盛軍によってマクされている。織田軍主力の攻撃を受けていないのは、松永弾正ぐらいであったが、その弾正までも織田への寝返りを考えているとなれば、義昭の孤立、ここに極まりといったところであろう。

「公方様。降伏も一つの手にございます。ここでもし、公方様が玉碎なされれば、いったい誰が將軍家を引き継ぐのです？」

三淵藤英はそう言って義昭の顔をぎろりと睨みつけた。

「既に公方様をおいて他に將軍家の有力者はおられないのですぞ。公方様が死なれることで、幕府は名実ともに滅びるのです。それが信長を大いに利する結果となることが分かりませぬか」

仁木義政もそう続ける。

義昭はじつと腕組み、苦り切ったような顔をしながらいろいろと考えていた。確かに、自分には後継者がいない。自分が死ねば…幕府は消えてなくなるだろう。信長にとって、これほど都合なこともあるまい。

「だが、降伏したら、信長に殺されるということはないのか？」

義昭はそこが不安である。

「如何に信長とても、降伏した公方様に手を下すような真似はできませんまい。それに織田軍の幹部には、明智光秀殿、わが弟細川兵部らがおります。彼らも、必ずや公方様の命乞いに全力を注いでくれるに違いありません」

三淵藤英の強い言葉に、義昭はただ、「そうか」と頷いた。

「降伏、か…。それもやむなしかもしれないなあ」

兄より受け継ぎし幕府は必ず守りぬかねばならない。少なくとも自分が最後の將軍となるわけにはいかないのだった。そのためには、恥を忍んで織田軍に投降するのも悪い策ではないのかもしれない。

足利義昭は同日夜、城を出、織田軍に投降した。

明智光秀並びに細川藤孝の懸命な命乞いもあって、信長は義昭の命だけは取らなかつた。まあ、將軍殺しの汚名がどれほどに重いものか、信長にはよくわかつていたのだらう。何しろ、將軍殺しを實行したがために、世間から猛反発を買い、没落の道を歩んでいった前例なら、いくつがあつた。とりわけ、三好・松永の事例は記憶に新しい。

かくして義昭は助かつたわけだが、しかし、希代の野心家にして謀略家たる彼が、この程度のことですべてを諦めるはずもなかつた。即ち、彼は織田方の手勢により山城国枇杷荘に護送されている最中、隙を見て脱走し、途中、落ち武者狩りによつて身ぐるみを悉くはがされるといふ不運に遭いながらも、命辛々、義弟である三好義継の居城若江城に辿りついたのだつた。

【落日編】第155章 岩成友通戦死

元龜四年四月、武田信玄逝去。武田軍撤退。

同年四月、朝倉義景軍、越前に撤兵。浅井長政の重臣磯野員昌らが織田方に離反。

同年七月、室町幕府滅亡。それに伴い、將軍足利義昭は三好義継の下に亡命。

同年七月末、元龜から天正に改元。

松永弾正、織田との和議に傾く。

四国の混乱、依然として収まる気配なく、三好氏の支配力大幅に減退。

： などなど。時系列順に並べていくと、元龜四年から天正元年はこんな調子である。まあ、見れば一目瞭然。はつきり言つて、このところ、反信長連合勢力は大いに精彩を欠いていた。

武田信玄逝去以後、急激に勢力を盛り返して、再び天下人の座に返り咲いた形となった織田信長は、この勢いのまま、一挙に反信長勢力を壊滅させる腹でいた。というより、今において彼らを滅ぼす機会はない。彼はそう踏んでいたのである。もしもこの機会を逃して彼らを野放しにしておけば、いつ何時、今の形勢がひっくり返るかかわからないのだ。全戦線において織田方が圧倒的優勢に立っている今のうちに、早急なる反信長連合の壊滅を目論んだのは、当然と言えば当然のことであつた。

そんな信長がまず目を付けたのは、足利義昭を救援するべく淀城に入っていた岩成友通であつた。義昭を助けるため…、という名目で、織田方の領内深く食い込んできた彼は、言ってみれば広大な織田領内に取り残された孤軍も同然の状態に追い込まれていたのだつた。こんな絶好機を逃すほど、信長という人は甘くない。

岩成友通は言うまでもなく三好三人衆の一人である。そんな彼を

叩き潰すことができれば、残る三人衆の残党を片づけることも容易いに違いない。そう考えた信長は、羽柴秀吉を総大将、細川藤孝や細川藤賢（今は亡き管領細川氏綱の実弟）を副将につけた大軍を、淀城に送り込んだのであった。

岩成主税助友通。

三好三人衆の一人として、三好長慶亡き後、畿内の政局に絶大な影響力を誇ってきた永禄・元龜及び天正初期を代表する戦国武将であった。

時に世の中は元龜から天正へと移り変わって間もない頃だった。足利義昭を滅ぼした信長は、新たな時代の幕開けを告げる象徴として、朝廷に迫って天正に改元させたのである。それが七月末のことであった。

世の中が天正元年に改まった直後の八月。

淀城は羽柴秀吉率いる織田軍によって完全包囲されていた。

「もはや、これまでか」

岩成友通もバカではない。眼前の織田軍を相手に勝ち目がある、などとは思っていない。何しろ岩成勢はわずか三千余騎足らずなのだ。一方、羽柴勢は総勢二万に達している。

「日向殿らは、佐久間信盛に牽制されているしなあ」

友通は、いつになくハアと深いため息を吐いて、その場につくりと腰を落とした。

淀城本丸御殿の一角に、岩成友通の居室がある。友通は先ほどから、その部屋の真ん中に雑に放置されている地図を相手に飽くことなき睨めっこを繰り返していた。

それを見れば、とりあえず現状、反織田方が置かれている状況は一目瞭然だった。

現在、最も織田方の勢力範囲内に食い込んだ位置にいるのは、山

城国淀城に陣取っている岩成友通である。そのほか、摂津越水城には三人衆筆頭の三好長逸がおり、芥川山城辺りには同じ三人衆の三好政康が詰めている。また石山御坊には本願寺顕如がいるわけだが、いずれも摂津三宅城に陣取る佐久間信盛軍二万に牽制され、身動きが取れない状況に追い込まれていた。

河内には三好義継がいるが、これには榎島城にて足利義昭を滅ぼしたばかりの織田軍主力が張り付いており、同様に身動きが取れない。大和の松永弾正は、筒井順慶との攻防に忙しく、他国に兵を出せる余裕はなさそうである上に、織田に寝返るかもしれないという風聞が実しやかに流れており、余り頼りになりそうもなかった。

越前には朝倉義景、北近江には浅井長政がいるが、これらは相次ぐ家臣団の離反に苦しんでおり、織田軍を攻撃できるような余裕があるとは思えなかった。唯一、織田軍に対して優勢を保っているのは、北伊勢は長島に陣取る一向一揆軍ぐらいなものであったが、生憎、京と北伊勢の間には、高い山もあれば、果てしない湖もあるわけで、いくら彼らに援軍を要請したところで、容易く来れるものでもなかった。

即ち…。

岩成友通。只今、孤立無援。絶体絶命と言いつてもいい。

人間というものは、ひとたび最期を覚悟すると、昔のことが走馬灯の如く脳裏に蘇ってくるものらしかった。

友通も例外ではない。

昨日は三好長慶のことを考え、一昨日は強大だった三好家のことを思い、今日は細川家のことについて思いをはせていた。

細川家。正確には細川京兆家<sup>けいちょうけ</sup>。

それは、黎明期の三好家にとって最大の政敵であり、仇敵であった家のことだ。今でこそ、細川勝元・政元・澄元・晴元と続いてきた京兆家嫡流は完全に力を失っているが、かつては確かに三好家にとって恐るべき脅威だったのだ。

なんて考えていると、細川晴元によって三好元長が殺害された日が、昨日のことのような気がするし、細川家から権力を奪い取るきっかけとなった江口の合戦は、今日の朝のことのような気がした。しかし、元長が殺されてから、既に四十一年という歳月が流れているし、江口の合戦からは、二十四年もの年月が流れていたのだ。光陰矢の如しとは、良く言ったものだ。三好長慶が死んで、既に十年にならんとしているのだから、全く、時間などあつという間に過ぎ去っていくものらしくった。

「細川氏綱様、なんて御方もおられたな」

友通は、ふと思ひ出し笑い。三好長慶により、晴元失脚後、幕府管領に擁立された人。何の力もなく、結局、幕府史上最後の管領となつてしまわれた御方。長慶の死に先立つこと半年前に、人知れず、この淀城内で没したのだ。

哀れな人だった。

彼をそう言う立場に追いやっていた側の一人として、岩成友通はふと思うのである。そして、改めて地図に目を移す。

「細川藤賢」

その中に、朱筆で書き込まれた敵将の名に目をやって、友通は苦笑いした。

羽柴秀吉は、先ほどからずっと、じつと淀城を睨みつけていた。

サル顔の小柄男。敵かな陣羽織が、これほど似合わぬ男も珍しいだろう。主君から日頃「猿」だの「禿鼠」だの称されている男は、床机の上でんと腰を下ろして、努めて重厚なる総大将の風格を醸し出そうと必死になっていた。

「申し上げます」

そこに、蜂須賀小六こと、彦右衛門正勝が駆けてきた。秀吉にとっては、尾張時代よりつき従う股肱中の股肱の臣であった。

「岩成主税助の家臣、諏訪三将らが我らに同心する意を固めたようでございます」

蜂須賀小六の報告に、

「でかした！」

秀吉はパチンと、勢いよく鉄扇を閉じると、床机より豪快に立ち上がって、小六の下に歩み寄った。

「これで、淀城は落ちましたな」

そう言うのは、秀吉の実弟で、羽柴小一郎秀長。後に、大和大納言と称えられることになる人だった。

「細川殿」

秀吉は、すかさず本陣に詰めている副将の名を呼んだ。

「はッ」

二人の男の声が木霊する。その様を見た蜂須賀小六、羽柴秀長、そして竹中重治（通称半兵衛）らが苦笑いすると、秀吉も頭を抱えて、

「右馬頭殿」

と、言い直した。

「何でしょう、羽柴殿？」

山城国勝龍寺城城主細川右馬頭藤賢が、サル顔の大將に向かって恭しく頭を下げた。

「これより岩成主税助を誘き出します。ついては、右馬頭殿に、岩成攻めの先陣を任せたいのですが」

と、秀吉は言った。

「それがしが、先陣にござりますか？」

藤賢は驚いた風に秀吉を見つめた。彼としては、てっきり秀吉勢が先陣を受け持つものだとばかり思っていたのである。

「左様。右馬頭殿には、三好勢にはそれなりに思い入れもござろう」

秀吉はにやりと笑い、藤賢はあとも否ともいうことなく、「御大将の命とあらば、御意のままに」と、頷くだけだった。

岩成友通は打って出るべきか、あるいは守りを固めるべきか。二つの選択肢を巡って悩んでいた。

そんな折、彼の家臣である諏訪三將が言つたのだつた。

「待つていても援軍などきそうもありません。このままじりじりと織田軍に押されるよりは、一気に打つて出て、万に一つの可能性にかけるのが目下とりうる最善の策と思われます」

彼は如何にも健気な忠臣顔を装っているが、実際のところは羽柴秀吉に内通した裏切り者であつた。しかし岩成友通にはそんなことは分からない。

「そうよなあ」

友通は一人静かにそう呟くと、

「突撃、かあ」

困つたように小さくため息を吐いた。

諏訪はしきりに突撃策を勧め、その具体的作戦として、夜陰に紛れた奇襲、即ち夜襲を提案していたのだつた。圧倒的に数に劣る軍が奇跡的大逆転勝利をもぎ取るには、それぐらいの策を打たねば駄目だと力説する諏訪に、友通は「なるほど」と頷いた。

確かに、夜襲というのは成功すれば大戦果が期待できる作戦ではあつた。例えば、若かりし頃の北条氏康が、足利（古河公方）・上杉連合軍を蹴散らした河越の合戦（河越の夜戦とも）などはその典型であろう。連合軍の兵力は六万に達したと言われ、逆に氏康以下北条軍は一万に満たなかつたという。

しかし…。

難しい策であることに変わりはない。一步間違えば、全軍玉碎という最悪な結果を招くことにもなりかねないのである。いずれにしても安易に決めるわけにはいかず、岩成友通はその日一日ずっと考えた末に、八月二日夕刻頃、ついに決断を下したのだつた。

「今夜、我らは打つて出る！」

大広間にて開かれた軍評定の場にて、総大将たる彼が朗々と宣言すると、居並ぶ武將たちも、一切反対の声を挙げなかつた。

それしかない。

皆、分かっているようだつた。こうなつた以上、城から打つて出



て、万に一つの可能性に賭けるより他に手がないのだということをして、

岩成軍三千。

岩成友通自ら戦陣に立つて、二万に達する羽柴軍に突っ込んでいく。白塗りの三好の旗が、赤塗りの織田の旗の中に飛び込んでいく様などは、傍目から見れば、実に圧巻であった。

まあ、岩成友通としても、はなから勝てるとは思っていなかった。しかしながら、自分とて、かつて三好長慶の重臣として、また三好三人衆の一人として天下にその名を轟かせた堂々たる戦国武将の一人なのだ。その名に恥ずかしくない、見事な死を遂げて見せる。今の彼は、そればかりを考え、思っていたのであった。

だから、

「三好武士の死に様、とくと見せつけてやるのだッ！」

彼は配下の士卒に向かってそんな風に怒鳴りながら、次から次へ、ばっさばっさと織田兵を斬り捨てていった。

戦い自体は、岩成軍の完敗であった。

岩成友通が…、というより岩成軍の幹部たちが期待していた、敵の混乱は一切発生せず、それどころか罠に飛び込んできた獲物に襲い掛かるかのごとく、猛然と反撃して来た羽柴軍の様子を見て、誰もが、

「謀られた！」

と思わずにはいらなかった。

結局、岩成軍など、羽柴軍にとっては飛んで火に入る夏の虫に過ぎなかったのである。用意万端整えた相手に向かって奇襲攻撃を仕掛けることほど愚かなこともあるまい。今の岩成勢は、さながら、ぱっくりと大きく広げたクジラの口に向かって飛び込んでいく小魚たちのように、悉く羽柴軍の格好の餌食となって倒されていった。

「…参ったな」

岩成友通は苦笑いしている。

既に刀折れ矢尽きた形となった彼は、阿修羅の如き形相をして、敵ばかり奔めく戦場に、唯一人呆然と突っ立っていた。

「そこにおるは、敵将岩成主税助殿とお見受けする」

そこに、一人の部将が駆け込んでくる。

織田の家紋と並んで、見慣れた九曜の家紋を記した旗を指すその男は、ぎろりと岩成友通を睨みつけ、

「お命頂戴」

と、言った。

九曜の紋章。

真ん中に大きな丸があつて、その周りを八つの丸が円を描くようにして取り巻いている。それは紛れもなく、細川京兆家を表す家紋であつた。

「我こそは細川右馬頭藤賢が家臣、下津権内である」

細川藤賢の家臣。その物言いに、岩成友通は苦笑いした。

かつて三好家が散々弄んできた細川氏綱の実弟、藤賢。その郎党に殺されるなら、それはそれで構わないような気がした。

岩成友通はフウと静かにため息を吐くと、

「我こそは、三好家家臣いわなりちからのすけともみち岩成主税助友通である。細川右馬頭殿の御家来なれば、此の首差し出しても文句はない」

そう言つて、彼は腰にぶら下げていた大太刀をさつと引きぬいたのだつた。

もとより勝てるとは思っていない。

形だけだ。

しかし、三好長慶に仕えた、この岩成友通が軟弱な武将であつたと思われては、敬愛する長慶の名を傷つけ、貶めることにもなる。岩成友通は、自分のためだけでなく、三好家のため、長慶のためにも、戦国武将として申し分のない華々しき最期を遂げるつもりでいた。

「御覚悟、あつ晴れなり」

そんな彼の思いを察したか、下津権内はそう大仰に叫ぶと、その瞬間、彼に向って思い切り飛びかかり、そして瞬く間に、彼の首を討ち取ってしまった。

かくして…。

三好三人衆の一人として、ここ十年間、畿内の政局に絶大なる影響力を及ぼしてきた実力者、岩成主税助友通が戦死した。享年不詳。ただ、五十代半ば以上の年齢であったことは確かだろう。

翌日。

首実検した羽柴秀吉は、哀れな首となり果てた岩成友通を丁重に葬ってやると、岩成を討ち取った下津権内の手柄を大いに称えて、その旨を都にいる信長の下に届けさせたのだった。

そして…。

本陣は秀吉の下に、裏切り者の諏訪三将らがやってきた。彼らは、岩成方による夜襲の情報を包囲軍に密告することで、包囲軍の圧勝に貢献した功労者であったが、

「我らのおかげで羽柴様は岩成主税助を討ち取るという大戦果をあげることができたのだ」

と、偉そうにふんぞり返る様を見て、秀吉の怒りは頂点に達した。もとより彼らを内応させた、即ち裏切らせたのは秀吉自身だが、しかし、彼らがほいほいと内応工作に応じて長年の主君を売り飛ばした行為を、彼は決して快く思っただけにはいなかったのだった。その上、いけしゃあしゃあと恩賞を求めてくる彼らの態度を見れば、彼でなくとも不満は怒りへと変化しよう。

かくして秀吉は、褒美と称して彼らに死を与え、信長の許可を得て、そのみすばらしき哀れな首を、京都は六条河原に何日も晒しておいたのだった。

【落日編】第156章 あっけない滅亡

岩成友通が滅びた頃、三好日向守長逸は、危険を冒して越水城を發すると、摂津国は中嶋城に入つて、態勢の立て直しに本腰を入れるようになっていた。

三人衆の片割れたる岩成主税助が死んだ今、三人衆の力は壊滅的なまでに激減したといつていい。それでも三人衆筆頭格たる三好長逸は、交通の要所たる中島を完全に掌握することで、強大なる織田軍に立ち向かおうとしたのであつた。中島は淀川などに周囲を囲まれた難攻不落のデルタ地帯として有名であるし、また大坂湾にも面しているから、四国三好家や毛利輝元、あるいは本願寺からの支援を受けやすいという利点もあつた。

先の野田城・福島城の合戦の際も、ここを拠点に戦い、織田軍を蹴散らしたのだ。長逸としては、野田城・福島城の夢をもう一度、と言つたところだつた。

天正元年（一五七三年）八月十六日。

芥川山城から撤退して来た三好政康軍が中島に入り、三好長逸軍と合流している。これで、三好軍の戦力は一万近くにまで膨れ上がったが、足利義昭・岩成友通両名を滅ぼして意気上がる織田軍の敵ではなかつた。

しかし…。

この頃、信長の矛先は、越前は朝倉義景に向いており、三好軍は見向きもされていなかった。それゆえに三好方としては防備の増強等に勤しむことができたともいえるが、このまま朝倉氏が滅び去れば、三好方にとって由々しき事態となることは明らかだつた。

ま、かといつて具体的に打てる手があるのかといえはそうでもないのだ。今や破竹の勢いで勢力を広げる織田軍に対し、物理的制約を加えられるのは、越後に依然として強大を保っている上杉謙信く

らしいものであったが、彼は信長と同盟関係にあるのだから、話にならない。即ち、現時点で信長に物理的制約を加えうる大名家は皆無といつていい。

ともあれ、ここからは織田軍による朝倉討伐の概要を述べてみることにしよう。

足利義昭を追放し、岩成友通を片づけて、畿内の安定にひとしきり目途をつけた信長は、返す刀で軍を北上させている。

八月八日、三万の大軍を従えて近江に入った信長は八月十二日、朝倉方の拠点の一つであった大嶽砦を、折からの暴風雨を利用して攻略。翌十三日には田上山にて朝倉軍主力を完膚なきまでに撃破することに成功したのだった。

以後、織田軍は容赦ない追撃戦に打って出、その途上に発生したのが、刀根坂の合戦であった。この戦いで朝倉方は山崎吉家、河合吉統らをはじめとする有力武将を失い、文字通り壊滅的打撃を受けることになった。また、この戦いで特筆すべきことがあるとするなら、それは斎藤龍興の戦死であろう。織田信長により美濃を追われて以来、ひたすら反織田陣営に属して徹底抗戦を重ねてきた男は、ここに、宿敵たる織田軍によって討ち取られる羽目となったのだった。

そして八月十七日。

織田信長の号令の下、織田軍は怒涛の勢いで越前国に乱入し、十八日には朝倉氏の拠点たる一乗谷に到達。ここに往時には人口一万を誇ったとされる山間の大都会は、空しく炎上することとなったのであった。

一方、織田軍到着以前に一乗谷を脱出していた朝倉義景は、わずか五百人足らずの郎党を従えて六松賢松寺に入っていた。

敗軍の将となり果てた義景が目指しているのは、長年朝倉氏と攻防を重ね、最近ようやく関係が改善して来た平泉寺であった。ここ

には往時の朝倉氏をも苦しめた屈強な僧兵軍団があり、彼らを味方につけることができれば、如何な織田軍とて一筋縄ではいかないはずだった。

そう一門の重鎮である朝倉景鏡かたむねのかがみに進言されたので、義景はわずかな郎党を引っさげて向かっていたのである。六松賢松寺はその道中にある、何ともいえぬ小さな小寺であった。

そして八月二十日。

「何事だ？」

やけに外が騒がしいので、義景は不安げな面持ちのまま、近臣に尋ねてみた。しかし近臣たちにも分からないらしく、

「調べて参ります」

と、行っただけ、彼らはなかなか戻らなかった。

その間にも、どんどん騒がしさは増していく。義景の不安や恐怖は高まる一方だった。

そんな折、調査に出向いていた近臣が慌ただしく戻ってきて、

「大変です。織田勢です」

と、言った。

「な、何だと…」

義景は絶句した。織田勢だと？ だが、織田軍は朝倉景鏡軍が食いとどめてくれているのではなかったのか。義景の頭は疑問符でいっぱいになった。

「そ、それが…」

近臣のもたらした報告は、義景にとって青天の霹靂というべきか、信じ難き凶報であった。

「寄せ手の中に、景鏡様の旗印が見えました」

まあ、詳細は聞くまでもあるまいし、言うまでもあるまい。

義景はがっくりと腰を落として、「ははは」と力なく苦笑いした。

あの景鏡が…。一族の重鎮として、長らく朝倉氏の政務の枢機に参与してきた男が…。

「くつくく。はっはっはっは」

笑うしかない。義景は壊れた人形のように、いつまでもいつまでも高笑いし続けていた。

そうこうしていると、織田方による総攻撃が始まった。

「火を放て」

義景は配下にそう命じた。

「名族朝倉の大將が、後世にバカにされるような最期を遂げるわけにはいかん。そして、このわしの体が信長如き者の前に晒されるのも耐えられん。火をかけて、わしの体ごと、この寺を焼き払え！」  
そうひとしきり言い切つて、彼はその場にゆっくりと腰を下ろした。

脇差を抜きはらい、切腹作法に則つてその腹に鋭利な刃を突き立てる。

すかさず、介錯を務める家臣が刀を振り下ろした。

天正元年（一五七三年）八月二十日。

朝倉義景が自害し、ここに朝倉孝景（初代孝景のことで、別名敏景）以来五代に渡り、越前国を治めてきた大藩朝倉氏は、あっけなく滅び去つたのである。

朝倉氏と織田氏。

同じ斯波氏の家臣であつた二つの家は、同僚であるとともに、ライバルでもあつた。信長の実父である織田信秀は、義景の実父である朝倉孝景（四代目）と美濃の覇権を巡つて激しく争つたこともある。孝景の息子たる義景、信秀の息子たる信長と、お互いが代替わりを済ませた後も両家は熾烈な攻防を繰り広げてきたが、結果として軍配は信長に上がったわけである。織田氏は天下を握り、朝倉氏は滅びた。

その後…。

朝倉氏と言う後ろ盾を失つた浅井長政も、八月二十七日に滅びた。

織田軍が朝倉攻めに本腰を挙げている最中も、小谷城は引き続き織田軍の包囲下にあった。織田軍による封鎖は実に完ぺきだったらしく、浅井長政の実父たる御隠居久政などは、最期の最期まで朝倉義景の滅亡を知らず、彼が援軍として駆けつけてくれるに違いないと信じていたのだという。

ともあれ、小谷城は陥落し、浅井長政及び浅井久政は切腹。亮政以来三代に渡り、北近江で繁栄を遂げてきた浅井氏はここに完全に滅び去ったわけである。ただし、小谷陥落、浅井氏男系の断絶をもって浅井氏の歴史的役割が消えたかといえ、全くそうではないのだから、歴史とは面白いものである。確かに男系の血はここに絶えることとなったわけだが、長政の血はその後も連綿と、時の権力者たちの中に受け継がれていくことになるのであった。

燃え上がる小谷の城より、羽柴秀吉により救出された一人の女子と三人の娘。それは信長の妹にして浅井長政の正室お市の方と、その娘たる茶々、初、江の三姉妹（通称浅井三姉妹）であった。

これは後の話になるが、お市はその後（信長死後）、柴田勝家と再婚。勝家が賤ヶ岳の合戦に敗れた後、彼とともに北ノ庄城にて自害する。また三人の娘のうち、長女である茶々は、義父勝家を滅ぼした豊臣秀吉の側室となつて、鶴松、秀頼の二人の子を産み、秀吉死後は幼君秀頼に代わつて豊臣家を仕切る最高権力者として大坂城に君臨。その後、徳川家康に敗れて、秀頼とともに自害している。

次女たる初は京極高次に嫁いで、豊臣、徳川の橋渡し役として奔走。三女たる江は、はじめ秀吉の養子たる豊臣秀勝に嫁ぎ、秀勝亡き後は徳川家康の三男であった徳川秀忠（後の徳川幕府二代将軍）の正室となり、三代将軍徳川家光を産むことになる（これは余談だが、結果としてみたとき、正室の腹から生まれた将軍は家康と家光及び慶喜のみで、御台所として将軍継嗣を産み落としたのは江のみである）。

要するにだ。戦国大名浅井氏は滅びても、浅井の血は豊臣、徳川両氏に寄生する形で、大いに花開くことになるのだった。少なくとも



も徳川幕府第七代将軍徳川家継までは浅井の血筋を受け継ぐ者が、この国の頂点に立ち続けていたのだから…。

天正元年は九月になる。

波乱の八月が幕を閉じ、何ともいえず悲しげで、寂しげな秋風の舞う九月となったが、三好長逸は、いつになく深刻そうな面持ちをして、中嶋城より見える秋空をまじまじと、ぼんやりと眺めていた。煌々と輝く青白い月明かりを肴に飲む酒も、格別ではある。しかし、あまり美味しくはない。盟友岩成友通は滅び、同盟国たる朝倉義景、浅井長政は、それこそあつという間に滅び去ってしまった。

次は自分たちだ。

長逸の不安は募る一方だった。

「気がつけば、皆滅びていますなあ」

三好政康は、「ははは」と笑って酒を呷った。

「御屋形様も、実休様も、十河一存様も安宅冬康様も…。内藤宗勝殿も篠原長房殿も、岩成主税助殿も…。気がつけば皆死んで、我ら二人が残った」

自嘲気味につぶやく政康に、

「我らとて、いずれ彼らのような末路を歩むさ」

長逸は淡々と答えるだけだった。

「それにしても、信長とは凄まじい男でございましたな。よもや、朝倉をあれほど短期間に叩き潰すとは思ってもありませんでした」

露骨なまでに感嘆の意を表す政康に、長逸は何も言わなかった。

彼自身、驚いていたのだ。如何に衰えたりといえど、朝倉氏は天下に名だたる大国だ。その意地にかけても、せめて半年は持ちこたえるだろう。そう思っていたのに、信長はわずか半月足らずで朝倉氏を攻めつぶしてしまった。

「つくづく信長と言う男は電撃作戦が得意なよう…。朝倉や浅井もそうでしたが、六角のときなども一瞬でございましたからなあ」  
言われてみれば、あれだけ強国と称えられていた六角氏も、織田

信長の手にかかれば一週間足らずの命だった。朝倉や浅井は半月足らず……。いったい全体、信長という男は、何者なのだろうか。鬼神か？ 悪魔か？ さすが、自らを第六天魔王と称するだけのことはある。

などと、三好日向守長逸、三好下野守政康の二人は、とりとめもない雑談に花を咲かせていたわけだが、そこに長逸の側近の一人が血相を変えて駆け込んできたので、二人の顔つきは再び険しいものに戻らざるを得なかった。

「何事だ？」

長逸がそう尋ねると、

「織田軍です」

荒れた息を落ち着かせながら、懸命に言葉を紡ぐ側近である。

「お、織田軍が動きだしました」

「織田軍だと？」

三好政康が驚いた。

「総勢五万以上。一路、ここ中島目指して進軍しているとのことにございますッ！」

「う、五万だと……」

三好長逸、政康両名ともに愕然とした様子で、耳を疑いながら、お互い、呆れたように首を傾げていた。

織田軍五万。

まず間違いはないだろう。朝倉・浅井を滅ぼしてまだ間もないというのに……。信長とは随分と忙しい男らしい。

「受けて立ってやる」

長逸がそう言うと、

「無論！」

政康はにやりと笑い、大きく頷いた。

【落日編】第157章 三人衆、壊滅！

気がつけば、無数の織田軍が取り巻いていて、気がつくと、味方はほとんどいなくなった。

ふと、長逸は三好政長のことを思い出した。三好長慶軍の猛攻を受けて、江口城に自決した男。江口城は今でこそ廃城のようになっているが、紛れもなく、ここ中島にあった城であった。

あの江口の合戦より二十数年という歳月を経て、同じように中島にて滅びようとしている自分の境遇に、長逸は思わず苦笑いした。あの時、圧倒的な長慶軍にどう足掻いても抗えなかった政長（当時は宗三と言った）軍のように、今の自分も、どう足掻いても圧倒的な織田軍には抗えそうもなかった。

「くつくく。歴史は繰り返す」

包囲している織田軍の総大将は佐久間信盛のようで、信長ではなかった。それが長逸には気に入らないが、まあ、仕方がない。三好三人衆筆頭として、申し分ない最期を遂げて見せる。岩成主税助友通とて、あれだけ華々しく玉砕したではないか。筆頭たる自分が軟弱な姿を見せてよいはずがない。

それにしても、織田軍とは実に忙しい軍である。つい数日前まで越前攻め、浅井攻めを行っていたのかと思えば、彼らを滅ぼすや否や、休む間もなく三好攻めの軍に早変わりして中島に押し寄せてきた。総帥たる佐久間信盛も越前攻めに従軍していたはずだが、再び摂津に舞い戻って三好攻め総大将の座に収まっている。

「ま、受けて立つただけだ。最期の最期まで、三好の一族に相応しき戦いをするだけのことだ」

一人小さく呟きながら、長逸はすつくと立ち上がった。

天正元年（一五七三年）九月中ごろ。

織田軍五万余が三好軍の立てこもる中島を包囲し、数日が過ぎた。

三好は兵力は当初一万だったが、圧倒的な織田軍に恐れをなしたのか、脱走兵が相次ぎ、今では七千程度にまで減じていた。

それでもまだ七千ある。難攻不落の中嶋城であれば、如何に織田軍とても簡単には落とせまい。苦戦していれば、いずれ安定を取り戻した四国三好家が援軍を繰り出してくれるだろうし、本願寺だつて動く。もしかしたら毛利軍が動いてくれるかもしれない。河内若江にいる三好義継も援軍を出しやすくなるだろう。情勢はまだまだ分からない。

「それにしても、織田軍とはひよろひよろな兵でござるな」

ある日の夜、三好政康が高笑いしながら、そんな風に言った。

「尾張兵は弱兵揃いとはよく言いますが、まさにその通り。今日の戦いの、奴らの腰の定まらぬ戦いぶりを見れば明らか」

ここ数日来、織田軍による熾烈な総攻撃が延々と繰り返されてきたが、さすがに中島は難攻不落の要所。三好軍の懸命な徹底抗戦もあって、彼らは攻めるたび、無数の屍の山を築くだけで、さしたる戦果もなく引き上げていくのだった。

「これなら、案外勝てるかもしれませんな」

子供のように無邪気な瞳を浮かべながらそう言う政康に、長逸は何も答えず、目を閉じたまま、ずっと黙想を続けていた。

「日向殿、如何なされた？」

政康が不思議そうな顔をして尋ねると、

「織田軍を侮るな」

長逸はきっぱりと言った。

「で、下野殿、四国のほうはどうなっているのだ？」

と、長逸が尋ねると、政康は呆れたような顔をして、首を横に振った。

「長治殿には領主としての才が甚だ欠けているように思われます。篠原殿を討ち取り、全権掌握したまでは良かったものの、家中はもとより領民に対してまで、強引に法華宗への改宗を迫ったりして、

不満を買っているようです」

「…」  
「そのためか、ただでさえ篠原長房に同情的な国人衆が、さっぱり長治殿の言うことを聞かず、長治殿はその討伐に躍起になっているようです」

「…」  
「しかし、長治殿だけでは、とてもではありませんが、討伐がおつかないの、讃岐から十河存保殿、淡路から安宅信康殿まで呼び寄せて討伐戦に明け暮れているとか。ただ、これは噂なのですが、こうした叛乱の裏には、阿波守護の細川真之殿がいるようなのです」  
「真之殿？」

ようやく関心を示し始めたらしい長逸が、苦々しげな顔をして呟く。

「そうです、真之殿です。形なりとも守護ですからな。反三好勢力にとつて、統合の象徴くらいにはなりましょう」  
「…いずれにしても、当分、四国は纏まりそうもない、ということだな」

「はい。残念ながら…」  
長らく三好家発展の原動力となってきた四国家が、こんな有様では、三好の命運も長くはあるまい。四国家が万全な体制を維持していれば、その動員兵力は二万以上は確実なのだ。二万もの援軍が到着すれば、戦局は一挙に覆るものを…。などと思いつつ、長逸は呆れたように酒を呷った。

三好長治は、あの名将三好実休の長子である割に、随分と凡庸らしい。まあ、何度か彼と会っている長逸だから、何となくそうなんだろうとは思っていたが、しかし、長年に渡り名君、名将を相次いで輩出して来た三好の血筋がどこかで覚醒するに違いない。彼は、密かにそう願っていたのに、期待は根底から覆された形だ。

長治はあくまで凡君に過ぎない。即ち、四国三好家は当分頼りにならぬ。

「それと毛利家ですが、最近北九州で大友宗麟との戦いが激しさを増しているようです。まあ、その大友も元龜元年（一五七〇年）の今山の合戦にて肥前の龍造寺隆信に敗れて以後、落ち目といえれば落ち目ですが、毛利としては、そこを叩いて北九州における地盤を確固たるものにしたいそうです」

「…要するに、毛利は上洛せん、ということだな」

「はい」

打つ手が悉く封じ込まれていく感覚に、長逸は何とも言えぬ脱力感を覚えた。これではどう足掻いても勝ち目はないではないか。

残るは石山御坊に陣取る本願寺顕如であつたが、これも織田軍の包囲下にあつて、簡単には動けそうもない状態に追い込まれていた。まあ、顕如が御文でも発すれば、諸国の一揆軍は一斉蜂起するかもしれないが、しかし強大な織田軍の前に、それはどれだけ有効だろう。甚だ疑問だ。

「まあ、仕方ない。後は、粛々と三好の戦をするだけだ。その結果滅び去ろうと、御先代様（長慶）の御霊に恥じぬ戦をすれば、それでよい。冥土にて、御屋形様に怒られるような無様を晒すわけにはいかん。我らは既に、散々、御屋形様に怒られるような真似を繰り返してきたのだから…。最期の最期くらいは、『よくやった』とお褒めの言葉に預かれるような戦をしようではないか」

長逸は誰に対してもなく、明確に自分自身に言い聞かせるようにして、そう言った。

「そうですな」

政康もにこりと微笑む。

「決戦だ！ 織田などに負ける、わが三好勢ではないぞ。はっはっは」

いつになく嬉しそうに高笑いする長逸は、一方で、その眼から、何ともいえぬ涙をばたばたと流していた。驚く政康に、「嬉し涙だ」などと抗弁していたが、実際のところは悲しいだけだった。之長が築き、元長が固め、長慶が大いに発展させた三好家。それを自分が

潰してしまった。自責の念が頭をよぎる。

織田などに負けるか！

とは思っても、これが三好家最期の戦になるかもしれないと思うと、長逸は言いようのない辛さを感じた。冥土で、長慶に何と云って謝ればよいのだろうか。長慶は何と云うだろう。怒るだろうか、蔑むだろうか。笑って許してくれるだろうか。

その夜。

年甲斐もなくびくびくとして、一人で眠ることができなかった長逸は、とりあえず愛妾と同衾していたのだが、それでも変わらず眠れず、仕方がないので、これからの世の中というものについて考えてみることにした。

三好の滅亡は確実だ。その後、織田が天下をとるだろう。そんなことは赤子にも分かる推測だ。織田信長は三好長慶ですら成しえなかった天下制覇の夢を成し遂げるかもしれない。

考えてみれば、信長と言う人はいろいろな面で長慶の政治方針を受け継いでいる。例えば長慶が足利義輝を追放したように、信長は足利義昭を追放しているし、長慶が布教を認めたと切支丹（キリスト教徒）に対しても、信長は引き続き布教を公認している。長慶が堺の町を重視し、ここから上がる利益を税金として徴収することにより三好家の財政を固めたように、信長もこの町を真つ先に支配下に置き、銭から鉄砲等々まで幅広く調達するようになっていた。

三好家は滅びても、長慶の夢は信長に受け継がれている。三好家が滅びることで、長慶の夢が実現に向かうかもしれないとは、何ともいえぬ皮肉ではあるが、しかし、自分たちに信長ほどの力があつたとしても、長慶や信長のような革新的政策を打ち出せるとは思えなかつた。結局、旧態依然とした支配制度にしがみついて、いつまでも無意味な戦国乱世が続いていくに違いない。

ならば、自分たちはこのまま肅々と滅びの道を歩むのが一番なのかもしれない。三好長慶の名を汚すことなく、堂々と戦い、堂々と

滅びる。それが一番なのだ。後のことは、信長に任せればいい。長慶の夢見た国は、彼の下で実現するに違いないのだから。

「お主たちは頑張った」

三好日向守長逸の頭の中に、そんな言葉が響いてきた。

「もう、これ以上虚勢を張る必要はない。お主は頑張った。よく、わが三好家をここまで維持して来た」

それは、昔懐かしき長慶の声だった。

「後のことは信長に任せよ。これ以上お主が抗えば、畿内はいつまでも戦乱状態のままだ。わしは幼き頃から嫌というほど戦を見てきた。そしてわし自身も随分と多くの戦を繰り返してきた。だが、その結果得られたものは何もない。空しさと辛さだけだ。幼き頃、わしは父元長が殺され、ざめざめと泣いたものだ。辛く、悲しく、寂しかった。だからわしは思ったのだ。こんな世の中ではいけないと。主君が家臣を殺し、家臣が主君を殺す。秩序も何もなく、ただ殺し合いが延々と繰り返されるだけの世の中は、何が何でも直さねばならん。そう思い、わしはひたすら戦いを繰り返してきた。

だが…。

気がつけば、わしは幼き頃のわしと同じ境遇に追い込まれた子供を無数に作り上げてきただけなのだ。しかし、戦の世をなくすためには、戦をしなければならぬ。凄まじき矛盾だが、しかしそれが節理なのだ。だからわしはひたすら戦いに明け暮れてきた。

だが、意味なき戦をしてきたつもりはない。あくまで戦の世をなくすための戦。しかし、今のお主たちは違う。三好の家を守るための戦に過ぎん。そんな戦のために、幼き頃のわしと同じ境遇の子が次から次へ生み出されているのだと思うと耐えられん。…お主たちは、わが夢と志を受け継ぐ三好の戦士であろう。ならば潔く身を引け。悔しいだろうが、織田に全てを明け渡し、天下を想う三好の天晴れを天下に示してやれ」

長慶の言葉は、まだまだ続く。長逸にはいろいろ反論したいこと



が山ほどあったが、どうやら幻想に向かつて彼が語りかけることは不可能らしかった。

長慶はさらに続ける。

「そして、お主たちは死ぬな。死なず、生きて、わしを含めた三好家の菩提を弔うのだ。そして、これからの世の中のことを逐次わしに伝えよ。信長がどんな世の中を作るのか。わしはそれを知りたい。わが夢、志を自分の力で果たせないのは悔しいが、しかし、わが夢に相応しい国が信長の下で作り上げられるのだとしたら、わしはそれを見たい。聞きたい。だが、残念ながら、今のわしに見ることはできん。それゆえ、お主がわが目となり耳となって、その後のことを伝えてほしいのだ」

長慶は、そう言つて、にっこりと笑つた。懐かしき故君の笑みに、長逸の目からはぼろぼろと涙がこぼれた。

「反論は許さんぞ。わしは独裁者じゃ。わしの意に逆らうことは、何人たりとて許さん。そしてこれは、独裁者たるわしの、最期の命なのだ」

長慶の幻が消え去つたのは、その直後のことだった。

長逸はがばつと飛び起きて、ハアハアと荒い息を吐いていた。

隣で眠る愛妾が驚いて起きる。「何事ですか？」という声を聞いて、長逸はようやくこれが現実であることを知った。

「御屋形様……」

長逸は再び涙を流した。幻想に過ぎないとしても、夢に過ぎないとしても、長慶に会えた。それだけで、長逸は嬉しかった。

翌日。

織田軍による総攻撃が始まるうとしている。

三好長逸は、かつて長慶より下賜された南蛮鎧を身にまとうと、全軍の先頭に立って、居並ぶ将兵たちを見下ろしていた。

三好三人衆筆頭。従四位下日向守。室町幕府御相伴衆でもあった

男は、ひたすら青き秋空を眺めながら、ゆつくりと目を閉じた。

「日向殿。いよいよですな」

政康の言葉に、「うむ」と大きく頷く長逸だった。

満天、青々と清々しい快晴が広がっていた。爽やかな秋風が、ヒユウウと吹き抜ける。パタパタと揺れる三好の旗が、何とも言えず誇らしい。

河内源氏の名門小笠原氏の系統に属する三好氏は、確かに阿波国内の土豪に過ぎなかったが、決して織田氏のような成り上がりではない。例え長慶の夢と志を受け継ぐのが織田信長なのだとしても、自分は長慶の家臣だったのだ。胸を張って、堂々と叫んでもいい。わしは、長慶様の家臣で幸せであった！ と。

「者どもッ！」

長逸は力の限り、怒鳴り声を張り上げた。

「いよいよ我ら三好の最終決戦が始まるッ！ 我ら三好家は、筑前守之長様の代より五代に渡り、この天下にその名を轟かせてきた名家ぞ。尾張からの成り上がりに過ぎん織田信長などに笑われては、末代までの恥と心得よッ！」

我らは偉大なる三好長慶公の遺志を継ぐ、紛れもなき三好軍だ！ 三好の旗の下、我らはここまで歩んできた。この御旗を汚すような戦は断じて許さん。長慶公より受けた恩義は山よりも高く、海よりも深い。その恩義にあだで返すような戦をした奴には、このわし自ら天誅を下してくれるから覚えておけよ」

ひとしきり叫び終えた長逸は、ゆつくりと居並ぶ兵士たちを見回した。どれも堂々として、凜としていて、確かに三好軍を名乗るに相応しい者たちばかりであった。三好長慶が築き上げてきた軍なのだ。これぐらいでなければ困る。

長逸は深紅の甲冑をかちやかちやと揺らしながら、ゆつくりと空を見上げた。黄泉の国はどこにあるのだろう。長慶はどこにいるのだろう。

「御屋形様。どうもそれがしは御屋形様の命を守れそうにもありません。

せぬ」

彼はそう呟くと、

「それがしもまた彼らとともに特攻し、玉砕しとうございます」  
心の中にて、長慶に頭を下げた。

三好長逸には、三好家をここまで追い込んだ責任がある。確かに自分たちには長慶の崇高な夢や大志を実現できるだけの力がなかったかもしれない。だが、長慶が育て上げてきた三好家をここまで衰退させてしまった責任があるのだ。ならば、せめて三人衆筆頭たる三好長逸は、これほど天晴れな武人だったのだということの後世に知らしめることで、少しでもその汚点を晴らしておきたかった。

彼はそう決意すると、隣に控える副将の三好政康に目をやった。すると、彼ははなから全てを理解していたような顔をして、

「承知した」

とだけ答える。だから、長逸はにつこりとほほ笑み、そして最後に、

「義継殿…、いや義継様に申し訳なかったと伝えてくれ」

と付け加えておいた。政康もにつこりとほほ笑んで、「承知」と大きく頷いた。

空は青く、風は心地よく、紅葉は真っ赤に咲き誇っている。

三好三人衆筆頭。長慶死後十年間、畿内に勢威を誇ってきた三好日向守長逸。

彼の心も、あの空のように晴れ晴れとしていた。

「申し上げます。織田軍に、動きがあります」

伝令の報告を聞くまでもなく、見れば織田の動きなど一目瞭然だった。

「いよいよか」

長逸はにやりと笑う。

いよいよだ。

彼はフウと静かに息を吸い込み、ハアと吐いた。

【落日編】第158章 義継と政康

「そうか」

河内国は若江城。松永弾正久秀の多聞山城を真似て作った天守閣の最上階で、三好左京大夫義継は悲しげな顔をしてため息を吐いていた。

「下がってよいぞ」

そう言って使者を下がらせると、義継は苦々しげな表情のまま、天守より見える下界をまじまじと見下ろしてみた。田舎町に過ぎなかつた若江も、今ではそれなりの規模を誇る城下町へと繁栄してきたように思う。ここ数年の義継の努力の結晶と言つてよく、人々が必死に働く様など、こうやって眺めていると、自然と顔がほころぶのだった。

「日向守、か…」

中嶋城にて玉砕した（とされている）、三好三人衆筆頭の三好日向守長逸。良くも悪くも、三好長慶亡き後の三好氏を代表する武将であつた彼の最期を聞くに及んで、義継の顔からは、大粒の涙がぼろぼろと溢れだした。

岩成友通が八月初頭に滅び、九月になつて三好長逸、三好政康が揃つて滅びたことで、わずか一カ月足らずのうちに三好三人衆は完全にこの世から消え去つてしまったことになる。

その上、八月中ごろには朝倉義景、浅井長政が相次いで滅びており、いつの間によら、畿内における義継の味方は松永弾正と本願寺顕如を残すのみとなつてしまった。そして、その松永弾正も、巷の噂では、既に信長と和議を結ぶ…、もとい降伏するかもしれないという話が実しやかに飛び交っている。まあ、三好を裏切り織田に付き、織田を裏切り三好についた男が、再び織田についたとしても何の不思議もないわけだが、もし松永までもが織田につけば、義継の

味方は本願寺のみ。孤立無援とは言わないが、苦しい状況に追い込まれることは確かだ。

ただ、悪い話ばかりではない。

信長によつて足利義昭が滅ぼされた頃。即ち天正元年七月のことだが、河内南半分を領有する畠山昭高が、重臣の遊佐信教によつて殺害され、今現在、高屋城は遊佐信教と、彼を支援した三好笑岩入道の支配下にある。親織田派であった畠山昭高が滅び、親三好派の遊佐と、三好笑岩入道が復権したのだから、義継にとってはこれ以上ない朗報と言えた。

しかし、だからと言つて、彼らの力が現在の情勢に大きな影響を与えとも思えない。北の義継、南の遊佐で、取りあえず河内一国は反織田の下、統一されることになった。しかし、三人衆と朝倉・浅井を滅ぼして意気上がる織田軍の前には、暴風の前の砂山に等しいだろう。

三好義継の憂鬱は尽きそうにない。

「義兄上、申し訳ない」

義継は、若江城本丸御殿の一角に居室を構える足利義昭に対し、そう言つて頭を下げた。

「三人衆が滅び、朝倉・浅井も滅び、もはや義兄上を都に御戻しするという夢は難しいものとなり申した」

率直に、簡潔に、義継は現実というものを、夢見る將軍に突きつけた。義昭は今も昔も変わることなく、せつせと御内書を諸国の大名に送りつけては、妹の夫たる義継の居城若江城を拠点に、反織田闘争を継続し続けていたのだった。

「何を申すか」

義昭は、義継をぎろりと睨みつけた。

「まだまだ織田に負けるような余ではないぞ。まだ畿内には本願寺があるし、西には毛利がいる。毛利輝元が動けば、反織田連合は今一度復活できる。ついては、上杉謙信、武田勝頼らにも御内書を送

りつければ、彼らも同盟に応じるに違いあるまい。特に上杉がこちらの味方につけば、如何な信長といえど、止めを刺せる！」

「上杉、にございますか」

信長と上杉謙信は、目下同盟を結んでいるはずだ。義理堅いことで非常に有名な上杉が、信長との和議を一方的に破棄して反信長同盟に加わるだろうか。

「いや、上杉は味方になる。何しろ謙信入道がまだ長尾景虎と言った頃、二度に渡って上洛し、わが兄義輝に謁見したことがある。その際、幕府の御為に働くは何度も誓って、わが兄を喜ばせた男だ。弟である余が幕命を下せば、奴は喜んで織田討伐軍を繰り出すに違いないあるまい」

義継も上杉謙信が二度に渡って上洛したことは知っている。とりわけ二度目の上洛時には、彼が五千にも及ぶ大軍を従えてやってきたものだから、三好政権を大いに揺るがす大事件となったはずだ。当時はまだ十河一存の息子でしかなかった義継だが、あの実父が慌てている姿を、幼いながらに覚えていた。

確かに上杉が動けば、再び信長を窮地に追いやることができるかもしれない。その上、毛利輝元、武田勝頼ら当代屈指の大大名を巻き込めば、信長は再び窮地に追い込まれよう。本願寺顕如や、及ばずながら三好義継も参戦すれば尚更だ。織田方の情勢が悪化すれば、松永弾正も再び織田に反旗を翻すだろうし、それに、その頃になれば、今は混乱の極みにある四国三好家も安定を取り戻しているだろう。もしこの構想が現実化するなら、信長は元龜二年（一五七一年）から元龜四年（一五七三年）初頭において味わった窮地以上の窮地を味わうことになるのだ。

「どうだ、素晴らしい策だろう」

自慢げに胸を張る義昭に、義継も悪くない策だと思った。上杉謙信が味方になってくれるか否か、という点に一抹の不安を感じないでもなかったが、実父信玄の代より反織田の姿勢を鮮明に打ち出し、今現在、織田方の徳川家康と激しい攻防を繰り返している武田勝頼

が反織田連合に加わるのは間違いないし、毛利輝元についても、これといった問題があるとは思えなかった。織田は毛利の宿敵尼子の残党を庇護下に置いておけるし、何より、織田の勢力がこれ以上拡大して西へ西へと伸びてくるようなことになれば、自然、毛利軍と激突せざるをえなくなる。毛利としては織田が強大にならぬうちに叩いておきたいと考えるはずだ。

上杉、武田、毛利。

西と東を代表する大大名が味方となれば、まず間違いなく織田は揺らぐ。とりわけ武田家は、信玄亡き後（現時点では病氣療養中とされているが、彼の死は公然の秘密として人々も承知していた）も、勇将勝頼の下、変わることもなき武威を誇っている。軍事的才能、という点においてのみ見れば、勝頼は実父信玄を凌駕していると言っても過言ではなく、実際、徳川家康は勝頼の猛攻を受けて苦しい戦いを強いられていた。

「問題は、上杉のみにございますな」

義継があえて念を押しておく、

「分かっている。だから先ほどから上杉宛の文を記しているのだ」  
義昭はそう言いながら、最後の一文を書き終えて、フウと小さなため息を吐いた。

九月、十月。

月日はあっという間に過ぎ去って、今や木枯らしの吹きぬける十一月となっていた。

三好義継の不安は尽きない。

上杉謙信、武田勝頼、毛利輝元、本願寺頭如らを巻き込んで、先の信長包囲網を上回る第二次信長包囲網の結成を企む義昭の構想は、義継にとって、今や唯一の希望となっていたが、義理堅い上杉が容易く応じるとも思えず、毛利は大友や龍造寺、あるいは尼子残党との戦いに追われて、本格的に信長討伐に乗り出せる余裕はない。唯一武田勝頼のみ信長討伐に出向ける余力を持っているように思うが、

そのためには徳川家康と言う障壁を乗り越えねばならず、既に徳川が三河・遠江二ヶ国を有する大大名となっている以上、そう簡単に勝頼が滅ぼせるとは思えなかった。

となると、少なくとも後数年は、今の状況が続くわけだ。信長とて愚かではあるまい。第二次信長包囲網なるものが完成する前に、その結成を阻止しようとするはずだ。さしあたり、信長包囲網結成の黒幕となっている足利義昭を庇護する三好義継などは、最重要標的となるに違いない。

さて、信長に目をつけられて、義継は領地を保てるだろうか。

それは甚だ難しいと言わざるを得ない。何しろ、三好三人衆とて信長の前にあっさり滅ぼされたのだ。朝倉・浅井ほどの大大名ですら倒されたのに、河内北半分を領するにすぎぬ義継に、圧倒的な織田軍を撃破できる力があるとは思えなかった。

「義昭様などを匿っておられれば、必ず織田は殿を攻めてきますぞ。今のうちに義昭公を追放するなり、信長に差し出すなりして、織田と和議を結ぶべきでしょう」

家老筆頭の池田丹後守などは、ここ最近、口を酸っぱくしてそう言っていた。多羅尾右近だの、野間長前ら他の家老たちも同様だった。彼らは基本的に今の義継の力では到底織田には勝てないから、早急に織田と和議…、即ち降伏して、御家の安泰を図るべきだと考えていたのだった。

「それはならん」

義継は頑なだった。

「何故ですか。大体、義昭様にとって、殿は兄の仇にございませう。今は確かに殿を利用しておられるかもしれませんが、もし義昭様が大志をなした時、あのお方が殿を重用なさるとは思えませぬ」

と、池田丹後が言えば、

「左様ですぞ。既に松永弾正殿も信長との和議に傾いているとか。今は時を待ち、信長の膝下に御家を保つが上策」



多羅尾右近もそう言つて義継に決断を迫つてきた。

池田丹後、多羅尾右近、野間長前ら、義継の三家老、通称若江三人衆は揃つて織田に降伏すべきだと主張していた。義継はうんざりといったような顔をして、

「降伏はせん。そなたたちはわしを誰と心得る？ 天下人三好長慶の跡目を引き継ぎし三好義継であるぞ。信長如き者に何度も頭を下げて、おめおめと男を下げられるか」

義継の脳裏には、信長と華々しく戦い、そして散つていった三人衆の姿がある。かつては三好家の維持こそ自分の宿命だと考えていた彼だったが、今では三好宗家を引き継ぎし者として、華々しき最期を遂げるべきだろうと思つようになっていた。

「確かに殿は長慶公の御跡目かもしれませぬが、今は河内北半国を領する若江城主に過ぎませぬぞ」

池田丹後守の辛らつな一言に、

「うるさい、うるさいッ！」

義継は腹立たしそうに怒鳴ると、「下がれ、目障りだッ！」と、三家老たちを退出させてしまった。

それから数日が過ぎたある日。

若江城に一人の珍客がやってきた。

「旅僧だと？」

義継は側近の報告に、不思議そうに首を傾げながらも、取りあえず面白そうだからと通すよう命じた。

ゆえにその僧侶はやってきた。僧侶、というより乞食と言つた方がよいような出で立ちをしていたが、そんなことより、義継はその僧侶の顔を見て驚いた。頭を丸め、確かにかつてとはだいぶ違つたが、しかしそこにいたのは紛れもなく、三好政康その人であった。

「下野殿、久しいな」

義継はすっかり様変わりした、かつての三人衆の一人の様に苦笑いした。

「義継様におかれましては、御元氣そうで何よりでございます」

かつて義継の家臣であった政康は、その時のままの態度で、恭しく頭を下げた。

「元氣そうね。ま、そう見えるのなら構わんが、わし自身は全く元氣ではない」

自嘲気味に笑う義継に、

「義継様も今年で二十三歳になられたようで…。義興様のこともありますれば、義継様には是非とも長生きしてもらわねば」

政康は淡々とした様子でそう言った。

「義興様、か…。そう言えば、今から十年前に二十二歳でお亡くなりになられたんだったな。そうか。義興様がお亡くなりになって、既に十年になるのか」

「はい。月日の流れとは速いものにございます」

「…全くだ。あの頃は、三好に並び立つ大名家など皆無であったものを。わずか十年でこの有様だからな」

はははと笑う義継に、政康も苦笑いした。

「それはそうと、中嶋城にて日向殿と最期に別れた折、申し訳なかつたと申しております」

「…日向殿が？」

「はい。おそらく、日向殿なりに自責の念を感じていたのでしょう。かくいう私もそうですが」

三好が急激に没落の道を歩み始めたのは、三好三人衆と松永弾正が、政権の主導権を巡って争い始めたからだ。結果、三好家は分裂し、織田信長の台頭を招いた。

三人衆の一人として、三好家没落のA級戦犯となった政康は、改めて、

「申し訳ありませぬ」

と、三好宗家当主三好義継に対して深々と頭を下げた。

「構わん。…わしが至らなかつたゆえに招いた悲劇じゃ。今さらそなたたちを責めても仕方ない。…ところで、日向殿は今、どうして

おられる？ 戦死したとも、無事逃げられたとも、いろいろ噂は流れているが」

「さあ」

政康は首を傾げて、

「あの折の日向殿の様子を見れば、討ち死になされたと思われませんが」

と、言った。

「左様か。だが織田方の首実検の際、日向殿の首はついに見つからなかったという。遺体もな」

「…そうですね。ならばおそらく、それは側近か誰かが首を隠したのではありませんか。日向殿は既に死ぬ覚悟を固めておられました。よもや生き延びておられるとは考えられませぬ」

「そう、か」

義継は悲しげに眼を落とし、しばらく黙りこんだ後、

「で、下野殿はわざわざ若江城に何用だ？ 日向殿の遺言を伝えるに参っただけか？」

と、聞いてみた。

「ふふふ。それもあります」

政康はにやりと笑い、そして「それがしも日向殿と同じく、三好家のために討ち死にしてみたくなり申した」と、言った。

「討ち死に？」

その物騒な台詞に義継の顔色が変わる。

「いずれ若江城にも織田の手勢が迫りましょう。その折、それがしもこの城にて働かせていただきたい。無論、一兵卒でよろしゅうござる」

「…討ち死にするためか？」

「左様」

きつぱりと言い切る政康に、義継は苦笑いした。

「ま、構わん。だが、仮にも三人衆の片割れであったお主が一兵卒では示しがつかん。わが家老として、わしを支えよ」

「…か、家老にござるか」

「そうだ。お主ほどの戦歴の持ち主は、今のわしには喉から手が出るほどにほしいのだ」

義継としては、紛れもなく率直な本音であった。いずれにしても、織田との戦いは避けられない。その時に備えて、できうる限り軍容を強化しておきたかったのである。そう考えた時、有能な人材はいくらいても困らない。その点、政康は三好一門の一人であるし、何より三好長慶時代より第一線で活躍するなど、戦歴豊富な名将だ。

「喜んでお引き受けしましょう。が、正式に家老にしていたたく必要はありませぬ。もしそれがしが家老になった、などと織田に知れば、それこそ織田を刺激するだけ。今はできるだけ時間を稼ぐが得策にございましょう」

と、政康が冷静に言つと、

「それもそうだ」

義継はにつこりとほほ笑み、そして大きく頷いた。

【落日編】第159章 若江城の戦い（前編）

十一月五日。

度重なる三家老（若江三人衆）の要求に応じる形で、三好義継は足利義昭を若江城から堺に移すことにした。義継としても、反信長を唱え続ける義昭をいつまでも若江城に置いておけば、信長に攻撃の大義名分を与えるだけだと考えたらしく、義昭も納得の上で、堺へ移ることになったのだった。

そんな風に織田信長への宥和的な方針を打ち出している義継であったが、一方では若江城を大幅に増築してみたり、鉄砲を買い集め、あるいは弓矢を大量生産するなどして、軍備の増強に勤しんでいた。無論、浪人をかき集めて兵力を増やしたり、長慶時代に蓄えられ、密かに若江城に移しておいた多量の銭や金銀を使って兵糧米を買い集めたりすることも怠ってはいない。とにかく、いつ戦が発生してもよいように、義継は急速に準備を進めていたのだった。

「織田方も準備を進めているようです。おそらく、年内には戦になりましょう」

と、三好清海入道（出家した三好政康の名）が言うと、  
「そうか」

義継は観念したような顔をして、小さく頷いた。

「で、下野…、いや清海入道。兵は如何ほど集まった？」  
「現時点で八千余。全国より浪人衆が殺到しておりますので、年末には一万ほどにはなりましょう」

軍師格として義継の側に侍り、義継政権の軍制改革を一手に担っている清海入道がそう答えると、「八千、か…」と、義継は頼りない顔をして、ハアとため息を吐いた。

「鉄砲は七百丁ほど。弓矢のほうに不足はありませんが、兵糧に少

々問題がありまする」

「…兵糧？ 足りんのか？」

「はッ！ 少々。今年は領内の農家、どこも不作だったらしく、買い集めるにしても農民たちの保有量にも限度がありました。城下の商人たちからも買い集めておりますが、如何せん値が跳ね上がっております。堺衆にも要請したのですが、信長の目が光っており、難しいのです」

清海が申し訳なさそうに頭を掻くと、

「仕方ない。農民どもにも生活がある。無理にかき集めるわけにもいかんからな。…だが、顕如上人には前々から兵糧支援を申しこんでおいたはず。上人からは連絡はないのか？」

義継はそう言って清海の顔をじっと見つめた。

「それが…。本願寺も連年の戦で財政状況は決して芳しくないらしく…。彼らも専ら、毛利からの支援に頼り切っている有様とか。その毛利も尼子、大友らと争っておりますので、本願寺向けの支援でやっとな。本願寺もそのわずかな兵糧を我らに回す余裕などなく、結局上人からは音沙汰なしでございます」

状況はどうにも芳しくないらしい。義継でなくとも頭が痛かろう。金ならばいくらでもあったが、品物と交換できなければ、ただのがらくたも同然だ。

「で、織田の動きはどうなっている？」

と、義継が尋ねると、

「どうやら佐久間信盛の指揮下に四、五万の軍が編成されているとのこと。まあ、詳細は分かりませぬが、佐久間が総大将となることは間違いないようだ」

淡々とそう答える清海入道であった。

撰津中島。

三好三人衆が壊滅して以来、このあたり一帯は織田軍の制圧下に

あつたが、その織田軍を束ねて、占領政治を一手に担っていたのは、織田家筆頭宿老の佐久間信盛であつた。

佐久間信盛といえ、織田の筆頭宿老というだけでなく、しんがり殿軍を得意としたことから、『退き佐久間』と呼ばれて恐れられている男だつた。まあ、柴田勝家のように際立つて戦に秀でてはいるわけでも、羽柴秀吉や明智光秀らのように政治の才覚に非常に長けているといふわけでもないが、しかし何事も無難にこなせる万能的な能力は、草創期の織田政権にとっては貴重だつた。

しかしそれ以上に、信長にとって、信盛は最も信用のおける重臣であつた。何しろ、彼の父、即ち織田家先代当主信秀の死後に発生した家督争いでは、林秀貞や柴田勝家ら主要な重臣たちが挙つて弟の信勝（信行とも）に付いたのに対し、信盛だけはあくまで彼に付く姿勢を鮮明にしていたからだ。結局、織田家有力家臣である信盛らの力もあつて、信長は信勝に勝利し、織田家家督の座を確固たるものとしたわけであるが、この家督争いは、その後の信長の政治方針や家臣団への接し方等々、様々な点に大きな影響を与えたと言われている。即ち、この事件で信勝方に味方しながらも、情勢の不利を見て信長に寝返つた重臣たちは、ほぼ例外なく、最期の最期まで信長から疑われていた。例えば信勝一派の筆頭格であつた林秀貞などは後に織田家から追放されているし（このことから二十数年たつた後も、信長はこの事件のことを根に持ち続けていたことが分かる）、信勝一派に属した中では最も重用された柴田勝家に対しても、越前に入国する際、自分のいる安土の方角に足を向けて寝るな！等々、いろいろしつこいほどに指図している。自らの筆頭家老にして、北国軍団総司令にまで抜擢した勝家に対してさえも、根本のところでは信用しきれていなかった証と言えよう。

ともかく、林や柴田らとは違つて、決して裏切ることのなかつた佐久間信盛は、信長から凄まじいまでの信任を受けていた。彼の最盛期には、他を寄せ付けぬ圧倒的な筆頭家老の座を占めていたし、近畿地方における織田軍団を悉く指揮下に置き、信長最大の敵とい

えた本願寺討伐を担当していたほどである（彼の失脚後、その大軍団は明智光秀の下に再編され、光秀が強大な力を得るきっかけとなった。ただし一部は織田信忠の軍団や織田信孝や丹羽長秀らの四国方面軍、さらには羽柴秀吉の中国方面軍に編入されている）。

ともかく、その信盛は今、中島にあつて兵力の編成を進めていた。全ては、このところ反織田姿勢を鮮明に打ち出して軍備増強に勤んでいる三好義継を討伐するためである。

左京大夫義継を滅ぼし、河内を掌握せよ！

それが信長より下された命令である。信盛は粉骨碎身の覚悟で、信長の命に応えるつもりでいた。

「兵は集まつたか？」

と、信盛が尋ねると、

「四万五千ほどが集まりました」

そう答えるのは、彼の嫡男たる佐久間信栄であった。

「四万五千か……。で、若江にはどれほどの兵がいる？」

十月の頭。先ほどからヒュウヒュウと木枯らしが吹きぬけているが、信盛はさして気にする風もなく、淡々と信栄に尋ねていた。

「八千を若干上回る程度かと」

と、信栄。

「八千？ 案外多いな」

「左京大夫は諸国の浪人衆を悉くかき集めておりますから。この勢いでいけば、年内には一万を超えましょう」

「……一万か。一万の大台を超えると厄介だな」

「はい。堺にいる貧乏公方がまたいらぬ考えを抱きかねませぬ」

「一向一揆など起こされてはたまらんからな」

信盛はそう言ってニタニタと笑った。

「よかるう。これより直ちに若江へ進軍する。全軍に下知せよ。左京大夫には一瞬たりとも時間は与えぬ。織田得意の電撃戦で踏みつ



ぶしてくれる」

もとより彼の頭に敗北の文字はない。四万五千の大軍でもって若江へ押し寄せ、三好の歴史ごと義継を滅ぼしてくれる。なんて眩いているほど、彼は余裕綽々なのだった。

織田軍動く！

その急報は瞬く間に畿内全土を駆け巡った。

それは当然、若江城の三好義継の下にも届けられ、若江城及び城下は徹底した戒厳下に置かれることになった。

若江城に入った義継軍は総勢六千。一時八千を数えた義継軍だが、圧倒的な織田軍に恐れをなしたのか、浪人衆を中心に脱走兵が続出結果として二千ほど足りない六千人しか集まらなかったのだった。

「六千、か…」

義継は困ったようにため息を吐き、

「構いますまい。この程度で逃げだす兵など、はなから願ひ下げ」

清海入道はぼんと胸を張った。

「で、援軍はきそつか？」

「援軍ですか？ 弾正は望み薄ですな。既に奴は信長に内通しておりますからな。絶対に援軍は出しますまい」

清海が断言するように言うと、義継は「そつか」とため息交じりにぼやいた。

「本願寺にも使者は送りましたが、織田の防衛網を突破して、若江こゝにやってくるには、それなりの時間がかかりましょう。まあ、一向門徒は全国津々浦々あちこちにおりますゆえ、領内の門徒衆が動いてくれれば、早急に援軍が到着する可能性はありますが」

「…一向門徒が動けば、勝算もあるうが」

なんて眩きながら、義継は、父十河一存や養父三好長慶らから散々聞かされてきた、祖父元長の最期を思い出していた。

堺公方（十四代將軍足利義栄の実父足利義維のこと）の扱いを巡

る主君細川晴元との対立、細川政権の主導権を巡る晴元側近の三好政長、木沢長政との対立、三好宗家家督の座を巡る三好政長との対立、さらには畠山家内部の主導権を巡る畠山家当主畠山義堯と同家筆頭家老木沢長政の対立など、様々な対立が複雑に絡み合った末に、畠山義堯の要請を受けて木沢長政の居城飯盛山城を包囲した三好元長は、圧倒的大軍をもって木沢長政を窮地に追い詰めるが、木沢方に味方した一向一揆軍に後背を叩かれて敗北、自害に追い込まれたという。

一向軍が味方となってくれば、自分もまた、窮地を脱して勝者の座を掴んだ木沢長政のようになれるかもしれない……、と、義継が期待したのも無理はなかった。

しかし、

「あまり期待しないことですな」

清海入道は淡々と言つて、につこりとほほ笑んだ。もとより討ち死にを覚悟している男は、余り援軍には興味がないらしかつた。

天正元年（一五七三年）十一月十五日。

この日、佐久間信盛率いる織田軍四万五千が、若江城を包囲した。対する三好義継軍は総勢六千である。兵力差は歴然としており、どちらに軍配が上がるか、なんてことは火を見るよりも明らかであった。

「結局、こうなつてしまつたか」

苦り切つた顔をしてため息交じりにぼやいているのは、池田丹後守教正であった。三好義継の筆頭家老でもある彼は、

「これだけの戦力差があつては、もはや勝ち目はあるまい」

と、呟く。

「それもこれも、清海とかいう、どこの馬の骨ともしれぬ坊主を重用して、軍備など増強するから、織田殿の御不興を買つたのだ」

同じく家老の多羅尾右近が続ける。

「左様。それにしても、清海とかいう坊主はいつたい何者なのだ？  
殿の信任を得て、城内で我が物顔にふんぞり返っているが…」  
野間長前がそう言っていると、池田丹後、多羅尾右近両名も大きく頷いた。

通称若江三人衆。

このところ、義継政権下で発言力を失っていた親織田派の領袖である。そして、河内国内に領地を有する有力な国人領主でもあった。主君義継の暴走が招いた悲劇に連座して、自分たちまでも滅亡する気は更々ない。

「こうなつた以上…」

野間長前が言つと、

「やむをえませんな」

多羅尾右近が頷く。筆頭家老の池田丹後も否定しない。

三人はそれぞれ深刻そうな顔をして、ハアとため息を吐いた。

【落日編】第160章 若江城の戦い（後編）

天正元年（一五七三年）十一月十六日。

三好義継は若江城天守閣にあつて、眼下に広がる圧倒的な織田軍団をじろりと見下ろしていた。

織田軍の戦力はさらに増していて、既に五万近くにまで膨れ上がっていた。一方、三好軍は六千から減つてもいなが増えてもいない。このままだと、もし佐久間信盛が総攻撃命令を発すれば、若江城は一日もせぬうちに陥落してしまいかねなかつた。

「落ちれば、三好家は真正銘おしまいだな」

三人衆が減びた今、若江城の義継は、畿内に残つた三好家唯一の砦である。彼までも減びたなら、三好の勢力は阿波の三好長治、讃岐の十河存保、淡路の安宅信康の三人を残すのみとなつてしまう。即ち、三好長慶が挙兵上洛した天文八年（一五三九年）以前に戻つてしまうことになるのだつた。

「一向一揆でも起きれば話は別だろうがな」

自嘲気味に苦笑いする。一揆勢如きに頼らねばならぬ今の自分が、何とも言えずもどかしかつた。

義継はその足で奥御殿に赴くと、

「孫次郎殿」

彼は無邪気に遊ぶ孫次郎義資に目をやって、悲しげに苦笑いした。故三好義興の遺児である彼も、既に十一歳である。考えてみれば、養父長慶や自分が家督を相続したのも、これぐらいの年頃だつただなあ、と一人物思いに耽りながら、

「孫次郎殿は何をなさつておいでかな？」

兄貴分として、彼は無邪気に遊ぶ少年の下に駆け寄つた。

「あ、兄上！ 今、暮など打つておりました」

「碁？」

見れば確かに碁盤の上に、綺麗に碁石が並んでいる。どうやら少年が優勢なようだ。相手役の女官は恥ずかしそうに頭を掻きながら、「若君様はお強うございます」

と、言った。

「…確かに孫次郎殿は強いようだ。これなら、将来的には必ずや名将になられよう」

義継は「ははは」と楽しそうに笑って、その場にゆっくりと腰を下ろした。

昼ごろ。

義継は前線にあつて指揮を執る三好清海入道を本丸に呼びつける

と、頼みがある

と、切り出した。

「何でしょう？」

清海は不思議そうに首を傾げ、義継の顔を恨めしげにじろりと睨みつけた。大した用でないなら後にしてほしい。とでも言わんばかりの顔をする彼に、義継は「ははは」と苦笑いした。

「お主は討ち死にするためにわが城に入ったと言つたな」

義継の言葉に、

「左様です」

清海入道はきつぱりと言い切つて、大きく頷いた。

「ならばそれは諦めよ」

義継は清海をぎろりと睨みつけた。

「何故です？」

清海は「今さら、何を…」と呆れたような顔をして、じつと義継を見つめていた。

「何故か…。何故か、ねえ。一言で言うなら、お主に守ってもらい

たい人がいるのだ」

「守ってもらいたい人？」

清海の顔がますます疑問符に染まっっていく。

「孫次郎殿…、孫次郎様だ」

「孫次郎様？」

「左様。孫次郎様だ。今は亡き三好筑前守義興様の御遺児」

義継の説明を受けるまでもなく、清海とて孫次郎義資のことくらい知っていた。今は亡き三好長慶が遺した遺命によって、義継の次の三好宗家当主と定められた人。之長、長秀、元長、長慶、義興と続く三好宗家嫡流の血筋を受け継ぐ、たった唯一の貴公子でもある。俺が、お主たち三人衆と袂を分かつて織田に降伏したのは、せめて、この若江の領地だけでも孫次郎様に譲りたいと考えたからだ。しかし、結果としてこうなった。若江の陥落も時間の問題だろう。

ならばせめて、孫次郎様は、孫次郎様だけでも逃げ延びていただき、三好の血筋を保ってほしいのだ。孫次郎様は義興あにつえ様の遺児。俺などより三好宗家の血筋に近い。彼が生き延びれば、それだけで三好家は保たれる」

「…それは、確かにそうですが」

清海とて否定はしない。しかし、だからといって、自分だけがこのこと城から逃げ出すことなどできるはずもなかった。

「孫次郎様をお助けしなければならぬという、殿の御気持ちは承知いたしました。それがしも全く殿と同意見にございます。が、だからといって、それがしが逃げ出す必要もありません。それ相応の家臣をつけて逃がせば、それでよろしいかと」

清海としては、死にたいのだ！ 岩成友通も三好長逸も、皆、三好家のために凄絶な最期を遂げた。三好義継もまた、偉大なる三好の名を背負って玉砕しようとしている。それなのに、自分一人おめおめと逃げ出し、生き延びるなんてことが許されるだろうか。

いや、許されるはずがない！

清海はそう思い込んでいる。長逸は言った。自分のせいで三好家

は没落したのだから、責任を取らねばならない、と……。だったら、長逸と同盟を結んで三人衆という一大政治勢力を結成していた清海にも責任は十分あるのだ。三好家をここまで追い詰めてしまった責任をとって、せめて、三好宗家最期の戦で華々しく討ち死にしたかった。

「お主でなければ駄目なのだ」

義継はきつぱりと言って、清海の肩をぼんと叩いた。

「反論は許さぬ。これは主命だ」

「し、しかし……」

清海は色をなして反論しようとしたが、

「煩いッ！」

義継は大音声張り上げて、烈火のごとく怒鳴り散らした。

「お主のほかには誰に頼める？ 池田丹後ら家老どもは余り頼りにならないしな」

悲しげな顔をして、ため息交じりに肩を落とす義継を前にして、清海はただ言葉を失った。

「全く。この世とは至極空しいものだ。できれば孫次郎様には、この世の苦労など一切知らずに育てていただきたかったが、こうなつた以上仕方あるまい。せめて生き延びていただき、三好の血筋だけでも後世に伝えてもらわねば……。長慶公、義興公の血筋が連綿と受け継がれれば、いずれ三好家が復権することもできるかもしれない」  
そんな義継の自嘲気味なぼやきに、清海は「そうですな」と困つたような顔をして、静かに頷いた。

清海入道に伴われ、三好孫次郎義資が城内に設置された秘密の抜け口を通じて脱出した頃。即ち日暮れ時のことだった。

織田軍に動きがあった。

「もう日暮れだぞ？ 織田に動きとはどういうことだ？」

夜襲でもかけてくるつもりなのか？

そんな義継の疑問に、

「わかりかねますが、佐久間信盛の本陣より総攻撃の命令が下つたと、間者から知らせが参りましてございます」

側近はそう答え、静かに頭を下げた。

「総攻撃だと…」

なぜ今なのだ？ 後数十分もすれば、完全に日は暮れるだろう。

しかし圧倒的優勢に立っている織田方が夜襲に出てくるような理由はない。攻撃したいなら、明日まで待てばいいのだ。別に今日中に決戦しなければならぬ理由があるとも思えない。

「なぜだ？」

まあ、攻めてくるなら攻めてくるで、義継としては別に構わなかった。どうせいずれ戦になることは間違いないわけだし、夜の戦なら、数が少ないために統率がとりやすく、また城にこもっている義継軍のほうが有利だ。

「とりあえず嚴重警戒態勢を取れ。織田方が攻撃を始めたら、絶対にこれを蹴散らせ。三好の意地にかけても、たった一日で陥落するようなことがあってはならん」

義継は居並ぶ重臣にそう命じて、フウと静かに深呼吸した。

いよいよ戦が始まるのだ。これまでに何度か戦を経験して来た義継ではあるが、いざ戦となると、やはり落ち着かぬものだった。玉砕覚悟の戦ともなれば尚更だ。

通称『織田木瓜』と名付けられた家紋をあしらった無数の旗が、織田の軍中に轟めいている。

織田軍本陣は城下町の外れにある小さな寺の中に置かれており、総大将たる佐久間信盛は、先ほどからずっと床机の上にでんと腰を据えて、ため息ばかり吐いていた。

「これで、三好もおしまいだな」

そんな風の中で呟きながら、信盛は静かに目を閉じた。かつ



て天下にその名を轟かせた三好氏が、今まさに滅びようとしている。しかも自分の手で…。そう思うと、何とも言えず不思議な感じがした。

「申し上げますッ！」

そこに、使番が慌ただしく駆け込んできた。

「池田丹後が約定通り、城門を開きました」

使番の報告に、「そうか」と、別段驚く風もなく、静かに頷く信盛であった。

「多羅尾右近並びに野間長前兩名も城門を開き、わが軍を引き入れましてございます」

相次ぐ朗報にも、信盛の答えは「そうか」とか「ふーん」といった、実に素っ気ないものばかりだった。

池田丹後守教正、多羅尾右近、野間長前。

以上三人は三好義継を支える家老であり、総称して若江三人衆と言う。

そんな彼らが、揃って織田軍に寝返ったのである。そのことを知った義継は、驚きを隠しきれぬような顔をして、

「な、なんだとおお！」

と、怒鳴っていた。

「申し上げますッ！ 織田軍が怒涛の勢いで迫ってきております」  
使番の報告に、義継はがっくりと肩を落として、力なく腰を落とした。

そ、そんな、バカな…。

義継でなくとも、目の前に公然とふんぞり返っている現実というもの疑いたくなるだろう。否定したくもなるだろう。あれだけ信任を置いて家老の座を任せてきた三人の重臣に裏切られたのだ。バカな！ と叫びたくもなるだろう。ひしひしと、容赦なく押し寄せてくる現実と言う奴は、余りに義継に対して冷たすぎた。

「…バカな」

義継は口をパクパクと震わせながら、

「終わった…、何もかも…」

静かにぼやいていた。

三家老の裏切りにより、城門はいとも容易く突破され、城内は瞬く間に織田軍の兵士たちでいっぱいになった。

既に二の丸、三の丸は陥落し、残すところ義継のいる本丸御殿と天守閣だけになっていた。義継はその天守に、正室の御台所（足利義昭の妹）や側室の藤の方など主だった一族をかき集めて、悲壮感漂う最期の晚餐に臨んでいた。

「すまん」

開口一番、義継は居並ぶ面々に頭を下げた。

「余が不甲斐ないばかりに、かような末路を歩むことになった。願わくば、皆には三好の名に恥じぬ見事な最期を遂げてもらいたい」  
彼は静かに小さなため息を吐くと、荘厳な甲冑をかちやかちやと揺らしつつ、天守閣最上階の窓の方へと歩み寄った。

織田、織田、織田、織田。

見下ろせば、そこには悉く織田の旗しか見えなかった。『釘抜』

印の三好の旗は、どこにも全く見つけれられない。

「火を放て！」

覚悟を決めたように、ギョツと拳を握り締めると、彼は側に控える側近にそう命じて、その場にゆっくりと腰を下ろした。

自分が死ねば…。自分が死ねば、大名家としての三好宗家は完全に滅び去ることになる。一時はあれだけ栄華を誇った三好宗家が、跡形もなく滅び去るのだ。盛者必衰とはよく言ったものである。

義継はふと、かつて阿波国平島御所にて足利義栄と謁見したときのことを思い出していた。あの頃の自分は、自他ともに認める天下人、三好政権の主として無力な義栄の哀れを思い切り同情していた

が、今の自分は、かつての義栄以上に哀れな立場に追い込まれていた。

全く、世の中の移り変わりとは凄まじいものだ。

三好義継は静かにため息を吐くと、腰に下げていた脇差をすつと抜きはらった。

「この世とも、これでおさらばだな」

少しでも物思いに耽りだすと、あれもしたかった、これもしたかったと、いろんな感情が脳裏をよぎる。

死にたくない。

それが義継の率直な本音であった。しかし、周りを見回すと、既に居並ぶ全員が頸動脈を掻き切つては凄絶な自害を遂げていた。今さら自分だけ、死にたくないなんて言えるものでもない。

無機質で青白い閃光が、きらりと光る。

短くも鋭い刃先は、お腹に突き立てると、確かに痛かった。

彼は最期の力を振り絞つて、腹に十文字を描く。

炎はいよいよ勢いを増して、義継の周りにも及びつつあった。ガラガラと何かが崩れ落ちる音がしたかと思うと、ダアアアア、ダアアアと、何かが破裂したような轟音が轟いた。おそらく、常備してあった火薬に引火したのだろう。そのたび、猛烈な爆風が彼の体にのしかかってきたが、お腹に走る激痛と格闘している義継には、別段どうということもなかった。

どんどん意識が薄れていく。

だんだん意識が遠のいていく。

これが死。

不思議なものだ。おそらく目を閉じたら、二度と起きることはないに違いない。永遠の眠りに付くだけの話だ。気にすることもある

まい。

黄泉の国とはいったいどこにあるのだろう。そこには養父長慶や実父一存はいるのだろうか。いるとしたら、三好家を滅亡に追いやったことを謝したかった。合戦のこと、政治のこと、女のこと……いろいろなことを思う存分語り合ってみたかった。

城が燃える。天守が燃える。

ありとあらゆる全てを突き崩して、城主たる従四位下左京大夫三好義継もろとも若江城は陥落した。

十河一存の子として生まれながら、実父の死後三好長慶の庇護下に入り、次いで三好義興の死後、三好宗家の家督を継いだ青年は、かくして紅蓮の炎に包まれながら、壮絶な最期を遂げることとなった。

享年二十三。

彼の死と共に、戦国史上にその名を轟かせた三好一族の宗家は、その歴史に幕を閉じることとなったのであった。

【落日編】第160章 若江城の戦い（後編）（後書き）

ついに義継が死に、三好宗家は滅びてしまいました。三好長慶伝と銘打っておきながら、既にほとんど長慶関係なし…（笑）。申し訳ありません。しかし義継が死んでもまだ話は続きます。いつそこまできたら、三好氏が真正銘滅び去るまで書き続ける覚悟です。できましたら、是非最後までお付き合いください。

【滅亡編】第161章 十河戦記 序章

讃岐国は十河城城下を少しばかり西に行ったところに、十河家の先祖を祀った無数の墓群があった。

最近ここに一つ墓が増えた。本当の墓ではないので、余り立派なものではなかったが、とある青年が、是非ここにもと主張したので置かれた代物だった。

十河家之墓と記された墓石には、法名のほかに生前名が記されている。

『十河重存』

それは十河家先代当主たる男の名前だった。昨年十一月に戦死した従四位下左京大夫三好義継の前名でもある。

「殿。お時間です。そろそろ出立いたしませぬと、今日中に勝瑞城には辿りつけませぬぞ」

家臣の言葉に、

「そうか」

と、小さく頷く青年だった。

パンパンと手を叩き、軽く頭を下げる。

空を見上げると、今にも降り出しそうな曇天だった。

何とも言えず物悲しい灰色の世界に、青年は思わず苦笑いした。

自分の今の心境とそっくりだ。自分の心と世界のあり様が、見事なまでにくつついてしまったような感覚に、青年は「ははは」と乾ききった笑みを漏らした。

ひとしきり笑った後、フウとため息を吐く。

なぜ、こんなことになったんだろう。ふと思う。

「殿」

家臣が急かすように彼の肩を叩くと、

「分かっている」

青年武将は静かに頷き、そして墓に背を向けて歩き出した。

行列を組んで歩いている限りにおいては、世界は平和そのものだった。

別に戦なんて一切起きないし、もとより大名行列に攻撃を加えようなんて愚かしいことを考える奴もいないだろう。完全武装の精鋭五百騎に守られた青年一行は、世界で一番安全な旅路を急いでいた。

海に山、そして川。

見れば見るほど自然に満ちたのどかな世界だ。

しかし、何度見た光景だろうか。

駕籠の中から見えるありふれた、変わることなき世界に、青年は苦笑いした。

青年にとつて、四国の東海岸沿いの光景は、くどいほど何度も見た景色だった。阿波に生まれ、ひよんなことから讃岐の国主となり、以来、阿波国主となった兄の下に行ったり来たり。そりゃ、馴れるわな。青年武将は「くくく」と噛み殺すような笑い声を出して、腹を抱えた。

「如何なさいました？」

側近が訝しがって彼の下に近寄ってきた。

「気にするな。思い出し笑いだ」

「思い出し笑い？」

「そつだ。気にするな」

二度ほど気にするなと言ってから、青年はフウと静かに深呼吸して、目を閉じた。

讃岐を出、阿波に入国したことは、一目見ればすぐに分かった。

民衆一人一人が殺気立っている。さすがに大名行列と見れば、慌てて沿道にひれ伏すが、さりとして、殺気立った雰囲気そのものを消すことはできない。

数年前とはがらりと違った世界の有様に愕然としつつ、青年一行は先を急いだ。勝瑞城は近い。かつて実父実休が居城とし、今は兄たる三好長治が居城を置いている。それ以前は、細川持隆の居城であったと言い、それより前は、細川澄元・晴元親子の居城であったというが、そんな昔のことは、青年には全く分らない。

とにかく、そこは今では兄の居城であるということだけは確かだった。伯父たる三好長慶の死後、阿波国守護代の座を引き継ぎ、名実ともに同国国主の座を確固たるものにした兄は、今では壮大な巨城の奥に閉じこもって、女子に酒に明け暮れた惨憺たる毎日を過ごしているという。

「…余り兄の政治は褒められたものでないようだ」

篠原長房を粛清し、ようやく念願の親政を執るようになった長治だが、その政治手法は実に雑で、無謀なものばかりであった。

やりたいことがいろいろある気持ちは痛いほどわかる。十河存保だって、十河家の家督を引き継いでしばらくの間は、あれもやりたい、これもやりたいと、いろいろ理想に燃えて、無理をしたものだった。けれど理想と現実とは全く違うわけで、政治なんてものは理想と現実の妥協の産物であると言っても、決して言いすぎではなかった。

「法華宗の強要が裏目に出ましたな」

物知り顔でそう言うのは、重臣の寒川元隣という男だった。

「まあな。兄上が民衆を法華宗に改宗させたかった気持ちもわかるが、もう少しやり方があるだろうに。強引に、これまでの宗教を捨てさせて、いきなり法華を信じろって言っても、誰だって普通反発するだろうよ」

存保は呆れたように呟きながら、荒れ果てた大地に目をやった。



おそらく、ここでも戦があつたのだらう。状況をみるに、そう前の話でもないようだ。

三好長治が篠原長房を肅清して以来、旧篠原党と長治政権の間で無意味極まりなき内戦が繰り返り広げられているというし、その上、法華宗強要に反発した民衆が一揆をおこすなど、阿波国の政情はこのところ極めて不安定なものとなっていた。

それは、存保がわざわざ五百騎もの兵を率いて、勝瑞城への道のりを急いでいる理由の一つでもあつた。篠原長房が執政していた時代なら、別に数人の供廻りだけで勝瑞城にひよいひよいと遊びに行くこともあつたけれど、今、そんなことをしたら、下手すれば盗賊やら、一揆衆などに拉致されて殺される。

勝瑞城に入った十河存保は、そこで兄たる三好阿波守長治に謁見することになっていた。

ともかく長治に謁見すべく、慣れ親しんだ城内をすいすいと先に進むと、一人の男と出くわした。

「清康殿ではありませんか」

存保は少々驚いた。どうやら安宅家の下にも長治から呼び出しがあつたらしく、それゆえ彼は、淡路より、兄信康の代理として勝瑞城にやってきていたようであつた。

「お久しゅうござる」

と言つて、存保はぺこりと頭を下げた。

存保にとつて、安宅清康は紛れもない従兄弟であつた。だから清康も、

「お久しぶりです、民部殿」

仰々しく頭を下げると、お互い、その余りに余所余所しい態度に、はははと苦笑いした。

「今日は、信康殿は？」

存保が不思議そうに尋ねると、

「兄は少々多忙にて、それがしが代理で参りました。何しろ、織田軍の脅威が迫っておりますからな。総大将たる兄上が、国許を留守にするわけにはいかないのです」

と、清康は言った。

「なるほど。淡路は最前線にござるからな」

「はい」

清康は大きく頷き、胸を張った。織田め、来るなら来い！ 安宅水軍の力で踏みつぶしてやる。とでも言わんばかりの顔つきに、

「頼もしいことだ」

存保はにつこりとほほ笑んだ。

「もし織田と戦になるようなことになれば、それがしも必ず軍兵を率いて信康殿の下にはせ参じましょう。その旨、信康殿に是非お伝えを」

と、存保が言えば、

「ありがたき幸せ」

清康は恭しく頭を下げ、楽しそうに「ははは」と笑った。

二人は揃って三好長治の執務室に出向くと、そこに広がる光景に、呆然と立ち尽くした。

「あ、兄上？」

そろそろ夕刻を迎えるとはいえ、まだ夜ではない。それなのに、長治は女子と戯れていたのだった。十河、安宅兩名が来たことぐらい報告が入っていただろうに、なお女子と遊んでいた彼をぎろりと睨みつけつつ、二人は構わずかずかと中へ入っていった。

「女子遊びとは結構な御身分ですな」

存保が痛烈な皮肉を浴びせると、

「ああ、この城の主は俺だからな」

長治は真面目に返した。

「そう言う意味ではありません。…全く、兄上は昨今の情勢を御存

じないのか？ 知っていれば、女遊びなどに精を出している暇ではないことぐらいおわかりであろう」

ただでさえ、阿波国内が混乱しているというのに……。

口にもこそ出さないが、存保の目は露骨に兄を糾弾していた。その失政を痛烈に咎めていた。

「仕方ないだろう」

長治は言い訳する子供のよような顔をして、

「どうせ俺が何をしても、どうにもならぬ世の中なのだ。女遊びくらい、させてくれよ」

と、言った。

「兄上。兄上がそんなことでどうなさるのか。兄上は我らの総大将でござろう。阿讃淡三国を束ねて織田に立ち向かっていくべき御方が、左様な有様で、兵どもが従うと御思いか？」

「…俺が、阿讃淡三国の大将ねえ」

形だけだろ。とでも言いたげな彼の瞳に、

「左様。阿波守殿こそが四国の総大将にござるぞ」

安宅清康が念押しするように続けた。

「ふーん。だが、阿波一つまともに治めきれぬ俺に、そんな資格はないだろう。どうだ。いつそ信康殿に旗頭の座を譲ってやるぞ」

そう言つて、清康の顔を覗く長治に、

「兄上。戯言はおやめあれ」

存保はきつぱりと言い切った。

「ふん。戯言ね。別に戯言のつもりはないぞ。信康殿にその気がないなら、民部。お主に譲ってやる。讃岐一国の主から、四国の主となる気はないか？」

どこまでもふざけの過ぎる長治に、存保はぎろりと睨みつけた。

その鋭い眼光に、長治は「ふん」と鼻息を荒げてそっぽを向いた。

「で、兄上。此度は何用か？」

わざわざ危険を冒してまで荒れ狂う阿波国に出向いたのだ。戯言を聞かされるためだけだとしたら、さすがの存保も堪忍袋の尾が切

れてしまいかねなかった。

「ほら、これだよ」

長治はぶつきら棒に言つて、懐から二枚の書状を取り出し、二人に手渡した。

「これは？」

そこには何やらいろいろと書いてあるようだが、要するに血判状だった。最後の条文を見れば、何の文かは一目瞭然だった。

「織田に立ち向かうべく、俺を総大将に阿讃淡三国は共に固い結束を保つべきこと…。と書いてあるのだ」

と、あっけらかんと言つてのける長治に、存保、清康両名は絶句した。

よもや、たったこれだけのことで自分たちは呼び出されたのだからか。二人の顔が朱に染まる。もとより血判状など差し出さずとも同じ三好一族として、長治の下、織田に立ち向かうことは何度も表明してある。それなのに、わざわざ忙しい二人を呼び出してまで血判状の提出を求めるとは…。

こう言う際の血判状は、はっきり言つて逆効果であつたりする。血判状の提出を求めるということは、即ち、長治が二人を信用していないことの証であるとも言えるからだ。そして血判状を提出したからといって、長治が二人に絶対の信用を置くという証拠はどこにもない。血判状など、所詮ただの紙切れだ。少々指を切つて痛い思いをするだけで、破ろうと思えばいくらでも破れる。血判状が何の価値もないことに気づけば、長治は再び二人を疑い出すにきまつている。

「兄上。よもや、これだけの理由で我らを招いたわけではありませんまいな」

存保が恐る恐る尋ねてみると、

「そうだ。これだけだ」

長治はあっけらかんと言つてのけ、にこにこ笑つていた。

【滅亡編】第162章 讃岐戦争

天正二年（一五七四年）四月ごろ。

十河存保は総勢六千の大軍を率いて十河城を発した。そして、反三好・反十河の旗を掲げて拳兵に踏み切った叛乱軍の盟主香川之景の居城本台山城に攻め入ったのだった。

香川之景は西讃岐地方に大きな影響力を持っていた有力な国人領主で、香川氏といえは、往時には十河氏、香西氏と並んで讃岐国三強の一角をなしていたほどの名家だったが、阿波最大の土豪三好氏と結びついた十河氏が、三好氏の勢威を背景に勢力を増すと、香川氏は事実上、三好・十河両氏に臣属せざるをえないようになった。三強の残る一つであった香西氏が、当主香西元成の下、細川晴元と結びついて最後の最後まで三好氏と敵対し続けたのは好対照をなしていたと言えよう。

それはともかく、三好の勢力が衰えた今、香川之景がいつまでも十河氏に臣従している理由などどこにもなかった。そこで彼は…、まあ、さすがに如何に衰えたりといえども、三好・十河勢力に単独で立ち向かうにはいささか心もとないので、香西氏を味方に取り込んだ上で、本台山城にて拳兵したというわけだった。

「阿波からの援軍はどれほどだ？」

本台山城から東へ少し行った小高い丘の上に本陣を置いた十河民部大輔存保は、側に控える重臣寒川元隣に目をやって、そう尋ねた。「阿波守様は篠原自遁殿を総大将に四千ほどの兵を出してくれたようです」

そんな寒川の答えに、

「四千か…」

存保はフウと静かにため息を吐いた。

十河軍が六千だから、合わせて一万である。まあ、確かに少なくはないけれど…。けれど、さして多くもない。この戦いを、四国中に改めて三好氏の力を知らしめるきっかけにしようと考えていた存保にとつては、少々物足りない数ではあった。

「ま、いい。で、香川らの出方はどうだ？ 奴らの下にはどれほどの兵がいる？」

燦々と輝く青空の下、床机の上にでんと構えていた存保は、おもむろにすつくと立ち上がり、寒川元隣を睨みつけた。

「香川軍は二千ほどです。また香川の与党と見られている香西勢が一千を多少割るぐらいの数と思われます」

「…足して三千弱か」

「はッ！」

一万対三千なら、はっきり言つて三好・十河軍が圧倒的に優勢だ。無論、戦は兵の数だけで決まるものではないが、十河一存以来、勇猛果敢で諸国にその名を轟かせている十河勢の実力を甘く見てはいけない。加えて言えば、総大将たる十河存保は、兄長治とは違って、それほど凡庸ではない。実父実休、養父一存の良い面を適度に受け継いだ名君であり、また若いながらも、幾たびか苦しい戦いを乗り越えてきた歴戦の名将でもあるのだった。

「まずは足場を固め直さねばならぬ。香川、香西ら反動分子は、この際、徹底的に排除する。足場、即ち阿讃淡三国を完璧に固めなければ、織田の脅威に立ち向かうなんてできるわけがないからな」

存保はひとしきりそう言つと、居並ぶ諸將に目を移し、

「援軍が到着次第、総攻撃を始めよ。それまで各自、警戒を怠るな。兵に勝るからと、油断したら今川義元の二の舞となる」

と言つて、再び床机の上に、どんと腰を下ろした。

四月末。

阿波三好家筆頭家老、篠原自遁に率いられた阿波軍四千が十河軍に合流すると、連合軍の兵力は一万に達した。

総大将は誰が何と言おうとも、十河民部大輔存保だった。そして副将の座には、篠原自遁が腰を据える。

「まずは徹底的に攻めましょう」

自遁がそう口火を切ると、

「左様。香川・香西などに臆したなどと伝わっては、三好の名折れにございますからな」

長治軍の重臣たちが、揃ってそんな強気の言葉を吐き続けていた。兵力差を生かした総攻撃。兵力的優位に驕っている阿波軍幹部の考え方は至極単純だ。一方、十河存保はそれほど短絡的ではない。

確かに阿波軍の到着を持って総攻撃を始めるつもりではいたが、相手は地の利に精通した香川之景だ。どんな罠が仕掛けてあるか知られたものではない。とりあえず、香川軍陣中に放つてある間者からの報告があるまでは、攻撃を控えるべきだと考えていた。

「そんな悠長な…」

篠原自遁は、じとつとした瞳を存保に向けたが、

「総大将は俺だ。そして三好阿波守長治の実弟でもあるこの俺の命に背くのか？」

彼はそうきっぱりと言い切って、口うるさい篠原自遁を黙らせてしまった。

「わかったのか、わからんのか？ はつきりしろ」

存保が怒鳴りつけると、

「民部様の御下知とあらば…」

そう言って、自遁は素直に頭を下げた。

しかし…。

そんな、至極従順な彼の様を見ていると、どうしても篠原長房と比較せずにはいられなかった。もし彼なら…。まあ、慎重家の彼なら、自分と同じ判断を下すだろうが、もしも自分と方針が違った場

合、理路整然と反論して、決して自分の意見を曲げようとはしなかつたろう。そして自分も必ず言いくるめられていたに違いない。けれど、彼はこの程度の言葉に頷き、応じてしまった。同じ篠原でも、長房と自遁では、全く違うものなのだなぁ、と、しみじみ思う存保なのであった。

間者からの知らせの結果、香川・香西連合軍が大した策を巡らせていないことが分かると、十河存保は全軍に対し、総攻撃を命じた。三好・十河軍は怒涛の勢いで連合軍に襲い掛かり、香川勢、香西勢もこれに果敢に応戦したものの…。しかし、もとより軍の質が全く違う。西讃岐地方においては有力雄藩かもしれないが、基本的に田舎大名に過ぎない香川勢に対し、三好・十河勢は長年に渡り近畿地方を転戦してきたのだ。細川、六角、畠山、織田といった強敵とひたすら戦い続けてきた戦歴豊富の精鋭でもある。

結局、香川軍は十河軍の猛攻に圧倒されて、大敗を喫した。身の程知らずの香川之景はとるものもとりあえず本陣から逃げ出し、本台山城に逃げ延びると、そこで籠城を決め込むことにしたのだった。

四月二十八日。

十河軍は本台山城を取り囲み、十河存保は城下に本陣を置いた。

「降伏の使者を送りますか？」

寒川元隣、香西佳清をはじめとする重臣たちの言葉に、「うむ」と、存保は静かに頷いた。

そこで早速使者が送られ、降伏を打診したものの、返ってきた答えは簡潔明瞭。

「我らにはまだまだ力がある。降伏する理由はない」

というやけに強気なものだった。

十河存保はにたりと不敵に笑うと、



「面白い」

と言つて、本台山城をぎろりと睨みつけた。

「総攻撃をかけたとして、どれだけの犠牲で攻め落とせるかな？」

居並ぶ部将に対し、存保が尋ねると、

「この規模の城ですと、まあ、少なくとも数百は犠牲が出ましような」

香西佳清が答えた。

「数百ね。ちと多いな」

「ですが、奴らが降伏に応じぬなら、やむをえませぬ」

「…ま、確かに」

これ以後、織田との戦いを控えている以上、できれば最小限の犠牲で抑えたいところであるが、まあ、そんなことを言つて攻め落とせなければ何の意味もないわけで…。存保はフウと静かに深呼吸すると、

「総攻撃を開始させよ。香川之景に、我らの強さ恐ろしさを骨の髄まで思い知らせてやるのだ」

と、命じた。

以後連日に渡つて三好・十河軍による猛攻が始まつた。

けれど、城攻めとなると、野戦のときは勝手が違い、そう簡単に決着がつくものではなかった。香川軍の懸命な抵抗と、本台山城の防御力が十河軍を阻み、十河軍としては、ひたすら無駄な犠牲を次から次へと出し続けるだけとなつた。

十河存保はその様を本陣から眺めていたのだが、芳しくない戦況に、落ち着きなく爪など噛んでいた。

「まだ落ちんか？」

報告に来た伝令に、存保が問うと、

「て、敵方の抵抗依然激しく、今日中の攻略は難しいかと…」

恐る恐る伝える伝令であつた。

存保は悩んだ。はつきり言って、これ以上の犠牲を出すわけにはいかなかった。ただでさえ、三好・十河両氏を取り巻く情勢は厳しさを増しているのだ。摂津を事実上掌握した織田軍だって、いずれ淡路に迫るだろうし、もしそうなれば、彼はすぐに大軍を安宅信康のために派遣しなければならぬ立場にある。犠牲はできれば出したいくない。

ただ、存保が本当の意味で不気味に思っているのは、何も織田軍だけではなかった。というより、確かに織田は脅威ではあるもの、こちらに攻めてくるには本願寺という最大の敵を排除しなければならぬのだ。その上、摂津と淡路の間には海がある。瀬戸内海全土の制海権は、安宅水軍と毛利水軍の支配下にあるといっても過言ではなく、陸上では織田軍に歯が立たずとも、海上では織田など敵でも何でもないのだった。だから存保は心の底で、それほど織田を脅威とは思っていない節があった。

そんな彼が本当の意味で脅威であると感じているのは土佐であった。何しろ、同国内にはこのところ急激に頭角を現し始めた一人の風雲児がいる。長宗我部元親と言って、現状、土佐の中央部及び東部を掌握している田舎大名の一人に過ぎなかったが、しかし土佐西部に大きな力を誇っていた一条氏を圧迫し、ほとんど彼らを壊滅寸前の状態に追い込んでいた。もしこのまま長宗我部勢が一条氏を滅ぼしたなら、土佐一国は元親の支配下にすっぽりと収まるわけだ。長年に渡り、分裂抗争が続いてきた土佐が、一つの大名の下に統合されるといふことになる、三好氏にとってこれ以上の脅威はない。「長宗我部が土佐を抑える前に、我らも阿波と讃岐の支配を固め直さねばならぬ」

存保はそう思っている。だからこそ、今回、三好長治に援軍まで求めて香川征伐に出向いたのである。自分たちの力を四国中に知らしめることで、おそらくは四国制覇を目標に据えているだろう元親に釘をさし、かつ阿波・讃岐両国内で反三好的行動をとる国人領主たちを再び三好の支配下におさめようと考えたわけであった。

しかし、本台山城が落とせないとなると、話はまた変わってくる。この城攻めにてこずるようだと、三好・十河両氏を侮る大名が出ないとも限らない。自分たちの強さを見せつけるための戦で、逆に自分たちの力を侮られるようなことになってはたまらない。

「今一度、降伏勧告の使者を送れ！ もし応じぬなら、例えわが軍の屍が山の如く積もろうと、最期の一兵になるまで、攻めて攻めて攻めまくって、あれの首をとるッ！ そう伝えよッ！」

存保の大音声が高らかに響き渡ると、重臣たちは「はッ！」と恭しくひれ伏して、早速使者が送られた。

結果、香川之景が降伏勧告を受理したことで、戦は決着した。案外、香川勢も窮地に追い込まれていたようで、十河存保からの降伏勧告は、渡りに船であったようだ。

とにかく香川氏及び香西氏が降伏に応じ、彼らは幾らか領地を削られた上で本領を安堵された。無論、本領安堵状を受け取るべく、彼らは十河城に出向き、主君として上座にふんぞり返る存保に謁見した。その際、彼らは存保に人質を差し出し、改めて、全面的な臣従を誓ったのであった。

かくして讃岐国内の動乱は決着したわけだが、問題は阿波である。相変わらず長治の暴政が続き、阿波国内の動乱は収まる兆しが見えないという。

「自遁殿」

そこで、存保は帰国支度を整えていた篠原自遁の陣に赴き、援軍に謝意を伝えるついでに、

「兄上のこと、お頼み申しましたぞ」

と、言った。お前が兄に讒言して篠原長房を殺させたのだから、長房の代わりとして一刻も早く阿波を立て直せ、とでも言いたげな目をする存保に、

「承知いたしました」

と、神妙に頷く自遁であった。

【滅亡編】第163章 更なる脅威

天正二年（一五七四年）はあつという間に過ぎ去って、世の中は天正三年（一五七五年）を迎えた。

天正二年という年を簡潔明瞭に表現したら、織田信長の全盛期。まさにその一言に尽きるだろう。いや、より明確に言うなら、信長の全盛期が始まった年と言うべきだろうか。あるいは第一次全盛期。少なくとも、信長が上洛して七年近い歳月が流れてようやく、織田政権は安定を見ることになったのだった。

その頃、四国では長宗我部元親の勢力が飛躍的に強大化していた。天正二年二月には、元親の十八番ともいえる謀略を駆使して、最大の敵であった一条氏を事実上支配下におさめることに成功した。その謀略というのは、一条氏の家臣団を唆して、史上稀に見る暗君と蔑まれていた一条兼定を追放させたことである。一条兼定が大友宗麟の下に亡命したのを確認すると、元親は大軍を引き連れて中村御所（一条氏の居城）に乗り込み、クーデターを起こした老臣たちが擁立した一条内政（兼定の子）を庇護下において傀儡化。まんまと一条氏を乗っ取ってしまったのである。

ここに彼による土佐統一は完成した形となったわけだが、しかしこうしたやり方に反発する者もいるわけである。とりわけ、一条氏の家臣の中で、中堅若手層は猛反発した。彼らは老臣たちが一条兼定を追放したこととて快くは思っていなかったのである。そこで、彼らは大友氏に亡命していた兼定に帰国を要請し、兼定もまた大友宗麟の支援を引き出すと、天正三年七月頃、大軍を率いて土佐国に乗り込んできたのだった。

「で、長宗我部と一条の戦はどうなっている？」

気が気ではないといった様子で尋ねる十河存保に、

「一条軍のうち、宗麟入道より借り受けた兵力が一千ほど。兼定入国に伴って、元親の方針に反発する一条の旧臣たちが彼に味方するでしょうから、その兵力は三千近くまで膨れ上がるものと思われま

す」

と答えるのは、阿波国家老篠原自遁であった。

存保は今、勝瑞城にあって国主にして兄たる長治を待っていた。彼はこのところ体調を崩しているらしく、代わりとしてやってきた自遁が言うには、まだ眠っているのだという。とはいえ、火急の要件を携えやってきた以上、風邪だからと長治に会わぬわけにはいかなかった。

「三千なあ。で、元親はどれだけ繰り出すか？」

「報告によれば、六千以上は確実」

篠原自遁の答えに、存保は「ぐぬぬ」と唸った。

さて、どちらが勝つか。地の利に精通している一条軍か、数に勝る長宗我部軍か。ただ、暗愚ではないにしろ、凡庸であることに変わりない一条兼定が率いる軍勢と、一代で長宗我部氏を土佐統一に大手をかけるほどの勢力に成長させた長宗我部元親率いる軍勢では、全く質が違ふ気がした。その上、国親が考案し、元親の下で本格運用されるようになった新式軍制『一領具足』は、長宗我部軍を土佐国、いや四国屈指の強さを誇る軍へと一変させたといわれているほどの代物だ。烏合の衆に過ぎない一条勢に勝てるものだろうか。兎にも角にも、家臣団から見捨てられて国から追放された男と、『土佐の出来人』『土佐の虎』『鬼若子』とも評されて諸国にその名が轟く男が戦うのだ。勝敗などはじめから分かっているような感じがした。

「兄上はまだ来られんか？」

存保は痺れを切らしたように、篠原自遁に怒鳴っていた。自遁は「さあ」とか、「殿はお体がお悪いので、今日は無理だと思われま

す」などと言つて、のらりくらりとほぐらかしてきた。

存保がわざわざ勝瑞城まで出向いた理由。

それは、一条を支援して、我らもまた土佐に進撃すべきだ、ということを長治に主張するためだった。

存保にしてみれば、土佐国内で急速に勢力を増す長宗我部元親は、はつきり言つて不気味で怖かった。それでなくとも、これから織田と戦つていかなばならないのに、背後に敵対的な大勢力が誕生することは、戦略的に言つて望ましくない。ならば、元親の勢力が決定的に強大化する前に叩くしかないか。災いの種は、芽になる前に断ち切つておくべきなのだ。

そう考えている存保にとつて、一条兼定が長宗我部討伐を掲げて出張つてきたのは勿怪の幸いであつた。彼と同調し、東から元親を圧迫すれば、如何に長宗我部勢が精強無比と言つても、必ず彼を圧倒できるだろう。確かに長宗我部軍は精鋭だが、三好・十河軍とてそれに劣るわけではない。

「いや、それは無理でしょう」

篠原自遁はけらけらと笑つて、そう言つた。

「なぜだ？ 一条軍三千に、我らが一万余の兵を率いて土佐に進攻すれば、必ず長宗我部を圧倒できよう」

存保が怒鳴ると、自遁は威儀を正して、静かに深呼吸した。

「よろしいですか。阿波と土佐の国境線上は極めて山深く、平地部分がかかなり狭くなつております。即ち、我らが大軍で出向いても、隊列は自然、一列、二列、三列ぐらいにならざるを得ず、敵はこれを各個撃破できるわけです。既に敵方も、我らの侵攻に備えて、最前線拠点たる安芸城に、香宗我部親泰（元親の実弟）を配して準備を進めております」

「……だから、何だ！」

存保は相変わらず激していた。しかし自遁は相も変らぬ冷静さを

保ち続けていた。

「要するにです。こちらが攻めていっても、香宗我部勢に阻まれ、しかも突破は容易ではない。その間に一条が滅び去ったらどうなさります。元親軍主力が出向いてきて、我らは撤退を余儀なくされまです。その上、長宗我部と本格的に敵対することとなり、殿の進める織田討伐事業に支障が生じます」

自遁が言いたいこともよくわかる。だが、その程度の言葉で納得させられるほど存保も甘くはなかった。それに自遁の論理は、あやふやな前提の上に成り立っている。例えば、香宗我部勢を突破できないかどうかなど、今の時点では分からないわけだし、地の利に精通した一条勢がそう容易く長宗我部軍に敗れるとも思えない。

存保はぎろりと自遁を睨みつけると、

「お前は阿呆か？」

と、きつぱり言い切った。

「よく考えよ。確かに阿波土佐国境は峻険な土地である。だが、だからといって突破できぬとなぜ決めつける？ いや、確かに突破できない可能性が高いかもしれん。だが、土佐に入る道は、何もそこだけではあるまい。山岳地帯ではあるが、白地城から南下するという手もあるし、それに、海を使うという手だってある。安宅水軍に、わが十河水軍、阿波水軍を合わせれば、長宗我部の水軍など屁でもない。室戸岬は海流の荒い地域だが、強者揃いの安宅水軍なら容易に突破できよう。直接、岡豊近くの海岸に乗りつけて上陸してやるという手もあるだろう」

存保の説明に、自遁は困ったように苦笑いを浮かべていた。

「それにだ。お主は一条を支援し、失敗したら長宗我部と敵対すると言った。確かにそうだろう。だが、一条を支援せずとも、いずれ長宗我部とは激突する定めだ。だってそうだろう。元親の野望が土佐一国の統一で終わると思えぬ。奴の当面の目標は四国の統一に違いないのだ。だとしたら、阿波に攻め込んでくる可能性は大いにある。もし元親が我らを倒すべく織田と結びついたらどうするつも



りだ？」

そんなことになったら、三好は半年と持たないだろう。織田と戦うだけで手一杯なのに、その上、背後に土佐一国を領する長宗我部を抱えれば、間違いなく三好は滅びる。

「いや、元親と信長は必ず同盟するぞ。信長ほど同盟の怖さを知っている武将もいないだろうからな」

かつて足利義昭が主導して結成された信長包囲網のことを思い出しつつ、存保は畳みかけるように自遁に言った。けれど、その自遁は相変わらず食えぬ苦笑いを浮かべたまま、これといった答えを返そうとはしなかった。ただどこまでも、

「民部様が仰せも尤もながら、今は殿が御病氣中。殿の許可も得ず、勝手に兵を繰り出すわけにはいかんです」

と言つて、はぐらかしてくるのだった。

それから数日が過ぎて…。

土佐西部、四万十川しまんじがわにて激突した一条、長宗我部両軍の戦いは、長宗我部軍の圧勝に終わった。

数に劣る一条方の基本的な戦略目標は、戦鬪の長期化にあった。戦が長引けば長引くほど、長宗我部方に属している一条の旧臣たちが靡くかもしれないし、さらに阿波から三好軍が攻め込んでくるかもしれないなかった。

とはいえ、戦を長期化させるには、数に勝る長宗我部軍の動きを封じる必要性があった。そこで彼らは四万十川に布陣し、その上で川に多数の杭を配置。これにより四万十川対岸に布陣した長宗我部軍による強引な渡河攻撃を阻止しようとしたのだった。

一方、数に勝る長宗我部方の作戦目標は、短期決戦の一言に尽きる。戦が長期化すれば、阿波より三好軍が出張ってくるかもしれないし、一条の旧臣たち、あるいはこれまでに元親が攻め滅ぼしてきた各地の国人領主たちの残党たちが蜂起するかもしれない。数に物

を言わせ、短期間のうちに勝利をもぎ取ることが、元親の至上命題になっていった。

しかし一条軍は既に長期戦を視野に入れた布陣をとっている。長宗我部軍にとつて、四万十川に配置された杭のおかげで、渡河攻撃という基本的作戦が封じられたことは痛かった。まあ無論、強引にやれば、渡河できないわけではない。しかし、ただでさえ川の流れに足をとられて身動きがとりにくいのに、杭まであつては、俊敏な動きなど到底できるものではない。そこを鉄砲やら弓で狙い撃ちされたらたまつたものではなかった。

そこで元親は、配下の部将福留隼人に命じて、彼の軍勢を杭のないう上流より渡河させると、一条軍の側面を圧迫させたのだつた。これに対し、側面を叩かれることを恐れた一条兼定は、全軍の半数を福留隊の迎撃に割いてしまったのである。これを見て取つた元親は、すかさず全軍に対し、強引なる渡河攻撃を命じた。敵兵の半数がいなくなれば、攻撃力は格段に低下しているに違いない。彼はそう踏んで攻撃に乗り出したわけだが、果たして策は全く見事の中した。側面に敵が進んできたということ動揺していた一条勢は、それに合わせたように長宗我部本隊が渡河攻撃してくると、見るも無残な大混乱に陥り、とてもではないが、長宗我部軍を迎撃できるような状態ではなくなつてしまつたのだつた。

かくして渡河に成功した長宗我部軍は、一条軍を圧倒。一条兼定はとるものもとりあえず逃走する有様で、これは合戦というより、ほとんど一方的ななぶり殺しに等しい状態といつて過言ではなかった。

四万十川の合戦に敗れた一条兼定は、浪人に身を竄して、何処かへと姿を消した。一方、勝利した長宗我部元親は、残党狩りを徹底して行いつつも、それに平行して一条氏旧領の掌握に務め、ついには一条氏旧領を長宗我部領に併合してしまつたのであつた。

かくして元親は正真正銘、土佐一国の覇者となった。もはや同国内には彼に逆らう勢力など皆無であり、その名、声望は天下に轟いた。とはいえ、土佐の掌握を持って彼の夢が終わるわけではなかった。彼の最終目標は、天下の掌握だ。細川氏、三好氏に続いて、今度は長宗我部氏が、四国から天下を握り取る。それが彼の夢なのである。

土佐を統一した彼の次の目標は、四国の制覇であった。そして、その第一段階として彼が目を付けたのは、三好長治の暴政により荒れ果てている阿波国である。

三好氏は正念場に立たされていた。

かつて尾張より勃興した新興勢力織田氏によって近畿地方から追い出されたように、今度は土佐より勃興した新興勢力長宗我部氏によって四国からも追い出されるのか。それとも、一時は天下を掴んだ名族三好の名にかけても、四国を保つのか。

畿内での織田氏との戦争は、天下の覇権を巡る抗争だった。しかし、四国での長宗我部氏との戦争は、三好氏が生き残るか否かを賭けた抗争だ。負けるわけにはいかない。

十河存保はそう胸に誓いながら、十河城への帰路についた。何が何でも、三好を守って見せる。例え、どんな手を使っても…。

【滅亡編】第164章 兄弟げんか

十河城、勝瑞城。そして十河城。はたまた勝瑞城。さらには淡路洲本城。

このところ讃岐国主十河城城主たる十河民部大輔存保は凄まじいほど多忙だった。

十河城にあるときは、讃岐国の国政の処理に明け暮れ、勝瑞城にあるときは長治の…、というより長治の側近たちによる暴政を制したり、土佐を統一して新たな脅威として浮上して来た長宗我部元親の具体的対策案を協議したりした。さらに洲本城に赴いた際には、安宅信康・清康兄弟らと織田信長対策について討議を重ねるのである。

全く、彼ほど多忙な人もいないのではないかと思われるほど、彼は多忙を極めていた。家臣などは、多忙が祟って体でも壊さねばよいかと本気で案じていたほどで、実際、病のために倒れることも一度や二度の話ではなく、そのたびに、医者からは「養生しなければなりません」と言われているのだが、今の彼は、一日二日の休息をとる暇すらないほど忙しかったのだった。

「全く、阿波守様などは、毎日女子と御酒に戯れておられるというのに…。これでは余りに不公平というものだ」

露骨な不満を表して、ぶうぶう言っているのは、十河家の兵士たちだった。特に主君存保に近侍する馬廻衆などは、彼の多忙ぶりを目の当たりにしているだけに、遊び呆けている長治への不満、不信感を大いに強めていた。

「それにしても、何故阿波守様とわが殿で、これだけ御出来が違うのだろう。御二方、ともに名君で知られた三好実休様の御子だといふのに……」

代々、英雄、名将、猛将を輩出して来た三好家の血筋を受け継ぐ人間とは思えぬほど愚鈍な長治の顔を思い浮かべながら、十河家の家臣たちはニタニタと笑った。

「そりゃ、決まりきっているだろう。本来阿波守様にも受け継がれるべき実休様の能力の大部分が、我らが殿に独占されてしまったからさ」

「なるほど。だとしたら、阿波守様は御気の毒なことよな」

と、馬廻衆の一人が高笑いしながら、楽しそうに呟くと、

「いや、御気の毒なのは我らが殿であろう。何しろ、能力の大半を受け継いでしまったがゆえに多忙を極めておられるのだからな。阿波守様みたいに暗愚に御生まれであれば、今頃は御城の中で、遊び呆けて御暮しであろうよ」

と、もう一人の男は、誇らしそうな顔に困ったような表情を浮かべるといふ複雑な顔つきをして、ハアとため息を吐いた。

天正二年（一五七五年）八月は中ごろのことだった。

十河存保は十河城内にあって、苦しそうに布団の中で寝込んでいた。

「…殿、お体は大丈夫ですか？」

長らくの過労が祟ったのだろう。すっかりやせ衰えた存保は、そのげっそりとした顔に笑みを浮かべて、「まあな」と答えた。

「薬湯にございます」

重臣の寒川元隣はそう言って、持ってきた茶碗を手渡した。存保はそれをごくごくと勢いよく飲み干すと、

「で、長宗我部に動きはあったか？」

思いついたように、唐突にそう言った。

「はッ！ それが、数日前、長宗我部の使者として、元親の嫡男千雄丸と家臣の中島可之助が京都に赴き、信長に謁見。詳細は不明ながら、その場にて両家の同盟が成立したと専らの噂にございます」

「な、なに…」

目をカッと見開き、存保は苦り切ったような顔をして、寒川をぎろりと睨みつけた。

「明らかになっっていることは、その場にて、元親の嫡子に信長が『信』の字を与えて、長宗我部信親と名乗ったことのみでございます」

「長宗我部信親、だと…?」

寒川の話の聞けば聞くほど、存保の顔色はますます苦みを増していった。まあ、無理もない。元親の嫡男に、信長がその文字の一つを下賜したということは、織田と長宗我部の間にも同盟が成立したことの何よりの証といつていいだろう。そして、それが意味するところがわからぬほど存保も凡庸ではないのだ。それどころか、今や四国三好家を一手に担っている存保には、その意味が、それこそ嫌というほどよくわかるのだった。

「これでは正真正銘の挟み討ちだな」

自嘲気味にぼやきながら、存保はハアと深いため息を吐いた。

東に織田、西に長宗我部。

二つの強敵を同時に前と後ろに抱えてしまった三好家と、それを支える十河存保の憂鬱は深まる一方であった。

「如何なさいます? 長宗我部が織田と同盟したということは、元親は着々と阿波攻めの布石を打っているということになります。このままですと、近いうちに長宗我部軍が阿波になだれ込んでくるのは必定にございますぞ」

寒川元隣の必死な言葉に、

「分かっている!」

存保は吐き捨てるように怒鳴った。

「だが、織田が攻め込んでくることはない。未だ顕如上人が石山御坊で踏ん張っているからな。織田が出てこないなら、まだ勝ち目はある。阿波に全軍を集結させて防備を固め、その上で、信康殿らと

連携して、水軍衆を結集させれば、元親とて容易くは攻め込めまい。我らは安芸や一条ら、土佐の弱小大名とは違う。もし元親が陸上から攻め込んでくるなら、こちらは海上から元親の本国を叩く！」

自信満々の笑みを浮かべながら、存保はフウと静かに深呼吸した。そうさ。まだ自分たちに勝ち目がなくなつたわけではない。確かに織田・長宗我部により挟撃されて、圧倒的不利な立場に追い込まれた感がある三好家だが、もう少し視野を大きくしてみれば、打開策はおのずと見つかるというものだ。何しろ近畿地方には依然として本願寺が巨木のように根を生やして織田軍の征西を阻止しているし、さらに西には依然として強勢を保つ毛利輝元がいる。東を見れば武田勝頼が織田・徳川連合勢力を圧迫しており、要するに例え織田と長宗我部が同盟したからといって、織田軍には四国に攻め込めるだけの余裕などないのである。ならば三好はこれまで通り、長宗我部対策に全力を注げばいい。確かに元親は土佐一国を支配下に置いたが、こちらは阿波・讃岐・淡路三ヶ国を支配下に置いているのだ。総合的な国力では遥かに勝っているはずだ。

とにかく、眠っているような場合ではない。早急に阿波の支配を固めて、迎撃態勢の万全を期さねばならない。さもなくば、土佐一国を挙げた長宗我部の大軍にやられておしまいだ。

「元隣、これより直ちに勝瑞城に赴く。準備せよ」

唐突に思いついたような存保の厳命に、

「承知いたしました」

彼の体調を気遣いつつも、従うほかはない寒川元隣であつた。

八月末ごろ。

十河存保は総勢五千騎の兵を率いて阿波国に入り、相次ぐ叛乱勢力を片っ端からなぎ払った後、九月六日、勝瑞城に入城した。

そして彼は兄たる三好阿波守長治に謁見すると、

「兄上。長宗我部勢による阿波進攻が今にも始まるかもしれぬとい

う時です。少なくとも昼間からの酒と女はご遠慮していただきたい」  
そう言つて、昼間から酩酊状態の兄をぎろりと睨みつけたのだつた。

「お、民部。久しいな」

長治はそんな彼の視線など意に介する風もなく、からからと笑うと、

「そつ目くじらたてるな。別にわしが酒と女に明け暮れようと関係あるまい。国内はしっかりと纏まっておるのだから」  
と、言つた。

何を言つているのだ、この兄は！ とでも言いたげな顔をして存保は、長治のとろんとした表情を見つめた。腹立たしい…、というよりはもはや哀れである。おそらく長治にはまともな報告など全く行われてはいないのである。都合の悪い情報は側近たちによって囲い込まれ、彼らがでつち上げた朗報を、長治は真実と信じ込んでいるに違いない。

「兄上は国内がどういふ状況にあるのか、誠に御存じないのか？」

長治…、というよりはその側近たちが、長治の威を借りて行つた法華宗強要政策その他数々の悪政が祟つて、今や阿波国内は騒乱状態に陥つてゐる。十河軍や安宅軍の支援もあつて、とりあえず長治政権は阿波全土に統治権を行使しえてゐるが、このまま叛乱勢力が強大化したら、長治政権などいとも容易く崩壊してしまつたろう。

「兄上！」

存保が力の限り怒鳴ると、

「知らん！」

長治はそう言つて、再びごくごく酒を呷つた。

「兄上。お酒はおやめくださいと何度申し上げたらわかるのですか！ 酒はやめ、女子もやめ、政務に励んでくださいませ！ 兄上は三好家累代の本国にして、伯父上、父上が築き上げてきた大国阿波を預かる三好家の御大将なのですぞ。左様な有様では、織田はおるか、長宗我部にすら太刀打ちできませんぞ！」



このところの兄はどうしたというのだ。昔は、確かに凡庸ではあったけれど、ここまで愚鈍ではなかったはずだ。理想に燃え、やる気に満ちて、精力的に政治に励もうとしていたではないか。まあ、篠原長房に邪魔立てされて、思うような政治はできなかつたらしいが…。

しかし、今なら長治は自分の思い通りの政治ができる。それだけの力がある。だったらなぜ、昔のような情熱をもって政治に取り組まないのか。織田と長宗我部に抗える体制作りに励まないのか。

「兄上は三好家の御大将としての自覚がなさすぎます」

存保は泣きたくなつた。誰が好き好んで、実の兄にこんな台詞をぶつきたいと思うだろう。それでなくとも、長治と存保は、父母を等しくする兄弟ということもあり、幼いころから仲良く過ごし、共に育つてきた間柄なのだ。

「民部、黙れ。黙らぬかッ！」

一方、そんな存保の気持ちなど、少しも分ろうとせぬ愚兄は、この世のものとも思えぬ大音声を張り上げて怒鳴ると、今にも泣き出しそうな賢弟の顔をぎろりと睨みつけた。そして、

「さがれ！ 目障りだ」

と、ひどく冷めきつた声色で、そう告げた。

「…兄上。兄上は、もはや完全に墮落しきってしまったようですね」  
存保の顔つきも、先ほどとは随分違つて見える。彼は彼で、何やら凄まじき決意を固めたようで、長治の定まらぬ瞳をキッと見据えると、

「衛兵ッ！」

力の限り、あらん限りの覚悟を込めて、彼は怒鳴つた。  
すると、そろそろと兵士たちが、大拳して押し寄せてきた。

「み、民部。そやつらは何者だ？」

長治が恐怖に怯えた顔をして尋ねると、

「それがしの配下にございます」

存保は淡々と答えた。

「兄上。兄上のお気持ち、この民部大輔存保、よくわかりました。…されど、土佐より長宗我部軍が押し寄せてくる可能性があります。三好家の御大將たる兄上がそのような調子では、兵たちの士気にもかかわりますので、長宗我部の脅威が消え去るまでは、それがしが三好家の大將の責務を代行いたします」

「だ、代行だと…」

長治はひきつった顔に怒りの色を込めて、平然と座っている存保を睨みつけた。しかし、存保は動じない。目を閉じ、フウと静かに溜息を吐いた彼は、

「よいか。今後兄上に酒は二度と渡すな。女子も近付けるな」

と、衛兵たちに言い聞かせておくと、兄を軟禁下に置いて、勝瑞城内の実権を完全に掌握してしまったのだった。

【滅亡編】第165章 織田政權

長宗我部対策と銘打って勝瑞城の実権を握ってはみたものの、篠原自遁をはじめとする長治家中の抵抗は根強く、十河存保による改革政治は一切合切全く進まなかった。

存保は相変わらず多忙を極めた日々を過ごし、それに比例して倒れることも多くなった。何しろ、普段は勝瑞城にあつて阿波国の内政再建に全力を注ぎ、しかしだからといって本領たる讃岐を疎かにするわけにもいかないから、時折十河城に戻つて、讃岐の内政にも励まねばならなかった。織田対策のために淡路に渡り、安宅信康らと会談することも度々であつたし、長宗我部の脅威に備えて、阿波・土佐国境の視察に出向くことも多々あつた。

これで倒れるなどというほうが無理な話であろう。存保は別に体がひ弱というわけではなかったが、それに甘んじて、自らの体を酷使しすぎる主君を見て、家臣たちはいつも冷や冷やとしていたものだった。

存保は水軍力の増強こそが三好の生きる道だと信じていた。

もとより精強な長宗我部勢や、圧倒的多勢を誇る織田勢に、陸上戦闘を挑んでも勝機は薄い。だが水軍なら……。安宅信康配下の淡路水軍や十河存保配下の讃岐水軍は天下にその名の轟く精鋭揃いであつた。

だからこそ存保は水軍力の増強に力を注いだのである。超大型船たる『安宅船』の建造に着手したり、あるいは武器となる鉄砲等火器戦力の増強も疎かにはしなかった。とりわけ、鉄砲というものの存在感が、今年六月に発生した、とある合戦をきっかけに大きく高まりつつあつたこともあり、存保は領内各地に鉄砲生産工場を増設するなど、その量産体制確立に力を入れていたのだった。

織田信長が対長宗我部外交担当に明智日向守光秀を指名したという事実が伝わってきたのは、天正三年（一五七五年）九月ごろのことだった。

明智日向といえば、近江坂本に領地をもつ織田の大重臣であり、巷では、佐久間、柴田に次ぎ、丹羽、羽柴、滝川と並ぶ有力者と専ら評判の人物だった。それほど男が、長宗我部外交を統括するようになったのだから、信長がどれだけ長宗我部との同盟を重視しているかは一目瞭然だった。

「明智日向、か」

存保がそのことを知ったのは、九月六日のことだった。勝瑞城内で、相変わらず忙しない日々を過ごしていた彼は、その報告を受けると、辛そうな顔をして、「そうか」と重苦しく呟いていたものだった。

「それにしても明智か」

かつては公方足利義昭の重臣であった男が、今では織田の家老だ。世の中も変われば変わるもの。肝心の義昭は、依然として、備後国鞆の浦にあつて、毛利氏の支援下に反織田活動を続けているというのに、かつて義昭の重臣であった光秀、細川藤孝の二人は、ちゃっかり織田の重臣の座に収まっていた。

「とりあえず、これ以後は長宗我部と織田の動きを注視せねばなるまい。まあ、石山御坊が健在なうちは、如何な信長といえど、瀬戸内海を渡って四国に進出してくることはできんと思うが、それでもだ」

存保は家臣たちにひとしきりそう命じると、フウと静かにため息を吐いて、水を持ってくるように言った。このところ、よく喉が渇く。暑いからだろうか。自嘲気味に苦笑いしつつ、存保は小姓たちが持ってきた水をぐびぐびと、浴びるように飲み干した。

織田の支配が固まっている。

存保は時に不安になった。

このまま織田政権の基盤が確固たるものになっていけば、それこそ自分たちは細川晴元のようになってしまうのではないかと……。晴元は、強大化する三好政権に対して徹底的に抵抗したが、日々強勢を加えていった長慶の前には全く敵わず、ついには降伏して、摂津富田は普門寺に死ぬまで幽閉されてしまった。

今の存保には、あの折の晴元よりは力がある。何しろ、あの当時の晴元は、名門細川京兆家の当主であるという権威以外には何一つ力を持たなかったが、存保には名門三好家の正統なる後継者という権威と、そして阿讃淡三ヶ国という実際の力もあった。

けれど……。

だからといって安心できるものでもあるまい。織田の力は日々強大を増している。彼と同盟した長宗我部とて、まさに飛ぶ鳥落とす勢いだ。旭日の如く勢威を増していく二つの雄藩に挟み討ちにされた三好の立場は、非常に危ういと言わざるを得まい。

「よもや、長篠の戦のようなことが起こるとは思いもありませんでしたからなあ」

と、寒川元隣がしみじみと呟いていた。

後の世に、合戦の歴史を根本的に変えたと称えられている長篠の合戦が勃発したのは、今年の六月のことだった。詳細は割愛するが、この合戦で、戦国史上にその名を轟かした大藩武田は無様なまでに大敗し、織田・徳川連合が、ありとあらゆる下馬評を覆して圧勝した。結果として、武田勝頼はこれ以後、急速に衰退の道を歩み、織徳連合、とりわけ織田の勢力は、飛躍的に強化していくことになったのだ。

それはともかく……。

長篠の戦における圧勝で、政権基盤を大いに強化した信長は今、本願寺討伐に全力を注いでいる。佐久間信盛や原田直政らを総大将

とした大軍を送り込んで、石山御坊を完全包囲下においていた。佐久間や原田の指揮下には、河内・和泉・摂津・山城・大和など、畿内全土から動員された軍が配置されており、総兵力は六万とも七万、あるいは八万とも言われていた。

もし石山御坊が陥落したら、次は三好である。

だから存保は不安なのである。無論、石山御坊に対する支援は怠りなく行っていた。と言っても、強大な織田軍に真つ向勝負を挑んだところで勝ち目などあるはずもなく、ゆえに、毛利水軍と共同で、兵糧や軍需物資などを海上から供給するぐらいしかできなかった。まあ、結果から見れば、この支援のおかげで本願寺軍は半永久的に織田の包囲に耐えきることができたわけだが、実際に援軍を出すことができない存保としては、ひたすらにもどかしかった。

ここで一つ、天正三年（一五七五年）九月ごろの国際情勢…、もとい織田政権の構造について見てみることにしよう。

織田政権というのは、頂点に立つ信長に全権が集中する典型的な独裁政権であった。この点、三好長慶に権力が集中していた三好政権と共通する点がある。長慶のカリスマ性によって保たれていた三好政権と信長のカリスマ性に頼る織田政権。規模と時代は違えど、共通点は多かった。

とはいえ、今や尾張・美濃・近江・山城・伊勢・志摩・大和・摂津・河内・和泉・越前・若狭にまで拡大した広大な織田領を信長一人で統治できるはずもなく、結果として独裁者信長の意向を隅々まで行き渡らせる代官が、各地に配備されることになったのであった。その典型が、越前に配置された柴田勝家であろう。彼は北ノ庄城に入り、寄騎となった前田又左衛門利家、佐々内蔵助成政、不破光治、佐久間盛政、金森長近らを従えて、強烈な統治政策を断行したのだった。とりわけ、朝倉の残党や一向門徒たちの弾圧には力を入れており、前田又左衛門などは、一千人もの門徒たちを釜ゆでの刑

に処して殺してしまつたほどだと言われている。

無論、織田政権の地方支配を支える代官は、柴田だけではない。北近江、即ち浅井長政の旧領には羽柴筑前守秀吉が入り、新たな領国支配に乗り出していた。彼は浅井氏の居城小谷では、明らかに不便だといつので、琵琶湖に面した今浜の地に城を築き、今浜を長浜と改めた上で、自らの居城としたのだった。

そのほか、近江坂本には明智光秀が入り、岐阜と京を繋ぐ重要地の支配を任されることになった。また村井貞勝は京都所司代として、信長留守時の京都を守る任に就き、原田直政は大和守護職となつた。とりわけ、原田の大和守護職就任は大きな政治的意味を持っていて、要するに、松永弾正久秀の政治的失墜を象徴する人事として、当時は大いに耳目を集めたものだった。

ちなみに松永弾正のことを軽く記しておく、天正元年（一五七三年）中ごろからの信長の猛反攻に恐れをなして、降伏したまではよかつたものの、その代償として、彼が丹精込めて作り上げた多聞山城を奪われ、領土も大和国の半分程度にまで抑え込まれる破目となつてしまつたのだった。：ばかりではない。没収された多聞山城は柴田勝家らの支配を経てあつけなく取り壊されることとなり、取り壊した際に出た廃材などは、悉く筒井順慶に下げ渡され、筒井城増築の資材になつたのだった。

とまあ、織田政権下における弾正の地位は日に日に低下の一途をたどり、ほとんど地方に割拠する国人領主の一つぐらいにしか思われなくなつていたのだが、そこはそれ、松永弾正は戦国にその名を轟かした梟雄である。そのため、信長は松永弾正を完全に封じ込めておくため、宿敵である筒井順慶の勢力拡大を黙認したり、大和守護に尾張時代からの股肱たる原田直政を任命して、監視の目を強めたのである。大和の隣国たる河内国や和泉国の支配を佐久間信盛に任せたのは、何も本願寺対策だけではなかつた。

それはともかく…。

織田政権は、政権と名乗る以上、京都及びその周辺、即ち近畿地方の支配を当然のように重視していた。そして、織田政権の畿内支配の要諦を握っているのは、間違いなく佐久間信盛だった。何しろ彼は、河内・和泉両国の支配権を握っているだけでなく、大和国主の原田直政や摂津国主の荒木村重らを指揮下に置く権限を与えられていたほどのものだ（ちなみに、佐久間信盛は信長の本国たる尾張国の支配権も握っている）。

そして、その佐久間は今、本願寺攻めの全権を担い、石山御坊を包囲下に置いている。織田家筆頭家老として、また織田家最大の方面軍司令官として、彼の担うべき責任は果てしなく大きいというべきだろう。

ちなみに伊勢国には、織田家の一門衆が多く配置されていた。

伊勢は一向門徒の勢威が強く、また北畠氏など旧主を慕う武士が多いこともあり、生半な家臣を配置するわけにはいかなかったという事情もある。

例えば北畠氏の家督を強引に引き継いだ北畠信雄（織田三介信雄＝信長の二男）は、北畠氏の居城たる大河内城に入って、南伊勢・中部伊勢の支配を固めていたし、北伊勢においては、神戸氏を継いだ神戸信孝（織田三七郎信孝＝信長の三男）や長野氏を継いだ長野信包（織田信包＝信長の実弟）が、それぞれ支配の完璧を期して奮闘していた。もちろん、北伊勢でも、とりわけ一向門徒の勢威が強大だった長島の地には、信長の家老の中でも、ここめきめきと頭角を現していた滝川一益が入って、彼は事実上、伊勢国に入国した一門衆に代わって、伊勢全土を統括する権限が与えられていた。

ほか、志摩国には、織田家に臣従した海賊大名九鬼嘉隆があり、伊賀国は依然として信長の支配に屈してはいなかった。



このところ頭を抱えることが多い十河存保の悩みの一つに、細川六郎真之という存在があった。

名目的な阿波国守護職。存保にとっては父が異なり、母を等しくする異父兄であった。それゆえにこそ接しにくいのだが、どうも、この真之兄が、阿波国内における騒乱を裏で操っている黒幕らしいのである。だとすれば、捨て置くことはできない。しかし名目なりとも守護職にあるこの兄に、直接手を下すのは気が引ける。故に悩むのだ。根が真面目な存保は頭を抱えてしまふのだった。

まあ、名門細川家の分家の中でも筆頭と目されていたほどの名族阿波細川家の嫡流たる細川真之が、自らの復権を期して策謀を巡らす理由も分からないでもない。まして、自分に代わって実権を握っている守護代三好長治が、果てしなく凡庸ときているのだ。そんな奴に阿波の支配を任せるぐらいなら、守護たる自分が仕切りたい。そう思うのも無理はない。

だが…。

阿波国は既に三好のものだ。決して細川のものではない。確かに母を等しくする兄とはいえ、三好の血筋を受け継がぬ真之に、阿波国を明け渡すわけにはいかなかった。

存保はその真之と、勝瑞城本丸御殿の一角にて対峙していた。

時に十河存保二十一歳、細川真之三十七歳。

かたや三好豊前守義賢の子で、かたや細川讃岐守持隆の子。

母は等しく小少将の方である。今は阿波三好家筆頭家老篠原自遁に嫁いでいるが、戦国という、女性にとっては最も辛く、生きるに難しい時代を、その力一つで生き抜いてきた逞しき女傑の血を、二人は良く受け継いでいるようだった。

ともかく、二人の兄弟は、小さな座敷に睨みあっている。

かたや阿波国守護職で、かたや讃岐国主。

「兄上」

存保はそう切り出した。あえて、「守護様」と言わないところに、彼なりの意地があつた。

「なんだね、弟よ」

真之もなかなか肝が据わっている。幼いころに実父細川持隆を殺され、三好義賢によって傀儡化されたのだ。いつ殺されるか分からぬ状況を必死に耐えてきた青年武将が、存保と相対したぐらいで動じるはずもなかった。

「単刀直入に申し上げる。兄上は、阿波国の騒乱に關与しておいでか？」

まあ、そう尋ねたところで、真之が「はい、そうです」と答えるはずもないとは思っていたが、とりあえず尋ねてみる。真之の反応を見るのも悪くない。

「何のことかな？」

想像通り、真之は開き直ってきた。表情一つ変えない辺り、反応から彼の真意を確かめようとした存保の思惑は見事に外れたことになった。

「違うなら結構。ただし、兄上の不必要な態度が、家臣たちの不審を買っているのも事実。行動は是非に慎重になさってもらわねば困ります」

存保が釘をさすと、

「不必要な態度とは、なんだね」

真之はぎろりと彼を睨んできた。

「長治兄上の政治に口出しすることです」

存保は極めて率直に切り出した。どうせ、真之とて自分の言いたいことぐらい分かっているだろう。いちいち婉曲表現に徹していは、逆に真之に議論の主導権を奪われることにもなりかねない。

「ほお。守護であるわしが、政治に口出しするのがいかんと言うの

か？」

そこを突かれると、多少弱くなる存保であったが、とりあえずここで反論の手を弱めてはいけなかった。

「はつきり言つて、やめていただきたい」

「何故に？ 守護であるわしが政治を行うのは当然。本来なら、守護代に過ぎん長治殿がわしの政治に口を挟むことがおかしいのではないか」

「なるほど。確かに道理。されど、兄上と長治兄上が同時に政治を行えば、二元政治の弊害が生まれます。今は織田、長宗我部と対峙せねばならぬ時。兄上には口を閉じていていただきたい」

もし、否というなら、存保はここで真之を殺す気でいた。既に兵は調べてある。彼が合図すれば、数十騎の精鋭が突入して真之を殺害する手筈になっていたのだ。もちろん、守護職を殺害すれば、非難は必至だろうが、全責任は自分が帯びると言う形にすれば、兄である長治に被害は及ばない。

「なるほど。織田と長宗我部に対峙するためには、わしに黙ってもらいたいのか」

「左様。我らは鞆の浦におられる義昭公を御支えし、逆臣織田を討伐する責務を担っております。もしここで我らが分裂すれば、義昭公は都に復帰できず、幕府は名実ともに滅び去ることになります」  
「…ふーん」

幕府、というより將軍である足利義昭が滅びれば、守護であることを拠り所としている細川真之の立場そのものが根底から覆ることになる。何しろ、守護というのは幕府、將軍から任命される役職だからである。

細川真之とてバカではない。ここで我を張り、存保の決意を実行に移させるようなへまはしなかった。既に部屋中を取り巻く殺気は、嫌というほど感じている彼なのだ。

「ま、よかるう。長治殿は守護代ゆえな。政治を一任するにやぶさかではない。だが、このところ民部殿におかれては、その守護代殿

すら差し置いて政治を執っておられるようだが、それは二元政治に繋がらんのか？」

真之の痛烈な皮肉であるが、存保は平然と、

「長治兄上から、全権を委任されております。二元政治とはなりえませぬ」

と、きつぱりと答える存保だった。

この程度のことでは真之が策謀を諦めるとは思えなかったが、とりあえず存保は真之のいる御殿に兵を配備し、彼を軟禁下に置くことにした。こうしておけば、とりあえず口は塞げる。

そうして自らの執務室に戻った存保は、そこでひと眠りすることにした。最近、夜もろくに眠っていないのだ。体は既に限界に近かった。

けれど…。

それから一時間ほどが過ぎた頃、

「殿！」

と、聞きなれた小姓の声が聞こえてきた。

夢うつつの存保は、ふらふらと起き上がって、「なんじゃ？」と、言った。

「川島様がお越しです」

「川島？」

余り聞き覚えのない名前だ。と、思い、しばらく考えると、そういえば長治の家臣にそういう姓の男がいたことを思い出したのだ。た。

「川島惟忠のことか」

「はッ！」

小姓が頷くので、存保は「通せ」とだけ命じて、乱れ切った服をパンパンとはたき、威儀を正した。

川島兵衛進惟忠は小姓に伴われて恭しくやってきた。

三好長治の重臣にして、上桜城主である。先の篠原長房討伐戦に功勞を上げて、長房の居城であった上桜城と彼の旧領の一部を与えられた男であった。

「何だ、兵衛進？」

眠い目をこすりながら、存保は上座にて、下座にひれ伏す一人の男をぎろりと睨みつけた。

「御休息中を御邪魔いたしましたして、申し訳ありません。火急の要件があり、民部様に御取次願いました次第です」

と言つて再び頭を下げる川島に、

「火急の要件とな？」

存保は不思議そうな顔をした。はて、火急の要件とはいったい何なのか。

「篠原自遁殿のことにございます」

「自遁？」

三好長治の筆頭家老で、存保の実母小少将の再婚相手。だから、存保にとっては義理の父にもあたる不思議な男の名前に、彼はあからさまに嫌そうな顔をした。何しろ、このところ存保の改革政治を悉く邪魔してくるのは、他ならぬ自遁なのだった。

「守護殿と結びついているという噂がございます」

川島の言葉に、「なに！」と驚く存保だった。

「噂にございますが、しかし篠原殿の重臣が時折真之殿と近い国人領主と接触していることは事実でございます。また、篠原殿の奥方様は…」

真之の母だ。まあ、存保の母でもあるが。

存保の顔色が朱に染まる。もし自遁が真之と通じているなら、それはれっきとした背信行為だ。同族の篠原長房を殺害して阿波三好家の筆頭家老の座を射止めただけでは飽き足らず、今度は真之と結びついて、主君長治までも追い落とそうとしているのか。

「詳しいことは分かりかねますが、陰謀好きの篠原殿のこと。御用心なされたほうがよろしいかと」

川島惟忠は、先の長房討伐で功績を上げたことからも分かるように、長房討伐軍を率いていた篠原自遁と親しかった。その男からの密告である。十分、信ずるに値する情報であるといえた。

「兵衛進。よくぞ伝えてくれた。今日は下がってよい。それと、このことは決して他言無用じゃ。まだ噂の段階で、自遁をどうこうできるものでもないからな。わしはわしで、奴を調べてみることにする」

存保はそう言って、川島惟忠の顔をにっこりと見つめると、

「承知いたしました」

川島惟忠も嬉しそうに頷き、大仰にひれ伏した。

どうやら、薄汚い陰謀が阿波国中に渦巻いているようだ。

存保はその夜、全く眠れなかった。眠いはずなのに、目がさえているのだ。

ため息が漏れる。

これから三好家はどうなっていくのか。織田、長宗我部という外圧に立ち向かっていかなければならないというのに、内部では無意味な陰謀が渦巻き、主導権争いが激化している。

存保は辛かった。

どうして皆、こころも自分勝手なのだろう。伯父長慶、実父義賢ら在必死になって作ってきた三好の旗の下、一致団結して外圧に立ち向かうという気概をなぜ持てないのか。

細川真之は殺害すべきなのかもしれない。父は違えど、兄は兄なのだから、そんな暴挙には出たくなかったが、しかし、やはり手を下さねば、三好家は分裂することになりかねない。

「困ったな」

布団の上で寝返りを打ちながら、存保はふとそんな風に呟いた。

## 【滅亡編】第167章 苦しい戦況

天正四年（一五七六年）。

激動の戦国乱世は、依然として終わる気配を微塵も見せずに、ただ延々と、飽きることなく繰り返されていた。

しかし、同じ戦国時代であっても、天正の以前と以後では随分と違うものだった。

天正以前はというと、細川高国、細川晴元、三好長慶といった実力者が都を中心に君臨したことはあったが、統一勢力と呼べるほどに強大な勢威を誇った大名家はなく、言ってみれば、北条、上杉、毛利、武田、大友といった有力大名が、それぞれの地域における統一勢力へと浮上していく過程であったと言っても過言ではなかった。

天正以後になると、織田政権なるものが、室町幕府や三好政権に代わる新たな統一的権力機関として登場し、三好や朝倉、浅井、六角、斎藤、北畠といった有力大名を悉く駆逐して、その勢力を飛躍的に拡大させていった。

そして天正四年現在、織田一門の棟梁たる信長の勢力は、単純に数えても、尾張・美濃・近江・越前・山城・伊勢・志摩・大和・摂津・河内・和泉の十一ヶ国に及び、さらに丹波や播磨、加賀や伊賀、紀伊や若狭の一部までも支配下に収めるに至っていた。

その上、今の彼は、従三位権大納言兼右近衛大将の栄位栄職にあり、それだけを見ても、従四位下修理大夫に留まった三好長慶を凌駕する実力者であることは明らかだった。

既に信長に敵う者はいない。

天正四年に入って、織田政権は栄華を極めていた。

所変わって四国。

かつての四国の王者たる三好氏は、非常に厳しい立場に追い込ま

れていた。

無理もない。三好が四国の覇者であったのは、今は昔の物語に過ぎず、とりわけ四国三好家を支えてきた篠原長房が滅ぼされて以後は、みるみるうちに、音を立てるように崩れ落ちてしまった。本領たる阿波では、国主三好長治の暴政に苦しむ人々の蜂起が相次ぎ、長治やその弟である十河存保が懸命に討伐戦争に明け暮れても、ほとんどいたちごっこ、モグラ叩きとでも言うべき状態であり、具体的な状況の打開策は見出せなかった。

そんな中へ、土佐を統一した長宗我部元親が進撃して来たのである。勢いに乗る土佐軍は、阿波土佐国境近くに位置する海部城や大西城を攻略して、着々と阿波攻略の準備を整えていった。

もはや織田どころではない。というのが、讃岐国主にして、今や実質的に四国三好家を支えている十河存保の本音であった。

長宗我部による阿波進攻が本格化したのは、天正三年の中ごろのことだった。以来、存保としては、なんとかして土佐軍の進撃を食い止めんと必死に奔走したのだが、この辺りは、さすがに稀代の名将元親である。肝心の御膝元、讃岐国内で香川之景をはじめとする潜在的反三好・十河勢力を唆して、拳兵させたのであった。かくして存保は讃岐国内にて身動きがとれなくなり、結果として、土佐軍は容易に阿波国内に拠点を築き上げてしまったというわけである。

「くそッ！」

存保は悔しそくに酒杯を放り投げた。

目下、十河勢を取り巻く状況は芳しくなかった。長宗我部元親の支援を得た香川勢は、しぶとく抵抗を重ね、決して数に勝る十河勢を受け付けなかった。



結果として、現在、香川勢は西讃岐四郡を支配下に収めるに至っており、既にその勢力は十河存保に匹敵すると言つて過言ではなかった。

「兵を集めれば、如何ほどになる？」

存保は不満そうな顔をして、居並ぶ諸將に尋ねた。

「三千が限度かと」

側近の報告に、

「くそッ！」

存保は再び悔しそうに舌打ちした。

昨年未ごろに三好・十河党に属していた有力豪族金倉顕忠が、香川之景、香西佳清らの攻撃で滅ぼされてしまったことは、存保にとつて大きな痛手であった。金倉氏からは再三に渡り、援軍要請の使者がやってきていたのだが、その頃はちょうど長宗我部軍による阿波進撃が激しさを増していた頃でもあり、援軍を出したくとも出せない状況にあつたのである。

結果として、十河氏の有力な味方であつた金倉氏は滅び、西讃岐地方はほとんど香川氏の支配下に収まつてしまった。当時の存保の立場を思えば、仕方のないことであると言えなくもなかったが、しかし、織田信長、長宗我部元親に続いて、新たに香川之景という強敵を抱えることになつてしまつた存保の立場は、ますます悪化する一方であつた。

近畿地方。近江の国。

従三位権大納言兼右近衛大将たる織田信長はこの頃、琵琶湖に面したこの地に、自らの新たな本拠地たる安土城を築き上げて、その圧倒的な栄華を満天下に示していた。

信長が安土城に移つたのは、天正四年（一五七六年）二月二十三日のことである。ちなみに、彼が長らく居城として使用して来た岐阜城は、安土入城に伴い、嫡男たる織田信忠に譲渡しており、つい

でに織田家の家督さえも譲っていた。これらの処置は、織田政権の後継者たる信忠の地位を確固たるものにするために必要不可欠なものであり、このころの信長は新時代の建設のみでなく、新時代の藩屏となるべき『織田政権』の安定にも全力を注ぐようになっていたのだった。

それとはもかく、広大な織田帝国のど真ん中に位置する安土に腰を据えた信長は、壮麗壮大な大宮殿の天主閣にて、次々と舞い込む各地からの報告に耳を傾けていた。

「一向宗と謙信入道が和議を結んだとのことにございます」

報告しているのは、信長の側近の一人たる堀秀政である。信長からは、特に久太郎と呼ばれて可愛がられている寵臣であった。

「謙信と一向宗が？」

信長の目の色が変わった。

「はッ！」

時は五月。あれだけ眩かった桜色も、無残なほどあっけなく散つて間もない季節。信長は桜色を、もつとどす黒くしたようなおぞましい顔をして、堀久太郎秀政を睨みつけていた。

「フン。あの腐れ坊主め。いよいよ余と決戦する意を固めおつた」

信長は天主閣のあちこちを、うろつろと落ち着きなく歩きまわり、そして再び堀秀政に目をやった。

「信盛に使者を出せ。意地でも石山を攻め落とせ、とな」

落魄れているかのように見えて、虎視眈々、来るべき繁栄に備えて、着実に手を打っていくのが信長のやり方なら、繁栄を謳歌しているように見えて、次々と敵に押し切られてしまふあたりも彼らしかつた。

前年には従三位権大納言などという栄職に上り、次いで家督を信

忠に譲るなど、着実に織田政権の基盤を固めていったはずの信長であったが、そこは熾烈な戦国乱世である。今日の繁栄が、明日も約束されているとは限らないのであった。

天正四年だけを見ても、一月には丹波攻めを行った明智光秀が、黒井城主赤井直正のために敗れて坂本に逃げ戻っているし、四月ごろから本格化した石山本願寺攻めも、依然として芳しい成果を上げていない。挙句の果てに、五月になると、本願寺と上杉謙信が和議を結び、織田と上杉の間に亀裂が走るようになった。

とりわけ、上杉謙信との関係が悪化したことは、信長の立場を大いに揺るがすに十分な威力を持っていた。何しろ、現在存命の諸侯のうちで、織田信長に対抗できる名声、実力、経験を兼ね備えた者は、上杉謙信ただ一人と言っても過言ではなかったからである。その上杉が織田家との同盟にひびが入るのを覚悟で、本願寺と和議を結んだとなると、ただ事ではなかった。

信長の受難は、そればかりではない。

七月に入り、史上有名な木津川の合戦（第一次）が起きている。これは、足利義昭の要請に応じて、反信長陣営への加盟姿勢を明確に打ち出した毛利輝元が、海路から石山本願寺への物資輸送を本格化させたことに対し、信長が阻止しようとして発生した戦いであった。

しかし、結果は織田水軍の記録的な惨敗。天下最強の誉れ高い毛利水軍の前には、俄仕込みの織田水軍では歯が立たなかったのである。

信長の頭は痛い。

一方、そんな状況を受けて、性懲りもなく悪い虫をその体中に飼いだめた男がいた。

松永弾正久秀。

大和信貴山城主として、織田政権下の一地方大名の座に押し込め

られてしまった、かつての覇者である。

今年で六十六歳という。老いてなお、一花咲かそうと野心を滾らすこの梟雄は、信貴山城の一角で、豪快に高笑いしていた。

「上杉に裏切られ、毛利に負け、石山は落ちそうもない。さてさて、織田大納言殿は、どう処理なされるかな？」

弾正は薄暗い居室の中で、にたりと笑った。

「くつくく。まだまだ、この老いばれにも働き場は残っていそうじゃな」

彼はおもむろにすくと立ち上がると、パンパンと手を叩いた。

すると、重臣の林若狭守や息子の松永久通がすたすたとやってきた。

「苦節十年。ようやく、この弾正にも時が巡ってきそうじゃ」

弾正の第一声。久通は首を傾げた。

「ふふふ。分らんなら分らんでいい。どの道、今は動けん。全ては、全ては上杉が動いてからだ。くつくく。上杉が動けば、さすがの大納言殿も二進も三進もいくまい。謙信入道は、信玄入道の轍は踏むまい」

老いてなお盛ん、の代名詞のようなこの老人は、先ほどからずっと、窓越しに広がる青くも果てしない空をジいっと眺めていた。

「それはそうと、若狭よ。四国の情勢はどうなっている？ 確か、

四国は四国で大変なそうだな。阿波守殿（三好長治）などは、飼いだ、もとい飼いだ主に噛まれて、やたら苦しい立場に追い込まれているそうだが」

【滅亡編】第168章 兄弟戦争（前編）

岡豊城。

ここは長宗我部家の本拠地で、今は長宗我部元親の居城となっている。

長宗我部元親と言えば、長宗我部家中興の祖たる国親の嫡男で、幼少期には「姫御子」と囁かれたほどにひ弱な人物だったが、今では父親ですら成しえなかつた土佐統一の偉業を成し遂げ、織田と同盟、三好の弱体化に乗じて阿波にまで勢力を伸ばさんと企むなど、稀代の名将として天下に名を馳せるまでになっていた。

その元親は、今、岡豊城の一角にあつて、にやりと不敵な笑みを漏らしていた。

「で、どうだ？ 細川は動きそうか」

元親が尋ねると、

「おそらく。細川殿から届いた文によると、同志は既に多数集まり、いつでも兵を挙げられるそうです」

重臣の谷忠兵衛がそう答えた。

「で、殿は如何なされます？ 阿波を手中に収める絶好の機会にございませうが」

「いや、しばし待て。まずは様子見が一番。細川が動いたとしても、そこは腐つても鯛。弱体化しても三好は依然として強大だ。細川も容易くは三好を滅ぼせまい。我らが今すぐ攻め込んでいっても、戦の長期化は避けられん。土佐の支配も依然として完璧でない以上、そんな冒険には出られんよ」

元親は側に山の如く積まれた金平糖を鷲掴みにして口の中に放り込むと、ぽりぽりと美味そうに食べていた。重臣の谷は「なるほど」と頷きながら、

「ですが、細川殿単独では三好を滅ぼすことはできませんまい。されば、こちらでも何らかの支援を行う必要性があります」

と、言った。

「それもそうだな。まあ、そちに任せよう。しかし、本格的には動くなよ。深入りするわけにはいかんからな」

元親の敵命を受けて、谷はにやりと微笑んだ。「お任せあれ」と言つて立ち去る彼の後ろ姿を眺めながら、元親は黙々と金平糖を頬張りながら、青く広がる空をじいいつと眺めていた。

阿波国は勝瑞城。

三好長治の下に重臣の三好越後守、矢野国村、河村左馬亮らが集まっていた。目的は言うまでもなく、細川真之の扱いをどうするか。即ち、彼らは細川真之を肅清するよう、長治に進言すべくやってきたのだった。

「守護殿が長宗我部と結びついていることは、もはや確実。このままでは、殿が守護殿に殺されますぞ」

三好越後守が声を荒げてそう言うと、  
「殺られる前に殺れ。もはやそうするより他に手がありません。かつて実休様は、前守護持隆公を殺しました。例え殿が守護殿を殺害しても、誰も咎めたりはいたしません」

河村左馬亮も同様の言を吐いて、長治の決断を迫っていた。

しかしである。

肝心の長治は、全く他人事のような顔をして、面倒臭そうに重臣たちを睨みつけていた。

「たわけどもめ。これから織田や長宗我部とやりあわねばならぬというときに、異父兄あしうえとやり合うなど愚の骨頂ではないか。ここは兄弟、手を携えて、阿讃両国の支配を固め直すべきだろう」

長治にしてみると、織田や長宗我部が迫る中、なぜ血を分けた異父兄と戦わねばならないのか、という思いがある。愚鈍な上に、変なところで頑固なこの男は、他ならぬ兄が自分に弓を引くなどとは夢にも思っていないようなのであった。

「殿」

さりとして重臣たちは、そんな生易しい考えに固執したりはしていない。今は戦国の世。親兄弟で争うことも少なくない。兄弟とはいえ、父を等しくしない細川真之と三好長治が、矛を交えることはない、などと断言できる根拠はどこにもないのである。それでなくとも、細川真之の実父、細川讃岐守持隆は、三好長治の実父、三好豊前守義賢（実休）によって殺されているのだ。

「やめよ、やめよ！ その方たちは、無益な戦を求めて、三好家を衰亡の底に追いやるつもりか？」

長治は居並ぶ重臣たちをぎろりと睨みつけて、そう言った。だから重臣たちは苦虫をかみつぶしたような顔をしながら、「殿は甘すぎますぞ」と吐き捨てつつも、主命とあらば、仕方なく、長治の下から退散したのだった。

とはいえ……。

ここで引き下がるわけにもいかぬ重臣たちは、使者を讃岐に飛ばして、十河存保の采配を仰ぐことにした。長治が駄目なら、存保に……、と思うのも当然の心理であり、そして、彼らの急報を受けた存保は眉を顰めながら、ため息を吐いた。

時は今、天正五年（一五七七年）。

三好が栄華を誇った時代などというものは、既に今は昔の物語と なってしまった。三好長慶が没して、十三年という年月が流れている。思えば、この十三年の間に、いろいろなことがあったような気もするが、とにかく信長の上洛以来落ち目の三好家は、今では讃岐・阿波両国を保つに過ぎなくなっていた。特に頼みの一つであった淡路の安宅信康が、織田方に寝返ってしまったときなどは、誰もが三好の終わりを痛切に実感したのだった。

阿波・讃岐両国を支配下に置いている、と言ってもそれすら建前に過ぎず、讃岐では香川氏の台頭に手を焼き、阿波では細川真之の

策動に困り果てている。その上、土佐には長宗我部元親という恐るべき強敵が誕生し、西から来る織田と共に、三好は東西から挟撃される立場に追い込まれてしまったわけであった。また香川氏、細川氏の反逆は、いずれも元親が裏で糸を引いていると専ら噂なのである。

存保は再びため息を吐いた。

「如何なさいますか？」

重臣たちが、存保に判断を求めてきた。

「言うまでもなからう」

フウト、静かに深呼吸して、存保は言った。

「もはや真之殿の反逆は明白。兄に伝えよ。俺はここを動けん。ゆえに、兄の手で真之殿を肅清せよ、と。……いや、兄に言っても無意味であるな。三好越後らに伝えるのだ。兄の意向など無視して構わん。確実に真之殿を殺せ。後のことは、全て、この存保が責任をとる」

「承知いたしました」

重臣たちは恭しく頭を下げ、存保の御前から立ち去った。そんな彼らの後ろ姿を眺めながら、彼はふと思うのだった。紛れもなく、兄にあたる細川真之を殺さねばならぬ己が立場。戦国とかいう時代でなければ、父は違えど、兄は兄。自分も真之を兄として慕い、長治を含めた三人で仲良く暮らすこともできたのだろうか。

「父上たちは、あんなに仲睦まじい兄弟であったのになあ」

今は亡き、父のことを思う。世に三好四兄弟といえ、どん底に追い込まれていた三好氏に栄華をもたらした有能揃いの仲良し兄弟として著名だった。然るに自分は……。父たちと自分たち。いったい何が違うのだろうか。存保は静かに脇息にもたれかけた。

阿波国は一宮城。その城主に一宮成助なる男がいる。



生粹の真之一派で、ここ数年続く阿波の内乱を主導している有力者だった。三好長治や十河存保も度々彼を討伐すべく兵を出していたが、さしたる効果もなく、依然として一宮城と、阿波全土に犇めく反長治党の総帥として、君臨し続けていた。

そんな彼は今、二通の書状をその手に持っている。一枚は、彼が主と仰ぐ阿波国守護職細川真之からのものであり、そしてもう一枚は……。長宗我部家家中にその人ありと知られる谷忠兵衛からのものだった。

「いよいよ、か」

成助は溢れだす汗を必死に拭いながら、ブルブル震える体を押し隠すように、すっと立ち上がった。

「殿」

重臣たちが、一斉に彼を見つめる。成助は静かに頷き、そして、彼らをぎろりと睨みつけた。

「これより我らは挙兵する。恐れ多くも阿波国守護職にあらせられる細川真之様を蔑ろにし、藩政を壟断する逆賊三好に天誅を下す時が来たのだ。我らはこれより立ち上がり、一挙に勝瑞城に攻めのぼるッ！」

一宮成助の目は爛々と輝いている。ようやくこの時が来た、という興奮の色に溢れている。

「準備が整い次第、出陣じゃッ！」

彼の大音声は、高く高く響いた。一宮城だけでなく、阿波と呼ばれる地域全体に、声高に響き渡った。

【滅亡編】第169章 兄弟戦争（後編）

一宮勢が勝瑞城に迫る。

対する三好長治は相変わらずだった。一宮が謀叛と聞いても、いつもと変わらぬ武装蜂起に過ぎないからと、別段気にする風もなく、処理一切は家臣たちに任せ切っていた。

そして彼はと言うと、酒浸りである。女を侍らせ、きゃいきゃいとはしゃいでいる。もはや、どうにでもなれと、自暴自棄にでもなっているかのような、長治の態度であった。

天正五年（一五七七年）も三月。冬の冷たさが、次第に春の暖かさへと変わりつつある季節。殺風景だった山々に、色とりどりの輝きが戻り始めた頃。

しかしながら、勝瑞城の冬が、春になることはなかった。一宮謀叛と聞いて、動揺していた長治家中をさらにどん底へ突き落とす凶報が、城中に轟いたのは、三月も半ばが過ぎた頃のことだった。

「な、なんだと？」

三好越後守は、耳を疑った。

「守護殿が、出奔？」

「はッ！」

「ば、バカな。守護殿の監視は完璧だったはずだ。ありの子一匹、逃げ出す余地はないはず……」

越後守は動揺を隠しきれぬ顔をして、右往左往した。

「篠原殿、ではござらんか？」

そこに、矢野国村という男が現れ、そう言った。

「篠原殿？」

三好越後が不思議そうに首を傾げると、

「篠原自遁殿は、守護殿と密かに結びついていたと専ら噂にござい

ました。もしかすると、自遁殿が手引きしたのやもしれませぬ」

国村は淡々とした様子でそう答えた。

「……噂は本当だったのか！ 殿の筆頭家老ともあるう御方が、守護殿に内通するとは、何たることだ」

越後は悔しそうに臍をかんでいた。

「されど、守護殿が出奔したとなると、事は厄介ですぞ。おそらく守護殿は一宮勢に合流しておりましょう。となると、各地の守護殿一派が一宮勢に加わる可能性が高い」

「……」

「とりあえず兵を集めましょう。そして、此度は何としても殿に御出馬してもらうしかありません。敵軍の総大将が守護殿である以上こちら三好の御大将を出さねばつり合いがとれませぬ」

矢野国村の言葉に、三好越後守は大きく頷いた。例え拒まれても、今度ばかりは拉致してでも、長治を戦場に連れ出さねばならぬ。そんな悲壮な決意を胸に秘めながら、二人は足早に長治の御殿を目指したのだった。

嫌じゃ、嫌じゃと駄々をこねる暗君を引っ張り出して、とりあえずかき集めた長治軍の総勢は四千。

対する、細川真之軍は六千。ついでに、海部城、大宮城には長宗我部軍が集結を始めており、その数は五千を超える勢いであった。

「長宗我部軍が細川軍を支援するとなると厄介だ。ここは、讃岐の民部様に援軍を求めねば……」

長治に代わって、実質的総大将の座を占めている三好越後の言葉に、矢野国村、河村左馬亮、川島惟忠ら主だった部将たちも大きく頷いた。

「だが、やはり篠原殿は来ないか？」

越後が悔しそうに呟くと、

「はい」

矢野国村は静かに頷いた。

篠原自遁が細川軍と通じている、という噂は既に長治軍全体に知れ渡っていた。そして、自遁が長治軍に合流しないところを見ると、その噂が嘘であると否定できる者は誰もいなくなった。

「筆頭家老の癖に裏切るとは、何たる奴だ。大体、あれの讒言で、長房様を殺してしまつたために、今、我らはこれほどの苦境に陥っているのだぞ」

どれだけ叫んでみても、こみあげる悔しさが衰えることはない。もし篠原長房が生きていたら……。おそらく、こんな事態は来なかつたに違いない。良くも悪くも篠原長房は強権的に四国三好党を統括して来た実力者であつた。彼が健在ならば、淡路の安宅信康が織田に寝返つたりもしなかつたろう。信康が織田に寝返つたのは、下らぬ内争に明け暮れる三好長治の実態を見て絶望したからであつた。これ以上、長治陣営にくつついてみると、安宅氏そのものが滅びかねない。確かに信康も三好の血筋を受け継いでいるが、しかし安宅氏の当主でもあるのだ。であるなら、安宅氏の存続を第一に考えるのが、当主たる者の務めである。

そう考え、決意した結果、信康は織田に寝返つた。

長房さえ健在なら、信康の離反などありえなかつただろう。

長房さえ健在なら……。

言つても詮無きことながら、言わずにはいられぬところに、三好家がどれほど追い詰められているかが分かるというものだった。

「とりあえず、篠原殿の下に使者を送れ。篠原勢が加わってくれば、少しは有利になる。それに、篠原殿はまだ細川軍に合流していない。こちらにつく可能性はあるのだ」

あらゆる悔しさを飲み込んで、篠原自遁の力に頼る。これが、あの三好の姿なのだ。長慶の時代に都で強勢を誇り、天下の征夷大將軍の地位すら動かした三好の末路なのであつた。情けないと言えば、これほど情けない話もない。

両軍は別宮浦と呼ばれる土地に布陣した。

天正五年（一五七七年）は三月二十日のことである。

三好軍は少しばかり兵を増やして四千六百になっている。対する細川軍は六千のまま変わらず。しかし、阿波南部にて五千以上の兵を展開させている長宗我部勢が不気味と言えは不気味である。細川と長宗我部が同盟していることは、ほとんど周知の事実であり、もしも長宗我部軍が細川に味方してなだれ込んでくれば、三好の敗北は決定的であった。

戦が始まる。

お互いが、互いの全力を注いでの正面衝突である。小手先の技など一切使わぬ全力戦争。まず、弓で撃ち合った後、礮を投げ、鉄砲を放ち、そして歩兵による白兵戦に移る。

「これで勝てば、父上の仇を討てる」

細川真之は、心の中でそう思っていた。彼の父、細川讃岐守持隆が殺されたのは、天文二十二年（一五五三年）のことだったから、今から二十四年も昔である。あるとき幼かった彼も、今や立派な中年男となっていた。

時代も変われば変わるものである。二十四年前、三好氏は栄華を極めていた。都を制圧し、近畿地方の大半を掌握。三好長慶は、それこそ飛ぶ鳥落とす勢いでその力を伸ばしていた。

それが今やどうだろう。三好家は阿讃二ヶ国すら維持しきれない次元にまで弱体化した。都は織田信長の支配下であり、近畿地方に残る三好系勢力は、松永弾正久秀ただ一人を残すのみとなっていた。

そして今。かつて三好の完全な傀儡で、何一つ力を持たなかったはずの細川真之が、三好家の正統な後継者ともいえる三好長治を圧倒し、追い詰めている。

時代は変われば変わるのである。真之は溢れだす笑いをこらえるので必死だった。

「わが父の仇たる義賢は死んだが、その息子二人は依然として健在。必ずや討ち取って見せる。長治を血祭りにあげたら、次は存保だ」  
そう呟き、真之は床机から立ち上がった。ワアワアと騒がしい戦場の方に目をやって、フウと静かにため息を吐く。

戦はどうやら、こちらの勝利で終わりそうな雰囲気である。何しろ三好軍は、全く統一性がないのであった。あれがかつて天下にその名を轟かした三好軍とは到底思えぬ有様に、真之は苦笑いした。

戦いは細川軍の圧勝に終わり、三好長治軍は文字通り潰走した。長宗我部軍動く！ という流言を細川方がまき散らしたことが功を奏したのである。結果として、三好軍を構成する諸豪族が次々と離反し、最終的に総崩れとなってしまったのだった。

細川軍はその勢いのままに勝瑞城へ進撃し、これを包囲した。また、戦況が細川の圧倒的優勢に傾いたと見るや、すかさず長宗我部軍も動きだし、細川軍に合流すると、総勢一万五千近くにまで膨れ上がった連合軍は、三月末頃、長らく三好家の覇城となってきた勝瑞城を攻略したのであった。

一方、三好長治はというと……。

彼は、父祖が長年に渡り築き上げてきた全てが音を立てて崩れていく様を目の当たりにして、ただ呆然と立ち尽くしていた。重臣たちが撤退するよう進言しても、「ははは」と、壊れた人形のように高笑いするだけであった。

「民部様の下に亡命し、再起を期しましょう」

と、三好越後は言ったが、長治の耳には届かなかった。

「夢崩れる」

そう言って、力なく床机に腰を下ろした長治は、筆と紙を持ってくるよう命じて、静かにため息を吐いた。

「何をなさいますか？」

驚いた越後が尋ねると、

「辞世の句だ」

長治は淡々と答えた。

「じ、辞世ですと。バカな。まだ諦めるには早すぎますぞ。民部様の御力さえあれば、いつでも復権できるのです。三好家の嫡流たる殿さえ健在であれば、いつでも三好家は復活できるのです」

越後は必死になって叫んでいる。しかし長治は気にしない。

やがて側近が筆と紙を持ってくると、彼はそれを手にとって、何やらすらすらと和歌を記していった。この辺りは、さすがに名族三好の御曹司である。一流の文化人とも称えられた三好長慶の甥だけのことではあった。

三好野の 梢の雪と散る花を 長き春とは 人のいふらむ

「どうだい？」

長治はにこりと笑って、それを三好越後に見せた。

「殿。本気で死ぬおつもりか？」

越後が諦めきった顔をして尋ねると、

「それが三好の大将たる者の務めであろう。それに、お前は俺が生きていれば、三好の家は復活できると言ったが、こんなボンクラが生き延びたら逆に足手まといだ。俺はここで三好の血筋を受け継ぐ者として見事に散って見せる。後のことは、民部に任せよ。奴ならば、見事に三好家を復活させてくれるだろう。民部は今でこそ十河家を継いでいるが、紛れもなくわが弟。三好義賢公の息子であり、長慶公の甥でもあり、そして元長公の血筋を受け継ぐれっきとした三好の御曹司だ。だから、お前たちも、今後は民部に任せ、三好のために力を尽くせ」

長治は、彼らしくもなく殊勝な言を吐いた。

「ふふふ。政治とは難しきものよ。次生まれてくるときは、できれ

ば大名家の跡取り息子なんて厄介な立場ではなく、普通の民草の子として生まれていものだ」

理想を求め、それゆえに堅い現実の前に幻滅した男は、最期の最期に本音を吐いて、にっこりとほほ笑んだ。

そんな様を見て、三好越後は何も言わなかった。ただ一言、「私は死にませぬ」

とだけ言つて、側にいる手勢を従えて彼の下から去っていった。長治はその後ろ姿を眺めながら、フウと静かにため息を吐いた。

やがて細川勢が彼の下に迫ってきた。

長治の本陣には、長治本人と、彼を守らんと集まった決死の兵が数十人ほどいるだけだった。

「そこにいるは、三好阿波守長治だな」

細川勢の将校が、嬉しそうな顔をして尋ねた。

すると、三好長治はゆっくりと床机から立ち上がって、細川勢の前に姿を現した。

「そうだ。我こそは三好筑前守元長が孫にして、三好修理大夫長慶が甥、三好豊前守義賢が嫡子でもある三好阿波守長治である。此の首欲しくば、奪い取ってみよ。一国に値する、三好が御曹司の首であるぞ」

長治はにやりと不敵な笑みを漏らして、愛刀を引き抜いた。長治の手勢もそれに合わせて刀を抜く。

両軍はしばらく睨みあう。

動いたのは長治だった。

「我こそは三好阿波守長治なりいいッ！ 我と思わん者は、尋常に勝負しろッ！」

そんな風に怒鳴りながら、圧倒的多勢の細川勢に突撃する様は、もはや壮絶と言うより他に仕方がなかった。



【滅亡編】第169章 兄弟戦争（後編）（後書き）

更新が遅れまして申し訳ありません。

次回から、十河存保による反撃が始まります。苦境の三好を支え続けた存保の生き様と、長宗我部元親や織田信長ら彼を取り巻く英雄たちの駆け引きを上手く書けていけたらよいなと思っています。

感想やご批判などありましたら、コメントしてくれると助かります。

【滅亡編】第170章 十河存保の決意

天正五年（一五七七年）四月。

三好長治は死んだ。享年二十五。

急報は讃岐にも届く。国主たる十河存保が絶句したのは、当然と言えば当然の話であった。

「そうか」

急使の報告に、存保は思わず天を仰いだ。思いのほか冷静でいられる自分の有り様に驚きつつも、それが体の奥底から溢れだす絶望の表れなのだと知ると、もはや苦笑いするしかなかった。

「で、勝瑞城は細川真之の支配下に入ったのか？」

存保が力なく尋ねると、

「いえ、それがそうでもないのです」

急使はそう言ってにやりと不敵な笑みを漏らした。

急使の話を総合すると……。

苦心の末に三好長治を滅ぼしえたはずの細川真之は、依然として傀儡の座に留まっており、そんな彼に代わって新たに勝瑞城を支配するようになったのは、長宗我部元親だと言うのである。

存保や重臣たちは、さもありませんといった顔をして頷いていたが、最後の最後に美味しいところだけ掻っ攫っていった元親のやり方と、まんまと元親に出し抜かれて、労多益少を強いられた真之の哀れさに、誰もが呆れずにはいらなかった。

「元親は、小少将の方を妻に迎えたとのことにございます」

急使は最後の最後でそう言った。

「な、なに？」

これにはさすがの存保も驚かずにはいらなかったようで、

「は、母上が、元親の妻？」

と、力いっぱい叫んでいた。

「はい。どうやら、篠原殿が元親に差し出したそうにございます」

「……な、なんと」

存保は眉間にしわを寄せながら、如何にも不満そうな顔をして唸っている。母が宿敵の正室となった、などと聞かされて、落ち着いていられる人間などそうそうおるまい。少なくとも存保は、冷静でいられるような人間ではなかった。

「だ、だが、母上は既に五十以上だ。元親も何故に、そのような年齢の母を妻に娶ることにしたのだ？ 別段、女子に困るような身分でもなかるうに」

存保が困惑を隠しきれぬ表情をして呟くと、重臣の寒川元隣がすかさず、

「少少将様は守護殿の母君でもあられますからな」

と、答えた。

「政略結婚、か」

「はい」

思えば、母ほどに哀れな女性もおるまいと、存保は心の中に苦笑いした。何しろ母という人は、幼いころに、家の事情から半ば強引に阿波国守護職細川讚岐守持隆の室に入れられ、継嗣たる真之を産み落とし、ついで持隆が殺されると、亡夫を殺した三好義賢の正室となり、三好長治、十河存保兄弟を生んだ。義賢が死ぬと、重臣の篠原自遁に嫁ぎ、挙句の果てには、長宗我部元親の正室である。

いずれも彼女自身が望んだことではない。全てが全て、周りの男たちの醜い欲望、政治的策謀によって繰り返されてきた悲劇だった。世人は彼女をして、女傑とか烈女と呼ぶ。しかし、存保に言わせれば、戦国と言う荒波にもまれ続けた、哀れ極まりなき女性の典型でしかなかった。

「阿波を支配するには、守護殿の義父であったほうが好都合というわけだな」

存保の言葉に、重臣たちは大きく頷いた。

存保としては、元親の勢力がこれ以上阿波に拡大することは、何としても防がねばならなかった。もしも阿波が長宗我部の手の中に落ちたなら……。結果は誰の目にも明らかである。讃岐一国に押し込められた十河家に勝ち目はない。

長宗我部の進撃を食い止め、三好の退潮を押しとどめるには、もはや今動く以外に手はなかった。即ち、今持ちうる存保の全力を動員して阿波に進攻し、各地の長治残党と共に長宗我部軍と決戦するのである。地盤が固まっていない今ならまだ勝てる。

「殿」

そこに、寒川元隣が声をかけた。

「なんだ？」

存保が尋ねると、

「殿は今後、単独で長宗我部と立ち向かうつもりですか？」

元隣はそう言って、存保の顔をジッと見つめた。

「そのつもりだが、なんだ？」

「いえ。ただ、今となっては独力で長宗我部に抗うのは難しいかと。そこで、織田と同盟すると言つのも、一つの手でございと思いますと思いまして」

「お、織田と同盟だと！」

思いもよらぬ元隣の言葉に、存保はびっくり仰天、驚きのあまり言葉を失った。

「悪くない策と心得ます。実際、今の我らの使命は長宗我部の打倒となっております。織田討伐など、ここ数年、ほとんど果たせていないではありませんか。ならば、織田と和睦し、織田の力をもって長宗我部とあたるといふのも悪い手ではないかと」

「……な、何をバカな。た、例え、織田と和議するのが良い方策として、織田と和議など結べるものか」

存保は動揺していた。織田と同盟、なんて選択肢が存在すること

すら考え付かなかった彼にとって、寒川元隣の進言はまさに驚天動地と呼ぶに相応しいものであった。

「しかしながら、織田の家中には、笑岩入道様がおられますし、松永弾正殿、三好因幡守政勝殿もおられます。彼らの伝を頼れば、決して難しい話でもありません。また、織田殿にしても、これ以上の長宗我部の勢力拡大は好むところではありますまい。即ち、織田殿から見た場合、三好と長宗我部が実力伯仲して睨みあってくれていた方がよい。ならば、長宗我部の勢力が拡大しすぎた今、織田が我らを支援することを拒んだりはいたしますまい」

散々敵対して来た織田と同盟し、長宗我部に当たる。確かに寒川元隣の言葉を聞いている分には、実現しそうな気がしないでもない。三好笑岩や三好政勝ら、生き延びている主な三好一族は、既に悉く織田信長の家臣となっている。だが、三好の正統を継ぐ存保が、織田と同盟するなどと言うことが許されるのか。織田との戦いで戦死してきた多数の同胞たちの御霊に対して何と申し開きすればよいのか。

「殿の最大の使命は、三好家の存続及び発展にございましょう。ならば、今は涙をのみ、織田と同盟するのです。もはや、それ以外に御家が復活する道はありませんぞ」

寒川の強い口調に、存保は黙り込んだ。

存保は一人静かに考えている。十河軍を総動員して阿波に攻め入る以上、敗北は絶対に認められない。負けとは即ち滅亡と同義。勝つて初めて三好の生きる道が開けるのだ。しかしである。例え勝てたとしても、引き続き織田と長宗我部に挟み討ちされている現状では、再び三好はじり貧に陥りかねない。

織田との同盟。悪くない。自分の頭の中に巣くっている無意味な自尊心とか、意地なんてものを捨て去ってしまえば、これ以上の良策もないような気がした。

いずれにしても、負けられない。負けるわけにはいかないのだ。兄が死んだ今、三好を背負って立てるのは、自分しかない。三好之長、長秀、元長、長慶、義継と続き、長治、存保と受け継がれてきた三好家を、自分の代で潰すわけにはいかない。

彼はパンパンと手を叩いた。すると、近習がすたすたとやってきて、彼の言葉を待った。

「寒川に伝えよ。例の件、お主に任せるゆえ、好きにせよ、と」

どうにも世の中、上手くいかぬことばかりである。

存保は自嘲気味に呟いた。彼は彼なりに頑張っているつもりなのだ。必死になって三好家を守ろうと努力して来たつもりだった。それなのに、どうだろう。三好家の衰退は歯止めがかかるところか、拍車がかかってきている感がある。何をやっても上手くいかず、何をやっても裏目に出る。

無間地獄にでも嵌ってしまったかのような感覚に、存保は、ハアといっぴになく深いため息を吐いた。

すると、そこに……。

「ち、ちち、うえ」

子供がやってきた。ヨチヨチと力なく歩く様を見て、存保はにっこりとほほ笑んだ。

十河千松丸。存保の嫡男で、今年で三歳になる。いずれは十河家を受け継ぎ、三好の命運を担う子供だ。できれば自分の代で、三好家復活に目途をつけておきたいところだが、こればかりはどうなるか分からない。兎にも角にも、子供たちの幸せのためにも、頑張らねばならぬと決意する存保なのであった。

「千松丸。千松丸やい。父はな、これから戦に出向くのだ」

存保は、千松丸の側まで歩み寄って、彼を抱き上げると、おもむろにそう言った、

「いくさ?」

片言ながらもしつかりとした口調で喋る息子を見つめ、存保は大きく頷いた。

「そう、戦だ。まあ、今すぐというわけでもないがな。嫌いな奴と仲直りしてから、戦に出向く。そして、いずれはお前も大きくなったら、戦に出向くのだぞ。父にも見せてくれよ。お前の勇壮な武者姿を。お前も、偉大なる三好の血筋を受け継ぐ御曹司なのだから」

あの兄ですら、最期くらいは見事に散った。三好に暗君無し、なんて言葉は、まだまだ死語ではない。存保はにっこりとほほ笑みながら、千松丸を下ろすと、

「全てが終わったなら、その時は思い切り遊ぼう。いいか。その時は、父を楽しませるいろんな遊びを考えておくのだぞ」

と言つて、彼は千松丸の小さき肩をぽんと叩いた。

負けられない。負けるわけにはいかない。

思いは膨らむ一方だった。千松丸を侍女に預けて下らせると、存保は再び一人になって物思いに耽った。

勝つのだ。

勝つて、再び三好の栄光を取り戻して見せる。

【滅亡編】第171章 秀吉と笑岩

織田信長は、この頃、京都は本能寺にいた。

今や一手に天下を治めている最高権力者である。上は朝廷から、下は貧民乞食に至るまで、彼を恐れ、敬わぬ者など誰ひとりいなかった。既に、誰もが彼こそ真正正銘の天下人だと信じ、彼以外の天下人などあるはずがないと思っていた。

信長の領土はますます拡大して、まさに飛ぶ鳥落とす勢いであった。官位も正三位内大臣兼右近衛大将の高みにあり、朝廷の中にはもっと高い官位を与えて、早期に彼を律令官制の下に取り込んでおくべきだと主張する者も少なくなかった。

信長という人はこれで生粋の尊皇家であつたりする。朝廷に対し、莫大な土地を寄進してみたり、度々多額の金を差し出してみたり。彼を朝廷の破壊者などと評する人もいるが、とんでもない。これまで現れた様々な権力者が、朝廷に強いてきた仕打ちの酷さを考えれば、信長の朝廷政策はよほど親朝廷的と言ふべきだ。それと、徳川家康ほどにケチではない信長は、朝廷が織田政権のことに口出ししない限りは、別段、朝廷のことに口出ししたりもしなかった。

彼の頭の中には、若かりし頃に見た都の姿があつた。確かにあの頃も、都そのものは立派で、十分に繁栄していたが、しかし、大内裏などを見るも無残な惨状をさらけ出していた。相次ぐ戦乱で焼け落ちた御所の一部などは、全くそのままの状態で放置されていたし、何より、公家と称される人たちのみすばらしき姿に、人知れず絶句したものだった。

少なくとも自分の統治下にある限りは、帝にそんな思いはさせまいと、彼は心の中に誓っているわけである。だからかもしれない。身なりばかりでなく、性根までも貧しくなってしまう公家たちの有様に、彼は言いようのない怒りや不満を抱かずにはいられなかった。



要するに、彼らは信長を恐れすぎているのである。連日のように彼の下にやってきては、無意味際ならないおべっかに励む公家衆を見ていて、よく思う。 magari なりにも帝の家来であるならば、それに相応しき自尊心と気位ぐらいは持つべきだろう。如何に信長が怖いからと、毎日毎日、懲りず飽きずに頭を下げる彼らを見てみると、反吐が出そうだった。

そして、今日もまた信長が本能寺にいたことを聞きつけた公家たちが、甘いものに群がる蟻の如くやってきて、ああだこうだと、くだらぬ阿諛追従を並べ立てては、家宝だとかいう茶壺や絵画などを置いて帰っていった。

「たわけどもめ」

信長は一人呟いている。

彼は相も変らぬ不機嫌な表情をその端正な顔の上に浮かべながら、散りゆく春の空を、ぼんやりと眺めていた。

しばらくぼんやりと寝転んでいると、そこに一人の男がやってきた。小柄で、しかしどこか偉そうである。信長は気配だけ察すると、おもむろに一枚の紙を放り投げて、「見る」と言った。

「上様。これは十河民部からの書状ではありませぬか？」

信長から下げ渡された書状をまじまじと眺めながら、羽柴筑前守秀吉はにんまりと微笑んだ。

「そつだ。和議を求めてきている」

信長が淡々と言うと、

「和議、ですか」

秀吉は、その少しばかり独特な猿顔をくちやくちやくに歪めて、にんまりと微笑んだ。

「たわけたことよな。余と三好が和議？ はっはっは。笑わせてくれるぞ」

信長は既に心ここにあらずと言った顔をして、あちこち落ち着き

なく動き回っている。そんな様を眺めながら、秀吉は静かにため息を吐いた。

「されど、悪くない、と上様はお考えなのでしょう」

相も変らぬ秀吉の態度であった。信長はプイッとそっぽを向くと、再び上座に戻って脇息にもたれかかった。

「まあな。これ以上、元親風情の勢力拡大を許しておくわけにはいかん。鳥なき島の蝙蝠とはいえ、肥え太った蝙蝠の退治は、厄介になりかねんからな」

信長の立場は良いようで苦しい。

目下、彼を苦しめているのは、西の本願寺と、北の上杉だった。とかく、本願寺の覇城たる石山御坊は、どれだけの大軍と物量で攻め立てても、うんともすんとも言わないし、上杉に至っては、既に越中を掌握し、能登にも力を広げて、織田との決戦に備えて着々準備を進めているという。

問題は上杉だった。武田信玄亡き後、信長に唯一対抗しうる人間と目される謙信入道率いる北国の雄が本格的に動き出すとなると、信長は再び窮地に追い込まれかねなかった。それでなくとも、依然として西には本願寺と言う強敵を抱え、拳句、毛利輝元という得体的にれない大名まで控えているのだ。東を見ても、長篠で潰したはずの武田勝頼が、性懲りもなく徳川家康の領土を侵している。

上杉が動き、次いで本願寺、毛利、武田が連動して動くとなると、如何な信長といえど、苦しい状態に追い込まれるのは確かだった。しかも、織田政権の膝元たる大和を領する松永弾正久秀が、密かに足利義昭を通じて上杉らと内通している、などという噂も実しやかに流れているくらいである。

打つ手を一つ間違えば、織田政権が崩壊しかねない。そんな中で十河家からの和議要請だ。信長包囲網の一角を占める十河家が織田方に付くということだから、一見すればよい話のようにも見える

が、もしも受理すれば長宗我部を敵に回す事になる以上、信長としても、ここは慎重に決めねばならなかった。

「猿、お主も上杉討伐軍に加われ」

信長は唐突に、そう言った。

「それがしも、ですか？」

素つ頓狂な顔をして驚く秀吉に、信長は大きく頷いた。

「権六を補佐するのだ。おそらく、後数ヶ月もすれば上杉は動く。謙信入道を甘く見るわけにはいかん。お前も長浜の手勢を率いて権六の寄騎に連なり、上杉勢を蹴散らして参れ」

信長の下す命令とは、常に唐突で、急なものであった。しかし、拒むことは許されない。とかく秀吉のように、ありとあらゆる主命を忠実にこなして、その成果を最大の武器として出世してきたような男にとり、「できませぬ」などと言う言葉は禁句以外の何物でもなかった。

「上杉さえ倒せば、十河との和議もやぶさかではない。しかし、それまでは保留だ。……いや、形だけは拒んでおけ。長宗我部にいらん詮索をされたらつまらん。……それにだ。和議と言うのも面白くない。十河が余に従うならば、それを認めると言うことにする」

信長はひとしきりそう言うと、「ははーッ」と恭しく頭を下げる秀吉のことなど意に介する風もなく、面倒臭そうにため息を吐くと、「酒だ。酒を持って！」

と、誰に対するでもなく、大声を張り上げて怒鳴っていた。

秀吉はその足で、己が京都屋敷に戻る。

羽柴筑前守秀吉。幼名日吉。旧名木下藤吉郎。

元は農民の子倅だったこの男も、今では近江長浜十四万石を領する、れっきとした大名であった。織田家中における序列も、一門衆を別とすれば、筆頭家老たる佐久間信盛、次席家老の柴田勝家、以下明智光秀、丹羽長秀に次ぐ五番手ほどの位置にある。要するに、

今の彼は、織田政権の中樞を担う大幹部というわけだった。

そんな彼は、いつものように飄々と屋敷に戻り、そこで、

「先ほどから御客人が御待ちにございます」

と言う、石田佐吉の報告を受けたのだった。

「客人？」

秀吉は難しそうな顔をした。

「はッ！ 三好笑岩と名乗っております」

見るからに利発そうな少年、石田佐吉も今年で十七になる。秀吉が長浜を知行するに際して抜擢した小姓衆の一人であった。

「笑岩殿？」

秀吉はますます不思議そうな顔をして、とりあえず客人たる三好笑岩が待っている部屋に向かった。

三好笑岩。

元の名を三好康長。今は亡き三好長慶の叔父であり、三好元長の弟でもある。生まれは永正三年（一五〇六年）と言うから、今年で七十一歳になるわけであった。短命が多い三好家にあつて、この老人は凄まじいほどの長寿であると言わざるを得まい。

長らく三好政権の長老として、近畿地方にその名を轟かせてきたこの老人も、今では織田家の家臣の一人である。ただし、彼ほどに経験豊富な人間もいないので、いわば相談役として、信長に意見したりすることも多かった。

「笑岩殿ではござらんか。やあやあ、久しぶりだ」

秀吉は相も変らぬ大声を張り上げて、馴れ馴れしく法衣の老人の下に歩み寄ると、その眼前にどっかりと腰を下ろした。

「筑前殿、久方ぶりにございます」

恭しく頭を下げる笑岩に、秀吉は苦笑いした。

「そんな仰々しい挨拶は抜きにしよう。笑岩殿は、今は亡き三好筑前、三好修理大夫に仕えて、その名、天下に轟く御方ではござらん

か。こんな醜き猿に、丁重な態度をとるには及びませぬよ」

「いえいえ。昔は昔。今は今。今をときめく羽柴筑前殿に、無礼な態度など取れるはずがありません」

などと言って、笑岩は再び頭を下げた。秀吉は満更でもなさそうな顔をして、彼をまじまじと見つめた。

「それで笑岩殿。此度は何用にございますか？ それがしも忙しい身にて、これより長浜に発ち、上杉征伐の軍に加わらねばならぬ仕儀となった。ゆえに、できれば手短にお願いしたい」

まくしたてるように秀吉が言くと、笑岩は「されば」と、軽く咳払いして、

「三好家……、あいや、十河家のことにございますが」と、切り出した。

【滅亡編】第172章 笑岩の思い

「三好家のことか。それならば、聞かずとも分かる。同盟……、もとい、十河民部が我らに付きたいと申し出ている話についてだろう。やはり、笑岩殿の下にも知らせが参っていたのか。まあ、三好の最長老ゆえ、当然と言えば当然だが」

秀吉はそう言つて、ふーむと唸り、そして、

「まあ、上様も乗り気でないわけではない。言うまでもなく、長宗我部元親の勢力拡大は急すぎる。このまま放置しておけば、いずれ四国全土が奴の手に落ちるのも近い。しかしである。今はそれどころではないのだ。先ほども申ししたが、わしは上様の命で上杉征伐に出向く。気に食わんが、柴田権六の寄騎に連なり、上杉軍を迎え撃つのだ。上手く上杉が退けられたら、上様も十河のこと、本気で考えてくださるだろう」

まくしたてるように言うのだった。

「しかしだ。ここに一つ問題がある」

「問題？」

秀吉の言葉に、笑岩は思わず身を乗り出して尋ねていた。

「そうだ。キンカン頭……、もとい、明智日向じゃ」

「日向守様」

「今では上様から惟任これいっなどという名字をもらつて、惟任日向守などと称しているが、こいつが、長宗我部との折衝の一切を取り仕切っている。長宗我部と断交し、十河と結ぶとなると、明智日向が実に厄介な存在となるのだ」

秀吉は露骨なまでの嫉妬心をその眼に滾らせて、腹立たしそうにぼやいていた。

明智日向守光秀。彼こそ、飛ぶ鳥落とす勢いの秀吉が最も恐れている人物であつた。はつきり言つて、秀吉には筆頭家老の佐久間も、次席家老の柴田、さらには丹羽など眼中にない。佐久間など、本願

寺攻めも上手く出来ず、拳句、陣中で茶会ばかり開いているので、信長から不興を買っている。近いうちに何らかの沙汰が下るのではないかと専らの噂だった。柴田は、確かに軍事的手腕と政治的な手腕は見事だが、秀吉から見れば小粒だ。恐れるに足らない。丹羽は文官としては見事だが、軍人としては今一つだ。軍人として今一つなら、大して問題にはならない。せいぜい、秀吉がそれなりに警戒しうるだけの実力を備えているのは、滝川一益くらいであろうが、まあ今現在、織田家中の序列において、滝川は秀吉の下位にあるようなものなので、それほど恐れることもなからう。

しかし、光秀は違う。軍人としても文官としても、とにかく何から何まで見事にこなす。しかも、かつて足利將軍家に仕えていたこともあり、京都のことに異常に詳しいのだ。面倒臭い朝廷折衝などの際には、彼ほど重宝できる人間もいない。その上、織田家中における序列は、秀吉より上位なのだ。

今現在、彼は丹波征伐を命じられているが、これが成功裏に終わったなら、明智家の領土は現在の坂本六万石から、一挙に丹波三十万石を加えた、織田家屈指のものとなってしまうのだ。

なんとかしなければいかんとは、秀吉もつねづね思っていたのである。そう考えると、今回の十河家の一件は、光秀が受け持っている長宗我部外交を破たんに追いやり、彼の面子を叩き潰す絶好の機会であるように思えたのだった。

「笑岩殿。この羽柴筑前、決して三好家を悪いようにはいたしません。笑岩殿も、どうぞ御心安らかに」

秀吉はそう言うてにつこりとほほ笑むと、そこに、石田佐吉が茶菓子など持ってやってきた。

「佐吉、下がってよいぞ。それと、権兵衛を呼んで参れ。一つ頼みたいことがあるのだ」

茶菓子をめいっばい口の中に放り込みながら、秀吉はおもむろにそう言った。

「承知しました」

佐吉は静かに頷き、すたすたと下がっていった。そんな彼の颯爽たる後ろ姿を眺めていた笑岩は、

「あれは？」

と、尋ねずにはいられなかった。

「ああ、我が小姓の石田佐吉にござるよ。あれで随分機転が利き、利発なので、重宝している」

「なるほど」

如何にも利発そうで、端正な顔立ちをしている佐吉青年を見ると、笑岩は何とも言えず臉が重くなつた。なんだか、若かりし頃の三好長慶を見ているような気がしたからであつた。

気がつけば、笑岩は七十一。兄である元長が死んで、既に四十五年。甥である長慶が死んで、もう十三年になる。随分と長生きしたものだ。もしも兄や甥が今も生きていたなら、世の中はどうなつていただろう。こんな風に、百姓上がりの俄か大名に頭を下げなくともよかつたのだろうか。

などといういろいろ考えていると、やがて佐吉に誘われ、仙石権兵衛という男がやってきた。

「こいつは仙石権兵衛秀久と言つて、私の家来です」

秀吉がそう言つて紹介すると、仙石秀久はぺこりと頭を下げた。

「笑岩殿。先ほども申し上げたが、私は忙しい。それゆえ、今後は、権兵衛を取次役にする。もちろん、それがしが上杉征伐から戻るまでの間にございますが。今後、もし十河殿に万一のことあらば、権兵衛に伝えてくれ。この羽柴筑前、決して悪いようにはいたしませんゆえ」

秀吉はそう言つてからからと笑つた。笑岩はというと、少しばかり戸惑つた様子で、仙石権兵衛秀久とかいう男の顔をジいっと見つめていた。

「笑岩殿、如何なされた？」



答えがないのを訝しく思ったのだらう。おもむろに秀吉が尋ねると、笑岩は慌てて首を縦に振り、

「承知いたしました」

そう答え、恭しく深々と頭を下げた。

仙石秀久は、秀吉配下では中堅級に位置づけられている武将である。近江は野洲郡に一千石程度を知行しているという。まあ、秀吉が大名となる以前から仕えているわけで、古参と言えなくもないが、羽柴小一郎秀長、竹中半兵衛重治、蜂須賀彦右衛門正勝、前野将右衛門長康らのように、羽柴家の枢機に参与できるような重臣であるとは言い難いものがあつた。

秀吉が慌ただしく去つた後、笑岩は仙石秀久と二人きりになつた。とはいえ、お互い、挨拶を済ませて、とりとめもない話を二つ三つしたぐらいである。三好笑岩は、まがりなりにも信長の直臣で、かつ戦歴豊富な戦国の長老とでも言うべき人物であるから、信長の重臣たる秀吉の家来筋に過ぎない仙石秀久とは立場がまるで違つたのであつた。それゆえお互い話すべきこともさして見当たらず、笑岩はやむなく羽柴家を去つたのである。

都の屋敷に戻つた笑岩は、ふといろいろなことを考えた。

昔のこと。今のこと。そして、これからのこと。

永く生きたものである。そして、世の中もがらりと変わった。昔はこんな世の中が来るとは夢にも思わなかつたもので、長生きしたからこそ味わえる不思議だとは重々承知しながら、こんな世の中になるぐらいなら、いつそ長生きなどしなればよかつたと、つくづく思うのだった。

三好の栄華も今は昔。今は織田の天下である。可愛い甥っ子であつた長慶が天下を掴み取ると思わなかつたが、長慶が死んで、こ

れほどあつけなく三好が衰亡のどん底に追い込まれるとも思わなかつた。

「大殿は、羽柴様と結ばれるおつもりですか？」

側近の一人が、ふと、おもむろにそう尋ねてきた。

「ん？ まあ、な。気は進まんが、わしが見るところ、織田家中で最も勢いがあるのは羽柴筑前じゃ。何しろ、百姓の倅からここまでの上がつたのだ。いずれ、柴田とか佐久間とかいうのをおしおのけて、あの人が織田の筆頭となられるだろう。織田が天下を握ることが確実な今、織田の中で一番羽振りがいい羽柴筑前に付くのが、一番妥当な策だ」

笑岩はそう答え、フウと静かにため息を吐いた。

「しかしながら、最近の上杉が出てくると専らの噂です。上杉が出てくれば、甲斐の武田、中国の毛利はもとより、石山の坊主どもも動きを活発化させましょう。大和の古狸……、もとい弾正殿も、最近上杉家や備後におわす流れ公方殿と密使を交わしていると、もっぱらの噂にて」

「……らしいな。松永弾正殿らしい。だが、此度ばかりは弾正殿もその眼鏡が曇つたらしい。今織田内府に逆らつて勝てる奴など、誰もおるまいよ」

「しかし、上杉軍が出てきたら、厄介ではありませぬか」

側近に言われるまでもなく、世間の人は皆、上杉が出てきたら、天下はどうなるのかと不安に慄いていたのだった。織田が勝つか、負けるか。

「織田は負けんき。底力がまるで違う」

笑岩はあつげらんと言つてのけ、フウと静かにため息を吐いた。

## 【滅亡編】第173章 手取川の合戦

天正五年（一五七七年）は七月頃。

上杉謙信率いる総勢二万の大軍が、満を持して出陣し、まず越中は魚津城に入り、そして能登に突入した。

能登を支配しているのは、畠山氏である。現在の当主は畠山春王丸と言つて、まだ五歳程度の子供であるため、それゆえ実権を握っているのは、長続連ら能登七人衆と称される重臣たちであった。

上杉軍が能登に攻め入るのは、これで二度目のことになる。即ち昨年、天正四年（一五七六年）九月にも、二万の大軍で攻め込んだわけだが、この時は、北条氏政の軍勢が上杉の属領上野に迫ったため、謙信はやむなく兵を引かざるを得なかった。

そして今年、七月。再度、謙信は能登に攻め込んだ。北条氏政軍が撤退し、再び能登に攻め込める余裕ができたからである。しかし、それ以上に、足利義昭や毛利輝元から、再三に渡り、上洛を求める書状が届けられてきたことのほうが大きかった。かくして謙信は、上洛の足場を固めるために、能登畠山氏の壊滅を目指して、能登に入ったのであった。

待ち構えるは、長続連ら畠山勢一万五千である。上杉軍が二万であるから、兵力的には互角であった。

しかし……。

畠山勢の兵力は、言ってみれば要するに寄せ集めである。とにかく、筆頭家老として実権を握る長続連は、領内の戦える者を悉く総動員した。精強無比と称えられる上杉軍二万と互角にやりあうには、まずは何より兵力が必要だと判断したわけだが、それが功を奏したか否かは、結果を見れば明らかであった。

即ち、余りに多量の、しかもこの馬の骨とも分からぬ人間を城

へ入れたことにより、おそらくはその中の誰かが持ち込んだであろう疫病が城内に蔓延し、あろうことか、総大将であるべき幼君春王丸が疫病のために没してしまったのである。

幼君とはいえ、総大将を失った畠山軍の士気低下は著しく、長統連は、やむなく急使を安土に派し、織田信長に援軍を要請したのであった。

北ノ庄城に織田軍が集結した。

総大将は、当地の城主たる柴田権六勝家。以下、その直属寄騎部将たる前田利家、佐々成政、不破光治、金森長近、佐久間盛政らのほかに、臨時寄騎として信長から与えられた羽柴筑前守秀吉、丹羽五郎左長秀、安藤守就、稲葉一鉄、原長頼ほか多数。兵力にして総勢四万を超える大軍である。

八月も後半となつて、織田軍は進軍を開始した。即ち、能登畠山氏を救い出し、上杉軍を撃破して、織田の勢力を北国にも広げる。

上杉の脅威さえ振り払えば、織田の天下は確固たるものとなるのだ。何はともかく、今回の合戦で勝利せぬわけにはいかなかった。

しかしであった。

「権六殿、早急に兵を進めねば、上杉に先を越される」

北ノ庄に集結した頃から、総帥たる勝家と、実質的副将格の秀吉の対立が深まりだすようになっていた。元から、さほど仲が良くない二人であるから、少しでも意見対立が発生し始めると、もはや容易く收拾のつかぬ大喧嘩へと発展していった。

「猿如きに、何が分かる」

勝家はそう言いたげな目で、じろりと秀吉を見つめてきた。秀吉という人は、そういう目をされることを何よりも嫌つ。

「権六殿はたわけじゃ。こんなところで、悠々と過ごしておつては、上杉に勝てようか。むぎむぎ上杉に能登を献じて、足場を固めさせてから戦うつもりか。愚の骨頂とはこのことよ。瓶割り柴田か何か

知らぬが、織田四万の将なれば、もう少し冷静に、大局的に物事を見てもらわねば困る」

一事が万事、全くこの調子なのである。とりあえず、柴田勝家、羽柴秀吉双方と親しい前田利家が中に入り、仲裁したので、二人もやむなく矛を収めたが、両者の中に入った亀裂は容易に静まりそうもなく、織田軍の未来に果てしなくどす黒い影を落とすことになった。

それはともかく、織田軍は悠々と進軍し、九月半ばになって、手取川までやってきた。

しかし、この頃になると、既に能登畠山氏の居城たる七尾城は陥落し、能登一国及び加賀の大半は、上杉軍の制圧下に入っていた。意気上がる上杉勢を率いる謙信入道も、織田軍を迎撃すべく、手取川に向かい、そして、両軍はそこで激突したわけだった。

ここで一つ、説明しておかねばならぬ深刻な問題が、織田軍の中に発生していた。即ち、羽柴秀吉の戦線離脱である。

「筑前、お前、本当に兵を引くつもりか？」

前田利家が、慌てて秀吉の下に駆け寄った。

「ああ、引く。この阿呆な大将の下では、いくら兵があっても足りんわ。それでなくとも、わしが手塩にかけて育ててきた貴重な家臣たちだ。有意義な戦で死ぬならまだしも、無駄死にはさせたくない」  
秀吉と言う男は、一度言いだすと実に強情だった。こうなっては、いくら仲の良い利家が説得したとて、彼が応じるはずもなかった。

「又左、好きにさせよ」

諦めきった口調で、柴田勝家が言う。

「しかし、親父殿」

利家は困り切った口調で、勝家を見た。もしここで、信長の許しなく戦線離脱したりしたら、如何な秀吉といえど、ただではすむまい。信長の逆鱗に触れて、ただですむ者など、この世にはいないの

だ。それは信長の寵厚き秀吉とて例外ではない。

「撤退したいなら、好きにさせればよかるう。戦いたくない者が同じ戦場におつては、兵たちの士気に関わるからな」

煽るように、佐々成政がそう続けた。利家と共に、越前府中に三万三千石を知行しているこの男は、柴田勝家に勝るとも劣らぬ秀吉嫌いなのであった。

「内蔵助まで何をたわけたことを」

利家は苦り切った。

「又左、わしは撤退する。後のことは任すぞ。おそらく、いや、確実に権六は負ける。お前も、せいぜい気をつけよ。府中の家来どもが悉く死に絶えるような破目にならねばよいがな」

そう言つて、秀吉は本陣を去った。「撤退！ 撤退！」と叫びながら、浅野長吉や堀尾吉晴ら家臣たちを従えて立ち去る彼のちっぽけな背中を見て、利家は深きため息を漏らした。

九月十七日。

織田軍と上杉軍が激突した。

世に言う手取川の合戦である。

数に勝る織田軍だが、如何せん士気が低い。羽柴勢の撤退がもたらした効果は、勝家たちが思っていた以上に甚大だった。一方、能登を攻めとり、加賀の大半を掌握した上杉軍の士気は高まるばかりである。これでは、どちらが勝利するかなど、誰の目にも明らかと言すべきだった。

同日中に合戦は幕を閉じ、上杉軍の圧勝に終わった。織田軍は、一千を超える死者を出し、手取川は悉く織田の兵で埋まり、水はその血に染まったといわれている。

織田の敗北理由としては、羽柴筑前の撤退による士気低下のほか、合戦当日、雨が降っていたことも大きいといわれている。逆に言えば、謙信は雨の日を待って合戦を仕掛けたわけである。なぜか

たとえば、織田が誇る鉄砲隊の威力を謙信が恐れていたからであった。長篠の合戦のことを知らぬ者は誰もいない。特に長年武田と戦い、最近では武田と同盟関係にあるとはいえ、良くも悪くも武田と密接に繋がってきた上杉が、武田を壊滅に追いやった長篠の合戦のことを調べていないわけがないのである。

謙信は鉄砲隊を無力化できる雨を待つて戦いを挑み、織田軍を壊滅に追いやった。手取川の合戦は、軍神とすら称えられる稀代の戦上手、上杉謙信の名を天下に轟かせただけでなく、各地の反信長党の士気を高めるに十分すぎる効果があった。やはり、信長を倒せるのは謙信のみ、という評価も、この合戦以後、確固たるものとなった。

この合戦以後、松永弾正久秀が織田に刃を向けて拳兵し、また毛利や本願寺、武田といった反信長勢力も活動を活発化させることになる。然るに上杉は、なぜかそれ以上進撃することなく兵を引き、謙信などは、越後春日山まで引き上げてしまった。北条が動いたからとも、越後・越中・能登・加賀にまで広がった領国を固め直すためとも、あるいは、謙信自身が病に陥ったから、などという説がある。肝心の謙信は、理由を家臣に問われても、

「木曾義仲は、倶利伽羅峠に平家軍を撃破した後、北国の支配をさして固めることなく都に上り、結果自滅した。わしは、義仲の轍は踏まんざ」

などと言って、からからと笑っていたとのことである。

まあ、実際のところは、柴田勝家ら織田軍首脳を悉く討ち漏らしてしまったことで、越前に配備された織田の防衛網を突破するのは容易でないことを悟ったからこそ、謙信は撤退を決断したのである。戦が長引けば、能登や加賀などで不穏な動きが発生しないとも限らないし、何より北条氏政の動きが気になるのだった。

何はともかく、手取川の合戦は上杉の圧勝に終わり、以後、北国

の支配権は上杉の手の中に入った。ゆえに、謙信入道が没するまでの間、織田による北国経営は非常に厳しい状態に追い込まれることとなり、織田による統一事業そのものも一時休止を余儀なくされることになった。

そして、無断撤退した羽柴筑前守秀吉が、信長の怒りをもるに受けたことは言うまでもない。彼は信長の命により、長浜城に謹慎した後、前田利家らの助命嘆願もあって、とりあえず命だけは助けられることになった。彼が正式に復権するのは、同年末に行われた、松永弾正討伐戦でのことである。



【滅亡編】第174章 弾正の末路（前編）

松永弾正は今年で六十七歳。信貴山城にいて、臍を咬んでいた。老いる、ということをおぼえてしまったかのように、この歳になるまで精力的に働いてきた老人は、気が付くと、すっかり老けこんでいた。何しろ、やることなすこと、全てが全て裏目に出て、今やただの国人領主の一つにまで成り下がっていたのだから。

松永弾正ほど波乱万丈な人生を歩んだ男も珍しかろう。生まれは……、そもそも良く分かっていない。おそらくは貧しき農家なのだろう。そこから這い上がり、三好家に仕え、ついには大名となつて天下を動かした。それが今やどうだろう。今の彼は、大和一国すらもまともに支配できてはいなかった。

「諦めんぞ」

弾正は常々そう思っている。

「わしは天下をとるのだ」

彼は信貴山城の本丸御殿にごろりと寝転ぶと、おもむろにパンパンと手を叩いた。すると、いそいそと正室たる三好御前がやってきた。今は亡き長慶の娘にして、弾正の妻。今年で三十三歳になる。

「どうなさいました？」

彼女はしおらしい口調で、ジツと弾正を見つめた。

「いや、何となくそちの顔が見たくなっただけじゃ」

そう言つてにつこりとほほ笑む老人の顔を見て、三好御前は困つたように顔を赤らめた。

弾正にとつて、三好御前は己が権力の象徴であつた。何しろ、彼女は三好長慶の紛れもない娘なのである。即ち、名もなき、どこの馬の骨とも知れぬ身分から這い上がった自分が、主家たる三好家の一門に列したことを証明する存在。しかしながら、その三好家も今や衰亡の極みにあり、このままの情勢が続くなら、確実に滅びるだらうと誰もが思わずにはいられぬほどであつた。

「そなたは、わしが憎らしいか？」

弾正はおもむろに尋ねてみた。

「なぜですか？」

三好御前は不思議そうに首を傾げた。

「いや、わしや三人衆が無意味な戦争に明け暮れたがゆえに、三好家は衰亡のどん底に追い込まれたのじゃ。今の世の中になったは、わしのせいと言って、まず過言ではあるまい」

「……」

「それに、そなたの兄たる義興公も、叔父たる十河一存公、安宅冬康公も、全部、わしが裏で糸を引いて暗殺したものと、専らの噂じや。そして、そなたの父たる長慶公さえも、わしが手をかけたと主張する者もあるぞ」

とかく噂などというものは無責任なもので、面白おかしく悪人を作らなければ気が済まないようだった。松永弾正なども、噂の被害者と言うべき面が多々あり、今やすっかり、三好をどん底に追いやった奸臣中の奸臣と、上は公家から下は民草に至るまで、彼を蔑む声は多かった。

「あなた様は、その噂が事実だと認められるのですか？」

三好御前はそう言って、ジツと弾正を睨んだ。

「さてなあ。わしは悪人じゃよ。少なくとも、東大寺を焼き払い、將軍を殺した男だからな。あるいは、噂も事実かもしれん」

「……違いますね」

三好御前は、父譲りの鋭い眼光を弾正にぶつけて、につこりとほほ笑んだ。

「違つとなぜ分かる？」

弾正が尋ねると、

「直感です」

御前は、あつけらかんと答えた。

「直感だと？ そんなあてにならんものに頼ると後悔するぞ」

弾正が高笑いすると、

「それ以外に頼るものなどありませんから」  
御前はきつぱりとそう言った。

弾正は苦笑いする。

随分と不思議な女子である。昔からそうだった。さすがに三好長慶の娘だけはあると、よく思った。

「やはり上杉は兵を引いたようです」

股肱の重臣、林若狭守の報告に、弾正はただ「そうか」とだけ頷いて、ハアと小さなため息を吐いた。

「手取川に織田を完膚なきまでに叩き潰しておきながら、兵を引くとはいつたい謙信入道は何を考えているのだ。……よもや、信玄入道の時の如く、死したわけではあるまいな」

弾正の憤りも無理はない。何しろ、上杉謙信上洛を生涯最期にして最大の好機とみて、彼は既に織田に対し、反旗を翻していたのである。手取川に上杉が勝利したと知るや、弾正は己が先見力の高さを自賛し、いよいよ巡ってきたわが世の春を楽しむに待っていたのである。

それが……。

上杉は撤兵し、急速に膨らんだ織田討伐の機運は、破裂した泡のように急激にしぼんでしまった。

「死んだわけではないようです。事情の詳細は間者に探らせている最中ですが、表面的には、北国の支配を固め直すためだそうです」

「……支配を固め直すだと？」

バカなと吐き捨ててやりたかった。能登を攻めとり、加賀を制圧、いよいよ上洛というときに、領国を固め直すために撤退とは、いったい何を考えているのか。上杉謙信は天下を欲さないのだろうか、弾正は何度も思った。

「それと、申し上げにくきことながら、織田内府は我らを討伐すべく、軍を集め始めたようです」

「……だろつな」

弾正は静かに頷き、フウとため息を吐きながら天を仰いだ。もはや、自分の天運は尽きたのかもしれない。使い果たしてしまったのかもしれない。思えば、長慶死後、三好家の筆頭宿老格として近畿地方狭しと暴れまわっていた頃が、自分にとつての最盛期であったのかもしれない。

「わしが滅びたら、三好の名は完全に近畿から消える。御屋形様が作り上げた三好家は、名実ともに滅び去るわけだな。全く、情けなき話じゃ。御屋形様が薨去なされて、まだ十三年しか過ぎていないというのに」

そんな風にぼやきながら、弾正はおもむろに林若狭の方に振り向いて、

「討伐軍の総大将は誰になりそうだ。よもや、内府自ら出張ってくるようなこともあるまいが」

と、言った。

「内府自ら出張ることはないでしょう。報告によると、内府の嫡男たる少将信忠が出張ってくる可能性が高いです」

「少将だと。それはまた、随分と大物だな」

織田左近衛少将信忠。信長の嫡子として、織田家の家督を譲られ、美濃及び尾張を支配下に置いていた人物。信長ほどに凄まじい才能を有しているわけではないが、任せられた任務は無難にこなし、真面目で温厚、人望厚い、まさに理想型の二代目である彼が出てくると言つことは、もはや弾正に勝ち目はないということにもなる。

「また羽柴筑前も少将の副官として随行するようです」

「筑前も？ ……奴は殺されなかったのか？」

「はッ！ 前田又左らの助命嘆願が功を奏したようで……」

「そうか。悪運の強い奴だ」

弾正は思わず苦笑いした。羽柴筑前守秀吉。彼を見ていると、まるで若かりし頃の自分を見ているようで、何とも言えず面白いのだつた。

「まあ、よかるう。少将や筑前に、戦国の荒波を今に至るまで生き延びた松永弾正の最期を思う存分見せつけてやるう。くっくくく。若造どもに、そう容易く敗北する弾正ではないぞ」

何やら嬉しそうに、と言うよりは壊れた人形のように高笑いしている弾正を見て、林若狭も静かに苦笑いした。

【滅亡編】第175章 弾正の末路（中編）

事の顛末を知った時、十河存保は「さもありません」とだけ言って、家臣たちには下がるよう命じた。

「しかし、まあ、あの狸……、もとい松永弾正殿が、こつもあつけなく滅び去ると思ひもよりませなんだな」

と、しみじみ語りながら、立ち去る者たちもいた。存保はぼんやりと庭先に広がる空を眺めながら、かつて見た弾正久秀のことを思い返していた。

世に、三好の大奸臣と評され、將軍を殺し、東大寺を焼き、その他さまざま悪行三昧を尽くしてきた下剋上の権化たる松永弾正の滅亡は、確実に一つの時代の終焉を象徴していた。

存保の感情は非常に微妙である。確かに弾正のせいで、今の三好の危機があることは否定できぬ事実である。その点のみをみれば、存保にとって、弾正は許されざる仇敵であったが、しかし、彼もまた紛れもない三好の遺臣なのであった。彼が大和に領地を保っていたからこそ、三好がかつて畿内に君臨した事実を、人々が忘れないでいたのである。

松永滅亡。それは近畿地方に、三好の流れを受け継ぐ者、その全てが抹消されたことを意味しており、三好氏の時代なるものが完全に終焉したという事実を、嫌と言うほどに象徴しているようだった。

弾正滅亡！

の急報が天下に駆け巡ると、人々は複雑な顔をして、その報告に耳を傾けていた。

戦国史に燦然とその名を轟かせ、確固たる地位を築き上げた松永弾正少弼久秀の末路とは如何なものであったのか。について、少しばかり見てみたいと思う。

信貴山城を包囲した織田信忠軍四万に対し、松永軍は八千だった。兵力差は歴然としているが、弾正久秀とて、激動の如き戦国をその腕一つで生き抜いてきた男なのである。容易く負ける気はなかった。「信忠如きに遅れをとるわけではないぞ」

と、すこぶる意気軒昂な弾正だった。

「しかしながら、織田軍に加わっているのは、信忠以下、佐久間、羽柴、明智、細川、筒井ら錚々たる武将どもですが」

少しばかり不安に満ちた、ひきつった顔をして呟くのは、弾正の嫡子たる松永久通であった。

「はっはっは。気にするな。この難攻不落の堅城信貴山は、そう容易く落とせるものでもないし、その間に、本願寺より加勢が来ることになっている。上杉とても再度の上洛軍を起こそう。決して勝ち目のない戦ではない。それに、わしが織田の主力武将を引きつけておけば、上杉や本願寺なども動きやすいというものじゃて」

「……しかし」

久通は不安なのである。何しろ相手は、あの織田である。確かに本願寺や上杉が出張ってくれば、勝ち目はあるかもしれないが、上杉は遠いし、本願寺は微妙である。

「しかしも糞もない。久通よ。お主は我が子ならば、もう少し、肝太き人間にならねばならんぞ」

などと言いながら、からからと笑う父を見つめながら、久通は「はい」と、神妙な顔をして頷くだけだった。

弾正はその日の夜、重臣の一人たる森好久なる人物を己が下に招いて、こう言った。

「君には是非、本願寺に赴いて援軍要請の使者となつてもらいたい」  
かつては筒井順慶入道に仕え、今現在、弾正に属している森好久は、複雑そうな顔をしながらも、「承知いたしました」と頷いた。

「よいかな。これはわが松永家の命運を分かつ大事な使命ぞ。是非、

成し遂げてもらいたい。もしも成功したなら、戦功筆頭は君のものだ。恩賞も思いのままにとらしてつかわそう」

弾正は、森の肩をぽんぽんと叩くと、路銀だと言って、小袋いっぱい詰まった銀をぽいっと放り投げた。

森好久が去った後、弾正は静かにため息を吐いた。どうなるものか。全ては運次第。松永弾正の名に賭けても、敗北は許されぬ。

#### 織田軍本陣。

信貴山城下は外れに置かれている。その中心に、総大将たる織田左近衛少将信忠がおり、信忠の周りを、十重二十重に囲むように、織田の精鋭たる旗本衆が犇めいていた。

「殿、いよいよですな」

重臣の斎藤新五郎長龍（利治とも）が、床机の上にでんと構える若大将に目を向け、そう言った。斎藤道三の遺児でもあるこの男は、信忠配下の中でも、とかく戦歴豊富な名将として名高かった。

「いよいよだ」

信忠は静かに頷き、フウとため息を吐いた。

すつくと立ち上がり、信貴山城を見上げる。

あそこに、松永弾正がいる。と、思うと信忠は不思議な気がするのである。今でこそ、自分は織田内府信長の嫡子として、正四位下左近衛少将平信忠と呼称される身分にあるが、信長が権力を握る以前は、松永弾正こそが、天下第一の権勢を誇っていたわけである。時代は変わる。こうして、優位な立場で松永弾正に相対できる己が立場に感謝しつつ、信忠はおもむろに采配を振り上げた。

本陣に緊張が走る。信忠はゆっくりと息を吸い込み、

「総攻撃を開始させよ」

怒鳴るように、そう命じていた。



織田軍による総攻撃が始まった。

天正五年（一五七七年）十月五日のことである。

総勢四万。数に物を言わせた猛攻が開始される。とかく奮戦していたのは羽柴勢であり、彼らは、先の失態を挽回すべく決死の覚悟で戦っていた。

しかし……。

築城名人と称えられた松永弾正が、再改築をなした古今無双の堅城信貴山を、そう容易く攻め落とせるはずもないのである。松永勢の決死の抵抗もあって、織田軍は攻めあぐねていた。

特に、松永方の武將たる飯田源基次なる人物は、二百騎ほどの手勢を従えて、自ら城を飛び出して織田軍に特攻し、数百人を斬り殺して、悠々帰城したと言われている。

「はてさて、困ったな」

秀吉は、困ったような顔をして、恨めしそうに信貴山城を見上げている。

「このまま攻め落とせなければ、わしはますます上様から御不興を買ってしまう。それは甚だ困る」

秀吉はフウとため息を吐くなり、側に控える蜂須賀彦右衛門正勝に目をやった。

「城内の雰囲気はどうなっている？」

「はッ！ 意気軒昂、依然、まだまだ戦えると、皆、張り切っているようにございます」

正勝の報告に、秀吉の顔はますます曇った。

「さすがは、天下に聞こえし松永弾正。一筋縄ではいかんわ。仕方ない。こう言うときは、松永に詳しく者に、尋ねるに限るわい」

「松永に詳しくき者？」

蜂須賀正勝だけでなく、側に控えていた側近の竹中重治なども不思議そうに首をひねっていた。

「一人おろうが。長らく松永と戦い、互角に競ってきた、若狸が」  
そう言つて、ニタニタ笑う秀吉に、「なるほど」と、竹中重治が真つ先に手を叩いた。

「筒井順慶ですな」

「その通り」

秀吉は即答しておいて、「後のことは小一郎に任す」と言うなり、供廻りもろくに仕立てず、飄々と陣を去つて、筒井軍の本陣に向かつて駆けていった。

筒井の陣。

大将たる筒井順慶は気負っている。いよいよ宿敵松永を滅ぼせるのだと思うと、心が躍るのである。

筒井と松永の因縁関係など、語りだしたらきりが無い。両者の対立関係は、順慶の先代たる順昭時代から始まっており、以来、三十年以上に渡り、攻防を繰り返してきたのであった。順慶が興奮するのも無理はない。

それにしてもと、順慶は思う。まさか、本当に松永を追い詰められる日が来るとは夢にも思わなかった。彼は幼い頃からひたすらに松永軍と戦ってきたが、そのたびに筒井城を追われ、復帰する、ということを繰り返してきた。領地は縮み、弾正に臣従するを余儀なくされたこともある。

恐るべき敵だったが、それゆえに今の感慨があるのだと思えば、悪い気もしなかった。弾正が死ねば、大和は真正銘、順慶のものだ。信長もそれを認めている。即ち、順昭時代からの宿願たる筒井家による大和統一が実現できるわけであった。

「殿」

そこに、重臣の松倉右近重信が恭しく頭を下げながら、彼の下に

やってきた。

「なんだ？」

順慶が尋ねると、

「何やら、殿に用があるとかで、珍しき客人が参っております」  
松倉右近は、にやりと笑って、主君の顔をまじまじと見つめた。

【滅亡編】第176章 弾正の末路（後編）

「して、何用あつて、我が陣に参つたか？」

筒井順慶の辛らつな言葉が響く。

「はッ！ 此度まかり越しましたは、是非、殿に御報告したいことがあつたからにございます」

男は言う。

「殿、だと？ そなたに殿と呼ばれる筋合いはないが」

順慶がぎろりと睨みつけると、男は「ははは」と苦笑いしつつ、「されど、殿とても松永弾正をとつと踏みつぶしたいとお思いでしょう。もしも弾正が粘れば、奴のこと、どんな手を使って生き延びようとするか分かりませんが。あるいは織田内府様と和睦するという可能性も考えられます。内府様は弾正がもっている茶器にいたく御執心とか」

と、言うので、順慶は少しばかり苦々しげな顔をしつつ、静かにため息を吐いた。

「……で、そなたの要件はなんだ。それ次第によつては、お主がわしを殿と呼ぶを許そう」

「はッ！ されば申し上げます。それがしは松永弾正少弼久秀殿より本願寺に援軍を求めるよう命じられて、城を出たのですが、ここに一つ面白い策が浮かび上がります」

「焦らすな。早く言え」

急かすように順慶が言うと、男はにやりと笑つて、こう続けた。

「要するにです。私が連れてくる兵は本願寺の兵と、松永方を欺くことができるわけです。もし私が連れて来た兵が本願寺の兵ではなく、本願寺門徒の格好をした、殿の兵だったら、どうなると思われませんか？」

「……弾正を出し抜くことができるというわけか」

順慶の顔がおぞましき策士の顔に変わる。

「なるほど。それは随分と良き土産じゃな。……よかるう。再びわしを殿と呼ぶことを許そう。後は、その策で見事、弾正を滅ぼすことができたなら、思うがままの恩賞を約束しようぞ。どうじゃ？」  
「はッ！ この森好久、粉骨碎身の覚悟で、殿の御為に働きとう存じます」

元筒井配下。後、松永に寝返り、再び筒井に帰参しようとしている、この森好久という男は、幾らか小物感があるとはいえ、松永弾正にも劣らぬ変節漢だった。

しかし、順慶にとってはそんなこと、どうでもよかった。あの松永弾正を謀略で出し抜くことができる。彼の十八番を奪うような形で、奴を葬り去ることができる。それが何より嬉しいのだった。

森が去った後、島左近清興が順慶の下にやってきた。

「羽柴筑前守様がお越しです」

そう言つて、頭を下げる左近に、

「筑前守殿が？」

順慶は驚きを隠せぬ様子で、とりあえず上座を降り立ち、秀吉を出迎えるに粗相のないよう、慌てた様子で配下たちにいるいろと命じていった。

松永弾正久秀は、天守閣の頂点にあつて、じつと敵軍を見下ろしていた。

総勢四万。圧倒的大軍だ。これを撃破することができたなら、自分の人生もある程度好転するような気がした。このところ、じり貧といつてよいほど、何をやっても裏目に出ればかりの弾正久秀なのである。この辺りで一発逆転の勝利をもぎ取らないと、せっかく築き上げた松永家そのものが滅びかねなかった。

弾正には敗北する気などさらさらない。不利だということは分かっているが、この程度の窮地は、何度となく乗り越えて、今の自分を築き上げるに至っているのだ。

手ならいくらでもある。まだまだ不利じゃない。本願寺に派した使者たる森好久が、援軍を伴って現れてくれれば、幾らかは持つだろうし、その間に上杉謙信が再上洛してくれたなら、一転して有利になる。そうなれば、武田勝頼も本格的に動くだろうし、毛利輝元だって動くに違いないのである。第二次信長包囲網は、未だ健在だ。これが機能すれば、不利となるは弾正ではなく信長だ。昨日の弾正は、明日の信長となりうるのである。

と、ここまで考えて弾正は苦笑いした。自分ともあろう者が、随分と他力本願な手を考えているものだ、と自嘲せずにはいられなかった。結局、本願寺が兵を貸してくれば……、上杉や毛利、武田が動いてくれれば……。自力では織田軍を倒せないという現実が、松永弾正にはやるせなかつた。

「よいかな。再びわしは、この地で名を上げる。絶対に負けない。三好の名を背負っている人間として、わしは絶対に負けることは許されないのだ。亡き御屋形様より与えられた大和は、断固として失うわけにはいかんだ」

松永弾正は、妻たる三好御前の前で、そんな風に力説していた。

「私とて、負けて欲しくはありません」

御前はそう言つて、にっこりとほほ笑んだ。

「そなたは、怖くないのか？」

余りに堂々としている御前の態度を訝しく思った弾正が尋ねてみると、御前は相も変らぬ笑みをこぼしながら、「はい」と、はつきりときっぱりと答えた。

「お前様は、父上が見込まれた御方にございますので。父上の目に狂いなどあろうはずがありません」

「……そう、か」

弾正は言葉を失い、気がつけば、何となく御前を抱きしめていた。これまでは、三好長慶の娘、ぐらいにしか彼女を見てこなかった弾

正である。散々、苦勞をかけ、弄び、辛い目にあわせてきた弾正に對して、このような温和な目を見せる御前の包容力に、彼は何も言えなくなった。

せめて、せめて彼女ぐらいは守らねばならぬと、弾正は本気で思った。

「よし。見てろよ。わしは必ず織田を倒し、畿内に返り咲いて見せるぞ。三好と松永の名を再び天下に轟かすのだ」

そんな風に叫んで、弾正は御前を思い切り押し倒した。

十月八日のことである。

織田の包圍網を潜りぬけて、本願寺の援兵と称する鉄砲隊二百を伴って帰還した森好久が、松永弾正の下にひれ伏して、復命していた。

弾正は言うまでもなく大喜びであった。何しろ、鉄砲隊二百である。今となっては赤子の手でも借りたいほどに人員不足が目立っていた城の防禦態勢を固め直すには十分すぎる兵力であるし、何より鉄砲隊というのがよかった。その上、

「これは顯如上人より授けられた先発隊であり、いずれ近いうちに本隊が援軍として駆けつけましようほどに」

と、森好久が報告したものだから、弾正としては百万の味方を得た思いだったのである。

だから弾正は快く森好久とその援軍部隊二百を天守閣に近い三の丸の守備に回るよう命じて、容易く城の要地を預けてしまったのだ。事、ここに至っては、さしもの弾正久秀も、森好久の真意を見抜くことはできなかつたものと見える。

それはともかくとして、援軍到着は、松永軍の士気を大いに盛り上げた。勝ち目はあるのだ、ということを知者には十分すぎる事件だったから、当然と言えば当然の話である。

そして十月八日は夜のことであった。

織田信忠本陣に、筒井順慶並びに羽柴秀吉の両名がやってきて、総帥たる信忠の御前にて、こう言った。

「準備は整いました。明日をもって総攻撃を再開することをお勧め申し上げます」

と言うのは、順慶である。続いて、

「順慶殿に秘策があります。それがしも総攻撃すべきと心得ます」  
秀吉が言った。

信忠は少々驚いた顔をして、「秘策とはなんだ？」と尋ねていた。順慶はにやりと笑い、告げるべきことを包み隠さず悉く述べた。信忠はというと、時折「ふむふむ」と頷きながら、納得したような顔をしていたが、最終的には秀吉の方を向いて、

「筑前も同意見だな」

と、尋ねていた。

「はッ！」

秀吉は大きく頷き、順慶と共に大きく頭を下げた。

「なるほど。ならば、よかるう。筑前が勧める策であれば間違いもあるまい。夜明けをもって、総攻撃を開始するから、それまでに恙無く準備が終わるよう取り計らえ」

総大将として、織田信忠は秀吉、順慶両名のみではなく、居並ぶ諸将全員に下知した。

かくして十月九日である。

再び戦が始まる。

数にものを言わせて迫る織田軍に、必死の防戦に励む松永軍。構図は初日に交わされた激戦と変わることはない。

さすがに松永勢も天下にその名を轟かせた歴戦の戦士たちである。如何に圧倒的多勢を誇る織田軍を敵に回したといえども、そう容易



く劣勢に陥ったりはしない。弓を放ち、礮を投げ、鉄砲を撃ち、熱湯を浴びせるなどして、押し寄せる織田軍を決して寄せ付けなかったのである。

かくして再び戦は長期化するものと、誰もが思い始めた夕刻頃のことだ。突如として三の丸から火の手が上がり、織田松永両軍ともに呆然とその様を眺めていた。

「さ、三の丸？」

第一報に弾正は驚きを隠しきれぬといった顔をしていた。

「申し上げますッ！ 森好久、返り忠いたしましたましてございますッ！」  
第二報が、彼の下に届く。

「な、なんだと？」

弾正は呆然と立ち尽くして、口元をびくびくと震わせていた。

凶報が相次ぐ。如何な堅城といえども、内からの攻撃に強いようには作られていない。森勢の散々な猛攻を受けて、松永軍は内から見ても無残に自壊していったようであった。

「ば、バカな……」

信じられない、と言った顔をして、眼前に広がる現実を呆然と眺めている。信じられない、というより信じたくない。弾正は、自分が長年に渡り築き上げてきた全てが、音を立てて崩れていくのを、その肌で、体全身で感じていた。

「父上！」

そこに、松永久通が駆け込んできた。満身創痍、と呼ぶに相応しい格好をしていた久通の姿に、弾正は諦めにも近いため息を漏らした。

「本丸に兵が迫ったか？」

弾正の問いに、

「はい」

無念そうに答える久通だった。

「さもありません」

弾正はそう答え、フウと静かにため息を吐いた。

ぞろぞろと松永一門、重臣たちが集まってきた。

今宵が最期と、既に覚悟は決まっているらしい。こんな年老いた老人に殉じてくれる人間がこれほどいることに、少しばかり感動しつつ、弾正はこう言った。

「無理に死んでもいい。こんな老いぼれとともに死なずともよいわしは、一人で死ぬ。それが天下に梟雄と言われた松永弾正らしい死に様であろう」

場を沈黙が包む。それを破るように、重臣の林若狭が言った。

「殿。我らは殿と共に死ぬ覚悟です。殿が死ぬおつもりなら、我らも死にまする」

「……そう、か」

弾正はそれ以上何も言うことはせず、ただ「好きなようにするがよい」とだけ言った。とはいえ、三好御前のことは少々気になったものか、

「すまん」

彼女の下に歩み寄り、彼はそう言った。

「謝らないくださいませ。私は、構いませぬ。これも戦国の習い」  
彼女はそう言って、にっこりとほほ笑んだ。松永弾正は悲しげに眼を落すと、「そうだな」と、静かにうなずいた。

然るに松永久通だけは少しばかり生に未練があったようで、弾正の側に歩み寄り、その耳元に、

「父上が御持ちの名器『平蜘蛛茶釜』を引き渡せば、降伏は許すと、織田内府直々の沙汰だそうにございますが」

と、告げた。

「たわけ。そんな戯言に惑わされて、死ぬ場を間違えるような弾正ではないわ。どうせ、あの茶道道楽の内府殿は、わしから名器を奪

い取って、頃合いを見計らって殺すか、一生飼い殺しにするつもりなのだろう。そんなのは御免じゃ。これでも天下に松永弾正と恐れられたわしが、そんな無様な末路を歩んだりしたら、後世に永遠に笑い物にされてしまうではないか」

「……申し訳ありません」

「まあいい。とにかく、内府殿が御所望の『平蜘蛛茶釜』は、わしがあの世に持っていく」

そう言って、部下にその茶器を持ってこさせると、弾正はそれを愛でながら、「こんな泥の塊に、そもそも何の価値があるというのやら」とぼやきつつ、「はっはっはっは」と、壊れた人形のようにいつまでも高笑いしていた。

信忠はジツと燃え上がる信貴山城を見上げていた。これで、いよいよ松永弾正が滅びる。天下にその名を轟かした弾正が滅びるのだ。自分の手で滅ぼしたのだと思うと、なんだか不思議な気もしたが、兎にも角にも滅びるのだ。信忠は、戦国の無常を感じて、ハアと静かにため息を吐いた。

同様に筒井順慶、羽柴秀吉、明智光秀ら、織田軍諸将も、それぞれの思いで弾正の滅亡を見守っていた。順慶にとっては人生最大の宿敵の滅亡であり、秀吉にとっては、自分と似たような境遇からのし上がってきた人生の大先輩の滅亡であった。光秀にとっては、順慶ほどではないにしろ、自分たちをいろいろと苦しめてきた宿敵の滅亡にあたるわけだった。

名もなき身分からのし上がって大名となり、ついには將軍を殺し、東大寺を焼き、主家を滅亡に追いやり、拳句の果てに、寝返りを繰り返した、さながら呂布の如き戦国の英雄が死ぬ。それは、織田信長による覇業が完成に近づきつつあることも相まって、戦国時代の終焉を物語るに十分すぎる事件であると言えた。

ダアアアアアアン

けたたましく響き渡ったのは、何かが発射したかのような大轟音だった。

織田、松永両軍の将兵は呆然と、燃え上がり、粉碎された天守閣の方を見つめていた。

弾正が死んだ。

誰もがそれを理解した。

弾正は死んだ。

戦は終わる。

ダアアアアアン

再び響く大轟音。

戦乱の世はまだまだ終わりそうもない。

【滅亡編】第177章 反撃開始

松永弾正少弼久秀が死んだといわれてもいまいち実感が湧かぬというもので、十河存保は日がな一日ずっと空を見上げてはため息ばかり吐いていた。

松永弾正といえば戦国を代表する梟雄の一人で、なおかつ近畿地方に唯一領地を保っていた三好系最後の大名でもあった。それが滅びたということは即ち三好は完全に畿内における足場を失ったことを意味しているわけで、長慶以来の栄光もここに完全に失われてしまったような気がして何とも言えず寂しい感じがした。

「弾正、か……」

生憎と存保の記憶の中にある松永久秀の面影は随分と薄らいでいたが、しかし全く忘れてしまったわけではない。年相応以上に老けた相貌をしていながらも生命力だけは常人の数倍はあるのかと思われた男。殺しても死なないような老人だと思っていたが、先日あっけなく滅びてしまった。

「父は戦死、叔父は殺され、養父と伯父は病死。兄上は異父兄あじうえに殺され、三好日向、三好下野は行方不明。そして弾正は織田に殺された。……はてさてわしはどういう末路を歩むのだろうか」

存保の不安は募る一方だった。既に阿波国の半ばは細川、長宗我部の勢力下に落ちているし、讃岐国にしても長宗我部と結んだ香川氏が力を伸ばして不安定化しつつある。このままでは確実に三好は滅びるだろう。それだけは阻止しなければならぬと思いつながら有効的な打開策が見つからないので、存保の不安や焦りは凄まじい勢いで膨れ上がっていったのだった。

「そう言えば織田との話はどうなっている？」

存保が尋ねると、

「笑岩入道様からの報告によると、羽柴筑前が口を利いてくれるそうです」

そんな答えが返ってきた。

「筑前、か……」

今や織田家中でその人ありと評されている羽柴筑前守秀吉と言う男。尾張中村のしがなき貧農の倅からのし上がって今や近江長浜十萬石を領するまでになっている。織田家内部では佐久間信盛、柴田勝家、明智光秀に次いで丹羽長秀辺りと同格視されている重臣らしいが、基本的にはどこの馬の骨とも知れぬ身分からのし上がってきた男である。……とまで思ってから、ふと、どことなく松永弾正と似ているような気がして存保は思わずプツと腹を抱えて笑いだした。

松永弾正と羽柴筑前。

はたして能力的にはどちらが上なのだろう。弾正は大和国主となつて天下を動かしたが羽柴筑前もやがてはそういう人間になつていくのだろうか。名門の家に生まれて生まれながらに大名の座を約束されていたような存保には彼らの気持ちや思いはよくわからないのだが、羽柴筑前や松永弾正のような男たちが世の中を仕切るようになればはたしてどういう世になるのだろうか、少しばかり興味を抱かずにはいられなくなった。

それはともかく……。

「織田との同盟が成つたなら、まずは織田の後ろ盾を背景に阿波を奪回する。兄上の仇は打たねばならぬ。何より三好本貫の地たる阿波を敵の手に渡すわけにはいかんだ」

誰に言うでもなくそんな風に叫んでから、存保はすつくと立ち上がった。

天正六年（一五七八年）になった。

相変わらず世の中は織田一色の感があるが、三月に入って上杉謙信入道が没したことでその色合いはますます濃くなつていった。

謙信死す。

その急報は凄まじき衝撃を伴つて全国に轟いた。今となつては織

田信長に対抗し得た唯一の存在が死んでしまったのだから無理もないだろう。

思うにここ数年の間に戦国を代表する英雄たちが次から次へと死んでいった。毛利元就、北条氏康、島津貴久、武田信玄、朝倉義景、浅井長政、松永久秀……、そして上杉謙信である。

「謙信入道までもが死んだか」

存保はその報告を受けるなりそんな風に呟いて、ハアとため息を吐いた。最近毎日いつものようにため息ばかり吐いているような気がしたが、そんな自分に果てしない嫌悪感を抱いて、またもため息を漏らしてしまう。

「時代も変われば変わるもの。今の世の中を父上らがご覧になられたらどう思われるであろうかな」

これで何度目のボヤキだろうと、自嘲気味に苦笑いする。もしも実父義賢がこの様を見れば、呆れるか怒るか嘆くか悲しむか、それとも「ふーん」と言っただけに気にも留めないか。

三好の名跡を受け継ぎ、三好長慶や義賢ら偉大な英雄たちと同じ血をその体に持つ男として実に不甲斐ない気がした。天下争覇の夢はおろか阿波・讃岐二ヶ国を保つことすら覚束ない。こんな破目に陥ってしまったのは、結局自分が愚かだったからいけないのだろうか。もしも実父が存命ならこんな仕儀には至らなかつたに違いないと思うと、いくら謝しても謝し足りない気がした。

「いや」

存保は目を閉じたまま心に思う。

「違う。俺はまだまだこれからだ。三好家としてこれから立て直せばいい。この程度で終わる俺ではないぞ」

必死になって言い聞かせてみる。このままでは終わらない。終わらせてたまるものか。まだまだ自分はやれるのだ。

存保はフウと深呼吸してから、

「重臣どもを呼べッ！」

と、声高に怒鳴っていた。

十河軍が動き出したのはそれから間もなくのことである。  
総勢四千。

讃岐を発し阿波に入る。

存保は意気揚々、愛馬に跨り全軍の先頭に立って行軍していた。とりあえずまずは阿波を回復し、あわよくば土佐をも攻め取って三好の栄華を取り戻して見せよう、などと彼は思っているのだった。織田信長には秘密裏に許可をとってあるから織田軍に攻め込まれる可能性はない。

兎にも角にも負けるわけにはいかない。負ければ最期、三好十河は確実に滅びる。

しかし存保には勝算があった。まあ元より勝算もなく戦を始めるような酔狂な奴もおるまいが、存保の場合は完璧と言って過言ではないほどの絶対的勝算をその胸に温めていた。

「既に細川軍は内部からガタガタです。長宗我部との関係も上手くいってはいないようですので、我らの勝利は火を見るより明らかといえるでしょう」

それは寒川元隣をはじめとする重臣たちの言葉であったが、これこそが存保が温めてきた勝算であったりした。要するに細川と長宗我部が仲違いし、分裂するのを待って攻撃を仕掛ける。両者に連携されると厄介だが分裂させてしまえば優勢に立つこともできると彼は踏んでいたわけだった。

元より兄たる三好長治を滅ぼして阿波を攻め取った細川と長宗我部がいつまでも仲良くいられるはずがないのである。いずれ必ず激突するに違いないと思っていいたら、案外早く予想的中を知ることになった。

「異父兄め、覚えておれよ」

馬上の存保はにやりと笑う。

「阿波は三好のものだ。誰にもやらん」

こみ上げる笑いを必死になって堪えてみる。けれど結局抑えきれ



なくなつて、まるで壊れた人形のようにからからけらけらと笑い続けていた。

「いかなさいましたか？」

いつもと違う彼の様子に驚いたのだろう。従者が不思議そうな顔をして尋ねると、存保は恥ずかしそうに顔を赤らめながら、

「すまんすまん」

と言つてようやく笑いを止めた。

【滅亡編】第178章 阿波回復

阿波侵攻の途についた十河軍は総勢四千ほど。けれど、さらに数を増して、今では五千ほどになっている。軍を進めるだけで次から次へ豪族たちが降伏してくるのだから、存保としては笑いが止まらぬと言ったところであった。

対する細川真之はというと……。とりあえず勝瑞城に兵を集めて迎撃態勢を整えているが、思いのほか兵が集まらず、かといって長宗我部元親に援軍を要請するわけにもいかないの、ひしひしと押し寄せてくる十河軍の前に打つ手がなくなっていた。

細川真之と十河存保。

二人は母を等しくする異父兄弟であるが、それぞれの父親時代からの対立を引きずる宿敵ライバルでもあった。

細川真之。今年で四十歳になんんとする中年男。若きころからいろいろと苦勞を強いられてきただけあって名門の御曹司とは到底思い難き、どことなく野性をほうふつとさせる容姿をしていたが、彼はこれでもかつては天下を支配してきた細川京兆家に連なる分家筆頭阿波細川氏の正統なる後継者なのだった。ちなみに彼の実父は細川讚岐守持隆と言い、かつて阿波国を守護として統治し、天下人細川晴元の重臣として栄華を極めた人物であるが、その晩年、重臣であった三好氏の下剋上によって滅ぼされ自害して果てている。

細川持隆を下剋上により滅ぼした人物は十河存保の実父たる三好義賢であった。無論、その背後には彼の兄にして三好一族の総帥であった三好長慶の意向があったことは言うまでもないが、持隆に直接手を下して彼を死に至らしめたのは間違いなく義賢だった。その義賢の息子の一人が十河存保である。

即ち、細川真之にとって十河存保は父の仇の息子となるわけだ。そしてその真之は存保の実兄である三好長治を滅ぼしたから、存保

から見ると真之は兄の仇ということになる。が、一方でこの二人の母親は紛れもなく同一人物なのだった。そのことが事態をややこしくしている最大の原因であるといえるだろう。

父の仇、兄の仇。しかし同じお腹から生み出された紛れもない兄弟。

その二人が阿波国の覇権を巡って争う光景は、戦国と呼ばれる時代の醜さと酷さと悲しさと空しさをこれ以上なく明確に表現していた。

……。

などと思いつながら馬上の十河存保は苦笑い。

「だが真之兄者など小物に過ぎぬ。後ろに控える土佐の梟が最も恐ろしい」

かつて三好氏が栄華を極めていた時代であれば、所詮土佐一国を支配下に置いたに過ぎぬ男など歯牙にもかけなかつたに違いない。

それが今やその男が最も恐るべき敵に変貌している。時代の流れとはいえ、すっかり落ちぶれてしまった自分の立場に、ただ溜息を吐くしかできない存保だった。

「ただ、我らの背後には織田殿がおります。長宗我部元親といえどそう容易く手は出せませうまい」

と、側近たちは言ったが、

「宿敵の一人であったはずの織田信長の支援を仰がねば、三好家本貫の地たる阿波一国も回復できないという事実が俺にとって非常に屈辱なんだよ」

存保はそう言つてため息を吐く。

「とにかくこれからでしょう。まずは阿波・讃岐を確実に殿の支配下に納めて、ついでに長宗我部をも倒して四国の支配権を回復すれば、先も見えるというものです。かつて長慶公は弱冠十歳、阿波の片隅にほんのわずかな領地を有する状態から始まり、ついには天下をも握られました。殿とて長慶公のお血筋を受け継ぐお方でございますれば、そう悲観なさることもないと思われませんが」

阿波平定戦はまず上手くいくだろう。十河軍の猛攻を前にして細川軍は既に瓦解している。だが、戦の勝利を目前にして、総帥が悲観論に浸っているようでは先が思いやられるというものである。側近たちはとにかく舌を奮って主君を励ました。その主君、十河存保も彼らの気持を察し、にっこりとほほ笑むと、

「どうにも俺は弱気になり過ぎる傾向があるようだ。すまん」  
居並ぶ家臣たちに軽く頭を下げて、フウと静かに深呼吸した。

十河軍の快進撃は続く。

と言つても細川軍は既に軍の体をなしていない。ただ三好の旗を掲げ、失地回復を叫んで進軍を重ねるだけで阿波国の大半が支配下に落ちていくのだから、これ以上に楽で、空しく、他愛無い戦争もないといえた。

一方。

勝瑞城の細川真之は相次ぐ凶報に愕然となり、冷静さを失いつつあった。重臣と恃んでいた者たちが次から次へと十河軍に降伏していく様を見れば当然と言えるだろうが、彼は事ここに至ってようやく自分が実に脆い砂上の楼閣の上に君臨していたことを思い知らされたのだった。

「どうすればいいんだ？」

と、真之が周囲の側近たちに尋ねると、

「とりあえず勝瑞城は捨てるよりほかにありませんまい」

重臣の伊沢頼澄はそう答え、悔しそうに唇をかみしめた。

「城を、捨てるのか？」

父が……いや、阿波細川氏の当主たちが長らく本拠としてきた城。そこを捨てるというのは細川家の総帥を自認している真之にとって非常に屈辱的であり、受け入れ難いことであった。勝瑞城を捨てて無様に落ちのびるぐらいなら、いつその城に残存する全軍をかき集めて籠城戦に持ち込み、細川家の当主らしく華々しく玉砕したいと思わずにはいらなかった。

「しかし殿が玉碎なされたら御家を誰が再興なさるのですか？」  
そんな主君の薄っぺらな名門意識を察した伊沢頼澄がすかさず口を挟むと、返す言葉を失ったらしい真之は、ちっと舌打ちしてがっくりと頂垂れた。

その後。

細川真之が数百人の兵を束ねて勝瑞城を脱すると、代わって三好越後守、矢野国村、河村左馬亮といった親十河系豪族が入城してこれを掌握。十河存保率いる十河軍主力の到着を首を長くして待つことになった。

その結果、存保と十河勢は一度として戦らしい戦をすることなく勝瑞城を回復、阿波全土に支配権を及ぼせる立場となったわけであった。

「なんだか、ばかばかしい話だな」

と、存保は思う。考えてみれば、こういう風に三好氏は近畿地方の支配権を織田信長に奪い取られていったのだろう。阿波という小さい範囲において、信長的な立ち位置を獲得した存保は、必死に抵抗しながらなすすべなく敗退を余儀なくされた三好義継や三人衆らの悲哀差に思いをはずすにはいられなくなった。

「何はともかくこれで殿は阿波・讃岐両国の御大将にございます」と、側近が一言。

「ようやくな」

かつて天下を左右した三好氏の主でありながら、阿波・讃岐という本国ともいえる地域の実権を握るのにいったい何年という時間を費やしたことだろう。

兎にも角にも、ここから全てが始まるのだ。この程度の小功に甘んじ、守勢に回るようなことがあってはならぬ。存保は勝瑞城より賑やかな城下を見下ろしながらそんな風に思った。

【滅亡編】第179章 四国の支配者

勝瑞城に入り、阿波国の支配権を回復して既に一カ月弱。

阿波・讃岐二ヶ国の支配者として名実ともに三好家の総大将となつた十河存保の威勢は、伯父長慶、実父義賢、養父一存、従兄弟の義興、義継には及ぶべくもないとはいえ、三好に存保ありと天下に示すには十分すぎるものとなっていた。

十河存保は自らに臣従した豪族たちの領地を安堵するなどして領国支配の完璧を期しつつ、不安定要素として依然として同国内に存在している細川の残党勢力およびその首領である細川真之を叩き潰すべく兵を国中に派していたのだった。

見事、阿讃両国の太守となりおおせた十河存保の抱く不安とは即ち細川残党勢力の掃討に手古摺り、その間に長宗我部元親が本格的に阿波に押し寄せてくることである。勝瑞城を奪取し、阿波国の大半が自らに従つた今、存保にとって義兄細川真之などはつきり言つてとるにたらぬ敵でしかなく、最も厄介な敵は土佐一国を實力で統一した四国の梟雄長宗我部元親ただ一人なのである。

が、土佐一国の長宗我部と阿波・讃岐両国の十河では實力伯仲。如何な元親といえどそう容易く阿波国に兵を出せるはずもない。かつてのように十河存保の背後にいる織田信長と同盟関係にあるならばともかく、今、信長と同盟しているのは十河存保なのである。即ち、存保は後顧に憂いなく全軍を長宗我部対策に投入できるのであり、十河の全軍と戦つて絶対に勝てるかと断言できるほど元親も傲慢にはなりきれなかった。

だからこそ、

「細川も存外だらしない」

元親は岡豊城内でそんな風にぼやいていた。まあ、旧三好系豪族たちの支配に手古摺り、窮地に追い込まれた細川真之を見限つて彼

にまともな援軍を派さなかつた元親にも、細川滅亡の責任はあると言えるのだが、それにしてももう少し細川には粘ってほしかったと思わずにはいらぬ身勝手な長宗我部元親なのだった。

「細川家は所詮、公家みたいなものですから」

そう言つて元親に同調しているのは彼の息子たる信親。聡明な若者と評判高く、元親にとつては目に入れても痛くない自慢の跡取りであつた。

「確かに。だが、十河民部が阿波を手に入れたことは我らにとつて実に由々しき事態。わが嫡子殿はこの事態、どう乗り切るべきと思ふか？」

十河家の勢力拡大に伴つて、元親が裏で糸を引いていた讃岐国の動乱も鎮静化しつつある。十河存保は自らの実力と織田信長の権勢を背景に領国支配を急速に固め直してきており、このままでは織田軍の本格的支援を受けた十河勢により逆に長宗我部家が衰亡のどん底に突き落とされるといふことにもなりかねなかつた。

「今は自重するよりほかに手がありますまい。父上もそうお考えになられたからこそあえて細川をお見捨てになられたのではありませぬか？」

と、信親は言つた。

「……まあな。だが、いつまでも自重はせぬ。いずれ機を見て阿波に出兵するつもりだが……。問題は民部大輔の背後に織田右府がいることだな。織田右府がいるとなるといささかわしも怯えずにはいられぬわい。なにしろわしは土佐の姫若子と評されたほどの臆病者だからな」

「ははは。されど左様に憶病な御父上だからこそ我が家はこれほどに栄えることができたといえましょう」

信親の親泣かせな言葉に元親はらしくもなく涙し、そしてそれを押し隠すように豪快にからからと高笑いした。

とは四つの国が存在するためにそう呼称されている一つの大きな島である。

四つの国とは即ち阿波、讃岐、土佐、伊予。

そのうち、阿波と讃岐は十河存保の支配下に落ち、土佐は長宗我部元親のものだった。ならば伊予は……。その一部は十河家の支配下にあるが、そのほかの地域は、河野氏、西園寺氏、宇都宮氏といった豪族たちが根を張り、一種の群雄割拠状態であった。無論、これら豪族の中では中国地方の覇者たる毛利氏の支援を受ける河野氏が有力だったが、それとて群を抜くものではなく、結局同国が統一される気配は微塵も感じられなかった。そのため同国は四国全体の趨勢に対しなんら影響力を与えられる存在ではなく、天下の人々からもそのように見られていた。

そのため十河存保と長宗我部元親、この両者のうち勝った者が四国を支配すると目されている。そして当の二人もそのつもりだったが、しかし四国の支配を目論見かつそれだけの実力を有している者はなにも決してこの二人に限った話ではなかったのである。

即ち、今や近畿地方、北陸、中国地方と日本列島の中央部を悉く支配下に置き、その身は正二位前右大臣兼右近衛権大将と呼ばれる文字通りの天下人たる織田信長。

壮大な琵琶の湖を眺めながら、自らの覇業の象徴と定めた大宮殿の最上部に鎮座した霸王はにやりと不敵な笑みを漏らして、そばに控える近臣の森蘭丸を呼びつけた。

「十河が阿波をとった。だが、余としては十河と長宗我部が同程度の力でいがみ合ってくれたほうが好ましい。このままでは十河の勢力が余りに強くなり、長宗我部が押されよう。で、蘭丸、そちららばどうする？」

尾張一国すら統一できていない状況から始まり今や天下を統べるに至った霸王からの下問にも全く動じることなく、

「私ならば」

と、答えられるところが蘭丸の非凡なところであつたらう。織田



家臣団内でその名を轟かす名族森家の御曹司だから信長の近臣に選ばれたのではないと言うことは、彼を見ていればよくわかるというものだった。

「私ならば、長宗我部との和睦をちらつかせて十河民部の動揺を誘います」

蘭丸の言葉に信長も大いに満足したらしく、

「その通りだ。だが、だからといって今度は長宗我部が増長するようなことになっても困る。長宗我部にはせいぜい阿波の半分くらいの領有を認めてやるのが妥当なところであろうな」

そう言って怒っているのか笑っているのか判別しにくい微妙な表情を見せ、彼はすっと立ち上がった。

【滅亡編】第180章 激動の天正十年？

溜息一つ吐こうものならその瞬間、国が壊れてしまいそうな気がした。愚痴の一つでも呟こうものなら、父や伯父や叔父や祖父らが必死になって築いてきた偉大な歴史と足跡が一瞬にして汚されてしまふような気がした。仕事一つ少しでもサボろうとしたら、自分のや家族、家来たちの人生が終わってしまうような気がした。自分が頑張らなければ、全てが終わってしまう気がした。

十河存保という人は本来別に勤勉な努力家ではなかった。三好家が絶頂を極めていた当時、即ち少年であった時分、彼は基本的に怠け者だった。家督は兄が継ぐわけで、嫌なこと辛いこと大変なこと面倒なこと、それら全ては父と兄に任せ切って自分は好きなことをして暮らせるものだと思っていた。勉強も武士としての鍛練も、疎かにはしなかったが懸命に励んだという記憶はなく、どちらかと言うと、勝瑞城の大奥に住まう女官たちをからかってみたり、さもなくば家臣たちの目を盗んで城の外に飛び出し、身分を偽って町人の子供たちと遊んだりして過ごしていた。無論、養子に出され、その家の家督を継ぐ可能性は無きにしてもあらずであったが、別に現時点でそうなると思つたわけではなく、正式に決まった時に頑張ればよいと思つていた。

それがどうだろう。永禄四年（一五六一年）に叔父十河一存の急死をきっかけに面倒臭がり屋の存保は十河家に養子入りすることになり、かくて讃岐一國を統治する身分を期せずして掴み取ってしまった。

面倒臭いし、辛いし大変。できうることならこんな身分はとつとと放り出して気楽な御隠居生活を送りたい……と心の中で思つても、国主である以上、そんないい加減な態度は許されず、結局彼は十河家のためにできうる限りのことをしなければならなくなった。だから彼は、時に伊予に攻め入り、時に近畿地方に兵を出し、実父義賢

の死後は暴君と化した愚かな兄長治を諫めたり、さもなければ若年の三好宗家当主三好義継を補佐したりと四国三好党の有力者として頑張った。

しかし彼の頑張りは報われない。

十河家が所属してきた三好政権は内紛を繰り返した挙句に衰退の道を突き進み、織田信長の台頭を招いて政権の座から転落した。三好三人衆は滅び、松永弾正久秀も滅び、そして三好義継さえも滅びた。兄の三好長治は行き当たりばつたりの暴政によって家臣たちの離反を招き、それに乗じた異父兄細川真之に滅ぼされ、結局、存保は長治の家臣たちに擁立される形で阿波一国の面倒すら見なければならぬ破目に陥ったのである。

かくて今に至る。

面倒臭がりの凡人たる本性を押し隠し、あくまで伯父長慶、実父義賢、養父一存らに勝るとも劣らぬ名将の仮面をかぶった彼は、ついに兄の仇たる細川真之を追い落として阿波・讃岐両国の太守となり、かつて天下に覇を唱えた三好家の名に恥じぬ戦国大名として、土佐国主長宗我部元親と四国の覇権を巡り争うほどの存在になりおせていた。

しかし……。

存保は心の底でこう思う。

面倒臭い、と。

時は流れて天正十年（一五八二年）。

幼いころから今に至るまで、様々な経験を重ねた結果、もうどんな事件が起ころうと驚くに値せぬ……と思っていた十河存保を大いに驚かせたのは、この年に入って三月に入って間もなくして、甲斐・信濃・駿河の太守武田勝頼が怒涛の勢いで迫る織田信長軍の前についに敗れて天目山にて自害して果てたという報告を耳にした時だった。

武田滅亡。

こんな報告を受けて驚かぬ者がいるとしたら見てみたいものだと思はれた。平安時代末期より甲斐国に根拠地を設け、先代の武田信玄の時代に最盛期を迎えて織田信長を散々脅かした武田氏。勝頼に代替わりして以後、長篠の敗北など急激に衰退の道を歩みつつあったが、それでもなお甲斐を中心に強勢を誇り、度々織田氏を圧迫するなどしており、そう容易く滅び去ると思われていなかった。

その武田が滅びた。

「これで信長の天下は固まったか」

存保は思う。そして、それならばそれでよかろうとも思う存保なのだった。

今更……。今更、三好家の栄華を取り戻すことができるなどと存保は思っていないかった。一家家臣たちの中には「夢よ、もう一度」と考えている者もいたようだが、存保はそれほど愚かではない。武田を滅ぼす以前から近畿地方全土を支配下に置き、さらに北陸、中国地方に勢力を急激に拡大する織田氏の勢いを見て、なおも三好政権再興という夢が実現可能だと思っている脳内お花畑の人間がいるとすれば、それは語るに値せぬ阿呆だと存保は思っていたのである。

存保の目標は、如何に阿波・讃岐の領土を保ち、織田政権下で三好・十河の名跡を保ちつつ生き残るかということにあると言って過言ではない。せいぜい長宗我部元親を倒して土佐や伊予を掌握し、四国の王になりたい……。ぐらいの野望しか抱いてはおらず、逆にそれ以上の野望は身を滅ぼす基だと信じていた。だからこそ存保は織田政権との関係を如何に強めるか、ということにこの数年腐心してきたのである。信長の重臣羽柴筑前守秀吉の甥秀次を、大叔父三好笑岩の養子に迎え入れさせたのも、存保の対織田融和政策の一環の一つであると言っていい。中国方面軍総司令官と言いつる地位を有し、信長の重臣の中で際立った存在感を放つ秀吉と密接に繋がってあれば、三好・十河家の未来も安泰であろうと言つのが存保の狙いで、今のところ彼の思惑通りに事態は推移していた。信長は長宗我

部ではなく十河を重用し、その結果、十河氏は長宗我部氏に対して非常に優位な立場を築くことに成功していた。そして信長は、近く長宗我部征伐軍を起こすつもりのもので、堺近辺に織田三七郎信孝を総大将、丹羽五郎佐長秀を副将とする大軍を集結させている。これが動けば長宗我部の滅亡は決まったも同然で、征伐軍の先鋒を務めることに内定している存保も、活躍次第によってはさらに領地を広げ、さらに信長の信頼を勝ち取ることも可能だろう。

武田滅亡の報に接した存保は、考え事があるからと家臣たちを下がらせ、独り静かに春も間近の青空を見上げながら物思いにふけた。

永く続いた戦国ももう終わり。武田を滅ぼした信長は、その勢いのまま上杉も毛利も滅ぼすだろう。既に徳川家康は信長の家臣も同然だし、北条氏政・氏直親子も信長に臣従する意を示している。伊達輝宗や大友宗麟も信長と誼を結ぶことに懸命なようで、おそらく彼が上杉や毛利を滅ぼせば臣従する道を選ぶに違いなかった。そして、長宗我部元親も、信長の鶴の一声一つで滅ぼすことが可能だ。

戦国は終わる。

どこことなく寂しい感じもしたが、泰平の世になれば、自分もまたのんびり暮らすことも可能になるだろう。いつそ家督を誰かに譲って楽隠居するのも悪くない。伯父長慶や父義賢、養父一存らゆかりの地を巡り、その事績に思いをはせる生活……なんてものを想像すると、早くそんな日々が来てほしいと心の底から思わずにはいられぬ存保なのだった。

そして彼は家臣を呼び戻し、

「長宗我部元親の動きはどうなっているか？ それと、三七信孝様の動きもだ。これから我らも忙しくなるぞ。四国の王になるのは元親風情ではなく、三好長慶公の血をひき、三好宗家家督にして十河家当主たるこの十河民部大輔存保様だということ満天下に示さねばならんからな」

そんな風に言って高笑いした。



【滅亡編】第181章 激動の天正十年？

織田信長による四国征伐軍の先鋒として三好笑岩が淡路経由で勝瑞城にやってくる、十河存保はこれを歓待した。

その笑岩は言う。

「おそらく四国方面に動員される軍は一万五千を超えるはずだ。民部殿の兵を合わせれば二万を超えよう。元親を滅ぼすには十分な数であろう」

随分と誇らしげな大叔父の姿に存保は苦笑いした。

「二万ですか。それは大軍ですが、問題は総大将です。三七信孝様の器量は如何ほど？」

今のところ信長の三男というだけで四国征伐軍総大将の座を仰せつかったと思われる織田信孝の器量は未知数である。しかし信長の次男たる織田信雄は、かつて伊賀攻めの総指揮を執った時、無様な敗北を喫して信長の逆鱗に触れたことがあった。信雄と信孝は違つかもしれないが、万が一信孝が信雄程度の力量の持ち主であった場合、老練な元親の前に敗北を喫するという可能性を否定できなくなる。事実元親は、これまでも圧倒的大軍を寡兵で撃破するという奇跡を何度も起こしている四国随一の名将なのだ。いくら圧倒的大軍を誇ろうと、それをもって勝利を確実視できるほど生易しい相手でないことは長年にわたり彼と対峙してきた十河存保が一番よく知っている。

「問題はないと思うがな。まあ岐阜中将様（信忠）ほどではないが、信孝様の器量もなかなかのものだ……と専らの評判だ。少なくとも三介殿（信雄）よりは有能だろうし、それに副将として丹羽五郎左殿がついておられる。事実上、総指揮を執るのはこの五郎左殿であると言つてよからう。五郎左殿は決して派手な戦を好まれるお方ではないが、何事も堅実にこなし、前右大臣様の覇業に貢献してきた功臣中の功臣であらせられる。まず長宗我部元親風情に遅れをとる

「こともあるまいよ」

「五郎左殿、か」

織田信長配下の中では柴田勝家と並び称される重臣中の重臣。佐久間信盛失脚後、織田の次席宿老とも評され、主に内政面で活躍をしたことから信長より「米五郎左」と呼ばれるに至っている有能な人物である。しかし一方で軍事面では目立った功績もなく、そのために同僚の柴田勝家、明智光秀、羽柴秀吉、滝川一益らに領地の面で大きく差を広げられており、今回の四国出兵を成功させなければまず間違いない長秀の存在は彼らの下に埋没するだろうと思われる。

「勝てますか？」

存保が率直に問うと、

「勝てるだろう。もしも不安ならばお主がその分頑張ればよいだけの話ではないか。三好家当主の名に恥じぬ戦をすれば元親など容易くねじ伏せられようぞ。不肖ながらこの古い耄れも、民部殿を助けるつもりで馳せ参じたのだ。之長公、元長公、長慶公、義継公と四代に仕え、なお生き長らえている老人をあまり甘く見るなよ」

そんな風に言ってから笑岩は胸を張った。

織田信孝率いる主力軍が到着するより前に、存保にはやっておかなばならぬことが一つあった。

それは即ち細川真之の退治である。かつて存保によって阿波国を追われたこの異父兄は、最近になって度々阿波を侵し、長宗我部征伐を間近に控えた十河存保の頭痛の種となっていた。

真之の背後にいるのは疑いもなく長宗我部元親であるが、元親もよほど焦っているものと思われ、このところ真之を使って阿波国内に騒乱を巻き起こすことに必死になっている様子であった。信長による長宗我部征伐の最前線基地となるであろう阿波国が混乱状態に陥れば、織田軍も容易く土佐には迫れまい。時間さえ稼ぐことができれば、この危機的事態を回避することも可能だと、元親はなぜか



そう信じているようなのである。しかしそれが存保には解せない。時間を稼げば、確かに少しは生き長らえることができるかもしれない。だが稼いだ時間の分だけさらに強大化した織田軍が土佐に迫るだけではないか。このまま事態が推移すれば長宗我部元親の滅亡は確実だ。阿波を荒らすことに専念するより信長との和議の道を模索した方が長宗我部家のためではないのか。無論、信長に対して臣下の礼をとらなければいけないだろうし、領土も土佐に限定されることになるかもしれないが、長宗我部家それ自体は存続させられる可能性は出てくるのだ。

「元親はいつたい何を考えているのだ？」

と、存保は家臣たちに対して何度か尋ねたりしていたが、家臣たちにも元親の真意はわからないようであった。

いずれにしても細川真之は長宗我部氏の支援下に阿波に入り、反三好・十河活動を続けていた。阿波国の混乱の拡大は十河存保にとって好ましい話ではない。自分の領地一つまともな統治できないのか！ と信長に責められ、挙句領地没収の憂き目を見ることにもなりかねないからである。事実として、本願寺討伐に手古摺った佐久間信盛は、信長の筆頭重臣の地位にありながらも容易く追放されている。信長は決して甘い男ではない。譜代の家臣ですら平気で改易するような男だ。外様の十河家を潰す絶好機が訪れれば容赦はしないだろう。

かくて十河存保は勝瑞城を発した。総勢八千の大軍を従えての進軍である。

対するに細川真之勢は二千に満たない。勝敗は既に決している。しかし真之は諦めない。存保は、ここ数年来続く異父兄との不毛な戦がなおも続くことに辟易しつつ、今回で終わらせると胸に誓い、そしてフウとため息を吐いた。

細川軍と十河軍の激突。

それは自然に始まり、あっけなく終わった。

十河軍は強く、細川軍は弱かった。十河軍は多く、細川軍は少なかった。

「最近の戦いは、つまらんな」

存保が思わずそう呟くと、意外そうな顔をしたのは彼の従弟たる三好隼人佑長則という男である。

「では昔の戦いは楽しかったのですか？ 殿？」

隼人には、楽しそうに戦いをする存保というものが想像できなかった。十河家の家督を継いで以来、存保は数え切れないぐらいの戦いを経験してきた。その戦いのほとんどに従軍した隼人であるが、存保は常に嫌そうだった。そしてそれは今も変わらない。常に嫌々なのに戦えば基本的に負けない存保を不思議そうな瞳で見つめてきた隼人なのである。

「別に楽しくないさ。ただ、やりがいがあった」

昔の戦いは、三好家が天下を掴み取るための戦いであつた。実父義賢や伯父の長慶が存命していた当時はもとより彼らが死んだ後、三好三人衆らと一緒に戦っていた当時も、基本的に三好氏の天下を如何に守るか、というのが主眼であつた。しかし今は違う。天下人としての三好家ではなく、単なる戦国大名としての三好・十河家を守るための戦いでしかないのだ。しかも血の通つた兄との戦いである。存保の心が躍らぬのも無理なきことではあつた。

「やりがい、ですか。なるほど。では、いつそのこと殿も天下を目指されますか？」

と、隼人が問うと、

「たわけ」

存保は呆れたような顔をして吐き捨てた。

存保の心情は極めて複雑であると言わざるを得ない。もはや三好家が天下を握ることは不可能だということを感じ、あくまで三好・十河家は阿波・讃岐の大名として生き残ることだけを前提に行動していると言うのに、心のどこかでは伯父や父や養父たちの如く天下を舞台に大暴れしたいという思いを抱かずにはいられないのである。

これが武士の血というものなのだろうか。平和で平凡な日常を求める一方で波乱に満ちた激動の世を求める自分がいることを否定できないのであった。

「天下、か」

それは今の存保が決して見てはいけない夢。だからこそ彼は頭をぶんぶん振ってから静かに深呼吸した。

「隼人」

存保は三好隼人に向かって真面目な顔を向けた。

「お前が指揮を執り、細川軍追撃の任にあたれ。無論、深追いは禁物だ。阿波国内から兄の勢力を一掃することができればそれでいい」

「承知」

隼人は静かに頷いてから、何も言わずに再び主君存保の方を見た。すると、その存保はこう言った。

「もしも我らに従わぬ者は皆殺しにしる。細川の名を阿波から完全に一掃するには、荒療治も必要だろう」

「皆殺しですか？」

「そうだ」

「承知いたしました」

存保の命令は隼人にとって絶対である。隼人は恭しく若き主君に對して頭を下げると、足早に彼の下から立ち去っていった。その後ろ姿を眺めながら、存保は何度目になるかしのれない溜息を吐いてから、平和な時代とはいっ頃到来するものかと考えた。何より、いつまで自分はこの手を血で汚し続けなければならないのかと思わずにはいられなくなった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0310h/>

---

三好長慶伝 ~ 未完全な天下人 ~

2010年12月24日03時40分発行